昭和二年七月十四日
伊香保にて撮影
德冨健次郎

7095

「德富蘆花集」目次

卷頭寫眞（照影）

題　言（筆蹟）

不如歸……五

思出の記……九九

黑潮……三一七

自然と人生……四三九

灰燼……四三九

自然に對する五分時……四五〇

寫生帖……四六六

湘南雜筆……四八三

風景畫家コロオ……五〇四

漁師の娘……五一二

夏の夜かたり……五二〇

五分時の夢……五二九

炬燵……五三〇

國木田哲夫兄に與へて僕の近狀を報ずる書……五三一

梅一輪……五三六

綱島梁川君……五四九

印度洋……五五二

一枝の筆……五五三

年譜……五五六

私がはじめて伊香保へ来たのは、明治
三十一年の五月だつた。其秋から書
いた小説不如帰を国民新聞に出しはじめ
た。主人公の浪子の花やかなる芳香あるとき
伊香保が出して来た自然がする雰気
香山の土を踏む事の間及んだ、猶も折
ぬ程に一一か三十年過ぎた。
此三十年の間に関しては東京第四山
見事は限りない、御子殿を合小面目

日清戦争、日露戦争、世界戦争、私の一
生は富士山懐までの三日より小だよ似たり、
山世の風霰、五十年の変幻遭遇、小説家の
如く開け来、而して又覚え列ねる事である
而して私は六十の齢を重ねた、黒髪有
魔もよりはれて、こゝを脱離の為よ此伊
香保で登って来たいと思ふより小説不如帰
筆を運んで今頃よ書かつたね、拵へて下さいまし
新しい出版を始めつる改造社の山本氏

の感慨に耽れば今此山上に病む間に
蒼茫の趣をきへ書きて且つ不如
歸ふ世の中がみるよ

昭和二年九月日
伊香保に於て
徳冨健次郎

不如帰

上篇

(一)の一

上州伊香保千明の三階の障子開きて、夕景色を眺むる婦人。年は十八九。品好き丸髷に結ひて、草色の紐つけし小紋縮緬の被布を着たり。

色白の細面、眉の間や、蹙りて、頬のあたりの肉寒げなるが、疵と云はゞ疵なれど、瘠形のすらりと静淑らしき人品、此れや北風に一輪勁きを誇る梅花にあらず、また霞の春に蝴蝶と化けて飛ぶ桜の花にもあらで、夏の夕闇にほのかに匂ふ月見草、と品定めもしつ可き婦人。

春の日脚の西に傾きて、遠くは日光、足尾、越後境の山々、近くは小野子、子持、赤城の峯々、入日を浴びて花やかに夕栄すれば、つい下の槙離れて唖々と飛び行く烏の聲までも金色に聞ゆる時、雲二片蓬々然と赤城の背より浮び出でたり。三階の婦人は、座ろに其行方を瞻視りぬ。

両手優かにかき抱きつ可きふつくりと可愛気なる雲は、徐ろに赤城の巓を離れて、遮る物もなき大空を相並んで金の蝶の如く閃きつゝ、優々として足尾の方へ流れしが、やがて日落ちて黄昏寒き風の立つまゝに、二片の雲今は薔薇色に褪ひつゝ、上下に吹き離され、漸次に暮るゝ夕空を別れ〳〵に辿ると見しも暫時、下なるはいよ〳〵細りて何時しか影も残らず消ゆれば、残れる一片は更に灰色に褪ひて、朦朧と空にさまよひしが、果は山も空も唯一色に暮れて、三階に立つ婦人の顔のみぞ夕闇に白かりける。

(一)の二

「御嬢——おや如何致しませう、また口が滑つて、おほゝゝゝ。あの、奥様、唯今帰りましてムいます。おや、真闇。奥様エ、何処に御出遊ばすのでムいます？」

「ほゝゝゝ、此処に居るよ」

「おや、ま、其処に。早く御入り遊ばせ。御風邪を召しますよ。旦那様はまだ御帰り遊ばしませんでムいますか？」

「如何遊ばしたんだらうね？」と障子を開けて内に入りながら、「何なら帳場へ其様言つて、御迎人をね——」

「左様でムいますよ」言ひつゝ手さぐりに燐寸を擦りてランプを點くるは、五十あまりの老女。

折から階段の音して、宿の女中は上り来つ。

「おや、恐れ入ります。旦那様は大層御緩りでいらつしやいます。……はい、あの先刻若い者を御迎へに差上げましてムいます。もう御帰りでムいませう。——御手紙が——」

「おや、御父上の御手紙——早く御帰りなされば宜いに！」と丸髷の婦人はさも懐かし気に表書を打かへし見る。

「あの、殿様の御状で——。早く伺ひたいものでムいますね、おほゝゝゝ、屹度また面白いことを仰有つてでムいませう」

女中は戸を立て、火鉢の炭をついで去れば、老女は風呂敷包を戸棚に仕舞ひ、立つて此方に来り、

「本當に冷えますこと！　東京とは餘程違ひま

すでムいますねエ」
「五月に櫻が咲いて居る位だからねエ。姥や、もつと此方へお寄りな」
「有り難うムいます」云ひつゝ老女はつく〴〵顏打眺め「噓の樣でムいますねエ。斯樣に御丸髷に御結ひ遊ばして、端然と坐つて御出遊ばすのを見ますと、ばあやが御育て申上げた御方樣とは思へませんでムいますよ、先奧樣が御亡くなり遊ばした時、ばあやに負されて、母樣母樣ツて御泣き遊ばしたのは、昨日の樣でムいますがねエ」はら〳〵と落涙し、「御輿入の時も、ばあやはねエあなた、彼御立派な御容子を先奧樣が御覽遊ばしたら、如何樣に御嬉しかつたらうと思ひましてねエ」と襦袢の袖引出して眼を拭ふ。

此方も引入れらるゝ樣に俯きつ、火鉢に翳せし右手の指環のみ燦然と照り渡る。

やゝありて姥は面を上げつ。「御免遊ばせ、また此樣な事を。おほゝゝ、年が寄ると愚癡つぽくなりましてねエ。おほゝゝゝ、御孃――奧樣も此までは色々御苦勞も遊ばしましたねエ。本當によく御辛抱遊ばしましたよ。最早最早此からは御目出度い事ばかりでムいますよ、旦那樣は彼通り御やさしい御方樣――」

「御歸り遊ばしましてムいます」
と女中の聲階段の口に響きぬ。

（一）の三

「やあ、草臥れた、草臥れた」

足袋草鞋脫ぎ棄てて、出迎ふ二人に一寸會釋しながら、廊下に上りて來し二十三四の洋服の男、提燈持ちし若い者を見返りて、

「いや、御苦勞、御苦勞、其花は、面倒だが、湯に浸けて置いて貰はうか」

「まあ、綺麗！」

「本當にま、綺麗な躑躅でムいますこと！ 旦那樣、何處で御採り遊ばしました？」

「綺麗だらう。そら、黃色いやつもある。葉が石楠に似とるだらう。明朝浪さんに活けて貰はうと思つて、折つて來たんだ。……どれ、すぐ湯に入つて來ようか」

＊　＊　＊　＊

「本當に旦那樣は御活潑でいらつしやいますこと！ 如何しても軍人の御方樣は御違ひ遊ばしますねエ、奧樣」

奧樣は丁寧に疊みし外套を緣と接吻して衣桁にかけつゝ、たゞ含笑みて無言なり。

階段も轟と上る足音障子の外に絕えて、「ああ好い心地！」と入り來る先刻の壯夫。

「おや、旦那樣最早御上り遊ばして？」

「男だもの。あはゝゝ」と快よく笑ひながら、妻がきまり惡げに被る大縞の褞袍引かけて、「失敬」と座蒲團の上に胡坐をかき、兩手に頰を撫でぬ。栗蟲の樣に肥えし五分刈頭の、日にやけし顏は宛ながら熟せる桃の如く、眉濃く眼いきいきと、鼻下に薄すり毛蟲程の髭は見えながら、まだ何處やらに幼な顏の殘りて、含笑まる可き男なり。

「良人、御手紙が」

「あ、乃舅だな」

壯夫は一寸座樣を直して、封を切り、中を出せば落つる別封。

「此は浪さんのだ――ふむ、御變りもないと見える……はゝゝ、滑稽を仰有るな……御話を聞く樣だ」笑を含んで讀み終へし手紙を卷いて側に置く。

「卿にもよろしく。場所が變るから、持病の起らぬやうに用心おしつて仰有つてよ」と「浪さん」は饌を運べる老女を顧みつ。

「まあ、左樣でムいますか、有り難う存じます」

「さあ、飯だ、飯だ、今日は握飯二個で終日步行きづめだつたから、腹が減つたつたら夥し

い。……はゝゝ。此あ何ちふ魚だな。鮎でもなしと……」

「山女とか申しましたつけ――ねエ姥や」

「左様？　甘い、中々甘い、其れお代りだ」

「ほゝゝ、旦那様の御早うムいますこと」

「其筈さ。今日は榛名から相馬が嶽に上つて、それから二ッ嶽に上つて、屛風岩の下まで來ると迎への者に會つたんだ」

「其様に御歩行き遊ばしたの？」

「併し相馬が嶽の眺望は好かつたよ。浪さんに見せたい位だ。一方は茫々たる平原さ、利根が遥かに流れてね。一方は所謂山又山さ、其上から富士がちよつぽり覗いてるなんぞは頗る妙だ。歌でも詠めたら、一つ人麿と腕比べをしてやる所だつた。あはゝゝ。そら今一つお代りだ」

「其様に景色が宜うムいますの。行つて見たうムいましたこと！」

「ふゝゝゝ、浪さんが上れたら、金鵄勲章をあげるよ。其あ危険い山だ、鐵鎖が十本も下つてるのを、つたつて上るのだからね。僕なんざ江田島で鍛へ上げた體で、今でもすはと云ふと檣でも綱でもぶら下る男だから、何でもないがね、浪さんなんざ東京の土踏んだ事もあるまい―」

「まあ、彼様な事を―嫣然顏を赧らめ、「此れでも學校では體操も致しましたし――」

「ふゝゝゝ、華族女學校の體操ぢや仕方がない。さう〳〵、何時だつけ、參觀に行つたら、琴だか何だかコロン〳〵鳴つてて、一方で『地球の上に國と云ふ國は』何とか歌ふと、女生が扇を持つて起つたり踞んだりぐるり廻つたりしとるから、踊の温習かと思つたら、彼が體操さ！　あはゝゝゝ」

「まあ。御口がお惡い！」

「さう〳〵。彼時山木の女と並んで、垂髪に結つて、ありあ何とか云つたつけ、葡萄色の袴はいて澄まして躍つてたのは、たしか浪さんだつけ」

「ほゝゝゝ。彼様な言を！　あの山木さんを御存じでいらつしやいますの？」

「山木はね、内の亡父が世話したんで、今に出入しとるのさ。はゝゝゝ、浪さんが敗北したもんだから默つてしまつたね」

「彼様な言！」

「おほゝゝゝ、其様に御夫婦喧嘩を遊ばしちやいけません。さ、さ、御仲直りの御茶でムいますよ。ほゝゝゝ」

（二）

前回假に壯夫と云へるは、海軍少尉男爵川島武男と呼ばれ、此回良妹ありて陸軍中將子爵片岡毅とて名は海内に震へる將軍の長女浪子と目出度く合卺の式を擧げしは、つい先月の事にて、こゝ暫日の暇を得たれば、新婦と其實家よりつけられし老女の幾を連れて四五日前伊香保に來りしなり。

浪子は八歳の年實母に別れぬ。八歳の昔なれば、母の容貌は歴々と覺えねど、始終笑を含みて居られしことと、臨終の其前に吾を臥床に呼びて、痩せ細りし手に吾が小さき掌を握りしめ「浪や、阿母は遠い處に行くからね、成人しくして、阿爺を大事にして、駒ちやんを可愛がつて遣らなければなりませんよ。今五六年……」と云ひさしてはら〳〵と涙を流し「阿母が在なくなつても阿母を記憶えて居るかい」と今は肩過ぎし吾黑髪の其頃はまだ總さりと額際まで剪り下げしをかい撫で〳〵し玉ひし事も記憶の底深く彫りて思ひ出ぬ日はあらざりき。

一年程過ぎて、今の母は來つ。其れより後は何も彼も變り果てたることになりぬ。先の母は

歴とした士の家より來しなれば、萬づ折目正しき風なりしが、其れにても彼の樣に伸好き御夫婦は珍らしと婢の言へるを聽けることもありし。今の母は矢張歴とした士の家から來りしなれど、早くより英國に留學して、男まさりの上に西洋風の染みしなれば、何事も先とは打つて變りて、すべて先の母の名殘と覺ゆるをば宛ながら打消す樣に片端より改めぬ。父に對しても事毎に遠慮もなく語らひ論ずるを、父は笑ひて聞き流し「好々、乃公が負ぢや、負ぢや」と言はるゝが常なれど、或時極氣に入りの副官、難波と云へるを相手の晩酌に、母も來りて座に居しが、父はじろりと母を見てから／＼と笑ひながら、「喃難波君、學問の出來る細君は持つもんぢやごわはん、いや散々な日に遭はされますぞ、あはゝゝゝ」と云はれしとか。流石の難波も母の手前、何と挨拶もし兼ねて手持無沙汰に盃を上げ下げして居しが、其後己が細君に吳吳も女兒共には書物を讀み過ごさせな、高等小學卒業で澤山と云ひ含められしとか。

浪子は幼きより至つて人なつこく、しかも怜悧に、香爐峯の雪に簾を捲く程ならずとも、三つの頃より姥に抱かれて見送る玄關に呑れから帽をとつて阿爺の頭に載す程の氣は利きたり。伸びむ／＼とする幼な心は、譬へば春の若菜の如し。假令一度雪に降られしとて、蹂躪だにせられずば、自づから雪融けて青々とのぶるなり。慈母に別れし浪子の哀は子供には似ず深かりしも、後の日だに照りたらば苦もなく育つ筈なりき。束髮に結ひて、側へ寄れば香水の香の立ち迷ふ、眼少し釣りて口大きなる今の母を、初めて見し時は、流石に少したじろぎつるも、人なつこき浪子は此母君にだに慕ひ寄る可かりしに、繼母は呑れから挾む一念に可愛き兒をば押隔てつ。世馴れぬ吾儘者の、學問の誇り、邪推、嫉妬さへ手傳ひて、まだ八つ九つの可愛兒を心ある大人なんどの樣に相手にするより、此方は取つく島もなく、寒さ淋しさは心に浸みぬ。あゝ愛されぬは不幸なり、愛することの出來ぬは猶更に不幸なり。浪子は母あれども愛するを得ず、妹あれども愛するを得ず、唯父と姥の幾と實母の姉なる伯母はあれど、何を云ひても伯母は餘所の人、幾は召使の身、其れすら母の眼常に注ぎてあれば、少しよくしても、して貰ひても、互に最屓の引倒し、却て爲めにならず、唯父こそは、父こそは渾身愛に滿ちたれど、其父中將すらも流石に母の前をはばかるゝ、其も思へば慈愛の一つなり。されば母の前では餘儀なく叱りて、蔭へ廻れば言葉少なく情深くいたはる父の人知らぬ苦心、怜悧き浪子は十分に酌んで、あゝ嬉しい忝じけない、何卒身を粉にしても父上の御爲めにと心に思は溢るれど、氣がつく程にすれば、母は自身の領分に踏み込まれたる樣に氣を惡くするが辛く、光を韜みて言寡に氣もつかぬ體に控へ目にして居れば、却て意地惡のやれ鈍物のと思はれ言はるゝも情無し。或時は些か間違より、流るゝ如き長州辯に英國仕込の論理法もて滔々と言ひ捲られ、己のみかは亡母の上までもおぼろ氣ならず中傷られて、流石に口惜しく噛んだ唇開かんとしては椽側にちらりと父の影見ゆるに口を噤み、或はまたあまり無理なる邪推されては「母さまもあんまりな」と窓帷の陰に泣いたることもありき。父ありと云ふや。父はあり。愛する父はあり。然りながら家が世界の女の兒には、五人の父より一人の母なり。其母が、其母が此通りでは、十年の間には靜もつく可く、愛も失すべし。「本當に彼女は些もさつぱりした所がない、いやに執念な人だよ」と夫人は常に罵りぬ。あゝ土鉢に植ゑても、高麗交趾の鉢に植ゑても、花は花なり、何れか日の光を待たざるべき。浪子は實に日蔭の花なりけり。

されば此たび川島家と縁談整ひて、輿入濟みし時は、浪子も息をつき、父中將も、繼母も、伯母も、幾も、皆それ〴〵に息をつきぬ。

「奥樣（浪子の繼母）は御自分は派手が御好きな癖に、御孃樣には嫌な、ぢみなものばかり、買つて御あげなさる」と毎に呟きし姥の幾が、嫁入支度の薄きを氣にして、先奥樣が御出になつたらとかき口說いて泣きたりしも、浪子は匆々として吾家の門を出でぬ。今迄知らぬ自由と樂しさの此さきに待つとし思へば、父に別るゝ哀さも聊か慰めらるゝ心地して、匆々として行きたるなり。

（三）の一

伊香保より水澤の觀音まで一里あまりの間は、一條の道、蛇の如く禿山の中腹に沿うてうねり、唯二ヶ所ばかり山の裂目の谷をなせるに陷りてまた這ひ上れる外は、眼をねむりても行かる可き道なり。下は赤城より上毛の平原を見晴らしつ。此處等あたりは一面の草原なれば、春の頃は野焼の痕の黑める土より、さまざまの草萌萩桔梗女郎花の若芽など、生え出でて毛氈を敷けるが如く、美しき草花其間に咲き亂れ、綿帽子着た錢卷、ひよろりとした蕨、此處も其處もたちて、一たび此處に下り立たば春の日の永きも忘る可き處なり。

武男夫婦は、今日の晴の蕨狩すとて、姥の幾と宿の女中を一人伴れて、午食後より此處に來つ。早や一しきり採りあるきて、少し草臥が來しと見え、女中に持たせし毛布を草の軟かなる處に敷かせて、武男は靴ばきのまゝごろりと横になり、浪子は麻裏草履を脱ぎ桃紅色の手巾にて二つ三つ膝のあたりを掃ひながらふはりと坐りて、「おゝ軟か！ 勿體ない樣でムいますね」

「ほゝゝ、お孃——あらまた、御免遊ばせ、お奥樣の好い御顏色に御なり遊ばしましたこと！ そして彼樣に御唱歌なんぞ御歌ひ遊ばしましたのは、本當にお久し振りでムいますねエ」と幾は嬉し氣に浪子の横顏を覗く。

「餘り歌つて何だか渴いて來たよ」

「御茶を持つて參りませんで」と女中は風呂敷解きて夏蜜柑、袋入りの乾菓子、折詰の卷鮓など取り出す。

「何、此があれば茶は入らんさ」と武男は衣兜よりナイフ取り出して蜜柑を剝きながら「如何だい浪さん、僕の手際には驚いたらう」

「彼樣な言を仰有るわ」

「旦那樣の御採り遊ばしたのには、杪欏が澤山雜つて居りましてムいますよ」と、女中が口を出す。

「馬鹿を言ふな。負惜みをするね。はゝゝ。今日は實に愉快だ。好い天氣ぢやないか」

「綺麗な空ですこと、碧々して、本當に小袖にしたい樣でムいますね」

「水兵の服には宜からう」

「おゝ好い香！ 草花の香でせうか、あ、雲雀が鳴いてますよ」

「さあ、御鮓を戴いて御腹が出來たから、今一稼して來ませうか、ねエ女中さん」と姥の幾は宿の女を促し立てゝ、また蕨採りにかゝりぬ。

「些し殘しといて呉れんとならんぞ——健な婆ぢやないか、ねエ浪さん」

「本當に健でムいますよ」

「浪さん、草臥れはしないか」

「否、些も今日は疲れませんの、わたくし此樣に樂しいことは初めて！」

「遠洋航海なぞすると隨分好い景色を見るが、併し此樣な高い山の見晴はまた別だね、實に爽々するよ。そら其處の左の方に白い雲が閃々するだらう。あれが來時に浪さんと晝飯を食つ

た澁川さ。それから今少此方の碧いリボンの樣たのが利根川さ。彼か坂東太郎だ、見えないだらう。それからあの、赤城の、斯うずうと垂れとる、それ／＼煙が見えとるだらう、あの下の方に何だか、うぢや／＼してるね、彼が前橋さ。何？ ずつと向うの銀の針の樣なの？ さうさう．彼は矢張利根の流だ。あゝもう先きは霞んで見えない。兩眼鏡を持つて來る所だつたねエ、浪さん。併し霞がかけて、先が明瞭しないのも却て面白いかも知れん」

浪子は竊と武男の膝に手を投げて溜息つき、

「何時までも斯うして居たうムいますこと！」

黄色の蝶二つ浪子の袖を掠めてひら／＼と飛び行きしあとより、さわ／＼と草踏む音して．帽子被りし影法師突然に夫婦の隈前に落ち來りぬ。

「武男君」

「やあ！ 千々岩君か。如何して此處に？」

（三）の 二

新來の客は二十六七にや。陸軍中尉の服を着たり。軍人には珍らしき色白の好男子、惜しきことには、口のあたり何處となく鄙し氣なる所ありて、黑水晶の如き眼の光鋭く、見つめらる人に不快の感を起さすが、疵なるべし。此は武男が從兄に當る千々岩安彦とて、當時參謀本部の下僚に居れど、腕利の聞えある男なり。

「突然で、喫驚だらう。實は昨日用があつて高崎に泊つて、今朝澁川まで來たんだが、伊香保は一足と聞いたから、一寸遊びに來たのさ。それから宿に行つたら、君達は蕨採の御遊と聞いたから、路を敎はつて遣つて來たんだ。なに、明日は歸らなけりやならん。邪魔に來た樣だな。はツはツ」

「馬鹿な。――君其後宅に行つて呉れたかね」

「昨日一寸寄つて來た。叔母樣も元氣で居なさる。が、最早君達が歸りさうなものだつて頻りに呟して居なすツたツけ。――赤坂の方でも御變りもありませんです」と例の黑水晶の眼は燗乎と浪子の顏に注ぐ。

先刻から赧らめし顏は一入紅うなりて浪子は下向きぬ。

「さあ、援兵が來たから最早敗けないぞ。陸海軍一致したら、娘子軍百萬ありと雖も恐るゝに足らずだ。――なにさ、先刻から此御婦人方が我獨一人を窘めて、やれ蕨の採り方が少ないの、採つたのが蕨ぢやないだの、惡口して困つたンだ」と武男は頤もて今來し姥と女中を指す。

「おや、千々岩樣――如何して來らツしやいまして？」と姥は喫驚した樣子にて少し小鼻に皺を寄せつ。

「乃公が先刻電報かけて加勢に呼んだンだ」

「おほゝゝ、彼樣な言を仰有るよ――あゝ左樣で、へえ、明日は御歸り遊ばすンで。へえ、歸ると申しますと、ね、奥樣、御夕飯の支度もムいますから、妾共は御先に歸りますでムいますよ」

「噯、其が宜い、其が宜い、千々岩君も來たから、澤山御馳走するンだ。其積りで腹を減らして來るぞ。はゝゝゝ、なに、浪さんも歸る？ まあ居るが宜いぢやないか。味方が無くなるから逃げるンだな。大丈夫さ、決して窘めはしないよ。あはゝゝ」

引きとめられて浪子は居殘れば、幾は女中と荷物になる可き毛布蕨など收拾めて歸り行きぬ。

あとに三人は一しきり蕨を採りて、それよりまだ日も高ければとて水澤の觀音に詣で、先刻蕨を採りし處迄歸りて暫く休み、徐々歸途に上りぬ。

夕日は物聞山の肩より花やかに射して、道の左右の草原は萌黃の色燃えんとするに、其處此處に立つ孤松の影長々と横はりつ。眼をあぐ

れば、遠き山々靜かに夕日を浴び、麓の方は夕煙諸處に立ち上る。遥か向うを行く草負牛の、叱られて哞と鳴く聲空に滿ちぬ。

武男は千々岩と竝びて話しながら行くあとより浪子は從ひて行く。三人は徐かに歩みて、今しも谿を涉り終り、坂を上りて眩き夕日の道に出でつ。

武男は忽然足をとゞめぬ。

「やあ、失策つた。ステッキを忘れた。なに、先刻休んだ處だ。待つてて呉れ玉へ、一走り取つて來るから――なに、浪さんは待つてれば宜いぢやないか。直ぐ其處だ。全速力で驅けて來る」

と武男は強ひて浪子を押とめ、手巾包の蕨を草の上にさし置き、急ぎ足に坂を下りて見えずなりぬ。

(三)の三

武男が去りし後に、浪子は千々岩と一間ばかり離れて無言に立ちたり。頓て谷を涉りて彼方の坂を上り果てし武男の姿小さく見えたりしが、また忽ち彼方に向ひて消えぬ。

「浪子さん」

彼方を望み居し浪子に、耳元近き聲に呼びかけられて思はず身を震はしたり。

「浪子さん」

一歩近寄りぬ。

浪子は二三歩引下りて、餘儀なく顔をあげたりしが、例の黒水晶の目にひたと熟視められて、側向きたり。

「御目出度う」

此方は無言、耳までさつと紅になりぬ。

「御目出度う。イヤ、御目出度う。併し目出度くない奴も何處かに居るですがね。へゝゝゝ」

浪子は俯きて、紋にしたる海老色の洋傘の尖もてしきりに草の根を抉りつ。

「浪子さん」

蛇に魅らるゝ栗鼠の今は是非なく顔を上げたり。

「何でムいます?」

「男爵に金、は矢張好いものですよ。へゝゝゝへ、いや御目出度う」

「何を仰有るのです?」

「へゝゝゝ、華族で、金があれば馬鹿でも嫁に行く、金がなけりや如何様に慕つても唾もひツかけん、ね、此れが當今の姫御前です。へゝゝへ、浪子さんなンざ其様な事はないですがね」

浪子も流石に血相變へて屹と千々岩を睨みたり。

「何を仰有るンです。失敬な。今一度武男の目前で言つて御覽なさい。失敬な。男らしく父に相談もせずに、無禮千萬な艶書を吾に遣つたりなンぞ……最早此から決して容赦はしませぬ」

「何ですと?」千々岩の額は眞暗くなり來り、脣を噛んで、一歩二歩寄らむとす。

突然に嘶く聲足下に起りて、馬上の半身坂より上に見え來りぬ。

「ハイ〳〵〳〵ッ。御邪魔でがあすよ。ハイハイ〳〵ッ」と馬上なる六十あまりの老爺、頬被りをとりながら、怪しげに二人の容子を見かへり見かへり行き過ぎたり。

千々岩は立ちたるまゝに、動かず。額の條はやゝ舒びて、結びたる脣の邊に冷笑のみぞ浮びたる。

「へゝゝゝ、御迷惑なら御返しなさい」

「何をですか」

「何が何をですか、御嫁ひなものを!」

「ありません」

「なぜないのです」

「汚らはしいものは燒き棄ててしまひました」

「いよ〳〵ですな。別に見た者は屹度ないですか」

「ありません」

「いよ〱ですか」

「失敬な」

浪子は忿然として放ちたる眼光の、彼が眞黒き眼の凄じきに見返されて、不快に得堪へず慄然と震ひつゝ、遙かに眼を外らしぬ。恰も其時谷を隔てし彼方の坂の口に武男の姿見え來りぬ。顏一點漿の如く赭く夕日に閃きつ。

浪子はほつと息つきたり。

「浪子さん」

千々岩は懲りずまに彼方此方逸らす浪子の眼を追ひつゝ「浪子さん、一言云つて置くが、祕密、何事も祕密に、な、武男君にも、御兩親にも。で、なけりや——後悔しますぞ」

電の如き眼光を浪子の面に射つゝ、千々岩は身を轉じて、俛して其處らの草花を摘み集めぬ。

靴音高く、ステッキ打振りつゝ坂を上り來し武男、「失敬、失敬、あ苦しい、走りづめだッたから。併しあつたよ。ステッキは。——う、浪さん、如何かしたかい、ひどく顏色が惡いぞ」

千々岩は今摘みし菫の花を胸の紐飾に插しながら、

「なに、浪子さんはね、君が餘り隙取つたもンだから、大方迷子になつたンだらうツて、ひどく心配しなすツたンさ。はツはゝゝゝ」

「あはゝゝゝ。其樣か。さあ、徐々歸らうぢやないか」

三人の影法師は相並んで道邊の草に曳きつゝ伊香保の方に行きぬ。

（四）の一

午後三時高崎發上り列車の中等室の一隅に、人無きを幸ひ、靴ばきのまゝ腰掛の上に足さしのばして、卷莨を吹しつゝ、新聞を讀み居るは千々岩安彦なり。

手荒く新聞を投げやり、

「馬鹿」

齒の間より言ふ拍子に落ちし卷莨を腹立し氣に踏消し、窓の外に唾はきしまゝ暫らく佇みて居たるが、頓て舌打鳴らして、室の全長を二三度往來して、また腰掛に戻りつ、手を拱きて、眼を閉ぢぬ。

眞黑き眉は一文字にぞ寄りたる。

* * * *

千々岩安彦は孤なりき。父は鹿兒島の藩士にて、維新の戰爭に討死し、母は安彦が六歳の夏其頃霍亂と云ひける虎列剌に斃れ、六歳の孤兒は叔母——父の妹の手に引取られぬ。父の妹は即ち川島武男の母なりき。

叔は母流石に少しは安彦を憐みたれども、叔父はこれを厄介者に思ひぬ。武男は仙臺平の袴穿きて儀式の座につく時、小倉袴の萎えたるを着て下座にすくまされし千々岩は、身は武男の如く親、財產、地位などのあり餘る者ならずして、全く空拳と吾智慧に世を渡る可き者なるを早く悟り得て、武男を惡み、叔父を怨めり。

彼は世渡の道に裏と表の二條あるを見ぬきて、如何なる場合にも捷徑をとりて進まんことを誓ひぬ。されば叔父の蔭によりて陸軍士官學校にありける間も、同窓の者は試驗の、點數のと騷ぐ間に、千々岩は郷黨の先輩にも出入油斷なく、苟くも交るに身の便宜になる可き者を選み、他の者共が卒業證書握りて吻と息つく間に、早くも手蔓つたうて陸軍の主腦なる參謀本部の圍ひ内に乘り込み、外の同窓生は彼方此方の中隊附となりてそれ練兵やれ行軍と追ひつかはるゝに引かへて、千々岩は參謀本部の階下に煙吹して戲談の間に軍國の大事も或は耳に入る羨しき地位に巢くひたり。此上は結婚なり。猿猴のよく水に下るはつな

げる手あるが爲め、人の立身するはよき縁あるが爲めと、早くも知れる彼は、戸籍吏ならねども、某男爵は某侯爵の婿、某學士兼高等官は某伯の婿、某富豪は某伯の子息の養父にて、某侯の子息の妻も某富豪の女と暗に指を折りつつ、早くも其處此處と配れる眼は片岡陸軍中將の家に注ぎぬ。片岡中將とし云へば、當時豫備にこそ居れ、驍名天下に隱れなく、畏きあたりの御覺えもいとめでたく、度量濶大にして、誠に國家の干城と云ひつ可き將軍なり。千々岩は早く此將軍の隱然として天下に重き勢力を見ぬきたれば、聊か便を求めて次第に近寄り、如才なく奥にも取り入りつ。眼は直ちに第一の令孃浪子を睨みぬ。一には父中將の愛自づから尤も深く浪子の上に注ぐを逸早く看て取りし故、二には今の奥樣は自づから浪子を疎みて何處にもあれ縁あらば早く片付けたき樣子を見たる爲め、三にはまた浪子の愼深く氣高きを好ましゝ思ふ念も雜りて、卽ち其人を目がけしなり。斯くて樣子を見るに中將は所謂喜怒容易に色に形はれぬ太腹の人なれば、何と思はるゝかは一寸測り難けれど、奥樣の氣には確かに入りたり。二番目の令孃の名はお駒とて少し蹤ねたる三五の少女は殊に吾と仲好なり。其下には今の奥樣の腹にて、二人の子供あれど、此は問題の外としてこゝに老女の幾とて先の奥樣の時より勤め、今の奥樣の輿入後奥臺所の大更迭を行はれし時も中將の聲がかりにて一人居殘りし女、此が始終浪子の側につきて吾子に好意の乏しきが邪魔なれど、何有、本人の浪さへ攻め落さばと、千々岩はやがて一年ばかり機會を覗ひしが、今は待ちあぐみて或日宴會歸りの醉まぎれ、大膽にも一通の艶書二重封にして表書を女文字に、故らに郵便をかりて浪子に送りつ。

　其日命ありて俄かに遠方に出張し、三月あまりにして歸れば、吾留守に浪子は貴族院議員加藤某の媒妁にて、人もある可きに吾從弟川島武男と結婚の式已に濟みてあらむとは！　思はぬ不覺をとりし千々岩は、腹立まぎれに、色よき返事斯の樣にと心に祝ひて土産に京都より買うて來し友染縮緬寸々に引裂きて屑籠に投げ込みぬ。

　然りながら千々岩は如何なる場合にも全く吾を忘れ了る男にあらざれば、忽ちにして敗餘の兵を收めつ。唯心外なるは此上彼艶書の一條若し浪子より中將に武男に漏れなば大事の便宜を失ふ恐れあり。持込みよき浪子の事なれば、まさかと思へどまた覺束なく、高崎に用ありて行きしを幸ひ、それとなく伊香保に滯留する武男夫婦を訪うて、やがて探りを入れたるなり。

　忌々しきは武男――

*　*　*　*　*

「武男、武男」と耳近に誰やら呼びし心地して、愕と眼を開きし千々岩、窓より覗けば、列車はまさに上尾の停車場にあり。驛夫が、「上尾上尾」と呼びて過ぎたるなり。

「馬鹿なッ！」

　獨り自から罵りて、千々岩は起ちて二三度車室を往き戻りつ。心に纏ふ或ものを振り落さむとする樣に身震ひして、座に復りぬ。冷笑の影、眼にも脣にも浮びたり。

　列車は又も上尾を出でて、疾風の如く馳せつつ、幾驛か過ぎて、王子に着ける時、プラットフォームの砂利踏みにじりて、五六人ドヤドヤと中等室に入り込みぬ。中に五十あまりの男の、一樂の上下揃ひ白縮緬の兵兒帶に岩丈な金鎖を晃かせ、右手の指に分厚な金の指環を插し、赭顏の眼尻著しく垂れて、左の眼下にしたゝかなる赤黑子あるが、腰かくる拍子にフッと眼を見合せつ。

「やあ、千々岩さん」

「やあ、此は……」

「何地へ、御出でしたか」云ひつゝ赤黒子は立つて千々岩が側に腰かけつ。

「はあ、高崎まで」

「高崎の御歸途ですか」一寸千々岩の顏を眺め、少し聲を低めて、「時に御急ぎですか。でなけりや夜食でも御一處にやりませう」

千々岩は頷きたり。

（四）の二

橋場の渡のほとりなる唯有る水莊の門に山木兵造別邸とあるを見ずば、某の待合かと思はる可き家作の、加之音締の響しめやかに婀娜めきたる島田の障子に映るか、左もなくば紅の毛氈敷かれて花牌など落ち散るに相應しかる可き二階の一室に、わざと電燈の野暮を避けて例の和洋行燈を据ゑ、取り散らしたる盃盤の間に、胡坐をかけるは千々岩と今一人の赤黒子は、問ふまでもなき當家の主人山木兵造なる可し。

遠けしにや、側に侍る女もあらず、赤黒子の前には小形の手帳を廣げたり、鉛筆を添へて。番地官名など細かに肩書して姓名數多記せる上に、鉛筆にてさま〴〵の符號つけたり。丸。四角。三角。イの字。ハの字。五六七などの數字。或は羅馬數字。點かけたるもあり。一度消してイキルとしるしたるもあり。

「夫れぢや千々岩さん、其方は其ときめて置いて、いよ〳〵定まつたら直ぐ知らして呉れたまへ。――大丈夫間違はあるまいね」

「大丈夫さ、最早大臣の手許まで出て居るのだから。併し何しろ競爭者が始終運動しとるのだから例のも思ひ切つて撒かんといけない。此だがね、此奴中々喰へない奴だ。しツかり轡を銜ませんと宜けないぜ」と千々岩は手帳の上の一の名を指しぬ。

「此あ如何だね？」

「其奴は話せない奴だ。僕はよく識らないが、ひどく頑固な奴ださうだ。先生正面から平身低頭で往くのだな。惡くすると失策るよ」

「いや陸軍にも、分つた人もあるが、實に話の出來ン男も居るね。去年だつた、師團に服を納めるンで、例の筆法でまあ大概は無事に通つたのはよかツたが、あら何とか云ッたツけ、赤鬚の大佐だつたがな、其奴が何の彼の難癖つけて困るから、番頭をやつて例の菓子箱を出すと、馬鹿奴、賄賂なんぞ取るものか、軍人の體面に關するなんて威張つて、到頭のつまりあ菓子箱を蹴飛ばしたと思ひなさい。僕の上層が干菓子で、下が銀貨だから、たまらないさ。紅葉が散る、雪が降る、座敷中――の雨だらう。すると其奴めいよ〳〵腹立てやがッて、汚らはしいの、やれ告發するのなんの吐かしやがるさ。漸と結局をつけはつけたが、大骨折らしアがツたね此樣な先生が居るから馬鹿々々しく事が面倒になる。いや面倒と云ふと武男さんなぞが矢張此流で、實に話せないに困る。先日も――」

「併し武男なんざ親父が何萬と云ふ身代を拵へて置いたのだから、頑固だッて正直だッて好きな眞似していけるのだがね。吾輩の如きは腕一本――」

「いや悉皆忘れて居た」と赤黒子は一寸千々岩の顏を見て、懷中より十圓紙幣五枚取出し「何れ何は後からとして。先車代に」

「遠慮なく頂戴します」手早くかき集めて内衣兜にしまひながら、「併し山木さん」

「？」

「なにさ、蒔かぬ種は生えんからな！」

山木は苦笑しつ。千々岩が肩ぽんと敲いて、

「喰へン男だ、惜しい事だな、せめて經理局長位に！」

「はゝゝ、山木さん、清正の短刀は子供の三

尺三寸よりか切れるぜ」

「甘く言つたな——併し君、蠣殻町だけは用心し玉へ、素人ぢや如何してもしくじるぜ」

「何有、端金だからね——」

「ぢや何れ近日、様子が分かり次第——なに、車は出てから乗つた方が大丈夫です」

「其れぢや——家内も御挨拶に出るのだが、娘が手離されんでね」

「お豊さんが？ 病氣ですか」

「實は其、何です。此の一月ばかり病氣をやつてな、それで家内が連れて此家へ來て居るですて。いや千々岩さん、妻だの子だの滅多に持つもんぢやないね。金儲けは獨身に限るよ。はツはゝゝ」

主人と女中に玄關まで見送られて、千々岩は山木の別邸を出で行きたり。

（四）の三

千々岩を送り終りて、山木が奥へ歸り入る時、彼方の襖すうと開きて、色白の但髪薄くして而も前齒二本不行儀に反りたる四十あまりの女入り來りて山木の側に座を占めたり。

「千々岩はんは最早御歸り？」

「今追つ攘つた所だ。如何だい、豊は？」

反歯の女はいとゞ額を長くして、「本當に良人。彼女にも困り切りますがな。——兼、御前は彼方往つて御出。今日もな良人、些何かが氣に喰はんたら云うて、御茶碗を投げたり、着物を裂いたりして、仕樣がありまへんやつた。本當に十八と云ふ年をして——」

「愈々以て巣鴨だね。困つた奴だ」

「良人、其樣な戯談所ぢやござんせんがな。——でも可哀想や、本當に可哀想や、今日もな、良人、竹に其樣云ひましたてね。本當に憎らしい武男はんや、ひどい〳〵〳〵人や、去年の御正月には靴下を編んであげたし、それからハンケチの縁を縫つてあげたし、それからまた毛絲の手袋だの、腕ぬきだの、それ所か今年の御年始には赤い毛絲で襯衣まで編んであげたに、皆自腹ア切ツて編んであげたのに、何の沙汰なしで彼の不器量な意地惡の威張つた浪子はんをお嫁に貰つたり、本當にひどい人だわ、ひどいわ〳〵〳〵、妾も山木の娘やさかい、浪子はんなんかに負けるものか、本當にひどい〳〵〳〵ツてな、良人、斯樣に云つて泣いてな、其樣に思ひ込んで居ますに、あゝあ、如何にかして遣りたいがな、良人」

「馬鹿を云ひなさい、勇將の下に弱卒なし、御身は流石に豊が母だよ。其ア川島だツて新華族にしちや餘程財産もあるし、武男さんも萬更馬鹿でもないから、乃公も餘程お豊を入れ込まうと骨折つて見たぢやないか。併し駄目で、最早ちやんと婚禮が濟んで見れば、何も彼も御破算さ。お浪さんが死んでしまふか、離縁にでもならなきやア仕方がないぢやないか、夫れよりも馬鹿な事はいゝ加減に思ひ切ツてさ、外に嫁く分別が肝腎ぢやないか、馬鹿奴」

「何が阿呆かいな？ はい、良人見たいに利口やおまへんさかいな。好い年配をして、彼女や此女や足袋とりかへる樣な——」

「其樣な寐言を滔々まくしかけられちやア困るて。御身は本當に馬——だ。すぐ眞面目になり居る。なにさ、乃公だツて、お豊は子だもの、可愛がらずに如何するものか、だからさ、其樣なくだらぬ繰言ばつかり云つてるよりも、別にな、立派な處に、な、生涯樂をさせようと思つてるのだ。さ、おすみ、來なさい、二人で些説諭でもして見ようぢやないか」

と夫婦打連れ、廊下傳ひに娘お豊の棲める離室に赴きたり。

山木兵造と云ふは何處の人なりけるにや、出所定かならねど、今は世に知られたる紳商とや

らの一人なり。出世の初、今は故人となりし武男が父の世話を受けしこと少なからざれば、今も川島家に出入すと云ふ。其も川島家が新華族中にての財産家なるが故なりと云ふ者あれど、其はあまりに酷なる評なる可し。本宅を芝櫻川町に構へて、別莊を橋場の渡の滸に持ち、昔は高利も貸しけるが、今は專ら陸軍其他官省の請負を業とし、嫡男を米國波士頓の商業學校に入れて、娘お豐はつい先頃まで華族女學校に通はしつ。妻は何時如何にして持ちけるにや、唯京都者と云ふばかり、頗る醜きを、よく彼山木は辛抱するぞと云ふ人もありしが、實は意氣婀娜など形容詞のつく可き女諸處に家居して、輪番行く山木を待ちける由は妻もおぼろげながら曉りしなり。

（四）の四

床には琴、月琴、玻璃箱入りの大人形などを置きたり。一隅には美しき女机あり、此方には姿見鏡あり、如何なる高貴の姬君や住み玉ふらむと見てあれば、八疊の中央に絹蒲團敷かせて、玉蜀黍の毛を束ねて結つた樣なる島田を大童に振り亂し、ごろりと横に臥した十七八の娘、色白の下豐と云へば可愛氣なれど、其下豐が少し過ぎて頰のあたりの肉今や落ちむかと危ぶまるゝに、ちよつぼりと開いた口は閉づるも面倒と云ひ貌に始終洞門を形づくり、薄すりとあるか無きかの眉の下にありあまる肉を辛うじて二三分上下に押分けつゝ開きし眼の中如何にも春霞のかけたる如く、前の世からの長き眠りが頓斗今以て醒めぬ樣なり。

今何か吩咐けられて笑を忍んで立つて行く女の背に、「馬鹿」と一つ後矢を射つけながら、娘は自烈體氣に搔卷踏みぬぎ、床の間にありし大形の――袴穿きたる女生徒の多くうつれる寫眞をとりて、絲の如き眼に瞬きもせず見つめしが、やがて其一人の顏と覺しきあたりを頻りに爪彈きしつ。猶其にも飽き足らでや、爪もて其顏の上に縱横に痕をつけぬ。

襖の開く音。

「誰？　竹かい」

「呟竹だ．頭の禿げた竹だ」

笑ひながら枕頭に坐るは、父の山木と母なり。娘は流石に狼狽てゝ寫眞を押隱し、起きもされず寢もされずと云はむが如く横になり居る。

「如何た、お豐、氣分は？　些は宜いか？　今隱したのは何だい。一寸見せな、まあ見せな、此さ、見せなと云へば。――何だ、此ア、浪子さんの顏ぢやないか、ひどく爪痕をつけたぢやないか、此樣な事するよりか丑の時參でもした方が餘程氣が利いてるぜ！」

「良人また其樣な事を！」

「如何だ、お豐、御前も山木兵造の娘ぢやないか。些氣を大きくして山氣を出せ、山氣を出せ、那樣な屑々した男に心中立――其れもさ、此方ばかりで御相手なしの心中立するよりか、こら、お豐、三井か三菱でなけりやア大將か總理大臣の息子、いやそれよりか外國の皇族でも引かける分別をしろ、其樣な肝ッ玉の小せエ事で如何するものか。如何だい、お豐」

母の前では縱横に駄々をこね玉へど、お豐姬も流石に父の前をば憚り玉ふなり。突伏して答なし。

「如何だ、お豐、矢張武男さんが戀しいか。いや困つた小浪御寮だ。小浪と云へば、ねエお豐、些氣晴しに京都にでも行つて見んか。其ア面白いぞ。祇園清水智恩院．金閣寺拜見が嫌なら西陣へ行つて、帶か三枚襲でも見立てるさ。如何だ、開いた口に牡丹餅より甘い話だらう。御前も久し振だ、お豐を連れて道行と出かけなさい、喃おゝみ」

「良人も一處に行きなはるのかいな」

「乃公？ 馬鹿を言ひなさい、此忙しい中に！」
「其れなら妾もまあ見合せやた」
「何故？ 飛だ義理立さするぢやないか、何故だい？」
「おほ」
「何故だい？」
「おほゝゝゝ」
「氣味の惡い笑ひ方をするぢやないか。何故だい？」
「良人一人の留守が心配やさかい」
「馬鹿を云ふぜ。お豐の前で其樣な事云ふやつがあるものか、お豐、母さんの言つてる事ア皆嘘だぜ、眞に受けるなよ」
「おほゝゝ。如何樣に口で云はゝつてもあかんさかいなア」
「馬鹿を云ふな。それよりか――なお豐、氣を廣く持て、廣く。待てば甘露ぢや。今に面白エ事が出て來るぜ」

（五）の一

赤坂氷川町なる片岡中將の邸內に栗の花咲く六月中旬の或土曜の午後、主人子爵片岡中將は六羅の單衣に鼠縮緬の兵兒帶して、擲手と書齋の椅子に倚りぬ。

五十に間はなかる可し、額のあたり少し禿げ、兩鬢霜漸く繁からむとす。體量は二十二貫、亞剌比亞種の逸物も將軍の座下に汗すと云ふ。兩の肩怒りて頸を沒し、二重の顋直ちに胸につゞき、安祿山風の腹便々として、牛にも似たる太腿は行くに相擦れつ可し、顏色は思ひ切つて赭黒く、鼻太く、脣厚く、髭薄く、眉も薄し。唯此體に似げなき兩眼細うして光和らかに、寢ながら象の眼に似たると、今にも笑まむずる氣はひの斷えず口邊にさまよへるとは、云ふ可からざる愛嬌と滑稽の趣味をば著しく描き出しぬ。

或年の秋の事とか、中將微服して山里に獵りし、姥獨り住む山小屋に澁茶一碗所望しけるに、姥つくゞゝと中將の樣子を見て、
「大々的體格だなう、兎の一疋も獲れたんべいか？」
中將莞爾として「些も獲れない」
「其樣な殺生したあて、あにが商賣になるもんかよ。其體格で日傭取でもして見ろよ、五十兩は大丈夫だよ」
「一月にかい？」
「あに！ 年によ。惡いこたあ云はねえだから、日傭取るだあよ。何時だあて此爺が世話あしてやる」
「一應、其れは有り難い。また頼みに來るかも知ん」
「其樣しろよ、其樣しろよ、其大々的體格で殺生は惜しいこんだ」

此は中將の知己の間に一つ話として今も時々出づる佳話なりとか。知らぬ眼よりは左こそ見ゆらめ。知れる眼よりは、此泰山巍々として物に動ぜぬ大器量の將軍をば、まさかの時の鐵壁と恃みて、其二十二貫小山の如き體格と常に怡然たる神色とは洶々たる三軍の心をも安からしむ可し。

肱近の卓子には青地交趾の鉢に植ゑたる武者立の細竹を置けり。頭上には高く兩陛下の御影を揭げつ。下りて彼方の一面には「成仁」の額あり、落款は南洲なり。架上に書あり。煖爐緣の上、隅なる三角棚の上には、內外人の寫眞七八枚、軍服あり、平裝のもあり。

草色の帷を絞りて、東南二方の窓は六つとも朗かに開け放ちたり。東の方は眼下に人家簇れる谷町を見越して、青々としたる靈南臺の上より、愛宕塔の尖、尺ばかり露はれたるを望む。鳶ありて其上を盤りつ。南は栗の花咲

きこぼれたる庭なり。其絶間より氷川社の銀杏の緑青鉾を樹てし様に見ゆ。

窓より見晴らす初夏の空碧々と淺黄繻子なんどの様に光りつ。見る眼清々しき緑葉の其處此處に、卵白色の栗の花總々と滿樹に咲きて、懸ける如く空の碧に映りたり。窓近くさし出でたる一枝は、枝の武骨なるに似ず、日光の射すまゝに緑玉、碧玉、琥珀さま〴〵の色に透きつ、鬪める其葉の間々に、肩總其まゝの花搖々と枝も撓に咲けるが、吹くとはなくて大氣の顫ふ毎に香は忍びやかに書齋に音づれ、薄紫の影は窓の閾より主人が左手に持てる「西比利亞鐵道の現況」の頁の上にちら〳〵躍りぬ。

主人は一霎時其細き眼を閉ぢて、太息つきしが、また徐々に開きたる眼を册子の上に注ぎつ。

何處にか、車井の響珂々と珠を轉ばす樣に聞えしが、また已みぬ。

午後の靜寂は一邸に滿ちたり。

忽ち虛を覗ふ二人の曲者あり、尺ばかり透きし扉より鬍と頭をさし入れて、また引き込めつ。忍笑の聲は戶の外に渦まきぬ。一人の曲者は八ばかりの男兒なり。膝ぎりの水兵の服を着て、緋上靴をはきたり。一人の曲者は五か、六なる可し、紫矢絣の單衣に紅の帶して、髮ははらりと眼の上まで散らせり。

二人の曲者は暫し戶外に跼蹐ひしが、今は堪へ兼ねたる樣に四の手齊しく扉を排きて、一齊に突貫し、室の中程に橫はりし新聞綴込の堡壘を難なく乘り越え、眞一文字に中將の椅子に攻め寄せて、水兵は右、振分髮は左、小山の如き中將の膝を生捕り、

「阿爺!」

（五）の二

「應、歸つたか」

如何にも緩々と其便々たる腹の底より押しあげた樣なる乙音を發しつゝ、中將は莞爾と笑みて、其重やかなる手して右に水兵の肩を拍き、左に振分髮の其前髮をかい撫でつ。

「如何だ。小試驗は……出來たか?」

「僕アね、僕アね、阿爺、僕ア算術は甲」

「妾ね、阿爺、今日は縫取がよく出來たつて先生御譽めなすッてよ」

と振分髮は袂より幼稚園の製作物を取出して中將の膝の上に置く。

「應、此立派に出來たぞ」

「それからね、習字に讀書が乙で、あとは皆丙なの、到頭水上に負けちやッた。僕アロ惜しくッて仕方がないの」

「勉強するさ——今日は修身の話は何ぢやッたか?」

水兵は快然と笑みつゝ、「今日はね、阿爺、楠正行の話よ。僕正行ア大好き。正行とナポレオンは何方がエライの?」

「何方もエライさ」

「僕アね、阿爺、正行ア大好きだけど、海軍が猶好きよ。阿爺が陸軍だから、僕ア海軍になるンだ」

「はゝゝゝ。川島の兄君の弟子になるのか?」

「だッて、川島の兄君なんか少尉だもの。僕ア中將になるンだ」

「何故大將にやならンか?」

「だつて、阿爺も中將だからさ。中將は少尉よかエライんだね、阿爺」

「少尉でも、中將でも、勉強する者がエライぢや」

「あたしね、阿爺、阿爺てばヨウ阿爺」と振分髮はつかまりたる中將の膝を顚頏臺にして體を上下に搖りながら、「今日はね、面白いお話を聞いてよ。彼の兎と龜のお話を聞いてよ、云つて見ませうか、——或處に一疋の兎と龜が居りました——あら阿母いらしッてよ」

柱時計の午後二點をうつ拍子に、入り來りしは三十八九の丈高き婦人なり。束髪の前髪をきりて、縮らしたるを、隆き額の上にて二つに分けたり。やゝ大きなる眼少しく釣りて、何處やら些險なる所あり。地色の黑きに薄すり刷きて、脣を稀に漏るゝ齒は眩きまで皓く磨きぬ。パッとした御召の單衣に黑繻子の丸帶、左右の指に寶石入の金環價高かるべきをさしたり。

「また阿爺に甘えて居るね」

「なにさ、今學校の成績を聞いてた所ぢや。――さあ、これから乃父の御稽古ぢや。皆外で遊べ遊べ。後で運動に行くぞ」

「まあ、嬉しい」

「萬歲！」

兩兒は嘻々として、互に縺れつ、搦みつ、前になり後になりて、室を出で去りしが、やがて「萬歲！」「兄さま妾もよ」と叫ぶ聲遙に聞えたり、

「如何樣に申しても、良人は矢張甘くなさいますよ」

中將は含笑みつ。「何、其樣でもないが、子供は可愛がツた方が宜いさ」

「でも良人、嚴父慈母と俗にも申しますに、良人が可愛がツてばかり御遣ンなさいますから、駒は當に逆樣になツてしまつて、わたくしは始終叱り通しで、惡まれ役はわたくし一人ですわ」

「まあ其樣短氣急に攻めんでも宜えぢやないか、何卒御手柔らかに――先生は先づ其處に御かけ下さい、はゝゝゝ」

打笑ひつゝ中將は立つて卓子の上よりふるきローヤルの第三讀本を取りて、固唾を吞みつゝ、薩音まじりの怪しき英語を讀み始めぬ。靜聽する婦人――夫人は頻りに發音の謬を正し居る。

此は中將の日課なり。維新の騷ぎに一介の武夫として身を起したる子爵は、身生の匆忙に逐はれて外國語を修むるの閑もなかりしが、昨年來豫備となりて少し閑暇を得てければ、此機にと先づ英語に攻めかゝれるなり。教師には手近の夫人繁子。長州の名ある士人の娘にて、久しく英國龍動に留學しつれば、英語に大抵の男子も及ばぬまで達者なりとか。げにも龍動の煙にまかれし夫人は、何事に寄らず洋風を重んじて、家政の整理、子供の教育、皆吾が洋の外にて見もし聞きもせし通りに行はむとあせれど、事大方は志と違ひて、僕婢は蔭に吾が世馴れぬを嘲り、子供はおのづから寬大なる父にのみ懷き、且良人の何事も鷹揚に東洋風なるが、先づ夫人不平の種子なりけるなり。

中將が千辛萬苦して一頁を讀み終り、まさに譯讀にかゝらんとする所に、扉[illegible]りて紅のリボンかけたる垂髪の――十五許りの少女入り來り、中將が大の手に小さき讀本を捧げ讀めるさまの可笑しきを、ほゝと笑ひつ。

「阿母、飯田町の伯母樣が入らツしやいましてよ」

「左樣」と見る可く見る可からざる程の皺を眉の間に寄せながら、一寸中將の顏を覗ふ。

中將は徐ろに起ち上りて、椅子を片寄せ、「此方へ御案內申しな」

（五）の三

「御免下さい」

と入つて來しは四十五六とも見ゆる品好き婦人、眼病ましきにや、水色の眼鏡をかけたり。顏の何處となく伊香保の三階に見し人に似たりと思ふも其筈なる可し。此は片岡中將の先妻の姉清子とて、貴族院議員子爵加藤俊明氏の夫人、媒妁として浪子を川島家に嫁しつるも此夫婦なりけるなり。

中將は莞爾に起ちて椅子を侑め、椅子に向へ

る志の帷を少し引き立てながら、
「さあ、何卒。非常に御無沙汰をしました。御主人ぢや相變らず御忙しいでせうな、はゝゝゝは」
「恰寫眞師でね、木鋏は放しませんよ、ほゝゝほ、まだ菖蒲には早いのですが、自慢の朝鮮石榴が花盛りで、薔薇もまだ殘つてますから何卒御警めに來て下さいまして、ね、呉々申しましたよ。ほゝゝゝ。――何卒。毅一さんや道ちやんを御連れなすッて」と水色の眼鏡は片岡夫人の方に向ひぬ。

打明けて云へば、子爵夫人はあまり水色の眼鏡をば好まぬなり。教育の差、氣質の異、其は勿論の事として、先妻の姉――此が始終心に蟠りて、不快の種子となれるなり。吾れ獨り主人中將の心を占領して、吾れ獨り家に女主人の威光を振はむずる鼻先きへ、先妻の姉なる人のしば／＼出入して、亡妻の面影を主人の眼前に浮ぶるのみか、口にこそ出さね、吾がこれをも昔の名殘とし疎める浪子、姥の幾等に同情を寄せ、死せる孔明の其れならねども、何彼につけて物故りし人の影を喚起して吾と爭はすが、甚だ快よからざりしなり。今や其浪子の姥の幾も漸くに去りて、治外の法權放れしはやゝ心安きに似たれど、今も彼水色眼鏡の顏見る毎に、墳墓中の人の出で來りて吾と良人を爭ひ、主婦の權力を爭ひ、折角立てし教育の方法家政の經綸をも爭はむずる心地して、おのづから安からず覺ゆるなりけり。

水色の眼鏡は蝦夷錦の信玄袋より瓶詰の菓子を取り出し、
「貰ひ物ですが、毅一さんと道ちやんに、まだ學校ですか、見えませんねエ。あゝ、左樣ですか。――それから此は駒さんに」
と紅茶を持て來し紅のリボンの少女に紫陽花の花簪を與へつ。
「何時も／＼御氣の毒さまですねエ、如何樣に喜びませう」と言ひつゝ子爵夫人は件の瓶を卓子の上に置きぬ。

折から姉の來りて、赤十字社の御方の奧樣に御面會なされたしと云ふに、子爵夫人は會釋して場をはづしぬ。室を出でける時、後より跟きて出でし少女を小手招きして、何事をか囁きつ、小戻りして窓の帷の蔭に内の話を立聞く少女を跡に殘して、夫人は廊下傳ひに應接間の方へ行きたり。紅のリボンの駒と云ふは、今年十五にて此も先妻の腹なりしが、夫人は姉の浪子を疎めるに引易へてお駒を愛しぬ。

寡言にして何事も内氣なる浪子を、意地悪き拗ね者とのみ思ひ誤りし夫人は、姉に比してやゝ侠なる妹の己が氣質に似たるを喜び、一は姉へのあてつけに、一はまた繼子とて愛せぬものかと世間に見せたき心も――ありて、父の愛の姉に注げるに對しておのづから味方を妹に求めぬ。

私強き人の性質として、或方には人の思はくも思はず吾思ふまゝに遣り通すこともあれど、また思ひの外に脆くて人の評判に氣をかねるものなり。畢竟名と利と併せ收めて、好きな事する上に人によく思はれむとするは、我儘者の常なり。斯る人に限りて、おのづから諂諛を喜ぶ。子爵夫人は男まさりの、加之西洋仕込の、議論にかけては威名天下に響ける夫中將にすら負を取らねど、中將の到る處友を作り逢ふ人毎に慕はるゝに引易へて、愛なき身には味方なく、心淋しきまゝにおのづから諛ひ寄る人をば喜びつ。召使の僕婢も言に訥きは何時か退けられて、世辭よきが用ゐられる樣になれば、幼き駒子も必ずしも姉を忌むにはあらざれど、姉を讒るが繼母の氣に入るを覺えてより、終には告口の癖をなして、姥の幾に顰蹙めさせしも一度二度にはあらず。されば姉は嫁

ぎての今までも、繼母の爲めには細作をも務むるなりけり。

東側の襖の、二つ目の窓の蔭に身を潜めて、聞き居れば、時々腹より押出した樣な父の笑聲、凛とした伯母の笑聲、かはる〴〵聞えしが、後には話聲の漸く低音になりて、「姑」「浪さん」などの途絶れ〳〵に聞ゆるに、紅リボンの少女はいよ〳〵耳傾けて聞き居たり。

（五）の四

「四ィ百く餘州を擧うざる、十う萬ン餘騎の敵イ、何んぞ恐れン吾アれに、鎌倉ア男兒ありイ」と足拍子踏みながらやつて來し先刻の水兵、眼早く、襖側に佇める紅リボンを見つけて、紅リボンが頻りに手もて口を掩ひて見せ、頭を掉り手を掉りて見せるも委細關はず、「姉さま〳〵」と走り寄り、「何してるの？」と問ひすがり、姉が連りに頭を掉るを、「何？　何？」と問ふに、紅リボンは顏を顰めて、「嫌な人だよ」と思はず聲高に云つて、しまつたりと云ひ顏に扉を鎖かし、匆々に走り行きたり。

「ヤアイ、逃げた、ヤアイ」

と叫びながら、水兵は父の書齋に入りつ。來客の顏を見るより莞爾と笑ひて、一寸頭を下げながら突と父の膝に縋りぬ。

「おや毅一さん、暫時見ない中に、また大きくなつた樣ですね。毎日學校ですか。さう、算術が甲？　よく勉強しましたねエ、近い內に阿爺や阿母と伯母サン處に御出なさいな」

「道は如何した？　應、左樣か。そうら、伯母樣が此樣なものを下さツたぞ、嬉しいか、あはゝゝ」と菓子の箱を見せながら、「阿母は如何した？　まだ客か？　伯母樣も最早御歸りなさる、と其樣云つて來い」

出で行く子供の後見送りながら、主人中將は熟と水色眼鏡の顏を見つめて、

「ぢや幾の事は左樣極めて何卒角立たぬ樣に——はあ其樣願ひませう。いや實は私も其樣な事がなけりや好いがと思つた位で、まあ遣らない方ぢやつたが、浪が連りに言ふし、自身も懇望しちよつたものぢやから——はあ、左樣、はあ、はあ、何分願ひます」

語半に入り來し子爵夫人繁子、水色眼鏡の方をちらと見て、「最早御歸りでムいますの、生憎の來客で——否、今歸りました。なに、また慈善會の相談ですよ、どうせ物にもなりますまいが、本當に今日は御愛想もムいませんで、何卒千鶴子さんによろしく——浪さんが居なくなりましたら一寸も遊びに入らツしやいませんねエ」

「此間から少し加減が惡かツたものですから、何處にも御無沙汰ばかり致します——では」と信玄袋をとりて徐ろに立てば、中將もやをら體を起して、

「どれ其處まで運動かた〴〵、なに其處までぢや、そら毅一も道も運動に行くぞ」

出づるを送りし夫人繁子はやがて居間の安樂椅子に腰かけて、慈善會の趣意書を見ながら、駒子を手招きて、

「駒さん、何の話だつたかい？」

「あのね、阿母、よくは分からなかツたけれども、何だか幾の事ですわ」

「さう？　幾」

「あのね、川島の老母がね、僂麻質斯で肩が痛んでね、それで近頃は大層氣むづかしいのですと。其にね、幾が姉さんにね、姉さんの御部屋でね、あの、奧樣、此方の御隱居樣は如何して彼樣に御癇癪が出るのでムいませう、本當に奧樣御辛うムいますねエ、でも御年寄の事ですから、どうせ永い事ぢやムいません、てね、其樣に云ひましたとさ、本當に馬鹿ですよ、幾はねエ、阿母」

「何處に行つても好い事はしないよ、困つた婆やないかねエ」
「それからねエ、阿母、恰ど其時緣側を老母が通つてね、悉皆聞いてしまツて、それは〳〵ひどく怒つてね」
「嘘だよ！」
「怒つてね、其れで姉さんが心配して、飯田町の伯母樣に相談してね」
「伯母樣に!?」
「だツて姉さんは、何時でも伯母樣にばかり何でも相談するのですもの」
夫人は苦笑しつ。
「其れから？」
「其れからね、阿爺が幾は別莊番に遣るからツてね」
「さう」と額をいとど曇らしながら、「其れツ切りかい？」
「其れから、まだ聞くのでしたけども、恰度一さんが來て――」

(六)の一

武男が母は、名をお慶と云ひて今年五十三、時々僂麻質斯の起れど、其外は無病息災、麹町上二番町の邸より亡夫の眠る品川東海寺まで徒歩の往來容易なりと云ふ。體量は十九貫、公侯伯子男爵の女性を通じて、體格にかけては關脇は確との評あり。併し其肥大も實は五六年前夫通武の病歿したる後の事にて、其以前は痩ぎすの色蒼ざめて、病人の樣なりしと云ふ。されば壓搾けられし護謨球の手を離されてぶくぶくと膨れ上がる類にやと云ふ者もありき。

亡夫は薩藩の輕き城下士にて、お慶の緣づきて來し時は、太閤樣に少しましなる婚禮をなしたりしが、維新の風雲に際會して身を起し、大久保甲東に見込まれて久しく各地に令尹を務め、一時探題の名は世に聞えぬ。而も特質の我儘剛情は累をなして、明治政府に友少く、浪子を娵せる加藤子爵などは其少き友の一人なりき。甲東歿後は兎角志を得ずして世を終へつ。男爵を得しも、實は生れ所のよかりし蔭、と云ふ者もありし。されば剛情者、我儘者、癇癪持の通武は居常快々として不平を酒盃に漏らしつ。三合入りの大盃たてつけに五も重ねて、赤鬼の如くなりつゝ、肩を掉つて縣會に臨めば、議員に顏色ある者少なかりしとか。左もありつらむ。

然れば川島家は毎に戒嚴令の下にありて、家族は避雷針なき大木の下に夏住む如く、戰々兢兢として明かし暮らしぬ。父の膝をば吾舞踏場として、父にまさる遊相手は世になき樣に幼き時より思ひ込みし武男の外は、夫人の愛子は固より婢出入の者果ては居間の柱まで主人が鐵拳の味を知らぬ者なく、今は紳商とて世に知られたる彼山木如きも此賜物を頂戴して痛み入りしことも度々なりけるか、何此しきの下され物、儲けさして賜はると思へば、何有廉い所得税だ、としば〳〵伺候しては戴きける。右の通りの次第なれば、それ御前の御機嫌が惡いと云へば、臺所の鼠まで闃然として、迅雷一聲奧より響いて耳の太き下女手に持つ庖刀取り落し、用ありて私宅へ來る屬官などは先づ裏口に廻つて今日の天氣豫報を聞く位なりし。

三十年から連れ添ふ夫人お慶の身になつては、中々一通りの辛さにあらず。嫁に來ての當座は流石に舅や姑もありて夫の氣質其樣も覺えず過せしか、程なく姑舅と相ついで果てられし後は、夫の本性あり〳〵と拜まれて、夫人も胸をつきぬ。初め五六度は夫人も一寸盾ついて見しが、とても無駄と悟つては、最早爭はず、韓信流に負けて匍伏し、さもなければ三十六計の其隨一をとりて逃げつ。其樣する

内に夜共は呼吸も呑み込みて三度の事は二度で済む樣になりしが、左りとて夫の氣質に年と共に改まらず。末の三四年は別して烈しくなりて、不平が煽る無理酒の焰に、燃ゆるが如き癇癪を、二十年の上も其で鍛はれし夫人も流石にあしらひ兼ねて、武男と云ふ子もあり、鬢に白髮も雜れるさへ打忘れて、知事樣の奧方男爵夫人と人に云はるゝ榮耀も物かは、寧此つらさにかへて墓守爺の嬶ともなりて世を樂に過して見たしと云ふ考のむら〳〵と湧きたることもありしが、其樣斯樣する間につい三十年うつかりと過して、其つれなき夫通武が眼を瞑つて棺の中に仰向に臥す姿を見し時は、吻と息はつきながら、さて偽ならぬ涙もほろ〳〵と滾れぬ。

涙はこぼれしが、息をつきぬ。息と共に勢もつきぬ。夫通武存命の間は、其大きなる體と大きなる聲にかき消されて何處に居るとも知れざりし夫人、奧の間よりのこ〳〵出て來り、見る〳〵家一ぱいに膨れ出しぬ。何時も主人の側に肩をすぼめて細くなりて居し夫人を見し者は、何れも呆れ果てつ。最も西洋の學者の說にては、夫婦は永くなるほど容貌氣質まで似て來るものと云へるが、成程近頃の夫人が物ごし容姿、其の濃き眉毛をひく〳〵動かして、煙管片手に相手の顏を熟と見る樣子より、起居の荒さ、其れよりも第一癇癪が似たとは愚か亡くなられし男爵其まゝと云ふ者もありき。

江戸の敵を長崎で討つと云ふことあり。世の中の事は概して江戸の敵を長崎で討つものなり。在野黨の代議士今日議院に慷慨激烈の演說をなして、盛に政府を攻撃し玉ふ。至極結構なれども、實は其氣焰の一半は、昨夜宅にて散々に高利貸を喚ひ玉ひし欝憤と聞いて知れば、難有味も半は減ずる譯なり。されば南支那海の低氣壓は岐阜愛知に洪水を起し、タスカローラの陥落は三陸に海嘯を見舞ひ、師直はかなはぬ戀のやけ腹を「物の用にたゝぬ能書」に立つるなり。而う宇宙は唯平均、物は皆其平を求むるなり。而して其平均を求むるに、吝嗇者の日濟を督促る樣に、吾よりあせりて今戻せ明日返せとせがむが小人にて、所謂大人とは一切の勘定を天道樣の銀行に任して、吾は眞一文字に吾分を稼ぐ者ぞ、と或人情博士は宣ひける。

併し凡夫は平均を目の前に求め、其求むるや物理運動の法則に從ひて、水の低きにつくが如く、障礙の少なき方に向ふ。されば川島未亡人も三十年の辛抱、樣へ〳〵し堪忍の水門、夫の棺の蓋閉づるより早く、さつと押開いて一度に切つて流しぬ。世に恐ろしと思ふ一人は、最早如何に拳を伸すも到頭には屆かぬ遠方へ逝きぬ。今迄默りて居しは意氣地なきのにはあらず、夫死しても吾は生きたりと云ひ顏に、知らず識らず積みし貸金、利に利をつけて無暗に手近の者に督促り始めぬ。其癇癪は、亡くなられし男爵は英雄肌の人物だけ、迷惑にもまた何處やらに小氣味よき所もありたるが、其程の力量はなしに譯分からず、狹く僻みて我儘強き奧樣より出でては、唯々無暗に辛くて、奉公人には故男爵の時よりも泣きける。

浪子の姑は斯の通りの人なりき。

（六）の二

丸髷を揚卷にかへし其折などは、まだ「御孃樣、御やすく御伴致しませう」と見當違ひの車夫に言はれても、召使の者に奧樣と呼びかけられて返事に躊躇ふ事はなき樣になれば、花嫁の心も先づ少しは落つきて、初々しき恥しさの狹霧に朦朧とせし四邊の容子もやう〳〵眼に分たるゝ樣になりぬ。

家毎に變るは家風、御身には言つて聞かす迄もなけれど、樣へて實家を背負うて先方へ行き

玉ふな、片岡浪は今日限り亡くなつて今よりは川島浪より外になきを忘るゝな、と最早晴れの衣裳着て馬車に乗らむとする前に父の書齋に呼ばれて懇ろに言ひ聞かされしを忘れしにはあらねど、嫁来て見れば、家風の相違も大抵の事にはあらざりけり。

　資産は寧ろ實家にも優りたらむか、新華族の中には先づ屈指と云はるゝ丈、武男の父が久しく縣令知事務めたる間に積みし財は鉅萬に上りぬ。然りながら實家にては、父中將の名聲海内に噪ぎ、今は豫備には居れど交際廣く、昇日の勢盛なるに引易へて、此方は武男の父通武が歿後は、存生の砌何彼と便りて來し大抵の輩は自づから足を遠くし、其上親戚も少なく、知己とても多からず、未亡人は人好のせぬ方なる上に、此より家聲を興す可き當主はまだ年若にて官等も卑く家にあることも稀なれば、家運はおのづから止める水の如き模樣あり、實家にては、繼母が派手な西洋好み、勿論經濟の講義は得意にて妙な所に節儉を行ひ、「奧樣には上庭の遣り方も御存じない」と婢共の蔭口にかゝることはあれど、其處は軍人交際の概して何事も派手に押出して為る方なるが、此方は何處までも昔風寧ろ田舎風の、よく云へば昔忘れぬ、噺みなれど、實は趣味も理窟も矢張木から自分に搗いたる時にかはらぬ未亡人、何でも彼でも自分でせねば頭が痛く、亡夫の時僕かなんぞの樣に使はれし田崎某と云へる正直一圖の男を執事として、之を相手に月に薪が何把炭が何俵の勘定までせられ、「阿母、其樣な事しなくたつて、菓子なら風月からでも御取ンなさい」と時たま歸つて來て武男が言へど、矢張手製の田舎羊羹むしやり〳〵と頬張らるゝと云ふ風なれば、姥の幾が浪子について來しすら、「大家は如何しても違ふもんぢや、武男が五器椀下ける樣にならにや好いが」など常に當てこすりて居られたれば、幾の排斥も強ち障子の外の立聞き故ばかりではあらざりしなる可し。

　悧巧な樣でも十八の花嫁、全然違ひし家風の中に突然入り込みては、流石事毎に惑へるも無理にはあらじ。然れども浪子は父の訓誡此處ぞと、「己を抑へて何も家風に從はむ」と決心の臍を固めつ、其決心を試むる機會は須臾に來りぬ。

　伊香保より歸りて程なく、武男は遠洋航海に赴きつ。軍人の妻となる身は、留守勝は覺悟の上なれど、新婚間もなき別離はいとゞ腸を斷ちて、其當座は手中の玉をとられし樣にほとほと何も手につかざりし。

阿爺が縁談の初に逢ひ玉うて至極氣に入つたと宣ひしも、添つて見て實にと思ひ當りぬ。鷹揚にして男らしく、さつぱりとして情深く、寸分鄙吝しい所なき、本當に若い阿爺の側に居る樣な、其樣云へば肩を揺つてドシ〳〵御歩きなさる樣子、子供の樣な笑聲まで阿爺にそつくり、あゝ嬉しいと浪子は一心にかしづけば、武男も初めて持ちし妻と云ふものゝ限りなく可愛く、獨子の身は姉妹まで添へて得たらむ心地して「浪さん、浪さん」といたはりつ。未だ三月に足らぬ契も、過ぐる世より相識れる樣に親めば、暫時の別離も彼此共に限りなき傷心の種子とはなりけるなり。

　然りながら浪子は永く別離を傷む暇無かりき。武男が出發せし後程もなく姑が持病の僂麻質斯再發し、起りて例の癇癪は甚だしく、幾を實家へ戻せし後は別して辛抱の力を試す機會も多かりし。

　新入の學生、其當座は故參の爲めに散々に窘めらるれど、後には己れ故參になりて、後の新入生を窘めるか、何よりの樂なりと書きし人もありき。綿帽子脱つての心細さ、便りなさを覺えて居る程の姑、義理にも嫁を窘められるものでなけれど、其處は凡夫の淺猿しく、花

嫁の花落ちて、姑と名がつけば、さて手頃の嫁は来るなり、吾儘も出て、何時の間にか吾がつい先年まで大の大の大嫌ひなりし姑其まゝとなるものなり。「それ〳〵其衽は四寸にして斯う返して、イヽエ其様ぢやありません、此方へ寄こしなさい。二十歳にもなツて、お嫁さまもよく出来た、へゝゝゝ」と冷笑ふ筆から眼つき、吾も二十の花嫁の時丁度其様して叱られしが、あゝ吾れながら恐ろしいとはツと思つて改むる程の姑はまだ上の上、眼に一眼を償ひ、歯にて歯を償ひ、所謂江戸の、姑の其敵を長崎の嫁で討つて、知らず識らず平均を保一代の中に求むるもの少なからぬが世の中、浪子の姑もまた其一人なりき。

西洋流の継母に鍛はれて、今また昔風の、姑に錬らるゝ浪子。病ある老人の用事多く、婢を呼ばるゝ故、強ひて「妾が致しませう」と引取つて、慣れぬこととて意に満たぬことあれば、此方には聲を言ひてわざと召使の者を傍の大音声に叱りなさるゝ其声は、十年が程も継母の当擦語を聞き慣したる耳にも今更の様に聞えぬ。其も初め暫しが程にて、後には癇癪の声直接に浮骨に顔ふ様になりつ。武男が去りし後には、誰れ憚る者もなく、時々には如何やらまた昔の日蔭に立ち戻りし心地もせしが、部屋に帰つて机の上の額の写真掛にかゝつた逞しき海軍士官の面影を見ては、嬉しさ懐しさなつかしさのむらむらと込み上げて、額と手にとり、喰ひ入る様に眺めつめ、接吻し、頬ずりして、今其処に其人の居る様に、早く帰ツて頂戴と囁きつ。良人の為めには如何なる辛抱も楽しと思ひて、吾を捨てゝ姑に事へぬ。

（七）の一

流汗を揮ひつゝ華氏九十九度の香港より申上候。佐世保抜錨迄は先便に申上置きたる通りに有之候。偖佐世保出帆後は連日の快晴にて暑気殊の外、流石南洋海面男子も少々辟易、尤も同僚士官及兵の中八九名日射病に襲はれたる者有之候得共、小生は至極健全、毫も病室の厄介に相成不申、但御存通りの黒人が赤道近き烈日に焦されたる為め、愈以て大々的黒面漢と相成り、今日一寸同僚と上陸し、市中の理髪店に参り候處、不図鏡を見て吾ながら哭出致し候。意地悪き同僚が、昔、如何た黒色写真でも撮つて、僕のブライドに送らんかと戯れ候も一興に候。途中は存の外平穏、尤も一両日モンスーンの名残ありたれ共、一同無事を喜び、昨早朝當港内に投じ申候。

先日の御手紙は佐世保にて落手、一読再読致し候。母上様御質断年来の御持病、誠に困りたる事に候。併し今年は浪さんお傍に居られ候事故、小生も大きに安心に候。何卒小生に代りてよく〳〵心を御用ゐ下さる可く候。御病気の節は別して御気分宜しからざる方なれば、浪さんも定めて色々と骨折らるべく遠察致候。赤坂の方も定めて御かはりも無かる可くと存申候。加藤の伯父さんは不相変本鉄お手を被れ申間敷候。[illegible]は歸省由、何故に候や不存候得共、實に残念の事共に候。浪さんより便あらば宜敷々々伝へらる可く、帰りには定へ澤山土産を持つて来ると御伝へ被下度候。實に愉快な女にて小生も大好きに候處、赤坂の方に帰りしは残念に候。浪さんも何彼と不自由に寂しかる可くと存候。加藤の伯母様や千鶴子さんは時々被参候哉。

千々岩に折々參候由、小生等に誠に親類少なく、千々岩は其少なき親類の一人なれば、母上も自然賴みに思す事に候。同人たとへ微なるも母上に孝行の一に可有之候。同人も才氣あり膽力ある男なれば、まさかの時の賴にも可相成候。(下略)

七月　日　香港にて　武男

お浪どの

母上に別紙略之 讀んで御聞かせ申上げられたく候。

當地には四五日碇泊、食糧など買ひ入れ、其れより馬尼剌を經て濠洲シドニーへ、それよりニウカレドニア、フィジー諸島を經て、桑港へ、それより布哇を經て歸國の筈に候。歸國は多分秋に相成申可候。

手紙は桑港日本領事館留置にして出したまへ。

(前文略) 去る五月は浪さんと伊香保にあり、蕨採りて賦みしに今は南半球なる濠洲シドニーにあり、サウザルンクロッスの星を仰いで其時を想ふ。奇妙なる世の中に候。先年練習艦にて遠洋航海の節は、如何しても時々筆を執りしが、今度は無病息災吾ながら達者なるに呆れ候。併し今回は先年に覺えなき感情身につきまとひ候。此航海中當直の夜など、黒き空に金剛石を撒き散らしたる樣な南天を仰ぎて、艦の艦橋の上に立つ時には、何とも云へぬ悲しき思が起りて、浪さんの姿が眼さきに閃々致し、女々しと笑ひ玉ふな(候。同僚の前では丈夫家を思はず遠征と吟じて平氣に澄まして居れど、笑ひ玉ふな) 浪さんの寫眞は始終或人の内衣兜に潛み居り候。今此手紙を書く時も、宅の後六疊の離屋の芭蕉の蔭の下に書見つきて此手紙を讀む人の面影が直ぐ其處に見え候(中略)

シドニー港内には夫婦、家族、他人交へず、ヨットに乘りて遊ぶ者多し。他日功成り名遂げて小生も浪さんも白髮の翁媼になる時には、是非ヨットのみならず、五千噸位の汽船を一艘拵へ、小生が船長となつて、子供や孫を乘組員として世界週航を企て可申候。其節は此のシドニーにも來て、何十年前血氣盛の海軍少尉の夢を白髮の浪さんに話し可申候(下略)

八月　日　シドニーにて　武男生

浪子さま

(七)の二

去る七月十五日香港より御仕出の御なつかしき玉章とる手おそしとくりかへしくりかへし拜し上まゐらせ候得者烈しき暑さの御さはりも不被爲有何よりくく御嬉しう存上まゐらせ候。此許御母上樣御病氣も此節は大きに御快よく何卒々々御安心遊ばし候樣願上まゐらせ候。わたくし事も毎日兎や角と淋しき日を送り居りまゐらせ候。御留守の事にも候へば何卒母上樣の御機嫌に入候樣にと心がけ居りまゐらせ候へ共不束の身は何も至り兼候事のみ多く候ことゝて何角と失策のみいたし誠に困入りまゐらせ候。たゞたゞ一日も早く御歸り遊ばし健やかなる御顏を拜し候時を樂みに毎日暮らし居りまゐらせ候。赤坂の方も何ぞかはり候事も無之先日より逗子の別莊の方へ一同參り加藤家も皆皆興津の方へ參り東京は淋しきことに相成候。幾度も一緒に逗子に罷越し無事相つ

とめ居り候・御傳言の趣申遣はし候處當人も涙を流して喜び申し候由呉々も宜敷御禮申上候樣申遣り候・

わたくし事も今になりて色々勉強の足らざりしを悔み居り候・家政の事は女の本分なればよく／＼心を用ゐ候樣平生父より戒められ候事とて宅に居候頃より成丈其積りにて居り候得ども何を申しても女の淺墓に其樣な事は何時でも出來る樣に思ひ徒らに過し居り候より今となりて彼の事も習つて置けばよかりし此事も忘れしと思ひ當る事のみ多く困り入り候・英語の勉強も御仰の言も有之候得者是非にと心がけ居り候得共姑の前にばかり居候ては母上樣の御思召も如何哉と實存今當分は何よりも先づ家政の稽古に打かゝり申度何卒々々不惡思召の程願上候・

誠に御はづかしき事に候得共どうやら致し候節は淋しさ悲しさの遣る瀬なく早く早く／＼御眼にかゝり度く翼あらば御艦に飛んでも行き度く存じ居り候事も有之夜毎日毎に御寫眞と御傍に寫眞を取り出では眺め入り居り候・何卒無理など學校にて何卒氣なく宿直しに致し候もの近頃は忘れし地圖など今更にとりいでて今日は御艦の此邊をや過ぎさせ玉はむ明日は明後日はと繪圖にて地圖の上を辿り居り候・あゝ男に生れしならば水兵ともなりて始終御側に離れず御つき申さんをなどあらぬ事まで心に浮かび候と吾身を叱り候ても日日物思ひに沈み居り候是迄何心なく眼もとめ申さざりし新聞の天氣豫報など今在すあたりは此外と知りながら暴風など警戒の出で候節には實にゝ氣にかゝり候・何卒何卒御身體を御大切に……（下文略）

浪より

戀しき

武男樣

（上略）近頃は夜々御姿の夢に入り實に實に一日千秋の思をなし居り候・昨夜も御一處に鎌倉にて伊香保に蕨とりに參候處不圖誰かが私共の間に立入りて御姿は遠くなりわたくしは艦より落ちると見て驚はれ候ところを母上樣に起されやう／＼夢醒でおそろしく候・凶兆と存じながらも何とやら氣に相成其につけても御身は如何お待遠く存上候・何も／＼御身の上にと日々東の空を眺めゝ或は行違になるやも不存候へども此状は布哇ホノルヽ留置にて差上候（下略）

十月　日　　浪より

戀しき／＼

武男樣

御もとへ

中篇

（一）の一

今しも午後八時を拍ちたる床の間の置時計を眼鏡の中より睨みて、川島未亡人は、

「八時——最早歸りさうなもんぢやが——」

と呟きながら、手をさし其肥太りたる手をさし伸べて煙草盆を引寄せ、つゞけざまに二三服喫ひて、耳を傾けつ。山の手ながら松の内の夜は車東西に行違ひて、隣家には福引の興やあるらむ、若き男女の聲頻りにさゞめきて、をり／＼どつと笑ふ聲も手にとる樣に聞ゆ。未亡人は舌打鳴らしつ

「何をしとつか。つツ。赤坂へ行くと何時も彼樣ぢやつで……武も武、浪も浪、實家も實家ぢ

や、今時の者は此れぢやでならん」と膝立て直さむとして、持病の僂麻質斯の痛所に觸れけむ。「あいたゝゝ」額を顰めて癇癪まぎれに煙草盆の縁手荒に打たゝき「松、松、松」と消魂しく小間使を呼び立つる。其時遠く「御歸りい」の呼聲勇ましく二挺の車がら／＼と門に入りぬ。

三ケ日の晴衣の裾踏み開きて走せ來りし小間使が「御用?」と手をつかへて、「何をうろ／＼しとつか、早玄關に行きなさい」と叱られて周章狼狽引下ると、引ちがへに、

「阿母、唯今歸りました」と凛々しき聲に前を拂はして手袋を脱ぎつゝ入り來る武男のあとより、外套と吾妻コートを婢に渡しつゝ、浪子は夫に引添うて靜淑に座につき、手をつかへつ。

「阿母、大層晩なはりました」

「おゝお歸りかい、大分緩々ぢやつたなう」

「はあ今日は、なんです、加藤へ寄りますとね、赤坂へ行くなら丁度好いから一處に行かうツて云ひましてな、加藤さんも伯母さんも其れから千鶴子さんも、總勢五人で出かけたのです。歸途でも非常の喜で、外に客はなし、話がはずんで、つい遲くなつてしまつたのです――あゝ醉つた」と熱くせる桃の如くなれる顏を押へつゝ、小間使が持て來し茶を唯一息に飲乾す。

「さうかな　其は賑やかで宜かつたの。赤坂でも御變りもないぢやろの、浪どん?」

「はい、宜しく申上げます、未だ伺ひも致しませんで、……色々御土産を戴きまして、呉々御禮申上げましてムいます」

「土産と云へば、浪さん、彼れは……旺此れだ、此れだ」と浪子がさし出す盆を取り次ぎて、母の前に差置く。盆には雉子一番、鳴鶉など堆く積み上げたり。

「御獵の品かい、此は澤山に――御馳走が出來るの」

「なんですよ、阿母、今度は非常の大獵だつたさうで、つい大晦日の晩に歸りなすつたさうです。丁度今日は持たして遣らうとして御出の所でした。まだ明日は猪が來るさうで――」

「猪?――猪が捕れ申したか。たしかわたしの方が三歳上ぢやつたの、浪どん、昔から元氣の好え方ぢやつたがの」

「其は何ですよ、阿母、非常の元氣で、今度も二日も三日も山に焚火をして露宿しなすつたさうですがね、また中々若い者に負けん積りぢやて、其樣言つて居なさいます」

「其樣ぢやろの、阿母がごと僂麻質斯が起つちや最早仕方があいません。人間は病氣が一番不好もんぢや。――おゝ最早やがて九時ぢや。着物でも更へて、やすみなさい。――おゝ、それから今日はの、武どん、安彦が來て――」

立ちかゝりたる武男は何か安からぬ色を動かし、浪子も不圖耳を傾けつ。

「千々岩が?」

「何か卿に要がありさうぢやつたが――」

武男は少し考へ、「左樣ですか、私も是非――逢はなけりやならん――要がありますが。――何ですか、阿母、私の留守に金でも借りに來はしませんでしたか」

「何故?――其樣な事はあいません――何故かい?」

「いや――少し聞き込んだ事もあるのですから――何れ其内逢ひますから――」

「おゝ其樣ぢや、其から彼山木が來ての」

「は、彼山木の馬鹿ですか」

「彼が來て此　其樣ぢやつた、十日に御馳走をすつから、是非卿に來て下さいと云ふから」

「五月蠅いやつですな」

「行つて遣んなさい、阿父の恩を覺えて居つが、可愛かぢやなつか」

「でも――」

「まあ、其樣云はずと行つて遣んなさい――どれ、阿母も寢ませうか」

「ぢや、阿母、御寢なさい」

「では母樣、一寸着更致して參りますから」

若夫婦は打連れて、居間へ通りつ。小間使を相手に、浪子は良人の洋服を脫がせ、琉球紬の綿入二枚重ねしをふはりと打被すれば、武男は無造作に白縮緬の兵兒帶尻高に引結び、やをら安樂椅子に倚りぬ。洋服の塵を拂ひて次の間の衣桁にかけ、「紅茶を入れる樣にしてお置き」と小間使に吩咐けて、浪子は良人の居間に入りつ。

「良人、御疲れ遊ばしたでせう」

葉卷の青き煙を吹きつゝ、今日到來せし年賀狀名刺など見てありし武男はふり仰ぎて、

「浪さんこそ草臥れたらう、――おゝ綺麗」

「?」

「美しい花嫁樣と云ふ事さ」

「まあ、嫁――彼樣な言を―」

・さと顏打赧めて、洋燈の光眩しげに、眼を瞬したる、常には耳際まで白き顏色の、今ぼうつと櫻色に匂ひて、艶々とした丸髷宛ながら鏡と照り、淡に千鳥の裾模樣、黑襲の白茶繻珍の[illegible]帶、[illegible]玉を簪みし勿忘草の襟どめ、(此たび武男が米國より持て歸りしなり)四分の羞六分の笑を含みて、嫣然として燈光の中に立つ姿を、吾妻ながら妙と武男は思へるなり。

「本當に浪さんが斯樣着物を更へて居ると、未だ昨日來た花嫁の樣に思ふよ」

「彼樣な言を――其樣なことを仰有ると往つてしまひますから」

「はゝゝ、最早言はない〳〵。其樣逃げんでも宜いぢやないか」

「ほゝゝ、一寸着更を致して參りますよ」

(一)の二

武男は昨年夏の初、新婚間もなく遠洋航海に出で、秋は歸る可かりしに、桑港に着ける時、器械に修復を要す可き事の起りて、其が爲めに歸期を誤り、舊臘押つまりて歸朝しつ。今日正月三日と云ふに、年賀をかねて浪子を伴ひ加藤家より浪子の實家を訪ひたるなり。

武男が母は昔氣質の、何方かと云へば西洋嫌ひの方なれば、寢臺に寢ねて匙もて食ふこと思ひも寄らねど、流行に若主人のみは幾分か治外の法權を享けて、十疊の其居間には和洋折衷とも云ひつ可く、疊の上に綠色の絨氈を敷き、卓子に椅子二三脚、床には唐畫の山水をかけたれど、欄間には亡父通武の肖像をかゝげ、開かれざる書筐と洋籍の棚は片隅に排斥せられて、正面の床の間には父が祕愛の備前兼光の一刀を飾り、士官帽と兩眼鏡と違棚に、短劍は床柱にかゝりぬ。寫眞額多く掛け列ねたる中には、其乘組める軍艦のもあり、[illegible]したる[illegible]の大勢うつりたるは、江田島にありける頃のなる可し。卓子の上にも二三の寫眞を飾りたり。兩親並びて、五六歲の男兒の父の膝に倚りたるは、武男が幼き頃の記念なり。カビネ一人撮の軍服なるは乃舅片岡中將なり。主人が年若く粗豪なるに似もやらず、几案整然として、隅々に到るまで一點の塵を留めず、新へ古銅瓶に早咲の梅一兩枝趣深く活けたるは、温かき心と細かなる注意と熟練なる手と常に此室に往來するを示しぬ。實に其花は簞瓶の下に在花の香を浴びて、心臓形の銀の寫眞掛の中に含笑めるなり。ランプの光は隈なく室の隅々までも照らして、火桶の炭火に綠の鉄瓶の上に紫がかりし紅の焰を吐きぬ。

愉快と云ふ愉快は世に數あれど、恙なく長の旅より歸りて、旅衣を平生服の着心地よきに更へ、窓外に吼ゆる夜あらしの音を聞きつゝ居間の煖爐に足さしのべて　聞き慣れし時計の

軋々を聞くは、完き愉快の一なるべし。況んやまた阿母老健にして、新妻の更に愛しきあるをや。葉卷の香しきを吸ひ、陶然として身を安樂椅子の安きに託したる武男は、今まさに此樂を享けけるなり。

唯一つの翳は、曩に母の口より聞き、今來訪名刺の中に見たる千々岩安彦の名なり。今日武男は千々岩につきて忌まはしき事を聞きぬ。曩臘某日の事とか、千々岩が勤むる參謀本部に千々岩に宛てて一通のはがきを寄せたる者あり。折節千々岩は不在なりしを同僚の何某何心なく見るに、高利貸の名高き何某の貸金督促狀にして、加之其金額要件は特に朱書してありしと云ふ。啻に其のみならず、參謀本部の機密折々思ひがけなき方角に漏れて、投機商人の利を博することあり。猶其上に、千々岩の姿をあるまじき相場の市に見たる者あり。兎に角種々嫌疑の雲は千々岩の上に覆ひかゝりてあれば、此上とても千々岩には心して、且つ自から戒飭する樣忠告せよと、參謀本部に長たる某將軍とは爾汝の間なる舅中將の話なりき。

「困つた男だ」

斯く獨語ちて、武男はまた千々岩の名刺を打眺めぬ。而も今の武男は長く不快に縛らるゝ能はざるなり。何も直接に逢ひて糾したる上と、思ひ定めて、心はまた釋然として今の樂しきに返れる時、服を更めし浪子は手づから紅茶を入れて莞爾に入り來りぬ。

「おゝ紅茶、此は有り難い」椅子を離れて火鉢の側に胡坐かきつゝ、

「阿母は？」

「今御寢遊ばしました」紅茶の熱きを薦めつつ、猶紅なる良人の面を眺め、「良人、御頭痛が遊ばすの？ 御酒なんぞ、召上れないのに、彼樣に母が御強ひするものですから」

「何有――今日は實に愉快だつたね、浪さん、阿舅の御話が面白いものだから、嫌な酒までつい過してしまつた。はゝゝ、本當に浪さんは良い阿爺を有つて居るね、浪さん」

浪子は莞爾、ちらと武男の顏を眺めて、

「その上に――」

「エ？ 何です？」驚き顏に武男はわざと眼を瞠りつ。

「存じません、ほゝゝゝ」と顏赧め、俯きて指環を捻る。

「いや此は大變、浪さん、何時其樣に御世辭が上手になつたのかい。此では襟どめ位は廉いもんだ、はゝゝゝ」

火鉢の上にさし翳したる掌にぽうつと薔薇色になりし頰を押へつゝ少し吐息つきて、

「本當に――永い間阿母樣も如何樣に御淋しくツていらつしやいましてせう。また直ぐ勤務に往らつしやると思ふと、日が早く經つて仕樣がありませんわ」

「始終内に居ようもんなら、其れこそ三日目には、良人、些と運動にでも出ていらつしやいませんか、だらう」

「まあ、あんな言を――今一杯あげませうか」

汲みて差出す紅茶を一口飲みて、葉卷の灰をほと〳〵火鉢の縁にはたきつゝ、快よく四邊を見廻して、

「半年の餘も吊床に搖られて、家に歸ると、十疊敷が勿體ない程廣くて何から何まで結構づくめ、まるで極樂だね、浪さん――あゝ、何だか二度蜜月遊をする樣だ」

實に新婚間もなく相別れて半年ぶりに再び相逢へる今日此頃は、再び新婚の當時を繰り返し、正月の一時に來つらむ心地せらるゝなりけり。

語は暫し絶えぬ。兩人は恍惚として唯相笑めるのみ。梅の香は細々として兩人が火鉢を擁して相對へる邊を繞る。

浪子は不圖思ひ出でたる様に顏を上げつ。
「良人行らつしやいますの、山木に？」
「山木かい、阿母が彼様仰有るからね――行かずばなるまい」
「ほゝ、わたくしも行きたいわ」
「行きなさいとも、行かう、一處に」
「ほゝゝ、止しませう」
「何故？」
「恐いのですもゝ」
「恐い？ 何が？」
「怨まれてますから、ほゝゝ」
「怨まれる？ 怨む？ 浪さんを？」
「ほゝゝ、有りますわ、わたくしを怨んで居なさる方が。あのお豐さん……」
「はゝゝ、何を――馬鹿な。彼馬鹿娘も仕様がないね、浪さん。彼様な娘でも貰手があるかしらん。はゝゝ。
「阿母は、千々岩は彼山木と親しくするから、お豐を妻に貰つたら宜からうツて、其様仰有つて御出なさいましたよ」
「千々岩？ 千々岩？ ――彼奴實に困つた奴だ。狡猾い奴た知つてたが、まさか彼様な賄賂を受けようとは思はんかつた。否近頃の軍人は――僕も軍人だが――實にひどい。壱も昔の武士らしい風はありやせん、皆金錙にかかつてる。何、僕だつて軍人は必ず貧乏しなけりやならんと云ふのぢやない。冗費を節して、恒の産を積んで、まさかの時節に内顧の患のない樣にするのは、其あ當然さ。ねエ浪さん。然し身を以て國家の干城ともならうと云ふ者が、内職に高利を貸したり、憐むべき兵の衣食を偸つたり、御用商人と結託して不義の財を貪つたりするのは實に容赦がならんぢやないか。其れに實に不快なは、彼薄蔵だね、僕の同僚などもこそ／＼遣つてる奴があるが、實に不愉快で堪らん。今の奴等は上に諂つて下から貪ることばかり知つとる」

今其處に當の敵のあるらむ樣に息巻荒く攻め立つる未[illegible]の海軍少將を、身に浸みて聞き惚るゝ浪子は勇々しと誇りて、早く海軍大臣か乃至軍令部長にして海軍部内の風を一新したしと思へるなり。

「本當に其様でムいませうねエ。あの、何だかよくは存じませんが、阿爺がね、大臣をして居ました頃も、色々な頼み事をして色々物を持つて來ますの。阿爺は其様な事は大嫌物ですから、出來る事は頼まれなくも出來る、出來ない事は頼んでも出來ないと申して、刎ねつけても／＼矢張色々名をつけて持ち込んで來ましたわ。で、阿爺が戲談に、此では誰でも役人になりたがる筈だつて笑つて居ましたよ」
「其樣だらう、陸軍も海軍も同じ事だ。今の世の中だね、浪さん……やあ最早十時か」折から琳々とうつ柱時計を見かへりつ。
「本當に時間が早くたつこと！」

（三）の一

芝櫻川町なる山木兵造が邸は、すぐれて寛しと云ふにあらねど、町はづれより西久保の丘の一部を取り込めて、庭には水を湛へ、石を据ゑ、高きに遣し、低きに橋して、楓櫻松竹など面白く植ゑ散らし、此處に石燈籠あれば、彼處に稲荷の祠あり、また其奥に思ひがけなき四阿あるなど、斯門内に斯庭はと驚かるゝも、山木が不義に得て不義に築きし萬金の蜃氣樓なりけり。

時は已に午後四時過ぎ、夕鳥の聲遠近に聞ゆる頃、座敷の騒ぎを背にして日影薄き築山道を庭下駄を踏みにじりつゝ上り行く羽織袴の男あり。此は武男なり。母の言默止し難くて、今日山木の宴に臨みつれど、見も知らぬ相客と並び

て、好まぬ厄擧ぐることの面白からず、さまざまの餘興の果には、如何はしき白拍子の手踊となり、一座の無禮講となりて、忌々しきこと限りもなければ、疾くにも辭し去らむと思ひたれど、山木が頻りに引留むるが上に、必ず逢はむと思へる千々岩の宴酣なるまで足を運ばざりければ、已むなく留まりつ、竊かに座を立ちて、熱せる耳を冷やかなる夕風に吹かせつゝ、人無き方を辿りしなり。

武男が舅中將より千々岩に關する注意を受けて歸りし兩三日後、鰐皮の手革嚢提げし見も知らぬ男突然川島家に尋ね來り、一通の證書を示して、思ひがけなき三千圓の返金を促しつ。證書面の借主は名前も筆蹟もまさしく千々岩安彦、保證人の名前は歷然川島武男と署しありて、加之歷々と實印まで押してあらむとは。先方の口上によれば、契約期限已に過ぎつるを、本人は更に義務を果さず、加之突然何れへか寓を移して、役所に行けば此兩三日職務上他行したりとかにて、更に面會を得ざれば、是非なく此方へ推參したる次第なりと云ふ。證書はまさしき手續を踏みたるもの、更に取り出したる往復の書面を見るに、逭ふ方なき千々岩が筆蹟なり。事の意外に驚きたる武男は、仔細を糺すに、母は素より執事の田崎も、左る相談に與りし覺なく、印形を貸したる覺更になしと云ふ。彼噂に此事實思ひあはして、武男は七分事の樣子を推しつ。恰も其日千々岩は手紙を寄せて、明日山木の宴會に會ひたしと云ひ越したり。

其顔だに見ば、問ふ可き事を問ひ、言ふ可き事を言ひて早歸らむと思ひし千々岩は來らず、頻りに波立つ胸の不平を葉卷の煙に吐きもて、武男は崖道を上り、明竹の小藪を廻り、常春藤の蔭に立つ四阿を見て、暫し腰を下ろせる時、横手の側道に駒下駄の音して、はたと豐子と顔見合せつ。見れば高島田、松竹梅の裾模樣ある藤色縮緬の三枚襲、綺羅びやかなる服裝せる程ますます隙のあらはれて、笑止とも自からは思はぬなるべし。其細き眼をばいとゞ細うして、

「此處にいらしつたわ」

三十珊瓦砲の的には立つ共、思ひがけなき敵の襲來に冷やりとせし武男は、澁面作りて匆々に兵を收めて逃げむとするを、慌てて追つかけ、

「郎君」

「何です？」

「阿爺が御案内して庭を御見せ申せつて其樣云ひますから」

「案内？　案内は要らんです」

「だつて」

「僕は一人で歩く方が勝手だ」

此程手強く打拂へば如何なる強敵も退散す可しと思ひきや、猶懲りずまに追ひすがりて、

「其樣御逃げなさらんでも宜いわ」

武男はひたと當惑の眉を顰めぬ。そも武男とお豐の間は、其昔父が某縣に知事たりし時、お豐の父山木も其管下にありて常に出入したれば、子供も折々互に顔合せしが、未だ十一二の武男は常にお豐を打敲き泣かしては笑ひしを、お豐は泣きつゝ猶武男に纏綿りつ。年移り所變り人長けて、武男が已に新夫人を迎へける今日までも、お豐は猶當年の亂暴なる坊ちやま、今は川島男爵と名乘る若者に對して果敢なき戀を思へるなり。粗豪なる海軍士官も、其と薄々知らざるにはあらねば、稀に山木に往來する時も成る可く危きに近よらざる方針を執りけるに、今日はおぞくも伏兵の計に陷れるた、また如何ともする能はざりき。

「逃げる？　僕は何も逃げる必要はない。行きたい方に行くのだ」

「郎君、其はあんまりだわ」

可笑しくもあり、馬鹿らしくもあり、迷惑にもあり、腹も立ちし武男、行かむとしては引と

められ、逃れむとしては縺られ、あはれ見る人もなき庭の隅に新日高川の一幕を出せしが、不圖思ひつく由ありて、
「千々岩はまだ來ないか、お豐さん一寸見て來て吳れ玉へ」
「千々岩さんは日暮でなけりや來ないわ」
「千々岩は時々來るのかね」
「千々岩さんは昨日も來たわ、晩くまで奥の小座敷で阿父と何か話して居たわ」
「呍、左樣か——併し最早來たかも知れん、一寸見て來て吳れないかね」
「私嫌よ」
「何故！」
「だつて、郎君逃げて行くでせう、何ぼ私が嫌だつて、浪子さんが美しいつて、其樣に人を追ひやるものぢやなくつてよ」
油斷せば雨にもならむずる空模樣に、百計つきたる武男は唯大踏歩して逃げむとする時、
「お孃樣、お孃樣」
と婢の呼び來りて、お豐を抑留しつ。此隙にと武男は突と藪を廻りて、二三十歩足早に落延び、吻と息つき、
「困つた女だ」
と呟きながら、再度の來襲の恐れなき屈强の要害——座敷の方へ行きぬ。

（三）の二

日は入りて、客は去りて、晝の騒ぎは唯臺所の方に殘れる時、羽織袴を脱ぎ棄てゝ、煙草盆を提げながら、覺束なき足踏みしめて、廊下傳ひに奥まりたる小座敷に入り來し主人の山木、赤禿の前額の湯氣も立ち上らむとするを、いとゞランプの光に輝やかしつゝ、崩るゝ樣に坐り、
「若旦那も、千々岩君も、御待たせ申して失敬でがした。はゝゝゝ、今日は御蔭で非常の盛會……いや若旦那は御弱い、失敬ながら御弱い、軍人に似合ひませんよ、御大人なんざ夫れは大したものでしたよ。年は寄つても、山木兵造——何有、一升や其處らは、はゝゝゝ、大丈夫ですて」
千々岩は黑水晶の眼を山木に注ぎつ。
「大分御元氣ですな。山木君、儲かるでせう？」
「儲かるですとも、はゝゝゝ——いや儲かると云へば」と山木は灰だらけにせし煙管を漸く吸ひつけ、一服吸ひて、「何です、其の、今度彼の〇〇〇が賣物に出るさうで、實は内々樣子を探つて見たが、先方も色々困つて居る際だから、案外安く話が附きさうですて。事業の方は、大有望さ。追々内地雜居と來ると、いよ〱妙だが、如何です、若旦那、田崎君の名義でも宜しいから、二三萬御奮發なすつちや。屹度儲けさして上げますぜ」
と本性違はぬ生醉の口は、酒よりも滑らかなり。千々岩は默然と坐し居る武男を流眄に見て、「〇〇〇、確な請合の。彼は一時儲かつたさうぢやないか」
「さあ、儲かるのを下手に遣り崩したんだが、甘く行つたらすばらしい金鑛ですぜ」
「其は惜しいもんだね。素寒貧の僕ぢや仕方がないが、武男君、如何だ、一肌ぬいで見ちやあ」
座に着きし初より始終默然として不快の色は掩ふ所なきまで眉宇にあらはれし武男、いよいよ喜ばざる色を動かして、千々岩と山木を等分に憤を含みたる眼尻にかけつゝ、
「御厚意辱ないが、吾輩の樣に、何時魚の餌食になるか、裂彈、榴彈の的になるか分からない者は、別に金儲の必要もない。失敬だが其某會社とかに一萬圓を投ずるよりも、吾輩は寧ろ海員養成費に献納する」
にべなく言放つ武男の顏、千々岩はちらと眺めて、山木に眴せし、
「山木君、利己主義の樣だが、其話は後廻しに

して僕の件から願ひたいがね、川島君も承諾して呉れたから、願つて置いた通り——御印ありますか」
證書らしき一葉の書附を取り出して山木の前に置きぬ。
千々岩の身邊に嫌疑の雲のかゝれるも宜なり、彼は昨年來其位置の便宜を利用して、山木が爲めの參謀となり諜者となりて、其利益の分配に與れるのみならず、大膽にも官金を融通して蠣殼町に黃金を攫まむとせしに、忽ち五千圓餘の損亡を來しつ。山木を強請り、其貯の底をはたきて二千圓を得たれ共、猶三千の不足あり、其唯一親戚なる川島家は富みて且未亡人の覺えめでたからざるにもあらざれど、出すと云へば嘆も惜む叔母の性質を知れる千々岩は、打明けて賴めば到底埒の明かざるを看破り、一時を彌縫せむと、こゝに私印僞造の罪を犯して武男の連印を贋り、高利の三千圓を借り得て、一先づ官金消費の跡を濁しつ。去る程に期限迫りて、果ては吾が勤むる官署にすら督促のはがきを送らるゝ始末となりたれば、今は已むなく恰も歸朝せる武男を說き動かし、此三千圓を借り得て彼三千圓を償ひ、武男の金を以て武男の名を贖はむと欲せしなり。さきに武男を訪ひたれど折惡く得逢はず、其後二三日職務上の要を帶びて他行しつれば、未だ高利貸の已に武男が家に向ひしを知らざるなりき。
山木は頷き、呼鈴を鳴らして朱肉の盒を取り寄せ、一通り證書に眼を通して、懷より實印取り出でつゝ保證人なる吾名の下に捺しぬ。其を取り上げて、千々岩は武男の前に差置き、
「ぢや、君、證書は此處にあるから——で、金は何時受取れるかね」
「金は此處に持つて居る」
「此處に？——戲談は止したまへ」
「持つて居る。——では、三千圓、確かに渡した」
懷中より一通の紙に包みたるもの取り出でて、千々岩が前に投げつけつ。
打驚きつゝ拾ひ上げ、推披きたる千々岩の顏は忽ち紅になり、また蒼くなりつ。緊く齒を喰ひしばりぬ。彼は未だ高利貸の手にあらむと信じ切つたる證書を現に眼の前に見たるなり。武男は田崎に事の由を探らせし後、終に怪しかる名前の上の三千金を拂ひしなりき。
「否、此は——」
「覺えがないと云ふのか、男らしく罪に伏し玉へ」
子供、子供と今が今まで高を括りし武男に十二分に裏を搔かれて、一腔の憤怨焰の如く燃え起りたる千々岩は、切れよと脣を噛みぬ。山木は打驚きて、煙管をやに下りに持ちたるまゝ二人の顏を眺むるのみ。
「千々岩、最早吾輩は何も云はん。親戚の好みに、決して私印僞造の訴訟は起さぬ。三千圓は拂つたから、高利貸のはがきが參謀本部にも行くまい、安心し玉へ」
飽くまで辱しめられたる千々岩は、煮え返る胸をさすりつ。氣は武男に飛びもかゝらむとすれども、心は最早陳辯の時機にあらざるを認むる程の働を存せるなり。彼は咄嗟に態度を變へつ。
「いや、君、其樣云はれると、實に面目ないがね、實は進退ならぬ——」
「何が進退ならぬのだ、德義ばかりか法律の罪人になつてまで高利を借る必要が何處にあるのか」
「まあ、聞いて呉れ玉へ、實は切迫つまつた事で、金は入る、借りる處はなし、君が居ると、一も二もなく相談するのだが、叔母樣には言ひ惡いだらうぢやないか。其れだと云つて、急場の事だし、濟まぬ——濟まぬと思ひながら——、

實は先月は些當もあつたので、皆濟してから潔く告白せうと――」
「馬鹿を云ひ玉へ。潔く告白せうと思つた者が、何故默つて別に三千圓を借りようとするのだ」
膝を乘り出す武男が見幕の鋭きに、山木は遽てて、
「此れさ、若旦那、まあ、御靜かに、――何か詳しい事情は分かりませんが、高が二千や三千の金、殊に御親類であつて見ると、此は御勘辨――ねエ若旦那、千々岩君も惡い、惡いが其處をねエ若旦那、此樣な事が表沙汰になつて見ると、千々岩君の立身も此限りになりますから。ねエ若旦那」
「其れだから三千圓は拂つた、また訴訟なぞしないと云つて居るぢやないか。――山木、君の事ぢやない、控へて居玉へ、――其はしない、併し最早今日限り絶交だ」
最早事爰に到りては惡るゝ所なしと度胸を据ゑし千々岩は、再び態度を一時にかへつ。
「絶交？――別に悲しくもないが――」
武男の眼は焔の如く閃きつ。
「絶交はされても構はんが、金は出して貰ふと云ふのか、腰拔漢！」

「何？」
氣色立つ雙方の勢に聲も幾許か醒めし山木は溜り兼ねて二人が間に分け入り、「若旦那も、千々岩君も、ま、ま、ま、靜かに、靜かに、其れぢや話も何も分からん、――此れさ、御待ちなさい、ま、ま、ま、御待ちなさい」と頻りに彼方を宥め此方を繕ふ。
押とめられて、しばし默然としたる武男は、熟と千々岩が面を見つめ、
「千々岩、最早云ふまい。吾輩も子供の時から君と兄弟の樣に育つて、實際才力の上からも年齡からも君を兄と思つて居た。今後も互に力にならう、吾輩も及ぶ丈け君の爲めに盡さうと思つて居た。實は此頃までもまさかと信じ切つて居た。併し全く君の爲めに賣られたのだ、吾輩を賣るのは一個人の事だが、君はまだ其上に――いや云ふまい、三千圓の費途は聞くまい。併し今迄の好みに一言云つて置くが、人の耳目は早いものだ、君は眼をつけられて居るぞ、軍人の體面に關する樣な事をし玉ふな。君達は金より貴いものはないのだから、言つたつて詮方はあるまいが、些とは恥を知り玉へ、おやもう會ふまい。三千圓はあらためて君に呉れる」
儼然として言ひ放ちつゝ武男は膝の前なる證書をとつて寸々に引裂き棄てつ。突と立ち上つて次の間に出でし勢に、先刻より此處に隱れて聞き居りしと覺しき女お豐を蹴り倒しつ。「あれえ」と云ふ聲をあとに足音荒く玄關の方へ出で去りたり。
呆氣にとられし山木と千々岩と顏見あはしつ。「相變らず坊ちやまだね。併し千々岩さん絶交料三千圓は隨分好い儲をしたぜ」
落ち散りたる證書の片々を見つめ、千々岩は默然として唇を嚙みぬ。

（三）の一

二月初旬不圖引きこみし風邪の、一たびは瘥りしを、或夜姑の[illegible]を仕上ぐるとて急ぐまゝに夜更かしゝより再びひき返して、今日二月の十五日と云ふに浪子はいまだ床あぐるまで快よきを覺えざるなり。
今年の寒は、今年の寒は、と年々に云ひ馴れし寒も今年こそはまさしく從來覺えなきまで、日々吹き募る北風は寒を誘ひ雨を帶びざる日にも宛ながら髓を刺し骨を剜りて、健やかなるも病み、病みたるは死し、新聞の廣告は黑枠のみぞ多くなり行く。此寒はさらぬだに強壯からぬ

浪子の漸く病を募らして、取り立てては此と云ふ異なれる病態もなけれど、たゞ頭重く食旨からずして日又日を渡れるなり。

今二時を拍ちし時計の鐘など鳴きたらむ様に琳々と響きし後は、暫し物音絶えて、秒を刻み行く時計の音の漸く静けさを加ふるのみ。珍らしく麗らかに浅碧を展べし初春の空は、四枚の障子に立て隔てられたれど、悠々たる日の光隈なく紙障に栄えて、余りの光は紙を透して浪子が仰臥しつゝ黒スコッチの襪を編める手先と、雪より白き枕に漂ふ寝乱髪の上にちらちら躍りぬ。左手の障子には、ひよろ/\とした南天の影手水鉢を覆ふて僅き影に映り、右手には槎枒たる老梅の縦横に枝を交叉したるが鮮やかに映りて、まだ莟勝なる其影の、花は数ふ可く疎らなるにも春の浅きは知られつ可し。南縁部を迎ふるにやあらむ、庭板の上に猫の頭の映りたるが、今日の暖気に浮かれ出でし羽蟲の日がけて飛び上りしに、捕りはづして擣と落ちたるをまた心に関せざるものゝ如く、悠々として前足を舐むるにか、影なる頭の頻りに頷きつ。微笑を含みて此光景を見し浪子は、日の眩しきに眉を攅め、眼を閉ぢて、恍惚として居たりしが、やをら彼方に転臥して、編みかけの襪を撫で試みつゝ、また縦横に編棒を動かし始めぬ。

ドシ/\と縁に重やかなる足音して、矮き仁王の影障子を傳ひ来つ。

「気分は如何ごあんすな――」

と枕頭に坐るは姑なり。

「今日は大分宜うムいます。起きられるのですけども――」と編物を措き、鬢の乱を繕ひつゝ、起き上らむとするを、姑は押とめ、

「其、其が不可ん、其が不可ん、他人ぢやなし、遠慮が入ッもんか。其、其、其、また編物しなはるな、いけませんど。病人な養生がお仕事、喃浪どん、稚女は武男が事ちふと、何も角も忘れッちまひなはる、いけません、早う養生してな――」

「本当に済みません。寝んでばかし……」

「其、其が他人行儀、喃、わたしは其が大嫌ぢや」

唾を吐き玉ふな、姑は常に当今の嫁なるものゝ舅姑に礼足らずと呟き、窃に吾嫁の斯に異なるを勿怪の幸と思ふならずや。浪子は実家にありける頃より、口に云はねど窃かに其継母の万づ洋風にさば/\とせるを慊らず思ひて、一家の作法の上には自づから一種古風の嗜味を存せるなりき。

姑は不図思ひ出でたる様に、

「お、武男から手紙が来た様ぢやつたが、如何書えて来申したッ」

浪子は枕頭に置きし一通の手紙の中ぬき出して姑に渡しつゝ、

「此日曜には乾度来らッしやいますさうでムいます」

「左様かな」ずうと眼を通してくる/\とまき収め、「転地養生もねもんぢや。此寒にエット[illegible]動して見なさい、其れこそ無か病気も出て来ます。風邪はぢいと寝て居ると、療るもんぢや、武は年は若かでな、医師をかへるの、やれ転地をすッのと騒ぎ申す。妾達が若い時分な、腹が痛かてて寝た事なし、産あがりだて十日と寝た事アあいません。世間が開けて来ると皆が弱うなり申すでな。はゝゝ。武に其様書えて遣つたもんな、阿母が居るで心配しなはんな、ての、はゝゝゝ、どれ」

口には笑へど、眼は聊か懌ばざる色を帯びて、出で行く姑の後影。

「御免遊ばせ」

と起き直りつゝ見送りて、浪子は微かに吐息を漏しぬ。

親が子を妬むと云ふこと、ある可しとは思は

れねど、浪子は良人の歸りし以來、一種異なる關係の姑との間に湧き出でたるを覺えつ。遠洋航海より歸り來て、浪子の痩せしを見たる武男が、粗豪なる男心にも留守の心遣を汲みて、いよ／＼傷るをば、聊か苦々しく姑の思へる樣子は、怜悧き浪子の目を逃れず。時には彼孝――姑の所謂――と此愛の道と、一時に踏み難くなることあるを、浪子は竊に思ひ惱めるなり。

「奥樣、加藤樣の御孃樣が御出遊ばしてムいます」

と呼ぶ婢の聲に、浪子はぱつちり眼を開きつ。入り來る客を見るより喜色は忽ち眉間に上りぬ。

「あ、お千鶴さん、よく來たのね」

（三）の二

「今日は如何樣？」

藤色縮緬のおこそ頭巾と共に信玄袋を傍へ押やり、浪子の枕頭近く立寄るは島田の十七八、紺地斜綾の吾妻コートにすらりとした姿を包んで、三日月眉匂やかに、凜々しき黑眼勝の、見るから冴々とした娘。浪子が伯母加藤子爵夫人の長女、千鶴子と云ふは此子なり。浪子と千鶴子は一歳違ひの從姉妹同士、幼稚園に通ふ頃より實の同胞も及ばぬほど睦み合ひて、浪子が妹の駒子をして「姉さんはお千鶴さんとばかり仲好くするから妾嫉だわ」と云はしめしこともありき。然れば浪子が川島家に嫁ぎて來し後も、他の學友等はおのづから足を遠くせしに引易へ、千鶴子は却つて其家の近くなれるを喜びつゝ、しば／＼足を運べるなり。武男が遠洋航海の留守の間、心淋しく憂き事多かる浪子を慰めしは、燃ゆるが如き武男の書狀を除きては、千鶴子の訪問ぞ其重なるものなりける。

浪子は含笑みて、

「今日は餘程宜い方だけども、まだ頭が重くて、時々咳嗽が出て困るの」

「其樣？――寒いのね」恭しく座蒲團を薦むる婢を一寸顧みて、浪子の側近く坐りつ。桐胴の火鉢に指環の寶石燦々と輝く手を翳しつゝ、櫻色に匂へる頰を押ふ。

「伯母樣も、伯父樣も、御息災の？」

「あ、宜しくッてね、餘り寒いから如何かしらッて非常心配して居なさるの、時候が時候だから、少し宜い方だッたら逗子にでも轉地療養しなすつたらッてね、昨夕も阿母と其樣話したのですよ」

「左樣？　横須賀からも恰ど其樣言つて來てね……」

「兄さんから？　左樣？　其れぢや早く轉地するが宜いわ」

「でも最早不日快療なるでせうから」

「だッて此頃の感冒は本當に用心しないと不可ないわ」

折から小間使の紅茶を持ち來りて千鶴子にすゝめつ。

「兼や？　母上は？　お客？　其樣、誰人？　國の方なの？――お千鶴さん、今日は緩々して宜いのでせう。兼や、お千鶴さんに何か御馳走して御あげな」

「ほゝゝゝ、お百度參するのだもの、御馳走ばかりしちや堪らないわ。御待ちなさいよ」云ひつゝ袱紗包の小重を取り出し、「此方の伯母さんはお萩が御嗜きだッたのね、少許だけども、――御客樣なら後にしませう」

「まあ、有り難う、本當に……有り難うよ」

千鶴子は更に紅蜜柑を取出しつゝ、「綺麗でせう、此は私の御土産よ。でも酸くて好けないわ」

「まあ綺麗、一ツ剝いて頂戴な」

千鶴子が剝いて渡すを、さも甘氣に吸ひて、

額にこぼるゝ髪をかき上げ、かき上げつ。
「うるさいでせう。ざつと結つてた方が宜かないの？ ね、一寸結ひませう。――其まゝで宜いわ」
勝手知つたる次の間の鏡臺の櫛取り出して、千鶴子は手柔らかに梳き始めぬ。
「さう〳〵、昨日の同窓會――案内狀が來たでせう――は面白かつてよ。皆が宜しくツて、ね。ほゝゝ、學校を下つてからまだやつと一年しかならないのに、最早三人はお嫁だわ。其は可笑しいの、大久保さんも本多さんも北小路さんも皆丸髷に結つてね、變に奥樣じみて居るから可笑しいわ。――痛かないの？ ――ほゝほゝ、如何樣な話かと思つたら、皆自分の吹聽ですわ。さう〳〵、其れから親子別居論が始まつてね、北小路さんは自分が些も家政が出來ないに姑が大變やさしくするものだから同居に限るつて云ふし、大久保さんはまた姑がやかましやだから別居論の勇將だし、其は可笑しいの、それからね、妾がまぜツかへしてやつたら、お千鶴さんはまだ門外漢――漢が可笑しいわ――だから話せないと云ふのですよ。――些つまり過ぎはしないの？」
「イヽエ。――其は面白かつたでせう。ほゝゝほ、皆自己から割り出すのね。畢竟局々で違ふのだから、一概には言へないのでせうよ。ねエ、お千鶴さん。伯母樣も何時か其樣仰有つたでせう。若い者ばかりぢや我儘になるツて、本當に其樣ですよ、年寄を邪魔に思つちや濟まないのね」
父中將の教を受くるが上に、自づから家政に趣味を有てる浪子は、實家にありける頃より繼母の政を傍觀しつゝ、竊かに自家の見を懷きて、自己一家の女主になりたらむ日には、見事家を齊へんものと思へるは、一日にあらざりき。然れど川島家に來り嫁ぎて、萬機一に攝政太后の手にありて、身は其位ありて其權なき太子妃の位置にあるを見るに及びて、暫し己を收めて姑の支配の下に立ちつ。親子の間に立迷ひて、思ふさま良人に傅くことのまゝならぬを竊かに喞てる折々は、曾て我國風に適はずと思ひし繼母が得意の親子別居論の或は眞理にあらざるやを疑ふこともありしが、之が爲めに翻て浪子は初心を破らじと竊かに心に帶せるなり。
繼母の下に十年を送り、今は姑の側にやがて一年の經驗を積める從姉の底意を、盡くは酌みかねし千鶴子、三に組みたる髪の端を白きリボンもて結へつゝ、浪子の顏さし覗きて、聲を低め、
「此頃でも御機嫌が惡くツて？ ――」
「――でも、病氣してからよくして下さるのですよ。でもね、……武男に彼此するのが、阿姑の御氣に入らないには困るわ！ それで、何時でも此家では阿母が女皇陛下だから乃公よりも誰よりも阿母を一番大事にするンだツて、初中終云つて聞かされるのですわ……あ、最早斯樣な話は止しませうね。おゝ好い氣持、有り難う。頭が輕くなつたわ」
云ひつゝ三組にせし髪を撫で試みつ。流石に疲を覺えつらむ、浪子は眼を閉ぢぬ。
櫛を仕舞ひて、紙に手を拭き〳〵、鏡臺の前に立ちし千鶴子は、小さき箱の蓋を開きて、掌に載せつゝ、
「何度見ても此襟止は綺麗だわ、本當に兄さんはよくなさるのねエ。内の――兄さん（此は千鶴子の婿養子と定まれる俊次と云ひて、目下外務省に奉職せる男）なんか、外交官の妻になるには語學が達者でなくちやいけないツて、佛語を勉强するが宜いの、獨逸語が是非必要のツて、責めてばかり居るから困るわ――」
「ほゝゝゝ、お千鶴さんが丸髷に結つたのを早く見たいわ――島田も惜しいけれど」

「まあ嫌！」美しき眉は顰めど、裏切る微笑は薔薇の蕾める如き唇に流れぬ。

「あ、ほんに、萩原さんね、そらわたし等より一年前に卒業した――」

「あの松平さんに嫁らしつた方でせう」

「は、彼方がね、昨日離縁になつたンですツて」

「離縁に？　如何したの？」

「其れがね、舅姑の氣には入つてたけども、松平さんが嫌つてね」

「子供がありはしなかつたの」

「一人あつたわ。でもね、松平さんが嫌つて、此頃は妾を置いたり、間な者をしたり、亂暴ばかりするからね、萩原さんの御父が非常怒つてね、其樣な薄情な者には、娘は遣つて置かれぬてね、到頭引取つてしまつたんですツて」

「まあ、可哀想ね。――如何して嫌ふのでせう、本當にひどいわ」

「腹が立つのねエ。――逆樣だとまだ宜いのだけど、舅姑の氣に入つても良人に嫌はれて彼樣な事になつて、本當に辛いでせうねエ」

浪子は吐息しつ。

「同じ學校に出て同じ敎場で同じ本を讀んでも、皆ちり／＼になつて、如何なるか分からないものねエ。――お千鶴さん、何時までも仲好く、さき／＼力になりませうねエ」

「嬉しいわ！」

二人の手は自づから相結びつ。良ありて浪子は含笑み、

「斯樣に寢て居ると、ね、色々な事を考へるの。ほゝゝ、笑つちや嫌よ、此れから何年かたツてね、何處か外國と戰爭が起るでせう、日本が勝つでせう、其樣するとね、お千鶴さん宅の兄さんが外務大臣で、先方へ乘込んで媾和の談判をなさるでせう。其れから武男が艦隊の司令長官で、何十艘と云ふ軍艦を向うの港に列べてね……」

「其れから赤坂の叔父さんが軍司令官で、宅の阿爺が貴族院で何億萬圓の軍事費を議決さして……」

「其樣すると妾はお千鶴さんと赤十字の旗でも樹てて出かけるわ」

「でも身體が孱弱ちや出來ないわ。ほゝゝゝ」

「おほゝゝゝ」

笑ふ下より浪子は忽ち咳嗽を發して、右の胸をおさへつ。

「餘り話したからいけないのでせう。胸が痛むの？」

「時々咳嗽するとね、此處に響いて仕樣がないの」

云ひつゝ浪子の眼は忽ちすうと薄れ行く障子の日影を打眺めつ。

（四）の一

山木が奥の小座敷に、飽くまで武男に辱しめられて、燃ゆるが如き憤嫉を胸に疊みつゝ我寓に歸りし其夜より僅々五日を經て、千々岩は突然參謀本部よりして第一師團の某聯隊附に移されつ。

人の一生には、爲す事なす事皆圖星をはづれて、宛ながら皇天殊に吾一人を擇んで折檻又折檻の笞を續けざまに打ち下ろすかの如くに感ぜらるゝ、所謂「泣面に蜂」の時期少なくも一度はあるものなり。去年以來千々岩は此瀬戸に舟遣り入れて、今以て容易に其瀬戸を過ぎ了る可き見當のつかざるなりき。浪子は已に武男に奪はれつ。相場に手を出せば失敗を重ね、高利を借りれば恥を搔き、小兒と見括りし武男には下司同然に辱しめられ、唯一親族たる川島家との通路は絕えつ。果ては唯一立身の捷逕として、死す共去らじと思へる參謀本部の位置まで一言半句の挨拶もなく、剝ぎとられて、此頃まで牛馬

同様に思ひし師團の一上官とならむとは。疵持つ足の千々岩は、今更抗議する譯にも行かず、倒れてもつかむ馬糞の臭を厭はで、阿容々々と練兵行軍の事に從ひしが、此打撃はいたく千々岩を刺戟して從來事に臨んで更に慌てず、冷靜に吾を持したる彼をして、思うて此に到る毎に、一肚皮の憤恨猛火よりも烈しく騰上し來るを覺えざらしめたり。

頭上に輝く名利の冠を、上らば必ず得可き立身の梯子に足踏みかけて已に一段二段を上り行きける其時、突然蹴落されしは千々岩が今の身の上なり。誰が蹴落せし、千々岩は武男が言葉の端より、參謀本部に長たる將軍が片岡中將と無二の昵懇なる事實よりして、少なくも中將が幾分の手を假したるを疑ひつ。彼はまた從來金には淡泊なる武男が、三千金の爲めに、——假令僞印の事はあり共——法外に怒れるを怪しみて、浪子が舊き事まで取り出でて吾を武男に讒したるにあらずやと疑ひつ。思へば思ふ程疑は事實と募り、事實は怒火に油さし、失戀の怨、功名の道に於ける蹉跌の恨、失望、不平、嫉妬、さま〳〵の惡感は中將と浪子と武男を繞りて焰の如く立ち上りつ。彼の常に吾冷頭を誇り、情に熱して數字を忘るゝの愚を笑へる千々岩も、連敗の餘の流石に氣は亂れ心狂ひて、一腔の怨毒何れに向つてか吐き盡す可き路を得ずば、自己——千々岩安彦が五尺の軀先づ破れ了らむずる心地せるなり。

復讐、復讐、世に心よきは惡しと思ふ人の血を吸つて、其頰の一轉に舌鼓うつ時の感なるべし。復讐、復讐、あゝ如何にして復讐す可き、如何にして怨み重なる片岡川島兩家を微塵に吹き飛ばす可き地雷火坑を發見し、成る可く自己は危險なき距離より絲をひきて、憎しと思ふ輩の心傷れ腸裂け骨摧け髓潰れ生きながら死ぬ光景を眺めつゝ、快よく一盃を過さむか。此は一月以來夜となく日となく千々岩の頭を往來せる問題なりき。

梅花雪とこぼるゝ三月中旬、或日千々岩は親しく往來せる士官同窓生の何某が第三師團より東京に轉じ來るを迎ふるとて、新橋に赴きつ。待合室を出づるとて、恰も十五六の少女を連れし丈高き婦人——貴婦人の婦人待合室より出で來るにはたと行き逢ひたり。

「お珍らしいぢやムいませんか」

駒子を連れて、片岡子爵夫人繁子は彳めるなり。一瞬時、變れる千々岩の顔色は、先方の顔色を覗いて、忽ち一變しつ。中將にこそ浪子にこそ恨はあれ、少なくも此人をば敵視する要なしと早くも心を決せるなり。千々岩は恭しく一禮して、微笑を帶び、

「つい御無沙汰致しました」

「ひどい御見限り樣ですね」

「いや、一寸御伺申すのでしたが、色々職務上の要で、つい多忙だものですから——今日は何方へか？」

「は、一寸逗子まで——貴方は？」

「何、一寸朋友を迎へに參つたのですが——逗子は御保養で厶いますか」

「おや、まだ御存じないのでしたね——病人が出來ましてね」

「御病人、何人で？」

「浪子です」

折から鐸の鳴りて人は潮の如く改札口へ流れ行くに、少女は母の袖引き動かして、

「阿母、晩くなるわ」

千々岩は逸早く子爵夫人が手にしたる四季袋を引とり、打連れて歩みつゝ、

「それは——何ですか、餘程御惡いので？」

「はあ、到頭肺になりましてね」

「肺？——結核？」

「は、ひどく喀血をしましてね、其でつい先日

逗子へ参りました。今日は一寸見舞に」云ひつゝ千々岩が手より四季袋を受取り、「では左様なら、直ぐ帰ります、些御遊に入らつしやいよ」

華美なるカシミールの肩掛と紅のリボンかけし垂髪と遂に上等室に消ゆるを目送して、歩を返す時、千々岩の唇には恐ろしき微笑を浮べたり。

(四)の二

医師が見舞ふ毎に、敢て口には云はねど、其症候の次第に著るしくなり来るを認めつゝ、術を尽して防ぎ止めむとせし甲斐もなく、目には見えねど浪子の病は日に募りて、三月の初旬には、疑ふ可くもあらぬ肺結核の初期に入りぬ。

吾老健を鼻にかけて今世の若者の高弱を嘲り、転地の事耳に入れざりし姑も、現在眼の前に浪子の一度ならず喀血するを見ては、流石に驚き――伝染の恐ろしきを聞き居れば――恐れ、医師が勧むるまゝに然る可き看護婦を添へて浪子を相州逗子なる實家――片岡家の別墅に送り遣りぬ。

肺結核！　茫々たる野原に唯独り立つ旅客の、頭上に迫り来る夕立雲の真黒きを望める心こそ、若しや、若しやと其病を待ちし浪子の心なりけれ。今は恐ろしき沈黙は已にとく破れて、雷鳴り電ひらめき黒風吹き白雨迸る真中に立てる浪子は、唯身を賭して早く風雨の重囲を通り過ぎなむと思ふのみ。其にしても第一撃の如何に凄まじかりしぞ。思ひ出づる三月の二日、今日は常にまさりて快よく覚ゆるまゝに、久しく打棄てし生花の慰み、阿姑の部屋の花瓶に挿さむ料に、折から帰りて居玉ひし良人に願ひて、匂も深き紅梅の枝を折るとて、庭さき近く端居して、彼此と択み居しに、俄かに胸先苦しく頭ふらふらとして、紅の霧眼前に渦まき、吾知らず呀と叫びて、肺を絞りし鮮血の紅なるを吐ける其時！　其時こそ「あゝ到頭」と、思ふ同時に、何処ともなく遂に吾命の影を瞥見しが。

あゝ死！　以前世を苦しと見し頃は、生何の楽ぞ死何の哀惜ぞと思ひし折もありけるが、今は人の生命の愛しければ猶吾命の惜まれて千代までも生きたしと思ふ浪子、情けなしと思ふ程、病に勝たむの心も切に、をりをり沈む吾気をふり起しては、己より医師を促すまでに怠らず病を養へるなりき。

眼と鼻の横須賀に恰も在勤せる武男が、暇を偸みてしばしば往来するさへあるに、父の書、叔母、千鶴子の見舞断間なく、別荘には、去年の夏川島家を逐はれし以来絶えて久しき彼姥の幾が、其の再会の縁由となれる為めに病其ものゝ悲む可きをも喜ばむずるまで浪子をなつかしめるありて、能ふ可くば以前に倍する熱心もて伏侍するあり。まめまめしき老僕が心を用ゐて事ふるあり。春寒厳しき都門を去りて、身を暖かき湘南の空気に投じたる浪子は、日に自然の人を恵しめる温光を吸ひ、身を繞る暖かき人の情を吸ひて、気も心も自づから舒やかになりつ。地を転じて既に一旬を経たれば、喀血止み咳嗽やゝ減り、一週二回東京より来り診する医師も、快しと云ふまでには得云はねど病の進まざるを甲斐ありと喜びて、此上烈しき心神の刺戟を避け、安静にして摂養の功を続けなば、快復の望ありと許すに到りぬ。

(四)の三

都の花はまだ少し早けれど、逗子あたりは若葉の山に山桜咲き初めて、山又山にさりもあへぬ白雲をかけし四月初の土曜。今日は朝よりそぼ降る春雨に、海も山も一色に打煙り、たゞさへ永き日の果もなきまで永き心地せしが、日暮方より大降りになりて、風さへ強く吹き出で、

戸障子の鳴る響凄まじく、怒り哮る相模灘の濤聲、萬馬の跳るが如く、海村戸を鎖して燈火一つ漏る家もあらず。

片岡家の別墅にては、今日は夙く來可かりしに勤務上已み難き要ありておくれし武男が、夜に入りて、風雨の暗を衝きつゝ來りしが、今は已に衣を更め、晩餐を終へ、卓に倚りかゝりて、手紙を讀みて居り。相對ひて、浪子は美しき巾着を縫ひつゝ、時々針をとゞめて良人の方打眺めては笑み、風雨の音に耳傾けては靜かに思に沈みて居り。揚卷に結ひし緑の髪には、一朶の山櫻を葉ながらに插みたり。二人の間には、一脚の卓ありて、桃色の蓋かけしランプは燄々と燃えつゝ、薄紅の光を落し、其傍には白磁瓶に插みたる一枝の山櫻、雲の如く默して語らず。今朝別れ來し故山の春を夢むるなる可し。

風雨の聲屋を繞りて騷がし。

武男は手紙を卷をさめつ。「阿舅も餘程心配して御出なさる。何せ明日は一寸歸京るから、赤坂へ廻つて來よう」

「明日行らツしやるの？　此お天氣に！　——でも阿母樣も御待ちなすツていらツしやいませうねエ。わたくしも行きたいわ！」

「浪さんが!!　とんでもない！　其こそ眞平御免蒙る。今暫くは流刑に遭つた積りで居なさい。はゝゝゝ」

「ほゝゝ、此樣な流刑なら生涯でも宜うムんすわ——貴方、卷莨召上れな」

「欲しさうに見えるかい。まあ止さう。其かはり來る前の日と、歸つた日は、二日分喫むのだからね。はゝゝゝゝ」

「ほゝゝ、それぢや御褒美に、今好いお菓子が參りますよ」

「其は御馳走樣。大方お千鶴さんの土産だらう。——其は何かい、立派な物が出來るぢやないか」

「此間から日が永くて、仕樣がないものですから、阿母へ上げようと思つて仕て居るのですけど——イヽエ大丈夫ですわ、遊び／＼してますから。あゝ何だか氣分が清々したこと。今少し起きさして頂戴な、斯樣してますと些も病氣の樣ぢやないでせう」

「ドクトル川島がついて居るのだもの。はゝは。でも、近頃は本當に浪さんの顏色がよくなツた。最早此方のものだて」

此時次の間より彼老女の幾が、菓子鉢と茶盆を兩手に擎げ來つ。

「ひどい暴風雨で厶いますこと、旦那樣が入らツしやいませんと、ねエ奥樣、今晩なんざ到底眼が合ひませんよ。飯田町の御隱樣は御歸京遊ばす、看護婦さんまで、一寸歸京りますし、今日は如何に淋しう厶いましてせう、ねエ奥樣。」

「此樣な晩に船に乘つてる人の心地は如何なでせうねエ。でも乘つてる人を思ひやる人は猶悲しいわ！」

「何有」と武男は茶を吸り果てゝ風月の唐饅頭二つ三つ一息に平げながら、「何有、此位の風雨はまだ宜いが、南支那海あたりで二日も三日も大暴風雨に出會ふと、隨分堪へるよ、四千何百噸の艦が三四十度位に傾いてさ、山の樣な奴がドン／＼甲板を打越してさ、艦が軋々響ると餘り宜い心地はしないね」

風いよ／＼吹き募りて、暴雨一陣礫の如く雨戸に迸る。浪子は眼を閉ぢつ。幾は身を震はしぬ。三人が語暫し途絶えて、風雨の音のみぞ凄まじき。

「さあ、陰氣な話は最早中止だ。此樣な夜は、ランプでも明くして愉快に話すのだ。此處は横須賀よりまた暖いね、最早此樣に山櫻が咲いたな」

浪子は花瓶に插しゝ櫻の花瓣を輕く撫でつゝ、「今朝老爺が山から折つて來ましたの。綺麗でせう。―でも此雨風で山のは餘程散りませうよ。本當に如何して此樣に潔いものでせう！ 左樣々々、先刻蓮月の歌に此樣のがありましたよ。『うらやまし心のまゝにとく咲きて、すがすがしくも散るさくらかな』よく詠んでありますのねエ」

「なに？ すが〱しくも散る？ 僕―乃公は其樣思ふがね．花でも何でも日本人はあまり散るのを賞翫するが、其も潔白で宜いが、過ぎると宜くないね。戰爭でも早く討死する方が負だよ、今少し剛情にさ、執拗さ、氣永な方を奬勵したいと思ふね。其で吾輩―乃公は斯樣な歌を詠んだ。いゝかね。皮切だから何せ可笑しいよ、しつこしと、笑つちやいかん、しつこしと人はいへども八重櫻盛りながきは嬉しかりけり、はゝゝゝ、梨本跣足だらう」

「まあ面白い御歌でムいますこと、ねエ奥樣」

「はゝゝ、姥やの折紙つきぢや、こらいよいよ秀逸にきまつたぞ―」

話の途切れ目をまた一しきり激しくなりまさる風雨の音、濤の音の立ち添ひて、家は震ながら大海に浮べる舟にも似たり。幾は紅茶の湯をかふるとて次に立ちぬ。浪子は挾み居し檢温器を一寸燈火に透し見て、今宵は常よりも上らぬ熱を手柄顔に良人に示しつゝ、傍に坐る、暫らく圓卓の櫻花を見るともなく眺めて居たりしが、忽ち含笑みて、

「最早一年經ちますのねエ、よウく記憶えてますよ。彼時馬車に乘つて出ると家内の者が送つて出てますから何とか云ひたかつたのですけど如何しても口に出ませんの、おほゝゝ。其れから溜池橋を渡ると最早日が暮れて、十五夜でせう、眞丸な月が出て、それから山王の彼坂を上ると恰ど櫻花の盛りで、馬車の窓からはら〱はら〱まるで吹雪の樣に降り込んで來ましてね、ほゝゝ、髷に花片がとまつてましたのを、最早下りると云ふ時、氣がついて伯母がとつて呉れましたツけ―

武男は圓卓に頬杖つき「一年位たつな早いもんだ。彼此すると直ぐ銀婚式になつちまふよ、はゝゝ、彼時浪さんの澄し方と云うたら、はツはゝゝ、思ひ出しても可笑しい、可笑しい。如何して彼樣澄されるかな―

「でも、ほゝゝゝ―貴郎も若殿樣できちんと澄していらしツたわ。ほゝゝゝ、手が震へて、盃が如何しても持てなかつたンですもの。」

「大分御賑やかでムいますねエ」と幾は莞爾笑みつゝ鐵瓶を持ちて再び入り來つ。「姥も此樣に氣分が清々致したことはありませんでムいますよ。唯一生に斯樣して居りますと、昨年伊香保に居た時の樣な心地が致しますでムいますよ」

「伊香保は嬉しかつたね！」

「蕨狩は如何だい、誰かさんの跣足が大分重かツたつけ―

「でも貴郎が餘り御急ぎなさるんですもの」と浪子は含笑む。

「最早直ぐ蕨の時候になるね。浪さん、早く全快なツて、また蕨狩の競爭しようぢやないか」

「ほゝゝ、其迄には屹度癒りますよ」

（四）の四

明くる日は、昨夜の暴風雨に引かへて、不思議な程の上天氣。

歸京は午後と定めて、午前の暇、かく風なき間を運動にと、武男は浪子と打連れて、別莊の裏口よりぶら〱松の砂丘を過ぎ、濱に出でたり。

「好いお天氣、斯樣にならうとは思ひませんで

したねエ」
「實に好い天氣だ。伊豆が近く見えるぢやないか、話でも出來さうだ」
二人は已に乾ける砂を踏みて、今日の凪を地曳すと立ち騷ぐ漁師、貝拾ふ子等を後にし、新月形の濱を次第に人少なき方に歩みつ。
浪子は卒然思ひ出でたる樣に、「ねエあなた。彼──千々岩さんは如何してらツしやるでせう？」
「千々岩？ 實に不埒極まる奴だ。彼後一度も會はンが。──何故聞くのかい？」
浪子は少し考へ、「イヽエ、ね、可笑しい事を云ふ樣ですが。昨夜千々岩さんの夢を見ましたの」
「千々岩の夢？」
「はあ。千々岩さんが阿母と何か話をして居なさる夢を見ましたの」
「はゝゝゝ、氣澤山だねエ、如何樣な話をして居たのかい」
「何か分らないのですけど、阿母が何度も頷いていらつしやいましたわ。──お千鶴さんが、彼方と山木さんと一處に連立つて居なさるのを見かけたつて話したから、此樣な夢を見たのでせうね。ねエ、良人、千々岩さんが我等宅に出入する樣な事はありますまいね」
「其樣な事は無い、無い筈だ。阿母も千々岩の事ぢや怒つて居なさるからね」
浪子は思はず吐息をつきつ。
「本當に、此樣な病氣になつてしまつて、阿母も嘸いやに思つていらツしやいませうねエ」
武男ははたと胸を衝きぬ。病める妻には、其と云はねど、浪子が病みて地を轉へしより、武男は歸京する每に母の機嫌の次第に惡く、傳染の恐あれば成る可く逗子には遠ざかれとまで戒められ、さま〴〵の壁訴訟の果ては昂じて實家の惡口となり、聊か宥めむとすれば妻を庇ひて親に抗するたはけ者と罵らるゝことも、已に一再に止まらざりけるなり。
「はゝゝゝ、浪さんも色々な心配をするね。其樣な事があるものかい。精出して養生して、來春は如何か暇を都合して、阿母と三人吉野の花見にでも行くさ──やア最早此處まで來てしまツた。疲れたらう。徐々歸らなくも宜いかい」
二人は濱盡きて山起る處に立てるなり。
「不動まで行きませう、ね──イヽエ些とも疲れはしませんの。西洋迄でも行けるわ」
「宜いかい、其れぢや其肩掛を御遣りな。岩が滑るよ、さ、しつかりつかまつて」
武男は浪子を扶け引きて、山の根の岩を傳へる一條の細逕を、しば〳〵立ちどまりては憩ひつゝ、一町あまり行きて、しやら〳〵瀧の下に到りつ。瀧の横手に小さき不動堂あり。松五六本、ひよろ〳〵と崖より秀でて、斜めに海を覗けり。
武男は岩を拂ひ、肩掛を敷きて浪子を憩はし、自己も腰かけて、吾膝を抱きつ。「好い凪だね！」
海は實に凪げるなり。近午の空は天心に到るまで蒼々と晴れて雲なく、一碧の海は處々練れる樣に白く光りて、見渡す限り眼に立つ襞だにもなし、海も山も春日を浴びて悠々として眠れるなり。
「良人！」
「何？」
「癒りませうか」
「エ？」
「わたくしの病氣」
「何を云ふのかい。癒らずに如何する。癒るよ、屹度癒るよ」
浪子は良人の肩に倚りつ、「でも萬一したら癒らずにしまひはせんかと、其樣時々思ひますの。實母も此病氣で亡くなりましたし──」

「浪さん、何故今日に限つて其樣な事を云ふのかい、必定癒る。癒ると醫師も云ふぢやアないか。ねエ浪さん、其樣ぢやないか。其らア阿母は其病氣で――か知らんが、浪さんはまだ二十にもならんぢやないか。加之初期だから、如何な事があつたつて癒るよ。御覧な、それ内の親類の大河原、ね、彼は右肺がなくなツて、醫師が匙を抛けてから、まだ十五年も生きてるぢやないか。是非癒ると云ふ精神がありさへすりア屹度癒る。癒らんと云ふのは浪さんが僕を愛さんからだ。愛するなら屹度癒る筈だ。癒らずに此を如何するかい」

武男は浪子の左手を執りて、吾脣に當てつ。手には結婚の前、武男が贈りし金剛石入の指環燦然として輝けり。

二人は暫し默して語らず、江の島の方より出で來りし白帆一つ、海面を滑り行く。

浪子は涙に曇る眼に微笑を帶びて、「癒りますわ、屹度癒りますわ、――あゝ、人間は何故死ぬのでせう! 生きたいわ! 千年も萬年も生きたいわ! 死ぬなら二人で! ねエ、二人で!」

「浪さんが亡くなれば、僕も生きちや居らん!」

「本當? 嬉しい! ねエ、二人で!……でも阿母がいらッしやるし、御職分があるし、其樣思つて御出なすッても自由にならないでせう。其時はわたくしだけ先に行つて待たなけりやならないのですねエ――わたくしが死んだら時々は思ひ出して下さるの? エッ? エッ? 良人?」

武男は涙を揮りはらひつゝ、浪子の黑髮をかい撫で、「あゝもう斯樣な話は止さうぢやないか。早く養生して、よくなツて、ねエ浪さん、二人で長生して、金婚式をしようぢやないか」

浪子は良人の手を犇と兩手に握りしめ、身を投げかけて、熱き涙をはら〳〵と武男が膝に落しつゝ、「死んでも、わたしは良人の妻ですわ! 誰が如何したツて、病氣したツて、死んだツて、未來の未來の後までわたしは良人の妻ですわ!」

(五)の一

新橋停車場に浪子の病を聞きける時、千々岩の脣に上りし微笑は、解かむと欲して解き得ざりし難問の忽然として其端緒を示せるに對して、先づ揚れる心の凱歌なりき。惡しと思ふ川島片岡兩家の關繋は實に浪子にありて、浪子の此肺患は取りも直さず天特に吾千々岩安彦の爲めに復讐の機會を與ふるもの、病は傳染致命の大患、武男は多く家にあらず、姑媳の間に輒々一片の言を投ち、一指を動かさずして破裂せしむるに何の仔細かある可き。事成らば、吾は直ちに飛びのきて、あとは彼等が互に手を負ひ負はし生き死に苦む活劇を見る可きのみ。千々岩は實に斯く思ひて、聊か不快の眉を開けるなり。

叔母の氣質は能く知りつ。武男が吾に怒りし程、叔母は吾に怒らざるも能く知りつ。叔母が常に武男を子供視して、寧ろ吾――千々岩の年よりも世故に長けたる頭に依頼するの多きも、能く知りつ。抑も亦親戚知己も多からず、人を叱り飛ばして内心には心細く覺ゆる叔母が、若夫婦に慊らで味方欲しく思ふをも能く知りつ。されば未だ一兵を進めずして其作戰計畫の必ず成功す可きを測りしなり。

胸中已に成竹ある千々岩は、更に山木を語らひて、時々川島家に行きては、其模樣を探らせ、且は自己――千々岩の甚く悔悛の覺悟せる由をほのめかしつ。浪子の病已に二月に及びて捗々しく治せず、叔母の機嫌の愈々惡しきを聞きし四月の末、武男はあらず、執事の田崎も家用を帶びて旅行せし隙を覗ひ、一夜千々岩は不

意に絶えて久しき川島家の門を入りぬ。恰も叔母が獨り武男の書狀を前に置きて、深く深く沈吟せる所に行きあはせつ。

（五）の二

「いや、一向捗がいきませんぢや、金は使ふ、二月も三月も經つたて宜うなるぢやなし、困つたものぢやて、なう安さん。――斯樣云ふ時分にや賴もしか親類でもあつて相談するとこぢやが、武は彼通り子供――」

「其處でムいますて、叔母樣、實に小甥も斯樣してのこ〳〵上られる譯ぢやないのですが、――御恩になつた故叔父樣や叔母樣に對してもまた武男君に對しても、此まゝ默つて見て居られないのです。實に云はゞ川島家の一大事ですからね、顏を拭つて參つた譯で――いや叔母樣、此の肺病と云ふ病ばかりは恐ろしいもんですね、叔母樣も幾何も御存じでせう、妻の病氣が夫に傳染して一家總斃れになるはよくある例です、小甥も武男君の上が心配でなりませんで、叔母樣から少し御注意なさらんと大事になりますよ」

「其樣ぢやて、わたしも其が恐ろしかで、逗子に行くな〳〵て、武に云ふんぢやがの、矢張聞かんで、見なさい――」

手紙をとりて示しつゝ、「醫師が如何の、やれ看護婦が如何したの、――馬鹿が、妻の事ばかい」

千々岩はにやり笑ひつ。「でも叔母樣、其は無理ですよ、夫婦に仲の好過ぎると云ふことはないものです。病氣であつて見ると、武男君もよいよ此ら其樣ある可きぢやありませんか」

「其ぢやてて、妻が病氣すツから親に不孝をすツ法は無もんぢや」

千々岩は慨然として嘆息し、「いや、實に困つた事ですな、折角武男君も好い細君が出來て、叔母樣もやつと御安心なさると、直ぐ此樣な事になつて――併し川島家の存亡は實に今ですね――所でお浪さんの實家からは何か挨拶がありましたでせうな」

「挨拶、ふん、挨拶、彼押柄な繼母が、ふん少つとばかい土產を持つての、言譯ばかいの挨拶ぢや。加藤の內から二三度、來は來たがの――」

千々岩は再び太息しつ。「此樣な時にや實家から些氣を利かすものですが、病人の娘を押付けて、よく居られるですね。併し利己主義が本尊の世の中ですからね。叔母樣」

「其樣とも」

「其は宜いですが、心配なのは武男君の健康です。若しもの事があつたら其れこそ川島家は破滅です、――其樣云ふ內にも何時傳染しないとも限りませんよ、夫れだつて、夫婦と云ふと、まさか叔母樣が籬を御結ひなさる譯にも行きませんし――」

「其樣ぢや」

「でも、此まゝに爲すつちや川島家の大事になりますし――」

「其樣とも」

「子供の言ふ樣にするばかりが親の職分ぢやなし、時々は子を泣かすが慈悲になることもありますし、それに若い者は一旦、思ひ込んだ樣でも少し經つと案外氣の變るものですからね」

「其樣ぢや」

「少し位の可哀想や氣の毒は家の大事には換へられませんからね」

「おゝ其樣ぢや」

「加之萬一、子供でも出來なさると、其れこそ到底――」

「いや、其處ぢや」

膝乘り出して、がつくりと一つ領ける叔母の容子を見るより、千々岩は心の膝を拍ちて、飜然として話を轉じつ。彼は其注ぎ込みし藥

の見る〳〵進るを認めしのみならず、叔母の心田もと已に一種子の落ちたるありて、未だ左右の顧慮に覆はれ居るも、其土を破りて芽み長じ花さき實るは唯時日の問題にして、其時日も勢甚だ長からざる可きを悟りしなりき。

其資質に於て悪人ならぬ武男が母は、浪子を愛さぬまでも悪めるにはあらざりき。浪子が家風、教育の異なるに関らず、成る可く己を棄てゝ姑に調和せむとするをば、流石に母も知り、剰さへ其或點に於て趣味を吾と同うせるを感じて、口に叱れど心には吾が花嫁の頃は到底彼程に届かざりしと窃かに思へることもありき。然りながら浪子が殆ど一月に亙るぶら〳〵病の後、いよ〳〵肺結核の忌まはしき名をつけられて、眼前に喀血の恐しきを見るに及び、殊其の病の少からぬ費用をかけ時日を費やしてはかばかしき快復を見ざるを見るに及び、失望とや云はむ、落胆と名づけむか自から分つ能はざる一念の心底に生え出でたるを覚えつ。彼を思ひ出で、此を思ひやりつゝ、一種不快なる感情の胸中に蟠屈するに従つて、武男が母は上に覆ひたる顧慮の一塊々々融け去りて後一念の動くべき勢もて日長じ来るを覚えしなり。

千々岩に分明に叔母が心の運路を辿りて、是よりをり〳〵足を運びては、唯さり気なく微雨軽風の両三點を放つて、其顧慮を弛め、其萌芽を培ひつゝ、局面の近くに發展せん時を待ちぬ。其のをり〳〵武男の留守を覗ひて川島家に往来することのおぼろに外に漏れし頃は、千々岩は已に其所作の大要を卒へて、早くも舞臺より足を抜きつゝ、彼山木に向ひ近きに起る可き活劇の豫告をなして、豫め祝盃を擧げけるなり。

（六）の一

五月初旬、武男は其乗組める艦のまさに呉より佐世保に赴き、それより函館附近に行はる可き聯合艦隊の演習に列せむ為め引かへして北航する筈なれば、彼此四五十日が程は帰省の機會を得ざる可く、暫時の告別かた〴〵、一夜帰京して母の機嫌を伺ひたり。

近頃は兎角奥歯に物のはさまりし様に、何時帰りても機嫌よからぬ母の、今宵は珍らしく莞爾顔を見せて、風呂を焚かせ、武男が好物の薩摩汁など自から手を下さぬばかり肝煎りてすゝめつ。元来あまり細かき事には気もとめぬ武男も、容子の何時になくあらたまれるを不思議――とは思ひしが、何歳になつても可愛がられて嬉しからぬ子はなきに、父に別れてより一入母なつかしき武男、母の機嫌の直れるに心嬉しく、快よく夜食の箸をとりし後は、湯に入りてはら〳〵降り出せし雨の音を聞きつゝ、此上の欲には浪子が早く全快して此處に吾帰りを待つて居る様にならばなど今日立寄りて来し逗子の様子思ひ浮べながら、陶然とよき心地になりて浴を出で、使女が被る平生服を無造作に引かけて、葉巻燻りし右手の甲に額を摩りながら、母の八畳の間に入り来りぬ。

小間使に肩揉らして、羅宇の長き煙管にて国分を燻らし居たる母は眼をあげ、「おゝ、早上つて来たな。ほゝゝゝ、阿爺が恰其様ぢやつたが――そ、其座蒲団に坐つが宜い。――松、和女郎は最早宜かで、茶を入れて来なさい」と自から立つて茶棚より菓子鉢を取り出でつ。

「まるで御客様ですな」

武男は葉巻を一吸吸ひて青き煙を吹きつゝ、うち含笑む。

「武どん、よう帰つたもつた。――實はの、些と相談もあるし、是非帰つて貰はうと思つてた所

おやつた。まあ歸つて哭れたで、好い都合ッごあした、逗子――寄つて來つろの？」

逗子に繁く往來するを母の嫌ふはよく知れど、まさかに見え透いたる虚言も云ひかねて、

「はあ、一寸寄つて來ました。――大分血色も直りかけた樣です。阿母に濟まないッて、ひどく心配して居ましたッけ」

「さうかい」

母は熟々武男の顏を睇視めつ。

折から小間使の茶道具を持て來しを母は引取り、

「松、御身は彼方行つて居なさい。そ、其襖をちやんと閉めて――」

（六）の二

手づから茶を汲みて武男にすゝめ、己も飲みて、やをら煙管をとりあげつ。母は徐ろに口を開きぬ。

「喃武どん、わたしも最早大分衰弱いましたよ。去年の僂痲質斯でがつかり弱い申した。昨日御墓詣したばかいで、まだ肩腰が痛んでな。年が寄ると何彼と心細らなつて困いますよ――武どん、卿身體を大事にしての、病氣をせん樣して哭れんとないませんぞ」

葉卷の灰をほと／＼火鉢の緣にはたきつゝ、武男は太々と肥えたれど流石に爭はれぬ年波の寄る母の顏を仰ぎ、「私は始終外に居ますし、何も彼も母上が總理大臣ですからな――浪でも達者ですと宜いですが、彼女も早く全快なつて阿母の御肩を休めたいッて其樣每も云つてます」

「さあ、其樣思つとるぢやらうが、病氣が病氣でな」

「でも、大分快い方になりましたよ。段々暖かくはなるし。兎に角若い者ですからな」

「さあ、病氣が病氣ぢやから、宜く行けばええがの、武どん――醫師の話ぢやつたが、浪どんの母御も、矢張肺病で亡くなッてぢやないかの？」

「はあ、其樣な事を云ッてましたがね、併し――」

「此病氣は親から子に傳はッてぢやないかい？」

「はあ、其樣な事を云ひますが、併し浪のは全く感冒から引き起したンですからね。何有、母上、用心次第です、傳染の、遺傳の云ふですが、實際其樣云ふ程でもないですよ。現に浪の阿爺も彼樣な健康な方ですし、浪の妹――はあ彼お駒さんです――彼女も肺のはの字もない位です。人間は醫師の云ふ程弱いものぢやありません、はゝゝゝ」

「否、笑ひ事ぢやあいません」と母はほと／＼煙管をはたきながら、「病氣の中でも此病氣ばかいは恐ろしいもんでな、武どん、卿も知つとる筈ぢやが、彼知事の東郷、な、卿がよく喧嘩をした彼兒の母御な、如何かい、彼母が肺病で死んでの、一昨年の四月ぢやつたが、其年の暮に、如何かい、東郷さんも矢張肺病で死んで、宜えかい、其から彼息子さん――何處かの技師をしとつたさうぢやがの――も矢張肺病で先頃亡くなッた、な、皆母御のが傳染ッたのぢや。まだ此樣な話が幾個もあいます。其でわたしはの、武どん、此病氣ばかいは油斷がならん、油斷をすれば大事ぢやと思ふッがの」

母は煙管をさしおきて、少し膝をすゝめ、默して聞き居れる武男の横顏を覗きつゝ、

「實はの、わたしも此間から相談したい／＼と思つ居い申したが――」

少し云ひ淀んで、武男の顏熟々と睇視め、

「浪ぢやがの――」

「はあ？」

武男は顏をあげたり。

「浪を――引取つて貰ちや如何ぢやろの」

「引取る？　如何引取るのですか」

母は武男の顔より眼をはなさず、「實家によ」

「實家に？　實家で養生さすのですか」

「養生もしようがの、兎に角引取つて――」

「養生には逗子が宜いですよ。實家では子供も居ますし、實家で養生さす位なら此家の方が餘程優しですからね」

冷たくなりし茶を啜りつゝ、母は少し震ひ聲に、「武どん、卿酔つちや居まいの、分かん風するのかい？」熟と吾子の顔見つめ、「わたしが云ふのはな、浪を――實家に戻すのぢや」

「戻す？　……戻す？　――離縁ですな!!」

「こーれ、聲が高かぢやなッか、武どん」寒戰ふ武男を熟と見て、

「離縁、左様ぢや、まあ離縁よ」

「離縁！　離縁！――何故ですか」

「何故？　先刻から云ふ通り、病氣が病氣ぢやからの」

「肺病だから……離縁すると仰有るのですな？　浪を離縁すると」

「左様よ、可哀想ぢやがの」

「離緣!!」

武男の手より滑り落ちたる葉巻は火鉢に落ちて夥しくうち煙りぬ。一燈熒々と燃えて、夜の雨はらはらと窓をうつ。

（六）の三

母は頻りに煙る葉巻を灰に葬りつゝ、少し乘出して、

「喃、武どん、餘い突然ぢやから卿は仰天するな尤つごあすがの、此母は最早此まで幾晩も幾晩も考へた上の話ぢや、其程で聞いてたもらんといけませんぞ。其アもう浪にはわたしも別に此と云ふ不足はなし、卿も氣に入つとつ事ぢやから、何も此方の好きで離縁のし申すぢやごあはんがの、何を云うても病氣が病氣――」

「病氣は快い方に向いてるです」武男は口早に云ひて、屹と母の顔を仰ぎたり。

「まあわたしの言ふ所を聞きなさい。――其は目下の所ぢや惡くないかも知らんがの、わたしはよウく醫師から聞いたが、此病氣ばかいは一時よかつてもまた惡くなる、暑さ寒さで直ぐまた起るもんぢや、肺結核で全快なッた人はまあ一人もない、醫師が其様云ひ申すぢやての。假令浪が今死なんにした所が、其内また屹度惡くなッは保證ぢや。其内には屹度卿に傳染すッな此保證ぢや。喃武どん。卿に傳染る。子供が出來る、子供に傳染る。浪ばかいぢやない、大事な主人の卿も、の、大事な家嫡の子供も、肺病持なッて、死んでしまうて見なさい、川島家はつぶれぢやなッかい。宜えかい、卿が阿爺の丹精で、折角此程になッて、天子様から御直々に取立てゝ下さつた此川島家も卿の代で潰れッしまひますぞ。――其は、も、浪も可哀想も中々痛か、わたしも親で居つて此ら云ふ事云ひ出すな面白くない、辛いがの、何を云うても病氣が病氣ぢや、浪が可哀想ぢやて主人の卿には代へられン、川島家にも代へられン。よウく分別のして、此は一つ思ひ切つてたもらんとないませんぞ」

默然と聞き居る武男が心には、今日見舞來し病妻の顔歴々と浮みつ。

「阿母、私は其様な事は出來ないです」

「何故？」母はやゝ高聲になりぬ。

「阿母、今其様な事をしたら、浪は死にます！」

「其は死ぬかも知れン、ぢやが、武どん、わたしは卿の命が惜しい、川島家が惜しいのぢや！」

「阿母、其様私を大事になさるなら、何卒私の心を汲んで下さい。此様な事を言ふのは異な様ですが、實際私には其様な事は如何し

ても出來ないです。まだ慣れないものですから其は色々屆かぬ所はあるですが、併し阿母を大事にして、私にもよくして呉れる、實に罪も何もない彼女を病氣したからつて離別するなんぞ、如何しても私は出來ないです。肺病だツて癒らん事はありますまい、現に癒りかけとるです。設令また癒らずに、如何しても死ぬなら、阿母、何卒私の手で死なして下さい。病氣が危險なら往來も絕つです。用心もするです。其は阿母の御安心なさる樣にするです。でも離別丈は如何あツても私は出來ないです！」

「へゝゝ、武男、卿は浪の事ばツかい云ふがの、自分は死んでも構はンか、川島家は潰しても宜えかい？」

「阿母は私の身體ばツかり仰有るが、其樣な不人情な不義理な事して長生したツて如何しますか。人情に背いて、義理を缺いて、決して家の爲めに宜い事はありません、決して川島家の名譽でも光榮でもないです。如何でも離別は出來ません、斷じて出來ないです」

難關ある可しとは期しながら思ひしよりも烈しき抵抗に出會ひし母は、例の癇癖のむら〳〵と胸先にこみあげて、額のあたり筋立ち、蜂谷動き、煙管持つ手のわな〳〵と震はるゝを、やうやう押しづめてわづかに笑を裝ひつ。

「そ、其樣せき込まんでも、また靜かに考へて見なさい。卿はまだ年が若かで、世間を知ンなさらンがの、よく云ふわ、それ、小の蟲を殺しても大の蟲は助けろぢや。喃。浪は小の蟲、卿――川島家は大の蟲ぢや、の。其は先方も氣の毒、浪も可哀想な樣なものぢやが、病氣すつが惡かぢやなツか、何と思はれたて、川島家が斷絕するよかまだ宜えぢやなツか、喃。加之不義理の不人情の云ひなはるが、此樣な例は世間に幾多もあいます。家風に合はンと離緣する。子供が無かと離緣する。惡い病氣があつと離緣する。此が世間の法、喃武どん。何の不義理な事も不人情な事もないもんぢや。全體此樣な病氣のした時やの、嫁の實家から引取つて宜え筈ぢや。先方から云はンから此方で云ひ出すが、何の惡か事恥かしか事があツもンか」

「阿母は世間々々と仰有るが、何も世間が惡い事をするから自分も惡い事をして宜いと云ふ法はありません。病氣すると離別するなんか昔の事です。若しまた其が今の世間の法なら、今の世間は打壞して宜い、打壞さなけりやならんです。阿母は此方の事ばつかり仰有るが、片岡の家だツて折角嫁に遣つた者が病氣になつたからツて戻されて快い氣持がしますか。浪だつて何の顏さげて歸られますか。萬一此が反對で、私が肺病で、浪が實家から肺病は險吞だからツて浪を取戻したら、阿母快い心持がしますか。同じ事です」

「否、其は違ふ。男と女とはまた違ふぢやなツか。

「同じ事です。情理から云つて、同じ事です。私から其樣な事を云つちや可笑しい樣ですが、浪もやつと喀血がとまつて少し快い方に向いたかと云ふ時ぢやありませんか。今其樣な事をすると、實に血を吐かす樣なものです。浪は死んでしまひます。乾度死ぬです。他人だツて其樣な事は出來ンです。阿母は私に浪を殺せ……と仰有るのですか」

武男は思はず熱き涙をはら〳〵と疊に落しつ。

（六）の四

母は突と立上つて、佛壇より一個の位牌を取り下ろし、座に歸つて、武男の眼前に押すゑつ。

「武男、卿はな、女親ぢやからツてわたしを何とも思はんな。さ、阿爺の前で今一度言つて

見なさい、さ、言つて見なさい。御先祖代々の御位牌も見て御出ぢや。さ、今一度言つて見なさい、不孝者奴が!!」

乾と武男を睨めて、續けざまに煙管もて火鉢の縁打敲きぬ。

流石に武男も少し氣色ばみて、「何故不孝です?」

「何故? 何故もあツもンか。妻の情ばツかい持つて親の云ふ事は聞かん奴、不孝者ぢやなツか、親が育てた體を粗略にして、御先祖代々の家を潰す奴は不孝者ぢやなツか。不孝者、武男、卿は不孝者、大不孝者ぢやど」

「併し人情――」

「まだ義理人情を云ふツか。卿は親よか妻が大事なツか。たはけ奴が。何云ふと、妻、妻、妻はかい云ふ、親を如何すツか。何をしても浪ばツかい云ふ、不孝者奴が、勘當すツど」

武男は唇を嚙みて熱涙を絞りつゝ、「阿母、餘り無理です」

「無理が何した」

「私は決して其樣な粗略な心は決して持つちや居ないです。阿母に其心が届きませんか」

「其ならわたしが云ふ事を何故聽かぬ……エ……何故浪を離緣せンツか」

「併し其は――」

「併しもねもンぢや、さ、武男、妻が大事か、親が大事か、エ? 家が大事? 浪が――?」

「エ、馬鹿奴――」

はつしと火鉢をうちたる勢に、煙管の羅宇はほつきと折れ、雁首は空を飛んではたと襖を破りぬ。途端にはツと襖の彼方に聲をのむ人の氣はひせしが、軈て慄ひ聲に、「御免――遊ばせ――」

「誰? ――何ぢや?」

「あの…電報が…」

襖開き、武男が電報をとりて見、小間使が女主人の一瞥に會ひて半ば消え入りつゝ匆々に去りしまで僅二分ばかりの間――ながら、此瞬間に二人が間の熱やゝ下りて、暫くは母子ともに默然と相對しつ。雨はまた一しきり瀧の樣に降り濺ぐ。

母は漸く口を開きぬ。眼には未だ怒の閃けども、語は何處やらに潤を帶びたり

「喃、武どん、わたしが斯樣云ふも、何も卿の爲め惡かごとすつぢやなかからの、わたしにや唯ツた一人の子ぢや、卿に出世をさせて、丈夫な孫抱えて見たかばかいがわたしの樂ぢやからの」

默然と考へ入りし武男は徐かに頭を上げつ。

「阿母、兎に角私も電報を來しました、此通り出發が急になツて、明日は是非とも歸艦せにやならんです、一月位すると歸つて來ます。其迄は何卒誰人にも今夜の話は默つて居て下さい。如何な事があつても、私が歸つて來る迄は、待つて居て下さい」

* * * * *

翌日武男は更に母の保證をとり、更に主治醫を訪ひて、懇に浪子の上を託し、午後の汽車にて逗子に下りつ。

汽車を下れば、日落ちて五日の月薄紫の空にかゝりぬ。野川の橋を渡りて、一路の沙はほの白き松の林に入りつ。林を穿ちて、桔槔の黑く夕空に聳ゆるを望める時、思ひがけなき爪音聞ゆ。あゝ琴を彈いて居る……と思へば心の臓を搾らるゝ心地して、武男は暫し門外に涙を拭ひぬ。今日は常よりも快よかりしとて、浪子は良人を待ちかてに絶えて久しき琴取り出でて奏でゝなりき。

嬉色の常ならぬを訝られて、武男はたゞ夜深しゝ故とのみ言ひ紛らしつ。約あれば待ちて居し晩餐の卓に、浪子は良人と對ひしが、二人共に食すゝまず。浪子は心細さを滞しき矢に紛

らして、手づから良人のコートの扣鈕ゆるめるをつけ直し、刷毛もて丁寧にはらひなどする内に、終列車の時刻迫れば、今は已むなく立上る武男の手に縋りて、
「良人、最早行らッしやるの？」
「直ぐ歸つて來る。浪さんも注意して、よくなツて居なさい」
互にしつかと手を握りつ。玄關に出づれば、姥の幾は靴を直し、僕の茂平は停車場まで送るとて手革嚢を左手に、月はあれど提燈ともして待ちたり。
「其おや姥や、奧樣を頼んだぞ――浪さん、行つて來るよ」
「早く歸つて頂戴な」
頷きて、武男は僕が照せる提燈の光を踏みつゝ門を出でて十數歩、ふりかへり見れば、浪子は白き肩掛を打被て、幾と門に佇め、手巾を打ふりつゝ、「良人、早く歸つて頂戴な」
「直ぐ歸つて來る。――浪さん、夜氣にうたれると不可ん、早く入ンなさい！」
されど、二度三度ふりかへりし時は、白き姿の朦朧として見えたりしが、頓て路は轉りて其姿も見えずなりぬ。唯三たび、
「早く歸つて頂戴な」
と云ふ聲の後を慕うて喚び來るのみ。顧みれば片破月の影冷やかに松にかゝれり。

（七）の一

「御歸り」の前觸勇ましく、先刻玄關先に二人俥を下りし山木は、早湯に入りて、早咲の花菖蒲の活けられし床を後に、ふうはりとした座蒲團に胡坐をかきて、さあ此れからが漸々此方の體になりしと云ふ風情。慾には酌人が些無意氣と思ひ貌に、併し愉快らしく、妻のお隅の顏じろりと見て、まづ三四盃傾くる所に、婢が持て來し新聞の號外洋燈の光にてらし見つ。
「う、朝鮮か……東學黨ますゝ猖獗……なに清國が出兵したと……。さあ大分面白くなツて來たぞ。此れで我邦も出兵する――戰爭になる　さあ儲かるぜ。お隅、前祝だ、卿も一つ飲め」
「良人、實際戰爭になりますやろか」
「なるとも、愉快、愉快、實に愉快。――愉快と云や、なあお隅、今日一寸千々岩に會つたがの、例の一條も大分捗が行きさうだて」
「まあ、其樣かいな。若旦那が納得しやはつたのかいな」
「何有、武男さんはまだ歸つて來ないから、相談も納得もありあしないが、お浪さんがまた血を咯いたンだ。所で御隱居も最早駄目だ、武男が歸らん内に斷行すると云つて居るさうだ。今一度千々岩に刺戟いて貰へば、大丈夫出來る。武男さんが歸りや中々斷行も六か敷からね、其で歸らん内に悉皆處置をつけて了はうと御隱居も思つとるのだて。最早其樣なれア此方のものだ。――さ、御臺所、御酌だ」
「お浪はんも可哀想やな」
「御前も餘程變ちきな女だ。お豐が可哀想だからお浪さんを退いて貰はうと云ふかと思へば、最早出來さうになると今度アお浪さんが可哀想、其樣な馬鹿な事は中止として、今度はお豐を後釜に据ゑる計略が肝腎だ」
「でも良人、留守にお浪はんを離縁して、武男はん、若旦那が承知しなはろまいがな、なあ良人――」
「さあ、武男さんが歸つたら怒るだらうが、離縁してしまッて置けば、歸つて來て如何怒つても仕樣がない。加之武男さんは親孝行だから、御隱居が泣いて見せなさりア、まあ泣寢入だな。其方は其で宜いとして、偖肝腎要のお豐姫の一條だが、兎に角武男さんの火の手が少し鎭まつ

てから、食料つきの行儀見習とでも云ふ口實で、無理に押かけるだな。何有、六ケ敷やうでも易いものさ。御隱居の機嫌さへとりア出來ることつた。お豐がいよ〳〵川島男爵夫人になりア、彼女は戀が叶ふと云ふものだし、乃公はさしより舅役で、武男さんは彼樣な坊ちやんだから、川島家の財産は先づ乃公が扱つて遣らなけりやならん。頗る妙 ― いや妙な役を受持つて、迷惑ぢやが、其はまあ仕方がないとして、偖お豐だがな」

「良人、最早御廢になはれな」

「まあ宜いさ。取ると遣るの前祝だ。――所でお豐だがの、卿今些と躾をせんと困るぜ。彼通り毎日駄々を捏ねてばかり居ちや、先方行つてからが實際思はれるぞ。觀音樣が姑だツて、彼樣ぢや愛想をつかすぜ」

「其れぢやてて、良人、躾は妾ばかいぢや出來まへんがな。何時でも良人は――」

「おつと其言譯が拙者大嫌ひでムるて、はゝゝはゝゝ。論より證據、乃公が躾をして見せる。さ、お豐を此處に呼びなさい」

(七)の二

「御嬢樣、御奥で一寸入らツしやいましつて」

と小間使の竹が襖を明けて呼ぶ聲に、今しも夕化粧を終へてまだ鏡の前を立ち去り兼ねしお豐は、悠々とふりかへり、

「あいよ。今行くよ。――ねヱ竹や、此處ン所が」

と鬢をかい撫でつゝ、「些とそゝけちや居ないこと?」

「否、些ともそゝけては居ませんよ。おほゝゝ。化粧がよく出來ましたこと! ほゝゝゝツ。惚惚致しますよ」

「否だよ、御世辭なんぞ云つてさ」云ひながらまた鏡を覗いて莞爾と笑ふ。

竹は口打掩ひし袂をとりて、固唾を飲みつゝ、

「御嬢樣、御待ち兼ねでムいますよ。」

「宜いよ、今行くよ」

漸く思ひ切りし體にて鏡の前を離れつゝ、ちよこ〳〵走りに幾間か通りて、父の居間に入り行きたり。

「おゝ、お豐か。待つて居た。此處へ來な〳〵。阿母に代つて説法でもしなさい。おつと亂暴な銚子の置き方をするぜ。茶の湯生花の稽古までした令嬢にや似合はンぞ。さうだ〳〵、左樣山形に置くものだ」

早や陶然と色づきし山木は、妻の留むるを更に幾盃か重ねつゝ、「喃お隅、お豐が斯樣化粧した所は隨分別嬪だな。色は白し――妾は好し。内ぢや其樣もないが、外に出りや一寸御世辭もよし。惜しい事には阿母に肖て少し反齒だが――」

「良人!」

「眼尻を今三分上げると女振が上がるがな――」

「良人!」

「こら、お豐何を怒れるのだ? ふくれると嬢振が下がるぞ。何も其樣不景氣な顏をせんでも可い、喃お豐。卿が嬉しがる話があるのだ。さあ話賃に一盃注げ〳〵」

漸々と注がせし猪口を一息に仰飲りつゝ、

「喃お豐、今も阿母と話したことだが、卿も知つとるが、武男さんの事だがの――」

空しき槽櫪の間に不平臥したる馬の春草の香しきを聞ける如く、お豐はふつと貌を擡げて兩耳を引立てつ。

「卿が寫眞を引抓いたりしたもんだから到頭浪子さんも祟られて――」

「良人!」お隅夫人は三たび眉を顰めつ。

「此れから本題に入るのだ。兎に角浪子さんが病氣が惡い、と云ふンで、まあ離縁になるのだ。

「否、まだ先方に談判はせん、浪子さんも知らんさうぢやが、兎に角近い内に其樣なりさうなのだ。所で其方の處置がついたら、徐々後々の賣りつけ――いや此處だて、乃公も阿母も卿をな、まあお浪さんの後に入れたいと思つて居るのだ。いや左樣直ぐ――と云ふ譯にも行くまいから、まあ卿を小間使、これも其樣吃驚せんでも宜いわ、まあ候補生の積りで、行儀見習と云ふ名義で、川島家に入り込ますのだ。――御隱居に頼んで、な宜いかい、此處だ――」

一息つきて、山木は妻と娘の顏を彼より此と見やりつ。

「此處だて、なお豐、少し早い樣だが――云つて聞かして置く事があるがの。卿も知つとる通り、彼武男さんの阿母――御隱居は、評判の癇癪持の、我儘者の、頑固の――おつと卿が御母を惡口しちや濟まんがの――兎に角此處に坐つて御出の此阿母の樣に――やさしくない人だて。併し鬼でもない、蛇でもない、矢張人間ぢや。其呼吸さへ飲込むと、鬼の嫁でも蛇の女房にでもなれるものぢや。何有、彼隱居位、乃公が女なら二日も傍へ居りや豆腐の樣にして見せる。――と自慢した所で、仕方がないが、實際彼樣な老人でも扱ひ樣ぢや何でもないて。所で、宜いかい、お豐、卿がいよ〳〵先方へ、まあ小間使兼細君候補生として入り込む時になると、第一今の樣に怠慢けて居ちやならん、朝も早く起きて――老人は眼が早く醒めるものぢや――外の事は如何でも宜いとして、御隱居の用をよく達すのだ。宜いかい、第二にはだ、今の樣に何と云へば直ぐ怒れる樣ぢや不可ない、何でも彼でも負けるのだ、宜いかい、叱られても負ける、無理を云はれても負ける、斯方が宜けりや猶負ける、な。さうすると先方で折れて來る、な、此處がよく云ふ負けて勝つのだ、決して腹を立つちやいかん、宜しか。それから第三にはだ、此は少し早過ぎるが、序だから云つとくがの、無事に婚禮が濟んだツて、宜いかい、決して武男さんと仲が宜過ぎちや不可ない。何さ、内々は如何でも宜いが、表向の所をよく注意しなけりや不可んぞ。姑御には恭々しくさ、成丈近くして、婿殿にや姑の前で毒にならん位の小惡口もつく位でなけりやならぬ。可笑しいもンで、吾子の嫁だから夫婦仲が好いと嬉しがりさうなもんぢやが、實際あまり好いと姑の方では面白く思はぬ。まあ一種の嫉妬――吾盡だな。でなくも、あまり夫婦仲が好いと、自然姑の方が疎略になる――とまあ、姑の方では思ふだな。浪子さんも一つは其處でやり損つたかも知れぬ、仲が好過ぎての――おツと、其樣角が生えさうな顏しちや不可ない、なあお豐、今云つた負けるのは其處ぢやぞ。所で、宜いかい、成丈注意して、此女は眞に吾の娘だ、子息の妻ぢやない、と云ふ樣に姑の感じさせなけりやならん。姑媳の喧嘩は大抵此の若夫婦の仲が好過ぎて、姑に孤立の感を起さすから起るのが多いて。宜いかい、卿は御隱居の娘だ、と其樣思つて居なけりやならん。何有御隱居が追付目出度くなつた後ぢや、武男さんの首ツ玉にかじりついて、ぶら下つてあるいても構はンさ。併し姑の前でゝ、決して武男さんに横目でも遣つちやならんぞ。まだあるが、其はいざ乘込の時に云つて聞かす。此三ケ條は中々面倒ぢやが、併し卿も戀しい武男さんの奧方にならうと云ふンぢやないか、辛抱が大事ぢやぞ。明日と云はずと今夜から其稽古を始めるのだ」

言葉の中に、襖開きて、小間使の竹、「御返事が要るさうでムいます」と一封の女筆の手紙を差し出しぬ。

封を披きてすうと眼を通したる山木は、手紙を妻と娘の眼さきに閃らかしつゝ、

「如何だ、川島の御隱居から直ぐ來て吳れは」

（七）の三

武男が艦隊演習に赴ける二週の後、川島家より手紙して山木を招ける數日前、逗子に療養せる浪子はまた喀血して、急に醫師を招きつ。幸にして喀血は一回にしてやみ、醫師は當分事無かる可きを保證せしが、此報は少なからぬ刺激を武男が母に與へぬ。間兩三日を置きて、門を出づること稀なる川島未亡人の肥大なる體は、飯田町なる加藤家の門を入りたり。

離婚問題の母子の間に爭はれつる彼夜、武男が辭色の思ふにまして厲しかりしを見たる母は、流石に其意に任せて彼が歸り來る迄は默止す可き約をばなしつれど、設令其迄待つにぱとて武男が心は容易に移す可くもあらずして、却て時經つ程彼の愛着の羈はいよ〳〵絶ち難かる可く、且思ひも寄らぬ障礙の出で來る可きをも思ひしなり。然れば其子の未だ歸らざるに乘じて、早く處置をつけ置くの寧ろ得策なるを思ひしが、然りとて流石に彼言質もあり此顧慮もまた無きにあらずして、其心はありながら、いまだ時々來ては嘲る千々岩を滿足さすほどの果斷なる處置をば施さざるなりき。浪子が再度喀血の報を聞くに及びて、母は決然として曾て媒妁をなしゝ加藤家を訪ひたるなり。

番町と飯田町と云はゞ眼と鼻の間に棲みながら、何時なりしか媒妁の禮に來しより殆んど踵を見せざりし川島未亡人が突然來訪せし事の尋常にあらざる可きを思ひつゝ、殷懃に客間に請ぜし加藤夫人も其話の要件を聞くよりはたと胸をつきぬ。其曾て片岡川島兩家を結びたる手もて、今や其繋ける緣を絶ち異れよとは！

如何なる縁の如何なる日あればとて然る事は言はるゝかと、加藤夫人は今更の樣に客の容子を打ち瞠めぬ。見れば何時にかはらぬ肥滿の體格、太き兩手を膝の上に組みて、膚撓まず、眼瞳動かず、口を漏るゝ薩摩の淀みもやらぬは、戯にあらず、狂氣せしにもあらで、まさしく分別の上と思へば、驚愕はまた膝を衝く憤にかはりつ。餘り勝手な言草と、罵倒せむずる言の巳に咽まで出でたるを、實の親とも思ふ浪子が一生の浮沈の境と、纔かに飲み込みて、先づ問ひつ、また説きつ、宥めもし、請もしつれど、却て其は入らぬ饒言、此方の話を浪の實家に傳へて貰へば濟むと云ふ風の明らかに見ゆれば、話聞く聞く病める姪の顔、亡妹――浪子の實母――の臨終、浪子が父中將の傷心、など胸の中にあらはれ來り亂れ去りて、情なく腹立しき涙の吾知らず催し來れる夫人は屹と容をあらため、當家に於ては御兩家の結緣の爲めにこそ御加勢もいたしつれ、然る不義非情の御加勢は決して出來ぬこと、良人に相談する迄もなく其儀は堅く御斷、ときつぱり刎ねつけつ。

悠然として加藤の門を出でたる武男が母は、即夜手紙して山木を招きつ。(篤實なる田崎にては埒明かずと思へるなり)折も折とて主人の留守に、且は惑ひ、且は怒り、且は悲める加藤子爵夫人と千鶴子と心を三方に碎きつゝ、母は然は云へど如何にも武男の素意にあるまじと思ふより、其乘艦の所在を糺して至急の報を發せる間に、焦燥ちに焦燥ちし武男が母は早直接談判と心を決して、其使節を命ぜられたる山木の車は巳に片岡家の門にかゝりしなり。

（八）の一

山木が車赤坂氷川町なる片岡中將の門を入れる時、恰も英姿颯爽たる一將軍の栗毛の馬に跨りつゝ出で來れるが、車の駈け込みし響に不圖驚きて、馬は竿立になるを、馬上の將

軍は馬丁を摚はす迄もなく、韁を絞りて容易に乘り鎭めつゝ、一回圈を畫きて、嫚々と歩ませ去りぬ。

見事の武者振を見送りて、聲づくろひして嚴しき中將の玄關にかゝれる山木は、幾多の權門を潜り馴れたる身の、常にはあるまじく膽落つるを覺えつ。昨夜川島家に呼ばれて、其使命を託されし時も、頭を掻きつるが、今現に此場に臨みては彼は實に大なりと誇れる膽の猶小にして、其面皮の未だ十分に厚からざるを憾みしなり。

名刺一たび入り、書生二たび出でて、山木は應接間に導かれつ、卓子の上には清韓の地圖一葉廣げられたるが、まだ淸めもやらぬ火皿のマッチ巻煙の殻と共に、先座の話を畧想はしむ。實にも東學黨の亂、淸國出兵の報、我出兵の噂、相ついで海内の注意一に朝鮮問題に集れる今日此頃は、主人中將も豫備にこそ居れ自づから事多くして、また彼英文讀本を手にするの暇ある可くも思はれず。

山木が椅子に倚りて、ぎよろ〳〵四邊を眺め居る時、遠雷の鳴るが如き足音次第に近づきて、頓て小山の如き人は緩やかに入りて主位につきぬ。山木は中將と見るより周章てて起てる拍子に、吾かけて居し椅子をば後ざまに撞と蹴倒しつ。「呀、此は疎匆を」と叫びつゝ、狼狽て引き起し、然る後二つ三つ四つ續けざまに主人に向ひて鄭重に辭儀をなしぬ。今の疎忽の謝も交れるなるべし。

「さあ、何卒御かけ下さい。貴君が山木君――御名は承知しちよつたですが」

「はツ。此は初まして……手前は山木兵造と申す不調法者で（句毎に辭儀しつ、辭儀する毎に椅子は嬉々と軋りぬ、仰の如くと笑へる樣に）……何卒今後とも御贔屓を……」

避け得られぬ閑話の兩三句、朝鮮の噂の三兩句――然る後中將は言をあらためて、山木に來意を問ひつ。

山木は口を開かむとして先づ固唾をのみ、固唾を吞みてまた固唾をのみ、三たび口を開かむとしてまた固唾をのみぬ。彼は常に誇る其流滑自在なる舌の今日に限りてひたと澁るを怪しめるなり。

（八）の二

山木は纔かに口を開き、

「實は今日は川島家の御名代で罷出でましたので――」

思ひがけずと云はむが如く、主人の中將は其體格に似合はぬ細き眼を山木が面に注ぎつ。

「はあ？」

「實は川島の御隱居が御出になる所でムいますが――まあ私が罷出でました次第で――」

「成程」

山木は頻りに滲み出づる額の汗押拭ひて、「實は加藤樣から御話を願ひたいと存じましたンでムいますが、――少し都合もムいまして――私が罷出でました次第で」

「成程。で。御要は？」

「其要と申しますのは。――申兼ねますが、其の實は川島家の奧樣――浪子樣――」

主人中將の眼は瞬もせず暫し話者の面を打まもりぬ。

「はあ？」

「其の、浪子樣でムいますが、如何も斯樣な事は實以て申上げ難い御話でムいますが、御承知通り彼御病氣につきましては、手前共――川島でも、餘程心配を致しまして、近頃では少しは御快い方ではムいますが――まあ御目出度うムいますが――」

「成程」

「手前共から、斯樣な事は誠に申上げられぬ

のでムいますが、甚だ勝手がましい申條でムいますが、實は御病氣柄ではムいますし——御承知通り川島の方でも家族と申しましても別にムいませんし、男子と申しては先づ當主の武男——樣丈でムいますンで、實は御隱居も餘程心配も致して居りまして、如何も實以て申難い——如何にも身勝手な話でムいますが、御病氣が御病氣で、其の、萬一傳染——まあ其樣な事も滅多にムいますまいが——併し何方かと申しますと矢張其の、其恐れも無いではムいませンので、其の、萬一武男——川島の主人に異變でもムいますと、まあ川島家も斷絶と申す譯で、其あ斷絶致しても宜しい樣なものでムいますが、何分にも其の、實以て如何も其の、誠に濟みませんが其の、其處の所を其の、御病氣——」

言ひ淀み言ひそゝくれて一句一句に額より汗を流せる山木が顏色覗りて默然と聞き居たる主人中將は、此時右手をあげ、

「宜しい。分いました。畢竟浪が病氣が險呑ぢやから、引取つて異れと仰有るのぢやな。宜しい。分いました」

領きて、手元近く燃え過れる葉卷を卓子の上なる灰皿にさし置きつゝ、腕を組みぬ。

山木は踏み込める泥濘より手をとりて引き出されし樣に、ほつと息つきて、額上の汗を拭ひつ。

「左樣でムいます。實以て申上げ難い事でムいますが、其の、何卒其處の所を惡しからず——」

「で、武男君は最早歸られたですな」

「否、未だ歸りませんでムいますが、勿論此は同人承知の上の事でムいまして、何卒惡しからず其の——」

「宜しい」

中將は領きつゝ、腕を組みて、暫し眼を閉ぢぬ。思の外、容易く運びけるよ、と竊かに笑坪に入りて眼をあげたる山木は、眼を閉ぢ口を結びて宛ながら睡れる如き中將の相貌を仰ぎて、流石に一種の畏を覺えつ。

「山木君」

中將は眼を瞠きて、山木の顏を熟々と打眺めたり。

「はッ」

「山木君、貴君は子を持つてお出かな」

其問の見當を定めかねたる山木は頻りに頭を下げつゝ、「はツ。愚息が一人に——娘が一人でムいまして、何分御引立を——」

「山木君、子と云ふやつは可愛者ぢや——

「はッ？」

「いや、宜しい。承知しました。川島の御隱居に其樣云つて下さい、浪は今日引取るから、御安心なさい。——御使者御苦勞ぢやつた」

使命を全うせしを慶ぶか、流石に氣の毒と詫ぶるにか、五つ六つ七八つ續けざまに小腰を屈めて、とぎまぎ立ち上る山木を、主人中將は玄關迄送り出して、歸り入る書齋の戸をばはたと閉したり。

(九)の一

逗子の別莊には、武男が出發後は、病める身の心細さ遣る方なく思ふほどいよ／＼長き日一日の流石に暮らせば暮らされて、早や一月あまり經ちたれば、麥刈濟みて山百合咲く頃となりぬ。過ぐる日の喀血に、一たびは氣落ちしが、幸にして醫師の言へるが如く其後に著しき衰弱もなく、先日函館よりの良人の書信にも歸來の近かるべきを知らせ來つれば、設令良人を驚かす程には到らぬとも、喀血の前程にはなり居らではと、自から氣を勵まし、浪子は藥用に運動に細かに醫師の戒を守りて攝生しつ

つ、指を折りて良人の歸期を待ちぬ。然るにても此四五日、東京だよりのはたと絶え、番町の宅よりも、實家よりも、飯田町の伯母よりすらも、はがき一枚來ぬことの何となく氣にかゝり、今しも日永の手すさびに山百合を生くとて下葉を剪み居れる浪子は、水さし持ちて入り來りし姥の幾に、

「ねエ、婆や、此も東京のたよりが無いのね。如何したのだらう？」

「左様でムいますねエ、御かはりもないンでムいませう。もう其内には參りませうよ。斯樣申して居ります内に何人ぞ入來つしやるかも分りませんよ。本當に何て綺麗な花でムいませう、ねエ、奥樣、これが萎れない内に旦那樣が御歸り遊ばすと宜うムいますのに、ねエ奥樣」

浪子は手に持ちし山百合の花瞻視りつゝ「綺麗、でも、山に置いといた方が宜いのね、剪るのは可哀想だわ！」

二人が問答の間に、一輛の車は別莊の門に近づきぬ。車は加藤子爵夫人を載せたり。川島未亡人の要求を刎ねつけし其翌日、子爵夫人は氣にかゝるまゝに、要を託して車を片岡家に走らせ、こゝに初めて川島家の使者が早くも直接談判に來りて、已に中將の承諾を得て去りたる由を聞きつ。武男を待つの今も今は空しくなりて、且つ驚き且つ嘆きしが、せめては姪の迎へ(手放し置きて、其と聞かさば不慮の事の起りもやせむ、兎に角膝下に呼び取つて、と中將は慮れるなり)にと、直ぐ其足にて逗子には來りしなり。

「まあ、よく……恰今噂をしてましたの」

「本當によくまあ……如何でムいます、奥樣、姥やが言は當りましてムいませう」

「浪さん、鹽梅は如何です？ 最早彼後何も變つた事もないのかい？」

と伯母の眼は一寸浪子の面を掠めて、側へ豁れぬ。

「は、快い方ですの。——それよりも伯母樣は如何なすッたの、大變に顏色が惡いわ」

「わたしかい、何ね、少し頭痛がするものだから、——時候の故だらうよ。——武男さんから便がありましたか、浪さん？」

「一昨日ね、爾舘から、最早近々に歸りますッて——否、何日と云ふ事は定らないのですよ。御土産があるなンぞ書いてありましたわ」

「左樣？ 晩い——ねエ——最早——最早何時？ 二時だ、ね！」

「伯母樣、何を其樣に躁々して御出なさるの、御寬りなさいな。お千鶴さんは？」

「あ、宜くッて、ね。云ひつゝ幾が持て來し茶を受取りしまゝ、飲みもやらず沈吟じつゝ

「何卒御寬りと遊ばせ。——奥樣。一寸御肴を見て參りますから」

「あ、左樣してお呉れな」

伯母は打驚きたる樣に浪子の顏を一寸見て、また眼を豁しつゝ、

「お止しな。今日は緩くりされないよ。浪さん——迎に來たよ」

「エ、迎？」

「あ、阿爺が、病氣の事で醫師と少し相談もあるから一寸來る樣にッてね、——番町の方でも——承知だから」

「相談？ 何でせう」

「——病氣の件ですよ、其れからまた——阿爺も久しく會はンからッてね」

「其樣ですの？」

浪子は怪訝な顏。幾も不審に思へる樣子。

「でも今夜は御泊り遊ばすンでムいませう？」

「否ね、彼方でも——醫師も待つてたし、暮れない間が宜いから、直ぐ今度の汽車で、ね」

「へエー？」

姥も驚きたるなり。浪子も腑に落ちぬ事はあ

れど、云ふは伯母なり、呼ぶは父なり、阿姑は承知の上とも云へば、兎も角も云はるゝまゝに用意をば整へつ。

「伯母様何を考へ込んでいらッしやるの？——看護婦は行かなくも宜いでせうね、直ぐ帰るのですから」

伯母は起ちて浪子の帯を直し襟を揃へつゝ、

「連れて御出なさいね、不自由ですよ」

* * * *

四時頃には用意成りて、三挺の車門に待ちぬ。浪子は風通御召の単衣に、御納戸色繻珍の丸帯して、髪は揚巻に山梔の花一輪、革色の洋傘右手につき、溢れ出づる咳嗽を白綾の手巾におさへながら、

「姥や、一寸行つて来るよ。あゝあ、久し振に帰京るのね。——それから、彼の——御単衣ね、今些しだけども——あ、宜いよ、帰つてからにしませう」

忍びかねてほろ／＼落つる涙を伯母は洋傘に押隠しつ。

（九）の二

運命の坑黙々として人を待つ。人は知らず識らず其運命に歩む。即ち知らずと云ふとも、近づくに従うて一種冷やかなる気にひしと襲はるゝは、誰しも然る事なり。

伯母の迎へ、父に会ふの喜に、深くも仔細を問はずして帰京の途に上りし浪子は、車に上るより頻りに胸打騒ぎつ。思へば思ふ程胸に落ちぬこと多く、唯頭痛とのみ云ひ紛らしゝ伯母が容子のたゞならぬも深く蔽せる事のありげに思はれて、問はむも汽車の内人の手前、其もなり難く、新橋に着く頃は唯此暗き疑心のみ胸に立ち迷ひて、久し振なる帰京の喜も殆んど忘れぬ。

皆人の下りし後より、浪子は看護婦に扶けられ伯母に従ひて徐ろにプラットフォームを歩みつゝ、改札口を過ぎける時、彼方に立つて誰しか居れる陸軍士官の一人、ふつと此方を顧みて恰も浪子と眼を見合はしつ。千々岩！　彼は浪子の頭より爪先まで一瞥に瞥りて、故らに目礼しつゝ——笑ひぬ。其一瞥、其笑の怪しく胸にひゞきて、頭より水浴びせられし心地せし浪子は、迎への馬車に打乗りし後までも、病の故ならで更に悪寒を覚えしなり。

伯母は言はず、浪子も黙しぬ、馬車の窓に輝きし夕日は落ちて、氷川町の邸に着けば、黄昏ほのかに栗の花の香を浮べつ。門の内外には車釣台など見えて、玄関にランプの火光さし、人の声す。物など運び入れしさまなり。浪子は何事のあるぞと思ひつゝ、伯母と看護婦に扶けられて馬車を下れば、玄関には婢にランプとらして片岡子爵夫人彳みたり。

「おゝ、此れは早く。——御苦労さまでムいました」と夫人の眼は浪子の面より加藤子爵夫人に走り、

「阿母、御遅りも……阿爺は？」

「は、書斎に」

折から「姉さまが来たよ、姉さまが」と子供の声嘩やかに二人の幼弟妹走り出で来りて、其母の「静かになさい」と容むるも顧みず、左右より浪子に縋りつ。駒子もつゞいて出で来りぬ。

「おゝ道ちやん、毅一さん。如何だえ？——あゝ駒ちやん」

道子は縋れる姉の袂を引動かしつゝ「あたし嬉しいわ、姉さまは最早今後始終此家に居るのね、御道具も皆昨来てよ」

はッと答もなし得ず、子爵夫人も、伯母も、婢も、駒子も一斉に浪子の面を瞻りつ。

「エ？」

駭きし浪子の眼は継母の顔より伯母の顔を掠めて、忽ち玄関隣の室も狭しと積まれたるさまざまの道具に注ぎぬ。まさしく良人宅に置き

たる箪笥！　長持！　鏡臺！
浪子は戰々と震ひつ。倒れむとして伯母の手を確と捉へぬ。
皆泣きつ。
重やかなる足音して、父中將の姿見え來りぬ。
「お、阿爺‼」
「おゝ、浪か。待つて──居た。よく、歸つて來れた」
中將は其大なる胸に、戰々と震ふ浪子をばかき抱きつ。
半時の後、家の内森となりぬ。中將の書齋には、父子唯二人、再び歸らじと此家を出でし日別の訓戒を聞きし時其まゝに、浪子は跪きて父の膝に咽び、中將は咳き入る女の背を徐ろに撫で下ろしつ。

（十）

「號外！　號外！　朝鮮事件の號外！」と鈴の音の魂消しう呼びあるく新聞賣子のあとより、一挺の車がら〳〵と番町なる川島家の門に入りたり。武男は今しも歸り來れるなり。
武男が歸らば立腹もす可けれど、勝は畢竟先の太刀、思ひ切つて武男の母に山木が吉報を齎らし歸りし其日、善は急げと媳が箪笥諸道具一切を片岡家に送り戻し、些後生ではあつたれど、到底其まゝには置かれぬ腫物、切つてしまつて安心と此二三日近頃になき好機嫌の其に引かへて、若夫婦方なる僕婢は氣の毒とも笑止とも云はむ方なく、今にもあれ旦那が御歸りなさらば、如何に孝行の方とて、中々一通りでは濟むまじとはら〳〵思つて居たりし其武男は今歸り來れるなり。加藤子爵夫人が急を報ぜし其書は途中に往き違ひて、素より母は其と云ひ送らねば、知る由もなき武男は横須賀に着きて暇を得るや否急ぎ歸り來れるなり。
今奧より出で來りし仲働は、茶を入れ居りし小間使を手招き、
「ねエ松ちやん。旦那樣は些も御存じない樣ぢやないか。奧樣に御土産なんぞ持つていらしツたよ」
「本當にしどいね、何處の世界に、旦那の留守に奧樣を離縁しちまふ母御があるものかね。旦那樣の身になつちやア、腹も立つ筈だわ。鬼婆め」
「彼位嫌な婆つちやありやしない。吝々の、分からずやの、人を叱り飛ばすが御職掌だからね、何も御存じなしの癖にさ。其筈だよ。ねエ、昔は薩摩でお芋を掘つてたンだもの、わたしや最早此樣な家に居るのが、染々嫌になツちやつた」
「でも旦那樣も旦那樣ぢやないか、御自身の奧樣が離縁されてしまふのも些も知らんてえのは、餘り七月の御槍ぢやないか」
「だツて、其ア無理やないわ、遠方にいらつしたンだもの。誰だつて下女ぢやあるまいし、肝腎な子息に相談もしずに、さつさと媳を追出して仕舞はうた思はないわね。加之旦那樣も御年が若いからねエ、本當に旦那樣も御可哀想──奧樣は猶御可哀想だわ。今頃は如何してらツしやるだらうねエ。あゝいやだ──ほウら、婆が怒鳴りだしたよ。松ちやんせツせとしないと、また八當りで御出るよ」
奧の一間には母子の問答次第に熱しつ。
「だツて、彼時彼程申上げて置いたです。其に手紙一本下さらず、無斷で──實にひどいです。實際ひどいです。今日も一寸逗子に寄つて來ると、浪は居らんでせう、幾に尋ねると何か要があつて東京に歸つたと云ふです。變と思つたですが、まさか母上が其樣な事を──實にひどい──」
「其はわたしが惡かつた。惡かつたから此の通り親が詫をして居るぢやなツかい。わたしぢや

ッて何も浪が悪がと云ふぢやなし。卿が可愛いばッかいで——」

「母上は身體ばッかり大事にして、名譽も體面も情も些も思つて下さらんのですな。餘りです」

「武男、卿はの、男かい、女ぢやあるまいの。親に詭言云はせても、矢張浪が戀しかかい。戀しかかい。戀しかか」

「だッて、餘りです。實際餘りです」

「餘いぢやッて、最早後の祭ぢやなッか。彼方も承知して、綺麗に引取つたあとの事ぢや、此上如何すッかい。女々しか事をしなはッと親の耻ばッかいか、卿の男が立つまいが」

默然と聞く武男は斷れよとばかり下唇を嚙みつ。忽ち勃然と立ち上つて、病妻に齎らし歸りし貯林檎の籠を微塵に踏み碎き、

「阿母、あなたは、浪を殺し、加之此武男を御殺しなすッた、最早御目にかゝりません」

* * * *

武男は直ちに横須賀なる軍艦に引返しぬ。

韓山の風雲はいよ／＼急に、七月の中旬廟堂の議は愈清國と開戰に一決して、同月十八日には樺山中將新に海軍軍令部長に補せられ、武男が乘組める聯合艦隊旗艦松島號は他の諸艦を率ゐて佐世保に集中す可き命を被りつ。捨ばちの身は砲丸の的にもなれよと、武男は誇地に艦と共に西に向ひぬ。

* * * *

片岡陸軍中將は浪子の歸りし其翌日より、自から指圖して、邸中の日あたりよく靜かなる邊を擇びて、特に浪子の爲めに十疊一間六疊二間四疊一間の離家を建て、逗子より姥の幾を呼び寄せて、浪子と共に此處に棲ましつ。九月にはいよ／＼命ありて現役に復し、一夕夫人繁子を書齋に呼びて懇々浪子の事を託したる後、同十三日大纛に扈從して廣島大本營に赴き、翌月更に大山大將山地中將と前後して遼東に向ひぬ。

我曹が父を逐うて其運命を辿り來れる敵も、味方も、彼銷魂も、此怨恨も、暫し征清戰爭の大渦に卷込まれつ。

下篇

(一)の一

明治二十七年九月十六日午後五時、我聯合艦隊は戰鬪準備を整へて大同江口を發し、西北に向ひて進みぬ。恰も運送船を護して鴨綠江口附近に見えしと云ふ敵の艦隊を尋ね出して、雌雄を一戰に決せむとするなり。

吉野を旗艦として、高千穗、浪速、秋津洲の第一遊擊隊、先鋒として前にあり。松島を旗艦として千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑の本隊之に續ぎ、砲艦赤城及軍見物と稱する軍令部長を載せし西京丸また其後に隨ひつ。十二隻の艨艟一縱列をなして、午後五時大同江口を離れ、伸びつ縮みつ龍の如く黄海の潮を捲いて進みぬ。頓て日は海に入りて、陰曆八月十七日の月東にさし上り、船は金波銀波をさゞめかして月色の中を駛る。

旗艦松島の士官次室にては、晩餐とく濟みて、副直其他要務を帶びたるは久しき前に出で去りたれど、猶五六人の殘れるありて、談まさに興に入れるなるべし。舷窓をば火光を漏らさじと閉したれば、温氣内に籠りて、左らぬだに血氣盛りの顏はいよ／＼紅に照れり。卓の上には珈琲碗四五個、菓子皿は概ね平げられて、唯カステーラの一片が何れの少將軍に屠られむかと兢々として心細氣に横はるのみ

「陸軍は最早平壤を陷したかも知れないね」と

短小精悍とも云ひつ可き一少尉は頬杖つきたるまゝ一座を見廻はしたり。然るに此方は如何だ。實に不公平も亦甚しと云ふ可しぢやないか」

でつぷりと肥えし少主計は一隅より莞爾と笑ひぬ。「何せ幕が明くと直ぐ濟んでしまふ演劇ぢやないか。幕合の長いのもまた一興だよ」

「なんて悠長な事を言ふから困るよ。北洋艦隊相手の盲捉戲も最早吾輩は厭々だ。今度も懸違ひまして御眼にかゝらんけりや、吾輩は、だ、長驅渤海灣に乗り込んで、太沽の砲臺に砲丸の一も御見舞申さんと、堪忍袋が堪らん」

「其れこそ袋の中に入るも同然、歸路を絶たれたら如何です？」眞面目に横槍を入るゝは候補生の某なり。

「何、歸路を絶つ？ 望む所だ。併し悲い哉君の北洋艦隊は其程敏捷にあらずだ。あへてけちをつける譯ぢやないが、今度も見參は此覺束ないね。支那人の氣の長いには實に閉口する」

折から靴音の近づきて、丈高き一少尉入口に立ちたり。

短小少尉はふり仰ぎ、「おゝ、航海士、如何だい、何も見えんか」

「一月ばかりだ。點檢が濟んだら、須らく寢て鋭氣を養ふ可しだ」云ひつゝ菓子皿に殘れるカステーラの一片を頬張り、「むゝ、少し……甲板に出て居ると……腹が減るには驚く。――從卒、菓子を持つて來い」

「君も隨分食ふね」と赤き襯衣を着たる一少尉は微笑みつ。

「借問す君は如何だ。菓子を食つて老人組を罵倒するは、蓋し我輩士官次室の英雄の特權ぢやないか。――如何だい、諸君、兵は皆明日を待詫びて、眼が冴えて困ると云つてるぞ。此で失敗があつたら實に兵の罪にあらず――の罪だ」

「吾輩は勇氣については毫も疑はん。望む所は沈勇、沈勇だ。無手法は困る」と云ふは此仲間にての年長なる甲板士官。

「無手法と云へば、○番分隊士は實に驚くよ」と他の一人は言を插みぬ。「勉勵も非常だが、第一如何に軍人は生命を愛まんからツて、命の安賣は此處ですと看板もかけ兼ねん勢は餘りだと思ふね」

「あゝ、川島か。何時だツたか、さう〳〵、威海衞砲擊の時だツて彼樣な險呑な事を遣つたよ。川島を司令長官にしたら、其れこそ三番分隊士ぢやないが、艦隊を渤海灣に連れ込んで、太沽所ぢやない、白河を溯つて李爺を生擒るなんぞ言ひ出すかも知れん」

「加之、容子が以前とは悉皆違つたね、非常に怒るよ。何時だつたか僕が川島男爵夫人の事についてさ、少し調戲ひかけたら、眞黑に怒つて、あぶなく鐵拳を頂戴する所さ。僕は鎭遠の三十珊より實際○番分隊士の一拳を恐るゝね。はゝゝ、何か仔細があると思ふが、赤襯衣君、君は川島と親しくするから恐らく秘密を知つとるだらうね」

と航海士はガリバルヂーと云はれし赤襯衣少尉の顏を見たり。

折から從卒の堆く盛れる菓子皿を持ち來りて、士官次室の話は暫し腰斬となりぬ。

（一）の二

夜十時點檢終り、差當る職務なきは臥し、餘はそれ〴〵方面の務に就き、高聲火光を禁じたれば、上甲板も下甲板も寂として宛ながら人無き樣になりぬ。舵手に令する航海長の聲の外には、唯煙突の煙の沸々として白く月に漲り、螺旋の波をかき、大なる心臟の拍つが如く小止なき機關の響の艦内に滿てるのみ。

月影白き前艦橋に、二個の人影あり。其一は

艦橋の左端に凝立して動かず。一は靴音静かに、檣より黒き影を曳きつゝ、五歩にして止まり、十歩にして返る。

此は川島武男なり。此の艦の○番分隊士として、當直の航海長と共に、副直の四時間を艦橋に立てるなり。

彼は今艦橋の右端に達して、雙眼鏡をあげつ、艦の四方を望みしが、見る所なきものの如く、右手を下ろして、左手に欄干を握りて立ちぬ。前部砲臺の方より士官二人、低聲に相談りつゝ艦橋の下を過ぎしが、また陰の暗きに消えぬ。甲板の上寂として、風冷かに、月はいよ／＼冴えつ。

艦首に立てる番兵の影を見越して、海を望めば、唯左舷に淡き島山と、見えみ見えずみ月光の中を行く先艦秋津洲をのみ隈にして、一艦の外月に白める黄海の水あるのみ。また一しきり烟に和して勢よく立上る火花の行方を見送れば、大檣の上高く星を散らせる秋の夜の空は湛へて、月に淡き銀河一道、蒼茫として白く海より海に流れ入る。

* * * * *

月は三たびかはりぬ。武男が席を蹴つて母に辭したりしより、月は三たび移りぬ。

此三月の間に、彼が身生は如何に多様の境界を經來りしぞ。韓山の風雲に胸を躍らし、佐世保の灣頭には、「此度此節國の爲め、遠く離れて出で行く」の離歌に腸を斷ち、宣戰の大詔に筆を抛り、威海衞の砲撃に初めて火の洗禮を授けられ、心を駭かし眼を驚かす可き事は續々、迫り來りて、殆ど彼をして考ふるの暇なからしめたり。多謝、此が爲めに武男は其心を呑み盡さむとする或ものをば思はずして、纔かに吾を持したるなりき。此國家の大事に際しては、渺たる滄海の一粟、自家川島武男が一身の死活浮沈、奚ぞ問ふに足らむや。彼は斯く自から叱し、彼痛を掩うて此職分の道に従ひ、絶望の勇をあげて征戰の事に從へるなり。死を彼は眞に塵よりも輕く思へり。

然れども事もなき艦橋の上の夜、黄海の夏著くして吊床の夢結び難き夜は、ともすれば痛恨潮の如く漲り來りて、丈夫の胸も裂けむとせしこと幾回ぞ。時はうつりぬ。今は彼當時、何を憤り、何を悲み、何を恨むとも、語ち難き感情の、腸に滞りし時は過ぎて、一片の痛恨深く蟄して、人知らず吾心を蝕ふのみ。母は彼後二たび書を寄せ物を寄せて恙なく歸り來るの日を待つと云ひ送りぬ、武男も流石に老いたる母の膝下淋しかる可きを思ひては、彼時の過言を謝して、其健康を祈る由書き送りぬ。然れど解きても解け難き一塊の恨は深く／＼胸底に蟠りて、彼が夜々吊床の上に、北洋艦隊の殲滅と吾討死の夢に伴ふものは、雪白の肩掛を纏へる病める或人の面影なりき。

消息絶えて、月は三たび移りぬ。彼女猶生きてありや、なしや。生きてあらむ。吾が忘るゝ日なきが如く、彼女も思はざるの日はなからむ。共に生き共に死なむと誓ひしならずや。

武男は斯く思ひぬ。更に最後に相見し時を思ひぬ。五日の月松にかゝりて、朧々としたる逗子の夕、吾を送りて門に立出で、「早く歸つて頂戴」と呼びし人は何處ぞ。思ひ入りて眺むれば、白き肩掛を纏へる姿の、今しも月光の中より歩み出で來らむ心地すなり。

明日にもあれ、首尾よく敵の艦隊に會して、此身砲彈の的にもならば、渾て世は一場の夢と過ぎなむ、と武男は思ひぬ。更に其母を思ひぬ。亡父を思ひぬ。幾年前江田島にありける時を思ひぬ。而して心は再び病める人の上に返りつ。

* * * * *

「川島君」

肩をたゝかれて、打驚きたる武男は急に月に背きつ。驚かせしは航海長なり。

「實に好い月ぢやないか。戰爭に行くとは思はれんね」

打點頭きて、武男は竊かに涙をふり落しつゝ雙眼鏡を舉げたり。月白うして黄海、物の眼鏡を遮るなし。

（一）の三

月落ち、夜は紫に曙けて、九月十七日となりぬ。午前六時を過ぐる頃、艦隊は已に海洋島の近くに進みて、先づ砲艦赤城を島の彖登灣に遣はして敵の有無を探らしめしが、灣內空しと歸り報じつ。艦隊更に進航を續けて、大、小鹿島を斜に見つゝ大孤山沖にかゝりぬ。

午前十一時武男は要ありて行きし士官公室を出でてまさに艙口にかゝらむとする時、上甲板に聲ありて、

「見えたッ！」

同時に警音の忙しく走せ違ふを聞きつ。心臟の鼓動と共に、艙梯に踏みかけたる足ははたと止まりぬ。恰も梯下を通りかゝりし一人の水兵も、ふつと立止まりて武男と顏見合はしたり。

「川島分隊士、敵艦が見えましたか」

「應、其樣らしい」

云ひ棄てて武男は亂れ掛つ胸を徒らにおし靜めつゝ足早に甲板に上れば、人影走せ違ひ、呼笛鳴り、信號手は忙はしく信號旗を引上げ居り、艦首には水兵多く佇み、艦橋の上には司令長官、艦長、副長、參謀、諸士官、何れも口を結び眼を据ゑて、遙かに艦外の海を望み居るなり。其視線を趁うて望めば、北の方黄海の水、天と相合ふ際に當りて、黑き絲筋の如くほのかに立上るもの、一、二、三、四、五、六、七、八、九條また十條。

是れまさしく敵の艦隊なり。

艦橋の上に立つ一將校袂時計を出し見て、

「一時間半は大丈夫だ、準備が出來たら、先づ腹でも拵へて置くですな」

中央に立ちたる一人は頷き、「御待遠樣、諸君、しつかい頼みますぞ」と云ひ終りて髭を撚りつ。

頓て戰鬪旗ゆら〳〵と大檣の頂高く引揚げられ、數聲の喇叭は、艦橋より艦內隈なく鳴り渡りぬ。配置に就かむと、艦內に行きかふ人の影織るが如く、檣樓に上る者、機關室に下る者、水雷室に行く者、治療室に入る者、右舷に行き、左舷に行き、艦尾に行き、艦橋に上り、艦橋に動ける局部の作用忽ち成るを告げて、戰鬪の準備は時を移さず整ひぬ。恰も午時に近くして、戰はむとして先づ午餐の令は出でたり。

分隊長を助け、部下の砲員を指揮して手早く右舷速射砲の裝塡を終りたる武男は、やゝ後れて、士官次室に入れば、同僚皆已に集りて箸下り皿鳴りぬ。短小少尉は眞面目になり、甲板士官は頻りに額の汗を拭ひつゝ俯きて食ひ、年少の候補生は折々他の顏を覗きつゝ、劣らじと皿をかへぬ。忽ち箸をからりと投げて立ちたるは赤襯衣少尉なり。

「諸君、敵を前に控へて悠々と午餐を喫ふ諸君の勇氣は——立花宗茂に劣らずと云ふ可しだ。御互に皆揃つて今日の夕飯を食ふや否は疑問だ。諸君、別に握手でもしようぢやないか」

云ふより早く隣席にありし武男が手をば無手と握りて二三度打ふりぬ。同時に一座は總立になりて手を握りつ、握られつ。皿は二個三個からからと卓の下に轉び落ちたり。左頰に痣ある一少尉は少軍醫の手をとり、

「吾輩が負傷したら、何卒御手柔かにやつて呉れ玉へ。其賄賂だよ、此は」

と四五度も打ふりぬ。呵々と笑へる一座は、また忽ち眞面目になりつ。一人去り、二人去りて、果は空しき器皿の狼藉たるを留むるのみ。

零時二十分、武男は、分隊長の命を帶び、副艦長に打合はす可き事ありて、前艦橋に上れば、我艦隊は已に單縱陣を形づくり、約四千米突を隔てゝ第一遊擊隊の四艦は眞先に進み、本隊の六艦は我松島を先登として之につゞき、赤城西京丸は本隊の左舷に添うて隨ふ。

仰ぎ見る大檣の上高く戰闘旗は碧空に羽たゝき、煙突の煙眞黑に渦まき上り、舳は海を劈いて白波高く兩舷に湧きぬ。將校或は雙眼鏡をあげ、或は長劍の柄を握りて艦橋の風に向ひつゝあり。

遙かに北方の海上を望めば、曩きに水天の間に一髮の浮めるが如く見えし煙は、一分一分に肥え來りて、敵の艦隊宛ながら海中より湧き出づる如く、煙先づ見え、ついで針大の檣ほの見え、煙突見え、艦隊見え、檣頭の旗影また點々として見え來りぬ。一際すぐれて眼立ちたる定遠鎭遠相並んで中軍を固め、經遠致遠廣甲濟遠は左翼、來遠靖遠超勇揚威は右翼を固む。西に當つて更に煙の見ゆるは、平遠廣丙鎭東鎭南及六隻の水雷艇なり。

敵は單横陣を張り、我艦隊は單縱陣をとつて、敵の中央を指して丁字形に進みしが、恰も敵陣を距る一萬米突の處に到りて、我先鋒隊は咄嗟に針路を左に轉じて、敵の右翼を指して驀地に進みつ。先鋒の左に轉ずると共に、我艦隊は龍の尾を揮ふ如くゆら〱と左に動いて、彼我の陣形は丁字一變して八字となり、彼は横に張り、我は斜めに其右翼に向ひて、宛ながら一大兩脚規形をなし、彼進み、我進みて、相距る六千米突に到りぬ。此時敵陣の中央に控へたる定遠艦首の砲臺に白煙むら〱と渦まき起り、三十珊の兩彈丸空中に鳴をうつて我先鋒隊の左舷の海に落ちたり。黃海の水驚いて倒に立ちぬ。

（一）の四

黃海！　昨夜月を浮べて白く、今日もさり氣なく雲を蒸し、島影を載せ、睡鷗の夢を浮べて、悠々として畫よりも靜かなりし黃海は、今修羅場となりぬ。

艦橋を下りて武男は右舷速射砲臺に行けば、分隊長はまさに雙眼鏡をあけて敵の方を望み、部下の砲員は兵曹以下概ね短表衣を脱ぎ棄て、腰而上は脊迄の襯衣を纏ひて潮風に黑める筋太の腕を露はし、白木綿もてしつかと腹部を卷けるもあり、默して號令を待ち構へつ。此時我先鋒隊は敵の右翼を亂射しつゝ已に敵前を過ぎ終らむとし、我本隊の第一に進める松島は全速力を以て敵に近づきつゝあり。雙眼鏡をとつて彼方を望めば、敵の中央を堅めし定遠鎭遠は眞先に抽んでて、横陣やゝ鈍角をなし、距離漸く縮まりて二艦の形狀は遠目にも次第に鮮やかになり來りぬ。卒然として往年彼二艦を横濱の埠頭に見しことを思ひ出でたる武男は、倍の好奇心もて打見やりつ。依然當時の二艦なり。但、今は黑煙を噴き、白波を蹴り、砲門を開きて、咄々來つて我に迫らむとする狀の、宛ながら惡獸なんどの來り向ふ如く、恐るゝとにはあらで一種已み難き嫌厭と憎惡の胸中に漲り出づるを覺えしなり。

忽ち海上遙かに一聲の雷轟き、物ありグーンと空中に鳴をうつて、松島の大檣を掠めつゝ、海に落ちて、二丈ばかり水を噴上げぬ。武男は後頂より脊髓を通じて言ふべからざる冷氣の走るを覺えしが、忽ち足を踏み固めぬ。他は如何にと見れば、砲尾に群がりし砲員の列一たびは搖ぎて、また動かず。艦いよ〱進んで、三個四個五個の敵彈つゞけざまに亂れ飛び、一は

左舷に吊りし端艇を打碎き、他は渾て松島の四邊に水柱を蹴立てつ。

「分隊長、未だですか」堪へ兼ねたる武男は叫びぬ。時まさに一時を過ぎむとす。「四千米突」の語は、遍ねく右舷及艦の首尾に傳はりて、照尺整ひ、牽索握られつ。待ち構へたる一聲の喇叭鳴りぬ。「打てッ！」の號令と共に、我三十二珊瓦砲を初め、右舷側砲一齊に第一彈を敵艦に迸らしつ。艦は震ひ、舷に沿ひて煙黯しく渦まき起りぬ。

恰も其答禮として、定遠鎭遠の何れか放ちたる大彈丸凄まじく空に唸りて、煙突の上二寸ばかり掠めて海に落ちたり。砲員の二三は思はず頭を下げぬ。

分隊長顧みて、「誰だ、誰だ、御辭儀をするのは？」

武男を初め候補生も砲員もどつと笑ひつ。

「さあ打てツ！　しつかり、しつかり――打てツ！」

右舷側砲は連放にうち出しぬ。三十二珊瓦砲も艦を震はして鳴りぬ。後續の諸艦も一齊にうち出しぬ。忽ち敵のうちたる時限彈の一個は、砲臺近く破裂して、今しも彈丸を砲尾に運びし砲員の一人武男が後に撞と倒れつ。起き上らむとして、また倒れ、血はさつと迸りてしたゝかに武男がズボンにかゝりぬ。砲員の過半は其方を顧みつ。

「誰だ？　誰だ？」

「西山ぢやないか、西山だ、西山だ」

「死んだか」

「打てッ！」分隊長の聲鳴りて、砲員皆砲に群がりつ。

武男は手早く運搬手に死者を運ばし、ふりかへつて其位置に立たむとすれば、分隊長は武男がズボンに眼をつけ、

「川島君、負傷ぢやないか」

「何有、今の餘瀝です」

「おゝ左樣か、さあ、今の仇を討つてやれ」

砲は間斷なく發射し、艦は全速力をもて駛る。我本隊は敵の横陣に對して大なる弧を畫きつつ、且つ射且つ駛せて、一時三十分過ぎには已に敵を半周して其右翼を廻り、まさに敵の背後に出でむとす。

第一回の戰終りて、第二回の戰此れより始まらむとすなり。松島の右舷砲暫し鳴を靜めて、諸士官砲員淋漓たる汗を拭ひぬ。

此時彼我の陣形を見れば、我先鋒隊は逸早く敵の右翼を亂射して、超勇揚威を戰鬪力なきまでに惱しつゝ、一回轉して本隊と敵の背後を撃たむとし、我本隊の中比叡は速力劣れるが爲め本隊に續行する能はずして、大膽にも獨り敵陣の中央を突貫し、死戰して活路を開きしが、火災の故に圈外に去り、西京丸また危險を免れて圈外に去らむとし、敵前に殘されし赤城は六百噸の小艦を以て獨力奮鬪重圍を衝いて、比叡のあとを趁はむとす。而して先鋒の四艦と、本隊の五艦とは、整々として列を亂さず。

敵の方を望めば、超勇焼け、揚威戰鬪力を失して、敵の右翼亂れ、左翼の三艦は列を亂して我比叡赤城を追はむとし、其援軍水雷艇は隔離して一邊にあり。而して定遠鎭遠以下數艦は、我が其背後に廻らむとするより、急に舳を回らして縱陣に變じつゝ、健氣にも我本隊に向ひ來る。

第二回の戰は今や始まりぬ。我本隊は西京丸が揭げし「赤城比叡危險」の信號を見るより、速力大なる先鋒隊の四艦を遣はして、赤城比叡を尾する敵の三艦を追ひ拂はせつゝ、一隊五艦依然單縱陣をとつて、同じく縱陣をとれる敵艦を中心に大なる蛇の目を畫きもて且つ駛り且つ撃ち、二時已に半ならむとする時、敵艦隊を

一周し終つて敵の此方に達しつ。此時我先鋒隊は比叡赤城を尾する敵の三艦を一戰に蹴散らし北ぐるを追うて敵の本陣に驅り入れつゝ、一括して彼側より攻撃にかゝりぬ。されば我本隊先鋒隊は恰も敵の艦隊を中央に取籠めて、左右より挾み撃たむとするなり。

第三次の激戰今始まりぬ。我海軍の精鋭と、敵の海軍の主力と、共に集まりたる彼我の艦隊は、大全速力もて馳せ違ひ入り亂れつゝ相鬪ふ。恰も二龍の長鯨を捲くが如く黄海の水沸つて一面の泡となりぬ。

（一）の五

我本隊は右、先鋒隊は左、敵の艦隊を眞中に取籠めて、引包んで撃たむとす。戰は今酣になりぬ。戰の熱するに從つて、武男はいよいよ吾を忘れつ。其昔學校にありて、ベースボールに熱中せし時、勝敗のこゝ暫らくの間に決せむとする大事の時に際する毎に、身の誰たり場所の何處たるを忘れ、殆んど物ありて空より吾を引き廻はす樣に覺えしが、今や恰も其時に異ならざるの感を覺えぬ。艦隊敵と離れてまた敵に向ひ行く間と、艦體一轉して左舷敵に向ひ右舷暫らく閑なる間とを除く外は、間斷なき號令に聲嗄れ、汗は淋漓として滿面に滴るも、更に覺えず。旗艦を目ざす敵の彈丸偏へに松島に集がり、鐵板上に裂け、木板焦れ、血は甲板に塗るゝも、更に覺えず。敵味方の砲聲は恰も心臓の鼓動に時を合はしつゝ、やゝ間あれば耳邊の寂しきを怪むまで、身は全く血戰の熱に浮かされつ。されば、部下の砲員も亂れ飛ぶ敵彈を物ともせず、裝塡し照準を定め牽索を張り發射しまた裝塡するまで、射的場の精確更に實戰の熱を加へて、火災は起らむとするに消し、彈は命ぜざるに運び、死亡負傷は忽ち運び去り、殆んど士官の命を待つまでもなく、手自づから動き、足自づから働きて、戰鬪機關は間斷なく滑らかに運轉せるなり。

此時眼を擧ぐれば、灰色の煙空を蔽ひ海を覆うて十重二十重に渦まける間より、思ひ掛けなき敵味方の檣と軍艦旗は彼方此方に仄見え、殆んど秒毎に轟然たる響は海を震はして、彈は彈と空中に相うつて爆發し、海は間斷なく水柱を蹴上げて煮えかへらむとす。

「愉快！　定遠が燒けるぞ！」嗄れたる聲ふり絞りて分隊長は叫びぬ。

煙の絶間より望めば、黄龍旗を飜へせる敵の旗艦の前部は黄煙渦まき起りて、蟻の如く敵兵の蠢き騷ぐを見る。

武男を初め砲一員齊に快を叫びぬ。

「さあ、遣れ、遣ツつけろッ！」

勢込んで、砲は一時に打ち出しぬ。

左右より夾撃せられて、敵の艦隊は崩れ立ちたり。超勇は已に眞先に火を帶びて沈み、揚威はとく已に大破して逃れ、致遠また沒せむとし、定遠火起り、來遠また火災に苦む。堪へ兼ねし敵艦隊は終に定遠鎭遠を殘して、盡く支離に逃げ出しぬ。我先鋒隊はすかさず其後を追ひぬ。本隊五艦は殘れる定遠鎭遠を撃たむとす。

第四回の戰始まりぬ。

時まさに三時、定遠の前部は火いよ〳〵燃えて、黄煙夥しく立上れど、猶逃れず。鎭遠またよく旗艦を護して、二大鐵艦巍然山の如く我に向ひつ。我本隊の五艦は今や全速力を以て敵の周圍を馳せつゝ幾回か盤りては亂射し、旋りては亂射す。砲彈は雨の如く二艦に注ぎぬ。而も輕裝快馬のサラセン武士が馬を盤らして重鎧の十字軍士を射るが如く、命中する彈丸多くは二艦の重鎧に刎ねかへされて、艦外に破裂し終りつ。午後三時二十五分我旗艦松島は恰も敵の旗艦と相竝びぬ。我うち出す速射砲彈のまさしく彼が艦腹に中りて、刎ねかへりて花

火の如く空しく艦外に破裂するを望みたる武男は、憤に堪へ得ず、歯を切りて、右の手もて劍の柄を破れよと打たゝき、

「分隊長、無念です。彼……彼を御覧なさい。畜生ッ！」

分隊長は血眼になりて甲板を踏み鳴らし、

「うてッ！ 甲板をうて、甲板を！ 何有！ うてッ！」

「うてッ！」武男も聲ふり絞りぬ。

歯を切りたる砲員は憤然として勢猛く連放に打出しぬ。

「今一つ！」

武男が叫びし聲と同時に、霹靂艦を震動して、砲臺内に噴火山の破裂するよと思ふ其時おそく、雨の如く飛び散る物にうたれて、武男は撞と倒れぬ。

敵艦の發ち出したる三十珊の大榴彈二個、恰も砲臺の眞中を貫いて破裂せしなり。

「殘念ッ！」

叫びつゝ刎ね起きたる武男は、また尻居に撞と倒れぬ。

彼は今體の下半に夥しき苦痛を覺えつ。倒れながらに見れば、四邊は一面の血、火、肉のみ、分隊長は見えず。砲臺は洞の如くなりて其間より青きもの搖めきたり。此は海なりき。

苦痛と、云ふ可からざる慘しき臭の爲めに、武男が眼は閉ぢぬ。人の呻吟く聲。物の燃ゆる音。ついで、「火災！ 火災！ ポンプ用意ッ！」と叫ぶ聲。同時に走せ來る足音。

忽ち武男は手ありて吾を捧ぐるを覺えつ。手の脚部に觸るゝと共に、限りなき苦痛は腦頂に響いて、思はず、「呀」と叫びつゝ仰反り――紅の靄閉せる眼の前に渦まきて、次第に吾を失ひぬ。

(二)の一

大本營所在地廣島に於ては、十月中旬、第一師團は夙く已に金州半島に向ひたれど、其後に第二師團の健兒廣島狹しと入り込み來り、加之臨時議會開かれむとして、六百の代議士續々東より來つれば、高帽腕車は到る處劍佩馬蹄の響と入り亂れて、維新當年の京都の賑ひを再び此處山陽に見る心地せられぬ。

市の目貫と云ふ大手町通は、「參謀總長宮殿下」「伊藤内閣總理大臣」「川上陸軍中將」など嚴めしき宿札うちたるあたりより、二丁目三丁目と下りては戸毎に「徴發に應ず可き坪數○○疊、○間」と貼札して、大方の家には士官下士の姓名兵の隊號人數を記せし紙札を張りたるは、假兵舍にも置きあまりたる兵士の流れ込みたるなり。其間には「○○酒保事務所」「○○組人夫事務取扱所」など看板新しく人影の忙しく出入するあれば、其處の店先にては忙しくラムネ瓶を大箱に詰め込み、此方の店はビスケットの箱山の如く荷造に汗を流す若者あり。此間を縫うて馬上の將官が大本營の方に急ぎ行きしあとより、電信局にかけつくるにか鉛筆を耳に插みし新聞記者の車を飛ばして過ぐる、やがて、鬱金木綿に包みし長刀と革嚢を載せて停車場の方より來る者、面黒々と日にやけてまだ夏服の破れたるまゝ宇品より今上陸して來つと覺しき者の行き違ひ、新聞の寫眞附錄にて見覺ある元老の何か思案顏に車を走らす此方には、近きに出發す可き人夫が鼻歌歌うて往來をぶらつけば、彼方の家の縁前に劍を磨ぎつゝ健兒が歌ふ北音の軍歌は、川向うの嬌めかしき廣島節に和して響きぬ。

「陸軍御用達」と一間あまりの大看板、其他看板二三枚、入口の三方にかけ列ねたる家の玄關先より往來にかけて粗製毛布防寒服やうのもの山と積みつゝ、番頭らしきが若者五六人を指圖

して荷造に忙しき所に、客を送りて怱卒と奥より出で來し五十あまりの爺、額やゝ禿げて眼尻垂れ左眼の下にしたゝかな赤黒子あるが、何か番頭に吩咐け終りて、入らむとしつゝ怱ち門外を上手に過ぎ行く車を目がけ、

「田崎君……田崎君」

呼び寄の耳に入らざりしか、其まゝに過ぎ行くを、若者して呼び戻さすれば、車は門に歸りぬ。車上の客は五十あまり、色赤黒く、頰鬚少しは白きも雑り、黒紬の羽織に新しからぬ同色の中折帽を戴き、蹴込に中形の鞄を載せたり。呼び戻されて怪訝の顔は、玄關に立ちし主人を見るより驚にかはりて、帽を脱ぎつゝ、

「山木さんぢやないか」

「田崎君、珍らしいね、抑何時來たンです？」

「此汽車で歸京る心算で」と田崎は車を下り、莚繩なんど取り散らしたる間を縫ひて玄關に寄りぬ。

「歸る？　何處に何時御出なので？」

「はあ、つい先日佐世保に行つて、今歸途です」

「佐世保、武男さん――旦那の御見舞？」

「はあ、旦那の見舞に」

「此はひどい。旦那の見舞に行きながら、往返とも素通りは實にひどい。娘も娘、御隱居も御隱居だ。葉書の一枚も來ないものだから」

「何、急ぎでしたからね」

「だッて、行きがけに一寸寄つて下さりや宜かつたに。兎に角先御上んなさい、車は返して、宜いさ、御話もあるから。一汽車後れたッて宜いだらうぢやないか。――所で武男さん……旦那の負傷は如何でした？　實は私も彼時御負傷の事を聞いたンで、一寸御見舞に行かなけりやならんならんと思つてたンだが、思つたばかりで、――丁度第一師團が近々に出發けると云ふンで、滅法忙しかつたもンですから、つい其の何で、御見舞狀だけあげて置いたンでしたが。――あゝ左様でしたか、別に骨にも障らなかつたですね、大腿部――はあ左様ですか。兎に角若い者は結構ですな。御互に年寄は一寸指尖に刺が立つても、一週間や二週間はかゝるが、旦那なんざ御年が若いものだから――兎に角結構御目出度い事でした。御隱居も御安心ですね」

中腰に構へし田崎は時計を出し見つ、座を立たむとするを、山木は引とめ、

「先い宜いさ。幸の便で、少し御隱居に差上げたいものもあるから。夜汽車になさい。夜汽車だとまだ大分時間がある。一寸用を濟して、何處ぞへ行つて、一盃やりながら話すとしませう。廣島の魚は實に旨いですぜ」

口は肴よりも猶旨かる可し。

（二）の二

秋の夕日天滿川に流れて、川に臨める某亭の障子を金色に染めぬ。二階には貴衆兩院議員の有志が懇親會とやら拔ける程の騒ぎに引易へて、下の小座敷は婢も寄せず唯二人話しもて盃をあぐるは山木と彼田崎と呼ばれたる男なり。

此田崎は、武男が父の代より執事の役を務めて、今も程近き吾家より日々川島家に通ひては、何くれと忠實に世話をなしつ。知才なく切つて廻はす力量なきかはりには、主家の收入を竊みて吾懐を肥す氣遣なきが此男の取柄と、武男が父は常に云ひぬ。されば川島未亡人にも武男にも淺からぬ信任を受けて、今度も未亡人の命によりて遥々佐世保に主人の負傷をば見舞ひしなり。

山木は持つたる盃を下に置き、額の邊を撫でながら、「實は何ですて、私も歸京はしても一日泊りで直ぐとまた廣島に引返すと云ふ樣な譯で、其樣な事も耳に入らなかッたですが。其れでは何ですね、彼後浪子さんも餘程わるか

ツたのですね。成程如何も些と惨酷かつたね。併し兎も角も川島家の爲めだから詮方が無いと云つた樣なもので。はあ左樣ですか、近頃はまた少しは宜い方で、成程、逗子に保養に行つて居なさるかね。併し彼病氣ばかりは如何程よく見えても畢竟死病だて。所で武男─否若旦那はまだ怒つて居なさるかね─

椀の蓋をとれば松茸の香の立上りて鯛の脂の珠と浮めるを旨げに吸ひつゝ、田崎は髭押拭ひて、

「さあ、其處ですがな、其はもう原を云へば何も御家の爲めで詮方もないと云つたものの、喃山木君、旦那の留守に何も相談なしにやつて御仕舞なさると云ふは、御隱居も少し御氣隨が過ぎたと云ふものでな。實は拙者も旦那の御歸まで御待ちなさる樣にと申上げて見たのぢやが、彼御氣質で、一日斯樣と云ひ出しなすつた事は否應なしにやり遂げる御方だから、到頭彼通りになつたンで。此れは旦那が面白く思ひなさらぬも尤ぢやと拙者は思ふ位、其に困つた人は彼千々岩さん──たしか最早清國に渡つた樣に聞いたですが」

山木はじろりと話者の顏を見つゝ「千々岩！はあ彼男は此日出征けたが、然顏を知られた報で、此處に滯在中も折々無心に遣つて來て困つたよ。頬の皮の厚い男でれ。戰爭で死ぬかも知れんから香奠と思つて餞別を呉れろ、其の代り命があつたら、屹度金鵄勳章をとつて來るなんか云つて、百兩ばかり踏んだくつて行つたて。はゝゝゝ、所で武男君は負傷が快くなつたら、一先歸りなさるかね」

「さあ、御自身は快癒次第すぐまた戰地に出かける積りで居なさる樣ですがね」

「相變らず元氣な事を言ひなさる。が、田崎君、一度は歸京つて御隱居と仲直りをなさらんと不可いぢやあるまいか。如何程氣に入つて居なすつたか知らんが、浪子さんと云へば最早緣の切れたもので、加之健康な方でもあることか、死病にとりつかれて居る人を、まさかあらためて呼び取りなさると云ふ事も出來まいし、まあ過ぎた事は詮方がないとして、早く親子仲直りをしなさらんぢやなるまい、と私は思ふが。喃、田崎君」

田崎は打案じ顏に「旦那は彼通り正直な御方だから、假令御隱居の方が非にもしろ、自分の仕打も宜くなかつたと其樣思つて居なさる樣子でね。それに今度拙者が御見舞に行つたンで先御隱居の御心も通つたと云ふものだから、仲直りも何もありやしないが、併し──」

「戰爭中の緣談も可笑しいが、兎に角早く奧樣を迎びなさるのだね。如何です、旦那は御隱居と仲直りはしても、矢張浪子さんは忘れなさるまいか。若い者は最初の間はよく強情を張るが、併し新しい人が來て見ると矢張可愛くなるものでね」

「いや其事は御隱居も考へて御出なさる樣だが、併し──」

「六か敷からうと云ふのかね」

「さあ、旦那が彼樣な一圖な方だから、其處は如何とも」

「併し御家の爲め、旦那の爲めだから、喃田崎君」

話は暫し途切れつ。二階には演説や終りつらむ、拍手の音盛に聞ゆ。障子の夕日やゝ薄れて、喇叭の響耳に冷かなり。

山木は盃を淸めて、あらためて田崎にさしつゝ

「時に田崎君、娘が御世話になつて居るが、困つた奴で。如何です、御隱居の御氣には入りますまいな」

浪子が去られしより、一月あまり經ちて、山木は親しく川島未亡人の薫陶を受けさすべく行

儀見習の名を以て、娘お豐を川島家に入れ置きしなりき。

田崎は含笑みぬ、何か思ひ出でたるなるべし。

(二)の三

田崎は含笑みぬ。川島未亡人は眉を顰めしたり。

武男が憤然席を蹴立てて去りし彼日、母は其子の後影を睨みつゝ叫びぬ。

一不孝者奴が！　如何でも勝手にすッが宜えー

母は武男が常によく孝にして、吾意を迎ふるに躊躇せざるを知りぬ。知れるが故に、其浪子に對するの愛の固より淺きにあらざるを知りつゝも、其兩立する能はざる場合には、一も二もなく彼愛を棄てて此孝を取るならむと思へり。思へるが故に、其仕打の吾ながら寧ろ果斷に過ぐるを思はざるにあらざりしも、猶家の爲め武男の爲めと謂ひつゝ、獨斷をもて浪子を離別せるなり。武男が憤の意外に烈しかりしを見るに及んで、母は初めて吾違算を悟り、同時に所謂母なるものの決して絶對的權力を其子の上に有するものにあらざるを知りぬ。曩きには其子の愛の浪子に注ぐを一種不快の眼をもて見たりしが、今は其の愛母の威光母の恩を以てして猶死に瀕したる一浪子の愛に勝つ能はざるを見るに及び、吾威權全く墜ちたる樣に、其子をば全く浪子に奪ひ去られし樣に感じて、且は武男を怒り、且は實家に歸り去れる後までも猶浪子を罵れるなり。

猶一つ其怒を激せしものありき。其は朧けながら方寸の那邊にか己が仕打の非なるを、知るとにはあらざれど、聊か其疑のほのかに[illegible]引けるなり。武男が憤の底には些の道理なかりしか。吾仕打には些の吾が領分を越えて其子を侵せし所はなかりしか。眠られぬ夜半に獨り奥の間の天井にうつる行燈の影眺めつゝ考ふるとはなく思へば、何處にか汝の誤なり汝の罪なりと囁く聲ある樣に思はれて、更に其胸の亂るゝを覺えぬ。世にも強きは自から是なりと信ずる心なり。腹立たしきは、或は人より或は吾衷なる或ものより吾非を示されて吾れと吾が良心の前に悔悟の膝を折る時なり。急所を刺せば、猛獸は叫ぶ。吾非を知れば、人は怒る。武男が母は、此が爲めに抑へ難き怒は猶更に悶を加へて、いよいよ武男の怒る可く、浪子の惡む可きを覺えしなり。武男は席を蹴つて去りぬ。一日又一日、彼は來りて罪を謝するなく、詫の書だも送り來らず。母は胸中の悶々を漏らす可き唯一の道として、其怒を恣にして、僅かに自から慰めつ。武男を怒り、浪子を怒り、彼時を思ひ出でて怒り、將來を思うて怒り、悲しきに怒り、淋しきに怒り、詮方なきにまた怒り、怒り怒りて怒りの疲勞に漸く夜も眠るを得にき。

川島家にては平常にも恐ろしき隱居が癇癪の近頃はまたひた燃えに燃えて、慣れし婢等も幾度か手荷物を仕舞ひかけける間に、朝鮮事起りて豐島牙山の號外は飛びぬ。戰爭に行くに告別の手紙の一通も遣らぬ不埓な奴と母は幾度か怒りしが、世間の樣子を聞けば、田舍より其子の遠征を見送らむと出で來る老婆、物を贈り書を送りて其子を勵ます母もありと云ふに、子は親に怒り親は子を憤りて一通の書だに取りかはさず、彼は戰地に吾は帝都に、おのおの心に不快の塊を懷いて、若し此まゝに永別となるならば、と思ふとはなく、ほのかに感じたる武男が母は、終に罵り罵り我を折りて引つゞき二通の書を戰地にある其子に遣りぬ。

折りかへして戰地より武男の返書は來れり。

返書來りてより一月あまりにして、一通の電報は佐世保の海軍病院より武男が負傷を報じ來しぬ。流石に母が電報をとりし手は顫々と打震ひつ。程なく其負傷は命に關する程にもあら

ざる由を聞きたれど、猶田崎を遠く佐世保に遣りて其容子を見させしなりき。

（二）の四

田崎が佐世保より歸りて、仔細に武男の容子を報ぜるより、母はやゝ安堵の胸を撫でけるが、猶此上は全快を待ちて一應顏をも見、また戰爭濟みたらば武男が爲めに早く後妻を迎ふるの得策なるを思ひぬ。斯くして一には浪子を武男の念頭より絶ち、一には川島家の祀を存し、一にはまた心の奥の奥に於て、曩きに武男に對せる所行のやゝ暴に過ぎたりし其罪(?)亡をなさむと思へるなり。

武男に後妻を早く迎へむとは、浪子を離別に決せし其日より早く已に母の腦中に湧き出でし問題なりき。其が爲めに數多からぬ知己親類の嫁し得可き孃子を心の中に彼此と繰り見しが、思はしきものもなくて、思ひ迷へる折から、山木は突然娘お豐を行儀見習と稱して川島家に入れ込みぬ。武男が母とて白癡にもあらざれば、山木が底意は必ずしも知らざるにあらず、お豐が必ずしも智德兼備の賢婦人ならざるをも知らざるにはあらざりき。然れど溺るゝ者は藁をも攫む。武男が妻定めに窮したる母は、山木が望を容ひ、試にお豐を預かれるなり。

試驗の結果は、田崎が含笑めるが如し。試驗者も受驗者も共に滿足せずして、云はゞ婢等が鬱散の種となるに終れるなり。

初めは平和、次ぎに小口徑の獵銃を用ゐて輕に散彈を撒き、終に攻城砲の恐ろしきを打出す。此は川島未亡人が何人に對しても用ゆる所の法なり。浪子も曾て其經驗を嘗めぬ。而して其神經の敏に感の鋭かりし程其苦痛を感ずる事も早かりき。お豐も今其經驗を強ひられぬ。而して其の無爲にして化する底の性質は、散彈の飛ぶも殆んど何處の家に煎る豆ぞと思ひ貌に過ぐるより、彼攻城砲は例よりも速やかに持出されざるを得ざりしなり。

其心悠々として常に春霞の棚引ける如く、胸中に一點の物無うして人我の別定かならぬのみか、往々にして個人の輪廓消えて直ちに動植物と同化せむとし、春の夕に庭などに立ちたらば靈も體も其まゝ霞の中に融け去りて掬ふも手にはたまらざる可きお豐も戀に自己を自覺し初めてより、僅かに苦勞と云ふものを解し初めぬ。眠むき眼摩りて起き出づるより、彼此と追ひ使はれ、其果は小言大喝、尤も陰口中傷は概して解かれぬまゝに鵜呑となれど、連放つ攻城砲のみは如何に超然たるお豐も當りかねて、戀しき人の家ならずば夙にも逃げ出しつべく思へるなり。然りながら父の戒、折々櫻川町の宅に歸りて聞く母の訓は此處と、健氣にも猶攻城砲の前に陣取りて、日又日を忍びて過ぎぬ。時には耐り兼ねて思ひぬ、戀は斯くも辛きものよ、最早二度とは人を戀はじと。憐れむ可きお豐は、川島未亡人の爲めには其亂れ勝なる胸の安全瓣にせられ、家内の婢僕には日永の慰にせられ、戀しき人の顏を見ることも無うして、生れ出でてより例無き克己と辛抱を以て當もなきものを待ちけるなり。

お豐が來りしより、武男が母は新に一の懊惱をば添へぬ。失へる玉は大にして、去れる婦は賢なり。比較になる可き人ならね共、お豐が來りて身近に使はるゝに及びて、爲す事毎に氣に入るはなくて、武男が母は堅く其心を塞げるに拘はらず、ともすれば昔吾が叱りも罵りもせし其人を思ひ出でぬ。光を韜める女の、言葉數多からず起居に靜淑なれば、見たる所は眼より鼻にぬける程華美には見えねど、不馴ながらもよく此方の氣を飲み込みて機轉も利き、第一心がけの殊勝なるを、圖に乘つては口汚く罵りながら、心が底には彼年頃でよく氣がつ

くと暗に白狀せしこともありしが、今眼の前に同じ年頃のお豐を置きて見れば、是非なく比較はとれて、事毎に思ふまじと思ふ人を思へるなり。されば日々氣に適はぬ事の出で來る毎に春霞の化けて出でたる人間の名をお豐と呼ばれて眼は細々と口も閉ぢあへず坐れる傍には、何時しか色少し蒼ざめて髮黑々と靜淑なる若き婦人の利發らしき眼をあげてつく〴〵と吾顏を眺めつゝ「如何でムいます？」と云ふ樣なる心地して、武男が母は思はずもわなゝかれつ。「ぢやつて、病氣たすつが惡かぢやなつか」と幾回か陳辯すれど、猶妙に胸先に込みあげて來るものを、自己は怒と思ひつゝ、果はまた大聲あげて、お豐に當り散らしぬ。

然れば廣島の旗亭に、山木が田崎に打向ひて娘お豐を武男が後妻にと朧げならず云ひ出でし其時は、川島未亡人とお豐の間は去る六月に於ける日清の間よりも危く、彼出すか、吾出づるか、危機は所謂一髮にかゝりしなりき。

（三）の一

枕邊近き小鳥の聲に呼び醒されて、武男は眼を開きぬ。

床の上より手を伸して、窓帷引き退くれば、今向ふ山を離れし朝日花やかに玻璃窓にさし込みつ。山は朝霧猶白けれど、秋の空は已に蒼々と澄み渡りて、窓前一樹染むるが如く紅なる櫻の梢を鮮かに襯し出しぬ。梢に兩三羽の小鳥あり。相語りつゝ枝より枝に躍れるが、不圖云ひ合はしたる樣に玻璃窓の内を覗き、半身を擡げたる武男と顏見合はし、驚き起つて飛び去りし羽風に、黃なる櫻の一葉ばらりと散りぬ。

吾を呼び醒ませし朝の使は彼なりけるよと、武男は含笑みつゝ、また枕につかむとして、痛める所あるが如く聊か眉を顰めつ。已にして漸く身を床の上に安んじ、眼を閉ぢぬ。

朝靜にして、耳を擾はす響もなし。鷄鳴き、欵乃遠く聞ゆ。

武男は眼を開いて笑み、また眼を閉ぢて思ひぬ。

* * * * *

武男が黃海に負傷して、此處佐世保の病院に身を託せしより、已に一月餘過ぎむとす。

彼時、砲臺の眞中に破裂せし敵の大榴彈の亂れ飛ぶにうたれて、尻居に撞と仆れつゝ、劇しき苦痛に一時吾を失ひしが、苦痛の甚しかりし割に、脚部の傷は二ケ所とも幸に骨を避けて、其他は些の火傷を受けたるのみ。分隊長は骸も留めず。同僚は戰死し、部下の砲員無事なるは稀なりしが中に、不思議の命をとりとめて、此の海軍病院に送られつ。最初は流石に熱も劇しく上りて、床の上の譫言にも手を戟にして敵艦を罵り分隊長と呼びては砲員を勵ましゝが、素より血氣盛なる若者の、傷も左まで重きにあらず、時候も秋涼に向へる折柄、熱は次第に下り、經過よく、腹痛の患もなくて、已に一月あまり過ぎし今日此頃は、猶幾分の痛をば覺ゆれど、ともすれば石炭酸の臭の滿ちたる室をぬけ出でて秋晴の庭に下りむとしては軍醫の小言を吃ふまでになりつ。此上はたゞ速やかに戰地に歸らむと、只管醫の許容を待てるなりき。

思ひ棄てゝ塵芥よりも輕かりし命は不思議に永らへて、熱去り苦痛薄らぎ食欲復すると共に、吾にもあらで生を樂む心は動き、從つて煩惱も湧きぬ。蟬は殼を脫げども、人は己を脫れ得ざれば、戰の熱病の熱に中絶えし記憶の絲は其體のやゝ癒えて其心の平生に復ると共にまたおのづから掀げ起されざるを得ざりしなり。

然れど大疾よく體質を新にするに齊しく、僅かに一紙を隔てて死と相見たるの經驗は、武男が記憶を別樣に新ならしめたり。海戰、及び其

前後に相ついで起りし異常の事と異常の感は、風雨の如く其心を振ひ撼かしつ。風雨は已に過ぎたれど、餘波は猶心の海に殘りて浮ぶ記憶はおのづから異なる態をとりぬ。武男は母を憤らず、浪子をば今は世になき妻を思ふたむ際に其心の龕に祭りて、浪子を思ふ毎に宛ながら遠き野末の悲歌を聞く如く、一種なつかしき哀を覺えしなり。

田崎來り見舞ひぬ。武男はよりて母の近況を知りまた仄かに浪子の近況を聞きぬ。（武男の氣を損はむことを恐れて、田崎はあへて山木の娘の一條をば云はざりき。）武男は浪子の事を聞いて落淚し、田崎が去りし後も、松風淋しき湘南の別墅に病める人の面影は、黄海の戰とかはる〲武男が宵々の夢に入りつ。

田崎が東に歸りし後數日にして、何處よりともなく一包の荷物武男が許に屆きぬ。

* * * * *

武男は今其事を思へるなり。

（三）の二

武男が思へるは此なり。

一週前の事なりき。武男は讀み饜きし新聞を投げ遣りて、床の上に欠伸しつゝ、窓外を打眺めぬ。同室の士官昨日退院して、室內には彼一人なりき。時は黄昏に近く、病室はほの闇くして、窓外には秋雨瀧の如く降りしきりぬ。隣室の患者に電話かゝるにやあらむ、時々の響絶間なく雨に和して、轉た室內の詫しさを添へつ、聞くともなく其響に耳を假して、眼は窓に向へば、吹きしぶく雨淋漓として玻璃に滴り、しとど濡れたる夕暮の庭は斑らに現はれてまた消えつ。

茫然として眺め入りし武男は、忽ち頭より毛布を引被ぎぬ。

五分ばかりたちて、人の入り來る足音して、

「御荷物が屆きました……御眠ですか」

頭を出せば、床の横側に立てるは、小使なり。油紙包を抱き、廿文字にからげし重やかなる箱を提げて立ちたり。

荷物？ 田崎歸りて未だ幾日もなきに、誰が何を送りしぞ。

「あゝ荷物か。何處からだね？」

小使が讀める差出人は、聞きも知らぬ人の名なり。

「一寸開けて貰はらか」

油紙を解けば、新聞、其を解けば紫の包出でぬ。包を解けば出でたり、小紬の單衣、柔らかき絹物の袷、白縮緬の兵兒帶、雪を欺く足袋、袖廣き襦袢は脫着容易かるべく、眞綿の肩蒲團は長き病床に床擦あらざれと願ふなるべし。箱の內は何ぞ。莎繩を解けば、就中好める泡雪梨の大なると芭蕉實の鮮けきと溢るゝまでに滿ちたり。武男が心臟の鼓動は急になりぬ。

「手紙も何も入つて居ないかね？」

彼をふるひ之を移せど寸の紙だになし。

「一寸其油紙を」

包紙をとりて、晉名を書ける筆の蹟を見るより、忽ち胸の塞がるを覺えぬ。武男は其筆を認めたるなり。

彼女なり。彼女なり。彼女ならずして誰かある可き。其縫へる衣の一針毎に、痕は無けれどまさしく洗げる千行の淚を見ずや。其病をつとめて書ける文字の震へるを見ずや。

人の去るを待ち兼ねて、武男は男泣に泣きぬ。

* * * *

素より涸れざる泉は今新に開かれて、武男は限り無き愛の滔々として漲るを覺えつ。晝は思ひ、夜は彼女を夢みぬ。

然れど夢程に世は自由ならず。武男は素より信じて思ひぬ、二人が間は死だも劈く能はじ

と。況んや區々たる世間の手續をや。然れども其心を實にせぬとしては、其區々たる手續儀式が企望と現實の間に越ゆ可からざる障壁として立てるを覺えざる能はざりき。世は如何にすとも、彼女は限りなく吾妻なり。然れど母は吾名によつて彼女を離別し、彼女が父は彼女に代つて彼女を引取りぬ。世間の前に二人が間は絶えたるなり。平癒を待つて一たび東に歸り、母に逢ひ、浪子を訪うて心を語り、再び彼女を迎へむか。如何に自から欺くも、武男は所謂世間の義理體面の上より然る事のなす可くまたなし得べきを思ひ得ず、事は成らずして畢竟再び母と吾との間を前にも增して乖離せしむるに過ぎざる可きを思ひぬ。母に逆ふの苦は已に嘗めたり。

廣き宇宙に生きて思はぬ桎梏に吾愛をすら縛らるゝを、齒痒しと思へど、武男は脱るゝ路を知らず、遣る方なき懊惱に日又日を送りつゝ、唯生死ともに吾妻は彼女と思ひて纔かに自から慰め併せて心に浪子をば慰めけるなり。

今朝も夢さめて武男が思へる所は、斯なりき。

此の朝軍醫が例の如く來り診して、傷のいよいよ全癒に向ふに滿足を表して去りし後、一封の書は東京なる母より屆きぬ。書中には田崎歸りて聊か安堵せるを書き、且聊か話し度き事もあれば、醫師の許可次第一先づ都合して歸京す可しと書きたり。話し度き事！ 若くは彼が尤も忌み且恐るゝ或事にはあらざるか。武男は打案じぬ。

武男は終に歸京せざりき。

十一月初旬、彼と齊しく黃海に手負ひし彼が乘艦松島の修繕終りて戰地に向ひしと聞く程もなく、纔かに醫師の許容を得たる武男は、請うて運送船に便乘し、恰も大連灣を取つて同灣に碇泊せる艦隊に復歸り去りぬ。

佐世保を出發する前日、武男は二通の書を投函せり。一は其母に宛てて。

一の（四）

秋風吹き初めて、避暑の客は都に去り、病を養ふ客ならでは留まる者なき九月初旬より、今茲十一月初旬まで、日の溫かに風なき時を撰みて、五十あまりの婢に伴はれつゝ、徐に逗子の濱邊を逍遙する一人の淑女ありき。

痩せに痩せて砂に落つる影も細々と傷はしき姿を、網曳く漁夫、日每濱邊を步む病客も皆見るに慣れて、逢ふ每に頭を下げぬ。誰傳ふともなく仄かに其身の上をば聞き知れるなりけり。

此は浪子なりき。

惜からぬ命つれなくも猶永らへて、また今年の秋風を見るに及べるなり。

＊　＊　＊　＊

浪子は去る六月の初、伯母に連れられて歸京し、思ひも掛けぬ宣告を傳へ聞きし其翌日より、病は見る〳〵重り、前後を覺えぬまで胸を絞つて心血の紅なるを吐き、醫は默し、家族は眉を蹙め、自己は旦夕に死を待ちぬ。命は實に一縷に繫がれしなりき。浪子は喜んで死を待ちぬ。死は早々嬉しかりき。何思ふ間もなく忽ち深井の暗黑に陷ちたる此身は、何の樂あり、何の甲斐ありて、世に永らへむとはす可き。誰を恨み、誰を戀ふ、左る念は形をなす餘裕もなくて、唯身を繞る暗黑の恐ろしく厭はしく、早く此裡を脱れむと思ふのみ。死は實に唯一の活路なりける。浪子は死を待ち詫びぬ。身は病の床に苦み、心は既に世の外に飛びき。今日にもあれ、明日にもあれ、此身の絆絶えなば、惜からぬ世を下に見て、魂は千萬里の空を天に飛び、懐かしき母の膝に心ゆくばかり泣きもせむ、訴へもせむ、と思へば待たるゝは實に死の

使なりけり。

　あはれ、彼女は死をだに心に任せざりき。今日、今日と待ちし今日は幾度か空しく過ぎて、一月あまり經たれば、吾にもあらで病や〻間に、二月を經て更に輕くなりぬ。思ひ棄てし命をまた更に此世に引き返されて、浪子はまた薄命に泣くべき身となりぬ。浪子は實に惑へるなり。生の愛す可く死の恐る可きを知らざる身にはあらずや。何の爲めに齡を迎へ、何の爲めに藥を服し、何の爲めに惜からぬ命を繋がむとするぞ。

　然れど父の愛あり。朝に夕に彼女が病床を省し、自ら藥餌を與へ、更に自ら指揮して彼女が爲めに心靜かに病を養ふ可き離家を建て、如何にもして彼女を生かさずば已まざらむとす。父の足音を聞き、吾病の間なるに喜ぶ慈顏を見る每に、浪子は現には墮さぬ涙の自づから頰に滴るを覺えず、漫りに死を希ふに忍びずして、父の爲めに努めて病をば養へるなり。更に一あり。浪子は良人を疑ふ能はざりき。海涸れ山崩るゝも固く良人の愛を信じたる彼女は、此回の事一も良人の心にあらざるを知りぬ。病や〻間になりて、仄かに武男の消息を聞くに及びて、愈其信に印捺されたる心地して、彼女は聊か慰められつ。固より此後の如何に成り行く可きを知らず。假令此病癒ゆとも一たび絶えし緣は再び繋ぐ時なかる可きを感ぜざるにあらざるも、吾二人が心は冥々の間に通ひて、此愛をば何人も割く能はじと心に謂ひて、竊かに自から慰めけるなり。

　されば父の愛と、此仄かなる望とは、手を盡したる名醫の治療と相待ちて、消えむとしたる彼女が玉の緒を一たび繋ぎ留め、九月初旬より浪子は幾と看護婦を伴うて再び逗子の別墅に病を養へるなりき。

（四）の二

　逗子に來てよりは、症や〻快よく、四邊の靜かなるに、心も少しは靜まりぬ。海の音遠き午後、湯上りの體を安樂椅子に倚せて、鳥の音の淸きを聞きつゝ恍然としてあれば、宛ながら去にし春の頃此處にありける時の心地して、今にも良人の横須賀より來り訪はむ思もせらるゝなりけり。

　別墅の生活は、去る四五月の頃に異ならず。幾と看護婦を相手に、日課は服藥運動の時間を違へず、體溫を檢し、定められたる攝生法を守る外は、せめての心遣りに歌詠み秋草を活けなどして過せるなり。週に一二回、醫は東京より來り見舞ひぬ。月に兩三回、或は伯母、或は千鶴子、稀に繼母も來り見舞ひぬ。其幼き弟妹二人は病める姉を懷かしがりて、しば〳〵母に請へど、病を忌み、且は二人の浪子になづくを面白からず思へる母は、たゞ叱りて止みぬ。今の身の上を聞き知りてか、昔の學友の手紙を送れるも少なからねど、大方は文字麗はしくして心を慰む可きものは却て稀なる心地して、よく〳〵も見ざりき。唯千鶴子の來るをば待ち詫びつ、聞きたしと思ふ消息は重に千鶴子より傳はれるなり。

　緣絶えしより、川島家は次第に遠くなりつ。幾百里西なる人の面影は日夕心に往來するに引易へて、浪子は更に其人の母をば思はざりき。思はずとにはあらで、思はじと努めしなりけり。心一たび其姑の上に及ぶ毎に、吾ながら恐ろしく苦き一念の抑ふれどむら〳〵と心に湧き來りて、氣の怪しく亂れむとするを、浪子はふりはらひふりはらひて、心を他に轉ぜしなり。山木の女の川島家に入り込みしと聞ける其時は、流石に心地亂れぬ。而も其は吾思ふ人の與り知る所ならざる可きを思ひて、强ひて心を其方に妨けるなり。彼女が身には湘南に病に臥して、

心は絶えず西に向ひぬ。此の世に於て最も愛すなる二人は、現に征清の役に從へるならずや。父中將は浪子が逗子に來りしより間もなく、大元帥麾下に屈從して廣島に赴き、更に遠く遼東に向はむとす。せめて新橋までと思へるを、父は制して、呉々も自愛し、凱旋の日には全快して迎へに來よと云ひ送りぬ。武男は彼後直ちに戰地に向ひて、現に聯合艦隊の旗艦にありと聞く。秋雨秋風身に慈なく、戰鬪の務に服せらるゝや、如何に。日々夜々陸に海に心は馳せて、世には要なしと謂へる浪子も躍る心に新聞をば讀みて、皇軍連勝、吾父息災、武男の武運長久を祈らぬ日はあらざりしなり。

九月末に到り、黃海の捷報は聞え、更に數日を經て負傷者の中に浪子は武男の姓名を見出しぬ。浪子は一夜眠らざりき。幸に東京なる伯母の其心を酌めるありて、何處より聞き得て報ぜしか、浪子は武男の負傷の太甚しく重からずして現に佐世保の病院にある由を知りつ。生死の憂を慰められしも、倍彼方を思ひ遣りて、斯くも爲たしと思ふ事の多きにつけても、今の身の上の思ふに任せぬ恨はまたむら〳〵と胸を塞ぎぬ。懲に夫妻の名義絶えしばかりに、まさしく心は通ひつゝ、彼は西に傷つき、吾は東に病みて、行きて問ふ可くもあらぬのみか、明らさまには葉書一枚の見舞すら心に任せぬ身ならずや。斯く思ひては遣る方なく悶えしが、猶已み難き心より思ひつきて、浪子は病の間々に幾を相手に其人の衣を縫ひ、其好める品をも取り揃へつゝ、裂けむとすなる胸の思の萬分一も通へかしと、名をば隱して、遙かに佐世保に送りしなり。

過去り過來りて、十一月中旬、佐世保の消印ある一通の書は浪子の手に落ちたり、浪子は其書を抱と握りて泣きぬ。

(四)の三

打連れて土曜の夕より見舞に來し千鶴子と妹駒子は、今朝歸り去りつ。暫し賑やかなりし家の内また常の淋しきに復りて、曇り勝なる障子の内、浪子は獨り床にかけたる亡母の寫眞に對ひて坐しぬ。

今日、十一月十九日は亡母の命日なり。憚る人もなければ、浪子は手匣より母の寫眞取り出でて床にかけ、千鶴子が持て來し白菊のやゝ狂はむとするを其前に手向け、午後には茶など點れて、幾の昔語に耳傾けしが、今は幾も看護婦も罷りて、浪子は獨り寫眞の前に殘れるなり。

母に別れて已に十年にあまりぬ。十年の間、浪子は亡母を忘るゝの日無かりき。然れど今日此頃は懷しさの堪へ難きまで慕りて、事毎に其母を思へり。戀しと思ふ父は今遠く遼東にあり。繼母は近く東京にあれど、中垣の隔昔のまゝに、ともすれば聞きづらきことも耳に入る。亡母の、若し亡母の無事に永らへて居玉はゞ、彼苦みも告げ、此悲さも訴へて、かよわき此身に負ひあまる重荷も些は輕く思ふ可きに、何故見棄てゝ逝き玉ひしと思ふ下より涙は湧きて、寫眞は霧を隔てし様に朦朧になりぬ。

昨日の様なれど、指を折れば十年經ちたり。母上の亡くなり玉ふ其年の春なりき。自身は八歲、妹は五歲、其頃は片言雜りの、今は彼通り大きくなりけるよ、櫻模樣の曙染、二人揃うて美しと父上に譽められて嬉しく、吾は右妹は左母上を中に、馬車を軋らして、九段の鈴木に撮らしゝ中の一枚は此處にかけたる此寫眞ならずや。思へば十年は夢と過ぎて、母上は此寫眞になり玉ひ、吾身は——。

吾身の上は思はじと定めながらも、味氣なき今の境涯は生憎に歷々と眼の前に現はれつ。

思へば思ふ程何の樂も何の望もなき身は十重二十重黒雲に包まれて、此八疊の間は日影も漏れぬ死囚牢になりかはりたる心地すなり。

忽ち柱時計は家内に響き渡りて午後二時をうちぬ。愕かされし浪子は逭るゝ如く次の間に立てば、此處には人もなくて、奧の方に幾と看護婦と語る聲す。聞くともなく耳傾けし浪子は、また此室を出でて庭に下り立ち、枝折戸あけて濱に出でぬ。

空は曇りぬ。秋ながらうつとりと雲立ち迷ひ、海は眞黒に凝みたり。大氣は恐ろしく靜まりて、一陣の風なく、一波だに動かず、見渡す限り海に帆影絶えつ。

浪子は次第に濱を歩み行きぬ。今日は網曳する者もなく、運動する客の影も見えず、孩を負へる十歳あまりの女の子の歌ひながら貝拾へるが浪子を見て含笑みつゝ頭を下げぬ。浪子は慘として笑みつ、また恍然と思ひつゞけて、俯きて歩みぬ。

忽ち浪子は立ちとまりぬ。濱盡き、岩起れるなり。岩に一條の路あり。其を辿れば灘の不動に到る可し。此春良人に導かれて行きし處。

浪子は其路をとりて進みぬ。

(四)の四

不動祠の下まで行きて、浪子は岩を拂うて坐しぬ。此春良人と共に坐したるも此岩なりき。其時は春晴うら〳〵と、淺碧の空に雲なく、海は鏡よりも光りき。今は秋陰暗として、空に異形の雲滿ち、海に蒼坐す岩の下まで滿々と湛へて、其涯きまで黯き面を點破する一帆の影だに見えず。

浪子は懷より一通の書を取り出しぬ。書中は唯兩三行、武骨なる筆蹟の、而も千萬語にまさりて浪子を思に堪へざらしめつ。「浪さんを思はざるの日は一日も無之候」此一句を讀む毎に、浪子は今更に胸迫りて、戀しさの切らるるばかり身に染みて覺ゆるなりき。

如何なれば斯く枉れる世ぞ。身は良人を戀ひ戀ひて病よりも思に死なむとし、良人は斯くも思ひて居玉ふを、如何なれば夫妻の緣は絶えけるぞ。良人の心は血よりも紅に注がれて此書中にあるならずや。現に此春此岩の上に、二人竝びて、萬世までもと誓ひしならずや。海も知れり。岩も記す可し。然るを如何なれば世は擅まゝに二人が間を裂きたるぞ。戀しき良人、懷かしき良人、此春此岩の上に、岩の上――。

浪子は眼を開きぬ。身は獨り岩の上に坐せり。海は默々として前に湛へ、後には瀧の音仄かに聞ゆるのみ。浪子は額打掩ひつゝ咽びぬ。細々と瘦せたる指を漏りて、涙ははら〳〵と岩に墮ちたり。

胸は亂れ、頭は次第に熱して、縱横に飛びかふ思は梭の如く過去を一日に織り出しつ。浪子は今年の春良人に扶け引かれて此岩に來りし時を思ひ、發病の時を思ひ、伊香保に遊べる時を思ひ、結婚の夕を思ひぬ。伯母に連れられて歸京せし時、昔々其母に別れし時、母の顏、父の顏、繼母、妹、を初めさま〴〵の顏は電光の如く其心の眼の前を過ぎつ。浪子は更に昨日千鶴子より聞きし舊友の一人を思ひぬ。彼方は浪子より二歳長けて一年早く大名華族の内にも才子の聞えある洋行歸りの某伯爵に嫁ぎしが、舅姑の氣には入りて、良人に嫌はれ、子供一人まうけながら、良人は内に妾を置き外に花柳の遊に淫り今年の春離緣となりしが、つい此頃病死したりと聞く。彼女は良人に棄てられて死し、吾身は相思ふ良人と裂かれて泣く。さま〴〵の世と思へば、彼も悲しく、此も辛く、浪子はいよいよ黯うなり來る海の面を眺めて太息をつきぬ。

思ふ程、氣はます〳〵亂れて、浪子は身を容るゝ餘裕もなき迄世の窄きを覺ゆるなり。身は何不足なき家に生れながら、懷かしき母には八歳の年に別れ、肩をすぼめて繼母の下に十年を送り、漸く良緣定まりて父の安堵吾も嬉しと思ふ間もなく、姑の氣には入らずとも良人の爲めには水火も厭はざる身の、思ひ掛けなき大疾を得て、其病も少しは痊らむとするを喜べる程もなく、死ねと云はるゝは猶慈悲の宣告を受け、愛し愛さるゝ良人はありながら容赦もなく間を裂かれて、夫と呼び妻と呼ばるゝこともならぬ身となり果てつ。若し其程不運なる可き身ならば、何故世には生れ來しぞ。何故母上と共に、吾も死なざりしぞ。何故に良人の許には嫁しつるぞ。何故に此病を發せし其時、良人の手に抱かれては死せざりしぞ。何故に、せめて彼恐ろしき宣告を聞ける其時、其場に倒れては死なざりしぞ。身には不治の病を懷きて、心は添はれぬ人を戀ふ。何の爲めにか世に永らふ可き。假令此病癒ゆとも、添はれずば思に死なむ──死なむ、死なむ。何の業ありて世に永らふ可き。

はふり落つる涙を拭ひもあへず、浪子は海の面を打瞰めぬ。

伊豆大島の方に當りて、墨色に濁まける雲急にむら〳〵と立つよと見る時、云ふ可からざる悲壯の音は遙の天空より落し來り、大海の面忽ち皺みぬ。一陣の風吹き出でけるなり。其風鬢を掠めて過ぎつと思ふ程なく眞黑き海の中央に一團の雲湧く〳〵と見る〳〵奔馬の如く寄せて、浪子が坐したる岩も碎けよとうちつけつ。渺々たる海洋は一分時ならずして千波萬波鼎の如く沸きぬ。

面を撲つ飛沫を避けむともせず、浪子は一心に水の面を瞰め入りぬ。彼水の下には死あり。死は或は自由なる可し。此病を懷いて世に苦まむより、魂魄となりて良人に添ふは優らずや。良人は今黃海にあり。假令遙なりとも、此水も黃海に通へるなり。さらば身は此海の泡と消えて、魂は良人の傍に行かむ。

武男が書をばしつかと懷に收め、風に亂るる鬢かき上げて、浪子は立ち上りぬ。

風は颼々として無邊の天より落し來り、辛うじて浪子は立ちぬ。眼を上ぐれば、雲は雲と相追うて空を奔り、海は眼の屆く限り一面に波と泡と眞白に煮えかへりつ。灣を隔つる櫻山は悲鳴して馬鬣の如く松を振ふ。風吼え、海哮り、山も鳴りて、浩々の音天地に滿ちぬ。

今なり、今なり、今こそ此玉の緒は絕ゆる時なれ。導き玉へ、母。許し玉へ、父。十九年の夢は、今こそ──。

襟引合せ、履物をぬぎ棄てつゝ、浪子は今打寄せし波の岩に碎けて白泡沸る邊を目がけて、身を躍らす。

其時、咄と背後に叫ぶ聲して、浪子に忽ち抱き止められつ。

（五）の一

「姥や。御茶を入れる樣にして御置き。最早彼方が入來つしやる時分ですよ」

斯く云ひつゝ浪子は徐ろに幾を顧みたり。幾は其處らを片付けながら、

「本當に彼方は好い方でムいますねエ。彼でも耶蘇でいらツしやいますツてねエ」

「あゝ其樣だツてね」

「でも彼樣な方が切支丹でいらツしやらうとは思ひませんでしたよ。加之彼樣に髮を切ツていらツしやるのですから」

「何故かい？」

「でもね、あなた、耶蘇の方では御亭主が亡くなツても髮なんぞ切りませんで、愈のこと假粧

粧飾をしましてね、すぐとまた御嫁入の口を採しますとさ」

「ほゝゝ、姥やは誰から其様な事を聞いたのかい？」

「イヽエ、本當でムいますよ。一體彼宗旨では、本若い娘までがそれは生意氣でムいましてね、本當でムいますよ。幾が親類の隣家に一人其様な娘がムいましてね、元はあなた温和しい娘で、其れが彼宗旨の學校に入る様になりますとね、あなた、悉皆容子が變つちまひましてね、日曜日になりますとね、あなた、母親が今日は忙しいから些と手傳でもしなさいと云ひましてもね、平氣でその御寺に行つちまひましてね、それから學校は綺麗だけれども家は汚くて不可ないの、母上は頑固だの、直ぐ口を尖らしましてね、加之學校に上つて居ましても、あなた、受取證が一枚書けませんでね、裁縫をさせますと、日がな一日襦袢の袖を捩くつて居ましてね、お惣菜の大根を湯煮なさいと申しますと、あなた、大根を俎板に載せまして、庖丁を持つたきり呆然して居るのでムいますよ。兩親も此様な事なら彼様な學校に入れるんぢやなかつたと悔んで居ましてね。其れにあなた、其娘は私はあの二百五十圓而下の月給の良人には嫁かない、なんぞ申しましてね。本當にあなた、呆れかへるぢやムいませんか。元は温和しい娘でしたのに、如何して彼様になつたんでムいませうねエ。此れが切支丹の魔法でムいませうね」

「ほゝゝ。其様でも困るのね。でも、何だッて、好い所もあれば、缺點もあるから、よく知らないでは云はれないよ。ねェ姥や」

心得ずと云はむが如く小首傾けし幾は、熱心に浪子を仰ぎつゝ、

「でもあなた、耶蘇だけは御止し遊ばせ」

浪子は含笑みつ。

「彼方と御話しては不可ないと云ふのかい」

「耶蘇が皆彼様な方だと宜うムいますがねエ、あなた。でも――」

幾は口を噤みぬ。噂をすれば影歴々と西側の障子に映り來れるなり。

「御庭口から御免下さい」

細く和らかなる女の聲響きて、忙しく幾が起ちて開けし障子の外には、五十あまりの婦人の小作りなるが彳みたり。年よりも老けて、多き白髪を短く剪り下げ、黒地の被布を着つ。瘦せたる上に憔れて見ゆれば、打見にはやゝ陰氣に思はるれど、眼に溫かなる光ありて、細き口元におのづからなる微笑あり。

幾が恰も噂したるは此人なり。未だし、一週以前の不動祠畔の水屑となる可かりし浪子を折よくも抱き留めたるは此人なりけり。

喇叭を吹き鼓を鳴らして名を賣ることをせざれば、知らざる者は名をだに聞かざれど、知れる者は其包むとすれど自づから身に溢るゝ光を浴びて、永く其人を忘るゝ能はずと云ふなり。姓は小川名は清子と呼ばれて、目黒の邊に大勢の孤兒女と棲み、一大家族の母として路傍に遺棄せらるゝ幾多の靈魂を拾ひては覆翼み育つるを樂としつ。肋膜炎に惱みし病餘の體を養ふとて、去月の末より此地に來れるなるが、彼日、恰も不動祠にありて圖らず浪子を抱き止め、其主人を尋ねあぐみて狼狽して來れる幾に浪子を渡せしより、おのづから往來の道は開けしなり。

（五）の二

茶を持て來て今罷らむとしつる幾は稍驚きて、

「まあ、明日御歸京遊ばすんで。ヘエヽ、折角御馴染になりかけましたのに」

老婦人も其和らかなる眼光に浪子を包みつゝ、

「私も今少し逗留して、御話も致しませうし、御鹽梅の宜いのを見て歸り度いのでムいますが——」

云ひつゝ懷中より小形の本を取り出し、

「此は聖書ですがね、まだ御覽になつたことはムいますまい」

浪子は未だ然る書を讀まざるなり。彼女が繼母は、其英國に留學しつる間は、信徒として知られけるが、歸朝の日其信仰と其聖書をば擧げて其古靴及反故と共に龍動の假寓に遣し來れるなり。

「はい、まだ拜見致した事はムいませんが」

幾は立去りかねて、老婦人が手中の書を、眼を圓にして瞻視りぬ。手品の種は彼中に、と思へるなる可し。

「此れから其の何でムいますよ、御氣分の宜しい時分に、讀んで御覽になりましたら、屹度御爲めになることがあらうと思ひますよ。私も今少し逗留して居ますと、色々御話も致すのですが……今日は御告別に、私が此書を讀む樣になりました其來歷を、御話したいと思ひますが。

あなた御疲れはなさいませんか。何なら御遠慮なく御臥なすツて」

しみ〴〵と耳傾けし浪子は顏を上げつ、

「否、些とも疲れは致しません。何卒御話し遊ばして」

茶を入れかへて、幾は次に立ちぬ。

小春日の午後は夜よりも靜かなり。海の音遠く、障子に映る松の影も動かず。唯遙かに小鳥の音の清きを聞く。東側の玻璃障子を透して、秋の空高く澄み、錦に染まれる櫻山は午後の日に燃えむとす。老婦人は徐ろに茶を啜りて、俯きて被布の膝をかい撫で、仰いで浪子の顏うちまもりつゝ、靜かに口を開き始めぬ。

「人の一生は長い樣で短く、短い樣で長いものですよ。

私の父は旗本で、先歴々の中でした。夙に人の有になつてしまつたのですが、御存じでいらツしやいませう、小石川の水道橋を渡つて、少し參りますと、大きな榎が茂つて居る處がありますが、私は彼屋敷に生れましたのです。十二の年に母は果てます、父は非常力を落しまして後妻も迎らなかつたのですから、子供ながら私が色々家事を遣つてましたね。それから弟に嫁をとつて、私は矢張旗下の、格式は少し上でしたが小川の家に參つたのが、二十一の年、あなた方はまだ中々御生れでもなかつた頃でムいますよ。

私も女大學で育てられて、辛抱なら人に負けぬ積でしたが、實際其場に當つて見ますと、本當に身に浸みて辛いことも隨分多いのでしてね、時勢が時勢で、良人は滅多に宅に居ませず、舅姑に良人の姉妹が二人——此は後で縁づきましたが——ありまして、まあ主人を五人もつた譯でした。それは人の知らぬ心配も致したのですよ。舅は其樣もなかつたのですが、姑が餘程事へ難い人でして、實は私の前に、嫁に來た婦人があつたのですが、半歳足らずの間に、逃げて歸つたと云ふことで、亡くなツた人を斯樣申すのははしたない樣ですが、氣暴な、押強い、辯も達者で、まあ俗に背を打つて咽をしむるなど申しますが、一寸其樣な人でした。私も十分辛抱をした積ですが、其でも時々は辛抱しきれないで、屏風の蔭で泣いて、赤い眼を見て叱られてまた泣いて、亡くなつた母を思ひ出すのも毎々でした。

其樣する内に維新の騷になりました。江戸中はまるで鍋の中の樣でしてね。良人も父も弟も皆彰義隊で上野に居ます。それに舅が大病で、私は懷姙と云ふのでせう。本當に氣が氣でなかつたのでした。

それから上野は落ちます、良人は宇都宮から段段函館まで參り、父は行方が分からなくなり、弟は上野で討死をいたして、其家族も失踪つてしまひますし、舅も途病死をしましてね、其中で私は產を致しますし、何が何やらもう夢の樣で、それから家祿はなくなる、家財は奪られますし、私は姑と年寄の僕を一人連れましてね、當歳の兒を抱いて彼箱根を踰えて靜岡に落つく迄は、恐ろしい夢を見た樣でした―

此時看護婦入り來りて、會釋しつゝ、藥を浪子にすゝめ終りて、出で行きたり。暫時瞑目してありし老婦人は眼を開きて、また語りつゞけぬ。

―靜岡での幕士の苦勞は、其は御話になりません位で、將軍家が先夜逃り、勝先生なんぞも裏小路の小さな家に籠つて御出の時節ですからね、五千石の私共に三人扶持は勿體ない譯ですが、併し恥しい御話ですが、其頃はお豆腐が一丁とは買へませんで、加之姑は贅澤に馴れて居るのですから、本當に氣を揉みましたよ。で、私はね、町の女子供を寄せて手習や、裁縫を教へたり、夜も晩くまで、賃仕事をしましてね。其は宜いのですが、姑は愈氣が荒くなりまして、時勢の所爲を私に負はす樣な譯で、それはひどく當りますし、良人は居ませず――良人は函館後は暫らく牢に入つて居ました――父の行方も分かりませんし、此樣な事なら死んだ方がと思つたことは日に幾度もありましたが、其を思ひ返し〳〵して居たのです。本當に此頃は一年に年の十もとりましたのですよ。

其樣する內に、良人も陸軍に召出さるゝ樣になつて、また箱根を越えて、最早東京ですね、其東京に歸つたのが、左樣、明治九年の春でした。其翌春良人は洋行を命ぜられましてね、朝夕の心配はない樣になつたのですが、姑の氣分は一向變りませず――其は宜いのでムいますが、氣にかゝる父の行方が如何しても分かりません。

良人が洋行しました其秋、非常雨の降る日でしたがね、小石川の知己まで參つて、其家で雇つて貰つた車に乘つて歸りかけたのです。日は暮れます、ひどい雨風で、私は幌の內に小さくなつて居ますと、車夫はほと〳〵〳〵〳〵引いて行きませう、襤褸笠を被つて繼たらけの桐油合羽を被て居るのですが、雨がたら〳〵〳〵〳〵合羽から落ちましてね、提灯の火はちよろ〳〵道の上に流れて、車夫は時々噎々太息をつきながら引いて行くのです。恰ど水道橋にかゝると、提灯が吹と消えたのです。車夫は梶棒を下ろして、奧樣、御氣の毒ですが、其蹴込の下に和蘭陀附木(マッチの事ですよ)が入つてますから、と云ふのでせう。風がひどいのでよくは聞えないのですが、其聲が變に聞いた樣でね、兎角してマッチを出して、蹴込の方に向いてマッチを擦る、其火光で車夫の顏を見ますと、あなた、父おちやムいませんか

老婦人は詞にもあらず額打掩ひぬ。浪子は汪然として泣けり。次の間にも歔欷の聲聞ゆ。

(五)の三

眼を拭ひて、老婦人は語り續けぬ。

一同じ東京に居ながら、知らずに居れば居られるものですねエ。それから父と連立つて、まあ近邊の蕎麥屋に參りましてね、樣子を聞いて見ますと、上野の落ちた後は諸處方々を流浪して、手習の先生をしたり、病氣したり、今は昔の家來で駒込の隅に極々小さな植木屋をして居る其者にかゝッて、自身は斯樣賃日貸車を挽いて居ると云ふのでムいますよ。嬉しいやら、悲しいのやら、情ないのやら、込み上げて、碌に話も出來ないのです。それからまあ其晩は父に心づけられて別れましてね。

夜も大分深けて居ました。歸るとあなた姑は待

受けて居たと云ふ體で、其は非道い怒り様苦り様で、情ないぢやムいませんか、私に何か闇らい、あるまじい所行でもある様に云ひましてね。胸をさすッて、父の事を打明けて申しますと、氣の毒と思つて呉れゝばですが、其はもう酷きづらい恥しい事を――餘り口惜くて、情なくて、今度ばかりは辛抱も何もない、もう／＼此家には居ない、今から直ぐに父の傍に行つて、と其様思ひましてね、姑が睡りましたあとで、窃と着物を着かへて、倅――六つでした――が斯様安んで居ます枕元で手紙を書いて居ますと、倅が夢でも見たのですか、眠つたまゝ右の手を伸して「母上、行つちや嫌よ」と申すのですよ。其日小石川に參る時置いて行つたのですから、其夢を見たのでせうが、實に一寸と其寢顏を見て居ますと、其顏が良人の顏其まゝになつて、私は筆を落して泣いて居ました。斯様すると、まあ如何して思ひ出したのでムいますか、まだ子供の時分にね、寝物語に母から聞いた嫁姑の話、彼話が彼様に胸に浮みましてね、あゝ私一人の辛抱で何も無事に治まることと、其様思ひ直しましてね――あなた、御退屈でせう？」

身に泌みて聽ける浪子は、答ふるまでもなく唯涙の顏を上げつ。幾が新に汲める茶を啜りて、老婦人は再び談緒をつぎぬ。

「其れから兎や角姑に詫びましてね。併し其様な次第ですから中々父を引取るの貢ぐのと云ふことは出來ません。で、まあ蔭で内々で少しは貢ぎ――多くもありませんでしたが――の物なんぞ賣り拂つたり、其も永くは續かないのですから、良人の知己に頼みましてね、或外國公使の夫人に、好きで日本の琴を習ひたいと云ふ人がありましてね。それで姑の前を兎や角して其れから月に幾回と數へて、先少しは父を楽にすることが出來たのですが、其様する内に、其夫人と懇意になりましてね、其は珍らしいやさしい人でして、時々は半端の日本語で色々話をしましてね、讀んで御覽なさいと云つて本を一冊呉れました。其れがね、其頃初めて和譯になつた馬太傳――此聖書の初にありますのでした。少し讀みかけて見たのですが、何だか變な事ばかり書いてありまして、まあ其儘に放棄つて置いたのでした。

其れから翌年の春、姑は突然中風になりましてね、氣の強い人でしたが、其はもう子供の様に、非常淋しがつて、一寸でもはづしますと、お清お清と直ぐ呼ぶのでムいますよ。側に坐つて、蠅を追ひながら、すや／＼眠る姑の顏を見て居ますと、本當に斯様なるものを何故一度でも心に憎んだことがあつたらう、出來ることなら今一度丈夫にしてと、其様思ひましてね、精一杯骨を折つたのですが、其甲斐もないのでした。姑が亡くなりますと程なく良人が歸朝しましてね、それから引取ると云ふ際になつて、父も安心した故ですか、急に病氣になつて、僅二三日で其れこそ眠る様に消えました。最早生涯會はれぬと思つた良人には會ふし、やさしくして呉れるし、自分程果報者は無いと、其様申しましてね。――でも私は思ふ十分一も出來ませんで、今でも思ひ出す度に今一度活かして思ふ存分喜ばして見たいと思はぬ時はありませんよ。

其れから良人は次第に立身致します、倅は大きくなりまして、私も餘程樂になつたのですが、唯氣を揉みましたのは、良人の大酒――軍人は多く其様ですが――の癖でした。其れから今でも矢張其様ですが、其頃は別してね、男子の方は不行跡で、良人なんぞはまあ西洋にも參りますし、少しは宜いのでしたが、其でも恥しい事ですが、私も随分心配を致しました。其となく異見をしましても、あなた、笑つて取合ひませんのですよ。

其様する内に彼十年の戰争になりまして、良人

――近衛の大佐でした――も參ります。其あとに倅が猩紅熱で、まあ日夜ハッきりでした。四月十八日の夜でした、倅が少し宜い方で眠んで居ますから、婢なぞも皆寢せまして、私は倅の枕元に、行燈の光で少し縫物をして居ますと、ついうと／＼致しましてね、斯樣氣が遠くなりますと、すうと人の來る氣はひが致して、倅の枕元に坐る者があるのです、誰かと思つて見ますと、あなた、良人です、軍服のまゝで、血だらけになりまして、蒼ざめて――ま、良人、思はず、ぶつた其聲にふッと眼がさめて、四邊を見ると誰も居ません。行燈の火がとろ／＼燃えて、倅はすや／＼眠つて居ます。もう悉皆汗になりまして、動悸が劇しくうつて――其翌日から倅は急に惡くなりまして、到頭其夕刻に息を引取りましてね。もう夢の樣になりまして其體を抱いて居る内に、着いたのが良人が討死の電報でした」

話者は口を噤み、聽者は息をのみ、室内森として水の如くなりぬ。

良久うして、老婦人は再び口を開けり。

「其れから一切夢中でしてね、日と月と一時に沈つたと申しませうか、何と申しませうね、其れこそ眞に眞暗になりまして、辛抱に辛抱して結局が此樣な事かと思ひますと、寧此儘癒らずに――すぐ其後で臥病ひましたのですよ――と思つたのですが、幸か不幸か病氣が段々よくなりましてね。

病氣はよくなつたのですが、最早私には世の中が悉皆空虛になつた樣で、たゞ生きて居ると云ふばかりでした。其樣する内に、知己の勸で兎に角家をたゝんで暫く其宅に參ることになりましてね、病後ながらぶら／＼道具や何角取り纏めて居ますと、何時でしたか簞笥を明けますとね、亡くなりました倅の袷の下から書が出て參りましてね、不圖見ますと先年外國公使の夫人が呉れました其聖書でムいますよ。讀むでもなくつい見て居ますと、一寸した文句が、斯樣妙に胸に響く樣な心地がしましてね――其は此書にも符號をつけて置きましたが――其れから知己の宅に越しましても、時々讀んで居ました。讀んで居ます内に、山道に迷つた者が何處かに鷄の聲を聞く樣な、眞闇な晩に微かな光が何處からか射す樣に思ひましてね。最早其書を呉れた公使の夫人は歸國して、居なかつたのですが、誰かに話を聞いて見たいと思つて居ます内に、知己の世話で其頃出來ました女の學校の舍監になつて見ますと、其れが耶蘇教主義の學校でして、其敎師の中にまだ若い御夫婦の方でしたが、其は熱心な方がありましてね、此御夫婦が私のまあ先達になつて下すつたのですよ。其先達に初歩を敎はつて此道に入りましてから、今年で最早十六年になりますが、杖とも思ふは實に此本で、一日も傍を放さないのでムいますよ。靈魂不死と云ふ事を信じてからは、死を限りと思つた世の中が廣くなりまして、天の父を知つてからは親を失つてまた大きな親を得た樣で、愛の働を聞いてからは子を失くしてまた大勢の子を持つた心地で、望と云ふ事を敎へられてから、辛抱をするにも樂がつきましてね――私が此本を讀む樣になりました來歷は先ざツと此樣でムいますよ」

斯く云ひ來りて、老婦人は熱心に浪子の顏打まもり、

「實は、貴樣には薄々承はつて居ましたし、彼樣して時々濱で御目にかゝるのですから、是非伺ひたいと思ふ事も度々あつたのですが、――其が斯樣不圖御心易く致す樣になりますと、また直ぐ御別れ申すのは、眞に殘念でムいますよ。併し斯樣申しては如何でムいますが、私には如何しても淺日の御面識の方とは思へませんよ。何卒御身を大事に遊ばして、必氣を永

く御許し遊ばして、ね、決して短氣を御出しなさらぬ樣に——御氣分の宜い時分は此書を御覽遊ばして——私は東京に歸りましても、朝夕此方の事を思つて居りますよ」

＊　　＊　　＊　　＊

老婦人は其翌日東京に去りぬ。然れど其晴れる一書は常に浪子の身近に置かれつ。

世には斯る不幸を經ても猶人を慰むる誠を餘せる人ありと思へば、母ならず伯母ならずして猶此茫々たる世に吾を思ひ呉るゝ人ありと思へば、浪子は聊か慰めらるゝ心地して、聞きつる履歷を時々思ひ出でては、心籠めたる贈物の一書を繙けるなり。

（六）の一

第二軍は十一月廿二日を以て旅順を攻落しつ。

「阿母、阿母」

新聞を持ちたるまゝ遽しく千鶴子は其母を呼びたり。

「何ですね、今些靜かに言を御云ひなさいな」

水色の眼鏡に一寸睨まれて、さつと面に紅潮を散らしながら、千鶴子はほゝと笑ひしが、また眞面目になりて、

「阿母、死ましたよ、彼男が——彼千々岩が！」

「エ、千々岩！　彼千々岩が！　如何して？　戰死かい？」

戰死將校の中に名が出て居るわ。——好い氣味！」

「また其樣なはしたないことを。——さうかい。彼千々岩が戰死したのかい！　でもよく戰死したねエ、千鶴さん」

「好い氣味！　彼樣な人は生きて居たツて、邪魔になるばかりだわ」

加藤子爵夫人は暫し默然として沈吟しぬ。

「死んでも誰一人泣いて呉れる者もない位では、生甲斐のないものだね、千鶴さん」

「でも川島の老媼が泣きませうよ。——川島ては、阿母、お豐さんが到頭逃げ出したんですツて」

「左樣かい？」

「昨日ね、また何か始めてね、最早々々此樣な家には居ないツて、泣き〳〵歸つちまひましたんですツて、ほゝほゝゝゝ、容子が見たかつたわ」

「誰が行つても彼家では納まるまいよ、晴千鶴さん」

母子相見て言葉途絶えぬ。

千々岩は死せるなり。千鶴子母子が右の問答をなしつるより二日を隔てて、一片の遺骨と一通の書と淋しき川島家に屆きたり。骨は千々岩の骨、書は武男の書なりき。其數節を摘みて。

（前文略）

旅順陷落の翌々日、第一師團第一聯隊の手に引取ることと相成、直ちに以下數名上陸致し、私儀も上陸仕候。激戰後の事とて、慘狀は筆紙に盡し難く（中略）假設野戰病院の前を通り候處、不圖擔架にて人を運び居候を見受申候。其額には白木綿のきれをかけて有之、其きれの下より見えし口元の樣如何にも見覺えある樣にて、尋ね申候得者、此は千々岩中尉と申候。其時の喫驚御察可被下候。（中略）覆をとり申候得ば、色蒼ざめ、緊く齒を切り居申候。創は下腹部に一ケ所、其他二ケ所、何れも椅子山砲臺攻擊の際受け候者にて、今朝まで知覺有之候處、終に絶息致候由。（中略）猶同人の同僚に就き色々承はり候處、彼は軍中の惡まれ者ながら戰爭の砌は隨分相働き、已に金州攻擊の際も、部下の

兵士と南門の先登を致候由にて、今回も中々働き候との事に御座候。尤も平生は往々士官の身にあるまじき所行も内々有之、陣中ながら身分不相應の金子を貯へ居申候。已に一度は雛子窩に於て、軍司令官閣下の嚴令あるに拘はらず、何か徴發致候とて土民に對し慘刻千萬の仕打有之已に其處分も可有之處、
(中略)兎も角戰死は彼が爲に勿怪の幸に可有之候。
母上樣御承知の通り、彼は重々不埒の廉も有之、彼が爲に、實に迷惑も致し、私儀も已に斷然絶交致居候事に有之候得共、死後に對しては恨も無御座、昔兄弟の樣に育ち候事など思ひ候得者、不覺の落涙も仕候事に御座候。依て許可を受け、火葬致し、骨を御送り申上候。可然御葬り置被下度、奉願候。
(下略)
武男が旅順にて遭遇しつる事は此に止まらず、故意書中に漏らしゝ一の出來事ありき。

（六）の二

武男が書中に漏れたる事實は、左の如くなり。

千々岩の死骸に會へる其日、武男は獨り遲れて埠頭の方に歸り居たり。日暮れぬ。

舍營の門口に見ゆる歩哨の銃劍、將校馬丁の聲、下士を叱り居る士官、呆れ顔に佇む清人、縱横に行き違ふ軍屬、其等の間を縫うて行けば、軍夫五六人、焚火にあたりつ。

「滅法寒いぢやねエか、故國に居りや、葱鮪で一盃てえ所だ。」

「吉、貴公アまた好い物引被けて居やがるぢやねえか」

吉と云はれし軍夫は、分捕なる可し、紫緞子の美々しき胴衣を着たり。

「源公を見ねえ、狐裘の四百兩もするてえやつを着てやがるぜ」

「源か、彼奴位馬鹿に運の强え奴ア無えぜ。博つちやア勝つ、遊んで褒美は貰えやがる、鐵砲玉ア中りッこなし。運の好いた彼奴の事だ。乃公なんざ大連灣でもつて、から負けちやつて、此沿一貫よ、畜生め、分捕でもやつツけねえぢや、本當に遣れり切ねえや」

「分捕も宜いが、用心けねえ、先刻も乃公アうつかり踏込むと、殺戮に來たと思ひやがつたンだね、突然樹の後から拔劍の清兵が飛び出しやがつて、乃公ア今些で婆娑に御別れよ。丁度兵隊さんが來て清兵め直ぐ斃つちまやがつたが。乃公ア肝潰しちやつたぜ」

「馬鹿な清兵ぢやねえか。未だ殺され足りねえてンだな」

旅順落ちて未だ幾日もあらざれば、實に清兵の人家に隱れて捜し出されて抵抗せし爲め殺さるゝも少なからざりけるなり。

聞くともなき話耳に入りて武男は聊か不快の念を動かしつゝ、次第に埠頭の方に近づきたり。此あたり人氣少なく、燈火疎らにして、一方に建て列ねたる造兵廠の影黑く地に敷き、一方には街燈の立ちたるが、薄月夜程の光を地に落し、瘠せたる狗ありて、地を嗅ぎて行けり。

武男は此建物の影に沿うて歩みつゝ、眼は忽ち二十間を隔てゝ先きに歩み行く二個の人影に注ぎたり。後影は確かに我陸軍の將校士官の中なる可し。一人は濶大に一人は細小なるが、打連れて物語などして行くさまなり。武男は其一人を何處か見覺ある樣に思ひぬ。

忽ち武男と彼兩人の間に更に人ありて建物の蔭を忍び行くを認めつ、胸不思議に躍りぬ。家の影さしたれば、明らかには見えざれど、影の中なる影は、一歩進みて止まり、二歩行きて覘ひ、まさしく二人の後を追うて次第に近き居るたり。たまたま家と家との間絶えて、

流れ込む街燈の光に武男は其の満人なるを認めつ。同時にものありて彼が手中に閃くを認めたり。「[illegible]打つぞ」、武男は竊かに足を早めて其後を慕ひぬ。

最先に歩める彼二人が今しも街の端に到れる時、闇中を歩める彼黒影は猛然と列を離れて、二人を追ひぬ。驚きたる武男がつゞいて走り出せる時、満人は已に六七間の距離に迫りて、右手は上り、短銃響き、細小なる一人は撲と倒れぬ、驚きて振り顧る他の一人を今一發、短銃の彈機をひかむとせる時、驀地に馳せつきたる武男は拳をあげて折れよと彼が右腕を敲きつ。短銃落ちぬ、驚き怒りてつかみかゝれる彼を、武男は打たむと組ふ。彼の獰猛大なる一人も走せ來りて武男に力を添へむとする時、短銃の音に驚かされたる衛兵士ばら／＼と走せ來り、武男が手にあまる満人を苦もなく取押へて引くゝりぬ。[illegible]同の顔に汗になりたる武男が混雑の間より出でける時、倒れし一人を扶け起せる彼の獰大なる一人に此方に向ひ來りぬ。此時街燈の光はまさしく片岡中將の面をば照らし出しぬ。

武男は思はず叫びぬ。

「ヤッ、閣下は！」

「おッ、貴下は！」

片岡中將は其副官と何處へか行ける歸途を、殊勝にも満人の狙へるなりき。副官の疵は重かりしが、中將は[illegible]も負はざりき。武男は[illegible]らずして乃ち[illegible]を[illegible]へるなりき。

* * * *

此事何れよりか傳はりて、浪子に達せし時、幾は[illegible]りなく欣びて、

「御覽遊ばせ、如何しても御縁が盡きぬのでムいますよ。精出して御養生遊ばせ。ねエ、精出して養生致しませうねエ」

浪子は淋しく打含笑みぬ。

（七）の一

戰爭の中に、年は暮れ、且つ明けて、明治二十八年となりぬ。

一月より二月にかけて威海衛落ち、北洋艦隊亡び、三月末には南の方澎湖列島已に我有に歸し、北の方には我大軍潮の如く進みて、遼河以東に隻騎の敵を見ず。尋で媾和使來り、四月中旬には平和條約締結の報遍ねく傳はり、三國干渉の噂について、遼東還附の事あり。同五月末大元帥陛下凱旋し玉ひて、戰爭は宛ながら大鵬の翼を收むる如く、寂然として已みぬ。

[illegible]に千々岩の[illegible]を救ひ、片岡中將の[illegible]を救ひし後、武男は[illegible]遠く南の方[illegible]六月初旬其[illegible]となりたるより久しく[illegible]して、[illegible]しき吾家の門を入りぬ。

想へば去年の六月、[illegible]を[illegible]て[illegible]したりしより已に一年を過ぎぬ。[illegible]か死[illegible]を[illegible]來て、[illegible]日の不快は薄らぐともなく[illegible]を減し、佐世保病院の[illegible]の日、[illegible]外[illegible]る夜は想[illegible]に[illegible]て[illegible]しことも[illegible]ぞ。

一年振りに歸りて見れば、家の内何の變りたることもなく、[illegible]の[illegible]に[illegible]つる[illegible]の額の新しくかけれるのみ。[illegible]は例の如く肥え太りて、僕[illegible]質[illegible]れりとて、一日床にあり。田崎は例の如く日々來りては、六疊の一間に控へ、例の如く[illegible]をとりてまた例刻に歸り行く、[illegible]に入れたる如き日々の事、見るもの、聞くもの、宛ながらに去年のまゝなり。武男は望を得て望を失へる心地しつ。一年振りに母に逢ひて、[illegible]き[illegible]に[illegible]えて久しき吾家の風呂に入りて、[illegible]安坐して、好める饌に向ひて、さて吊床ならぬ

黒天鵞絨の括り枕に疲れし頭を横へて、而も夢は結ばれず、枕邊近き時計の一二時を拍つまでも、眼はいよ〳〵冴えて、心の奥に一種鋭き苦痛を覺えしなり。

一年の月日は母子の破綻を繕ひぬ。少なくも繕へるが如く見えぬ。母も流石に喜びて其獨子を迎へたり。武男も母に會うて一の重荷をば卸しぬ。然れど二人が間は、顔見合せし其時より、全く隔なき能はざるを武男も母も覺えしなり。浪子の事をば、彼も問はず、此も語らざりなり。彼の問はざるは問ふことを欲せざるが爲めにあらずして、此の語らざるは彼の聞かむことを欲するを知らざるが爲めにはあらざりき。唯彼此共に此危險の問題をば努めて避けたるを、互に其と知りては、相對ひて話途絶ゆる毎におのづから座の安からざるを覺えしなり。

佐世保病院の贈物、旅順の彼出來事、夫はなくとも素より忘るゝ時はなきに、今昔共に棲みし家に歸り來て見れば、見る物事に其面影の忍ばれて、武男は怪しく心地亂れぬ。彼女は今何處に居るやらむ。吾が歸り來しと知らでやあらむ。思は千里も近しとすれど、緣絶えては一里も離れぬ片岡家、宛ながら日よりも遠く、彼女が伯母の家は呼べば應ふる近邊にありながら、何の顔ありて行きて其消息を問ふ可きぞ。想へば去年五月艦隊の演習に赴く時、逗子に立寄りて別を告げしが一生の別離とは知らざりき。彼時別莊の門に送り出でて「早く歸つて頂戴」と呼びし聲は今も耳底に殘れど、今は誰に向ひて「今歸つた」と云ふ可きぞ。

斯く思ひつゞけし武男は、一日横須賀に赴きし次に逗子に下りて、彼別墅の方に迷ひ行けば、表の門は閉ぢたり。偖は歸京せしかと思ひ訝びつゝ、裏口より入り見れば、老爺一人庭の草を挘り居つ。

（七）の二

武男が入り來る足音に、老爺は徐ろに振り顧りて、其と見るより聊か驚きたる體にて、鉢卷をとり、小腰を屈めながら、

「此は御出なさえまし。旦那樣ア何時御歸りでムエましたんで？」

「二三日前に歸つた。老爺も相變らず達者で宜いな」

「如何致しまして、はあ、ねッから宜けませんで、はあ御世話樣になりましてムエますよ」

「何かい、老爺は最早餘程長く留守をしとるのか？」

「否、何でムエますよ、其の、先月までは奥樣――ウンニヤ御孃――ごご御病人樣と姥やさんが御出なさつたんで、其後まア老爺が御留守を致して居るでムエますよ」

「其では先月歸京つたンだね。――では東京に居るのだな」

と武男は獨語ちぬ。

「はい、左樣さまで。殿樣が淸國から御歸りなさる其前に、東京に御歸りなさつたでムエますよ。はア、其れから殿樣と御一處に京都に行かつしやりました御樣子で、未だ歸京らつしやりますめえと、はや思ふでムエますよ」

「京都に？ ――では病氣が宜いのだな」

武男は再び獨語ちぬ。

「で、何時行つたのだね？」

「四五日前――」と云ひかけしが、老爺は不圖今の關係を思ひ出でて、云ひ過ぎはせざりしかと思ひ貌に忽ち口を噤みぬ。其と感ぜし武男は思はず顔を赧らめたり。

彼此相對ひて暫し默然として居たりしが、老爺は流石に氣の毒と思ひ返しゝ樣に、

「一寸戶を開けますべえ。旦那樣、御茶でも上つてまあ御休みなさッて御出なせエましよ」

「――何、構はずに置いて貰はう。一寸通りがかり

に答へたんだ—

云ひ捨てゝ武男は曾て來馴れし屋敷内を廻り見れば、流石に守る人あれば荒れざれど、戸は悉く閉めて、手水鉢の水絶え、庭の青葉は茂りに茂りて、處々に梅子こぼれ、青々としたる芝生に咲き殘れる薔薇の花半は落ちて、ほのかなる香は庭に滿ちたり。何處にも人の氣はなくて、唯後の松に蟬の音のみぞ喧しき。

武男は匆々に老爺に別れて、頭を垂れつゝ出で去りぬ。

在六日を經て、武男はまた家を辭して遠く南征の途に上ることとなりぬ。家に歸りて十幾日、他の同僚は凱旋の歡迎のと面白く騒ぎて過せるに引替へて、武男は面白からぬ日を送れり。遠く離れては流石になつかしかりし家も、歸りて見れば思ひの外に面白き事もなくて、武男は終に其の階段を消す可きものを得ざりしなり。母も其を知りて、苦々しく思へる容子は自づから言葉の端にあらはれぬ。武男も母の其と知れるを知り得て、相對ひて語る毎に、ものありて間を隔つる樣に覺えつ。されば母子の間は最早昔の如き親しみこそなけれ、武男は一年後の今の却て隔てよりも母に遠かれるを悩みて、猶遠かるを奈何ともする能はざりき。母子は冷然として別れぬ。

横須賀より乘る可かりしを、出發に垂とし て障ありて一日の期を愆りたれば、武男は呉より乘ることに定め、六月の十日と云ふに孤影蕭然として東海道列車に乘りぬ。

（八）の一

宇治の黄檗山を今しも出で來りたる三人連れ。六十餘と見ゆる鬢髪の紳士は、洋裝して、金頭のステッキを持ち、廿許りの淑女は黒縮緬の洋傘を翳し、其後より五十あまりの婢らしきが信玄袋を提げて從ひたり。

三人の出で來ると共に、門前に待ち居し三輛の車がら／＼と引き來るを、老紳士は洋傘の淑女を顧みて、

「好い天氣ぢや。些し歩いて見ては奈何か」

「歩きませう」

「御疲れは遊ばしませんか」と婢は口を添へつ。

「宜いよ、少しは歩いた方が—

「ぢや疲れたら乘るとして、先ぶら／＼歩いて見るも宜いぢやらう」

三輛の車を後に從へつゝ、三人は徐ろに歩み初めぬ。云ふ迄もなく此は片岡中將の一行なり。昨日奈良より宇治に宿りて、平等院を見、扇の芝の昔を弔ひ、今日は黄檗の停車場より大津の方へ行かむとするなり。

片岡中將は去る五月に遼東より凱旋しつ。一日浪子の[illegible]を招きて、浪子を伴ひ、其翌々日より、[illegible]を從へて飄然として京都に來り、閑雅なる河原の宿を擇みて、此處を根據地と定めつゝ、軍職を暫く棄てて平服に身を包み、人を避け、公會の招きを謝して、浪子を連れては彼女が意の欲ふまゝに、博覽會を初め名所古刹を遊覧し、西陣に織物を求め、清水に土産を買ひ、優遊の限りを盡して、こゝに十餘日を過ぎぬ。世間に嘗しく中將の行方を失ひて、浪子獨り其父を占めけるなり。

「黄檗を出れば日本の茶摘かな」茶摘の盛季は夙過ぎたれど、風に時々焙爐の香を送りて、此處其處に二番茶を摘む女の影も見ゆるなり。茶の間々は麥黄ばみ熟れて、處々と蠶の音聞ゆ。眼を上ぐれば神州の山遠く夏霞に消え、宇治川は麥の穂末を渡る白帆にあらはれつ。彼方の屋根の見ゆる停車場より午前の汽笛響き、野づらを渡り來て、打仰ぐ空には薄紫に焦れし雲行々と漂ひたり。

浪子は吐息つきぬ。
忽ち左手の畑路より、夫婦と見ゆる百姓二人話しもて出で來りぬ。午餉を終へて今しも圃に出で行くなる可し。男は鎌を腰にして、女は白手拭を冠り、歯を染め、土瓶の大なるを手に提げたり。出合ひざまに、立どまりて、暫し一行の様子を見し女は、行き過ぎたる男の後を小走りに追ひかけて、何か囁きつ。二人共に振り顧りて、女は美しく染めたる歯を見せて含笑みしが、また相語りつゝ花咲こぼるゝ畔道に入り行きたり。

浪子の眼は其後を追ひぬ。竹の子笠と白手拭は、次第に黄ばめる麥に沈みて、頓て影も見えずなりしと思へば忽ち畑の彼方より、
「卿は正宗、儂ア錆刀、卿は切れても、儂ア切れエ――ぬ」
歌ふ聲哀々として野づらに散りぬ。
浪子はさし俯きつ。
ふりかへり見し父中將は、
「草臥れたちやらう。どれ――」
云ひつゝ浪子の手をとりぬ。

（八）の二

中將は浪子の手をひきつゝ、
「年の經つは早いもンぢや。浪、卿は記憶えて居るかい、卿が幼少かつた頃、よく阿爺に負さつて、ぽん〳〵阿爺が横腹を蹴つたりし居つたが。さうぢや、卿が五つ六つの頃ぢやつたの」
「おほゝゝ、左様でムいましたよ。殿様が負遊ばしますと、少嬢様がよく御むづかり遊ばしたンでムいますね。――唯今も如何様に御羨ましがつていらッしやるかも分かりませんでムいますよ」と氣轉に老女が相槌うちぬ。
浪子は嬉しげに含笑みつ。
「駒か、駒には澤山土産でも持つて行くぢや。喃、浪、駒よか千鶴さんが羨ましがつとるぢやらう、一度此地に來たがつて居つたのぢやから――」
「左様でムいますよ。加藤の御嬢様が御出遊ばしたら、如何様に御羨やかでムいませう。――本當に私なぞおまあ此様な珍しい見物をさして頂きまして――あの何でムいますか、先刻渡りました彼川が宇治川で、あの螢の名所で、ではあの駒澤が深雪に逢ひました處でムいますね」
「はゝゝ、幾は中々學者ぢやの。――いや世の中の變遷は早いもンぢや。阿爺なぞが若かつた時分は、大阪から京へ上ると云ふと、何日も彼三十石で、鮓の様詰められたもンぢや、否、其れよか阿爺がの、二十の年ぢやつた、大西郷と有村――海江田と月照師を大阪迄逃出した後で、大事な要が出來て、阿爺が行くことになつて、さあ後追つかけたが、餘り急いで一文無しでな、――伏見から大阪まで川堤を走つたこともあつたンぢや。はゝゝ。――若いぢやないか、浪、草臥れると宜かん。最早、少し乘つたら奈何ぢや」
後れし車を麾き手招けば、からからと挽きて來、三人は乘りぬ。
「ぢや、徐々挽つて呉れ」
車は徐々に麥圃を穿ち、茶畑を貫きて、山科の方に向ひつ。
前なる父が頭の白髪を見つめて、浪子は思に沈みぬ。良人に別れ、不治の病を懷いて、父に伴はるゝ此遊を、嬉しと云はむか、哀しと思はむか。望も樂も世に盡き果てて遠からぬ死を待つ身を不幸と謂はゞ、其身を思ひ想ふ父の心も傷むに堪からず。浪子は限り無き父の愛を想ふにつけても、今の身は唯慰めらるゝ外に父を慰む可き道なきを哀しみつ。胸を忘れ人を離れて父子唯二人名殘の遊をなす今日此頃は、せめて子供の昔にかへりて、物見遊山も皆れから

すさみ、やがて消ゆ可き空蟬の身には要なき唐織物も、末は妹に記念の品と、殊に華美なるを選みしなり。

父を哀しと思へば、戀しきは良人武男。旅順に父の危難を助け玉ひしとばかり、後の消息は誰傳ふる者もなく、思は飛び夢は通へど、今は何處にか[illegible]玉ふらむ。逢ひたし、一度逢ひたし、生命ある中に一度、唯一度逢ひたしと思ふにつけて、先に聞きつる鄙歌の生憎耳に響き、彼百姓夫婦の睦じく語れる面影は眼前に浮び、樂しき粗布に引かへて憂を包む風通の袂恨めしく——

せぐり來る涙を手巾に抑へて、泣かじと唇を噛めば、生憎[illegible]の[illegible]りに漏れぬ。

中將は氣遣はしげに回顧りつ。

「最早宜うムいます」

浪子は纔かに笑を作りぬ。

＊　＊　＊　＊

山科に着きて、東行の列車に乘りぬ。上等室は他に人もなく、浪子は開ける窓の側に、父は彼方に坐して新聞を展げつ。

折から煙を噴き地を轟かして、神戸行の列車は東より來り、まさに出でむとする此方の列車と相並びたり、客車の戸を開閉する音、プラットフォームの砂利踏みにじりて驛夫の「山科、山科」と叫び過ぐる聲彼方に聞ゆると共に、汽笛鳴りて此方の列車は徐ろに動き初めぬ。開ける窓の下に坐して、浪子は徐ろに移り行く彼方の列車を眺めつ。恰も彼中等室の前に來し時、窓に頰杖つきたる洋裝の男と顔見合はしたり。

「まッ良人！」

「おッ浪さん！」

此は武男なりき。

車は過ぎむとす。狂せる如く、浪子は窓の外にのび上りて、手に持てる菫色の手巾を投げつけつ。

「御危うムいますよ、御孃樣」

幾は驚きて確と浪子の袂を握りぬ。

新聞手に持ちたるまゝ、中將も立上りて窓の外を望みたり。

列車は五間過ぎ——十間過ぎぬ。落つばかりのび上りて、回顧りたる浪子は、武男が狂へる如く彼手巾を振りて、何か呼べるを見つ。

忽ち軌道は山角を繞りぬ。兩窓の外青葉の山あるのみ、後に聞ゆる帛を裂く如き一聲は、今しも彼列車が西に走れるならむ。

浪子は顔打掩ひて、父の膝に俯きたり。

（九）の一

七月七日の夕、片岡中將の邸宅には、[illegible]く集ひて、皆低聲に言へり。[illegible]まれるなり。

豫ては一[illegible]の[illegible]も期せられつる京洛の遊より、中將父子の去月下旬俄かに歸り來れる時、玄關に出で迎へし者は、[illegible]ならざるも浪子の病勢大方ならず進めるを疑ふ能はざりき。果して醫師は、一診して覺えず顔色を變へたり。一月ならずして病勢遽かに加はれるが上に、心臓に著しき異状を認めたるなりき。是れより片岡家には、深夜も[illegible]えて、[illegible]間斷なく出入し、月末より逗子に[illegible]く可かりし子爵夫人も流石に暫し其行を見合しつ。

名醫の術も施すに由なく、幾が夜毎日毎の祈念も甲斐なく、病は日に募りて、數度の喀血、其間々には心[illegible]の[illegible]起り、[illegible]あと、は[illegible]として[illegible]を減じ、今日は昨日より、翌日は今日より、衰弱いよ〳〵加はりつ、其[illegible]を聞いて連夜眠らぬ父中將の音枕頭に來る毎に、浪子は仄かに笑みて苦しき息を忍びつゝ明かに言へど、うと〳〵となりては絶えず武[illegible]

男の名をば呼びぬ。

* * * *

今日明日と醫師の殊に戒めし其今日は夕となりて、部屋々々は燈遍ねく點きたれど、聲高に言ふ者もなければ、森々として人ありとは思はれず。今し下注射を終へたるあとを暫し靜かにすとて、廊下傳ひに隣家より出で來し二人の婦人は、小座敷の椅子に倚りつ。一人は加藤子爵夫人なり。今一人は曾て浪子を不動祠畔に救ひし彼老婦人なり。去年の秋の暮に別れしより、暫らく相見ざりしを、浪子が父に請ひて使して招けるなり。

「種々御親切に――有り難うムいます。姪も一度は御目にかゝつて御禮を申さなければならぬと、其樣言ひ〳〵致して居りましたのですが――御眼にかゝりまして本望でムいませう」

加藤子爵夫人は纔かに口を開きぬ。

答ふ可き辭を知らざる樣に、老婦人は唯太息つきて頭を下げつ。やゝありて聲を低くし、

「で――は何方に御出なさいますので？」

「臺灣に參つたさうでムいます」

「臺灣！」

老婦人は再び太息つきぬ。

加藤子爵夫人は湧き來る涙を辛うじて抑へつ。

「でムいませんと、彼通り思つて居るのでムいますから、世間體は如何とも致して、逢はせもいたしませうし暇乞も致させたいのですが――何を云つても昨日今日臺灣に着いたばかり、其れが外と違つて軍艦に乘つて居るのでムいますから――」

折から片岡夫人入り來つ。其後より眼を泣腫らしたる千鶴子は急ぎ足に入り來りて、其母を呼びたり。

（九）の二

日は暮れぬ。去年の夏新に建てられし離家の八疊には、燭臺の光ほのかにさして、大なる寢臺一つ据ゑられたり。其雪白なる敷布の上に、眼を閉ぢて、浪子は横はりぬ。

二年に近き病に、瘦せ果てし軀は更に瘦せて、肉と云ふ肉は落ち、骨と云ふ骨は露はれ、蒼白き面のいとゞ透き徹りて、唯黑髮のみ昔ながらに艶々と照れるを、長く組みて枕上に垂らしたり。枕頭には白衣の看護婦が氷に和せし赤酒を時々筆に含まして浪子の脣を濕しつ。此方には今一人の看護婦と共に、眼凹み頰落ちたる幾が俯きて足を摩りぬ。室内森々として、唯忽ち急に忽ち微かになり行く浪子の呼吸の聞ゆるのみ。

忽ち長き息つきて、浪子は目を開き、微かなる聲を漏らしつ。

「伯母さまは――？」

「來ましたよ」

言ひつゝ徐かに入り來りし加藤子爵夫人は、看護婦が薦むる椅子を更に臥床近く引寄せつ。

「少しは睡れましたか。――何？ 左樣かい。では――」

看護婦と幾を顧みつゝ、

「少しの間彼方へ」

三人を出し遣りて、伯母は猶近く椅子を寄せ、浪子の額にかゝる後れ毛を撫で上げて、しげしげと其顏を瞻めぬ。浪子も伯母の顏を眺めぬ。

やゝありて浪子は太息と共に、わな〳〵と戰ふ手をさしのべて、枕の下より一通の封せし書を取り出し、

「此を――屆けて――私がなくなつた後で――」

ほろ〳〵とこぼす涙を拭ひやりつゝ、加藤子爵夫人は、更に眼鏡の下よりはふり落つる涙を拭ひて其書を確と懷に藏め、

「屆けるよ、屹度私が武男さんに手渡すよ」

「其れから――此指環は――」

左手を伯母の膝にのせつ。其第四指に燦然と

照るは一昨年の秋、新婚の時武男が送りしなり。去年去られし時、彼家に属するものをば悉く送りしも、独り此のみ愛みて手離すに忍びざりき。

「此は──持つて──行きますよ」

新に湧き来る涙を抑へて、加藤夫人は唯頷きつ。浪子は眼を閉ぢぬ。やゝありてまた開きつ、

「如何していらツしやるでせう？」

「武男さんは最早台湾に着いて、屹度種々此方を思ひやつて居なさるでせう。近くにさへ居なされば、如何ともして、ね、──其様阿爺も仰有つて御出たけれども──浪さん、貴嬢の心尽しは屹度私が──手紙も確かに届けるから」

幽かなる笑は浪子の唇に上りしが、忽ち色なき頬のあたり紅をさし来り、胸は波うち、燃ゆばかり熱き涙はら〳〵と苦しき息をつき、

「あゝ辛い！ 辛い！ 最早──最早婦人なんぞに──生れはしませんよ。──あゝあ！」

眉を顰め胸を抑へて、浪子は身を悶えつ。急に医を呼びつゝ、赤酒を含ませむとする加藤夫人の手に縋りて半起き上り、生命を縮むる咳嗽と共に、咽を衝いて一盞の紅血を吐きつ。昏々として死床の上に倒れぬ。

声と共に、皆入りぬ。

（九）の三

医師は騒がず看護婦を呼びて、応急の手段を施しつ。指図して寝床に近き玻璃窓を開かせたり。

涼しき空気は一陣水の如く流れ込みぬ。真黒き木立の背ほのかに明みたるは、月出でむとするなる可し。

父中将を首として、子爵夫人、加藤子爵夫人、千鶴子、駒子、及び浪子も次第に臥床を繞りて居流れたり。風はそよ吹きて已に死せるが如く横はる浪子の鬢髪を戦がし、医は頻りに患者の面を覗ひつゝ脈をとれば、此方に立てる看護婦が手中の紙燭ははた〳〵とゆらめいたり。

十分過ぎ十五分過ぎぬ。寂かなる室内闃かに吐息聞えて、浪子の唇纔かに動きつ。医は手づから一匙の赤酒を口中に注ぎぬ。長き吐息は再び寂なる室内に響きて、

「帰りませう、帰りませう、ねエあなた──阿母、来ますよ来ますよ──おゝ未だ──此処に」

浪子はぱつちりと眼を開きぬ。

恰も林端に上れる月は一道の幽光を射て、惘々としたる浪子の顔を照せり。

医師は中将に目くばせして、片隅に退きつ。中将は進みて浪子の手を執り、

「浪、気がついたか、阿爺さんぢやぞ。──皆此処に居る」

徐ろに見廻はし浪子の眼は次第に動きて、父中将の涙に曇れる眼と相会ひぬ。

「阿爺──御大切に」

ほろ〳〵涙をこぼしつゝ、浪子はわづかに右手を伸して、其左を握れる父の手を握りぬ。

「阿母」

子爵夫人は進みて浪子の涙を拭ひつ。浪子は其手を執り、

「阿母──御免──遊ばして」

子爵夫人の唇は顫ひ、物も得言はず顔打掩ひて退きぬ。

加藤子爵夫人は泣き沈む千鶴子を励ましつゝ、かはる〳〵進みて浪子の手を握り、駒子も進みて姉の床側に跪きぬ。顫く手をあげて、浪子は妹の前髪をかい撫でつ。

「駒ちやん──左様なら──」

言ひかけて、苦しき息をつけば、駒子は打顫ひつゝ一匙の赤酒を姉の唇に注ぎぬ。浪子は閉ぢたる眼を開きつゝ、見廻して、

「毅一さん──道ちやん──は？」

一人の子兒は子爵夫人の計らひとして、已に月の初めより避暑に赴けるなり。浪子は頷きて、[illegible]、恍惚となりつ。

此時[illegible]に泣き浸りたる幾は、突と身を起して、力無く垂れし浪子の手を犇と兩手に握りぬ。

「姥や——」

「お、お、お、孃様、姥も御一處に——」

泣き崩るゝ幾を纔かに次に立たしたるあとは、[illegible]として水の如くなりぬ。浪子は口を閉ぢ、眼を閉ぢ、死の影は次第に其面を掩はむとす。

中將は更に進みて、

「浪、何も言遺す事は無いか。——確かりせい」

なつかしき聲に呼びかへされて、纔に開ける眼は加藤子爵夫人に注ぎつ。夫人は浪子の手を執り、

「浪さん、何も私がうけ合つた。安心して、阿母の所に御出」

[illegible]かなる微咲の脣に上ると見れば、見る見る瞼を閉ぢて、眠るが如く息絶えぬ。

さし入る月は蒼白き面を照らして、微咲は猶脣に浮べり。然れど浪子は永く眠れるなり。

* * * *

三日を隔てて、浪子は青山墓地に葬られぬ。

交遊廣き片岡中將の事なれば、會葬者は極めて衆く、浪子が同窓の涙を掩うて見送れるも多かりき。少しく仔細を知れる者は中將の暗涙を帶びて棺側に立つを見て斷腸の思をなせしが、知らざる者も老女の幾が吾を忘れて棺に縋り泣き口說けるに袖を濡らしたり。

故人は妙齡の淑女なればにや、夏ながらさまざまの生花の寄贈多かりき。其中に四十あまりの羽織袴の男が齎らしつるもののみは、中將の玄關より突き返されつ。其生花には「川島家」の札ありき。

(十)の一

四月あまり過ぎたり。

霜に染みたる南天の影長々と庭に臥す午後四時過ぎ、相も變らず肥えに肥えたる川島未亡人は、やをら障子を開けて椽側に出で來り、手水鉢に立寄りて、水なきに舌鼓を鳴らしつ。

「松、——竹——」

呼ぶ聲に一人は庭口より一人は椽側より遽しく走り來つ、恐慌の色は面にあらはれたり。

「汝達は何をしとッか。先日もいつといたぢやなつか、こ、これを見なさい」

柄杓をとつて、空虚の手水鉢をからからとかき廻はせば、色を失へる二人は唯息を呑みつ。

「早よせんか」

耳近き落雷にいよいよ色を失ひて、二人は去りぬ。未亡人は何か口の中に呟きつゝ、頓て齎らし來し水に手を洗ひて、入らむとする時他の一人は入り來りて小膝を屈めたり。

「何か」

「山木樣と仰有います方が——」

言終らざるに、一種の冷笑は不平と相半ばにして面積廣き未亡人の顏を掠ひぬ。實を言へば去年の秋お豐が逃げ歸りたる以後は自づから山木の足も遠かりき。山木は去年此後の戰爭に[illegible]の利を占めける由を聞き知りて、川島未亡人はいよいよ以て山木の仕打に不滿を懷き、召使に對ひて恩の忘るべからざるを說法する每に、暗に山木を實例にとれるなりき。而も習慣は終に勝を占めぬ。

「通しなさい」

頓て座敷に通れる山木は幾度か彼赤黑子の顏を上げ下げつ。

「山木さん、久し振ごあんすな」

「いや、御隱居樣、如何も申譯ない御無沙汰を

致しました、是非御伺ひ申すのでムいましたが、其の、戦争後に商用でもつて始終彼方此方致して居りまして、――先づ御壮健で御目出度う存じます」

「山木さん、[illegible]やしつかい[illegible]かつたでごあんそいな」

「へ、ゝゝゝ、如何致しまして――まあ、御蔭さまで其の、兎や角、へゝゝゝゝ」

折から小間使が水引かけたる品々を[illegible]に捧げ来つ。

「お[illegible]様の――」と室の中央に差出して、[illegible]りぬ。

じろり一瞥して其の上の物に見くれて、やゝ満足の笑は未亡人の[illegible]にあらはれたり。

「此は種々氣の毒でごあすの、ほゝゝゝ」

「否、御[illegible]仕りまして。ついほんの、其の――」

「いや、[illegible]れましたが、武――[illegible]様も大尉に御昇進遊ばして、御勲章や御賜金がムいましたさうで、實は先日新聞で拝見致しまして――御目出度うムいました。で、唯今は何方――佐世保に御出でムいませうか」

「武でごあんすか、武は昨日帰つて来申した」

「へエ、昨日？ 昨日御帰りで？ へエ、それはそれは、それはよくこそ、御變りもムいませんで？」

「相變らず坊ちやまで困いますよ。ほゝゝゝ、今日は朝から出て、未だ帰いません」

「へエ、其は、先づ御帰で御安心でムいます。いや御安心と申しますと、[illegible]も誠に[illegible]氣の毒でムいました。たしか最早百ヶ日も御過ぎなさいましたさうで――併し[illegible]御病氣ばかりは如何も致し方のないもので、御隠居様、流石御[illegible]が[illegible]きましたね」

[illegible]川島未亡人[illegible]らしつ。

「彼女の事ぢや、私も實に困いましたよ。[illegible]は[illegible]違ふ、[illegible]と離縁までする、其結句にや鬼婆の[illegible]云はるゝ、[illegible]のいかん娘御ぢやつてな、山木さん――。加之彼女が死んだと聞いたから、[illegible]儀に田崎を遣つて、生花を[illegible]、遣つたと思ひなさい、[illegible]所が――[illegible]して[illegible]申した、[illegible]ちやごあはんか、[illegible]」

浪子が死せしと聞きし其時は、未亡人も流石に[illegible]はせざりしが、其のたまへ[illegible]りし生花の一も二もなく突返されしにて、[illegible]の感情はさらりと消えて、[illegible]のみ残りしなり、

「へエ、それは――其はまた[illegible]な――いや、御隠居様――」

小間使が捧げ来れる一碗の茗に滑らかなる唇を濕し、

「昨年末は[illegible]御世話に相成りましてムいますが、[illegible]――豊も近々に[illegible]に遣ることに致しまして――」

「お[illegible]――其はまあ――そして先方は？」

「先方は[illegible]で、目下[illegible]務省の○○課長を致して居る男で、御存じでムいませうが、○○と申します人でムいまして、千々岩さんなども元世話に――や、千々岩と申しますと、誠に[illegible]、未だ若い御方を、[illegible]でムいました」

一[illegible]の[illegible]未亡人の[illegible]。

「[illegible]は[illegible]なもんでごあすの、山木さん。――其の[illegible]は何日？」

「[illegible]まして[illegible]を[illegible]ましてムいます――[illegible]御隠居様、如何か一つ[illegible]下さいます様に、――[illegible]に[illegible]と申しますれば、へゝゝ、[illegible]の[illegible]らムいます[illegible]で、――何卒是非――實は[illegible]も出ます筈でムいますが、其の、取り込んで居ますので――武――[illegible]も何卒――」

未亡人は頷きつ。折から[illegible]を[illegible]上の[illegible]時計を顧みて、

「おゝ最早五時すぎや。日が短いな。武は如何しつろかい」

（十）の二

白菊を手に提げし海軍士官、青山南町の方より共同墓地に入り来りぬ。

恰も新嘗祭の空青々と晴れて、午後の日光は墓地に満ちたり。秋は此処にも紅に照れる桜の葉はらり〳〵と落ちて、仕切の籬に咲む山茶花の香ほのかに、線香の煙立上る辺には小鳥の声幽に聞えぬ。今笄町の方に過ぎし車の音微かになりて消えたる後は、寂けさ一入増り、唯遥かに響く都城の轟々の、此寂寞に和して、彼現と此夢と相共に人生の哀歌を奏するのみ。

墓籬の間より衣の影閃々見えて、頓て出で来し廿七八の婦人、眼を泣らして、水兵服の七歳許の男児の手を引きたるが、海軍士官と行きすりて、五六歩過ぎし時、

「阿母、彼をぢさんも矢張海軍ね」

と云ふ子供の声聞えて、婦人は手巾に顔を掩へて行きぬ。其とも知らぬ海軍士官は、道を考ふる様に屢々立留りては新しき墓標を読みつゝ、不図一等墓地の中に松桜を交へ植ゑたる一劃の塋域の前に到り、頷きて立止まり、垣の小門の閂を揺かせば、手に従つて開きつ。正面には年経たる石塔あり。士官は突と入りて見廻し、横手の稍新しき墓標の前に立てり。松は墓標の上に翠蓋を擎して、黄ばみ紅らめる桜の落葉点々として之を繞り、近頃立てしと覚ゆる卒塔婆は簇々として之を護りぬ。墓標には墨痕鮮やかに「片岡浪子之墓」の六字を書けり。海軍士官は墓標を瞻めて石の如く突立ちたり。良久しうして、唇は震ひ、嗚咽は咬ひしばりたる歯を漏れぬ。

* * * *

武男は昨日帰れるなり。

五ヶ月前山科の停車場に今此墓標の下に臥す人と相見し後は、征台の艦中に加藤子爵夫人の書に接して、浪子の已に世にあらざるを知りつ。昨日帰り、今日は、加藤子爵夫人を訪ひて、午過ぐるまで其話に腸を断ち、今此処に来れるなり。

武男は墓標の前に立ち、吾を忘れて良久しく哭したり。

三年の幻影はかはる〳〵涙の狭霧の中に浮みつ。新婚の日、伊香保の遊、不動祠畔の誓、逗子の別墅に別れし夕、最後に山科に相見し其日、此等は電光の如く漸次に心に現はれぬ。「早く帰つて頂戴！」と云ひし言は耳にあれど、一度帰れば彼女は已に我家の妻ならず、二度帰りし今日は已に此世の人ならず。

「あゝ、浪さん、何故死んでしまつた！」

吾れ知らず言ひて、涙は新に泉と湧きぬ。

一陣の風頭上を過ぎて、桜の葉はら〳〵と墓標を撲つて翻りつ。不図心づきて武男は涙を押拭ひつゝ、墓標の下に立寄りて、やゝ萎れたる花立の花を抜き棄て、持て来し白菊を插み、手づから落葉を掃ひ、内衣兜をかい探りて一通の書を取り出でぬ。

此は浪子の絶筆なり。今日加藤子爵夫人の手より受取りて読みし時の心は如何なりしぞ。武男は書を披きぬ。仮名書の美しかりし手蹟は痕もなく、病人の筆かと疑ふ迄字は震ひ墨は泥みて、涙の痕班々として残れるを見ずや。

もはや最後も遠からず覚え候まゝ一筆残しあげ参らせ候　今生にては御目もじの節もなきことと存じ居候ところ天の御憐れみにて先日は不慮の御目もじ申しあげ嬉しく〳〵併し汽車内のこととて何も心に任せ申さず誠に〳〵残り多く存上まゐらせ候

車の窓に身を凭えて菫色の手巾を投げし其時の光景は、歴々と眼前に浮びつ。武男は眼

を上げぬ。前には唯墓標あり。

　儘ならぬ世に候へば何も不運と存じ誰も恨み申さず此まゝに身は土と朽ち果て候とも魂は永く御側に附き添ひ——

「阿爺、誰か來てますよ」と涼しき子供の聲耳近に響きつ。引つゞいて同じ聲の、

「阿爺、川島の兄君が」と叫びつゝ、花を提げたる十許りの男兒武男が側に走り寄りぬ。

　驚きたる武男は、浪子の遺書を持ちたるまゝ、淚を拂つてふりかへりつゝ、恰も墓門に立ちたる片岡中將と顏見合したり。

　武男は頭を低れつ。

　忽ち武男は無手と吾手を握られ、ふり仰げば、淚を浮べし片岡中將の双眼と相對ひぬ。

「武男さん、わたしも辛かつた！」

　互に手を握りつゝ、二人が淚は滴々として墓標の下に落ちたり。

　稍ありて中將は淚を拂ひつ。武男が肩を敲きて、

「武男君、浪は死んでも、喃、わたしは矢張卿の爺ぢや。確かい頼んますぞ。——前途遼遠しぢや。——あゝ、久し振、武男さん、一處に行つて、寛々臺灣の話でも聞かう！」

（明治三十二年十二月作）

第百版不如歸の巻首に

不如歸が百版になるので、校正かた〴〵久し振りに讀んで見た。お坊ちゃん小說である、單純な說話で置いたらまだしも、無理に場面を賑はすためかき集めた千々岩山木の安つぽい芝居がかりやら、小川某女の蛇足やら、あらを云つたら限りが無い。百版と云ふ呼聲に對しても今些どうにかしたい氣もする。併し今更書き直すのも面倒だし、到頭ほンの校正だけにした。

　十年ぶりに讀んで居る中に端無く思ひ起した事がある。其は斯小說の胚胎せられた一夕の事、最早十二年前である。相州逗子の柳屋と云ふ家の間を借りて住んで居た頃、病後の保養に童男一人連れて來られた婦人があつた。夏の眞盛りで、宿と云ふ宿は皆塞がつて、途方に暮れて居られるのを見兼ねて、妻と相談の上自分等が借りて居た八疊二室の其一を御用立てることにした。夏のことで中の仕切は形ばかりの小襖一重、風も通せば話も通ふ。一月ばかりの間に大分懇意になつた。三十四五の苦勞をした人で、（不如歸の小川某女では無い）大層情の深い話上手の方だつた。夏も末方のちと曇つてしめやかな晩方の事、童男は遊びに出てしまふ、婦人と自分と妻と雜談して居る内、不圖婦人が左る悲慘の事實譚を話し出された。最早其頃は知る人は知つて居たが自分にはまだ初耳の「浪子」の話である。「浪さん」が肺結核で離緣された事、「武男君」は悲しんだ事、片岡中將が怒つて女を引取つた事、病女の爲めに静養室を建てた事、一生の名殘に「浪さん」を連れて京阪の遊をした事、川島家からよこした葬式の生花を突返した事、單に此丈が話の中の事實であつた。婦人は鼻をつまらせつゝしみじみ話す。自分は床柱にもたれてぼんやり聽いて居る。妻は頭を低れて居る。日はいつか暮れてしまうた。古びた田舍家の間内が薄闇くなつて、話す人の浴衣ばかり白く見える。臨終のあはれを話して、一さうお云ひだつたさうですつてね——もうもう二度と女なんかに生れはしない——」と云ひかけて婦人は歔欷して話をきつて了うた。自分の脊髓をあるものが電の如く走つた。

婦人は間もなく健康になつて、彼一夕の談を置土産に都に歸られた。逗子の秋は寂しくなる。話の印象はいつまでも消えない。朝な夕な波は哀音を送つて、蕭瑟たる秋光の濱に立てば影なき人の姿がつい眼前に現はれる。可哀想は過ぎて苦痛になつた。如何にかしなければならなくなつた。そこで話の骨に勝手な肉をつけて一篇未熟の小說を起草して國民新聞に掲げ、後一冊として民友社から出版したのが此小說不如歸である。

で、不如歸のまづいのは自分が不才の致す所、其にも關せず讀者の感を惹く節があるなら、其は逗子の夏の一夕にある婦人の口に藉つて訴へた「浪子」が自から讀者諸君に語るのである。要するに自分は電話の「線」になつたまでのこと。

明治四十二年二月二日
昔の武藏野今は東京府下
北多摩郡千歲村粕谷の里にて

德冨健次郎識

秋さびし

（『みゝずのたはこと』の「落穗の掻き寄せ」より）

今日はさびしい日である。

ダリヤの園を通ると、二尺あまりの茶色の紐が動いて居る、と見たは蛇だつた。蜥蜴の樣な纖い頭をあげて、黑い針の樣な舌をペラ〳〵させて居る。殺さうか殺すまいかと躊躇して見て居る内に、彼は直ぐ其處にある徑一寸ばかりの穴に這入りかけた。見る中に吸はるゝ樣にズルズルと辷り込んで了うた。

園内を歩くと、蟬のヌケ殼が幾個も落ちて居る。昨夜は室内で、小さなものの臨終の呻吟の樣なかすかな鳴聲を聞いたが、今朝見ればオルガンの上に弱りはてたスヰッチョが居た。彼は未だ死に得ない。而して死に得る迄鳴く可く餘儀なくされるのである。

自然は老いて行く。座敷の前を蜂が一疋歩いて行く。兩羽をつまんでも、螫さうともせぬ。何に弱つてか、彼は飛ぶ力もたぬのである。そつと地に下ろしたら、また芝生の方へそろそろ歩いて行く。

今日はさびしい日である。

午前は曇つて泣き出しさうな日であつた。

午後になつて、いやに蒸暑い空氣が湛へた。懶い自然の氣を感じて、眼ざとい鶴子が晝寢した。掃き溜には、犬のデカがぐたりと寢て居る。芝生には、猫のトラが眠つて居る。

南から風が吹く。暖かい事は六月の風の樣で、目を瞑つて聞くと、冬も深い凩の響がする。

今日はさびしい日である。

今は午後四時である。雲を漏れて、西日の光がぱつと射して來た。散りかゝつた滿庭のコスモスや、咲きかゝつた菊や、殘る紅の葉鷄頭や、蜂虻の群がる金剛纂の白い大きな花や、ぼうつと黃を含んだ芝生や、下葉の褐色に凋れて乾いた萩や白樺や落葉松や、皆夕日に寂しく榮えて居る。鮮やかであるが、泣いて居る。美はしいが、寂しい。

今日はさびしい日である。

（大正元年十月二十八日）

思出の記

"All things are engaged in writing their history. The planet, the pebble, goes attended by shadow. The rolling rock leaves its scratches on the mountain; the river, its channel in the soil; the animal, its bones in the stratum, the fern and leaf, their modest epitaph in the coal. The falling drop makes its sculpture in the sand or the stone. Not a foot step into snow, or along the ground but prints, in characters more or less lasting, a map of its march"
—*Emerson.*

三十年前われを其膝に抱きて桃太郎かちかち山の話をきかしめ給ひ三十年後の今日も銀鬂を撫してわれに世道人心の重んず可きを誨へ給ふ吾父君のことし八十の齢を重ね給ひし賀の御祝ひに此つたなき物語を獻ず

一の巻

(一)

古の君子は、よく十歳にして經國の志を起すの、三歳にして字を識るの、穎異人に絕するの、二葉より芳しのと云ふが、凡人の吾儕憗かしながら自傳の第一章を飾る可き事を有たない。この凡庸な頭に、「吾」と云ふもののぼんやり宿つたのは、左樣、先づ十一の年。僕が若し政治家なら、其年は恰も大久保甲東が紀尾井坂に濃厚な血を濺いだ年として、特筆大書するのであるが、政治家で無いから、其要も無い。併し兎に角十一歳は僕にとつて記憶すべき年であつた。其年の春に父は一家を破產し、其年の秋に僕は父を喪つたのである。

僕の故鄕は九州、九州の一寸眞中で、海遠い地方。幅一里長さ三里と云ふ「もつさう」の底見たやうな谷は、僕の搖籃です。何方向いても雜木山がぐるりと屛風を立て廻し、其上から春は碧くなり冬は白くなる遠山がちよい〳〵顏を出して居る。尤も高いのは、東に一峰孤立した高鞍山で、誰が天邊に乘捨てたのか宛ながら鞍を置いた樣、雨が降る前には必ず此岳に雲がかゝり、此岳が見え出すと如何樣に降つて居ても頓て晴れる、雲がかゝるのも日の射すのも先づ此山が第一で、云はゞ僕が故鄕の氣象臺だ。四方の山から滾々と湧出づる清水は、滙り集つて村人の所謂大川小川の二流となり、十分に谷を濕して居る。谷は一面の田――其田を無理に排けて、此處に村が一撮、彼處に家が二三十、此隅にあるのが妻籠の里と云つて先づ此谷の都で、町と云へば町、戶數は千に足らない。

取出でて云ふ程でも無いが、今も忘れ難く思ふのは、水の淸いのと、稻の美しさである。たしか東京に積出して鮨米になるさうな。實に其稻葉の艷々と青んで、蜒々と立揃つた所は、都人士に見せもしたい。實に見せたいですよ。蛙の聲を踏分けて一村總出の田植時、早乙女の白手拭がひらり〳〵と風に靡いて、畦から畦に田植歌の流るゝ頃の賑ひを。それから炎天の田草取は傍で見ても辛いが、併し夕立! 暑い、堪らぬと云ふ下から殷々鳴出す。突然大氣が冷える。ふつと見ると、黑雲が最早高鞍山を七分通り呑んで居る。其がインキの散る樣にすうと滿天に浸染んで來る。稻妻がきらり。夥しい雷鳴二つ三つ。冷たい風が颯と吹いて來ると、頓て大粒の雨がぽつり。耳を掩へた太郎作が未だ半町と逃延びぬ中に、鳴る、光る、降る、吹く、――世の終かと思ふ程の荒れ樣。と思へば忽ちすうと明るくなつて、歇んだ樣だと出す顏へ霽ぎはの白雨二條三條、笠押取つて出て見る頃は夕立は最早隣村へ逃げのびて、隣村は宛ながら簾越になつて居る。大空を眞二に割つて、東の方はまだ眞暗、雷樣がごろ〳〵太鼓を敲いて居

るが西の方は明々と夕日がさして、高鞍山の頂邊と思ふあたりから谷へかけてすばらしい虹が立つて居る。あゝ涼しい、御覽なさい、先程までやゝ瘦んで見えた稻が唯つた一瞬の間に眼も醒むる程青々となつて、一二寸も伸びた樣に、何處を見てもさわ〳〵〳〵〳〵さゞめいては露を搖りこぼして居ると、濁り泡だつ田の水はどく〳〵溢れて、小鮒や鯲が矢鱈に畦路にはねて居る。蟲送りも濟んで、初秋の風そよ〳〵と稻葉に音づるゝ頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稻花の美しさ。二百十日、二十日の厄日も事なく過ぎて青疊敷いた谷間が、何時しか金色に照つて、此處にもさわ〳〵、其處にもさわ〳〵、收穫の盛になれば、誰を訪ねても家には居ない、皆田に出て居る。時雨が降出すと、夜晩くまで籾すりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻は最早綺麗な米俵になつて、庫や納屋に積まれて、東家西隣新酒に舌鼓うつて豐年を祝ふのである。

其から水！ あゝ此樣な水が縱橫に市中を流れて居たら、東京も莫大の金をかけて罪人までこしらへずに濟んだかも知れぬ。僕の故鄕では殆ど井戸の用なしと云つて宜い位。四方の山から源泉滾々として絕えず湧出づる淸水は、縱橫に小さな流をなして、結はしる二つの川に落ち合ふ。何處に行つても、潺湲、淙々、洌々、滾々の音が聞える。非二必絲與一レ竹　山水有二清音一で、夏の月夜なぞ、ぢつと聞いて居ると、實に好い。京都は水が宜いと云ふが、僕は京都よりも宜いと思ふ。蘇東坡の文では無いが、何處を掘つても淸泉滾々として湧出づるのである。馬が飲む道側の小溝の水も、女が洗濯する家の前の細流も、乃至水車が攪ぜる田川の水も、實に氷と冷たく、玉と澄んで居るのである。今でも夏になると、僕は一入故鄕を忍ぶのです。

水がよくて、米がよい。因で田舍のくせに酒家が多い。僕の家も造酒家で、加之妻籠第一の豪家であつた。

（二）

素性を云へば、南朝の忠臣の其また忠臣で、店には酒樽を並べても、奧には鎧と刀劍を飾つてある。僕も六歲の頃までは、木劍を帶いて、正月には紋付の羽織袴で、下男を連れて八幡宮へ參詣するが例であつて、端午には鯉幟と矢幡で門の前が眞暗になる位。自分でも吾菊池愼太郎は士族だと威張つて居た。

年月と云ふいたづら者が、覺えて居たいと思ふ事は容赦もなく忘れさして、何でも無い事ばかり思ひ出させる。家の柱が無暗に大きくて部屋が薄暗かつた事や、破風の處に鳩の像を高彫にしてあつた事や、裏の方が馬鹿に廣くて倉庫が幾何もあつた事や、其一の倉庫には何時も米俵が山程積んであつた事や、馬鹿媽と云つて其處に二三日此處に四五日と町の富家を食廻り少し其家の米俵が減れば直ぐ他の家に移るのが癖であつた男が僕の家ばかりは一ケ月乃至二ケ月逗留の榮を辱うした事や、一の倉庫には仁王樣の風呂桶の樣なのが一杯入つて居て、其倉の屋根から恐ろしく大きな榎樹がぬつと頭を出して、夏の頃になると蟬の聲が宛ながら雨の降る樣であつた事や、其れから家には若い男女が二三十人も居て盆の月夜に裏庭で白手拭を冠つて踊つた事や、此樣な事はきれ〴〵に覺えて居るが、さあ家の全圖をひけと云はれると一切分からぬ。また、夏の夜松明ともさして男の肩にのつて小さな鐘をたゝいて田の蟲追に行つたことや、父が朝寢僕も朝寢で――尤も小學校に行く樣になつてからは餘儀なく早起きしたが――冬の朝九時過に起きて八疊の茶の間に出ると大きな爐がきつてあつて若い男が半疊もある火斗に山の如く焚火を持つて來た事や、節分には大叔父が袴をはき澄まして煎豆をまいて「福は内鬼

は外―と云つた事や、僕は毎晩此大叔父に抱かれて寢ては鎭西八郎の話だの山寺の和尚と小僧の話だの聞いた事や、其大叔父が時々は酒臭くて話半にうと〳〵眠りかけ、やつと揺り起してもまたむにや〳〵、話が曖昧になつて、鎭西八郎が鶴を放して猿を退治して白縫姫を娶つたのか、猿が鶴を放して八郎を退治して白縫姫を貰つたのか一向分からないので僕が非常立腹した事や、姥が僕を負つて何處に行つても一内の坊樣の御悧巧と云つたら―と自慢して居た事や、此樣な事はウロ覺えに覺えて居るが、其頃の生活を順序立てゝ話せと云はれたら、其は出來ぬ。先大抵田舍の家の獨子の生活であつたと、其樣云つて置かう。

併しながら世は何時までも春風和やかに花見て暮らすことは出來ぬ。此谷第一と云はれた僕の家もつひに破産に際會することになつた。僕は委しい事は知らぬ、また云ひたくもない。併しながら父があまりやさしかつたのが、畢竟一家零落の原因となつたやうに思ふ。父は實に腹に一點の毒もない、人を疑ひ得ない、人に斯うと云はれて否と云ひ得ない人であつた。已に祖父の沒後、堅吾叔父――僕に昔話をして呉れた大叔父では無い、僕が大嫌の叔父だ――別家さす時も、叔父が強情に慾ばつたので、身代を眞二つに割つて與へた上に、家までも建てて遣つた位であつた。親類他人の差別なく、金を借られて貸さなかつた例が無く、賣りつけられて買はなかつた例が無い。學校に金を出す、親類に泣きつかれて夥しい金額の借用證文に連印する、其がまた奇妙に僞る事は外れ、世介はふりかゝり、其上に造つた酒が二年續けて腐るなど種々な事が嵩じて、さしもの大身代も何時か筍の皮剝ぐ樣に瘦せて來た。厭な顔やら者が出入したり、其を母が嫌つて頻りに父を諫めたり、懇意にする和尚樣が父に忠告したり、町の者村の者が僕の家に出入する毎に空洞になつた大木の下通る樣な顔をしたり、兎に角其樣な事を見聞するにつれて、一種不穩の感は惡夢の如く幼稚な僕の頭を壓して居たが、果してカタストロフイが遣つて來た。山を賣り、田を賣り、道具を賣り、酒造を止め、雇人を減らし、果ては父が最後の賭として望を屬して居た製絲事業が見事失敗して、僕が十一の春家屋敷悉皆人手に渡して父と母と僕は町はづれの一軒家――祖父が物數寄に建てた小さな隱宅に引移つた。

不幸は伴侶を好んで、父は其後鬱々として酒ばかり飲んで居たが、其年の秋母や僕に對して「濟まぬ濟まぬ」を云ひ續けて、一片の墳墓となつてしまつた。

（三）

明治六年征韓論破裂以來、世の中は兎角物騷になり、其源の樣な田舍にも社會がうたす波のうねりは自づから響いて、佐賀秋月小倉の亂、熊本神風黨の暴擧、其れよりも猶恐ろしい明治十年の亂、相ついで村人の肝を冷やしたが、併し豐かな家に父母と棲んで居る小兒の眼には、山の上から海の暴風を見る位のものであつた。誰某と云ふ前參議は謀反して死刑の際に「唯有皇天后土知」と云つた、某の縣令は腹を剝られた、肥後の田原と云ふ處では合戰が十八日もつゞいて拔刀隊が土壘を越えて切り込んだなどと云ふ話は戸毎に傳はつて、一度は薩軍の一隊が今にも突進して來さうに村中大騷ぎしたこともあつたが、幽靈譚と同樣僕には怖くて面白く、夜になると父と母の間に寢ながら色々な話を思ひ出して、騷々吹く嵐の音に心ときつかせながら、右に左に父母の手を握つて、斯樣に阿爹と阿母の間に寢て居れば何が來ても大丈夫、可哀想に、雨にぬれ風に吹かれて恐ろしい戰爭をして居る人達は今如何して居るだらう、此樣な暖かい床も有たず、父母も有つまい、あゝ安心、可

哀想、可哀想、安心と思ひ〳〵つい眠つてしまつた――其も今は一場の夢となつた。夜毎々々川の字に寝た其大事な一筋が缺けて、僕は母と唯二人此宇宙に殘されたのである。

僕は父を愛して、母を敬した。平生は父に懐かれて寝るのが好きであつたが、病氣の時は母の手を握つて居たかつた。花見には父に手を引かれて、盗賊の入つた夜は母の袂の下に隠れる。名は節と云つて、實に吾母ながら凛々しい、氣性の勝つた人。父は五日も十日も母に置いて居た。一家分散後はます〳〵母を憚つて、餘所目にも氣の毒な程氣をかねる。喧嘩も時々起つた。「睦じうして一塊の乾けるパンあるは、争ありて宰れる畜の盈ちたる家に愈る」勿論である。併しながら悲しい矣、乾けるパンは多く爭の原因になる。況んや昨日は榮華の滋味に飽いて今日粟飯の硬きを食ふ身となつては、斯る爭の起るも無理はないと思ふ。大方は父の敗に歸した。「皆乃公が悪いから」と父は悄然としてしまふ。すると母が突然落涙する。僕も泣く。斯樣な悲劇が月に幾回となく繰り返されるのであつた。あゝ併しながら其悲劇すら最早なくなつた。彼やさしげな眼も子供らしい笑ひ聲も、昔紋付の羽織袴で親類寄合の上席を占めてゐた時の立派な風采も、零落して町外れの一軒家の柱に倚つて愁然として居た樣子も、最早見られない。二親揃うて育つる子は貧乏も長者のくらし、と云ふが、何も知らぬ僕も父の棺を送つて歸つた夜は、母と顔見合はして、眞に「零落」の淋しさを感ずるのであつた。

辛い、と云つて零落程辛いものがあらうか、上る一歩は荊棘を踏んで汗だらけにならうとも、望と云ふものが、上にあつて引揚げる。併し昨日迄の榮華の夢を背に負うて、眞暗い明日の虞を懐に抱いてほと〳〵零落の坂を下つて行く一歩一歩は實に血涙である。其も東京とか、乃至大阪とか、人間が桶の中の芋の様にごろ〳〵して居る處では、贅澤も仕放題、貧乏も仕放題、隨分昨日の長者今日は顔を拭つて裏店にマッチ箱を張ることも出來ないではないが、田舎では實に堪らない。先梟首の様なものの生きて感ずる丈が更にひどい。愁つか知らぬ顔が無い丈、何處を見ても苛責の鬼に圍まれる。昔の榮華の歴史を諳んじて居られる丈、皆の結んだ口もこに嘲弄冷笑の意がほのめいて居る様に思はれる。一寸歩いても、昔吾有であつた家屋敷山林田畑が到る處に待伏して、吾を辱しめる。昨日まで下つて居た村の頭は最早下らなくなる。昨日迄は、隣の家の梅の花を折つても、「坊ちやま、御危なうございます、私が折つて上げませう」と云はれたのが、今日は「何處の餓鬼だ、人の麥畑歩いてるなあ」と怒鳴られる。藻掻いても、足掻いても、最早駄目だ。田舎は深い井戸の様なもの、一度陷ちたら容易に上られない。

僕は今母と其井戸に陷ちてしまつた。實を云つたら名代の舊家、自賛では無いが祖先代々隨分陰徳を積んだのであるから、せめて縋つて上る桔槹でも下ろして吳れる者が無い筈はないのであるが、其樣な者もなく、見殺にせられるのは、一の仔細があつたからで、其は即ち叔父の迫害である。

叔父は卽ち亡父の弟、姓は矢張菊池を名乘つて、堅吾と云つた。僕は如何しても此叔父を好き得なかつた。父の寛大なるも、常に彼を恩不知と怒つた。母の如きは人非人だと常に云つて居た。叔父は已に父の身代を折半したを以て足れりとせず、猶家を建てさせ、それでも猶不滿の樣子であつた。無邪氣な僕も叔父を見ると何だか斯樣冷やつこい日蔭にでも入つた樣で心地が悪かつた。彼は醬油製造を業として頗る繁昌し、炭焼業を始めて、此にも成功し、播けば殖え、出せば倍し、貸せば太る、と云ふ風に、

資財を治むるの道に於て、慥かに兄よりも兄であつた。然るに彼は父――實兄の破産を現在眼の前に見ながら、一錢を出して救はうとはせず、剰へ其家屋敷道具を他人の名で買取つて、終には其處に住み込んだ。云はゞ叔父は菊池家の全身代を横領したのである。其と知つた時ばかりは、流石の父も憤然として最早弟とは思はぬ兄とは思ふなと云ひ送つたが、金錢の上に兄弟はない、先方は素より零落した兄には何の情義も無かつたのである。父が死んだ時も唯義理に一寸顏を見せたばかり、母は怒つて葬式の日取も云はなかつた位である。何故斯通り叔父が迫害を加へたか、僕は今に到る迄其故を知らぬ。知らぬが、僕の祖父は常に父を愛して叔父を疎んじて居たさうだ。僕の母は此頃まだ三十にならず、此谷第一の美人で、而して母が常に叔父を嫌つて、顏さへ見るといふと立つてしまつたことはよく覺えて居る。

無情の叔父は、僕が一家の零落を冷眼に看過した上に、云はゞ兄の一家を追ひ出して其跡を占領した上に、父が死んだ後までも、猶迫害を已めぬのである。僕の親類――町の大家の大半は親類縁者であつた――の中には、非常に潔癖家で毎日掃除ばかりして居る菊池金藏と云ふ老爺もあつた。非常に猫好きで、白、黒、三毛、斑とりまぜ十疋も飼つて、猫が鼠を捉ると、「其樣な物を食ふ人があるかい、さ、さ、之をお食べなさい」と云つて、わざ〳〵鮪の煮附を盛つてやる老婆もあつた。發句の上手な人もあつた。非常に柿剥き自慢の先生もあつた。其智慧だけは別にある將棋の名人もあつた。併しながら唯一人も彼堅吾叔父の向うに立つ程の者が無く、叔父は親類頭として殆んど專制君主の勢力を振つて、僕の一家をボイコットしたのである。村の者町の者の中には、陰では隨分氣の毒に思つた者もあらう。併し此谷第一の金滿家、一番の智慧者、一番の意地者たる叔父の不機嫌を冒して迄も、僕等に同情を表する程の勇者もなく、思へば吾儕の善は如何に弱いものであらう：長いものには捲かれよ、弱いものは窘めよで、つい有意無意の迫害を加へたのである。僕は決して怨みには思はぬ、人情は得て其樣なものだ。弱きを扶け強きを挫くなんぞは慾を知らぬ昔の馬鹿者がした事、弱肉強食是天理の今の世の中では、上帝を拜むより金を拜むが餘程近道、未來はあるか知らぬが未だ〳〵遠いこと、向うの長者の御機嫌を損ねては差寄り此可愛い口が乾あがるではないか。だから世は富めるについで大なる者愈大に、乏しきを削つて瘠せたる者ます〳〵瘠せたりで、古の聖人も云はれた通り「有てる者は與へられて猶餘りあり、有たぬ者は其有るものをも奪らるゝ」のである。早い話が、外套に獺虎の襟つけてフラッシ天の膝掛を携へた若い紳士が乘る一二等の客車には厚いクッションを敷き湯たんぽを備へて、よぼ〳〵した百姓老爺は三等の板の腰掛に水涕を啜つて居るではないか。――いや此は話が餘所へ飛んだ。兎に角先斯樣な次第で、母と僕は親類知己の眞中に居ながら全く孤立の身となつてしまつた。

（四）

前にも言つた通り、母は非常に氣性の烈しい人で、家は潰れる、良人は死ぬる、大抵の婦人は落膽沮喪して死ぬるのだが、母はいよ〳〵運命に反撥して、おのれと云ふ一念が絶えず眉目の間に閃いて居た、否つてこそ居なかつたものゝ、大家に生れて大家に嫁した身で、綠の黒髪惜げもなくふつつり切つて、木綿着物に吳絽の前垂、木綿をひいたり、機を織つたり、夜も晩くまで婢を相手に裁縫物をしたり、精一ぱいに働いて居た。僕は前に村中町中殘らず僕等を迫害した樣に云つたが、二三の除外をしなけ

ればならぬ。此婢の如き、實に藍綬褒章を受くべきものであらう。名を重と云つて、額一面の黒痘痕、丈は五尺五六寸、力は男二人に敵する、板額の亞流であつた。母が嫁して來ぬ前から勤めて、最早二十年、一度も病氣したことなく、怒つたこともなく、失策をしたこともない。一家破産の時、大勢の僕婢はそれ〳〵暇を出したが此お重のみは斷じて動かない。父が、其心は嬉しいが今迄の樣に給金がやれぬからと云つたらお重は生れて初めて怒つた。旦那樣あ此重を畜生と思つておいでなさるかと、云ふんで、殆んど腕力で踏み止まつた。以來彼女は殆んど家族の一人となつて、父が死んでからは、いよ〳〵骨身も惜まず、根限り働き、百姓もすれば米も搗く、お蠶もする、お針もする、實に母の片腕であつた。彼は僕の誕生の時から知つて居るので、十一になつても猶ちよち〳〵あわわ孩兒の樣に思つて、老牛の犢を舐める如くに僕を愛した。彼女が處嫌はず、相手を問はず、僕の自慢をするのは些か片腹痛かつたが、併し僕はお重が大好きであつた。

お重の父も大好きであつた。彼は名を勝助と云つて、祖父が惣庄屋と云ふ役をして居た時分に、配下の庄屋であつた。三世に歴事して、云はゞ我家の武内宿禰である。尤も宿禰の樣に白髭を蓄へては居らぬが、てら〳〵と禿げた額の頂邊から皺の寄つた顋の邊まで、一面赭光りに光つて、眼と口元に云ふに云はれぬ愛嬌をもつて、始終笑を含んでにこ〳〵して居る所は、宛然チョン髷の惠比須樣だ。彼は先づのつそり入つて來て、爐側に坐つて、ゆつたり「愼ちやま」と僕に云つて、ゆる〳〵古びた革の煙草入を出して、二三服喫つて、吸殼を吾掌の上にはたいて、また新に一服つけて、それから悠々と掌の上に燃えて居る吸殼を棄てゝ、僕は珍らしい掌だと思つた、何時か眞似てやつて見た所が、眞黒に掌を焦したつけ、偖談話に入るのである。彼は蕪漬が大好物で、僕は常に斯樣な地口を云つて居た。「カブスケや、カッスケ食べないか。」世には不思議な事もあるもので、立派な水引かけた土産をもつて上手に挨拶をして勸めても一向有り難くもないが、拔いで來た大根一把無雜と土間に置いて、上つたきり何も言はず唯坐つて居て、其れで此方の氣苦勞もめつきり輕くなることがある。實に沈默は金、雄辯は銀、勝助は通用する金は有たなかつたが、此金は確かに持つて居た。併し彼は決して沈默してのみ居なかつた。或時彼が斯樣母に言ふのを聞いたことがある。「奥樣、天道樣あ光つてムらつしやいます。人間が羽振りの宜い時にや、彼雪ころがしの樣に、（前日雪が降つたので、僕がお重を相手に雪丸を拵へて置いた、其を勝助爺は指したのだ）轉んで行く程我重量で土でも藁でもくつつけて太つて行くのでございますが、追付お天道樣が照りつけらつしやると、段々融けて、土も流れる、襤褸も出る。つまりは元の無に還りますでな、はい。奥樣、今に御覽なさいまし、彼新屋敷（叔父の事）も此雪丸同然になりますから。御辛抱が大事でございます。」何の事だかよく〳〵は分からなかつたけれども、斯一言はしつかり小耳にとまつて居る。

三里程山奥に住んで、月に幾回、炭馬を引いて出て來る、二十二三の新吾と云ふ男、此も僕は大好き、彼も僕が大好きであつた。彼は面白い男、鼻も大きく、聲も太いが、其割に眼が細く、それで鼻が無性に大きいので、一寸見ると顏中鼻ばかりかと思はれる。博奕もうたず、酒もあまり飲まず、寺の和尚に書いて貰つた手本を夜の暇々に習つて、山道の往來に論語を懐中して、馬の口綱をとりながら子曰學而時習之と誦する男である。彼は山から出て來る毎に、炭俵の上に或は一間程の自然藷、或

は篠にぬいた生椎茸、或は蕨、或は楊桃などを載せて、毎も土産にした。而して僕の顔見る毎に、「坊ちやん、エライ人に御なんなさい、御なんなさい、なアに人が如何したつて構ふもんか、エライ人になつて皆に御辭儀させて御遣んなさい」と斯様云つた。

まだ一人僕が好きな人があつた。誰と思ひなさる？　大嫌ひな叔父の娘、僕の從妹だ。其も姉の方は大嫌ひ、好きなのは妹の方であつた。姉は僕に一歳まさり、お藤と云つて容色好だが、小娘のくせにしやなら／＼として、いやに白粉をつけたり鏡と睨めツくらをしたり着物の小言ばかり云つて、昔から大嫌ひだつた。妹は僕に一歳下で、色は淺黑いが、眼鼻立のきりゝつとした、氣の利いた兒で、まだ僕が先の家に居た頃は、始終遊びに來て、「愼ちやん」「芳ちやん」と云つて、大の仲好だつた。今の家に越してから、一度隨れて遊びに來たが、あとでひどく叔父に打たれたとか、何とか、其後はふッつり會はなくなつた、小學校の往復に顔見合はせると、涙ぐんで、恥かしさうな悲しさうな顔をするのをしば／＼見た。母は新屋敷と云ふと甚より嫌ひだつたが、（芳ちやんの母さんは惡い人ぢやないが、と母は云つて居た）此女兒ばかりは氣に入りで、可哀想に、彼兒も行々は苦勞をするだらうと、暗涙を含んだこともあつた。

何處の沙漠にも多少の綠地はあるもので、他鄕の樣な故鄕にあつて寂しい僕等を慰むるものは、實に此數人であつたのである。

（五）

小學校には相變らず通つて居た。僕の家から六七町、田の中にちよこりんと一個立つた茅葺のが其れで、田舍の事だから先寺小屋に些毛のはえた位のもの。文庫硯に、其でも流石石盤丈はあつて、夏の盛は朝手習と云つて暗い内に蠟燭をつけて手習をする。冬は各自に火鉢を持つて行く、と云ふ有樣。

都遠い片田舍、殊に摺鉢の底の樣な處で、何方へ出るにも坂ばかり、文明開化も此處へ來るには、草鞋がけで汗だらけにならうと云ふので、貧乏人が呼ぶ醫者ではないが中々一寸來て吳れぬ。東京の新聞紙と申すものが天にも地にも唯つた一枚來るばかり、其を町での識者と云はるゝ三四十人が戶毎に讀み廻はすので、最後の讀者が日本の出來事を知る頃は、最早其事のあつて以來地球が五六十遍も寢返りうつて、氣の早い佛蘭西などでは革命の五六遍もして內閣が十遍も變つて居らうと云ふ位。だから、社會の風潮を感ずる神經は極めて鈍たものであるが、併し明治も未だ十歲にならぬ其頃の改革又改革、經驗又經驗片時も固定した精神のなかつたことは、今思うても分かる。其最初、學校も上下各々十級に分れて居たのが、後には六級になり、最後には上中下級に分れ、同じ試驗を何度もして、同じ樣な卒業證書を何枚も貰つたことを覺えて居る。單語篇地理初步から讀み初めて、讀本も年に二三度は變るので、或貧乏人は到底本が買へぬと云うて退學したことがある。僕は算術と習字が大嫌ひで、歷史と作文と地理と惡戲が大好きだつた。算術の勝負や淸書の點取ではやゝもすると敗北するが、其でも級の第一を占めて居た。今から思ふと敎員先生（實に好人物で、近眼で、煙草好きで、僕を非常に可愛がつて、而して課書ばかり敎へる先生だつた。其金科玉條は寬の一字で、名は增見先生と云つたやうだ）少し手加減をしたかも知れぬ、尤も少しは出來たかも知れぬ。東京から全國巡回して來た今の視學官、昔は何と云つたか其先生（僕等が如何樣にエライ人と思つたらう！　增見先生如何樣に震へたらう！）から譽められたことも覺えて居る。兎に角第一には素封家の子、第二には先才童と云ふので、學校では威張つたも

のであつた。

所で一家破産する。父が死ぬ。其等の結果は直ちに學校に於ける僕の位置にあらはれた。今迄「愼さま」とか「坊ちやん」とか云つた裏の田子作の小猴子までが「愼公」とか菊池とか呼棄にする。金滿家の子供は急に身の丈が高くなつたかの樣に僕を眼下に見て、遊仲間にも入れて呉れぬ。「愼ちやんは何故彼樣な小さな家に越したの?」と未だ無邪氣な幼童が言ふすら已に腸にしむのに、無情な連中は何かにつけて僕を揶揄し侮蔑し、嘲弄して其れで自身がエラクなつた樣に思つて居る。大將好きの僕、大將であつた僕、如何しても此境遇を甘受することが出來ぬ。最早學校には行かぬと云ひ出した。母が斷じて許さない、何が何でも、學問は決して已めさせぬと云ふ。母も流石に僕の胸中を酌んで、今は昔に引かへて苦しい中から學校用の諸道具に決して不自由させず、恥辱を感じさすまい、卑屈にさすまい、と思つたのであらう、衣類までも昔に優るとも劣らぬ樣に木綿着物の小ざつぱりとしたものを着せて、朝々手づからきりつと帶をしめて呉れて、本を背負はせて、門口まで送つて、僕の影が學校の門に入るまでは立つて見て居る。餘儀なく僕も行く。行くが、學校は最早昔の樣に樂の場所でない、寧ろ囚徒が工場に出る格で行くのである。面白味がない、從つて張りがない、從つて懶ける、從つて荒む。才童の評判は未だ苔のまゝに已に蟲がついて見えた。

此小天地での上流社會の子供が、一格下に僕を見るのが、如何にも癪に障つて、さればとて孤獨は別して子供に辛いので、僕は何時しか昔其に伍するを屑しとせなかつた其下流の仲間入をした。最初は厭々ながら、後には化せらるゝともなく化せられて、言葉遣ひも下卑て來ると、惡戯も次第に下卑てつい虚言もつく、染むは易いもので何時の間にか學校の勉強よりも自墮落の遊に實が入つて來た。其結果、今迄覺えのない罰も受ける。いよ〳〵自棄になる。果ては其年の冬の試驗には生れて初めて落第と云ふものをした。才童の末路實に斯くの如しである。

流石に僕も恥ぢ且憤り且悲み且恐れた。僕が此不吉の報を齎らして、滿面の羞恥を帶びて歸ると、其と聞いた姉のお重は「先生も餘りな」と怒つた。（尤も此時は增見先生は辭職して、田中先生とか云ふ髮を丁寧に分けた若い先生の時代になつて居た。此人は教育の第一義は威張るにありと考へたと見えて、矢鱈に先生風を吹かせる人であつた）母は何とも云はぬ。唯熟と僕の顏を見たばかりであつた。尤も是迄勉強せい、下賤の子供と一處に遊ぶな、などと折々叱られたことがあつたので、今度の事では何の位叱らるゝか知れぬと覺悟をきめて居たが、其日は別に何事もなく、唯母は默然と何か考に沈んでゐた。僕は其沈默が却て氣味惡く、戰々兢々として居たが、其夜は別に何事もない。明日は僕の遊び仲間が門口から「愼ちやん、遊びに行かねえか」と云ふ調子で呼び出しをかけるのが、妙に辛く覺えた。母は何思つたのか、愼太郎は用があるからと斷らせて、偖自身も着物を更へ、僕にも紋付の木綿羽織を着せ、「來なさい」と云つて門口を出た。

（六）

雪を釀す寒空、がさ〳〵風に鳴る井戸端の枯茹薏、何處を見ても冬枯の、澁面作つて、今にも泣き出しさうな景色であつた。

家を出て二三十歩行くと、此も金滿家の子の勇次と云ふ色の生白い兒が突然、「一けん、三げん、しけんに負けて、落第坊主」と囃し立てる。撲ちのめして遣りたかつた。が、母が熟と睨んだので、默つて跟いて行く。すると、今度は矢張遊び仲間の勘次郎と云ふ半面眞黑な痣をした

兒が、「やあ愼ちやん、紋付着て何處へ行くだ。先生に斷りに行くだかね」と云ふ。僕は顏を眞赤にして、矢張默つて母の後に跟いて行く。

母も無言、僕も無言、蕭條と雪意を催して來た田の中道を横ぎつて、次第に櫟の茂つた丘の方に近づいた。偖は墓參をするのだなと思つた。併し此丘の後に僕が家先祖代々の墳墓がある。其にしては、花も持たず、線香も持つて來ず、如何するのであらうと疑つたが、母は矢張無言でずん／＼落葉に埋む小逕を山へ／＼と上つて行くから、僕も無言で從つた。

丘を越えると、すぐ椎柏杉などの蓊然と茂つた小山があつて、小山の半腹に二反ばかり拓かれて、此處は特に菊池家の菩提所になつて居る。四方は小高く石垣を築き上げて、上には平石の間々に小石を敷きつめ、苔だらけの五輪塔や定紋の桔梗を彫つた石碣が其處此處に立つて居る。すばらしい老松が一本、櫻の大木が一本、右左から墓地を蔽うて居るが、今は十二月の末だから、櫻は裸で、小石の間には一面の松の落葉が埋めて居る。此秋父の棺を送つて、此處に來た時は、櫻の葉が紅くなつて、はら／＼落ちて居たが、今は最早葉の影もない。觀音竹ががさ／＼鳴るばかり、鳥も謳はず、人も來ず、淋しい事である。

母は墓地の入口で足駄をぬいで、つゝと後も見ず上つて行くので、僕も草履をぬいでついて行く。母は父の墓――まだ木標のまゝだ――の前に來ると、膝を折つて石の上に坐つた。僕も坐つた。暫らくは無言である。

「愼太郎」

僕は顏を上げた。母は何時の間にか、黑鞘の懷劒を左手に握つて居る。

「卿は何歳になるかい」

僕は頭を垂れた。

「彼程阿母が平生言つて聞かすのが、卿の耳には入らんかい。阿母はな、唯菊池の家が興したいばかりに、難儀苦勞もして居ます。其心盡しが、如何に子供でも、卿には分らんかい。阿爺は斯樣になつて御仕舞なさる、家屋敷は人の有になる。義理にも生きて居られたものぢやないに、斯樣して恥しい日を忍んで居るのも、唯つた一人の卿を育てて、潰れた家を立て直して、あゝ菊池の家がまた興つたと、村の者にも云はれたいばかりぢやないか。其に今度の卿の狀は、一體何事です。卿は水呑百姓の子と遊んで、水呑百姓になつて、其で一生腐つて仕舞ふ積りかい。菊池の家を潰した上に亦潰して、其で宜いと思ふかい。口惜しいとも思はんか。愼太郎、何故默つとる。――エ、口惜しい、今日が今日迄身を削つても卿を育てよう一廉の人間にしようと思つて居たに、――最早諦めた。卿を殺して母も死ぬから、其樣思ひなさい。其とも口惜しいと思ふか。思はんか。愼太郎、さあ御死に、此短刀で御死に、卑怯者、さあ死たんか」

黑塗の鞘をはらつて氷の如き懷劒をつきつけつけ母は僕に詰寄つた。まゝ此時の母の顏、屹と僕を睨んだ眼光、二十何年を經て今眼の前に歷々と見える。何處に居ても、氣が挫ける時、一點不良の念が萌す時、此一双の眼は突如爛然と吾を睨んでゐる。

僕の額から大粒の汗がほろ／＼滴り落ちた。皮膚は氷を浴びた樣に、腹の内は熱鐵を飮んだ樣に、耳は鳴り眼は眩いて、心臟は早鐘を撞鳴らす樣に鼓動する、最早母の顏も見えぬ、言も聞えぬ、夢中に懷劒の柄を攫むかと思ふと母はもぎとつて懷劒を二間あまり投げ棄てた。

「卑怯者」

顫々と震へて、僕は拳を握つて、突然に涙がほろり。と思ふと僕は嗚咽して哭き出した。悔しいのか、嬉しいのか、哀しいのか、恥しいのか、辛いのか、恐らく其渾てであつたらう。身

も心も溶けるばかり大泣きに泣いた。最早僕は此まゝ其墓場の露に溶けてしまふかと思ふ程存分に泣いて、二十分後は最早香爐に溜つた雨水で顔を洗つて、母と一處に先祖の墓や父の墓の前に跪いて、未だ嗚咽をしながらしんみりと何事をか念じて居た。

（七）

雪がちら〳〵降り出した。母は懐劍を帯の間に藏めて、僕の手をひいて、墓門を出たが、二人ともに何も言はぬ。

墓場を出て少し行くと、大きな椎の樹の下に小さな鬼子母神の祠がある。少し休んで行かうと云ふので、母と僕と竝んで、祠堂に腰かけた。此處は小山の角で、見晴が宜い。谷の三分二は先づ一目に入る。町は素より學校も見える。谷を流るゝ二條の川も見える、某の城下に通ふ往還も見える、幾千頃の空田に寒烏の下りるのも見える。故郷の風物は蕭條として、一種悲寥の面影を吾儕母子の眼前に展べて居る。雪は間も無う小降りになつて、たまにさら――さら霰音笹にさゝやいた。

母は僕の手を握りながら種々の話をし出した。僕の先祖の事、祖父樣の事、彼處に見ゆる赤黒い杉の森は大水の出ぬ樣に曾祖父樣が植ゑたので、彼川堤は祖父樣が自分で金を出して村の爲め築いたので、彼鳶の飛んで行く邊の山は一も殘らず僕の家の有だつたので、彼傘をさして人の行く畔路の邊から此方の田は何十町と云ふ程皆僕の家の有だつたので、彼學校も元はと言はゞ僕の家の地面を父が寄附したので、昔は菊池と云へば此谷に比ぶ者の無い大家、而して代々直な道を踏んで村の爲めを計つて、殿樣の褒美を受けた者もあれば、自から名乘り出て村の者の罪を庇つた者もある、と云ふことを諄諄として話した。

耳は過去の榮華を聽いて、眼は今の零落を見ると云ふは、僕の當時の身の上であつた。熟々と母の物語を聞いて、偖今は他人の有になつて居る其山や其田や其家を見て居る内に、眼は次第に曇つて、涙がまた新に湧いて來た。而して僕の胸中には幼いながらも一の志望がしつかりと根を下ろしたのである。

マコーレーの「ワアレン・ヘスチングス傳」に斯樣な事を書いてあるのを諸君は夙御承知であらう。

或晴朗なる夏日に、當時恰も七歳なりける彼兒童は、其家の舊領地を流れてアシスの河に入る小川の岸に横臥びつ。こゝに、七十年後彼自から語りし如く、一の志望彼の腦中に湧き出でぬ。此志望をば、多事なる生涯の千變萬化を通じて、彼は遂に放擲せざりき。其志望と云ふは、曾て祖先の有なりし其土地を恢復せむとする事なり。デーレスフォルドのヘスチングスたらむとする事なり。幼少貧困の際に成りし此志望は、其智愈廣く、其身いよ〳〵上るに從つて、ます〳〵強大となりぬ。彼は其性格の一大特質とも云ふ可き、冷靜に而も頑然たる意力を以て、其經綸を遂行けり。彼が熱帶烈日の下にありて、五千萬の亞細亞人を治むる時に當りても、戰爭財政法律等百般の苦心焦慮の中にありて、其望は猶デーレスフォルドを指したりき。而して其善惡榮辱の奇妙に混淆したる長々しき公生涯の遂に其終局に達するや、彼が死なむとて退隱せし處は即ちデーレスフォルドなりき。

幸に誤解し玉ふな。僕は決してワアレン・ヘスチングスを氣取る者ではない。況んや僕は未だ四十にもならぬ。屍を馬革に包まぬまでも、此身畢竟何處に骨を埋るのであるか、其すらも定めぬ男である。僕は故郷を愛するが、必ずしも故郷を世界第一の場所とは思はぬ。併

しながらヘスチングスの傳を讀んで、當時の吾感情を想ひ出すと、實に同情に堪へぬのである。今も記憶して居る、僕が初めて某の塾で此ヘスチングス傳を讀んだ時、吾れ知らずほろ〳〵落涙して、遽てゝ拭つたら、手にインキがついてたと見えて、本が眞黒になつたことを。

兎に角犬死すまいと思ふ一念の燃え立つたのは、實に此時で、言ふまでもなく此は母の烈火にまき込まれたのである。あゝ若し母が居なかつたら、僕は如何なつたであらう。だから僕は今も母の崇拜者で、從つて女子教育の熱心家である。

（八）

生れて初めて淋しい正月をしました。去年までは、最早家が傾きかゝつて居たにせよ、餅の一石あまりも搗かして、風呂桶の蓋程の御鏡を飾つて、町の者村の者入れかはり立ちかはり年始に來ては屠蘇の酒に醉つて歸つた。其に引易へて今年は誠に心細い正月をした。

併し世はそれ〴〵に荊棘も花もつと云つたやうなもので、零落の今の身の上にも滿更嬉しい事の無いではなかつた。家は昔に引易へて、八疊に六疊に二疊、たつた三間ぎり。六疊に大きな爐をきつてある。前にも一寸云つた通り、此處は僕の祖父樣が、母屋近くは騷しくていけぬと云ふので、わざと町はづれの田の中に建て隱居した隱宅で、まだ祖父が存命の砌、僕もちよいちよい此處に來ては遊んだことを覺えて居る。

尤も極幼少の頃であつたから、委しい事は覺えぬが、祖父は蚊と蚤が大嫌ひで、夏の頃は晝も八疊に青蚊帳を釣らして、其中に臥て居た。僕が姥や母に連れられて、「祖父さん」と云つて入つて往くと、蚊帳の中から「坊主、來たか」と聲がかゝつて、やがて白い髯が動いて、其れから煙草の火がちら〳〵見える所は、宛然螢籠の樣だつた。冬は爐の横座に陣取つて、好物の柚味噌で湯漬を喫べるのが、大好きであつた。活氣な老人で、八十何歲と云ふ歲をして、長押には槍だの鐵砲だの飾つて、すはと云つたら槍押取つて強盜の五人十人突伏せてくれるなんて威張つて、僕は非常に祖父さんが好きだつた。併し其樣な事は最早昔の幻影になつてしまつて、祖父も父も位牌になつて佛壇から眺めて居るばかり、母と僕と姉と三人淋しく此家に住んだ。

併し世は――繰り返して云ふが――荊棘にも花が咲くもので、淋しい貧しい僕等の境涯は決して憐まれる境涯ではなかつた。氣丈の母と一處に、極めて茫漠としたものではあるが併し前途に何か知らん一の志望を抱いて、而して勉強するのを、御氣の毒なとでも云つたら、僕は怒つたかも知れぬ。母の綺麗な手が荒ぎれだらけになつたり、何處の馬骨か母に向つて失敬な無禮を云つたり、其樣な時は腹も立つ、悲しくもなる、が僕一身にとつては、冬の朝氷を碎いて顏を洗つて、木綿着物を着て、味噌汁で朝飯を喫べて、學校に行くのは苦でもない。夜に大抵行燈一つで塀を明けて、一家――と云つても高が三人――六疊の間に打寄つて、爐にどん〳〵榾をくべて、僕は日本略史の復讀をする。母は紬をひく。姉は大根を切つたり、木綿をひいたり。

或時は風が凄じく吼えたり、雨がちら〳〵窓に當る。併し部屋の中は榾火と行燈で暖かく、明るく、僕が云々の聲は、榾のぶち〳〵燃える音や、續々唸る木綿車の響に和して、夜深く響いて居た。僕が復習をする時は、母は紬をひきながら時々僕の顏を眺めて、ぢつと聞いて居る。母は昔の婦人にしては一通り教育があつて、非常に手蹟をよく書いた。聰明な人で、僕が無意味に論ずる事を樣々の問を出しては、噛んで含めて吳れた。復習が濟めば、爐の灰に埋けてあつた薩摩芋が最早燒けて居る時分だ。爐側でことと灰をふるつて、皮を剝いて、頰を燒いた

り手を燒いたり、あつい〳〵と云つて食ふ時の甘さ！　未だに其時の味が忘れ兼ねる。

其樣する内に日は走り月は歩んで、背戸の柳が芽を出す、向う山に白雲が下りた樣に山櫻が咲く。淋しいながらも春はまた故鄕に立ち返つた。

或日學校から歸つて見ると、延年寺の和尚樣が來て居る。西澄樣と云つて、七十近い坊さんで、眞宗であつた。僕の家はもと此寺の大檀那であつたのみならず、祖父が此和尚樣と大の仲好で、時々碁をうつたり、談をしたり、極の懇意であつたから、僕も自然見知つて居る。痔が惡くて、年中臥床は取りつぱなしで、說敎にも臥床から出て行く、人にも臥床で逢ふ、と云ふ鹽梅で、身體は弱かつたが、活氣があつて面白い坊さんだつた。章魚が大好きで、僕が何時も章魚坊主――と云ふと、面白い小坊主だと云つて僕が頭を撫でて吳れた。坊主のくせに世間話が大好きで、學校の先生よりも色々な事を知つて居る。西鄕が如何の、木戸は氣が小さいの、大久保は強情で面白いの、何の事だか分からぬが、兎に角東京の新聞と云ふものを取つて讀んで居るのは、此谷で此坊さん一人だつた。

坊さんは手紙を前に廣げて頻りに何か熱心に話して居た。何の話か知らぬが、唯斯樣云つたのを小耳にはさんだ。「其樣なさい、其樣なさい。此樣な田舍に腐つてしまふより、乞食になつても出たがましぢや。此坊主（彼は坊主のくせに、僕の頭を撫でて其樣云つた）だつて、今の世の中にかへり點のある本ばかり習はして、何なさる？　苗木でも老けた土では育たぬものぢや。思ひ切つて其樣なさい、其樣なさい――

其樣なさい、其樣なさいと言ひ續けて、和尚樣は歸つてしまつたが、其夜僕は初めて和尚樣の前に廣げてあつた彼手紙は母の姉なる人から來たので一家移轉問題の起つたことを聽き知つた。

（九）

田舍は實に窮屈なものだ。云はゞ小さな盆の水、砂利一つ落しても、すぐ海嘯だ。一寸手を伸すと向うの田吾平が戶口にぶつかる、足を伸せば權左が背戸につかへる。女兒の襟が異つても、一村の問題を惹起さずに居られない。大隱は市に隱るで、呑氣は都の事、田舍では、嚔一つ快よくせられない。其も、村第一の豪家で居る時分は兎も角も、一旦落した日になると實に溜らないのである。

母は何故氣強くも此田舍に踏み留まつたのか。例の氣性で、一敗して逃るゝを口惜しく思つたのであらう。また菊池家墳墓の地、流石に去り難く思つたのであらう。一にはまた去る可き地が無かつたのであらう。「實家が立派にして居つたら斯樣な時にも相談相手になるけれども」と母が喟然として嘆くのを、後にも前にも唯つた一度聞いたことがある。母は何でも十何里と云ふ遠方から嫁して來たので、其實家は川上と云つて僕の家にも劣らぬ大家であつたが、何故か一家斷絕して、唯一人の姉が殘つて居ることは、おぼろ氣に聞いて記憶して居る。其は兎も角も、母は其方の事は殆んど斷念して居たらしかつた。所が不思議の運があるもので、母の姉の良人――卽ち僕の準伯父なる人が近頃東京から歸つて、現に某の城下に住んで居るさうで、勿論其事は已に手紙の上で承知して居たが、此方の消息が分かつたと見えて、驚いて伯母から移轉を勸めて來たのである。伯母の手紙には、直ぐにも來て見たいが歸國後兎角健康すぐれず、伯父も普請や何かに一日もはづされぬ次第を斷つて、一日も早く斷行する樣にと書いて來た。幸ひ「愼さん」が入る學校もあるから、と細々書き添へてあつた。母は延年寺の和尚樣に相談したきりで、直ぐ其事にきめてしまつた。

さあ其れからは移轉の用意――尤も用意と云つても、着物は平生ある丈はちやんと清淨にしてあるし、始末をつけるのは唯つた今住んで居る家ばかり、道具は永年忠實に勤めたお重に呉れる。とゞのつまりは荷物になつたのが古籠二個に柳行李が一個、風呂敷包が幾個、馬二駄に少し足らぬ位、谷第一の素封家菊池の身代は馬二駄になつてしまつた。寺の和尚樣や、勝助爺や、炭燒の新吾やよくまめ／＼しく何角の世話をして呉れた。獨りお重は悄々して、奥樣が行つてしまはつしやつたら吾身は尼になりますとかき口說いた。炭燒の新吾は大贊成で「坊ちやま、エライ人になつて御歸んなさい。斯樣な田舎に腐つちや、男ぢやありませんや。今に新吾も出てきます」なんぞ勇みをつけた。一言目には「エライ人に御なんなさい」が此の男の癖であつた。

何かの用意は直ぐ出來てしまふ。僕は最早四五日前から學校を下つた。一如何するの、愼ちやんは何處へ行くだなど、皆が不思議がる毎に、僕は超然として意味深い笑を湛へて居た。彼等に別るゝを僕は悲しいとも思はぬ。先生も、昔はエラク思つたが、近來は其オーソリチーを少し疑ひかけた位で、別に惜しいとも思はぬ。唯彼從妹の「芳ちやん」は如何したであらう、今度の事を如何思つたであらう、と斯樣思つた。併し彼樣な可厭な叔父樣の門口には、死んでも入りたくない。だから「芳ちやん」には最早會はぬ會はれぬと、諦めた。移轉の評判が廣まつたと見えて、絕えて久しい淸潔好きの老人や、樽剝き自慢の先生や、猫好きの老媼や、將棋の智慧に富む親類や、無沙汰の詫に告別を兼ねてぼつ／＼遣つて來たが、何れも恥かしがるのでもあらうが、妙な顏をして居た。母は平氣なもので、つん／＼して、御蔭さまで此方から告別に行く要もなくなつて、有り難いなぞ忌味を云つた。嫌な叔父は素より音沙汰もせぬ。聞けば叔母が芳ちやんを連れて告別に來ようとしたのを、叔父が非常怒つて差止めたさうな。何處まで腹黑い人であらう！

明日は出立と云ふ前の日に、僕は母と墓參をした。去年の暮に母と來た其時の事が歩々心に浮んで、僕はしんみりと墓前に祈念した。母も頻りに涙を拭いて居た。時は四月の九日、櫻は盛を過ぎて、墓地一面の落花であつたが、まだ褐色の葉隱に彼處に一簇此處に一團の雲が殘つて、風が吹く毎に、ちら／＼／＼／＼舞つて來る。墓地の向うは崖になつて、早咲きの胡蝶花が深綠の葉の間からほの白く咲んで居た。僕等が明日此處を去つたら、（素より人非人の叔父でも先祖の墓であるから、時には來もしようし、勝助やお重も詣ではしようけれ共）誰が香を上げようかと思ふと、石塔も名殘を惜む樣で、僕も母も悵然として暫し夕日に彳んで居た。

遠方に旅立つ前の晩程人が眞面目になることはあるまい。荷物行李は整然と座敷に置いて、身のまはりの小荷物はちやんと片隅に置いて、明日穿いて行く履物までも揃へて、偖行燈に向ふ心地！ 過去と未來の追分に立つて、越方行末を思ふ其心地！ 僕は到底此訥辯を以て言ひ顯はし得ないのである。此晩は勝助爺やら、お重やら、新吾やら大變寄つて、何やら彼やら話が賑やかであつたが、段々夜深くなると話が沈んで、皆言葉少なになつてしまつた。僕も初めは皆の話を聞いて、父の顏や、祖父の事や、去年の落第の事や、一昨年の正月の事や、芳ちやんの顏や、舊家の倉の榎の蟬の聲や、色々の事が頭の中で渦を捲いて居たが、小さな頭腦はあまり重い荷物に疲れてしまつたのであらう。「何、寢はしない、皆の話を聞いてるのだもの」と云ひ云ひ母の膝を枕に眠つてしまつた。

（十）

明くれば明治十二年四月十日――僕等母子が埃及を出た日として、否寧ろハガルとイシマエルがアブラハムの天幕を出た日として、僕にとつては尤も記憶す可き日であつた。お重が心ばかりの祝に、小豆飯を焚いて、頭付は川の若鮎――大好きであつたが、何故かあまり進まなかつた。給仕人は素より泣の涙で居る。「何だい、御發途に、不吉兆な」と窘むる勝助爺も、鼻聲であつた。

何や角やに手間取つて、外に出ると最早春の夜はほの〴〵と曙けて居た。此處其處に鷄が鳴いて居る。

新吾が馬は已に新しい馬沓を穿いて、鈴をちやらちやら鳴らして、門に待つて居る。彼は無理にも僕等母子を城下まで送ると云つて、此間から準備をして居たのである。二駄に荷物を載せて、一駄には淺黄縞の蒲團をかけて、僕と母と乘つた。

新吾は口綱を執つて、一寸空を仰いで、「好い天氣、御目出度うございます」と云つた。

門を出て、馬に乘つた僕は、悲哀よりも愉快が多かつた。故郷を離れる哀しさよりも、未だ見ぬ新天地に、しかも母と共に行く面白さに心も匆々して居た。で、新吾が言は恰も僕が心を道破した樣で、僕も横雲きれ行く東の空を仰いだのである。

送る人は歩行、送らるゝ人は馬、一團になつて、門を出て五六歩行くと、後から手を振つて來る者がある。近寄ると延年寺の和尚樣だ。急いで馬から下りようとする母を押とめて、

「其まゝ、其まゝ。首途には極上と云ふ日和ぢやな。はい、はい、承知しました。（此は父の一周忌と石塔建立の事であつたと思ふ）隨分氣を御つけなさい、愚禿もまたちよく〳〵出て行きます。愼公、（和尚は常に僕を愼公の、やれ小坊主のと云つた）エラクなつて來なさい。愚禿は死なずに待つて居るぞ。はゝゝ――さ・御出なさい、愚禿は此で御免蒙る」

可笑しな和尚樣だ、自分の云ふことばかり云つて、さつさと歸つてしまつた。

馬は歩き出す。鈴がちやら〳〵鳴る。朝風が冷やり〳〵面を撫でる。最早悉皆開け離れた。鷄の音のする村にはまだ白い靄が殘つて居るが、空には最う雲雀が鳴いて居る。麥畑の畔には、蓮華草を押分けて小川の水がちよろ〳〵、宛ながら「愼ちやまゝ、左樣なら、左樣なら」と云ふ樣に聞える。其處此處の一軒家は、大方戸が閉つて居たが、中には前の井戸で顔を洗つて居た女が不圖顔をあげて、呆れ顔して、「菊池の奥樣だ．最早立たつしやるだ」と獨語して、目禮したものもあつた。

頓て人家が絶えてしまつて、兩側は麥畑になる。麥畑を少し行くと、駄菓子や草履草鞋なんど賣る一軒茶屋がある。此茶屋に近づくと、ふいと少女が走り出して來た。小さな風呂敷包を持つた姉がついて居る。芳ちやんと、其家の姉だ。早くから來て待つて居たのであらう。

其れからあとの事は．よく覺えぬ。唯新吾が抱いて吾儕の馬に乘せると、芳ちやんが突然に母に縋りついて泣き出した事や、姉が何かくどくど云つて風呂敷包を出した事や、母が少し考へて、其風呂敷包を「有り難う」と受取つて、插して居た櫛を紙にくるんで、「芳ちやんが大きくなつてから」と云つて其懷に入れてやつて、「母上に宜しく」と傳言をして、最早下ろすと云ふ際にほろり涙をこぼして、其髪を撫でて遣つたことばかりである。僕に何と云つたか、僕が何と云つたか、其れもぼんやりとして更に覺えぬ。唯眼の前に今もちらついて居るのは、大きな棒縞の袷を着て．茶小屋の前の木槿の側に立

つて、泣き〳〵此方を見送つて居た姿である。凱旋將軍の意氣を以て馬に上つた僕も、何うやら引き入れられて、眼が霞んで來た。

茶小屋を過ぎて少し行くと、往還は平地を離れて、七曲坂といふ螺旋狀の長い坂にかゝる。何處まで送つても果しがないと云ふので、母は無理に離別を宣告した。彼方も、此方も、淚ばかり。

「奧樣、達者で――愼ちやま、左樣なら」

「奧樣、御坊ちやま。御達者に」

「卿等の親切は決して忘れないよ」

「奧樣、御恩は忘れませぬ」

「大事にしな」

「御大事に」

「時々便をして御吳れよ」

「奧樣も、御便を」

此樣な挨拶は幾回も不幸な主從の間に繰り返された。

併しながら離別は終に來らねばならぬ。馬は坂を上りはじめた。新吾は口繩を短くとつて、「はい、はいッ」と馬を勵まして行く。後には「奧樣、愼ちやまあ――」と淚まじりの聲が呼ぶ。併しながら坂は曲つて最早勝助父子の姿も見えぬ。馬は朝風に嘶いて勢よく坂を上つて行く。

坂を八合ばかり上ると、少し平坦な處に出る。小さな地藏が道傍に立つて居て、其傍に大きな杉が一本ある。杉の平とは此處を云ふのである。此處から見ると故鄕は一目だ。來る者は此處で足を止めて見る。去る者も此處で顧みる。新吾が馬の腹帶をしめ直す間、僕等も暫し此處に立ち止まつた。

今別れようとする故鄕は、少しも僕等の立去るのを氣付かぬ樣に、常にかはらぬ春の朝の裝をなして居る。其處此處から朝炊の煙がさも悠々と立ち上つて居る。十年來住み馴れた町も、行き馴れた學校も、祖父や父が限りなく眠つて居る墓所の山も、菜花の黃金を敷く野も、川も、蓮華草の田も、水車も、神社も、宛然春の畫の樣に横はつて居る。今來た往還も、往還の此方に二三人打群れて、立つて居るのも、手にとる樣に見える。送つて來た彼等であらう――彼等だ、手をふつて居る。此方が見えたのであらう。あゝ小さな姿が見える、芳ちやんであらう。僕の眼は淚に曇つて來た。故鄕は宛ながら霧がかかつた樣に朦朧となつてしまふ。

母は獨言の樣に、

「分からぬものだねェ、今日斯樣して此處を立たうとは夢にも思はなかつた。十三年前わたしが嫁つて來た時も、此處に休んだが、其時は駕籠に乘つて、賑やかにして來たが――」

僕は堪らなくなつて來た。淚の顏を母の胸にすりつけて――何と云つたかよくは覺えぬが、斯樣な意味の言であつたと思ふ。

「阿母、堪忍して下さい、俺が屹度、私が勉強して、阿母をまた駕籠に載せて此處に來ます」

母はひしと僕を抱いた。新吾が突然に大きな聲で、

「愼ちやま、よく云ひなさつた。何有、何有――好え日和ぢやござんせんか、御覧なさい、高鞍山が」

僕の眼は突と空を走つて、東の方に群山を踏まへて、一峰崭然あたりを拂つて朝空に立つ高鞍山の頂に向つた。藍よりも碧い山は、腰に流雲を帶び、背に朝日を負うて泰然笑を含んで此方に向つて居る。

頓て馬の鈴がまたちやら〳〵と鳴り始めて、路は一轉十一年の生涯を包んだ故鄕は卷物を捲く樣に過去の幻影となつてしまつたが、髣髴として眼底に殘つたものは、煙立上る故鄕の村でもなく、道上に泣いて居る送者の面影でもなく、唯泰然として朝の空に聳える高鞍山の面影であつた。

二の巻

（一）

一夜を淋しい山驛の行燈の下に明かして、翌日の午過ぎには僕の迴南たる某の城下を眼下に瞰め、其夕方は右の城下を半周して西の郊外に立つ唯有る小丘の麓で馬を下りて居た。此小丘は後に連なる重疊たる青山の裾山で、伯父の屋敷は此丘の南半面を占領して居たのである。

先刻馬の上から初めて城下を望んだ時は、井戸の鮒が江湖に出た樣に、僕等母子は彼廣い中に出て如何なるであらうと頗る心細く覺えたが、今伯父の屋敷の門前で馬を下りて、母が僕の着物を引繕つて吳れると、小さな僕が猶急に小さくなつた樣に、氣おくれがして仕方がなかつた。

門を入つて、小石だらけの坂路を上つて行くと、揃ひも揃つて澁色の着物を着た——加之二人宛鍾で繫がれた男が大勢石を掘つたり土を運んだりがや／＼働いて居る。見れば何の顏も何の顏も恐い顏ばかり。竊と母に聞くと、懲役と云つて惡い事をした人だと云ふ。僕は一驚を喫した。斯樣な惡人を使ふ伯父樣は、如何に恐い人であらうと思つた。段々上つて行くと、まだ大勢の人夫——此は澁色のでは無い——が木を植ゑたり、石垣を築いたり、また普請と見えて手斧の音や鎚の音が頻りに聞える。不圖人を叱る聲が聞えたので、其方を見ると、大きな柿の樹の下で、大きな男が曲尺を持つた印半纏の男を叱つて居た。何でも五十位であらう。額は少し禿げ、赭黑い顏の下半部を蔽ふ長髯は白勝に見えて、兩の肩怒つて、實に見上ぐるばかりの大漢。尻をからげて、薩摩下駄をはいて、手拭を腰にさげて、櫻の枝をステッキについて居た。僕等が近づく足音にふつと眼——其眼には怒火いら／＼と燃えて居たが、何故か、あまり嫌ではなかつた——をあけて、少時怪訝の容子であつたが、突然、

「ほウ、此は」

云ひ／＼二三歩寄つて來た。母が丁寧に頭を下げて挨拶するを待たず、伯父——と直ぐ知つた。尤も以前一二度見た事があつたが、其は僕が四五歳の頃で、無論覺えて居らぬ。云はゞ初對面である。

「此は早かつた／＼。此が愼どん——大きくなつたな。歩いて來たか。何、馬で——呍、呍」

頷きながら伯父は僕の肩をたゝいて居たが、此時僕と同年配位の色白の小娘が出て來たのを「鈴江、鈴江」と呼んで、叔母樣が着いたと阿母に云つて來いと命じると、娘は一寸御辭儀をして小走りに行つてしまつた。

「まあ、鈴さんが大きくなりましたこと。而して綺麗にまあ——」と母は後見送つて叫んだ。

「はツはツゝゝゝ、お轉婆でな。さあ、兎も角も宅へ——拙者は一寸用を仕舞つて來る」

呆氣にとられて見て居た印半纏を伯父がまたあらためて叱り出す聲を聞き殘して、僕等は宅に向つた。宅は門から一町ばかり、丘の中腹を拓いて建ててある。未だ玄關にかゝらぬ内に、四十餘の母によく似た婦人がどつかと出て來た——小手招ぎをしながら。

「待つて居た、待つて居た」

唯一句。併し伯母ならずばと僕は思つた。

此處までは歷々覺えて居るが、此から後は少し曖昧になる。唯引ずられる樣に玄關に上つて、座敷に通つて、伯母が先づ母の切髮を見るよりほろりと落涙して、また僕を大人しいと譽めて、母が「田舍者で、何も分かりませんから」と云つて、僕が其に內々不平を感じて、鈴江とか云ふ娘が茶を汲れて來たり菓子を出したりするのを

母が感心して、僕に「御覧な、鈴さんの大人しいこと」と云つて、僕が何有故郷の芳ちやんだつて其位はすると思つたことなどを覺えて居る。

其れから日が暮れて、湯に入つて、故郷では未だ大々的贅澤であつたランプと云ふ行燈が幾個もついて、其れから故郷に居た時の樣に別々の膳ではなく、伯父を初め一同大きな机の樣な四足の膳に一處について、其れから伯父が食べるも食べるも喫驚する程食べた事や、食べる時に猪の樣に鼻息を立てた事や、僕等を乘せて來た馬士の新吾が振舞酒に醉つて臺所で大氣焔を吐いたのを母が氣の毒がつた事や、兎に角色々な事があつたが、よくは覺えぬ。唯、面白い、妙な、珍らしい感覺の中に搖られて、此新天地に於ける僕の第一日は過ぎてしまつた。

（二）

伯父は野田大作と云つた。もとは由緒ある郷士。若年の頃は藩中第一の人物たる某先生の薫陶を受けて、門下俊秀の一人と云はれ、維新後は或は地方に或は中央政府に種々の官職を帶して居た。名が大作、體が大漢、大志、大膽、大氣、大言、大食――實に大の字揃ひで、先づ英雄型の人物であつたが、仕上げの時に臨んで天道樣が一寸何かに氣をとられて居たのであらう、英雄――ではあるが、惜いかな、罅裂がいつて居た。譬へば箍のゆるんだ十石樽、如何にも大きい、が酒樽にもならず、風呂桶にもなり兼ねる厄介物。併し胸中唯憂國の念あつて、自から期する所の大なるは、中々小刷巧な當世才子の比では無かつた。で、明治十年の際にも、伯父は九州某縣の要職に居たが、西郷の亂が起ると甚く慷慨して、實に「市も市（大久保市造）吉も吉（西郷吉之助）ぢや。馬鹿共が、内輪喧嘩をする樣な今の時節か。宜、宜、乃公が一つ叱つてやらずばなるまい」と慨嘆して、單騎肥後に乘り込み、西郷を說破して兵を弭めさせ、然る後大久保を叱つて、市と吉との仲直をさす筈であつたさうな。所が、中途で賊兵に捉へられて、木山の賊營に引かれた。已に其途中で、賊兵が刃を效いて、如何だ、面倒臭いぢやないか、やつてしまはうか、と互に相談するのを、伯父は平氣の平左で聞いて居る、流石の賊も「此者が面魂を見ろ」と讃嘆したと云ふことだ。木山の營でも、夜は高鼾で寐る、五圓札を出して鰻を註文する、賊も荒肝をぬかれて、西郷に面會は許さなかつたが、併し厚きで戻して、三日ばかりして終に兔した。其は宜かつたが、伯父は途中で居睡つたと見えて、馬は夢中の英雄を乘せながらまたひよつくり木山の營に歸つた。賊の隊長某は洒落な男で、「野田君、最早大概にして歸つて吳れないか」と笑つて、兵をつけて三四里送り出したさうだ。虛言の樣だが、本當の事だ。斯樣な人物だから、倒巧者の集合所とも云ふべき政府の役人が中々以て勤まる道理は無い。已に某縣でも、其長官が私利を營んだとか怒つて、伯父は突然獨大力で長官を押倒し、存分に撲つたので、電報免職になつたが、今度も中央政府でまたまた上長官と喧嘩して、論旨と發意と五分五分と云ふ辭職をして、歸國したのは去年の春。此れからは地方有志家の巨魁として、率先して殖産興業の事に從はうと云ふので、もと或雅人が住んで居た此丘陵の地面家作を買ひ取つて、蠶室を立て、牛小屋を作り、豚小屋を搆へ、鷄塒をしつらひ、また夥しく果樹を栽ゑ茶や桑を仕立て、西洋蔬菜類を作つて、文明的殖產家の先達を以て自から任じて居るのである。

伯母は名を實と呼んだ。母に似て居る樣に前に云つたが、母よりは年の十餘も上で、今些し體も大きく、何處やら締々して居る。年はまだ四十あまりだと云ふに、白髮も大分見え、額のあたりに皺も見える。良人が良人だけに、人知らぬ氣苦勞も多いのであらう。如何やらする

と今にも泣き出しさうな顏をして、よく「さうなあ――宜、宜」と云ふ癖がある。一寸見には男の樣で、二度見ると雌ゝやさしくて、三度見ると其やはらかな中に凛とした一節の籠つて居るのが分かる。母が圭角稜々たる水晶なら、伯母は圓く磨つた瑪瑙とでも云はうか。此家に來た翌日と覺えて居る。小座敷の前を通ると――障子がしまつて居たが――しんみり母と伯母と話す聲が聞える。不圖立ちどまつて聞いて居ると、伯母の聲として、

「未だ若い、若い、如何しても手習は嫌と云つて草紙を川に投げ込んだ頃の樣子が見えるよ。未だ未だ、如何して世の中は、其樣な事ぢやいけませぬ。今些頭が下る樣にならなくては、いけませぬ。泳ぎの上手は川で死ぬで、氣性者は氣性で失策ります」

と云つて、何やら母の背でも撫でた樣だつた。此時からして、僕の心は緊と伯母を捉へて、何だか祖母樣でも得た樣に、妙に嬉しかつた。

伯父と伯母の間には、大一郎鈴江と云ふ二人の子女があつた。大一郎は當年十五歲、此は東京の叔母――伯父の妹だ――に託して、某學校に勉强して居る。鈴江は僕と同年で、伯父の娘だけ妙に鷹揚な女兒であつた。着いた翌日、伯父は出る、母は伯母と話す、僕が手持無沙汰の樣子を伯母が見て、

「鈴江、愼さんと屋敷まはりでもして來なさい」

と云つた。臆面もないもので、鈴江は直ぐ案內者然と先きに立つて、此に何役は何と一々說明しながら屋敷中引張りまはした。鉋屑や鋸屑を踏んで、先づ見たのが蠶を飼ふ蠶室で、此は大工が出來て居た。其筈だ、最早蠶は生れかけて居るのである。然るに蠶室の普請の一方には、石垣工事だの、果樹栽培だの、何もかも一時にやつて居る。此が蓋し伯父の癖であつた。

其れから例の懲役が土を掘り、石を運ぶ中を通ると、僕は吾れ知らず口走つた。

「伯父さんは何故惡人を使ひなさるかしら？」

すると僕の案內者は、

「阿爺はね、あたし達に、あの懲役なんか云つてはいけない。可哀想な人達だつて、ね、其れで何時もおやつには御餅だの御團子だの拵へて御馳走するんですわ」と云つた。僕は口を開いたきりであつた。

面白いのは七面鳥やばりけん鳥で、汚いのは豚小屋、可愛いのは犢、恐ろしいのは大きな牝牛の哞と云ふ聲――尤も乳を搾るのは面白かつたが、其晩生れて初めて牛乳と云ふものを飮んで、猶頭から、きれないで座敷一面に吐いた事は、未だに恥かしい事の記憶として殘つてゐる――珍らしいのはユーカリ、アカシヤ、カタルペ、祕椈など云ふ樹、此は鐵道の枕木になると鈴江さんは說明したが、恥かしい哉、其鐵道なるものが僕の頭には頓斗瞭然しなかつたのである。

其れから鈴江女史は一歩々々に且つ驚き且つは喜ぶ田舍漢の僕を得意氣に引張つて、屋敷の一番高い處に上つて見ようと云ふので、一條の石逕を傳うて上り初めた。先の持主の仕置であらう、逕の左右は段々畠になつて居て、麥は簇々と日に光つて居たが、處々は無慘にも掘り棄てられて、其處に梅、桃、李、杏、巴旦杏、梨、柿、蜜柑など新に植ゑてある。段々畠を過ぎて、少し上ると、上二三段が程は未だ拓かずにあつて、小笹まじりの春草青々として、菫菜、蒲公英、蓮華草なんどの花が咲いて、其眞中に小家程もあらうと云ふ紫色の大石が頑として横はつて居る。案內者も僕も此大石に攀ぢて腰かけた。

何でも僕が故鄉の谷に十倍する――と思つた――眼界であつた。城下は左手の方に隱れて見えぬが、五里七里十里彼方に霞む遠山にぐるりと繞どられた一面の平蕪は、菜花の黃と麥穗の青白に染め分けられて、孤村彼方此方に霞み、

川流處々に白銀の光をのべ、實に悠々とした景色だ。南面して、冷りとした春風に吹かれて、雲雀の歌を聞いて、廣々とした景色を眼下に瞰めて、こと〳〵く手拵や鷄の音を下に聞いて、水道の水に磨かれた娘と山出しの少年は互に見聞を鬪はした。小さな愛鄕者は、負けぬ氣になつて、高森山だの、大川だの、延年寺だの、田の蟲追の賑ひだの、智識の底をはたいて爭つて見たが、駄目々々、鈴江君は東京（？）を見に居るのだもの、先づ天子樣、富士の山、淺草の觀音、兩國の花火、神田祭、汽車と云ふ火の車、汽船と云ふ煙を噴いて一時間に十里も行く船、其他珍奇な話は爽やかな東京辯にのつて滔々と耳邊に漲り、僕はまた昨日初めて城下を眺めた時の樣に、如何にも吾は小さな無學な田舍の一小兒たるを感ぜざるを得なかつた。其と同時に、鈴江孃は驚く可き女博士の樣に思はれて、其にこやかな唇の上の黑子までが妙に神々しく拜まれた。

兎に角十年の生涯にもまさる二日の東京見聞に僕は何か早換りの速成師でも見る樣に匆々して、此日馬士の喜吾が歸るのに染々挨拶もしなかつた。のみならず、お芳坊に傳言するのも忘れてしまつた。

芳ちやんが別れ際に持つて來た風呂敷包の中には、僕が曾て欲しがつて居た葡萄蔓を蒔繪にした手箱に、綺麗な巾着まで入れてあつたに！

此晩伯父、伯母、母、僕、列席の上で、僕の就學の相談があつた。母は流石に手放して遣るさすを心憂く思ふ樣子だつた。併し僕に鈴江孃の前で男らしく振舞ひたいと云ふ馬鹿な野心があつて、一も二もなく入塾に決してしまつた。此塾と云ふのは、鈴江孃も通つて居る所謂小學校ではなくて、伯父の朋友の中西西山先生が立てて居る家塾だ。

（三）

中西西山先生の塾と云ふのは、伯父の家から小一里も離れ、矢張り城下から引込んで山に據つて居た。其朝紋付の着物を着て、伯父について、西山塾に行く途中で、僕は竊かに思つた。故鄕の小學校が先づあの位だから、音に聞ゆる西山塾は如何に大きなものであらう、中西先生は如何に立派な先生であらう。然るに此日は實に意外吃驚で持ち切つた日であつた。否々、故鄕を出でて十日ばかりと云ふものは、肝の拔かれどほしで、よくまあ生きて居られたと今から不思議に思ふ位、先づ此日の肝の拔かれ初めが、路の小半里を行く頃、××とも見える男二人、大きな日蓋を擡つて僕等を追越した。中を見ると、生々しい牛の骨で、剝ぎ殘しの肉が點々とついて居る。

「伯父さん彼は何するのですか」

氣味惡さうに尋ねると、伯父は莞爾と笑つて、

「卿も明日から彼を食ふさ」

「牛の骨を？　伯父さん」

「何有、骨を煮出して、汁を喫ふのさ」

急に胸がむか〳〵とすると思ふと、涙がぽろぽろこぼれさうになつて來た。あゝひどい、實にひどい、牛の骨をしやぶる位なら、何も學問しなくもよささうなもの、あゝ情無いと思つた。併し伯父が恐いから、僕は默つてとぼ〳〵ついて行く。

丘を廻ると、一寸した谷があらはれた。其谷の一隅に、山に據り田を前にした小村があつて、村の一隅に竹藪と梅林にはさまれた茅葺の屋根が大小二つ見える。田の畔を通り、溝川に架した石橋を渡つて、石だらけの逕を上つて、先づ小さな方の茅葺の門を入ると、四十歲餘の賤の小男が草履をはいて、梅の枯枝を鋸でごし〳〵ひいて居る。思ひきや、此が中西西山先生であらうとは！

琉球表の六疊に通されて、先生の奧樣であら

う四十恰好の痩せきつた婦人が持つて出られた茶をのんで、暫くすると西山先生手を拭き〳〵入つて來た。其れから先生と伯父の間に、梅の培養に關する短かからぬ講習があつた後で、痺れをきらして居た僕を伯父が紹介すると、西山先生熟と僕を見て居たが、

「何歳かい。何、十二、小いな。好々、乃公が鍛つてやる、初の間は些辛いぞ」

少しすると、箆棒に短かい筒袖を着た少年が二人、縁の方から入つて來て、時間になりました、と云つて、一人は先生の煙草盆を、一人は見臺と本を持つて行く。僕も伯父と先生の後について、初めて西山塾と云ふのを見た。

先生の宅を出て、椿の花の夥しくこぼれて腐つて居る裏口を出ぬけると、最早蜂衙の呍々の様な聲が聞えて、頓て大きな茅葺の平屋があらはれた。何でも塾に建てたのではなく、百姓家の引直したのであらう。梅干の核、鰯の頭、竹の皮なんぞの山をなした掃溜を過ぎ、ありとあらゆる下駄草履の互に相蹂躙して居る玄關を横目に見、矢鱈に樂書した障子の孔から塾生の名札がずらりと掛つて居るのをちらと見て、別口から上つて行くと、直ぐ二十疊――琉球表は赤くなつて、處々は腸が出て居た――ばかりの室で、三四十人の塾生がずらりと長方形に坐つて居たが、一齊に僕の方を見て、小さな奴が來たなと云はぬばかりの顔をした。僕は小さくなつて坐つて居る。先生が點頭する。塾生が御辭儀をする。隨分何れも御辭儀に垢づいて居たが、感心に小さな者までもきちんと正坐して居る。頓て會――八大家の漢文であつたと思ふ――が始まる。上席の塾生が一つ辭儀して、朗朗と讀んで講義する。僕はいよ〳〵小さくなつて、何十年勉强したら彼塾生の様に流水の如く難かしい漢文が讀めるであらうかと絶望の頭をうな垂れて居る内、質問答辯も漸く濟んで、先生は「上田」と云ふ塾頭を呼んで、僕を紹介する。僕が辭儀する。伯父が「諸君、宜しう」と言を添へる。僕がまた辭儀する。一同が辭儀する。塾頭が「菊池愼太郎」といふ札を書いて、塾生名札の最尾に掛ける。願書もない、入塾試験もない、最早此れで僕は一躍して西山塾の一生となつたのである。

其翌日、僕は母から他人の間に處する心得を懇々と云ひ聞かされて、小さな机と薄蒲團と皮籠を下男に擔はせて、伯父の家を出た。今まで十二年間唯の一日も母に離れたことのない僕、心細くて哀しくて胸は裂ける様であつたが、併し門に立つて見送つて居る伯母、母――別けて鈴江君の手前、まさか泣きもされず、無理に肩を揮つて、後をも見ずに出かけた。出かけた、が初一町は脱兎の如く、二町目からは處女の如く、三町目からは屠所の羊の歩で――それでも到頭塾に行着いた。

子供の時の習慣は移り易いもので、此時着た袷が單衣になり、單衣がまた袷になる頃は、山家育の坊ちやまも、ユキタケ短かな筒袖を着て、高足駄を踏み鳴らして、出る時は蠟引傘を腰にぶら提げて、豪傑袋をつけて、肩で風を切つて、牛の骨の煎汁を吸つて、超然として西山先生の門人と威張つて居た。

（四）

休言他郷多苦辛、
同胞有友自相親、
柴扉曉出霜如雪、
君汲前流吾拾薪、

此は廣瀬淡窓が家塾の情趣を咏じたるものであるが、實に此家塾なるもの今は殆んど過去の物になつてしまつた。世が進んで來ると、金紋付の車で通ふ講師の、煉瓦造の校堂の、兵式體操の、制服制帽の、何のかのと、渾ての事が立派に組織的にまた――惡くいへば――器械的

になつて來る丈、主腦たる一人の人格を基として立つ家塾などと云ふものは自づからなくなつて、例へば師弟の情義とか朋友の切磋とか名節とか元氣とか云ふ樣なものが、兎角乏しくなり易いのは、歎息の次第である。

西山塾主中西西山先生といふのは、もと藩の輕い士の二男で、伯父と同門であつたが、維新後は別に役付もせず、早くから西山塾を開いて子弟の教授をして居られた。委しい事は知らぬが、何でも若い時から非常に貧乏して、色々心配もせられたさうな。と思へば、其奇矯な風の中に、如何にも世馴れた所があつた。跛と云ふは體の上の事、世の進歩を趁ふ足は、中中滿足な足を有つて居る人の及ばぬ所、士族で候と二本指して箆棒に威張つて居た頃から、西山先生はをり〲馬を牽いては薪だの薩摩芋だの城下に賣りに出られたさうな。尤も僕が入塾してからは其樣な事もなかつたが、でも農業は極の好物で、先生の机上には論語や通鑑と共に農業三事農業新誌など云ふものがのつて居て、糞汁の臭を嫌ふ男は話が出來ぬと常に威張つて居られた。大嫌は不精と坊主、髪は風く切つて、刀は明治三四年の頃賣拂つて、荒神樣の祠に小便して、托鉢僧を叱り飛ばすと云ふ人物。要するに田舍には隨分風變りな人であつた。此樣な所が僕の伯父と頗る意氣相投じた所である。尤も西山先生は伯父を疎放と罵り、伯父は先生を頑固と嘲り、時々は隨分喧嘩も盛に行はれたが、併し兎に角話が合つたのは、斯非凡な所、惡く云へば少うしばかり狂――味を帶びた所が相似たからであらう。

此樣な樣子だから、其教育法は、實に何と云つて宜いか、名狀するに苦む程だ、先づスパルタの教育法と、ペスタロッテの教育法と、在來の家塾的教育法と、打て一丸となした樣なもので、實に一種特別な教育法であつた。何でも先生は、我塾生たる者は、第一、成る可く身體を强壯にして艱難辛苦に耐へ貧困匱乏を忍ぶの氣力を養成し、第二、在來の士族根性を打潰して、自力を以て自家の運命を造るの習慣を養はねばならぬ、と斯樣思つて居られたらしい。廢藩以來は、昔威張つた士族の右に倒れ左に躓いて見る蔭もなく零落する者頻々と相ついで、五千石の大資産を破つて人の門口に扇さし出す者もあつたが、先生は兩刀棄てて飯が食へぬとは意氣地のない話だと笑つて居られた。で西山塾生は、矢張九分九厘九毛まで、士族であつて、中には何千石の若樣もあつたが、先生は決して假借しない。十五六歳位までの塾生には、皆筒袖を着さして、衣は骭に至り袖腕に至るを厭はず、嚴寒に足袋をはかせず、飯は粟四米六で、加之二三人宛當番に炊くことになつて居た。僕の如きは實に塾中第一の幼者であつたにも拘らず、矢張定規によつて行はれて、幾度朋友飯（朋友有信、信は心に通じ、煮えぬと云ふ謎だ）を焚いては衆人の怨府となり、また一把の附木を用ゐ盡しても火が薪につかないで、竈の前に蹲つて泣いたかも知れぬ。のみならず、淡窓の詩を文字通りに實行して、山に薪採りに行く、先生の宅の風呂の水汲む、甚しきは梅の肥料までかけさせられる。いや最早力業と云ふ力業は殆んど爲さざる所なしと云ふ有樣で、僕等は書生か下男か、些分かり兼ねる位であつた。

柴扉曉出霜如雪、炬燵に入つて吟ずると實に好い詩だが、併し實際其場に臨んでは詩境よりも寧ろ苦境である。一體塾の位置が、前は田、後は竹藪からすぐ山つゞき。夏の蚊に、冬の寒風、難行苦行には持つて來いの場所だが、冬は實にひどい。夜は蒲團が薄くて、あまり寒いから、大きな石だの薪だの蒲團の上に重しにして寢たこともある。嘗膽臥薪と云ふ、薪や

石を着て寢た者は先づ僕等に始まるかも知れぬ。氷の山を上る夢醒めて、萬藥蒲團をはねのけて、眞白い息を吹いて出ると、一面雪が降つた樣な白霜、葱も大根もうな垂れて、側の小溝が落ち込んだ藁屑を封じ込めたまゝ氷りつめて、鼻の尖や耳の端死ながら剃刀をあてらるゝ樣な曉に、釣瓶竿の霜を扱いて水汲んで、偖男政岡は可なりこたへる。稀に伯父の家に行くと、母や伯母や鈴江君が僕の手足の赤ぎれ霜やけを見て、顏をしかめた。去る門閥の子弟は、秋來て冬になると直ぐ退塾した者もあつた。僕も折々はあまりひどいと思つた。併しながら今から思ふと、些過激な樣ではあつたが、併し僕の身體と辛抱力は全く此數年間に鍛はれたので、今でもあまり冬温夏冷の地を擇ばず、隨分素綿衣で冬季の西比利亞横斷もしかねぬのは、西山先生の賜物と云つて宜からうと思ふ。

塾生はかく鍛はれても、よく西山先生に服して居た。何故か。先生は蓋僕等を愛して居られた。身を以て僕等を率ゐられた。決して己は勝手次第に一本四五十錢もする樣な葉卷を燻らして僕等の喫煙を禁じたり、己は教科書運動で懐を煖めて僕等に廉潔の講義をしたり、親の病氣を抛擲かして倫理學の講釋をしたりせられなかつた。牛骨のソップを作つて飲ましたり、田川を乾して鯲鰻をとつて一處に闇汁を吸つたり、鍬を擧げて裏の山に自然薯を掘つて僕等に摺鉢を押へさして先生自身摺子木をとつてとろろ汁を作つて師弟一座に舌鼓を鳴らしたり、苦もあつたが愉快も實に少なくなかつた。唯一の不平は、先生が何百本と云ふ梅を植ゑて、實の一顆だに惠まれず、あまり長く梅樹の下に躑躅すると御眼玉を頂戴することであつたが、併し此は先生唯一の財産であつたのみならず、若し一度許可が出たら梅子の熟する迄には恐らく其幾割をも殘さない患があるから、此は無理も無い。併し其餘沫は飛んだ處へかゝつた。塾から十町ばかり北方に當つて、某と云ふ村がある。全村都李で、春は青白い霞をかけた樣に、夏になれば此處も彼處も白粉を吐いた紫玉紅玉累々、ぽて〳〵と落ちて、潰えて、村へかゝると酒の樣な臭が芬と鼻をつく位。濟まぬ事だが僕等は、闇夜の頃をはかつて、時々李下に冠を正した。西山塾には隨分悍馬も多かつたが、よく先生に服して居たのは、先生が常に身を以て塾生を率ゐられたからで、露國の勇將スコベレッフは常に白地の軍服を着て、突貫の場合には「さあ、皆吾について來い」と、眞先に立つたと云ふが、西山先生の教育法は云はゞスコベレッフ流であつた。

（五）

僕は恰も斯地方に於ける新學問の云はゞ中世闇黑時代に故鄕の谷間から出て來たのであつた。五六年前までは洋學校の設もあつて、英語が盛に行はれたが、其は何かの都合で閉校して、當時の英學生は大概東京大阪長崎へ出てしまつて、縣廳へ一寸英字の手紙が來ても、一人だに讀み得る者が無い位。で、西山先生も殘念ながら洋學をば取除いて、塾の課程は漢文が十の八九を占め、殘一二分は其頃新版の飜譯書で塡めてあつたが、矢張醇乎たる漢學塾であつた。嘗て萬國新史の會讀の時、「世紀」と云ふ字があつたが、上は先生より下僕等に到るまで如何首を捻つても一向其意味が分からぬ、顏見合して茫然として居ると、幸にも塾生の中に長崎で洋學をかじつて居た男があつて、世紀と云ふは西洋の年代を算ふるに用ゆる語で、百が一世紀だと云ふ説明をしたので、一同雲霧を排いて青天を見たこともあつた。

先生と云つては、西山先生を大先生として、中先生には何時も革色の紋付羽織で出かけて來る謹直な松島先生、小先生には塾頭の「上田」

此れが最下級の素讀や何かを教へる。僕も最初は此小先生について、日本外史十八史略を授かつたが、程なく西山先生について左國史漢四書五經八大家などの講義を聞く樣になつた。先生も「菊池菊池」と可愛がつて、「菊池は蚕の樣ぢや、小さいくせに、早いやつぢや」など云はれて、僕も大きな連中に妬まれたこともある。何、早くも何もありはしないが、小兒時代は記憶が宜いのに、負けまい負けまいの一念があつて、加之少し解けると母の兩眼が何處からか電の如くあらはれてきつと僕を睨むので必死と勉強した故であらう。併し打明けて云へば、去年までは田舍の田舍の小學校に蠢々して居た子供が、今は見上ぐる程の大男の中にまじつて、相撲とつたら其小指にも敵はぬ程の壯士が、「菊池、此ぁ何ちふ字か、敎へて呉れ」なんぞ慇々しさうに聞きに來るのは餘り不愉快では無かつたのである。

前に云つた通り、塾は古い百姓家をひき直したもので、敎場も寢室も食堂も素より別にあらう筈なく、疊のやゝ清潔な處が敎場、汚い處が食堂、机のない處が寢室だ、其れ時間だ、會だと云ふと、或は障子の蔭より、或は窓の下より、或は薄暗い隅の方より、塾生は續々寄つて來て、ぐるり輪を作つて──其が敎場。さも無い時は、此處では聲張り上げて通鑑を讀む、彼處では默つて戰國策に不審紙つける。塾頭が初學生に素讀を敎ふる此方では、中學生が三四人で外史の會讀をして居る。其また此方では（夏なれば）生平の帷子に扇を腰に插して通學生が、握飯を包んだ布切を丁寧に剝がして、小さな火鉢で鹽鰯を燒いて居る。右に本箱、前に筆立、几案整然として字を書く潔癖家もあれば、爬く爪の垢にはさまる虱をひねり殺して課題の詩を案ずる風流王猛もある。頭から蒲團（冬なれば）を被つて眼と鼻の孔ばかり出して本を讀む者もある。夜は居眠りして鼻の孔に紙捻插されて怒る者もある。竊と机の抽斗から饅頭の隱し食をする者もある。正課を怠つて通俗三國誌ばかり讀む者もある。若し夫れ飯時の混雜に到つては口で云ふより想像した方が餘程分かる位だ。

斯る有樣だから、智育と云つては漢字を識るの外殆んど幾何もなかつたが、其代り辛抱力を養ふ意育と、筋骨を鍛ふ體育は、先づ遺憾なく施された。今日の樣に組織的な體操や、文明的遊戯なぞ無かつたが、藷掘り、水汲み、魚捕り、遠足、夏の游泳、何れも盛に行はれた。就中愉快なのは兎狩だ。兎狩と云つても、銃や獵犬を用ゆるのでなく、兎が棲みさうな小山の一角に幾反の網を張つて、勢子をもつて追ふのである。

收穫が濟む。霜が降る、裏山の櫨が染まる。と兎狩の季節が徐々始まる。繕ひに遣つてあつた網も出來て來る。何日は兎狩と云ふ貼札が出る。脚袢草鞋の用意に僕等は匆々として、何も手に着かぬ。炊事番は夜半に起きて、握飯を拵へる。皆結束して塾の庭に勢揃ひする頃は、最早午前の三時過ぎでもあらう、有明の月白く冴えて居る。三たび鬨の聲を揚げて、月影を踏んで、行く處は東か西か、近くて一二里、遠くて四五里。大人組は、網をかついで、高らかに詩を吟じて行く。僕等は默つて、併し心は揚揚として、ついて行く。睡さうな鷄の音のする村も過ぎ、消魂しく犬の吠えかゝる村も過ぎ、月色茫々たる野路を歩いて行くと、果ては段々睡たくなつて、頭は茫となつて、こくり〱、足ばかり器械的に歩んで居る。不圖颯々と云ふ音が聞える。松風か。眼を開くと川──月にさざめく川瀨の音だ。橋番小屋の前をわざと吶喊して走せ渡る。最早一里半も來たらう。月落ちて、野は一面の曉闇──前に行く者の姿も

瞭然とは見えぬ。不圖すばらしい大きな眞黒いものが鼻先にあらはれる。山だ——目的の。未だ早い。皆其處らに積んである稻塚や粟がらを引出しては、焚火をしながら天明を待つて居る。氣早い連中は土鼠の如く畠に蹲るかと思ふと、一抱へ甘藷を盗んで來て、藁灰に燒いて、談笑しながら食つてゐる。「おい菊池、一つ食はんか」併し僕は睡たい、藁の上に横んで居ると、背は寒いが、面や腹は焚火に暖まつて、炎々と立ち上る焔の間にちら〳〵見えて居た一同の赤い顏が次第に遠くなつて、ついうつとりと一睡入りしたと思へば、「おい、起きんか、夜が明けたぞ、最早網を張りに行つた」と起される。眼を摩つて起き上ると、成程天明だ。東が白んで、曉の風切る樣に面を吹く。焚火の跡だけ黒い圓を描いて、四邊は一面の霜だ。頓て勢揃ひして山にかゝる。進軍の號令がかゝる。鬨の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、最早朝日が晃々と秋空に上つて居る。

今想つても愉快だ。秋が黄に金に紅に紫に鳶にあらゆる彩色の限りを盡した落葉木の枝を押分け葉を打ちはらひ聲を上げて上る心地。網近くまで追ひつめて、如何かと思つて居る時、何處からか「獲れた！」と云ふ聲がして、吾れ知らず棒を振つて勝鬨をあげる時の心地、網番をして攻め寄する勢子の叫びの最早間近になるに、兎のうの字もかけて來ず、あゝ駄目と落膽する時、突然がさ〳〵〳〵と樹叢が鳴つて、覗く鼻先へ淡褐色の痩影がちらり、思はず網に飛び込んで二つ三つ網ながらに筋斗飜る兎を樹蔭から飛びかゝつて押へる時の心地。狸や狐に迯げられて、皆に「菊池は拜んだ、拜んだ」と嘲らるゝ恥辱。あゝ最早正午か。何處の山中の一軒家でか午鶏が鳴いて居る。落葉かき分けて、谷川の水口づけに吸つて、木の根草の上に足投出して、網袋の握飯にかぶりつく時の心地。食つてしまつて、落葉の床に仰向けて寝て、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顏を冷々した風に吹かす心地。「さあ、出發だ」やゝ重い足を移して、また二山三山。不圖郁子の紫を蔓蘿の間に認める驚喜。あまり紅の美しさについ欺されて、自然生なる澁柿の一口に顏を顰める可笑味。數へ立つれば、際限も無い。

秋の日の短かさ、未だ三匹しか獲れぬに、最早鴉が鳴き出した。遙かに見ゆる湖や川は金の如く夕陽に閃いて居る。獲物は葛蘿で四足を縛つて、大人が舁いで、夙に歸つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら〳〵後から歸つて行く。山を下りて、野に出ると、日は彼方の欅の森に沈んで、夕煙が村々の黄昏を催して來る、と思ふと、薄紫にけぶる野末に大きな月が洞々と顏を出す。狩りくらし……何とか歌でも咏みたい風情。其月がやゝ高くやゝ小さくなつて、うち作れて行く吾影の大分短かくなる頃は、僕等は最早塾に歸り着いて、瓢草鞋をぬいで、顏を洗つて、先生を初め一同大胡坐で、手に手に兎汁を盛つて、飯を食つて居る。大久保彦左の鶴の吸物では無いが、此兎は別名を大根、胡蘿蔔、午蒡、燒豆腐、蒟蒻と云ふのではあるまいかと思ふ程正味には懸違つて御目にかゝらぬが、併し其味！　否、其よりも食つてしまつて、着物も更へず、ぐつすり寢る時の心地！　夢も見ない、身動きもしない、明朝の九時頃迄は死骸も同然だ。獵は獵でも、彼獵官者には、到底此寢心地は分かるまい。

（六）

西山先生の塾では、別に塾則と云ふものもなく、大抵の事は自治に任せてあつた。尤も、罪によつては、竹篦とか禁足とか下つては便所の掃除とか云ふ罰もあつたが、其樣なのは亂暴者を制するよりも寧ろ卑怯とか鄙劣とか破廉恥の擧動を排斥するが爲めに設けられてあつたのだ。

一方には他人の飯を食つて威張る士族根性を打つぶすと共に、一方には名節廉恥を重んずる士族魂を何處までも維持させ、此方では堅く塾生の上に君長の權を握つて、而も彼方では決して唯々諾々の卑屈男子を作るまいと云ふのが、蓋し西山先生の目的であつたと思ふ。

面白いのは毎週の聽訟だ。先づ其日は、放課後塾の大廣間に塾生がずらりと輪を作つて坐ると、先生は松島先生を從へて大岡然と上座に坐つて、徐一座を見廻して、「何か申出る事があるかい」と云はれる。すると、塾生の中何か同窓に對して苦情ある者は、「何某君」と被告を名指して、原被兩告相並んで先生の前に出て、原告より其苦情を訴へる。先生が被告に尋問する。稀には列座の塾生が原告若くは被告の證人になることもある。尋問濟んで、先生は即座に判決を下す。辯護士もない、豫審もない、無論控訴もない、上告もない。一種特別の裁判である。其訴訟事件と云つたら實に種々樣々「先生、何某は私を箒でうちました」「何某は私の鼻が天に向いとると云ひました」「私に舌を見せました」など云ふ極無邪氣な問題から、上つては千差萬別。從つて其判決もまた實にさまざまで、「何、舌を見せた、何某、誰某は爾者ぢやないぞ、舌を見せると云ふことがあるか、謝りなさい」「何、鼻が天に向いとると云つた、貴樣の鼻は實際天を向いとるな、併し其樣云ふことは唯默つて思つとるが宜い、言ふ法があるものか、謝りなさい」「何、箒でうつた。宜、これから一月何某は其箒で原告の机の邊を毎日掃除するが好い」など、書き集めたら中々面白い判決例の本が出來ようと思ふ。其稠人廣座の中で被告となると、大した恥辱と考へらるゝので、「出るぞ」と云ふ一言は非常な脅嚇となつた。

併しながら若し人間が尋常正規の裁判を以て、普通の刑罰を以て滿足するものならば、何も米國でよくある彼私刑と云ふ樣なものゝ要もあるまい。竹箆、禁足、稠人廣座の訴訟、此等に優して恐る可きは、塾内の制裁——私刑であつた。塾生一同に睨を注がれた最後、其犧牲は實に氣の毒な目に遭ふのである。誰某は生意氣な奴だ、見苦しい、打て——直ぐ打て。誰某は懦弱な奴だ、胴揚にしろ——直ぐ眼のまはる迄天井の木理を見させる。殊に恐る可きは、夏の頃游泳に行つては溺らされるのと、また一は蒲團蒸だ。こゝに何か塾生の氣に入らぬ者がある。面憎い奴だ、蒲團蒸しにやらうぢやないか、宜からうと、何時の間にか塾中の默契が出來ると思ひなさい。其男が夜本でも讀んで居る所へ、「おい、一寸來い」と一人がさり氣なく呼び出す、うつかり出る所を一人が蒲團を持つて後から打被せる。「何をするッ!」罵つて藻掻く頭に、最早其處此處から蒲團を持つた大供子供が口々に「亂暴はよせ〳〵」と罵り〳〵むら〳〵と寄つてたかつて、押倒しては打被せ、打被せてはまた打被せ、いやが上に積み重ねた蒲團は宛ながら山の如く、其ればかりでも下に埋れた者は堪らぬに、又其上に雲つく男が、「おい、おい、ひどい事あするな、よせ〳〵」なんぞ言ひながら蒲團の上に走りかゝつて顛がる、乘つて踏む——飛んだ舞踏會だ。蒲團の下に踏まれ蒸されて海月となつた犧牲が片息で這出し、ぐにやりと長くなる頃は、最早先刻の舞踏連中は何時かそれ〴〵机の前に坐つて、何處の猫をうつたかと云ふ顏で、いやに澄まし、妙に咳拂ひして、本を讀んで居る。實に誰を怨む事も出來ない。其れこそ泣寢入りだ。

僕は幸にして此等の私刑を免れたが、一度僕の友人を助けた事がある。松村清磨と云つて、僕より二歲年長で、僕より半歲あまり後れて入塾した少年であつた。何でも大分遠方の田舍の金滿家の子で、入塾の時も先生の宅初め塾生

一同にまるで寺小屋入りの樣に饅頭、赤飯なんぞ持つて來た。至て無口な、人違い少年であつたが、塾生は田舍者の癖に――御自分達も田舍者の癖に――高慢だとか、威張つて居るとか、面憎がつて、終に何月何日の夜、誰某がランプを消すを相圖に散々ぶちのめすと云ふ約束が出來た。其日僕は裏の井戸端で小刀を磨いで居ると、件の松村が相かはらず默然として出て來たが、僕の顏を見ると莞爾笑つた。其笑貌を見ると、僕は堪らなく氣の毒になつて、終に裏切の復讐を受くるの危險を冒して、今夜斯々の企ある事を告げ、西山先生の奧樣――奧樣は大に僕を可愛がつて、時々着物の綻を縫つて呉れたり、先生には內證で梅子など竊と袖に入れて呉れた。僕が西山塾第一の幼者であつたからであらう……に賴んで、其夜は先生の宅に潛伏さして、首尾よく此陰謀を免れさした。

此れが緣となつて、僕は松村と非常に親くなつた。人間は實に淺つぽいもので、交際つて見れば、極皮相で人を判斷してしまふ。高慢と思つた松村は、極めて柔和で、人臆をするので、平素默つて居るが、話をすると面白い少年でした。で、僕と松村の交情は愈深くなつて、入塾した翌々年の春であつたと思ふ、西山先生の病氣か何かで一ケ月ばかり塾が休業になつた時、松村が歸省するから是非一處に來いと云ふので、僕は母に强請つて、伯父に許されて、松村の故鄕を見に行つた。

（七）

同伴は僕に、松村に、其れから迎へに來た松村の下男、都合三人。西山塾から五里程歩いて、其れから舟……無論五六反帆の極小さな和船だ。

山家育の僕、恥しい事だが、此時初めて海と云ふものを眼近に見た。（繪圖や遠目には承知して居たが）已に其前にも塾で車鰕の生きたのを見て「ヤア此鰕は未だ熟れて居ない、白いな」と云つて塾の大嘲笑を惹起したことがあつた。干鰕ばかり見馴れた僕は、鰕は皆赤いものと思つたのです。所が海に關する僕の失策はまだまだ已まない。舟出して暫らくは穩波晴潮鏡の如しで、僕も松村と笑つたり食つたりして居たが、頓て少し搖れ出すと、さあ大變！　醉ふ、吐く、唸る、舟をつけろと怒鳴る。松村も下男も舟子も流石に持て餘した樣子だつた。其內寢入つたのは宜かつたが、夜中頃眼をさますと、無暗に咽が乾いて來た。茶瓶がない。待てよ、舟の外漫々たるもの渾て是れ水では無いか。幸ひあり合ふ茶碗でそつと舷外の水を掬つて、一口。あつ――咽返つた、鹹いの、鹹くないのツて、今思つても――咽が痛い。幸ひ船頭は帆の蔭になつて居たし、松村と下男は寢て居て、月と星丈が見物人だつたから宜かつたが、時々思ひ出しても馬鹿々々しくて堪らぬ。

海と云つても、たかが內海、右手には大きな島が斷續横はり、左は連山波濤の如く重疊して居る。離れて見ると屛風を立てた樣な山又山、何處に舟が着けられようかと覺束なく思はるゝが、近寄つて見ると處々に小島もあれば、山穿ちて入江潛み、江に沿うて村もある。陸路だと、名だたる峻坂の幾個も越えて、上つたり下つたり鋸形に歩いて行くのだが、海路は氣樂に山を眺めて、好きな入江に入られるのである。僕等は翌日の午頃其中で尤も大きな入江の一つに舟を繫いで、まだ船心地に頭はふらふら、千鳥足に蠣殼砂利を踏みつけて、松村が宅に向つて居た。

三方山の一面、平地の廣さは中々僕の故鄕に及ばぬが、戶數は三倍も其上もあらう。眞中を川が流れて、川の右岸に人家が集まり、海つきは大概漁村だが、山手の方は大分瓦葺や白壁が見え、大きな寺の屋根も見えて居た。川の左岸

は田に、嶋濱に、漁村だ。松村が初めて僕を連れて行つたのは、濱近くの村の中に、一段高く石垣を築きあげて、白練塀を繞らした大きな家であつた。何でも夥しく煙草を乾したり、俵にしたのを積んだりしてあつた所を見れば、煙草屋であつたらう。三十あまりの松村にはあまり似て居ぬ男主人が、松村の來るを見ると莞爾した。若い父親だなと思つたら、豈圖らんや此は松村の兄で、兩親は母屋を總領に讓り、離れの隱宅に居ることを聞き知つた。

其れから松村と母屋を出て一町ばかり、小さな汐入川の橋を渡つて行くと、水に臨んだ一構の屋敷があつて、門前には家鴨が騒いで居る。門を入るとすぐ左に大きな海棠が一ぱいに花をもつて、右手に二階建の家があつて、其處に機の音が聞えて居た。其處を過ぎて行くと、平建の家があつて玄關側にはすばらしい朱欒の樹があつて、其下に白い鶏が澤山に居た。下男が已に報知をしたと見えて、四十位の如何にも眼の美しい婦人が玄關に出て居て、松村を見ると莞爾、僕にも「よく御出なさいました」と云つて莞爾。松村が「阿爺は？」と問ふ言葉の下から、五十位の綺麗な隱居が、片手に鋏片手に菊苗を提げて、裏の方からやつて來た。頓て上る。茶が出る。無口の松村が非常に喋舌べる。四邊の賑やかなのに、何故か僕は妙に悲しく、泣き出しさうな心地になつて、默つて居た。其れを松村の母君が見て、「御氣分がお惡い樣ですね」

「否」

「阿母、菊池君は舟に醉つたんです」

「あゝ其樣かい、其では少し御寢みなさるが宜からう」

「其れが宜い、其れが宜い、少し寢ると直ぐよくなる」と老人は語をそへた。

松村の母君が態々に敷いて呉れた蒲團に横になつて、僕は何時しかぐつすり寢てしまつたから、親子の間に如何な情話があつたか、それは知らぬ。

呼ばれて眼を醒すと最早夕方、醉心地も大分よくなつて居た。南國の、嶋濱は殊に暖かいので、庭の白砂に大きな紫臺を置かして、松村の兩親、松村、僕、それから先刻は見かけなかつたが松村の妹であらう母に似て美しい眼をもつた可愛い八歳位の娘、此丈揃つて、遥か向うの島山が紫から藍になるのを眺めながら、鰤づくめの料理に舌鼓を鳴らして居た。

（八）

松村の隱宅は實に好い場所だつた。川尻に築き出して、三方は水、裏は蜜柑畑に櫨の木が七八本、高潮には屋敷の三方宛ながら水に浮いて、石垣の上から釣も出來る、白帆の往來も座敷から手に取る樣に眺められる。

水は家の三方を繞り、村の好意は家の全部を繞るとでも云はうか。何でも久しい村の喬木で、家は富に潤ひ、人は德に潤つて居た。父は彌兵衛とか云つて、最早五十を過ぎ、家は長子に讓つて全くの隱居、酒も嗜まず、煙草も喫まず、碁もうたず、菊作りが道樂。花では菊を愛し、樹では櫨が大好き――其幹も枝も如何にも矗々として些の曲なきを愛するのだと云ふ。それで號を櫨堂と云つた。成程庭樹も多かつたが、松でも何でも一本として曲りくねつたものはなかつた。木に限らず、凡て不自然なものが大嫌ひ、然るに人間は兎角不自然なもの、自然ほど自然なものはないので、バイロンでは無いが彌兵衛老人は人間よりも寧ろ自然を愛して居た。曾て一たび東京に行つた時、遠州灘で大荒れになつて、乘客は皆眞蒼に醉つて南無阿彌陀佛を唱へて居るに、彌兵衛老人獨り甲板の欄につかまつて、山の如き大濤を眺めて居たので、船長が漸く慰めて下へやつたこともあつたさうな。それから歸つて、皆が東京話を聞きに來

ると、老人は唯「東京と云ふ處は、いやもう人ばかりどや〳〵して、火事が一夜に三度もあつて、いやな處だ」と云つたきりだつた。曾て嫡子の妻に親類の娘を貰ふことにきめてあつたが、或時彌兵衛老人親類の宅に行つて見ると、七尺に三尺五寸といふすばらしい總桐の簞笥が三つも四つも拵へてあつて、わざ〳〵城下から呼び寄せた針女が何でも西陣下りの織物を夥しく仕立てて居たので、老人大に怒つて「其樣な贅澤な事する馬鹿は、最早貰はぬ、貰はぬ」と罵つて、其きり破談にしたと云ふことだ。僕が逗留中は、別に大した物珍らしいと思ふこともなかつたが、或時松村が、塾では皆威張つて、乃公の家は何千石だつたの、公乃の爺は何と云ふ官員だの云ふ癖があつて仕方がないと愚痴をこぼしたら、彌兵衛老人は、「其ぢや卿も爺は煙草刻の息子だ、と其樣云つて遣れば宜いぢやないか」と笑つた。又此も逗留中目撃したことであつたが、或日近邊の金滿家の隱居で、俗物の標本は手前でムいと云ふ顏をぶらさげた嫌な老人が話に來て、少し長座をすると、彌兵衛老人は大きな聲で、隣室に居る細君を呼んで、「最早何時だい――皆戸でも締めて、早く寢ろ、寢ろ」斯樣な老人だから、村でも、俗物は「變物」と諢名を負はして、笑つて而も恐れて居た。

若し彌兵衛老人のみであつたら、あまり己を潔うするに過ぎて、一家親類知己朋友の交際も隨分圓滑を缺いたかも知れぬ。其を甘く彌縫するのが、松村の母――兄と松村と一向肖て居ないと思うたも道理、兄は先妻の子であつた――の役目であつた。睦と云ふ名は至極其人に適當したものであらう、如何なる人にも、調子を合はして行く。否先方から自づと合はされて行くのである。人の世話を燒くのが大好きで、必ずしも求めて味方を作るでないが、自づと人が懷いて來る。田舍で誰教ふるでもあるまいに、和歌も詠む、手もよく書く、畫も一寸かく。氣澤山で、趣味の多角形なること夥しい、一寸家の内を見ても、長火鉢は拭ひつけて黑光りに光り、銅壺は磨いて赤光りに光り、傘は袋に、小刀は鞘に、紙撚は束ねて机の小抽斗に藏め、隅の隅まで塵一つ落ちて居ず、恰も無心の道具も此名將の意を受けては一寸隊外に呼び出されてはまた自づから元の位置に歸りでもする樣に、秩序整然として、見るも清々しい心地がするのみならず、障子の補綴一つにも、櫻紅葉を切り、袋戸の切張にも手づから桔梗朝顏を畫くと云ふ風に、一種の「グレース」が物毎にあらはれて居る。或時松村の母が、夥しい古下駄を井戸端でせつせと洗つて居るのを不圖見かけて、僕は可笑しいと思つた――西山先生から彼程鍛はれても、如何しても矢張菊池の坊ちやまであつた風が除かない――が、斯樣に下駄を洗つて、乾して、自身緒をくけて、たてて、一足づつ村の貧乏人や乞食に施すのが母の癖だと云ふことを後に松村から聞いて、僕は赤面した。隱宅は、此兩夫婦の外に、松村が妹――お敏ちやんとか云つた――其れに松村を迎へに來た下男の萬吉夫婦に、犬が一疋、家鴨鷄各十數羽――いやまだ忘れて居た、非常に音の美い鶯が一羽飼つてあつた。

松村が塾に居ても始終懷鄉病をもつて居るのは、無理でない。此家庭の空氣は實によかつた。松村が妹の敏ちやんが、天眞爛漫として、寸分の修飾なく、花の笑ふが如き面を見ても、其は分かる。家庭の空氣も實にさま〴〵で、いやに蒸暑いのもあれば、骨が冰る程冷たいのもあり、座敷に伽羅を焚いて舊所の臭を隱すのもある。大人は却て欺さるゝが、子供の鼻覺は案外に敏なもので、寄ると直ぐ其家庭の空氣を嗅ぎ分ける。僕は直ぐ此家が好きになつた。

愛子の友と云ひ、また不幸な身の上と聞き知

つたからでもあらう、松村の兩親は大きに僕を可愛がつて呉れた。老人は「若い時の苦勞は買つてもせいと云ふ通り、子供の内から鍛へた體でなければ物の役に立つものでは無い、あなたでも、淸磨――松村の名だ――でも、精出して勉强なさい」など幾度か其樣云つて呉れた。松村の母も僕の母の事など色々細かに聞き質して、口には何も云はなかつたが、眼にはしば〱涙を持つて居た。

境遇が變つて、事毎珍しいので、僕等は如何して日が立つか分からなかつた。或時は汐干にいつて、貝をとつたり、蟹に手をはさまれるやら、海月を握つた手で顔を撫でゝ顔が眞赤に腫衝するやら、だぼをつぶしたり、手長蝦を捕へたり、暫時の間に可なりの海通になつた。雨が降る日は母屋の二階にある武王軍談、漢楚軍談、呉越軍談、三國誌、八犬傳、太閤記の類を山の如く持ち出して、あられを噛りながら、讀み散らしては、勝手次第に批評を加へたり、また或は漁村を見舞つては、皆が、「坊ちやま、大きく御なんなさつたなあ、まあ」と松村を懷しがるに、僕は心の何處にか微かな苦痛を覺えたり、或は松村と二人してあらゆる法則を破つた怪畫を描いては、松村の妹にやつたり、其も退屈しては、二人でお化の眞似して敏ちやんを嚇したりした。或は小學校の側を二人手を組んで憚りながら僕等は中西西山先生の門人だと云はぬばかりに睥睨して通つたこともある。また城下から二人の少年學者が歸つて來たと云ふので、近隣の者が如何して手に入れたのか何か横文字を書いた何かの包紙を持つて來て説明を請ふに、僕等は眞赤になつて頭を搔き、其晩二人で塾に歸つたら如何でもして英語を始めようぢやないかと奮然相誓つたこともある。

(九)

面白いのは、松村老人の命で、僕、松村、萬吉、それから犬の「熊」、これだけ打連れて、松村家の山見に行つたことであつた。萬吉とは僕も大分仲好になつた。彼は曾て僕の家に勤めて居た女のお重を男にした樣の人物、口は遲いが、非常の早足、松村が故郷から城下まで二十何里、加之半分は嶮阻の山道を、樂に日着きする男、子供の時から奉公して、松村家の山は、何處に何尺何寸廻りの松が何本あつて、何處の松は何時何本伐つて何本植ゑついだと云ふ事まで、悉く諳じて居る。山行の用意は極簡單、僕等は股引に草鞋、萬吉は素足に草履、鉈を一挺腰にさし、握飯包を肩にかけ、木の寸法を量る繩を袂に入れて居る。「熊」は勿論着のみ着のまゝ、尾をふつてさきに立つて行く。

松村家の山は、或は海に沿ひ、或は陸に引込んで、北の方五里ばかりが間に點々として居た。春の山を歩くのは、實に好いものだ。暖かくはあり、草萱も茂らず、未だ蛇も居ず――それから此頃の樣に彼恐ろしい人射獵師も居ず――去年の落葉の間からぼつ〱萌え出した若草や草花を踏みしだいて、うす闇い杉山に入つたり、松子を蹴り松脂の香を嗅いで松山を穿つたり、花かと疑ふ新芽美しい雜木山に分け入つたり、ぶら〱行くのは實に愉快なものだ。僕等はしばしば萬吉を呼んでは、手頃の椿や樫をステッキに切らせたり、蕨を土産にすると云つては採り、よさうと云つては捨て、躑躅の花を折つては綺麗と讃めて行く、山櫻は大方散つて居たが、稀には四月の雪を葉がくれに殘して居た。突然犬がウーと唸る。足もとから雉子がばた〱飛び出す。羽風に驚いて、花はちら〱。あゝ惜しいことをしたと云ひ貌に、犬は鼻をひく〱させながら熟と後を見送る。僕等も立どまつて耳傾ける、最早何もない――唯何處かに丁々木を伐る音が聞えるばかりだ。忽ち林中に隙がさす。ふり仰ぐと、ふは〱とした白雲が今樹の

間を流れて行く。雲過ぎてまた碧空になる――身は最早陽光に包まれて居る。汗を拭つて、山腹を上る。ふと山の頂に出る。晴潮鏡の如き海があはれる。遙かに島山が霞んで見える。古い切株に腰かけて、欠伸しながら、眺めて居ると好い心地に眼は細うなつて、身も魂も融然と溶けてしまひさうな。いやもう長閑なもの。

山番小屋で澁茶を飲んで、また小山を二つ三つ越えて、大分草臥れかけた頃、不圖足下に小さな入江があはれる。思ひがけもない、誰が斯樣な處に斯樣な入江が隱れて居ると思はうぞ。僕等は恍然と眺める。入江の對岸に茅葺の家が二三十、煙も見え、ほのかに午鷄の聲も聞える。萬吉は其一を指して、彼家で午餐を食ふのだと云ふ。其れから滑る樣にして山を下りて、入江の濟に出る。狹い樣だが對岸へは十町ばかり、陸を廻つたら小一里もあらう。あゝ誰が之を江と云ひ、水と云はうぞ。水では無い、玉、玉の鏡だ。其淳に若草の山を映じ、水心に天色の碧を浮べ、瑩然と凝つた所は、實に綠の緣とつた長手の明鏡――玉の鏡だ。つい其處に一艘の小舟が眠つて居る。舟の上で一人の漁師が足投げ出して網を繕つて居る。渡を賴む。漁師がやをら起つて舟を寄せる。犬が逸早く心得貌にひらりと飛び乘る。僕等もつゞいて乘り移る。下を覗けば、水は青味を帶びた水晶と透き徹つて、底の小石に金絲を拔く日影がちらちら。「海鼠々々、船頭さん、一寸」と突いて貰つて海鼠をざぶ〳〵洗つて、萬吉は手摑に食つて居る。頓て櫓が咿啞と鳴り出す。舟は湛然と凝つた入江の水を分けて、白リボンの樣な一條の痕を曳いて、惜しい程早く對岸へ着いてしまふ。回顧ると、先刻立つて居た渚は最早對岸になつて、江に浮ぶ山の影が未だ搖々として定まらぬ。船頭をねぎらつて、漁家の間を縫つて、山の上から見た彼大きな茅葺の家に入ると、廣々した庭に躑躅が照つて、裏の孟宗藪に鶯が頻りに鳴いて居る。四十四五の質朴な婦人が出て來て、松村の顏を見るより「まあ、淸ちやま――」と喫驚する。中々握飯を食はさうや、彼女は筍飯を製へて、飢ゑて倒れんとする僕等に供するのである。

三日ばかり山を歩いては、田舍家に宿り、夜が明けてはまた歩きして、松村家の山は大方見盡した。衣は春山の香に染めて、心は悠々として平和に滿ちた。唯一度、喧嘩らしいものをした。其も畢竟曲は僕にありで、實は僕も松村が故鄕に來て以來、面白いにつけ、樂しいにつけ、西山雄の境遇に殆んど忘却して居た僕が家の昔、今の身の上が頻りに思ひ浮べられて、心の底に一種の不滿――嫉妬とは云はさぬ――が潛伏して居たのである。其が不圖あらはれて來た。何有、喧嘩の問題は、舟で歸るか、陸を歸るかと云ふ簡單なものに過ぎない。松村は如何しても舟で歸ると云ふ――彼は足に肉刺が出來て居た――僕は陸と云ふ――舟に醉ふから――雙方固く執つて相下らずで、僕は――吾儘ッ子ではあつた哩――客だから、客の云ふ通りにするが法だと云ふ。柔和しい松村も些と腹が立つたと見えて主人は吾だから主人の云ふ通り客はするものだと云ふ。果ては愈激戰となつて、僕は「松村、貴公は僕を貧乏人の親無し子と思うて、僕を壓制するのか。僕は最早此れから陸行して歸る。獨りで塾に歸る」と憤然と言ひ放つた。言つた後からあゝ言ひ過ぎた、とは思つたが倂し頑として一歩もひかぬ。伯林會議あはや破裂と見えた所に、ビスマークの萬吉が、半分は舟半分は陸と云ふ仲裁說を持出して漸無事に治まつた。ゴルチャコッフは柔和な男で、先方から頓て「堪忍して呉れ玉へ」と折れて來る。所で、此ビーコンスフィルドも脆く「堪忍して呉れ玉へ」と鸚鵡返しに折れて、五分過ぎた後は、また二

人で何か面白さうに笑つて居た。
要するに、約一ケ月の逗留は僕をして松村といよ／＼親密ならしめた。面白い限りを盡して、したゝか御馳走になつて、また其上に僕の母へ土産にと松村が母の殊に心を配つた鹽鯛の苞まで持たされて松村とまた西山塾に歸つたのは、翌月の初めであつた。
歸つたが、併し西山塾も最早暫時であつた。何でも先生は病中に色々考をつけられたのであらう、一日——明治十四年七月一日と記憶する——先生は塾生殘らず集めて云はるゝには、今日の樣な日々新の世の中に、老生の樣な老朽が諸君を教育の任に當つて居ては、人の子を賊ふ恐れがある、老生は此れからいよ／＼百姓爺となるによつて、諸君は隨意によき師を求めて、外國語などを修めて、一廉世に有用な人物となつて貰ひたい、と斯樣云ひ渡された。突然の事で、多數は愕然、中には涙をこぼす者——僕も其一人——もあつた。それから先生は其晩塾生一同を呼んで、五目飯の馳走をして其翌日別れに一同寫眞を撮つて、西山塾は閉塾となつてしまつた。

（十）

昨日日曜の暇に書齋の整理をすると、古い寫眞を見出した。最早二十年近くもなつて、加之昔の幼稚な寫眞術で撮つたのだから、一體に茶色にぼけて、人の顏は幽靈の樣に見える。何でも四五十人もあらう、立つたり、蹲んだり、腕まくりして肩を怒らしたり、洒然として冷笑つたり、樣々な態をして居る。見るから耐へ難いなつかしさが、水の如く身にしみた。右の端に、雲つく大男の間から「僕も一口加へて吳れ玉へ」と云ひ貌にちよこりんと小さな顏を出して居るのは、確かに僕だ。きつと口を結んで、頰の何處やらに笑を浮べて居る。あゝ此れが二十年前の僕か。あゝ菊池君、君も年が寄つたな。西山塾で一番子供と云はれて、小さいものゝ譬喩には直ぐ引出されて、一反で二つも出來るユキタケの短かな着物を着て、此れでも中西西山先生の門人だと威張つて居たのは、思へば昨日の樣だが最早二十年の昔になつたか。流るゝものは水、逝くものは月日、今此寫眞を見ると、吾子でもあるかの樣に、なつかしくて堪らぬ。
——見て居る内に、今年九歲になる僕の長子が入つて來て、「阿爺、何を見て御出なさるの？」と云ひ／＼すり寄つた。「昔の阿爺や阿爺の朋友を見て居るのさ」「左樣？　何れが阿爺なの？　此れが？　此れが阿爺？　此樣に小さかつたの？」と云ひ／＼寫眞と僕の顏を見比べて居たが、吻と笑ひ出した。無理に寫眞を持つて、書齋を出るより早く、「靜ちやん、此れは僕の長女で、今年五歲になる）御覽な、可愛い阿爺の寫眞」と呼んで居た。
寫眞は今眼の前にないが、眼を閉ぢると、二十年の雲を透して樣々の顏が歷々と浮んで來る。眞中に長鬚を綽して、顴骨稜々精悍の氣面に溢るゝは、西山先生では無いか。先生の左に莞爾笑つて居る——あゝ此れが彼髯嚴しい紳士の松村か、あゝ小松——彼は家が貧乏であつたのか、四季袷一枚で通して、虱が居ること實に夥しいので、「王猛先生」と諢名があつて、また汗や脂や醬油や色々の物に汚れた其袷は實に忍ぶ可からざる奇臭を帶びて、彼が立つと芬と薫ずるので、「小松の打ふり」と云つて有名なものであつた。山鹿と云ふのは、僕に一歲上だが、如何にも鼻汁が出る癖があつて、其を筒袖で拭くので、彼が左右の袖は糊した樣に光つて鯱張つて居た。金井と云ふのは俊敏にして、氣を負ふ少年で、滿足な着物をわざ／＼綻ばし、羽織の紐は引切つて、觀世捻（尤も此丈は僕もやつた）で結んで居た。河喜多と云ふのは、見上げる程の大男、力も智慧も牛に匹敵

する人物で、何時も菓子を縕と持つて來ては、僕に八大家の素讀を習つた。志方と云ふのは兄弟だつたが、喧嘩ばかりして居て或時家許から先生に雉子を持たせて遣つたのを卿持つて行けあなた御出と兄弟互に讓り合つて、七日も八日も經つてやつと二人で持つて行つたが、最早其時は雉子は酸ぱくなつて居たさうな。荒井と云ふのは、非常に怒りつぽいので、「消炭」と云ふ渾名があつたが、火の樣に怒つたあとは水の樣に沈んで、三日も四日も妙に鬱いで居るのが癖だつた。若し一々記憶を呼び起したら、一部の列傳を成すも容易な事だ。

二十年、二十年と云へば、實生の木ですら最早一廉の材になる。それに碌々として澄まして居る僕のさまは、何事か。思へば腸が煮える樣な。あゝ人間の運命程分からぬものはない。同じ釜の飯を食つても、身の行末は實に千差萬別。二十年前一枚の寫眞に顏を合はせた西山塾生の中には、未だ四十にならずして最早姓名を「不朽」の卷に彫つた人物もある。或は村長をして居る者もある。縣會議員もある。俊秀の才子身を誤つて、車力とまで墮落した者もある。また悲しいかな道を失つて强盜とまでなつた者もある。一滴の水、大海に落つる樣に、二十年來杳として音沙汰もなくなつた者もある。寫眞の顏を見れば、何れも活潑に、無邪氣に、すぐれて秀でた人もなく、また惡人も居ない樣だが、實際の運命は實にさま〴〵で、人生の不思議、思へば實に暗涙に堪へない。

三の卷

（一）

松にせよ、欅にせよ、切つた木口を御覽なさい。輪層重々われと吾發達の歷史を描いて居るが、仔細に檢すると、其圈と圈との間は決して一樣ではなく、此でも伸びたのかと思ふ程輪々相密接して居るもあれば、或年はまた非常の速力を以て外に向つて膨脹して居る。畢竟時間は等差級數を以て進むが時間に生活する或ものは往々にして幾何級數をとつて進むのである。國民の歷史、個人の生涯皆然りで、若し仔細に其發達の歷史を點檢して見ると、一世紀に當る一年もあらうし、また一秒にあたる一日もあらう。

明治十四年七月の僕は、明治十二年五月の僕とは大分總ての點に於て變つて居た。二年前、一人の小兒が母に連れられ馬に乘つて山中から出て來た事は、吾が上か人の事か分からぬ位。里數を云へば唯二日程、年から云へば唯二年の月日を隔てながら、最早故鄕の面影も瞭然とはしなかつた。年少時代は、馬車馬ではないが、傍目もふらず、唯前へ前へと進めば其で宜いので、後の事などに頓着する暇はない。所謂人生の春は一步進めば後は直ぐ霞になつてしまふ。

故鄕の消息もまた稀であつた。ちよく〳〵出て來ますと云つた延年寺の和尙樣も何故か一寸も出て來ず、勝助お重は無筆の悲しさ、稀に覺束ない他人の筆を賴んで安否を問ひ、知らすばかり。尤も唯一度、故鄕の生きた消息に接したことがあつた。西山塾の閉づる少し前であつたと思ふ、或日机に凭つて何か寫物をして居ると、同輩が僕を呼んで、

「菊池、人が來とるぞ」

僕の筒袖を着た儘で、勢よく飛んで出ると、直ぐ玄關口に大の男が立つて居た。新吾だ、新吾だ――彼樣な大きな鼻と細い眼を持つた男が外に何處にあらうぞ。

「新吾ぢやないか」

と僕が口走る聲は、新吾が、

「おゝ、愼ちやま」

と叫ぶ聲にぶつかつて、彼は僕を眺めて突立ち、

僕は暫らく彼が鼻孔の伸びつ縮みつ——此れは彼が一方ならぬ滿足を感ずる時によくする癖で——するのを唯熟と見て、彼が平生の樣に馬も引いて居ず、着物さへも藍縞の單衣に古いながらも小倉の角帶、矢立を腰にさして、草鞋脚袢がけで居るのに氣づいたのは、餘程後の事であつた。

塾内には應接間が素よりあらう筈なく、僕は新吾を引張つて、塾の裏の竹藪の蔭に行つて、二年間の積る話をした。寺の和尚樣は、其後兎角持病が惡くて、寢てばかり居るが、併し相變らず口は達者でよく喋舌ると云ふ事。但章魚は病氣によくないので止めたと云ふ事。勝助は相變らず莞爾々々して月々の墓參を怠らずする事。お重は緣あつて村の文次と云ふ正直な百姓の家へ嫁に行つて、今でも矢張菊池の奧樣や坊ちやまの話ばかりして、朝々神棚を拜んでは、菊池の奧樣坊ちやまが息災で早く妻籠に歸つて御出なさる樣にと祈願する事。其れから彼嫌な堅吾叔父の家では、別に變りもないが、近來叔父が筋の惡い流れ者の女を妾に入れて、叔母がひどく氣鬱して、從姉のお藤は近來ます／＼お洒落をして三味線端唄ばかり習つて居て、妹のお芳は矢張小學校に通つて何時も僕等をとるが、家庭が面白くないので氣の毒な程心配をする事。新吾其人は相變らず暇々に讀書筆算を勉強して、此先月からは馬士をやめて、炭燒親方の手代の樣なものになつて、今度も其親方の要でわざ／＼城下に出て來た事。伯父の家に行つて僕の母に逢ひ、其足で此處に尋ねて來た事。僕が大きくなつて、活潑な風をして居るのが非常嬉しい事。斯等の話は滔々として彼が重やかな脣を漏れ、久し振に「精出してエライ者になんなされよウ」と例の口癖を云つて、何も土產がなくて殘念だとこぼし／＼大きな手拭に包んだものを袂から出して吳れた。開けて見ると、僕が大好きの楊梅だ。わざ／＼故鄉から持つて來て吳れたのであらう。

其れから僕は得々然と肩を掉つて、新吾を引張つて塾の周圍を巡つて、僕等が自炊して居る事を話すと、新吾は非常の大慶で、其れから僕が本箱の中から不用の書籍を一二册と、竝びに僕が書いたものを和尚樣や皆の者に見せたいと彼が云ふので寫物の書損を一二枚遣ると、新吾はます／＼大慶で、其れから僕が新吾を引張つて一寸西山先生に面會さすと、新吾が大慶は最早絕頂に達して、何度も／＼坊ちやまを御願申します」と繰り返した。西山先生は滅多に人を容さない方であつたが、新吾に對しては別に嘲弄の鋒も出さず、機嫌よく面會して、「宜、宜、此坊主は乃公が可愛がつて敎つてやる、安心さつしやい」と領かれたので、新吾はほくほく喜んで、あとでも「先生はエライ、先生はエライ」と獨言して居た。

子供の悲しさには、故鄉の芳ちやんや勝助等にも「宜敷」の外遣る土產もないので、僕は「宜敷」を澤山新吾に背負はして別れた。新吾が歸つたが、其人の噂は楊梅の核と共に塾に殘つて、皆が菊池の「叔父御々々」と諢名をつけて、僕を嘲つた。其れを西山先生が聞いて、或時、

「貴公達は彼をたゞの田舍者と思ふかい、今に見さつし」

と云はれたこともあつた。

併し此れは話が逆戾り、あらためて前卷のつゞきを話さう。

（二）

西山塾を閉ぢた後は、しばらく伯父の家に歸つて居ました。在塾の間も、一月に一度位は、洗濯物など抱へて歸つては、伯母が得意の甘藷團子汁や五日飯の馳走になつたが、併し多くは其日歸りで、殊に西山塾では今の樣に夏休冬休と云ふものもなかつたので、伯父の家にゆつ

くりするのは、今度が初と云つても宜い位であつた。
　未だ男の二三人は始終來て、其處の石垣を直したり、此處の畠を拓いたりして居るが、併し伯父の屋敷も餘程整つて來た。一秒時の油斷なく進む自然物の成長は思ひの外に早いもので、僕等母子が一昨年初めて此家に來た頃、纔植ゑてあつた果樹も最早ぼつ〳〵實を結び、其頃未だ棚もかけず蔓は無暗に刈つて束ねてあつた葡萄も、今は棚一はいに綠の葉をのべ、淡綠の珠玉をつるし、薄紫の影を滿地に落して居る。扇形滿月形の花壇には、伯母が東京から種子を持つて來た西洋草花が、紅、紫、碧、黃さまざまの濃やかな色を夏日の光に曝して、終日蜂を招いで居ると、屋敷の隅の肥料小屋には、夕顏絲瓜烏瓜苦瓜瓢が無暗に這ひかゝつて、其邊には伯父が自慢の西洋水瓜や西洋南瓜がごろごろ葉がくれに轉がつて、粗硬な葉の中に嫩らかな心を包んで野菜の中の武藏坊辨慶と一寸洒落た甘藍はべたりと坐り、觀兵式でもあるまいに玉蜀黍は紅絹の帽飾の房をふりたてて列を正して立つて居る。山羊と豚の繁殖は思はしくなかつたが、牛は更に一頭殖えて、日々家族の用に餘る程の乳がとれるので、伯母は頻りに牛酪の製法を研究して居るが、未だ頓斗好結果を奏しない。家禽類は、洋禽も和鷄もよく育つて、朝々鈴江君が餌を遣ると夥しい鬨の聲をあげながら眞黑にかゝつて來る。卵はもとより、親鳥もしば〳〵伯父の胃の腑を盈したが、あまり消費が劇しいので、伯母は憲法を立てて、特別の來客若くは式日を除くの外、月に一鷄を超ゆ可からずと云ふことに定めたので、伯父は少し弱つて居た。僕が歸つた頃は、最早夏蠶も濟んで、蠶糞は肥料壺に、桑がらは束ねて薪小屋に、種紙は風通しの宜い座敷の天井に吊られて、新築の蠶室の方には終日座繰の音が響いて居た。鈴江君も折からの休業に、面白半分座繰の前に坐つて、節だらけの絲をひいて、其でも今日は一升五合ひいたなどと威張つて居た。茶は未だ栽培の日が淺いので、大した事もないが、併し溪紙張りの大きな茶壺の二つも座敷に据ゑてあつた。要するに、創業後僅々二年の經營としては、何も可なりに整つて居たのである。

　母が來たのは、伯父伯母の爲めに、確かに一大利益であつた。元來は僕等母子の爲めに呼んだのであらうが、結果は野田家の益になつたのである。伯父は中々企業心に富んで、よく經綸を立てる、また其經綸を實行しようと云ふ勇氣もあつたが、併し餘の粗大な氣質で、いざ實際の施設となると、遺算だらけ、加之事業家の第一資格たる彼忍耐執着の力を缺いて居たので、種々有益な經綸を立てるが、直ぐに倦む、行はれぬと腹を立てる、實に公共心のあつた人で、他人の事は寧ろ自己が事よりも世話する方であるのに、此粗大と短氣の爲めに却て往々吾人望を殺ぐ樣になつて了ふこともある。凡そ日本の改良は先づ有志家其人の居村から始めねばならぬと云ふのが伯父の素論で、戶長初め村の重立つた者を呼び寄せてはしば〳〵說得して居た。併し改良が一回二回の說諭でおいそれと出來るのなら、何もわざ〳〵志士の涙を搾つたり、殉難者の血を流したり、する迄もあるまいが、左樣行かぬが世の中。伯父は誰から聞いたのか、泰西諸國と並び立つには是非日本の人種改良をせねばならぬ、人種改良は先づ食物改良から始めて大に肉食を奬勵せねばならぬと云つて──隗は勿論此點にかけては今更あらためて云ふまでもない率先者──村中に是非鷄豚を飼はせようとかゝつて、自身世話して洋鷄の種を取り寄せ、自家の卵まで孵さして、重なる家に雛つ子を二三羽づつ配つたが、一平が家のは猫めがとる、二作が宅では下水に陷ちて死ぬ、三

右衛門が豚は畑を荒らしたと云つて打殺して食ふ、いや最早散々の成績。それから甘藷を植ゑさせると云つて、わざ〳〵甘藷栽培法を平假名に書き直さし、其を活版に刷つて戸毎に種と共に配つたが、種は多分鳥の餌になり、「栽培法」は恐らく子供の鼻ふき紙になつてしまつた。世話好きの伯父は之にも懲りず、今日の世の中子供は素より大人と雖も無教育では行かぬと云つて、わざ〳〵先生を雇つて、村に夜學校の樣なものを興したが、伯父が恐さに初めの間こそ其處の太郎作此處の茂平次も頭かく〳〵孫が讀みさしの小學讀本を廣げたが、頓て一人減り二人減つて、間もなく先生は弟子が來ぬので敎へられぬと訴へた。伯父もあまりの事に、非常に立腹して、村の者を呼び寄せて散々叱り飛ばしたが、併し立腹は改革の好手段にあらずで、村の者は大恐入りに恐入つたは宜かつたが、恐入り——泣寢入りで、伯父が折角の經綸も水泡に歸して了つた。伯父は時々晩餐の食卓に其事を持出して、「馬鹿共」と叱ると、伯母は「如何して良人、自己の子供を育てるのでも思ふ樣には行きません。孫の相手の心持で無くては。田舍者は叱ると呆れるばかりですから」と慰めて居た。

實に伯母の着實なる思慮と母の富贍なる經綸、不撓の氣力と、左右より伯父を扶くるにあらざれば、野田家は頗る危かつたかも知れぬ。母の働と云ふものは、非常であつた。養蠶製茶の時節に偶々塾から歸つて見ると、母は筒袖の着物を着て、大勢の男女を使ひ廻して、眞黑になつて働いて居た。雇人も伯母よりは餘程母を恐れたさうだ。尤も母が氣力の熾なので、流石の伯父も辟易して、時々衝突もあつたが、併し伯母は勿論、伯父も母の盡力の如何に野田家に必要であるかを認めて居たのである。

（三）

鈴江君は僕と同年の早生れで、恰も十四。僕等が故郷から出て來た頃、其頭にのつて居た天神髷は、最早銀杏返しになつて、脊丈は小柄の僕より却て大きい位。何時か田舍言葉を覺えて、「兄さんは來年戻つて來なはるのですよ」なんて鵺語を使つて居たが、其れでも流石に水道の水で磨いた名殘はあつて、何處か垢ぬけがして居た。超然として些も物事に齷齪せぬ悠々とした質で、大竹を割つた樣な娘、伯母や母は今些女らしく細かに氣がついて欲しさうであつたが、伯父は大氣に入りであつた。

蛇を五分切にし、蛙を炮烙の刑に處し、總て生物を苛めるが樂の年配から云つても、無暗に威張つて强がれば其で男が立つ樣に思ふ士族根性から云つても、其頃の僕等は婦人を輕蔑して——若くは輕蔑する樣な風をして居た。强い、素朴剛健など云はるゝが第一の名譽で、「婦女子の腐れ」と云はるゝ程恥辱はなかつたので、苟にも「弱い」ものの代表者たる婦女子と對等に言ふは士君子の恥辱かなんぞの樣に心得て居た。で、婦人に對しては言はざるをよしとす、已むを得ず言ふ時は成る可く簡勁に言ふべし、肩を怒らし臂を張るべし、輕蔑の意を明々に發表す可しと云ふが、僕等の不文律であつて、苟くも此律に違ふ者は蒲團蒸より猶ひどい「婦女子の腐れ」の嘲を受けるので、西山塾生中には隨分心に母を慕ひ姉妹に懷しむ者があつても其を表するのを憚つて、時たま道に姉妹に逢つても知らぬ顏で外を向き、家に歸つて阿母が、「まあ、其綻は！」と針もつて引とめるのを振りきつて逃げて歸ると云ふ有樣。だから僕なども、二年前田舍から出て來た時は女神の如くに崇めた鈴江君に對しても、わざと睥睨の態度をとつて居た。併し今度伯父の家に歸つて、朝夕一處に居て見ると、其樣々〳〵睥睨ばかりしては居られず、つい仲好になつてしまつた。其さら〳〵

として、男の様に、妙に鷹揚な所が、僕の氣に入つたのです。鈴江君も鈍才ではなかつた。併し僕には一籌も二籌も輸して居た——と其樣鈴江君は思つたと見えて、僕が大嫌ひの算術の難題を持ちかけては弱らせたが、併し其代り僕は日本支那の歷史や別けて三國誌の講話に大氣焔を吐いて、鈴江君を煙に捲いてやつた。僕は鈴江君と少なくも一の趣味を同うして居た——其は果物の趣味です。如何も艶消な話だが、僕は或時鈴江君と梨子の喰比をして、僕が十三に、鈴江君が十二喰つて、僕は母から鈴江君は伯母から大きに叱られたこともあつた。（尤も伯父は莞爾として笑つて居た）前にも言つた通り、伯父の屋敷も大分落ついて、果樹も漸々實を結んで、一歲柿などは已に枝も撓に實つて居る。鈴江君は好い娘であつたが、唯一ついけない癖は、枝上の果實を一口噛んで熟否を嘗むることであつた。時たま庭園を歩いて見ると、恰ど子供の脊丈のとゞく位の下枝の梨や柿の實にをりをり前齒の痕形が殘つて居て、はゝあ野田令孃先刻屋敷廻りをせられたな、と直ぐ知られるのであつた。

鈴江君の令兄大一郎氏は、前に云つた通り僕に二歲上で叔母（伯父の妹）監督の下に、東京の某學校に勉强して居た。しば〱歸省したいと云ふ手紙が來て、伯母も頻りに顏を見たがつて居たが、伯父は卒業の上で無くば歸省はならぬと毎も叱つて遣つた。僕は從兄に會つたことはないが、其寫眞（洋服を着て英雄乎として寫つて居た）や其手紙（伯父の子だけに細節に拘らぬのであらう、無學の僕が見ても誤字だらけであつた）を見ては、東京——彼東京に勉强して居る彼が羨ましくて堪らず、竊と手紙を書いて、薫陶を希ふの交誼を辱うしたいのと知つて居る限りの鹿爪らしい文字を竝べたが、大一郎君は田舍兒何をか知らんと思つたのか、如何だか、此も返事を與れなかつた。僕は不平で堪らなかつた。

母が伯母を扶ける程では無いが、僕も聊か伯父の助になつた。伯父は流石に地方の名望家だけ、一昨年來縣會議員に選擧せられて、時々縣令（未だ知事とは云はなかつた）と喧嘩しながら、未だ其職に居たので、隨分文筆の要も多かつた。伯父は兎角不精であつたが、就中筆の文は極々の不精で、手頃の者が來ると直ぐ引提へて手紙を書かしたり、帳面をつけさすのが癖で、凡そ伯父を識つて居る程の若者に、曾て一回二回伯父の臨時秘書官を命ぜられた經驗がない男は恐らく一人も無い位、鈴江君も思ふに乃父の手紙で餘程手習をしたであらう。僕も此度伯父の家に歸つたについては、即刻御用召があつて「愼どん、御苦勞だが、一寸此返事を書いて與れ」此が口切りで、其れから毎日毎日「愼どん、一寸此を寫して與れ」「此を讀んで與れ、愼どん」——愼どんも中々忙しい。併し僕もまんざら嫌な事でもなし、伯父から賴まれるのが何だか大人になつた樣で、唯々と云はるゝまゝに要を達すと、伯父は喜んで、鈴江君と何方が實子かと云ふ位に僕を可愛がつて與れた。

新任秘書官の室は、大臣室の直ぐ隣の長四疊。間は襖で仕切つて、他の二方は縁、縁外は竹林で、千竿の綠竹猗々として戰いで居る。午後の日盛りとなると、僕は毎も籐椅子を此縁に持出して、伯父が雷の如き鼾を聞きながら、滿身に竹影を浴び、踵で板縁を蹴り〱、好きな本だの東京の新聞だのを讀んで居た。

流石に地方の名望家と云ひ、客好きの伯父の事で、隨分來客の數も種類も多かつた。伯父の居間兼客間は直ぐ隣だから、其話聲は嫌でも耳に入る。否、伯父の大音は恐らく四五町距れても聞えたであらう。併し伯父の癖として、大音聲に話して居るかと思ふと、俄然聲を低めて、

先方の額をまじ〳〵見ながら、さも無い事を如何にも一大事の機密でもあるかの如く囁く癖がある。其囁く聲すら僕の机邊には手に取る樣に聞えた。僕は幾回襖の隙から覗いたかも知れぬ。若し其頃僕に寫眞と速記術の嗜があつたなら、主客の風采談話を速撮にして置いたものをと、今更殘念に思ふのである。

いや其頃は實に賑やかなことであつた。西南戰爭で一時頓挫した民間黨の氣焰は、兩三年來再び國會開設の運動と燃え上つて、殊に其頃問題になつて居た開拓使官有物拂下事件は全國を沸騰せしめ、一波帝都に起つて千波萬波全國に狂ふの有樣であるから、僕の縣下でも演說會がある、新聞が騷ぐ、伯父の家にも遠近の政客來つて天下の形勢を談ずる者踵相接すと云ふ勢で、其口角泡を飛ばし扼腕擊節して論ずるに當つては、伯父の大音と來客の高聲と入り亂れて、此響ばかりでも明治政府の牙城は動搖するであらうと思はるゝ程であつた。

一體西山塾では、政論などは寧ろ耳遠い方であつた。西山先生は無論其系統から言へば、伯父と同じく漸進黨に屬せらるゝのであつたが、未だ乳臭い少年が修養を忽にして浮足になるを嫌はれた故でもあらう、塾生が新聞でも持つて居るとひどく叱られた位であるから、自身政治上の意見を吐露せられることは先絶無と云つても宜い位。極々稀に時事に談及せられる場合には、政府も罵り、民間黨も罵り、例の冷嘲鋭利の舌は八面に切つて廻つて、其結果我西山先生のは八當りと云ふ主義であらうと云ふ感覺を僕等の腦中にとゞめたばかり。で、伯父の家に歸つての二月は、西山塾の二年にまして僕の爲めに新天地を開いたのであつた。實に伯父の居間の隣の四疊は、僕にとつて政治思想の暖室、乃至時事問題の間接教場と云つて宜からう。東京田舍の新聞を見噛り、隣室の談話を聞き噛り、「國會」「自由」「民權」「權利義務」「政黨」「板垣」などと云ふ文字とは大分親類になつて來るに從ひ、僕も熱心自由主義を執つて、子供心に國會開設を待兼ねた一人であつた。未だ經驗の苦きを嘗めず、六千年の歷史も七十年の人一生も、云はゞ果無き山登り、彼峰を越えたらと思ふ峰を越えても猶行先は山又山に汗を絞る習と云ふ事を知らぬ悲しさには、國會と云ふものを打出の小槌か何んぞの樣に心得、是れさへ手に入れば國家泰平福德萬年五風十雨の世は極樂となるかの樣に思つて居た。思へば笑止千萬な話だが、併し斯樣な妄想を懷いて居た者は僕ばかりでは無かつたかも知れぬ。

(四)

西山塾の閉塾後は、塾生も四散八落になつて、頓斗消息を聞くこともなかつたが、別懇の松村淸磨ばかりは歸鄕後もをり〳〵手紙を遣取して居た。八月の末方であつたと思ふ、松村から手紙が來て、容易ならぬ事件を報道した。其頃の僕等にとつて容易ならぬ事件と云つても高が知れたもの、松村は來月を以て東京に遊學すると云ふのである。得々の狀は亂筆御判讀も出來兼ぬる縱塗横抹の書翰紙に溢れ、さらぬだにすわりの惡き彼が字はまさに飛舞の致を極めて居る。

東京!。嗚呼此二字は如何に僕の心を鼓動せしめたであらう。今でこそ東京と云ふ處は、百餘萬の生靈が桶の中に芋の樣にごろ〳〵踏み合つて、上にならう〳〵と跪いて居る修羅場、十分の一が殘る十分の九の汗血に身を肥して、果敢ない榮華の夢を見て居る蜃氣樓、などと思はず罵詈の聲も出るが、其頃は實に黃金城を望むが如くに望んで居た。恰も國會が政治上の最大理想であつた樣に、東京は僕の好奇心名譽心の燒點であつた。其文字を見てすら戀しくてたまらぬ東京、從兄の大一郎君が其處に勉強

して居ると思へば、寧其人が憎い位思ふ東京、立身の機會は車馬の蹴上ぐる塵よりも稠く街頭にさまようて、家が立派で、食物が甘くて、人間が氣が利いて、言葉が爽して、腸が綺麗で、物の便利が備つて、面白い物盡しの東京、其東京につい先頃まで机を竝べて睦み合つた松村が行く、而して僕は？——僕は？　と思ふと、俄然涙がはら／＼と手紙の上に落ちた。

吁僕も若し父が生きて居たら、昔の通り妻籠一の豪家であつたら、直にも許を受けて、松村、君行くか、僕も行かうで直ぐ出かけるのであらうもの、其は返らぬ昔の夢、今は母と共に伯父の家に厄介になつて居る身分、到底、到底と思ふ今の吾身が始めて鮮やかに見せられた心地がして、僕は恨めし氣に松村の手紙を打眺めた。

數日經つと、果然新しい單衣に新しい小倉の袴を穿き新しい下駄を穿いて新しい麥藁帽子を冠つた松村が、東京まで送つて行くと云ふ父の隠居と打連れて、欣々然と告別かた／＼立寄つた。手紙を見てさへ此四五日碌々眠れなかつた僕は、今松村を見るより、胸一ばいになつて、彼の父が流石に僕の心情を察して慰めて呉れた言葉も、松村が向後を契る言葉も、多くは耳に入らず、僕が嗜きであつたからと云つて松村の母がわざ／＼彼に持たして呉れた干鰕の禮など半ば咽につかへて、餘程男らしく振舞はうと思つて居たに拘らず、いざ告別の際になつて、松村が車の上から、

「其れぢや——君も早くして來玉へ」

と云ふと、僕はつい意氣地なく涙をこぼしてしまつた。次第に遠くなり行く松村父子の車を見送りながら門邊の金柑樹の側に立つて居た僕の姿は、其れこそ「失望」の化身であつたらうと思ふ。

今もかく覺えて居る、僕が泣顔を拭き／＼歸つて行くと、秋蠶の桑を摘んで居た鈴江君——彼鷹揚な鈴江君が驚いた顔をして、

「如何したの？　エ、如何したのですの？」

とすり寄つて尋ねるのを、少動爵士は毎になく腹立聲で、

「何でも無い!!」

と一つ怒鳴りつけて、走り出すと、鈴江君は呆氣にとられて、ちつと僕を見送つて居た。

（五）

松村が上京遊學につけても、自身の學問の一刻も忽にすべきでないのは、染々心に感じたのであつた。伯父の祕書官も宜いが、口は飛ぶ、月は奔る、少年は老い易うして學は成り難しと口癖にも吟ずるに、何時までも斯様遊んで居るのでもあるまいと思へば、宛ながら地蹈鞴でも蹈みたい心地。母も同じ思ひで、然る可き學校のあれかしと日々祈つて居た。

當時僕の縣下には醫學校師範學校中學校の三つが新に設けられて居た。併し僕の考へでは、醫者になるのは嫌だし、師範學校を卒業した所で、鞭を執つて田舍の子供を教ふるが關の山、苟くも妻籠では神童と云はれ（尤も神童先生一度は落第したが、其は夫子の罪にあらずだ）西山塾で一廉の俊秀と云はれた少年が、其様な屑々なものに入らうや、中學こそ行く／＼は至高學問の府たる大學へも通ふ順路、此だ、何が何でも此に入るのだと矢も楯もたまらず、母に迫り伯父に請うて見たが、伯父は夫れよりも斯様な事があるので今暫時待つて見よと云ふ話をした。其は伯父の仲間で、新に一校舍を興すの計畫があつたのである。

伯父の仲間は縣下の漸進黨とも云ひつ可き連中であつた。當時僕の郷國は、略々甲乙丙の三黨派に分れて居た。丙は保守黨である、維新前の佐幕黨で明治十年前の不平黨、十年後の政府黨、此れが此黨の三世相であつた。甲は急進黨、

夙に自由の空氣を呼吸して慷慨激烈の徒は、爭ふて此旗下に立つて居た。甲丙の間に立つのが乙黨即ち漸進黨である。此黨の先輩は何れも老練着實、曾て一たびは地方に中央政府の然る可き官職を占めて居たが、今は概ね野に退いて、地方有志家を以て自任し、政治上は溫和的進步の主義を執り、元來の學問は一種開新的儒學だが、猶新智識を求むるとか云つて、時々四五輩打寄つては自由言論社會平權論道德の原理など新版の譯書を講習して居た。伯父は即ち此黨に屬する一人であつたが、例の不精で規律が大嫌ひ、加之例の性癖の兎角常格をはづれる事が多いので、自由黨中からも敬遠主義で待たるゝ傾向があつて、云はゞ一の遊星に過ぎなかつたのである。併し青年子弟を教育し、我黨の相續者を作る可き機關學校を設くるの必要は、伯父も他の諸人と一同に感じて居た。

若し搖籃を搖がす者は即ち天下を搖がすならば、學校を握る者は社會の牛耳を握るのである。帝國大學が如何に明治政府の保障となり、三田塾が如何に一布衣の感化を日本に普及したかは、今更言新しく云ふ迄も無いが、大袈裟な話は差措いた所で、實際機關學校の必要を、伯父の連中も夙に認めて居たのであつた。中西西山先生も系統を云へば無論此黨に屬す可きであるが、先生は到底黨化し難い個性を具へて、一人なら任せろ、一同には否と云ふ質であるから、以前の西山塾も畢竟西山先生の塾たるに止まつた次第、今回機關學校創立の相談があつた時にも、西山先生は、吾輩は最早含然の百姓だ、教育の學校のと云ふ事は眞平御免蒙る、諸君やるならやり玉へ、開校式に甘諸の一俵も寄附しよう、と、すげなく謝絶せられたさうだ。併しながら同志間の話は次第に熟して、敷地が手に入る、某の山持が材木を寄附する、伺が濟む、困難であつた英語教師も工部大學に居たとか云ふ男が手に入る、終に明治十四年の十月、恰も國會開設の大詔が出て五日目と云ふに、私立育英學舍のフラフは郊外の風に飜つた。

因で、伯父の秘書官も願に依つて本官を免ぜられて、また〳〵寄宿舍の飯食ふ身となつたのである。

（六）

西山塾を去つて、私立育英學舍に移つた僕は、兎も角も幽谷を出で喬木に移つたのであらう。

一寸其建物を云つても、西山塾は聞こそ廣けれ畢竟ふるい百姓家を引直したものに過ぎない、其に引替へて育英學舍なるものは粗末ながらも新築の校舍、假令天井はないにせよ二階もあり、四方窓だから明るいことは眩しい位、其上運動場たる庭もあり、黑塗りの門もあり、大きな門札もあり、フラフも立つて居て、兎に角學校の體裁を帶びて居る。郊外の畑の眞中に突立つて居るのだから、北風が颯々障子を鳴らす頃の寒さと、其れから麥浪菜花の眞中に二階建の瓦家の漆喰が白く日に光つて白いフラフが飜々と東風に飜つて居る所は一寸好い景色であつた代りに、生溫い風が四方から吹いて來て尾籠ながら糞汁肥料の臭か芬々と面々の書窓に御見舞申す時の臭さと云つたら、今思ひ出しても窒息する程であるが、併し此は贅澤千萬な話で、西山塾での樣に夏は睡い目を摩り冬は凍ぎれだらけになつて自身飯を焚く必要もなく、一日勝の賄男が居て三度々々ちやんと暖かい飯を食はして呉れるのを思へば、實に其ればかりでも大したものだ。假令其飯は、往々にして糠臭く、其汁にはよく炭屑砂利藁ぎれなんど推參な汁の實が飛び込む癖があるにもせよ、感涙を流す可きであるのだ。況んや彼恐る可き西山先生が、僕等書生を宛ながら若黨小廝かなんぞの樣に、それ庭掃け、やれ水汲めと追ひ使はれた事を思へば、

今は朝起きる、蒲團をたゝむ、顏を洗ふ、机邊を掃くばかりで、あとは勉强の仕放題である。

また況んや西山塾では、先生と云つても唯つた二人、學科は漢籍の一方に限つて居たに引易へて、育英學舍には大先生から中先生小先生まで數へて都合先生が十三人、實に最初は學生よりも先生の數が餘程多かつた位で、中には正五位を有つて居らるゝ先生もあり、また寳藏院流の槍の達人(尤も其先生は學校では槍を教へるのでは無く文章軌範を講じて居た)もあり、學科も漢文國文譯書、數學は珠算筆算、剩へ英語科まで備はつて、此にはもと工部大學の退學生菜と云ふ至つて溫順な先生が、頻りに汗をたらして南蠻鴃舌の徒に綴書と云ふ讀本と申す驚く可き困難な書を教へて居た。所が世は意外千萬なもので、一月經ち三月過ぐる程に、大なる希望を以て始まつた育英學舍も、機關の運轉に面白からぬ所あるを露呈するに立到つた。古から船頭多ければ舟山に上ると云ひ、ヂスレリーは英人は聯立內閣を好まずと云つたが、其は必ずしも英人に限らず、寄木細工は兎角脆いもの、育英學舍の組織は先づ共和政治で、大統領の小森田先生が黌主として姑らく總理の任に當つて居たは宜かつたが、其頃全國に燃え立つた政黨組織熱に犯されて、黌主を初め先輩兩三其方に奔走して兎角缺席勝になると、若手の先生が何角互に衝突を始める、負けた方は不平で引入る、規律と云ふものが次第に亂れて、凡そ破壞に先だつ一種の倦怠は黌內に充ち滿ちた。

此に到つて、彼恐る可き西山先生と其塾が却て忍ばるゝのであつた。

西山塾では、西山先生の特質と其感化が雪隱の隅までも行き渡つて、假令中庸を得なかつたにもせよ、其斬絕なる個性と其一種奇矯なる主義とは、殆んど一點の曖昧摸稜を容さない程明明白々と塾內に瀰漫して居たので、所謂適從する所を知るとでも云はうか、僕等は隨分辛いと思ひ、ひどいと感ずる中にも、何處となく小氣味よく、譬へば霜の朝の寒さは如何にも凜然と身に浸みて烈しいが、併し其が爲めに筋張り血湧み何有と云ふ男魂を振起さす所がある樣に、西山塾の空氣は決して僕等を昏睡に導かず、卑屈に陷れず、倦怠させず、迷はせず、凜々として常に僕等を刺戟し警醒して居たのであつた。流石英雄漢丈に、公明正大の敵は二心の味方に優る萬々とは、コルシカの兒もよく言つた。世に可嫌なもの、曖昧な人、旗色の鮮明ならぬ政黨、無臭味の政府と數へ立てる迄もないが、別けて青年に禁物は此生溫い空氣である。私立育英學舍は無臭漸進黨の機關學校。先生は何れも黨中の歷々、老實溫厚なる人々であるが、見渡した所凸凹の無い、よく云へばよく揃つた、惡く云へば傑出の人に乏しく、成程其人每に其れ其れの長所本色は具へて居ても、其處が七色の共存は白色に歸し、水酸素の抱合は水になつてしまふ道理で、育英學舍の空氣は青年が要する彼一種芳烈な馨香を缺いて居た。其點に於て別格立優つて居た西山塾から出て來た僕にとつては、其空氣の相違が殊に劇しく感ぜられたのであつた。此は獨り僕のみにあらず、西山塾の舊友で僕と前後に育英學舍に來た者は誰も多少感ずる所であつた。

僕は、此空氣の相違に一種面白からぬ物足らぬ淋しい感を持ちながら、其を何故と押尋ねるでも無く、せめて英語の學習が出來るを仕合せと、せつせと勉强して居た。併しながら前にも云つた通り、校內の機關が兎角面白く運轉せず、政黨組織の騷ぎで重立つたる二三先生が缺席勝になると、校內次第に亂れて、若手の先生の間に衝突が起る、其に乘じて退屈し果てた學生が騷ぎ出す、あまり惡戲がひどいと云つて流石

謹直の英語科の先生も、顏を眞赤にして怒つて、其れからと云ふものは虚病を構へて暫らく出て來ぬ始末。是に引替へ保守黨の方で我育英學舍と前後に創立した慶應學校は生憎都合よく運轉して、甚しきは學舍の書生中にもぼつ〳〵退學して保守黨の學校に入る者もある位。實に多望を以て始まつた育英學舍も未だ一歳ならずして、如何やら險呑になつて來た。

あまり面白くないので、何とか伯父に相談をして見ようと、或日學校を出て一里あまり隔てた伯父の家に行つた。恰も門を入る時、年の頃は二十二三、服裝は餘り立派で無いが、風姿楚々眉目清秀宛ながら好女の如き小柄の美丈夫が出て來て、行違ひざまに、黑玉の如き眼をあげて熟と僕を見たが、莞爾ともせず、其まゝつゝと行つてしまつた。

（七）

彼美丈夫は誰であらう？ 誰だらう？ と思ひながら、伯父の家に入ると、母は留守であつたが、伯父は恰も今客を歸したと云ふ體で、安樂椅子に倚りながら、大分白勝になつて來た長髯を扱いて居た。

「ホウ、愼どん、學校は如何だな？」

僕は學校亂脈の有樣を出來得る限り鮮やかに描いて、斯々の次第だから中々勉强所では無い、寧何處かへ轉校したい、と思ふ旨を詳らかに述べた。伯父は直接學校の管理に與つては居ないが、昨今の事情は僕の報告を待つ迄もなく、無論知つて居ると見えて、僕が一伍一什の物語を別に耳新らしくもなささうに聞き流して居たが、話の途切れる途端に、

「彼なら宜からう！」

突然に叫んで、頭を一掉、

「珍らしい男ぢや！」

云ひ終つて、自から頷いた。

藪から棒は從來伯父の癖だが、僕は直ちに先刻門前で會つた彼美丈夫を想ひ出した。

「伯父さん、先刻歸つて行つた客の事ですか」

伯父は僕に人の胸中を洞察する明があるかの如く、怪訝の眼を瞠つて僕の顏を眺めて居たが、忽ち莞爾として、

「オゥ會つたかい、愼どん。珍らしい男ぢやろ。實に珍らしい若者ぢや」

世には、他人の事とし云へば、惡くばかり見える眼がある、またよくばかり見える眼がある。伯父の如きは後者に屬する方で、伯父が感服し出したら其れこそ實に際限なしだ。其代り、隨分贋物を丸呑みにして、咽に刺を立てて、遽てて吐き出すこともある。だから、初面會、甚感服、晩絶交と云ふは往々伯父に於て見受くるの弱點である。僕は、また始まつたな、と思ひながら、ぢつと聞いて居ると、伯父はいよ〳〵圖にのつて彼美丈夫を誉め立てた。彼は姓を駒井名を哲太郎と云つて、土州の生れで年は二十三四だが、英佛二國語に通じ、つい先頃まで東京に居て、某新聞とか雜誌とかに政府攻擊の筆を執つて居たが、何か感ずる所あつて、一朝飄然帝都を辭し、數通の紹介狀を懷にして遠く鎭西に來たので、隨分學問もあり、猛志あり、識見あり、毫も浮華の嫉なく、眞に今世に珍らしい一箇の好丈夫であると云ふ。話八分とした所で、伯父が斯程惚れ込んだのは、餘程感じた所があつてのことであらう、其れにしても先刻門前で見受けた彼瀟洒たる美丈夫が果して其樣な人物であらうかと、覺束なく思ひながら、猶も耳を傾けて居ると、伯父はます〳〵稱贊の歩を進めて、斯樣な人物が下つて來たのは實に天幸で、若し彼をして、育英學舍を掌らしめたならば、衰運の挽回は朝飯前だと宣言し、

「喃愼どん、其樣ぢやないか」

と何も知らぬ僕に相槌を促した。其結果、僕に

相談に伯父の宅に行つたのか、抑も亦彼駒井とか云ふ人の感服話を聞きに行つたのか分からぬ位。僕も煙に捲かれて、何が何やら要領を得ずに了つた。併し「事實は小說よりも奇」で、伯父が此時の座談は、半月が內に事實となつてあはれた。

八

宛ながら大西洋の颶風に、限りも無い海藻の岩根離れて、八重の潮路を漂ふ如くに、此頃の風雲に驅られて志士政客の日本を彼方此方さまよふ者も多かつた。駒井先生も蓋其一人であつた。

偖此新來の客駒井哲太郎氏が私立育英學舍の主幹となるについては、漸進黨內にも大分二の足踏んだ者もあつたが、一には伯父を初め二三有志者が切に斡旋したのと、二には現に衰頽した育英學舍が目前に橫はつて救濟を待兼ねて居る有樣であるから、所謂暗中大飛躍の意味で、是非なく同意したのであつた。駒井先生の方でも、斯任を引受けるについては、屹度全權を依託される、必ず掣肘されないと云ふ意味の條件を持出し、承諾を得て初めて承諾を與へたので、兎に角此一擧は賴む方も、賴まれる方も、中々思ひ切つた處置であつた。時は明治十五年、猫も杓子も政社政黨組織に熱中する時節、殊に急進黨は新に機關新聞を興すについて、恰好の記者を得たり貌に頻りと入社を勸めて來たのを斷然辭して半破の育英學舍を引受けたのは、駒井先生中々物數寄と謂はなければならぬ。

私立育英學舍生徒一同は、滿腔の猜疑、少くも冷淡を以て新主幹を迎へたのであつた。僕等の眼から見れば、駒井先生には幾多の恕し難い缺點がある。先づ、先生は他國人である。曾て我等が父祖の胸中に燃えて鎖國攘夷を唱へしめた毛嫌ひの精神は、矢張僕等の胸裡に蟠つて、少し見知らぬ者に出會すと直ぐ燃え立つて來るのが癖で、駒井先生――他國人と云ふ一念が如何も先入主となつてしまふのであつた。其れから僕等の樣に、南蠻鴃舌の短音促節を美妙の音樂と心得て居る者には、彼駒井氏が南海訛の圓轉滑脫な調子が如何にも柔弱に、輕薄其者の聲であるかの樣に感ぜられて、如何しても嫌でたまらぬ。其れから、僕等の理想の豪傑と云へば、所謂身材魁偉、色黑々として音吐鐘の如く、力能く鼎を扛ぐる底の丈夫、小碓尊の昔から西鄉南洲の輓近に到るまで、偉大の靈魂は偉大の身體に宿るが常であると、斯樣思つた。然るに駒井先生の如きは、眉目清秀、白きは其面、紅なるは其脣、風姿楚々として宛ながら好女の如しで、實に僕等の理想を蹂躙するも亦甚だしいと云はなければならぬ。

私立育英學舍生徒一同は十二分の冷淡――寧ろ猜疑を以て新主幹を迎へた。駒井先生就任の第一日、例の土佐辯をもて挨拶の語を陳べられると、惡く澄して居た生徒一同――左なきだに見馴れぬものに會へば猫の如くに毛を逆立つるが癖の上に、近來はまた學校の亂脈に規律も制裁も無くなつて校を擧げて宛ながら一の「モッブ」となり果てた生徒一同、忽ち動搖めいて、何處の隅からか、エヘンと一つ奇聲を發して咳拂ひをすると、時ならぬ咽喉加答兒が瞬く間に滿場を襲うて、此處にもエヘン、其處にもオホン、果ては勇士も顏色を失ふ可き失笑の聲となつた。此は蓋し駒井先生にとつて前途に塞がる敵の軍勢が戰を挑む鯨波の第一聲であつたのだ。

吁併しながら僕等は誤つた、育英學舍生徒一同皆誤つた。「容を以て人を取るに之を子羽に失す」誰か思ひもかけようぞ、彼衣にだにも勝へざるが如き駒井先生こそ、實に白雲に埋む噴火山の、外見は皓として玉の如く麗はしきも、中には天をも衝かんず猛火の炎々として燃えて

居ようとは。其樣思へば、昔者博浪沙上に秦を椎した玉の如きやさ男もあつたものを。近くは西鄕南洲に頭を下げさした景岳と云ふ男も居たものを。流石に伯父の鑑識も此回は中つた。併し悲しいかな、僕等の凡眼は、駒井先生に刃向ふより岩と相撲とるが猶樂なことを會得するに二箇月の餘もかゝつたのであつた。

人間は愚なものだ。眞の基督を十字架につけて置いて、猶基督基督と待つて居るは、昔のユダヤ人ばかりと思へば、決して左樣で無く、我儕は常に同一劇を繰り返して居る。古の大人豪傑と云へば宮に祠り、畫にかき、記念碑を建て、詩歌に詠じ、金泥をもて其傳記を書いても猶足らぬ癖に、鼻の先に佇む大人をば氣もつかず、途に袖觸合ふとも知らずに看過すはまだしも、少し異な人間と見れば直ぐ化物視して迫害を加へる。而して猶偉人出でよ、天才生れよと云ふ、其偉人其天才を幾何無慘無慘蕾で傷め二葉で摘んでしまつたかも知れぬ。思へば淺猿しい話だ。

麓にあつて頂を見ず、離れて初めて富士の高きを覺ゆる道理で、今眼を瞑つて遠方の幻影を喚起して見るに、駒井先生は實に偉かつたと思ふ。あへて生前つらかりし罪滅ぼしに死者に阿る（駒井先生は已に故人となつた）譯では無いが、今日迄色々の人にも會つたが、未だ斯樣な人は見當らぬ樣に思ふ。惜しい哉、年齡未だ若くして沒し、何の事業をも爲す機會を得なかつたので、明治の歷史は終に斯人の名を傳ふることなくして已むのであるが、僕は竊かに橋本左內など云ふ男が恰駒井先生の樣な型では無かつたらうかと思ふ。

或經驗に富む老爺は、よく家政所を治むるの人あらば、大藏大臣に推薦する、と云つたが、僕は斯う謂ふ、見ず知らずの他國人で、無一物で、他人の遣り崩したあとの事業を引受けて、其を首尾よく築き立つる程の人であるならば、行々總理大臣にも推薦しよう。駒井先生は恰も斯事を成就したのであつた。言語は違ふ。風俗は異なる。假令二三有志者の同情をもつて先生を待つ者はあるにもせよ、育英學舍の教師株は多く「生意氣な飛入奴が」と云ふ惡感を抱き、嫉妬を懷き、生徒は何れも猜疑冷笑の態度をもつて先生に對する。先生が育英學舍の主幹となつて、二三ケ月は、釋迦も堪忍袋を破るやうな事件が續々起つて來た。餘の事は姑らく預りとして、單に日々授業の光景から云つても、初め二三日が間は、先生が座に就きさへすると、それは／＼恐ろしい惡澄し、惡丁寧で持切つて居たが、少し馴れ出すと、いよ／＼攘夷亂暴黨の地金を出して、馬鹿に先生の調子を眞似る滑稽家があれば、呆聞をたゝみかけて得々たる豪傑もあり、甚しきは無屆總缺席を企て、先生を胴揚にしようと同輩を教唆する者もある位（尤も此丈は實行せられなかつたが）で、若し夫れ裏面に立ち入つたらば、駒井先生の身邊には實に百鬼の跳梁も啻ならぬものであつたであらう。

然るに彼先生、惡く云へば旅鳥の身を以て、此好ましからぬ境遇に處し、如何に沈着に、忍耐に、横着に、冷靜に、强情に、萬の障礙と戰ひ、困難に打勝ち、倦まず迫らず、一個一個の反對を斃げ、惡感を解し、終に吾意通りの境遇を吾れと造りなしたかは、若し細かに觀察し記述したらば、實に其のみでも一篇の好小說を爲すに足るのであるが、其話は且らく他日に讓つて、唯凡眼英物を識らず、今斯く云ふ僕ですら、其當時は反對者の先鋒でこそ無かつたが、如何しても一種不信猜疑の眼をもつて見て居たことを告白するに止めるとしよう。

我邦人は兎角意志が弱いと云ふが、先生の如き意志の強い人物が居たかと思へば、竊かに心

強い次第であると云はなければならぬ。

（九）

名將陣に臨み、名優場に上ると、何時しか其處に魂が入つて、場面活潑と引立つて來る。何と云つても、人物の魔力は爭はれないものだ。旅烏の、業平先生の、土佐鰹節のと云つても、駒井先生が麾を把る樣になつてから、平倒ばかりかけた育英學舍がむく〳〵起き上つて來たから不思議だ。

寄宿舍の二階下の北の隅に、四疊の一室がある。駒井先生は此室を本陣として、學生と一緒に飯も食ひ、萬事生徒同樣の生活をして居た。一脚の机に、小ランプが一つ、烟管のあとだらけな火鉢が一つ、竹のつゞらが一つ、棚には漢書洋册が少許、如何にも蕭然たるものであつた。が、先生の勉强は非常なもので、朝も眞先に起き、晝は生徒の教授に暇なく、夜は竊と障子の穴から覗いて見ると燈下に端然と坐して洋書を讀んで居た。御し易いのは青年、御し難いのも青年――要するに青年の呼吸を會得すると否とにあるのだ。駒井先生は確かに其呼吸を知つて居たのであらう。前にも云つた通り外來の先生、加之打見た所芝居の女形にもなりさうな優男――尤も眼は人を射る光をもつて居たが――と來て居るのであるから、小豪傑連は兎角先生を輕侮して、先生が知らず貌に過すを好い氣にして、先生の居る隣室で、「好以寶刀加渠首」などと高吟し、甚しきは先生の頭上の二階がぬける程亂舞する。先生は平氣なものだ。伯夷の樣な顏をしながら、柳下惠よろしくと云ふ澄し方。此れでは行かぬと學生は更に方略を一變し、總缺席、故意の遲刻、無暗の質問、果ては矢鱈と惡丁寧を始めて、一言云ふにも再拜し、一言聞くにも開き直つて手をつかふると云ふ樣に、馬鹿にしきつた仕打をする。併し先生は平氣なものだ。學生は愈募つて、先生が目をまはすほど胴揚にしてやらうぢやないかと云ふ相談が持上つたが、其處は不思議、彼衣にも勝へぬ優男の身邊に、眼には見えぬが「此れより內入る可からず」と云ふ鐵柵でも立つた樣に、如何しても褻れがたい所があつて、其一條はつい立消えとなつてしまつた。彼先生は、此樣な出て行けがしの待遇を受けながら、平氣で居る。果して何の感覺もないのであらうか。否々、先生のすばやい耳には、廁の中の獨語でも一々聞きつけて居たに相違ない。併し先生は、今此處で少しでも怒る激する若くは恐る退くなら其れこそ先方の氣焔を千百倍せしむる所以で、此鞭一たび落ちてまた揮ふ可からざるを知る程に、青年の氣あひを知つて居た。で、先生は此騷ぎの眞中に、手を後ざまに組んで、冷々然と突立ち、さあかゝつて來いと澄まして居た。實に駒井先生が學校に來てしばらくは先生の意思を的に全校の學生が立ちかはり入りかはりぶつかる力競べの時期であつた。

育英學舍は終に先生の意思一つを投げかれたのである。相撲にも、相手を疲らして置いて、一寸捻ると云ふことがあるが、此相撲も、大分長い間もみ合つて、學生の方が少し草臥れて來た所へ、些細な、極めて些細な事件が起つて、つい駒井先生に手もなく投げられることになつた。其は、斯樣な次第だ。

先生が學校に來て凡そ百日も過ぎた頃何かの休暇に全校を擧げて四日ばかり遠足を行つた。駒井先生は氣の毒に、足が弱かつた上に、兩足共に夥しく底豆を踏み出して、歩き難んだ所は宛ながら豹子頭林冲と云ふ體であつたが、先生は遂に何も云はぬ、一言も云はぬ、顏は苦痛のあまりに眞着になつて居たが、終に四日間山路を歩きつめて、學校に歸ると突然昏絶してしまつた。醫師が來る。足を檢して此れはと驚いた。此足で一町も歩けるものではないに、と重

ね重ね驚いた。事は全校に聞えて、今更先生の強情に驚いた。所が、翌日先生が雨足を蹣跚しながら、這ひ出して來て、例の通り課業を始めたので、學生は皆先生の眞蒼な顏を見て、森としてしまつた。

先生は此れから一月の餘も立てなかつたが、先生の威は此時から屹と立つて來た。

此學生對先生の戰爭に、僕は成る可く局外中立を守つて、惡口を云はぬ、亂暴には加はらぬことにして居たが、併し身を挺して先生の加勢をするでもなく、同輩の亂暴を牽制するでも無く、ずる〱傍觀者で居たのは、年が少いとは云へ、實に男らしく無い仕打で、今も慚愧に堪へぬ次第である。

（十）

駒井先生の入來と共に、育英學舍の面目は悉皆一變した。

先づ學課があらたまる。論孟が立志篇品行論になり、史記日本外史が歐洲文明史になり、學課の一隅に覺束なき生命を保つて居た英學が、大部分を占領して來た。駒井先生の英學は正則では無かつたが、兎に角僕等は先生の指導の下に、綴書、第一讀本、其れから文典の少許、すぐハアレーの萬國史、スキントン萬國史、キソオの文明史と英學の道を非常の大跨に進んで行つた。其れから漢文詩會が廢せられて、演說文章會が起り、老儒先生が四角四面な修身談は、駒井先生の殊に愛誦して居られたプルターク英雄傳の講演になると云ふ樣に、隨分思ひきつた改革で、從來教授の任に當つて居た連中は不平のあまり辭職する者もあつた。併し駒井先生は委細かまはず、ドシ〱改革を決行したのである。

併しながら學課の變更の如きは、變更の小なるもので、尤も重大な變化は、學校の旗幟の變更精神の一變であつた。

駒井先生の政論は如何なるものであつたか、今日から考へて見れば、英國風の着實な憲政を主張すると同時に、佛國風の極醇なる理想を懷いて居られたかと思ふ。畢竟頭は老いて居たが、氣は年と共に若かつた。先生の英國憲法史の講述、決して面白くないではなかつたが、先生の眼底には、如何しても希臘羅馬（プルターク）の英雄傳に寫されたゝの面影が映つて居た。先生が好んで講義した佛國革命史を聽いて居ると、如何しても先生其人が「ヂロント」黨の「ブゾオ」や「サン、ジュスト」の再來ではあるまいかと思はれた。要するに先生の胸中には、自由平等の理想が炎々と燃えて居たので、此焰はやがて育英學舍に燃え擴がり、もと漸進黨の機關學校として溫和な桃色の旗を揭げて居た學舍が、何時か旗幟を一變して濃い紅の色となつたのである。

僕等青年は此旗幟の變更を歡迎した。今更事新しく云ふ迄もないが、青年は如何なる場合に於ても鮮明なる旗幟を喜ぶ者である。熱帶にあらずんば極地に住むを喜ぶのが即ち青年の本色だ、西山塾の僕になつかしく思はれるのは、其塾の兎も角も一癖あつて、樸素澤山の空氣が殊に僕等青年の肺臟に適したからであつた。前期の育英學舍の兎角萎靡して振はず、僕等青年の氣を腐らしてしまつたのは、其空氣が如何にも生溫く、其旗幟が實に鮮明を缺いて居たからだ。されば諸老先生の中には、駒井先生が意外な方に青年を引張つて行くのを險吞がつた人もあつた容子だが、僕等は踴躍して駒井先生の嚮導の下に自由平等の光明界に向つて進軍したのである。

西山塾が社會の外に超然として全く別乾坤を作つて居たに引易へ、駒井先生は育英學舍の四方八面の窓を明け放して、飽まで社會の風を入れた。先西山先生大禁物の新聞が入り込む。

遊歴の有志が立寄る。一人飄然として來り、半歳ばかりも宿泊して民約論の講義をして行くものもあれば、三人五人打連れて、一夕の談話に中央の形勢を傳へ、新しい空氣を齎す者もあつて學舍の方でも十分に歡迎した。何時であつたか、知名の何某が來た馳走に、駒井先生が議長となつて、擬國會を催した時、或俊秀の一少年、何の問題であつたか忘れたが、「其樣な淺薄な言は今から十年も以前に日本の邊隅の私立育英學舍とか云ふ田舍學校で國會の眞似をした其時の議論には似合つて居ようが、苟くも堂々たる我國會の議場に於て尊敬す可き代議士の口より出たものとしては、幼稚極まるではないか」と云つて、非常の大喝采を博したことがある。其れから此は矢張其馳走の文章朗讀會に、或項籍流の一青年が、何の本から生呑して來つたのか、「國、是 國是を定め國家をとみ嶽(富嶽)の安きに置く」と讀み上げて、滿場の哄笑を博し、是より「國是先生」の諢名を得たこともあつた。

要するに駒井先生が、麾を執つて居た二年間に、育英學舍は名こそ昔にかはらぬが、其實全く別物となつてしまつた。其を傍觀して、駒井先生の爲すがまゝに任せた諸老先生の無頓着もまた甚しであるが、一には諸先生も育英學舍では大分手こずつて居たので最早干渉をする氣もなく、また一は其頃の風潮に諸先生も聊か酔氣味で、まあ宜いでは無いかと放擲つたので、駒井先生も思ふ通りに行つて見ることを得たのである。

（十一）

あゝ其頃は實に今思ひ出しても愉快な時代であつた。世の中は如何樣なものとも知らず、直線に世を渡らうとする者の前には如何樣な障壁陷穽があるとも知らず、吾一身の上にも廣い世間の上にも進歩の代價に如何程貴いものとも知らず、師は若く、弟は幼なく、共に理想の光明界を指して驀地に進んで居た。吾心は「自由」の聲に躍り、吾眼は「偉人」の上に閃き、純潔なる「志望」は絶えず吾胸に沸つて、一眼は書卷の上に、一眼は世間の上に、僕等は恰も兵學校の生徒が戰場の報告を聞く心地で、細腕を扼りつゝ學校の窓から社會を望んで居た。

時代は潮の漲る如く變つて來た。二三年前三國誌に耽つて張飛の長板橋に胸を轟かした僕等は、今「西洋血潮小嵐」「自由の凱歌」など云ふ小説に餘念もなく喰ひ入る時となつた。學生の中に、淺井と云つて、年は十七だが、十二三にしか見えぬ少年が居た。「君は何故其樣小さいのだ」とからかふと、「僕は頭上に壓制政府を戴いて居るから大きくならんのだ、二十三年になると急に伸びるから今に見玉へ」と答へるのが常であつた。柄に似合はず、朗々玉を轉がす樣な美音をもつて居るので、「自由の凱歌」の載つて居る自由新聞が來ると「淺井、淺井、」――淺井は何處に居るか」と淺井を呼び立てて窓の下に眞黒に蒿なりたかつて、淺井が例の美音で朗讀するのを聽いて居る。時々は興旺して、「ワア」と喝采の聲をあげる。其れから經國美談の番で、僕等は幾晩徹夜してイパミノンダスペロピダスとセーベの經營に眼を惡くしたかも知れぬ。實は其頃は、見るもの聞くもの一として心を動かさぬものなく、僕等の身は、寄宿舍の二階に、煎餅蒲團にくるまつて、夜々の夢には、ラフアエットを助けて米國獨立の加勢に行つたり、ローラン夫人と斷頭臺に上つたり、パトリク・ヘンリーと演臺に上つて「吾に自由を與へよ。然らずんば死を與へよ」と叫んだり、ミルトンと話をしたり、今些近くては駒井先生がグラッドストーンになつて我日本の大宰相になつて國會の開設を明年に縮めたり――其は忙しい、併し愉快なことであつた。あゝ併しながら最早

其夢も今は見られぬ。

實に其頃は、教場以外、教科書以外、僕等を啓發す可き事件が續々社會に起つて、其樣な事件の報道に接する毎に、僕等の血は如何に沸え立つたか知れぬ。彼福島事件が天下を騷がした頃なんぞは、其裁判筆記の出た新聞が來ると、扯ぎ裂く樣に爭ひ讀んで、河野愛澤平島花香田母野諸士の艱難苦心を思うては熱き涙のほろほろ頰を霑すを覺えず。今其處に飛んで行つてせめて其繩目の喰ひ入る手に接吻し警官の劍の鞘尻につかれた其背を撫でもしたく、暴令尹の非道、其非道を庇ふ政府の奴原が髯顏を思ふ存分撲つて蹴つて踏んで踏みにじつてやりたく、其雪中素足に引ずり廻されし事を聞いては、僕等も何時か一度は彼志士の轍を踏んで行くことがあるかも知れぬ、其時の覺悟を今試して見ようと、或雪夜素足になつて外に立つたこともあつた。

雪中に立つと云へば、將來事に堪ふるの體力膽氣を養はねばならぬと云ふので、寒中の冷水浴、霜の曉の撃劍、柔術、夜中の競走登山などが盛に行はれ、兎狩、遠足會も行はれた。西山塾で鍛へた僕は別に困難を覺えぬのであつたが、學生の中には隨分弱つた者もあつた。面白いのは膽力を練るとか云つて、夜中札張を行るのであつた。育英學舍から四五町離れて、古墳新墳累々たる墓地があつて、其眞中に杉が二本立つて居る。其杉にかはる／＼已が名刺を張りに行くのである。雨のそぼふる夜、月蒼白き夜、何時行つても墓場はあまり心地のよくないもの。此ればかりは腕力の有無に係らぬものと見えて、僕の如きは何時も相撲に敗を取るに係らず、平氣に行つて歸つて來る（尤も友人から鞘と短刀を借りて、墓場の一町ばかり手前から鞘を拂つて、幽靈出でなば突かん寄らば切らんと身構へながら、前後左右に眼をくばつて行き、歸りは早足で飛んで來るのが例だつたが、此は毫も僕の元氣を減ずる所以にあらずと思ふのである）が、彼國是先生の如き、小文吾宜しくと云ふ猛者が、札張の晩に限つて屹度頭痛がしたり脚痛がしたりするのは不思議であつた。大勢の中には中々智者もあつて、姓は岡本諱名をイースト・レーキ（レーキ即ち湖水即ちコスイである。もとは岡本一人で、レーキの名を占めて居たが、後優るも劣らぬ山上と云ふレーキが來たので、區別する爲め鄕里の位置により岡本を東の湖水と稱し、山上を西の湖水と名づくるに至つた）と云ふ男なぞは、賄に五錢呉れて札を張らせ、自分は緩と賄部屋に寢て居て、頓てしすまし顏に歸つて來るのが例であつた。併し漏れ易いは祕密の常で、或少年が之を看破し、其少年も饅頭一袋の約束でしばらく口を禁んだが、湖水君が契約を履行しなかつたと云ふので、少年は憤然として祕密を漏らし、一時無邪氣な大騷ぎをしたこともあつた。

（十二）

育英學舍に於ける僕の生涯は、何の波瀾も變化もなく、流水の如く滑らかに運んで居たが、野田伯父の家には悲しむ可き一の出來事があつて、其がまた終に僕の生涯に一曲折を造す原となつたのである。

恰ど明治十六年の夏休の前であつた。僕は久しく母を見なかつたので、休暇を利用して伯父の家に行つた。何時になく家内の森として居るのを不思議に思ひながら、奧に行つて見ると、此は如何したのであらう、家族殘らず寄り集つて居るが、伯父は緣の安樂椅子に腰かけて惘然として居ると、伯母は荷造りをした鞄の傍に坐つて、何か紙きれを持ちながら、泣き沈んで居る。母は其傍に泣いて居る。鈴江君も泣いて居る。何事であらう？

仔細を聞けば、思ひ掛けもない、從兄大一郎

君が死んだのである。今朝大一郎君を預つて居る東京の叔母から、大一郎急病の電報がかゝつて、伯母は直ぐ東京に立つ用意をして居ると、追つかけて死去の電報が來た。病氣は虎列拉、直ぐ火葬して髪を送ると云ふ電報であつた。實に分からぬものは人間の命だ。大一郎君は去る明治十二年伯父伯母が歸國する時東京に殘して來たので、今年の夏は五年ぶりに歸省する筈で、つい四五日前も大一郎君の手紙が來て、二週間すると歸省の途に上る、鈴江にも澤山土産を持つて來る、愼太郎君にも宜敷などと今から思へば暇乞の、何時になく行き渡つた愛嬌をふりまいてあつた。伯父も祕藏息子の歸を期して、近來何時も上機嫌であつた。伯母の如きは大一郎が歸る歸ると、逢ふ人毎に吹聽して、浴衣を縫つて置くやら、部屋までもキチンと整理して、大一郎は小麥團子が好きであつたと今は十八の青年をまだ十一二の子供の樣に思つて、わざ〱搗が細い樣にと一里も其上も離れた水車へ、粉を挽かせにやつて居た。鈴江君の如きは顏見る毎に、「兄さんが歸る、兄さんが歸る、大きくなつて來なさるでせうねエ」と、其樣云ふ自身も僕より却て大きい位だのに、兄をまだ子供と思つて居るかして、屋敷内で一番甘い桃を「此れは兄さんの」と人を側へも寄せなかつた。僕も今年は大一郎君に初對面をして、東京の話も聞かう、學問の程も覗はうと、樂しんで居たのに僅かに寫眞で顏を識つたばかりで、ものも言はずに此まゝ幽明を隔ててしまふとは、何たる果敢ない事であらう。伯父は頻りに咳拂ひをして居たが、

「虎列拉位で死ぬる、意氣地のないやつだ。お實、最早大概に諦めるが宜いぞ」

伯母は涙を拭ひ〱して、

「はい、いくら泣いても、彼が生き復るぢやなし、最早諦めます、諦めます、東京を立つ時、彼が叔母さんに、手をひかれて、横濱の、あの埠頭に立つて居たのが、まだ眼前にちらついて――毎年歸りたい、歸りたいと云ふのを、延し延しして、さあ歸ると云ふ際に――不孝者が」と伯母はまた泣き出した。母も慰めかねて、共に差俯いてしまふ。鈴江君もしく〱泣き出す。

伯父は、

「馬鹿が」

と何を當ともなく罵つて、

「愼どん、屋敷まはりでもしよう」

と僕を引張つて、屋敷まはりに出かけたが、何を見るでもなく、默然として行く。僕も何と云つて宜いやら知らず、默然として伯父のあとに跟いて居た。

其れから十日ばかりたつと、東京から細かに事の次第を報じた手紙と、遺髪、寫眞などが屆いて、また一家の涙を添へた。病氣柄骨を送ることも出來なかつたので、遺髪だけ葬つた。墓地は屋敷の最高處で、僕が此家に初めて來た日鈴江君と共に腰かけて東京の話や大一郎君の話をした其大石から程遠からぬ場所だ。其處に二本の櫻と梅に護せられて、生前には終に見るに及ばなかつた其屋敷を、大一郎君の墓は見張顏に立つて居る。伯父も時々行つては墓邊の草をむしり、伯母も屢々隱れて泣きに行つた。鈴江君が朝々行つては、園の花、野の花となく立てるので、墓は宛然花に埋れて居た。

此後伯母は何時でも僕の顏を見さへすればほろほろ涙をこぼす。僕は伯母に濟まぬ樣な心地がして、伯母の顏を見るのが辛く、其家に行つても伯母の眼を避ける樣に〱して居た。

（十三）

實に其年の夏休程打濕つた休暇は無かつた。伯父は鬱々として、ともすれば失望の化物の癇癪を相手嫌はず振り廻す。伯母は素より、鷹揚の鈴江君、さては平素冴々とした吾最愛の母ま

でが、浮かぬ顔で居れば、冴えたものは柱時計の響ばかり。此陰氣に搗てて加へて、僕は實に結構な伴侶を得たのである。待ち設けた大一郎君は、永遠不歸の客となつて、來て欲くもない斯伴侶が來ると云ふも、何かの約束事であらう。

　大一郎君の葬式には、流石に平生疎遠にして居た親類も少なからず集まつた。其中に髪は切つて、滿面に白澄漠を帯びた、四十位の大の女の、辯舌達者に周旋するを、誰ぞと母に問うたれば、彼は笠松後家と云つて、伯父の從弟に當る人の寡婦だと云ふ。成程笠松後家と云へば、良人の歿後、五六人の子を育てて、可なり大きな身代を動かさずに居る、兎に角評判の女で、其が伯父の縁つゞきであることは、曾て聞き及んで居た。一體伯父の親類は、維新後八方に離散した上に、僅殘つた連中も、多くは伯父の異常な人物に辟易し、敬遠主義を執つて居たので、僕が伯父の家に來てから五年間、親類の顔を見ることは殆んど稀であつた。勿論僕は西山塾、育英學舍と、外に在るの日が多かつたのであるが、實際伯父と其親類の間は冷淡なもので、伯父は彼等を俗物視し、彼等は伯父を小狂視して、其間自づから渡り難き溝があつたのだ。就中彼笠松家の舊主人なるものは、伯父と正しく從兄弟の間でありながら、伯父は彼を腸の腐つた俗物、小人と罵り、曾て何かの事で喧嘩をしだして、伯父は有り合ふ煙管で彼を打据ゑ、其額に死ぬまで殘つた疵を負せたこともあつたとやら。彼が死んだ後までも伯父の憎しみは猶殘つて、笠松後家の話が出さへすると、似たもの夫婦とはよく云つたもの、彼後家を見い、世間では働き者のやりてのと云ふが、彼腸の腐れざまを見い、金持の役人のと吾爲めになりさうな所には直ぐ取り入る、恥も法も無い奴だ、今に見ろ、何か利益になると見たら此家にでも御辭儀して來るからと、斯樣罵るのを聞いたこともある。で、僕は其笠松後家をばよく〳〵眼をとめて見た。成程左樣思つて見れば、眼のぎろりとして、にやりとする毎に歪む其口元に云はれぬ鄙しい所がある樣に思はれた。

　笠松後家は其日屋敷中を見廻り、疎遠の詫やら、弔儀やら、鈴江君に愛想やら、舌三寸を八方に切つて廻して歸つたが、四五日すると手土産を持つてまた突然現れた。小半日座敷に陣取つて、例の長廣舌をふるつた。其話の三分の二は、自分の吹聽、其吹聽の三分の二は己が次男の三次郎と云ふ絶世の才子、稀代の孝行者の手前で持切つた。其三次郎君は、母の病氣に三日三夜帯を解かなかつた位で、其通學する造士學館では試驗毎に優等をとる程の俊才で、殊に野田の伯父上を慕つて是非薫陶を受けたい〳〵と云つて居ると云ふ。唯遺憾なことには、勉强のあまり健康を害し、兎角病身で困るが、自宅では兄弟も多くて保養が出來ず、此樣な閑靜な家で保養したら一と頻りに諷し、果ては打つけに、「御邪魔でもせめて此夏休の間だけ」と云ひ出した。伯父は留守であつたが、伯母は平素良人と親類の間の兎角疎遠なのを氣にし、其を己が咎かなんどの樣に、心苦しく思つて居たので、其優しい心に大一郎の事を思ひ比べ、「當分の事なら話して見ませう」と諾してしまつた。母は苦笑してゐた。

　二日許すると、多病の才子稀代の孝子笠松三次郎君は、其母と共にやつて來た。病身と云へば、色は蒼からう、痩せて居よう、氣の毒な體裁からうと待ち構へた僕は、後家の後に引添うた色赤黒く鼻低く、顋張つて最早口髭のぼつ〳〵生え出した屈强の青年を見て、一驚を喫したのである。年は僕や鈴江君に一歳まさりとは聞いて居たが、脊丈は三寸、體量は確かに五六貫僕よりも上である。何處が病氣であらうとよく〳〵見廻したが、眼中鈍如として過食の故であら

う、雨口角に白い爛れが見える外は、此ぞ病氣の徴候と思はしいものを、醫者ならぬ僕は認めかねたのであつた。竊と母に聞いて見ると、

「彼かい、彼はね」

と云つたが、終に何も言はず、唯にやり〳〵笑つて居た。

（十四）

「若い者は一處が宜い、愼さんも淋しくなくて宜からう」と伯母が三次郎君を僕の四疊に入れて果れたのには、實に痛み入つた。併し成る可く好意を表する積りで、机を出してやつたり、押入をあけて行李を入れさしたり、加勢をして、偖何か話をせずばなるまいと、

「學校は何處ですか」斯様尋ねると、

「學校？　何の學校？」と多病の才子稀代の孝子は怪訝の顏である。

「貴君の行く學校です、中學校ですか」

「中學校なんて、馬鹿な所に行くものか。造士學校だい」

造士學校と云ふのは、我育英學舍とは正に反對の主義を執る保守黨の學校だ。

「君は中學校か」

下問を辱うしたので、僕は慇懃に、「否、育英學舍です」

「育英――フヽ」冷笑つた顏つき、撲りたい程憎かつた。

「育英學舍か――フン、君は彼貧乏學校に行くのか、國賊になりに」

自由即ち不忠即ち國賊と保守黨の學校では教へてあると見える。僕はぐつと癪に障つて、唯つた一口に論破してやらうと思つたが、まだ初對面の口說がすんだばかりだのに、直ぐ摑み合ふも如何と、蟲を殺して默つて居た。

江南の橘江北に移されて枳となると云ふが、音に聞えた才子德行家の笠松君が一里離れた自宅から伯父の宅へ來ての變り樣を見れば、成程虛言でもあるまいかと思はれる、現在の母の口から其と吹聽された勉强家が、來た翌朝からぐつすり朝寢をする。部屋の掃除は僕に一任あつて、何處に行つたか影が見えぬと思へば、屹度柿の木の下に結跏趺坐して柿を噛つてござる、晝は大抵屋前の楠の蔭に蓆を敷いて宰予の跡を追ふ。其れで睡足るかと思へば、夜は八時頃からこくり〳〵（尤も此は三次郎君が三度の食事に、大食の伯父を驚かす技倆を出さるゝので、非常に胃が惡い故かも知れぬ）床についても寢言、齒ぎしり、高鼾、其は先づ宜いとして、客星夜毎に帝座を犯して、三次郎の足しば〳〵此劉文叔の横腹を蹴るには、實に弱つた。彼所謂非常の勉强家が、如何した事ぞ。机の前に一時間坐るでなし、伯父が寫字を賴めば、誤字ばかり、新聞を讀めば、小麥の團子を小麥の團子と讀み、古諺を引張れば雞口とならんよりは寧ろ牛後となれ、などと云ふ。此で僕等は不思議、と思ふのは愚かな話。僕はまだ笠松家の贈物が、しば〳〵造士館の先生の門に入るを知らなかつたのである。居は氣を移すとは云ふが、此はまた餘りな移り樣。三日たゝぬ間に、流石の伯母も眉を顰めた。

彼笠松後家は子を託して以來、四五日越しには屹度尋ねて來た。其度每に屹度伯母の好物を持つて來た。屹度大一郎君の墓に參つて行く。屹度鈴江君に愛想を言ふ。土產をやる。煎餅の袋、饅頭の包を出しては、「三次郎、鈴さんに之を上げなさい。鈴さん、三次郎と一處に御たべなさい」と、よく三次郎と鈴江君を一處に云ひたがる。僕が直ぐ前に坐つて居ても、彼後家は「卿其處に居るのか、わたしには見えないよ」と云はぬばかりにしらを切る。實に彼後家は母と僕とを白眼に見やり、無用の寄生物早く此家を出て行けと云はぬばかりに厭味を云ふことも度度であつた。僕の心の奥に潛む或貴重のもの

を蹂躙らるゝ心地して、彼後家が其樣な眼色口ぶりをする毎に、憤に堪へぬ場合も多かつた。母も流石に勝氣の性質、冷笑つて口には云はねど、眉のあたりぴちりと顫ふを見受けたことも一度二度では無かつたのである。

彼後家は何の爲めに斯く伯母や鈴江君に取り入つて、母や僕を邪魔物にするか、心得ぬ事だと僕は思つて居ると、或日下男の勝造と云ふ僕と仲好の老爺が斯樣云つた。

「愼ちやま、御聞きなさい、彼三次郎馬鹿がね、此屋敷はいまに己の所有になるんだ、己が此處の主人になるのだ、其時は卿の給料を殖してやる、なんてぬかすから、とんちきめ、卿を御主人にして如何するかい、て其樣言つてやりました。愼ちやま、しつかりなさい」

(十五)

僕は驚いた。偖は其目的であつたか。道理で、彼笠松後家が僕等母子を何時も白眼に視て、邪摩者、早く出て行けと、云ふ樣な顏をする。道理で、彼三次郎が鈴江君に馴々しく言葉をかけて見たり、さては鈴江君の居る前で故らに僕に腕押し、相撲の勝負を挑んだりするのである。─彼樣な奴等は蠅も同樣、臭がすると直ぐ寄つて來る、今に見ろ、何か自分の利益になると見ると、頭を下げてやつて來る」と伯父がかね〴〵云つた言葉に少しも違はぬ。大一郎君は死ぬ、あとは鈴江君一人、機失ふ可からずと次男の三次郎を入れ込まうとの心底は、實に鏡にかけて見るが如しだ。

其心底を、伯父や伯母や鈴江君は果して見破つて居るであらうか。伯父は彼不幸後、兎角茫然自失の氣味で、平生は唯惛々として居る。素より時々は叢雲の間から雷樣が鳴り出す樣に、さも無い事に烈火の如く怒り出すこともあるが、其發作が濟めば、大方草臥れてぐつすり寢てしまふ。其惛々の間に、三次郎氏もずるずるはひり込んで來たのであつた。伯母は何人でも愛して、何人にもつとめる人だから、彼困り者をも「三さん〳〵」と云つて居る。鈴江君は例の大竹を割つた性質、別に氣づいた容子でもなく、また如何せうと思ふ容子でもなく、三次郎が可笑しい事を云へば笑ふ、問はるれば返事をする、至つて平氣なものだ。引括めて云へば、野田家は今其肺腑に喰ひ入らうとかゝつて居る蟲をば、別に嫌ふ樣子でも無く、平然と其家庭に入れて居る。此れが果して野田家の爲めに得策であらうか。

まだ肩揚もとれぬ子共の癖に、小癪な事を云ふ樣であるが、菊池愼太郎も男であれば、貧寠して居て他人の身代を吾有にしよう、なんぞの卑劣な心は露持たぬのである。否々、打明けて云へば僕等母子が野田家に寄るすら、已に面白からぬのである。勿論伯父伯母は快よく僕等を待つ、また母が野田家に盡した功業は僕等が伯父の厄介になるよりも遙かに多かつたのであるが、其れでも僕等の今の身分の滿足す可きで無いのは、幾度か僕の小さな胸に浮んだ。母は素より其念を一日も胸中に絶やしたことは無いのであらう、口には云はぬが、僕が行つて母を省する毎に、母の眼は僕の脊丈を測つて、「未だ小さい、小さい」と云ひ貌であるのを僕は常に認めた。斯程獨立の日を待兼ねて居る僕等親子が、然る可き人の野田家に入り込むを何條嫌ふ可き、併し彼笠松如きの勢力が入り込むに到つて、實に吾等に恩ある野田家にとつて、患ふ可きの至ではあるまいか。僕は野田家の人々が、三次郎如き癡漢を俘同樣に待遇するを不滿に思ひ、鈴江君も冷淡になれば、伯父の僕に對する愛も餘程衰へたのではあるまいかと、竊に不快を懷いたのである。

勝造爺が彼事を僕に話した其日の午後、僕は一葉散り初めた櫻の下に、秋蟬の音を浴び

ながら本を讀んで居た。實は此夏休に、幸福な連中は吾敬愛する駒井先生と共に九州旅行を企てたが、僕は不幸にして先生に從ふことも出來ず、せめて此休暇の間は英學で、勉强して置かうと思つたので、今日も涼しい木蔭に來て頻りに字書をひつ張りながら、スヰントン萬國史の佛國革命の章、路易王が斷頭臺に馘らるゝ條に喰ひ入つて居ると、僕の右の耳を引張つて、

「おい」

と云ふ聲がする。振り返つて見れば三次郎氏だ。投網を肩にして、魚籃をつき出しながら立つて居る。

「おい、網打に行かう。魚籃持、立たんか」

云ひながら魚籃もてこと／＼僕の頭をたゝいた。恰も其時、鈴江君であらう、白飛白に紅い帶の影がすぐ向うの臺所にちらりとした。と思ふと、僕の右手は突然魚籃を手暴く拂つて、

「行かんと云つたら行かん」

吾ながら調子の高いに驚いた。三次郎氏は呆れ顏。其筈さ、僕も外の事なら兎も角も、腕力にかけては所詮彼三次郎君に勝つ見込がないので、これまで僕の分別は僕の堪忍袋にゴムひいて、嫌々ながら魚籃持の役を務めたこともしばしばであつたのだ。三次郎君は何時にない僕の權幕に驚いたが、見る／＼其頑冥不靈な顏に壓制者の相を出し、にやり／＼笑つて、

「來いと云つたら來い。長者の云ふことを聽かんか」

「乃公の自由だい」僕の耳は熱して來た。

「來んか」

壓制者は突と寄つて、僕の右の手を執へる。懸念らしい鈴江君の顏が臺所の口に現れた。

「來ぬ」

「來い」

ぐいと引張られて前へのめると、僕は突然夢中になつてバスチール堅固な三次郎氏の胸倉に武者振りつく。

（十六）

トランスヴアールが英國に勝てぬ此世の中では、此も致方ないもの、僕は年長の大力に奢つて、續けざまに投げられた。

投げられて、今は眞黑に逆上せ、死物狂ひになつて、彼が足をとつて引倒し、上になり下になり小石凸凹の地面をしばし揉み合ふ。砂利が眼に入る。女の叫びが耳に入る。鼻血が口に入る。無念、到頭組み敷かれた。彼は馬乘りに乘つて、僕の頭を小突く。口惜しまぎれに、僕は口もと近くにあつた彼の肉（腕であつたか、股であつたか）をわぐと嚙む。軟かいものが、歯の間にこちりと挾れると、流石の三次郎氏、「あつ」と悲鳴をあげて仰反つたが、睨んだ僕の眼にも見ゆるほど血相變へて、僕の顏とも云はず、手とも云はず、亂拳を雨らす。此は堪らぬ、菊池愼太郎生年十六歳、こゝに討死を遂ぐるかと齒軋りして居ると、

「あつ」

と叫んで三次郎は忽ち僕の上から轉び落ちた。跳ね起きて眼を摩つて見れば、何時來たのか、伯父が悄然として例の櫻のステッキで、したゝか三次郎を撲つたのである。三次郎君は不意の打撃に血迷うたか、眞一文字に伯父に喰つて掛る。と、見ると、伯父は怒髪冠を衝き怒鬚戟の如く張ると云ふ勢で、

「馬鹿奴、乃公に手向ひするか」

と罵るより早く、五十は越しても昔大兵多力の某縣令を足蹴にした大力者、右の足が擧ると思へば、三次郎は鞠の如くころんだ。其間實に一轉瞬、はつと思ふ間もなかつたのである。二度目に擧つた足のまだ下りぬうちに、

「まあ、良人は」

と駈け出して來た女を見れば伯母であつた。

「まあ、良人は――子供の喧嘩に良人までが、――まあ愼さん、其鼻血――鈴江、鈴江、早く金盥に水を、何をうろ〳〵するのです。おや三さんは？」

不思議、不思議、まさか伯父が九天の上に蹴上げた譯でもあるまいに、三次郎は掻き消す如く見えなくなつた。顏を洗ひ、鼻に塵紙の栓をして、よろぼひ〳〵座敷の方に行つて見ると、三次郎の行方について評議區々の所であつた。伯母は頻りに彼を氣遣ひ、萬一口惜しまぎれに、短氣でも出したのではあるまいか、とまで疑つて、其處の藪を探させの、此處の井戸を覗けのと指圖をして居たが、伯父は舌鼓うつて、

「馬鹿云へ、彼が死得るものか。何處かに隱れて居るだらう。其れとも逃げて歸つたかも知れん。あゝ好い厄介拂をした。――愼どん、怪我はせんかい」

怪我はあつても大したこともなかつたが、三次郎君の行方は其れ切り分からぬ。で、大方伯父の云つた通り逃げて、家に歸つたことと定まつた。伯母は非常に氣の毒がつて、笠松に一寸挨拶に行かうとするのを、伯父は笑つて「抛擲つとけ抛擲つとけ」と押とめた。彼事件出來の日、母は恰留守であつたが、歸つて其れと聞いて、別に僕を叱りもせず、今にも笠松後家が遣つて來たなら、少しばかり言つてやらうと、實は手ぐすねひいて待つて居たが、後家は終に顏を見せなかつた。顏は見せなかつたが、辭令の妙を極めた一通の手紙が屆いた。其手紙に、後家は先づ其愛子の長々厄介になつた禮を如何にも鄭重に述べ、次ぎに其愛子が彼日草履もはかず襦衣一枚（蓋し漁に行く途中で泣く〳〵歸つて來たことを敍し、其愛子の二の腕の噛痕と背の撲傷は、長く御恩の記念と大切に保存する云々の文言をもて手紙を結んであつた。其れから尚書には、外戚の跋扈は家の傾く原と云ふが、野田家は萬々歲で幾久しく御祝ひ申すと云ふ意味の文句が書いてあつた。彼三次郎君が、十七歲の大童、襦衣一枚の跣足で、泣く〳〵家に歸つて行つた光景を想ふと、可笑しくもあり、また氣の毒にも思はれて、僕は三次郎君に對して別に憎みも怨みもしなかつた。併し此事あつて、伯父の僕に對する愛の昔に變らぬことを知つたのは、あまり不愉快ではなかつた。

僕は實に大一郎君の死去が伯父の心にあけた其缺陷を滿すことは出來ない。鈴江君でも出來ない。併しながら大一郎君を除いては、鈴江君について尤も愛せらるゝ者は僕であつた。而して逝く者の終に還り難く、哀のやゝ沈むにつれて、僕は伯父の僕に對する愛の日に〳〵彌増すを覺えたのである。僕が頻りに本を讀んで居る傍を通つては、

「愼どん、勉強が過ぎるぞ。――死んで學問が役に立つか。さあ、運動々々」

と伯父が僕を引立てては散歩に行く、其容子を、知らぬ人が見たら親子と見たかも知れぬ。

伯父が僕を愛するの著しくなるにつれて、伯母の顏は次第に曇つて來た。

（十七）

十六年の秋期が始まつて、程なく僕は、一の不快な報に接した。誰か思ひがけようぞ、野田伯父の拘引されたと云ふ凶報を聞いたのである。

驚いて伯父の家に歸つて見ると、仔細は直ぐ知れた。伯父は此頃までも引續いて、縣會議員をして居たが、議員の中にかねて伯父を嫌つて居る黑木と云ふ男があつて、先日の事知事議員一座の宴會に何かの問題について激論の結果、伯父は怒に得堪へず、縣知事初め公衆列座の前で件の議員に飛びかゝつて蹴倒し、呆氣にとられて諸人が眼を瞠つて居る間に、伯父は件の男を蹂み躙り、ぶん撲り、知事が飛んで來て

「野田君、野田君」と制すると、伯父はいよ／＼烈火の如く怒つて、
「貴様までもが依怙贔屓するか」
と罵りざまに知事の横素頬をいやと云ふ程鐵拳ではり飛ばし、果ては總立の騒となつて、やつとをさまつたのは一時間も後であつたさうな。知事は怜悧な男で、大人になつて伯父の亂暴を大目に見て置くことになつたが、件の議員が伯父の嫌ふ程頗る腹黒い男で、到頭告訴したのであつた。

幸ひ伯父の友人や駒井先生達までが非常周旋し、其れから僕の母が伯母と同道して彼議員の細君に談ずるやら、大骨折つてやつと伯父には内々で件の議員に詫狀を入れる事になつて、告訴を取り下げて貰ひ、僕は車を連れて伯父を迎へに行つた。後で聞けば、伯父は未決檻に居た一週の間、最初は火の出る様に怒つて居たが、二日目位から草臥れたのかぐつすり寢てばかり居て醒めれば昔薩軍の本營に囚はれて白刃の間に鰻飯を註文した格で、鰻の鮨のと頻りに取寄せて居たさうだ。

伯父は罰金輕禁錮を覺悟して居たので、其まま裁判にも掛らず、青天白日の身となつたのを不思議に思ひ、何か其處に魂膽があるやうに疑ふ容子であつた。家に歸つて伯母の顔を見ると、
「卿、黒木に會つたかい」
「否」と伯母は答へる。
「まさか詫狀は出さなかつたらうな」
「否、其様な事はございません」と母が立派に云ひ切つた。

伯父は胡亂さうに伯母や母の顔を見て居たが、やがて獨語つ様に、
「彼意地惡がよく告訴を取り下げた」
「其れには知事さん初め諸君が色々骨折つて下すつたのでございます」と伯母は語を插む。
「知事が如何した？」伯父はすぐカン／＼が昂る。
「斯様でございます、知事さんが告訴の事を聞きますとね、彼者を呼びつけて、非常叱つたさうでございます、野田先生から撲たれたと云つて告訴する馬鹿があるものか、早速取り下げて、野田先生に詫を云へつて其様云ひましてね」と母は眞赤な噓を云ふ。聞いて居る僕は、可笑しくもあり、また伯父の無聊無頼な悄々とした顔を見ると、何だか斗米肉十斤の老廉頗を見るやうに、妙に物悲しい感も起るのであつた。

伯父は默つて聞いて居たが、舌鼓をうつて、
「知事の出過者奴、彼が止めなかつたら黒木の奴を踏み殺してやるのだつたが！」

伯父は間もなく縣會議員の職を辭して、全く閑散の身となつた。「閑暇になつたから些と勉强を始めよう」と駒井先生なんかに相談して、經濟書類を山程東京から取り寄せたが 英雄元來讀書に懶く、リーバーの自治論スペンサアの道德の原理などは何時までも綺麗にして伯父の机に載つて居た。

伯父の一件で子供ながらに心を痛めた間もなく、僕等にとつて實に悲しむ可き一の報が傳はつた。其は我駒井先生が學校を去らるゝの報であつた。

（十八）

何せ一度は別るゝ時の來ると云ふことを知らぬでは無かつたが、其別れが斯様に早からうとは實に思ひも掛けず、吾等が師とも父とも敬愛する駒井先生は猶幾年も／＼吾等と共に棲んで、吾等を導き、せめて羽翼の今少し丈夫になるまでは、吾等の側を離れずに居て下さることであらうと、子供心に思ひ込んで居たので、先生が愈學校を辭して歸國の途に就かるゝと云ふ事が知れ渡つた時には、僕は實際落膽してしまつた。

駒井先生が學校を去らるゝのは、先生が學校

を嫌になつたからでもなく、學校が先生を嫁になつたからでも無く、實は先生が故郷土州に殘し置かれた老父親の病を省せんが爲めである。先生には一人の實兄があつて、孝養の任に當つて居るが、先生は殊に愛子で、老病餘命幾何も無い今日、此頃是非暫に逢ひたい〳〵と老人の口癖の樣に云はるゝ樣子を、兄なる人から細かに先生の許に報じて來たので、先生も急に行李を理むることになつたのである。老親の先途を見屆けたら、また歸つて來て、弟の如く子の如く思ふ諸君と共に研學の事に從ふであらうと、先生は僕等を慰めたが、僕等は云ひ合した樣に此れが先生との永別ではあるまいか、と其樣感じたのであつた。

送別と云ふ程で無くとも、せめては先生に對する滿校の感謝を表する一端にもと、先生が出立の前夜は、先生を正賓に、諸老先生や野田伯父なぞも招待して、盛なる饗莚を開いた。諸先生も最初は苦し紛れに賴み、やがて危み、育英學舍が見る〳〵變色して行くのを不安の眼を以て目送して居たが、駒井先生の感化は諸先生の老硬なる頭腦にまでも影響を及ぼして、諸先生も可なりの自由論者となり、今度駒井先生の去らるゝに就て眞實遺憾に思はるゝのであつた。野田伯父の如きは、竊かに鑑識の誤らざるを誇つて居た位で、今回の先生の歸國には尤も落膽して居た。

駒井先生の後任と假りに定められた喜多川某と云ふ近眼鏡をかけたあまり重味の無い先生が開會の辭を述べ、學生の重立ちたる者數名の送別の辭があつた。少年の組では、澤井(壓制政府を頭上に戴いて居るから自分の丈が矮いと自から稱する少年だ)が演說をなし、僕が文章を朗讀した。「師トモ父トモ敬愛スル我駒井先生」と讀み出すと、聲が震へて、眼前に霧が掛つて、暫し絶句した。此れが平生であつたら、滿場の哄笑を惹起す所だが、場合が場合で滿校の感情同一轍であるから、却て場內森として水をうつた樣であつた。其れから諸老先生の鄭重なる謝辭があり、最後に駒井先生は留別の辭を述べられた。

先生は先づ諸老先生が遠來の客に育英學舍を掌るの大任を與へ、且つ全然打任して思ふまゝに意見を行ふの餘裕を與へられたことを謝し、次ぎに學生一同が年齢若く經驗足らず學問乏しき他國他郷の客を十分の信用もて受容れ、歩調を揃へて未熟な嚮導者の後に從つたことを謝し、此回已み難き事情の爲めに一旦愛する此育英學舍を辭するの遺憾を述べ、猶機會を得たらば必ず來つて今一度此育英學舍の爲めに十分盡瘁する覺悟である旨を述べ、人生意氣に感ず、諸君は實に吾知己、諸君を懷ふの念は何處にあるも決して一日も胸中を去る能はず、若し自分の一死諸君を益する場合もあらば此命何時にても諸君の前に擧げん、と云ふ意を述べらるる時は、流石の駒井先生も涕淚雨の如く、滿場の學生皆一種の電氣にうたれて、飮泣する者、齒を切つて俯く者、拳に淚を拂ふ者、實に一人の仰ぎ視る者も無かつた。最後に先生は淚を拂つて、言葉を改め、諸君も自分も共に眞理の一兵卒として行く〳〵は濟世の志を懷く者、行末共に誘惑に克ち、時俗に溺れず、死に至るまで志士の骨頭を維持し、書生の精神を失はず、彼こそ曾て育英學舍に學んだ者と衆目の指になりたい、と云ふ意を嚴かに述べられた時は、皆屹と顏を上げて、腕を扼つた。

其あとは僕等が手料理の薩摩汁の馳走があつて、劍舞があつて、野田伯父の寄附とやら、ふかし甘藷を十ばかりの大笊に山の如く盛つたのが出て、種々の躍ひに暫し離愁を紛らした。

翌朝駒井先生は歸國の途に上られた。僕等學生一同先生を擁して、見送に行つた。一里ばか

り街道を行くと、大きな榎樹が二本道の左右に立つて居る。送君千里、須一別、最早此處で別れようと先生は車に上り、

一諸君の健康を祈る一

と帽を振られた。僕は胸元に大きな塊がつかへて、急に俯向いた。一同が何とか高聲に叫んだが、はつきり分からなかつた。

暫くして見ると、車は最早一町ばかり行つて、先生は振り返り〱帽を振つて居られる。僕等も狂氣の如く手を振る。車は次第に小さく小さくなつて、果ては道と共に廻つて、見えなくなつた。

（十九）

火が消えた樣なとは、駒井先生が去られた後の育英學舍の事であらう。

偉いとは思つて居たが、先生を取り除いて、斯程までに學校が空虛にならうとは意外であつた。學課は先生が居た時同樣に行つて行く。渾ての機關は依然として舊のまゝに運轉して居る。併しながら魂が脫けた軀同然、些も活氣と云ふものが無くなつた。京多川近眠先生頻りに忌々しがつて、駒井が居ないと直ぐ斯樣なる樣では、乃公の恥辱、學校の恥辱、と大きにあせり、叱咜督勵頗る努めたが、矢張り駄目だ。一週も經たない內に、校內其處にも此處にも欠伸の聲が聞ゆる樣になつた。でも、萬一したら先生が意外に早く歸つて來られるかも知れぬ、と待つて居たも空頼み、一月ばかりすると先生の書狀が届いて、到底急に歸校せらるゝ譯に行かぬことが分明になつた。と云ふのは、最早此れきりと云ふことであらうと僕等は解したのである。書狀の末には、丈夫自から立つ所なかる可からず、人に賴つて事を爲すが如きは碌々小人の所爲のみ、余は育英學舍の諸子が行々共に丈夫兒の面目を維持せんことを祈る、と云ふ意味を書いてあつた。獅子の兒落しと云ふ譯があらうが、落さるゝ僕等は實に駒井先生を恨めしく思つたのである。

駒井先生の書に接して程なく、僕は東京の友人から一通の手紙を貰つた。友人とは西山塾で識り合つた彼松村清麿である。他の雜友とは多く其れぎりになつてしまつたが、獨り松村のみは三百里を隔てて此三年越し書信の往復を絕たなかつた。僕が駒井先生の下に育英學舍の活氣勃々たる有樣を書いてやれば、松村は田舍の學校位では駄目だ、君も早く上京し玉へと云つて遣す、僕が躍氣となつて反駁する、松村が反々駁する、と云ふ樣に、手紙の上に議論の花を咲かすことも度々であつた。時々はあまり其花が咲き過ぎて、一方が怒り出し、其樣に云ふなら手紙は最早遣らぬ、貰はぬ、絕交する、と云ふが、氣の合つた友垣はまた別なもので、少し默つて居れば、また音信をしたくなり、到頭喧嘩と仲直りに三年を過して、昔に變らぬ親友と吾も思ひ彼も許して居たのである。

松村の手紙は、今度某中學を卒へたについて、遠からず大學豫備門に入る筈、と云ふ意を漏らし、また例の筆鋒に、君も何時まで田舍の學校に逡巡するぞ、疾く心を決して東上し玉へ、學費の如きは如何樣ともなるべし、及ばずながら僕も一臂の力を致す、などと大人びた事を云つて遣した。此は松村が書信の度毎に書いて來る文句だが、駒井先生去つて落寞たる學舍の窓の下に讀んでは、宛ながら天外の福音を聞くの感があつた。

東上！　上京！　其樣だ、左樣だ、駒井先生が到底歸つて來られるでは無し、先生が居なければ死骸も同然の此學校に可惜青春の月日を等閑に過すは、此れ程つまらぬ事があらうか。此處こそ駒井先生が云つて遣された通り、丈夫自から立つて人を恃まず、意を決して行る可き所、駒井先生と云へば先生もむかし學資乏しく

若し僕の樣な事をして勉強されたとか、高が月に五圓足らずの金、如何とかならう、是非上京、上京と思ひ立つては、矢も楯もたまらず、松村が手紙のついた翌日、學校の午後の課を休んで母に相談に行つた。

母は靜かに、僕が息卷荒く述べ立つる企の程を聽いて居たが、

「其樣して學資は如何する積かい」

「學資ですか、學資は——塾僕でも、書生でもして——」

母は僕の身體をつく〴〵目に測つて、眉宇に一點の雲を宿した。

「實は、萬一の用に少し許り取つて置いた金があるけれども、其れはほんの不時の用にとつてあるのだから——あゝ昔の樣だつたら」

と氣は强くても流石に女の、母はほろりと落涙した。

「否、阿母、私は決して人の世話になるまいと、其樣決心して居ます。何有、學資位は如何したつて出來ないことはありません」

斷然と云ひ放つた僕の顏をうちまもつて、母は少し眉を開き、

「汝が其覺悟なら、旅費や二三ケ月分の所はわたしが如何かして都合する。其上誰の厄介にもならぬ覺悟があるかい」

「男ですもの」

「伯父さんにも？」

「はい、誰にも」

母は初めて頷いた。

「では、來なさい、伯父さんに一應話して見なければならぬ」

僕等母子が伯父の居間に行くのを、恰ど奥から出て來た鈴江君が不思議さうに目送つた。

（二十）

僕等母子が座敷に入つて來た容子の常ならぬを、流石に伯父も認めたのか、讀んで居る新聞を措き、眼鏡——伯父は去年から徑一寸あまりの大きな眼鏡をかけ出した——を外し、要は？と云ひ顏に、僕等の顏を眺めた。

「愼太郎の事につきまして少し御相談致し度うございますが」

と母は口を開いた。

「愼どんの事で、フウム」と伯父は僕の顏を見る。

「實は此兒も何時までも田舍にばかり置きましても修行盛りの年配を殘念にも思ひまするし、また何時までも斯樣に御世話にばかりなつて居ましても濟まない譯で——今度は此兒も一つ上京させうかと思ひますが」

否と一言に斥けられると思ひの外、伯父は頻りに頷いて、

「左樣、左樣、乃公も其樣思つたことぢやが、駒井が居らんやうになつて見ると、愼どんも其樣何時までも育英學舍に居た所でつまらん話ぢや、かうつと、愼どんが——十六、鈴江と同年ぢやの、最早修行に出るも宜からう。そこで、愼どんの志……目的は、如何する積かの？」

僕は初めて口を開いて、僕の目的は政治家、修むる所は政治學であると云ふ意を述べた。實は政治學の何ものたるかを知つた譯では無く、また政治家なるものは果して何ものであるかを知つた譯では無く、駒井先生の感化を受けて、唯だ政治家となつて天下の爲めに盡さうと云ふ空漠たる考をもつて居たので、國家に盡すには政治家になるべし、政治家になるには政治學を修むべしと云ふ樣な極單雜な見當であつた。

同じ單雜でも年齡は年齡だけ、伯父は僕よりやゝ精密に考へたのであらう。暫し沈吟して居たが、やがて僕の顏と母の顏を等分に見やりて、

「乃公は其樣思ふが、北海道の農學校に入つちや如何かい」

過る夏の事であつた。札幌農學校の卒業生と

か學生とか云ふ男が伯父を訪うて、頻りに高談雄辯したことがある。伯父は餘程其話が身に沁みた容子であつた。が、突然に斯様な事を言はれて、僕はぐつと詰つたのである。

「農學校は嫌かの。嫌なことはあるまい。政治家、政治家と云ふが、其様誰も彼も政治家になると日本は饑ゑる。其れよりも農學士になつて、殖産興業でも行ると、幾何日本の利益になるか知れん。如何でも日本は農業國ぢやからの。農學校に入るが可い、農學校が可い」

調子に乘つて伯父は農業立國論を滔々と述べて、畢竟日本の農業を振起するは僕菊池愼太郎の責任であるかの如く說き立てた。併しながら僕はわざ〳〵北海道まで出かけて、百姓の先生にならなくてもと云ふ考が如何しても除かない。爺と母の顔を見ると、母も寸斗すゝまぬ容子。名譽心の熾な母は、到底其一子を農業專門の一學士にするを甘んじ得ぬのである。

話は暫し途切れた。

伯父はやゝ久しく考へて居たが、

「いや其について此間からお節さん(僕の母の名)に話したいと思つて居た事があるが、幸ひ愼どんも來たし……鈴江、鈴江」

呼ぶ聲の下に、何時來て居たのであらう？鈴江君の白い顔が襖の蔭から現はれた。

「鈴江、母さんは」

「臺所でせう」

「母さんに一寸來いと其様云へ。それから卿は少時彼方へ行つて居ろ」

母の顔色は少し變つた。

（二十一）

前掛に手をふき〳〵伯母が入つて來るのを、伯父は待兼ね顔に、

「喃お實、愼どんが修行に出たいと云ふがの」

「愼さんが、修行に」と伯母は僕等母子の顔を眺めた。大一郎君の死去後は、伯母も餘程氣弱に、涙脆くなつた。僕が上京するのを死ににでも行くかの様に思ひ做した容子であつた。

伯父は頓着なく、

「其れについて、喃お實、彼一件の相談を持ち出して見ようと思ふが」

「左様でございますね」と伯母は母の顔を眺めた。伯父は少し容をあらためて、

「お節さんも、愼どんも、一つ聞いて貰はうと思ふのは、乃公が斯様云ふ目論見を立てたがな、吾家も大一郎が死んで見ると、あとは鈴江一人で、是非養子と云ふ所だが、其養子と云ふやつが、中々考へものでな。それで乃公が思ふには、誰彼と云はうより愼どんは乃公もお實も十二から世話をしてよく氣質人物を知つて居る、云はば實子も同然ぢやから、……其様すると、ゆくゆくは鈴江をつけて家屋敷悉皆愼どんに讓つて、それこそ他人雜らず水入らずで、乃公等も大安心ぢやからな。お節さんも、愼どんも如何思ふかの」

僕の胸は頻りにどきつき、耳朶がほてつて來た。母は兼ながら待つて居た伏魔殿の開かれた様に、覺悟はしながら少し色を變へて居たが、やゝあつて、咳拂ひし、

「では愼太郎に野田を名乘らせますのでございますか」

と言葉がやゝあらたまる。

「其れは如何でも宜いが、兎に角乃公の跡を立てて貰ひたいのぢや。喃お實」

顧みられて、伯母も口を開き、「愼さんも菊池家の一粒種だから、養子と云ふも異しい話だが、喃お節さん、野田家も一人、菊池家も一人、氣も心も知れぬあかの他人を養子に貰つたり、嫁にとつたりするよりも、兩家一つになつた方が雙方の利益ではあるまいか。幸ひ鈴江も愼さんとは大仲好ではあるし……」

僕の耳が紅くなる程、母の顔はます〳〵白う

なつた。

「其はもう愼太郎の樣な者に此家の跡繼と仰有るのは、面目な譯でございますが」と母の言葉は鐵を截る樣に一句々々齒の間から漏れ始めた。

「誠に面目な譯で、また是れまで何につけ彼にかけ一方ならぬお世話になつて居るのですから直ぐ御請をするのが當然でございますが、兎に角菊池の家の血脈は此兒一人に繋がつて居ります譯で、御存じ通り先代は彼樣になつてしまひますし、臨終の際にも此兒丈は是非立派な男にして、菊池の家を再興さして呉れる樣に、其樣しみ〴〵言ひ遺しました位で」と母はほろりと落涙した。が、直ぐ取り直し、

「其樣な譯で斯兒には是非菊池の名跡をつがせ、掘立小屋でも吾家と云ふものを興さしたいと思つて居ますので」

「其れなら兎に角愼どんが此家を相續して、ゆくゆく子供に菊池家を繼がす樣にしたら、別に障りもあるまいぢやないか」

母は少し默つて居たが、

「でも子供の中の仲好と云ふものは、分からぬもので、今其れと取り極めて置きました所で、二人が大きくなつたら又如何氣が變らぬとも申されませんし、また愼太郎が如何なりますか、十年もたつて見なければ分かりませんから……其れとも本人の所存は如何でござりますか」

顧みる母の眼色を、僕はよく解した。母は鈴江君を嫌ひでは無いが、好きでもない。はきはきした性質と鷹揚な性質と自づから合はぬのである。母は伯父夫婦の厚意を嬉しく思はぬでは無いが、其一子を十が十まで伯父の恩惠の下に置くのを好まぬのである。

「愼どんの所存は如何かな」と僕に注いだ伯父の眼は餘程怒を帶びて居た。突然「丈夫自から立つて事を爲す可し！他人を恃むなかれ」と云ふ駒井先生の戒の言が僕の頭腦に閃き出づると、結んで居た口は自づから解けて、「私は伯父さんは大好き、伯母さんも大好き、鈴江君も大好きですが、此家を繼ぐのは大嫌ひです」と云ふ樣な意味を吾れ知らずさら〳〵と言つてしまつた。

（二十二）

其後修辭學の講義を聞いて、同じ事を云ふにも詞の轉倒で餘程聽者の感が異なるもの、例せば、「君の彼點は好いが此點は惡い」と云ふよりも、「彼點は惡いが、此點は實に宜い」と云ふと、同じ意味を聞く先方でも餘程其感に相違があると云ふことを知つたが、子供の中と云ふものは唯其しきの分別も無く、ついさら〳〵と思ふ事を言つてのけて、伯父の顏を見るよりはつと思つた。

已に母の不承知に出會つて、焦躁して堪らぬ所へ、僕が眞向正面つくりもかざりも無い拒絕を受けて伯父の怒は終に破裂した。

「汝等は乃公を誰と思ふか。高で野田大作ぢや。女子供と思ふて、穩和に相談すると、つけあがつて、「家を繼ぐのは嫌」た何の口から云ふ？四年も五年も恩になつて居ながら――」

母は氣味惡い微笑した。

「御恩にはなつて居りますし、また御恩になつて居ることはよく存じて居ります。愼太郎も成人なつたら屹と御恩報じをしなければなりません。またわたくしも自身丈は御恩報じをする樣にする樣と心がけて居ますので」

此五年間母が野田家の爲めに盡した所は實に夥しいもので、其れは伯父も知つて居る。知つて居る程伯父はいよ〳〵怒り出した。

「默れ。些少ばかり加勢をしたと云うて、御恩にはなつて居らんと云ふ口ぶりは――不埒千萬な」と伯父は吾怒りの脅力に驅られて、今は火の如くなつた。沸え返る胸の憤悶を何處から漏らす由もなく伯父は髯の間に埋もれた口を頻り

に顫して居たが、突然襖障子もびりりと震ふ大音聲をあげて、

「出て行け」

と叫んだ。

母は微笑した。眼中の閃きを見なければ、伯父の大音を琴か笛の音と聞いて樂むのではあるまいか、と思はれる程落ついて微笑した。

「御邪魔になりますなら何處でも出てまゐりますが」

「不埒――」と身を震はして、立ち上る伯父よりさきに伯母は突と身を起して中に入つた。

「良人、其樣沒義道に――」

「何が沒義道だ」と仁王の如く突立つた怒氣滿滿たる眼は、かさなりかゝつて伯母を睨む。

「何卒御勘辨――お節さんも少し言葉が過ぎはせんか。――此樣な事は考へた上にも考へなければ、ね、あなた、此談は今日は此まゝ措つて、まあ篤と分別した上で、またあらためて相談する事にいたしたら如何でございませう」

と伯母は一方の手に良人を控へ、一方の眼に妹を制し、しきりに氣を揉む。伯父は默つて立つて居たが、突と座敷を出て行つた。

あとは寂然。伯母は大息ついて、「お節さん、わたしが惡かつた、此間から内相談をして見ようう見ようと思つて居ながら、つい默つて居たものだから――斯樣な事は今日が今日と直ぐ極めてしまはれることでは無し、またゆつくり話もして見れば、愼さんも今日は一まづ學校に歸つてね、――また其內あらためて何かの相談をすることにしませう――待ちなさい、其袂の綻び樣」

と伯母は手づから綻を縫つて吳れた。

默然として居る母と、氣を揉む伯母に別れて、伯父の家を出て、半町ばかり行くと、後に急な手の音が聞えた。顧みれば、伯母である。小手招ぎするので、小戾りすると、伯母は道の側に僕をひきのけて、小聲に、

「愼さん、伯父さんでもわたしでも、眞實卿を大一郎の樣に思ふのだから、伯父さんが癇癪を起しなすつたと云つて、決して氣に掛けなさんな。卿の遊學の事も伯父さんは望んで居なさる位だから、何れ其內に相談をきめませう、決して短氣を出しなさんな、宜いね、分かつたね」

と云つて、伯母は僕の帶のゆるんだのを手ばしこく結んで吳れた。

僕は唯々として別れた。

(二十三)

唯々として別れたが、僕の胸中は宛ながら亂麻の如くであつた。

伯父、伯母、母、鈴江君、野田家、菊池家、相續、養子、札幌農學校、上京、「出て行け」、「恩になつて居ながら」「短氣を起しなさんな」など云ふさまざまの言が一時に腦に揉み合ひ、もつれ合ひ、腹も立てば、嬉しくもあり、口惜しくもあり、馬鹿らしくもあり、失望もし、何が何やら一切分からぬ。

足は伯父の家より學校へ通ふ往還を步みながら、心はまるで胡思亂想の八重葎を分くる有樣。

兎に角僕は今生涯の一轉角に立つて居る。

伯父の言に從つて唯と云へば其で濟む。何事も圓滑に行く。併しながら其樣なれば、菊池愼太郎は最早世に存しない。「菊池」が存せぬと云ふは、「男」が立たぬと云ふ意味ではあるまいか。其樣な感じがしたればこそ――尤も些少と恥かしさも加はつて居たらうが――伯父の前で否と云つて、伯父を怒らしたのである。其れなれば、前言を守つて何處までも否と云ひ通さうか。伯父は、現に彼樣に怒つた。今後とても同樣であらう。また萬々一伯父も伯母も怒らぬにした所で、先方を失望させながら、其意見に背きながら、僕等母子が依然として其家の厄介に

なつて居るは、到底我忍び得ぬ所である。「また其内に相談して」と伯母は云つたが、二三日後の形勢は矢張今日の狀態と少しも變らぬのではあるまいか。あゝ如何しよう、如何しよう？ と思ふと、突然駒井先生が「丈夫人を恃むなかれ」と云ふ戒が腦中に湧き出でて、伯母がさきに云つた、短氣を起しなさんなの其短氣の意味を考へた。想へば其短氣が今の僕にとつて唯一の活路ではあるまいか。僕は出奔を案じ出でたのである。

僕が居ればこそ、色々の紛紜が起つて、伯父も怒れば、母も困む。一旦飄然として此地を立去つたならば、彼一件の話も自づから立消えとなつて、伯父伯母の思はくも變つて、母も氣兼が少なくなる。一方に吾上京進學の志を遂げて、一方に野田家との係累を脫するとすれば、此れ程得策があらうか。

「行かう、行かう」

と僕は獨語した。何時行かう？ 兵は由來神速を尊ぶ、色々面倒の起らぬ内、明朝立つとしよう。其れなれば一寸歸つて、母にだけ竊と相談して、暇乞して、と十五六步引返したが、また思ふには、萬一母が許さなかつたら如何であらう、寧ろ伯父にも母にも告げずに、斷行するが宜からう。母は全く知らぬと云ふ事が分かつたら、伯父も母子共謀して此に出でたと云ふ疑は起すまい。丈夫涙なきにあらず、離別の間に注がず、母に告別せぬは哀しいが、思ひ切つてと伯父の家に背をむけた。

學校に歸るとやがて冬の日は暮れた。差寄り困るは旅費の一件だ。東京迄は是非十圓の金が無くてはならぬ。母に相談すれば、無論其れ位は如何でもなるのであるが、無斷の出奔とすれば其樣も行かぬ。幸ひ僕の机の抽斗には、今度英和字書を買ふつもりの四圓不足の金がある。衣類雜書も少しはある。僕は仲好の賄を竊と喚んで、今夜中に是非拂はねばならぬ負債があるから、此衣類書類で出來るだけ金を拵へて吳れと賴んだ。少し不審の樣子であつたが、平生信用して居る僕の云ふ事で、承知して出て行つたが、二時間ばかり經つて、二圓なにがしの金を持つて來た。賣つて仕舞ふと駄目だから自分の名で質に入れたと云ふ。賣つて來て吳れれば宜かつたと思つたが、今の場合打明けることも出來ず、猶無きに優れりと謝して、金を收めた。是れで僕の懷中は六圓未滿、車にも乘らず、汽車は素より下等、菓子一つ食はず、已むなくば木賃、露宿の覺悟で居たら、兎に角東京までは行かれよう。

旅費の算段は既に出來たし、此れから書置の事と、四邊見廻すと、何やら彼やらに更闌けて同窓の多くは最早眠て居る有樣。此處其處について居る机上のランプは晨の星程稀である。

僕は先づ母に殘す手紙を書いた。告げずして去る不孝の罪を詫び、告げずして去らざる可からざる所以を陳べ、業を成し遂げて迎に參る日まで、必ず御自愛ある樣にと、書きながら僕は不覺の涙に暮れた。やう〳〵母への手紙を封じ終り、今度は野田伯父に殘す手紙を書いて居ると、座右の本箱の上から、

「菊池」

と聲を出すのを、喫驚しながら見れば、彼渥井と云ふ少年だ。

「菊池、何を書いとるか、――おい見せたまへ、隱さんでも宜いぢやないか。やあ、君は泣いたな、眼が赤いぞ」

僕はやつと此手紙は東京の友人の松村と云ふ者から上京を勸めて來た其の返事であることを辨疏した――上京の勸告を拒絕するのが殘念で落淚したと云ふ噓まで添へて。

「其樣か。僕も東京に行きたいな。此樣な學校に居たつて、彼眼鏡の薰陶ぢやひどいから

ね。あゝ駒井先生は最早來んのかな。僕も上京したいな——風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還」

と僕の美音で朗吟しながら淺井は行つてしまつた。僕はほつと息ついて、少しランプの心を細くし、匇々に伯父への書置を書いてしまふ。其手紙には、「君子は交絶えても惡聲を出さず、自分は少なりと雖も教を君子に奉ずる者云々と樂毅もどきに鹿爪らしい事を書いて、伯父の恩は何時までも忘れぬ事、併し自身は獨立を重んずる事、また母の上は宜しく賴む事、などを順序も無く書いた。其れから學校の諸友に宛てて、已み難き事情あつて竊かに上京する事、別紙を野田の宅に屆けて貰ひたき事、を手短に書き、母のは伯父と同封にして、都合二通机の抽斗にしまつた。其れからあたりを見ると皆寢て居るので、悄々地に荷物を拵へて、今些晨近くなるまでと假りに蒲團の中にもぐり込んだが、胸は躍り、頭は冴えて、固よりまんじりともせず、右に左に高低する鼾聲齒軋りの音を聞きさま〲の事を考へたが何と考へたか少しも覺えぬ。

良久しくたつと、學校の向うの村に鷄が鳴いたので、僕は竊を起きて荷物を提げ、震ふ足を踏みしめ〲唯一つあるランプの薄明をたよりに算を亂して橫はる英雄の手を避け、足を跨ぎ、やう〲二階の階段の口まで來ると、少し安心した故か忽ち其處に橫つた一人の足をぐつと踏んだ。

「あいたッ」

と跳ね起きる其時遲く、僕は電の如く階段を辷り降りて、階段の下隅に隱れた。二階には「誰だ、失敬なッ」と睡げに罵る聲が聞えたが、下りて來る樣子もないので、僕は胸撫で下し、荷物を肩に、下駄を突かけて外へ出た。

外は猶ほの闇く、學校の屋根に廿六七日の月が金の弓を掛けて居る。霜柱の立つた庭を小走りに走せ通つて、十町あまりは、追手が迫る樣な氣がしてあとをも見ずに急いだが、其れから少し歩を緩めて、初めて面を斬る樣な朝風の寒を覺えて、不圖持つて來る樣に準備して置いた蝙蝠傘と、臺所から內證で拵へて貰つた握飯を忘れたのを思ひ出して、立佇つたが、また頭を掉つて歩き出した。

學校から一里ばかり、先月駒井先生を送つて來た彼大きな榎樹の邊に來ると東が白んで來た。此處で僕は帶を結直し、悉皆旅支度になつた。支度と云つても、大したことはない。平常の綿入、綿入羽織、白木綿の兵兒帶、薩摩下駄、頭は古びた黑の帽を冠つて、手拭は腰につけ、僕を東京へ連れて行く六圓の金は、古帶にくるんで、腹卷にし、母から貰つた蟇口は五十錢の銅貨を入れて袂にぶらさげて居る。荷物は母が今度の正月着にと縫つて呉れた紺木綿、綿入を後、駒井先生から貰つたマコーレー文集の端本一冊と外一二卷の書物を前、兵兒帶の古いので括つて、振分けに頸にかけた。傘を忘れたので、道に落ちてあつた竹ぎれをステッキ代りに持つて居る。

行かうとして、僕は不圖榎樹を見て立佇つて、菊池愼太郎今回の遠征果して吉か凶か、志遂げ業成るか、或は襤褸を着て恥を故鄕に曝すか、若し吉ならば彼榎樹の幹の大瘤に此石屹度あたれ、あたらねば凶と、小石を拾ひ、狙を定めてはつしと擲てば、見事にはづれた。二三步進んで、手頃の石を投ぐると、またはづれた。腹立紛れにつか〲と樹の側へ立寄り、頭大の石を兩手にかゝへて、投げつくれば、堂とあたつて木の瘤の皮二三寸剝げたので、僕はやつと機嫌直し、手の塵拂つてまた途に上つた。

最早日の出に間はあるまい、東の空はぼうつと金色さして來た。僕は其東を指して、東京は愚か、道しあらば日邊にまでも到るの意氣を

もつて、蕃地に濶歩し初めた。

四の巻

（一）

明治十六年の十二月廿三日と云ふに、僕は第二の故郷たる某の城下を出奔して、東上の途についた。

路筋は、先づ豊後の別府の港へ出て、其れから汽船で大阪に渡り、其上は旅費の加減で、横濱まで汽船で行くか、若くは東海道を膝栗毛にうたすか、其は其時の都合として置いて、兎に角別府まで出ることに定めた。

初一日は途中に初旅の心細さ、後に殘した母の上が氣にかゝり、また追手の心配が斷えず氣になつて、駄馬の跫音にもぎよつとし、初めて泊つた山間の宿屋では、故らに筆跡を違へてあられもない名前を書いたりしたが、二日目からはやゝ旅心も定まつて、追手の心配もいさゝか薄らぎ、草鞋の穿き心地もしつくりとして來た。實は學校を薩摩下駄で出たのだが、二三里行くとふつゝり横緒をきらしたので、或る店で草鞋に穿きかへ、下駄は茶代がはりに其店の老婆に呉れたのであつた。

時は今冬枯れの野道山道淋しい事だが、併し僕は淋しいとは思はぬ。僕の頭腦には萬感錯集して、獨旅の道中は實に多過ぎる程であつたのだ。嘗て杉井先生も此道を取つて行かれた。師の足跡を踏むと思へば、小石まじりの此往還も何となくなつかしい。東京について、松村の下宿を尋ねて、「おい、松村、來たぞ」と彼が肩を敲いたら、如何様に驚くであらう。其れよりも伯父伯母貴江君なぞが今頃は如何様に驚いて居るだらう。若くはまだ其と氣づかずに居るであらうか。母は驚いても、内々喜ぶであらう。學校の友達が如何様に騒ぐだらう。「思ひ切つた事をやつたなあ」と驚嘆するであらう。左様、左様、何時か先生に聞いた泰西詩人の詩にも、英雄豪傑は他人の眠つて居る間にごそごそ這つて其地位に上つたものだと云ふ事があつたが、僕も學校諸友の眠つて居る間に駈けて來た。其と比とは勿論意味が異つては居るが、吾ながら今回の一件はよく思ひ切つて斷行した。と思ふと古來の名高き人物で、曾て一たび其生涯に出奔の幕を演じた人々の名が星の如く記憶に浮み、僕は獨り莞爾と笑んで、「男兒立志出郷關」の詩を高らかに吟じたのである。

幸の晴天つゞき、何の異る事にも會はず、足に豆も踏み出さず、三日目の四時過ぎに、別府の此方の龜崎と云ふ處に着いた。此處から別府までは僅つた一歩、と聞いて心勇み、草臥れ足引ずつて行く所へ、後の方から來かゝつた年の頃は三十四五、甲斐絹のぱつちを穿いた商人風の男がじろじろ僕の容子を見て居たが、

「別府に行くかね」

「左様です」

「汽船に乗るんだな」

「左様です」

「何處に行くのかね、東京？　大阪？」

「え、まあ其様なものです」

「此地は初めてかね、何處から來たかね」

其言葉の横柄な上に、僕は生面漢と諄々しく言ふのが嫌だから、黙つて答へなかつた。

商人風の男はじろじろ僕の顔を見ながら、

「わしも大阪まで行くが、何なら一處に連れて行つてあげようか。少年の一人旅はあぶない、胡麻の蠅がついてね」

胡麻の蠅と云ふのは如何様な蠅だらうと思つた。やゝあつて件の男は、

「別府では何の宿屋につくかね」

僕は口籠つた。

「其れぢやわしについて來なさい。わしが泊り

つけの宿に案内しよう。どうせ汽船は明日の午過ぎになるからね」

旅では見も知らぬ者とあまり心易くするものでは無いことをかねて承知して居たので、僕は心をゆるさず、目をとめて其容子を見ると、絹物づくめの衣裳に、表附の駒下駄、一寸した手鞄を提げて、立派な風をして居る。聞けば、大分の米商で、大阪に用達に行くのだと云ふ。僕は少し心安堵いた。日のくれ〴〵に別府に着いて、其處では煤掃き、此處では餅舂き、正月の支度に忙しい町中を中程まで來ると、件の男はフラフの立つた、看板に汽船問屋何々と筆太に書いた家に入つて、僕を顧み、

「此處だ、此處だ、何を立つてるのかね」

僕も續いて入つた。

（二）

汽船宿に着いて、件の男と同室することになつて、湯に入るまでも、僕は聊か不安の念を除き得なかつたが、湯に入る時彼男がどさりと取り落した懷中の重やかなるに、何だか堅氣な商人の證據を見た樣な心地して、大きに安心したのであつた。彼は宿の亭主を呼んで、確と其懷中を預け、僕を顧みて、

「込んで居るから用心がわるい、君も預けて置きなさい」

宿の亭主も言を添ふるので、僕は物蔭に行つて胴卷にした六圓未滿、僕にとつては六萬圓の金を取り出し、五圓丈本にはさんで手拭にしかとくるみ、亭主に渡した。これで僕は更に安心したのである。件の男は馴れたもので、夕飯の膳に一本取り寄せ、給仕女を相手に冗談云つたりして居たが、僕は三日の旅に草臥れて、飯を喫つてしまふと、間もなくぐつすり寢込んでしまつた。

明くる日、朝飯を喫ふと、件の男が、汽船の出帆にはまだ大分間があるから、此別府の町を歩いて見ようと云ふので、打連れて海添の汚い町をぶらつき、唯有る唐物屋の前を通ると、件の男は立寄つて毛の襟卷を買つたが、不圖懷中に手を入れ、呵々と笑つた。

「懷中を持つて來なかつた、一寸待ちなさい」

言ひ棄てて匆々と行つてしまつた。

僕は唐物屋の前を彼方此方や、暫し歩いて待つて居たが、つい一二町の宿に行つた彼男が十分經ち二十分經つても歸つて來ぬを不審に思ひ、宿に歸つて見ると、帳場に居た亭主が、

「御歸りなさい、御連れさまは？」

「今さき懷中を取りに歸つた筈」

「は、一寸御歸りなさつて買物をして來ると仰有つて御出かけなさいましたが」

忽然恐る可き疑が僕の腦裏に閃き出でた。

「乃公が預けた物は？」

「一處に御連れさまに差上げましたが」

「彼人に渡したと？」

叫んだ僕の顏は眞蒼であつたらう。宿の亭主は仰天した。（彼は六十近いでつぷり肥えた禿爺で、人の惡くなささうな顏であつた）

「ではあなたさまは御存じないので、へーエ、私はまた御連れさまが御歸りなさつて二人で買物をするから昨夜預けた二人の懷中を呉れと仰有つたものだから――では彼方は御連れでは無いので、へ、エ」

と呆れ顏――僕は泣顏。顏見合はして居ると、婢が遽しく、

「旦那、旦那――御客樣が一寸」

「何だい」

「二階の御客樣の時計が見えない――」

「何、時計が？――彼だ、彼だ、畜生、騙り、盜賊――」店頭は忽ち大騷ぎになる。巡査が來る。其室の時計、此處の蟇口と、客は紛失物に騷ぎ出す。其樣思へば、彼男の眼つきがと亭主が云ふ。其樣云へば、彼奴は手鞄を提げて出まし

たと婢が云ふ。云つてもわめいても後の祭り、巡査があせり、若者が八方に走せ廻つても、件の男は影も見えない。他の客は頻りにがや／＼騒いで居たが、軈て午になり、汽船出帆の時刻になつたので、皆口々に罵りながら、亭主の平謝りに謝るをせめてもの償に、どや／＼と立つてしまふ。僕は俊寛然と殘された。亭主は頻りに叩頭し、

一あなたさまには誠に申譯もございません。全く手前の不調法で、と謝つて、巡査の方で少し手がかりがありさうだから、今晩まで待つて呉れと云ふ。待つて呉れと云はなくても、待つより外に仕方は無いのだ。僕の旅費は今初めて其意味を知つた彼胡麻の蠅君の鞄に入つてしまひ、蟇口だけは肌身離さず持つて居るが、中には僅かに二三十錢しかない。荷物は流石に蒲團の類も殘したが、木綿着物が一枚に、古本が一二册、此が何になるものぞ。

汽船宿の二階の窓下にもたれて、今汽笛を鳴らし煤烟を殘して別府の灣を出で行く汽船を見送つた僕の胸の中、推量しても貰ひたい。

（三）

故國を出でて僅かに三日、自分の失策にもせよ災難に遭ふのは、或は我に告げず、伯父に計らず、學校の諸友をも欺いて出奔した其罰ではあるまいか、と思へばます／＼心細く、落膽から落膽に陷ちて、學校を飛び出した勇氣は何處へやら、身は全くの子供に返つて、眞に泣き出したくなつた。併しながら目下の場合、中々泣いて居る所の話では無い。時は移る、費は嵩む、何れにか早く策を定めねばならぬ。

歸らうか。斷じて否。男兒の面目が立たぬ。母に宛てて電報か郵便でも出して、事情を打明け、旅費を請求しようか。否、否、今更其樣な女々しい事が出來ようか。災難も自分で拵へたれば、災難を脱け出る道も自分で探り出さねばならぬ。向う見ずに進まうか。假令裸になつた所で、大阪所か半途までも行けない。と云つて、此別府に百年逗留した所で何の妙策が出る譯もない。何處に行かう、何處に向はう。比較的に一番近い目的は駒井先生である。先生の住所番地はちやんと書きとめてある。土州の須崎と云つて、何でも高知から西南に當つて、船つきの場所さうな。行かう、行かう、假令土を食ひ鹽水を飲んでも駒井先生を尋ねて行かう。宿の亭主を呼ぶと、禿頭を掻き／＼氣の毒さうに入つて來た。

一どうも飛んだ事で、誠に御氣の毒な――未だ一向手がかりがつきませんが――

僕は其樣なことであらうと期して居た。で、出立の一條をぬいて、事情を打明け、土州の須崎に行くに就て、なるべく廉價に便りを聞くと、亭主はぢつと考へて居たが、

一土州――の便船と申しては一寸ございませんが、豫州の宇和島へ今夜出る船がある樣なことを申して居ましたが、何なら宇和島へ御渡りなさつて、宇和島から便船を御求めになつた方が宜しからうかと存じますが――

僕は其宇和島行の船で宜いから、舟子の手傳でも何でもするから極々廉價に行かれる樣に周旋して呉れと賴み、此のみは手放さず着京の日の晴着と思つて居た母が縫つた新しい木綿の綿入と帽子風呂敷に古兵兒帶まで揃へてそつくり渡し、此で出來る丈金を拵へ、其内から宿料もとつて呉れと賴むと、禿翁はいよ／＼氣の毒さうに、幾回も叩頭して、件々を取つて座を立つた。

やゝ久しくたつて、亭主はまた頭かき／＼入つて來た。

一御待遠さま、恰ど船も此れから出ます所で――其れからお依賴の彼でございますが、彼樣云ふものは如何も、節季ではございますし―と金一圓廿錢と其れから帽子風呂敷をもどし、

「唯今御膳を差上げます、直ぐ御支度――」

と立たうとするので、僕は遮て「宿賃は？」

亭主はちらと僕の顏を見たが、「最早其中から戴いてございます」と云ひ棄てゝずる〳〵滑り出た。見えすいた嘘つき爺め、其れ所か綿入の代も屹度幾許か自腹をきつて居るくせに。人の情が嬉しいのか、情を受けるが口惜しいのか、夕餉の膳に向つても一碗をすら嚥下し得なかつた。立ちがけに僕は隙を覗ひ、十錢銀貨三枚を竊と皿の下に入れて逃げる樣に宿を出で、宇和島行きの船に乘つた。

船は八九反の此れで豐豫海峽の波を截るのかと思ふと心細い位のもの、舟子と云つては船頭夫婦に乳呑子一人。何かの乾物を積んで居るらしく、乘り移ると芬と腥い鹹臭い臭がした。

恰ど西北の追風が出たと云つて、船頭夫婦は罵る、わめく、錨を揚げる、帆を張る。やがて船脚條々と波を截つて、燈明かき別府の湊を後に、船は次第に灣を出た。僕も乾物の俵の蔭から出て、暫の間でやゝ暫し船頭と問答して居たが、やがて船頭の妻がかけて呉れたどんざを引被いで、羽織のまゝ横になつた。併し眼が冴えて少しも眠れない。最早日はとくに暮れて、一天の星きら〳〵と光霜を含み、帆を掠むる夜風瑟々として、船底をうつ寒潮の音、腸も氷るばかり、艣を握つた船頭が、

「船頭可哀や、音戸の瀬戸で、ヨウ、一丈五尺の櫓がしいわるヨウ」

歌ふ聲も宛ながら泣く樣に海面に震へる。

（四）

眠らぬ、眠らぬと思つても何時か眠つたのであらう、眼をあいて見ると、朝日きら〳〵と波に砕けて、左手の方には一帶の山が茜色の龍の如く淡路の末に横はつて居る。

「彼は何處だね？」

と聞くと、櫓管銜へた船頭は、

「佐田」と答へた。

「別府から最早餘程來たかね？」

「まあ半途だね」

「宇和島には何時頃に着くだらう？」

「何處何時かん時は云ひなさんな」

成程船の上では前程の事は問はぬのであつた。併し此分なれば、今日の午後には遲くも宇和島に着くだらう。と思へばやゝ頼母しく、幸に船暈もあまりしないので、舷につかまつて潮水に漱ぎ（僕は三年前、松村の故郷に行つた時、船の上の失策を思ひ出でた）乳呑子負つて船頭の嬶が焚いた甘諸飯の熱きを鵜呑にして、大分元氣づいて來た。昨夜の寒に引易へて、今日は冬ながらぽかり〳〵と日ざし和らかに、船頭の鼻歌も長閑に聞える。船頭の嬶は流石に女だけ僕が獨旅の容子を不審にも氣の毒にも思つた樣子で、僕の郷里は何處か、兩親はあるか、年齡は幾歲になる、何の爲めに誰を便つて何處に行くか、心細くは思はぬか、など云ふ事を根ほり葉ほり問うて呉れた。のみならず、別府で貰つたと云つて、餅を燒いて呉れた。僕は心から嬉しく、不圖淮陰漂母の譚を思ひ出して、此後若し志を得る時あらば、此一片の餅を百倍して報いようなどと妄想した。併し目下は何も其情に酬いるものが無いので、僕はせめて些少なと手助けにと、彼女が飯を焚きどんざを繕ふ間、子守になつて其乳呑子をあやして居た。

午頃になると、風が急に凪いでしまつた。船頭は頻りに東の方を望んで居たが、何か口早に其妻に云つて、手早く帆を取下ろし、櫓を押し出した。彼が妻なる者も、子を僕に託して置いて、脇櫓を立てた。一時間ばかりすると、船は或る島の灣に入つた。此は沖の島と云ふ小島だ。船頭は忙しげに錨を下ろし、纜を繫いだ。

「如何するのかね？」

「客人、覺けて來た」と云ひ〳〵船頭は船の篷を

撫ふ。昔に分からぬものは海の上、今朝は玉の如くに晴れて居たが、何時の間にか東の空暗くなり、やがて風颯々と逆まに吹き來り、船は二挺の錨に、四本の綱に繫がれながら次第に揺れ出した。幸に船は島の灣内深く隱れて居たので、直接に逆風の攻擊は受けなかつたが、波の來る毎に揺り上げ、揺り下げ、宛ながら鞦韆に乘つて居る樣。馴れたもので船頭夫妻は此中に飯櫃かき出し、悠々と食事をして居るが、僕は素より一粒も喉に入らず、雨の音、風の音、船板一枚底をうつ波の音を聞きながら、乾魚鹽魚の臭に蒸されて堪へ難い篷底に海鼠の如くなつて横はつて居た。

斯風雨の最中に、一層僕の煩悶を加へたのは、船頭夫妻の喧嘩であつた。何の喧嘩か、風波の音の騒がしい上に、彼等の言葉が本來分からぬので、僕は五里霧中に迷つて居た。が何でも船頭の妻は頻りにそふか〳〵と云ふ事を言つて居た。其そふかと云ふは何樣な鐵か知らぬが、喧嘩は次第に風波と共に騒がしくなつて、口論の果ては摑り合の活劇、今は僕も見兼ねて、船暈と戰ひ動搖に立つことは出來ず、腹抑ひながら二人が中に割つて入り、やう〳〵押鎭めた。船中の風波は鎭まつたが、外の風波は中々をさまらぬ。僕は彼や此やに精根を疲らし、天明が近くなつて風波の少し靜まると其まゝぐつすり寢込んで前後も知らず、誰か頻りに揺ぶるので、やつと眼をあいて見ると、何時の間にか夜は明け、日は闌け、船は宇和島の港に着いて居た。

五

船賃と飯料を拂つて剩す所は僅か七十錢未滿の懷金を袖にし、足は跣足、頭はふら〳〵して、僕は宇和島の埠頭に立つて居た。

時は四月の廿八日、此處らも漸暑を用ゐると見えて、師走の船つき殊に忙しく、貨物を揚げる船、魚類を下ろす車、耳馴れぬ罵り聲わめき聲は身を繞つて騒しいが、僕には何の縁もゆかりもなく、此賑ひの眞中に立ちながら身は絶海の孤島に流れついたロビンソン・クルツオの如く感じたのであつた。

あまり足がよろめくので、其處にあつた樽に腰かけて居ると、突然赤白い手拭が僕を押しのけて、

「其處どけ、ちぼめ」

と叱咤れる聲が聞つたので、愕然として見ると、筋ぎすの男があざ笑つて立つて居た。僕は匆々に立ち上つて、よろめく足を踏みしめ〳〵町の方へ行つた。少し行くと汚い飲食店がある。僕は昨日の夕刻來絶食して居たので、（飯料は船で出したが、飯に食はなかつた）少し腹でも拵へて、此上の分別を定めようと、這入つて、金毘羅樣の額の下に座を占め、眼を瞑つて蕎麥の樣な饂飩一碗を喫つた。僕此れから如何しようか、船で行つたら足は樂でよからうが此上彼樣な風波にでも會つたら、其れこそ命が堪らない。何でも陸行に限る、苦しくも陸行ときめようと、主人の婆に道筋を聞いてゐると、向うの方に何か臭い魚の煮つけで濁酒を引かけて居た老爺が不圖耳を立てて、

「土州の須崎に行くかね、卿さんは？」

然りと答へて道を問ふと、爺は須崎へ行くには、陸路は本往道と近道とあるが、本往道はやゝ樂なかはりに餘も遠く、山越えすれば近いかはりに大分むごく〳〵、殊に最早雪があるかもしれぬと云ふ事を教へた。僕は路費の都合もあるし、苦しくても近道をとつて行かうと決心し、饂飩の代を問うて袂を探すと、僕大變、蟇口が無い。兩袖をふるひ、帶をといて見たが、更に見えぬ。不思議、不思議、先刻船賃を拂つて、たしかに左の袖に入れて置いたに、如何したのであらう。素より蟇口の中には七十錢足らずの錢貨が入つて居たばかりだが、併し其も

十錢は僕の全身代である。僕は茫然としてしまつた。泣面に蜂とは此事であらう。驚き顏の嫗と老爺をあとにして、僕は埠頭の方へ走せ戻り、若しや落ちては居ないか、拾つた人はあるまいかと探して見、尋ねて見ても、一向に見當らぬ。「ちぼにやられたのぢやないか」と一人が云つたので、「ちぼ」の意味を問うて、「掏摸」と云ふ事を知ると同時に先刻蒼白い男が僕に「ちぼめ」と云つて、突當つたことを思ひ出し、其れでは彼男が「ちぼ」で、夫子自道つたのであつたか――と足ずりしても詮方が無い。一回のみか、二回までの失策に、吾れながら面目なく、悄然としてまた先の饂飩屋に還つて來た。嫗は頻りに氣の毒がり、老爺は巡査に訴ふるやうにと勸めた。併しながら件の蟇口が今日中に果して無事に僕の手に戻るとすれば可、左樣でなければ一日の滯留は一日の費用――負債を醸すのである。失望は僕に勇氣を與へた。最早斯樣なつては詮方なし、乞食しても前進する外はない。

此處までも持つて來た古風呂敷を饂飩一杯の代りに投げやつて、僕は逃げる樣に駈け出した。唯有る古着屋の前に來ると、僕は一寸立停つて考へたが、突然着て居た綿入羽織(無論木綿の)を脱ぎ、冠つて居た帽子をとり、因業な亭主を口説いて二十錢に取かへ、其れから書林の前へ來ると、雜書一二册(マコーレー文集の端本は已に其中に插んだ五圓なにがしと共に胡麻の蠅に奪られたのである)を出して泣く樣にして八錢にかへてもらつた。これで荷物もなければ帽子も無し、羽織も無し、それで懷中僅かに二十八錢。否でも應でも此二十八錢で土州須崎の駒井先生の處まで行かねばならぬ。

宇和島の町はづれで、店の時計を見ると、午後の二時過ぎだ。此れから先刻の饂飩屋で聞いた吉野と云ふ處までは大分道程もあり、殊に山路にかゝると云ふが、是非共今日日の中に、若くは日が暮れても其處までは行つて居なければならぬ。

不圖空を仰いで見ると、鼠色の綿雲滿天に渦まき、日は雲の中にぼんやりとして、如何にも雪になりさうであつたが、果して町を出離るゝとちら〳〵降り出した。

(六)

「雪降れば野路も山路も埋れて遠近知らぬ旅の空かな」と古歌のあはれは今僕の身の上になつて來た。

宇和島の町を出離るゝ頃ちら〳〵降り出した雪は、行く程に〳〵ます〳〵紛々霏々と降りしきり、拂へども〳〵袖にたまり、頭に積り、襟に入り、眼鼻に入りて堪へられぬ始末。斯樣な事なら、せめて彼古帽子だけでも賣らずに置くのだつた、と悔んでも今は詮ない噺。と云つて、蓑笠買ふ餘錢もなし、あゝ何か無いかな、と道の左右に眼をくばりながら歩んで居ると、不圖路傍の刈田に案山子が殘つてあるのを見つけた。近寄つて見ると、着物はぼろ〳〵の加之雪に濡れ浸つて役には立たぬが、竹の子笠は古びて穴が明き締緒もちぎれて無いとは云つても、猶雪を凌ぐいさゝかの便りにはなりさうだ。時にとつての青羅傘と取はづして、其處らに落ち散つた藁屑を早速の紐に打冠つた。此上蓑があらば結構なれど、眼に入るものは唯田の畔に立つ藁束ばかり。此でも無いよりは優だ、雪をふるつて、肩に引かつぎ、またて〳〵歩き出した。

雪はます〳〵降りしきる。未だ宇和島から二里とは來ぬと思ふに、雪の日の黄昏れ易く、足下に一條ほの白き道を殘して四邊は薄暗うなつて來た。鼠色の空は低う頭の上まで覆ひかゝつて、其處から數限りもない大雪小雪はら〳〵ちら〳〵降りに降るばかり、連日の旅づかれ、心痛、其上を一晝夜も船の上の風波に揉まれて、綿の樣になつた體、未だ船暈も醒めぬに雪道を

歩いたこととて、疲勞は夥しく、殊に昨日以來絶食して、食物と云つては今日の晝頃宇和島で唯饂飩一杯食つたばかり、爪先の冷さ腹に應へて、腹は頻りに痛む。此では到底堪へられぬ。人家は無いか、廐牛小屋にでも寢さして貰はう、麥飯諸粥の剩餘でも啜らして貰はう、懷中の二十八錢は吾全身代であるが、其半分をつかつても構はぬ、と斯う思ひ〳〵また二三町行くと、降る雪の間に小さな火光がちら〳〵漏れて來た。近づいて見ると、小さな茅舍の、戸は締めて、唯一枚「酒肴いろ〳〵」と書いた障子戸に火光がさして居るのである。中では頻りに女の罵る聲が聞えた。僕は寒に凍えた手を息で暖めて暫時戸外に佇立んで居たが、やがて、

「御免……」

障子明くると、眉を剃つた色黑の兇悍な女の顏が此方を見返つた。叱られて居たのであらう、十ばかりの女の兒も泣き止んで、涙の眼を遣つて此方を見た。年增の女はじろ〳〵僕を見て居たが、

「出ないよ」

出ない！ 人を乞食と思ふか――とむつとしたが、不圖自分の容子を見れば、破れ笠に藁束を被て、實にも乞食で無いとは云へぬ容體。

「乃公は乞食ぢやない、錢はあるが、今夜一晩泊めて――」

「宿屋ぢやないよ。何だて其處ら雪だらけにするだな。出て行かう！」

慳貪に女は罵つた。

「其んなら何か食物を賣つて吳れないか、錢はあるが――」と僕は哀求した。

「食物なんかありやせんてぢやないか。其處しめて出て行かう。出て行かうたら出て行かう。」

突と走せ寄る權幕の鋭さに、僕は半分障子の外に出ながら、

「此れから何里あるかね、吉野までは」

「知らんよ」

「此あたりに泊めて吳れる家はないかね、錢は――」

「五月蠅え乞食だな」

ぴつしやり戸を閉めてしまつた。

僕は熟と其閉つた戸を眺めて居たが、是非なくまた歩き出した。道は此れから坂になる。彼女の怒鳴聲、女兒の泣き聲も暫く聞えて居たが、やがて其も雪に隔てられて聞えずなつて了ふ。

踏み辷らして跪いたを機會に、僕は二口三口雪を摑んで咽喉を濕し、此樣な時には詩でも吟じて行かうと[illegible]い聲を絞つて王郎酒酣云々と吟じ出したが、聲に何時しか鳴咽つて、意氣地ない涙がほろ〳〵こぼれて來た。僕は默つて震ふ脣を嚙みしめ〳〵、蹌踉とまた一二町登る。

日は到頭暮れた。

（七）

日は暮れる。眼には見えぬが、雪はます〳〵霏々と降りしきつて、笠を傾けても面を撲つ飛雪紛々、衣は濡れ透り、爪先は凍え切つて感覺を失ふ。行く程に、苦し、ひもじい、寒いの境涯はいつか通りぬけて、一種快い、萎えた、睡い、夢の樣な感が身を包んで來た。故國を飛び出して來たのも夢、別府の出來事も夢、海を渡つて此四國に來たのも夢、宇和島の出來事も夢であれば、今此雪の夜道を獨り辿つて行くのも夢の樣な心地。不圖何かに躓いて倒れた。起き上らねばならぬならぬと思つたが、また不圖此處は宇和島の山道では無く、其山道に躓いて倒れたのが夢で、實際は故國の伯父の家で、否故鄕の臺所で、母の前に跪いて詫びて居るのだと思つて、

「阿母」

とまでは言つたが、あとは茫となつて、唯ほの白

い無邊際の野原を何時までも〳〵辿る心地。

* * * * *

其野原を何處までも〳〵辿つて居ると、千萬里の彼方から蚊の泣く様な聲で、「おゝい〳〵」と追つかけて來る者がある。折角斯様して歩いて居るものを、誰が呼戻すのであらうと、顧みもせず行くうちに、忽然螢の様な火光が見えて來た。何の火光だらうと思つて怪しんで居ると、此方が行くのか、向うが來るのか、火光は段々大きくなつて、「おゝい〳〵」と云ふ聲も次第に近くなつて來た。

「最早大丈夫ぢや」

耳近く人の言ふ聲に、ぽつかり眼を開いて見ると、不思議――野原は消えて、山道も消えて、身は見た様な家の中に横はつて居る。前には爐の火がどん〳〵燃えて、其側には身の丈程の木刀をついて、巡査の様な外套を着た四十あまりの髯だらけの男が腰掛けて居る。此方にはチョン髷の褸の百姓らしい男が坐つて居る。僕は起き上らうとして、またくら〳〵と倒れた。彼髯男が何か言ふと、チョン髷の男はやがて溫かいどろ〳〵した辛いものを咽せるに構はず僕の口に注ぎ込んで呉れた。此は濁酒であつた。

「本當に卿さん、旦那によく禮を云ひなさい、旦那が此處まで卿さんを負つて來なさつたのだよ」

背後に聞き覺えある女の聲がしたので、見返る眼前に現れたのは、先刻僕を素氣なく追拂つた彼邪慳な女だ。僕は此處に先刻の小屋で、僕が雪に凍えて山道に倒れて居たのを、此髯男が通りかゝつて此籠の茶屋まで連れて來て呉れたのか。道理で見た様な家と思つた。先刻叱られて泣いて居た兒は寢でもしたのか。チョン髷の男は其時見なかつたが、亭主でもあらう。

「本當に旦那、功德をなさつたよ」

チョン髷の男も口を插んだ。髯男は頻りに口髭を引張りながら、

「[illegible]達は乃公を鬼々云ふが、鬼にも人情はあるぞ。乃公は取る筈のものを取る丈ぢや」

爐火の溫度と、今飲んだ濁酒の溫りで、棒の様に縮んで居た手足が少し舒びて、咽に氷りついた舌が少し弛んで、僕はやつと起坐して禮を述べ、且髯男の問に應じて、鄉里身分姓名、其れから今夜此處を通りかゝつた由來の大略を告げた。髯男はぢつと聞いて居たが、

「其れぢや兎に角乃公が家まで來なさい。待てよ、未だ歩けまい、治左公、貴様負つて呉れんか」

治左公と呼ばれた男は、チョン髷頭を搔いて、女房の顏を見ると、女房は何か眼の相圖をしたので、是非なく承知の旨を答へて、僕を背負ひ（衣類はあらかた乾いて居た）其上から蓑を着、「旦那」に素より草鞋穿き、片手に木刀、片手に龕燈提灯をさげて、未だ降りしきる雪を冒して出かけた。何だか夢に夢見る心地であつた。

半里ばかり宇和島の方へ後戻りして、往還から横にきれ込み、二三町行くと山蔭に一軒家があつて、其門近くなるや否凄まじい狺々が起つて、三四匹の犬が勢猛に飛んで來たが、

「馬鹿め、乃公ぢや」

と云つた主人の聲に、忽ち歡迎の聲をあげて、主人の身邊を狂ひ廻つて居る。良しばらくたつて、提燈提げて老婆が出て來た。

「旦那様？」

「婆、今戻つた」主人は家に入ると、木刀を戸の隅に寄せかけ、外套の雪をふるつて、土間の竿にかけ、草鞋の雪をはたいて、隅に直し、さて丁寧に足を洗つて上りながら、

「治左公、御苦勞。――婆、乃公の古袷があらう」

「へーエ」と婆は一隅に今治左の背から上框に、おろされた僕を眺めて怪訝な貌。

「此人に着更へさして、直ぐ寢せろ、彼二疊に

──毛布でも着せての、──纏い方のだぞ
僕は膳を運ぶる間もなく、垢じみた袷に着更へさせられて貞操な部屋に寝かされた。襖一重の向うでは、主人が聲として、
「治左公、彼一件は明後日まで如何様にかして貰ひたいな。最早乃公の方ぢや待たれんぞ
治左は何かくど／＼云つて、やがて歸つて行つた容子。主人は其れから寝酒でも飲む氣配であつたが、僕はひどい疲勞とさし當つての安心に、體は古毛布の下に舒び、心は見知らぬ人の情に跪んで、其まゝぐつすり寝てしまつたから、其後の事は知らぬ。

八）

疲勞と安心あたりで、翌朝になつても、如何しても枕が上らぬ。一日又一日、やつと起き上つたのは、明治十七年の正月元日で、年頭の祝儀と救護の謝禮と同時に述ぶる始末。
僕が寝て居た其間、主人は非常の多忙で、人が来る、十六點を鳴く、出る、殆んど寸暇も無く、僕あるを忘れたかの様であつたが、老婆は隙々に粥など持つて来ては、親切に問ひ慰めて呉れた。年寄でも流石女の優しいもので、問はず語りに色々の事を教へて呉れた。
僕を救つて呉れた當家の主人は、西内平三郎と云つて、當年四十二歳、もと宇和島藩のあまり重からぬ士族の家の三男で、若い時から随分貧苦を嘗めた人さうな。維新後[illegible]に入つて大[illegible]まで立身したが、[illegible]められたのか、辭したのか、兎に角陸軍を去つて、此宇和島在に引込んだのが、恰度鹿兒島戰爭の翌年であつた。其れから或知邊の百姓家の一室を借りて、金貸を始めた。其れが運よく繁昌して、四年ばかりの間に、一寸一身代を作り出し、二年程前に抵當流れの地所に新築して引移つたのが此家。何處の里でも、成功に嫉妬は形の影で離れぬもの、殊に金貸商賣と来て居るので、此近在ではあまり好い感情を懐いては居ず、必ずしも高利を貪る譯では無いが、恐ろしくきちやうめんな男で、自分でも契約をきちんと守るかはりに、人が契約を履行せぬと、如何なる事情があつても容赦せず、取るものは土を捧つても取ると云ふ風だから、年が年中、督促、裁判、差押のやり通しで、随分怨を受けて居ることも少なからず。或時夜中催促に行つた歸途を、待伏せして大の男が二三人うつてかゝつたが、此方は武藝の達者。金火箸ほどのステッキで右往左往にうち散らし、自分は微傷も負はなかつた。其れからは絶えて闇討の話も無いが、主人はひどく用心して、夜中出あるく時は必ず此樫の大木刀をついて出るのであつた。右の通りで、近在では鬼の様に言ひ雜す者もあるが、實際は其様な恐ろしい人では無く、癖さへ飲み込んで居れば、つきあひ易く、今の老婆なども現に長らく勤めて居る。但し物を粗末にするのが何より嫌ひで、なかしもとの米一粒、庭に落ちた紙の一片でも、[illegible]をしかむることは難しく、鬼の旦那一名を吝嗇爺と村人に云ふさうな。老婆の如きに、よく此處を呑み込んで、主人の物を大事と禮節の一片も無駄にせぬので、大に主人の信用を博して、留守も安心して託されると云ふ位。禮節と云へば、先年二度目の細君──一度目の細君は如何なつたか、老婆も知らぬ──を離縁したのも、禮節のかき様が大ざつぱであつたので、此様な女は行く／＼家を亡ぼす、と云ふ所から三行半となつた譯さうな。何時も「小事が大事、小事が大事」が口癖で、閑暇な時寝酒のあがりには其昔貧乏士族の三男に生れてさま／＼の艱難辛苦をした事から、陸軍に出ても他の士官は宴遊濫費半文の錢も殘さぬ所か、負債をこしらへるに引易へ、自分は身の皮を剥ぐ様にして金を蓄し、他の連中は職を罷めて一は途方に暮るゝ者もあるに、自分は其金を土臺として今は此近在に 旦那

のが常である。

以上は僕が寢てゐる間に老婆から聞いた大略で、未だ十分面會もせぬ内に、主人の身分性癖の次第は大略腹に落ちたのであつた。

元日には努めて起き、初めてゆるりと主人に面會して、救護の恩を謝した。主人も今日に何時に無く屠蘇を古土盃に酌みながら、細かに僕の身分、此四國に渡つて來た仔細、目的を質し、算筆が出來るや否を問ひ、其では當分此處に居て、少し事務の手助をして呉れ、給料はやれぬが、衣食の費は引受ける、と云ふ意味を諭した。

僕はつく〴〵思案した。金は無し、體は弱つて居るし、今日此處を飛び出した所で、また難儀をするばかり、加之兎に角救護の恩もあるし、今暫時此家にとゞまつて、猪駒井先生にも手紙で相談し、其上の分別にしよう。東京遊學に出かけた者が、四國にまれ込んで、金貸の小僧になるも、實に意外心外な話だが、途中に行倒るゝよりも猶優かも知れぬ。

斯樣思案を定めたので、

「其れぢや當分御厄介になります」

と答へて、僕は其日から「鬼の旦那」の帳つけになつた。

あゝさきには伯父の祕書官になり、今はまた金貸の祕書官になる。祕書官、祕書官、僕は到底祕書官男であらうか。

（九）

人の身の上程分からぬものは無い。十日前の九州育英學舍の書生、十日後には忽ち四國の片隅の金貸の小僧になると云ふは、小說にしても隨分唐突な話だが、僕は今其運命に會つたのである。

僕の職掌は實に雜多なものであつた。朝起きる。雨戸を明ける。水を汲む。庭を掃く。箒の柄が氷柱の如く冷たくて、手拭を卷いて掃いたこともあつた。飯は三度ながら粥だ。朝飯が濟むと、小さな机にかゝつて、帳面をつける、主人を相手に十六盤を彈く、質を置きに來る者があれば質札を書く、小使になつて役場に行くこともあれば、主人のお伴で督促にも出かける。治左が家は未だ宜いが、他の見知らぬ家に行つて、彼晚僕を負つた治左が家にも二三度行つた。

「此兒は誰だ？　鬼の旦那の二代目ぢやないか」

と云ひ貌にじろ〳〵睨まれる時のきまり惡さ、見えすいた貧乏な家に、主人の伴して行つて、僕の急がず騷がずゆるめず縱たずじわり〳〵主人が督促する傍に、瘠せこけた男女の額から汗眼からは淚のほろ〳〵こぼるゝを見る時の辛さ。あゝ僕は行く〳〵如何に落魄れても、誓れと金貸商賣は決してすまいと誓つた。又は村の者共が、加之立派な利子つき抵當つきの金を借りに來ながら、世辭笑ひして頭の三つ四つも續けざまに下ぐるを見ては、氣の毒とも何とも云はん方なく、片腕落して喇るとも負債と云ふものするでない、と其樣しみ〴〵思つたのである。

主人西内は何でも子供の時から貧困に育つて、貧の爲めには實に夥しい苦痛を受け、恥辱を忍び、人間の最大不幸は貧である、まさかの時には親も恃むに足らず、兄弟も賴みにならず、神佛素より賴む可からず、賴む可きものは唯一の金である、と云ふことをしみ〴〵思ひ込んだのである。故に其生涯の目的は、如何して金を取らうか、如何して其取つた金を守らうか、と云ふの二點に注がれてあつた。金を取るの心づかひは素より云ふ迄も無いが、金を守るの苦勞も、大したものであつた。西内氏が恐いものは二つ、火事と盜賊だ。だから西内家では冬の最中と雖も炬燵を許さず、燈火は夜の十時限り主人自から消してあるき、一切石油を廢して行燈を用

ゐ、炭ははしらぬ樣に必ず一晝夜水に浸して乾かしたのを用ゐ、老婆の如きは餘程信用を得て居るに關らず、時々は主人自から臺所に出張して消壺に水を洒ぎ、揚げ板を撤げて今蒸んだ火の粉の行方を詮議する始末。若し夫れ防盜の手段に至つては、西内氏の頭腦は恐らく此が爲めに強半を耗したのであらう。其家を訪ふ者は、門の嚴乘にして、家を繞る枳殻の生垣の隙間もなく尖鐵を立てて寄れや刺さんと身構へて居る勢を見て先づ一驚を喫するであらう。併し其門に入るより早く何處から來るのか聞いて驚心見て駭慄、恐ろしい猛犬が二疋も三疋も鬪の聲を揚げて跑け來るに會うては、如何に豪膽なる盜賊も敗走するに相違ない。外廓の守已に右の如く堅固なるに、搗てて加へて、戸、雨戸、窓は悉く其裏を鐵刀で張りつめ、戸は掛金の上に心張りし、雨戸は一々さるを落して猶其上を門で押へ、且處々に觸るれば響く金盥の類をかけて、障子の外には盜賊入らば蹶く樣に術、足つぎの類を伏せ、障子にも心張を施してある。而して主人の枕元には龕燈、マッチ、仕込刀は徃々にして不覺をとると云ふので二尺五寸の長刀を夜具の中に入れ、すぐ手近の處には彈丸をこめた六連發の短銃が置いてある。夕の戸締は必ず主人自から手を下して、加之寢がけに一度内外を見廻らねば夢が結ばれぬさうな。老婆すらも主人の注意で出刄庖丁を枕もとに置いて寢る、僕の如きも命によつて一尺二三寸の脇差を賜つて蒲團の下に入れて寢た。一夜に少なくも一度は「菊池、菊池」と喚び起されて、主人のお伴で戸締を見繞ふのが常であつた。風雨の夜は、戸のがたぴしに「菊池、菊池」の掛合で、僕は殆ど目睡む隙も無い。實に夜毎の籠城とは此事であらう。要するに「人は盜賊、明日は雨」とは、まさしく西内氏の處世觀を道破したもので、老婆は未だしも、僕の如き蔟鳥が突然其家に入り込んで、金の在所こそ知らね、其秘書官となつたのは、實に破格の優遇であつて、所謂知己の感ありと云はなければならぬ。

僕はしば／＼斯樣思つた、あへて救はれた僕に贔屓するでは無いか、此家の主人の如き、惡い人でも無いに、持つ者から鬼と蔭口云はるゝ程一克に金貸商賣をして、金を溜めて、夜の目も合はぬ程火事盜賊の要愼に氣根を憊らして、さて其金をもつて如何すると云ふでもなく、其金を傳ふる子孫もなく――僕の知る限はで――畢竟何の爲になるであらうかと。併し此は未だ幼い僕の考で、主人が寢酒の一纏に陶然として、吾建てた嚴乘な家の天井を睨廻す時、若くは大人國の歌がるたとでも云ふ樣に部屋も狹しと地券證を廣げ並べて、其眞中に頰杖つきながら見廻す時、其相は「鬼」の樣では無く寧ろ惠比壽樣であつたのを見ると、金と云ふものには、如何して手に入れたとか、何になるとか、其樣な馬鹿面倒な話はヌキにして、何時見ても云ふに云はれぬ人の莞爾とする魔力があるものと見える。

（十）

主人も老婆もとり／＼僕によくして呉れた。就中老婆は僕の翁のゐたを一度聞いて以來、三日にあげず「翁い」ぬたを拵へては、旦那樣には内所で僕を臺所の隅に呼んで振舞つて、僕をして嘻に苦しい涙を搾らせたし、主人はまた僕が正直で勉強で年に似合はぬ確かな者と賞むる横合から、其れ其字の書き樣が大き過ぎるの、やれ紙屑を拾つて置けの、箒を輕く持つて埽かねば庭の土が減つてしまふの、としば／＼御小言を賜るのは事實であつたが、併し鬼の旦那は決して「鬼」では無かつたのである。村人は何と思つたか知らぬが、僕は寔に角も内家の天井の下に、饑ゑず、凍えず、下男兼書官として相當の待遇を受けたのである。

然らば僕は今の境涯に安んじて居たか。問ふも管、不肖ながら僕も菊池愼太郎では無いか。駒井先生の弟子で西山先生の門人では無いか。身の獨立を貴らんより寧ろ學僕となつても自力をもつて自家の運命を造らんと唯つた一人の母にも告げず故國を飛び出して來た僕では無いか。苟くも自由主義を標し、古の大人君子の傳記をも與り聞き、竊かに世の爲め人の爲めにもなららうと云ふ志を懷いて居る僕では無いか。西内家の恩は忘れぬ、また其人を村人の云ふ樣に「鬼」とも思はぬ、唯昔餘りの貧苦に身神を絞られて心の乾からびた人と氣の毒に思ふのみである。併しながら何處を見ても金、金、金、何を聞いてもまた金、金、金の外は無く、小さな繭の中に蛹の蠢々うごめく樣に、小さな吾家に栖籠つて蠢々金滿器械となつて了る可き運命の人と朝夕共に棲んで、其頤使する所となるのは、實に氣もめいる話ではあるまいか。僕の脈管には、まだ紅の熱血が漲つて居る。僕の眼前には未だ遠くて近く近くて遠い理想の光が煌々と照り渡つて居る。僕は竊と駒井先生に宛てて一通の郵信を出した。其には細かに事の顛末を打明けて、先生の教を求めたのであつた。先生が若し來いと云つたら、また飛び出しても行く心算であつた。云はなくても、恐らく行く心算であつたのだ。併し不幸なる哉、其手紙は附箋せられて歸つて來た。宛名の者は先頃何處かへ行つてしまつて、受取者が無いとの事である。僕は非常に落膽した。

駒井先生は最早駄目だ。先生の父君は物故せられて、先生は東京へでも行かれたのであらう。先生已に駄目とすれば、僕の執る可き道は何れにあるであらう。故國の母や伯父伯母に事情を報じて、上京の途をつけようか。僕は已に幾回も筆をとりかけた。併しながら飜つて思ふに、僕には未だ自分ながら子供の樣に思つて居るが、柄こそ小けれ、數へ年にすれば當年とつて十七歳、伯父の言を刎ねのけ、母にも告げて、學校の諸友をも驚かして、一旦飛び出した者が、今更阿容々々と路資がきれた、助けて下さいと、云はれた義理であらうか。伯父に助を求むるは、限りなく己を屈するのである。母に今の事情を打明けるは、徒に母の心を痛ましむるのみである。先辛抱、辛抱、辛抱する内には如何にか道がつかぬこともあるまいと、當もない事を頼みにして、僕は依然西内家の小僧をつとめた。併しながらまさに其れと打明けて言つてやられる次第では無いので、僕は幾回か執りかけた筆をまた擲つて、つい一回も家郷に便りをしなかつたのであつた。

（十一）

月日のたつは早いもの、故國を飛び出したのは、まだ昨日の樣に思はるゝが、最早何時か百日あまりも過ぎて、桃や菜の花の時節となつた。生溫き風が傳ふる「南無大師遍照金剛……」の聲、昨日も今日もぞろ〳〵と四國遍路の門前を通るを見るにつけても、吾も旅の身、圖らぬ事で此處に三月あまりも掩留の身となつたが、吾指す處は東京、其東京に何時行かれるかと思ふと、實に情無く、此方から便りをせねば、母も今頃は愼太郎は東京に着いて、最早何處ぞの學校に入つたことと思ひ入つて居るであらう、まさか此樣な處に來て此樣な身の上になつて居ようとは思ひもかけぬであらう、と帳面つけかけて茫然となることもあつた。

或日僕は主人の要を帶びて宇和島警察署に行くと、六尺ゆたかの赤髯蓬々たる、併し人相のいゝ西洋人が警部巡査を相手に何か頻りに――無論英語で――言つて居る。警部は一葉の名刺を手にしたるまゝ呆然として居る。巡査も皆茫然、啞然として、頻りに動く洋人の口もとを眺めて居る。蓋し一方は日本語が通ぜず、一方は英

語が通ぜず、分からぬ同士の問答に果しなく、双方困り切つて居るのだ。洋人は絶望と云ふ態で、頭を掉つてにや／＼笑ふ。警部は髯を捻りながら左右を顧みて、

「困つたなあ」と云つて、また、

「誰か通辯が出來る者は居らんかな」と頭を掻いた。

「彼先頭開業した醫者は如何ですか」と巡査の一人が口を出す。惟ふに宇和島唯一の外國語に通ずる人であらう。

「彼は昨日大阪に行つた樣です」とまた一人が云ふ。頼の綱は切れてしまつた。

「困つたなあ。此れから一人通辯の出來る者を置いて貰ふ樣に上申しなけりあならぬ」と警部はまた頭を掻いた。

僕はうつかり此一幕の見物に吾要も忘れて居たが、あまり氣の毒で堪らず、吾を忘れて洋人の傍へ寄り、「何の用ですか」と怪しげなる英語で尋ねた。洋人、警部、巡査は忽ち僕に集まつた。洋人は地獄で佛に會つた顏つき、流水の如く舌をふるつて、云々の事を述べる。元來吾英學舍の英學は不完全極まるもので、殆んど會話と云ふものもなく、Sir Isaac Newton 流の讀法でやつた上に、外國人などとは一度も對話したことの無い僕であるから、其話の要件は分からなかつた。併し接續詞も前置詞も無い單句斷片的英語で、問ひ返し、聞き返し、やつと其話の要點だけを摘んで見れば、此洋人はキルキー・ブラオンと云ふ米國の耶蘇教宣教師で松山から陸路此地の耶蘇教傳道師に要あつて來たが、生憎其傳道師が居ず、汽船で大阪に引かへしたいが、勝手が分からぬから周旋を頼むと云ふのである。

僕は是丈の要領を得るに大汗になつたが、警部巡査からは一廉の學者であるかの如く驚かれ、洋人も巡査に伴はれて汽船宿に行くとて警察署を出る時、僕の手を握つて、懇々禮を云つた。署内に居合はした者は皆、彼小僧が如何して異人と話が出來るか、汚い風をして居るが、此れぞ微服した天才であらうと思ふかの如く、頻りにじろ／＼僕を見るので、僕はきまり惡く匆々に要をしまつて出て行つた。

警察署を出ると、續いて年の頃四十あまりの立派な八字髭を蓄へた人が出て來て、

「君」

と僕を呼びとめた。

（十二）

呼びとめられて、僕は立ちどまつた。彼八字髭の無名氏は、

「失敬ですが、君は何方に御在です？」

僕は主人の名を告げた。無名氏はじろ／＼僕の容子を見て居たが、

「西内君の御親戚ですか」

僕は僕の姓名を告げ、一時其家に寄食つて居る者なるを告げ、猶自分の志望を告げた。

「道理で言葉が違つて居ると思つた。で、今暫らくは此地に御在ですか」

己が姓名を告げずによく人の事を根ほり葉ほり聞く男だ、と思ひつゝ、僕は、

「失禮ですが御姓名は？」と問うた。

「いや此は失敬、乃公は」と云ひつゝ懷中から紙入を取り出し、一葉の名刺を呉れた。名刺には兼頭一道と書いてある。肩書には縣會議員と署してある。

「併し此處では御話も出來んけれ、一寸來て呉れませんか」

斯く云つて無名氏――否兼頭氏なる人はと有る茶店に這入つた。僕も續いて這入る。茶を持つて來た老爺が、兼頭氏の前に平身低頭して敬意を表するを見て、名望家だな、と僕は思つた。而して僕を呼び立てた用の何事なるかは知らぬが、不安の念はやゝ薄らいだのであつた。

「君は英語を御やりですな？」
僕は先、外人との對話に大骨折つた不手際を思ひ出して、赤面しながら、「いや一向出來ません」
「餘程長く御やりですか」
「二年程やつたのですが、會話なんぞは些もいけないんです」
「一體如何して此地へは御出なすつた？」
僕は包む可き理由を發見し得なかつた。即ち國を飛び出した以來途中の出來事、雪中の難儀、西内氏に救はれて斯樣して居る次第の概略を物語つた。兼頭氏は熟々と聞いて居たが、
「では西内には何も別に係累は無いんですな？」
「今迄世話になつて居る丈です」
「如何です、英學教授をしては吳れませんか」
僕の胸は躍いた。まだ二年しか英學をせぬ僕、字引と頸つ引でやつとギゾオの文明史を嚙りかゝつた僕が、英學教授！
「併し教へるなんか到底出來ません」
「何、初學の者ばかりですからな。實は此地にも昨年まで中學校があつた、英語科もやつて居たんですが、經費の都合で廢校してしまつたもんです。彼方此方に英學をしたい〳〵と云つて居る者が澤山ありますが、教師が無い樣な仔細で――何皆どうせ讀本綴、書の連中ですからな――貴君が御承諾下さりや、西内の方へは此方から挨拶しても宜いが」
僕が心は大に動いた。人の患はこのんで人の師となるにあり、僕の英學教師も烏滸がましいが、併し讀本位なら教へられぬこともあるまい、殊に其樣すれば今の食客小僧の境涯を脫する譯で、假令今直ぐ東京に行く便とならざるにもせよ、また何か好機會をつくる手段にもならう、先方から西内へ掛合ふと云ふに到つては、願つたり叶つたりと云ふので、此は一も二もなく承諾す可きであると、斯樣思つたので、
「極初學の方ばかりならやつて見ても宜いですが、併し――」
「其樣して下さりあ此方も實に好都合で――何れ二三日中乃公が西内へ行つて、何かの相談をすることにしませう。何、其方の都合は如何でもつけるです」
僕は兼頭氏に別れて、足輕く西内家に歸つた。併し宇和島での出來事は何も主人に云はなかつた。

（十三）

三日程經つて、午後の日課に薪を割つて居ると、（雇人に薪を割らすれば屑が出ると云つて、從來薪割は主人の任であつたが、僕が來て以來何時か其任を讓られたのである）老婆が驅けて來て、
「愼太さん（丁稚の樣だから愼太さんと云ふことはよして吳れ、愼太郎と呼んで吳れ、と歎願しても老婆は直ぐまた愼太さんと呼んだ。併し僕は實際丁稚であつたから、其樣云はれても仕樣は無いのだ）愼太さん」
「何？」
僕はやゝ慳貪に答へた。其は老婆がまた愼太さんと呼んだし、且は薪が丁度節こくれで容易に割れなかつたからである。
「其れ所ぢや無えだよ、兼頭の旦那が今御前さんに會ひに――」
「左樣か」
僕は薪割斧を抛げ棄てて立ち上つた。
「御前さん兼頭の旦那知つてるかね」と老婆は不審の面地。
「知つとるとも」と云つた僕の顏には、乃公を薪割水汲の外何も出來ぬ者と思ふが、氣の毒なもの、と云ふ得意の色が蓋現れて居たのだらう。
「わたしやまた兼頭の旦那が來らつしやつたけれ、内の旦那に會ひにござらつしやつたかと思

や、御前さんに會ひたいと云はつしやるだもの――――

僕は其話の末を聞かずに、さつさと玄關の方に出て行くと、果然先日の美髯氏が立つて居た。座敷に請じて（主人は留守であつた）座定まると、兼頭氏は先日の話を持出し、皆が非常に喜んで居る事、都合がよくば直ぐ明日からでも始めて貰ひたい事、場所は中學校がどうせ明いて居るから其處でする事、時間は小學生徒なども來るから夕飯後早々に始むる事、宿所は自分（兼頭氏）の宅でも宜しい事、名稱は海南英語夜學會とでもつける事、（素晴しい名だと思つた）報酬は追つて相談する事等を話した。此等の條件は僕に於ても別に異存はない。今は唯僕の恩人に交渉するのみである。

やゝ暫らくして主人は例の通り大胴亂を眞田の紐で肩から下げ大木刀をついて、督促の巡回から歸つて來た。座敷に坐つた客の姿を見るより意外千萬と云ふ顏付。（あとで聞く所によれば、兩氏は互に一面の識あるも、其間は却つて冷やかなものであつた、）其意外は、兼頭氏の來意を聞くに及んで更に幾十倍したのであつた。

蓋し實は西内家に入用な僕になつて居た。自賛では無いが、僕の如く一心主家の爲めを思ひ、勞を勞とせず、十分に盡す秘書官丁稚は、西内氏が鐵の草鞋を穿いて捜しても左樣な寶山は無いのである。實利の爲めにも、家の用心の爲めにも、僕は實に有用の器であつた。其處で主人は僕を手放すを好まぬ。何のかのと云つて頻りに遮る。兼頭氏はまた兼頭氏で頻りに迫る。權利の義務のと云ふ言葉が彼の如く二人が間に行きかうて繰り出す議論の花模樣。西内が頑鐵を撫でて一分刈みに執念く論ずる、兼頭氏が八字髭を撚りあげ〳〵息卷あらく攻め立てる、忠ならんと欲すれば損をする進退維谷まつて居る臣愼太郎、呆れ貌のお婆、其には緣先の犬まで何事にかほえ立つる、あゝ若し僕に馬遷の筆あらば此一種風がはりの鴻門の會を描くのだが、所詮出來ぬとして、讀者の推量に任すのみである。

戰鬪は不意に遮つて、終局の利は漁人が收めるは昔から變らぬ相場。意氣盛なる兼頭氏の譟嚼る主人を追ひ立て〳〵済々と論じつめたが、結局は斯樣なつた。宇和島までは僅かに一里餘（僕には一向僅かで無い）時間は五時から八九時までとすれば、其前後に如何しても差支ない。（僕には大にある）其れで僕は依然西内家にあつて、其時間だけ宇和島に通勤する、と云ふ話。一日西内家に勤めて、夕方から一里の餘も宇和島へ通ひ、三時間勤めてまた一里あまりの夜道を歸る。それで先方の恩人は得々として居る。何と益のいゝ話ではないか。あゝ二大強國の間に一弱國がはさまれば、つまる所は雙方に其の半々を喰られて、馬鹿を見るのが弱國の常。保全の保護のと騒いでも實は利益の問題に外ならず、まさかの時には甘い汁だけ吸つて僕は勝手に棄下さるゝ、僕の身の上が恰も隣國支那の形勢ではあるまいか。

（十四）

實に迷惑千萬な話であるが、是非も無いと諦めて、早速其翌日から宇和島に通ふこととなつた。

今も忘れ難く思ふのは、初めて先生になつた其日の事である。初めての事だから、紹介の爲めにと、兼頭氏が僕を連れて、點燈頃から夜學會の場所に行つた。場所は前にも云つた通り中學校跡だ。其一室に入ると、ランプが煌々とついて居て約二十人あまりの壯幼さまざまの者が、話をやめて一齊に今入り來る僕等を眺めた。

「此れが菊池先生です」

と八字髭を撚つて、兼頭氏が一同に紹介すると「菊池先生」の髭の下から冷汗がずうと流れた。一同は一齊に目禮したが、中には微笑する者あり、睥睨する者あり、或顏は「小さい先生だな」

と云ふ樣に見えた、或職は一枚で英學の教授が出來るかしらん、と訝る樣に讀まれた。僕は電光の如く駒井先生が育英學舍に來て初めて就任の挨拶をされた事を思ひ出して、後れ馳せながら同情に堪へなかつた。僕の生徒は默然。僕も默然袴の襞（着ながしでは可笑しいから此を穿いて御出なさい、と兼頭氏が其子息の穿き古しの小倉袴を貸して呉れたのである）を撫でて居ると、兼頭氏は、僕を顧みて、

「如何ですな、教授は明日の晩からとして、今夜は組を定めたり何かの相談をなさつちや」

僕は此處ぞ先生の威嚴を保つ所と、小さい體を成る可く椅子の上に伸びあがり、肩肱張つて、屹とあたりを見廻し、

「如何ですか、諸君は最う餘程御やりですか」と云つた其聲は吾聲の樣では無かつた。

「如何かね、皆一處ぢやあるまい」と兼頭氏が言葉を添へる。

すると彼方此方に囁きが始まつて、やがてがや〳〵騷がしくなつた。aの字も知らぬと云ふ者があれば、第一讀本を少しやつたと云ふ者、第二讀本をあげたと云ふ者もある。今些強敵が出て來はしまいか、と僕は内心竊かに恐れて居たが、幸にして極上の英學者が第三讀本が初であつたので、僕は胸を撫で下ろし、尻口揃へて、甲、乙、丙の三組に分けて一時間づつ替る〳〵教へると云ふ事に定めた。

僕其翌日から僕は降つても照つても怠らず宇和島に通つた。一日西内旦那の祕書官、老婆どのの御勝者を勤めて、午後の五時過ぎになると、小さな麥飯の握飯を腰にして、足駄踏み鳴らして一里餘の道を夜學會に通ひ、三時間勤めてまた夜道をとぼ〳〵西内家に歸つて來ては夜番の役を勤める。馴るれば其も別段つらくもなく、初めて「先生」になつた異な心地も日數經つほど馴れて來て、教ふるに臆することなく、此小先生を取つて喰ひさうな大生徒も書の上では爭はれぬ權威に順うて行く樣になれば、初め笑はれた方言の相違も彼方の耳に立たなくなり、一月も夢の如く過ぎて其末日に當月分の報酬として金二圓を受取つた時には、千萬金を獲た樣に、僕の素人英語が此樣な大金になるかと空恐ろしい思ひもし、また此分なれば數ケ月働いて東京行の資金を獲ることも出來ようと、久し振に愁眉を開いたのであつた。

（十五）

月重なると共に、此旅烏の小先生と生徒の間にも自づからなる親しみがついて、生徒は續々ふえる。兼頭氏には世話甲斐があつたと喜ぶ、僕もしばし異郷の客たるを忘れて、こゝに雀の——自分では鵬の積りであつたかも知れぬ——翼を休めて居た。

唯一つ困るのは、恩人西内氏との關係が依然としてきれなかつたので、晝と夜で小僧と教師つ[illegible]り、主人の要を帶びて宇和島に出かける時なぞ吾生徒に出會して隨分きまりの惡い事も少なからず、此ではならぬと兼頭氏に最後の談判を持込まうと思ふ矢先きへ、天吾に幸したのか、西内氏の甥なる者が地から湧いた樣に現れ出て、其叔父の家に寄食することになつたので、僕はこゝに樊籠を出づるの機會を得た。嘸不機嫌であらうと思ひの外、西内氏も今は快よく暇を呉れた。一つは近來業務いよ〳〵繁昌して、殊に或大きな口の債件が首尾よくかたがついた節下であつた故かも知れぬ。僕は兼頭氏に相談して、せめての禮ごころに、木綿縞一反を舊主人に贈り、老婆には前掛一つ與へた。

僕首尾よく西内家を引拂ふについて、兼頭氏は頻りに吾家へと請じて呉れたが、僕は請うて中學校の一室を借り受けた。前にも云ふ通り中學校は廢校以來全く空屋同然の體となつて、僕等が夜學會に用ゐる外は、椅子テーブルも其ま

まに使用を待つて居ると云ふ有様。僕は其二階の一角を占領した。此處は二十疊位の廣間で、眞中に四疊半程の大きなテーブルがあつて、晝は机になり、夜は寢臺になる。蒲團は兼頭氏が周旋して呉れた。僕は土鍋二個と、七輪と、炭とり、炭、まつち、附木、の類を買うて、自炊を始めた。米はテーブルの抽斗にしまひ、醬油の瓶は石油瓶と相竝んで一隅に割據して居る。面倒な時は土鍋の飯に醬油をぶつかけて、かき雜ぜて食ふし。少し奢つた時は、鯛鰆(春魚の時節には鯛鰆の廉なこと夥しい、大抵五錢も出せば立派なものが一尾買へる)などを買つて來て、手荒く料理つて、腥い骨だらけの鯛飯を焚き、焦臭い鰆の煮付を拵へる。時には兼頭氏に夕飯の馳走に呼ばれることもある。生徒の家で氣を利かして、煮染佃煮の樣なものを持たしてよこす者もある。生徒とは大分親密になつて、夕飯に葱をテーブルの上で刻み、肉の臭を立てて居ると、早く來た生徒が莞爾覗き込んで、「先生、牛肉をおやりですか、お手傳しませうか」と云ふ調子だ。

實に「渡る世界に鬼はなし」、眞直に身を持つて人を信じ人を愛し人の爲めに盡すの心だにあるならば、恐らく敵地に入つても高鼾で寢られぬこともあるまい。國を出でてまだ半歲、僕はさまざまの事に會つて、こゝに初めて人情と云ふものを少し解した心地がするのであつた。

烏無き里の蝙蝠とやら、僅か一日の長あるが爲めに、此れから修行と云ふ聲を英語の教師と立てられ、眞面目に懇切に教へて呉れると云ふ評判でも立つたものか、吾れも〳〵と夜學會に入る者相ついで、中々一人でに手が廻り兼ねる位。果ては夜學進んで晝學となつて、午後の二時頃から入りかはり立ちかはりやつて來る樣になつた。生徒の種類は千差萬別。エー、ビー、シーを囀る横では、其れは犬である蟻は眼を持つと譯をつけ、第二讀本は接すカッケンパスの米國小史、スキントン萬國史は轟る小文典と云ふ樣な次第で、所謂應接に遑あらずとは此事であらう。月經つに從つて生徒の學力は漸々進んで、時々は菊池先生も困じることがある。誤謬を敎へて、あとで違つたと氣がついても、おいそれと白狀しては先生の權威に關るの虞ありと云ふので、其場は王安石流に非を遂し、餘程經つてそれとなく、時に彼は彼樣でも宜いが此樣解した方が穩宜いなどと胡魔化す術も覺えた。萬國史など、教へる間に、知らぬ字が出て困ることがある。其樣な時には生徒の流讀する間に、眼早くさきの方を見て、知らぬ字があれば一寸用ある體に見せて座を立ち、字書を繰つて何喰はぬ顏で儼然と座に復る。運の惡い時は一夜に三度も四度も菊池先生御中座をなさる樣な始末。實に馬鹿げた話だが、吾力に不相應な役を引受けては、其苦心實に譬ならざるものがあつたのである。

併しながら一月の勞は月末に報つて十分に償はれたのである。初一月は兼頭氏の方で會計をやつて呉れたが、其後は直接の交渉としたので、菊池先生は夜學會長、教頭、幹事、會計を一人で切つて廻すと云ふ話。月謝は級の高下に係らず、一人に付十五錢としたので、月末になると、銅貨銀貨天保錢などが僕のテーブルの抽斗に堆くなつて、生徒の多い時に大枚六圓乃至七圓の多きに達したこともある。其中から生活費小遣の二圓五十錢未滿を差引いて、餘は悉く郵便貯金(其頃は驛遞局預金)として置いた。月又月、貯金通帳を展げて金高の次第に十に近づき十を越ゆるのを僕は如何樣に嬉しく眺めたであらう。誤解し玉ふな、暫し西內家の小僧となつて居たので金溜めの味を覺えたのだらうなどと。其金を記入してある一行一行は、即ち僕を東京に――從つて青雲に導い

て行く段階では無いか。

　西内家を引拂うて中學校に引移ると共に、僕は初めて母への手紙を書いた。西内家に居る間は、幾回筆をとりかけても、如何しても書けなかつたのである。彼氣強い母、容易に人に頭を下げぬ母が、其愛する獨子の場所もあらうに金貸風情の手代小僧となつて居ると聞いたら如何な感じをするであらう、其を思へば僕は如何しても音信の筆がとれなかつた。併し中學校に移つてからは、聊か面目を恢復した心地がして、僕は幾行の涙と共に手紙を認めた。先づ去年の暮告げずして出奔し、出奔して以來今日迄一回の手紙も出さなかつた不孝の罪を謝し、國を出でて以來の一伍一什を細かに書き、此宇和島に來て雪の夜に西内なる人に助けられてから兼頭氏の世話で夜學を教へる様になつた次第を述べ、目下の所は體も壯健に人の世話にもならず月々幾分の金を剩して居る事を報し、併し此まゝ何時までも此處に英學教師で朽ち果てる所存は寸分無い事、節儉して金を積み遠からず東京に出る心算である事、此方の事は少しも懸念なく自愛して不肖が成業の日を御待ち下されたく云々と書いた。野田の伯父様には別に書状も認め申さず、母上より宜敷、伯母様にも、鈴江さんにも宜敷と細々書に書き添へた。

（十六）

　十日ばかり經つと、待ち焦れた母の返事が來た。手蹟を見れば宛ながら母に逢ふ様に、懷しさ嬉しさの込み上げて、否ながら不覺の涙を手紙の上に溢したのであつた。

　一筆申入れ候去る八日の手紙死んだ者の便りでも聞く様に嬉しく悲しく披見いたし候左候得者昨年の暮東京へ行くとの旨書殘し出でられ候以來今日は安着の便りがあるか明日は手紙が着くかと指を折り相待ち候ところ何時までたつても何の便りもなくあまりの事に東京の中島様(愼云、大一郎君を預つて居た叔母の事)に問ひあはせ候ところ少しも知らぬ由返事參り猶も其許のかねがね心易くせられし松村氏へも尋ねやり候得共彼方も思ひがけぬ由にて實に何處をあてに尋ぬるすべもなくあまりの心もとなさに愚かしき事とは知りながら巫、易者にまで相談いたし

　僕は耐へかねて机の上に突伏した。彼男まさりの、愚かしい事は蟲より嫌ひの母上が！

　何故僕は早くはがきでも出さなかつたのであらう？

相談いたしてもとりとめぬ事ばかり今は其運を天に任す外なしと諦めても夜は其許の病氣にて道側に倒れ臥されしと夢に見晝は人の足音郵便の聲にも胸轟かし實に情をそぐ思にて日々暮し居候ところ天道人を憐みたまひて思ひがけなく七月ぶりに其許の手紙とゞき實に〳〵胸撫で下ろし參らせ候其許にも昨年來さまざまの苦勞いかばかりと存參らせ候併し西内様兼頭様とやら人々の御親切に世話なされ兎も角も人さまの御厄介にもならず勉強致し居られ候段いかばかり嬉しう存上候過ぎし事は最早何とも申間敷候乍此上萬事に心をつけ身體を大切にし志をふり立てて出精の程祈入參らせ候申すまでも無く候得共其許は菊池家再興の重荷を負はるゝ大事の身に候へ者よく〳〵思案し菊池家の家名を損ずる様の事なき様呉々も心づけられ度く母が世の中の望と申しては只々其許の立身出世これ一つに候へば乍此上勉勵祈上參らせ候其許も不幸な時に人となり何角につけて思はしからぬ事のみ多く齒がゆく辛く思はれ候事も定めて多かる可く候何

を申しても女の腕一つ身の皮を剥いでも其許の一月の學資だに思ふに任せぬ母が心の切なさを酌みたまはば艱難辛苦にめげず屈せず名をあげ家を興し、古の名ある人々を手本と仰ぎ身に襤褸を纏ひても心の操をつゆ汚さず此上の勉強新上候申度事は山々候得共一時にかき盡しがたく一先これにて筆とめ參らせ候めでたくかしこ

七月十四日　　　母より

愼太郎どのへ

尙々別紙一通は兼頭樣一通は西内樣へ其許持參呉れぐも御禮申し述べらるべく候わが勞にほこることなく人の恩を忘るることなきは人につきあふ第一の心得にて候

野田家にても何もかはりなく安心いたさるべく候母も都合により近頃は表書の所に（愼云、封筒を見れば成程母の宿所は野田家でなく、矢張城下ではあるが野田家より一里近くも離れた士族屋敷の内であつた）移り近所の娘子供に手習や裁縫やら敎へなどしてくらし居參らせ候皆々親切に致し呉れ少しも不自由な事もなく候まゝ此方の事は必ずく氣に懸けられまじく唯々其身の勉強祈入候着物など嘸々不自由致さるべく唯今單衣仕立て居候間出來次第送り申候

かへすがへすも病氣せぬ樣呉々も用心祈入候又々かしこ

（十七）

手紙を拔き終れば、別紙二通、外にはたりと落つるを拾へば、一圓紙幣が二枚封入してあつた。

机に頬杖ついて幾回母の手紙を繰り返したか知れぬ。其につけても、氣がかりは、母が野田家を出でゝ、別に一家を構へて居ると云ふの一事。問ふまでもなく、僕が出奔の後、母と野田伯父の間が面白からぬ關係となつて、其爲め母が別居するに到つたのであらう。其も畢竟僕が渾ての原因と思へば、今更面目も無い次第、嘸何か不自由もあらうに、親なればこそ血を絞る樣な此二圓、吾には千金にも萬金にも代へ難きものを、勿體なしと押戴いて、暫し思案に沈んで居た。

二週間程經つと、通運が届いて、母が縫つた絣の單衣にまた涙を落した。而して僕は絶えて久しい野田伯父に宛てゝ一通の書を認め、過ぎにし事の詫を云ひ、僕は如何に背くとも、母をば何卒宜しくと懇々頼んだ。折返して返事が來た。其は勿論伯父の手蹟。母上には達者で暮して居られる、少しも心配するに及ばぬ、と云ふ意味である。僕は此返書が伯父の意を承けて書いたものなるやを疑つたが、兎に角一安心したのであつた。唯驚く可き一報は、鈴江君が東京に往つたと云ふことである。文面にして一向委しい事情は分からぬが、鈴江君は去んぬる三月下旬是非にと請うて修學の爲め上京したと云ふ。僕は一女子に先を越されたと思へば腹立たしくも、また鈴江君の勇氣を心地よくも思つた。

兎に角婦人ですらずんずん上京するものを、丈夫何時までか田舍にくすんで、蠹紙殘書の教師で居ようぞ。野水江南去不留、あゝ此翼が生えたらばと僕は未だ中々生え揃はぬ青翼をかきむしりたく思ふのであつた。

節は大暑に入つて、額から流汗が流れる頃の事、一日例の中學校の樓上で、眞裸になつて本を讀んで居ると、

「菊池君、菊池君」

と兼頭氏の聲がした。大急ぎで着物をひつかけ、下りて見ると、兼頭氏が一人の青年——年の頃は廿歳ばかり、眉の非常に濃い、色の少し蒼い而して沈着な風の青年——を連れて立つ

て居た。

「此が菊池君」と筆頭氏が青年を顧る。青年はづかゝゝと寄つて、微笑し、目禮した。此は筆頭氏の子息であつた。

筆頭氏の子息は名を道太郎と云つて、東京早稻田の專門校で政治科を修めて居る、と云ふことはかねて承知して居た。筆頭氏は、自由黨派の盛んな地方にあつて獨り改進黨の一雄鎭を以て自から期し人にも許される男で、行く行くは國會にも出ようと云ふ人物。從つて其長子をはるばる專門學校に入れたのである。此夏歸省する由は、さきに母の手紙を持つて筆頭氏を訪ふた時、聞き及んで居た。あへて相術をよくすると云ふ譯では無いが、大抵の人物は最初の一瞥で略見當がつくものである。小筆頭氏の相貌は最初から僕の氣に入つた。其は少しも浮華輕躁でなく、沈着な男々しい人の相貌であつた。

彼方は僕を如何見たのか、最初の微笑は何時までも消えず、初對面は十分か十五分の事であつたが、其が永き交際の基となつたのである。

（十八）

夜學何も大暑中は半休の態になつて、淋しさも一入である今日此頃、小筆頭氏の如き談敵を得たのは、非常に嬉しかつた。彼方も何が氣に入つたのやら、毎日の樣に遊びに來て「貴君」は何時しか「君」となり、「私」何時か「僕」となり「吾輩」となつて、果ては宅は暑くて騷々しくて眠られぬと云つて、泊り込んで行く始末。例の大きなテーブルを寢臺がはりに横臥びながら、明け放した窓にさし入る月を寢物語の燈火にかへて、僕が自分の身の上話さてはとりとめもない空想志望を打明ければ、彼は僕の望むまゝに東京書生の有樣、修學の模樣なんど知れる限りを細かに說き聞かせた。僕は齡よりも猶幼く、彼は年には餘程ませて最早立派な一人前の男、併し其間には自づから一片同情の脈が通つて、吾も隱さず、彼も僕を賴むに足ると思つたのであらう、色々家庭の事まで打明けて物語つた。則ち其父はもと儒教主義の懷から出た人であるが、負けじ魂が強くて、日新の文明に後るゝを嫌ひ、何でも人の先きに立つてしよう／＼とする事、母は繼母で兎角自身（道太郎氏の事）を邪魔にし父に惡するの傾がある事、父もまた自身よりは異腹の弟（正道と云つて當年十二の腕白者）を愛する傾向がある事、自身には已に許嫁の少女、名は冬と云つて後妹に當る當年十六の娘があつて自身が專門學校を卒ふると共に結婚する筈になつて居る事、併し自身は早婚を青年の一不幸と做る者で成る可く結婚を延して卒業後は洋行して見ようと思ふ事、其許嫁の少女の父母は死んで、祖父と云ふのが愛媛縣內屈指の金滿家、氣丈者で節儉家で七十五になつて冬も足袋穿かず召使が棄てる紙屑まで一々拾つてとつて置く人で、自身の父も內々恐れて居る事、などを物語つた。なるほど聞いて見れば、如何な處にも苦勞はあるもの、道太郎氏が年に似合はず大人びて沈着――寧ろ沈鬱な傾がある樣に思つたのも、一つは其家庭の空氣が然らしめたのかも知れぬ。僕は滿腔の同情を以て、其話に耳傾けたのであつた。

唯一つ同情が出來ぬのは、道太郎氏が耶蘇教信者であることだ。氏が初めて僕の二階に泊つた夜、いざ寢ると云ふ時、片隅に跪いて俯いたので、僕は愕然、

「如何しました、頭痛がしますか」

と差覗くと、氏は依然眠るが如く念を凝して居る。やゝあつて氏は微笑して立上り、

「菊池君、吾輩は祈禱をして居たのです」

「祈禱！ 何の祈禱？」

「吾輩は基督教信徒ですから」

「耶蘇教信者？」

と叫んだ僕の顏を莞爾眺めて、

一た樣です。――惡いですか」

僕はぐつと詰つてしまつた。實を云へば、僕は宗教の事に關しては全くの門外漢である。僕の母は迷信が大嫌ひ、西山先生も大嫌ひ、育英學舍とても同樣宗教なんど云ふことを全く度外に措いて居たので、宗教の二字は僕の耳に殆んど無意味であつたのだ。若しあるとすれば、其は愚夫愚婦を濟度する一の方便位に思つて居た。耶蘇教の如きも、素より一度も說教聞いた譯でもなし、眞面目に研究した譯でも無いが、耶蘇と云ふ字音に一種性惡い所があつて、其れから曾て國に居た時一度瞥ばかり長い下卑た人相の男が耶蘇の十字架にあがつて血がだら〳〵流れて居る圖を指して何か器械的に憐つぽいことを云つて居たのを聞き嚙り見嚙つて無性に可厭になり（今から思へば其は加特力か希臘かであつた）此宇和島でも町を通ると、時たま基督教講義所と看板かけたぼそ〳〵とした格子の內から聞くも滅入る樣な間のぬけた歌（讚美歌であつた）の聲がするのを聞いて其薄のろさ云ふばかりもなく、耶蘇教なんぞは畢竟丈夫のかゝはる可きものにあらずと斷定を下して居た。然るに其交や昨今の事ではあるが、吾れながらしつかりとした人物と尊敬する兼頭道太郞氏其人が、耶蘇教信徒の一人と聞いては、僕は且驚き且失望せざるを得なかつたのである。

「如何です、喫驚しましたか」と道太郞君は莞爾僕の顏を眺めた。

「尊父も御信仰ですか」

「否、吾輩の家では吾輩ばかりです。餘程骨折つて說いても、父は聽かないで、却て其れが爲めます〳〵吾輩を疎んずる樣になるのです。此れから明治の新學問を味つて政治家にもならうと云ふ者が、耶蘇教信者になつて如何する、と其樣何時も言はれるのです」

僕は中心大に兼頭の嚴君に同意したのである。

其れから道太郞君は、僕の爲めに所謂耶蘇教の大意を說いた。卽ち上帝の存在、靈魂の不朽、人間の有罪、基督の贖罪と神性、永遠の罰と永遠の生、信仰の意義、聖書の天啓、などを頻りに說いた。其中の一二は成程と思ふ所なきにしもあらずだが、槪して荒唐不稽、苟くも知覺ある男子が如何して其樣な事を眞面目に信ぜられるであらうか、と思ふ事のみである。僕は蹶起となつて駁論を試みた。（尤も恩人の子息に雷同するの阿諛に近きを思うて故意[illegible]烈の論鋒を用ゐたかもしれぬ、若い內は此樣なアテ氣が多くて困るのだ）何と云つたかよくは覺えぬが、佛教も耶蘇教も畢竟愚人を度する方便に過ぎない、日本には日本魂があり、儒教の道德があり、武士道があり、況んや人各々良知良能を有つて居るからは、安心立命何ぞ必ずしも宗教を待たん、若し宗教にあらずんば人は救はれずとすれば、雲の如き古の大人君子英雄豪傑は如何にして彼樣に赫々の行蹟を殘したか、天は自から助くる者を助くで己を救ふ者は己、聖書は讀まずも古人の聖經賢傳志士仁人の蹟を讀めば澤山、耶蘇如きを理想とせずも理想とす可き大靈魂は星の如く宇宙に輝いて居る、と云ふ樣なことを拉々雜々口に任せて說破した。

道太郞君は微笑して聞いて居たが、其夜は更に反駁もしなかつた。

其れから四五日經つて、或日道太郞君は、明日から蜂谷の老人（卽ち許嫁の少女の祖父）訪問の爲め松山に行くが、一處に行かないか、と云つて來た。幸ひ此四五日は夜學も休みになつて居るし、遠くもない處で旅費はいらないと云ふので、一も二もなく承諾して、明くる日未明に陸路をとつて出發した。

（十九）

中途に一泊して、翌日の夕方草鞋を松山の唯

有る豪家の奥座敷の縁先に置いだ。何でも店は油でも搾めるかして、油樽を夥しく積んであつた。僕等が突と店を通り貫けて、一寸した中門を潜つて、奥へ入ると、奥座敷の縁端近く、縫物をして居た色の淺黑い眼鼻立のはつきりとした十五六の娘が屹と見返つて、顏を赤くし、莞爾一禮して手ばしこく縫物を押やり、中庭の方を向いて、

「お祖父さん——あの、宇和島から入らつしやいました」と呼ぶと、

「應、道太郎さんが來たか」

聲を先きに立てて、生平の短衣一つひつかけた眉の眞白い鬚の蓄な大きな老爺が、草箒と塵取を左右に提げて現れた。

「や、道太郎さんか、此間から最早來さうなものと待つて居た。貴家でも何も異變はあるまいな。はい、はい、此爺も此通り丈夫、まだ中々急に片づきさうでもない譯、はははッ」

口で笑つて、其細い瞼眼は僕の頭から爪尖までぢつと眺めた。道太郎君が僕を紹介すると、蜂谷老人は頷いて、

「左樣か。其れはよく來なすつた、何有、邪魔なことがあるものか、此爺は若い者が大好きぢや。ゆつくり逗留しなさるが宜い」

此處へ先刻の娘が大きな金盥にゆすぎの水をとつて、手拭を添へて持つて來たので、僕等は足を洗うて上つた。

店には男女大勢使つてあるが、奥は老人と孫娘と、其娘の弟で即ち蜂谷家の家督であらう十歲位の逞ましい骨格の怜悧さうな腕白さうな男兒と、其れから道太郎君が叔母さんと云ふ四十あまりの女と、下婢と、此れぎりであつた。

暑かつたらうと風呂の馳走になつて、其れから逗留中の部屋と二階を示されて、やがて夕飯の膳についた。蜂谷老人は上戶と見えて、德利三本盡く僕に倒したが、僕等は無論一滴も飲れぬ方だから、彼娘の給仕で夕飯を濟した。話は種々の事に涉つた。其中老人は已に三本目の德利を空虛にし、三杯目の飯碗に注いだ茶をがぶがぶと飲みながら、

「道さん、卿が來たら一つ相談せうと思つて居たが、他ぢやないが、此れがな……」

と顋もて娘を指す。

「あらお祖父さん、今其樣な——」と娘が遮るのを、

「何、恥しい事では無し、宜いぢやないか」と打消して、老人は其孫娘の已に小學校をば卒へたが、當人は是非塲所へ出て今少し高等の教育を受けたいと切望して居る事、自身は教育と云ふものは金ばかりかゝつてあまり役にも立たぬ樣に思ふが、當人は今些教育がなければ道太郎君もゆく／＼何かにつけて迷惑するであらう（娘は顏を眞赤にして俯いた）から、加勢とならぬまでもせめて邪魔にならぬだけ場所へ出て修行がしたいと云ひ／＼して居る事を話し、「何せ卿に關る事ぢやからな、此は卿に相談する事だと思うて、實はまた別に相談もあり——」

話が段々僕の聽くを許さぬ範圍に入り込むので、僕は徐と座を立つて、さきに示された二階へ上つた。

末江君が東京へ行つたかと思へば、此處にも修行に出ようと云ふ娘がある。女、女と侮つて居た女ですら右の通りだのに、男と名のつく身を以て、此れは悶圖々々やつて居る所で無い、と二階の欄干に拳をあてて、今向うの物乾し臺の上にぶらりと昇つてござつたお月さまに、滿腔の憤慨を吐きかけたのであつた。

（二十）

松山逗留は都合三日間、此間には松山城趾を訪うて加藤左典厩の昔を弔ひ、道後の温泉に浴して半日の閑を消するなど、さま／＼の事もあつたが、中に就て尤も異つた出來事は、兼

頭君の案内で同地の耶蘇教會堂の、「奨勵會」とか「祈禱會」とか云ふものを見に行つたことである。僕は其會堂の門を入るより斯く思つた、此は乾度兼頭君が先夜の宗教論の返報に、其となく僕を此處へ引張つて、餘所ながら耶蘇教なるものの働きの一端を見せるのだな、眉に唾つけて居なければならぬと。

僕等が入つた時は、可なり大きな會堂に人が充ち滿ちて、所謂牧師なる者であらう、三十恰好の黑眼鏡をかけた溫厚な紳士が祈禱をして居た。兼頭君は無論牧師を識つて居るが、僕と一處に群衆の最後に坐つた。程なく牧師は祈禱を終へて、「天地の主なる父よ、此事を智者達者に隱して赤子に顯し玉ふを謝す」と云ふ聖書の文句を題として、細い聲で諄々と話し出した。其を聞き聞き一座を見渡すと、大方は社會の地位から云へば中以下の人、智識の程度から云へば牧師が讀んだ聖書の文句に所謂「赤子」と云ふ可き連中で、肴屋であらう魚臭い男もあれば、紺屋であらう兩手を藍染にして居る者もある。其祈禱を聞けば、「天に在す在天の父よ」の「其皆の御馬前に討死する」のと抱腹絕倒す可きことの限りを平氣に言つて居るが、併し其無學其無識にかゝはらず、上帝の外は人にも頭を下げぬ毅然たる所が自づから容子にあらはれて、其れで和氣藹々として居る。祈禱の中間に四十五六の沈鬱な顏をした大男が立つて「懺悔」とか云ふものをしたが、其時兼頭君は窃と僕の耳に口つけて、彼男は三年前まで此界隈に名だたる惡黨の首領であつたが、或冬の夜質に入る可き古着を小脇に賭場を指して行く途中、不圖燈有る格子先きに今の牧師の說教の漏れ來る聲に耳立てて、其夜から翻然と心を改め、今は立派な菓子屋となつて人々の尊敬を受けて居ると云ふ事を告げた。其れから其男の云ふ事を聞けば、其は會員の家の一小兒が死去の事を報じたのであつた。其小兒は當年九歲の女兒、五歲の歲から非常の難病に罹つて、今年まで殆ど五年間始終床の上に苦しみ通しであつたが、終に一回も不足を訴へず、終まで明らかに知覺を持して、讚美歌を歌つて、微笑して永き眠についたと云ふ事である。大哲ソクラテスが毒盃を手にして從容として靈魂不死を說いた話は聞いて居るが、當年九歲の何も知らぬ一病女兒如何なれば天命に安んじて呟かず、秀れた人傑も往々にして惑ふ死の前に微笑して、希臘の聖人が言を以て示せし所を殆んど身を以て證據立てたのであらうか。一條の光線がぱつとさして來たと思へば、また忽ち消え去つて、始めて吾心の暗きを感ずる樣に、僕は一種異樣の煩悶を覺えたのであつた。

「あつまり」が濟むと、兼頭君は僕を伴うて牧師——志津[illegible]と云つた——の宅を尋ねた。側へ寄つて見れば、少しも說教者の風に無く、直ぐ人に「叔父さん」と呼び寄られさうな人物。書齋には和漢洋——洋書が尤も多かつた——の書籍を夥しく積んで、彼方の間からは子供の笑聲が聞えて居た。

兼頭君の紹介が濟むと、牧師はさら〳〵と隔て無い調子で色々の事を尋ね、まだ長く宇和島に居る積りか、何處かの學校へ行く心算は無いかと問うた。僕は無論東京へ行く積りですが、併し——と口籠る。兼頭君が口を添へて、僕が今夜學會を教へて學資を作るに骨折つて居る事を話し、僕が如何しても他人の厄介になるを好まぬと云ふ事まで語つて、「吾輩も其れで無いと一臂の力を致すのですが」と毎常其胸中に往來して居ることを思はず漏した。牧師はぢつと考へて居たが、礑と膝をうつて、

「是非今すぐ東京で無くも宜いでせう、普通學なれば何處でやつたつて同じですからね、關西學院に入つては如何ですが、彼處なれば——」

と其學校では、英語は餘程進歩して居り、且つ貧生には例へば室つき、門番、教室の掃除などをして學資を得る方法もあると云ふ事を話した。僕の心大に動いた。併し音に聞く關西學院は、宗教學校であれば、師範學校の卒業生が教鞭を執るの義務ある樣に、卒業後傳道師になる義務は無いかと尋ねると、牧師は笑つて、其處には別に神學科と云ふものがあつて傳道師牧師を養成するが、普通科には其樣な事は無い、無神論者も隨分居ると答へた。僕の心ます〳〵動いた。目指す處は東京だが神戸まで行けば已に半途、此四國に愚圖ついて居るより其方が餘程得策ではあるまいか。

結局、牧師は僕の爲めに僕の學校の地位のあきがあるや否やを學校に問ひあはして呉れることにまとまつた。其夜は別に宗教上の話もせず、唯牧師が探し出して呉れた關西學院の古い規則書と、新しい新約聖書を貰つて其宅を辭し、而して其翌日僕等は檜谷老人や龕頭君の許婚（彼女は大阪の梅花女學校と云ふに九月から入學することになつたさうだ）や弟の腕白君に別を告げて三津から船で宇和島に歸つた。

（二十一）

兎に角松山行は僕にとつて今の境遇を脱して進歩の道に復へ、其緒を與へたのであつた。而して僕に劣らず其事を喜んで、賛成して呉れたのは、道太郎君である。「吾輩は其れで重荷を卸した樣な心地がする」としば〳〵言つた。

大龕頭氏にも、毎夜やつて來る學生にも、無論其事は默つて居るが、母には未だ明瞭とは分からぬが、都合によりては近々に關西學院に入ることになるかも知れぬと云ふ事を報じ、其學校の程度、學資の都合も略說明して置いた。折返して母から返事が來た。其は入學の運びになるのを喜んだ手紙で、いよ〳〵其事となれば、衣類初め入用の物もあるであらうから、如何ともして送ることにすると云ふ意であつた。併し學校が學校だけに、僕が耶蘇教信者になりはすまいかと餘程心配した容子があつて、卿も已に十七の若者となつたれば、事毎に母が干渉する譯では無いが、最初の志を喪はぬ樣に、一時の都合や當座の感情の爲めに魔道に踏み込まぬ樣に隨分と注意をして呉れ、と云ふ意味が繰り返し繰り返し書いてあつた。

愈彼學校の口があるか無しかは、兎に角松山の志津牧師から返事の手紙が來なくては分からぬ。また其返事は九月に入らなければ來ぬ（關西學院の秋期は九月中旬に始まるので）筈であるが、併し其まで安閑として居るべきで無いので、僕は入校の準備を夜學を教へる片手間にやり始めた。規則書を見ると、普通科が五年、自分の學力を計るに少なくも三年には入れる、唯難しいのは會話、更に怪しいのは數學だ。幸ひ道太郎君が、餘程其方には心得があるので、僕の爲めに數學教師となつて呉れ、僕は毎日毎日トドハンタアの代數に幾升の油汗を流したかも知れぬ。會話に到つては、道太郎君もあまり長じて居ないので、此れから少しなりとも會話の舌を自由にする爲め、二人の間は決して邦語を用ゆ可からずと云ふ規定を設けたにも拘らず、二言目にはもどかしがつて直ぐ持前の國なまりを出すと云ふ始末。終には其方は中止として、專ら力を數學の方に用ゐた。宗教論も彼後は一寸泣寢入りの姿となつた。志津牧師から貰つた新約聖書はテーブルの抽斗に入れて居るが、馬太傳山上の說教を讀んだ丈で、此も一時中止とした。打明けた所が、宗教よりも學問が僕には急務に思はれて、今から學校に入らうと云ふ急がしい體に安心立命所かと云ふ樣な淺薄な俗な幼稚な考が僕の心を支配して居たのだ。

併しながら人品の說教は口舌の說教よりも雄

辯で、心靈の耳は肉の耳よりも聰いものである。人の心の田地に落ちた種は早かれ晩かれ決して生えずには居らぬ。庭を歩いて、此れは不思議、此處に梅の木が生えた、植ゑもせぬに、と驚くだけが愚な話、風が吹いたか、鳥が落したか、抑も内の腕白が投げたのか、何時の間にかころんだ核に土が被つて、何もない〳〵と踏む下にちやんと未來の梅の大木は出來て居るのである。松山の會堂でちらりと射した光は、消えた〳〵と思ひの外、數學に汗を流し夜學に欠伸を噛みくだく忙しい中にも何處やらに温まりを殘して居たのであらう。而して道太郎君其人の如きは、實に僕の爲めに不言の傳道者となつたのだ。其潔白な心、沈着な氣質、眞摯の情、要するに其一見人を射るの異彩なきにもせよ、久しうしていよ〳〵愛す可く敬す可き人品は、へろ〳〵傳道師の億言萬語にまして――僕は其と自覺しなかつたが――僕の心耳に耶蘇教證據論を吹込んだ。

九月の初旬道太郎君は東上の道についた。其前々夜は、夜の白むまで僕の二階で炒豆を噛りながら、さま〴〵の事を語り明し(僕は松村の事を道太郎君に話し、色々の言傳をした、松村には去年の暮から一度も音信をしなかつた)出立の其日は、埠頭まで送つて、手を分つた。埠頭に立つて道太郎君を載せた汽船の煙を殘して出で行くのを目送つて、僕は思はず涙にくれた。彼俗歌にも云ふ「殘る煙」が實に恨めしく思はれた。思へば、涙は戀の花にのみ宿る露であらうか、僕は知らぬ、僕は唯何故か涙の禁じ難かつたのである――知己の涙とでも云ふのであらう。

（二十二）

道太郎君が出發すると程なく待ち焦れた志津牧師の手紙が來た。顫ふ手に封を披いて見れば、確たる事は其期に及んで見ねば分からぬが、入學試驗が無難に通りさへすれば、一人位は如何とか都合がつくであらうと云ふ事で、而して入學試驗は十日から始まり、學業は十五日から始まる筈になつて居るから、一刻も早く出發するが宜いと云ふ意味を書いて、關西學院の幹事井原と云ふ人と教師淸水と云ふ人に宛てた都合二通の添書を封入してあつた。

志津牧師の厚意で、兎に角其方の道は開けた。唯試驗――此が如何であらうか。無事に通れば可、通らなければ更に困難から困難に移る樣なもの。併しながら今は如何か斯樣かと躊躇する場合で無い。背水の陣と出かけなくてはならぬ。

僕は早速出發の準備にかゝつた。貯金通帳を覽げて見れば、貯の金は十三圓となにがしになつて居る。此は僕の額の汗を絞つたもの、之を出すのは實に辛いが、併し旅費と其れから入校――若し試驗が通るとすれば――の費用は此れから支辨せねばならぬ。母には試驗が濟んだ所で何も報ずることにした。其れは、愛する母に旅費萬端の心配をかけるのも辛し、萬一試驗が面白くない時を慮つたのである。

併しながら此處に僕は道太郎君の如何に僕の事を思つて呉れるかを知るの機會に遭遇した。兼頭氏を訪うて、恐る〳〵であらうと思ひながら、出發の事を相談――實は報告――すると、承知して居たと云ひ貌に頷いて、送別――と云ふも烏滸がましいが、所謂送別の馳走をして、其れから熨斗つけた一封を出した。厚意にはさる事ながら、謂れ無い餞別を受くるのは――と例の我慢が出かゝつたが、不圖見れば、其一封の片隅に道太郎君の名が書いてある。あゝ僕如何に己を潔うするに餘力を殘さぬとは云へ、斯くも自分の事を思つて呉れる親友の情を仇にしようか。僕は膝を折つて、兼頭氏に謝した。

僕の夜學生は、僕の出發近きにあるを聞いて、一方ならず驚いた樣であつた。「先生は行つておしまひなさるさうですな」と云はれて見れば、先

生も嬉しいやうな悲しいやうな滿足なやうな濟まぬ樣な心地がして、しんみりと別を告げたのである。愈出發の前日、其内の重な二三人が何か紙包に水引かけたものを二つ、餞別の印として持參し、「其樣な事をしなさつては困る」と云ふのを、無理に押つけて逃げてしまつた。開いて見れば「カステーラ饅頭」を一包に、一方のは表附の駒下駄であつた。饅頭の方は兎も角も、駒下駄の方は勿體なくて氣恥かしくて足には穿けず、と云つて折角呉れたものを棄てられもせず、餘儀なく荷物の中にしまひ込んで、宇和島を穿き古しの薩摩下駄で出たのであつた。

荷物と云つては風呂敷包が唯つた一つだ。否、唯つた一つ所では無い、去年の暮此處に渡つて來た時は實に無一物であつた。雪の夜道に凍えては此命すら無い所であつた。其を拾ひ上げて、兎に角今の身の上となり、有形には風呂敷包、無形には幾十人の好意を持つて此處を出る樣にならしめたのも、元はと云へば彼西内氏のお蔭である。僕は煎餅一袋持つて、西内家に暇乞に行つた。門を入ると、例の「赤」や「黑」や「斑」が鬨の聲をあげて突貫して來たが、僕の顏を見るよりむら〳〵と走りかゝつて手と云はず足と云はず顏までも舐めまはす。其騷ぎに、水を汲んで居た彼婆がひよいと覗いて、

「おゝ愼太さんか」

と呼んだ。愼太さんと呼ばるゝのも此が終と思へば、格別腹も立たなかつた。

「愼太さん、卿さんまあ一寸も顏見せんぢやねえか」

「忙しかつたもんだからな。婆さん、今日は暇乞に來た」

「暇乞つて何處え行きなさるね」

「上方に」

「上方！　本願寺さまか、お伊勢參りかね」

憐む可き老婆よ。卿と吾とは最早全く別世界に住んで居る。

「學問に行くよ」

「學問？　卿さんは最早師匠してなさるぢやねえかよ。まだ學問するのかよ」

「然、學問には上の上があるから」

問答半に「菊池ぢやないか」と奥より聲をかけたのは舊主人の西内氏である。入つて見ると、相も變らず、帳面を前にして、十六盤を彈いて居た。（婀とやらは何處へ行つたか見えなかつた）

僕が來訪の趣意を聞いて、

「よく金が出來たなウ」

僕は彼學僕の事を話すと、舊主人は頷いて、已にしば〳〵聞き古して居る西内立身談を新に說き聞かせ、辛抱は立身の本、節儉は立身の綱、金と云ふものは決して粗末にしてはならぬ事を繰り返し說いて、果ては長い間奥に入つて居たが、頓て塵紙半枚に金貳拾錢包んで「草鞋錢」と云つて僕の前に置いた。意外の賜物に僕は驚いたが、終に感謝して收めた。而して主人も老婆も好意たら〳〵是非飯を食つて行けと、老婆が僕の所好と信ずる所の彼恐る可き魚のぬたを强ひるので、僕は涙ながらに其幾皿を鵜呑にして、主人老婆竝に犬に門まで送られて日のくれぐれに別を告げた。

九月七日の夕方、僕は兼頭氏初め埠頭まで送つて來て呉れた夜學會諸子（送らるゝ先生のまだ矮小かつたこと！）に別を告げて、大阪行の汽船に乘つた。夕風そよぐ甲板に立つて、後になり行く宇和島を眺めると銀河につゞく墨畫の陸に燈の影ちら〳〵と——夢の樣に美しい處であつた。

五の卷

（一）

四ケ月過ぎた。

宇和島の汽船の甲板で吾白浴衣の袂をそよがした涼しい夕風は今六甲颪の骨身に沁む時候となつた。僕は吾三階の室の西窓に倚り、入り日を追うて飛び行く烏の群を目送つゝ向見ずに故國を飛び出した去年の今頃を想つて居た。窓の下は一面の枯芝生に砂利道が縦横について居て、二十四五から十五六迄の青年が、今しがた食堂を出て、彼處にぞろ〳〵、此處にがや〳〵賑やかな群を作つて居る。其向うには長方形の二階造りの窓の何個も明いた建物が市松に並んで居る。此處は何處？ 無論關西學院の寄宿舎だ。僕は終に關西學院の生徒――第三年期生となつたのである。

四ケ月前宇和島から來て、初めて此處を覗いた時は膽を潰した。（田舎者ではあつた哩）神戸を少し山手に離れて、六甲摩耶の諸山を背後にいたゞき、淡路島を右手に見て、玩具の舟を浮べた盆の様な攝津灣を一日に眺むる其位置すら已に過ぎたものと思はるゝに、教場、寄宿舎、食堂、禮拜堂と幾棟となく建て續して、此が學校とは此、勿體ない位。其後一生が京都の同志社と云ふ學校は此處よりも立派で、東京の大學はまた同志社より十倍立派だ、と云つて聞かした時は、僕の膽はまた〳〵潰れた。あゝ潰れ易い膽ではあつた哩）此様な所で學問をする學生は皆學者、教師はすべて大學者、校長は聖人であらう、僕の様な田舎漢は都の手ぶりとか足ぶりとかも知らぬ身なれば、到底驥尾にも粹にもすがれぬだらう、と豫め落膽したのであつた。

幸ひ志津牧師の懇切なる紹介状があつた爲め、幹事も清水とか云ふ牧師も細かに世話をして呉れ、其れから羅生門より倍恐かつた試驗の難關も、一つ過ぎ、二つ通り、僕の汗搾器械と稱して居た彼代數も兎も角通り、平均して七分と云ふ出來は、吾ながら出來したと云つて宜いかも知れぬ。唯心痛して居たのは、英語（讀む方では無い、話す方だ）であつたが、意外な事もあればあるもので、會話の試驗場に出て待つて居ると、軈て閾を跨して入つて來た試驗係の西洋人と、顏見合はして愕然、此方が「あゝ」と云へば、彼方も「おゝ」と呼び、試驗は其方のけで先づ握手する始末。此れは別人ならず、曾て宇和島警察署で僕が不十分の通辯をした彼米人キルキー・ブラオン氏であつた。小説の様な奇遇だ。其れから今度此校に入學する様になつた次第を、先方は問ふ、此方は答へる、やゝ暫くして試驗にかゝつたが、僕は意外の奇遇に力を得て大に放膽的英語を振り廻した。無論沙汰の限りの成績であつたが、ブラオン氏は破格の七點を惠み、加之入學の上は一週二回宅に夜話に來ないか、其樣すれば英語の進歩に餘程效力があるであらうと云ふ話をした。實に非常の厚意で、僕は心から感謝したのであつた。

兎に角試驗は濟む。月謝束脩を納めて、僕は第三年級に編入された。其れと同時に幹事の斡旋で、教場のお番頭に任ぜられた。即ち教場の内二室丈、朝夕一回づつ掃除する役を命ぜられたのである。併し其月給の四圓なるものは、月末にあらざれば入らぬので、束脩月謝書籍及粗末千萬の古テーブル古椅子ランプなどの雜用品は、すべて兼頭君の餞別にかゝる金圓の中から支辨せられた。實に此回の事は、もとを云へば道太郎君初め諸氏の盡力によるので、僕は入學濟むと先づ母に報じ、次ぎに道太郎君及志津牧師、兼頭氏、さては西内氏におの〳〵禮狀を出したのであつた。

（二）

四ケ月經てば、學校の様子も大略腑に落ちて、僕も先づ關西學院生となり了したのであつた。

西山塾、育英學舍の其に引易へて、學科は整頓して居る、教員は完備して居る、教場が立

派で、生活便が比較的に備はつて、要するに雲泥の相違である。而して西山塾が勤倹力行を旗幟とし、英學舎が自由の大旆を掲げた如くに、此學校は耶蘇教を精神として居る。校長片岡氏は仙臺の藩士、維新の際に錦旗に抗して白河口に血戰し、其後明治政府に對して已み難い對抗の一念は激烈なる自由主義を執らせ、身命を擲つて國會開設の請願運動に盡力して居たが、一朝翻然悟る所あつて耶蘇教を信じ、爾來一身を捧げて青年の教育に從事して居ると云ふ事である。左れば其耶蘇教には一種武士的有志家的精神が加味して居て、外國宣教師などは随分不安の眼を以て眺めて居たが、青年は喜んで其嚮導に從ふと云ふ風であつた。

已に耶蘇教を以て精神として居る學校であるから、朝は授業の始まる前に必ず禮拜の式があり、日曜は無論安息日となつて居る。書生のテーブルには大方小形の新約聖書がのつて居、夜十時頃竊と玻璃窓から覗いて見れば、必ず一室に一人か二人は椅子に跪いて就寢の祈禱を捧げて居る。本科の外、別に高等英語神學科、また邦語神學科なるものがあつて、本科生は其邦語科を呼ぶに反故科の諢名を以てして居たが、其れでも耶蘇教の精神は校内に充ち滿ちて居た。

凡そこゝに一の範圍を支配する大勢力があれば、其處に僞善的服從者と無稽の逆流者を生ずるは必然の勢である。左れば關西學院にも、耶蘇教全盛については、随分人知らぬ花柳の遊をしながら日曜には殊勝らしくつまらぬ說教長々しい祈禱に耳傾け、酒臭い口を竊と拭つて讃美歌を口ずさむ者もあれば、耶蘇教を世渡りの蔓と縋つてはパンが欲しさに「人はパンのみにて生くるものにあらず」と誦する者もあつた。また一方には奇を衒つて故意耶蘇教を睥睨し、學生が聖書を廣ぐる横で、小三金五郎娘節用を朗讀し、昂然として無神論を唱へ、男の癖に西洋人の糟を舐る意氣地の無い奴等と鼻尖にせゝら笑ふ者もあつた。僕の如きも、素より其中に入つたからと云つて決して雷同はすまい、心にもない盲從はせぬ、獨立の精神、獨立の精神と何處までも自己を持して行く覺悟は片時も胸中を去らなかつたが、其と云つて無暗に輕躁の擧動をして騒ぎ立てるのも能であるまいと、耶蘇教には中立の態度をとつて、學藝の方に全力を注いだのである。

學科の割合に少なくも、僕は中々繁忙であつた。其は他の科は兎も角も、數學と其れから英語會話は未だ素養が足りないので、人二倍の骨が折れた。午後十時は滅燈就寢の時刻としてあるので、僕は十一時頃から竊と起きて、豆ランプを持つて押入れの中に這入り、火光の漏れぬ様にして、幾何と組討をした。ブラオン師の好意で、一週二度の夜話は、雪が降つても雨が降つても必ず通つた。其れから例の掃部頭の役目が毎日毎日朝夕に少なからぬ時間を殺いでくれる。西山塾で鍛はれ、宇和島の西内で錬つた體は、其位の勞は物の數とも思はぬが、何處の社會にも自力で食むを恥辱の様に思ふ坊ちやまが絶えぬもので、僕等が左手に大きなばけつを提げ、右に長柄の棕櫚箒を持つて、朝な夕な教場に通ふのを、母の懷から直ぐ學校の搖籃へ渡されて忘れて居ても月々八九圓十圓の爲替が飛んで來て、尚其上に暑寒の新衣は勿論所嗜の食物までも取り寄せて金が足らぬ〳〵と郵便毎に云つて遣るお坊さま方が御覽じて、眼で笑ひ、顋でしやくり、背で指すに、取りあつては詰らぬと知りながら時々は腹も立つて、ソクラテス夫人では無いが雜巾の汁を頭から浴せて力行宗の洗禮を施し、長柄の箒押とりのべて其脾弱な胴腹へ横薙にして呉れんかと焦つこともあつたが、また蟲を殺してぢつと堪忍の齒を喰しばつた。併し人の鬱憤は何處にか漏れずには居らぬ。僕

の憤りは學藝の方に漏れて、墓地に勉強したので、冬期の試驗には三十幾人の頭を飛び越して、二番と云ふ成績を得たのであつた。

（三）

學校の生活は、昔も今も何處もあまり異らぬもの、同じ月日も將來の眼鏡には永く、過去の眼鏡には短かく、日とよみ、週と繰り、月と算へして行けば、一年の暦は夢の間に大晦日まで見てしまふのである。

月曜日の朝の起きにくさ、（一週勉強の初日であるから）金曜日の夜の快よさ、（關西學院では、日曜を心靈の安息日、土曜を肉體の安息日として、一週五曜を勉強週としてあつた）此は強ち僕ばかりでは無い、皆其樣言つて居る。愉快なのは、一日では晩餐後、一週では土曜の一日である。一日の課終り、夕飯が濟めば、滿校の生徒三人、五人、打連れて學校の周圍を運動するのである。而して往復には必ず東の居寮と西の居寮の間の廣場に寄るので、此處は自然學生の「フオラム」になつて、此處に十人、彼處に二十人、重立つた學生を中心として、宗教政治文學の得失から近來賄の良否に到るまで、何角の議をする。（發言自由、冷評も自由）去就隨意と云ふ結構至極の小議會、學校の輿論は大抵此處で卜せられる。夏の新月の夕など白浴衣黒絣白此處に其處に環を作つて、敎場の大時計が八時を報ずるに、本意なく、散り行くこともある。夜は殊に默讀を勵行してあるので、幾個の居寮の窓には讀書の燈あか〳〵と射して居らうとも、人無きが如く靜かだ。唯戸外は必ずしも此限にあらずで、冬季寒月晝の如く冴ゆる夜などは、豪傑がつた青年が雲井龍雄や頼三樹の悲歌を高らかに吟ずる聲の、宛ながら胡笳の如く霜夜の空に震うて、幾多游子の腸を斷つのである。

夜は十時には如何なる事があらうとも、燈を消し寢に就くの定めで、十時半頃になれば、全校寂々として蟲音と月のみ醒め、三百餘人の無魂は鷄と玻璃窓を拔け出でて、或は太政大臣（明治十八年の官制改革前だから）になり、落魄れて學校の小使になり、三井三菱の婿になり、橋下に薦着た淑女と結婚し、或は借金の劍の山に角が生えた友人の鉛筆で追ひ上げられ、或は母の懐に歸省して飽くまで餡ころ餅を喰ひ、試驗に落第して唸り、卒業式の洋服が出來て笑ひ、三百人の夢は即ち三百種、一々記せば筆が禿び、「成功」の女神に願かけたらば、娘一人に婿八人と云ふものを、三百人の婿樣は、と女神も美しい首を捻り玉ふ外はあるまい。

朝寢日、洗濯日、閑食日、入湯日として土曜日は聖別されて居る。明治の宰予が朝九時十時頃まで床にもぐつて、惡戯友達に蒲團剝がれて大にあわてるも此日。韓信が貧に漂母の勞まで兼帶とは何たる因果ぞとこぼし〳〵覺束ない手ぶりで綿入の丸洗と云ふ新發明の洗濯をする秀才が井戸側に集ふも此日。其れから例のあいゝだ、は室毎に行はれて、さま〴〵の使命を帶びた大使、公使、代理公使の膝栗毛は下町の道に絡繹として、蜜柑、煎餅、豆、餅菓子の輸入夥しく、えらい靜かなこと、お留守ださうなと部屋の中を覗いて見れば、お靜かな筈、皆猿轡を召して居るのである。竹の皮蜜柑の皮乃至豆の皮は土曜に於ける關西學院の産物であるとは、何處の地理書に出て居るのかしらん。

併し土曜日の本色は、其遠足日たるにあるのだ。晴れた土曜の朝、學校の門に立つて居ると、足が三本もはひる樣な大きな白ずぼん下をはいた、或は季節によつて赤青毛布を被つた、大のステッキを振り廻した青年が三々五々西東を指して欣々と出で行くを見る。夕方門に立つて見ると、此等の連中が足は重く、財布は輕く（もとより輕く）草臥れて、併し愉快らしく、歸つて來て井戸の水で顔や手足を洗つて、食堂

に入つて、賄方の恐慌を起すを見る。實に攝播の春はよく、秋には猶好く、風景は面白く、歴史の懐古は猶面白く、羊子の墮涙碑、九郎、無官太夫の須磨一ノ谷、明石舞子布引箕面、生田の森、尼ヶ崎大阪京都や奈良の大詰足は除いても、だゝつ子の高平太や、太つ腹の等持院殿や、正直小氣の左中將や、腕白の藤吉や、凡そ日本の歴史で尤も興味ある時代の興味ある事蹟は、方數里の間に取りこめて、好歴史を妙風景に入れて見るは、水晶の盒に金剛石を盛つた樣に、春朝秋日、笻を曳く毎に、僕の心を躍らして、彼久太郎先生をして「分明千年攻守勢、著論誰逐賈誼風」と吟ぜしめたインスピレーションは、百尺の高樹を動かす風がまた其樹下の一草を動かす如くに、僕の心を動かして、僕をして今迄にない史的趣味と藻思とを涌出するを覺えしめた。

（四）

土曜日が遠足日なら、金曜の夜は演說夜である。演說文章は青年の氣焰を吐く二大煙筒、關西學院では學生の手になつた一二雜誌、無論筆寫のがあつて、月に一回位新聞雜誌閱覽室に出るのであつたが、演說に比すれば微々たるものである。金曜の朝飯後、食堂の外の板壁、此板壁は學校の揭示場で、賄退治の檄文、書籍賣却の廣告、昨夜ダアキンの進化論を先生に聞いて今日堂々と駁論をする一夜學士の講演の引札、十傑投票結果の披露、其冷評など、凡百の公掲文字は此處に張られるのを見ると、曰く、蒼生會、興風會、曰く何會、何會の名を以て「嗚呼東洋文明の開拓者は誰ぞ」の、「一涙を揮つて吾滿天下の同胞に訴ふ」のと驚く可き演題を辯士の名と共に揭げてある。期に及んで窃と其場を覗いて見ると、テーブルにランプが一つ置いてあつて、廣い教場に聽衆が無慮十數名、此はと一驚を喫するが、其僅少な聽衆に對して滔々と演說する辯士の熱心と雄辯にはまた再驚を喫するのである。金曜の夜、庭に立つてぢいと聞いて居ると、彼處では「諸君よ」、此處では「ノオ〳〵ヒヤ〳〵」盛なものだ。

西山塾、育英學舍、其生徒は重に士族の一階級、範圍はたかが一縣内に限られて居たに引易へ、關西學院は兎に角關西に雄視して居る私學校だけ引力の及ぶ所も廣く、種々雜多の分子を包含して居た。「おますさかい」の京男、「ばつてんくさい」の九州男、「しやがばい云ふな、しばくぞ」と罵る四國者、中國、關東（關東は少數であつたが）士農工商の子弟が其れ其れの國風、族風、藩風、家風、自個の風を持ち寄つて、基督教の精神を含んだ教育を受くるので、宛ながら芋の子洗ふ樣にごつちや〳〵と賑やかで面白い。

學校を横斷するのが學級の區別で、縱斷するのが精神的區別である。縱斷的には、關西學院は凡そ二派に別れた。俗派、即ち世間派、非俗派（または信徒派）即ち是である。而して之を細別すれば、兩派おの〳〵豪傑組、才子組、尋常組、の三つに別れる、俗派は非俗派を呼ぶに、迂濶、無氣力、などの語を以てし、非俗派はまた俗派を氣の毒な者視して居る。學校の性質から云へば、無論非俗派は實子で、俗派は庶子だ。而して上級になる程信仰が一致して、（即ち信徒の數が殖えて）行くので、此縱斷線は垂直線よりも、寧ろ對角線と云つたが適當であらう。

新入の學生は未だ物馴れず、故參の學生は大人ぶつて妄りに動かぬ。其間に介立する僕等の階級は蓋し尤も活動する階級で、而して恐らく尤も各種の人物に富んで居た。

赤澤、即ち俗派の豪傑組を代表する男。曾て玄洋社に居たさうな。倔強の壯士、肩を掉つて歩くのと、破靴と、政論とで名高い「政治家」。教

科書よりは新聞を讀んで、此學校は時事に冷淡(此丈は僕も同感)だと、居常憤慨して居た。

俗派の才子組を我級に代表するは馬場。頭は丁寧に分け、ペアス石鹼を使ひ、出るには玉蟲の樣に光る着物を着て、机の抽斗の奧には梅暦をかくし、誰にでも調子を合はして、實はうまい飯くひ道ばかり考へ、また時々は鼻で信者を笑つて世間知らずの時勢おくれと云つて居た。

要がなければ三日も言はず、湯には一月も入らず、五年の間抱茗荷の紋付の眞岡木綿の羽織一枚で通し、先生も知らず書物にも無い新發明の方式で幾何の難問題を釋く、「思想家」遠藤は、非俗派の豪傑(外面から云つて)組の尤物である。

學問は出來ぬが、口がうまく、如才が無く、親睦會の幹事、先生や他の級へわたりをつける時の交渉委員、「交際家」の川田。さる町家の息子とか、十錢の貸金を每日友人に督促つて、五厘の焼芋の隠喰して、他人が菓子買へば眞先に飛んで來る佐藤、何處の悪婆に舌剪られたか、舌切雀の舌足らぬ言樣しながら、莞爾しながら、詐の名人、借倒しの大統領、「來る、來る」と云つて居る爲替は終に來ず、「返す、返す」と云ふ借金は決して返さぬ男、何時か食堂の眞中に推參な××に蹈み込まれて雪駄代の二十錢を大音に强請まれながら、直ぐ其翌日から平氣に水菓子屋小間物屋を荒らしてあるく「樂天的」の深水。幾何學の表紙に「腦充血製造之活機」と書き、萬國史の表紙に「六千年之老翁」と洒落れ、數學の教場では簡單な問題に一時間も書きかけた方式を消したり書いたり黒板と睨めつくらの立往生をしながら、詩歌が達者で、歴史の教場では竪板に水の如く應答する「文學者」の清浦。質問が癖で、讀書が細かで、凡そ繙した頁には決して半點の疑義をも剩さぬ「學者癖」の喜多川。粗末に本を讀み散らして、質問には一として滿足な答が出來ぬくせに、試驗には何時も最高點をとる「胡魔化屋」の本間。家許が富家の養蠶家で、學費が澤山、甘い物が澤山、其で人間も少し甘い所につけ込んで、寄つてたかる蒼蠅の蚊々云ふのを吾徳風に靡く草ぞと心得、得意がつて居る當世「チモン」の山岸。口に俗物を嘲り、眼に凡骨を冷晒ひ、終始苦つて遊つて自から「皮肉家」を以て擬しながら、實は夫子自から俗骨でまします小宮山。「法螺」の異名となつた澤。信仰で及第する(と云はるゝ)武者小路。今日は日曜の說教も聞かず、聖書枕にインガソオルの排耶蘇教論でも莞爾として讀んで居るかと思へば、明日は涕泣懺悔大聲をあげて祈る歇私垤里性の「蝗」信者の松本。此等の中には俗派もあり、非俗派もあり、箇は向うに置いて當分此方に寄留する者もあつて、一寸容易に分からない。

僕の如きは蓋し俗派の尋常組——寧ろ凡庸組に屬して居た。

(五)

若し大なる困難に小なる辛苦を樂に思はせ、皆無は貧乏を富の如くに思はしむるものなれば、僕が曾て經た所を以て今の遭ふ所に比ぶる時は、僕は實に樂に且富んで居たのである。着掃部頭の役目で勉強時間が少なからうとも、物が田舍じみて居らうとも(私立學校にも最早美服の風がぽつ〳〵入り込んで來た)人が三度入浴する時は自分は一回がやう〳〵と云ふ程金力に乏しからうとも(僕は何方かと云へば潔癖家の方であつたから、湯に入る代りに、何時も寢る前に、井戸端で冷水浴をやつて居た。菊池の水垢離と云つて同級間に有名なものであつた)其様な事は何でも無いのである。されば僕は入校以來、賄征伐の同盟軍にも加はらず、就寢時間が過ぎてから毛布かぶつて學校の牆をのり越し饂飩牛肉喰ひに行く連中にも加はらず、教場で教科書の蔭に小說本を廣げ先生に質問され

て慌てて質問の質問する仲間にも這入らず、其處此處の店に借り散らしてつい一町の湯に行くのに道の八町も遠まはりし催促者の影が見ゆれば戸棚の奥に息を凝らす者にもならず、借金して着物を拵へ不義理の金で洋食喫つてビーフステーキを截る手つきのうまさを婢に賞められて得意になり、早く紳士になつて見たさに五圓の時計の鎖だけ金ぴかを閃かして神戸から大阪へ行くに一寸中等汽車と洒落れて見る組にも入らず、只管勉强々々とかゝつて居た。其も一は僕の身邊に競爭者があつたからだ。

競爭者も僕の同級生、僕に一歳優りの矢吹周三と云ふ中國生れの青年である。實に其容貌と云ひ、性質と云ひ、玉の樣な人物で、少しも才はじけた風は無いが、恐ろしく明瞭な頭腦を持つて居た。學才の上から云つて肩以上は儕輩を抽いて居る。其で寡言で、親に孝行で（家許には年寄の雨親があつて、あまり豐では無く、只管に倅の立身を待つて居たさうな）其學校に於ける籍は俗派に屬して居たに拘らず、校長も教師も皆非常に望を囑して居た。僕は入學の初から、此青年の優然として首座を占むるのを心憎く覺えて、例の負けじ魂を振り起し、彼取つて代る可しと腕を扼つたが、如何しても取つて代られぬ。毎日の成績、毎期の結果、常に雁行の態である。皆が教科書一つを持餘して汗になつて居るのに、彼は平氣に書籍室から色々の洋書を借りて來て讀んで居る。果ては僕も到底彼を凌駕するの望を絶つた。

彼はあまり人と交らなかつた。人が彼に親しまぬのか、彼が人と親しまぬのか、兎に角彼は獨歩の姿であつた。文義的に獨歩と云つてよからう、其は夕方の運動にも彼は獨り離れて歩んで居たからである。僕は彼と競爭して勝ち得なかつたにも拘らず、頻りに其人を床しく思ひ、彼もまた僕に與ふるの一瞥は他に向ふの眼に異つて居た。併し如何したのか、顏見合はしては莞爾しながら、また毎日教場や食堂で顏見合はせながら、ついしみ〴〵話したことも無かつた。唯一度　其は明治十八年の春期の末方であつたと思ふ　彼が學校の後の芝生に足投げ出して、何か書を手にしながら、其を讀むでもなく、ぢいと入り日を眺めて居るのを見て、僕は其處に立つて居ると、彼が氣づいて笑む、僕が答へて笑む、果ては長い間立つて居た沈默の關がとれて、初めて親しい話をした。其書を見ると英語の詩集で彼はグレーの「墓畔」の詩を讀んで居たのである。僕は先づ彼が學力の綽々餘裕あるを羨んだ。彼は唯淋しく笑むのみである。僕は彼が將來の多望なるを羨んだ。彼は入り日を指して、

「人間の一生にいくら精出しても、事業の額は知れたものですよ。日は今日入つても、また明日出ると云ふことがちやんと分かつてますが、人間は日が入れば最う駄目です、實に人の生涯は冬の日よりもまだ短かい、其短かい間に何が出來るものですか」

「でも耶蘇教信者は永生があると云ふですな」

「永生！　永生！　眞に永生があつたら愉快でせう——併し僕は耶蘇教信者ぢやない。僕は永生を信じないですよ。併し人間は實につまらぬですな、エライ人になつて榮耀の花を咲した所で、此樣な無心な草花になつて（彼は脚下の蓮華草を指した）子供に摘まれた方がまだ優かも知れんですな。目的々々と皆が騷ぐが、僕には其目的が一切分からぬ。人は何の爲めに生れて來るのか、其目的が先づ分からぬぢやありませんか。學校を卒業して、大學にでも入つて、官員か教授にでもなつて、親を養つて、——其が目的とすれば、目的もつまらぬものぢやありませんか。其樣な事を考へ出す

と僕は時々眞暗になつてしまふのです」

僕は大に驚いた。一校の秀才として、前途有爲の資を抱いて、何人にも望みを囑されて居る矢吹君にして、此事あらうとは實に意外の限りである。「智慧多ければ憤激多し、智識を増す者は憂を増す」多學が矢吹君の腦を攪したのではあるまいか。

併しながら更に意外な事が僕を待つて居た。一夕の話は其れぎりになつて、間もなく春期の休暇になり、矢吹君は歸省した。歸省したが何時までたつても歸校せぬ。學校でも心配して問ひ合はせたれば、實に驚く可きではないか、矢吹君は歸省後二階にばかり閉ぢ籠つて居たが、或朝あまり下りて來ぬので、母親が行つて見ると、矢吹君は鴨居から兵兒帶をさげて、縊死して居たとの事である。

此變報を聞いた僕は涙も出なかつたが、實に頭から冷水を浴びせらるゝ心地であつた。

（六）

湯漬の箸を擲つて好敵手の物故を歎じた英雄を學ぶ所では無い、僕は實に云ふ可からざるの感に打たれたのである。あゝ矢吹君は逝いた、彼は一級の首座を僕に遺した、併しながら其座と共に彼は自家の憔悴を僕に傳へた。

うら〳〵と長閑な春の野に立つて、天外遙かに笑めるが如き遠山を眺めて居ると、忽然湧いて出た一團の雲見る〳〵日を遮つて、滿目の景味も風情もない樣にすうと曇つて了ふ――此が恰も僕の今の境涯である。實に僕は十七年來此世に住んで、色々憂い事辛い事があるとは云つても、心は面白く愉快に過して來た。何かは知らず前途に限り無い愉快が待つて居る樣に思はれて、些やそつとの困難は青年の早足に踏いで過ぐるのであつた。唯進む、唯知ると云ふ面白さに（一は秀才と云はるゝ嬉しさに――宛ながらおゝ早い、斑よ、走れと云はれて尾をふりふり息を切つて犬の走る樣に）僕は當もない當を當にして無暗に勉强して居た。併しながら、今や足を佇めて考へねばならぬ場合に遭つたのである。

あゝ矢吹君は逝いた、玉の如く秀でゝ全校の望を負つた矢吹君は、最早地下の人となつた。彼才學も、希望も、人生の目的に關する疑問の憔悴も、今は一片の骨と共に土中に埋もれて居るのだ。「明日知らぬ吾身と思へどくれぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ」僕は實に矢吹君の死を哀む。併し今日人を哀む吾身は、また何時人に哀まるゝかも知れぬ身である。あゝ死、死は實に底知らぬ淵の如く吾前途に潛んで居る。全體僕は何の爲めに勉强するのであらう？ せつせと急いで何處へ行くのであらう？ 行きつく先は死とすれば、何の爲めに生れて來たのであらう？ 死んで何樣なるのであらう？ 氣が付かなければ付かずに濟むものゝ、一度氣が付いては幻の如く影の如く身に添ひ寢ても醒めても人を責めて〳〵最後までは放さぬ此等の古い、古い、併し永久に新な疑問は、今や黑潮の如く吾が胸中に漲つた。

外部の生活は少しも以前に變らぬ。相變らず、五曜に勉强して、二曜に休息し、秀才矢吹のあとに秀才菊池の名は次第に校内に聞えて來る。併しながら僕は宛ながら千鈞の鉛塊を心に帶びて往來して居た。歷史を讀むランプの陰にも彼疑問が幽靈の如く現はれる。夕飯後皆と一處に騷いで居ても忽然「何の爲め？」囁く聲が聞える。體が弱つた故かも知れぬと思つて、心もち勉强を控へて、土曜の遠足に精出して見ても、矢張駄目だ。青葉を吹く風にも心は驚き、摩耶の面に薄れ行く夕日の光も人生の短かきを警めるやうな。獨居が何となく淒くなつて、無理に人中に出て、笑つてふざけて見ても、意味も無い高笑が吾を嘲る樣に聞えて、またもと

の獨居に追ひ返される。併し獨居の靜寂には、あの疑問が大嶽山の如く頭上を壓して控えて居る。否、――此疑問は斷じて逭れられぬ。必ず解釋されずには居らぬ。死？　解釋？　斷じて其一を取らなければならぬ。

僕は志津牧師から貰つた彼小形の新約聖書を取出して、馬太傳第一章から讀み始めた。宛ながら砂を噛む樣だ。日曜の說敎祈禱にも耳傾けて聞き出した。つまらぬ。心にも無い嘘八百を云つて居るやうに聞える。恰ど其頃學校に不思議な事が始まつた。信仰復興とか云つて、實に奇々怪々な現象であつた。事の起りは、よく分からぬが、何でも上級の者が無暗と祈禱をしたり泣いたり、まるで狂人の態をし出すと、其が學校中に蔓延して、果ては泣く、わめく、眞晝中庭に平伏して大聲に祈る、天を仰いで奴凧の樣に兩手をあげて感謝する、銅鑼聲を張りあげて讃美する、二階の窓から飛び下りて足を折る、町へ說敎に押出して巡査に咎められる。いやもう癲狂院丸出しで、學課も二三日休業と云ふ有樣。僕の級でも過半此病が傳染して、何時も落第點をとる男が突然僕の手をつかんで、悔改めよ、祈れよ、信ぜよ、感謝せよと一息に說いて答へも待たず「あゝ天の父さま、此罪ある兄弟を―なんて祈り出すと云ふ騷ぎ、僕は實に人生の疑問に惱まされて居る、且僕は他人の感情を重んずる點に於いて決して人後に落ちぬ積であるが、皆の樣子があまりと云へば輕躁で、馬鹿馬鹿しくて、折角の基督教も此では南無妙法蓮華經と五十步百步だ、宗敎は神經病の異名で、天國が癲狂院の別莊なら僕は地獄に落ちても宗敎は嫌だ、其れに僕は行を愼んで決して人の前に言ふ可からざる事をすまいと司馬溫公を學んで居る者を、「罪ある兄弟」の「悔改めろ」のとは生意氣なと、一種の嫌厭と反撥を起して、吾と吾心の戶を閉ぢ、冷眼に見て居た。癲狂院の情態はざつと一週間ばかり續いたが、やがて藁火の樣に消えて、あとは當分凹んだ眼と、落けた頰と、其れから彼精神的地震の搖り返しに意氣地なく足をとられて信仰の絕頂から忽ち不信の谷に墮ちた者が俗派の冷笑を招くのみであつた。

やがて第三期の試驗も濟んで、夏休となつた。待ちかねた輩は試驗の點が分かると、直ぐ柳行李をしめて、新しい浴衣に着かへて、莞爾歸鄕の途に就く。僕は學校に留守居ときめて居たが、彼キルキー・ブラオン師が此夏京都の比叡山に避暑中道樂に植物採集をするので、其手傳に來ないかと誘つて吳れたので、學校に居殘つて痩蚤の餌食になるよりも優であらうと、七月の上旬ブラオン師と叡山に天幕生活をすることとなつた。

（七）

西洋人は氣澤山なもので、夏になると一家挈へて海に山に自然的生活を樂むが、中にも京阪神の異人連が好んで寄る處は比叡山だ。山の八合目あたり、杉や樅の大木の間の勾配やゝ緩な處に杭をうち板を渡してざつとした床を拵へ、如何なる强雨長雨にも堪へる厚いゴムびきの天幕を張つて、此處に盛暑二ケ月ばかりが間起臥眠食するのである。夏季の盛には、三百人からの人數が部落をなして、矢張天幕張の禮拜堂が出來、眞靑い樹の間に白い天幕がちらちら覗いて、オルガンや讃美の聲が清涼な山氣にのつて來るなぞは、頗る面白い。信心もペンキ臭い會堂よりは却て舊約の昔忍ばるゝ此樣な天幕の殿に起るものだ。

ブラオン師の家族は夫妻に、其れから西洋の護謨人形に靈入れた樣な四歲ばかりの女兒とクック夫婦と其れだけである。僕の部屋は、もとブラオン師が書齋にする筈の小さな天幕だ。其は勾配の大分急な處に、一方は崖、一方は高

い柱にもたしてしつらつた三疊位（二疊だけ疊が敷かつて居た）の小屋で、母屋との間には板橋がかゝつて居る。一寸番兵小屋の樣に、一方口開けて居るが、夜は此處も寒いで眠る。道具と云つては白木の机が一つに、ランプに毛布と蒲團が一枚、其れ丈だ。西南の方に明とりの小窓があつて、夜は此窓から月が覗き、晝は眼をあげさへすると靑黑い樅の梢を見越して遙かに京都の町に煙が颺るのを見る。雨が降る日なぞは、晝でもぐるりと戸をたてて天幕も靑く染まる程、ぽと〳〵帆布を敲く木間雨の音を聞きながら本を讀んで居ると、何だかロビンソン・クルツオにでもなつた樣な氣持であつた。

ブラオン師は少し剽輕な併し實意のある人で、僕を可愛がつて吳れる上に、他の洋人が多く陷り易い弊――人の感情を重んずるを知らず、無暗に我を通す樣――も餘程少なかつたので、僕は非常に愉快を覺えた。天氣の好い日には、或は捕蟲網を肩にして蝶捕りに行つたり、また僕の採集胴亂をさげて、叡山から果ては鞍馬の邊まで珍しい羊齒や種々の植物を渉獵り、咽が乾けば杉山の濕つぽい氣を嗅いで古株の下に見出した苔淸水に命を潤し、腹が空けば杉ごけの上に足投げ出して古新聞に包んだ一サンドキツチ―に舌鼓をうち、あまり遠歩きして烏の聲に不圖頭を上ぐれば、杉木立を漏る入り日の光閃々と谷を隔つる山又山は紫に打煙つて居るに驚き、いざと立歸る一足々々に谷は暮れ山は黃昏の靄蒼く、あゝ困つたとふりあふぐ梢にうつすり照り初めた新月のおぼつかない光をたよりに幾山越えて、眞黑い木の間に燈火を認めた時の嬉しさ。其れから飯が濟むと、早速採集したものを乾燥紙に插んで、眠くない時は鉛筆で羊齒などの寫生をする。面白い職務だ。ブラオン師は何時も「菊池さん、あなたあるく達者あります」と僕の健脚を譽めて吳れた。ブラオン師も此頃は僕の英語ほどには日本語が使へる樣になつたのである。

實に愉快な生活。あゝ此樣な生活は、兼頭君が喜ぶだらう、と思ふと矢も楯も堪らず、僕は東京なる兼頭君に手紙を出して、歸省のついでに是非來て見玉へと書いた。一年位は實に夢の間に經つてしまふ。僕が初めて道太郎君を識つたのは去年の夏君が歸省の時であつたが、最早一年經つて、また夏休になつた。君と僕の間には交通が絕えなかつたが、今此手紙を書くについていよ〳〵光陰の早くたつを感ずるのであつた。

其手紙を今日京都に貫出しに行くと云ふ隣の天幕のクックの處へ頼みに行つて歸ると、横手の崖道から西洋婦人と打連れて下りて來た十六七の女學生は、見た樣なと思つて見ると、きつてはめた樣な話だが、實際去年松山で會つた兼頭君の許嫁のお冬と云ふ少女だ。一年會はぬ間に、束髮の前髮を剪つて、すつかり女學生になつて居る。意外の對面に驚いて、如何して此處に御出なさると問へば、梅花女學校が夏休になつたから、昨日女教師に連れられて來たので、（其は少し晩れて居た英語を暫くでも勉强する積りで）併し八月には兼頭と一處に歸省する筈で、兼頭も來月初には此處へ立寄ることになつて居ると話した。所謂事實は小說よりも奇で、天の調合は往々にして小說家の配劑よりも誂へた樣に行くものだ。

果して日ならず兼頭君の返書が來て、且驚き且喜んだ樣子が歷々楮表に躍つて居た。「如何しても兄と小生の間には宿世の緣ありと可申歟、面晤の日を待兼候」と書いてあつた。此方は猶更待ち兼ねて、今日か明日かと待つて待ちくたびれて少し腹が立つて居ると、或日麻の夏服を着た眉の濃い靑年が片手に夏帽をとつて滿面の汗を拭き〳〵息をつ

きつき莞爾やつて來た。

前以てプラオン師の許可を得て置いたので、僕は兼頭君を早速僕の小天幕に誘うて、顏を洗はす、着物を更へさす、砂糖水を飲ます、無暗に笑ふ、同じ事を何度も繰り返す、嬉しさがさす樣々の狂態を爲盡して、其れから早速お冬君にも知らせ、三人三樣の喜びに夏の日の傾くも忘れて打興じ、晩餐にはお冬君の女教師に喚ばれて、其れから夜は僕の天幕に一枚の毛布を二人して引張りながら、別來無限の情を敍べた。

月は傾いたが、話は中々盡きぬ。東京書生の風儀の漸く亂れて、生活問題が次第に青年の頭腦を支配する事、兼頭君は來春學校を卒業して、大學に入る積で、昨年來學課の側に其準備をして居たので、非常に多忙であつた事、其故でもあるまいが、少し心臟を惡くし、時々息切れがする（僕は大に驚いた、併し兼頭君は、大したことは無い、歸つて暫らく休養すると直ぐ治るであらう、と云つた）事、去年の夏休は思ひがけない友を得て樂しかつたが、今年は淋しかる可き事、僕が云つた言もあるので、東京に行くと早速松村を尋ねて見たが、已に何れへか轉校して、踪跡が分からなかつた事、などを兼頭君が物語れば、僕はまた手紙に書き漏した學校の生活や、入校後一年間の僕の感觸、前途の空想、などを倫次もなく吐露した。手紙の上にも現れて居た其人の床しい人品、ゆつたりと人を包む感化、今一年ぶりに枕を並べて寢物語をして見れば、ます／＼立優る其人柄、實に有つ可きものは朋友、其友の中でも兼頭君程好きな友は無い、と僕は關西學院三百の學生に思ひ比べて、したゝかに思ひ入つた。

明くる日も興は盡きず、話も盡きぬので、兼頭君は僕の強請にまかせ、一日出發を延して午餐過ぎから比叡の最高峯なる四明が嶽の絶巓に登つた。お冬君は明日出發の支度に忙しくて居たが、僕等が炎天に曝されて山登りするのを見て、兼頭君を呼びとめて洋傘と鍔廣の麥藁帽を渡したので、僕は帽をかぶり、兼頭君は傘をさして、延暦寺の裏を通り、杉を穿ち小笹を分けて、次第に上つた。兼頭君が息切れがするので、休み／＼上つて、將門が純友と遙かに皇城を俯視したと云ひ傳ふる邊へ來ると、洛陽の平原は一目の中に落ちて、京都の町や、村や、寺を擁する森や、青田や、鴨桂の諸川や、其れから遙かに淀山崎から彼が大阪の方角だらうと思ふあたりまで、僕の指す指頭に俯瞰圖を廣げた樣に見える。僕等は猶少し上つて、唯有る櫟林を彼方へ出ぬけると、忽ち脚下に閃々と琵琶湖の半面が現れた。

「絶景！」と兼頭君は喘ぎ／＼見とれる。僕も滿面の汗を揮つて、太息をつき／＼、高山の巓を繞る「オゾオン」の氣を水の如くに吸うた。

岩を拂つて、曲りくねつた松の蔭に足投げ出し、猶も滲み出る汗を拭つて、僕等は暫し言もなく絶景に見とれた。脚下に攢る山又山は筍の皮の如く重なり重なつて、其下には半面の琵琶今まさに午後の日を滿面に受けて鏡の如く光つて居る。湖を縁どる條よりも狹い平地の青いのが田で、出崎に一寸ばかり秀でたのが松で、煙が颺つて居るのが大津、矢橋、坂本、堅田、北の大きな半面は出張つた山に遮られて見えぬが、左手の比良と湖の向うの三上山は手招きでも出來さうな。恰今長濱通ひの小蒸汽が大津を出て行く。玩具程の船が、縷程の煙を吐いて鏡の上を滑つて行く。耳を澄ますと、蚊の樣な聲がする。汽笛の音であらう。■

やゝ久しく默つて居たが、兼頭君は突然莞爾と僕を顧み、「如何です、聖書は相變らず讀んで居ますか」と問うた。

僕は赤面した。彼信仰復興の騷ぎ以來、僕は聖書を抛つて居た。所謂「人心」はずるいもの、

色々な口實を見出しては、人生の問題を兎角後へ廻したがるのである。

僕は一切を打明けた。彼矢吹君の事を話すと、兼頭君は非常に殘念な顏をして、「惜しい、惜しい」と云ひ貌に聞いて居た。其れから僕の懊惱に來ると、ぢいと聽いて、頻りに頷いて居たが、信仰復興に反撥した一條を聞いて、熱心に說き出した。卽ち信仰復興は精神界の大旋風の樣なもの、此に逢へば石も地に飛び木も天に舞ひ色々不思議な現象を見るのであるが、要するに心靈の活動は決して冷やかな常識の繩墨を以て律す可きもので無い、現にインスピレーションとか、感激とか云つて雲が靈に火を燃やすこともあるでは無いか、信仰復興は卽ち其の大なるものである。「ホラシオ、天地の事は卿が理學に說き盡されぬ事もあるものぞ」で、宇宙の事は智識の到り得ぬ境がある、信仰の眼でなければ上帝の面は仰がれぬ。說くに從つて、兼頭君の眼は閃き、舌は燃え、實に僕は兼頭君を識つて以來、此樣な嚴肅な容子を見るのは初めてである。

「菊池君、信仰は決して愚夫愚婦の事ぢや無い、士君子の本分です。人間は宇宙の一分子、如何しても宇宙の大本原と一致しなければ、滿足は出來ない。上帝を追ひ求むるは人心の本能です。貴君も現に求めて御出だ。心の懊惱は卽ち靈の親を慕ふ煩悶です。何故其まゝに抛擲つて置きます？　同じ上帝の懷に抱かれても、眼を瞑つて孤立を歎くと、確かに至上者の懷にあるを自覺すると、何方が幸福です？　迷うて死すると、信じて死すると何方が幸福です？　人生の疑問は何時までも抛擲して置く可きもので無い、時は刻々過ぎ行くぢやありませんか」

兼頭君は默した。僕も默つて俯いた。「時は刻々過ぎ行く」一句悲風の如く耳を掠めて、心に限りなき哀思をかき起し、僕は唯悄然と頭を垂れて何時までも〳〵沖想の淵に沈んで居た。

何處やらに、幽かな物音がし出して、其が次第に近く、近く、殷々隱々云ひ出すと思ふと、四邊がすうと薄闇くなつた。ふつと氣づいて、ふり仰いで見れば、比良の方角が眞闇になつて、何時湧いたのか洋墨色の夕立雲がむら〳〵〳〵〳〵天穹を捲き上つて居る。其が天心に達したかと見ると、西の半穹を目がけて沛然と崩れ落つる同時に、眞黑い蔭が白い光を追うて橫一文字に湖水の面を奔つた。

「夕立！」

「早く！」

聲を合はして二人が立上る途端に、黑雲の天を劈いて桃紅色の電が五條六條つゞけ樣に湖水にたばしる。

「早く、早く」

聲かけて一步踏み出す處を、颯と吹く疾風一陣。風にまじつて葡萄大の雨粒ぼつり眞額を撲つかと思へば、雲踏破る雷の一聲頭上に轟いて、雨が瀧流しに落ちて來た。

「菊池君、傘、傘」

兼頭君が呼ぶので、一本の傘に二人が頭をつき入れて、また五六步。

「駄目です、駄目です、僕に跟いてお出なさい」

云ひ棄てて、僕は兩手に帽をおさへ、頻りに募る雷の燁々碎けて火花を散す稻妻の光を便りに、最寄の寺を指して跑け下りながら、ぴかりとする拍子にふりかへると、兼頭君は洋傘をつぼめて手に持ちながら、ずぶ濡れになつて、二三步あとから喘ぎ〳〵跟いて來る。

「走れますか、息切れはしませんか」

「何有」と云ふ聲は闇に聞えて、稻妻の君が笑顏を見するも一瞬、また一しきり眞暗の闇に瀰る暴雨を衝いて、漸く杉の森の邊まで來た、と思ふと、忽焉膨しい電光に眞白の雨を透して森の隅々殘なく見る那時遲く、地軸もゆるぐ物響

の頭上に破裂して僕は俯伏に捲と倒れた。

(八)

あゝ僕は最早其後の事を書くに忍びぬ。

吾に返つて小降になつた雨の中に立上つた時の心地。五六間向うの大杉が二つに裂けて、弗弗と煙が立つて居るので、僕は落雷と氣がつく刹那、はつと兼頭君を振り返り見れば、右手に洋傘を握つたまゝ仰向けに倒れて居るのを見た時の心地。駈寄つて抱き起し「兼頭君、達太郎君」と呼べど叫べど、頭はうな垂れて、顔にも手にも血の氣が絶えて居るのを見た時の心地。狂氣の如く寺に駈け込んで、助を求めた時の心地。折よく山に來て居た西洋人の醫師が駈けつけて來て、診るより早く、此は心臓破裂だ、最早駄目と、公言するのを聞いた時の心地。お冬君が眞蒼になつて、女教師と走せて來た時の心地。僕が頭をかゝへ、醫師とクックが足腰をかゝへて、天幕に復る時の心地。かなはぬまでもと醫師が百方手を盡しても、去つた靈魂再び返らず、太息と共に、「已矣」と云ふ宣告をあらためて聞いた時の心地。僕は到底書くに堪へぬ。

其れから僕が京都に走せて、宇和島の兼頭家と松山のお冬君の實家に電報うつた時の心地。死骸を護して、來る人を待つ間の心地。翌々日の午後兼頭君の嚴君が松山からよこした人と前後して駈けつけて來た時の心地。嚴君を導いて遺骸の側に立つた時の心地。其日禮拜堂で基督教の葬儀があつて(兼頭の嚴君は宣教師等の好意を辭する筈であつたが、お冬君が堅く請うて此式を行つた。お冬君が此際の舉動は年端も行かぬに、見上げたもので、吾兼頭君の許嫁たるに愧ぢなかつた)其れから直ぐ鳥邊山の火葬場に行つた心地。父と許嫁とに伴はれて、宇和島の土になりに行く一片の遺骨を送つて、七條の停車場に、去り行く汽車の烟を(僕は去年宇和島の埠頭で目送つた兼頭君の汽船の烟を思ひ出した)見送つた時の心地。千鈞の足を曳摺つて器械的に叡山に歸つた時の心地。あゝ僕は到底云ふに忍びぬ。

夢、夢、實に何もかも夢だ、兼頭君が來たのも夢、死んだのも夢、骨を送つて歸つたのも夢、何時か此夢が醒めてあゝ苦しい夢だつたと寢汗拭うて熟く胸を撫ふる時がありさうな心地のみして、僕は事のあつた其日から涙一滴出ず、器械的に奔走しながら、腦は石の如く固まつて、唯時々欠伸ばかりするのを、彼醫師が見て、無理に僕の脈を檢て、寢がけに飲めと散藥を與れた。ブラオン師は頻りに僕を慰めて、且信仰を勸めて與れた。併し僕は藥は飲まぬ。信仰の勸めは猶更嫌である。僕は默つて聽いて居たが、心には否、否、否、僕は信じない、死す共信じない、と頭を掉つて居たのである。あゝ僕の疾は體には無い、僕は實に天を怨んだのであつた。恐ろしく欺かれた樣な、弄られた樣な心地がして、芥子程の靈に火の如き謀叛心を燃やしたのであつた。兼頭君を活かして返さば、信じもしよう、兼頭君を目前に殺して置いて、其れで信ぜよとは、實に甚しい矛盾では無いか。僕は信ぜぬ、決して信じない、頭上に百千の雷が落つ共、「恐怖では信じない」と言はねど思ひ、思はねど感じ、眞黒になつて頭を掉つて居た。

叡山の生活は最早何の面白味も無くなつた。僕は何處にも出ず、眠さへあれば、吾天幕に寢てばかり居たが、兼頭君の遺骨を送つて歸つた五日目の夕方、僕はぶらりと天幕を出でて、彼事のあつてから初めて頂上の方へ登つた。美しい夕で、日はいまし方入つてしまつたが、夕の光明は山に滿ち、森の隅々まで月夜でもなく亦晝でもない一種匂やかな光がさして居た。登る一歩々々に、過ぐる日の記憶は卷物を繰るやうに現はれて來る。此處では兼頭君が足をとゞめて息をついた。彼處では兼頭君が俯いて天鵞絨

苔を摑んだ。あゝ兼頭君——さわ〳〵〳〵小徑を分くる足音が後にしたと思へば、誰も居ない。僕は立佇つて、ぢいと考へて居たが、また上つて、先日兼頭君と腰かけて話した彼松蔭の岩の邊へ來た。

絶頂はまだほのかに夕の光をとゞめて居るが、脚下の峯も谷も最早黄昏の煙靄に包まれて、琵琶の水が遙底にほの白う見えるのみである。今延暦寺で撞き出した晩の鐘が、靄を分けて山から山、谷から谷と傳うて行く其行方を目送つて、僕は何時までも〳〵立つて居た。あゝ兼頭君——何處を見ても人の影は無い、唯時の過ぎ行く、過ぎ行く」と云ふ聲が何處かに震へて居る樣に聞える。

下るともなく下つて、杉の森の邊まで來ると、最早日は暮れて露に咽ぶ蟲の音が四方に起つた。不圖眼の前に白いものが現はれた。立ちどまつてぢいと見ると先日の雷に裂けた杉の幹である。僕は知らず識らず先日の路を趁うて、僕が氣絶し兼頭君が永眠した其跡へ來たのであつた。引据ゑられる樣に足下の切株に腰をおろして僕は良久しく默想に沈んだ。

星の雫か、露か、冷たいものがぽつたりと額に墮ちた。驚いて眼を上げると、眞黑い巨杉の簇々と天を刺す間から、星が降る樣に見いて居る。未だ初更の頃であらうか、高山の夜は森森と、蟲の音寂しく、耳を澄せば、眠るが如き吾心の鼓動も仄かに聞える樣な。

忽焉、此眞黑い森林の奧より、波の寄するが如き聲が起つた。慄然として僕は耳を傾ける。聲は一山の老樹を戰がして颯と千萬里の空に消えて了ふ。

僕は地に平伏した。

（九）

僕が十八年の生涯に、吾靈の底から振蕩された經驗が二回ある、一は故鄕熊本の菊池家先祖代々の墓所、一は洛東比叡の山上。前者は愛する母によつて、後者は愛する吾友によつて。不肖僕の如き者にも、猶一莖の草に傍ふ影程の歷史があるならば、此兩回の事は實に僕の生涯の歷史の新紀元を作つたものであつた。併しながら誰が、母をして友をして此愚かなる心に新生命を注がしめたのであらうか。

あゝ無神論者は何とでも云ひ玉へ、功利教、快樂宗の信者は何とでも笑ひ玉へ、僕は如何あつても全能者の攝理を認めずには居られぬ。眼を瞑つて吾十八年の生涯を繰つて見ると、吾を導く至上の指が鮮やかに見えるではないか。迷つても、拗ねても、駄々を捏ねても、忘れても、忍び忍んで來い來いと手招き玉ふ大なる父の顏影が涙の眼に見えるではないか。手をかへ品をかへて吾を教育し訓練し啓發して行く大智大能の鞭の影が鮮やかによまれるではないか。僕は信じなくても、靈が信ぜずには居られぬ、「信ずる——、謙つて、眞に赤子となつて、身を投げかけて」

寂々たる高山の星夜に、吾友の魂の斃れし地上に平伏した時、僕は心に斯く叫んだのである。

僕は死に到るまで此一夕の感を忘れぬ。

僕は死に到るまで吾友の身を以てした說教を忘れ得ない。

如何して忘れられようか、己を殺して僕を活し、己の肉の生命を以て僕の靈生を購つた吾爲めの小基督を如何して忘れられようぞ。あゝ兼頭君は實に僕の爲めに死んだ、死は萬事の終である乎。否、兼頭君は生きて居る、魂に生きて居る。眼には見えずも、必ず生きて居る。其人品、其性情、其感化——兼頭君其自身は現に僕が心に生きて、日々僕を誘掖して行くでは無いか。僕の理想の中に、僕の戰鬪の中に、僕の感謝の念に、兼頭君は何時までも生きて居る。

僕は兼頭君が僕の側に斃れた彼八月六日を

記念の日として、其日に遭ふ毎に、人を避けて默思を凝らす。僕の書齋には、平常其寫眞（此は兼頭の嚴君から乞ひ得た君が浴衣がけの寫眞で、東京に出た年撮つたのさうな。一處に撮らう撮らうと云つて居たが、つい其折がなくて、永別となつた）が、寫眞掛の上から莞爾に僕を瞰めて居る。而して其寫眞と眼を見合はす毎に、僕が心の鼓動は高まるのである。

思へば、花に百日の香なくして、而も人の氣品は限りなく香るものだ。

僕は青年にして夭折した人々を思ふ毎に、二つの面影が直ちに眼前に浮んで來る。一は彼矢吹君の面影で、一は兼頭君の面影である。二人ながら秀づ可くして半途に折れた者——僕は實にこれを悼む。而して矢吹君を思ふと、腸を絞らるゝ樣に苦痛の涙を落すが、兼頭君の記念は同じ涙を催すにも、宛ながら慈雨の如く、戰闘に枯れ果てんとする吾心を沾す樣に覺える。

何故であらう?

六の卷

（一）

關西學院に於ける僕の第二年は、何の異狀もなく始まつた。相も變らず、朝早起してバケツと箒を提げて學僕の務をする、田舍臭い弊衣を着て往來する、丈くらべでは何時も最尾に落ちて教場では何時も最首に坐る僕を見る者には、去年の菊池と今年の菊池と少し國訛りが減つた外には何の異なる所も發見しなかつたであらう。僕の外部の生活は實に少しも以前に異らなかつた。

併しながら張りつめた氷の下に潮水の心は躍り、降り埋む雪の下に火山の情は燃ゆるが如く、靜平なる生活の裏に僕の精神的醱酵作用は吾ながら恐ろしい勢を以て行はれて居たのである。僕は其を祕して居た。其は俗漢の嘲弄を恐るゝ故でもなく、又あながち己が心の動搖を濫りに人に漏らすの端なきを厭ふが爲めでもなく、吾心の八重霧を分けて一線閃き落ちた不思議の光、巖の如く頑なる魂を透して一滴したゝり落ちた天の靈漿を、漏らすまじ溢すまじと。わなゝき〳〵かき抱いて居たからである。少女子の初戀を祕する如く、僕は此新光を心の奥に祕めた。

僕はこゝに一々吾信仰の歷史を辿るまい。曾て志澤牧師から贈られた、半歲前に一たび讀みかけて擲つた、其聖書を再び取り出でて、閑を偸んで幾度繰り返し讀んだか。土曜或は日曜に同輩を避けて獨り山に上り森に隱れ讀みては祈り、祈りては想ひ、或は疑ひ、或は信じ、或は悔い、或は喜び、曾て吾冷笑した彼「瘋癲」の擧動を幾たび親らしたか、其は說くまい。

唯、僕は聖書を讀む毎に、奇蹟や異樣の言行の雲霧を分けて、「神の子」と名のる基督の次第に大きく、大きく、其頭はまさしく天に聳ゆるまで偉大に現はれ、其放つ光はいよ〳〵照り輝きて日よりも眩しく、昔吾理想として崇めた百の偉人英傑も宛ながら日の前の星の如くに光を失ひ、仰げば仰ぐほどあやに妙なる天の光は此大なる「プリズム」を透して見えると云ふよりも、寧ろ此が即ち光其ものの源……即ち神の顯現と覺え、僕はこゝに全く心の戶を開き——若くは開かれ——乾ける海綿の水を吸ふ如くに此光を吸うたのである。

あゝ其光をば吾靈乳の如く吸うた時、其光櫛の如く吾身心を梳いた時、「吾」を擧げて其光の流れに浴びた時、僕は實に口云ふ能はず心思ふだにも堪へぬ千萬無量の愉悅の泉の如く湧き出づるを禁じ得なかつたのである。夜半に不圖眼ざめては、何故とも知らぬ涙が雨の如くに流れる。書を讀んで居ても、何時しか「感謝」の頭が

低れる。僕は實に吾心の喜に惱み、何故吾はエリヤの衣の如くに此肉を脫ぎ棄てて、直ちに天に行かれぬのであらう、と喜のあまりに歎いた。

明治十九年新年第一の日曜日に、僕はブラオン師から洗禮を受けた。洗禮を受けた其日に、僕は事の顛末を細かに書いた手紙と共に、小形の新約聖書を母に送り、且兼頭君について僕が信仰の親とも云ふ可き志津牧師にも年詞に添へて其由を報じた。

（二）

僕が猶故鄕妻籠に居た頃――十歲の秋であつたと思ふ――或日二三の友達と山に椎拾ひに行つて、歸途に踏迷つたことがある。何でも最早日沒近い頃だに、行つても〳〵椎や樫やらが暗う茂つて居て、物音と云つては唯足下にがさつく熊笹の音ばかり、三人泣顏を見合はして、茫然立つて居たが、不圖友達の一人が此方行つて見ようと唯有る雜木山を指したので、僕等は草臥足曳ずつて其小山を攀ぢ、絕頂に立つより、呀と見惚れた。僕等の立つ山の下には、廣く可き一の大きな谷が横はつて居る。銀の霧の樣なものが谷の中央を閃々とくねつて、其向うにも此方にも紫の雲の樣なものが簇々として、處々に靑いものが聳つて居る。一所綺麗、何と云ふ處だらう、と吾を忘れて且訝り且眺めた。あゝ其は何處でもない、矢張妻籠の谷、銀の霧は木曾川で、紫の雲は村や森、靑いのは僕等が家より立つ夕炊の煙であつたのだ。誰が此樣な幻術を行つたのか、魔法使は何處に居る、と見廻しても、異形の者は何處にも見えない。唯火の玉の樣に眞紅な日輪樣が素知らぬ顏して今西の山に入りかゝつて居た。僕は其時の驚異を今も歷々と覺えて居る。

人の生涯には、此樣な事が時々あるものだ。人生の旅にも、或山角を一步曲ると、忽ち見馴れぬ新山川が埋伏より躍り出でて眼下に開展するに會ふことがある、眞中ぽつかりと眼を開いて見れば、一瞬の間に宇宙はぐるり彼方向いて、眼を驚かす新天地、此處は何處だらう、全體吾は今迄何處に何を見て居たのであらう、と思ひ迷ふ樣なことがある。畢竟新光卽新天地。僕は今其新天地の前に啞の如く佇んだ。

唯一片方寸の心に無邊の宇宙を千變萬化さす光の作用も奇妙なものではないか。戀人が見る薔薇色の宇宙、聖徒が觀ずる白光の天地も、究竟吾靈の或外來の靈力と摩擦する途端に發する火光の作用で、悟を開くの新天地を見るのと云ふのは、此發火の瞬間に心眼を開いてまた開く一刹那の瞬を云ふのであらう。此は固より一次一回と限つたではあるまい。若し細かに觀察したらば、人間は母胎を出でてからまた幾回生るゝも知れず、天地開闢も每日の事、悟も幾度開けるか知れぬ。人の所謂一生ある人間になるまでには、幾回か筍の皮を脫いでは長るものだ。但し其間には自づから大小輕重の相違あるを免れぬ。僕は今其尤も重大な時期に會つたのである。

僕が明治十九年の上半はいとも平和に、若く着關西學院の課程を趁うて行く間に、一たび心に射し入つた新信仰の光は實に驚く可き勢をもつて、內に漲り、僕の理想も目的も批評判定の標準も、要するに吾思想の風は何時しか悉皆一變してしまつた。此新しい光で見れば、昔僕が求め〳〵して居た目的の青雲も實は浮雲の果敢なきよりも果敢なく、名譽の光、黃金の花、學位、勳章、地位、勢力、所謂富貴利達なるものも、子供が玩弄の線香花火の火花よりも空しく思はれ、從來僕の拍車となつて居た空漠なる希望は根柢から崩れて、更に覺悟をあらたむ可き必要を感ずるのであつた。何となれば、僕は從來人を最後の判官とし、觀客

とし、人の眼の前に菊池愼太郎を輝かすを目的として居たが、今は人を措いて直ちに「神」の前に立つ身では無いか。

僕は熟々自家の天職を考へた。世に尤も貴重なるものは即ち天來の此「光」である。世に尤も貴重なる働は即ち此「光」を傳ふる事ではあるまいか。僕は課業の暇に、書籍室から色色の宗教書籍を借り出して來て、讀んだ。中にもザヴィエー、ヘンリー、マアチン、リギングストーン等傳教師の傳記は深く僕を感激せしめた。僕は之を讀む毎に、彼等が世の棄て難きものを棄て、忍び難しと思ふものを忍び、命を抛つて天光を暗黑の民に傳ふる高潔、熾烈の精神を慕うて、涙の卷上に滴るを覺えず、竊に思つた、僕の天職もまた彼等の轍を踏むにあるのではあるまいか。

（三）

昔ルーテルは其友と道を行いて居た時、落雷に友は撃たれて、己は免れた。其がやがて發心の一動機となつて、終には宗教改革の大立者となつた。彼は固より稀世の人物、一粟よりも猶果敢ない吾身を其に比する譯では無いが、事も相似て吾醒覺も原はと云へば彼落雷に兼頭君を喪つた時からである。

思へば思ふ程、此事件には何處やらに吾を導く皇天の指の痕がよまれる樣に覺え、兼頭君が不言の遺言も此處にある樣に思ひ、所謂名を揚げ家を興すにも、昔は專ら其外面の光華をのみ考へて居たに引易へ、今者其內實を先にして上天の聖旨良心の褒賞には印度の富も千載の名も弊履を棄つる如くに抛つの覺悟を定め、如何しても僕の使命（と云ふも烏滸がましいが）は傳道師だと思ひ、關西學院の普通科を修めた上では、高等英語神學を修めて、一生を此聖事業に獻げようと、洗禮を受けて三日目の夜、學校の後の松林に默坐して心に誓つた。

僕は愈耶蘇教傳道師と心を決した。而して早速に傳道を始めた。心に溢るゝ喜を汲んで誰かに分たねば自から其重に堪へかねたのである。朝日の光が先づ接吻するは高山の頂、人の心の何事にも先づ向ふは愛する人の上、僕の傳道は先づ故鄕の母から始まつた。前にも云つた通り、僕は受洗後早々聖書を母に送つて、吾信仰を述べ母の信仰を勸めた。母が初めて其手紙をよんだ時は、（後に母自から僕に話した樣に）手紙を引裂き、聖書を抛ち而して泣いたと云ふことである。其とは知らなかつたが、僕は母の返書に接して、意外の手强い反對に駭いた。何でも母は僕が學資の都合より己を屈して、心にも無い信仰をした樣に思ひ做したと見えて、悲憤の詞が書中に充ち滿ちて居た。其樣な甲斐ないことで、菊池家の再興が出來るか、何處に男の節操があるか、町人百姓（關西學院の書生に平民が多いと云ふ事は曾て僕の書中に述べて置いた）と一處に居れば其樣にまで根性が腐つたか、七年前妻籠の墓所で母が云ひ聞かした事をよもや忘れはしまい、と書き其れから、手紙の末には、母も卿が學資の事には一方ならず心を苦めて、何れ其內關西學院を卒へてまた高等の學校に移る時の學資の補にもと去年以來狹い家に蠶を飼ひ、忙しい中に絲をとり、夜も晚くまで紡絲をひき、一粒の米、一枚の紙屑も愼太郎が出世のたよりにとしまつして貯へた金が少許ある。其金をこれから送る程に心にも無い信仰など必ず思ひ止まつて呉れ、一度汚れた體は中々もとの淸白にかへらぬもの、卿も今が一生の大事な場合と云ふ意味が一尋の餘も書き列ねてあつた。

僕は大きに驚き、其夜徹夜して僕が信仰の理由と顚末を三尺ばかり書いた、即ち斯樣な次第であるから決して爲めにすることあつての信仰では無く、また學費は日々牧場酒掃の報酬と夜

學（僕は書き落したが、去秋以來僕は人の周旋で兵庫の唯有る英語夜學校に一週八時間教へに行つて、資金の缺を補つて居た）の報酬で立派に支辨して行くので、一厘の負債もなければ、勿論金の爲めに己を枉げることもなく、且身體は强壯で無暗な勉强は爲ぬによつてかならず御安心なさる樣にと、くりかへし書いた。

此手紙は母を滿足せしめぬまでも、幾分か其心配を減ずるの效を奏したと見えて、折返して來た手紙は、最初のよりは餘程和やかな調子になつて居た。併しながら、信仰の事は斷じて勸めな、卿も一應も二應も篤斗考へて見るが可い、若い時には善惡共に一圖になるもの、必ず向ふ見ずな事をすな、大事は干涉がましい樣だが一應母が耳にも入れた上で行つて貰ひたい、と書いてあつた。要するに、僕が傳道の第一步は、意外の失敗に歸したのである。僕は方略を一變して、唯祈禱と忍耐を以て母の心の和らぐを待つことにしたが、初陣の失敗は當の敵が吾母だけに少なからぬ失望をおこし、且今後彼傳道の目的を明かす日には名譽心の熾な母と僕の間に必ず衝突の起る可きを豫想して、竊かに心を痛むるのであつた。

併しながら僕の目的は更に動かぬ。此夏は若し都合が出來たらば歸つて顏を見せて呉れぬか、と母の手紙にはあつたれど、僕は歸省を明年に延ばし、今年の夏休は豫て傳道會社に頼んで置いた通り夏期傳道に岡山に赴くことに定めた。

（四）

聖書一冊抱へて中國に飛び込んだ僕は、惟ふに比類少なき無鐵砲――年少氣鋭な傳道師の一人であつた。

右に劍を握り、左にコランを握る回々教徒の其では無いが、僕は眞理の押賣、壓制的傳道、脅迫的說教もしかねぬ程、熱心であつた。今から思へば、忽然天來の光に射られて少し眼が眩み氣がふれて居はしなかつたかと危む程激烈な傳道師であつた。僕は思つた、他の牧師宣教師傳道師などが、傳道の困難だの、日本人は宗教心が乏しいの、と云ふのは實に腑甲斐ない話で、畢竟熱心が足らぬ故だ、一個の靈魂を救ふには一萬度の苦艱も吾甘んずる所と云つたザヸエーの熱心があるならば、日本を擧げて基督教國とするも十年を出でずであらう、僕の如きは新參の信徒、一ケ月の傳道期は短かくも、身を粉にして働いたらば、土產話の一つや二つ持つて歸られぬことはあるまい、働かう、働かう、と吾れながら燃ゆるばかりの熱心をもつて、傳道地に乘り込んだ。

僕の職務は二樣、信徒の奬勵と、未信者の誘導である。僕は二つながら精出した。中國教會の雄鎭と云はるゝだけ信徒は三百名、立派な會堂もあつて、盛んなものである。僕は牧師の指圖によつて、一々信徒の家を訪問した。金滿家の信者を訪うては、「富める者の天國に入るは如何に難いかな」と云ふ聖書の文句を引いて、大に慈善を勸め（何となれば、其頃教會の傳道費を募るに、此金滿家は身代に似合はぬ少額の出金をした。僕は思つた、僕が彼身代の主人なら、生活費だけを殘して餘は盡く施してしまふと。併し此は有たぬ者の考で、實際金が出來たら案外彼金滿家同樣になつたかも知れぬ。富限の財布は口が小くて、貧乏人の腹太は昔からあり來つた事實である。併し其頃の僕は全くの共產黨であつた）或は忙しい菓子屋の店頭に上り込んで、カステーラの焦げつくを氣にする亭主に頭を搔き〳〵「誰か思ひ煩ひて其命を寸陰も延べ得んや」の說明を聞かせ、青年職人の無駄話する所を襲うては明夜の祈禱會に缺席する決心を翻へさせ、越後上布の單衣ねだる孃樣の頭上に「價貴き衣を以て

飾とせず善行をもて飾とせよ」の句を浴せ、所謂奬勵の職務を熱心に盡したので、「熱心な菊池君」の名と顏は忽ちにして三百の信徒に知られ、中にも青年は僕の言を喜び納れて、果ては來つて教會內の不平を漏らしなど、氣焰頗る盛になつたので、教會の執事が「菊池君、何卒若者を餘り教唆てずに置いて下さい」と內々賴んで來ると云ふ有樣であつた。

青年の不平も無理では無い、教會には色々弊害があつた。（何處の社會に弊害が無いものがあらう？）中にも僕の不快に堪へなかつたのは、平等無差別眞に精神的共和國たる可き教會に種々の閥があり從つて嫉妬猜忌陰謀など云ふ惡德がちらほら角を出して居たことである。（僕は忘れて居た、信者も矢張人間であつたことを）其は僕が着した其夜、祈禱會の席で直ちに感じた所であつた。座席一つ見ても、八字髭、金緣眼鏡、絽の羽織が眞先に坐つて、後になる程見すぼらしい風をして居る、多く教會費を出す者は低い鼻も高く、縣會議員縣官代言人など云ふ肩書のある肩は自然に張つて、北米土人が功名の人頭と一般、牧師が手柄話の實例にずらりと竝んで居る。金閥、官閥、職閥、――地位閥では無いか。古株の信者の長々しい祈禱感話は欠伸を嚙み殺しても聞き、新參の信者の禱は往々にして司會者の呼鈴に剪截される。此も一の信閥では無いか。尤も片腹痛いのは、祈禱會後傳道の事について相談會があつて、或青年の信者が口角沫を飛ばして熱心に或論議をすると、種々批評が出て、立消えとなつたは宜かつたが、やがて重々しい年寄株が頻りに咳拂して述べた建言は、一も二もなく採用され、加之其建言にまさしく立消えとなつた青年の所論と同じ意味であつた、此も一の閥では無いか。僕は餘り奇怪に思つたので、後で牧師に其事を話すと、牧師は笑つて、「年の功は仕樣がないものさ。言を弾丸に譬ふるなら、信用は火藥だね、火藥がなければ弾丸は透らない。先あせらずと火藥を積むさ」と答へた。其後僕は自身の意見が當つて居ることの見す／＼知れきつてゐるに拘らず、青二才の言として排斥輕蔑され、後では却て吾言つた通りの事が、他の年長者の名でずん／＼通つて行くのを見る毎に、齒痒くてたまらず、ピットと共に、「白髮何の尊ぞ、年少何の咎ぞ」と罵る言を纔かに呑み込んで、ぢつと堪ふる折々は、牧師の此言を思ひ出るのであつた。

併しながら世俗は兎も角も、神聖なる教會に此樣な閥が行はれたりするのは、實に奇怪なる話と、僕は竊に憤つて、攻擊の機會を待つて居た。

（五）

性急の傳道師は眞黑になつて働いた。六十餘日の滯在に、名高い後樂園も見ず、只管職務に從事した。信徒の奬勵は素より、未信者の誘導も非常に骨折つた。連夜說敎、路傍說敎、膝詰祈禱、惡戯小僧が投ぐる石の矢面にも「神よ、彼等を赦し玉へ」と祈り、長張短李が面白半分のまぜつかへしにも笑顏を見せ、情迫つては汗と涙を一時に飛び、聲を張上げ、地蹈鞴を踏み、腕をふりまはし、天を指し、「まるで狂氣」と云はれて少しも恥ぢなかつた。

僕は更に遠征の領分を廣げて、單騎貧民窟に乘込み、或は××村を訪うた。基督はパンの屑を少しも失はぬ樣に拾ひ集めよと宣うた。社會の屑を棄てず、其靈魂を拾ひ集めよ、との聖旨であらう。僕は惡臭を穿ち、汚穢を潛り、襤褸にまじり、癩病の婦にも「貴女」と云つて信仰をすゝめ、皮臭い××の手を握つては「兄弟」と呼んだ。昨日篋底を探つて、古い日記を見出した。左に揭ぐるは、即ち明治十九年の夏、僕が傳道地の貧民窟を訪うて歸つた其夜認めて置いたもの、一字も更へずに載するも强ち物數奇の

故では無い。

一歩踏込めば、臭氣鼻を撲つ。町とは名のみ、獸の小屋の幾個ともなく竝べるなり。砂地の上に細き木竹を立て、此木竹の骸骨に藁蓆を纏ひつけたる小屋、素より天井もなく、窓もなく、甚しきは床もなく、戸もなし。折しも雨降りの後なれば、砂濕ひて物のしめりたる臭氣は歩々鼻に滲み、黑める藁よりは汚れし雫、涕涙の如く滴れり。足駄を一方に着け、片足古草履を穿ち來るは贅澤、大抵は皆跣足、何の顏を見るも蒼黑き顏のみ。此頃の不景氣に立上る煙も絶々なり。

余は、左手に聖書を抱き、右手に一の尤も憐れなる小屋の戸を引離して、内に入れり。暫くは物の善惡も分かず。やゝあつて眞黑に煤けし屋根裏と、床と見え來りぬ。床、床は土より高きこと僅に三寸、荒削りの板なり。此床の左の端に、堆きものあるを、近寄り見れば、荒むしろを一枚敷き、上に襤褸を蔽ふ。襤褸の中より白きもの〻滿るを、猶寄りて見れば白髮の頭、少しく動く樣なり。

余は靜かに搖り起せるに、白髮の頭は襤褸を出で余が方に向へり。八十許りの老爺なりき。干からびて血の氣更になく、眼は惘々と乾き果てたり。涙を流す力もなしと見ゆ。

余は「病氣」かと問ふ。老爺は眼を閉ぢて唯其口を指す。既にして右手もて徐ろに襤褸を搔やり微かなる息つきて、三日食せず、と云ひ、余が立てる後を指せり。顧みれば、其處には缺け土瓶、眞黑の土鍋、缺け茶碗一つ、竹箸二三本散在す。水の氣もなく、火の氣もなく、冷やかに乾けり、此老人の眼の如く。

「飯釜は」と問へば、「稅が出されぬから役場の役人衆が持つて行かれた」と答ふ。「疊は無いのか」「それも御役人が」と答ふ。余は覺えず脣を噛めり。(愼云、僕は其時全くの無黨になつた。今も何か腹が立つと、黑塗馬車に爆裂彈でも投げたくなつて困る。彼は語をついで、一體はわるし、商賣は無し、御上は嚴重に聚斂をなさるし、食ふことは出來ず、寢るばかり——追付最早かたがつく」と。

余は袂を探れり。袂に金二十錢あり。余は直ちに出でて、米と干鰯を買ひ來り、之を老人の前に置きたり、此時此處彼處より集まり來れる憐れの一群、皆羨まし氣に余が顏を見つめたり。而も二十錢は此日の余が身代なりき。余は心に思ひぬ、「吁余が白井ならば」。と白井は山陽屈指の金滿家にて、信者なり。

此時老人の後より又一の白髮あらはれ來れり。此は其老妻なりき。彼女は先刻より暗黑の中に眠り居りしなり。未來の暗黑に移るの日も遠からざるべし。

余は聖書を開きて、彼等に暫く話し、終に其手を握り、跪きて祈れり。皆驚き、俯きて云ふ「まあ、汚い手を」

余は此日曜に會堂に來る可き旨を約し、歸れり。あゝ社會は此憐れむ可き輩を容るゝの餘地なきや。法律は唯富者強者をのみ護するの器なりや。彼等は世に生れて、樂を知らず、苦んで生れ、苦んで生き、また苦んで死す。彼等は心の樂を知らず、彼等若し不德の行あらば、是れ彼等の罪にあらず。

萬軍の主耶和華の神、願くは彼等を憐み玉へ。

次の日曜日に、彼等は果してどや〳〵會堂に

入つて來た。僕は恥しがる彼等を引張つて、會堂の上座に坐らせた。信徒の中には、目を側立つる者、憤を含む者、微哂む者、鼻を掩ふ者、實に千種萬樣であつた。中には、傳道々々と云つて、左樣無闇な事をせられちや困る、と呟く聲も僕の耳に入つた。併しながら信徒の苦情も、長くは續かない。僕の弟子等は此一回を限りとして、最早來なかつた。而して僕の貧民傳道も長くは續かなかつた。何となれば、彼等が求むるものは、神の道よりも衣食の道、僕は、先づ神の國と其義を求めよ。然らば此等の衣食はこれに附加せられん」と說くに、彼等は「耶蘇宗信者には御上からお金が下がりますか」などと云ふ。僕は自から恥ぢた。此は自から卑き彼等を欺くのである。僕は傳道の景物（と云ふのは俗な話だが）に米と干鰯を與へたに、彼等は本品を措いて景物ばかり欲しがる。併し景物の供給は大に限りあつて、彼等の需用は底ぬけである。此割合で行けば、僕がヴァンダルビルトかせめて三菱の親玉ならば知らぬこと、僕の身代では百萬遍の身代限をしても一個の靈魂を救ふことは覺束ない。併しやりかけた事は惜しいもので、僕は少し變則かも知れぬが、衣食足而知禮節の格で彼等の身體を併せ救ふの建議を教會に持ち出したが、彼金滿家白井翁の首唱で直ちに排斥された。其樣な高價な靈魂――加之虱だらけ垢だらけの――を買はうより、外に廉價の――加之ぴか〳〵光つた――が幾個もある、其方が上帝の經濟に適ふ、との事であつた。

僕は此頃の事を思ふ毎に、慚愧に堪へぬ。乘輿を以て人を渡す子產の仁、酢を隣に乞うて施す男の義には遙かに劣つた無暗の慈善、先方の利益を思ふよりも吾私情を滿足さすばかりの仁惠、眞心ではなく一種の好奇心、功名心、所謂あて氣から出た詭矯の行――惡くないまでも幼いと云ふことは免れぬ。

あゝ僕は若かつた。

（六）

あゝ僕は若かつた、若かつた。十七年何ケ月と云ふ齡をして、僕の眼には猶一重膜がかぶつて居た。其膜がかぶつた眼で眺むれば、理想の峯はつい谷一重、躍り越えても行かれさうに見え、實は其道こそ紆餘曲折の千萬里、行く程に行く程に近くなつたり、遠くなつたり、汗と血と涙を流して一生旅で暮すが人の運命と云ふことも忘れ、唯一息とあせつた結果は、忽ち息を切らして、足下の石に躓いた。

火の樣になつて働いた骨折は、大海に投げた一粟の痕だも殘らぬ。信徒の獎勵何の結果を生じたか。年寄株の眼顏は「若い、若い」と嗤つて居る。未信者の誘導――貧民窟の虱が會堂に落ちて、直ちに掃き出されたに過ぎぬ。此は僕の熱心の足らぬ爲ではあるまいか、或は僕に傳道師の資格が元來無いのではあるまいか、と竊に惑ひ、また其惑ふのを腑甲斐ないと悶え、僕の目的が潔白でなかつたのかと迷ひ、未だ眞の信仰と云ふものを知らぬのかと焦ち、教會や牧師に對する不滿の上に猶甚しい自家に對する不滿を覺えて、僕は半精神的半肉體的頭痛を發し、僕の生涯に珍しい不眠の病にかゝつた。

腹壁切開よりも、脫疽截斷よりも、苦痛は「實際」の荒々しい手に「理想」の眼の膜を切らるゝ時である。支那の詩人は、「脚力盡時山更好、莫將有限趁無窮」と吟じた。併しながら其無窮がつい眼の前に閃くに當つては、走らずには居られぬが僕等の常である。走る、走る、併し理想は映景の如く走つても追つても後ざまに逃げる。追ひ疲れて、ばつたり砂場に倒れながら、眼をあげて猶前方に彳む笑貌の「理想」を眺むる時湧き出づる涙こそ眞に人生に於て最苦最痛の涙であらう。「老年」は吾耳に口つけて、「諦めよ、有限に安ぜよ、無窮を趁ふなかれ」と

皺枯れ聲に囁く。併しながら僕等の涙眼には、如何しても彼詐つきの「理想」あの手招が見えて仕方が無いのである、諦められぬ、走られぬ、悶える――自殺は唯一歩の境だ。僕は告白する、眠られぬ夜半に獨り牧師の家の後園に出で、星だらけなる夏の夜の空を仰いで悄然と立つ中に、吹くともない風のすうと體を包む同時に、「死にたい」と思ふ念がむら／＼と起つたことは、一回二回では無い。鴉片を飲む様に、不可思議な、朦朧な、甘美い魔力を以て吾を引つける「死」の拘擁を脱るゝは中々容易ではなかつた。

僕は此心裡の騷擾を牧師にも祕した。牧師は世に馴れた古兵、青年の囈言と眞面目に聞いても呉れまいし、呉れた所で彼通りの氣焔で居た僕が今になつて阿容々々内兜を見するは、口惜しい話だ。僕は默つて悶えた。若し他の憂を身に擔はずば、僕は少なくも病んだであらう。他の憂と云ふは、曾根君の失戀である。

曾根君は當教會の信徒、關西學院では僕の一級上で、學校の青年會で、何時も道化役をふられる人、但理科には傍得意で教師を毎にやり込める、と云ふ事を知つて居た丈で、別に話もしたことは無かつたので、當地に來て彼人に戀人があると云ふ事を聞いた時は、やゝ意外であつた。

曾根君の心を擒にした婦人は矢張同教會に屬した信者、姓は池田、名は金子、某女學校を卒業した俊秀の女學士、雪白の面、十八と云つても通る當年二十一の美人（であつたと思ふ。何となれば、青年の眼には、渾ての少女は皆美人で、美人は盡く貴婦人に見える時代がある。僕も其頃は蓋し其時期に屬して居たから、僕の所謂美人は、主觀的美人であつたかも知れぬ。こゝに青年と云つたのは、青年男子の事で、青年女子にも果して渾ての少男は、皆好男子で、好男子盡くエライ人に見える時代があるや否や、僕は女でないから知らぬ。併し西洋の俚諺にも、女は男の不完全なものと云ふ事を直ぐ知つてしまふが、男は何時までたつても世界の何處かに理想的婦人が居さうにばかり思ふものだ、と云ふ事があるから、女性の夢は男性よりも早く醒めるのであらう）學問は少くも中學の教師が出來、英語は米國禁酒會の遊說員レビット夫人の演說を通辯した程の達者、オルガンピアノが上手で、唱歌がうまくて、それで如何にもしとやかな少女。僕も一度對話の榮を得て、婦人はやさしかる可し、つゝましかる可しと云ふ素論を少し述べると、彼女學士は吾を忘れた樣に同意を表して不圖云ひ過ぎたかと云ふ樣に口を掩うてさし俯いた。實に學問もあり、淑德もあり、面貌は備後、女は岡山と云ふ内にも、池田金子女史の如きはすぐれた者と僕はしたゝか敬つた。

此淑女と曾根君の間に、如何樣な戀の歷史があつたか、門外漢の僕は一向知らなかつたが、唯不思議な事は、英國歸りの文學士、加之信者、加之百圓どりの官員隈谷規矩之介とか、風采瀟洒として十歩の外に佳香のする紳士が其高女なる牧師を訪問かた／＼來て暫らく逗留する内、曾根君の顏は宛ながら澁を吞んだ樣になり、同時に文學士と金子女史と相伴うて夕方後樂園に行つたなぞ云ふ噂が立つた。而して、良禽は木を擇んで棲み、淑女はよき紳士を擇んで嫁すが自然の道理、未成品の曾根と履書の金箔ぬり收入の金鋲うつた既製品の隈谷とは勿論比べものにならぬ、今時の世に樹の木から育てて嫁入道具作るものがあらうや、金さへ出せばいくらでも上等の既製品がある、此は金子さんで無くても誰しも牛を馬に乘りかへる所と教會の俗論は頻りに飛んでもない方に雷同附和して居た。

（七）

或夜牧師の宅で、ロングフェローの論講があつて、彼隈谷と云ふ文學士、曾根君、僕、金子女

史、其他男女四五人一座に落ち合つた。此間からの評判もあるし、何となく殺氣座に滿ちて、鴻門の會にでも出た樣な心地であつた。やがて「ハイアワサ」の篇の講義が始まると、忽ち左る一句の解釋について、隈谷對曾根の衝突が起り、曾根君が青筋立てて爭ふと、隈谷氏は冷然として、

「匹夫も志は奪ふ可からず、頭腦が違へば解釋も違ふ、最早議論は止したまへ」

「匹夫――失敬、」と曾根君は立ちかゝつた。

「曾根君、々々」と牧師が制する。

「否、其樣な推をされちや困る、匹夫とは僕自身を云つたのです」

にやり笑つて、隈谷氏は金子女史とちらり眼を見合せた。實に瞬間の事であつたが、忽焉曾根君は身震ひして躍り上り、隈谷を突倒して、二三回踏み躙つた。

一座は總立。「失敬な、君」と云ふ聲。「一踏み殺すぞ」と叫ぶ聲、つゞいて米舂く樣な響。女の呀と叫ぶ聲。(此は顏をうたれた金子女史の叫であつた。うつたのは誰の手であつたか、足であつたか、混雜の際よくは知らぬ)「曾根君、曾根君」「逃げ玉へ、早く」「打殺すぞ」平和の家は忽ち修羅場となつた。約五分やつさもつさ揉め返した後、僕は漸く曾根君を介抱して其家に行つた。曾根君は年寄の母と唯二人士族家敷の外れにあまり豐かならぬ生計を立てて居た。

あゝ僕は生れて初めて戀の劇藥の人を惱亂さす狀を見た。而して初めて人の親の如何程其子を思ふかと云ふ事の一端を覗ひ得た。戀の反動で石の如く默つた曾根君と、おろ〳〵する母君の間に挾まつて、無經驗の僕は如何慰めて宜いか知らず、さりとて此場を見棄てかねて、一夜まんじりともせず、「男ぢやないか、しつかりし玉へ、しつかりし玉へ」と同じ事ばかり云つて居た。やゝ明方になると、曾根君の石の樣な沈默は融けて、雨の如き淚となり、戶棚の奧から竹の小行李を持ち出して、一抱程の手紙を一切の事情と共に僕の前にうちあけた。此は金子女史の曾根君に送つた「ふみ」であつた。「見て吳れ玉へ」と迫られて、僕は恐る〳〵一つ宛披いて見るに、未だ十五六の筆蹟もあれば(近い頃のは餘程稀であつた)英語まじりの讀みにくいのもあり、歌が書いてあるのもあり、言文一致もあり(僕は舊弊な男で、艷書は必ず參らせ候で來るものと思つて居たので、此等はやゝ意外であつた)滑稽を云つてあるのもあり飴の樣な文句もあり、「君は妾にうつり氣ある樣に云ひ玉へど、妾が心は鐵石よりも堅く侍る、君は妾が富貴利達を求むる樣に思ひ玉へど、妾の幸福は成業の人に嫁すよりも是れより業を爲す可き人と困難を共にするに侍るを知り玉はずや」「兄が日本の科學界に一新紀元を開き玉ふ日を今より信じて日待つものは此少妹」など云ふ句もあつて、要するに證券印紙張つた契約證書は無いが、雙方の間に立派な默契が成立して居たことは歷然と見える。

然るに其默契を無にして、彼少女は輕薄男子に僕を見かへた、と曾根君は瞋る。「其だから阿母が云はぬことぢやない、此頃の學問が出來る女は皆斯樣です、猫を被るのが上手で、若い男は直ぐ欺されてしまふが、本當は中々勘定だかで、すはと云ふと面をとつて如何樣な不實な事でもします。彼樣な女はいけない〳〵と阿母が云ひ〳〵したのを、卿が聞かないものだから、御覽な、御顏はお綺麗でも彼腐つた魂が卿の目にもお見えか――菊池君、貧乏程辛いものはありませんねエ、何かと云ふとひけばかりとつて」と母君は泣いた。聞けば聞く程、思へば思ふ程、僕は不思議で堪らぬ。彼淑女に限つて――萬一したら曾根君の思ひ違ひではあるまいか、此樣な手紙も書いた人、彼樣なしをらしい容子

の人が——兎も角もおせつかいな話だが、行つて様子を見てやらうと、僕は直ちに金子女史の家を尋ねた。

女史は居らない。父君に聞けば、昨夜電報がかゝつて今朝阪府の學校へ歸つたと云ふ。其足で牧師の家に歸つて聞けば、隈谷は昨夜立つたと云ふ。偖こそ彼噂も實、曾根君の疑も實、昨夜の二人の見合はした眼の意味も分かつた。咄、彼しをらしい顏で——僕は實に意外に思つた。而して四五日後、曾根君の母の許へとゞいた金子女史の手紙(辭令の妙を極めて居たが、畢竟其意は明白な約束した譯では無し、今後自身の事に故障を入れて貰ふまい、と云ふのであつた)を見ては、吾ながら切齒して、「如夜叉、如夜叉」と罵るを禁じ得なかつたのである。僕の女性に對する尊信は、一大打撃を蒙つた。

「其だから阿母が、彼女はよくない〳〵と口を酸くして言つたぢや無いか」と口惜し涙に咽ぶ母の言耳にも入れず、默るかと思へば呵々と笑ひ、泣くかと思へば牧師を罵り(牧師が二人の媒介者と曾根君は信じて居た)彼等二人を探し出して、血の雨降らさずには置かぬと息卷く曾根君を如何したら宜からうかと、相談の結果、當分讚州琴平在の親類に預ける事となつて、最早休暇も四五日になつた僕が途中警護の任に當ることになつた。

九月十日と云ふに、僕は曾根君と此初陣の傳道地を立つた、教會からは「御苦勞でございました」の挨拶を貰ひ、曾根君の母君からは、「如何した御縁で此樣な御世話になるやら」と涙ながらに船中の用心を頼まれ、吾失望やら人の心配やらに洋傘一本小行李一つの身も重く、此失望の子は彼失戀の兒を伴うて、悄々と兒島灣を乘り出した。瀬戸海を横斷する間は、片時も曾根君に眼を離さず、漸と琴平在の親類に同君を渡し、上帝と時日と骨肉の同情に同君の心の疵の治療を託し、懇ろに別を告げて、僕は多度津から神戸行の汽船に乘つた。

（八）

保命酒しば鰈さま〴〵の物賣る舟、艀、荷舟などがさつと漕ぎ開くと、汽船は笛を鳴らし水を泡だたせて多度津の港を離れた。

僕は荷物を蒸暑い下等室に置いて、甲板に上つた。日は暑くも、船の進行に風少しそよいで、而も海には波と云ふ波もなく、銅色の雲の影を蘸して鏡の樣な海の面、遊山に似たる穩やかさに、乘客の過半は甲板に薄べり敷かせて、日遮の下に胡坐かき肩肌ぬいで持參の酒をさしつおさへつまだよくは名も知らぬ知己と飲むもあれば、「せつせつせ」と歌ふ者もあり、近頃は船の競爭が盛んで何處の會社の船では船賃を一割に下げた上に手拭一筋冥加物に與れるの、横濱まで金の一圓五十錢もあれば行かれるの、此競爭が續けば無賃で載せた上に金巾の蝙蝠傘の一本位も與れる樣になるかも知れぬ、此樣な時に船に乘らぬは馬鹿、なんぞと種々樣々の話をして居る。宛ながら浮世の態を縮めてこゝに見る樣に、面白くもまたあはれに思はれた、實に船ほど人の縁を牽くものは無い。上等中等下等と位は分れても、畢竟浮世は乘合船、目に見えぬ船長の舵とりで、大人豪傑の火夫、水夫、歴史の船蹟をあとに曳き〳〵、永遠の海を乘り行けば、生れて乘る客、死んで下りる客、悲喜憂歡のさま〴〵を載せて、見るも杳かに思ふも遠き無窮の海原を何處までも何處までも行く——船は即ち浮世の雛形ではあるまいか。

僕は其處を離れて、船尾の甲板に行つた。此處には誰も居ない。半月形に船尾を覆うた格子甲板に腰をかけて機械のごと〳〵、客の話聲、つい頭上にはたゝく旗のそよぎを耳にして、大きな蜘蛛の絲ひく樣に船が繰り出して行く白い船痕の一里も二里も海面に殘るを目送り、船の

進むまゝに此方へ〳〵と流れ來る漁舟、盆石の樣な島山の煙立つ人家を載せてぐるりと廻るを眺めながら、心はさま〴〵の事を思つた。僕が傳道の失敗、今日多度津在に殘して來た友の身の上、其友の母の上、其れからひいて故郷の母の事、此年は歸省せよと云つて寄越されたのを寫眞だけ送つてつい歸らずにしまつたが、如何樣に案じて居られるであらう、曾根君の母君の痛心を見ても人の子の一人前の人間になるまでには親の心づかひは實に一通りではあるまい、其につけても青年に戀は苦の蟲よりなほ大敵恐る可きものである、と思ふ心は一轉して、一昨年の丁度今頃此處の海を通つた事、去年の夏此處を通つて歸る筈で思ひがけなく比叡の山に不歸の客となつた兼頭君の事を思へば眞に夢の樣な世の中、人の身の上、――涙にあまる思の重味に頭は自づと垂れて、眼は甲板を見るともなく眺めて居ると、左の方から何か黑いものが甲板を蝕んで來た。ひよい〳〵寄つて來るまゝに、見れば頭の大きな影法師であつた。僕は不圖見上げた。

紺飛白の單衣に角帶の大男が、僕の顏を熟と眺め〳〵立つて居た。

「卿は新吾ぢや無いか」

愕然と立上る其時遲く、大きな鼻は動き、細き眼は絲の樣に閃き、崩るゝ如く笑つて、

「はゝゝゝゝ、愼ちやまだ、愼ちやまだ、矢張愼ちやまだ。はゝゝゝゝ」

（九）

思掛けなき再會に、互に額見合はせて、彼が「大きく成んなさつた喃」と見とるれば、僕も新吾が大分落ついて身裝も一寸堅氣な商人と云つた樣な容子をまじ〳〵見詰め、暫らくは徒にや〳〵笑つて居た。

最初彼が一寸僕を識らなかつたのも道理、此前新吾に會つたのは僕が猶西山塾に居た頃で、指を屈すれば最早彼是五年の上になる。

「而して卿は一體何處に行くのか」僕は格子甲板に腰を下ろして問うた。新吾も腰かけた。

「新吾でござすか（彼は自から新吾と名いふを好む）新吾は大阪まで、而して愼ちやまは――本當に大きくなんなさつた喃」とまた僕の頭から足の爪先まで眺める。

僕は關西學院に在學する事から、夏休に岡山に行つた歸途である事を手短かに物語つて、

「卿は豐前の方に居る樣に聞いたが、矢張炭の方をやつとるのかね」

莞爾と新吾は笑つて、「はい炭は炭でござすが、近來は石炭の方をな――

と新吾は、不圖した事から肥前の某炭坑の所有主に見込まれ、今は其重手代の一人になり、今度も其所要で大阪に上る事を話した。實に三日見ざれば眼を拭うて見る、と古人も云つた。彼は最早昔の馬子では無い。何處かに、大勢の人を使つて、物馴れた風が備はつて見える。昔から性根の据つた男であつたが、果して會ふ毎に進歩して居る。彼が大きな鼻を見る毎に、僕は千荊萬棘をつき分け押分け進んで來る豪猪の鼻を想ひ起すのである。

「本當に久し振でござした喃、愼ちやま。はゝはゝ、斯樣大きくなんなさつたに愼ちやまは。可笑しうござす喃愼ちやま、此れから若旦那と云ひます、喃愼――其樣ぢやなか、あの――若旦那。はゝゝゝゝ」

何時會つても愉快な男だ。僕も「若旦那」の御禮では無いが、「新吾、卿」を「中村、君」にあらためた。

五年ぶりの話は中々盡きない。新吾は事務員に談じて、僕の行李を自分の中等室に移させ、それ茶を持つて來い、餅菓子だ、と船僮を怒鳴り、毛布を敷いて呉れる、鞄の中から梨子を出して剝いて呉れる、他の乘客の目を側立てて見

る様な次第。問は問を促し、答は答を産んで、菓子は平げ、茶は飲乾し、梨子は心と皮ばかりになつても、話は滾々として盡きない。

僕は育英學舎出奔以來の概略を物語つた。宇和島の經驗、關西學院の苦學、新吾は呟々唸つて頷いて聞いて居つたが、話し終ると極印でも捺く様に其巨頭でがくと一つ空を舂いて、

「其處ぢや（餘り聲が大きかつたので、隣に寢て居た客が愕然跳ね起きてきよろ／＼四邊を見廻した）新吾もな、其は大分骨が折れましたぢや。骨は折れたが、延年寺の和尚様（愼ちやま、覺えて居んなはるか）和尚様が書いて呉れさつしやつた立身出世の心得な、一、嘘をつくまじき事、一、借金（戻されぬ）すまじき事、一、女と博奕と大酒つゝしむべき事、一、人間の爲た事は人間に出來る事、此を毎日讀んでは腹にをさめたお蔭でな、兎に角、新吾と云ふ和郎は嘘は云はん、盜賊はせん男と云ふ事が些は知られてな、まあ借錢もなし、此大きな鼻も無事、（右隣の客が笑つた。其れから愼ちやま――若旦那、喜んで下はれ、新吾も此頃は一通り手紙も書きますな、東京の新聞も社說論說が先大半分かる様になつてな（彼詩の碁の歌の豚の云ふやつは分かりもせねば大嫌ぢやがな）辛抱ぢや、辛抱ぢや、愼ちやま、世の中は氣根くらべぢや、面白いな」

愉快な男ではある、何だか先月來の事で少しくづをれかけた僕の氣分を太鼓たゝく様にたたき立てた。

僕は妻籠の消息を問うた。彼は其方面の職に暇無しで、僕の母の方へも（遠方ではあり）最早何年と云ふ程無沙汰をして居る位で、妻籠の方も頓斗出たきりだが、風の便に聞けば、菊池の分家彼堅吾叔父の家では、長女のお藤が養子を置き去りにしてのつぺりした小學教員と駈落し、性の知れぬ女を叔父が妾にして大分家内が亂れて居るさうな。

「否、愼ちやま、天網ばり／＼漏らして疎ならず、正直が頭に神宿るで、今に彼家は丸潰れになりますぢや。愼ちやまや、お福老様は今一息の御辛抱ぢやでな。お袋様は御達者ぢやろか。野田様でもお變りはなかぢやろかな」

僕は母が近頃は野田家に居ぬ事、野田家では別に變りもあるまいと思ふ事を話した。

新吾が聲の大きいので、否でも耳に入る話を、隣に居た六十許の田舍者らしい爺が聞くともなく聞いて居たが、此時一寸辭儀して、

「失禮ながら貴君方は野田様の御知己でございますか」

僕は親戚と答へて、誰氏と問うた。彼は野田伯父の隣村の隱居で、此年會社の競爭で船賃が非常に廉いのを幸ひ、伊勢參宮から本願寺參詣を兼ねて上る途中と云ふ事を話し、

「野田様も御氣の毒な事で」と挨拶した。僕は其後久しく野田家へ無沙汰をした上に、母から何とも云つて來ないので、此挨拶の返事一寸しかねて居ると、彼爺は一向頓着なく、

「飛んだ事でございました、身代限なさらんでも、如何か仕様があらつしやりさうなものに、お氣の毒な」

僕は驚いた。

（十）

驚いて、樣子を問へば、偖は未だ御存知無いかと彼爺は小聲に左の顚末を物語つた。

野田伯父の奇行は久しく縣下の評判になつて居たが、此一兩年は殊に甚しかつたさうな。中にも、今春村に立派な小學校を建築すると云ふので、（まだ外に橋梁のかけかへなど、材木入用の事もあるので）官林の無代價同樣の拂下を願ひ出たが、係官が黑木某と云つて先年或事件で伯父に撲たれたと云ふ歷史つきの男で、中中埒明かぬを、伯父は腹を立てて、未だ正式の手續も終へぬに、己が許すと村の者を指圖して

どし〳〵伐らせた。黒木茱は天の與へと雀躍して、忽ち官林盗伐の騒ぎを惹起す。伯父が拘引される。事重大になりかけたのを、伯母や親戚の婦人(蓋し僕の母であらう)や二三の老友が骨折つて知事を説き、外ならぬ公共の裨益を慮る爲めの過失だからと云ふ事になつて、免許の日附を更めて、何千圓とかで其伐りかけた部分を拂ひ下げることになつた。併し何處にも「無いものは金」で、其中幾分は村の出金や殘の材木抵當で融通がついたが、二千圓ばかりは如何しても伯父が引受けねばならぬ事になり、家屋敷殘らず賣拂つてしまつた。僧學校は建つたが、伯父の生計が立たぬ。因で伯父夫婦は四里程田舍の山里に、小さな茅舍を求めて、今は其處に暮らして居るさうな。

「如何も飛んだ事で、皆御氣の毒に思つて居ります。はい。でも人間の慾が恐ろしいものでな、野田樣の御親戚――エヽと、左樣々々、笠松樣、其笠松の後家さんが、何か少しばかり貸金があつたのを、あらう事か、血の出る樣な屋敷代の殘りがあつた内から、到頭拵つたと云ふ話で、野田樣が打殺すと云つて怒りなさる、其は夫人が御心配だつたさうで、――本當に世の中が面倒になつて、迂濶に善事も出來ん世の中になりましたなあ」

と語り終つて、彼爺は歎息した。新吾はぢいと聽いて居たが、「愼ちやま、段々負荷が重くなつて行きますね、其肩に負へますか」と云ひ貌に僕の顏を瞶めた。實に左樣だ。別に親しい親類もなし、鈴江君は女であつて見ると、傾いた伯父の家をまた建て直すは即ち恩義をうけた僕の責ではあるまいか。

僕は手負猪の樣な伯父の怒の顏と、急に白髪の殖えた伯母の顏を思ひ浮べて、離れて居るとは云ひながら此春の事を今までも知らずに居た僕の迂濶を悲み、且は一言の報知もせぬ母を恨めしく思つた。惟ふに母は、修行中の僕に言つても詮ない凶報を傳ふるを忌んだのであらう。

樣々の話に、播磨灘も明石海峽も何時過ぎたやら覺えぬ内に、船は燈影水に亂るゝ神戸の港に着いたので、僕は大阪まで直行する新吾(歸途には是非學校を尋ねると云つた)と彼老爺とに別を告げて上陸し、學校に歸つた。

關西學院に於ける僕の第三年の第一期は事も無く始まつて、五日ばかりすると、果然新吾は學校に尋ねて來た。僕は學校の盛大に呆るゝ新吾を引張つて、遍く校内を觀せ、其れから新吾が是非御馳走すると云ふので、神戸一と云ふ牛屋の離座敷に、ロースをつゝいて寛話した。僕は新吾の問に應じて、卒業後の目的――即ち基督教傳道の目的を話した。新吾は大不承知である。僕は生煮の葱を飲み込み、肉の黒焼を嚙つて、箸で牛鍋の緣をたゝき〳〵、精神的事業の貴重なる所以、傳道師は後生願の老耄にあらずして志士仁人の事である所以を反覆論じたが、如何しても新吾は聽かぬ。

「其は傳道師とか貧乏士とか云ふ者も大事な役目ぢやござせうが、菊池の愼太郎樣が傳道師ぢや、人は何と云つても此新吾が承知は出來ませんぢや。お袋樣も其樣でござせう。總理大臣でも(新吾は新聞を讀むから昨年の官制改革を知つて居る)陸軍大將でも大學者でも大金持でも腕一つでなりはうだいと云ふ今時の時勢に、愼ちやま――若旦那、此新吾――覺えて居んなはるか、馬牽いて『新吾、新吾、うぬが、わりが』なんて村の馬鹿和郎共に云はれた此新吾が罷り違へば國會議員になつた夢でも見ると云ふ時勢に、「愼――若旦那程の方が耶蘇教の坊主――情無いぢやござせんか、後生願は老爺になつてからで澤山でござす」

と萬丈の氣焰を吐いて、大の身體を搖ぶる拍子に、天井に釣つてあつた金色の蠅除玉が正に牛

鐸の上に落ちて、微塵になつた。二人は顔見合はせたが、莞爾ともせずまた小半時論じた。新吾は如何しても聴かぬ。僕も「勘考して見よう」で一先づ論陣を繰りあげた。新吾は一席の辯論で僕を改宗させぬを遺憾に思つた様子であつたが、併し「聴き置」かれて滿足の由を述べ、其れから僕の出世は自分の立身よりも猶嬉しく思ふ事、此れから高等教育を受くるについて學資の入用があつたり、また其に限らず何でも金の入用がある時は、決して人に談ぜず、此新吾に兵糧奉行を勤めさして呉れる様にと、繰り返し頼んだ。(若し僕が力學の志堅きを見ずば、彼は必ず此月から關西學院の學資を負擔しようと云ひ出したであらう)而して書籍代と云つて、五圓の包を呉れた。僕は一寸考へ 喜をのべて收めたので、新吾は更に喜び、別るゝ際にもまた繰りかへして傳道師などにならぬ樣にと呉々も頼んだ。僕はフランクリン「致富要訣」と云ふ册子を贐にして、新吾と手を分つた。

新吾が去つて、五六日すると、伯父の事を尋ねてやつた手紙の返事が母から來た。其文意によれば、伯父伯母は目下城下から四里の田舍に住んで、別に縺りも無く、村の者も親切にして、骨を晒すと云ふ程の貧でも無く、伯父は例の公共心で、村に桑を植ゑさしたりなぞして、暇には銃猟など(如何な血迷つた鳥、獣が伯父の筒先に獲られるだらうと僕は怪んだ)して居るさうで、無用の心配はせぬ様に、と書いてあつた。僕は絶えて久しい無沙汰の詫やら、事變の見舞(延引ながら)やらをかね一通の書を添へて、牛肉の罐詰を伯父に送つた。

(十一)

僕は非常に多忙であつた。毎日の正課の外に、朝夕の學僕の務、一週八時間の夜學教授、まだ其外にブラオン師が聖書註釋の草稿を飜譯するに、頗る時間を費した。併しながら此最後の務は、一は文學の習練にもなり、一は些少ながら報酬を齎らしたので、僕は進んで之を引受けた。其後の經驗でも、兎角人間は忙しい時程仕事がよく出來るもので、僕は毎日此丈の仕事をした上に、まだ運動もすれば、新聞も讀み、無駄話もすれば、樂讀樂をする餘裕もあつた。僕が學校の雜誌に掲載した「青年傳道師の懺悔」と云ふ一種奇怪な文字も、即ち此百忙の中から、零碎の時間を偸んで、書いたものである。

或日心理學の課終つて散ずる時、教師は特に僕を呼び留めて夕飯を食ひに來い、と云はれた。此教師　菅先生は矮小男の痩ぎす、殊に短氣を以て有名で(校長と異名がついて居た、總ておこると云ふ謎だ)凡そ學生に一たび此先生に叱られた經驗が無い者は無い位。加之信仰の點に於て頗る正統派と意見を異にするので、宣教師仲間の受もあまり宜くない。併し學問がしつかりして、殊に英文學の素養があつて、教員會議の席でも往々米國大學出の宣教師をやり込める位だから、兎に角必要な人物として忌々ながら置いてあつた。先生に同情を有つて居たのは、校長位なもの。僕も此先生には、不釣合の肥大な細君があつて時々恐ろしい夫婦喧嘩をすると云ふ噂を聞いて居た丈で、教場で會ふ外は、一度も其私宅を訪うた事がなかつたので、思ひがけない夕飯の案内を受けて、吉凶を測りかねた。

併し胸中を遍く搜つても、最近一ケ月間には、別に譴責を受くる覺えもなし、御馳走に招んで叱ると云ふこともあるまい、と思ひ切つて、其夕菅教師の宅を訪うた。直ぐ書齋に通されて、――四疊半の書齋に、几と青表唐冊と算を亂して跌居つて居たので、人間の坐る處はやつと一疊位――先生は眞鍮の煙管で煙草をのみながら、僕は煎餅を噛りながら、色々の話をして。百歩の鬼は五十歩の人、五十歩の人は十歩の兄弟とやら、可畏い先生も側へ寄つて打とけ

て見れば、案外やさしい人である。頓て、彼肥大夫人の手料理であらう、恐ろしく鹽辛い午餐飯——先生はあまり饒でなかつた、俸給は大抵書籍に化けたから。惟ふに家内合戰の原は此であつたらう——の馳走になつて、また書斎に歸ると、先生は胡坐かき、僕にも膝を崩させ、偖端を改めて僕が明年卒業後の目的を問はれた。僕は神學科を修めて傳道師になると答へた。僕は猶僕の目的は確かに此點に向つて居ると信じたのである。先生は少し沈吟して居たが、「成程其事は薄々聞いた、また先頃雜誌に出た彼『青年傳道師の懺悔』を見て君が志の程は知つて居るが」と冒頭を置いて、彼一篇の文字は近頃面白く讀んだ事を話し、

「如何です、文學をやつては。乃公が不信仰で云ふ譯では無いが、何も傳道師にならなければ上帝の道にかなはぬと云ふではあるまい。大工ばかりぢや家は建たぬ、砲兵ばかりぢや戰爭は出來ない。薔薇の隣に百合を咲かす造物者の意は、各自の花を開けと云ふのぢやないか。人間の第一職分は、自家の天職を探究するのが第一で、其天職を何處までも遂行するのが第二の本分であらう。若い内には、理想の光が眼の前にちら〳〵するので、往々精神的色盲になつて、飛んでも無いものを吾本色と心得違をすることがある。決して强ひる譯では無いが、菊池君、先老婆心と思つて乃公の言ふことを聞いて吳れ玉へ。乃公の僻目か知らぬが、君は確かに天賦の職分を持つて居られる。先日『青年傳道師の懺悔』を讀んで、乃公は確かに其と認めた。傳道も宜い、教育も宜からう、政治家も望ましい、併し乃公の見た所では、如何あつても君の天職は別にある。傳道必ずしも壇に立つて祈り、晩餐の葡萄酒を調合し、日曜の說教をするに限るまい。鞭を執つて教場に臨む教育なぞはそも〳〵迂濶な話ぢや無いか。一管の筆には百年の說教が出來る。日本を教場にして教育することも出來る。人が自己の立場を知らぬ程憐れむ可き事はあるまいと思ふ。其所を得ぬ總理大臣と、其所を得た小學教員と、何方が幸福であらう、何方が上帝の旨に適はう？ 何方が天の經濟に合はう？ 其は專門傳道師にして同時に文學に堪能なる者も無いでは無い。併し二本のステッキは、丸太一つに如かない。勿論天才は必ず己を主張せずには居らぬ。押しまげられても、磁石の針は北を指す樣に、天賦の能力は必ず一度は現れて來る。秤をとつても、バルンスの吟心は動く。東印度商會の簿記臺に坐つても「エッセイ、オヴ、エリア」は書かれずには居らぬ。併し出來ることなら順路を行きたいでは無いか。喃、菊池君。今大事な準備時代だから、乃公が斯樣言ふのだ」

（十二）

此期の初、雨降の土曜の夜、僕の部屋に同級殘らず打寄つて、樣々の戲も仕飽き、饅頭は竹皮になり、豆は殼になつた擧句、誰かの首唱で全級の未來を品定したことがあつた。アルファベットの順で、一人宛品定して行く。誰か原案を出す、修正が起る、多數に決する、能書を以て自任する某が紙と筆を持つて控へて居て、片端から筆記する。曰く、赤澤某、警視總監。曰く、馬場某、割烹店の入婿。大學の教授もあれば、郡長もあり、米相場師もあれば、牧師もあり、執達吏もあれば、全權公使もあつて、得意、不得意、顚覆る騷ぎであつた。やがて、僕の番になると、誰やら頓狂な聲で、「小說家」と云ふ原案を出した。ヒヤ〳〵と云ふ聲が起る。「ノー〳〵、菊池君は自からムーデ ホイットフィルドを以て任じとるぢやないか、須らく傳道師に改む可し」「否、吾輩は未來の關西大學總長を以て擬する」曰く何、曰く何、種々修正も出たが、矢張原案賛成の聲が高くて、僕が躍起となつて抗議

を試みたにも拘らず、到頭原案通りにしてしまつた。恰も佳人之奇遇の第一冊が出て、幽蘭紅蓮が非常の跋扈を極め、小説熱が大分關西學院にも起つて居たが、或時僕は戯談半分「諸君は彼様ものに感服するか、僕が筆をとるなら彼様な拙いものは書かぬ」と大言したのを、彼頓狂聲が小額悪く思つて此原案を出したのであらう。僕は立腹した。小説家――戯作者――士君子の事であらうか、人を馬鹿にするも程がある。其れから側に居た男が慰めて、何有、ヂスレリーも小説家では無いか、ユゴーも小説家では無いか、人民に自由平等の理想を吹き込むには奈何したらよからうと板垣君が問うたら、乃公の小説を讀ますが宜いと云うたもユゴーで無いか、小説家何の恥づる所があるか、要するに其人にあるのだ、菊池君にも似合はぬ、甘受す可し甘受す可し、と到頭誤魔化してしまつた。

其とやゝ趣は違ふも、意外の菅先生が勸告に、僕は種々様々の感情を以て耳を傾けた。彼の厳酷寄癖人を好かず人に好かれぬ菅先生が斯様親切に言つて呉れらるかと思へば嬉しくもあり、また其言に幾分の條理ある様にも思はれる。併しながら斯様な事は決して輕々に然と云ひ否と斷ず可きでは無いので、僕は篤斗熟考する由を答へて猶文學の何れの方面を指す可きであらうかと、其目を請ひ問うた。先生は頻りに頷いて、先づ英文學の研究を勸め、其中に君が執る可き方針は必ず歴然と見えるであらう、と云つて、架上の書を三四冊抽いて貸された。其は「ハムレット」解釋、カーライルの英雄崇拜、テーヌの英文學史等であつた。

あゝ僕の砦塞は未だ壁も乾かず矢間も明かぬに、最早入れかはり立ちかはり強敵を引き受けねばならぬこととなつた。而して尤も心外なのは、砦の内に内應者が潜んで居るのを發見したことである。目的堅く定つて、金輪際動かぬ大地に立つて居る積であつたに、愕然眼を開けば、足下の地はずる／＼動き出した。あゝ僕は大地の上でなくて、游島の上に立つて居たのである。僕が傳道の目的は、一年も經たぬに、最早搖ぎ出した。

其と氣づいた時の失望は、實に一通りでは無かつたのである。其様な飽きつぽい事で、何事が出來ようぞ、何處までも初一念を貫くが男子の本分と齒を切つた。併しながら、彼時の決心は果して天意をまさに感得したのであつたか、其とも吾一時の感情では無かつたか、若し其様とすれば之を株守するは僞主に殉死するよりも愚な話で、吾眞の天職を空うするの責は却て僕の頭上にあるかも知れぬ。否々、其が信仰の冷やかに、俗心の湧いた證據、天に通ずる荊棘の路の淋しく辛きを厭うて、浮世の榮華につゞく大道を濶歩する氣になつたので、即ち名利の奴となる所以だ。否、待てよ、其名利と云ふやつも、私に溺るればこそ禍なれ、使ひ様では非常な武器である。口に獻身と云ひ安心と云つた所で、無いものを捨てるが何の獻身、出來ぬものを諦めたとて其が安心と云はれうか。「後生願は老後の事」と新吾が俗論の中には、實に一大眞理を含んで居るのではあるまいか。若者の生悟り、十七八の珠數爪繰りは、意氣地無しでなければ僞信心。今ですら斯様に心が動く様では、今後の事も思はるゝが、其と云ふのも青年の氣血は奈何しても活動せずには居らぬ故であらう。負けるが恐さの中立は卑怯の骨頂、世間に成功が出來ぬから傳道師になるなぞは情無い話。出來ることなら、競爭場裡に打つて出で、勝つか負くるか腕の力も試し見て（人に見せる爲めではなく、己の安心思ひ出の爲め）名と云ひ利と云ふものも獲て（己の用でなく、人の爲めに）自己の力量の程を知つた上で、然る後快よく其渾てを抛つて、翻然洒脱の

境涯に入つて見たい。素裸のまゝ神の寶座の階級の下にかじりついて、亞眠をのべつに言はうよりも、天から賜はつた手もあれば足もある、此殺生でも野山かけ廻つて吾弓勢（若し弓矢が身に備はつて居るならば）の程も試し、獲物を提げて天壇に燔祭を獻げたいもの、其方が確かに天意に適ふのであらう。否々、惡魔は由來口說上手、尤らしい口をしてずる〳〵人を淵に引込むもの、祈禱は此處と跪いて吾心の眼を開き・正しき道を見せしめ玉へと祈る最中、不圖「左樣すれば、母の心も傷めず」と思ひ、咄、何事ぞ祈禱半にと自から責め、何有、水到渠成は絕對の處世法、芥子粒程の意地を張つて蟷螂程の腕を揮はうより、感ずるまゝに云ひ、云ふまゝに行ひ、身をあげて自然の成行に任すが却て天意に從ふと云ふもの、と自から宥め、とつおいつ思案に暮れた。

併しながら僕は吾決心の日に〳〵守弱くなつて、踏みこたふるも唯申譯の樣な心地がして、己に不滿を覺ゆるの結果は、些細の衝動にも焦躁易く、病氣ぢや無いかと怪んで問ふ者もあつた。

否、僕は病氣ぢやない。少なくも生理的病氣ぢやない。僕の病は心――身の大疾に憐んだのは、僕では無く、二百里外の伯父である。

丁度明治十九年の十二月廿四日と云ふに、母の手紙が屆いて、野田伯父が中風にかゝり、此冬を過されぬかも知れぬと云ふ事を報じて來た。

（十三）

僕は母の手紙を見ると、早速歸省に決した。幸ひ其翌日から冬期休業になつたので、聖書註釋翻譯料を受取ると、直ぐ其日の汽船に乘つて、翌々日の朝博多に着し、直ぐ腕車に乘つて僕が第二の故鄕へと急がせた。時は恰も十二月の廿六日、煤掃き餠搗きの騷ぎも賑やかに、正月の支度とり〴〵忙しい狀を見て、不圖憶ひ出せば僕が育英學舍を出奔して東上の途についたのも、丁度三年前の此月此頃、三年四年の月日は實に今其處の櫨の木を立つた烏のぱたりと一つ羽たゝく間に過ぎてしまふ、人の一生も思へば吾乘る車の輪の上になり下になりしばらくも定まらぬもの、彼強健な大漢の伯父が命且夕に迫らうとは――何卒着くまで事無くて居て呉れゝば宜いが、母も定めて今日明日に僕が歸らうとは思ふまい、など思ふほどに只管先のみ急がれて、車のめぐりもどかしく、川風寒き筑後川の渡を渡つて福島と云ふ村驛に一夜を過し、翌朝夙く立つて曾て住馴れし城下に着いたのは最早黃昏の頃であつた。

母の住居は城下はづれの士族屋敷とかねて手紙で承知して居たので、杉籬に格子門何の家も多くは似寄つた屋敷小路を彼方此方尋ねて居ると、今夕飯を終へたのであらう十歲位の男兒が犬を連れて向側の家から駈け出して來た。呼びかけて、「菊池」と云ふ婦人の住む家を問うたれば、

「菊池？　家の姉樣の先生の家？　直ぐ其處のね、竹のある家」

と二三軒先きを指した。其處に車を下りて見ると、果然門札に母の手蹟で小さく「菊池愼太郎」と書いてあるのが、黃昏の薄明に讀まれた。騷立つ胸を押へて、音なへば、ランプを持つて三十許の婢があらはれた。

「誰氏樣？」と云ひながらしげ〳〵僕の顏を眺めた。

「阿母は？」

「ま、如何致しませう。若旦那樣で――道理でまあよく御肖まして――」

僕は奧の方を覗き込みながら、「阿母は？」

「さ、何卒奧へ――お袋樣は、郎君、昨日野田樣の方へ――」

「野田へ――左様。如何様な容態かしらん」―。
「如何やらまた御悪い御様子で」と姉は火鉢をあせりながら、「都合によつたら二三日歸られんかも知れぬ」と、「郎君、其様御有いまして」
「左様か。其れぢや直ぐ行から」と僕は膝を建て直した。
「ま、郎君、御草臥でございませうに――其れでは一寸御僎をさし上げますから」
姉はすぐ立つて行く。茶を飲みながら、四邊を見ると、此處は六疊の室、一間の床に、一間の押入、床には猶苔の水仙を生けて、掛地の梅月は見覺えのある一軸、僕が六七歳の頃樂書した不思議の鳥がまだ梅の枝にとまつて居る。此は祖先傳來の物とやら、僕も樂書の咎によつて小半日庫の中に閉籠められた程のもの、破産の時にも此丈は殘してあつた。片隅には小形の机、一隅には裁縫用の大きな篦板、切り張りした障子のはづれから、次の四疊の機（織りかけた上に風呂敷を覆うてあつた）が顔を出し、柱にかけた手細工の狀差には、僕の手紙が插してある。綺麗に片づいて、古疊に塵一つ落ちて居ない。
種々母の消息を聞きながら、姉がすゝむる熱飯を嚥込み、寒いから見苦しくもとかけて呉れた古い赤毛布を頭から引被いで、僕は伯父の居村に向つた。
伯父の棲む山下村は城下から四里、昔西山塾に居た頃一二回兎狩に行つたことがある。車は無くも、幸ひ十七日位の月が霜の如く冴えて居るので、僕は影と唯二人、凍てた道を足駄踏鳴らして、只管急いだ。道は畑中を穿つて、一里に一村、二里に一落、人通りも絶えて淋しいことだ。三里許行くと、忽ち野川の畔に出た。川の向うには、月に背いた一帯の山黒く横はつて居る。此れからは一本道、川堤傳ひに溯ると、山は次第に寄つて來て、川はくの字に曲り、道は橋を渡つて一寸した丘を上つて居る。此橋を渡る時、夜をこめて城下に裏白賣に行く馬子に逢つて、伯父の家を聞くと、「先生様」の宅は向山下の高みで、茅葺の家と教へて呉れた。
馬子に別れて、うす闇い石だらけの坂を上り、丘を向うへ下ると、即ち山下村である。月影流るゝ川を中に、此方に人家が六七十、彼方にも五六十、此方は山蔭で眞闇だが、向山下は一帯に月光を浴びて家も木も石も寂然と眠つて居る。大方最早夜の十二時過ぎでもあらう、燈の影もなく、人聲一つ聞えぬ。唯何處か遠方の一軒家に犬が吠えて居る。姿は見えぬが、唐碓の時を隔てて軋々と唸る音が聞える。其間には、月を碎いて流るゝ川瀬の音のさあ〳〵と松風を鳴らす樣に聞えるばかり。夢中の景を見る樣な。
不圖己にかへつて、僕は川に下り、飛石傳ひに彼岸へ渡つた。馬子が教へた通り、坂路を上つて、似た樣な茅葺を夫れか此れかと覗いて見、耳を傾けて見たが、寂然して此れぞと思ふ家も無い。起きて居る家は無いか、何處ぞたゝき起して尋ねようか、と思ひ〳〵右の方の徑に入つて、肥壺の側へ來ると、月の光では無く黄色の光が何處からかちらちらと漏れて來た。ふりかへつて見れば、僕が立つて居る徑の上に、桑の生垣をした家があつて、其處から縷の樣な光がさして居る。此處に尋ねて見ようと、僕は生籬を潜つて、一寸裏庭と云つた樣な明地に立つと、人の話聲が聞える。恰其處に筧の水が小鼓をうつ樣に落ちて居て、話聲がよくは分からぬ。
僕は竊と雨戸の傍へ寄つて耳を傾けた。
「嘸案じて居らさう、喃」
僕の胸の鼓動が忽ち止つた、と思ふと、波の如く拍ち出した。
「彼も嘸案じて居りませう、昨夜も歸つた夢を――」
「阿母」

内の話聲はぱつたり已んで、固唾を呑む氣はひが聞えた。

僕はホト／＼雨戸をたゝいて、

「御免」

「誰氏？」母の聲。

「阿母、私」

「エー」

戸は忽ち二尺ばかり明いて、僕は光の流れの中に立つた。

「ま、卿は――」

「愼さんぢやないか」

僕は忽ち母と伯母に手をとつて引きあげられた。

（十四）

母と伯母と夜伽の火鉢にあたりながら伯父の病を僕が如何樣に案じるであらうと話して居た其六疊へ引ずられる樣に上つて、暫らくは僕も母も伯母も言葉の出途を失つて居たが、

「よく歸つた喃」

と母はやう／＼云つて、かき立てた行燈の光に、なつかしい彼清しい眼で、喰入る樣に僕を見詰めた。僕も三年の間に眼立つてふけた母の顏を眺めて、胸一ぱいになつた。

「噂をすれば影で、本當に喃、唯つた今のこと阿母と噂をして居た」と、伯母は火鉢の火をあせりながら、「よう來て呉れた喃、まあ大きくなつて――」

「伯父樣は如何です？」僕は漸と問ふ隙を見出した。襖越しに、忽ち高く忽ち低く人の寢息が聞える。

「今日は亦些と宜い方でね」と伯母は一寸襖の隙から覗き「お眼がさめたら嘸喜びなさらう。此樣に晩く、嘸寒かつたらうな、愼さん」

「手紙を見て直ぐ立つてお出かい」

「は、今日夕方家に着いて、直ぐやつて來たんです」

「左樣」伯母は熟々僕の顏を眺め、「よくまあ。鈴江も丁度昨日――鈴さん、鈴さん」

「はあ」

襖が明いて、羽織の紐を結び／＼束髪の娘が出て來た。

此は鈴江君であつた。三年の間に、喫驚する程大きくなつて、まる／＼と肥えて、女學生じみて居る。

鈴江君は僕が出奔した翌年の春上京して、三年ぶりに今回歸つたので、實は叔母（伯父の妹）と一處に歸る筈であつたが、叔母なる人が足痛で寸歩も移されぬので、鈴江君一人歸つたとのことである。

熱い茶を喫み、火鉢を中にして、伯父の眠を擾さぬ程の小聲に、途切れ／＼の話をした。伯母の話によれば、此春破産して此村に引込んで以來、伯父も案外機嫌よく、養蠶の利を說いては村の家毎に桑を植ゑさしたり、病氣は御祈禱や葛根湯では行かぬと云つて一里程の處から醫師を移住させたり、獵をしたり、山上りをしたり、村人も「先生樣々々々」となついて、芋を掘つたと云つては持つて來、盆の小麥團子を拵へたと云つては寄越し、此分なれば壽命が延びて身代限りが仕合せかも知れぬ、と喜んで居る內、伯父はつい此程村の若者共が新に買入れた龍吐水の使用初式に臨んで、其半に不圖倒れたので、其れから最早體が自由にならず、言は出るが話がよく分からぬと云ふ容態で、城下から召んだ醫師も此寒は六ケ敷いと云つたさうな。

話途絶えて、四人共に火鉢の火を眺めて居ると、襖の彼方にうゝゝと唸つて、一つ咳嗽が聞えた。僕は伯母の後に跟いて、奧の間に入つた。行燈の光で見ると、此處も六疊位で、其眞中に、枕を高くして、仰向けに寢て居るのは伯父である。ふつと僕の顏を見て、

「呍？ 大一郎――如何して來た？」

僕はぐつと詰まつた。伯母は俯き、母は側向いた。鈴江君が、
「阿爺、愼太郎さんですよ」
と云ふと、伯父はいよ〳〵怪訝の顔、「愼太郎愼太郎」と云つて居たが、
「ホウ、愼どんかい、愼どんかい。何處へ今まで行つとつた？　此處へ來い、〳〵」
出さうとした手は力なくばたりと落ちた。僕は膝行寄つて、其手を握り、
「伯父樣」
と云つた切り（會つたら彼樣云はう斯樣言はうと途すがら思つたことは何處へやら）顴骨高う、眼は惘々として、而も莞爾々々子供の樣に笑ふ伯父の顔を見つめて、聲を呑んだ。

伯父は大晦日の夜まで永らへた。其間、燈火の明るく闇くなる樣に、知覺がつくかとすれば、忽ち失せ、「愼どん〳〵」と呼ぶかと思ふと、「大一郎大一郎」と呼び、村の蠶種を上州から取り寄せねばならぬと獨語つこともあり、またもとの屋敷に居る積りで「豚小屋を取りはらつて蜜蜂飼はう」なぞ云ふこともあり、伏見鳥羽を云ふかと思へば、「西郷未だ止めんか」と歎じ、實にさま〴〵であつたが、併し始終莞爾々々して居た。唯待ち兼ねて、飯を呼ぶ時のみは、駄々を捏ねる子供の樣であつたが、伯母と母は頻りに珍味を工夫しては、機嫌をとり、食事は伯父の手がかなはぬので、鈴江君がいつも箸をとつてすゝめた。（僕が先月送つた牛肉の罐詰の伯父に喜ばれたことを聞くにつけても、今度あまり急いで何もかも忘れたのを殘念に思つた）僕も晝夜伯父の傍を去らず、妻がかへりに抱きかゝへ、手足を摩り、伯父は知らずも、せめて吾心やりに十分看護の手を盡した。時々其骨太の體を摩りながら已に亡骸の樣な寢顔を眺めては、寤めたらば一言たりとも未來の安心を說かうと思つても、寤めて子供の樣な莞爾々々を見てはまた思ひ斷え、唯安らかに此大なる、不幸なる靈を迎へ玉へと祈つた。

大晦日の午後は殊に機嫌よく、冬ながら日影の暖かなるに、障子開かせて村の者共が大紙鳶の試揚をするのを、莞爾々々眺めて居たが、其夕方から次第に昏睡の狀態に陷つて、午後の容態の良好のに欺かれて城下に歸つた醫師が追かけ使者と打伴れてまだ返らぬ其內、丁度夜十二時と云ふに、伯父はぽつかりと眼を見開き、「國會が開けたか、どれ——」と云ふを末期の一句、かなはぬ體を半分起しかけた。驚いて扶くとすれば、忽ち大木の倒るゝ樣に體はばたりと僕の腕に倒れて、最早伯父の大なる靈魂は此世には在なかつた。

（十五）

旅に病みておきながら夢は枯野を駈け廻り、孤村に死して伯父の魂は其多くの事を企てて、一の事をも成し遂げぬ世をば遺憾の眼に顧みたであらう。思へば伯父の一生は、彼アマゾンの河に生ふてふ鬼蓮の、葉は徒らに大きくて、此と云ふ花もなく實をも結ばず、例へば翅傷めし大鷲の志はやれど身從はず、鳶烏にさへ笑はれて、世を憤り、身を悶え、吾と吾腸を食ひやぶつて斃れしごと、思へば哀しく、而して其產を破つて孤村に病みながら、龍鍾とした腦中にも國家を思ふ暮年の壯心、國の前途を氣遣ふ末期の一句にも櫪に伏す老驥千里の志あはれて、愈哀しく、伯父の死顔を眺めて死別の悲にはあらぬ涙の湧き出づるを僕は抑へ難たのである。

あゝ伯父は逝いた。十二から十六の年まで子の如くに僕を可愛がつて呉れた伯父は、まだ何の報復をする間もなく、一時の誤解に生じた行違をまだ十分に直す間もなく、永久不歸の人となつた。切て其息ある內に歸つて、末期の床に侍したのを、吾思ひやりに、假令儀仗兵祭粢料等

の榮典は無くも其愛する妻子に護せられて、村人の飾らず作らぬ同情に圍まれて、和やかに瞑したのを、伯父の記憶に伴ふ遺憾の中の慰としなければならぬ。

正月の三日と云ふに、伯父は川向うの清泉寺と云ふ寺の樫木の下に葬られた。墓は大一郎君の墓に並んで居る。大一郎君の墓は彼屋敷を賣拂ふ時、此處まではる／＼移したので、伯父は常に、乃公が死んだら大一郎が傍に埋めるが宜い、決して坊主なぞ呼ぶな、立派な石塔を建つな」と云つて居たさうである。葬式は至つて質素であつた。伯父が異常の人物で敵の多かつた爲め、一は場所の僻地であつた爲め、會葬者は親戚の者二三人（笠松後家も三次郎君も來なかつた）伯父の舊友總代が一人（西山先生は他縣に逗留中であつた）伯父のもとの居村の者が三四人、あとは皆村の者。村の者の厚意は實に尋常では無く、棺舁ぎ、墓穴掘り、臺所の手傳、人數が多くてまごつく位であつた。此村はもと伯父の祖父なる人が、郡代を勤めて居た時の管下で、水源に中山をしたて、寺子屋を設けて算筆を奬勵し、心學道話の樣なものを聞かして村の風儀を正すなど、色々徳政も多かつたので、村人も今に到る迄野田家に一方ならぬ厚意を有つて居るのであつた。

葬式濟んで二三日は、其れこそ眞に大風の吹いた後の樣に、僕等母子が居なければ、伯母も鈴江君も恐らく悲悼に堪へかねたであらう。夜は殊に寂しく、彼奥の六疊に火鉢を圍んで、つい四五日前までは此處に臥して居、今は白木の位牌になつて立上る線香の煙透しに吾等を眺めて居る亡き人の上を物語つた。伯父は逸事の多い人、分けて僕が出奔後の三年間は、奇行も多かつた。不圖途上に魚賣人に會つて、一荷の海鼠を買ひ占めて、往來の者に配つたり、山の蕨を馬に三駄も負はせて知人の許へ贈つたり、或時にまた奉加帳を腰に下げ白馬に乘つて知己親類の家を乘廻つて（大久保彦左の樣に）死んだ後の香奠はつまらぬ、生きて居る内に貰つて置かうと己が石塔料の寄進につかせたり、無一文で錢屋に上つて一圓のかたに其白馬を置いて歸つたり、車夫を裸にして茶代を拂はせたり、盜賊を叱つて酒を飲まして歸したり、時人傳の材料は伯父の生涯に滿ちて居た。伯父は彼屋敷を手離すを餘程殘念に思つたと見えて、買主が定つて、明日にいよ／＼引拂と云ふ日は、何の監督もせず、唯屋敷中を彼方此方ぶらついて、林樹桃木を撫でては「よく生れよ」など云つて居たさうな。僕は耳にとめて此話を聽いた。

伯父の逝去について、今後の處置を協議の結果、鈴江君は矢張上京して勉學をつゞけることになり、伯母は種々片付次第城下に引出て母と同居することに決した。其と聞知つてか、村の者共が頻りに伯母を引とめて、決して御不自由はさせませぬ、何卒何時までも此村に御在なされて、と歎くに、伯母の袂はまた一入濕つたのであつた。

伯父の一七日が濟むと、僕は母と一先づ山下村を引揚げた。

（十六）

母は蝙蝠傘を杖いて黑天鵞絨緒の下駄、僕は桃色になつた赤毛布を頸に卷いて薩摩下駄を踏み鳴らし、打伴れて山下村を出で、歸途についた。此十日ばかりは、伯父の事で殆んど夜の目もあはず、人の出入の多くて、母と差向ひに話す機會もなかつたので、此日は途すがら問ひつ答へつ、語りつ聽きつ、四里の道をゆる／＼話しながら歩いた。霜枯れ時の田舍道を面白いものとは、斯時知つた。

僕は手紙に書き漏した出奔以來の遭遇を話せば、母は僕が出奔後伯父の怒の甚しく其爲め伯父の家を引拂つて別居するに到つた事、伯

母が中に立つて苦心した次第、今年伯父の家の破産の時母が伯父に知らさず奔走心配した事、今は獨居が却て都合好く春夏の養蠶、秋冬の機織、餘暇は近所良家の子女に裁縫習字など教へてつましくすれば活計に事を缺かず、猶僕が將來の爲め一絲一毛も積んで居る事、已に舊冬も左る有志の人々が女子英語學會と云ふものを設くるについて是非其監督をして吳れと頼んで來て居るが此は伯母に讓らうと思つて居る事などを話し、猶僕が新吾の事を物語つたに對して、昨年の春彼お重の父の勝助爺が絕えて久しい御機嫌何かた〲淸正公樣へ願ほどきに出た事、延年寺の和尙樣は入寂した事、堅吾叔父の家では山師にかゝつて鑛山で大分身代を傾けた上に近來叔父が胃癌とかになつて非常に苦んで居る事、病氣の父、氣弱い母、妾に攪されたあとの身代を負うて次女のお芳が一人で苦勞して居る事、手紙は恥しくてやれぬと云つて勝助にくれ〲傳言を賴んだ事を物語つた。僧話は僕が卒業後の事に及んで、僕は未だよくは分からぬが、今一二年は學校の生活をするかも知れぬと云ふことをざつと話した。母は手紙の上で思つたよりも、逢つて餘程安心した樣子、決して干渉する譯では無いが、自己を安賣する樣な事はすな、幾年でも待つて居るから、此方の事には掛念なく、第一等を目ざして吳れ、縦へが今迄他人の厄介にならず獨力で道をきり開いた其覺悟を何時までも失はずに居て吳れ、年毎に歸省するよりも、結構な品物送らうよりも、早く月給取になつて引取つて吳れるよりも、其れが第一の孝行と云つた。

しみ〲した話に、何時か道の二里ばかりも歩んで、丁度坂下へ半途と云ふ處が石の處へ來た。往還の側に小家程の大石が臥虎の如くに蹲つて、注連繩を張つた大榎が其上に葉も無い枝を廣げて居る。其蔭に一寸した茶店があつて、草鞋、馬沓を吊し、駄菓子、飴、かちれた蜜柑などを竝べ、七十位の老媼が日光を横頰に受けて續々木綿をひいて居た。僕等は此處に暫らく腰かけて、老媼が汲んで出す澁茶に咽を濕した。

往來に母の顏を見知つて居る老媼は、早や伯父の死を聞き知つて「彼お丈夫なお方が」とくやみを述べ、猶一場の逸話を語つた。(伯父の逸話は、此往還の石の樣彌る處にごろ〱して居た) 其は、丁度明けて去年の收穫時分、或夜破るゝばかり此小屋の戶を敲く者があるので、老媼は恐々ながら戶を開けて見ると、頰被りした雲衝く程の大男がぬつと立つて居たので、老婆は膽を潰し、お盜賊樣、命ばかりは御助けと賣溜の錢を入れ物の枡ごとさし出して平伏した、すると彼盜賊は呵々と笑つて、錢は入らぬが、腹が減つて溜らぬ、飯を吳れと、冷め麥飯湯漬にして七八杯平げ、ついでに些寒いから此を借りて行くと老媼が着ふるしのちやん〲を被つて、錢は有たぬからまた與ると、言ひ棄て悠々と出て行つた、老媼はやれ〱一命を拾つたと胸撫で下ろし、其れから逢ふ人每に昨夜の不敵な强盜の話をして居たが、或日馬の上から「おい」と呼ぶ聲に眼をあげると、先夜の强盜が莞爾莞爾笑つて、「先夜は重疊、生憎錢入を忘れたから――それ飯代ぢや」と素晴しい金具つきの煙草入(此も破產の名殘)を投げて通つた。强盜は野田樣であつた。

老媼が話に、僕等は涙まじりの笑聲を立てて居ると、呵々と下駄の音が近づいた。不圖見ると、古い臘虎帽に黒紬の紋付羽織、懷手して大きな緒の下駄を穿いた中老人が、萌黄の風呂敷包を提げた丁稚を伴れて、前を通りながら此方を見た。

「や、尊老は――」

驚いて立上る僕。立どまつて怪訝な顏の老人。

「誰人だつたかな？」
「尊老は清磨君の――御忘れでございますか、
菊池――」
「あゝ、愼三郎（老人僕の名をば間違へて居る）さんだつたか。此れは不思議な處で――」
　實に不思議な處で不思議な人に逢ふものだ。此老人は卽ち僕の舊友松村清磨の父君、僕が清磨君に伴はれて此老人の家に行つたのは最早六年前、十四の春であつた。

（十七）

「貴君が餘り長つたものだから、見忘れてしまうた」と云ひ〱松村老人は茶店に入つて來た。
　母は座を起つて、一禮し、席を掃つて老人を請じた。
「あゝ、愼三郎君の母君？」
「愼太郎が母でございます、初めまして」と母は慇懃に禮をした。
　僕と松村は莫逆の中であつたが、母は初めて松村の父君と會つたのである。以前松村老人が一寸伯父の家に來た時も、懸違つて母は會はなかつた。
「其樣して、貴君は矢張城下に居なさるか」と老人は僕の顏を見た。
　僕は關西學院から野田伯父の見舞に歸った事、母は城下に住んで居る事、を話し、清磨君の近況を問うた。
「あゝ、申し晩れたが、野田樣は如何も笑止な事で、嘸御力落しなさつたらう。――清磨も達者で居ります、北海道の方にな」
「北海道に？」
「はあ、農學校に、札幌の――彼奴も百姓になとしなさうと思うて、北海道へやりました」
　此三年越、一向消息を聞かなかつたが、偖は札幌に居るのか。
「何時城下へ御出浮で？」と母が問うた。
「やあ、此れは御存知ないも尤ぢや。老拙も愚息（清磨ぢやない、長男でござる）其愚息が商賣の都合もあり、田舍にばつかり居ると子供も大兒も馬鹿になつてしまふから、丁度――最早明けたから去年の十月城下へ引越してな、野田樣は先年御目にかゝつたこともあるし、菊苗や家禽を世話して下さつたこともあるから、丁度一月ばかり前に御尋ねして見ると、彼屋敷は他人の名前になつて、野田樣は田舍にお出の樣子で、一寸御尋ねせう〱と思ひながら、つい不精をやつて――昨日不圖した處で、御不幸の事を聞いて、實は落膽した譯でな、墓參なとせうと思つて今日は出かけて來ました」
「まあ御遠方の所をわざ〱――如何樣に姉も喜びますでございませう。其樣して何處に御住居でございます？」
「はあ、老拙は坂町、貴女は――榎小路、其れは遠くも無い處を、些も知らずに居ました。愼三郎君、阿母と些遊びにお出なさい。併し最早そろ〱上京んなさらうな」
　僕は最早學校も始まつて居るから、不日東上する由を答へた。
　老人は突と身を起し、「左樣なら、お袋さん。何、道は聞いて知つとる、老拙はおつとめが大嫌ぢや（僕が母と道しるべに戻らうかと小聲に相談するのを老人聞いたのである）左樣なら」
　丁稚を促して出て行くかと思ふと直ぐ取つて返した。
「お忘れ物？」
「はゝゝゝ、老媼、茶代を忘れた」と天保錢五六枚どさりと投げ出して、松村老人は行つてしまつた。
　僕等が歸途の話の題目は、また一個殖えた。而して僕は清磨君の母君の人柄を知つて居るので、母が話相手のまた一人出來たのを心竊かに喜んだ。
　僕等が歸つて程なく、伯母も鈴江君の上京が

餘り遲延するので、あとを村の知邊に賴んで、母子打連れて出て來た。二軒の家内が一處になり、二人の上京が一時に落合つたので、狭い家が愈狭く、それ茶碗が無い、箸が足らぬ、蒲團を借ると云ふ騷ぎ。鈴江君は終日「阿母、わたしの襦袢は何處にあるでせう？　叔母樣、針は何處にありますの？　愼太郎君、あなたわたしの革鞄を知らないこと？」と物ばかり搜して居ると、母が笑つて「家が廣いから物が紛失つて困りますね、はい、はい、出してあげませう」としまつて置いた戸棚の中から出してやると云ふ始末。伯母も此混雜に少しは悲哀をまぎらした樣であつた。

男役に會葬の禮廻りやら、何やら角やらで、僕は松村家を尋ねる暇も無く、思ふ樣に母や伯母に傳道する機會もなく（唯一度聖書の文句を引いて、伯母を慰めたが、併し伯母は唯慰めらるるを嬉しく思つて、肝腎な聖書の文句に注意しなかつた）勿論舊友先輩を訪ふ閑も無かつたが、唯一日伯母の寄留届を戸長役場へ出しに行つたついでに、一寸廻り道して、なつかしい彼育英學舍を尋ねた。

十町四方は草葉の數さへ諳じて居るなつかしい土地、早や七八町の邊に來ると、僕等が革命の地造だと云つて土塊投げ合戰をやつた麥畑、或晴夜の湯歸りに高橋と云ふ男が板橋から落ちて「高橋、高橋より落つ」と云ふ秀句を生んだ小川、枯草を燃して百姓に叱られた畔路、何處か其處らに十四五の菊池愼太郎が莞爾笑つて立つて居さうに思はれて、僕の胸は打騷ぎ、此を出ぬけると學校が見えると云ふ竹藪に入ると、僕は狂氣の樣に獨笑した。

藪を出ぬけて、眼をあげた。不思議、何も無い、唯一面の麥畑。僕は愕然と立どまつた。

（十八）

萬一したら場所違では無いか。併し以前學舍の窓から每も眺めた隣村の八幡の大銀杏は、依然冬枯の村を抽いて、寒空を衝いて居、練膽修行の一課として夜中相張に行つた墓場は、依然二本の杉を擁して累々と灰色の墓碣を見せて居、土塊合戰の時每も伏兵が起つた肥料壺の藁屋根は、昔ながらに一羽の鴉をとめて居る。彼育英學舍は何處に消え失せたのであらう？

一歩每に霜融の泥がくつついて重い下駄ひきずつて、麥畑の中に入り、確かに學校のあつた位置と思ふ邊に立つた。何も無い唯一面の麥畑、褐色の地に織り出す緑の綺の幾段も〳〵底寒い冬の日影に榮ゆるとはなく唯匂うて居る。

「如何したのだらう？」

と僕は獨語つた。冷たい風が何處からか颼と吹いて來て、滿目の麥は「知らない〳〵」と云ふ樣に、一齊に頭を掉つて居る。

「本當に如何したのだらう？」

と僕は足下の吾影法師に問うた。啞々と云ふ聲がしたので、不圖眼をあけると、一羽の鴉が肥料壺の屋根を立つて、彼方の冬枯の村を指して飛んで行つた。噫育英學舍、駒井先生、此麥畑――吾は浦島の子ではあるまいか。

良久しく佇立んで居たが、僕は太息ついて、麥畑を出た。干大根を二三本入れた畚をつつかけて、一人の老農がぶら〳〵やつて來た。

「爺さん、此處らに學校があつたが、如何なつたか知らないかね」

「何、學校？　左樣、左樣、若者達が軍の眞似事をするといつちや菜花畑を荒らして困つたが、最早一昨年潰れたでがすよ」

「左樣？　潰れた？　最早何處にも何も無いのかね？」

「左樣さね？　よくは知んねえが、何でも建家は賣れるし、何もあんめえよ。何かね、貴君は其學校にでも入學る積で來なさつたかの？」

「何、其樣でもないが　有難う」

老爺に別れて、僕は今更世事の變遷の劇しきに胸を撲たれ（後で聞けば、育英學舍は僕が出奔した翌年、主管其人を得ない爲めに、自然瓦解し、家は賣れ、學生は散じ、唯彼皿鉾先生が城下の片隅に十四五人の書生を集めて、敎へて居ると云ふことであつた）駒井先生や舊友の上を考へながら、ぶら〳〵榎小路の家に歸つた。

歸ると、頗る怪しい手つきで襦袢を縫つて居た鈴江君が、

「愼太郎さん、好い同伴が出來てよ」

「好い伴侶つて、誰です？」

「松村の母君が嬢さんを連れて上京るのですつて――今歸つたばかり」

「嬢？――淸磨の妹か知らん」記憶帳を繰つて見ると、成程僕が遊びに行つた時、八歲位の莞爾々々した女兒が居た。

「左樣でせう、十四ですつて――可愛い孃、わたしが世話をしてあげる積なの」

世話も可笑しい、先御自身の其袂の綻のお世話からなさい、と惡口が出かゝつたのをぐつと呑込み、「靑韈が萌えて結構」と獨語した。

「靑韈て何？」

「鈴江君の樣な女學士の事です」

「わたし其樣に茶かすこと嫌ひ――、女だつて學問してはならぬと云ふ仔細はないわ。フオセツト、マダム――」

「其樣ですとも。僕も大贊成ですとも。日本中の女が皆エラクなつて、男が飯焚――」

「澤山冷かして頂戴、人が眞面目に云つてるのに。本當に貴君はすれて來なすつたのね」

鈴江君の氣嫌當る可からず、僕は笑ひながら舌を捲いて、奧へ背進した。伯母の話を聞いて見ると、松村の妹のお敏と云ふ娘が、平生東京に行きたがつて居た所に、先日松村老人が野田伯父の弔儀に來る、伯母が其答禮に行くして、不圖鈴江君が近々に上京する、僕も神戸まで行く、と云ふ話が出たので、彼お敏君が是非一處に行きたがり、愛孃の事ではあり、同伴も好し、高等小學を卒へたからと思つて居たが、其では今回遣らう、其れにはお敏君の母も東京見物かた〳〵送つて行つて、兎も角も學校に入れて來よう、と云ふ話になり、今日其打合せかたがた母子打連れて來たとの事であつた。母も伯母も好い同伴と喜んで居た。

何やら角やらに日數たつて、一月の十五日と云ふに、漸出發することになつた。今回は海路長崎に出ることになり、伯母も母も艀の出る處まで送つて來た。問屋の前まで來ると、待合はせて居た松村列（松村老人と其僕は送りに、母子は旅裝して）が立つて僕等を迎へた。久し振に淸磨君の母君に挨拶して、見ると、其後に紫のシヤツ、赤襟、黃八丈の綿入に黑奉書の羽織、銀杏髷に梅の花簪を插した、色の透徹る樣に白い、雛形の女兒が莞爾々々笑ひながら立つて居た。是れがお敏君であつた。僕が淸磨君の家に遊びに行つた頃は、未だふさ〳〵した振分髮を披つて、人形を負つて居たが、最早遊學などと生意氣を云ふ樣になつたか。思へば早いものだ。

離別は如何な場合でも、餘りよくないもの。伯母は眼を赤くして、鈴江君の羽織の襟を直しながら、こま〳〵東京の叔母への傳言を述べて居ると、此方には松村の母君が其僕に留守中よく老人に氣をつける樣に色々云ひ含めて居る。送者、行人、別れて艀に乘るまで打濕つて居た。

「お連は好し、お天氣は好し、何だかわたくし共も書生になつて上京りたくなりますね」と母が埠頭の段に立ちながら、沈默を破つた。

「いや、お連れが連れで大安心でござる、愼三郎さん、（老人まだ斯く云ふ）お世話になります」

「左樣なら、松村のお袋樣。愼さん、賴みますよ」

「愼太郎よく氣をつけてお出、鈴さん、左様なら、東京の叔母様によろしく」
「左様なら」
「左様なら、御免遊ばせ。良人行つて參ります」
「阿爺、左様なら。お淋しうございませう」とお敏君が初めて銀鈴を振る様な聲で明瞭と言つた。
松村老人はほろ〳〵落淚しながら「心配すな、心配すな、病氣せん様勉强するが宜えぞ」
櫓鳴つて、艀は岸を離れた。

（十九）

僕等の一行は長崎に着いて、横濱行の汽船に乘り更へた。
五島海峽を溯つて、玄海を廻る間は、北の氷藏から吹き來る寒風波を挑げて、船體の動搖甚しく、松村母子は枕が上らず、大分船に馴れた僕すら少々怪しい心地、悠然として三度の辨當を平けるは獨り吾勇敢なる鈴江君のみであつたが、船瀨戸內海に入ると、大分穩やかになり、皆々人心地つき、寢て居た者も起きて隣同士挨拶を始める始末。松村の母君も、やう〳〵ペンキの臭と機關の響に馴れて、隣の女客と言葉をかはし、四方山の話をする様になれば、鈴江君は其頃大分流行つて來た毛絲の編物をしながら、屋島と壇浦は同地異名で、安藝の宮島と嚴島は全く別、太閤様が昨日其沖を通つた博多に陣どつて元寇を鏖にしたなんぞと驚く可き誤謬に滿ちた歷史地理を、默つて胡亂氣に聞いて居るお敏君に授け、僕は時々其話に冷評を插みながら、他の客から借りた近頃の新聞を展げて、鹿鳴館の舞踏の、假裝舞踏會の、學生英語演劇のと、近頃西洋崇拜者風の帝都に吹きすさぶを慨嘆し、また風日穩やかな時は、一同打連れて甲板に上り、僕が指點の下に綺石の様な島山の翠を迎へて帆船往來しばらくも止まぬ景色の妙なるを賞翫した。鈴江君は寧ろ菓子でも食つて客室に臥ころんで居るを好んだが、お敏君は場所珍しいのであらう、やゝともすれば甲板に出て見ませう〳〵と催促した。
お敏君は實に妙な女兒であつた。莞爾々々笑つてばかり居るから、何も分からぬのかと思ふと、本人は勿論、鈴江君も松村の母君すら氣づかぬ僕が袂の綻を見つけて、母君に囁いて縫はせる。始終無口で居るが、ぢいと人の話を聞いて、幼いながら獨で判斷を下して居る様子。三人の女性の保護を引受けた菊池勳爵士には、餘程心を用ゐたが、其處は男の意到つて手隨はぬ所多く、松村の母君が初旅の心細く兎角家の事を氣にしたり、愁場でも流石に女は女鈴江君が亡父を思ひ母を懷ひ出して鬱ぐ時、男の保姆役には持餘すことも多かつたが、此様な時には無口のお敏君がよい〳〵機嫌をとつた。とると云つても、眼にもとまらず、耳にもたまらぬ微妙の早技、畢竟淸々しい心胸から自然に流るゝ氣あひの所爲で、無爲而化と云ふのであらう。鈴江君は妹でも得た心地で大得意、當初の宣言通り、頻りに「世話」をやいて居た。松村の母君が躊躇するに拘らず、お敏君の銀杏髷を東髪に結び直してやつたり（東髪と英語は其頃の婦人社會の二大流行であつた）學校は是非自身の入つて居る淑養女學校になさいと强ひたり（僕は其女學校なるものを知らないが、鈴江君に徵して或は足下から鳥が立つ的の教育をする所ではないかと危んだ）一寸甲板に出るにも、「お敏さん、階梯があぶないから、用心なさい」と云ひながら己が袂の新理のペンキの觸るゝをお敏君が後から竊とおゝけるに氣もつかないで、飽まで姉を以て任じて居た。
同伴ある旅は早いもの、二十六灘何時か過ぎて、攝津灣の夕日に響く汽笛の音に、最早神戸かと驚いた。時間があらば須磨明石案内しようと云つて居たが、玄海の風波に着が晩れて碇泊

時間をきりあげるとの事で、其目算もはづれ、僕は船中近づきになつた商人夫婦に一同の世話を頼み、さて別を告げた

「菊池さん、有り難う、御親切に色々御世話になりました。隠居にも早速其樣申して遣はします。――本當にあとが淋しくて詮方があるまい」

と松村の母君は羽織を被せて呉れながら別を惜しんだ。

「左樣なら」鈴江君は一揖し、お徹君も默つて一禮した。

「左樣なら、鈴江君、氣をつけてお出なさい」

云ひ棄てて僕は小行李を提げながら艀に下り、ふり仰いで見ると三人は甲板に立つて居る。

僕は今漕出す艀に立ち、帽をとつて一禮した。松村の母君は微笑んで答禮した。

「左樣なら、早く上京つていらつしやいな」と鈴江君が呼んだ。お徹君は鐵欄につかまつて、まじまじ此方を瞰めて居る。

また一禮して、腰を下ろす途端、不圖向うからさつさと漕ぎ來る艀を見て、愕然立ち上つた。

「先生――菅先生！」

紛れも無い先生だ、肥大夫人も一處に居られる。

「や、菊池君か」

「何處へお出になります？」

「東京だ」

何の用でと問ふ間もなく、鈴江君等の上を託する間もなく、三挺櫓の艀はさつと兩方に行違つた。

（二十）

關西學院に歸つて、第一に耳に入つた新聞は、彼の菅先生が學院教授を辭して東京に赴いたと云ふ事であつた。全體何の爲めに、正月早々其樣な事をせられたのであらうか、仔細を聞き糺して見ると、先生は宣教師派の綜合排斥運動の犧牲となつたのである。先生が宗教上の持論の正統派の教義と相容れざる所多きは、已に前にも云つた通り、且其人物の狷介峻峭にして、學問あるにまかせ、往々宣教師輩を舌端に侮弄する樣な事もあつて、雙方の間に久しく惡感の潛伏して居たのは、此も已に述べた通りである。而して其破裂を來した最近因は、菅先生が新年始業の當日德育講話をするに當つて、「迷信と信仰」と云ふ題をかゝげ、アブラハムが其子イサクを犧牲にして上帝を祭らんとしたのは、當時カルデア邊に流行せる迷信の餘風に化せられたもので、信仰の模範とす可きでは無い、總じて迷信は何時の世にもあり易いもの、洗禮とか聖餐とか云ふ儀式の上に拘泥して宗教の眞精神を忘却する如きは、即ち一の迷信で、宗教の罪人であると云ふことを演說せられた。所で、宣教師間には非常に物議が起り、斯くの如き異端邪說を公々然稠人廣座の眞中に演說するとは、我々を侮辱したも同然、所謂基督教教育を以て主義とする此關西學院に斯る教師は到底置く可からざるものであると、曾て菅先生と教授法の爭論に言ひ負けて腹に怨を蓄して居た首座の宣教師が躍起となつて運動し、終に菅先生を罷めるか、宣教師の總辭職、從つて學校の補助を悉皆引拂ふの結果を甘んずるか、と進退ならぬ手詰の談判をしかけた。其に就ては校長の苦心一方ならず、彼プラオン師の如きも仲間の宣教師の怨を買ふまで中に立つて色々調停の勞を取つたが、宣教師連の火の手中々をさまらず、遂に菅先生自から校長の苦心を諒して辭表を出し、袂を拂つて東京に去つたと云ふのである。彼艀の上でちらと見た先生の顏に、常にもまして忿恚憤激の色が漲つて居たのも、當然である。

僕の心は憤に滿ちた。何と云ふ宣教師輩の跋扈であらう？ 菅先生を見殺にした滿校の學生、實に何と云ふざまであらう？ 僕は枕に就いたが、如何しても寢られぬ。夜十一時と云ふ

に、蹶と起き出て、豆の様な燈火の蔭に、安着の報知を母に書いた墨の未だ乾かぬ筆を執つて、滿腔の孤憤を瀉らした。菅先生の貸された文學書類は、眼前に並んで居る。辭の上に見た無聊無賴の先生の顏は、歴々と眼の前に立つて居る。僕は殆んど考へもせず、書き流し、書き飛ばし、駿河半紙五十餘枚さら〳〵と書き果てて、戛然と筆を擲つて、玻璃窓の東雲に對した。題は「基督教を過るものは誰ぞや」と云ふのである。「余は自から基督教を信ずる者なり、余は菅先生に對して恩怨ある者にあらざるなり、然れども今回の事たる實に默止す可からざるものなり、我基督教の爲めに、我關西學院の爲めに、思想の自由の爲め、言論の權理の爲めに、嗚呼我滿校三百の同窓諸君、幸に耳を余が孤憤の言に假せ」と云ふ句を冒頭にして、菅先生が學殖饒かに學者として直往勇進の氣性に富む事實を擧げ、堂々關西學院の如き私立學校を以てして一個の大膽率直なる學者を容るゝの餘地なきを慷慨し、「基督教を過る者は誰ぞや。世界萬民の爲めに上帝の下したまへる眞理の專權を壟斷する者は誰ぞや。パリサイを嘲つて己れ天國の鍵を緊握する者は誰ぞや。宗教改革者の子孫と稱して第二の羅馬法皇たる者は誰ぞや、吁誰ぞや、基督教を過る者は誰ぞや」と疊みかけて彼基督教徒と稱して寛容の精神に乏しき輩を攻撃し、博愛を唱へて漫に藩籬を作り、形式を先にして宗教の魂を忽にし基督教の大旆を偏僻の糞土に塗らす者あるを痛罵し、次第に鋒鋩を露して「堯の子に丹朱あり、舜の弟に象あり、ワシントン、フランクリンの子孫には何人かある。學殖の富無くして人の能を妬み、『羅馬に入つては羅馬に從ふ』可きに漫りに自家の偏僻を他邦の民に課せんとする者は、基督教を過る者なり。恩を賣り、義を衒ひ、己を尊るを知つて異風の民を敬するを知らざる者は、基督教を賊する者なり。『狐は穴あり、天の鳥は巣あり、然れども人の子は枕する所なし』然るに彼輩は高給を貪り、美屋を建て、料理番を使ひ、避寒避暑して、福音道を傳ふと云ふ。嗚呼彼何の道をか傳ふる？ 彼等は道を傳ふる宣教師にあらずして基督教に衣食する雇傭兵にあらずや」と憤り、「余は決して攘夷論者にあらざるなり。色の黄白を以て字の縱横を以て、齊しく上帝の子たる人類に人爲の差別を加ふるを惡む者なり。然れども今回の事の如きは基督教を過る所爲として私立學校の面目を傷くる者として決して默止する能はざるなり。吁基督教を過る者は誰ぞや。基督教を過る者の爲めに過られたる菅先生に一滴の涙を濺ぐ者は誰ぞや」と絶叫し、滿校の輿論を以て彼不當なる判決を取消し菅先生を復職せしむる樣にしたしと論じて、筆を收めた。

書き果てて、緊く閉を綴ぢ、天明を待つて、新聞縱覽室に出し置き、且其旨を筆太に書いて食堂の揭示場に張り出した。

（二十一）

朝飯の頃になると、食堂前の揭示場には、眞黑に人がたかつて、其れから新聞縱覽室に入る者出る者織るが如き有樣を、僕は吾室の玻璃窓から眺めて、思ひ切つてはなした彼一箭の手答あるを竊かに喜んだ。

菅先生が餘り人望が無かつたのと、宣教師派の氣焰が餘り熾であつたので、事件の當時は左まで激昂しなかつた校內の輿論は、菅先生已に去つた後の僕が一篇の檄によつて不思議に燃え立つた。何處に行つても其話ばかり、出ると顏を見られるのが餘り氣恥しいので、室內にぢつとして居ると、種々樣々の人々が入りかはり立ちかはり遣つて來る。「菊池君、思ひ切つたことをやつたな」と云ふ者もあれば、「一君の身上に萬一の事が無ければ宜いが」と心配して呉れる者もあり、「傳道師を以て任ずる君が宣教師攻撃は

實に奇觀だ」と冷評する者もあり、「今後運動の方針如何」と問ふ者もあり、「實に同感だ、彼赤鬚を引つこ抜いて、鳶鼻の曲る程打撲つてやりたい」と飛んだ相槌うつ者もあり、就中俗派の豪傑組未來の警視總監赤澤、非俗派の豪傑組の二三子の如きは「菊池君、實に我輩は恥入つた、其場にも居合はさぬ君に先鞭を着けられて、濟まなかつた」と懺悔して、善後策を講ずるもあり、極々温順しい連中と、喧嘩過ぎての棒ちぎり今から騷いで如何するよせ〳〵と笑つて居る連中を除くの外は、多少其熱に感染せぬ者は無い位。僕は吾點したマッチの火の爆々焉と燃え廣がる勢の熾なるに、且は驚き且は勇み、更に「善後策如何」と云ふ一篇の意見書を公にした。

學校の輿論は次第に燃え立ち、其結果として、各級各派の總代は、土曜日の朝を以て學校の後の松林に會合し、種々討議の結果、校長に一篇の建白書を呈して菅先生の復職を歎願することになり、此建白の主意を貫く爲めに一同袂を連ねて退校するも辭せずと云ふ決議をして、僕は卽ち建白書起草委員の第一に撰まれた。容易ならぬ大任を負うた僕は、竊かに人無き教場に退いて、筆をとつて建白書の草案を稿し、

一、菅龜太郎先生の免職は、基督教寛容の精神に戻り、學校の不利益不面目なるにより、速かに復職せしめられたき事。

一、菅先生免職事件に關する宣教師某、某、某等の舉動は卑劣にして、紳士の體面を汚し、基督教信徒にあるまじき所爲と認む。因て某、某、某は菅先生復職の上、公然謝罪す可き事を誓——

此處まで書きかけると、後の扉が開いて、小使の聲で、「此處にお出になります」と云つたので、回顧ると思ひがけないブラオン師と清水教師であつた。

「菊池さん、貴下、ひどい事します」とブラオン師は泣き出しさうな聲で云へば、「菊池君、逆まつた事をして呉れたぢや無いか、最早半年で卒業と云ふ際に！」と清水教師も云つた。其話によれば、僕が彼激烈な檄文と從つて其影響が學校を沸騰せしめた事は、彼宣教師（ブラオン師も宣教師であつたが、師は非常に我々に同情を有つて居て、何時も宣教師と我日本人の間の連鎖となつて居た）の耳に入つて、非常に激昂し、嚴重なる處分をしなければならぬと云ふ意氣込で、首謀者の僕は從來傳道師候補生として望を囑されて居た丈一層憎惡が強く、十字架にでもつけさうな勢であつたのを、片山校長が非常の苦心で宥め、今校長親ら學校の重立ちたる連中を集めて鎭撫の談話をして居られ、僕には特に兩教師を遣はして懇々說諭せられるとの事であつた。兩師は言を齊うして、僕が校内上下の望を負ふ身にてありながら、菅先生其人すら已に校長の苦心を諒として去られた後に、斯る輕擧に出づるはかへす〴〵も殘念な話、速やかに彼檄文を取消し、煽動を止められよ、其樣すれば宣教師仲間の憤怒は校長初め吾儕が如何樣にもして宥める、と一時間餘も諭された。

口もとまで出かゝる反駁をぐつと飲み込んで、篤斗熟考す可き旨を答へ、彼建白書の草案を卷いて懷にし、教場を出て見ると、彼方の禮拜堂から彼赤澤を初めとし、局外派の所謂「曹達水」（沸騰さんと云ふ謎）の連中が三々五々出て來た。涙ぐんで居る者もあれば、思案顏もある。一見して僕は事の狀態を認めた。校長一滴の涙は、感じ易い學生の烈火を、一席にして消滅したのである。僕等は再び例の松林に會議を開いた。彼一句、此一句、要するに外國宣教師の菅先生排斥は甚だよく無い話だが、菅先生も已に合意的に辭職せられ、云はゞ軍陣の名譽を保つて去られたことではあり、今更復

職と云ふも學校の威信に關する譯で、此際輕擧妄動するは情誼父の如き片山校長の苦心を無にし、衷情を蔑にする所以で、男兒の所爲では無い、校長が罪を一身に引受けて謝すると云はれた、其で十二分では無いか、其れに今回の示威運動で宣教師等も定めて膽を冷したであらう、兵法にも窮寇は追はずとある、最早きりあげ時、と云ふのが輿論であつた。間々二三子の、其ではあまり意氣地が無いぢやないか、と云ふ者もあつたが、畢竟藁火は燃え盡して、一同の意氣は最早銷沈して居た。併しながら火元の僕は其樣云ふ譯には行かぬ。「菊池君、君も異論は無いか」と問はれて、「僕か、僕は——左樣、先勘考して見る」と口早やに云つた答の裏には、己に對し同輩に對し校長に對し誰とはなく渾てのものに對して云ふ可からざる「賣られた」と云ふ感を懷いて居た。

其夜、其次の日曜日、片山校長は特に僕を二回まで招いて、懇ろに諭された。自家壯年の實歷を物語つて、

「菊池君、吾輩も覺えがあるが、客氣は決して事を成す所以では無い。世事は複雜極り無いものだ、氣に任せれば一歩毎に衝突は免かれない、無用な衝突に氣力を消磨するは、千里を期する貴君にとつて此程憂ふ可き事は無いです。何卒自重して戴きたい——と、一回屈を忍んで彼煽動運動を中止し、彼意見書は過激であつたと云ふ事を公に承認しては吳れまいか、（其は種々宥めて見たが、宣教師等は極度の寛典が「謝罪」と云つて一歩も引かぬから）其は貴君が純ら義俠の精神から彼意見書を發表せられた事は十分吾輩も酌んで居るが、內外人の中間に立ち、大勢の青年を統ぶる吾輩の苦衷を諒して、犧牲となつた積で淮陰を學んで吳れ」とまた餘儀もなく賴まれた。

（二十二）

僕は校長の厚意を感謝し、明日決答する旨を答へ、學校に歸ると、またブラオン師がわざわざ僕を晩餐に招いで、繰り返し諭された。

其夜僕は寒風に吹かれながら例の松林を何十回何百回となく往返して考へた。僕の味方は盡く敵に降つて、今は唯つた僕一人になつて居る。（敗軍の將は每も一人だ）校長の苦心を諒とし、ブラオン師等の厚意に從ひ、僕もまた降らうか。其も男兒の所爲かも知れぬ。併し僕は彼意見書の一字一點も撤回す可き理由を見ない、此激烈でも僕の言は確かに中つて居る。己の非を認めたら、乞丐の前にも跪いて詫びもしよう。さも無いのに、上帝と吾母の外何人にも下げぬ此頭を無暗と人に下げられうか。否、僕は謝罪はせぬ、斷じてしない。假に百步を讓つて、謝罪して宥された所で、敗軍の將何の面目あつて大手をふつて行かれうか。況んや阿容阿容と帶かたげて學資を學校に仰がれうや。吾等を攻擊した輩の說教を日曜每に有り難がつて聞かれうや。否、僕は斷じて謝罪はせぬ。併し校長等の厚意も決して仇にはしない。一面校長諸師の厚意を答へ、一面自家の自尊心を宥むるの道は果して何れにあるであらうか。百考千思、僕は終に自から進んで退學する外に、其道を見出さぬのであつた。併し最早六ケ月で卒業證書一枚が其樣に欲しいか、と心の內で或ものが吾を叱つた。

僕は松林から籬を乘越え、（最早門がしまつて居た）吾室に歸つた。幸に僕は一人で三疊の室を占めて居た。音がせぬ樣に、書籍衣類を行李に詰めて、立派に荷造し、あとを綺麗に整頓し、友人から借りた書籍は一々名前を書いた札を插んで机上に並べ、校長に一通、ブラオン師清水師に各々一通、同級諸子に一通、殊に懇意にした「思想家」の遠藤に一通（此は僕が東京——僕は無論東京を指した——に着後、報知

次第彼柳行李を通運で送つて呉れる様に（通運料は蒲團を賣り拂つて）頼んだのである。僕は夜中出奔するを屑とせず、白晝せめて此方ばかりなと告別して行く積であつたが、併し斯様なつては引とめらるゝを恐れたので、荷物は氣どられぬ様に殘して、机、ランプ、破椅子、其他諸雜品は、貧乏仲間の甲乙に遺した。幸にして僕の嚢中には、母が入れて呉れた金の殘が六圓許あるので、東京までは無論行かれるのであつた。負債は一厘も無く、當期の月謝は拂つてある）夜學會の世話人に一通、手紙を認めた。書きながら、不圖四年前育英學舍で恰も同様の擧動をした其夜の事を思ひ出て、僕は沈吟した。出奔又出奔、あまり忍耐がないではないか、且彼出奔の後には彼様な困難に會つて可惜月日を徒消した、此回の出奔も或は其二の舞をするのではあるまいか。思ひ惑うて、聖書をひき出し、吾に決心の枝折を與へ玉へと禱つて、手當にひきあけて、其頁の初一句を讀むと、「さんとし、既に彼を縛りひきゆきて方伯のポンテオ。ピラトにわたせり」とある。何の事だと舌鼓うつて、また眼をねぶりひきあけて見ると、「らに歸るべし、其家にとゞまりて供ふる所のものを飲食せよ、・・・家より家に移ることをせざれ」

とある。僕はいよ〳〵迷うた。迷ひ迷うて茫然として居ると、西山塾で習つた屈原卜居の末節「以君之心、行君之意、龜策誠不能知此事」の句が忽然腦に浮び出た。僕は得たりと頷いて、さら〳〵と手紙を書いてしまつた。

其れから鐵の様な蒲團にもぐり込んで、夜が明けると、例の通りさり氣なく起き、盥嗽濟んで、食堂に入り、心の中に諸友に別を告げて、それから朝の禮拜の鐘が鳴り、全校の生徒が禮拜堂に集つた其隙に、僕は校長に宛てた書翰と其退校屆を懷中し、風呂敷包一つ提け、居寮を出て、門にかゝると、向うから清水教師が走つて（禮拜の時刻に後れるので）來る。手早く風呂敷包を門の蔭にさし置き、さり氣なく立つて居ると、清水氏は走り入りざまに不圖目をつけて、

「菊池君か、禮拜には何故出ないのか」

僕に曖昧な返事をして、見つかつたかと胸を轟かした。併し清水氏は心せいたる體で、

「君、彼事は如何した。宣教師の方でも昨夜また校長に迫つたさうだ。暇どるといよ〳〵事が大きくなる――」

「今日午前の中に校長の所まで確答する筈です」

「其様か、其け宜い、其は宜い、――ちや失敬―」

と清水氏は、禮拜堂の方へ走つて行つた。僕は風呂敷包をとつて、門を出さまにふりかへつた。禮拜堂で一同が歌ふ讃美の聲が、遠い波の音の様に響いて來る。誰にともなく、何にともなく、僕は一揖して、門を出た。

海岸通りの西村へ行つて横濱行の汽船を聞き合はすと、今明には出帆せぬと云ふので、僕は不便でも四日市から乘ることに定め、偖最後の難關たる校長の宅に向つた。引とめられるが五月蠅さに諸師友には告げずとも、此二年あまり薫陶をうけ今回の事についても彼程懇切に云つて呉れられた片山校長には一言の謝辭訣別の語なかる可からずと思つたのである。素より僕が退學の決心は萬牛も動かす可からざるものであるが、進退の節に闇い點を殘すまいと、竊に心がけたのであつた。

唯有る店の時計を見ると、最早九時二十分、先生も確かに禮拜から歸つて居られる時刻である。僕は風呂敷包を提げながら、校長私宅の門を入つて玄關に立ち、胸は動悸、手は案内の鐘をうち鳴らした。婢が出て來た。

「先生は最早お歸り？」

「へえ、お歸りやした――」

僕の胸はいよ／＼急にうち出した。

「――が、唯つた今使が來てまたお出はりました」

決鬪に出かけた者が、半途に相手の頓死を聞いた樣に、僕はがつかり太息した。殘念た樣な、免れた樣な。

僕は少し考へて、懷中から彼退校屆と陳情書を出して、婢に渡し、

「御告別に上つたが、御留守で殘念――と其樣申上げて呉れ玉へ」

云ひ棄てて直ちに三の宮停車場に向つた。

* * *

京都で汽車を下りて、其夜は石部に泊り、明日は雪中に鈴鹿を越え（頃日來の餘憤炎々として、さまで寒を覺えなかつた）て其夜四日市の汽船に乘つたが、遠州灘でしたゝか鍛はれ、降りしきる霙を冒して横濱に上陸した時は身神共に海月の如くなつて居た。其れから辛と汽車にのり、皆掏摸の樣な顏した人々の中に小くなつて、寒に齒の根もあはず、しぶきに曇る玻璃窓から面白くもない景色を眺めながら、丁度明治廿年一月廿七日の午後四時、夢にも古いちかづきの新橋停車場（僕は故國から此處まで四年の歲月を費した）に着いた。

汽車を下り、車や人の押合ひへし合ふ泥だらけの混雜をあやふく縫うて、風呂敷包片手に石階の上に立ち、降りしきる霙（此時からして僕は英語のミゾレブルと云ふ字を思ふ毎に、霙降る、と云ふ語を思ひ出す）に愛想も見栄もなくびしよぬれに濡れた芝口の通を眺めて、僕は思つた。

「此か東京か、何と云ふ汚い處だらう！」

七の卷

（一）

明治廿年一月廿八日の朝九時頃、銀座通の西側を往來した人は、（記憶しては居るまいが）日報社前の柳の下に、思ひ出し／＼降る小雨に傘もさゝず、灰色になつた黑の鍔廣帽を阿彌陀に冠り、風呂敷包一個提げて都珍らしい好奇心と心配をわざと冷笑に包んで傲然と立つて居る一個の青年を見たであらう。其青年は斯く云ふ僕。僕は昨夜芝口の宿に泊つて、今朝本郷を指して行く途中である。

今も其前を通ると、大人氣ない話ながら、拳固をふりまにしたくなるは、僕が東京に於ける第一夜を過した芝口の宿（勿論今は家も主人もあらたまつて居るが）である。書生君の一人旅、荷物と云つては風呂敷包一つ、何處をたゝいても茶代が出る氣遣なしと見込まれたが最後、汚い三疊敷に押込まれ、都の人の心も汲んで知る生温き薄茶一杯、あとは火鉢の火が消えようと、手にかり鳴らさして、稍二時間も待たしてやつと持つて來た飯は砂利澤山の生温飯、表面澄んで實少なの汁に、塗盆を膝に立てて人を馬鹿にした給仕の婢も同樣性の知れぬ煮肴の向うづけ、口ばかり甘い煮豆に、浮世の味は倍辛い鹽漬大根の嚙めば我利々々と音するやつを菜に強ひて二碗をかき込み、草臥れたからと泣く樣にして敷いて貰つたのは薄く小さく硬く臭くて十九世紀の夫差が薪がはりに敷いて寢さうな蒲團に縮こまり、「東京と云ふ處は、寒い處とは聞いて居たが、人の心までが氷點以下であつたか」と不平で堪らず、僕が一朝志を得たらば、市中に此旅宿を十倍した程の一大宿舍を建築し、金紋付や馬車で來る大官豪商など云ふ連中は、お生憎さま、此處は君達のお宿ぢやありませんよ、と氣の利いた婢に顋で追はせ、「未來」の徽章を眞額に帶びた弊衣破帽の人達は、一町も此方から飛んで出て迎へ、思ふ存分優待して可愛がつてやらう、なぞと途方も無い空想に耽

り耽りつゝ日睡んだが、今朝朝飯が濟むと、早速勘定を拂つて、宿を飛び出した。實は蟇口の底をはたいて、茶代に呉れた上に、亭主を呼びつけて昨夜來の不埒を叱りつけ、「御氣の毒樣」の百遍も云はして、恐れ入らしてやらうかとは、思つたが、一錢は百圓にも値る目下の場合、見榮所でないと眼をつぶつて、耳を塞いで、逃げる樣に宿を出たのである。

足の塵をはらつて新橋を渡り、音に聞く銀座の通に出ると、思つた程立派では無いが、流石朝から人の往來の繁く、立並ぶ店の賑ひも成程日本一の都一の街丈あつて珍らしく、僕は彼方見、此方見、をり〳〵人に行當らうとしては危く身をかはしながら、ぶら〳〵歩いた。日報社の前まで來ると、また其建物の宏壯に一驚を喫し、袖名筆を福地君は此二階で揮つたのかと見あげ見おろし、しばらく片寄つて眺めて居た。往來の路人はつくねんと柳の下に佇む一寒書生を何と思つて（若くは思はずに）見たのであらうか。僕が心の中の獨語はまさに左の如くであつた。

「東京、東京、卿は此菊池愼太郎君の來遊を一向知らず貌に、せつせと生活の戰闘をやつて居るな。行人、行人、卿等は僕の顔を見ても何も知らず、袖ふり合うても氣もとめず、押のけ押のけ往來して居るな。今に見玉へ、菊池愼太郎と云ふ名が揚り、今卿等が讀んで居る其新聞（日報社の掲示新聞の前に人が三四人立讀して居た）に、今此處に立つて居る此青年の名があらはれ、卿等も菊池君だ、愼太郎氏だと道をよけて通し、足をつまだてて見る時が來るかも知れぬ。喃、柳、其樣ぢやないか」

と僕は撫づる樣に柳の幹をたゝいた。時は今冬の最中、柳の葉は落ち盡して、幹は眞黑に、何處に春が籠つて居るとも見えぬ。併し春は來る、必ず來る。春が來て死んだ樣な柳が綠に息ふきかへすも最早二月を出ないのである。併しながら吾生の春は何時、吾芽の吐くは何れの日であらうか。其は恐らく五年、十年、二十年、汗血を揮ひ盡して長々しい冬と闘つた後の事であらう。

（二）

僕は本郷湯島天神町一丁目の松谷と云ふ下宿屋に一先づ落ついた。一は先年友人の松村が寄寓して居た縁故もあり、一は僕が上京の目的に兎も角も近い方角を擇んだのである。

僕が上京の目的は、帝國大學であつた。吾足關西學院の門を一歩踏み出した時は、最早文科大學に心は飛んで居た。否、若し僕の枕を仔細に糺したならば、吾夢の赤門を潜つたのは、恐らく一朝夕の事であるまいと思ふ。新吾の攻擊、菅先生の勸誘は無くとも、僕が傳道師たる決心は早夏の頃から芽立つて居た。唯一縷の瘠我慢あつて僕を關西學院に、神學修行の決心に、傳道師の目的に繫いで居たものの、吾心の輕氣球は次第に昇りつめて、彼方の空に輝く別世界が近く見ゆるほど、吾を此世界に繫ぐ綵はいよ〳〵伸びていよ〳〵細く、風の一吹、刃の一觸を待つの有樣であつた。菅先生の一件は、恰も僕の爲めに快刀の一揮となつたのである。若し一面の照魔鏡をとつて、僕の心の前に押立てたならば、菅先生問題に關するあらゆる憤激失望の其奧には、微笑する或ものの面影が映つたかも知れぬ。併し僕は其と知らず、若くは知るを欲せず、何處々々までも菅先生に對する同情より宗教師輩の狹隘なる感情の犧牲となつて――云はゞ基督教の公義を維持せんとして斃れた一種の殉道者、諸同輩の身替りとして、昂然と關西學院を出たのであつた、僕が去つたのでは無く、關西學院が僕を追ひ出した。僕は當初の目的を維持する筈であつたのを、事情が僕に迫つて決心を變へさせたのだ。即ち

僕は是非なく關西學院を出で、是非なく傳道師たる可き目的を中止し、是非なく帝國大學を指して來たのである。

大學の事は關西學院に居た頃から薄々聞知して居たが、下宿に落つくと直ぐ入學試驗、受驗料、保證人等入學の手續を詳かに糺した。入學試驗は九月初旬に行ふとの事で、試驗課目は打見た所左程恐るゝにも及ばぬ、唯理科數學だけが少し骨折と思はれたが、是とても今から六ケ月間勉強したらば滅多に後れを取る氣遣はあるまい。唯困難は兎に角九月まで自から支ふるの計を定めなければならぬのである。

僕の懷中には、剩す所僅かに二圓なにがし、素より一ケ月分の下宿料に足らぬ位。愈々大學に入つた上は兎も角も、關西學院を出奔した、東京に來た、金送り玉はれ、とは如何あつても母に云ひたくなし。新吾に云つたら一も二もなく出來もしようが、其もあまり意氣地が無い。東京に百萬の人はあつても、僕の知人は殆んど皆無と云つて宜い位。勿論菅先生は來て居られる、關西學院の達藤(僕が荷物の送り先を託して置いた男)に尋ねてやつたら先生の宿所も分からう、が、今の場合先生に顏を合はすは、男兒として妙に面白くない感もある。鈴江君なぞの女達(僕が斯く速かに來ようとは夢にも思はぬであらう)は無論話にならぬ。斯樣な時に、亡くなつた兼頭君や、札幌に居る松村が居たら、力になつて吳れるのだが、今は愚痴を並べる暇は無い。僕は下宿の主人を呼んで、事情を打明け、澤山の報酬は望まぬが、日間の勉強を妨げず夜だけ稼ぐ道はあるまいか、と相談に及んだ。主人は新七とか云つて、奧州訛の極篤實らしい五十餘の男。

仔細に聞き終つて、「成程御尤の次第、私も此樣な稼業を致して居ますれば、書生の御方々とは大分御交際も致しますし、及ばずながらお世話申して、今では立派な御方になつて、まだ時々は『おい、新七君』なんて仰有つて下さる方もございます、何でも御辛抱が肝腎でございます」と前置して、色々話す所によれば、神田本鄉あたりは夜學の教師なぞは生徒の數より尙多い位、また然る可き家の書生の口なぞも中々今日明日と云つては無し、夜の稼業では、活版職工は修練がいるし、牛乳配達か、少し骨折でも車挽か、さもなくば新聞配達は馴れさへすれば案外樂なもの、其には少し心あたりもあればと、座をすべり出た主人はやがて其日の暮方にまた「御免」と入つて來て、其知人の知人に此頃新に發行した平民新聞の庶務係があつて、其人の話では配達を一人社では求めて居るさうで日給は二十五錢、一つためしにやつて御覽になつてはと話した。

何かありさうなものとは思つたが、最早關學に歸る可からざる今の場合、車は收入が多くても到底體がつゞかず、同じ配達なら牛乳よりも寧ろ頭腦の飮物を配達するが宜からう、其にしても平民新聞と云ふは如何樣な新聞かと、一枚取寄せて見れば、昔育英學舍に居た頃爭うて讀んだ「自由之燈」の成人した樣なもの、社說は誰の筆か知らぬが、佛蘭西學者の香味を帶びて光焔人に迫るの槪ありとも云ふ可く、此れなれば配達して步いても先々可なりと思案を定め、卽ち新七君を保證人に立つて貰ひ、其知人の知人とか云ふ赤木某の世話で、僕はいよ〳〵平民新聞の配達人を拜命した。

(三)

一月の卅日に僕は薬研堀の平民新聞社に初めて出勤して、其日は故參の者に跟いて、僕が配達區域と定まつた某町一圓の得意の家を彼是と敎へて貰ひ、其次の夜も案內に跟いてまはり、二月一日から愈一本立の配達人となつた。

新聞を滿插した口廣のズックの革嚢を右の肩に

からつり、餘れる新聞を左の小脇にかゝへ、右手に「平民新聞社」の印提燈を提げて、左の掌に配達名簿を繰り〳〵歩く僕の容態を、故郷の母上に見せたら何と思はれたであらう？ 關西學院の學友が見たら何と評したであらう？ 人は寢靜まつて、盜賊と、夜行巡査と、夜稼の車夫と、おでん大福鍋やき饂飩の類のみ纔かに眼さめて居る夜の東京の面影を、僕は日間の東京よりもさきに識つた。其も霞うつとりと大路の柳をこめて月影おぼろの春の夜か、八百八街の空に銀河流るゝ夏の夜か、せめて月影霜の如く萬家の甍に落つる秋の夜ならばまだしも、東京の一月將軍二月將軍との夜合戰は、とつて二十歳の僕の血氣にも些こたへたのである。饅頭笠傾けても吹雪面を撲つて、頼切の提燈の半町毎に消ゆる夜、寒月晝の如く凸凹の道は劍の山と氷つてひゆう〳〵吹き通るから風に夜深按摩の笛の音の宛ながら號泣ぶ樣に震ふ夜、三日以來降りつゞいた雨に路は沼、空からは氷の鍼や霙の錐が降つて降つて桐油合羽の裏かくまでずぶ濡れになり爪尖から腦天までぞくぞく痛んで果ては骨も髓も痺るゝ雨の夜、坂に辷つてべたりと手をつき、大事の大事の新聞を可惜泥だらけにした時なぞは、年の七八も若かつたら泣き出してやる所であつた。今も覺えて居るが、九段にかゝるのは何時も夜の十二時か一時の間であつた。坂下に七十近い老人が毎夜かゝさず屋臺店を出して居る。僕は何も其前を過ぐると、乾度立寄つて、五厘の大福餅を二つ買つて、老人と二言三言交へて行くが例であつた。老人何時も、「お若いに、よくお稼ぎなさいますなア」と褒めて呉れた。僕も今更に、「男は稼ぎ、女は泣く」が浮世の常と云ふキングスレーの句を憶ひ出し、彼七十の老人さへ毎夜大道の寒風に吹かれて稼ぐに、血氣盛りの僕が義理にも寒いの辛いのと云はれようか、とまた勇氣を鼓して九段に上るのであつた。

市會議員に十日許りも新聞配達を命じたら、市區改正、道路修繕も今些し捗が行くかも知れぬ。東京で候、日本一の首府で候と云ひながら、道の惡さ、巷衢の立てかたの雜駁さ、番地の分からなさ、僕が受持の麹町の中でも、番町などと來るとまるで迷宮に踏み込んだ樣で、僕も初の内は幾度其處の小路に迷ひ、此處の辻に惑ひ、同じ處をぐる〳〵廻りに、情ない夜めに明けられて、得意先の利いた風な下婢に「大層早くお出だね、わたしの家では舊聞は入らないよ」などと劍突を喰はされ、社の發送掛から「君の配達區域から大分苦情のはがきが來るぞ、横着をやるぢやないか」と苦られたこともある。成程地の利を知らざれば以て戰を爲す可からず、僕は日間も當分百事差措いて、足駄の齒のつゞく限り、麹町區を東西南北に縫うて歩いた。今でも此區だけは精密な地圖を記憶からひき得るほどである。

麹町區に限らず、山の手を歩くのは、僕が東京に來た當座の一大快樂であつた。上野淺草向島下町の賑ひは見ずもあれ、山の手を歩いて、新聞や雜誌の上で知つて居る名士の門札を見るのは、一の愉快で、若し折よく主人公の出入に出會して其顏を瞥見する時は、更に愉快であつた。時々は入つて尋ねて見ようかと、殊に慕つて居る名士の門に躊躇して、巡査に怪まれ、犬に吠えられたこともある。來て見れば聞くより低し富士の山、名士など云ふものは霞を隔てて遠くから拜んだ方が餘程有り難く近寄れば隨分と火山灰の醜い所も見えるものと云ふことを思はず、すぐれ者は十六七から世に名士と云ふ者の鼎の輕重を見破つて十分批評的に世をも人をも觀察するに、恥しくも年のみとつた此「熱中者」は、一度會つて吾精神氣宇を養ひたいと蘇轍もどきに名士を慕つた。白狀すれ

ば、僕の幼稚なる、突然名士の玄關を驚かしたのも、一二回ではなかつた。然るに其一軒では、「紹介なき者には面會せず」と玄關に張り出した回避牌に追拂はれ、他の一軒では、お無心のお方にはお氣の毒さまながらお斷り」とおの字盡しの三指ついた婢にふはりと刎ねられ、留守が三軒(此内二軒は確かに居留守也)多忙が二軒(一軒では棊子の盤に落つる音が聞えて居た)御用なら承り置きますが一軒、如何したはずみか最後の一軒は在宅、御面會申さう(思按ずるに餘程退屈の折柄でもあつたらう)と通されて、會つて見た主人公は金縁の眼鏡に大島紬の羽織、髭を撚つて、「何か要ですか」「御高名は久しくうけ――」「はは丶丶、飯食ひ道を頼みに來たのだらう」「否、何か私等青年の心得――」「ははゝゝゝ、心得も絲瓜もあるものか。金、力、力即理さ、飯を食ひ外さぬ分別が肝腎だよ」と眞劍から浴せられ、僕は匆々に歸つた。

僕の名士訪問病はこゝに一頓挫を來したのである。青年の時代には愛するも憎むも兎角一圖になり易いもの、名士など云ふ者は、すぐれた長所がある丈、短所も亦往々甚しいもの、其を解らずにうつかり見て眞黒に惚れ込むと、案外に短所を見せられた時打殺したい程嫌になる。其れから思ふと、彼金縁眼鏡の紳士の一言は、即ち僕の爲めに一貼の頓服解熱剤を與へられたものと云はなければならぬ。

然だ、然だ、僕は最早々々理想を人間界には置かぬ。鳥ですらも、猛きは直ちに日を睨んで昇るではないか。

(四)

僕は依然湯島の下宿に住んで居た。室料の廉いのを取柄にわざと擇んだ西向二階下便所側の三疊、夏暑くて冬寒く、所謂熱時人を熱殺し寒時人を寒殺すると云ふ瘧部屋、三尺の縁の向うは、猫の額程の庭に、二階から投げおとす鼻ふき紙、蜜柑の皮、竹の皮が年が年中集積と横はつて、其向うが薪炭屋の物置。鬱陶しくて、寒くて、臭くて、騒々しくて困るが、併し僕が東京での初夢を結んだ芝口の宿屋などに比べては天壤の相異があると云ふのは、前に云つた亭主の新七とやらが至つて實體に、主婦はまさとかかいさとか云つてはき／＼したよく話の分る女、唯一つの癖はよく下婢を更迭するの一事で、現に僕が來てから一ケ月の間に下婢の顔が十三度替つた位、佛蘭西の内閣も中々及ばぬので、無給で下婢を使ふ法を主婦が發見したかの樣に穿つた評判もあつたが、兎も角も先づ手堅い下宿屋、加ふるに同宿の連中も、亭主の所謂「お堅い方ばかりで、唯日曜や祭日の朝など僕が配達から歸つてどれゆつくり一やすみと寝て居る頭の上で、二階も落つる樣な相撲柔術のどたばたをやつたり、喫驚する程大音に失脚落來江戸城を怒鳴つたりするには聊か弱つたが、是とて月琴彈唄や猥褻の話で邪魔されるよりまだ幾干か諦めがつくと云ふもの。此豪傑組の四人の外には、猫の樣におとなしい醫學生で國の許嫁の寫眞を始終懷中して居るとか云ふ小男と、矢張開業試驗を受けに出京して居る未來の扁鵲で胃が惡い惡いと云ひながら頗喫つて酒飲んで急にビットルを飲む人と、猶他に四五人。唯一人、「惡いお方ではありませんが、滅多に金などお貸しなさいますな」と主人が注意して呉れた木村某と云ふ青年、長崎の者で高等中學を頼りに落第する男とか、東京馴れた愛嬌者、僕が下宿へ來て二日目に、「君、失敬、何卒以來お心安く」と馴々しく這入り込んだが、六日目には、「君、お氣の毒ですが、壹圓立替へて呉れませんか、今日あたり爲替が來る筈だが」とやつて來た。囊底無一文の由答ふると、一寸困つた樣子で、「君の羽織か、不用の着物でも宜いから一寸ほんの一寸

貸して呉れませんか」と云ふので、「お寒いのですか」とは僕が一生の大出來、流石に質に置く爲めとは云ひ兼ねて、苦笑して歸つて行つた。併し僕は此木村君には感謝す可き理由を有するのである。平民新聞發行停止（激烈な非政府新聞だけ停止は毎度の事であつた）の際、僕の爲めに十行二十字詰一枚五厘の筆耕を周旋して呉れたのは、君であつた。尤も後で聞けば、原依賴者は一枚一錢五厘の割で金を渡したさうで、差引一錢は僕の手に屆くまでの途中で煙と消えたのである。併し僕は尤もとこそ思へ、萬々不平は云はぬ。今の世に誰か世話料を取らずに世話をやく人があらうぞ。（因に云ふ、或時僕は某學校敎師の講義錄とか云ふものの淨寫を賴まれたが、初二十枚ばかりで忽ち謝絶された。誤寫が夥しいとの口實であつたが、實はあまり文章がまづいので、よせば宜いのに僕がちよい〳〵添削したのが、先生の逆鱗に觸れたのであつた）

配達を終へて新聞社から歸ると、冷汁冷飯で晩い朝飯を食つて、一寸睡むと、僕は梅干入の握飯を拵へて貰つて、上野の書籍館に通つた。一は書籍代を倹約し、一は下宿附近の騷々しきを避けて、心靜かに大學入學の準備を整ふる爲めである。馴れない晝夜顚倒の仕事に、睡眠時間が如何しても不足するので、兎もすれば頭がふら〳〵して、理科の書やユークリッド、トドハンタアの上に意氣地なく點頭し、一度は吾れ知らず鼾を立ててはつと心づけば、滿室の青年老年或は哄笑し或は不禮な男と云ひ貌に憤激して居るので、僕は思はず火の様に赤面したことがある。其後は少し怪しくなると、竊と出て、庭の腰掛にもたれ、早咲の梅が香鳥の音の清きに魂を浮べ輕風暖日に背を曝して三十分か一時間快よく睡つて、さめるとまた入つて書卷に對した。閉館の時刻になると、僕は種々の事を考へながら上野の森を穿つて、夕照流るゝ不忍池の方へ下りるのが常であつた。僕は今も非常に、上野の森を愛する。人に限らず、樹木でも大きいものは傍へ寄つても、誠に心地の快いもので。

燈火がつく頃、下宿に歸つて夕飯を食ふと、非常に睡ければ燈火を消して三時間ばかり寢るし、さも無いと早めに下宿を出て（此も一は燈油代の節倹である。僕はしば〳〵思つた、此様な風なれば西内さんの養子にもなれさうだ）平民新聞社の土間の大火鉢の側の長木榻に腰かけて、他の同僚が草鞋ばきのまゝ荒莚の上に鼾をかいたり、今は昔の榮華の夢を繰り返したり、或は鄙猥な冗談を云つたりして居る横で、薄闇いランプの光に、事務室から數種の新聞を借りて讀んだ。配達の分際だから、勿論編輯局の模様は知らぬが、二階の笑聲など聞いて、已に落涙しかけて脣を噛んだことは幾回か知れぬ。

（五）

去年の秋の暮、僕は愛宕山上の腰掛に倚つて、暮れ行く都の狀を眺めて居た。折ふし四邊に人もなく、増上寺の鐘夕を告げ渡ると、靄の中に市街の燈火は一個宛眼をあいて、ぢいと耳を澄ますと、さま〴〵の人聲物音が一つになつて、此ぞ「東京」と云ふ巨人のつく吐息かと思はるゝ一種の悲歌が身に泌みて聞える。稍暫し恍惚夢現の境に遊んで居る内に、不思議、見渡す限りの市街が次第に白け〳〵て、何時しか森々一面の水となり、恐ろしい大渦を卷いて居る。而して此頃の落葉の様なものが夥しく浮きつ沈みつ其渦に卷かれて居る。見れば木の葉は皆人間、足掻き手掻き呻く聲が遠波の音の様に聞える。僕は悚然として眼を轉じた。すると、此渦に吸ひ寄せられたのであらう、方數十里數百里の間、秋川を下る木の葉の如く夥しい人が流れて來る。見て居る内に、底は奈落へ通ふ此大渦へ入るより早く、ずぶ〳〵と吸ひ込まれて、其

まゝ影が消ゆるもあれば、死骸になつて浮くもあり、半死半生になつて渦に廻されて居るもあつて泅ぎぬけるは誠に稀である。併し後の輩は少しも其が見えぬかして、多くは勇みに勇んで泅いで來る。あぶない〳〵、——と聲ふり絞つて叫ぶとして、僕は愕然と眼を開いた。身は依然愛宕山上の暮色に坐して居る。下には燈火を漁火と浮べた東京の市街が海の如く茫々と展いて、波の咽ぶ樣な都のどよみが耳に通うて居る。

僕は額の汗を拭うて太息ついた。此都に百何萬の人間が桶の中の芋の樣に上にならう〳〵ともがいて居るが、幾個得意の人があるか。遑遑として奔走し、鳴々として呻吟しながら、生きて居る。何がよければ、其樣都に執着するのだ。千島臺灣、行く處は廣いではないか。田舍の空氣はよく、故鄕の水は甘いではないか。何の爲めにバチルスだらけの空氣を吸つて居るのだ。氷川の古賢では無いが「田園將蕪」に、何時まで虛名空利を石の樣な東京から搾らうとするか。——併しながら人は生きねばならぬ、生くる爲めには戰はなければならぬ、名は揚げねばならぬ、金は儲けねばならぬ、命がけの勝負はしなければならぬ、都鄙の懸隔が甚しいので一たび都の飯を食つた者は如何しても田舍に落ついて居られぬ、其れで瘠せながら、肺病になりながら、掏摸の樣な眼をしながら、生きた死骸になりながら、何時までも都に齷齪して居る。而して年々歲々飽くことなき首府の無底洞の腹を肥しに幾多の青年壯年は落ちて來るのである。あゝ僕も其一人であつた。

東京に來て六十日、僕が未來の保證人に擬した銀座街頭の枯柳が毿々と綠の絲を垂れて、山の手の配達に梅花を踏む頃になると、僕も少しは東京馴れて、生活もやゝ順序立つて來た。故鄕の母から案外快よき事後承認の手紙が來て（先頃の歸省で、母も餘程安心する所があつて、殊に關西學院に齷齪するより大學に入ると云ふのが母の氣に入つたのであらう）關西學院からは友人の遠藤が僕の柳行李を送つてやつたついでに、上下擧つて僕の出奔を惜んだと云ふ事を報じて來た外は誰の手紙も來ず（僕は遠藤にだけ宿所を明したが、堅く祕密を守つて吳れと賴んで置いたのである）吾働いて吾食ひ、吾志して吾勵むばかり、自由と云へば自由、氣樂と云へば氣樂、淋しいと云へばまた隨分淋しくもある。

唯一度、或日曜の朝、例よりも晚く配達を終へて歸る途中、番町の唯有る巷路から出て來た大小二人の束髮を不圖見ると、白茶の肩掛が鈴江君、海老茶のがお俊君であつたので、僕は饅頭笠傾けて忽ち橫町へきれ込んだことがあつた。鈴江君等は無論僕が上京を知らなかつた。試驗が濟むまでは、誰にも、伯母にも僕の行動を祕して吳れる樣に、母へ云つて遣つたのである。顏を見ても名は知らず、名を聞いても辭儀はせずに濟む、東京ほど世を忍ぶ（も凄じいが）に都合の宜い處は無い。

あせらずに勉强するが宜い、病氣になつては學問も持ちぐされと母の訓戒を身にしめて、貴重な時間だが、日曜丈は（號外の出ない時は）朝の配達が濟むと、存分に寢、或は會堂に行き、或は東京を縱橫に見物して步いた。歌舞伎新富は看板で濟まし、精養軒や八百善は遠い香で埒を明け、丸善や池の端の「バイブル」の前は眼をねぶつて駈け通つた。此日は僕の贅澤日で、竊と袂から出す燒薯の三錢や、恐々入る繩暖簾の鯨汁一杯は、吾れと大目に見て置いたのである。雨が降つて退屈な日曜は平民新聞の投書を書いて慰んだ。

此は僕が平民新聞社から受くる報酬以外の報酬であつた。平民新聞は寄書投書を獎勵した

ので、色々な投書があつて居たが、中には隨分拙いのも人氣とりに出してあつた。僕は見るより例の技癢を發して、或時新聞の漫錄を眞似た一文を草して、竊と社の投書函に入れて置いた。翌晩新聞の刷り上るのを待兼ねて折る加勢をする風で竊と開いて投書欄內に僕の文を見出した時の心地！　僕も關西學院などでは吾書いたものを公にした事もあるが、堂々帝都の一新聞に僕の文字が出て、四千五千の人の目に觸るゝのは、此が初めて――僕は實に微笑を禁じ得なかつた。讀者よりも先づ作者の僕が其夜配達の道々街燈の光で何回、何十回讀んだかも知れぬ。而して僕は新聞受函に插入するにも、例より餘程心を用ふる程、現金であつた。其れから味を覺えて、閑さへあると書いては投じたが、十の八九は掲載されて、天晴僕も新聞記者となつた積で得意になつて居た。無論投書は半錢を齎らすでも無く、また編輯局の評判に聞きたくも耳に入らなかつたが、新聞に出ると云ふ其事が已に十二分の報酬であつたのである。

　僕が平民新聞で尤も愛讀したのは、社說と漫錄と其れから鐵嶺と云ふ人の巴里通信であつた。聞けば此鐵嶺と云ふは三四年前洋行した佐藤とか云ふ仁で、近きに歸朝して今の主筆に代る筈とか。其通信に文の妙、事の精、說の卓は更にも云はず、何處か不思議に僕の心を鼓動さす所があつた。先づ昔聞いた喇叭の音、と云つた樣に、今の感と昔の記憶を一時に喚び起すのであつた。

（六）

　其樣する內に佐藤氏は歸朝して、噂通り平民新聞社の編輯局に主なる椅子を占むることとなつた。歡迎の宴、入社の辭、其噂は大分耳に入つても、不幸にして僕は同氏を瞥見するの機會を有たなかつたが、櫻ざかりの或日の夕、例よりも早く社に行つて、配達の控席の腰掛に踞して、薄暗いランプの下に事務室から借りた雜誌を讀んで居ると、洋服の立派な紳士が二階から靴音優かに下りて來た。編輯局員は、此方からは大抵顏を見知つて居たので、此見馴れぬ容子の人は、確かに佐藤氏であらうと思つて居ると、彼紳士は入口の方へ出るとて、一寸會釋して僕等の前を通つた。ランプの光で、ちらと橫顏を見るより僕は愕然と立ち上つた。紳士は何も氣付かぬ樣子で、さつさと行き過ぐるあとより、僕は吾を忘れ追つかけながら、

「先生、駒井先生――」

　今や車に乗らうとした先生は驚いた體でふりかへりながら、

「誰氏でしたか」

　あゝ僕は四年ぶりに此聲を聞いて、胸は一ぱいになつた。

「私は――お忘れでございますか、育英學舍で――菊池愼太郎です、お世話になつた――」

　育英學舍と云ふ聲に、先生は車夫が提燈の光にすかして、熟と僕の顏を眺めたが、忽ち莞爾と笑を含んで、佛蘭西流に僕の手を執つて二三回打ふり、

「あゝ菊池君でしたか、餘り大きくなつてお出だから見忘れてしまつた。其樣して今は――否、此處お話が出來ぬ、此方お出なさい」

　先生は取つてかへして二階へ上られる。僕は同僚や事務の人達が愕然とうちまもる視線の中を、慙かしいとも嬉しいとも何ともかとも云ひ樣のない心地で、胸はどき〱、膚はぞく〱、泥だらけの草鞋を穿いたまゝ、階段を三四段上つて、急に思ひ出して、解かうとすれば生憎手さきに絡む草鞋の紐をひきちぎつてはふり出し、飛ぶが如くに二階へ上ると、先生は已に應接間の瓦斯の下ににつこり立つて居られる。

「實に暫らくでしたね、よく僕を覺えてお出だつた」と云ひ〱僕に椅子を薦め、自分も椅子に

侍られた。

否、先生、何十年たつたつて先生を忘れることが出來ますか、と云ひたい心は一ぱいでも、僕は一言も云ひ得ずに、唯氣が狂つた樣に、嬉嬉と笑つてばかり居た。

應接間の會話はせい／＼十分間、僕はざつと今の身の上を話し、駒井先生は其宿所＝歸朝郎下で先生はまだ日本橋の旅館に居られた＝を書いた名刺を僕に渡し、明日を期して別れたが、僕の心は愉快に滿ちた。同僚の連中が不思議がつて色々尋ぬるを僕は殆んど答へかねた、言へば不覺の涙がこぼれさうで――。實に奇遇だ。噂に聞く佐藤子が駒井先生であるとは、嘘の樣な話だ。先生は俗に所謂兵隊養子となつて一時駒井を名乘つて居られたのを、先年來本姓の佐藤に復せられたのであつた。

翌朝配達を濟ますと、僕は直ちに先生の寢ごみを襲うて、先生が詳かに問ふまゝに、育英學舍出奔から、先生を指して土州に行く途中宇和島にさすらへた一條、關西學院の生活、伯父の死去、東上の次第、目下の生活、前途の希望、嬉しさが授ける雄辯の吾ながら滔々と思ふ存分物語つた。先生は長々しい話に退屈の容子も無く、細かに注意を拂つて、しば／＼領い居られたが、語り終ると少し考へて、僕に何か文章を書いたものがあるかと問はれた。恰も其日の新聞に、僕が例の悪戯の投書がのつて居たのを、先生に見せるのなら、もつとよく書いて置くのだつたにと思ひながら、其と答ふると、先生は一讀して、床の間に積んだ亂卷亂册の中から英國時事評論を一冊取出して其中の東洋問題に關する一論文を指示し、此を譯して持つて來て見せよと云はれた。

僕は其日午餐（先生は朝餐）の馳走になつて歸ると直ぐ飜譯にかゝつて、翌日一夜業があるので一成し果つると、直ちに社に持參した。先生は早速一讀せられたと見えて、其夕また僕を應接間に呼んで飜譯は可なりよく出來て居る、多分の事は出來ぬが當分の學資は此方で勉強片手にとれる樣に都合をつけるから、配達の方はよすがよからう、と云ふ事を話された。此さへ僕には非常の喜であるのに、先生は猶話を進めて、近々に家を持つ積りであるが、仕事の上の都合もあるし、女氣の無い家だから、育英學舍の昔に返つた積りで、下宿を引拂つて一處に居ては如何だ、と話された。宛ながら夢の樣な話。

併しながら此夢は實となつて、僕は其月の末、下宿を引拂つて駒井先生――佐藤先生の新居に移つた。

（七）

上根岸の門前小溝を渡し樫の生垣をめぐらした家に、鰥獨先生の書齋は安頓せられた。家族は先生、僕、菊池、他に書生が二人、飯炊の老婆が一人、兵站部は此老婆がきつて廻す、玄關番掃除番は他の書生が引受けてやる、僕の務はちよいちよい先生の秘書官をやる位で、云はゞお客分、晝間に書籍館に通ひ、夜は新聞雜誌の飜譯に從事し、時々に同居の書生に英語の不審を聞かれ、先生が閑な時は打寄つて談外の話をせがむ位なもの。新聞配達から今の身分へは實に夢かと思ふ一足飛、以前晝夜顛倒の生活をして、夜霧夜露に身體の和を傷り、店頭の硝子に映る吾顏見ても、色蒼ざめて眼に光なく頰殺げ、吾ながらやつれたと思つた體も、次第に若へ復つて、大分人間らしくなつて來た。此も駒井先生――佐藤先生とは如何しても云ひ馴れぬから、以前の通り駒井先生で通さして貰はう――のお蔭である。

先生が育英學舍を去られた後の話は極簡單。故郷に歸つて嚴君の終焉に侍し、東上して間もなく舊藩主家の公達の傅と云ふ資格で洋行し、

公法の勉學を監督かた〳〵巴里大學に政治學を修め、大陸諸國憲法の運用、政黨の事情など觀察し、滯留三年にして此たび歸朝して直ちに平民新聞に入られたのである。育英學舍の昔に比すれば風采一層揚り、曩時の磯崎人を捉れしめた風は巴里の土を踏まれただけ頗る洒落の風にかはつて、一寸非の打處なき立派の紳士になられた。併しながら此は皮相の話で、氣分は何處までも昔のまゝの一書生、洒々落々として裏に、火の如き理想、鐵の如き意志を藏して居られる。三日とたゝぬに先生の體から迸る一種の魔力は忽ち僕を擒にしてしまつたのであつた。

先生は妙に嗜好などの淡泊な人であつた。熾烈な理想の焰が肉情を燒き盡したのであらう、唯一の癖は青年書生を愛せらるゝのであつた。嘗て戯れて云はるゝには、人は洋行して制度を見て來る、僕は人間を見て歸つた、今の世に拂底は國庫の金で無くて人才である、要路に立つて志を行ふと思ふまゝに人才を教育するのが僕の愉快の南北極である、他日總理大臣になつたら家塾から内閣に出勤しようと思ふと。閑さへあれば、僕等を集めて、燒藷を嚙りながら、さま〴〵の話をされた。政治家も空疎な頭ではいけぬ、學者も志士でなくてはならぬ、と云ふのが先生の素論で、鉢も同宿の粗豪な二三子には讀書をすゝめ、僕にはまた時々は書卷を擲つて些と外に出たまへと勧められた。

併しながら僕にとつては、時事の實物教育は決して其少なきを患へなかつたのである。久しい間僕が配達人控所に腰かけながら羨望して居た平民新聞編輯局にも自由に出入を許されて、飜譯物など持つて行つた折に、ちよい〳〵手傳しながら、先生初め諸君が天下を吾有顏の快活の談話に耳傾けて、人物の長短、時務の得失、内治外交、閭巷の瑣談、戯談から眞面目を出す記者、紙面つくつて滑稽ものを書く人、鍼が棒になつたり、隨分と重大な問題が滑稽諧謔の舌さきに滾々と團子の樣に轉んで行つたり、不可思議な新聞發生の作用を日擊して、僕も從來過し來つた十有九年の歲月よりも此編輯局を見舞ふ數時間こそ却て世の中と云ふものを知る心地するのであつた。

（八）

明治廿年は明治政史に一花咲かした年であつた。就中條約改正問題は、端なく藩閥政府攻擊の導火線となつて、久しく蟄伏して居た民間の氣焰は、また明治十三四年の頃の樣に燃え上つて來た。某臣外人の意見書、某大臣の意見書など云ふものが漏れて、此處其處に出すと見るが内に、忽ち燃え廣がつて、新聞演說が非常に賑やかになり、民間名士の車が東西に走せる、壯士が飛揚する、祕密出版が行はれる、人の血を鼓舞する檄文は全國隅々へ飛んで行く、地方有志家が血眼になつて上京する、當路大臣の門には威嚇詰問的訪問者がつめかける、政府攻擊の熱度は都門の暑氣と共に彌まして、示威運動は恐る可き勢となつた。云ふまでもなく、駒井先生は管下の新聞を提げて、斯運動の中心に飛び込まれたのであつた。而して示威運動其效を奏して、條約改正中止、外務大臣辭職の報が傳はると、先生は手を拍つて、面白い、最早一息だ、と勇まれた。

僕は斯際往來の頻繁なるにつれて大分名士の顏も見覺え、襖越しに其話の模樣も聞き、（最屓目かは知らないが、年こそ若けれ、駒井先生に及ぶ者は一人も所謂名士の中には無い、と僕は思つた）ちよい〳〵先生が文筆の勞を手傳ひ、民間黨が放つ彈丸の政府の壘に見事破裂するを見てはおのづから喝采禁ずる能はざるのであつたが、併し例の熱中病にも罹らず、壯士となつて外務大臣の門に押かくるの擧動にも出でなか

つたのは、僕も亦別に戰ふ可き一大敵を有したからである。此敵と戰ふ爲めに、僕は關西學院を出奔して、背水の陣を布き、此敵に勝たんが爲めに僕は新聞配達ともなつて苦勞したのである。即ち僕は目前に迫つた大學入學試驗に、是非共吾學んだ關西學院の名譽ともなる可き好良の成績を以て及第しなければならぬ、と思ひ込んで居たのである。上野戰爭の砲聲を聞きながら洋書を講じた福澤先生を學ぶでは無いが、僕もまた政府包圍攻擊の本陣に居ながらせつせと試驗の準備を整へて居た。

關西學院の遠藤から手紙が來て、愈卒業式が濟んだ事、都合によつては秋になつて上京する事を報じ「唯殘念なるは尊兄が此内にあらざることに候、同級の者皆之れを惜む」と書いてあつた。併しながら逸りに逸つた僕の心には、さまでの感を與へなかつたのである。仰山な話だが、萬の恥辱を雪ぐのも、萬の辛抱に酬いるのも、僕自家の面目を保つのも、母の心を慰むるのも、此一戰に打勝つにあり、と其樣思ひ込んで居た。

月は九に入つて、僕は出來得る限りの準備は已に整へ、首尾よく入學を許された日には正副保證人は駒井先生の知邊の誰々と云ふことまで定めて、文科大學長宛の入學願書を出し、入學受驗料五圓を大學會計課に納めて、愈其日を待つて居た。月の初から少し感冒の氣味で、兎角頭が重く、此二三日は飯も箸をつけたばかり、其擁茶ばかり飲んで居たので、駒井先生は書生に命じて、鷄を買はせ、元氣づけだと云つて馳走されたが、其れすら嬉しく思ふ程には咽に入らず、吾ながらあまり腑甲斐ない樣で、時時井戸側に出でては素裸になつて、釣瓶七八はいもかぶりなどして、元氣をつけて居た。併し頭はます〳〵重い。

僣待ちに待つた試驗の日は來た。僕は起上るとふら〳〵とするのを、何有と跳ね起き、顏を洗ふ間も倒れさうなのをやつと我慢して、形ばかりの朝飯の卓に向つたが、素より一粒も咽を通らぬ。不圖駒井先生は僕の顏を見て、「菊池君、非常に顏が赤い、熱があるのぢやないか」と云ひ〳〵僕の手を握つて、「火の樣な手をしとるぢやないか、醫師に見せたまへ」

併し僕は自から冷笑して、先生に謝し、垢づかぬ木綿縞の單衣に同宿の書生から借りた袴を辛つけて、玄關の方へ出ようとすると、またふらふらと倒れかゝつた。同宿の甲乙が驚いて立ち寄る、駒井先生も聞きつけて、立ち出で、

「本當に菊池君、押しちやいかん。試驗はまた出來るぢやないか――其れとも是非今日出るなら、一寸醫師に見せて行きたまへ―」

と書生を呼んで、醫師を迎へにやられるのを、僕は遮て押とめ、(醫師にとめられるのを恐れて)車を呼んで貰つた。如何してもとまらぬと見て、先生は自から寶丹を取り出して來て、一杯の水と共に與へられた。押しいたゞいて師の惠を口に銜み、無理に嚥みこみ、ふら〳〵するのを、歯を喰ひしばつて、

「では一寸――」

先生に一禮して、車に乘らうとすると忽ち眼前が眞闇になつて、ばつたり玄關に倒れる。

（九）

山の周圍に人垣作つて、必ず通る道筋に手練の射手數多伏せ置いても、獸は往々逃げるもの。九分九厘まで人力で押つめても、殘一厘は如何あつても儘にならぬが、所謂天であらう。大學に入る筈の僕は大學病院に入る身となつた。病は重症の腸窒扶斯、無理押して居た丈頗る惡性のものであつた。

口惜し、殘念と思ひながら、動かぬ身を釣臺に載せられて、大學病院の門に舁き込まれた後は、一切夢中、後で聞けば久しい間、熱は四十

度の上を往來して、醫員もよく是れでもてると驚いた位、試驗の答案を述べる樣な譫言を頻りに云つたさうだが、本人の僕は殆んど何の記憶もなく、唯地獄の釜に蒸さるゝ思で、熱い熱いと感ずるばかり、日に百何斤からの氷を湯にしてのけて、氷枕に氷嚢、氷の片を銜んで果敢ない命を繋いで居た。よく死ななかつたと自から怪しむ位。

幸に天命未だ盡きず、發病二週ばかりにして、熱は退口となり、宛ながら氣體となつて濛濛と蒸して居た身體の分子がまたやう〳〵に凝り固まつて、浮々と宙にさまよつた「吾」が已にかへつて、二方壁、一方が玻璃窓、一方が戸、世の味氣なさを此二坪の内に縮めた樣な傳染病室の寢臺に己を見出したが、此半月の大熱に體は宛ながら蟬殼の如くなつて、舌は眞黑に、唇は乾割れ、咳嗽をする力もなく、頭は二秒と同じ事を思ふの疲勞に堪へず、先づ生きて居ると云ふばかり。忙しい中を、時々見舞に來て呉れらるゝ駒井先生にも唯「有り難う」と云ふばかり、病氣標御出は御無用になされたいと思うても口に出されぬ疲勞。云はゞ搖籃を世界の孩兒にも劣つた容體であつたが、流石に血氣盛りの體質の彈力強く、熱が分離し、滋養物が喉に入る樣になると、さしも衰弱した體もぼつぼつ見直して、退屈千萬の回復期に入つたのである。

體が回復期に入ると共に、精神の衰沈は始まつた。阿母の方へは駒井先生から僕が病氣の樣子を心配しない位に云つて遣られたさうで、此方の掛念は先づ免かれたとした所で、諦められぬは僕が目的の一頓挫である。何の、高が大學入學が一年延びたと云ふ位なもの、と云つてしまへば其迄だが、最早半年で卒業證書を握ると云ふ關西學院を飛び出し、宣教師事件で追出されたとは云ふものの、實は此方からおん出たのである。大分辛苦を重ねたのも、元はと云へば此目的の爲めであつた。然るに、受驗の上落第でもする事か、未だ一兵を動かさず一太刀も交へずしてがつくり膝を突くとは何と云ふ馬鹿馬鹿しい話だらう。母に對し、駒井先生に對し、關西學院の諸友に對し、實に面目もない仕合せである。眠られぬ夜半にランプの影かすかな病室の天井を眺めて、此一年間の事を考へると、宛ながら意地惡の天が故らに僕の新芽の出はなをぽつきと折つた樣で、勿體ないが蘇生の感謝よりも寧ろ攝理の不公平を天廷に爭ひたい位。

僕は鬱々として病床に横はつて居た。

未だ行歩はかなはずも話が出來る樣になれば、折々見舞者が來て、秋の日の長きを、たまにはまぎらして呉れるのであつた。駒井先生も自から來られぬ時は、必ず書生を遣はして、慰問された。日曜には時々鈴江君が遊びに來た。鈴江君は僕が上京した事も、病氣も少しも知らなかつたさうで、伯母から僕が病氣で大學病院に入つて居ることを報じて來たので初めて其れと知つて、直ぐ尋ねて來たのであつた。一年も前から東京に來て居ながら默つて居なさるのだもの、病氣になつて居ながら、はがきで知らしもせずに居なさるのだもの、と見舞に來ながら立腹して居た。而して僕が病氣が病氣だからと一ッもすゝめて歸すと鈴江君は猶更立腹して、袂から毛絲編棒をとり出し、悠々と枕頭の椅子に腰かけながら、當地の叔母は今も足痛を惱んで居る事、故鄕の母(即ち僕の伯母)は目下小さな女塾を取締つて居る事、今年の一月一處に上京した松村のお敏君は一ッ橋外の高等女學校に入學した事、今年の夏前お敏君が上野で偶僕の樣な後姿を認めた事、併し鈴江君が其樣な筈はないと云ひ張つた事などを話し、「本當に貴君はひどいわ」とあらためて立腹し、藥瓶を袂にかけて引倒したりしながら看護

婦所を務めて呉れるのであつた。

（十）

寢返りにも人手を借りて寢ながら孩兒の樣に横はつたのが、積滿圍に倚りかゝつて起坐す樣になり、其れから歩行が上手と看護婦に笑はれながら寢臺の縁につかまつてよろ／＼と二足三足、其れが進んで寢臺一周の大事業、ほつと息ついて寢臺に倒るゝ拍子に不圖藥瓶に映る吾顔見つけて何處の卵塔場からさまよひ出た幽靈だらうと怪しんだ第六週もやう／＼後になり、駒井先生のやさしくも書生に持たしてよこされた一枝にあゝ最早菊が咲いたかと思はず一滴を意氣地なく落した頃は、退屈も云ひ飽きて今些歩が行きさうなものと醫員に喰つてかゝりたい位、待ち兼ぬるは退院の日、三度の食事、見舞の客であつた。

前回に云つた人々の外に、稀には珍らしい見舞の客もあつた。其一人は思ひ掛けもない、僕がお下宿して居た湯島の彼新七爺、如何して知り、如何して來たのか、てら／＼とした彼頭は暫し病室の中央を照したのである。看護婦が椅子を寢臺近く寄せて請ずると、室内に滿つ石炭酸の臭に鼻を鳴らして居た新七君頭掻く／＼椅子を遙に入口の方へ引き退けて、其處では話か出來ぬ、お進み下さい、と云つても、最早此方で澤山で、とたつて辭退した。迚も深い男だなと思ふ途端に、はゝあ病氣の故か、と氣がついて見れば、成程是は遠慮深い、と、僕が寢ながら莞爾と笑つた、但し其心情は頗る嬉しく思つたのである。世に態々一文呉れるでもない貧書生をわざ／＼見舞に來て呉れる者があらうか。更に思掛けない見舞者は、菅先生であつた。先生は目下府下の某私立學校に教鞭を執つて居られるさうで、僕が關西學院出身の一條は少しも知らずに居られたが、此夏學院長片山氏が所要を帶びて上京された時、僕の事を殘念であつた、何卒此上勉强の都合をつけ加勢をしてやりたいが、足跡を晦ましてしまつて、東京とばかり居所が分からない（僕の秘密をよくも遠藤は守つて居て呉れたと見える）と語られたさうで、菅先生も其後は心にかけて居られたが、不圖其友人なる大學教授某の家から大學入學志願者の内に僕の名前を見出し、駒井先生宅から病院へと尋ねて來て呉れられたのであつた。

「一寸尋ねて來て呉れりや宜いに、遠慮が過ぎるぢやないか、菊池君」

と仰せられた。但し菅先生は關西學院の記憶を喚び起し、學院の記憶は一も取らず二も取らぬ僕が身の上を案る樣で、打明けた所が、先生の見舞は我ら快よき感銘を殘さず僕には行かなかつたのである。

遂に退院の許可が出た。單衣を着て入つた僕は、同時の書生が持つて迎へに來て呉れた羅入つけて安髪に遊び出た阿僧の樣に、車の上から天長節の國旗がひら／＼打振く街の賑ひを物珍らしく眺めながら、上根岸の駒井先生の宅に歸り着くと、氣が緩んだのか、まだ足に力が無い故か、二ケ月前寄附した玄關にべたりと尻餅ついた。

僕が退院した其夜、駒井先生は僕を書齋へ招いて、送別を祝し、僕が云ひ盡されぬ感謝の齡を打消し、

「菊池君は實に羨ましいね、珍らしい侍御を有つて居て」

と當初僕の病氣を國許へ先生から報ぜられると、母の見込を聽とざ明して呉れと云ふ母の電報が來た事、其れから激症ではあるが多分快復するだらうと云ふ名醫の見込を返電せられると、上京は見合はすから何卒萬事宜しくお願ひ申すと云ふ手紙と共に、五十圓送つて來た事を話し、更に一通の手紙を取り出で披見せよと渡された。見れば、母から駒井先生に宛てた

手紙（先日退院の近きにあるを報ぜられた其返事と見える）で、僕が先年は教育薫陶の恩になり今回はまた再生の惠に預かる其禮を吳々も述べ、御承知通りの性質で、彼方此方に氣をかね面目ながるの餘り身體の病は癒えて心は却て鬱屈する樣の事あつては、其れこそ先生の厚恩を空しうする譯、何卒何事も宜しく混とつて下さる樣に、母はまだ〳〵白髮の一筋もはえず、何年でも待つて居る、と其樣遂して下さる樣に、と書いてあつた。俯いて其手紙を巻きかへす僕の顏を覗き込んで、駒井先生は、

「御互にしつかりしないと、母御に笑はれるよ、菊池君」

* * * * *

醫師の言もあり、駒井先生の勸めも默示し難く、三日ばかりして僕は房州へ病後の靜養に赴いた。

（十一）

僕は殆んど病院に居た丈の日子を房州北條の田舍宿屋に過した。

海水浴と云ふ事、此年あたりから流行出して、夏季の盛には東京の一書生さあ一も大分入り込んださうだが、今は十一月、北條館山何處を尋ねても都臭い客には會はず、小蒸汽が齎らす新聞郵便に東京の消息に傳はるばかり、賑ひは地曳網、鮪漁、鮪向うの舊の名主が宅の無盡位、長閑なものである。

僕は斯大なる自然の搖籃に、裕々と足を伸ばした。最初は濱の運動に一町行つても草臥れて、砂の上に橫になり、或漁師の女に、一江戶のお客さあがおつ死んで居ると叫ばれたこともあつたが、一日又一日、鮮けき魚と鮮けき空氣は肉を添へ力を增して、濱の漁師も顏見識つて「今日は」と辭儀する頃は、那古船形まで徒步の往返も出來る樣になり、半頁讀まずに退屈して抛り出した書籍も少しは頁を繙へし、母や駒井先生に少しは長い手紙を書く氣根も附き、湯に入つては猶吾手足の細々と折れさうなのが氣になつても、宿の女房が所謂「干瓢の樣な」顏は潮風に「好えお色」になり、生活の慾望がぼつ〳〵吾胸に湧き返つて來るのであつた。

實に此一年ばかりは、「氣は彈弓、心は矢竹」身は生存競爭の渦に間斷なく、殆んど靜かに考ふる餘裕もなかつたが、思はぬ病氣に暫し閑散の身となつて、否と云つても自から省み靜かに思はなくてはならぬ境涯に置かれて、軒の松風、磯の白波、窓を撲つ夜の雨、吾靈を喚び醒まず天籟に耳傾けて、つく〳〵越方行末を思ふ夜半も多かつた。

或夕僕は館山北條の間を流るゝ名無しの川の川口に添ふ松林の下に坐して、夕景色を眺めて居た。日は伊豆の方に落ちて、とろ〳〵金を溶した鏡が浦の水一面の白きに返り、濃き紺色の鷹島、沖の島の二つ双んだ間から金地に染めぬく紫の富士やがて藍色になると見れば、ぼうん、ぼうん、那古の鐘撞く那古觀音の邊から暮靄は湧いて、何時となくぼうつと鏡が浦一灣の水を罩め、果ては此方の松林を一本づつ這ひ寄つて、やがて吾が膝を抱いて倚りかゝる松の隣まで蒼く暮れてしまつた。漁火が二つ三つ見え初めた。濱には人影人聲共に絕えて、茫々として暮色の中を大なる海の汀に言ふ聲のみ聞える——あゝまた鐘を撞く、緩やかな音が夕靄と一つになつて灣内に滿ち渡る。

ぢいと耳を澄まして居ると、不圖一昨年の夏、兼頭君が變死の後、比叡の山上で聞いた鐘の音が何處かに聞えて、微笑した兼頭君の面影が夢ともなく現ともなく、悶と眼前に浮み出でる。——僕は顏を掩うてやゝ久しく泣いた。

何の爲めに泣いたか。强ひて名づけたならば、其涙は服從の涙、醒めて悲む涙とも云ふ可きものであらう。

あゝ僕は誤つた。顧へば此一年間、僕は只管客氣に任せて、一直線に走らうとした。僕は自から吾力を恃み過ぎた。功名心の急なるまゝに、靜かに天命を待つ信仰も何時しか冷やかになり、稀に聖經を披き、祈禱をぼしても、心實にこゝに在らなかつたのである。宣教師攻撃、關西學院の出奔は、名義は立派に飾つても、私を營むの念が其中に籠つては居なかつたか。在京一年の辛苦、勉强、確かに吾藥ではあつたにもせよ、其中に不醇の野心が興奮劑となつては居なかつたか。否とは答へられぬ。僕は實に血氣に任せて走つたのである。走る者は躓く。僕は思ひがけない病に鋒を挫かれた。

圭角とりて圓かにして現れる波の鞭を蹶返す岩の心は頑なものだ、僕は實に天命に刃向つた。九死の中に求め得た一生を謝するよりも、一簣に缺いだ九仭の功を憾むのである。

俯仰しながら鏡が浦の一夕は吾頑な心を融かした。彼無形の前には、果敢ない人の一生は、そも何ものであらうぞ。彼大なる意思の前には人間の小さな意思果して何ものであらうぞ。千萬年走つても終に偶學の上をば越え得ぬ身を有ちながら、擅まゝに驀地に何處まで走つて行く積りであつたか。四時の歩みも、潮の滿つのも、悠々として迫らず止まぬ中に進歩はあるものを、僕は實に無暗とあせつた。足は地に着いて居なかつた。思へば病は僕の爲めに警醒時計であつた。曩きには友の死を眼前に見せて、今者吾死を近くに望ませて、天は吾を警醒したのに、如何なれば僕は無情と恨んだのであらう？而して熱い涙はまたさらに頰を傳うて落つるのであつた。

＊　＊　＊　＊

思はず五十日あまり房州に費して、氣力も大分快復したので、十二月の廿五日と云ふに、僕は歸京の船に上つた。

靈岸島に着いて、駒井先生の根岸の宅に歸ると、悉皆暮れてしまつた。車を下りると、横合から靴音と共に眞黑い形像が二つ三つぬつと出て、角燈の光さつと吾面に注いだ。見れば警部と巡査だ。警部は違つたと云ふ樣な顏をして、

「卿な佐藤哲太郎君ぢやあいますまいな？」

「左樣です、僕は菊池愼太郎と云ふ者です」

「佐藤に用があつとぢやかな？」

「否、僕は此宅に居る者です、何か先生に御用ですか」

云ふ内、轣轆の響と共に提燈が三つ四つ走つて來るかと思ふと、忽ちとまつた。眞先に車を下りられるのは、駒井先生だ。眼早く僕を見て、

「やあ、菊池君、歸つたね」

返事する僕よりさきに、件の警部はつか〳〵立寄り、

「貴所が佐藤氏ごあんすな」

「左樣、何か御要ですか」

警部は衣兜から一葉の書付を取り出して、駒井先生に渡した。先生は披き見るより、愕然、

「退去を命じるのですな、三里以外に！」

「左樣、三日以內」

（十二）

條約改正中止運動の成功以來、民間黨の氣焔大にあがり、攻撃の鋒非常に鋭くなるにつれて、政府も愈防禦の手を盡す樣子は房州滯在中、新聞や駒井先生の書簡によつて承知して居たが、まさか年の暮々に斯樣な非常手段を政府が取らうとは、僕は素より、犠牲となつた駒井先生も意外であつたらう。

「失敬な、先生、やつつけやせうか」と猛り立つ二三子を叱して、「御役目御苦勞」と警官に挨拶しながら、先生は一先づ奧へ入つて、僕等に後の事云々と云ひ含め、取つて返して出られる所へ、「佐藤君、々々々」と玄關に呼ばはる聲、出て見れば平民新聞の前主筆、駒井先生にには父

君樹の青山居士、滿口の酒氣を吐いて踉蹌と上りながら、「佐藤君、やられた〳〵、まさかと思つたら到頭クーデーターをやりをつたぞ、君は其樣、二年か、吾輩も御同然――ははゝゝは、流罪祝にブツン君を一寸開召した所さ、はゝゝゝゝ、御互に此れでも大臣格になつたね、護衛巡査がついてさ、ははゝゝゝ」泣くか、笑ふか、怒るか、分からぬ鬱勃たる言葉は酒氣と共に四邊に迸つた。

實に此夜、と其次の日の騷ぎは、筆舌の及ぶ所にあらずで、所謂保安條例の犠牲に、駒井先生、青山居士等僕の平生親近して居た人物を初めとして、名を聞いて面を見ぬ人、名も聞かぬ者まで、上下總て五百七十人、三年二年一年、家あるは三日、家なきは廿四時間を限つて京城三里以外に追つ拂はれ、聊にても抵抗する者は片端より拘引されるので、其騷ぎは實に名狀す可からざる程であつた。

駒井先生は二人曳で彼方此方走せ廻り、緊急の用を濟まして、直ちに横濱に赴かれた。僕は他の二三子と家をたゝんで、それ〳〵始末をつけ、差當り必要の荷物を携へて、直ちに横濱なる先生の宿に赴いた。其頃の替歌にも「連れ來るはあとから汽車で來る」と歌つた樣に、都落の連中相逆うて横濱に落合つたので、同港の騷ぎは實に非常なものであつた。志士の多くは、故郷に歸つて地盤を造ると云ふ者、地方新聞に從事すると云ふ者、横濱にとゞまつて東京の政論壇を賑はさうと云ふ者、何れとも決せず徒悲憤する者、歸らうにも旅費がないと先輩に泣きつく者、さま〴〵であつたが、駒井先生は逸早く心を決せられたと見えて、僕等が先生に會つて初めて聞いた新聞は、旅行免狀が下り次第海外へ行かるゝとの事であつた。（平民新聞は主筆が退去命令を受くると同時に發行禁止を命ぜられ、大阪に名を更へて同新聞を出さうとの計畫もあつたが、先生は辭せられたさうである。猶洋行費は先生の知己の豪商中川とか云ふ人が出すとの事であつた）今二三年は此土に居ても、別に面白い事もあるまいし、窮屈な思をしようより外國に遊んで、自家の修養もし、及ばずながら日本を外國に紹介して、外人の誤解疑團をも解く樣に務めたら、將來條約改正の一助にもならうと思ふ、と先生は云はれた。

此間僕は先生の要を帶びてしば〳〵京濱の間を往來して居たが、免狀もいよ〳〵下つて、明日は乘船と云ふ其日、一寸の閑に先生は僕を伴うて野毛を散歩しながら種々諭された。其中に今も忘れぬのは、左の數言である。先生が云はるゝには、

「今の所謂藩閥は患ふるに足らぬ、年限から云つても彼等の前途は知れたものさ。併しながら患ふ可きは敵たる彼等にあらずして寧ろ味方にありだ。君も目撃して知つて居ようが、今の民間黨――志士と云ふ者の中、話が出來る者が幾個あるか。大抵は不學無術、で無ければ德操も識見もない輩だ。此輩が國家の繼續者と云ふでは、實に心細い譯ぢやないか。否、菊池君、此れから後の日本は決して從來の空疎な事では行かぬ。渾て實力の勝負だ。政治界でも、眞の困難は廿三年以後に始まると思ふね。政治に限らず、皆然りで、日本が世界の舞臺に出れば出る程、國家の實力を試す機會は多くなる。志士自から愛して大に修養勉勵す可き秋では無いか。僕が所謂志士は政治家に限らず、渾ての方面に於て國家に貢獻するの志を抱くの士を云ふのである」

と僕に向つては飽くまで今の目的を追うて、且つ志士の魂を維持する樣にと勸められた。

殆んど遺言を聞く樣な嚴肅な訓戒に不覺の涙を墮した僕は、翌日（明治廿一年一月三十一日）大勢の見送客と共に先生を米國へと奪ひ行く

「オセアニック」號の甲板を去るに臨んで吾ながら女々しと思ふまでに落涙を禁じ得なかつた。「暫時攜手還分手」とは實に先生と僕の間を云つた句である。

唐人の詩に「同心一人去、坐覺長安空」と云ふ句があるが、茫然とした二三子と埠頭に立つて見す〳〵消え行く〳〵「オセアニック」號を目送つた時、僕は日本が空になる樣に思つた、而して僕自身も魂は彼船が持つて行つてしまつて此處に立つのは其亡骸である樣に思つたのである。

八の巻

（一）

明治廿一年の一月末に僕は恩師駒井先生の洋行を見送り、同年の秋九月の初旬に僕は愈文科大學の第一年に入つて、英文學を修むる事となつた。駒井先生と別れて後は、彼湯島の下宿に再び小生涯を始めた。先生が彼百忙の中に不肖の一弟子を忘れず、後々の事まで考へて、僕の事を保安條例に觸れた其頃評判の好かつた雜誌「明治評論」の主幹安藤と云ふ人に紹介委託し置かれたので、僕は早速自活の道を得、飜譯などして得る金額は、假令肥美を食ひ車に乘る程に無くも、僅かに下宿料を拂つて、あまり垢づかぬ襯衣着るに足り、まだ昨年の春の樣に新聞配達を再びするに及ばなかつたのである。

稀に菅先生を訪ふの外、病中鈴江君に見舞物持たして寄越された禮に唯一度鈴江君の叔母なる人の宅を音づれた外、月に一兩回明治評論社を訪ふの外、僕は誰をも訪はず、誰にも逢はず、宛ながら猫の如くにおとなしくして、ぼつぼつ勉強して居た。實は一年後れたついでに、大學の第二年に入る程の準備をと思つたのであるが、大病後一年間は身體も十分舊に復しかねて、無理する所があるので、僕は思ひ切つて落つきに落つき、牛の歩のぬら〳〵行くことと定めた。而して試驗に臨むにも、昨年の意氣は無くて寧ろ平々淡々として其場に臨んだのであつた。併しながら試驗は無事に通つた。後に聞けば、外來の受驗者には近來出色の出來であつたとか。去年であらば兎も角も、今年となつては別に格外の愉快でもなく、——無論不快でも無く——先づ當然の事として、母や當時米國に居らるゝ駒井先生や正保證人となるの約束ある商人中川氏（駒井先生の洋行費を引受けた人）や副保證人たる可き菅先生に報ずるのも、唯事務的に報じた迄であつた。惟ふに安心した者は、僕よりも、三百里外より日夕東の空を眺めて口にこそ云はね其立身を片時も祈つて居る母其人であつたらう。氣強くても流石母親、入學済の通知の返事の字はおのづから喜色溢れて、やがて送つて寄越した新らしき袷、袴の丈は從來よりも長かつた。大學に入つて、急に大人になつた心地がしたのであらうか。

關西學院を出て、殆んど二年ぶりに僕は再び規則立つた學校生活、寄宿舍生活に立返つた。未だ去りやらぬ病心に、日本の最高學府を内々恐がつた大學も、入つて見れば何有思つた程にもなく、博士學士教授、成程エライ人もあれば、案外エラクない人もある。（意外なのは、一昨年の夏備前岡山で、彼曾根君が失戀の幕に、立敵の役を勤めた隈谷文學士が助教授とやらをして居る事であつた。以前なれば冷評の一句も獻ずる所であつたが、今は僕も大人になつただけに、目禮したのみ、既往の事は何とも云はなかつた。其後同助教授はしば〳〵私宅に遊びに來いと云つたが、僕は終に行かなかつたので、其家の主婦——當年の金子女史が果して如何な令夫人となつて居られるかは、終に見るの機會に遭はなかつた）同窓生にも成程俊才もあれ

ば、隨分の不佞才もある。僕は沈默菊池と云ふ諢名を博した程無口に、また別名を隱者菊池と云はれる程獨居の生活をして、眞面目に勉强した結果、學年末の試問に好成績を得て、第二年より特待生となつた。

（二）

大同團結の騷ぎ、憲法發布の盛典、外務大臣の隻脚を吹き飛ばした條約改正再度の破裂、明治政史の廿一年、二年、三年は國會の黎明き前、賑やかな年であつた。文學史から云つても、文運勃興、文士輩出、印刷大繁昌の時代であつた。併しながら僕は此兩三年を一直線に驅け通る積りである。何となれば、此兩三年間は、僕は別に書く可き事を有たぬ。成程僕の生涯も多事であつた、併し其多事に多く腦裏の出來事、紙上に寫しては殆んど幾何も無いのである。

西山塾、育英學舍、關西學院とおの〳〵一癖ある私立學校を通つて來た僕は、主義氣風感情の凡てに於て、多く官立校の正課を踏んで來た諸子と、如何しても合ひ難い所あるを自覺したのは、大學に入つて猶幾何もあらぬ程の事であつたが、時たち事情ます〳〵分明なるにつれて、僕はいよ〳〵此相違の著しきを感じたのであつた。噴火山が投げ出す最初の石は大にして後ほど小さくなる様に、一國の歷史でも、一學校の歷史でも、創業若くは復興時代の灝氣が生み出す子は粗豪有爲なのが多く、萬事整頓世話が届き過ぎる家庭に育つ坊ちやまはよく風をひく、と云つた様に、大根を食つて馬鹿に騷ぎ大學の寄宿舍からインキだらけの手を伸ばして一つ日本を撼かしてやらう、などと調子はづれの騷ぎをやつた少年時代は過ぎて、大分分別がついて來ると共に、曩時の元氣は此處しばらく伏流の姿となつて、能吏の卵、おとなしい學者の卵、渡世上手の卵、などを孵へすに至極適當な生溫な空氣が充ち滿ちて居る様に覺え、知識の源泉は成程開かれてあるが、其内に入つて人の脊骨を凛とさす風氣は、何處の教室に、何處の寄宿舍に隱れて居るのだらうと怪しむ位。間には毛色の異つた男も無いでは無いが、兎角耳目に觸るゝ所は不快心の種子が多く、學問を商賣道具と心得て立身出世の近道ばかり研究したり、教授にすり込み身分ある人に電信求めて卒業前から身のふりかたに憂身を窶したり、隨分と風流遊の負債を拵へたり、する者下に少なからねば、學者にしては香しからぬ朋黨比周の爭ひも上に盛で、此れでは國士の養成所では無くて氣概ある論者が、曲學阿世の本場、俗吏製造所なんどと罵詈するのも萬更否とは云はれない、と思ふこともあつた。

僕は失望した。德望識量一代の師表たる可き人物を戴くの日は兎も角も、今の所では、僕は殆んど「師」と指す可き者を有たぬ、「友」と云ふ可き者も發見し得ない。僕は決心した、此處に在る間は、單に知識の食道を開いて、空氣は一切呼吸すまい、微力到底他を化す能はぬまでも、他に化せられぬ様に警戒しなければならぬと。其れで僕は伯夷主義を執つて、眼に惡色を見ず、耳に惡聲を聞かず、手に酒盃を把らず、公事にあらざれば教授の宅を見舞はず、（菅先生の宅には時々行つて史學上の話など聞いた）日曜には聖書を衣兜にして或は會堂或は上野の森、或は郊外に獨往獨來し、一寸の鉛筆も棄てず、反故も背がへしにして筆記の用に供し、（時々は塵紙を筆記に用ゐた。僕は母を煩はすを欲しなかつたので、大學から月四圓の奬學貸費を受けた。餘は明治評論の飜譯や、菅先生が世話でちよい〳〵調物などして、費用を辨じた）冬季春季の休業に寄宿舍の騷がしく、聞き苦しい話が出れば、圖書館の閲覽室に逃げ込み、或は池の邊の楓樹の下に足投げ出して考へ、吾ながら頑固一徹の生涯を送つたので、「隱者

菊池」「沈默菊池」の外に、「野暮」「高慢」「吝嗇」など云ふ結構な諢名を貰つたのである。

（三）

併し僕はあまり同窓の毀譽に心をとめず、孤立の地位に甘じた。孤立は固より不利なもの、淋しいもの、併しまた自由なもの。好かれて困れば、嫌はれて結構な事もある。人を惡むは吾心に毒を孕む樣なものだが、人に惡まれるのは（若し吾に清白の良心だにあらば）たかが皮膚の痛に過ぎない。旅は固に道づれだが、伴侶がなければ、一人で歩かなければならぬ。

幸にして僕は健康を有つて居た。先年の大病は却つて體の組織を一新して、殆んど舊に倍るの元氣を與へた。僕の如き鈍才は、長生しなければ何事も出來ぬと思ひ、俊秀の士が可惜玉を抱いて半途に斃るゝを殘念に思つて、僕は故らに健康に注意した。隱者菊池には一の現象と云はる、程戶外運動には出精し、短艇競漕ベースボール何處にでも顏を出したが、中にも大學競技會の六百碼選手競走には每も第一着の賞を得て菊池長髄彥の諢名を得、明治廿二年の夏期游泳には西山卒以來鍛へ込んだ技倆をあらはして、隅田川を千鳥がけに十三回まで往復して、また一つ河童菊池の諢名を得た。

身に健康あり、心に希望あり、出づるに車なくも讀むに書あり、友を古人に求むると云へば仰山に聞えるが、所謂友を古に求め、印度の富も猶貧しきまで限り無き富の溢るゝ文學の野を渉獵する僕の生涯は實に幸福と云はなければならぬ。幸福の生涯、また多忙の生涯。何となれば、僕は正課の外に、圖書館に參考書を渉獵する外に、明治評論の編輯、又をり／＼は評論で新著、文學上の批評を草する外に、駒井先生が米國にありて英文日本歷史を著はさるゝについて其材料を集めて送る外に、僕自身の道樂を始めたからである。其は德川時代封建的日本の研究である。僕は先年東京に入つて以來、千代田の城を仰ぐ每、戊辰の彈痕猶殘る東臺の森を散步する每、見附々々の大石を撫して通る每、新東京の眞中に封建の昔を語る長屋門、屋敷跡を見る每、新聞紙上に某の俠客某の老爺など江戶時代の遺物の沒去を見る每、大學に來て日夕の散步に不圖梅鉢の紋ついた瓦の片を蹴る每に、封建時代の面影は髣髴として眼前に湧き出づるを覺え、昔寢物語に父母が話して吳れた談片と共に、小兒時代に眼に觸れた繪草紙の記憶と共に、非常の興味を喚び起すのであつた。或秋の夕僕は麴町に菅先生を訪うて、歸途此も昔の名殘の長屋門をさつさと人の取崩すを見て、九段へ來かゝると、秋の日落ちて暮靄やう／＼萬家を罩め、近衞の喇叭の音は頻りに夕を催して居る。彼銃劍形の記念碑の側に立つて、眺むる吾胸中に、「蒼茫萬古意、遠自荒烟落日之中來」の句が閃く途端、三四羽の鳥が唖々と鳴き連れて、一羽の影を牛が淵の水に曳きつゝ、遙かにニコライ塔の方へ飛んだ。殆んど其刹那に、僕は一の決心をなしたのである。實に世の變遷は、今水に映つた飛鳥の影の、在るかと思へば已に無いもの、維新を距る僅か二十餘年の今日此頃でさへ、幕府の代は最早雲霞と隔つて居るに、今の若者の子や孫曾孫の時代となつたら、如何であらう。未だ其記憶の較新なる今、故老の存する今、記錄物件の多き今、而して其物の實形實質を見るに尤も都合よき距離を隔つる今は、即ち畫布の上にしつかと描き留め置く好時機であるまいか。まさに其時機である。僕は試に之を描いて見よう。而して僕は之を描くに、正史の體を用ゐず、史的小說の體によつて（僕は其頃課餘の閑暇にスコットの歷史小說を讀んで居た）此封建日本の活寫眞を傳へて見たい。事實を擧げ、時處人を考證し、微を析き、細を敘づる歷史は他に書く人もあらう、僕は歷史以外の

歴史を書いて見よう、封建日本の眞面目眞精神を活寫して見よう、即ち一部の新日本外史を書いて見ようと思つた。思へば日本外史の著者が其不朽の著作の第一稿を終ふる年配に、僕はぼつ／＼此様な妄想を起したのである。才と庸との別も亦甚矣であるが、其かはり僕は百歳の壽を保つて氣長にやつて見よう。九段の夕に佇んで、ちら／＼見え初むる街の燈火を瞰めながら、僕が想つた所、右の通りであつた。

（四）

斯く多忙の中にも、僕は聖經の靈漿を啜うて心の枯渇を慰すを怠らず、日曜には、會堂に行かなければ、野外を歩き／＼默思して居た。同輩の多くは今日宗を奉じて、苟くも日本の最高學府に籍を置きながら時勢後れの信心沙汰は沙汰の限りと冷笑するのであつたが、僕は此に據る可きの大盤石を見出したのみならず、英文學を研究するに當つて、其汪洋たる詞海想海の何處に漂ふとも、少し潛つて見れば其裡には萬古不盡の宗教思想が底流となつて漲り、眼を驚かす雄大跌宕の産物も此底流の湧き上る結果に歸す可きもの頗る多きを見て、いよ／＼信仰の事の輕忽に附す可からざるを思つたのである。僕は「信仰なき學問は往々にして人を驕傲狂、若くは憂鬱狂に導き易きものなるを思ひ、「潭清疑水淺」如くに、宗教の直覺が授くる眞理は往々平凡に見え、學者の高談微妙の論も往々人を五里霧中に迷す事あるを思つて、想界の迷途を辿るにも手に此一條のをだまきを離すまいと決心したのである。而して僕は此點に於て偏強の味方を故郷の母に見出した。

是非と思つた時には成らず、忘れた頃におのづから成る。「時」は從來呑氣な然し記憶の好い仕事師だ。先年の失敗以來、傳道は暫らく思ひ絶つて居た今日此頃、母が心を信仰に傾けたと云ふ報を聞くのは、實に意外であつた。

前回の末に述べた彼頃の事であつた、母はやや久しく眼病（仕事に夜深かした故であらう）に惱んで、徒然のあまり來る人毎につらまへては色々の本、新聞、雜誌など讀んで貰つた。其と聞いて僕は新刊の小説數種を送つたが、其も母は忽ちで聞いて倦きてしまひ、何か珍らしいもの珍らしいものと求めて居たさうな。恰其時お冬君、（僕は書き漏らしたが、此夏伯母から其管理する女學會の英語女教師を一名欲しい、と云つて來た。鈴江君も恰其夏頌榮女學校を卒業したが、まだ二年ばかり留まつて高等英語科を修め、其上洋行がしたいなど云つて居る位、中田舍の女教師なぞしさうもない權幕なので、伯母も吾子ながら鈴江君には強ひかねたのである。僕は其頃在る所で不圖「基督教新聞」を繙へして、大阪梅花女學校卒業生人名の中に故兼頭君の許嫁であつた彼お冬君の名を認めたので、猶松山に居ると聞いた志津牧師に手紙を出し、周旋を頼んだが、首尾よく話纏つて、お冬君が赴任したのは八月末であつた。僕は先年叡山でのお冬君の擧動、確乎した婦人と見込んで、斯く計らつたが、果して思ひがけない良教師が出來て皆々大滿足と云ふ伯母の禮状が程なく届いた）其お冬君が母を見舞に來て、何か讀みませうか、彼も此も最早お聞きなさいましたのなら其れでは聖書でも讀みませうか、と云ふ調子で、年來押入に押こめられた彼小形の聖書（僕が受洗の當時送つた）がこゝに取り出さるゝこととなり、母は其日初めて聖經の奇異なる文言を聽いた。而して此一日の事が如何母の心を動かしたか知らないが、母は其後日毎に聖書を讀んで貰つて、新約全書一部讀み終る頃は、心融け、眼病癒えて、眼も悟も一時に開けたのである。而して其眼病平癒を知らして來た手紙に、

先年彼程切に云つて吳れたのを拒んだのはわたしが心が到らなかつた、年甲斐もなくて恥ぢ入ると、白々地に子に詫びた母は子よりも猶熱心に信仰の道に進んで、たゆたふ伯母を攻め落し、其年の暮二人共に受洗した。

其後母の手紙には、氣をつけてやりたい母は遠くに隔つて居ても絕えず氣をつけて下さる父が在すと思へば少しは慰む、云ふまでもないが學問に耽り過ぎて信仰を忽にしなさるな、と云ふ意味の文言が每も書いてあつた。

（五）

悲歡憂喜の綯れてしばらくも定まらぬ世の中とは云ひながら、母が受洗の吉報を受取つて未だ三日とたゝぬに、腸を斷つ一悲報に接しようとは、實に思ひもかけなかつた。恩師駒井先生の訃報卒然英國より逹したのである。

去年一月横濱を解纜されて以來、駒井先生は米國の西部に半年、東部に一年餘滯在して、種種研究さるゝ傍、講談を開いては日本を米國人に紹介し、また英文日本歷史を編述せらるゝについても僕も命によつて材料を蒐集して送つたりしたが、廿三年國會の開設も近まつたれば、大西洋を渡つて、歐大陸を一巡し、七月の總選擧前には是非歸朝するとの事で、新約克を發して英國に渡られたのは、つい二月許り以前の事であつた。先生の手紙、先生の時々明治評論に寄せらるゝ論文及海外通信、米國新聞に出て居る先生の講演其他の記事、總て先生の身邊愈賑やかに、前途の益盛なるを想はしむるばかり、師已に斯くの如くなれば弟子もまた三年たつても依然たる吳下の舊阿蒙と笑はれぬ樣勵しなければならぬと、僕も思つて居た。歸朝の上は、如何樣な面白い有益な土產話があらう、日本開闢以來初めて開かるゝ第一議會に先生の人品と識見と雄辯は如何に光彩を放つであらうと、指を屈して歸朝の日を待ち詫びた、然るに突然と此悲報は何事ぞ。倫敦の毒霧寒煙はあゝ終に先生を奪ひ去つたのか。三十を過ぐる纔に一歲、花も實も此れからと云ふ年をして、沖天の猛志を懷いて、知己後輩の望を負ふて居ながら、異鄕の鬼となられたか。餘りの事に、涙も出ず、茫然となつて居ると、其翌日（完ながら人生の果敢なきを惡鬼の嘲る樣に）一通のはがきが倫敦から逹した。見ればまさしく先生の手蹟（心が動顚した時とて僕は先生自から死去の電報の誤を正されたはがきかと思つた）日附を見れば十一月の中旬、文言は、倫敦の冬は中々こたへさうだから用事仕舞次第多分來月中旬あたりから大陸漫遊の途に上る筈、身體は壯健、安藤君（明治評論主筆）に宜敷、と書いてある。僕は此はがきを投函された後で、まだ英國滯在中に發病されたのであらう。情無いではないか、書いた人は其はがきが地球を半周する間に果敢なくなつてしまつて、心無い筆の跡ばかりさり氣なくとゞいて來るとは。今は記念の此一通のはがきの上に、僕は抑へ難き千行の涙を灑いだのであつた。

彼電信がついて四十日餘りたつて、先生の遺髮と共に先生の病氣及臨終の模樣を報ずる我公使館書記官の手紙が、安藤氏宛に屆いた。其手紙によつて、先生の病氣は急性肺炎であつた事、病床には本邦人數名かはる〴〵侍して居た事、大熱の譫言にも頻りに國會の事を云つたり、演說をする樣な事を云つたり、また故鄕土州須崎の兄君の事を云つたりせられた事、最早終焉と云ふ際に、先生は蹶然と寢床の上に起き上り、眼を睜いて、「しつかりやつて吳れ」と明瞭に一言云ひ放つて、やがて昏睡の狀態に陷られた事、英醫が先生の氣分の確かなのに驚いた事、先生が暫時の滯留に往來された英人何れも教養ある好紳士と稱するに一致し、弔するに慇懃であつた事等を知つた。數日の後、土州

から出京された先生の實兒（先生とは異つて純然たる田舍漢）や諸先輩と先生の遺髮を谷中墓地に葬つた。保安條例執行後まさに二年を過ぎて、逐客の歸京し會葬する者多きを見るにつけても、僕は落涙に堪へなかつた。其日歸る道すがら、淺井（讀者諸君は、育英學舍に非常の美音を有つた俊敏の短小少年が居たことを記憶せらるゝか。斯少年淺井は僕が出奔後、中學、第一高等中學を經て、今年法科大學に入つた。不圖寄宿舍の階段で相見て、互に驚き、こゝに舊交を暖めたのである。彼は僕よりさきに出京して、大分世馴れた如才無い男になつて居たが、一皮剝れば當年の腕白者は依然として存して居る）と先生が育英學舍の昔を語り合ひ、其れから歸つても夜深くるまで眠られぬまゝに、僕は寄宿舍をぬけ出て、庭内を彼方此方歩いた。霜夜の風颯々と面を吹いて、骨を痛む樣。

（六）

不圖雁が鳴き渡る。愕然として僕は空を仰いだ。凄まじい星の夜だ。空の何處を望んでも、寒星爛々と今にも降りさうである。宛ながら四年前叡山の杉木立の隙から仰いだ空も思ひ出でらるゝ。否、其時よりも空は彌々高く冴えて、一天の星光驚くばかり明らかに、何の星を眺めても、氷の絲霜の鏃より猶鋭き光の殆ど吾胸を射ぬく樣に覺える。僕はやゝ久しく空を仰いで立つて居た。涙にある感想が湧いて來た。彼泰西詩人の句にも、

宇宙に一の大なる社會あり、
　これを組織する者は、
　　高尚なる古人と今人と。

とあるが、實に其通り、志士の魂は決して死なぬ、大人の靈は萬古に生きて居る。生きて萬萬世の後までも挺然流俗の外に奮ふ靈魂を勵まし、言はずして而も相呼び應へて居る。時何ものぞ、空間の隔何ものぞ、人種の相違、信仰の異同、要するに大海の水上に劃した無跡の線に過ぎない。彼燦たるものは果して星か、創世以來世に生れ來て貴き生涯を送り死の關門を經て更に無窮の生に入つた百千限り無き靈魂が天上より下界を見おろして居るのではあるまいか。駒井先生、鎌頭君、人は死したと云ふ、併し厳然と生きて居る、生きて彼大なる社會の一員となつて居る。――何の星が其であらう？と不圖空を仰いだ。

人類の進軍も思へば悠久なものである。生きかはり、死かはり、歩んで、歩んで、何處まで行くのであらう、何時が終極であらう？　思へば駒井先生と云ひ、鎌頭君と云ひ、吾先頭に立つて足を揃へて進んで來た師友は、此處に一人斃れ其處に一人落ちして、否でも獨歩しなければならぬ時が來た。獨歩？　獨歩？――否、僕の眼には見えぬが、千萬限りなき足音を前に後に右に左に聞く。皆僕と共に進軍する人の足音である。行かねばならぬ。足の續く限り進まねばならぬ、斃れた師友の分まで負つて進軍しなければならぬ、兒女の泣を學ぶ時であらうか。涙を拂つて、雙脚を踏みしむ可き時である。駒井先生が末期の言に「しつかりやつて吳れ」とは誰を指されたか、恐らく僕も其遺言の分け前に與るのであらう、また與らねばならぬのである。

湧きかへる感想を傾けて、僕は寄宿舍に歸るや否、燈に對して「恩師駒井先生」の一篇を草した。此一篇は其次號の明治評論に掲載され、後先生の先輩青山居士の「佐藤鐵嶺傳」中に收められ、「教育家としての鐵嶺」を紹介する便にせられた。僕自身も其內には先生の詳傳を物して、せめて知遇の萬分一に答へたいと思つて居る。

僕は最早兒女の泣を學ぶまいと決した。併しながらまた其覺悟を空にした。葬送の後餘程た

つて、或日用あつて安藤氏を訪ふと、先日倫敦からついた故駒井君の遺物の中に斯様なものがあつた、菊池と名ざしてあるから君に渡すと、小形の洋書を一冊渡された。手に把つて見れば、白羊皮に金文字入の表紙、ミルトン詩集である。表紙をあけて、僕は唇の震ふを禁じ得なかつた。ブランクページに、ペンで、

贈　菊池君　　哲

と書いてあるは、まさしく先生の筆である。察するに、クリスマスの贈物にせらるゝ筈で、名宛まで書いて置いて、病氣になられた爲めついに果されなかつたのであらう。――僕は涙と共に無量の恩情籠る先生の遺物を收めた。

詩集は十回百回亂讀されて、頁は手垢によごれ、縁の金は色褪せてしまつたが、二重に三重に包まれた羊皮の表紙はまだ雪の如くに白く、今も兼頭君の寫眞と共に、僕が書齋の二大寶物となつて居る。

僕の一生に大感化を及ぼした者、母を除いては、駒井先生と兼頭君とが其最なる者である。兼頭君は其沈毅の人格をもつて僕に基督教の光を齎らし、駒井先生は僕に烈士の活模範を示された。僕は自から省みて吾不才下劣の器なるに失望し、世の腐敗に失望し、進めば進む程理想の遙なるに失望する毎に、斯師友の面影が突然浮み出でて、吾を勵ます様に覺える。

單に其から言つても、靈魂は實に不朽なるものである。

（七）

駒井先生遺髪の埋葬式に鬢の毛を吹き切る様に冴えた北風何時か和らいで、梅白く綻み、柳緑に眠り、東臺崋陀の櫻薄紅に蕾む頃、内國勸業博覧會は數多田舍人の足を東京へ運ばせた。

過る一月、菅先生が第二高等中學教授に任ぜられて仙臺に赴かれし以來、僕は副保證人を下谷の中島氏に頼みかへた、即ち鈴江君の叔母、故野田伯父の妹の家である。當主は海軍少佐で、大概船に乗つて居、夫人は兼子と云つて大の好人、男隠居はまた嫁に劣らぬ娯樂人、年が年中謡鼓に凝つて居られて、留守の天下は女隠居の手に握られて居る。仲子と云つて、今年五十六、持病の足痛が盛に起る時は、從六位の肩書ある八字髭の主人すら七八歳の悪太郎同様に叱り飛ばす位で、良人とは云へ男隠居なぞは、恐ろしきもの、一、鰒、一、大晦日のかけ取の顔、一、細君（寧ろ大君が適當である、鈴江君の父なる人の妹だけ、體格倔強の大女、權力から云つてもおさ／＼徳川家の將軍に均しかつたこと恐らく日記帳の片隅へ楽書されたであらうと思はるゝ程内を畏れて、それ女御隠居の御機嫌が悪いと云へば、一間どころに逃げ籠り、消息にかりついて居られる位。況して好人物の老御寮は變色蜥蜴の様に日に幾度か青くなり赤くなり、鍛冶屋のふいごの様に五色の息を吹いて居るが常であつて、平氣に其病間に出入するのは、鷹揚の鈴江君か、頑是ない嫡孫の不二男と云ふ童ばかり。併しながら野田伯父が「一妹はエライ」と稱賛したと云ふだけ、女に稀なる俠氣あつて、難を釋き諾を重んずる魯達季布の風を具へ、才を憐み、書生を愛し、主人の大禮服を質に置いて窮生の急を濟つたり、吾巾箱は勿論嫁の臍くりの底はたかせて來る者毎に馳走をしたり、さしより時人傳中の人であつた。それで若い者間の評判に非常によく、僕なぞも時々行つては世話になつた。

或日此中島の宅で鈴江君に會ひ、松村隠居が博覧會見物かた／＼近々に上京するとお徹君の噂であつたと云ふ事を聞いた。僕も未だ一度も東京の土踏まぬ母に是非今回の賑ひを見せ

たいと思つて居たので、其は好同伴と、早速母に上京を促した。折かへして來た母の返事には、上京したいは山々、また其位の費用はちやんと用意して居るが、今年の養蠶前に是非かたづけて置かねばならぬ仕事もあり、鈴江さんの阿母も學校が忙しくて一寸はづしかぬるに、一人は出たくない心地もあり、殘念ながら見合はす、其かはり卿が思ひがけない人が多分來るであらう、此方の樣子萬端其人から聞いて呉れ、と書いて來た。

思ひがけない人、誰だらうと思つたまゝ、五六日たつて、博覧會開會の第一日曜、朝餐食つて此れから上野へ出かけて見ようと帽を取る所へ、面會だと報じて來た。應接間へ行つて見ると、黒綾のモーニングを着た大の男が莞爾莞爾笑つて立つて居る。

新吾だ。

「やあ、これは珍らしい、突然ぢやないか

彼は絲の如き眼に僕を見上げ見下ろし、頻りに其大なる鼻孔を動かしながら（讀者は記憶されまい、此は新吾君が滿足の徴候である）

「はい、昨日着きましたが。喫驚しなさつたぢやろな、はゝゝゝ、新吾もお目にかゝつて斯ういふ嬉しかことあござせん」と崩れさうに笑ふ。僕もつりこまれて、笑ひながら、

「阿母から、思ひがけない人が行くと云つて寄越しなさつたが、其れぢや卿の事だつたね」

「お袋樣――今年は八年ぶりにお袋樣にもお目にかゝります、四年――愼ちやま、神戸で愼――若旦那にお目にかゝつた年は戊の年でござしたた――四年ぶりにまた若旦那にお目にかゝります。結構な年ぢやござせんか。――愼ちやま、よウく新吾の云ふ言をきいて、大學校に入んなさつた。本當に立派な男ぶりになんなさつた。斯樣な好い男子になんなさつた所をお袋樣に見せたら、泣きなさろな」

言葉は暫し途切れた。

「其樣して、今度は矢張り商賣用をかねて來たのかね」と僕は問うた。

「はい、愼ちやま、喜んで下され、新吾も最早番頭手代ぢやござせん、小ちやか石炭山の所有主でござす」

新吾は、先年嵩坑坑夫虐待問題の起つた時、坑夫に同情を寄せた廉で、解雇されたが、少し許蓄へた金で、不圖福岡縣某郡の掘りかけて見込がないとかで賣物に出た小さな炭山を棄値に買ひ取り、高島を逃げ出した坑夫などつかつて、ぼつ〳〵やつて見た所、案外の好成績で、もと顔知りあつた問屋取引先も信用を置いてくれるし、かた〴〵好都合を得て、其後また同じ礦脈に當る一二の山を買ひ入れ、大した事はないが、今は中村新吾と云へば一寸九州の北部に噂、彼かと領かるゝ樣になつた事をかい摘んで話し、

「新吾もまだ〳〵此れからでござす、ござすが一寸土塊石がまあ一つ掘つたで、喃愼――若旦那、新吾も久しか振りに今年はまあ妻籠にも行きます、お袋樣にもお目にかゝりに行きます、其れから今度はまた愼ちやまにお目にかゝるなり、東京見物なり、博覽會見物なり、其れに些と要事もござすで、のこ〳〵出て來ましたでござす」

「其樣して卿は最早見たかね、博覽會は？」

「愼ちやま、何を言ひなさる、愼――若旦那にさか今お目にかゝるぢやござせんか、未でござす」

「僕も未――ぢや此れから一緒に行からぢやないか」

僕は新吾と打連れて寄宿舍を龍岡町の方へ出た。新吾は歩き〳〵目を側だてて、「本當に好か男子になりなさつた喃」と獨語の樣に云ふ。

「卿こそ立派になつた、洋服が似合ふよ」

新吾は窮屈さうに肩を動かして、額の汗を風呂敷大の手巾で押拭ひ、カラアのあたりを出來得るだけくつろげながら、

「本當に似合ひますか喃、嚊も其樣云ひますが」

「嚊？——細君が出來たのかね」

「ははゝゝゝ、此は大失策、——愼、若旦那、新吾も到頭女房持になつたでござす、はゝゝ、はゝ、新吾も昔は金儲は獨身者の事ぢや云ひましたが、否、好か嚊持ちや大金持でござす。はゝゝゝ」

「其樣して其細君と云ふのは？」

其細君は士族の孤兒、辛い目をして學問した女、容貌は「似た者夫婦でござす」が、實があつて（「昔から北の方なんて女房はつめたか者の樣云ひますが、新吾のは南の方で、はゝゝ、温かでござす」と新吾は洒落た。無論新吾は北半球の人だから其樣云つたのだ）讀も算筆も達者で、帳簿から問屋の應接何くれと一人できつて廻すと云ふ事を話し、其細君が今度東京行上りについては是非洋服になさいとすゝめ、大急ぎで福岡の洋服屋に誂へ、やつと仕立上るを待ちかねて、早速着用して出て來たのである事を話した。履歴を聞いて、あらためて見れば、猪首にカラアの摩れあと赫く、胴衣のボタンは下二つが捩ちぎれて、一歩々々に溜息をつき、固唾を飲んで居る。不圖足を見ると新足袋に其階と云ふ不思議の形装。

「靴は如何したのかね」

「いや其靴でござすが」と新吾は福岡一番と云ふ大きな靴を買つたが、其も出來合で、足には小さかつたのを、細君が、少し辛抱して居るとすぐよくなります、西洋あたりでは蹄の入らぬ靴を爪先につゝかけて歩くのが上流社會と云つて貴びますと云ふので、痛を忍んで穿いては來たが、東京に着いた頃は踵の皮が剝けて湯にも入られず、昨夜宿で即効紙を買つて貼り、今日は此通り和洋折衷で來た、と云つた。ひどい實がある細君だと僕は思つたが、新吾は中々動じない。

「いや、愼——若旦那、持つ可きものは好か女房でござす、お待ちなされよ、新吾がいまに好か奥樣を見つけてあげますぢや」

八

魁梧貞任をあざむく新吾が身材、和洋折衷の身装が已に人目を惹き易い所に、斯樣な事を依昔ながらの大音にわめくので、往來の者が顧りと顔を見るに、僕ははら〳〵しながら、池の端を通つて、蟻の行列たゞならぬ群衆と共に上野に繰り込んだ。

四月朔日の上野は花の眞盛り、博覧會開けて第一の日曜と云ふに、昨夜の小雨今朝は殊なき淺黄の空に晴れて、日かげうら〳〵と木蔭も惡からぬほかつきに、我も我もと肩を揃つて上野に押寄せたので、衣香扇影何千何萬と云ふ人のぞめきの中に紛れて、十歩の彼方は人の息とも塵とも霞とも分かぬ曇りのぼんやりと立迷ひ、あゝ熱と手巾を扇がはりの、花よりも先づ人の顔が櫻色になる程の人出。僕は聊か人出の夥しきに呑まれ顔の新吾をせきたてて、押分け押分け石段を上つた。

櫻が岡から都の春を一眺め、「成程東京は大きうござす」と嘆賞する新吾を引張つて、案内役の僕は先づ彰義隊の墓前に維新の昔物語から、井戸側の欄はあぶない秋色櫻の由來、濃い緑に映る花の微妙さ、殘る隈なく講釋したが、新吾は例の大手巾で湧き出づる額の汗押拭ひ、熱さうな溜息ばかりして居るので、僕は袂を摺鉢山の方へ導いた。流石に此處は人の往來も少なくて、大木の林が含む冷々とした氣の汗ばんだ面を撲つ心地よさ、新吾は鼻を鳴らして木の香を嗅ぎ、時々大樅大杉の下に立どまつては、

木の丈を目測り、子でも撫づる樣にとん〳〵と敲いて見て、

「好え木材でござす喃、官林ぢやろな」

と嘆稱した。

さ、此れから博覽會、と林を出ぬけて廣場へ下りる途端に、此も今迄林中を歩いて居たのだらう、臘虎帽と花色の蝙蝠傘と横合からたらたらと下りて來て、呀と思ふ間もなく、僕は忽ち松村老人の前に立つた。

「やあ、御出になりましたな」

制帽をとつて、慇懃に一禮する僕の顏を眺めて一寸寄せた老人の眉皺が忽ち舒びると同時に、掻卷大の大紋付黑紬の羽織の袖口から懐中した手が出て、やをら臘虎の帽(見覺えある)を脫り、

「や、これは、愼三郎君、久し振」

併し僕の耳には、此迄しか聞えなかつた、老人の背に咲いて居た花色の蝙蝠傘がすうとつぼんで、驚く可き幻想は嫣然日輝したから。

僕は自分の眼を疑つた。此がお敏君であらうか。櫻花の精ではあるまいか。

足かけ四年と云ふもの、同じ東京に住みながら、懸違つてつい會はなかつた(僕が出京した年、新聞配達をして居た頃、麹町で一寸其姿を見かけた事はあるが間に、祝す可き年よ月よ日よ時よ、卿はお敏君を斯くも美しく育てたか。

八歳の年會つた時は可愛い女兒であつた。十四の年見た時は愛らしい娘であつた。十七の今日見れば——あゝ最早僕は言ふ可き言を知らぬ。櫻、櫻、其でも卿は花と威張れるか。

足はわなゝく、體はぞく〳〵する。魂はふらふら。眼は其方を見つめても、殆んど何も見えぬ。

最早駄目だ。

春秋の筆法を用ゆれば、明治三十有三年春王四月松村敏、菊池愼太郎を殺してしまつた。

(九)

やつと吾にかへつて見れば、紹介を待ちかねて、新吾が自から進み出でて老人に挨拶を始めて居るので、僕は遽てて、此は同郷の中村新吾云々と頗るとんちんかんの紹介をした。

「而して何時御出京でした?」

と問ふ聲は吾聲ながら怪しく顫へて居た。

「拙老はこれで三晩東京に寢ます。一寸お尋ねする所ぢやつたが、不精閑なしでな、はゝはゝ、國許では母御方とも始終お心易くして居ります。——呍? 呍? (お敏君が何か囁いた、僕は老人の耳になりたかつた)應、それそれ、お禮が後れた、先年は愼三郎君、家內や娘が一方ならぬお世話になつて、重疊かたじけなう——いや、成長盛だ云ひながら、三四年ぶりに會つて見ると、また見違へる樣大きくなんなさつた喃」

と老人はあらためて僕を見る。老人の背後から黑眼勝の星の樣な一雙の明眸も僕に注ぐ。僕は紅くなつて側向きながら、心に叫んだ、斯樣な事と知つたら、今朝顏の五六遍も洗つて、せめてカラア、カフスだけでも新しいのにとりかへて、靴も磨いて來たものを。

莞爾々々して居た新吾が此時進み出でて、最早博覽會は御覽になつたか、と問うた。

「未見ませんぢや。先刻來は來ましたが、餘り人がどや〳〵するから、今其處で休息して來た所——貴君達も、未? あゝ其は好え同伴、愼三郎君、一つ案內して下さらんか」

此方から案內さして下さらぬかと願ふ所を、案內せずに何とせう、博覽會は云はでもの事、有頂天まで眞先にと、僕は群がる人を押分け押分け一行を導いて會場に入つた。

國旗や紫に縣名を白くぬいた旗など交叉した門を潜つて、岸に見立つる兩側の列品の間

をぞろ〳〵流るゝ人の川に、僕等一行も身を委ねて、彼方見、此方見、併し素より僕の眼には何もとまらぬ。唯腹立しきは、若い男女が云ひ合にした様にお敏君の姿を顧つて、色々の相をするのが、ねた〳〵てたまらず、僕の眼にだけ姿が見えて他人には見えぬかくれ蓑笠をお敏君にうち被せるか、さも無くば僕等一行四人を除く外老若男女一切の見物客の眼に無二膏張つて、當座の盲にしてやりたく思ふのであつた。

沖繩縣出品區で、新吾は琉球絣二反に賣約濟の札をつけさせ（一反はお袋様にと云つた。他の一反は蓋し彼が所謂南の方へ土産であらう）青森縣の部で、松村老人は國に歸つて野遊びの携帶用にと通草蔓の食籠を買つた。京都府の出品には織物の美を盡して流石にお敏君の眼を惹くものが多かつた（友禪なぞにはあまり眼をとめなかつたが、中にも西村出品の黑天鵞絨に絹糸で月の白浪千鳥に蘆を刺繡した大幔幕にはやゝ久しく見惚れ居た。僕は僅か一圓なにがしを入れた衣兜の蟇口を探つて、千何百圓の正札を怨めしげに睨んだ。併し此遺憾は、新潟縣の部に入つて、松村老人がお敏君の爲めに越後上布の極揃の好いのを求め、お敏君は父にねだつて母と姉への爲めに更に二反を買つたので、其憂悶を減じた。僕はお敏君を甚く可愛がる老人を可愛くも亦妬ましくも思つたのである。

美術館に來た時は、老人もやゝ退屈し、新吾は欠伸ばかりして居たが、お敏君は一枚毎に丁寧に見て行くので、案内者の僕には詮方なくも二人に後れて、お敏君の爲めに説明兼先導者とならざるを得なかつた。胸は頻りに動悸つく。何か云はなければならぬと思つて、

「油繪お好きですか」

と云つた聲の半は咽にかゝつて出なかつた。

「面白いのですけれど何だかわたくしにはよく分かりませんの」

すら〳〵と答へた其聲の清さ、涼しさ。

僕は恍惚となつた。

（十）

彈琴美人の畫の前へ來ると、お敏君は、

「まあ綺麗」

と見惚れた。若し此時僕に今程のおちつきと、思ひ切つた事を云ふ面皮があつたなら、「お敏さん、あなたは此樣なものを綺麗と思ふのですか。否、否、僕の眼には畫よりも畫を眺むる人が百倍千倍美しく見えるのです」と斯樣云つてやる所だつたが、初心の僕は唯仔細もなく胸うち騷いで、云はうと思つた氣の利いた言も出て來ず、少し引下がつて、畫を見る風して見る人を眺めて居た。

眩しくてよくは見えぬが、何かぱつとりした縞の綿入に白茶の帶をしめ傘をついて少し仰向き加減に畫に見惚れて居る姿の好さ、解かば地に曳き靡せば人顏も映りさうな黑髪を揚卷に結んだ頭の好さ、少しのぼせて耳から横頬の櫻色になつた美しさ、眼の涼しさ顏の愛らしさ、藤色に櫻模樣の半襟に映る襟筋の清さ、——もとから可愛い兒ではあつたが、唯つた四年足らずの間に、すつかり磨かれて、清々しくて、如何して斯樣美しくなつたらう、と僕が竊かに太息したのであつた。

「菊池君、々々々」

愕然と顧れば、同じ文科大學生で、頗る口の惡い、齋藤と云ふのが、僕の背後に微笑して居る。

「あゝ齋藤君か」

「ひどく喫驚するぢやないか」と意地惡く言ふ。

「なに其樣でもないが——時に君一人か」

「五六人拉して來たが、餘り人が多いもんだから離々になつたんだ——如何だ、油繪も未だ中々前途遼遠だね、斯樣な俗畫に人がたかる様

ぢや――併し君もひどく熱心に見とれて居たぢやないか」

「何有、馬鹿な」

「併し實際見とれるも無理はないね、中々美人だ」と齋藤が眼は二三間さきに畫を見て居るお敏君を流眄に見た。

恰ど其時、

「若旦那、々々々」

と四邊構はぬ新吾が大音に呼んだので、僕は幸逃るゝ機會を得て、

「如何だ、君、一處に行かないか」と捨ぜりふを云ふと、齋藤は、

「行つても宜いが、お伴侶がある樣だから、先よさう」と云つて意味あり氣に笑つた。

何か機警な返答をと思つたが、容易に出ないので、「失敬」と云ひ棄てて、花柄の平太が大蛇を退治る畫の前に佇んで居る一行に加はつて、一寸ふりかへつて見ると、齋藤は猶にや／＼笑つて此方を見て居たが、龍頭觀音の畫前に來た時ふりかへれば、最早齋藤の影は見えなかつた。僕はやつと胸撫で下ろし、觀音の畫に對つた。併し畫については何の感も起らず、唯彼觀音のかはりにお敏君を龍頭に立たしたら猶神々しからう、と思つた迄である。

のこり多いほど早く濟んだ見物も、時計の時間にしては大分長かつたのであらう、會場を出て見ると、午は餘程過ぎて、人出はます／＼多く、午後の日に蒸され、花はうつとりと眠げに、草臥れた人は花の下に大欠伸して居る。僕も何やら飲まぬ酒に醉つて、氣が遠うなつた。

珍らしい處でお面識になつた祝に、何處かで是非午餐をと新吾が云ふので、僕等四人は松源に上つた。併しながら珍味佳肴も殆んど僕の咽には入らなかつた。「東京の料理は宜うござすが、醬が甘いな」と云ひながら其しほ甘い料理を片端から平げるは新吾。老人は米がわるいと惡口し、お敏君は微笑み、僕は茶ばかり飲んで居た。

其後ヂッケンスの「カッパアフィルド」を讀んで、主人公がドラを戀ふる條下に、「ドラと珈琲で生きて居る」と云ふ句を讀んで、失笑したが、僕自身も松源の一席は確かに「お敏君と茶」で濟ましたのである。

あゝ戀は實に「腹ふくるゝ」ものである。

（十一）

松源を出て、此れから神田の親戚の家へ歸ると云ふ松村父子の爲めに車を雇つて、別るゝ際に「有り難う――」とお敏君が禮の一句餘韻嫋々として耳に殘り、「僕－お敏君＝0」と云ふ不思議な方程式を造つて歸つた翌々日、僕は松村老人と新吾を引張つて大學構内を隈なく案内し、更に數日を經て、僕は松村父子及其親戚石川（主人は軍醫、夫妻に子供の外は男ぎれ無しと聞いて、僕は眉を舒べた）鈴江君及中島一家（男隱居は謠の方が多忙で來なかつたが、鈴江君の叔母君は出馬して、松村老人や新吾と初對面の一幕が中々賑やかであつた）並に新吾を墨田の端艇競漕會に招待した。不幸にして世に感冒など云ふつまらぬものがあつて、僕のかはりにお敏君にとり憑いた爲め、僕が豫算はがらり狂つて、失望は非常であつたが、松村老人も新吾もみな／＼喜んで、故郷へ土産が出來たと云つて居た。

新吾は十日ばかり滯京した。幸ひ春期休業中であつたので、僕は東道の主人となつて新吾に東京を紹介し、また僕の保證人（即ち故駒井先生の洋行費を出した中川と云ふ男、天秤棒かついで一代の中に八百萬からの資産を拵へた人物、僕は貧の傲であまり近しくしなかつたが、新吾が會ひたいと云ふので紹介した。流石世馴れた人の、一見新吾に見所ありと見てとつたのであらう、一寒生の紹介もて來た初對面の

田舍漢と、忙しい中を緩々話して、新吾が事業の上にも有益な助言を與へたさうで、此もつまり鄕君のお蔭と片腹痛い事を新吾は云つた。（や一二知名の政治家、此は明治評論主筆安藤氏の紹介で）にも面會したが、如何した拍子か、新吾は彼中川翁程には他の政治家には感服せず、評判もあてにならぬと呟いて居た。愚案ずるに、新吾が風采言語の粗野なるに驚いて、彼政治家が冷と云ふ字のつく遇を與へたのであらう。孔夫子すら、子羽は見損ねたと機嫌せられた位だから、必ずしも彼政治家を咎む可きにあらずだ。

新吾は今年一ぱい逗留して、國會の開會を見ずに歸るが殘念とこぼして居た。而して僕の年齡を指折つて勘定して、三十にはまだ中々と大息し、一倂し其迄には新吾が澤山儲け出して、若旦那、選擧費は一文でも鄕君には出させませんぢや」と大言した。

彼が歸國の途に上る前日、馬喰町の宿で、僕等は緩々話した、創業の苦心、人使ひの困難さまざまの彼が經驗談を聞いたが、中にも身慄せらるゝは、彼が妻籠に歸省して詳しく聽いた堅吾叔父の末路であつた。實に那に咲く榮耀の花の盛は一時、吾家沒落後は妻籠一と云はれた叔父の身代も、意滿ち氣驕つた女が原になり、彼恐ろしい智慧者に魔がさしたかと村の者には云はれて己れは得意の冒險事業の損が損を生み、三都すりからしの山師に腹をあはした腹黑の奴に大分搔さらはれ、さしもの身代もめきと弱つた所へ、養子を嫁つた姉娘が當歲の子を殘し大金と小學敎師を連れて駈落し、叔母の氣鬱症、其あとが叔父自身の大難病、百日に近い闘苦痛呻吟の聲に四邊を怖かせ、病苦に疲れてうと／＼眠るとすれば、忽ち魘はれて、片時も安眠の暇なく、骨だらけの手で蒲團の上を拂ふを何事と問へば、「愼吾さん（僕の父、叔父の實兄）が來て胸を壓つける」と額から冷たい汗を流し、「惡うございました、惡かつた」と人も居らぬに詫び、彼剛氣な人が一人は恐くて居られぬと云つて、始終妹娘を側からはなさず、死ぬる時も娘の手を握つて（寧ろ握られて）苦しい息を引取つた。而して葬式の日は車軸を流す大雨、汲み乾しても／＼瞬く間に墓穴が水になつて、棺が浮き出すので、誰一人色を喪はぬものはなかつたと云ふ事である。

―ほんに親子の何のと如何した緣でございますか」と新吾に更に話を進めた、可哀想なは妹娘のお芳で、廿歲そこらの細腕で、此倒れかゝつた大廈の心張棒になり、背には姉が殘した當歲の兒をあやして大病の父、半狂の母を右左に撫でさすり、氣をつかひ、心を配つて、菊池分家の命脈人望を唯一縷に繫いで居たさうな。父の歿後はいよ／＼家も細う疊んで、骨と皮ばかりになつて働いて居るが、半病人の叔母は娘に不足たら／＼、杖柱の子は措いて不義に走つた姉娘に是非逢ひたい／＼と云つて居て、何かと云へば直ぐ姉娘に逢ひに巡禮でもしさうに云ふので、お芳は何卒姉を尋ね出して、母に逢はせたい一心に、人に賴んだり、神佛に祈願をかけたり、新吾にまでも賴んださうな。菊池の分家と云へば、昔は荒神の樣に恐れ、中頃は蛇蝎の樣に忌み、終には糞土の如く蔑んだ村の者も、お芳には我を折つて、おのづと見舞の大根の一本も提げて來る樣になつて、現に天罰覿面好い心地と聞いて空嘯いた新吾も、お芳が姉の子を負つて、裏の井戸側に洗濯する姿を見て落涙し、思はずゆつくり上り込んで慰めて來たとの事である。其時お芳の話に、家は斯うなつてしまふし、これが尋常であれば力になつていたゞくのだけれど、本家の伯母樣や愼太郎樣も人非人の樣に思つてお出なさらう、と泣いたさうな。

一寛心な人でござす。如何して彼翁の娘に貴様した噂が生れたおぢやろな。彼松村の嬢さんの様學問や容貌が好かと、立派な夫人ぢやが—と新吾は深く嘆息した。

（十二）

新吾が歸つて三十日、松村老人が歸つて二十日、花の上野は青葉となつて、さしもの賑ひも大風のあとの様に淋しくなつた。

僕の心の中も淋しい。

何故？ 僕は非常の苦痛を忍んで自殺を行つた。とばかりでは分かるまいが、僕は心を制つて、其處に深く深く印された戀人の面影を削り去つたのである。

僕は最早決して松村とも敏とも思ふまいと心を決したのである。

誰が故障を入れたのか。お敏君が其と知つて拒絶をしたのか。否、否、誰も知らぬ、—少なくも知らぬと思つた—僕自から考へて僕自から斷行したのである。即ち僕は自殺したのである。

彼上野の博覽會見物以來に、菊池眞太郎は最早世に存在して居なかつた。魂はお敏君と名づくる憎む可く戀愛す可き獄丁の手に鋼せられて、淺草に往來して居たのは、僕の亡靈であつた。自由自在不羈獨立の精神は彼日お敏君の眼許に一閃に殺されて、あとは奴隷であつた。

僕が愛には從來大地盤に唯一人母の上に集つた。彼お敏君何者ぞ、突然と上野にあらはれ出でて、忽ちに僕の愛を占領してしまふ、とは實に不思議では無いか。

審美學の卷上にもお敏君の光輝矢を含んだ姿が立顯はれる。書物をしかけて、何時か筆は原稿紙の端に松村敏、松村敏、お敏、お敏、など樂書をして居る。新聞雜誌を見ても、「松村」とか「敏」とか云ふ字は電の如く眼に閃く。日曜にはお敏君がよく行く親戚の近邊を用なきにぶらついて見たり、お敏君が寄宿する學校を眺めて見たり、擬への土産物を託するに事よせてわざ〳〵半日の暇を費して松村老人の出發を箱崎に見送つたり、せめてお敏君の學校の消息など聞く積りで中島の宅へ出かけながら、鈴江君の顔見ては松村とも敏とも云ひ兼ねて、無邪氣な鈴江君にすら、一貫君如何かなすつたの、變たわ—と怪まれたり、お敏君を讃美する歌百首を一夜の中に作つたり、下手な肖像を鉛筆で書いて見たり、白茶の帯に胸を躍かし、揚巻に肝を冷やし、縮お召の着物に眼から電を出し、花色の洋傘に道に立すくみ無い髯を刺らしたり、簪の皮をこすり剝いたり、支那の女が穿きさうな靴をはいて見たり—要するに此頃の僕は實際正氣では無かつた。誰が發狂せしめたか。松村敏の罪當に誅す可しである。

僕は從來小説では戀の物語も讀み、芝居では戀の芝居も見、實際の舞臺でも友達なぞが半狂になつて居るのを冷やかに笑つて見物して居た。然るにお鉢は今や僕にまはつて、五尺何寸の男、見事戀の奴となり了つたのである。

此時若しお敏君が隻手をあげてさし招いたならば僕は奈落の上の一足飛をしたであらう。幸にして、（若くは不幸にして）僕もお敏君も學業暇なく、暇があつても相會ふ機會少なく、僕も初戀の唯意氣地なく羞かしくて、うちつけにづう〳〵しく其と明かす勇氣もなく、稀に稀に顏が合へば默つてしまひ、言へばぶる〳〵顫ひ、而して別るればやるせなく思ふ位、先様は多分御存じ無しの片思ひ、あゝ馬鹿らしい、男が立つか、意氣地がない、咄と叫び、喝と罵り、斯様したら熱が冷えるかと井戸側に行つて頭から冷水を浴び、夢なら醒めろとペン尖で膝頭をつゝいたりして居た。

（十三）

斯様な狀態の最中に、僕は不圖小事件に遭つ

た。官吏侮辱罪で入監して居る明治評論の署名編輯人に面會の要あつて石川島監獄に行つた時、思ひもかけず彼曾根君に會つたのである。罪人の曾根君では無く、押丁曾根君に會つたのである。意外の再會に、僕は驚き、君は面伏の容子であつた。指を折れば、最早四年になる、初めの夏期傳道に圖らず曾根君が失戀の苦痛を目擊し、君を送つて讃州多度津で手を分つた後は、杳として其消息を聞かなかつたが、大學で助教授の彼隈谷文學士の顔見る毎に失敗の競爭者の曾根君を思ひ出して如何して居るかと思ふのであつたが、所謂「遠い郎千里、近い郎咫尺」同じ東京の加之斯樣な處に斯樣な役を勤めて居たのか。

餘の意外に碌々話も出來なかつたが、二回目に其築地の下宿の少閑を訪うて、事情を聞けば、實に氣の毒な話。失戀の後間も無く、母君は病歿して、曾根君は孤兒となつた。此哀と彼不快を一に集つた故郷の土踏むが嫌になつて、君は少許の家産を金に代へ、ぶらりと出京した、もとは理科大學、大學院、海外留學と行けるだけの道を行つて、造化の祕庫を探つて見ようとの志望もあつたが、淋しさ面白くなさ味氣なさに、つい自棄を起して瞬く間に無一文となつた。唯物主義の判廷に情狀酌量は無い、老いた丈は是非とも知らなくてはならぬ。曾根君は流浪の身となつた。流浪の果は今の身となつた。でも普通學の素養もあり、英語も出來、理科に殊に得意の君が押丁にならなくても何かありさうなものと僕は問うた。併し君は答へた、破廉恥な奴輩が大きな顔して跋扈する世の中には、顔見るも嫌、見らるゝも嫌でたまらず、名譽とか利達とか其樣なものは思ひ切つて、せめて罪人と云ふ不幸者の世話でもして世を過さうと思つて、斯樣な處に來たが、來て見れば此處も世の中、金もこいひ、位ものさばる、何方向いても不愉快な事ばかり、もとは改革の矯正のと分に過ぎた事も思ひ、看守長典獄にもなつて世話を燒いて見ようの心もあつたが、最早其んな事も嫌になり、眼を閉ぢ、耳を塞いで、免職されない限りは押丁で終るつもり云々。而して君は僕が避けて言はなかつた金子女史の事を言ひ出でて、其東京に來た一の目的は、彼夫婦に會つて、腹が癒える程復讐して見たいのであつた事を語り、一度は其門まで行つたことを語り、或時銀座の通りで金子女史が二歳位の男兒を抱いて車を走らすに礑と行き逢ひ此方は石の樣に立すくんだが彼方は車の上から一寸見下ろしてにやり笑ひ色代して行つた事を語り、（此時曾根君は唇を噛んではらり涙を落した）一時は彼等を押並べて眞二つにして死なうかとまで思ひつめたが、今は其復讐の念も消え下がつて、何もかも唯夢の觀をなすことを語り、「私は敗者です、敗者は蹂躙されても、抵抗する力は無いのです。最早私は何の望も無い。死ぬるまで生きて居れば其れで可いのです」と云つて、重病患者のつく樣な微かな息を漏らした。

實に此まゝ置けば曾根君は次第に唯消え行くに違ひない。何處か君を復活さす境遇はあるまいか、と僕は思ひ廻らしたが、不圖思ひ出たのは新吾が話に、技師の手傳や書記をする樣な男が一人欲しいと云つて居た、其が出來れば監獄に居るより餘程優で、第一新吾が彼快活な進擊喇叭の樣な笑聲聞いたばかりでも、曾根君には興奮劑になるであらうと、斯樣思つたので、早速新吾に照會し、無理に曾根君を說いて、監獄を辭させ、九州に立たしたのは月の末であつた。

（十四）

曾根君の一條は深く僕の心に徹した。新橋に送つた時、別を告げて汽車に乘る君が姿の如何にも力無く、影の樣に薄いのを見て、四年以前

の打撃がまだ〳〵殘つて居るを認め、實に「戀は曲者」と心に叫んだ。

あゝ「戀は實に曲者」である。

「而して僕は？」

愕然として僕は目を瞠いた。――僕も其曲者に憑かれて居る。

油斷がならぬ世の中だ。掌にのりさうな可愛氣な彼お敏君と思つて居る間に、堂々五尺の男子が却て其掌にのせられて居る。（先方は其氣もあるまいが）

其と氣がついて見れば、成程近來の僕が擧動は、吾ながらあまり譽めた話では無いのである。男子の獨立と云ふこと、何處へ行つたやら、高手小手に縛られた、其顛末をお敏君にとられ、（先方はとる氣もあるまいが）行くも止まるも、吾意思の力に及ばぬ。學業の上にも吾知らず懈怠勝になつて、書見考索も疎になり、凡ての事皆手後れとなつて居る。一錢の冗費を厭ひ、半文の剩餘も積んで居た僕が日記帳を繰つて見れば、兎角出入相償はずで、石鹸、はみがき、撫髪、カラア、カフス、靴新調、手巾、を初め種々虚飾費が非常に蠶食して居る。博覽會で會つた齋藤が尾鰭をつけて吹聽したと見えて、寄宿舍の僕に對する眼口は、僕の霞んだ眼にも、如何しても笑を帶びて居るとしか見えぬ。現に五六日前も、僕が書見をして居る側で、突然一人が、

「品行矯正の近道は如何」

と誰やらに問ふと、彼齋藤が、

「美人を意中の人に有つにありだ」

と答へて、一同哄然と笑つた。其は猶可いが、中には牀几下まで切り込んで、

「菊池君も近頃は急に垢拔がしたね、非常に有力な洗禮を施されただらう」

などと皮肉を云ふ者もある位。要するに此一刻千金の勉強盛りを、僕は夢見て暮らして居る。眼を皿にして居ても兎角躓き易い世の中を、眼を閉ぢ驀地に走つて居る。志業の荒廢、名聲の失墜、も唯一步の境だ。

誰の爲めに？　纖たる一少女子の爲めに。而して其少女は果して僕の一生を賭す程の値ある女乎。

或は其樣かも知れぬ。僕の心は然云ふ。併しまた其樣で無いかも知れぬ。分からぬ者は女、迷ひ易いは若い女を見る若い男の眼。曾根君も賣らるゝまでは金子女史を天女と信じて居た。啻に曾根君のみならず、局外者の僕すら欺かれて居た。局外已に然り、況んや當局の今日をやである。

戀は馬鹿なもの、結婚は鬮引にかぎると云つたのは、自身に好かぬ妻持ちあてたジョンソンのやけ腹から怒鳴り出した暴言としても、有り難くもない一少女子に可惜男の一生を犧牲にした實例は手近く曾根君にある。何と云つても、分からぬものは女、危險なものは戀の道。吾行く道は野越え山越え杳々と有形の外へ通つて居るに、秋の日かげの傾き易い身をもちながら、色美しと袖をひかれて女郎花の野に暮さうや。

否、僕は斷じてお敏君を思ひ切らねばならぬ。

僕は思ひ切つた。片思でも思ひ切るは痛いもの。思ひ切つた胸の中は宛ながら火が消えた樣に冷たく味氣なくなつた。起きて見つ寢て見つ幮ならぬ僕の心も其寥しく廣きに堪へなかつたのである。併しながら「戀は曲者」、踏みにじつても容易に死なぬ。ともすれば死灰またとろ〳〵と燃え立つて、熖の末にお敏君の姿が嫣然と現はれる。其時は詮方なさの對症藥に、新吾が話のお芳君の幻影を喚び起して、一方を打消さうと試みた。

實に憐れむ可きは從妹の彼お芳である。堅吾叔父の末路に慄然とすれば、其妹娘の身の上には潸然とするのである。實に金をかけて磨く

澗の玉に石多くて、山中に轉がつて居る石には却て玉があるもの。僕等母子が妻籠を立つ其朝、村はづれの茶小屋に待ちうけて、涙ながらに葡萄蔓の蒔繪した小箱を僕に餞別に呉れたのは昨日の樣だが、指折れば已に十年、一度も音信をしなかつたが、さては其樣に苦勞をしたのか、感心な娘、見上げた女、學問容貌が無くとも其樣な賢い女こそ眞に好家妻——と僕は義理堅い女が先妻の子を譽めそやす樣に、從妹を譽めて居た。

（十五）

曾根君は去る、お敏君をば思ひ切る、先々心にかゝる隈はなくなつたので、僕は必死と學業の方にはまつた。隙さへあれば、いたづら者の心めが淋しがつたり、思ひ出したりするので、殆んど一秒の餘裕もない程僕は頭腦に仕事を課して居た。

去る程に、絶えて久しい札幌の松村清磨の手紙に接した。書中は、非常の無沙汰を詫び、先年妹の書狀で僕が關西學院に居る事を承知し（妹と云ふ字に胸が急に躍り出したのを僕は一喝して次の文句を意味分からずに四五度讀んだ）手紙を出したが附箋して戻つた事、其後僕が大學に居る事を聞いて音信をせう〳〵と思ひながら筆不精でつい怠つた事、先頃國許から手紙が來て老人上京の際色々僕の世話になつた由を報じて來た事など書き列ね、此六月は學校を卒へて多分東京へ來ると云ふ意を漏らし、農林學校が農科大學になると聞いたは事實か、など書いてあつた。

折角松村と云ふ字に遠からうと思つて居るのを何故誘惑が斯樣來るであらうと思つたが、併し妹こそ憚る因もあれ、兄其人には何の遠慮も無いに、恐がらずともの事と思ひかへして、直ちに返簡を出した。其れから學年末の試驗騷ぎで、松とも村とも暫らく忘れて居たが、試問もやう〳〵濟んで少し手足をのばす所へ、松村清磨と署した名刺が僕の几前に齎らされた。來たな、と思ひながらとつかは出て見れば、浴衣がけに兵兒帶の一壯年が莞爾として待つて居た。

「やあ、菊池君、非常に失敬した」

云ふ聲は昔に變つて大人び、體格も倔強になつて、鼻下には好い加減な髭を蓄へて居る。併し札幌の林檎畑から偸んで來た樣な頰の赤味、此も北海道の熊にでもあやかつた樣な眼もと口もとの愛嬌は、八年以前野田伯父の門前で別れた時の松村其まゝ、否寧ろ其時にもまして快活になつて居る。久別の後再會ふ時の樂しさは、先方が相見ぬ年の其間を愉快に過したか不快に送つたか、今後の交誼は親しかる可きか疎かる可きかを、大抵は告げて呉るものである。若し此斷定にして誤らずば、僕は當年の親友清磨を今の農學士松村に見たのである。新なる北海の野に、クラアク教頭の遺風猶存する黌舍に、自然を相手の學問に幾年を送つた彼は、都門の學生に滅多に見られぬ爽やかな眼色と新鮮の氣風を帶びて居た。

「吾輩こそ非常に御無沙汰した。——而して今歸途だね」

「昨夜着いた。——最早君も休暇だらう」

「試驗が濟んだばかりだが。君は少時は逗留する積りか」

「僕か、僕は九月から此方の研究科へ入つて見ようと思つとる。無論一寸歸縣するが、其前に些と休んで行かうと思ふ、明日から親類の者が海水浴に行くからね」

「海水浴、洒落るぢやないか、何處？」

「江の島の近邊だ、何でも——」

「其樣か、僕の親類の者も大磯に行くなんて云つて居たが」僕は中島の叔母が鈴江君や孫を連れて保養に行くと云ふ事を一寸聞いて居た。

「あゝ中島さんぢやないか、中島さんなら、僕も聞いたが、大磯は波が荒いし、騒がしくていけぬて、僕の親類の石川と云ふのが其樣云つてね、多分一處に其―何とか云つたけ―其同等が行く處に行くことになつたさうだ。―君も行くだらう、其とも歸省するのかね」

「歸省はしないが、其樣だね――」

「其れなら是非來たまへ、要は無いのだらう、宜いぢやないか、是非來たまへ」

「併し――」僕は彼愛す可き敵、天使の惡魔も彼と一處ではあるまいかと恐れたのである。

併しながら松村は切りに迫り、昨日着いて明日は立つと云ふに話は山ほどある、役地に行つても親類の者ばかりで誰も遠慮する者は無いから（否、大に有りだ）是非來いと勸め、別るゝ際にも二三度念を押して行つた。

＊　＊　＊　＊

松村には是非ゆつくり逢ひたいが、松村の近邊に恐ろしい者が一人ついて居るであらうと僕は思つた、併し松村には敢て其有無を問はなかつた上に、僕は明治評論の爲めに夏期附錄編輯の手傳をして居たので、三日にあげず鵠沼（松村が行つたのは鵠沼であつた）から今日來い明日來いと矢を射る如き松村が催促狀にも、曖昧な返事ばかりして居たが、或日中島叔母自筆の手紙が來て、風景の好い事、魚の鮮しくして廉い事、客が少なくて靜かな事等を列擧し、是非腦を休めに來い、其れにはまた是非相談したい事もあるから是非來いと退引ならぬ命令が來た。

相談とは何事であらうと頻りに胸騷ぎしたが、否とは云はれぬ場合、明治評論の方の仕事を終ると、着物一二枚、書一二卷、手拭一筋を破革囊に押込んで、國府津行の汽車に乘つた。

九の巻

（一）

藤澤停車場に着いたのは、午後の五時過ぎであつた。江の島行の汗臭い白衣道者の中にまじつて、汽車を下りる途端、忽ち眼についたのは、構外の人待顏の麥藁帽三つ。驚破と胸は躍る、眼は彼三つの帽に注ぐ。彼方も僕を認めて、六個の眼齊しく笑を帶びて輝いた。松村兄妹に鈴江君だ。

改札口を出るより早く、松村は僕が革囊を引奪つて、

「君はひどいね。僕等にお百度を踏ましたぞ」と怨ずる。兩女史は大きな麥藁帽を脫いで、にこやかに目禮した。

居るであらうか、居らぬであらうかと疑ひ、居て呉れゝば宜い、居て呉れなければ可い、と迷つた僕の大敵の彼妖魔は果然待伏して居た。妖魔、々々、併し斯樣な可憐な妖魔が何處の世にあらうぞ。雪恥かしい彼顏が、少し日にやけ、汐風に焦れて、橄欖色になつて居るに、頰のあたりほのかに紅を含んだ工合、鬢の毛の後毛かこぼれかゝるをかきあげ／＼嫣然笑を含んだ可愛い口もと、涼しい眼もと、西班牙あたりの秀れて美しい人を見る樣に、白がすりに紅の帶、右手に海水帽をとつて、すらりと立つた風姿、――僕には天の使より此妖魔が餘程嚴かに美しく拜まれた。萬々一會つたらば稚兒も啼き止む澁面作つて、砲丸もはねかへる程堅固の塵封して呉れうと、固めて居た決心も、如何やらぐらぐらと搖ぎ出して、駟馬も及ばぬ笑がつい唇に浮び出た。

「待たすにも程があるぢやないか」と松村は重ねて怨じた。

「實に失敬した、用が多くてね」

「お敏さん、あなた勝ちなすつたのね」と鈴江君が云ふを、何事？とふりかへると、松村が引

取つて、

「何、あまり焦されるものだから、昨日の彼はがきは見たがね、またおだましだらうと思つて、吾輩は最早今日は行かないと云つたのさ。すると妹はね、今日は乾度君が来ると云ふのだ。来る、来ぬ、いや来ぬ、来る、で吾輩と妹と賭をしたのさ」

「左様か」口は冷やかに云つた積りでも、胸の中では心臓が頻りに三番を踏んで居る。而して今の言をきかぬ笑みがまたぞろ顔へ現はれた。

「さあ、往復り力が出来た」と松村が言を進行曲の音頭にして、僕等男はさきに立ち、両女史は僕等が蹴立つる砂ほこりを避つて袂に拂ひながら後に従ひ、[illegible]路を踏み切つて少し行くと、忽ち鈴江君が買物を茶店へ預け忘れたことを思ひ出して「徐々行つてらして頂戴な」と[illegible]君と共に引返したので、僕等は砂だらけの桑畑、大豆畑、甘藷畑の間をくねる一條の砂路を語し語し緩歩した。

「東京は暑いだらう」

「[illegible]、随分暑い、此方は[illegible]だらうね」

「左様さ、海は近し、魚はよし、俗客も少なくて宜いが、併し非常に淋しかつた。何しろ女ばかりだからね」

「左様だつたらう。でも中島の手紙には君が時時話に来て呉れるので、賑やかで結構と書いてあつた」

「中島の叔母君は中々面白い人だね、僕も始終行つては話すが、女には珍らしい[illegible]けた者だね」

「左様さ、何しろ、君も知つとるだらう、彼野田伯父の妹だからね」

「野田様！　野田様は残念な事だつたね。吾輩の叔父なぞもひどく褒めて居た」

「左様さ　實に不運な人だつた」

「彼鈴――江さんはあまり親父に似ては居ないね」

「[illegible]に似ては居ないが、気質は余程似とるさ。君も見とるだらうが、極[illegible]な、こせ〳〵しない質でね――」

「さつぱりした人だね。着物なぞも聊も着しない方で、微塵も鄙吝げな所がないて、妹なんぞも其様云つて居る――」

妹の一語に僕は耳を傾けて、まだ何か妹の事を云ふかと心待に待つて居ると、松村はやはり本題を何處までも追つて、

「それに中々沈着いた女だね、一寸した事だが、吾輩は實際感心した事がある」

と松村は、鈴江君等が宿の主翁が村の[illegible]者と[illegible]を仕[illegible]して居るの夫くのと云ふ噂さになつた時、叔母は留守であつたが、鈴江君は[illegible]に込んだ主翁を一間に隠して、獨り縁側に立出で、今にも闖入して来さうな[illegible]者連を叱り退けた一件を話した。流石に[illegible]の[illegible]中に[illegible]を[illegible]つて熱心した伯父の娘だけあつて、落ついたものだ。

話に[illegible]取つて、何時か七八町も来て居たので、僕等は桑畑に夕日を避けてしばらく待つて居ると、鈴江君とお[illegible]は手に風呂敷包を提げて[illegible]〳〵やつて来た。僕は無理に其風呂敷包をとつて左右に提げ、妙に操人形になつた様に、手も足も吾有ではない様な心地しながら、[illegible]々然と歩いた。

夕日弱つて蟬の音猶残る村に入つて五六町、路は二筋に岐れて、羽黒山云々と彫つた供養塔が立つて居る。

「少しまはりだが先一寸寄りたまへ、鵠沼一と云ふ水があるから」

と松村が云ふので、僕等は右に折れてまた一二町、椿、[illegible]なとの[illegible]つた[illegible]の[illegible]から、[illegible]有る農家の庭に入つた。養蠶をすると見え屋根窓を開いた大きな農家だ、庭の一隅には、農家の[illegible]流、小さな花壇に[illegible]

仙花など咲いて居る。左手の納屋の側には、三四羽の鶏が乾麥をほじくり、右手の椰の枝から枝に海水着、手拭などが乾してある。縁前に立つて、石川、松村の親類の細君に挨拶して居ると、お敏君が手早く其所謂鵠沼一の水に、白糖を和し橙皮油を落して持つて來た。

あゝ其水！　今思つても實に喉ひつくほど。但僕は其香を聞くと夢の樣な氣になつて、僕が水を飮んだか、水が僕を呑んだか、其點は今に到るまで些分明を缺くのである。

（二）

中島叔母の寓は、松村兄妹の居を東へ距る二町ばかり、小綺麗な農家であつた。家族は叔母、鈴江君、不二男と云ふ當年五歳の男兒、其保姆なり婢なりのお吉、此れだけである。

吾室と與へられた東向の六疊に草臥れた五尸の體横たへて、青蚊帳に通ふ松風、波の音、颯々たる天籟に夜一夜夢を洗はれ、明日は早起して裏へ立出で、藤豆に朝顏の分く由もなくからんだ棚の下に、曉の星を浸した淺井の清水汲みあげて顏を洗ひ、南瓜畑甘藷畑の向うに見ゆる片瀨の山々次第にはつきりと朝の空にわかれ行く清々しい黄色に見とるゝ時、

「菊池君、未だ起きないか」

表面の聲に出て見ると、跣足に尻端折りはさみ手拭と云ふ態で松村が立つて居る。

「昨夜は失敬、――海に行かう」

「昨日は御苦勞、非常に早いぢやないか」

「水浴は朝に限る、――跣足で來玉へ、冷々して實に好い心地だ」

早出の農夫に道を讓つては淺茅にまじる晝貌の花の露したゝか蹴散らし、夢と云ふものの色は斯樣なものでもあらうかと思はるゝ蒼白い霧のまだ枝から枝へ這ふ松原を穿つては浴衣も染まる程滿身の露を浴びして濱へ出た。清々しい朝景色だ。海はほの白うしてまだ光なく、つい對面の江の島も睡げに、右手に延いた長汀の松の梢の富士、箱根、足柄、大山、何れも薄りと夢さめあへぬ風情。

朧天に響く冷たさを忍んで、僕等は海に飛び込み、やゝ暫し泳いだ。忽ちきら／＼と朝日が流れて來た。僕等は二羽の家鴨の如く、黄金の水を攪して、またしばし騒いだ。

冷えきつた皮膚を緊く摩擦して、浴衣の砂を振つて引被け、五分刈頭をさつと撫でゝ八方に金雨を飛ばし、太息一つして、沖の白帆を眺むる心地はまた格別である。

手拭を絞つて居た松村は突如として、

「吾輩は實に困つとる、最早歸省しなけりやならん樣になつてね」

さしも美しい朝黄色、富士も江の島も、索然としてしまつた。（僕は今まで此黄色の靈は朝日であると思つたが、豈圖らんや朝日はお敏君であつた）

「如何したんだ、一體」

「何、ね、君達が歸つた後で、昨夜また國から手紙が來てね。何、何も別に要があると云ふぢやないが、先月中もたび／＼歸省を催促して來たのを、延ばし／＼して居たものだから、大分怒つて、此狀見次第直ぐ立てさ。何せ歸るから、其樣急がんでもよさゝうなものだが、其處は親だね――況んや農學士の顏はまた別だからね――併し僕が來ると直ぐ歸るのはひどい」

「詮方が無い、君が散々待たした罰と思ひたまへ」

「でも直ぐ歸省はひどい、せめて一週間、宜いかね、僕は君の叢君慈堂に詫狀を書いたら可いだらう――實際僕を呼び寄せて置いてぷいと立つのはひどい」

「左樣だね――僕も折角君が來たのに、――妹も非常に此處が氣に入つて居るから――」

「左樣し玉へ、一週間位は宜からうぢやないか。——而して君は九月また來るのだね」

僕等は其處に引揚げられた舟の簀板を裏がへしに敷いて、やゝしばし話した。松村は、其日的なる牧畜事業をやるについて、獸醫學を今少し研究して置きたい事、多分新設の農科大學に研究生としてマンソン博士の講義を聞いて見たいと思ふ事、次男ではあるし、父母はまだ比較的にわかし、別に成功をあせる必要もないからぼつぼつ思ふ丈の事をやつて見ようと心がけて居る事を話し、僕は僕の志望の一斑を語つた。

「君が理想派なら、僕が實際派と云ふ所だね。併し僕の實際は怪しいものさ。加之趣味とか想像とか云ふものは一切有たないからね——妹はまた僕と違つて餘程其方には長所があるが」と歎息した。眞率は松村の人物に於て尤も僕が愛する所である。殊に其妹々と妹を譽める所がまた一層僕の氣に入つた。

不圖氣づけば、日が大分高うなつて居たので、僕等はやをら立上つた。鵠沼館の横手の松原をぬけると、お敏君が鈴江君と僕等を尋ね來るにはたと行逢つた。

お敏君は、今日は藤色がかつた縮みの浴衣に白襦袢を重ねて、帯は日用の紅、素足に麻裏はいて、まだ露がこぼれさうな濱撫子花を持つて居る。昨夜髮を洗つたのか、阿彌陀にかぶつた麥稈帽の下から幾筋ともなく黑髮の眉にこぼれかかつた風情、實に可憐だ。僕を見ると、颯と小褄を下ろして、嫣然帽をとつた。束にあまる垂髮を白いリボンで結へた風姿、憎いほど好い。

「昨日は有り難う」と云つたのは僕の精一ぱい。其樣早く歸られてたまるものか、と僕は心に泣き出したくなつた。

打連れて、松影を踏み、露を踏み、朝日を踏んで、岐路に來た。

「それぢや、彼事は是非其樣したまへ」

「左樣さ、妹とも相談して見よう——失敬」

松村兄妹は左へ曲つた。

「何？」と鈴江君が後から問うた。

「松村兄妹が急に歸るのですと」

「其樣？」と鈴江君は少し氣ぬけした調子。「如何したんでせう？　貴君も來なすつたばかりだのにねエ」

僕は松村が家から手紙の一件を話し、

「だから僕は松村に是非四五日と云つたんです、鈴江君もお敏君を說いてごらんなさい」

「其樣しませう。お敏君は屹度延期說だわ」

「何故？」

と問うた僕の耳は「でも貴君が來なすつたから」と云ふ返事を豫期して、手廻しの好い心臟が已に動悸をうち出して居たが、鈴江君は他の無意味な返事をしてしまつた。

歸つて其事を叔母君に話すと、「其りや其樣だらうな、子の顏は見たいものです」と云つて少し考へて居たが、朝飯が濟むと、鈴江君を全權大使に四五日延期の談判を命じ、不二男は保姆に連れさして遊びに出し、人拂ひして然る後僕を一間に呼んだ。

（三）

やゝあらたまつた叔母の前へ坐ると、吉凶の運命をこめた祕密箱の蓋に手かける其刹那の一種の惧が僕をとらへた。

「他でも無い、鈴江の事ですがね」

「はあ」と僕は唾をのんで叔母の眞面目な顏を見た。兄妹と云つて爭はれぬもの、數年前鈴江君問題で伯父が怒つた彼時の面影が叔母の顏に殘つて、僕は、白狀するが、少し恐かつた。

「彼女も最早段々年はとるし、姉からも始終其事を云つて來る樣な仔細で、わたしも色々考へて見たが」

何事を云ひ出すか、と堅くなつて熟と聽いて居ると、急流一轉、叔母は彼松村清磨を養子に

貰ふことは出來まいか、次男とは聞いたし、人物も手堅いと見たし、僕の姉に無論大喜と思ふが、君は如何思はるゝか、異存なければ君から松村君の心を聞いては呉れまいか、と平生の元氣にはかはつて如何にもしんみりと頼まれた。

思ひがけない話に、僕は一たびは驚き、再びは喜悦の眉を開いた。

同意も、異存のと云ふ段か、無論大々的贊成である。異存など唱ふる奴があるなら、叔母を總大將に押立てて、僕が先鋒となつて、卵を碎くが如く挫いでやる。

實に鈴江君の事は伯母叔母の氣にかゝつた樣に、僕の氣にもかゝつて居た。彼程恩になつた伯父の一人娘、殊に兄妹の樣に育つて今も互に兄妹の思ある鈴江君、其身の振り方が氣にかゝらずに居られるものでは無い。無論僕等の間には、兄妹の關係より到底一歩を進む能はざる自覺があつた。子供の時から一處に育ち、互に氣心を知りあつて、餘所からは似つかはしい夫婦の候補者の樣に目ざされても、如何しても其關係は兄妹の親味に止つて、愛情を生まぬことは間々あるものだ。王陽明(と云つても樂屋落になるから、割註を加へる。此は僕の母の隱語で、母の洒落である。僕の母は時々斯樣な口の惡いことを云つた)と僕の間まさに斯くの如くであつた。王陽——否その鈴江君は僕を兄視し時としては弟視して何事も打明け、僕はまた鈴江君を且笑ひ且嬉いて居た。併し僕等の間は何時まで經つても唯其切り、加之僕は菊池家の一本柱、鈴江君はまた野田家の女主人、到底結婚などは問題外であつて、此等は當人の僕等は勿論、僕の母も、鈴江君の母も、中島叔母も、苟くも事情を知る程の者に其と知らぬ者は無かつたのである。僕等の結婚は問題外である、併し鈴江君の結婚は決して僕の思案の外では無かつた。亡き伯父に對しても、伯母に對しても、別して妹とも思ふ當人(尤も當人は時々姉ぶつて困つたが——鈴江君は僕より四ケ月早生れだ)に對しても、先年野田家の養子となるを拒絶した僕は、一度は野田家の養子を周旋せねば濟まぬ感がある。而して其養子が、親友の松村とは。——成程今朝右の耳が頻りに痒かつたのも道理、僕は發案者中島君萬歲と心に叫んだ。

殊に昨日の松村が容子口ぶり、其と思つて見れば、決して鈴江君を憎く思つて居ない事が分かる。鈴江君も松村を嫌はぬ。のみか大分氣に入つて居る樣子は、僕の睨んだ眼にも見えた。成就すれば萬事に多分成就するであらう。成就すれば、實に野田家萬歲、殊に松村が牧畜事業なぞ野田家には持つて來いである、故伯父が生きて居たら娘はさし措いて自婿にしたかも知れぬ。鈴江君は良人を得、松村は好妻を得、伯母は安心し、彼遠い山下村の櫻木の下に眠る伯父も地下に滿足するであらうし、僕と母とはまた伯父夫婦に報恩の一端にもなる。加之松村に鈴江君を妻はして置けば、——いや、言ふまいぞ、言ふまいぞ。

僕は無論大贊成の旨を答へ、且其事の多分成就するであらう事を豫言し、早速松村の心も聞いて見て、返事次第國の母にも云つてやらうし、要するに此回の事は僕等母子が肩を入れて是非成就させると誓つたので、中島叔母は顏を崩して悦んだ。恰話が終つた所に、鈴江君が歸つて來て、首尾よく使命を全うし、五日間滯留の確答を受取つた事を報じた。僕は叔母と顏見合はして、幸先よしと含笑んだ。

其れから鈴江君は、僕に松村の傳言をつたへた。午餐馳走の案内だ。

「鈴さん、わたしは除物になるのかい」と叔母が笑つた。

「はあ、何せあとであらためて御馳走があるのださうですけれど、今日はわたしと眞太郎さんだけよ、今松村さんが地曳の魚を買ひに行つて、お敏さんが芋の皮を剝いたりして、大騒ぎですわ。叔母君、わたしも手傳に行つて宜いでせう」
「宜いですとも、でも愼さん、鈴さんの料理を食べるなら、寶丹を持つてお出なさい」
「あら叔母君、ひどい、わたしだつて魚の煮付位は出來ますわ」
「煮付ぢやない、黒焼でせう」と僕が口を插む。
「お二人で澤山冷かして頂戴。本當に黒焼を拵へて上げるから其樣思つていらつしやい」
鈴江君は笑つてすぐ引かへして出て行つた。

（四）

二度目の御使者に來た松村と打伴れて、彼宅へ行つて見れば、八疊の座敷は清く掃はれて、眞中に食卓と繼ぎたしの低几を据ゑ、大きなコップに桔梗撫子をつかみ插しにしたのが、卓布の雪に色添へて、先づ眼ざむるばかり。此は無論吾細君の手に成つた風流であらう。
客に僕に鈴江君、主は石川の細君に松村兄妹、[illegible]はとつて三歳の[illegible]兒を抱いて出たので、お敏君と石川の細君が時々箸を置いては給仕をさし出す始末。獻立は、小鯛の吸物、鯛の刺身、罐詰の鮭、胡瓜もみ、「デザアト」が新薩摩芋のふかしたのに、冷水に浸した梨。鈴江君が嚇した肴の黒焼は幸にして無かつたが、[illegible]困つたのは、何の品と何の品がお敏君の彼可愛らしい手を煩はしたのか、せめて札でもつけて置いて貰ひたいのであつたが、まさか聞きもされず、僕は是非なく凡ての物を味ひ、凡ての物を賞めた。（尤も薩摩芋だけは、確かに鈴江君の手際と見えて、大に心があつた。併し北海道ぽつと出の松村は珍らしがつて、頻りと平げて居た）
「實に久し振だね、君と一處に飯を食ふのは」と松村は愉快に堪へぬ容子。僕も、馳走はよし、給仕はよし、彼松源で茶ばかり呑んだ當時に引易へて、今日は全身胃であるかの如く食つた。食はざるを得んや、お敏君が彼愛嬌で頻りに強ひるのだもの。
一座いよ／＼賑やかに、食にも話にも口は頻りに動いた。流石東京つ子の石川の細君は、如才なく色々面白可笑しいことを云つては、僕等を笑はした。其話の一二を紹介して見よう。
或田舍者が東京の鰻屋に上つて、牛肉を持つて來いと註文した、女中が、「牛肉はおあいにくさま」と云ふと、一寸、其おあい肉を持つて來いと云つたさうな。また一つ。此れは東京の客が田舍に行つて、恰も初夏の事で、食後の[illegible]に枇杷を持つて來いと云つた、やゝ久しくたつて、亭主罷り出で、ヘヽ、、先刻びはと御有いましたが、如何も手前共に琵琶はございませんで、エ、、何なら月琴では如何さまで」落語家跣足と云ふ石川の細君の話に、僕等は哄然と笑つた。而して此笑聲は、宛ながら綿火藥の爆發した樣に、遠慮の關門を吹き飛ばしてしまつたのである。
食物の話が出る一座は親しいものだ。話は大食の事に移つて、古いところでは廉頗の斗米肉十斤、新しい所ではビスマアクの一餐に鷄卵五十のオムレツ、さまゞ＼引合に出たが、僕は健全なる身體は健全なる精神に伴ふと云ふことは例外があるもの、例せば文學の如きも飢腸奇作を出すなんぞ云つて、其處へ來ると「慷慨悲憤は胃病より起る」のみならず、古今文學の精華も往々胃病より起ることがある、カーライルの文や杜甫の詩は或處までは胃病の産物と云つて宜い。此に反して強壯消化の好い胃をもつて居たと思はるゝマコーレーや白樂天は名家は名家でもカーライル杜甫に及ばぬのは其[illegible]て、

文學を進歩せしむるの道は文學家が大食して胃を惡くするにありと云ふ樣な咄々怪事の結論まで漕ぎつけた。（お撤君の前では何時も澁柿の一片を含んだ樣にこだはる舌が、如何して今日は斯樣動くかと吾れながら怪しんだ。鮎に醉つたのかも知れぬ）

すると松村は忽ち得意の肉食論をかつぎ出した。歐米の實例に照しても、大國民は即ち肉食國民である。君が云ふ樣に支那文學が剛健雄大の男性文學であるならば、其は肉食の結果である。お粥にせい〳〵鮎の鹽燒位で生きて居た平安宮廷時代の日本文學を見たまへ。總じて一國の元氣は一個人の元氣、個人の元氣は個人の體力、個人の體力は即ち肉食で、畢竟富國と云ふも強兵と云ふも文明と云ふも肉食の化けたもの、今日の急務は國會よりも、政黨内閣よりも、宗教よりも、教育よりも、先づ牧畜であつて、愛國者は即ち牧畜家、牧畜家即ち救世主と云ふ樣な夥しい我田引水論を唱へ、

「今に見玉へ、吾輩が濠洲米國の產にも劣らぬ牛羊豚山羊をどし〳〵こさへて、北は占守から南は沖繩八重山まで、戸毎に每日二斤三斤の肉は豆腐を食ふ樣に食はすから

と大氣焰を吐いた。鈴江君は頻りに感心した容子であつた。

「併し君、其樣肉食萬能を唱へられては困るさ。『蘇格蘭人は麥粥で文學を養ふ』と云ふ諺もあつて、現にトルストイ初め菜食論者も歐米に多いぢやないか」

「いけない〳〵、其は肉食にあきた結果さ、醉醒の水と一般だ。其を魚と野菜ばかり食つて居る日本人が唱道するのはひどい――妹なんぞも矢張菜食黨で困る」

お撤君を見れば、可愛らしい手附で梨子をむきながら、少し顏を赧くして、含笑んで居る。

「僕も菜食黨の一人だ」と僕は云つた。

「あら、いけません、貴君は昨夜も叔母が一番お好きはと云つたら、牛肉つて云ひなすつたではありませんか。わたくし其樣に說をかへること嫌ひ」

と鈴江君が先刻の返報に素破ぬいたので、僕は苦笑ひ、お撤君は噴笑ひ、石川の細君と松村は高笑ひ、而して緣先にしけ〳〵此方を眺めて居た鷄までけたゝましく鳴き出した。

午餐は愉快に濟んで、女達は臺所に、松村は、

「僕の書齋に來て見たまへ」

と僕を引張つて裏へ出た。

（五）

屋外は十二時過ぎの日盛り、吾影すら吾足もとに逃げ込む暑さ、滿地の砂は日を照りかへして赫々ほてり、甘藷畑大豆畑も砂ほこりを浴び、何處を見てもきら〳〵しい光が眼を射て、未だ百歩に到らずして汗は滿身に流れた。

併しながら砂畑を行き盡して、畑の端に聳立つた砂山を上り、翠影婆娑たる松林に入ると、流石に冷たい風が吹いて居る。僕等は其松林を縫つて、尤も影深い邊に行つた。此處は松山の半腹、紫幹翠葉の間から富士足柄箱根大山高麗山がちら〳〵顏を出し、白帆を浮べた相模灘の漫々たる青海原も松の間々に透いて見える。濱に游泳浴客の群は見えて、騷がしい聲は聞えず、颯々たる海風松を梳つて翠香動き、紫影戰ぎ、若し此處に結んだら夢も亦香ばしからうと思はれた。鶯の音すら此處には涼しく聞える。

松村は携へて來た吊網床を丈夫さうな松の幹から幹へ緊と縛つて、

「さあ、かけ玉へ。僕は午後每も此處へ來て一睡するのだ。時々蟹に足をはさまれて眼をさますこともある。――何、今日は些も眠くない、存分話さうぢやないか」

僕等は低う釣つた吊網床に腰かけて、足の爪

実で松影だけの砂に一字を書きながら、存分に話した。書窓の生活でも、別れて八年と云へば、随分話は多いものだ。西山塾の昔話、東京から札幌へかけての松村が生活、僕が一浮一沈の實歴談、駒井先生兼頭君に松村を逢はせぬ遺憾、さまゞゝの話に松影の頻りに移るも知らなかつたが、話は松村が家事に入つて、

「君は無論別家を興すのだね」と僕は問うた。

「左様、僕は其様な事は未だよく考へて居ない方だが──君も知つとる通り、僕は其、家名門地なんか云ふ事にはあまり頓着しない方でね、自分のやりたい事業さへやると、餘事は先如何でも宜いと云つた様な譯で、僕の義兄と云ふ男が非常に律義な男で、兩親の方は氣遣なしだから、十分勉强して見る積りで居る」

「野田家を嗣いで呉れる氣はないか」僕は突如として問うた。

「何？」松村は愕然として未だ十分僕の問を解せぬ容子。

「野田姓を名乗つて呉れないか」

「何を冗談云ふのだ」

「否、冗談ぢやない、君、本當に鈴江君を娶つて、野田伯父の名跡を立てゝ呉れないか」

松村は凝と僕の顏を見て、やゝ暫し考へて居たが、

「如何して突然其様な事を云ひ出したのだ？」

「云ひ出すのは突然だが、熟議の結果さ、決して冗談ぢや無い」

松村はまたしばらく考へて居た。

「でも僕には到底野田家の名跡はつがれない。不相應だ」

「何、不相應は此方から云ふ事だ。打明けた所が、君も知つとるが、野田家も不幸に遭つてね、今は母子の體二つ、財産があるでは無し、眞の名ばかりだ　實に君には氣の毒さ。併し其處を折入つての賴だ。見込まれると思つて、考へて呉れたまへ」

松村は三たび考へた。「でも吾輩は未だ此れから勉强と云ふ體だから」

「何、今直ぐ家持になつて呉れと云ふんぢや無いがね。唯其積りで居て呉れれば宜いのだ。其れとも鈴江君が君の氣に入らなけれや詮方が無いがね」

松村は赧くなつた。「餘り突然で吾輩には考ふることも出來ん」

「左様さ、餘り突然云ひ出して、餘り性急に返事を促す様だが、四五日中に君も歸省するだらう、其前に是非君の意向を聞いて置きたいのだ。僕だつて君と斯様親しくするからには、僕の姉と云つた様な鈴江君と君の結婚を望むのは無理ぢやあるまいぢやないか──あ、待ちたまへ、誰か來る様だ」

松の間に衣の影がちら〳〵したが、やがて石川の婢が來て、茶が入つたと報知した。

婢が歸つて、僕等もやがて歸つた。家に入る前に、松村は斯う云つた。

「何しろ餘り突然で、吾輩には何と云つて宜いか、知らんが、まあ一兩日考へさして呉れ玉へ、妹にも相談して見よう──無論何も國の兩親の指圖次第だが──」

家に入ると、お敏君は鈴江君と東の縁に腰かけて、香嚢で何か小さな絹様のものを縫んで居る。ぼちや〳〵した色黒の不二男坊と、色白の露ちやんと二人の肩におつかゝる様にして見て居る。僕の贔屓目は斯様な際にも忽ち二人の性質性格の相違を認めた。お敏君のは目がつまつて緊と出來て居るが、鈴江君のは形も目も大きく、先刻の話の枇杷でも漏りさうだ。併し松村は其様思はなかつたであらう、兎に角鈴江君が彼ゆつたりした顏をあげて莞爾目禮すると、松村は其處に乾した梅干の様に紅くなつて、茶を飲み　片瀨饅頭をつまむ間も、先刻の雄辯に

似げなく、手足に鯨でも入れた樣に、錘でもした樣に、重くなつて居た。

六

夜明方から降り出した雨、午頃になつても猶止まず、松村か許からは先刻明治評論を婢が借りに來たばかり、多分御考中の彼を妨ぐるも如何と已に出かけた足を控へて見たが、退屈でたまらぬ。午餐が濟むと、叔母は横になつて鼾をかき、午前に昔話をねだつて僕を弱らせ「お家歸らう」を云ひつゞけて皆を困らした不二男君も叔母のからびた乳房を握つて鬼が島の征伐に行つたので、淋しくてたまらぬ。詮方なさに携へて來た美學の書など引出して見たが、一向興味がない。ショッペンハウエルが何と云はうが、ハアトマンが何と論じようが、美しいものは可愛く、可愛いものは見たく、要するに百卷の美論も一個の美其ものに及ばない。此回は革嚢の底に押込んで來た一二雜誌の夏期附錄小說を讀みはじめたが、其もまどろかしくて厭になつたので、抛り出して、欠伸しながら絲の樣な茅屋の雨を眺めた。隣の室では、此も先刻松村許行からうとして今日は止せと叔母にさしとめられた鈴江君が、「風雅でもなく洒落でもなくせうことなし」の手すさびに手風琴をいぢめて居る。

其何十回となく繰りかへさるゝ頗る怪しい「おもひ出れば」の睡さうな節は、物置きの方で宿の老爺が藁をうつ單調な響に和して、其を聞いただけで人の氣がめいりさうな。僕は忍びかねてまた欠伸した。

退屈でたまらぬ。何故だらう。いや思ひ出した、今日は見たいものをまだ一度も見ないからだ。と思ふと、不圖先月最早二度と其人の事を思ふまいと決した事を思ひ出して、面目ないと云ふ樣な感が少し浮みかけた。僕はかけたと云ふ、何となれば更に強大な或勢力が忽ち其感を壓倒し去つたからである。否、僕は如何してもお敏君を愛さずには居れぬ、僕は承知しても、僕の心胸が承知しない。官を得て黑塗馬車に乘らずとも、妻を娶らば如何してもお敏君を獲なければならぬ。

また欠伸する途端に、手風琴の拷問が止んで、欠伸と共に鈴江君が入つて來た。

「如何したんでせう、今日はお敏さんも誰も來ないのね」

「怒つとるのです」

「何故？　誰が？」と鈴江君は少し眼を瞠る。

「わたしが松村と喧嘩したんです、其れで彼方も來ない、此方も行かないのです」

「嘘」

僕も少しじらし草臥れて、默つた。

兩掌に團扇を捻つて居た鈴江君は、やゝあつて突然に、

「お敏さんは可愛い嬢になりましたねエ」

僕の胸は忽ち三ツばんをうち出した。近火だ。

「學校でも大變によく出來るのですつて、――繪なんか巧いんですよ、怜悧な娘」

「其樣ですか、喃」

「貴君、其樣思ひなさらなくつて？」

「貴嬢、其樣思ひなすつて？」

「其樣にはぐらかしちやいやですよ。本當に貴君はお敏さんを如何思ひなすつて？」

「然樣ですな――多分松村の妹で、女學生ですかな」

「最早嫁」と云つて、やゝあつて、「わたくし彼娘大好き」

「其れなら細君にお貰ひなさい」

「わたしが男なら本當に貰つてよ」と鈴江君は笑つた。叔母が寢がへりする。

「靜かになさい、不二男さんが醒めるです」

鈴江君は急に聲を落して、(大きな聲で話すかと思ふと忽ち小聲にかはる所は、故伯父其まゝ

までであつた）

「兄妹でも違ふのね、松村氏とお敏さんは餘程氣質が違ふわ」

僕は不圖思ひついて、話を轉じた。

「鈴江さん、貴孃、來年の四月卒業でしたね」

「はあ、さうよ」

「卒業後は如何するのです、洋行？」

「其樣ね――」

「而していつか云ひなすつた樣に生涯獨身で、女子大學を興すのですな？」

鈴江君は默つて居る。

「併し鈴江さん、獨身の女は如何しても不具ですよ。聖書の文句ぢや無いが、男女一人居るは宜からずです。其れは大きな事業は獨身と定まつた樣なものだが、其樣な人は萬人の中一人あれば大したものです。其よりも良妻賢母の必要は一般に渉つての事ですよ。如何しても大國民の建物は好家庭の煉瓦を積まなければならぬ。家を粗略にするのは女の恥辱です。僕は子供に破れ衣を着せたり良人に焦飯を食はしたりする社會的事業（婦人のですよ）には贊成が出來ない」

「其れならわたくしは如何したら宜いのでせう？」と鈴江君は顏をあげた。

「無論適當の紳士を助けて、内家政を理し、子女を育養し、而して餘あらば一臂を外に揮ふのです」

「でも家政なんか面倒くさいわ」

「其樣な亂暴な事があるものですか。其が女の職分です。其ともたつて厭なら、良人と二人で下宿住をするのです」

「でも下宿はひどいわ」

「其れぢや嫁でも家を持つのです。何、少し持つてごらんなさい、面倒と思つた事に趣味が出て、如何樣に樂しいか知れない」

「老爺の樣なことを云つてらつしやる」と鈴江君は笑つた。

「宜いですか」と僕は一歩を進めた。「假りに、假りにですよ、松村なら松村――」

鈴江君の頰に薄り紅がさした。

「松村でも誰でも宜いが、教育ありですね、品行方正で、前途有望の紳士が、宜いですか、鈴江君と一處に家庭を造りたいと云つたら、如何ですか。其れでもわたしは家政なんか面倒くさいからお斷りします、何處か他をきいてごらんなさいて云ひますか」

鈴江君は更に一段顏を赧くして、而して笑つた。

「其樣な紳士を萬々一拒絕するなんて其樣な事があつたら女冥利がつきます。其樣な時は否應なしに――」

「其樣な壓制な媒は無いわ」と鈴江君は笑つた。

「其や少しは壓制かも知れんが、併し若い内はよくまだ／＼さきに好い緣が幾個も金の車を挽いて待つて居る樣に思つて、折角の好い緣を見のがすものです。まだ／＼でのばし／＼して、年をとつた擧句が、其れ、發句にありますね『秋ぐちの水瓜ごろりと投げて賣り』すて賣りとは情無いぢやないですか。其を思ふと僕は女は何十何歳までに是非結婚す可しと云ふ法律を設けたくなるのです、出來ることなら其樣な人達に一々會つて云つて聞かしてやりたい位――」

「老婆の樣な事を云つてらつしやる」と鈴江君が莞爾した。

「冗談ぢやない、本當の事です」

「でも其ぢや女に撰擇の權がない樣になるわ」

「若い男女の撰擇があてになるものですか。（尤も僕の撰擇丈はあてになると獨り心にことわつた）今の若い者に夫妻の撰擇さすのは、色盲に友禪の買物賴むより猶ひどい」

「でも自身の良夫を自身に撰まれないと云ふの

はひどいわ」

「だからさ、教育の必要は其處でせう。僕の教育と云ふのは學校ばかりぢやない、社交的教育を云ふのです。珍らしいから眼迷ふのです。ね、男珍らしかつたり、女珍らしかつたりするから、直ぐ迷ふのです。だから成丈男女隔離しない樣にして、宜いですか、せめて中學位までなと合同教育を行つて、其れから先づ一家親類知己朋友の間からなど男女の交際を頻繁にし（其樣すれば家政の整理に暇がないと切り込まれた時は、其處で衣食住改良の必要があると應ふる筈だつたが、鈴江君は幸に僕の撞着を認めなかつた）たいものです。其樣でせう？」

「其はわたしも同意よ、だからあなたもせい出してお敏君と交際をなさい」と鈴江君が笑つた。

僕はぐつとつまつた。鈴江君に斯樣なきはどい手があらうとは、實に意外。

（七）

忽然日が暮れた樣に室內闇くなつて、思ひがけない雷が鳴り出し、雨がざあと降り出したので、戰は先づ交綏となつた。

今曉來の雨は知らぬ顏に、突然降り出した暴雨、雷鳴電光の加勢引連れて、崩れよ潰れよと茅屋を襲つたが、四時の時計が鳴るを宛ながらの相圖に、すうと明るくなつて、細大の白雨何時か疎らな絲雨となつた。

止むを待ち兼ねて、僕は跣足で飛び出した。霽際の小雨ひやり〳〵顏を撲つて、足下には潦水が砂路を目流れ目吸はれて居る。青い雫の降りさうな竹藪の彼方で鷄が鳴いて居る。

不圖氣づけば、松村が宅近く來て居たので、僕は一寸考へたが、また氣をかへて、遠まはりして濱へ出た。

雨は止んだ。南の方、大島の空にはまだ洋墨色の雲がむら〳〵遠雷の響を包んで居るが、富士の方角は薄うなつた綿雲の間からほうつと明光がさして、海はとろりと白う澱んで居る。富士は見えない。併しむら〳〵卷き上る雲の下から、大礒國府津小田原眞鶴あたりの山が濃い藍で抹した樣に露はれて居る。つい對面の江の島はたつぷり水を含んで、今にも流れさうだ、水際に、裸體の漁師が頻りに小舟のあかを汲み出して居ると、此方に引きあげた舟のみよしの茶筅から雫がぽたり〳〵落ちては小さな穴を砂に鑿つて居る。雨後の冷々した風が顏に當る。

波打際をぶら〳〵歩いて、彼大船のみよしを廻ると、此は意外、お敏君が露ちやんを負つて立つて居た。

「や、お一人？」

胸はまた例の驀地にうち出す。（僕が心臟の發動機はお敏君であると見える）お敏君は、薄紅に含笑んだ

「兄樣は？」

「少し休んで――」

「如何かなすつたんですか」

「否、何も別に――昨夜おそくまで何して居ましたから」と少し顏を赧くした。

言葉が一寸途切れる。露ちやんが背でぴんぴん飛び立つた。

「重たいでせう――さあ、露ちやん、僕が抱しよう」と手を出すと、露ちやん（白いボンネットを冠つて、桃色のちやん〳〵を着て居た）は、「否よ〳〵」と笑つて、敏君の肩に顏を隱した。敏君は「如何したの」と嫣然顧みる。

僕は唯莞爾見惚れて居たが、不圖心づけば未だ昨日の禮を云はなかつた。

「昨日は御馳走でした」と頭を搔いた。

「如何致しまして」と云つた樣にお敏君は お辭儀をした。

日のあたり少し雲切れがすると、忽ち白金色の光がさつと斜に落ちて、海も江の島もきらきらと宛ながらに笑を溢す。

「好い景色ですな」
「本當に好い景色で――」とお敏君は眩しさうに眺める。冷々した風が鬢の毛を吹いて、其美しい顔から頬のあたりをひら／＼撫でて居る。
「兄樣からお聞きでせう」と僕は思切つて尋ねる。敏君は「はい」と云つた樣に見えた。
「兄樣怒つては居ませんか」
「否」と敏君は含笑む。
「貴孃の御意見は如何です」云ひ終つて、吾ながら大膽に驚いた。
「わたくし別に――」と敏君は口籠つた、嬉しげに。
「如何でせう、兄樣は承――」
「母ちやん／＼」露ちやんが突然反つたので、驚いて顧ると、海水帽を冠つた石川の細君が兩手をさし出しながら蹣跚々々やつて來た。
僕は敏君の親戚として、氣さくな婦人として、石川の細君を好んで居たが、此時ばかりは世に石川の細君なる者の在る可き理由を發見し得なかつたのである。

* * * *

其翌日朝から松村兄妹、僕、鈴江君、石川の細君、打連れて江の島に行つた。歸途コキン別莊の横手を通る時、松村は遙かに後れた鈴江君等を見かへり、然る後聲を低めて、
「兩親さへ同意するなら、吾輩――は別に異存は無い」
と赤くなつて意外に早い承諾を與へた。

（八）

意外に早く松村が返答を得たので、歸るを遲しと僕は中島叔母に告げ、叔母は早速鈴江君を呼んで旨を諭した。昨日の僕が話の意味を俗はと今日悟つた鈴江君、おいそれと承諾するも權式がないと思つたか、色々故障を持出すのを、叔母は「其樣な分からぬ事を云ふものではありません、わたし達に任せなさい」と頭から叱り飛ばして鈴江君の口を塞いでしまつた。其と云ふも畢竟鈴江君の心底がよく見えて居たからで。
兎に角善は急げで、叔母は直ぐ鈴江君の母なる人に、僕はまた僕の母に宛てて手紙を認め、夕飯が濟むと僕は自から二通の書を携へて、藤澤停車場の郵便函に投入した。
停車場を出ると、日は暮れた。野路の夕暮、露は未だ置かないが、冷々した微風面を撫でて、道側の草叢や大豆畑や桑畑に頻りに蟲が鳴いて居る。最早月の出に間は無いのであらう、片瀬の山の上がぼうつと黄ばんで來た。今日は陰曆の七月十五夜、盆踊（此邊は重に陽曆より一月おくれに年中行事をするが、稀には其の陰曆を用ゐることもあるので）の爲でもあるのか、行く方の村には頻りに笛太鼓の音が聞える。
嬉しいとも、哀しいともつかぬ一種の感がずうと身を包んで來た。嬉しいのは無論鈴江君の爲め松村の爲めであらうが、何の爲めに哀しいか、自から解せない。何か心に不足がある、不滿がある、缺陷がある、僕の心は悶えて居る。吉野紙を隔てて櫻花を見る樣に、朦朧くて堪らぬ感がある。僕は愛して居る――其は事實だ。併し其愛は酬はれて居るであらうか――僕は彼なつかしい人の一言一動をずらりと心に列べて見た。已惚か知らぬが、確かに嫌はれては居ない樣だ。併し樣だでは決して滿足が出來ない。最早明後日は兄妹も歸省するのだ。今別るゝとまたゆつくり會ふ機會は無い――永久に無いかも知れぬ。左樣すると今迄の嬉しいも何も皆夢になるのだ。あゝ如何かしたいものだ。併し如何して宜いか僕には分からない。打明けて彼人の心底を聞いて見ようか、不可、々々、僕は羞しくて到底左樣な事は出來ない。人に縋らうか。猶羞しくていけない。斯樣な時に此僕が今一人他にあると宜いが、と愚痴をこぼしたが、こぼしても甚へても愚痴は矢張愚痴で、何の役に

も立たぬ。僕は腹を立ててステッキふりあげ、蟲の音をはつしとうつた。

　ステッキがきらりと光る。ふりかへつて見ると、橙黄色のぶら提燈を吊つた様なまん丸なお月さまが出て居る。

　僕が移す一歩々々に、其お月さまは次第に高く、次第に澄んで、銀光が豆の葉や草葉や桑の葉にきら〳〵流れると、其光を吸つたかして蟲の音がいよ〳〵繁くなつて來た。昨日の雨で悉皆洗ひあげた空は月光を帯びてたら〳〵と今にも露が滴りさうな。

　僕はセルリーの「Art thou Pale——」と云ふ月に寄する短歌を誦して見たが、其も面白くないので、ステッキをふるつて後半節を打截つた。つまらぬ、つまらぬ、詩人が歌はうが、月が照らうが、吾敏君は明後日の朝は行つてしまふのだ——限りなくかも知れぬ。空は勝手に澄むが宜い——僕の心は如何しても晴れない。月ばかり圓滿に澄んだつて如何するのだ——敏君を除却した僕は如何しても半圓に過ぎない。

　僕は草をうちたゝき〳〵野路を行き盡して、うど闇い鵠沼の村に入つた。

　歸つて見れば、叔母を初め誰も居ない。盆踊の留守にちやん〳〵一つ着て縁端に水澤山の南京酒を手酌に飲つて居る老爺に聞くと、皆石川——即ち松村の方へ行つたと云ふ、僕も後追つて松村が許へ行つた。

　月は大分高うなつて居るが、村中は木立に遮られて、わづかに螢程の光が砂地に落ちて居る。例の寒竹垣の絶間からぬつと入れば、閉めた障子にランプの光がさして、靜閑として居る。

「松村君——留守かね」

　人の起き上る氣はひがして、小さな咳が聞えた。

　と思ふと束髪の大きな（併し可愛い）影が障子に浮いて、忽ちお敏君の姿が障子の外にあらはれた。

　光を負うてよくは見えぬが、何處やら惱まし氣に——或は泣いて居たのでは無いか、と思つた。胸は頻りに騒ぐ。

「松村君は？」

「皆樣と御一處に——」

「散歩ですな。——貴孃は」

「わたくし、あの些——頭痛が致しまして」と敏君は鬢を撫でた。

「やすんでいらつしたのですね、餘程おわるいのですか」

「否、別に——最早淸々致したやうでございますの——何卒おかけ遊ばして」と敏君は一寸はたいて繭の座蒲團をすゝめた。

「暑氣中りなすつたんですね」云つて、僕はまだ立つて居た。

「何卒おかけ遊ばして」

「は、有り難う。何方へ、濱の方へですか、兄樣達は？」

「濱で——ございませう。最早歸りませう、何卒おかけ遊ばして」

　僕は到頭腰かけた。敏君が團扇をすゝめる。

「併しあなた起きていらつしてはわるいぢやありませんか」

「否、最早些も——何卒御話遊ばして——宿の者もあの、踊とかに參つて、わたくし淋しくて仕樣がありませんのですから」とにつこり含笑む。

　僕は消え入りさうな心地になつた。

「あの、藤澤にいらつしたのでございますか」と敏君が沈默を破る。

「は、郵便を出しに——彼事を早速國許へ申してやつたのです」

「色々お世話になりまして——」と敏君は可愛らしい頭を下げた。

「否、お禮は此方から申すのです、松村君が早

速承諾して下すつたので、叔母や一同非常に喜んで居るです。併し父上や母上の御意見は如何でせうな」

「父や母も喜びませうと存じますが――」

「其お話が出たら、何卒貴孃からも――貴孃の仰有ることなら父上や母上も直ぐ御聽になるさうで、否、松村君が其樣云つて居られたです」

敏君は少し頭をかしげて、含笑んだ。

螢がとまつて居る樣に、寒竹垣の間からちらちら覗いて居た月は、垣を過ぎて、其處に茂つて居る欅の間からひよつくり顏を出した。同時に木の葉がさわ／＼と鳴つて、月の息かとばかり涼しい風が面を撫でる――と思ふと、敏君の背後のランプが吻と消えた。

月の光が水の如く流れ込む。

（九）

「まツ」

敏君は微音に叫んで、手早くマッチを擦り、二三度つけたが、今は水の流るゝ如く吹き出した風に忽ち吹き消さるゝので、敏君はランプを次の間に移し、隔の障子を一枚引きたてた。

燈火が退いたので、月は得たりと僕等が――僕は縁に腰かけ、敏君は四五尺離れて少し身を側め團扇をいぢつて――話す八疊にさし込み、隅々隅々の深黒い蔭の中に諧然水際だつた光を投げ、寒竹や欅の影はまた庭から縁、縁から座敷と上つて、僕等の浴衣も月光と樹影と宛ながら染め分けた樣になる。

葉越の月の移る毎に霜と置いたる疊の光は伸縮み、風わたる毎に墨繪の影は縁にそよいで、古歌の所謂「影定まらぬ夕月夜」敏君を見ると、可愛らしい笑顏が半は月に出で半は蔭に入つてゆらゆらと凝りもあへぬ愛嬌の露と湛へ、團扇まさぐる膝の上、胸のあたり、雨袂、白地の浴衣に墨染の木葉模樣のちら／＼動いて、撫にも手に漏り抱かば腕に融けんかと危まるゝ姿。

恍然と僕は夢中の人となつた。

寒竹垣の下で、蟲が鳴いて居る。何處かに踊の笛の音が聞える。

「好い月ですな」

「本當に好い月でございますこと」敏君は竊と息ついた。

「斯樣に貴孃や兄樣と御一處にお心やすくするのは珍らしいですね。ずつと昔お宅に上つたことがありますね、覺えていらつしやらないでせう、貴孃はまだお小さかつたから――僕が十四でした、兄樣とよくお化をしては貴孃を嚇したり、惡戯ばかりして居たのでしたが」

「否、よく覺えて居りますの。あの、畫を描いていたゞいたのをまだ持つて居ますの、國許に」

「左樣でしたか」と云つた僕の心は張り裂ける樣。

「年が經つのは早いものですね」

「本當に早く經ちますのね、あの、母や鈴江さんや御一處に連れて來ていたゞいたのは最早四年になりますのね」

「來年卒業なさるのですな」

「何も出來ませんで」

「否、大變よくお出來なさるつて、鈴江君が其樣云つてました」

「嘘でございますよ」

「畫をおかきなさるさうですね」

「嘘でございますよ」

「歌もおよみなさるでせう」

「否、何も出來ませんの、――何か致したいと思つて、兄に其樣申しても、些も相手にして呉れないものですから」

「あなた方は御兄妹で羨ましい」と云つて、はつとして僕は急に語を轉じ、「兄樣と御一處に遊びにいらつしやい」と時處の分からぬことを云つた。僕は居常大學寄宿舍に居るから、敏君が遊びに來られないのは無論である。併し敏君は

嬉しいと云ふ相を月かげにほの見せた。
僕は夢から夢に深入りする心地。
「最早直ぐ御歸省ですね」
お敏君は默つて居た。極めて微かな歎息を聞いた樣であつたが、其は木の葉のすれた音かも知れぬ。
「松村君が居なくなると、淋しくて仕樣がありません――、僕も――歸つちまはうと思つとるです」
「兄も大變居たがつてますけど――」
お敏君は俯いた。
あゝ僕は西洋に生れた西洋人であつたなら、此時跪いて、お敏君の可愛らしい手をとつて、「可憐の敏子孃よ、吾生命よ、卿は此むくつけ男と一生を共にしてたまはらぬか、ゆく〳〵吾妻になつてたまはらぬか」と白々地に云ふのであるが、僕は最早寸歩も前へは踏み出せぬ。無論後へも退かれぬ。僕は唯太息した。
敏君も差俯いて、團扇を見つめて居る。
風はさら〳〵欅を搖つて、葉毎にこぼるゝ月かげは千萬の玉を閃かす樣に見える。

（十一）

平生左樣不辯では無い積りであつたが、今夜に限つて如何しても言葉が見つからない。否、見つからないのでは無い、僕の全身心に溢るゝ或ものは、到底人間の發明した言葉や文字のまどろかしい運搬器では運び了せぬのである。
實に好機會、恐らく二度とあるまじい好機會、僕の心を明し彼方の心を聞くに誂へても出來ぬ機會、併し僕は如何して宜いか知らず、何と云つて宜いか知らぬ。其樣する内には、一同が歸つて來るに違ひない、云ふならば今、明かすならば此瞬間、とあせる程心は亂れ、口は澁つて、實に吾ながら吾を引裂いてしまひたい心地。
「あまり長話して、御氣分に障りはしませんか」
と云つて、あゝまた同じ無意味な言を繰りかへして居ると落膽した。
「否」と敏君は俯いたまゝ。
話はまた途切れる。
風はさら〳〵流れるが、僕等の座邊は恐ろしい濃厚な空氣の壓迫があつて、息もつまるばかり、言はずば心も裂けさうな。
一分間過ぎた――殆んど一世紀にも渉る長さの。ばた〳〵云ふ響を見れば、敏君の側近く風が白いものを翻へして居る。物の本だ。
「其書は何ですね？」
「あの昨日貸していたゞいた――」
「明治評論ですね――御覽なすつて？」
「はい」
「つまらないでせう？」
「否、大變に面白うございましたの」
「彼中に西洋の短篇小說を譯したのがありませう、御覽でしたか」
「はい、あれ大變に面白うございましたの」
「如何しても西洋人は甘いですね、まだ〳〵我邦のは幼稚なものです。矢張彼作者の書いたので、短篇に面白いのが幾篇もありますよ」
「何樣なのでございます？」
「何樣なつて、幾篇もありますがね」
「伺はして頂戴な、何卒」
僕は思ひ出づるまゝに一短篇の筋を話した。
露西亞の或田舍の別莊に、貴族の孃君が住んで居た。年は十八、美しい、悧巧な、やさしい、可愛い（恰貴孃の樣な、と云ふ言葉が一寸とつ口にかけ出したが如何しても脣の關所を通れなかつた）娘であつた。其處に二人の戀人が現はれた。一人は中年の紳士、風采も立派、爵位も富もあつて、一寸彼孃君を訪問に來るにも、一朶何十ルーブルと云ふ珍花の花束を持つて來る。結婚したらば、蜜月遊は何年でも構はぬ、亞米

利加にでも日本にでも行かうし、交際社會に出るならば、冬宮の舞踏會に金剛石の光を輝かさして、世の中の人の所謂幸福は此紳士が捧げて納にする程の運命の寵兒。今一人は平民の子の大學生（恰も僕の樣な、と心は謂つたが、口は言はなかつた）腕一本で此れから身を興さうと云ふ體、無論財産もなく、爵位もなく、容貌すら醜くて――併し、併し其孃君を愛する事に於ては、世界を敵としても些とも恐れず、其孃君が死ねと云へば今眼の前で直ぐ死に、飛び込めと云へば水火の中にも笑つて飛び込む位一心に思ひつめて居たが、臆して羞ぢて如何して其心を明かして宜いか分からず、戀ひて〳〵戀死ぬる程戀ひても何時までも默つてばかり――

　はつと思つて、僕は話を止めた。止めてまたついだ。併し話の緒はいよ〳〵纏綿かつて、僕か人かを分き兼ぬる樣になつてしまふ。僕は默つてしまつた。

　幾秒か過ぎる。

　不圖忍び音の歔欷が耳に入つたので、驚いて見れば、敏君は突俯して居る。

「あッ、お敏さん、如何しました？」

　敏君は顏をあげた。涙が眞珠の如く頰を傳うて居る。何か云はうとして脣を開いたが、言は聞えない。敏君はまた俯いてしまつた。

　僕は身も世もあられぬ心地。

「如何しました？　エ？　エ？」

「わたくし……あの……」敏君の聲は歔欷に埋れて聞き取れない。

「僕の云つた事が氣にさはつたら堪忍して下さい。エ、エ、お敏君」

　僕は夢中になつて背を撫でた。

　突然僕の手は燃ゆるが如き手に緊と握られた。熱い雫が手に滴る。

　僕は狂氣の如く、

「堪忍して下さい」と云ひつゞける。

「わたくし……あの……」

「僕が惡いのです、僕が惡いのです」

「御免…遊ばして…わたくし…あの…」

「エ？　エ？」

「わたくし…あの…うれ、嬉しくて…」

　四邊の世界は忽焉と消えてしまふ。永遠に架す夢の浮橋に僕等は唯二人立つて居る。

　月は照つて居る。風は吹いて居る。蟲は鳴いて居る。併し僕等は見もせず、聞きもしない。

　何秒若くは何時間若くは何世紀過ぎたか知らないが、人間の聲（後で考ふれば、石川の細君が松村と垣の外を高笑して歸る聲であつた）に愕然と吾にかへつた時は、僕の右手は敏君の左手を、敏君の左手は僕の右手を互に緊と握つて居た。

十の巻

（一）

　鵠沼の農家の一室に、僕が中島叔母に誓つた言は、反故にはならなかつた。松村は終に野田を名乘り、鈴江孃は清磨夫人となつたのである。

　併しながら此事の中島叔母の脳中に湧き出でてから事實となつて現はるゝまでには、實に豫想外の手數を費した。「媒妁は草鞋千足」とは云ふが、此位骨が折れた縁談は初めて」とは母の述懐であつたが、實に此事件の發端から結末まで一人で樽俎折衝の役目を引受けた母の骨折は並大抵の事では無かつたのである。

　松村兄妹が鵠沼を立つて歸省の途に上ると、間もなく僕も東京の炎塵の眞中へ引返した。松村からは、何日何時無事到着仕候の報告的はがきが一枚ぶらりと來たばかり、「やつと四五日前に歸つて來た、駒場の方の手數彼此で、直ぐ來る筈だつたが、失敬した」と間の惡さうな顏

して本人が尋ねて來た其までは、縁談の件については、呍とも啐とも云つて寄越さなかつた（無論羞かしかつたので）が、併し彼件談判の進行は僕や中島にちよい／＼來た母や伯母の手紙でよく承知した。松村老人は最初から大贊成、不肖の清磨が野田家の樣な名家の跡を嗣ぐのは、當人の仕合、親の面目、と大喜び、殊に鈴江君のさつぱりと大竹を割つた樣な性質が至極老人の氣に入り、眞に當世の娘の樣に白粉くさく、しやなら／＼とした所が寸分無く如何しても大家の娘、清磨には過ぎた奧樣と、頻りに乘地になつて居た。併し清磨君の義兄で松村家の總領の謹次と云ふ男が、義理ある弟に他姓を名乘らすも世間の手前如何と妙な所に義理を立て、殊に名家とは云へ一枚の田、半錢の貯あるでなき野田家にわざ／＼財産背負はして異姓を名乘らせに義弟をやるにも當らぬ事とのさばつた。其は猶可いとして、松村の母なる人の腦中には、清磨君の身の上を、卒業したらば斯うして彼樣してと云ふ分別も已に出來て居た所で、嫁も色は少し淺黑いがはつきりした悧巧な女と頻りに彼お冬君を望んで居たさうな。併しお冬君は故兼頭君を亡くして以來最早人に見ゆる心もなく、殊に松山なる其實家も彼活氣な老人は次第に老衰の境に向ひ、弟の戸主は猶弱し、近々に歸つて家の世話をせずばなるまいと云ふ都合で、其方の望は絶えたが、併し立派な壯年まで育て上げた清磨君をむざ／＼野田家に奪らるゝをつらがり、且は鷹揚な鈴江君に兎角十分の同情が行き兼ねて、未だ早い／＼を口實に、頻りと防禦の陣を張つたのであつた。其堅固な陣を破り、彼謹次氏が一徹の砦さへ陷れて、如何して首尾よく成功まで漕ぎつけたか、其處は書手紙や傳聞では到底云ひ盡されず聞き盡されぬ苦心の潛む所で、實に斯事の成就は、此時こそと双肩ぬいだ母の骨折と、また此はあまり人の知らぬ事實だが、吾敏君が内にあつて石を融かし鐵を和らぐる纖腕を振つた結果であらう。

兎に角帷子で始まつた縁談は、僕が朝夕の散歩に大學校内の楓樹の早や狐色になるを見る頃に到つて、初めて首尾よく結了した。

野田伯母が、故伯父の四週忌前に是非其内祝言だけでも濟したいとの情願もあり、故障が多かつた縁談だけまた種々事の持上らぬ内にさつぱりと方づくるがよからうと誰しも念つたので、結婚は取り急ぐこととなり、東京で中島叔母が痛い足引ずつて一通りの買物整ふれば、國許では僕の母が指に針だこをこしらへて彼を縫ひ直し此を仕立てに餘念なく、年の暮押つまつて松村が東京を立つた其三日前に中島叔母も亡兄の墓參かた／＼鈴江君を連れて下り、恰くれの廿八日血眼になつて懸取の馳せ廻る最中に悠々と結婚式は擧げられた。風變りの故伯父の娘だけ、結婚までが餘程風變りであつた。

僕は遺憾ながら此結婚式には列しなかつた。（敏君も同樣と聞いた）併しながら時刻を計つて、一通の祝電をうつた。而して後で聞けば、此電報は恰も一同が式饌の箸取り上げる其瞬間に着いて、彼むづかしやの謹次氏がギナタ讀に讀みあげると、中島叔母は列座の前で頭を下げて僕の母に此回の勞を謝し、「お禮には屹度わたくしが愼さんに立派なお嫁を世話します」と大音に言つたさうな。野田伯母も僕にこま／＼禮狀を寄越して、母御や卿の骨折で大安心した、此上は唯卿の身の固まる其のみ心にかけて居る云々と書いてあつた。

（二）

野田伯母は、其管理する女學舍の日に月に盛大に赴くにつけて、父兄の信用も重く、如何しても中途に辭する譯に行かぬので、依然國許に留まることとなつたが、新郎は農科大學に猶獸醫學の研鑽をつゞけ、新婦はまだ四ケ月の學課

を剩して居るので、一月上旬中島叔母と打連れて歸京し、澁谷の邊の唯有る小綺麗な茅舍に、小さな野田淸麿の門札をかゝげた。

結婚が兎に角人の生涯に一時期を劃することは承知して居たが、初めて新夫婦に會つて驚いた。松村の鰌髭に何處となく位がついて、ちんと澄ました所如何しても人品が一段上つて見え、鈴江君も確かに女振を上げた樣な。夫婦仲の好いのは、樂器の調子がうまく合つて行くのを聞く樣に、餘所目餘所耳にもわるくないもの、殊に此回の結婚は僕も與つて大に力あるので、新家庭に穆々たる淸風の滿つるを見て、心竊かに兩人の爲めに欣んだ。尤も家庭と云つても、此はまた隨分風變りな家庭。寧ろ一種家塾の樣な家庭。主人が駒場の大學へ通へば、細君は肩掛引かけ、紫包の辨當提げて麹町まで日每の通學。留守は、大丈夫と保險付で中島叔母が自宅に使つたのを其まゝお讓りの婢のお銀が預つて、午後の四時五時頃までは淋しいことであつたと思はれる。此婢の報告によれば、旦那樣の奧樣思ひはまた格別で、朝は遠方の事ではあり、夫人が先きに出馬するので、松村否野田君が肩掛まで取つてきせ、少しわるい日和にはそれ車を雇へ、やれ風邪をひくなと子供を可愛がる樣な可愛がり樣、履物揃へぬばかり、夕方もまた旦那が先きに御ひけになるので、最早奧樣が歸る時分、茶は沸いて居るか、炬燵に火を入れて置けと、其れは〳〵餘所目にも齒痒い位、婢も今一度年をあとへ取つて彼樣に可愛がられて見たうございます、とは蟲の好い婢が述懷。夫人もまた劣らぬ旦那思ひで、麹町から歸途買つて來た赤坂豆を良人の膝にのせて、良人、此は腦に宜いさうですから、とは飛んだ怨道。淸麿君が彼髭を引張つて仔細らしく豆を噛る顏付が見たかつた。

節儉家は着物を立派にして食物を粗末にし、食物に奢つて衣服を粗にするは不經濟家と或世間通は云つたが、其定木から割り出して見れば、鈴江君の如きは餘り經濟家の方では無かつた。良人の肉食論を演繹した譯でもあるまいが、着物などは垢づかぬものを着て居れば木綿で澤山、食物は成る可くよくせねば、萬事の原の健康を全うすることが出來ぬと云ふのが鈴江君の主義で、從つて賄費は野田家の豫算の大部分を蠶食するのであつた。加ふるに、今日途中で林檎のあまり宜いのがありましたから買つて來まし」たり、雨が降つて運動には出られず、淋しいから菓子でも買はせにやりまし」たり、客があれば婢が魚屋蕎麥屋に走るし、走るは足の事だが、今一つのあしも其筋に出る數がつもつて、忠義のお銀が内々中島叔母へ訴訟したとは成程左樣ありさうな話。

夫妻の間は至極和して居たが、家内の秩序は隨分と亂れて居たと云つても宜からう。六疊二間、二疊一間、三疊一間の家は殆んど膝を容るゝの餘地なきまでに色々の物品が占領して居た。主人の外套と細君の肩掛と押込につめ込んであるかと思へば、床の間には農學書類が女學雜誌と同居して居り、主人公の卓子にマッチのからやピンがのつて居れば、夫人の針插には菓子皿や卷煙草がのつて居る。「如何樣に片附けましても、斯方樣では如何して斯うひつ散らかりますかしら」とお銀も澁谷の七不思議の外にまた一不思議を算へて居る。敏君が日曜毎に遊びに來て綺麗に片づけて行つても、翌日からまた忽ちもとの渾沌にかへるさうだ。

此渾沌の上に更に一層の混雜を加ふるのは來客の群集であつた。敏君は、妹、僕は舊い友人、石川や中島の一家は親戚の事で、往來に不思議は無いが、鈴江君の女朋友や、淸麿君の新知己が好い遊び所を得たり貌に押寄するのは、片腹痛かつた。主人が愛嬌は婦人間に評判よく、鈴江

君が座上客常滿、樽中酒不空の孔融氣どりで好く客を待つ主婦氣質は男子間に稱贊を博して、日曜なぞに行つて見ると、五分刈頭と束髪頭と此處にもがや〳〵、彼處にもどや〳〵、菓子でも肉でもどし〳〵通でとつて馳走する鈴江君、内の徐世賓は成程人心を獲る哩と云ひ貌に眼を細くして居る清磨君、此主人夫婦を中心として、近眼の甲君、顋の長い乙君、滑稽家の丙君、大學で作り出す西洋南瓜の樣に平たい顔の丁君、お洒落の戊君や、顔が眞黒で歯だけが眞白い歯美人のA女史、冬瓜の樣に青白いB女史、學問なぞ廢して寧淺草の女相撲にでも出れば好ささうな倔強のC女史、暇さへあれば鏡と睨めつくらをして天下の美人は唯君とわらはとのみと己惚るゝD女史、此等の連中が彼處に騒ぎ、此處に笑ひして居るので、折角僕が遊びに行つてもゆつくり話も出來ぬ始末。少し控へ目にしては如何だと、忠告して見たが、清磨君は莞爾として彼髭を撚るばかり、夫人はまた「でも男女交際は貴君の素論だわ」と鵠沼での僕が言を引張り出し、まさか僕の男女交際は或二人を意味したのですとも答へかねて、僕は唯苦笑する外はなかつた。其は猶可いが、折角敏君と會つても、しみ〴〵挨拶も出來ぬのみか、鈴江君が今はいよ〳〵姉の威光をふりまはして、（眞實妹として可愛がつても居たが）敏さん、一寸あゝして頂戴な、斯樣して下さいよ、なぞ吾敏君を使ひまはすさへ腹が立つて溜らぬ所に、何の事情も知らぬ逸り男の奴輩が中原の鹿視して八方から眼光の矢を敏君に射かくるのが忌々しく、敏君の居る一町四方に、「菊池愼太郎所有地、禁銃獵、東……間、西……間」と高札立てて置きたくも左樣は行かず、獨り氣を揉んで居ると、同じ思の敏君も彼歯美人や冬瓜が僕に笑顔をするのを一方ならず嫌つて、若し僕が彼束髪連に愛想のいゝ返事でもして居ると、敏君は耳まで紅になつて、口には一語も云はぬが、眼は電の如く僕の心を貫いた。

（三）

鵠沼の月夜以來、僕と敏君の關係は悉皆一變した。一片の誓紙を取りかはした譯でなく、一語の將來を約した譯でも無く、無論公に承認を經た譯でも無いが、後にも先にも唯一回吾を忘れての握手に、僕等は最早金輪際解く可からざる關係を結んだのである。僕は其と自覺し、且敏君が其樣自覺して居ることを自覺した。

彼月夜の出來事を回想する毎に、僕は慙悔と欣喜と交々到るのであつた。慙悔に堪へないのは、一旦の情に驅られて、前後を忘却し、深く祕す可き心の程を恣に打明けたのは、端ないと云はうか、無分別と云はうか、殊に先方はまだ十七、年齢も行かぬ少女、親友の妹と云へば吾妹も同然の娘を唆かしたと云はれても否とは云はれぬ彼場の仕儀、何故彼樣な向不見をやつたかと今更後悔に堪へない。併しながらまた一方から云へば、彼爲めに僕の心は明々地に敏君に通ひ、敏君の心底はまた白々地に僕に分かり、殆んど一語を費さず一紙の誓を待たずして十分の默契を來したのは、或は勿怪の幸であつて、若し彼事が無くば僕等は互に思に堪へずして病み、鬱に忍びずして傷れたかも知れぬ。彼夜僕は松村が許を辭して、久しく月影を踏んで鵠沼の濱を往來した。僕は其夜の感想を到底吾拙い筆舌にあらはし得ない。僕が心の缺陥は實に溢るゝまでに滿たされた。此茫々たる宇宙に於て、僕は最早一人では無い、半圓ではない、他の半圓が忽然天外より飛び來つて吾と合したのである。僕の愛に酬はれた。僕が思ふ其人は正しく僕を思つて居るのだ。花の如く美しい人、姿のみか心迄、否心こそ殊に花も及ばぬ清香を帯びた怜悧なやさしい彼敏君が僕を愛する――不思議、不思議、夢の樣だ、と僕

は獨語したのであつた。

あゝ敏君の心底は已に解つた。誰が何と云つても敏君は僕の妻である。妻である、妻となる可き者である。併し世間晴れての妻となるまでには、まだ幾多の時日を經、幾多の順序を踏まねばならぬ事は、無論當初から僕の心に浮んだ所であつた。其處の砂上に横はる舟を見ても其は分かる。海を懷ふは舟の心、舟を浮べたいはまた海の情であるが、併し海が舟を得舟が海を獲るまでには、潮時も待たねばならず、枕木を敷いて押し出す人の力も待たなければならぬ。彼方の心底を再知つて、吾眞情を彼解した上からは、餘は何事もうまくほつッて行く時日と云ふものの手も借らなければならぬし、僕等の爲を思つて呉れる人々の腕もまた煩はさなければならぬ。情は情として身を切る樣に切なくも、禮は禮として岩の如く堅く守らねばならぬ。愛して忍び、信じて待つ、此外に僕等の踏む可き道はないのだ。患ふる所は情を恣にして業に荒み、吾短氣ゆゑに自づから成る可き事をも毀つのである。此は僕のみならず、敏君も正に其樣思つたであらう。

故に彼月夜の翌日、僕等は相會つても、唯きまり惡く默然として居た。其翌日藤澤停車場に別るゝ時も、敏君の涼しい眼に暗涙の宿るを見て、心は裂くるが如くであつたが、双方唯目禮して別れたのであつた。兄妹が歸省して居る間も、松村へ出す手紙に、令妹に宜敷とだに書かず、彼等兄妹が歸京して後も、日曜に石川の宅へ行けば十に八九敏君に會はれるとは知りながら、つとめて足を遠くし、稀に會つても言葉少なに挨拶し、鈴江君が其話を持出しても忽ち傍へそらして居た。若し淺人の眼から見たらば、喧嘩でもしたのか、非常に遠々しくなつた樣な、と觀察したかも知れぬ。併しながら僕も敏君も斯く背いて反對の方向に行くのも、終に地球の一角で正に相逢ふことを知つて居たのである。

松村と鈴江君の結婚は、實に僕等の爲めに日出たい序幕を出した樣なもの、敏君も僕も兄の爲め從姉の爲めならずして更に非常の喜を感じたのである。結婚濟の報に接した僕の心は、(敏君の心も蓋)未だ蕾勝の吾庭の梅に對して隣の梅花が咲いた噂を聞く樣であつた。後れて殘念とは淺い話、春は最早隣家まで來て居るではないか。

鷹揚でも流石は女、僕の敏君に於ける、敏君の僕に於ける情緒は、鈴江君がよく知つて居る。妹々と妹の事を御注進に僕の耳に擦舞ふ兄者人も、存外の通り者かも知れぬ。中島叔母が鈴江君が結婚式で、僕の妻を吃度世話すると母に誓つたのは、其心當なくして可ならんやである。僕の顏さへ見ると莞爾笑ふ石川の細君、此もまさかの時には加勢の一刀位は賴まれよう。偕新背の吾母は如何であらう。敏君を見るは即ち愛する所以、少しも利いた風は無くて、しかも恐ろしい底ばやり、素直で、やさしくて、加之拔ける程悧な彼敏君を、彼眼力に富む母が見損ずる事は、萬々あるまじい話。松村家一統も、婿に二頃の田はなくも、一前途だけは有つて居るに、まさか敏君や清磨君の希望を徒にはすまい。

斯う算へ立てて見ると、未だ戰はずして勝算已に歷々たるものだ。

(四)

敏君の心は已に明らかに知れたし、四邊の形勢も右の通り有望であるし、何をあせり、何をくづをるゝ要があらうぞ。唯循々と歩いて行けば、目的地には達せられるのだ。戀ひ煩つたり、思ひ屈したり、物や思ふと人に問はれて得意がるのは、色の蒼白い神經質の小說の主人公なら知らぬ事、僕には其樣な和事師の役は出來

ない。學に志さば是非共名の稱さるゝまで、人を戀ふるなら是非共吾家の妻に娶るまで行かなくてはならぬ。斯う思ふと、僕は更に勇氣の全身に滿渡るを覺えたのである。

幸に先年の大病後は非常に壯健で、殆んど一回の風邪もひかず、夜もよく眠るし、(鵠沼以前は一時あまり眠れぬ事があつた)些やそつとの困難は此方から衝撞つても見たい位。書窓の月日の立ち易く、つい先頃大學に入つた樣だが、最早卒業も今年の夏と迫つて、身は故參の一人、文科大學の菊池と云ふ名は烏滸がましいが一部の社會に有望とか多望とか云ふ形容詞をつけて噂をされる樣になつたし、明治評論に執る文學評論の筆は月々學資を齎すのみならず猶幼稚な文學界だけに幼稚な筆も少しは讀者の好評を博して居るさうで、修養中の片手間仕事には、實に分に過ぎた報酬。閑を偸み嗜好に任せてあさる東西文學の寶庫は、入れば入る程無盡の富を示して、及ばぬと思ふ失望の嘆美を吾より捲る一方には、大樹を撼かして見たい蚍蜉の野心も煽つて呉れる。古人が鎌を入れない田地は無い樣に當初思つたのは愚の又愚で、僕が課餘の道樂にぼつ〳〵やり出した德川時代の研究も、やつて見れば先から先へ眼界は廣がつて、特別に研究したい事項、書きたいと思ふ題目は、天上の星より多く、實に生命が百も欲しい位。

貧を云つたら帝國大學學生の中で最も貧なる一人は僕であらう。併しながら僕は母もある、敏君もある、健康も有つて居る、希望もある、理想もある、痩せてもからびても獨りで立つ抱負もある。然れば家許が金滿家で卒業後は直ちに自費で海外留學に行くと云ふ同窓の阿某を僕は羨まない。貴顯に知己があつて、時々行つて馳走のブランに赤くなり、金紋付の抱車で送られて得々と歸つて來る以某をも羨まない。僕は誰をも羨まず、亦何も不滿に思はぬ。若し不滿に思ふ事があるなら、其は昨年の秋以來僕が監督することになつた故兼頭君の義弟が兎角學業に性根が入らぬ事位なものであつた。(兼頭の父君は去年の總選擧にいよ〳〵愛媛縣選出の衆議院議員となつて、出京の際後妻の子の名は正道と云つて實は極々横道者の十六になる少年を宜しく賴むと連れて來たが、賴まれた僕は每度此少年には手古擦つた。如何しても甘く育つた子は大きくなつて困り者になる)

瀑布に近く水流の騷立つ樣に、兎に角一段落の卒業も半年足らずの間に迫つたので、同窓の中にも種々身の振方に夢身を窶し、學課以外に大分多忙な者が多くなつて來た。僕も此れから社會と云ふものに出るについては、一分別しなければならぬ。否、僕の方針は最早夙に定まつて居たのである。僕は政治家では無い、無論軍人では無い、實業家でも無い。官海は僕の游泳場で無ければ、株式取引所も僕の舞臺では無い。以前は說教壇を僕の戰場と思つたが、今は必ずしも其樣思はない。僕の戰場は書齋、僕の武器は筆である。無論文士も活きなくてはならぬ。望を云つたら、海外留學も是非して見たい、萬卷の書も積んで見たい、學校も興したし、千人の書生も養つて見たし、金庫や壯麗の家屋や馬車や別莊も少しも惡くは無い、吾母に日本一の生活をさせ申して、敏君にせめて拇指大の金剛石の頸飾位は結納に贈りたし、枯木死灰でない限りは、慾も野心も山程ある。併しながら大學の寄宿舍から此榮華迄は中々遠い。否、隨分と近道もあるさうな。併し僕には盜賊の行く徑は踏めない。如何しても此頭は下げられぬ。此腰は折られない。(恥を言ふ樣だが、僕がまだ東京に來たての頃、平民新聞の配達をして居た時分、あまり前途が覺束ないので、大枚十錢を抛つて、銀座の本國堂に將來を占つて貰つたことがあつた。其時相者がぢいと僕の顏を

見て、此りや大分苦勞をしなさる哩、頭が下りませんなと云つた事を今日までよく覺えて居る）時が來、運が向いたら金の車にも乘らうが、僥倖の近道を狙つたり、お奧に泣きつき玄關にユヘ、笑をして、頭を下げて地位を上げる事は如何しても出來ない。頑固と云はれ、偏狹と笑はれ、野暮と罵られても、仕方が無い、僕の體質が左樣組織されて居る。半點の束縛を自覺すると最早僕は手も出ぬ、足も動かぬ、無論筆も動かないのである。因で僕の方針は唯一箇、富貴若し自づから到らば天の賜と拜しよう、正道にして求め得可くば求めても獲よう、併しながら其代價に「自己」を渡せと云はれたら、切るゝまでも此首を振らう。同窓の秀才が官府に五彩の羽を飜へして「癡人猶汲夜塘水」と嘲つたら、僕は「海内文章落布衣」と答へてやらう。目下の所では、粗食を食ひ、水を飲み、筆をとつて奮闘する外に、僕の執る可き道は無いのだ。望は無論山程あるが、差寄り望む所は、職務以外に何の束縛も受けぬ地位、露命を繋ぐ收入と、心の餘裕と時間の餘裕と是丈である。其位は小學教員をしても得られるであらう。併し其樣すると、母を迎へ、敏君を迎ふる時が、中々急に來ないかも知れぬ。但喜ぶ所は、吾母心身猶健やかに、意氣烈しい人だけ、必ず僕の志を憐れんで呉れるであらうし、吾妻となる可き敏君も、まさかの時は僕の爲めに彼美しい手で米を磨いで呉れるであらうと確信したのである。

五

春は三月初旬、本所小梅の別莊の紅梅が眞盛りで、此日曜に梅見の小宴を開き度、家族の者ばかりで、別に御遠慮になる客も無し、是非御來車を仰ぐ、と保證人中川氏から云つて來た。

已に前回にも云つた通り、貧乏人の痩我慢、金滿家の門を潜るを士の恥かなんぞの樣に心得て居た僕の事だから、保證人の中川と云へば同じ金滿家でも、勤儉力行以て今日の富を致した堅氣な男、駒井先生を識つて洋行費まで己れから進んで出した人、一寒書生にも決して禮を失はぬ人物、要するに同じ素封家でも尤も銅臭の無い英吉利風の紳商と云ふ事は承知して居たにも拘らず、萬已を得ぬ場合の外は滅多に其邸を訪うたこともなく、從つて本所の別莊も噂は聞いて未一回も見たことはなかつた。其に突然此招待は何事であらうと思つたが、折角の案内を無下に斷るも無禮であらうし、殊に其日になつてわざ／＼迎の車まで寄越したので、僕は澁谷行を見合せ、兎も角も制服の塵を拂ひ角帽の埃をはたいて、車にのつた。

吾妻橋を渡り、枕橋を渡り、右に折れて三囲町、黑板塀に見越の松の生垣は霜にうたれてやや黄ばんだ一構の別莊の門にから／＼車を挽き込むと、程なく玄關に顯はれた中川翁、今年六十二と聞いたが、小男ながら鐵鎚でうちかためた樣な骨柄、眼ざし確固として一文字に結ぶ口もと、天秤棒一本で日本の長者の五六番目に据つた男だけ、人をそらさぬ應對ぶり。「や、これは好うこそ——夙から其樣思つて居ながらついつい失敬ばかり、今日はゆつくり御話を伺ひます。何、客は貴君と外に一兩名、あとは家族の者ばかり、柄に無い風流ですが、花に對して家族の者に琴でも彈かせませう、其にはまた拙老が天狗の庭園も褒めていたゞきたいので」

成程主人翁が天狗だけ、氣の利いた江戸の宗匠が腕をふるつた庭の作りはまた格別。小梅の流を引いて中央に池を湛へ、池細りて流るゝ邊に柴橋をわたし、蓮菖蒲の頭も忍ばるゝ眺。幽邃を云へば鳥鳴いて樫實こぼるゝ邊に稲荷の祠を半隱して椿の花小開く、花やかなるは牡丹花壇薔薇の塢菊花壇七草の區其をり／＼の眺も思はれる。家にありたきとならびが岡の法師が書いた松櫻、霜黴ひした棒類合抱の楓、

東坡竹、一石一木の配置にも金目は推測られて、成程此翁の資力あつてこそと頷かれる。其間を縫うて程よく植ゑ散らした紅梅は、八重、一重、薄紅、深紅、鶯宿、内裏、枝垂、咲分の類を盡して竹に隣り、松に映り、泉水に鑑し、或は紅の雪を緑苔にこぼすも趣深く、木の間隠れの鶯の音を可愛しと愛づれば、誰が結びさげたのか女筆の短冊を冷やりとした東風のひらひら揉はすのもまた憎からぬ風情。「成程結構な」と僕も案内して行く主翁に稱讃の一句を吝み得なかつた。

紅梅林の奥に小さな四阿があつて、陶製の腰かけ三四個据ゑてある。主翁と僕と對座して、故駒井先生の事、新吾が事（新吾を中川氏に紹介した事は前に述べた。主翁は頻りに新吾を譽めて居た。彼後間もなく十萬からの資本を低利に貸したことは新吾の手紙で承知した。惜む所には一錢の金も惜んで出す所には十萬の金もどし／＼出して行く、成程左様無くては一代に千萬近くの身代は持ち出されぬ、と僕は感心したのであつた）僕が卒業後の事など話して居ると、十八九の高島田が其處に咲いて居る紅梅の樣に紅い顏をして、盃盤の設け整つた由を報じた。

客と覺しいのは、三鱗紋付羽織の四十位の商人風、痘痕だらけの三十餘の洋服紳士、外二三人、あとは何れも亭主方、羽織、洋服、高中生、小學生、小丸髷、大丸髷、島田、桃割、稚子髷、大分の人數。酒の座に下戸程困つたものはなく、滿々と注いだ盃二つ三つ前に控へて弱りきつて居ると、主翁が眼早く見て「や、これは御迷惑でした、今の若い方には御珍らしい――早くベルモットを上げないか」と救つて與れたので、僕はやつと息つき、一同に顏見らるゝて隱しに、ベルモットを舐め、刺身をつゝきして、敏君は如何して居るであらうと考へて居た。

其れから餘興の座に移つて、先刻四阿にお使者に來た彼島田の娘が琴について、主翁が得意の鉢木、此も亭主なり保證人だけ一曲は是非謹聽せねばならず、畏まつて候ふ程に足の痺を忍ぶ苦しさ、流石に手堅い家風だけ常磐津清元やつぶし島田の責苦は免れたが、主翁はいよいよ興に入つて、あれ御覽候へ、日もはや傾きて庭前の紅梅斜陽を帶ぶ姿のいみじく候ふ程に、彼をさかなにお茶一つさし上げうずるにて候と、別室に請じて、英雄の閑日月、何時の間にか習ひ覺えた千家の表、袱紗さばきの手も鮮やかに捧げ出でた一碗の濃茶のお鉢は僕へまはつて、心の中は四苦八苦、如何して飲まうか、人眞似は嫌なり、無禮も氣の毒、可、可、達人は自から法門を開く、僕も菊池流の茶の湯の開山をしようと、茶碗をむずと取つてぐつと乾し、菓子をむしや／＼と平げたので、末座の島田や桃割はくす／＼笑ひ出し、僕も思はず赤面したが、主翁は莞爾と笑つて居た。實に僕は此日の馳走ほど苦しい馳走に會つたことはない。花見の宴か、苦の宴かと云ひたい饗應が濟んで、門外に出た時は吻と息ついた。

其にしても主翁は何故突然僕を花見の宴に呼んだか。紅梅の影は眼に消え、琴謠の音は耳に絶えても、此疑團は殘つて居たが、彼日曜から五日目と云ふに、僕の疑團は忽然と氷解し、其と同時に僕は思ひ掛けない一の難問題に遭逢したのである。

（六）

觀梅の宴後程なく、僕は一夜彼宴で會つた三鱗氏に招かれて、思ひがけない相談を受けた。

僕が卒業後の方針、保累の有無を聞いた所で、三鱗は言葉をあらため、貴君の御事は故佐藤氏（即駒井先生）以來の關係もあり、ゆくゆく一臂の御力を添へたい中川の所存、何れお若い方の西洋の土もお踏みにならうし、其樣な

時はまた御遠慮なく御相談に與りたい心底、不躾ながら此方の力に及ぶ事は御腹藏なく云つていたゞきたく、其に就て近頃突然な話ながら、先日觀梅の宴に琴を弾いた彼娘（名は糸と申して、今年十八、もとは親類の娘で今は中川の養女分、今年華族女學校を卒業する筈で、容貌は御覽の通りすぐれて美しいとは申し難いが、性質は極順良で、手堅い躾を致してあるつもり、と三鱗氏は媒妁口をきいた）をゆく〱妻に貰つては下さるまいか、中川姓を名乘つていたゞけば此上も無いが、承れば一家中興の大事のお體、其樣も參るまい、兎に角あまり突然な申條と其樣お疑もあらうが、實は中川も失禮ながら夙から貴下の御人品に眼をつけ、當世の若い方には珍らしい手堅い御仁、お糸には無論過ぎた方だが成らうことならと其樣思案致してのことで、若し御承諾下さるなら此上もない仕合せ、實は中川自から御相談申上ぐる所ですが、其では却て御遠慮もあらうと、拙者から右の通り云々と、此れが所謂藪から金の棒、突然と云ひ出した。

僕は驚いた。

何れ熟考の上と言葉をつがへて其夜は別れたが、無論返答は豫め定まつて居る。白石先生ならぬ凡夫の身は、若し若し吾心がまだ或人の名を書いて無い白紙のまゝであつたなら、原憲の貧に誇ると云ふ吾も、或は（僕は或はと云ふ）心動いたかも知れぬ、少なくも返答を決するに半月其こらの猶豫を要したかも知れぬ。僕も兎に角一通りの辛酸は嘗めて、黄金の能力はよく知つて居る。日本屈指の金滿家を舅に有つの便宜は、僕と雖も知らぬでは無い。紙に書いては唯一字の「否」と云ふ語に、夥しい便宜、夥しい機會、を塗抹してしまふことを悟らぬでは無い。況んや否がいとほしと思ふ人とても、心にこそ互に許せ、公然と契約をしたでは無し、鵠沼の月夜は夢と見做して、中川家の婿の一人となつて、隨分大手をふつて歩かれることは今の日本には何でも無い事を知らぬでは無い。然しながら誘惑の來る已に晩矣、僕の心には敏君が住んで居る。美人のほまれ高い英國の某公主が、英蘭銀行を衣兜に入れ、印度全領を手提につめ込んで、一生を共にしようと云つて來られても、お氣の毒さま、と斷つて返す所を、況んや十萬二十萬の金で僕を動かさうとは、到底出來ない相談。敏君を除却した富貴は金の額縁あつて繪なきが如く、如何しても滿足が出來ない。僕は歸ると直ぐに返書を裁した。

一介書生を斯く愛顧さるゝは、眞に知己の感深き次第、無論一も二もなく有り難く御承致す所であるが、殘念ながら此儀は御斷り致さなくてはならず、破格の遇を與へらるゝ芳志に對して何も打明けて申上げるが、小生は尤も中川家の婿に不適當の男、不才不肖は更にも云はず、何方かと云へば現實界よりも寧ろ思想界に棲む小生、自から擇んで居る生涯の方針は世の所謂利達の路とは大分違つて、云はゞ縁の下の力持、功を目前に收むる業でもなければ、今日播いて明日刈る利益も有たない、假令知己の感に絆されて中川家と姻を連ねても、同家の恩義に一芥の報も出來ず、淡泊に云へば小生には節を曲ぐるの嫌あつて、中川家には利する所にあらざる者を養ふの損がある、大學にも俊秀の才有望の士は林の如く、技量から云つても、目的から云つても、恰好の人物は幾個もある、現に小生の友人の中にも此人ならば推薦したいと思ふ者もある（僕は淺井を意味した）適當の人物を措いて不適當の小生を擇まれたのは、小生にとつては光榮餘りあるも、中川家にとつては決して得策とは申されぬ、故に此御相談は十分の感謝を以て謹んで御ことわり申したい、云々と書いた。

冠は帝者にきせよ、僕は今日に到るまでも、此返書は僕が書いたか、僕の内に棲む敏君が書いたか、を判ずるに苦む者である。

折かへして三鱗氏の返書が來た。御書面の趣、篤斗中川へ申し通じた、ついては中川もますます潔白な御氣性に惚れ込み、枉げて御承引を仰ぎたく、猶決して急ぐ譯ではないによつて、かさねてゆる／＼御熟考を仰ぐ云々。

僕は非常に弱つた。小生には相契の許嫁がある、と云つてしまへば何でも無いが、僕は未だ其樣云ひ得る地位には居ないのだ。

恰も春期休暇前の學課多忙に逐はれて、「ゆるゆる熟考」を幸ひ、暫らく其事を拋棄つて居ると、中川から九州へ電氣が傳はつたと見えて、新吾が例の一寸角位の大文字の手紙を寄越した。無沙汰の詫、曾根君が猶鬱ぎながら勉强して居る事、猶意ひがけないのは故郷妻籠の從妹お芳が此回正直一途の陸軍中尉の妻となつて叔母諸共に福岡に來て居る事を報じ、偖三鱗に承れば云々の御話があるさうで、實は新吾も以前は彼お芳樣を郎君の奥樣にと思つた事もあつたし又彼松村の孃樣は容貌なら人品なら學問なら揃ひも揃つててつきり郎君の奥樣に出來て居るお方と思つて實は事のついでに先頃も其樣阿母樣へ申上げた事も有之（偖は母上に敏君の事を云つたのかと僕の胸は頻りに騷いだ）併し今度のはまた大極上々吉、箱崎八幡樣も照覧あれ、決して新吾が我田へひく水では候はず、天の與ふるものを取らざれば取る可き所を取るものにあらず（何の事だか僕には解せない、時々新吾が斯樣な無意味を書くには弱つた、併し彼が自造の人物たる所は斯樣な所にあらはれて僕には却てゆかしく思はれる）で、此は是非御承引と書いて來た。

其は猶可いが、新吾の奴め、直ぐ母へ其樣云つて遣つたと見えて、母から斯樣云つて來た。實は一寸其噂を聞いたので、今日は云つて來るか、明日は相談して來るかと待つて居たが、一向便りがないので、如何かと案じる、無論考があるであらうが、一體其娘と云ふのは如何な人か、何も仔細に知らして呉れ、妻定めは男一生の大事、此ばかりは云ふまでもないが篤斗母に相談の上でなければなりませぬ云々。

僕は最早猶豫が出來ない。忙しい中であつたが、二尋ばかりの手紙を書いて、事の顚末を詳報し、富豪と婣を結ぶの望ましからぬ理由十三ケ條を擧げ、妻定めの事については少し考へも有之、實者一寸御耳に入れて置かうかと思つたのでしたが、何しろまだ修業中の身をもちながら大早計に妻定め所では無いと控へて居りました、併し此回の樣な事が出て來て見ると何も打明けて申上げねば話が行違になり易い譯、小子の理想の妻は、普通の學問あつて身體壯健に、母上にやさしく、良人に親切に、心に品あつて、身に貧を厭はぬ女、譬へて申さうなら彼松村の妹お敏（僕は書きながらかつと手紙の上に赤面した）の樣な風なのが宜しいかと思ひます、勿論何も母上の御心次第ですが――と書いた。

何や角やに取紛れて、澁谷の方へも暫らく無沙汰をして居たが、母へ手紙を出した其夜、松村の野田からはがきが來て、近來顏を見せぬのは病氣ぢやないか、偖國許の母（新に非ず、と云ふ括弧註が入つて居た）も僕等の新世帶檢分かた／＼、妹の卒業式も最早二三日内に迫つて居るので、迎へかた／＼昨夕到着した、ことづかり物もあり、話もあり、此日曜には是非來て呉れと書いてあつた。

（七）

恰も春期休暇となつたので、一日繰上げ、土曜の午後澁谷に行つて見ると、鈴江君唯一人椽緣の障子を開けて珍らしく裁縫して居る。清磨

君はと聞〻と、母と妹を連れて石川から中島へ行つたと云ふ。期した事だが、やゝ拍子拔の氣味であつた。

婢の銀が茶を持出でゝ暫らく無駄口をきく。休暇になつたのに彼A女史B女史甲君乙君が一人も影を見せぬは如何したものと尋ねると、銀が、「お國のお母樣がいらつしてから頓斗皆樣のお出がございません」と笑ひながら勝手へ立つた。はて飛んだ案山子もあつたものだ。

「愼太郎君、貴君何が好いこと？　お蕎麥？　天麩羅？」と例の鈴江君が馳走主義をやつと押止め、僕等は暫らく國許の噂、鈴江君が卒業すればお敏君も卒業する、此夏は僕も卒業する、此年は卒業年であると云ふ噂をして、[illegible]君等の歸りが遲いとすれば明日また出直して來ようかと中腰になると、鈴江君が引とめた。

「何故？　宜いではありませんか。色々御話があるわ」

「話て何です？」

「貴君が吃驚しなさる話よ」

「何？」

「當てゝ御覽なさい」

「何です、面倒臭い」

「吃驚しなすつてはいけませんよ。お敏さんの結婚問題が起つたのですわ」

「馬鹿な」

「本當に」

「鈴江君も奥樣になつて大分口が惡くなつたですな」

「あら、本當に、本當ですよ」

鈴江君の眞面目な顏見て、僕ははつと思つた。或は恐る、狂人の其に近くはなかつたか。

「一體如何したんです？」と叫んだ僕の聲音は、

「だから吃驚しちや否ですよと斷つたのだわ。其話は斯樣なんですよ」

と逐一[illegible]ず鈴江君が物語る次第を聞けば、吾敏君を望んで行かうとする[illegible]に、松村家の故郷の選擧區から選出された新代議士、菅谷恵郞と云つて、三十三歲の立派な鰥男、資産名望學問も相應にあつて國權黨の一員、つい昨年の選擧前に細君に死別れた二度目の新郞、去年の夏選擧あがりの御禮廻りに（清磨君の義兄が何角と盡力したので）松村家に立寄り、偕歸省して居た敏君を見染め、敏君兄妹が歸京した後で、徐々談判を始めたのを、まだ修行中と斷つて置いたが、此頃最早追付卒業と聞いてまた〳〵是非にと云ひ込んで來たさうな。

「其れに周旋人が可笑しいわ。貴君覺えて居なさるの、ね、ほら、ずつと昔、内で、貴君が喧嘩しなすつたでせう、ね、井戸端で、ほら、笠松——」

「彼三次郎が？」

「否、三次郎さんぢやないの、彼母さんよ、忌な人！」

「左樣！」

内眦するが、僕は此時心に殺人罪を犯した。今此處に其人が居るなら、刺違へても死にたい笠松後家！

「其樣して如何返事したんです？」

「其れからね、何せ阿母、清磨のですよ、阿母が上るから、わたし達にも本人にも相談した上で、兎も角も御挨拶をするつて、其樣云つてあるのですと」

「左樣！——而して阿母、お敏君の阿母は如何な意見です？」

「阿母にね、先方が少し年が多いし、加之二度目だからつて、其樣云つてお出ですがね、併し先方も子供があるではなし、兎に角立派な人ですから、敏さんの意向次第では——加之、謹次さんが代議士を緣家に持てば何角に都合が宜いからつて大變にすゝんで居なさるのですと。阿母も謹次さんには何角につけて遠慮があるのですか

ら、其れで――」
嘖々、復一人刺違へたい男が出來た。
「左樣？――而して阿爺は（お年君の）？」
「阿爺はあまりお年さんを手放したくない樣子ですわ」
「清磨君は？」
「良人も、まだ年は少いし、其樣急ぐことはない――」
其れつきり？　僕の胸は沸え立つた。
「其れぢや松村――清磨君も代議士黨ですね」
「あら、其樣ぢやありませんわ。だから貴君に手――」
「其樣ですか、其はお目出度いですな――ぢや阿母が連れて歸り次第目出度く結婚があるのですな」
「あら其樣ぢやないわ。お年君は――」
「お年君は如何したんです？」
「お年君は最早少し東京に居て、英語が勉強したい――」
「でも最早高等女學校を卒業すれば、立派な衆議院議員の令夫人ぢやないか。愚圖々々せずと早く歸つて結婚してしまふが宜い」
「其樣に憤んなさるものぢやないわ」
「否、些も憤つちや居ない、誰が憤るものか。だから目出度いて云ふのです。――僕は最早歸――」
「お待ち――お待ちなさいよ。貴君は些も此方の話け聞きなさらないのだもの。
「いくら聞いたつて、目出度い事に目出度いのです。目出度いから目出度いと云つとるのです。
「ま、お待ちなさいよ。わたくしだつて――」
馬鹿々々しい」
「其樣な事はないわ」
「皆代議士黨だ！」
「あるからあると云ふんです！」
「まあ、何も其樣に怒ることはないわ。安心していらつしやいよ。わたくし達が居るぢやありませんか。大船に乘つた氣でいらつしやいよ」
大船もよく出來た。あなたのは大船ぢやない、狸の土舟だ、當になるものか、と云はうとして、口を噤んだ。
口は噤んだが、胸は宛ながら鼎の如くに沸きかへる。
あゝ此月は何と云ふ惡月だらう。僕の方に思ひがけない故障が出るかと思へば、年君の方にも此樣な事が生ずる。此樣な事なら去年の夏、打つけに清磨君に口をかけて置けば宜かつた、全體清磨君夫婦が氣が利かぬ――と腹を立つても、最早已に晩矣。

（八）

鈴江君は朝鮮飴を切つたり、甘い葡萄酒を出したり、色々慰めて吳れたが、僕の興味は最早灰の如くなつてしまつた。
如何したら宜からうか。
「些も其樣に心配なさることはないわ。何も猶向方の話がきまつたと云ふではなし、此方から求婚したら宜いではありませんか」と鈴江君が眞面目に持ち出した。
「併し僕は代議士ぢやないから」
「あら其樣に怒つてばつかり居たつて仕方が無いわ――お敏さんを下さいと云つたら宜いではありませんか」
「でも僕には乞食の眞似は出來ない」
「ま、其樣な事――お敏さんの心底はわたくしよウく知つてますよ。否、本當よ、お敏君は如何しても菊池夫人ですわ」
「其樣でせう、其れだから代議士に嫁くが宜いです」
「最早代議士々々つてよして頂戴よ、お敏さんが聞きなすつたら乾度怒つて泣きなさるわ」
「御勝手にお泣きでもお笑ひでもなさるが宜いです、僕の知つた事ぢやなし」

「まあ此方の話を聞いて頂戴よ、わたくしだつて見も知らない人にお敏さんをやりたくもなければ、見も知らぬ人を貴君の夫人に來て貰ひたくもないぢやありませんか、貴君の心底もお敏君の心情もわたくし最早ずつと以前からよウく知つてますよ、だから清磨とも始終其事ばかり話して居るのですわ、だからあなたと相談の上で阿母（清磨のですよ）にも打明けて、何する積りで、其れで彼手紙をあげたのですわ」

「だつて僕は母の意向さへ知らんぢやありませんか」

「國許の阿母なら大丈夫よ。否、本當よ、去年歸つた時も阿母は大變にお敏さんをほめて居なすつたわ、而して色々お敏さんの事をわたくしに聞きなすつてよ。屹度お敏さんをあなたに欲しがつて居なさるのだわ」

「いくら欲しがつて居なすつたつて——あゝ最早いやだ〳〵、彼方も縁談、此方も縁談、縁談は最早あき〳〵だ」

「おや、何か別に縁談がありますの？」と鈴江君が不審の耳を立てる。

秘す可き理由も無いので、僕は中川の事を仔細に話した、鈴江君は驚いた容子。

「而して貴君は何返事なすつて？」

「無論斷つちまつたです」

「まあ、——お敏さんの身になつたら如何様に嬉しいでせう、其ばかりでも屹度出來るわ」

「併し僕は其様な報恩的結婚は嫌です」

「ま、貴君今日は如何なすつたの、まるでものが云へやしないわ」

と少しあへて、兎に角今度は好い機會だから、內相談だけでも取りきめる事にして、阿母（清磨君の）の方へ鈴江君夫妻と中島叔母と内外から攻落し、國許の方は愈母（僕の）の意向を確めた上で鈴江君の阿母に談判を委任し、總攻撃で是非共成就さする事にしようと述べ、

「大丈夫ですよ。第一お敏さんが彼心底ですもの——安心して居なさるが宜いわ。何ですつて？ 女はあてにならんのですつて？ 其様な失敬な事を、あなたまだ些も御存じないのね、女でも思ひ込んだら男なんかに負けやしないわ、男なりも餘程執拗ですわ、だから幽靈でも女の方が餘計出るわ」

鈴江君が眞面目くさつて此様な事を云ひ出したので、僕も思はず笑ひ出した。

「やつと御機嫌が直つたのね」と鈴江君も溜息つき〳〵笑つた。

其れから鈴江君はお銀を呼んで到頭鰻飯の馳走をした。先刻からの話が思はず聲高であつたので、彼お銀め確かに一伍一什を聞いて居たに違ひないと、僕は少しきまりが惡かつたが、其處は怜悧の江戸女、少しも其様な風を見せず、色々可笑しい事を云つては僕等を笑はした。鈴江君も松村老人が[illegible]を[illegible]らしく持つて來たのを、「わしが家には其様云ふものは大嫌、無用々々、持つて歸らつしやい」と劍突喰はした可笑味、老人が澁谷代議士の事を、[illegible]ばつかり御立派で」と冷笑した話、それから今度清磨君の母君が着いた其夕、鈴江君が御馳走ぶりに自から飯を焚いた所が、つい火をひき損つて眞黒焦の飯が出來、幸ひお銀が吾身の咎にかぶつて呉れたが、非常にきまり惡かつた事を自白し、

「彼時は本當に困つたわ、わたしだつて食べられないのだもの」

「でも旦那様が召し上つて下すつて宜うございましたこと」とお銀が笑ふ。

「はゝゝ清磨君は感心だ——併し細君が焚いたとなると焦飯にでも隨喜の涙をこぼさなくちやならんでは、人生良人たるも亦難矣ですね」

果ては一同大笑ひして、僕は日のくれ〳〵に清磨君の宅を辭した。

（九）

其翌日から僕は草鞋脚絆で五日ばかり千葉成田の方へ膝栗毛を乗り出し、月末に歸つて見ると、中島叔母のはがきが二通に、清磨君の手紙が二通、名刺が一葉、外に中川家から一通、三鱗から一通、何れも召喚狀が來て居る。

先づ中島叔母の召喚に應じて延引ながら出頭して見ると、叔母は待ち受けて直ちに一通の電報を見せた。母から中島へ來たのである。「マツムラヲトシサンヲ、シンタロウノサイニモライタク、パンジタノム、イサイユフビン」察する所、母は僕の彼書狀を見るや否、手紙はまどろかし、敏君の母君が東京に居る間にと、電報を飛ばしたのであらう。人を射るには先づ馬を射よ、娘を獲るには先づ母を攻むるが一の手である。

時として母を懷はぬことは無いが、事ある毎にいよ〳〵母のありがたさを感ずる。今日の場合の如きは即ち其尤も著しい一である。吾母ながら、如何して斯うはき〳〵して居るであらう——と僕は且嬉しく且恥かしく思つた。

「阿母が斯樣捌けた人だから、此方も負けぬ氣になつて、卿の留守に最早あらかた形をつけて置いたのです」と中島叔母は詳らかに事の次第を物語つた。即ち叔母が清磨君夫婦と熟議の上、僕を待たずして敏君の母君に談判を開始した事。敏君は母の問に應じて些の躊躇もなく承諾の明答を與へた事。敏君の母も一時は色々困難を唱へ、一方には僕が非常に好い立身の機會を拋つを惜む（中川の件を聞いたので）と同時に、一方にはまた敏君が一躍して代議士夫人となるの機會を見す〳〵逸するを惜み、何も其樣わざ〳〵立身の機會を棄てずもの事と云つて居たが、何を云つても多勢に無勢、殊に本尊の敏君が明らかに決心の程を示して居るし、中島叔母が此時こそ母への禮どころ敏君の母御を呼んで馳走して話した上でまた此方から澁谷まで一回ならず押かけて行つての正面攻擊、清磨君夫妻の起きても寢ても承諾を得る迄は已めぬと云ふ背面攻擊、其には四方より攻め立てられて敏君の母御が逃げ込む石川家の夫人までが果して一臂の力を攻擊軍に假して攻め立てたので、流石敏君の母御も我を折り、義理ある謹次へ氣の毒ではあれど娘の幸福や愼太郎君の切なるお心や皆樣の御親切にはかへられず、愼太郎君の身が固まつた上では、わたくし別に異存は無く、隨分と隱居（松村老人）や義理ある倅にも說いて、と先づは立派な承諾を獲た事 其については敏君も實は修行の爲め此まゝ東京に滯つて居たい樣子なれど、兎に角今回は母御と共に歸るがよからうとの事で、潔く敏君も承諾した事。中島叔母から此方の都合は上首尾と云ふ電報を僕の母へやつた事を話し、頗る愉快な容子であつた。

實に三日見ぬ間の花ざかり、鈴江君と前回の談をして歸つた其足がまた中島家の門を入るまでの間に、斯く事が迅速に運ばうとは實に意外であつた。猶別るゝに臨み、叔母は敏君母子も不日歸國の途に上るについては、明後日あたり打揃つて花見の趣向がある筈故、卿も是非來て下さらなくてはならず、今度逃げたり隱れたりしなさるなら、最早お敏さんはわたしが貰つてしまつて、卿にはあげない、と冗談まじりに念を押した。

哲學の眞理の美の人生のと大學では大分むづかしい問題をも云々して、可なり大きくなつて居るつもりの菊池君も、斯樣な問題にかけては、まるで三歲兒の樣にあやなされ、腹も立てば、嬉しくもある、何處を搔いて宜いか分からぬが、兎に角何處かがむず痒い心地。

敏君は可いとしても、未來の義母の眼にまづく見ゆるも殘念と、花見の前日から僕は行李を

虚にし破れ鏡に向つて服装及態度の研究をしたが、矢張正直は最良の政略で、質素は粧飾の極意と云ふことをやつと悟つたので、當日は例の通り角帽に制服ステッキと云ふ装で、さも平氣らしく、かねて落合所と定められた中島家に赴いた。

（十）

僕、敏君親子、清麿君夫婦、中島叔母中島夫人及不二男君、石川夫人及露孃、婢一人、總勢で十一人、早めに午餐を濟して上野から淺草、其れから竹屋の渡を渡つて向島へ押出した。薄曇りの月曜日、人出の少ないのが至極の好都合。

敏君の母御に四年ぶりに會つて此方から挨拶し彼方から顏見らるゝ時のきまり惡さ、少し見ぬ間に敏君が大分面痩せて見ゆるいぢらしさ、中島叔母と石川夫人を饒舌の二幅對、敏君と僕を沈默の二幅對にして、花に埋るゝ長堤をねり行く時の感、此等は暫らく宥くとしても、僕は歸途の一小事件を漏らす譯には行かぬ。

僕等一行が已に木母寺まで行つて、歸途中の植半で早夕飯を濟まし、（今日は又々松源の二の舞をやつた）ぶら〱言問の渡の邊まで來ると、遊人は皆歸る時刻を何事ぞ悠々と此れから散歩がてらの花見と云ひ顏に此方へと來る女連を、近くまゝに見れば、南無三、人もあらうに中川の老夫人、外二人の女伴は識らぬが、島田はまがふ方なき彼お糸とか云ふ娘。しまつたと思つても一筋道、容赦なく双方の足は進んで、はたと行逢ふ。僕は是非なく列を離れて、中川夫人に挨拶した。

世馴れた老夫人の如才なく、「おや、菊池君、彼時から些もお顏をお見せなさらんから、如何していらつしやるかと思つて居ました。今日はお花見？ ―ついお目にかゝりませんが、御親類樣でいらつしやいますか」と眼は十一人を隈なく見渡す。中にも敏君をしげ〱見る樣であつた。

中島叔母が此時つと進んで、「愼さん、貴方は？ ―あゝ左樣ですか、此れは初めてお目にかゝります、中島と申して此甥が叔母でございます、かね〱お世話になつて、ついまだお禮も申しませず ―」

と四邊構はぬ大音に挨拶をして居る。彼お糸とか云ふ娘は顏を朱の如く紅くして頻りに此方 ―殊にお敏君を見て居る。お敏君もさつと顏を紅くして彼娘を見て居る。彼方の二人の女伴も此方を見ては、引下がつて何か小聲に囁いて居る。

「如何ですか、菊池樣、何もお構ひは申しませんが、お茶一つ、何せお歸途ですから、なにわたくし共は最早歸らうと致して居たのですから ―」

中川夫人が勸めるので、僕は弱りきつて居ると、よせば宜いに、中島叔母が折角あゝ仰有つて下さるから、では一寸お邪魔をしませうかと引受けてしまつた。僕はます〱弱る。

中川夫人が何かさゝやいたので お糸孃は眞紅になつて一禮し、他の二人と急ぎ足に土堤を左手に下りてしまつた。生面者の伴が殖えたので、不二男君や露坊までが靜かになつて、一行言葉少に刻み足で小梅の別莊に行つたのは、最早誰彼時、晝間の雲はさらりと消えて、夕月の光薄ら地に落ちて來た。座敷には電燈をつけて、人數だけ絹座蒲團を敷き、火鉢まで整然として、彼娘が恭しく一行を迎へた。車にでも乘つて急いで歸つたものと見える。

一月の間に、梅の代は過ぎて、池畔の老櫻雪の如く咲いて居る。風のすうと渡る毎に、月影の散るかと見えてほろ〱と花の池水にこぼるる風情、は宛ながらの歌である。併し僕は唯もう鍼のむしろに坐る樣に冷々して居た。敏君も頻りに落つかぬ容子。彼お糸とか云ふ娘も、茶

をくみ、其をすゝむる間も、頻りに敏君を見つめて、此れも心懸ける樣子。呑氣なのは佐江君夫婦に石川の夫人、敏君の母御は頻りに電燈を見、座敷の裝飾を見、庭の構の壯麗を見、彼お糸嬢を見ては、默つて考へて居る。話は中島叔母と中川夫人の間に專ら行はれて居た。

やがて中川夫人は一寸お談があるからと、中島叔母を別室に請じたので、あとはます〱てれて、僕等はいよ〱かたくなり、果ては此體の筋が張り切れはせまいかと心配する程であつたが、流石に如才ない江戸兒の石川夫人が何角と口輕くばつをあはせて、彼お糸とか云ふ嬢と四方山の問答して居たので、幾何か苦艱を免れ、其れから叔母が出て來るを機會に、一同謝禮を述べて立上つた。

先の花見でも苦しみ、今の花見でも苦しむ、世に花見ほど辛いものは無い、と僕は逃げる樣に眞先に別莊を出てからつく〲花見が嫌になつた。併し此回の花見は少なくも僕に二個の利益を與へた。一は敏君の母御の胸中に、僕が敏君の爲めには如何なる利益も拋棄して顧みぬと云ふ感を意外に深く印象したのと、今一つは此れが爲めにすつぱりと中川の方の係累を免れたのである。別るゝ際に中島叔母は僕を招いて耳に口よせ、二間さきの者に聞ゆる位の小聲で、

「愼さん、少し荒療治だつたけれど、中川の方はわたしがすつぱりとやつたよ、何有、先方もはやいもので、愼君を見ると直ぐ感づいた容子だつた。何しろ一方は切れて、一方は繫がる、今日は目出度い花見だつた。此れでわたしもゆつくり寢られる。愼さんも今夜は高鼾でおやすみなさい」

（十一）

中島叔母の所謂手荒な療治で、中川の方がすつぱり手切になつた翌々日、敏君母子は無事歸國の途に上つたが、五月の五日と云ふに母の手紙が來て、談判首尾よく結了し、敏君はいよ〱菊池信太郎の妻と定まつた事を報じて來た。此れについては、松村老人を說き、蕩兒の謹次氏を宥むるなど、定めて一方ならぬ手が入つた事であらうし、また彼大谷代議士や周旋人の小松後家の方でも隨分激烈な對抗運動があつた事であらうと思はれるが、三百餘里を隔てた僕には母の苦心伯母の骨折れ君の母御の肝煎も大方は想像で、瞭然と眼に見たのは唯松村敏君が遠からず菊池敏子となると云ふ吉祥文字であつた。

實に明治卅四年と云ふ年は、僕にとつてなつかしい嬉しい年だ。其五月の節句に敏君の事もいよ〱定まつたと云ふ確報に接し、其七月の五日に僕は母を新橋停車場に迎へた。實は此方から歸省する筈であつたのを、母はまだ東京の土を踏まぬので、一には僕が卒業式にも列し、二には東京も見物し、三にはまた歸省の往來に無駄ひまを費すよりも其間に身を固むるが大事と云ふ意見なので都合よくば僕が最初の家持を世話する爲め、國許の家に忠實な婢に留守をさして、倍上京したのである。中島叔母や、弟江治夫婦の切なる招はあつたが、母は寧ろ下宿の氣樂を撰んだので、荷物は中島に預けて、舊い馴染の彼本郷湯島の下宿屋松谷の二階の六疊を母の本陣と定めた。

僕は最早此前後の事に關して逐うて書くに堪へない。書く事が無いではない、あり過ぎて困るのである。併しながら其中尤も著しく今まで僕の眼裏に殘つて居る幻象を擧ぐれば、新橋停車場の電燈の光で足かけ五年ぶりに見た母の笑顔、（五年の歲月はやゝ母を老いしめぬまでも若くさせた樣に思はれた、子を以て母を議するでは無いが、若し僕の眼誤らずば、母は確かに年と共に圭角を磨し去り、何處か綽然とした風を帶びて來た、一は年、一は基督教を奉じた結果ではあるまいか）七月十日の卒業證書授與式

に僕が卒業生總代として謝辭を述べ席に復する時參觀者席に喜と涙を拭いて居た母の姿、大きかつたのは送別留別の騷ぎ、小さかつたのは新聞の大學卒業生姓名の中に六號文字で出た自身の姓名、きまり惡かつたのは母と同道して保證人中川氏に禮に行つた時、（彼事件後僕は彼保證の進退伺でも出す筈であつたが、一向彼件を意に介した風も見せぬ中川氏の大腹中に恥ぢて、其まゝにして居たのである）涙に咽んだのは母と打連れて谷中に恩師駒井先生の墓に詣でた時、愉快は中島叔母や鈴江君夫妻に招かれた母の歡迎なり僕が卒業祝なりの小宴、更に愉快は赤門に最後の別を告げて（僕は大學院には入らない事にしたので）がらくたを人力車二臺に積んで母の下宿に行つた時であつた。彼下宿も三年の間に、客は大分變つて、失脚落來を朗吟した連中も最早立脚地を得て去り、例の神經を質へにしようとして失敗した某氏も何處へか失せ、唯嫁の貞を始終懷中して居ると云ふ彼醫學生ばかり每年々々開業試驗に落第して依然逗留して居たが、僕は眞に嫁とか云ふ人の爲め眞實其失敗を悲しみ其成功を祈つたのであつた。客は變つたが、相變らず人の好い主人、僕の卒業を喜んで呉れて、此れで手前共から學士が三人お出になりましたと誇り、心ばかりのお祝と稱して神酒を持ち出したまでは宜かつたが、僕等が飲まぬかはりに倍ひたもの手酌で傾け、果ては客よりも肝腎の主人が醉つて散々に管をまき、僕がおかたいいい方である事を繰りかへし繰りかへし母に保證するには弱つた。幸に拉與の政子夫人が出て來て、亭主を叱り／＼引き立てて行つたので、やつと息をついたが、併し悠々行路の心ばかりの東京に、些酒臭くとも斯樣な溫かい心は珍らしいものの一かも知れぬ。

數年前下の三疊に新聞配達から歸つて草臥れ果てた體を横へた時とに違つて、同じ下宿でも一階上つて今は母の數も倍、自分こそ片腹痛くも思ふ肩書の文學士も思はぬ所に利き目があつて主人は無論主婦の待遇疎かならず、朝涼夕涼の散步にも母と打連れて五年養場きて老母を省し得ぬと云ふ同宿の書生に羨まれ（散步には何時も大分時間を費した、其は古道具屋を過ぐる毎に、母は長火鉢とか、鉄瓶とかに眼をつけては値ぶみして見るので）夜は新を語り舊を話してしば／＼夏の夜の更くるを忘れ、餘程小聲に話す積りでも、時には隣室に立つ人の咳拂を聞いて、盡きぬ話を其まゝに明日に讓つて默つてしまふこともあつた。

東京の夏を愉快な季節とは、後にも先にも此夏の感であつた。

（十二）

望んで居た三年の月日も、顧れば、唯一片の夢の間に過ぎて、昨日かぶり初めたと思へば今日は早や角帽を脫いで文學士も氣耻かしい。何ぞや唯三年の課程を踏んで、幾冊の筆記を搾へて、云はゞ手をとつて教へられたいろはのいの字、一字に書いたればとて、かくて人眞似、恥を知る身の吾は飢も出來る譯では無いのである。されば赤門に立つて小手を前途に翳した僕は、今太郎が家を出て金剛杖つき立てゝ頭上の峰を睨む登山の客にも似たらうか。今までは多人數がや／＼の遊山、草鞋の踏試し、此れからが眞の登山、特立獨行獨で汗をたらして獨りで上らなくてはならぬ。唯喜ぶ可きに、學は登山の二步は一步より眼界廣く、道は難くも樂もまたのぼるほど深うなつて、滴り落つる苦汗に其を洗さぬ人の到底知り得ない箇中の甘味が滿ちてあることだ。

兎に角僕は帝國大學の三年を終へて、社會大學の第一年級に入つたのである。偖此れからは如何云ふ道をとつて進まうか。人間は振り出しが尤も大事、首途に踏み損ふと、生涯まごま

ごするもの。僕も身の振方には大分思案を凝らしたのであつた。

恐秀才の優等のと學窓の虚名を博した結果、思はぬ手蔓が幾條かふりかゝつて來た中で、一寸首を捻つたのは洋行の相談と、一は仙臺に居らるゝ菅先生の手紙であつた。恰も卒業式の二ケ月ばかり以前の事であつたが、大學の教授で文部省の左る要職を占むる某氏が、或日僕を呼んで、馳走した上歸朝後文部に奉職する條件つきで僕に海外留學の香餌をあてがつた。洋行は惜くないが、僕は某氏が學問以外に文部省に自己の勢力を扶植するに汲々たるを知つて居たので、官金を以て私恩を賣る擧動には何分にも感服出來かね、他人の爪牙となつて搏噬の御用に立つのもあまり不見識な話と、忽ちに斷つてしまつた。菅先生のは其と違つて、休養かたがた暫らく二高の英文教授に來ないか、校長にも内々推薦して置いた位で、君さへ諾すれば其筋の都合は如何でもつくと云つてやられたのである。併し僕の考では、こゝ五六年は如何しても東京に留まつて居た方が、何角の都合に宜いと思つたので、(母も此點は至極同意であつた)先生の厚意を辭謝し、其他一二地方からかゝつた口は(一は兼両氏の周旋で愛媛縣の中學校からの)はしばらく見合はせて、已むなく下宿に藷を嚙つて賣文の生活をする積りで居る内、明治評論主筆の安藤氏の手から恰好の位置が見つかつた。其は城北の某私立學校に一週十時間英文學史の初歩を擔當することとなつたのである。無論私立の事ではあるし、今大學を飛び出した新參の講師、報酬が多くないのは當然の次第、またあまり出世とも云はれぬが、其かはり職務以外に何等の牽制も受けぬ事と、英文學も極の初歩であれば格別僕に骨も折れず、學生には相當の滿足を與へて此方には比較的に時間の餘裕を享けるが、何よりの好都合。僕は母と相談の上早速應諾していよ〳〵九月から出勤する事に約定した。

僕が職掌も已に定まつたについては、下宿住居も不便利不經濟であるし、何處か學校にあまり遠からぬ家をと、母と二人で毎日牛込を歩いて、市ケ谷仲町に家賃五圓の小綺麗な家を見出した。杉籬を繞らした一構へ、廣くはないが庭に松櫻梅などもあり、八疊六疊二疊の玄關二の姉部屋、其れに母屋から鍵の手に折れて四疊半の茶室がかつた部屋があり、僕の書齋にもなれば、母の部屋にも持つて來いである。總じて南向きの建方で、夏は涼しく、冬暖かく、臺所の北向は疵だが、其かはり井水は和らかで好い水だ、と此は母の鑑定。表は巷路、東隣は士官學校に勤むる教官とか、西隣は何處かの樂隱居、煩はしい事も無いので、早速取きめ、八月下旬松谷の下宿を引拂つて此處に移り、中島家に預けてあつた荷物をとり寄せ、門に菊池愼太郎の札をかけ、兩隣に引越蕎麥をくばり、こゝに母と二人の生活を始めた。

假りにも、吾が家と名のつく家に母と住むのは、故鄕を出でて以來今が初めて、指を折れば實に十三年ぶりである。

僕は九月の中旬から、毎日袴を着けて、足駄を踏み鳴らして、學校に出勤し、暇々には明治評論に筆を執り、讀書研究に忙しくて、唯時時水を汲んだり、跣足になつて庭の草をむしる位なもの、家事は一切母の手一つで行はれた。母も旅での家持、世帶道具揃ふる丈でも中々の世話、(中島家や鈴江君等が頻りに加勢を申込んだが、掃除と買物は如何しても自身でしなければ滿足せぬ母の性分、其も其筈母は塵埃汚穢を仇敵の如く憎み、また火箸一具求むるにも吟味して少し値は高くも持の宜いのを〳〵と求めたので)大膳職、掃部の務、外務の應對、其隙には押入から疊紙を取り出してはせつせと裁縫

をして居る。「阿母、最早およしなさい」と云つても、母は「何有、此位は何でもありません」と云つて居る。婢を雇ひませうと迫つても、まゝ、お待ちなさい、其内にと云つて居る。僕も教場では隨分新學士の威嚴を保つて、無い髭を引張つて見たり、澄ましたものだが、歸ると袴をとつて、「阿母、何かありませんか」とは吾れながら恐ろしい若返り樣。併し母は叱りもせず、手づから茶を入れて、拵へて置いた薩摩煎を蠅入らずから出して、母子相對して無駄話しながらの味は實に云ひ難い程であつた。時たま清磨君が來て見ては、「君の家は非常に立派だなあ、吾輩の家は、家が狹いか、道具が多いか知らないが、始終居所もない位だ」と感嘆して居た。

實は僕は此頃程幸福な日を送つた事は無い。斯樣にして母と住むならば百年も一日の如く過ぎるであらうと思つた。併しながら僕等が唯二人住む時も最早長くはない、僕が身生の一變動は今や刻々迫つて來たのである。

（十三）

今年の櫻花季節に業を卒へて歸國した以來、敏君の消息は重に清磨君夫妻の手から傳はつた。其後母の上京で、更に詳細な事情が知れ、また母の上京後も、野田伯母や敏君の母御と吾母の間に始終文通があつて、彼方の樣子は略知れるのであつた。併しながら其消息の何れの手から傳はるを問はず、敏君に關する報道は渾て滿足す可きものばかり。一度の病氣もいたし申さず、針仕事や臺所の事に日々出精致し居り、近頃は臺所（隱宅のであらう）にわたくしの足をいれさせ申さず、と母なる人が報ずれば、野田伯母もまた敏君が何處にも評判よく、彼樣あつてこそ東京遊學の甲斐もある、見上げた者、と近所の噂とり〴〵である事を報ずる。敏君の談が出れば、母は毎も、「怜悧で、やさしくて、而して心に張があつて――先づわたしが今迄見た娘の中に彼位氣に入つたのは無い」と其樣譽めた。信ずる者に愛する者を譽められるのは、朝日に玉を翳して見る樣なもの――光は倍するのである。

僕は滿足した。無論二人の間には文通もなく、（尤も唯一度、母御が病氣でもあつたと見えて、代筆の書狀が來たことがある。美しい假名の書きぶり、まだ何處かに芽出し柳の若々しい嫋やかな所があつて、確かにお敏君の手蹟とは知られた。其中に、愼太郎樣に宜敷と、書いてあつたが、母御の名前ではあれど、書いた人の心情が見えて、なつかしさもまた一層であつた）何事も間接のまどろかしく、若し此が鵠沼以前であつたなら、片時もぢつとして居られぬ所であるが、最早互の心も知れ、前途も確かに定まつた以上は、何を左樣悶ゆることも、急くこともないのである。

併しながら母を初め清磨君夫妻、野田伯母、中島叔母、また松村の母御の間に、何時か結婚問題の氣脈は通じて、或日突然母は僕に結婚式を年内に擧げては如何かと云ふ相談を持ち出した。

僕は躊躇した。何となれば、僕は當年かぞへ齡の廿四、敏君は十八、何方かと云へば早婚である。加之僕も此夏大學を出て、つい先月から專門學校の新參教師になつたばかり、位置もなければ、財産も無い、まだ眞の一寒書生を、――結婚などとは實際早過ぎる。せめて今少し身も立ち、名も揚り、産も出來、兎に角世間普通の門戸を張つてからの事にしたいもの。せめて敏君に縮緬の三枚襲繻珍の丸帶位は心易う贈つて、來早々敏君の彼可愛らしい手に皸あかぎれは知らさぬ樣にしたいもの。西洋では約婚の時期に往々二年三年五年十年の久しきにも渉ることがある。今一年位は此まゝで――と僕は逡巡した。

併し母の意見は夙に定まつて居た。成程西洋

では其樣な事もあらうが、日本の事情では、其約婚とかをあまり延ばすのはよくない、加之何も結婚が人の最後ではなし、云はゞ眞の土臺の据ゑはじめ、廿四を早いとは云はれぬ、成程身も立ち名も揚つての結婚は望ましいが、土臺から夫婦で築き起した家はまた格別の興味がつくもの、氣心を知り合つた仲では何も其樣見栄を張るにも及ばぬこと、枉げて此事は阿母に任せて下さい、と僕を退引ならぬ地位に置いた。

何時とはなく四邊が妙に紛々し出すと共に、僕の身邊に一種香しい靄が立てこめた。譬へば旅人が遙かに霞こめたる一區の山水を眺めて、未だ遠い〳〵と思つて居る中に、足は進み、景は寄つて、何時ともなく霞の中を歩いて居ると同じく、結婚々々と何か遠い事の樣に思つて居た結婚も間近に迫つて、不圖氣づけば溫かな香しい靄が朦朧と身を包んだのである。

僕の生涯は少しも變らない。朝早く起きる。母の手助けに雨戸を明ける。水を汲む。學課の豫習（教師としての）をする。足駄を鳴らして早稻田へ通ふ。歸る。讀書する。明治評論の原稿を書く。散歩する。或は明治評論社へも行く。清磨君も尋ねる。大學から遊びに來る淺井や二三の知己と談ずる。或は圖書館へ大學も上野のもに買物に行く。日々の行動は少しも變らぬ。併し四邊の光景は、秋ながら春めかかけて居る。斯樣な時にはいよ〳〵落ついて、澄まして、儼然として、冷澹にして、平氣にして居なければならぬと思つて、隨分と自己を保つて居た積りであつたが、或は恐る、其は醉つた人の醉はぬ〳〵に酷似しては居なかつたか。

何だか夢の樣だ。

否、夢では無い、儼然とした事實である。母が今迄よりも一倍忙しくなつた。松村家や野田伯母から頻りに手紙が來る。母が頻りに手紙を書く。清磨君や中島叔母がたび〳〵やつて來て、僕を除外物にして何か母と頻りに相談して居る。然だ。夢でもなければ、嘘でもない、僕と敏君の結婚は最早旬日の間に迫つたのである。

（十四）

秋雨季節が過ぎて、秋霽玉の如き季節は始まつた。蝸牛の歩捗取らぬ樣にもあれば、電光石火のあまり短かい樣にも思はるゝ一日又一日は次第に過ぎて、「今日立つ」と云ふ電報が國許から屆いた五日目、十月の廿五日に松村隱居夫妻が敏君を連れて、澁谷の清磨君宅に着いた、と云ふ報知があつた。僕が身邊の霞はまた一段の濃を加へる。

松村老人夫妻が僕の留守に訪問に來る、母が答禮の訪問に行く。廿七日には、媒妁役の中島隱居が、今日は謠をやめ、小鼓をさし置いて、羽織袴で、結納を澁谷に齎らす。（愼さん、結納には何か實用になる樣なものをやりたいが、何にしようか、と母が云ふので、家政學の本でもやりませうか、と眞面目に云つたら、何ですね、其樣な事を、と母に笑つて到頭帶にした、白茶地に白菊を織出した繻珍の）廿八日には、清磨君が鹿爪らしく羽織袴で、禮物を持つて來る。（魚子地が一反、綾織が一反外に品々）式の日取が定まる。十一月三日、天長節の吉日。場處は狹くも牛込の自宅で、客は水入らずの誰々彼々と定まる。僕も相談の席に列するが、所謂員に備はるばかり——大抵の事は母と清磨君、中島叔母、松村の母君の間に定まるのである。

僕は未だ敏君を見ない。見ないが、二里とは離れぬ澁谷に、——以前の樣に、歸國してしまふ爲めに出京したのではなくて、限りなく留まる爲めに——來て居ると思ふと、云ふ可からざる悅が心に溢るゝのである。なつかしい面影を見ず、なつかしい其聲を聞かずも、其氣はひを感ずる。時としては一寸行つて、彼枳殼の垣の隙から、何をして居るか、覗いて見たくてた

まらぬが、馬鹿な事をと、自から叱つて居る。

中島叔母の話によれば、敏君は少し面痩せて、更に一段美しくなつたと云ふ。清水君の噂によれば、内が狭いので、敏君の荷物は盡く石川家まで運んであるさうな。併し其樣な事は如何でも宜い。吾敏君がいよ／＼吾舟君になるも、最早一週日を出でずである。

僕は依然として早稲田に通つて居る。日々の勉強をつゞける。若くはつゞける風を爲る。結婚位に驚くものか、と世にも落ついて居る。若くは落ついた積りで居る。併しながら、英文學の教場で、學生が皆莞爾々々して居るのは、如何したのであらう？ 書に對すると、頁が左右に開いて、活字が一つ宛起き上つては、お辭儀をして、とん／＼／＼と足拍子を踏んで、萬歳を舞ふのは、如何したのであらう？ 門前を「目出度イ」とふれて歩くを、誰かと見れば、豆腐屋だ。庭に一枝咲き出でた菊を眺めて居ると、其が段々人の顔になつて、果ては溢れさうに笑ふ。不圖軒端で誰か早口に僕の噂をして居る樣に思つて、見れば二羽の小雀が仔細らしく小首傾けては、一寸此方を眺めて、また早口に饒舌つて居る。日々早稲田に通ふ路すがら、散歩に出る路すがら、今まで見もせぬものが見え、聞えもせぬものが聞えて、全體此處は何處であつたか、と立とゞまつた事は一度や二度で無い。僕は如何かして居る。否、此方が如何かして居るではなくて、全體四邊がまはるのだ――其に違ひ無い。此樣な時には、落ついて、二倍も勉強するのだ。と思つて、僕は一心不亂に書見をする――併し讀み終つて何の事か分からず、餘程注意しないと、同じ行を何十遍も眺めて居る。明治評論の原稿紙を前に置いて、筆を握つて、文案は宜いが、やゝともすれば、原稿紙に誰が書いたのか――僕では無い――菊池敏、敏子、お敏など云ふ咄々怪事の文字が何時の間にか現はれて居る。まゝよ、誰も居ない、一寸云つて見ようと、小聲に「お敏」と云つて、恣まゝに微笑を溢して居ると、「旦那様」と後に聲がする。喫驚して顧れば、二三日前に雇入れた年若の婢だ。「何か一寸御隱居樣が」叱られに行く惡戯小僧と云ふ格で、六疊に行つて見ると、母は今仕立上げた仙臺平のしつけをふつつり噛んで、「さ、愼さん、一寸穿いて」と莞爾。婢も畏つて笑つて居る。人を馬鹿にした袴までがキュウ／＼笑ふ。

此頃の僕は何處に住んで居たのか、多分此世界では無かつたかも知れぬ。彼霞の區に入つて以來、僕の視聽はまるで逆樣になつて、小さいものが大きく見え、大きいものが小さく見え、不思議と思つた事が通常で、通常が不思議に思はれ、都の騒がしい眞中を通つても春の水唯悠然と流れ行く綠の野邊を歩く樣に、而して聲なきものに却て聲を聞くのである。何を見ても、四角三角なものはなくて、唯楕圓形に見える。僕の靈魂、僕の存在は宛ながらの流動體になつて、感と云ふ感、想と云ふ想、準て融け合ひ、搖々して、一の定形をなさぬのである。一廉鍛へもし、磨きもし、隨分と硬くなつた積りの菊池愼太郎も、何時の間にか熔爐に投げ込まれ、坩堝の中に融けてしまつて、――實際僕は此まゝ蒸發して了ふのではあるまいか、と恐れた。

併しながら幸に形だけは此世に取とめて、僕は心得顏の秒、分、時、日の送るまに／＼次第に結婚と云ふ不思議の國へ近づいた。僕を睡遊者の其に比すなら、ぱつちりと醒めて居る母はき／＼萬端の事務を捌いて、式の前日には、何角の手筈も全く整ひ、板の間は光る樣に、疊は滑る位に、庭は箒をかけた樣に、隅の隅まで掃除は立派に出來て、婢も無事に苦む位。夜は、磨かれて光りまさるランプの下に、母子相對ひて、茶を飲みながら、話すとはなく良久しく時を移した。

（十五）

十一月二日の夜は夢もなく明けて、起き出づれば天長節の日本晴。「今日が結婚の日だ」とは醒めて第一の思であつた。

未だ結婚の意味もよくは解せず、良人たるの道も知らぬに、最早今日は結婚するのだ。と思ふと、獨身の生涯が名殘惜しい樣にもあり、また共棲の時を待遠い心地もする。明瞭に今の位置を考へて、過去の淸算をして、整然と心の緒を揃へて——と心の整理にかゝつて見たが、感も想も唯溶々と解けて流れて、眼には見えても手にはとられず。宛ながら土耳其浴でもした樣に、淸々しくて、うつとりとして、何と云ひ樣もない奇妙な心地。

朝飯（であつたと想ふ）が濟むと、當分要も無い僕。些散歩でもして來ようと、ステッキを振つて出かけた。千門萬戸にはたゝく國旗の影、君が代は千代に八千代にと子供が歌ふ聲も、今日は殊に可愛くてたまらぬ。其れから道を轉じて、處々の菊園を音づれた。多分花盛りであつたと思ふが、よくは覺えぬ。

歸つて見ると、早や中島叔母が加勢の婢を二人引連れて來て居る。書齋の四疊半に入つて見ると、此は如何したもの、白桐の箪笥、行李、革嚢、萌黄の大風呂敷包、鬱金木綿の袋、其他品々室も狹しと積んである。驚いたが、忽ち莞爾と笑んだ。叔母が後からついて來て、今日は此室を花嫁の更衣室休憩室にするから、愼さんは六疊の方に居て下さい、と云ふ。

晝飯（であつたと想ふ）が濟むと、僕は理髪舖に行つて、其れから湯に入つて、其れでもまだやつと二時、秋の日の長いこと夥しい。幸ひ思ひがけない新吾がやつて來たので、取りとめも無い事を話して、時間を殺した。新吾は所要あつて十一月下旬に上京する心算で居たのを、母が僕の結婚を報じたので、是非其式にと急いで來たのであつた。「矢張松村の孃樣が御縁がござした喃」彼中川の事を御勸め申したのは、新吾が勘違ひ、何卒堪忍して下されよ、と新吾はしたゝかに詫びた。而して何であつたかよくは覺えぬが、母や僕や鐵君に銘々に山の如く土產物を持ち出した。

其れから程なく絕えて久しい彼志津牧師が來た。志津氏は今度東京に開かるゝ基督敎の敎師牧師の大會に出席する爲め上京したので、僕は母や松村一統と相談の上、同牧師に折衷流の結婚式を司つて貰ふことに依賴したのである。同牧師の面影は故兼頭君の面影を喚び起し、噫兼頭君が居たら如何樣に喜んで吳れるであらうと思ひ、其許嫁のお冬君の寂しい面影が何處からか朦乎と現はれて來たが、夫も唯一霎時の事、何も角も今日の悅に吸はれてしまふのであつた。

日が傾く。暮れる。間每にランプがつく。母の手添で、僕は晴着に更へた。桔梗の紋付の小袖、羽織、仙臺平の袴、皆母が蠶から飼ひ、絲からとつて、手づから織り、京都に染めさして、手づから縫つたのである。中島叔母が側から見て「立派、立派」と囃す。僕はさつと赤面しながら、六疊の溜へ行く。

柱時計が六時拍つ。忽ち門前に夥しく車がとまる。僕は息を吞む。遽てて玄關へ出た中島隱居や叔母や、其れから松村老人や松村の母御や僕の母の聲が、襖一重越しにごつちやになつて聞える。花嫁は直ちに僕の四疊半に導かれた氣はひ。

淸磨君や石川氏や明治評論主筆の安藤氏が莞爾々々僕の溜へ挨拶に來る。丸髷の鈴江君が何か取りに來て、誤つて僕等が話して居る六疊の障子を明けながら、「おや」と云つて、莞爾笑つて「お目出度う」と僕に挨拶し、淸磨君を見て「良人、一寸」と呼び立てて、何か云つて居る。

清磨君が頭を掻いて居る。門前も、勝手元も、座敷も、六疊も、人だらけ、笑聲だらけ、目出度いの挨拶だらけ、何だか吹上の泉でも見る樣に、人聲や物の光やすべての物が、さゞめいて、きら／＼して、狭い家に溢れて居る。

＊　＊　＊　＊

やゝしばらくたつた。

新郎新婦相竝んで、座敷の床の間に向つて、志津牧師の聖書朗讀を耳にして居る。羽織の紋の桔梗と、羽織の紐と、襟と、足袋を除けば、僕の服裝はすべて純黒。面の櫻色と、島田の烏羽玉を除けば、敏君は渾身雪白（此は其母君の嫁時の白無垢を是非と云つて敏君が着たさうな。但帯は結納に贈つた彼白茶地に白の亂菊を織り出した繻珍のをしめて居た）僕は敏君を見ない、唯神々しい白光に照らさるゝ思。

志津牧師が祈禱を始める。背後に一同の肅然とした氣はひがする。併し其實僕は何も聞かず、何も見ない。耳に落つたのは、唯志津牧師が祈禱の後で、朗讀した契約書中の「憂歡苦樂を共にし偕老終天の約を全うし」と云ふ一句であつた。

媒妁役の中島叔母夫妻が志津牧師から二通の契約書を受取つて、一通を敏君に、一通を僕に渡す。懐中して志津牧師に一禮する。互に一禮する。中島叔母夫妻の注意で、顧みて一同に一禮する。一同が答禮する。

式は濟んだ。松村敏子は最早限りなく菊池敏子となつたのである。

＊　＊　＊　＊

同じ座敷の、正面床の間を背にして、僕は新婦（薄色縮緬の三枚襲に着更へて居る）と相竝んで坐して居る。僕の右には松村の老人、新婦の左には吾等の母が坐して居る。松村の母君、中島隠居夫婦、清磨君夫婦、石川氏夫婦、安藤氏夫婦、中島若夫婦、志津牧師、新吾、（中島若主人は航海中。兼頭一道氏も招待したが、去り難い急要あつて、お斷りの使が來た。殘念なは野田伯母が道遠い上に、學校のはづし難くて、此座に漏れた事であつた）皆程よく左右に居流れて居る。家婢と、澁谷から加勢に來たお銀が、おの／＼服をあらため眼八分に大きな黒塗の膳を捧げて來る。

併し僕は何にも箸をつけぬ。つけても、更に物の味は覺えぬ。のみならず、何も見ず、聞かず、云はず、思はず、唯坐して居た。吾側に敏君――吾妻が坐つて居る。感ずる所唯其のみである。

宅が狭い割に客が多くて、次の六疊の一部を屏風で取きつて、新吾や中島若夫人などは敷居の向うに坐つて居る程であつたが、併し幸に一の混雜もなかつたさうな。一切酒を用ゐなかつたが、併し陽氣な一座で笑聲や話聲は始終絶えなかつたさうな。清磨君が立上つて、野田伯母から送り越した祝歌を讀み上げたさうな。中島隠居が得意の高砂を謡つたさうな。新吾が狭い家にはあまる程の大の洋服體をやをら起して、演説をしたさうな――新吾が僕を孩兒の時から知つて居て、乾度秀れ者になる見込をつけて居た事の述懐や、將來の豫言や、若し僕が平生の耳で居たら慙死する程の大言壯語を例の「ござす」言葉でやつたさうな。其れから明治評論主筆の安藤氏も負けぬ氣になつて僕が貧書生で居た時の事を述べて、文士の爲めに大氣焰を吐いたさうな。中島叔母が彼向島の花見に僕が中川連に會つて弱つた事を素破拔いて、滿座の喝采を博したさうな。如才ない石川夫人の良人の如才ない石川氏が、自身の結婚の時の失策談を持ち出して、此又滿座の大笑を博したさうな。

僕は「さうな」と云ふ。何となれば此等は大抵

後で確めた話で、思ひめぐらして見ると、實際其事があつた様でもあり、また無かつた様でもあるからである。唯一座が非常に賑やかで、皆がよく笑ひ、殊に松村の阿舅が言毎に高笑したと云ふ丈は、ほゞ記憶して居る。

*　*　*　*

約三時間あまりも過ぎた。

賑やかに笑つた一座は、またや賑かに立つた。松村の阿舅阿姑を初め、媒妁夫婦、清原君夫婦以下或は「一大安心しました」と笑を傾け、或は「お目出度うございました」と會釋し、賑やかに歸つて、座敷には母と僕と吾妻と唯三人殘つて居る。

「阿母、嘸おくたびれなすつたでせう？」と僕はの眞面目な顔を眺めた。

一否、些も、と母は莞爾したが、また直ぐ容をあらためて、「愼さんも、敏さんも、一寸來て下さい」と身を起した。

緣側傳ひに四疊半に入ると、母は床の前に立てた二枚折の小屏風を靜にかたよせた。床には小机を据ゑて、茶色がかつた古い寫眞を飾つてある。亡父の寫眞だ。

僕等夫婦が寫眞の前に跪いて一様に頭を下げると、母も跪きながら、

一御目にかけたい！」

と落涙した。

僕も思はず落涙する。敏子は差俯いて居る。

此が斯日出度い日に於ける唯一の涙であつた。

巻外

（一）

僕と敏子の結婚式が濟んで一月ぶりに、松村の舅姑と打連れて、母は歸國の途に上つた。僕も敏子も是非にと引留めたが、母は夙に思案を定めて居て、彼方の片づけやら何やら角やら是非一先づ歸國しなければならぬ、と云つて立つた。此には蓋母の深い考があつたので、兎も角も新婦が家馴れ物馴れ人馴るゝまでは、同じ家に二人の主婦が居る様でも何角の爲めに宜くない、と飽くまで僕等の上を思つての擧動であつた。

出發の前日、僕等三人例の四疊半にさまぐ〳〵の物語をしたが、母は敏子に向ひて、今後は家内の全權を擧げて嫁に讓つて、吾身は眞の隱居になるのだから、何事も二人の相談で、決して遠慮がましい事がない様に、存分やつてもらひたい、其について嫁に何か證土產をと思つたが、と云ひさして、袋戸棚の手箱の中から紙に卷いたものを取り出し、

一愼さんも、敏さんも、聞いて下さい。此處に公債證書が四百圓ありますがね、と母は父が明治十六年に國許を出發して以來、僕が學資にと、頭をかひ、綿をとり、織物をし、其他一錢の收入でも差當死し置かれるものは、盡く或は銀行に、或は郵便局に貯金をして置いたのが、此八年間に利子共に五百圓あまりになつた事、併し僕が此八年間に些とも母の手を煩はさず徹頭徹尾自から働いて勉强したので五百圓には少しも手をかけなかつた事、尤も一回病氣の時に五十圓ばかり出金しまた鈴江君の結婚の時五十圓ばかり其内から出したので今は四百圓餘になつて居る事、結婚費は僕が小册子を書いたり、何かして、零碎の金を貯へて置いた中から支辨した）菊池家も不幸後は殆んど一紙の殘る物もなくて僕等に讓るものとては系圖一卷、刀劍が二本、掛物少々の外は唯此公債證書四百圓に過ぎぬ事を話し、併し千兩箱を山の様に積んでも落魄れる者もあれば、腕一本で立派な人になる者もあり、皆其人の器量次第、心がけ次第である事を話し、

一旦とんと此迄随分骨が折れたが、此れからがまだ中々ですよ。でも、困難に打勝つて道を開いて行くのは、辛くも楽しみなものです」

＊　＊　＊　＊

母の言葉は違はなかつた。

若し結婚前を戦闘の生涯と云ふならば、結婚後の戦闘は更に複雑更に多方面の戦闘であつた。而して此三十年戦争の上巻二十年に於て、僕は百萬騎の味方にまさる味方を吾母に見出したが、後十年間の戦闘には更に一の強大なる味方を得た。其れは云ふまでもなく妻敏子である。

萬の物に貧くも、僕は確かに天與の二大幸福を有する。賢母と良妻とである。母が一家淪落の中から卿と僕を抱き上げて、此頑鈍の心に生命を吹き込み、二十何年の間陰に陽に僕を刺衝し、督励し鼓舞し、僕をしてあらゆる悪魔と奮闘するの勇気を起さしめた事は、已に述べ来つた十数の歴史によつて、略其一斑を明らかにしたと信ずる。而して其結婚以来、敏子が如何に僕の光明となり、生命となつて、僕をして倒れてもまた起ち、失敗してもいよ／＼向上の勇を鼓せしめたかは、まさに是れから述ぶ可き所であるが、今に其機會を有たぬのである。

結婚の其月、僕が敏子と相談して、家憲を定め、如何なる事があつても、負債をせぬ事、何故となれば、財布を握らるゝのは、往々にして靈魂を握らるゝことになる）綿服にあらざれば着ぬ事、余儀無き緊急にあらざれば車に乗らぬ事、月収の十分一乃至十五分の一を必ず貯金する事、（此は甚だ困難であつた。収入が少ない上に、豫算外の費用が遠慮なく加はつて来て、加之少額ではあるが、大學で受けた奨學貸費の月賦返済も、きまりきつて加はるのだから）要するに勤倹の二字を厳重に励行する事を約定した始末。貧家浄掃地と云ふ格で、敏子が其溢るゝ趣味と器用の手を以て、殆んど一物も無き寒家を暖かに、美しく飾り、（僕が書斎の前に一坪大の空地に、薔薇を挿したり、井戸側の猫の額程の地に西洋苺を植ゑたり、障子の破一つ繕ふにも花形を切り、状插一つも手づから厚紙で製へて、「一輪の花でも書くと云ふ様に）尤もつましく消極的経済を行ふ同時に、僕の心身の快をはかり、（尤も驚いたのは、敏子が何時の間に見聞いたのか、僕の食性を諳じて、巧みに僕の嗜好物を調理してすゝめた事である。若し西洋の諺に云ふ通り、男子を攻落す間道は即ち食道であるならば、細君は確かに僕の死命を制する手段を有つて居るのだ）家政の傍らしば／＼僕の為めに引用書を調べたり、草稿を浄寫したり、（女の字の様に見えても宜くないとか云つて、態と右あがりの堅くるしい字を書き、額面の揮毫など習つて居た）渾ての意味に於て僕の補助者となつた事。斯等は今此に詳しく述ぶる機會を有たぬ。

明治廿四年十一月から今日に至るまでの十年間、我日本は非常に多事であつた如く、僕の生涯も頗る多事の生涯であつた。専門學校には二年ばかり通つて、三年目からは一週三時間出ることになつた。（關西學院の片山校長から、當時下谷教會の牧師をして居る舊友逢坂[illegible]五郎を以て、僕に[illegible]一枚で通した「思想家」の[illegible]を以て、僕に史科の教授になるやうに諭され、其後一二高等學校に奉職の口もあつたが、思ふ所あつて断つた。）明治評論の方は、主筆[illegible]氏が任[illegible]あつて身を官界に投じた以来、[illegible]の主宰に帰し、幸ひに雑誌界落寞の間を以前にまさる讀者を繋ぎ得て、政治上社會上文學上の評論は、幼稚ながらも一切世論に頓着せず、思ふが如く云ひ、行はんと欲する通り論じて、いさゝか無位の諫官、無官の弾正、説教家ならぬ説教家、教育家ならぬ教育家、進歩軍の別働隊として立

言の機會を得ると共に、一方にはまた卑名も少しは人に知らるゝこととなつた。二三の小著も公にした。篋底には未定稿のやゝ大部の著述もある。大學に居た頃からやりかけた德川時代の研究は、更に僕を導いて、封建の末路から新日本出現の逕路を、非常の興味を以て辿らせたのである。宛ながらイリー湖がオンタリオ湖へ移る間にナイヤガラの瀑布は轟く如くに、封建的日本が二十世紀の日本に移る過渡=維新前後の五十年は、實に夥しい戲曲的色彩を以て僕の眼を射たのである。僕は自から揣らざるの大膽を以て、試みに一篇の歷史的小說を草した。篋底に藏すると云つたのは、此一篇である。

十年の月日は、大抵人の浮沈を定むるもの。大學の門から肩を揃へて社會の海に飛び込んだ者の中には、十年經つた今日、何處に居るか影も見えぬ者があれば、逸早く浮み出でて、拔手をきつて島に泅ぎ着く者もある。僕の如きも、有體に云へば、わづかに溺るゝを免れた一人であらう。併しながら風潮の使を假らぬ泅手は、骨が折るゝも當然の理、おくれ勝なるもまた致方無い次第と云はうか。併し凡夫の眼は近くして心狹く、身は是れ永劫の海に結ぶ間もなく消ゆる泡沫の果敢なきものとも知らず、長短大小盡く大能の掌上に載す運命の圏を傳うてめぐるものとも知らず、人生の競爭に遲速の見はたゞ是れ眼睫の迷ひのわざ、埃及アッシリアの文明を早しと羨むにも及ばねば、おくれて開けし日本を不幸とも弔されず、「後なる者は先になり、先なる者は後になり」して躍るも觀るも皆共にめぐる浮世のまはり舞臺、千兩役者もとつたりもなくて叶はぬ共稼ぎと悟つて見れば何の不平所かと思つても、誰は高等官何等になつて年俸が如何したの、誰は博士になつて何處の講話で大喝采を博したの、誰は株式取引所の何になつて金が金庫に唸るのと云ふ評判を聞いては、何だか後くれた樣な氣持がして溜まらず齒がみして地鞴を踏む氣にもなつたが、併しながら幸に踏みも迷はず、大學を出る時の覺悟を何處までも維持し得たのは、此れ實は吾力では無くて、吾信仰理想の管を通じて落つる天來の光、師友の感化、母の感化、敏子を中心にした家庭の感化に歸せなくてはならぬ。斯については、述ぶ可き事も夥しいが、今は茲に詳說するの機會を有たぬのである。

僕の家庭もまた大分成長した。母は歸國した翌々年の十月、長男愼一郎が生るゝ頃に、國許の家をたゝんで上京した。而して愼一郎が三歲の秋、長女の靜が生れた。玄關側の六疊には知己から賴まれた子弟三人寄寓して居る。僕は猶牛込の借家に住んで居る。併し最初の家よりは遙かに手廣で、庭には愼一郎が筋斗翻る芝生もあり、二階には親類朋友が來て泊る室もある。

此十年間を回顧すれば、僕は實に書く可き事の多きに堪へぬ位。前二十年を記して、後十年を省くは、非常に遺憾に思ふ所である。併し此處には書く可き機會を有たぬ。他日必ず「後十年」と云つた樣なものを公にする積りである。其には敏子が家政の餘閑に書いた「わらはがおもひ出の記」も添へて、公にしようと思ふ――僕等が結婚の生涯は、詳らかに此に說いてあるから。

僕は最早此長物語を終る可き時となつた。併しながらこゝに省き難き一節がある。

其は兩三年前、久し振に故鄉妻籠に歸省した一件である。

(二)

强者の堅吾叔父が歿して以來、菊池愼太郎の名がぽつ〳〵世間に知れて來ると共に、絕えて久しい故鄉妻籠の親類から何時とはなく文通が始まつて、色々の事を尋ねたり相談したり賴んだり、する中に、是非一度歸省して、今は昔に

かはる故郷のさまも見て呉れる様にと云ひおこせた事も度々であつた。

僕も母と相談して父の十七回忌には必ず歸省して法事も營み、なつかしい父の墓に香花を手向けようと思つて居たが、恰も其年征清の役が起つて果さず、其後一兩年は殊に寸暇も無い多忙に追はれて、歸省の事も暫らく一邊に押やられて居たが、明治三十年の春しばらく閑を得たので、一家打連れて久々振に歸省の途に上ることとなつた。

歸省の勸は獨り妻籠から來るのみではなかつた。清麿君夫妻、松村一家からも頻りに一度下つて來る様にと云つて來たのである。清麿君は僕が結婚の翌年、獸醫學の研究を一先づ卒へて、恰も好し、國許の農業試驗所の顧問に聘せられたので、一家を挈へて歸國し、而して間もなく野田伯父が賣拂つた彼屋敷を買ひ取つて、(村人も野田伯父の舊恩を思つて、此處を先途と盡力したので、清麿君は餘程廉價に買ひ得たのであつた)故養父の志を嗣ぎ、頻りに園藝牧畜の業をやつて、牛酪の罐詰、杏、桃、梅、種々の果物で製したジャムの罐は、清子(長女)大一郎(長男)大次郎(次男)三人のぽちや／＼太つた可愛らしい寫眞と共に、年々東京に上つては僕の家庭を見舞つた。清麿君も時たま上京しては宿る毎に、是非一度下つて屋敷の整頓して來たさまを見て呉れ玉へ、寫眞だけでは物足らず是非東京の孫共の生きた笑顔を見たがつて居る實家の父母を滿足さして呉れたまへ、と切に迫つた。野田伯母からも頻りに云つて來た。

加之新吾も其炭礦事業のます／＼盛大になつて、社會問題勞働問題研究の一端として僕が種々新吾に註文して置いた諸般の設備も大分緒についたに付いては、是非一回見て下さる様にと、しば／＼云つて寄越した。のみならず新吾は是非共僕を衆議院に出したがつて、已に妻籠の有志者とも内々手筈を定めて居るらしく、無論まだ僕の年齡も三十に滿たぬのであるから、今明年と云ふ譯には行かずも、是非選擧區民に一度僕の顏を見せて置きたい心根で、頻りと展墓を促したのであつた。無論文學者は必ず書齋にかじりつく可きものでもなく、衆議院の一席は左程有り難くないにもせよ、何れの黨にも派にも屬せず眞に國家の利害を思つて行動する獨立不羈の議員は唯一人と雖も無用ではあるまいと思つたので、僕も若し選擧區民にして決して一地方の利害の爲めに天下の利害を後にする様な要求をせず、全く僕の良心次第に運動する自由を與ふるなら、故郷の選擧區を代表するも差支はない、と云ふ意を新吾に通じて置いたのである。

兎に角歸省の理由は連りに重つて來たので、明治三十年の三月三十日と云ふに、留守は寄寓の書生達に託して、母、僕、鶴子、長男愼一郎、長女靜、姉、(中島叔母も是非一處にと云つて居たが、今年は例の足痛で、見合はした)一行六人、僕と共に東京を立つて、東海道汽車の中も賑やかに、神戸に二日逗留し、(一日は須磨明石に遊んだ爲め、一日は絶えて久しい片山校長を訪問して昔の事どもを謝し、其れから校長の依賴でなつかしい關西學院に演説した爲め)汽車の長旅もよくあるまいと云ふので、神戸から商船會社の汽船に乘つた。

幾度通つても飽かぬ瀨戸内海の春景色。一家擧つて甲板に出て、當年五歲の腕白者の「僕さん」(此は長男愼一郎の綽名である。僕が「僕、僕」云ふのを小耳に聞き覺えて、二歲三歲の頃から、「僕、僕」云ふので、何時しか皆が僕さんと云ふ様になつた)が船にも驚かず悠々と鏡の如き水の上に浮いて居る鷗を捕へるとか云つて舷外に飛び出しさうにするのを僕がやつと制して居れば、女の靜は母の手に抱かれて、清々

しい海風に吹かれるのが快よいかして連りにひよいひよい飛び立つと、彼女が祖母の吾母は手を拍いて「お出〳〵」とあやして居る。やゝ久しく遊んで、母と姉は二人の子女を連れて客室へ下り、僕は敏子と猶暫し海山の長閑な景色を眺めて居る。折ふし船尾には誰も居ず、僕等はさまざまの物語をした、――國許の父君母君が如何様にか指を折つて待つて居なさらうと云ふ事、清麿君や鈴江君が如何様な生活をして居るであらうかと云ふ事、土産が不足する様だつたら門司からでも買つて行かうかと云ふ事、其れからまだ種々様々の僕等には興味があつて他人には五月蠅い細件。話はしばし途絶える。僕等は向うの島=菜の花が咲いて、家は見えぬが煙が颺つて居る=を掠めてふうはりと滑り行く白帆を目送つて居る。

「良人」と敏子は聲を低くする。

「何?」

「覺えていらつしやいますの、わたくしが初めて東京へ上る時――」

「左様々々、國許の母君や鈴江君と、矢張船で此處を通つたね」

「彼時わたくしは――」といよ〳〵聲を低くする。

「彼時――?」

「彼時わたくしは、あの、姉さん(鈴江君の事)が心易く良人に言を仰有るのが羨しくつて――」

とまでは云つて、僕の側に立つ丸髷の夫人はさつと面を紅くする。僕の眼の前には、銀杏髷に結つた言葉少ない、色白の十四の少女が嫣然と立ちあはれる。

* * * * *

多度津に着いて、曾て曾根君を伴うて此處に來た事など思ひ浮べながら、甲板に立つて客の上下を見て居ると、今漕ぎ寄せた艀から、見た様な大胴亂を首につり下げ、灰色になつた黒帽を冠つた男が上がらうとして、梯子段が汚れて居るのを厭つたのか、新しくもない紺足袋をぬいで袂にいれて、やをら艙口に入つた。顔は見えなかつたが、何處か見覺えがある様に思つた。

出帆の騒が靜まつて、僕は客室に下りるつもりで船尾の方へ行く拍子に、煙突の蔭からひよいと彼大胴亂があらはれた。僕は其顔を見て愕然、

「貴君は――西内氏ではありませんか」

と叫んだ。然、確かに僕の舊恩人に違無い。顔の半面を埋むる鬚髯が餘程白くなつて、額に皺が寄つて居るが、其他は寸分も違はない。

西内氏は胡亂氣に僕を左見右見して居たが、

「つい御見忘れしましたが、誰氏でございましたかな」

西内氏が見忘れるも尤だ。年始状だけは屹度此方から出して居たが、一度も寫眞を送つたではなし、指を折れば最早彼此十五年も會はずに居たのである。

僕は十五年前雪の夜道に救はれてしばらく其家に小僧をして居た菊池愼太郎である事を説明した。西内氏は非常に驚いた様子。僕は西内氏を船尾に伴つて、種々問答した。西内氏は相かはらず獨身で(最早わしも本卦がへりが近うてなと西内氏は嘆じた)ある事、彼相續者の筈であつた甥とやらは金づかひを始めたので早速離縁した事、僕を愼太さん〳〵と呼んで鰯のぬたで僕を泣かした彼老婆は最早年寄つて役にもたゝぬが行き處もない體だから生涯飼殺にする筈で今に置いてある事、彼盗賊の恐怖であつた三頭の猛犬は最早死んで其子が家の番をする事(わしも子があると死んでも宜いが、子が無いからな、と西内氏は嘆じた)今度は訴訟用で大阪まで出て用があつて多度津にわたり此れから廣島に行つて其れから宇和島へ歸る筈である事、留守には彼雪の夜に僕を西内家まで負つた

治左が（彼やかまし嘷は到頭男を見放して駈落をしてな、と西内氏は言ひ添へた）老婆と二人で番をして居る事等を話した。

僕は西内氏が六十も已に過ぎる齡をして遑遑と身忙しく心安からぬ有樣を氣の毒でたまらず、猶よく其訴訟用なるものを聞いて見ると、西内氏は性の惡い相手にかゝつて血の汗を絞つて溜めた財産の殆ど一半を踏倒されんとして居るので、裁判に持出しても、辯護士が先方と共謀になつて、誰一人西内氏の爲めに力を出さぬので、二三度敗訴し、今度大阪で最後の黑白を爭ふことになつて居ると云ふことであつた。法律に縁遠い僕ではあるが、聞いた所無論西内氏の條理があつて、且萬づの缺點はあるとも虚僞だけは決して云はず聞かぬ西内氏が一刻の性質を知つて居たので、如何か加勢がしたいものと考へて見たが、不圖舊友の法學士淺井が辯護士になつて、當時大阪で若手の腕を鳴らして居る事を思ひ出し、紹介の事を話すと、西内氏はやゝ喜んだ樣であつたが、「併し其樣な名のある御方では——」と逡巡の模樣が見えた。僕は重ねて、報酬の事は少しも御掛念に及ばず、何も詳しく淺井まで申通ずるによつて、其邊は決して御心配なき樣に、と云つて、不取敢名刺の裏に淺井の住所姓名と、舊主人西内氏を紹介する旨を鉛筆で認め、認印を押して、西内氏に渡した。

思はぬ再會に、僕は聊か舊恩を謝するの機會を得、母もしみ〴〵昔年の禮を述べ、敏子も眼早く西内老人が古びた黑紬の羽織の綻び見つけて縫つてやるなど、心ばかりの待遇をした（尤も子供丈はあまりなつかず、僕さんは鬚髯の伯父さん鬚髯の伯父さんとやゝ恐がつて、伯父さんが來いと云つても頭を掉つて居た）ので、西内氏も眞鍮の口金をはめた彼大胴亂の底に僕の名刺を大事に仕舞ひ、昔世話になつた彼老婆へ心ばかりの土産にと贈つた手巾、手拭を懷中にをさめて、宇品へ上陸する際にも、其干からびた面の何處かに少しは喜色に似た樣なものを浮べて居た。

（三）

其後は船中も別に事無く、門司の港に着くと、新吾が一の番頭と云ふ男が待受けて、僕等一行は小憩の後、九州鐵道を折尾驛から南折して、日のくれ〴〵に新吾が宅に着いた。

偖新吾が如何に歡天喜地の大々的歡迎をなしたか、彼が所謂南の方なる新吾夫人が口も八丁手も八丁出來得る限りの饗待をなして如何に僕等を困却せしめたか、鼻大に目細くして乃翁其まゝの子供が一小隊ばかりもあらはれて雪の進軍、君が代、ちやんこ節、其他あらゆる藝盡しに如何に東京新下りの「僕さん」を後に瞠若たらしめたか、此等は姑らく他日の話に讓るとしても、新吾が居間の床には何處の畫家の筆か知らぬがまさしく股引草鞋で山路に炭馬を新吾がひいて行く畫をかけてあつた事、延年寺の和尚樣が卷紙に書いた「立身出世の心得」を額にしてかけてあつた事、僕が新吾に迫られて惡筆を揮つた「受くるよりも與ふる者は福なり」と云ふ聖經の一句も立派な表裝の額になつて居た事、僕がまだ五六歳の時是非此方から書いてやつたいろはの手本を新吾が保存箱の中から出して見せた事などは、項目丈でも擧げて置かなくてはならぬ。翌日新吾が案内で、詳しく見物した炭礦の模樣、採掘から貯藏門司若松へ運搬の手續まで、複雜にして而も整然たる機關の運轉、斯等は確かに非常の興味を與へたのであるが、併し坑夫飯場の清潔にして風日のあたりよく建ててあつた事、夜學校の設ある事、說教場にもなれば軍談講釋幻燈會などの寄席にもなる板葺の一大平屋（平民倶樂部とか云つた）が建てられてあつた事、疾病創傷の爲め小さいながら信頼すべき病院の設がある事、中村貯

蓄銀行と云ふものがあつて役夫の貯金を奨勵し利子は無論、半季々々の利益を貯金の高に應じて配當する仕組になつて居る事、八時間勞働日曜安息をやつて居る事、保險及恩給扶助の役夫の爲めに十分安心の道を開いてある事、五人組の制を設けて一種の自治機關が出來て居る事、斯等は更に一層の興味を喚び起した。斯等の中には、僕が勸めて行はしたものも少なからぬので、其結果の比較的に良好なのを見るは、非常の愉快であつたのである。併しながら畢竟機關制度は死物、活殺は人にありで、渾て斯等の機關を活かして行く新吾が器量は大したものと云はなければならぬ。實に馬士から身を起して獨力此位置に達した新吾の成功は、目ざましいものである。併しながら僕が殊に喜んだのは、新吾が規模の廣大にして、自から利して併せて人を利するの主義をとり、坑夫に對するも勞働者對資本主の關係では無くて寧ろ親子の關係をとつて居ることである。實に九州北部の炭礦業者の中にも、資力に於ては遙かに新吾の上に立つ者も少なからずであるが、眞に「親方」の名稱に値る者は恐らく新吾を其一位に推さなくてはならぬ。勞働時間を短縮したり、休暇を與へたり、役夫の爲めに自腹を切つて種種の設備をしたり、一見不利の位置に立ちながら、慾の外には親子も知らぬ他の同業者と角逐して、毫も後れを取らず、じり〳〵押しに進んで行くのは、無論新吾の技倆だが、また其間に微妙の消息がなうては叶はぬのである。實に「無い袖は振るに振られず」僕等書生が百年の空論も富豪は一朝にして實行し得るもの、僕は新吾が爲めに萬歲を唱へ、アンドリウ・カアネギーの事を引いて、新吾が億萬の富を積んで、億萬の功德を散ぜんことを希望し、また新吾が望により彼平民倶樂部で坑夫に演說する時も、新吾を活きた模範にして勤儉力行す可き事、人は職業よりも向上にわが心がけを据ゑて居られねばならぬ事を反覆說明したのであつた。

新吾が家に逗留の二日三晩の間、色々眼を喜ばし心を慰むる事少なからずあつた中に、嬉しかつたのは、彼曾根君が昔石川島の押丁で會つた時に比すると全く別人の如くなつて、新吾が大事の裨將となり、已に妻子を持ち、一家を構へて、非常に勉勵して居ることであつた。悲喜相半ばしたのは、二十何年ぶりに分家の叔母と從妹のお芳に會つたのである。此は新吾が計らひで、僕等が着する日を計つて、福岡なる彼等を招いたのであつた。從妹は僕よりも一歲下だが、打見には三十四五、四十近くも見ゆる程にふけて、二十年前妻籠の茶小屋で別れた時の面影は、唯凜々しい眉と、澄んだ眼に殘るばかり、久しぶりに會つて嬉しいのか、恥かしいのか、悲しいのか、よくは顏も得あげなかつた。叔母は猶更骨と皮ばかりの樣にやつれて、頻りに其長女のお藤が十何年前に出奔して以來、生きたとも死んだとも便りがないのを苦にして、死ぬる前に一度如何樣にやつれて乞食になつた顏でも宜いから一目見たい、など云ふ樣な事ばかりこぼして居た。後で聽けば、從妹の良人の光永中尉と云ふ人は朴訥一圖の軍人氣質、働きがないかはりに、叔母にも從妹にも隨分よくする方であるが、家計はあまり豐かでなく、其に姊の置き去りの男兒まで預つて居るので、從妹の心づかひは中々一通でないさうな。成程何も不如意な事は、男の僕が眼にも見え、隨分質素に質素にとして居ますけども、吾家の子女の着物が綺麗で、落つた樣で、彼方に濟まない樣な氣がしました、と吾妻は後で僕に囁いた。唯喜ぶ可きは、從妹が連れて居た熊彥と云ふ當年七歲の兒、從妹其まゝの眼ざししつかりと、故叔父の强情な所も見え、梶さへよく取つたら隨分家を興して行きさうな怜悧な童であつた。ま

さか廣大無邊の天意を吾小さな杓子で量る譯では無いが、分家の命脈も從妹によつて繫がつて、此莟からまた一花咲く時節が來るであらうと、土産にやつた玩器の短銃持つて早速己より年上の新吾が二男を追ひまはす彼兒を見て、僕が其樣思へば、母も、親子と云つても分からぬもの、彼人の娘によくまあ彼樣なのが出來た、わたしが最早二十年も昔別れる際にやつた櫛を今日もさして居た、と嘆じた。

さきがあるのにあまり長滯留も如何と、僕等一行は南の方が切に留むるをふりきつて、新吾と妻籠で再會の期を約し、(從妹母子は、留守が無人だから、と斷つて歸つた。本當ならば妻籠にも是非御伴して法事の御手傳も致すのでございますが、と名殘惜しさうに從妹は母や僕等に挨拶して、顏を隱して行つた)四月六日の朝また九州鐵道の便を假りて、其日の午後には、松村の舅姑、野田伯母、清磨君夫婦及子供、清磨君の義兄等が歡迎の中に汽車を下りた。

（四）

十二の春から十六の冬まで青春の時を過して、西山塾、育英學舍、野田伯父の家などさまざまの記憶が籠つてある第二の故鄕に、十年ぶりにかへつて、第一の愉快は、松村家も野田家も共に息災にして、駸々と繁榮に向ひつゝある事であつた。

清磨君を得て、野田家はまさしく復興時代に入つて居る。着實眞率な清磨君の人物は、知事議員農商課の吏員より居村の老翁姥嫗に到るまで、交渉する程の者の信頼を博して、野田家の新主人の名は大分縣内に廣まつて居る。農業試驗所顧問、農工商青年會々長、九州農學校創立委員、九州肥料會社顧問、蠶業取調委員、其他さまざまの肩書の數を見ても、其位置の漸く鞏固に、信用の日を逐うて增長し居る事は、分明に卜される。鈴江君も好個の細君となつて居る。大體に通じて決斷が速いのは、清磨君も常に贊稱して居る所、故伯父に似て隨分下々には寬大な方で、雇人初め村の者共にも中々人望があるさうな。伯母は相かはらず女學舍に宿泊して、休暇に歸つて來る位であるが、伯母が所謂「歸ると學校に行くのが厭になる」程に、養母子の間は尤も親しく圓滑であつた。實際清磨君があまりよく養母に事ふるので、實家の母はやゝ妬ましく、何時も敏子への手紙に、鈴江どのがあまり氣が大きくて家計に絲目をつけぬが心配の、清磨が細君の言ばかり聞いて一向わたし達が云ふ事を聞いて吳れの、ぬと不平を訴へて居たが、併し近頃清磨君の次男大次郎坊を松村隱宅の跡目に定めてから、可愛がる者が出來て、大分心落ついた樣子、(尤も鈴江君夫婦があまり子供に物を食はせ過ぎるを氣にして、何卒貴婦から清磨に其樣云つて聞かして下さい、と姑が僕に賴んだ。僕はスペンサアの敎育論を引張り出して、胃は正直なものだから、子供には食ふ丈食はすが得策である事を諷し、併し其樣無暗に食はしても宜くあるまいから其邊の所は篤斗御相談申して置きませう、と慰めて置いた)舅は固より大の鈴江君贔屓、要するに野田松村兩家の關係は先々滿足す可き狀態で、彼偏屈者の名取の謹次氏(清磨君の義兄)も、一度女子敎育とかの問題で、うつかり偏屈論を持出し、鈴江君の爲めに散々說破されて以來、少し恐がり氣味になつたさうな。

前の所有主があまり手を入れなかつたと見えて、家屋敷の模樣は、宛ながら故伯父の時其まゝに殘つて居る。鈴江君母子が此舊巢に棲む樣になつた時は、定めて流浪の夢が醒めたやうであつたらう。僕が伯父の秘書官として占めて居た奥の四疊は、今清磨君の書齋になつて、野田伯父の寫眞、實父母の寫眞、札幌農學校の寫眞、僕等一家の寫眞が四方から眺めて居る。(床側の

柱の横手に僕が樂書した「少年才子不如愚」の七字は未だ分明に殘つて居た）彼笠松三次郎氏が常に其蔭に晝寢した楠樹、僕が三次郎氏と喧嘩した井戸側、清磨君が初めて上京する時僕が其側に立つて泣顔で目送つた金柑樹、鈴江君がよく一口噛んで見た一歳柿、皆舊のまゝであつた。併し新主人の代になつて、版圖は更に擴張され、且種々の設備が新に出來て居た。

僕等が野田家に泊した翌早朝、野田菊池兩家の人數打揃つて、清磨君の牧場に、搾り立ての牛乳を飲みに行つた。大人は皆歩き、子供連は驢車にのせて、清磨君が驢馬の口をとつて行く。親が親しいのを子も見做つて、昨日まで寫眞で會つたばかりの從兄弟同士が、今朝は最早仲よく車に乘つて、お清坊（清磨君の長女で今年八歳の昔の鈴江君其まゝと云ふ子）が僕の長女の靜子を抱いて（餘程可愛かつたと見えて、清坊が敏子に、叔母様、孩兒を頂戴な、と云つた）居ると、大一郎大次郎の兩童は一様に東京土産の赤帽をかぶつて、僕さんと軍歌を謳つて居る。牧場は屋敷から十町ばかり、丘の麓で、草地の一端を野川が流れ、周圍に一寸した柵を遶らして、西隅に幾棟かの板屋が建ててあつた。（此處の總監督は、彼無口早足の松村家の舊僕萬吉であつた。清磨君が紹介すると、無口の萬吉も「まあ」と驚いて、「大きうおなんなさりましたなあ」と暫らく呆然として居た、此れが彼舟に醉つてやんちやを云つて困らした坊ちやんかと云ひ貌に）僕等は朝露を踏んで、場内其處此處見物し、各自にコップを傾けて温かい乳を飲み、彼が純粹濠洲種の乳牛で、彼が雜種の牡牛で、彼が代價に積つて何百圓、彼が生れて何ケ月と清磨君が一々牛を指しての説明に耳を傾け、牛酪コンデンスミルク、チース製造の順序、牧牛の經濟談等を聞いた。清磨君は段々此牧場の規模を擴めて、是非屠牛をやると云つて居た。僕等が此話をする間、僕さんは從兄姉と場内を走せ廻つて居たが、忽ちわつと云ふ聲に驚いて見ると、其は僕さんが從兄姉に倣つて、家が臥た様な濠洲牛の鼻づらを恐々ながら撫で居ると、牛が哞と大に鳴いたので、喫驚して二三間飛びのいたのであつた。牧場には、牛の外に、豚、山羊、羊、馬なども少許飼つてあり、また密柵を結つた小池の邊には、鵞、家鴨、七面鳥、和洋鶏の類が大分飼つてあつた。歸途には、屋敷内の養蜂の仕組、ポテトオ葛製造場など見た。要するに、何處を見ても實着な主人が性質は、整然たる渾ての様子にあらはれ、伯父が一たび行はんとして失敗した事業は、學理に基き實功を期する清磨君の精細周到な管理によつて、着々成功に向つて居る。

僕は其日一同打連れて伯父の墓に詣でた時、心に其事を陳べて、喜悲相半ばしたのであつた。伯父の墓は、大一郎君の墓と並んで、屋敷の最高所に立つて居る。此は清磨君が此屋敷を買戻した其年、山下村の樫木の下から此處に移したのださうな。僕等は良久しく墓畔にとゞまつた。麗らかな春の日で、雲雀の歌は耳に滿ち、春風は袂に滿ち、何處を見ても悠々と霞み渡つて居る。屋敷内は、段々畠の麥を彩つて、桃、李、郁李、米桃、櫻、林檎などの花が咲きこぼれ、左手には今朝見に行つた彼牧場を牛羊の點々臥すのが見えて居る。僕は伯父が臨終の當時を想うて、其墓を顧み、彼樣に心にかけて居た舊の屋敷にかへつて、其家の繁昌を此處から眺めて、嘸地下に嬉しいであらうと思ひ、また伯母の心根を思つて、彼を傷み、此を哀み、やゝしばらく思に沈んで居た。

實に月日ばかり早いものは無い。山の上から眺めらるゝ景は、黄菜綠麥の野も、其を限る霞の遠山も、村も川も宛ながら昔のまゝ、遙かに一條の鐵軌が走つて居るのを除けば、少しも

昔にかはらぬが、眺むる人の身上は如何であらう？　僕が十二の年母と故郷を出て伯父の家に着いた翌日「鈴江君と共に腰かけて東京の話をした彼紫色の大石は、少しも二十年の月日を知らず顔に默々と其處に横はつて居るが、其下に鬼子ッこをして居る僕等の子供が最早追々其年になる。

「ねエ、君」と僕の側に立つて居る清麿君がやゝ小聲に云つた。

僕は顏を上げた。

「吾輩は別に何の不足もないが、斯樣東西離れて居ると、君達に頻々會はれないのが、一の遺憾だ。細君と始終其樣云つとるがね、せめて避暑でも一處にしたらつて――鵠沼は愉快だつたぢやないか」

「僕等も始終其樣云つとるがね――如何だ、須磨明石あたりでも毎年出會はうか。併し其も六ケ敷からう」

「其は戯談として、吾輩は實際考へとる事があるがね」と清麿君は屋敷の西隣に當る一區の地を指し、「吾輩は彼屋敷を買はうと思つとるさ。彼を買つて置いて、君達が行く〳〵の住所にするのだ。今から隱居の相談も可笑しいが、何年かの後君達が來て姉妹兄弟、朝晩往つたり來たり、ね、同じ牛の乳を呑み、同じ風に當りさ、其樣して死んだら墓を並べて――愉快だらうぢやないか」と云つて、大息した。

僕も大息して、ふりかへつて見れば、母は伯母と墓前の石に腰かけてしめやかに話して居り、敏子は此方の石に腰かけて蓮華草を束ねながらお靜を抱いて鈴江君と何か話して居る。僕さんは三人の從兄弟と彼大石を廻つて蝶を追つたり草花を摘んだり、嘻々と笑つて居る。

別期の近きを思つて、僕は重ねて太息ついたのであつた。

（五）

松村家に一日一夜、野田家に二日一夜、三家打揃つて彼牧場で寫眞を撮つたり、伯母の女學舍で僕が演説したり、母がもと世話して居た女弟子等が尋ねて來たり、何や角に日數延びて、父の命日も近くなつた上に、故郷の方でも待兼ねて居る樣子が知れたので、盡きぬ名殘を歸途の滯留の豫約に託して、僕等一行は四月十日の未明に清麿君宅を辭し、車を連ねて故郷へ向つた。

城下を離れて二三里、路は菜圃麥畦を貫いて、車の響に和す雲雀の歌面白く、春の日のぽかりぽかりと睡催す長閑さ。菜の花の香を嗅いて、驀然思ひ出せば、僕等母子が新吾の馬に乘つて、故郷を出たのが、十九年前の今月今日であつた。

「愼さん、大變道がよくなつたではないか」

僕さんを抱いて前の車に乘つて居る母が莞爾顧みた。實に――十九年前僕等を乘せて新吾の馬が踏み惱んだ凸凹の石逕は、今坦々たる砥の如き縣道となつて居る。

「見違へた道路になりました――少し坊主をとりませうか」

「否、好い心地で、すや〳〵睡つて居ます。――靜ちやんは？」と母は顧みる。僕も顧みる。

「おとなしくして居ますよ――ほら祖母樣が」と後の車の敏子は莞爾靜を此方に向けると、薄桃色の涎かけをした靜ちやんは、母の膝に抱かれて、鈴の樣な眼をぱつちりと開いて、車を隔てて「おい〳〵」と頷く祖母樣の方へ兩手をさし出して、嘻々と笑つて居る。

春風一路障る事も無く、半途に午餐小憩して、故郷の入口の彼七曲坂へ來たのは、恰も日暮時。

「さあ、最早直ぐ見えますよ」と母は車を下りて、僕さんの手をひいた。打連れて、彼杉の平まで來ると、故郷の谷――思の外に狹かつた――が忽ち幻の如く眼下にあらはれた。村々

の夕煙が靜かに颺つて居る。大川はほの白く、菜の花はほのかに黄ばみ、最早ちら／＼燈光が見えて居る。唯なつかしい彼高鞍山は、巔に一點の夕日をとゞめて、靄然と笑を含んで居る。あゝ高鞍山！ 多く名山を見た眼は、爾を意外に低く思ふも餘儀ない次第であるが、なつかしさは昔にも彌増す心地がする。

二十年の月日は何處に行つたか。

彼時新吾が馬を繫いだ一本杉は依然として其處に立つて居る。彼石地藏も、昔ながらに褪め果てた紅木綿の涎かけして、其下に立つて居る。思へば、僕は母と今朝出て、今夕歸るのではあるまいか。

「阿爺、早く行きませう」と僕さんが顧みて叫ぶまで、僕は暫時恍然と杉の平に立つて居た。

* * * * *

僕は故郷の出來事を一々こゝに擧ぐる暇を有たぬ。僕等が從妹のお芳と別れた彼茶小屋の邊に、歡迎の一群が提燈ともして待つて居た事、親類の家に引ずり込まれた時の賑ひ、辭儀に頸の骨痛く、挨拶に聲が嗄れた事、同じ樣な馳走の受け廻りに、腸胃を惡くした事、法事が非常の賑ひであつた事、（新吾のみならず、松村の舅姑、野田伯母まで突然に僕等の後を追つて來た）額、掛物の揮毫を山の如く持ちかけられて弱り果て、東京に歸つたら早々法帖を買つて手習を始めようと決心した事、百科字典でもあるまいに、大は日本の前途より小は懶息子の處分方に到るまで、宇宙間にあらゆる質問を持ちかけられた事、新吾が先達となつて、妻籠初め諸處引ずり廻し、僕に演説の稽古をさした事、敏子が非常に評判よく、母の嫁入を知つて居ると云ふ親類の老媼が、恰も若い母を見る樣なと云つた事、お重が母や僕に取縋つて泣いた事、僕さんや、靜ちやんが、親類の女の手から手に渡つて、僕等が東京から連れて來た婢が、些も抱くことが出來ないと憤つた事、斯等は唯其項目をあぐる丈で置かねばならぬ。

十九年の間に、故郷も大分變つて居た。大川にペンキ塗の橋がかゝつて、僕等が通つた茅葺の小學校が何處の異人館かと思ふ程の立派な建物になつて、妻籠銀行が立つて、妻籠倶樂部と云ふ樣なものが出來て、煙突が其處此處に見えて、料理屋の二階から媚めいた絃歌が聞えて、大分華奢の風が入りこんで居る。親類の家も、大抵代がはりで、柿剝自慢の隱居や、猫好の老媼や、將棊の名人や、多くは故人になり、其頃の當主は大抵隱居し、今は地方中學の卒業生、慶應義塾、早稻田專門校の卒業生などが、一家の塵を揮つて居る。其細君の中にも、現に野田伯母の女學舍を卒業した者もある。要するに、故郷も大分變つて來た。

* * * * *

妻籠に着いた翌朝、僕等一行、お重を連れて、第一になつかしい父の墓に詣でた。

親類やお重等の掃除が屆くので、墓地は少しも荒れて居ないが、僕等が故郷を出た年に建てた父の墓石は二十年の風雨に大分黑うなつて居る。僕等は更に墓邊を掃除して、閼伽を灌ぎ、花樒を立て、香を燒き、母を初め子供に到るまでかはる／＼默拜した。僕等母子は十九年ぶりの對面、敏子や二人の孫には初對面の――あゝ石が言ふなら、と僕は不覺の涙に咽び、母も額を背けて頻りに眼を拭いて居た。

時は恰四月中旬、墓地一ぱいに枝をひろげた彼老櫻は猶八分の花を剩して、風度る毎に落花繽紛、墓も香爐も敷石も掃く片端から忽ち一面の雪になる。墓域の端には胡蝶花や菫菜花が咲いて居る。母が敏子に一々祖先代々の墓の歴史を敎ふる此方には、愼一郎が落花を拾つては吻と吹き飛ばし、菫菜花を摘んでは墓前の花立に插して居る。

父の墓前に佇む僕の眼の前には、十九年前の恰も此頃此處に別の涙に暮れて居た寡婦孤兒の姿が髣髴と現はれる。――懐劍を閃かして子に迫る母の面影が現はれる。僕は心に天に謝し、父に謝し、母に謝した。

「慎さん」と母が呼ぶ。

行つて見ると、母は墓地の一段低くなつた片隅に猶新しい墓標を指して、

「彼にも花を立ててやりませうか」

墓標は堅吾叔父のである。僕は太息した。彼程父に僕等につれなかつた曲者の叔父――併し墓には恩も怨も無いもの、何卒ついでにとも云ひ兼ねた從妹の心を酌んで、一杓の水、一把の花を僕の叔父の墓に手向けたのであつた。

僕等は延年寺（此處の住持も某學林出の若僧になつて居る）に詣つて、彼老和尚の墓に詣でた。僕が何時も遊びに來ては、其花をちぎり、蜜を吸つたりした八重椿は昔ながら滿地に花を落して居るが、「エラクなつて來い、死なずに待つて居る」と云つた彼活氣な和尚樣は、未だエラクもならぬに最早言はぬ墓と爲つて居る。お重が父の膝助も四年前に歿して、此寺に葬られて居る。僕は其墓の前に立つて、彼が雪達磨の像を思ひ出した。

僕の舊家は、堅吾叔父の落魄後、名も知らぬ他國人の所有になつて、矢張酒屋をやつて居る。母と僕とお重と淋しい生活をした彼隱宅は、小學教師の住宅になつて、僕が何時も其蔭で行水した垂楊は依々として綠の絲を簾に垂れて居た。「兒童相看不相識、笑問客從何處來」僕は二十年前額や手足に墨塗つて其處に通つた小學校に演説する時、物珍らしげに僕の顔を見つむる小さき聽衆の顔を見て、斯感を催したのであつた。

僕等は十日ばかり妻籠に滯留した。十日の間殆んど懷舊の感に耽る間もない程歡待を受けて、演説と挨拶と下戸のことわりと揮毫と馳走と宿變へと（親類がかはる〲僕等を要求したので）に、ぐつたりとする程であつた。僕等が妻籠を立つ前夕、妻籠の有志者は僕等一行を妻籠倶樂部に招待して、送別の宴を張つた。非常の盛會で、昔の僕の學校仲間、今は村長、町長、縣會議員、其他種々の働き役者になつて居る甲乙丙丁の紳士がかはる〲立つて背に汗する送辭を述べた。最後に僕も立つて一場の演説をなした。先づ此回の歸省について非常の懇情に預つた謝辭を述べ、故郷の繁榮を喜び、其れから轉じて地方と都會の關係に入つて、英佛の例を引いて、國家の實力は地方に存する事、地方の生血新鮮なれば一國の元氣旺盛なる事、文明の頭腦に野蠻の元氣を兼備ふるが今日の急務である事、奢侈文弱の弊を救ひ勤儉力行の風俗を奬勵し都會に汚されずしてドシ〱健全の血液を都會に送るは地方の責任で、殊に地方有志家の責任である事を論じ、故郷の前途を祝して、喝采拍手の裡に演説を終つた。

其夜會散じ、親類の家に歸つて後、僕は獨り飄然と裏門を出て、やゝ久しく徜徉した。恰も高鞍山の肩にかゝつた一輪春の夜の月の光はおぼろに妻籠の谷を籠め、何處を見てもうつら〱と宛ながら夢の國でも見る樣である。僕は畑中道に佇んで、しばらく耳を傾けた。野も山も村も空も寂然として眠るが如き此谷の夜を、流水の音のみ淙々と耳に滿ちて居る。……種々の感想が湧いて來た。過去の生涯は宛ながら卷物の如く吾眼の前に展げられた。實に人の運命程分からぬものはない。人の志望程滿され難いものは無い。昔は錦を飾つて故郷に歸る筈であつた――併し其飾る錦は今何處にあるか。短刀を擬して母に迫られた彼日、是非共父の土地財産を恢復して、祖先の名を墮すまい、と決心した其決心は今も歴と記して居るが、僕は未だに東都

流寓の客であつて、故山に二頃の田も獲なければ、祖先の墓も人手に任してある。併しながらまた一方から考へて見れば、此十九年の間には、種々艱難にも會つたが、幸に心身を全うし、母も健やかに在せば、妻子も出來て居る、故郷に山林田地を有たずも無形の田地は少なからず有つて居る、僕を代議士にと望む有志家もあれば、資格が入用な時は何時でも吾所有地所の一半を僕の名前にしてやらうと云ふ親類もある、鄙名も少しは世に知れて、同志の士も少なからず出來た、要するに故郷で枯れかゝつた菊池の家はまた東都に新芽を吐いて居る……思へば實に上天に感謝する外は無い。感謝、感謝、然だ、僕は實に過去三十年の恩寵を上天に感謝し、向後の天祐を祈り、百敗不屈の氣を鼓して理想に向つて進まなければならぬ。

（六）

拜啓
長物語は前回にて結了候得共、猶一回書き添へ申候。長々御目をかけられし諸人物の最近消息を申上ぐる爲めに候。
野田家はます〳〵繁昌致候。彼後賤江、勝江と云ふ女兒二人加はり候。野田伯母は十五年一日の如く女學舍を監し、令名九州に遍く、此程東京の有名なる某女學校より校長に聘したれ共、當人は勿論、父兄が手離し不申、立消となり候由。清磨君は、彼蒲谷代議士（以前僕の競爭者）があとを承けて、今回の總選擧に衆議院議員となる筈に候。一君と二人で二人黨を組織し、政友會にも、憲政本黨にも、八つあたりをやらうではないか」と申越され候。同君が鵠沼で揚言されし素志—千島以南臺灣以北戸毎に肉を豆腐同樣に食はす事—はまだ實行に遠く候へ共、彼牧場はいよ〳〵繁榮、但し先頃乳牛十五頭まで鵞口瘡のストライキをやつたには困つたと申す事に候。鈴江君は東京に女子大學が興るなら、九州にも是非と專ら躍起となり居られ候由。彼隣の屋敷はいよ〳〵清磨君の手に入り候。僕等も「明月好同三徑夜、綠楊宜作兩家春」と云ふ境涯を他日に期し申候。
松村家は皆健在。僕の舅姑は、來年は大阪の博覽會見物かた〴〵是非上京して孫の顔を見ると申居候。彼偏屈謹次氏も年と共に少しづつ軟かになられ候。
中島の好謡隱居は昨年歿し候。墓に入つてやつと息がつかれたらうと、惡口屋が申候。中島叔母は不相變英雄に候。僕の母に對して、天下の英雄は君と吾と、と云ふ樣な言を發せられ候を承り申候。
石川氏は軍醫監となつて、北方の某師團に勤め居られ候。同氏は醫も上手なれば、處世の術も中々上手に候。遠からず總監は受合に候。
中村新吾君はます〳〵太り（體も身代も）候。最早貝島、平岡及三池等を除けば、九州北部に匹敵者無之候。彼後何處に行つてもカアネギーをふりまはすので、中村カアネギーの諢名が出來候。何時か出京の際僕の母に、「麻布に家屋敷二萬圓と云ふ若旦那のに持つて來いの家がござすが、若旦那が叱りなさらんと、買うて上ぐるとぢやがな」と云つたとか、母が笑ひ居候。南の方はます〳〵勇健に候。曾根君は新吾の用を帶びて目下渡米致居られ候。彼隈谷文學士及金子女史は一向消息を承り不申、大學に關係なき丈は事實に候。

中川家にはいよ〳〵金が唸り候。遠からず男爵になるゝ由の風聞致申候。彼お糸とか云ふ娘には、佛國巴里大學法學博士某と云ふ人が婿に來りし由。

菅先生は日本文學と英國文學の比較研究に關する論文を提出して、文學博士の學位を受けられ候。

キルキー・ブラオン師は病氣保養の爲め關西學院を辭して、一先づ故國に歸られ候。片山校長清水教師皆健在に候。志津牧師は目下東京に來住し、大學傳道に忙はしく候。舊友遠藤君も同樣に候。

前回に書き漏らしたるは、先年歸省の節、一日清磨君と同道舊師中西西山先生を訪問致したる事に候。先生は矢張城西の梅花林中に隱栖して、七十近き體に、寒中も袷で通され候由。尤も近來は歯が少しかけて、粟飯が食はれぬので、蕎麥がきを食ふと申され候。僕を見て、「ほウ菊池かい、大きくなつたな」と云ひ、「國會議員になりに來たのかい」と冷やかされ候。併し段々融けて、半日寬話し、例のとろゝ汁の馳走に、十七年ぶりの師弟會食を致し候。同先生はあまり人と交際せず、野田伯父の緣から、時たま清磨君宅へは遊びに來られる由に候。彼僕の袂に梅子を惠まれた干からびた夫人は、最早五年ばかり以前に歿せられ候。

淺井辯護士の盡力で、西内氏は彼後訴訟に勝たれ候由にて、僕の手許にも禮狀が屆き候。淺井君の所には、實費の外に、謝禮として干物一連送り來りし由に候。母は西内氏の事を氣の毒がり、恰好の婦人があつたら後妻に世話してやりたい、と申居候。

兼頭一道氏は學堂氏等と憲政本黨を脫し候。彼正道少年は兎角横道へきれ込むので、先年國許に呼び戻され、近日結婚する由に候。松山の彼隱居は死亡し、家督の子息は最早追々法科大學を卒業する筈に候。留守はお冬君がきつて廻し候。其後度々緣談の口があつても、盡く斷つて、弟の爲めに留守師團長を致居候由に候。

分家の叔母、從妹お芳及其良人、熊彦坊、皆達者にて猶福岡に住み候。從妹よりは折々母へ手紙を寄せ候。相變らずかつかつにて暮居候樣子に候。他の同伴が上手をやつてずん〳〵立身致候を憤つて、良人がやけ酒を飲みはじめ、從妹も大に心配致居候由。氣の毒なものに候。

こゝに奇異なる話有之候。一昨年の冬、僕は不圖した事より分家の從姉お藤が消息を知り候。從姉は國許を駈落して以來、五人男を拵へて五人に捨てられ、六人目の男と淺草馬道の裏屋に住み居り候。此六人目の男は、巡査にて、人もあらうに僕の舊友彼笠松三次郎氏に候。分家の叔母の依賴もあり、母と相談して右夫婦に旅費を與へて下し、新吾に使つて貰ふ事に致し候。叔母も娘に逢つて本懷と存候。目下夫婦に、長らく妹の厄介になつた彼子、三人ぐらしにて、新吾が下に使はれ、よく夫婦喧嘩をしながら暮居候由。分家の叔父叔母、從姉從妹の事は、細かに述ぶれば其れ丈で一篇の哀史が出來申候。此は他日機を得て、披露仕る可くと相考へ候。

三次郎氏の母君、笠松後家氏は今も追々として、少し芽の出さうな處へは血眼でかけつけ居候由、氣の毒なものと母も申居候。

前の明治評論主筆安藤氏は、實業界に投じて志を得ず、また筆戰場に逆戻りして、日下中立新報の主筆を致居候。淺井君はいよ〳〵阪地に評判よく、刑法改正問題については別に一派の意見を懷き居られ候由、詳細は未だ承り不申候。

湯島の下宿屋の亭主松谷君は今以て時々遊びに來り候。西山塾、育英學舍、關西學院、帝國大學、此四學校の同窓諸友の中、別れた切り頓と名を聞かぬもあれば、街でひよつくり出會つて「やあ」と互に聲かけるもあり、去年北清戰役戰死者姓名中に二人程舊相識の名を見申候。新聞や實際の遭遇に於て、思ひがけない人が思ひがけない處で思ひがけないものになつて居るを見るのは、誰も經驗ある事と存候。已に昨日も育英學舍の俊秀なる當年の一少年が落魄して合力を求むるに會ひ候。五たび業を更へて成らざりし末と申候。人も己の眞事業を發見するまでには中々骨が折れるものに候。發見して何處までも遂行するのは、是亦いよいよ困難に候。逸早く己に恰當の事業を知り得て、固く執つて動かざる者は、幸福に候。僕は知友の才子の中にも、才にまかせて東塗西抹、精力を八方に耗した果は、却て昔吾眼下に見た魯鈍者――精力を一方に傾注した――の下に立つ運命に會へる者少なからざるを見て、哀痛に不堪候。

故郷なる父の墓、第二の故郷なる伯父の墓、谷中なる駒井先生の墓、宇和島なる兼頭君の墓、皆更に四年の苔を加へ候。

最後に僕の一家も幸に恙なきを得申候。母は片手に孫を撫して、片手に婦人矯風會を助け居候。細君は閑を偸んで文筆の練習を致居候。「小公子」位は書けさうなものですねエ、と氣焔を吐き候。愼一郎は尋常小學の三年、靜は幼稚園に、毎日仲よく(時々は喧嘩して)通ひ候。僕は――相かはらず眼高手低の嘆を漏しながら、理想を目がけて蝸牛の歩を運び居候。

終に臨んで、菊池愼太郎は斯面白からぬ長物語に耳傾け玉ひし諸賢の健康を祈り候。早々不悉。

(明治三十四年三　作)

つゆ霽れ（「みゝずのたはごと」の「落穗の掻き寄せ」より）

梅雨中とは云ひながら、此十日餘思はしい日の目も見ず、疊を拭くと新しい雜巾が黴で眞黑になつた。今日はからりと霽れて、歡ばしい日光の代になつた。待ちかれた樣に蟬が高音をあげる。ほやり〳〵水蒸氣立つ土には樹影黑々と落ち、處女が袖の樣に淸々と晴れた空には、夏雲が白く光る。戶、障子、窓の限りを開放して、存分に日光と風とを容れる。

今日の晴を待ちつけた農家は、小踊りして、麥うちをはじめた。東でもばた〳〵。西でもばつたばた。東の辰さんの家では、形は小さいが氣前の好い男振りの好い岩公が音頭とりで、「人里はなれた三軒家でも、ソレ、住めば都の風が吹くウ、ドッコイ」歌聲賑やかにばつたばた。北の金さん宅は口の重い人達ばかり、家族中で歌の一つも歌はうと云ふ稻公は砲兵に、春つ子は小學校に往つて居るので、爺、長男、長女、三男の四人、歌は歌はぬかはり長男の音公が時時「ヨウ」と懸聲に勢をつけて、規則正しくばつたばた。西も東も南も北も勇ましい歡喜の勝鬨。聞くからに心が躍る。

つゆ霽れやたう〳〵〳〵と麥を撲つ

黒潮

謹告

一、斯小説の第一篇はもと國民新聞に掲載せり。而も余は客臘國民新聞と關係を絶ちたるを以て、自ら貲を捐てて刊行せるなり。

一、當時斯小説の讀者諸君に事の由を宣べむと欲したるも、國民新聞は余が告別の辭を陳ぶるを好まざりしを以て、余は是非なく默々として今日に到れり。若し國民新聞の讀者諸君にして或は斯冊子を手にせらるゝの日あらば、余が本意にあらざりし無責任を宏恕あらむことを望む。

一、第二篇は目下起稿中なれば、脱稿次第別に一冊として刊行す可し。

一、黒潮社とは余唯一人の社なり。存するも他の助を假らず、亡ぶるも他の責にあらず。余は他に累を及ぼさずして、思ふさま言ひたきことを言はむが爲めに、民友社を去つて、黒潮社なるものを設けぬ。小説黒潮を初として、拙著は此處より出さむと欲す。讀者幸に諒焉。

明治卅六年一月廿一日

黒潮社に於て

德富健次郎識

* * * * * *

初斯小説を民友社より出す時、君に獻ぜむと思ひたり。今や余は民友社を去りぬ。而も斯小説を獻ず可き者は終に君ならざるを得ず。

蘇峰家兄

余は君と胞を同うして斯世に生れ出でぬ。齢は僅に五年の差、才は乃ち千里の差のみならず。余が幼きや、君に手をひかれて、村塾に通ひたりき。十五六に及びては、君を師として英語を學び、文章を習ひ、自由の大義を聞けり。君が東都に旗幟を樹つるや、余も民友社員の末に列なり、君が指麾の下に立つこと、明治廿二年より明治卅五年に到りて、實に十有四年の久しきに及びぬ。余が經驗、思想、趣味、著作、（明治廿二年に初めて民友社より出版せしブライト傳は君自ら筆をとつて添削せり。明治卅五年に國民新聞に載せ始めし小説黒潮の第一篇は實に其一部のヒントを君に得たり）生活、乃至甚麽の虚名に到るまで、君に負ふ所の如何に多きかは、必ずしも言を費すを須ゐず。狂愚の余を君は忍び、怯懦の余は君に庇はれ、斯くて余は君が翼の下に生ひ立てり。

情義實に如斯。當に君に隨うて地の端にまでも到る可きなり。而して余は君に別を告げ、十有四年の棲遲なる民友社を去り、國民新聞と絶てり。何爲ぞ然る。

他なし。余は久しき以前より我等の傾向

の次第に異なるを氣づきたり。而して此相違は實に氣血と共に生れ出でたる先天的相違なるを認めたるなり。余は此が爲めに久しく煩悶せり。而して、姑息の情に絆されて自ら欺くは、決して皇天の賦命を全うする所以にあらず、また君が恩義に答ふる所以にもあらざるを知りぬ。夫れ人の運命は已に胎內にあつて定まる。松子は松となり、椰子は終に椰とならざるを得ず。主義も同情も要するに自家發展の現象のみ。是故に強き君は自づから力に同情し、弱き余はおのづから弱きに同情す。複雜なる性格の君は、世に處して婉曲を辭せず。單純の余は偏に直截を好む。經世家として君は事功の上に立つ、折衷讓歩は事を成す者の金誡、君が一隻眼は常に利理の抱合點を離れず、君が眼中より見れば文學の如きは唯經世の一手段のみ。思想界に住む者は枉げざるを以て骨とす、文學に籍を置く余は自づから文學の獨立を唱へ、美を通じて眞善境に彷徨せざるを得ず。即ち經世の手段に於ても君は國力の膨脹に重きを置きて、帝國主義を執り、余はユーゴートルストイゾラ諸大人の流を汲んで、人道の大義を執り、自家の社會主義を執る。余は決して君を非とし、自ら是とせず。眞理の山には峰多し。君は彼峰に立ち、余は此峰に立つも、畢竟山外に立つにはあらず。されば君が執る所の道と、余が歩まむと欲する所の道と、其差未だ必ずしも黑白の甚しきに到らず。甚しきに到らずと雖も、我等が趣味の傾く所、着眼の向ふ所、同情の注ぐ所、要するに其動機の相同じからざるものあるは、斷じて掩ふ能はず。

事態已に斯くの如し。余は恩義の重きが故に何時までも君が旗下に逡巡す可き理由あるを見ず。假令君憐んで余が愚を容れ、余强ひて國民新聞の一隅に寄居するも、終に是れ何の要ぞ。若し余が言にして君を累するあらば、君に背くなり。若し君が欲する所に從うて余が言を枉げなば、余は自ら欺くなり。若かず相別れて、おの／＼其道を行かむには。兄弟牀を對するも、夢は東西に飛ぶ。烏鵲今宵一枝に棲むも、明朝は南天北地の身なり。骨肉は情なり。傾向は天なり。各賦命に從うて、自己を發揮せむのみ。湘南の双親老い玉へりと雖も、必ず不悌を以て余を責め玉はざるを信ず。

君が麾下には俊秀林の如し。君を誤解する者素より多しと雖も、君が知己また天下に乏しからず。何ぞ闇弱なる一小弟の去るを惜まむや。余は何人の助をも求めず。孤立には馴れたり。寂寥は余が不斷の糧なり。神明上にあり。衷自信あり。身を天命に委ねて、斃るゝまでは行かむのみ。幸に以て念となすなかれ。

別に臨んで、再び顧みて世の眼前に山の如き君が恩義を謝し、敬意を表し、君と君が社中の健康を祈らしめよ。而して斯拙き一篇の小說を留別として君が机前に獻ぜしめよ。

明治卅六年一月廿一日

弱弟　蘆花生謹識

＊　＊　＊　＊　＊　＊

第一篇

第一章

（一）

明治廿年四月の初旬、東京は麹町區内山下町の呦々館に貴婦人連の催にかゝる演藝會が開かれた。

主意はやんごとなきあたりの思召を奉じて、海防費獻金の資を作る爲め、と云ふ。既に畏き勅語と共に御手元金三十萬圓の下賜あり、總理大臣は旨を各地方官に傳へて全國の富豪に獻金を促し、奉公の時節は今ぞと續々獻金者も顯はれる今日、苟くも社會の上流に立つ者、婦人と雖も豈一片憂國の念なからんや、とあつて偖こそ此演藝會は成立つたのであつた。左れば主意書の末に、某々妃殿下御賛助と恭しく二號活字の鮮やかなる下に、某々公爵夫人侯爵夫人伯爵子爵男爵夫人のずらりと名を並べたのを見ても、當日の御用新聞がしかも社説欄内に特筆大書「吾曹は我上流貴婦人の方々が畏き思召を體して此美擧に出でられしを感激措く能はざるものなり」と感激したのを見ても、其尋常一樣の慈善演藝會の類で無いのは分かるのであつた。

開會は午後六時。五時過ぎから、馬車、車、車、馬車と引き切りなしに呦々館の門内に流れ込んで、イヴニングドレスが下りる、白襟紋付が下りる、高帽が下りる、フロックコートに造花の緋櫻の徽章を帶びた接待係の連中が案内して入る、出る、奔命に疲れきつたが、七時過ぎには後れ馳せの參着も絶えて、海軍樂隊吹奏のあとを巳に番組も大分佳境に入つたと見え、光溢るゝ四十幾個の窓から、時々拍手の音や笑聲が漏れた。

庭には今を盛りの櫻花の間々に、球燈は紅の星を掛け、瓦斯燈は薄紫の晝を作つて、光の息つく毎に滿庭の花の雲薄れ顯はれ、春の呼吸は此一庭に搖ぐ風情。門の内外には警官の幾人か晴れがましい光に立つて居る。西の車寄には百輛近くの馬車が並んで、嘶く聲、前蹄で砂を爬く響。幾百輛とも知れぬ車は門内から溢れて、垣に傍うて百足の如くずらりと列んで居る。空には十幾日の月がぼんやり眺めて居る。

「畜生」

また一しきりさゞめく館内の笑聲を、忌々しげに表門外に立集つた群衆の中から叫んだ。

「――何を騒ぎやがるんでい」

言の下に、

「退け／＼」

叫びながら走せ來る黒鴨仕立のあとにつゞいて三歳黒の二頭立、ぱつと退く群衆の中を轣轆と門内にかけ込んだ。

（二）

場内では、今圓朝の鹽原多助が終り、さし代つて拍手喝采の中に越路廣助の二人が相並んで演壇に上つた所である。

舞踏室の正面、一段高く設けた演壇は燃え立つばかりの猩々緋の毛氈を敷きつめて、後に銀屏の光眩ゆく、天井から釣つた大瓦斯燈の眞晝の明を猶も足らじと銀燭二臺壇の左右に立てたので、壇上の二人が赤光りに光つた顏の毛穴も見うる位。

演壇を中に、右手には、某々親王殿下某々王殿下の金枝玉葉を初め、内閣大臣、外國使臣、公侯伯子男爵の人々、海軍は殊に多く陸軍も少し、高等官、紳商。左の方は各親王妃王妃殿下を第一に、桃紅色、すみれ、ひは、花や

かな色を競つた洋服の間々に白襟紋付、振袖の床しきを點じて、百花亂るゝ其處此處に露と光れる金剛石の閃き、牙骨の小扇色ハンケチの閃閃する毎に、なまめいた香はふは〱浮いて、迷うて、其れきいたばかりですき者は消え入りさうな。

今、廣助が冴えた撥音の二聲三聲に、滿場のぞよめきぱつたり止んで、水うつた樣な大廣間、谷の戸出づる鶯の音にもまさる越路が美音、

「――入りにける、人の心の奥深き山科のかくれ家を尋ねてこゝに來る人は――」

と語り出す途端、東側の扉が開いて、緋櫻の徽章の案内につれ、二人の男が顯はれた。つい近くの席がふつと其方向くを宛ながらの相圖に、滿場の視線は云ひ合はした樣に二人に集まる。

前のフロツクコートは四十四五の矮男、たつぷり肥えて、顏色の黄な、唇の薄い、何處やら卑い素生を思はす面相。滿場注視の矢先に立つて、にやり笑を浮べ、悠々と白手套をとつて、會釋し玉ふ皇族方に目禮し、中腰に立ち上がる外國使臣の人々と一寸握手し、其れから間隔てて此方を見玉ふ各御息所に一禮し、彼方此方に點頭して、接待係が鞠躬如としてすすむ前列の椅子にやをら腰を下ろして、倨疎髯を撚つた。此は當代の日本に飛ぶ鳥を落す藤澤伯である。

伯爵を導いた接待委員の案内を待つて、扉の邊に突立つた他の一人を、會衆一同――暫しは越路も三味も忘れて――不安の念を以て熟視した。六十四五にもならうか、と思はるゝ、昔は嘸、今は骨あらはに、而も見上ぐるばかりの老人。左眼をぐる〱卷きの繃帶が頭の大半を隱して、白髮疎らな禿頭の一部と頰から顋へかけ鮫の齒を拔く短髯と、其れから見開くたびに兩眼の力を此一方に集めたかとばかり稻妻を走らす血ばしつた右眼と、此れ丈が繃帶を免れて居る。武田菱の五紋の淺黄羽織、折目の深くついた茶縞の仙臺平を穿いて、腕を組み、晴れがましい瓦斯の光に、例の右眼を瞬き、額を蹙めて立つて居た。

「誰だ?」

「何人でせう?」

唯有る空席に、彼老人を導いて、靴音を竊み竊み下がり來る緋櫻を、プログラムを持つた雪白のカフスが引とめ、

「誰だい?」と小聲。

「知りません」

「でも君が案内したぢやないか」

「此(接待委員は拇指を見せた)と同乘で來たんですが、――一向分かりませんな」

(三)

件の老漢は、四邊の注目、疑訝、密語に頓着なく、やをら席に着いて、接待係が持て來たプログラム受取つたれど其を見るでもなく、演藝の其に耳傾くるでもなく、手を拱き、例の繃帶を免れた右の一眼を光らして、物珍らしげに、天井の瓦斯燈を眺め、會場の花やかな裝飾を眺め、綺羅を飾つた會衆の容子をじろじろ眺めて居たが、何時しか苦々しげな冷哂が唇に溢れた。

遲刻の到來に一寸それた滿場の注意は、再び演壇に向つて、靜かなること林の如き場中に、宛轉と繰り出す越路が肉聲の美は、文句の麗、其に絃聲の妙なるを添へて、節一節語り進むにつれ、明治廿年四月の喨々館は消えて、時は元祿、場所は山科の閑居に、嬌癡の娘戀にもだえ、虛無僧の尺八斷えては續き、義理堅い武家女房のつめひらき、今其處に聞く思して、心を空に聞き惚るゝ會衆。つい鼻先に黑光り

に光つた髑天から眞二つに分けた頭がひよこひよこ拍子を取つて居るかと見れば、婦人席には可惜千金の涙を惜氣も無くレースの縁とつた舶來のハンケチに拭き玉ふ容子を、件の老人は忌々じげに、眼を閉ぢたが、委細構はぬ語り手はます／＼語り進んで、今は終の三兩句――「南無阿彌陀佛、なむあみだ、是れや尺八頓惱の――心殘して」と一調子張り上ぐるを相圖に、雷の如き拍手、眼を開けば壇上の二人は平伏して居るのであつた。

此れで休憩前の番組は濟んだ。滿場の會衆はつと息ついて、扇が閃く、手巾が戰ぐ、夕立の如きざめきの中に、海老茶の洋服の胸に造花の一重櫻を帶びた、下ぶくれの極めて大きな顏を眞白に塗つた三十恰好の婦人が演壇の下にあらはれた。

一誰ですな、彼女は？一邊鄙の知事とも思はれる胡麻鹽頭が隣席の美髯の顏を覗いた。

一彼女ですか、彼が北島龜代子です。

一彼が！？――何處が美人です？」――北島龜代子の名があまり高いので、てつきり美人ときめて居たのであらう。

「さあ？」美髯はにやり。

北島は當夜の會の幹事の一人として、一不束ながら私が貴婦人方一同に代りまして一を冒頭に、盛會の謝辭、思ひがけなく各公使閣下及公使館員諸君の來臨もあつたので休憩後の番組を差更へ花柳門下某々女の手踊及來遊中の名手匈牙利人コマロッフ氏のギオリンを一曲奏すると云ふ事、其れから入場券の賣上は意外の成功であつたが、猶も來會諸君子の好意にあまえ當座の義捐を募る爲め今帽を廻すによつて暫らく此まゝでと云ふ意を淀みなく述べ終つて退いた。

突然婦人席の横手の溜りで花やかな陽氣な海軍樂隊の奏樂が始まる。と、正面の扉がひらりと明いて、春風百花を吹いて群蝶のひら／＼と起つが如く、十八九以下の令孃約十七八人、手に／＼帽を捧げてあらはれた。

左なくとも恍惚となる春の夜を、生温き此處の空氣に蒸され、花やいだ奏樂の音に浮かされ、花の如着飾りし妙齡の、洋服の裾振袖の袂のあふりに白薔薇を薫らせ、大方は舞踏交際に馴れし口輕く、「今此頂戴――お出し遊ばせな」と寶石光る手に帽をさしつけられ、男子は殊に一溜りもなく、藤澤伯を初め、公使達は此が他日我國をうつ砲彈になるかも知れぬと思ふ間もなく、一錢の徴を積んだ紳商は海軍獻金をさして入場券も賣りつけて、加之中錢まで取るのはひどいと怨ずる間もなく、紙幣は閃々、金貨銀貨は鏘々と帽に落ちて、

「さあお出し遊ばせ、其お時計でも可いわ」

「御苦勞さま」

「些とお遊にいらつしやいよ」

場内湧くが如き賑ひを、彼老漢は苦々しげに見遣つてゐたが、不圖人の氣はいがしたので、ふり向くと、十二三の極めて端麗な令孃が帽を捧げて、立つて居た。

笑みもせず、含羞むでもなく、きつと澄ました、小作りの貴夫人と云つた樣な兒、帶際以下を白うぼかして落花流水の模樣をあしらつた古代紫の振袖に白をかさねて、絲錦の帶を胸高にきちんとやの字にしめて居る。切り下げた前髪に額の雪を透かして、純黑の稚子髷に銀びらつきの舞鶴の前插を一つ。やゝ面長の、鼻筋のよく通つた、透徹る程白い上を淡り粧つて、ぽつちり紅さした小さな唇をきつと一文字に結んで、男に欲しい濃い眉を冠つた眼はぱつちりと凜々しい黒目勝の、些も恐れず老漢を見つめる。

小貴婦人は老漢を、老漢はまた小貴婦人を、あからめもせずうちまもつて居たが、やがて老

爛の手が懐に入つて、古びた羅紗の紙入が出て、銅貨が六枚ばかりと傍に落ちた。紅をした小さな脣が些と開いて、可愛い乳歯が一寸見えると小貴婦人は一禮して立去る。

「嬢さん〳〵」

老漢の隣席に坐つた羽織袴が遽しく呼んだ。揚羽の蝶の紋を辞めて、やの字の竪の秀でた肩越しに、小貴婦人は顧みる。

「上げませう〳〵」

羽織袴は五圓紙幣を閃かす。流眄にぢいと彼方の顔を見て、小貴婦人は返事もせずずうと行つて了ふ。

「威張つとるね、併し非常の尤物――待たれるぞ、五年の後が」すぐ後の方で小聲に囁いた者がある。

「彼母にして此子ありさ」黄ろい聲が囁く。

「誰家の嬢かい？」

「なんて、婿入の周旋は眞平御免だね」

「馬鹿な。一體誰の嬢だい？」

「よく聞きたがるね、――彼女は君、喜多川嬢――」

「喜多川！――喜多川伯？　彼評判の何かい――いや彼父にして此子ありで、騒がれた日にや、男子は皆しだな」

「―だから君の様な聖人に教育を頼む事だ――いや其れこそいよ〳〵事かね。ふゝゝゝ―」

恰も轍は限なく巡つて、皇族方が先づ休憩室へ立たるゝを相圖に、滿場の會衆ばら〳〵と立つて、宛ながら大濤の礁に碎けて千穴百縫に滿つる如く、喫煙室も、露臺も、婦人室も、廊下も一時にさゞめき渡る。

（四）

月は今中天近く上つて、花睡り去る時刻を、馬は焦つて嘶き、供待の車夫馬丁は欠伸ばかりして居る其に頓着なき館内の賑ひは絶頂に達した。特別室の彼方は戸に隔てられて見えぬが、今此方の露臺では、意地悪さうな三角顔の長田伯が、珈琲碗を持ちながら、「此様な歌を作つた」と狼の獨吟、此方はほく〳〵、己を意氣地なしの様に嘲つた縣會議員めに伯爵閣下と乃公と斯心易さを見せてやりたい、などと好人の知事が思つて居る。奥州の、二歳の、青の、黒のと馬喰大臣の講釋に馬は四足の定義より知らぬ高等官が覺束ない相槌をうつ彼方では、日本のヴァンダルビルトをとらへて、「此間の雪舟は是非譲つたもはんか」と贋畫賈占掛の某貴顯が迫つて居る。彼方の廊下では、紛れ込んだきよろ〳〵眼の新聞記者が外務の若手を引とめて、「おや、會來何ですな」わい〳〵逆に騒がれちや困る、祕密にして呉れ玉へ」と祕密を破つて居る。此方の隅では、鉛筆を胸衣兜に、プログラムを手に持つた側の緋襷の男が三四人、「男子ばかり使ひあがつて、困るぢやないか」と困つて居る。

婦人室の廊下では、幹事接待委員の徽章を帯びながら其様な面倒は重寶な男子に背負せて、「ボールドレスを着たりして、外國人の手前もあるわ」とつい先日某外國公使夫人に洋服の着こなしをお世辭にほめられて忽ち洋裝學卒業の淑女が慨嘆。此方の一人は、「わたくし大名華族は大嫌ひ、昔時ではあるまいし、何時までも主君氣取で、高慢ちきな」と先刻車にのる玄關で、頭が高いと小間使に一本參つた其には頓着なく、彼方の婦人室の正中にちんと澄ました反歯の公爵夫人の横顔を燦然其襟にかゞやくすばらしい金剛石のブルーチと共ににくさげに睨んで居る。

「ちよいと、あなた、假裝舞踏會の趣向が出來て？」と婦人室の入口で、藤色の洋服の十八九が同年配の桃紅色を要する。

「オフェリアにしようと思つて居るのよ、散ら

しにすつかり花をさして――」
「其は宜いわ―但其赤毛に花を挿したつて如何なる―のかと云ふ意味で。
「本當に忙しいのね、晝日中假装博覧會で、夜は又それから英語演說でせう――ロザリンドの台詞が覺えられなくて〳〵」
「オルランドは誰？　さう、金井さん、大學の、彼の二枚眼の、一寸新駒に似た――まあ落つて頂戴よ」
「いやよ、失敬だわ、ほゝゝゝ――新駒つてば、何故新駒をプログラムに入れないのでせう。音羽屋の先頭なんか見たつて仕樣がないわ」
「木下順の行李には、福助が勸進帳の義經をするのですと」と歩み寄るひは色。
「杉本さんに聞いたのよ」
「本當？」
「左樣？　其れぢやまた仕事が殖えたわ。何だつて此樣に忙しいのでせうね、昨日も舞踏、今日も夜會つて、洋服を着たり脫いだりするばかりでも大抵ぢやないわ。此頃は、毎晩踊る夢ばかり見て、さめると足をぴん〳〵して居るのですもの、此が本當の舞踏病だわ。最早あき〳〵よ」桃紅色の自慢の三日月眉が一寸顰む。
「だつて條約改正の一助ぢやありませんか。洋服を着て踊るのは吾々の義務だわ」
「まあ、愛國者！」
「いやよ、北島さんであるまいし、――北島さんてば、立派な事を云つたり書いたりするくせに、ひどいのよ。此間もね――」藤色の口もとに二個の頭がつと寄る。
「まあ、本當？」
「本當ですとも、下婢に聞いたんですもの」
「ぢや藤澤伯のも本當でせうか」
「'Tis quite possible よ」
「喜多川伯爵夫人ね、彼方が藤澤伯……て云ふのは、本當でせうか」
「嘘よ」
「でも先刻藤澤伯がみち子さんね、喜多川の、彼澄ました兒――彼女を皆が美人の卵なんて云ふけれど、わたくし彼樣な儀式ぶつた兒は大嫌ひ」
「藤澤伯がみち子さんを如何したの？」
「なに、ね、先刻藤澤伯が彼兒に、『阿母はいらつしやらないか、宜しく』なんか云つて居たんですもの」
「藤澤伯が如何ですつて？」
其驚見かへる三人の眼先に北島皐代子の大きな額がぬつと。紅桃色は殊に赤くなつて、口籠る。
「最早直ぐヸオリンが始まるのです、其樣な處に立話しないで、廣間へいらつしやい」
「はい」云つて、北島の後姿を見ると、桃紅色は一寸肩をすぼめて、舌をぺろり。
「ちよいと――先刻の」藤色が頤でしやくる彼方を、太陽系に飛込んだ彗星と云ふ體で、腕組してつか〳〵老人の姿。
「王リアの樣ね」
「チモンぢやないの」
老人は車寄の方へ出て行つた。

（五）

東京歸りの田舎大盡が、食ひ馴れた田舎料理の急に鼻につき、見馴れた庭の田舎臭きを嫌つて、無暗と改革をあせる樣に、洋行歸りの眼に何事も見すぼらしくまどろかしく、既に憲政の基礎も定まらむとし、議院の開設もつい鼻先につつかけて居る今日、風を移し俗を易ふるは目下の急務、其には令を流水の源に下して、上流社會から始める事だと考へついたのが是れ一つ、實は父祖の代から壓制されて頭が上がらぬ下賤の地位に生れて果報いみじき少數の富貴榮華が羨しくて溜らず欲しい〳〵と沸きかへ

つた其父祖傳來の血が今陽春四月の時に會うて千朶萬朶一時に花さいた其れ一つ。其れから今一つ、一夜作りの文明に外人の眼を眩まして條約改正とは、室咲きの梅一輪見せて、其れ春が來た、約束だ、貸して置いた布子を返せ、と云つた樣な話、振舞酒に醉つて、世辭は振薄くとも本性違はぬ懷中の算盤勘定高な外人が其手に乘らうとは些受取り難い話なれど、やつて見る者にはやつて見る事が出來さうに思はるるもの、兎に角國會前の片づけ仕事、其には此も近道と、或年或月或夜殊に熟懇の甲乙が葡萄酒の盃を手にしての談が直ぐに事實となつて、がつくりうなづいた藤澤伯が頭は大黑天の寶槌、忽ちに七寶世界榮華の城をこゝ日本帝都の中央に幻出したのである。されば、今吻々館の別室に御相手をして居た皇族の御前を罷つて、煙滿ちたる喫煙室の安樂椅子に腰を下して、葉卷をつけた藤澤伯の心地は、已が嘯いた雲にのつて游龍の長閑な心地であつた。

「藤澤さん」

碧煙の絶間から、眉の太い、眼の細い、馬鹿な樣な、人を馬鹿にした樣な南條伯の顏が三分二ばかり。

「今其話をした所ごあんすが、土屋の新聞に、藤澤君を太政入道に比しちよる云ふ事ぢやが——」

藤澤伯は唯にやり。萬人の頭は下げさす、議論ならビスマアクでも御相手になるが、此伯の眞綿の針のちく〳〵刺ばかりは、五寸足らぬ身長と共に奈何ともし難いのである。

「新聞屋は失敬ぢやごわはんか。わたしが思ふ所ぢや藤澤君は清盛よか餘程エラか」

藤澤伯の胸はひやり。其處此處に落を待つ氣はひ。

「清盛も好色は好色ぢやつたが、常盤でも、妓王でも、新しかとが來つと舊ものは棄てたもんぢやが、藤澤さんは博愛ぢやから」

哄然と笑聲が煙を搖つた。藤澤伯はまた唯にやり、葉卷の火を赤き螢と光らせて居る。一來、今夜は上機嫌なので。二來、怒るとます〳〵馬鹿にする南條伯の機鋒を知つて居るので。

「其新聞は吾輩も見たが」と煙の中からさきに露臺で自作の歌を吟じた聲が云つた。

「見たが、色々脅嚇的な事を言つちよる。平家は全盛でも諸國の源氏は時を待つちよる、いや膝下に隙を覗ふ源三位の老爺があるかも知れん、なんか——」

「や、忘れた〳〵」藤澤伯は俄然膝を拍つた。「——來海君々々」

二十七八の色白の秘書官づくりが進み出でて小腰をかゞめる。

「東を呼んで呉れ、東を」

「は？」大凡知名の人士に其名と其面を識らぬ者なく、わが識らぬ者は識るの値なき者と誇つて居る此秘書官は、一秒の十分一の間に胸中の紳士錄をさら〳〵と繰つて、東の名を見出さなかつたので。

「東よ、先刻吾輩が連れて來た——」

「は」遲かりしを恥づる樣に、秘書官は電の如く消えたが、「彼が東——」と南條伯の云ひ切らぬうちに、また電の如くあらはれた。

「如何した？」

「お歸りになつたさうです」

「歸つた？」

秘書官の後から緋櫻の徽章が進んで、「唯今でした。よろしく申上げて呉れろと云ふことで」

「歸つたか。いや——」

休憩の終を告ぐる樂隊の奏樂。ばら〳〵と立つ人の足音。

「いや中々手硬い老爺よ」

獨語つ樣に云つて、藤澤伯は立上りざまに葉

巻の灰を彈き、南條伯と肩を並べて語らひながら徐々廣間の方へ行つた。

第二章

（一）

吻々館の門を出るとやがて雇つた辻車を、老人は下二番町の唯有る門構の瓦斯燈に青柳の二字を書いた家の前で下りて、がらり小門を明けた。

「おや、お歸り遊ばせ」

出迎ふ十八九の色白の、慧しいよりも寧ろずるい眼を有つた小間使が、顏見るゝ迯つたと云ひ貌に素氣なきを、委細構はず老人は突々と奥二階に通つて、眞暗な中に突立つて居ると、やゝおくれて小間使が行燈ランプを持つて來る。

「十郎は留守かな」

「旦那樣は未だ御歸り遊ばしません」と旦那樣を強く響かす。

「奥樣は？」

「奥樣はお風呂を召していらつしやいます」

「吭、其樣か」老人はどつかり座蒲團に坐つて、ぬいだ羽織袴を押遣り、「たゝんで置いて呉れ」

小間使は一寸眉を寄せたが、其れでも次の間へ持ち出して、にやり笑ひながらたゝみにかかつた。

「卿達にも世話になるの」

「如何致しまして」

と云つて小間使はまたにやりした。およそ青柳家に出入するは、玄關から來るのは何れも美服して馬車で來なければ金紋付の抱車、勝手口から小腰を屈めて來るのはお疎末ながらと上下の召使一同に何か遣物はきまつたものになつて居る。何者の田舍漢ぞ、手拭一筋土産を呉れるではなく、旦那の兄で候と威張りあがつて、彼は何でも甲州の猿だよ、山猿だよと、一昨日の夕方古びた柳行李一個もつてぶらりと青柳の玄關に老人が來た以來女中部屋の宣告であつたのである。

「唯今お茶を點れて參ります」

羽織袴を片寄せて、小間使は立つて行く。

老人は火の氣の無ささうな火鉢を擁して、大きな欠伸一つ、繃帶せぬ右の眼を瞑つて、やがて何事かうつとり考へ込んだ。

（二）

余輩が老人と呼び、藤澤伯が東と云つた彼不思議な人物は、元來何者か。物語を續ける前に、說明の必要を感ずる。

老人の名は、東三郎と云ふ。六十四五に見えると云つたが、曆の年は五十七歲。舊幕府の旗本。殆んど二十年ぶりに甲府在から出京したのである。其所要――所要を述ぶる前に、少しく其出身を說かねばならぬ。

嘉永安政――元治慶應と十步九折千變萬化して而も一尺を流るゝ毎に萬弩の勢を加へた激流が今維新の斷崖に漲り落つる慶應三年の秋、將軍慶喜に從つて上洛中の幕臣に東三郎と云ふのがあつた。元は武田浪人の德川家に仕へて十何代、甲州流の軍學師範は、三郎の代となつて蘭學修行、蕃書調所の出仕から一時軍艦奉行心得の樣な事をやつて、江川、川路、小栗などの名が交游簿中に見えた。世は麻の如く亂れて、人の實力を試す可き時は來た。海外の書を讀み、要路に近く、史を讀んで尊王の義を知り、情によつて主家の恩を思ふ東三郎は、外にあつて漸次の開國、內に在つては公武合體、德川家を總理大臣に天下の政を爲すと云ふ越前流の、古嚢に新酒の說を執つて居た。討幕の密勅の下つた其日までも、東三郎は容堂後藤の說を信じて、兎に角一應は政權返上をと將軍に慫慂した家臣の一人であつた。併しながら

幕府の日は已に過ぎて居た。剛膽の岩倉、大久保、西郷等が決心はとく已について居たのだ。返上した政權は正に受納される。慶喜を除外し薩長を心核とした新政府は立つ。賣られた——と怒るも無理であらうか。東三郎が薩長の陰險——及び土州の反覆——を惡むの念は火の如く燃え起つた。

前將軍京師を引拂ふ。伏見鳥羽の戰は戰はれる。東三郎は前將軍に從うて海路江戸に還る。追つ樣に海道山道を寄する錦旗。江戸は鼎の如く沸きかへる。溜り兼ねた若殿原は、箱根に走り、笹子を扼する。此は一大事、追つかけて取しづめよ、と早打に重き者幾人か走らす恭順派の命により、近藤勇土方歳三等の猛夫を取しづめ、甲府の人心を鎭撫し、過なからしむる樣との旨を受けて、時は明治元年二月江戸城中市中上を下へ血眼になつて騷ぐ中を、七十の老母と臨月の細君を出入の手堅い商家に託し、傳家の寶刀夜叉丸を帶びて東三郎は甲州路に走せ向つた。

あゝ併し此は狼の鎭撫に虎を遣るのだ。東三郎は鎭撫を名として甲府に入り込み、敵愾隊を募つて近藤土方と氣脈を通じ、遺憾、目指す薩長の本軍ならぬ土州勢を相手に勝沼附近の一戰、隨分と手いたく戰うて、手づから夜叉丸の寶刀を揮ひ敵十三人まで切つて棄てたが、彼衆に此寡の敵しかねて四散八落の敗軍。落ち行く途中を流彈に股を貫かれて、巡邏隊に捕へられ、已に斬に處せらるゝ所を、土州の大隊長に知る人あつて死一等を減じ甲府の牢に忘られたる樣に一年あまりの禁錮。明治二年五月の末、牢を出た時は、股の傷は癒えたが、花落ち葉茂りて世はさても變つたものになつて居た。

(三)

江戸は東京、慶應は明治、本丸は御駐輦所、前將軍家は蟄居、旗本八萬騎は四散八落、德川武士の江戸兒の意地を示した五稜廓の陷落をきつかけに舞臺は全く一周した。何處を見ても勝ち誇つた隼人の健兒が大手を振つて、狡猾な長州兒が揚々として往來して居る。德川の天下は何處に行つたか。牢を出て、ぶらりと江戸の東京に歸つて、櫻田門外に立ちながら本丸を眺めて、東三郎は生れて初めて火の如く熱き涙を落したのである。

併しながら最早死す可き時は過ぎて了つた————死ぬるなら晩くも勝沼の敗軍に股を剔られた其時腹かつさばいて死ぬ可きであつた。最早晩矣。負けるは實につらい、負けた上に負けたと白狀するのは得て忍ばれない。死は二重の敗北である。東三郎は終に生きた。併しながら今の東京に留まるは、愛兒の死骸に取りついて居る樣なもの。さればとて、八百萬石が七十萬石となつて、一萬石五千石の大身も豆腐一丁心のまゝに買へぬ靜岡へ行つて、舊主家に迷惑をかけるも、素より欲しない。東三郎は、遠くは祖先出身の地、近くは吾戰うて敗北し捕はれて錮せられた甲州の地を擇んで、甲府在の富士見村に退いた。——其家眷と家とは如何なつたか。

番町の屋敷にはもと長州騎兵隊の中隊長某が住んで居る。妻は時の騷ぎに血逆を起して、胎内の兒と共に土中の人となつた。七十の老母は、移り行く世の樣に、媳の最期に、半狂氣して自害した。實に御賴甲斐もなく、御目にかゝる面目もございませんで、と神田鍛冶町の今義平と呼ばれた藥商越中屋儀兵衞は、涙と共に一包の位牌と遺髮と古金の箱と系圖と御朱印書と大小五本葵紋服一襲を藏めた葛籠を三郎の前に出したが、實は儀兵衞其人も僅かに生命と素立の家を取りとめたのであつた。

東三郎は甲府在の村に退いた。浪々の身には似合はぬ古金の貯もあれば、多くの士には

似合はぬ理財の心得もあり、節倹と勤勉は平素から鍛ひなした習慣なので、さまで寒からぬ生計を營むを得たのであつた。廣からずも田地家作を買ふ。少なくも、人も使ふ。農作をする。家塾を起す。撃劒もやる。書も讀む。獵をする。人の媒妁で、さる士分の娘を後妻に迎へる。男兒一人擧ける。足は郡の境を出でず、名は一村の郷先生として、こゝに約二十年、夢の間に過ぎた。東三郎は眠つて居たのか――否々二十年前薩長諸人の亡狀に對して燃え立つた無明の業火は、種々の油を添へ、薪を加へて強ひて閉ぢた脣の裏に今も炎々と悶えきつて居る。人代り世移つても、斯一念は痼疾となつて心を蝕ふのである。此だ、年よりも早く老いしめたのは此痼疾である。彼は富士の山蔭から眼を光らして竊かに天下の變を覗つた。

德川幕府を押流した維新の潮流は滔々と流れ行く。薩長其他伴食の輩は、順風快潮に帆を揚げて、鼻歌ながらに梶をとる。初め逆流を溯き出した輩も、漕ぎつかれて、舟にとりつき、流れに從つて一瀉千里の快と安とを貪る。曰く雲井龍雄、曰く某、曰く某々、一杯の土を握つて流れを堰かん塞さんとする輩は、脆く間に溺れて了ふ。征韓論の[illegible]喧嘩、引つゞいて佐賀、萩、秋月、熊本の小波瀾。東三郎は纔かに髯を撫でて含笑んだが、其ものにはならなかつた。西郷起つ、と聞いた時は、先きに甲府在の農民が納租の事で竹槍席旗縣廳に押寄せた時見かへりもしなかつた東三郎は、流石に心動いて、竊かに刀の塵を拭つた。併しながら翻つて思へば、大久保を西郷にかへた所で、畢竟一の武斷的薩閥を以て文斷的薩閥に代ふる所以ではあるまいか。三郎はぢつと形勢を見て居た。起つかと期した土州は終に起たない。折角燃えかゝつた西南の火は城山一陣の嵐に吻と消えて了ふ。而して薩長政府は舊に仍つて萬々歳である。やがて梶取の甲東が斃れる。今度こそはと、三郎は眼を見張つた。併し薩長政府の船は動ぜぬ。――其は時勢の潮流に乘つて居るのだ。梶取斃れて微塵と思つた船は、梶取の蔭に隱れて居た小わつぱの梶取で、また恙なく進行をつゞける。明治十二、三、四、五年の國民的波瀾の瀬戸では、船の上も頗る狼狽のさまも見えて、三郎の眼は閃いた。併し其も一時の空頼み、右に漸進の詔勅の油をこぼし、左に鎮壓の笞、板を投げ入れて乘り越したあとは平潮千里、船は何處までもと擅まゝに駛せるのである。

斯くて二十年、いち早き霜は雨鬢を侵して、東三郎は終に帝都の土を踏まなかつた。

（四）

人我の見を除却すれば、勝と云ひ敗と云ふも、得意失意唯是れ車井の釣瓶の上り下る間の事、もとは同じ繩に繋がれて、水汲上ぐる自然の機關。大海の水の此は男波と立ち、彼は雌波と伏すも、畢竟一彈指頃の皮相觀、やがて伏者起つて起者伏すも、大海の水は其一滴をだに増さず減ぜぬ道理。と悟つて見ても、勝つて嬉しく、負けるは口惜しく、所詮割の合はぬは此自在の大宇宙に情と云ふものを持つて生れた人間の上であらう。

東三郎は二十年間帝都の土を踏まなかつた。二十年と云へば、磯の角石も大分圓くなり、折れた柳の古株から吐いた新芽が床柱にもなる月日である。黑門の飛彈に坊主にされた上野の櫻も、若枝を出して、已に十數度の春に咲んだ。過渡時代の亂軍には、敵となり味方となるも一切夢中、醒めて後は何も可笑しき昔語り、彼時君を斬つた奴は濟まんが斯く云ふ僕だ、ひどい男だ一つ飲め、とさす其手をとつて、肴には君を斬つた彼刀を獻じよう、と云ふ世の中。

千島の果から沖繩まで皆王臣皆日本人、舊主家の當代も華冑の筆頭となつて新年參賀に逸早く馬車を驅せ、伏見鳥羽に互に肉を喰はんといがみ合つた薩長會桑の武士が觀兵式に馬を並べて大元帥陛下萬歳を唱ふれば、創業時代の人才人用に元氣は地方の勝者にあれど經驗智識は敗者の幕府に多かつた所より牢屋から一足飛びに新政府に飛び込んだ幕人も多く、中には臺閣に上つた者もある位、本所の月夜に涙を垂れて禁辭を讀み濹上の花に盃を銜んで愁腸を賺した二三の多恨子を除く外は、大方は世と推移つてきつて廻はす世の中。賊魁と云はれて泥を塗られた巨眼翁にも贈位の御沙汰が聞えて、元老院の蔭から疥腕を出して明治政府を捻ぢ倒しにかゝつた長顎兒も監獄の長座に居縮まつた足のしびれを華聖頓の舞踏で直す聖代の恩波洋々到らぬ隈なき世の中に、何を苦み誰に賴まれて何を望んで、東三郎は炎々の心火を燃して居たのであらうか。明治の初年、一たびは兵部省に、一たびは海軍部内に、一たびは某縣の權令に、召出されもし、推擧もされたが、其度毎に頭を掉つて、終に出なかつた。多事の世、多忙の人、振る袖を引張つてばかり居られぬ、推擧した輩もつい遠くなる。世は全く東三郎を忘れ果てた。

世は三郎を忘れた、併し三郎は世を忘れなかつた。新政に對する三郎の惡感は、二十年の日波月瀾を以て洗ひ去るにはあまり深く浸染こんで居たのである。三郎も今の時は昔の時にあらず徳川氏の日はとく已に沈んだ事を知らぬ程の愚ではなかつた。また自己が世の風潮におくるゝを感ぜぬ程の鈍ではなかつた。足は峽中を出でずも、東京の新聞新版の書籍は少なからず机上に積まれたのであつた。併しながら三郎が岸上に跏趺して昔を顧み哀しむ間に、世は駸々と進んで、風潮に乘ずる薩長政府は飛揚して馳つて居る。吾時勢におくるゝと云ふ感がおぼろに胸中にさし來る程、新政に對する憤恨はます／＼深くなる。彼は明治政府を如何なる手段で如何に革め如何に善後の處分を施すと云ふ事については、精明なる經綸を缺いて居た——たゞ明治政府と東三郎とは兩立する能はずと云ふ感を二十年一日の如く懷いて居たのである。而して朝々顏洗ふ盥の水に映る吾影の風ならずして皺み雪ならずして白きを見る毎に、長かれと祈る命の或は新政より短からんかと憂へて、一子晋に腹中の火を吹込んだ。

（五）

東三郎が一子晋程妙な兒も少ないものである。甲冑を着て母の胎内を出なかつたのが不思議、呱々とあげた初聲から開戰喇叭の其に似て居た。胎内に居る頃から腹壁を突貫しさうに暴れる。加ふるに難產、加ふるに色黑の不美男、其れで母は初から餘り愛憐を有たなかつたが、父三郎は生立つ程吾子の面魂の鮮やかに讀まれ、惡戯の增長するを見て、含笑んだ。惡戯は男兒の特權、併し晋のは殊に烈しい。大人を大人とも思はず、人を人臭くも思はず、父ばかりは例外であるが、其れすら親子よりも寧ろ朋友——其間に以心傳心の默契を有する朋友の樣であつた。母を初め、塾生、雇人、稀に訪ふ來客、誰一人晋に對して好意を有たぬ。其と感ずる晋はいよ／＼復讐的に惡戯を逞うする。可愛がるにも可愛がられず、惡むも劍呑と云ふ有樣である。彼が六歲の秋、近隣の御浪人の子歲になる子と喧嘩して、先方の頭に拇指の入る程の穴をあけた。母が細帶を持つて來たので、父も餘儀なく晋を縛めて、炭置小屋に入れて、隨分と丈夫な戸を立て切つて置いたが、やゝしばらくすると、如何して紐を切つたか、戸を押破

つて、手足は血だらけになつて出て來た。行末は如何樣な者になりませうと母は泣いたが、父は手づから手足の疵に膏薬を張つて、背戸の柿の實三つもいでやつた。

　四書五經、史記、外史の素讀を授け始めたのは、右の喧嘩の餘程前からで、源平合戰、元寇、元弘建武の出來事、元龜天正の諸英雄、曾我兄弟、赤穗義士、三國の人物、奈破烈翁の事などは、父に抱かるゝ床の中でかた言まじりに「其かや」とさきを促す——如何な太閤樣も五右衛門も此經驗は屹度ある——頃から夜毎に聞いて居た。少し丈がのびると、擊劍、柔術、水泳を效はる。父は獵銃を肩にし、晋は握飯を提げ、春雉子を追うては、躑躅が崎の城荒れて石垣に菫花さき、馬場山縣二十八將無敵の猛者が或は元朝に衣紋を正し或は出陣に鎧の袖をかゞやかして往來した屋敷跡の今は一面畑となつて桑摘女が節面白き歌を春風に流るゝを聞く日。秋は山國の空殊に清く、今生けるが如き機山將軍の像を見四郎が悲壯の最期を聞いた惠林寺の門を出て、彼が其れよと父の指先に夕日を迎へて嘯きもせぬ天目山の千古恨めるを見る夕。草鞋の足重きを引ずりて、勝沼の附近を彼方此方と、葡萄食ひながら聞く父の戊辰の昔語り、積負馬の嘶きに日は暮れて四郊の煙火蕭條と哀しきに、見るかげもなき野中の一つ家、此も其時戰死の墓、と父が憐愍して野菊を手向くるを見る夕。更に秘密を漏らさうか。白峯、駒が嶽、地藏が岳、八ヶ嶽、金峰山何れも一萬尺を出入する亂峰起伏峽中の天を劃して、宛ながら檻に籠されし猛虎の檻閾き程御勵激しく、此自然の限をば押破つて天下に横行せんず昔機山の雄心を挑發した自然の障壁、其上に一峰特立、來いと招き貌の富士の神威を仰ぐ日。久雨の後は四山の水を集めて十噸二十噸の石は羽毛の如く飛ぶ富士川の、岩あらば岩を蹴飛ばし山あらば山を蹴開く濁流の勢を信玄堤に立つて眺むる日。何ものが其腦中に入つたか、恐らく說明の要はあるまい。

（六）

　晋が十二の秋、絶えて久しい叔父の十郎と云ふのが尋ねて來た。三郎の兄弟はすべて十人、皆男で、數へ名をつけてあつた。一郎二郎は早く夭し、東家の家督は三郎がとつて、餘の七弟は其下に藩中に養はれた。其中で、四郎は伊庭八郎等と箱根に官軍を喰ひとめんとして討死し、五郎は彰義隊に加はつて上野に斬り死し、六郎は品川灣を脱して函館に走る途中破船して房州沖の水屑となり、七郎は會津の落城に自刃し、八郎は病死、九郎は養家の都合から獨り官軍に加はつて五稜廓外に討死し、兄弟中の生存者は三郎と四國某藩家中の青柳と云ふ醫家に養はれた末弟十郎と唯二人であつた。

　世の騷ぎに一家離散、兄弟の行方も分からなかつたが、波靜まると共にやつと所在が知れて、文通が始まり、少し公務の暇——十郎は家業を捨うて、今は侍醫局に出仕し畏くも至尊の御脈を拜する職務を帶びて居る——があるので、弟の方から久し振に逢ひに來たのである。兄弟と云つても、年も違ふ性質も違ふ、經歷も違ふ、今の身分も違ふ、手紙で懷しがつた割合に、白髮が生えたり口髭が光つたりする顏見合はせては、思つた程に芳しくもなかつたが、併し三郎は喜んだ——晋も已に十二歲、自己は日蔭に年老いて此まゝ恨みに朽つる共、晋こそは出來得る限り教育を施し、一旗揚げさせねばならぬ、早く東京に出さねばならぬ、行々大學にも入れねばならぬが、知己は疎くなるし、親類はありとしても音信絶えて、彼兒を託す可き所がないのを久しく困じ果てゝ居たのである。晋は叔父に從つて上京した。一月ばかりすると、着物は泥、足は豆だらけ、顏は眞黑に汚れ、眼ばかり

光らして、突然に吾が門口にあらはれた。東京はつまらぬ、學校の先生は何も知らぬから、叔父さんの家の障子に穴を空きして、歸つたと云ふ。つまらぬと云ふことがあるものか、と叱つて、着いたかと氣遣つて寄越した叔父の使者につけて、再東京へ出した。今度は三月ばかり居たが、學校の先生が失敬な事を云ふから石盤を投げつけて、叔父の家には默つて歸つたと云つて歸つた。三たび强ひて出したが、此度は東京一の金滿家の子と喧嘩して組み伏せられて小指を嚙み切つたとかで首尾よく退校を命ぜられ、所詮私共の手には合はず强ひて東京で勉强さす御所存なら兄上自から東京に御移住あつて監督して下さらずばと云ふ叔父の附手紙を懷中して、附人と共に歸つた。

父も當惑の腕を組んで、折からの眼疾、初學の塾生に外史の素讀など敎へさして置く中に、早速の思案は維新前から熟懇の彼藥商俵兵衛の來訪と共に湧いた。彼俵兵衛は今大川屋の名に恥ぢぬ俠氣、昔を忘れず田舍に燻つて居る東に折々の音信を絕たなかつたが、今尋ね來て語るを聞けば、五十を越して倍も元氣な男、何時まで神田にかじりついて小さな金儲けばかりして居ても面白からぬによつて、今度英國倫敦に押渡り、彼處に日本雜貨商店を開く筈、就ては水晶細工買入かた〴〵御暇乞に上つたと云ふ。父が側にちつと話を聞いて居る吾が眼は閃と父の顏を射た。父は良久しく考へた。昔に異なる文明の學問、出店でするより本元でする好都合は知れた事、古金の値は殊によき此頃、萬一の用に祕めたる共を賣りても旅費と二三年は支ふ可く、彼兒が軍用金の積りで年來百姓にすら客と云はるゝ生計をして貯へた金もまた少しはある、延ばす程吾も老いるに、好き作倂もあり、强ひて好まぬ東京に遣るよりも年は少し早くもと決心の膝を拍つて、宜しく賴むと打明けた。五十過ぎて海外へ押出さうと云ふ俵兵衛の事で、久しく吾が顏を見て居たが、宜うがす、先度に懲りず引受けませう、何子供の一人位、相談は如何でも出來ます、異人は中々太つ腹な所がありやすからな、と忽ちに引受けた。談は卽座にきまり、用意は一ケ月に整つて、吾が富士見村の宅を出發したのは、明治十五年吾が數へ年で十三の五月。談がきまつたと聞いて死ぬ程喫驚し今迄左程にもなかつたくせに急に別がつらくなり、おろ〳〵して役には立たぬ母が、出發の前日金毘羅樣のお守を錦の袋に入れて渡し、船が覆りさうになつたら此を懷いて南無金毘羅大權現々々々と念ずるのですよと云つて聞かすに引易へて、父は吾を呼びつけて、日本人の名折になる樣な事をするなら此で死ね、先方の大學を卒業せずに歸るなら乃公が刀はまだ刃がついて居る、不自由はさせん積ぢやが貴樣は土を喰ふつもりで行け、貴樣が歸るまでは何年でも乃公は死なずに待つて居る、と云つて則宗の短刀を與へた。其翌朝、吾が迎へに來た俵兵衛の使者に伴はれて行く時、父は緣を下りなかつたが、唯連りに咳拂をして居た　母は欅の若葉朝風にそよぐ門に立つて、見かへりもせずさつ〳〵と歩むまだ小さな後姿を見送つて、何と云ふ氣強い兒だらう、母の心も知らずに、と泣いた。併し彼方向いた吾の眼は吾踏む足も見えぬ程溢れて居たのであつた。

(七)

吾が洋行後五年間に、父三郞は年の十四五もとつた。幸にして吾に關する海外のたよりは、槪して好報ばかり。無事着、親切な家族の家に寄寓して英語勉强中、其れから愈ハアロウ中學に入つたと云ふ報、校長が特に不便を加へて萬事好都合と云ふ事、此等は本人のペンにより俵兵衛が筆によりしば〳〵報ぜられて、寂

寥を慰めた。つい二年前儀兵衛が中歸りした折には、此は吾さんのと取り出でたのが、父にステッキ、母に櫛、其から大勢のゼームス、ヘンリーにまじつて洋服姿凛々しく眼光の爛々たるにまがふべくもあらぬ吾が寫眞、大得意の母は獨り見て足らず、來客に示して猶足らず、實家親戚知己の限りを持ち廻つて、此「ハロハロ」と云ふ學校はあなた、と云ふを口上の冒頭に到る處興行し廻るほどの騒ぎであつた。だから、今年の年始狀に私も愈此六月學校を卒業して、秋からカムブリッヂ大學に入學のつもり、と云ふ事を報じて來た時は、母は會ふ人毎に、倅も三年致しますと大學者になつて歸つて參りまして、私共も東京の方へ引越す筈で、などと手にとる樣な話をしたのである。

併し父は喜の中にも屈託の腕を組んだ。從來の五年に、思ひの外嵩んだ費用は、東家の痩身代をいよ／＼骨ばかりにして、今は少許の公債證書と田畑とあるばかり、此を賣れば日々の生計が立ち兼ねる。家塾は、去年來急に其筋の規則が面倒になつて、また一は折々起る眼病故に、去年の暮閉塾して了つた。妻お銀の實家は、御浪人中で先づ豊な方だが、舅が非常の吝嗇、娘の顔見さへすれば借金に來たかとびくびく顔で近頃金子拂底の話ばかり。東京の弟十郎とても、金の聲聞けばじうと縮む男。吾が手紙にも頻りに其事を云つて、今こゝで大學に入らずに歸るも殘念、其と云つて儀兵衛に世話もかけ度くなし、校長にでも打明けたら都合して呉れるは乾度なれど其も好もしからず、當地駐在の我公使には已に二三回も會つて面識なれば、頼めば公使より我文部大臣に手紙一本やつて給費留學生として、貰ふ事も出來ようなれど、折角今迄人の力を假らずにやつて來たのを此期になつて官の助力を仰ぐも殘念と、如何にも餘儀なく云つて來た。

恰も此時である、三郎は約二十年ぶりに舊知己の一人に會つた。檜山と云つて、もとは幕人、今は男爵と嚴しく名のつて、樞要な位置を政府に占めて居る。巡回の次に知事から三郎の事を聞いて、富士見村の詫住居を尋ねて來た。總じて「得意」の胸は廣いもの――先方が其胸に入る限りは――で、「成功」の頭は存外低い――先方が御低い限りは――ものだ。人を憐れむのは不愉快なものでは無い、憐まるゝ者は其樣でないかも知れぬ。兎に角檜山は三郎を尋ねて、世に侘びた白髮だらけの其容子を見て妙に咽をつまらせ、田舍にくさるは惜しいぢやないか、吾輩が是非周旋する、必出京し玉へ、と云つて別れた。多くの約束は空と云ふ字がつくが、檜山のは流石に眞情であつたと見えて、三月の初一通の素晴しい大きな狀袋に入つた手紙が檜山から屆いた。例の一件は藤澤伯に話した、伯も君の名を知つて居る、のみならず馬關砲擊事件で君が兵庫に出張した時會つて何角と世話になつたこともあるさうな、何にせよ是非逢ひたいと云つて居る、下まはりの方は當世流の學問も入るが、何、少し上の方だと年と分別と名だけで澤山、中央が厭なら地方は如何か、良二千石の一人殖えるは、吾輩に於ても大慶だ、兎に角にも直ぐ出京し玉へ、との文面。

三郎は苦笑した。が、先年弟十郎が官途に世話すると云ふ手紙を寄越した時の樣に引破つて火中はしなかつた。机にのせて、腕を組んで、平素から寡言の三郎は啞の如く默し、盲の如く瞑した。而して不思議、十八九年一度も相談をかけた覺がない妻のお銀を呼んで書中を話した。眼を圓くした細君に、合點がいくより早く躍り上つて喜んだ。其れぢや直ぐ着物を出して、と匆卒立上る端を、馬鹿め、と一喝、其では今日は、今日所を百年經つても乃公は東京に行く要は無い、と再喝されて、見張つた細君

の眼は正氣かと良人の顏を眺めた。

併し事情は細君に味方した。先年からちよいちよい病んだ左眼の此四五日ひたと霞むを甲府の醫者に見すれば、如何も内障眼の樣だが、此方では確とした診斷も療治も出來ぬ。是非東京の名醫に御見せなさいと勸める。其れ御覽なさい、と細君はせき立てゝ古い紋付の埃を拂ふ、袴の皺を伸ばす、土産は何にしませう、珍らしくはなくも矢張月の雫、干柿、下駄よ、傘よ、帽子よ、行李よと上を下への騷ぎに、三郎もまくし立てられて、不圖氣づけば殆んど二十年ぶりに足は、生きて見るまいと思つた其東京へ向いて居るのであつた。

先方の手紙に何とあらうとも、出京の理由は他に幾個もある。一には眼病の治療、二には吾が學資——無論自己は粥をすゝつても吾に大學を卒へさす心算で、詮方なくば少しの足にでも賣らうと公債證書を行李の中に携へたが——三には久々振りに谷中にある先祖代々の墓も掃ひ、戊辰に討死した諸弟の墓にも一杯の水を手向け、四には舊主家に謁して年來の疎濶を詫び、——年賀狀は怠らなかつたが——五には弟十郎の家をも見、六には宛ながら愛兒の墓の見てはつらくも矢張見たき昔の江戸が今の東京と如何樣に遊つたか其變遷の狀を見るため、七には新聞で讀み人傳に聞いて考へてわが彈劾しつゝある今の在朝政治家及政治其他社會百般の事物を實地の觀察に照らして最後の斷案を下す爲め。其爲めに飄然と甲州の茅廬を出でて、都は花に埋るゝ四月一日東京は番町の弟十郎の宅に着いたのである。

第三章

（一）

「御歸でしたな」

と頭上から降る圓い聲に、驚いて見上ぐる東老人、

「や、今歸つたのか、些も知らなかつた——乃公も今さき歸つたばかり」

「左樣でしたか、其れは——」

云つて火鉢の向うに莞爾坐る四十恰好の、頗る肥滿した、血色の美しい、綺麗に分けた頭髮も奈翁式に捻り上げた髭も黑光りに光つた、要するに健康と滿足が毛穴の一個毎に溢れて居る男。黑綾のモーニングの胸に金鎖を光らして、葉卷を握る右手は殊に白く滑らかに、小指には寶石入の指環を閃かして居る。即ち青柳國手其人で。

兄弟と云つて、此はまた似ざるの甚しいもの。兄の東三郎を骨が立つた樣とするなら、弟の青柳國手は肉と脂肪の塊と云つて不可なしであらう。逆流を泳ぐ兄とは違つて、此は潮に身を任す至極樂天的の世渡り上手。十歲の年から四國某藩家中の青柳と云ふ醫家に養はれて、養父母のほめ者、業を嗣いでは先代にもまさると云はれ、維新の後は漢醫の日も長からずと見切りをつけて、暇々に彼洋醫につき此醫書を習ひ彼病院に出入して何時か出來した寄木學問。左る手蔓から大内近く住みこんで、度々の人替にも無事に居殘り、今も其位置は中中鞏固、青柳は油斷のならぬ奴、莞爾々々して居て其筋々のつけ屆は中々ぬからぬ、喰へぬ男とさる人は云つたさうだが、兎に角敵を作らぬと云ふ至極重寶な技倆を有つて居るのは事實らしい。殊に青柳國手は婦人の勢力を信ずる一人で、而して婦人の驩心を得るの術を先天的に有つて居る。醫師にして此術あらば、成功の四分三は已に約束濟である。で、番町の青柳と云へば、刀圭社會でも有福な方に數へらるゝ一人である。其も其筈、侍醫の本俸、臨時の御手當、其れから大膳職の手を經る供御の數々も

何れ玉體の御健康を專務とする人々の監督を受くるので吾御用を承らんと爭ふ商人の袖の下、臺の上も素より少なからぬ筈、青柳國手は進んで來らぬを促す程の度胸は無くも、來るを刎ねる程の不通者では無いのである。加之奉公の暇を割いて、自宅診察——藥局もある——病家回診、何れも一粒撰の數は左程に上らずとも、收入は大したものであるさうな。無論洋行一度せず、大學一つ卒へぬ器用學問、實力があると云ふ譯でもあるまいが、其處が宮内省御用と云へば酸い葡萄酒に勿體がついて、乙夜の御覽を經たと廣告に二號文字の書はべら棒なものでも俗眼を牽き易い道理、至尊の御脈をも拜する侍醫に何條愚あらんやと侍醫の二字は其まゝの證券印紙、今は内職却て本職を欺く繁昌。但先年去る大金滿家の祕藏の一子が實扶垤利亞を誤診して、何有大丈夫です大丈夫大丈夫の言葉の下に首尾よく落命させ、立合の名醫某から散々油をとられた上に、其金滿家の勢力範圍の得意はさらり落ちて、青柳國手も頭を搔いたが、併し世間は廣い、殊に何事も保守勝の上流社會、些とやそつとの噂は聞いても、些費用は多くとも——否寧ろ費用の多くかかる爲めに一語に云く、高價は物の價値を定める」——猶此如才ない、而してあまり品の惡くない國手を歡び迎へたのである。

と云つて、國手は俗眼に見苦しい阿諛をするでもなく、品行は方正と云ふことだ。自分自身も、當世の紳士として、加之斯男前で、藝妓買はず、妾置かず、北廓一度覗かず、花ひかず、賄賂と名のつくものもとらず——種々の進物は受くるが、其は向うから持つて來るのだ——醉醐する程飲みもせず、糟糠の妻は追出さず、子供は可愛がる、公の務は缺かさず、要するに吾れながら自個の完全無缺に呆れて居る。世間があまり黑いので、大抵の鼠色は雪白に見ゆるのだなどと皮肉を云ふ者もあるが、其は國手の自信自滿を撼すには足らぬのである。

「方々歩いて御出なすつて、如何です、餘程何かが變つて居ませう」

「左樣さ、先づ別世界に來た樣なものだな、丸の内あたりは別して見忘れて、迷子になりさうぢや。はゝゝゝ、此分ぢや今十四五年もすると昔の江戸は影も殘るまい」

「其樣でせう共、何ですて、私共が始終東京に居るのでさへ、二三日も出ずに居ると屹度何か變つて居ますからな。いや、忙しい世の中にはなりました」

階段に人の足音して、やがて三十二三の大丸髷が入つて來た。頰骨の張つた、眼の凹んだ、やゝ貧相に近い女。此は青柳夫人秀子である。絲織の綿入、鳥紬の書生羽織、黑繻子に更紗縮緬の晝夜帶と云ふ服裝、湯上りの白粉の香を芬とあたりへ散らして、良人の側に坐つて、「先刻は失禮を——」と東老人に挨拶する。

（二）

續いて入つて來た小間使が茶をいれかへ、菓子鉢を程よく据ゑて行つた。

「あなた、御すべりでございます、一つお戴き遊ばせ」

と青柳夫人は菊の御紋をうち出した紅落雁を東老人にはさむ。

其顏をじろり、さて菊の御紋を熟々と見て居たが、

「見事な菓子だな」

喰いかく其齒は已に疎。

「有り難い事です、私共が御下りを戴くなんか」

入齒の金の閃々する口もとを芬と香水の香高き手巾で拭いて、御免を蒙つて崩した膝のあたりを拂ふ。

「藤澤に御面會でしたか」

「出かけ前で一寸會つた。いやお秀さん、わしも初めて馬車と云ふものに乘つて見た。何、藤澤め餘程如何かして居たと見えて、是非吻々館に來て見いなんか云ひ居つて、到頭わしを口車にのせたて」と苦笑する。

青柳夫人の眼は閃と東老人から良人へ走つた。

「藤澤と同乘で――へエ、其は。何ですて、私も特別券を押付けられてね、一寸覗いて見る筈でしたが、日暮方から小石川くんだりまで出かけたものですから――其れにお秀も恰」

「わたくし彼樣な處へ參るのが大嫌でございましてね、皆樣御歷々の立派にしていらつしやる中に、中々私共の樣な田舍者は參れませんわ」一二年程前に、少しつけ屆が少なかつたのを根にもつて、出入の髮結に田舍者がと嘲られた噂を耳にはさんだ以來此が口惜しい事の一になつて居るのだ。

「お秀さんの話ぢやないが、わしが此形裝で吻々館に飛込んだんで、皆きよろ〳〵見居つた。何だね、わしが此惡い眼で睨んだだけでも、恐ろしい贅澤な世の中になつたものだ。海防費、獻金も至極結構ぢやが、其れよりも彼手合が名名身の皮を一枚宛剝いだら、其れこそ大砲の百門や軍艦の二三艘は出來さうなものぢやな」

「實に贅澤な世の中になりましたて」と無意識に云つたが、不圖火鉢に翳した右手の寶石のけざやけき光に氣づいて、青柳國手は急に火鉢の胴を摩でる。

話が一寸途切れる。

「あなたお召更をなさいませんか」夫人が囁く。

「左樣、先宜いさ――緑や絲は、眩、寢たのか――いや可笑しい事がありますて。内の緑が頻りと驅はれるのです、兄上が御出になつた晩から、晉さんが僕をいぢめる、晉さんが睨むから厭だい、なんか云つてね、窘められた記憶が今に殘つとると見えますて」

「はゝゝ、家内でも始終云つて居た事で、彼奴の事では一通ならぬ世話をかけた、親の手にも乘らぬ奴でな」

「勝氣な方ですから」青柳夫人は其調子の憎さげなるを禁じ得なかつた。

「からつと、緑に三歲上だから、最早十八ですな」

「最早十八ですかねエ、今にえらい方におなりでせう。御樂でございますわ」

「さあ、彼樣な奴ぢやから、如何樣なごくだうになるまいとも限らんて。烏の子は烏で彼も生中學問なんかさすよりも百姓が宜かつたかも知れん」

東老人は太息した。

「當節の子供は何で親を親と思はないのでございませう、何にも世の中に恐い者知らずですわ。此間もお絲が其樣申して居ましたが、お絲が參ります學校に、喜多川、彼だな」

「喜多川」

「は、左樣ですよ、其喜多川の姬樣、十二ださうです、好い標致つて云ひますがね」

「其樣だらう、母御――伯爵夫人は評判の美人だ」

「おや――」何か云ひかけて、不圖東老人と顏を見合はし、流石に赤面して口をつぐむ。

（三）

「其孃が如何したのかな」あまり話が途切れるので、東老人は終に尋ねる。

「何でございます、其の、修身科とかの教場で、先生がね、あなた、あれは何とか申しましたつけ、左樣々々、君君たらずとも臣臣たらざるべからず、父父たらざるも子は子の分を盡さねばならぬとございますね、あれを先生が引きまして、親が如何樣にあらうとも子は子たるの道を

盡さなければなりませぬ、些や少の無理があらうとも默つて順ふが子の務で、別して婦人は其處が第一――ほゝゝゝ、私が講義を始めて――先其樣な事を話しましてね、會得が行つた方は手をお擧げなさい、てますと皆擧げたのですが、其喜多川の姫樣ばかし擧げないのでございます。すると先生が、喜多川さん、あなた左樣思ひませんか、何度云つても默つて居るのです。何故返事をなさらぬ、てますと、其姫樣が突と立ちましてね、わたくしは其樣思ひません――先生も驚いたさうですがね」

よく動く青妻の口もとを眺めて青柳國手は頻りに髭を捻る。東老人は熟と聞いて居る。

「先生も癪に障つたのでせう、何故左樣思ひませんか、理由を仰有い、てましても、顏を紅くして默つて立つて居るのです。其樣な事ならあなたに修身の御話は出來ない――恐嚇のつもりですわね、其樣先生が云つたのは。すると、其姫樣は本を持つてずん／＼教場を出てしまつたさうです――本當に驚くではございませんか、十二位で其も下司の子なら兎も角も、華族の姫樣ともあらう者が――」

「一晉を女にした樣なものですね」青柳國手は煙を一吹して老兄の顏を見る。

「而して其喜多川の父御と云ふのは如何な方かな」

「好い人です、私も職業上で二三度會ひましたがね、瀟洒して、些も尊大な風はなくて、何しろ歐羅巴にも二三年行つて居ましたし、華族の中では先譯が分かつた方です」

「何かよくない評判がある樣に聞いたが」

「其樣でございますよ、彼方は評判の何ですもの」

「其は其樣さ、併し惡くない人だ」

「惡くないつて、あなた、無暗と妾を置いたり、素性の知れない者を――」

「其は昔の大名だつて左樣さ。其を矢釜しく云ひ立つる位なら、今の貴顯紳士は皆落第で、新年參賀の貴婦人の少なくも三分一は二重橋から追拂はなければならぬ。第一――」

「でも彼方のはあまり亂暴ですもの、何時かも、何ですと、何處か田舍のね、百姓の娘とか、漁師の妹とか、最早ちやんと嫁く約束が出來て居たのを、無理に妾に引揚げて、其れから其許婚と云ふのが兵隊から歸つて、狂氣の樣になつて、何でも別莊に押かけて、喜多川さんを踏んだり、蹴たり――否、噓ぢやありません、其事が新聞に出ようとしたのを、夫人が家扶の何某とか云ふ人に、吩咐けて、一生懸命かけ運つてやつと世間の評判にはならずに濟んだつて、確かな人から聞いたのですわ」

「いや西國大名の喜多川なら、十郎さんは知るまいが、今の先々代に當る人ぢやろ、其方の評判が中々高うてな、御家騷動が起りかけたことを、わしが子供の時分に聞いて居る。――而して夫人と云ふのは？」

「何でも公卿華族から來たのださうです」

「今は別邸に押籠同樣で本邸には其漁師上りの女が跋扈つてるてことぢやありませんか」

（四）

東老人は頷いた。

「いや十郎さん、子供が親を馬鹿にするのは無論間違は云ふまでもないが、親も子供に馬鹿にされぬ要心が肝要だの」

「併し何ですて、喜多川を辯護するでも何でもありませんが、一體世の中が其樣ですからな。親玉の藤澤を御覽なさい、大阪の死んだ何とか云ふ役者は生涯に女千人の願をかけたさうですが、藤澤に撫斬にされた女の數は千人にも上りますぜ。あなたの御相談の彼楢山なんかは、先温和しい方ですが、彼でも妾の三人位は處々

に置いとると云ふ事です」

「檜山？　彼なら丹其位なものだらうて」

「は、其様ださうです。併し其等は何でもありませんて、恩人の女の妻を狂氣なんか云ひ立てて座敷牢に閉籠めて、梅干大の握飯を一日に二つ宛呉れてですね、隣座敷では小間使あがりの妾と酒を飲んで巫山戯たり——眞實です共、私に狂氣の診斷書を書いて呉れつて頼まれましたが、餘り何ですから斷つたですて」其實診斷書は書かなかつたが、其は後難を恐るゝ怜悧な國手の要慎であつたのである。

「夫人を蹴殺して、藝妓を夫人になすつた方がありますさうですよ」

東老人の額の皺が二つ三つ波うつた。

「高くは云はれないですが、大頭連中にも、賭博をやる、國家の機密を握つて相場をやる、强淫をやる、馬車に乘つてあるく連中に刑法の罪人は幾個もあるのです。何しろ夏蜜柑は長州で通る、他國生れの巡査も薩摩なまりでおいがわいが云ふ時節ですからな、大抵の非は理で通るですて。併し考へて見れば何ですて、ピザの塔は歪んで居るから立つて居るのではなくて、歪んでも立つ丈の基礎があるから立つて居るですね。何を云つても薩長は維新の二本柱で、二十年來兎に角日本を負つて來て居るし、第一人才に富んで居るから仕樣がありませんて」

東老人はじろり弟の顏を見た。

「嘸阿諛をつかふ奴が多からうの」

青柳國手の眼はちらり兄の顏を射たが、忽ち向うの床の間に「仁術」の二大字を書いた幅に轉じた。掛物の落欵は「白雲山人」とある。白雲は藤澤伯の雅號。

「何、其樣ばかりでも無いですて、腕があるやつはまた自己の伎倆で隨分きつて廻す餘地がありますからな——尤も私なんざ言も云つたことはないのですが、今内務のきれ者の白井なんかひどいさうです、何ですて、大頭株を別莊に案内してですな、皆好い加減に醉つた頃、別席で酔醒しの御茶を差上げますなんか云つて、はなればなれに案内するのです、其部屋と云ふのが妙に茶室がかつた隣室の遠い、出口が一方で、襖板戸にしまりが出來る仕掛ださうでね、幾個もあるのです、さて千鳥足ではひると『御前』なんか婀娜つぽい聲が待受ける、『や、お前は』なんか云ふ途端に後の板戸のさるがかちんと下りる、と云ふ仕掛ださうです」

「彼秦さんにお妾を世話した、小谷——ね、彼商人も矢張其手で官吏にとり入つて大變な身代になつたでぢやありませんか」

「秦——宮内省の？」

「は、彼ですて」

「其様な奴が御前近く出るのか、フーム」

良久しく東老人は沈吟して居たが、やがて熟熟弟の顏を眺めて、斯く云ふ聲はやゝ震へて居た。

「十郎さん、卿も大した立身をしたものだ、昔なら御簾越しに拜しても眼が潰れる樣に思つたものだが、親しく御手をいたゞいて御脈を診ると云ふは實に果報な事だ。併し十郎さん、何時かも卿が話で聞いたが、御饌の物を調べたり、御便の量を日記に書いたり、御病氣もないに「キニイネ」を丸藥にして差上げたり、するばかりが能ではあるまいぢやないか。上醫は國を醫する、と古人も云つた。機があつたら國事に關する意見も申上げて、御裨益になる事を言上する樣にしたら如何だな」

「は——併し分限があるですからな」

「分限？　わしはよく分からぬが、何かな、分限と云ふのは、月給をとつて、きまりきつた仕事だけ爲る、と云ふ事かな」

青柳國手は默然。夫人は何か云ひたげに口を

もちくしたが、其隙を得なかつた。

「爾は乃兄と違つて、中々怜悧ぢやから、肥桶臭い乃兄が兄ぶつて云ふまでもないが、炭小屋の白猫は得て鼠色に化けるものだ。婆心の樣ぢやが、氣をつけるが宜からうぞ」

青柳國手は猶默然、葉卷を頻りに撚つて居る。

青柳家にもらはれて行く頃は、國手は漸十歳、蜻蜓髮に木の小脇差、二十を遙かに越して、三尺近い大刀を插して、恐ろしい角字横文字を誦んだり、肩衣嚴しく出仕する兄を畏ろしきものに思つた其習慣が二人の子の父となつた今迄も殘つて、口には何と云はうが猶畏敬の念をもつて居るのである。また一は——其夜寢物語に細君に諷した通り——氣の毒な失意の兄が忠告を、聊思違や嫉妬はあらうとも、得意の弟は默つて受くる位の度量はなければならぬ、と思つたのである。併し青柳夫人は然思はない。兄とこそ云へ、身分才智財産何一つ弟の上に立たぬ身分でありながら、已に先年も晉の事で散々世話をかけながら、今度も——田舍者の嫂が馬鹿さ加減、碌な土産一つ持たしてよこさず——ぶらりと來ては厄介になつて居ながら、おとなしく下から出れば、嵩にかゝつて雜言過言、餘りな、と先刻から心の中で齒をきりくと噛んで居た。

「今日藤澤伯に御面會遊ばしたんでございますね」

「は、會ひました。其れが？」

「あなた御就任遊ばすのでございませうね」

東老人が右眼はじろり青柳夫人の白く塗つた厚顔を見た。

「わしかな、わしも藤澤が門番か、檜山の小使に仕込むかも知れんて。はゝはゝゝゝ」

はぐらかされて口惜しと辯じかゝる細君の言を、圓滑な國手は宙にひつさらつた。

「戲談は何ですが、實際彼一件は如何なりました？」

「如何て、藤澤にも檜山にもまだ一寸會つたばかりだからの——併し十郎さん、造酒屋の話を聞いたが、何ださうだ、初めて窖に入りたては、蒸暑くて燒死さうだが、漸次馴れると誠に快い心地で、外に出るのが厭になると云ふ事だ。山の中から突然今度都に來て見ると、窖だな、窖だ——蒸暑い、臭氣の烈い——」

「はゝはゝゝ。私なんざ其窖に齁々焉鼾をかいて居る連中かも分かりませんて。併し何ですて、決して無理に御勸する譯でも何でもありませんが、其局に當つて見ると、局外で思つたとは、また餘程考が違つて來るものだらうかと思ひますて。兎に角、先ゆつくり御逗留なすつてですね、十分觀察もなさるし、御考もなさらうし、大頭の連中とも十分御話もなさつた上での決斷になさつたら如何でせう。第一、御決斷一つでは、晉が世の中に出る便宜にもなりますからな」

東老人は默然、一座白け果てた中を、心得貌に違棚の大理石の置時計が十一時をうつた。

「良人、何も御草臥れでせうから——」青柳夫人は國手の顏を見た。

「噫、此は長話を、御疲れで——では御休み」瘦れた足を撫でて立ちかゝつて、不圖思ひ出し、

「山下に御見せでしたか」

山下は有名の眼科醫。

「眼か、眼は駄目らしいて。今に痛が出れば終ださうだ。最早療治なんかしないが宜いと云つた」

「其は困つたものですな」

「本當に、ね、あなた、名人でも駄目でございますかねエ」現に歷とした醫師——加之侍醫を弟にもちながら、他の醫にかゝるのを、青柳夫人は少なからず不快に思つて居るのである。

「併し隻眼あれば、不自由もあるまいて。はゝ

はヽヽヽ」

「併し何ですて、一方では弱り易いですからな——明日今一度私が診て上げませう。ではお休み」

「おやすみ遊ばせ」

夫妻は座を立つたが、階段を下りる時、欠伸を嚙む氣はひがした。

小間使が來て、臥床をのべ、行燈ランプを朱塗の丸行燈にかへて、繃帶をおとり申しませうかと云つたもよくは知らず、何宜いと己が答へたのも氣づかず、葉卷の頭だらけの火鉢を擁して、東老人は猶何時までも思案に沈んで居た。

第四章

（一）

伯爵喜多川家の麻布富士見町の別邸は、其昔德川何代將軍の姫君が輿入の當時持參の屋敷であるさうな。建物の嚴めしきは、麹町平河町の本邸に及ばず、瀟洒たる野趣は向島の別邸——喜多川家は伯爵華族中一二を爭ふ金滿家である——にとゞめを刺すが、境域廣く、花木林泉の秀を盡し、四阿の柱一つにも數寄を凝らした所は、麻布の別邸に限つて、出來星紳商の金に飽した庭園の所詮企及ぶ可からざる趣を具へて居る。

何しろ一萬坪の上越す邸內、自然の勾配を利用した山あれば、湧水を湛へた泉水、瀧も幾條、苔蒸す岩石、櫻が丘、楓が谷、躑躅の道、秋栗拾ふべき、春筍を採る可き、百尺の老松晴天の雨を鳴らす、常盤木の蔭も小闇き、梅林、桃野、蛙鳴く田、大根畑、四阿、祠、石橋、板橋、四時の賑は概ね具つて、近年建增された三層樓に上れば、西窓に富士千秋の雪を眺め、南窓に上總房州かけて品海を一目に見晴らし、「含雪觀瀾」と書いた舜水の額はもと餘所のものながら、恰も此樓の爲めに書いたかと思はれる。併し伯爵は、此麻布の邸を陰氣だと謂つて、殊に去春此處で愛妾の腹に出來た娘を一人喪してから、愈此處に寄りつかず、本邸でなければ足は大方向島の別邸、些遠くも沼津の別莊に向ふのであつた。此疎まれた屋敷には疎まれた伯爵夫人が、令孃道子、老女、召使、家扶田中一家、馬丁、車夫、馬二頭、セント・ベルナアド種の犬一頭、猫二匹、其れだけを將て、去秋以來淋しく住んで居るが、今日は喜多川家の姻戚に當る同族で伯爵夫人の殊に懇意にする靑山の佐々倉子爵夫人が令息令孃を將て朝から來訪したので、寂しい奥も勝手も今日は聊か時候の春に調子を合はして居るのであつた。

午餐の饗は濟んで、今は午後一時。碧玉に薄綿かけた空は泉水に落ちて、幻に似た白雲の二つ三つ、徐に水の面を逍つて居る。此方の蘆芽の三寸ばかり伸びた汀には、置物の樣に鶴が二羽、體を圓めて一足立、彼方にさし出た新柳の絲は翠を水にはえて、影と何か頷き合うて居る。向岸は冬の姿を其まゝの常盤木と入り亂れて、此頃の嫩葉色々の煙と萌え、水際の一重櫻は早散り方の、ほろ〳〵こほれては緋鯉に吸はれ、微風に掃かれては汀に集まつてゆらゆらと水に霎時の浮生を託する。木下路は、踏む處なきまでの落椿。

其大きな八重椿の下に、椿花を拾つては絲にさし居る女兒二人。稚子髷は已に吻々館で見受けた喜多川令孃道子。紫矢がすりに、ひは色の房つけた紋縮緬の被布を着て、襟は白、丈長も白、雪白の素顏はぼうつと櫻色に、黑眼は殊に活々と、時々他の二人と顏見合はしては、右の頰に小やかな笑凹を見せて居る。垂髮に紅のリボン、レースの襟かけた桃色の洋服を例の裾短かに蹴つて、水色の絹襪に小さな半靴を穿いたのが、道子と同年の仲好、佐々倉子爵

令嬢照子。熟した桃を拱く顔は眞圓、眼もくるくると圓く、眉も半圓、鼻も低くて圓く、口も圓く、極めて快活で、剽輕で、可愛くて、人に含笑ます顔容。今一人の十三位な、銘撰の綿入に帶は緋繻子、銀杏髷、人形だちの標致好は、道子が伽なり小間使なりの名は千代、家扶の田中が娘である。

「兄様、今些落して頂戴な」

桃色の洋服は椿の梢を見て呼んだ。木の下には十四五の男兒の編上げ靴が脱いである。

「落すよ、其ら」

ゆら／＼と椿の枝が搖れると、ぽた／＼／＼、忽ちにして落花滿地。二人は其大きな造花の様なのを、儔いては拾ひ、拾ひては刺す。樹上は静かになつたが、突然俛いた桃色の背を狙つて、大きな花が一つぽたりと落ちる。

「あれッ」

桃色は一間ばかり跳ねたが、忽ち梢を見上げて、「兄様ひどいわ。其様な事をなさると靴を隠してしまふから宜いわ。ね、道子さん」

稚兒髷は唯含笑んで居る。

「靴がなくたつて、足がありますよ」

「兄様、最早下りていらつしやいな」

「大きに御世話――道子さん、すてきに好い枝を上げますよ、ほら」

花五つ六つ、蕾三つ四つついた枝がぱたり落ちた。

「兄様、わたしにも頂戴な」

「否ですよゥ、靴を隠したりする人に誰が遣るものか」

「最早隠しませんからさ、ヨウ兄様、兄様てば、後生だからヨウ」掌を合せて拜む眞似をする。

「照子さん、わたくし最早澤山よ、此あげませう」

稚子髷が初めて口利いた、明晰した、張りのある聲で。

「さあ、最早下りよう。あぶないぞ」

聲諸共に、學習院の制服制帽した十四五の男兒がする／＼と幹をすべり下りた。

（二）

此は佐々倉子爵家の嗣子清麿。妹と相肖て、まる／＼と肥えた、二皮眼の活潑な男兒。千代が直すを引たくる様に穿き、阿彌陀にすべらした帽の庇の外に秀でた額の紅く汗ばむのを、手の甲で摩りながら、妹の傍に突と寄つて、

「どら、お見せな」

「ほら、此様になつてよ、わたしよか餘程高いでせう」小さな金環の光る右手を高くさゝげた。其手から流るゝ様に紅の花の鎖はだらりと垂れて地に曳いて居る。

「一寸兄様にかして見な」

「否よ」

「否ならいりませんよ」云つたが、隙を覗つて、引たくりざま、とつとと駈け出す。

「あら、兄様、ひどいわ、／＼、／＼、阿母様に云つけてよ――ね、道子さん、あんまりだわ」

「一寸、照子さん、ぢつとしていらつしやいな」

雨蕭を結びあはせた大きな椿の花輪を道子はゆらりと友の頸にうちかける。

「ま、好いお飾り――千代のは嬢様にあげませう」

千代は同じく吾が拵へたのを、雪恥かしき道子の襟にかける。

「あら、袴布にかけて、坊様の様だわ、ね、道子さん」

「やあい、女の坊様だつて、やあい」未來の佐々倉子爵は叫んだ、妹から奪つた花鎖を鎖鎌とふり廻しながら。

「其れでは道子さんは女だから尼様よ」

「道子さんが尼様なら、照ちやんはあめん棒の、風ン棒の、馬鹿棒の、べら棒だ」

道子と千代と聲をあはせて、嘻々嘻々と笑ひ出した。
「宜いことよ、あんまりね――男なんか、彼方いらつしやい。ね、道子さん、此で綾取をしませう」
「其樣なもので出來るものか」
「出來なくツて。さ、貴方片つ方持つのよ」千代に一端を持たせて、引張つた花輪の唯中を、
「お面！」
とうちこむ若樣が手の內、絲切れて忽ちに落花狼藉。
「嫌よ、此樣に――さ、まどつて頂戴、〳〵。
ほんとに憎らしい兄樣ね」
「照子さん、泉水に行つて見ませう」
道子が言葉は、波の上の油、「茶瓶の暴風」は忽ちに靜まつて、主從兄妹友達四人の年を合せて六十にもならぬ一群は、後になり先になり泉水のほとりに行つた。そよとの風も動かず、水は宛ながら一面の鏡。
「一寸道子さん、わたくしの顏紅くつて？」水鏡見ては頻りと顏を歪めて居た照子の前は莞爾。
「紅いわ」と答ふるも莞爾。
「鯉と何方が紅くつて？」
「其樣に紅くはないわ、ほゝツ〳〵」朱唇少し開けて、乳歯が一寸露はれた。洋服の手が被布の肩にかゝると、稚子髷と垂髮と竝んで、水にうつむいたが、不圖顏見合はして、ふゝッと笑ひ出した。
「些も緋鯉が見えないね」若樣は池の面を見廻して居る。
「餌をやると出て參りますよ」白木蓮の花片を含んで居た千代が答へる。
「一寸、此やつて見せうか」
照子は椿の花びらを一つづつ摘んでは投げてやる。鶯茶色の水分けて日の出を思はす緋鯉の三つ四つ、落花を餌かと含んだが、いや又かと云ひ貌にぬらりと沈んで了ふ。
「畜生、ずるいやつだな」
清麿君は二つ三つ花を投げつけたが、今度は力任せに遠く投げた。先刻から向うの碧桃の水に隱んだ邊で、頻りと長嘴で翼の間をかいて居た鶴の一羽が、獲物と思つたのか、突とよつてつゝいた。
「やあ、鶴がつゝいてら――來い、來い」
「千代、呼んで御覽」
女主人の命を傳ふる千代が召集喇叭の口笛。鶴は此方見て、小頸を傾げたが、悠くにして、思案一決、然らばそろり〳〵參上仕るべうもや、と云ひ貌に、据頸、ぬき足、ひよこ〳〵泉水を渉つて來る。
「まあ可笑しい、彼眞面目な顏、ふゝつ」照子は噴出したが、溜らなくなつて、體を二つに折つて、きやつ〳〵笑つて居る。其に釣られて、餘の三人も聲をあげて笑つた。
何をお笑ひなさるかの、ともいはず、些怪訝な顏で、鶴はのそ〳〵二三間さきまで來たが、忽ち何に驚いてか、消魂しい羽音をさせて飛び立つた。
一池の春水、落花と、花影と、雲と天との影を浮べたまゝに、ゆら〳〵。

（三）

「やあ、鶴が飛んぢやつた」
「如何したのでせう」
「おや、ネッド、卿なの」
逸早くふりかへる道子が側へ、約積程もあらうと思はるゝ黑白斑の、毛深い、セントベルナアド種の巨犬が大きな尻尾をふつてのそりのそり寄つて來た。
「やあ、ネッドだ、ネッドだ、ネッド、來い」
「ネッド、今迄何處に行つてたの」照子も舊識

の一人。

「毎日御ソップをとりに一本松まで參るのでございますよ」と千代が說明する。

「其樣、御使をするの。好い兒ね、一寸ネッド」

照子は來、來、來をする。

併し引手あまたのネッドは、何方へも眼ばかりやつて、大きな體を女主人の紋縮緬の被布にすりつけ、其大きな頭を下げ——小さき女主人は大兵の家來より高きこと僅かに一寸——眞白の小さな手が其額を摩でるまでは滿足しなかつた。

「ネッドは本當に此方の御屋敷が好きでございますよ、ね、嬢樣。此頃も御前が一寸あの寄つていらつして、無理に引張つて去らつしたのですよ、其樣しますとね、直ぐ鎖を引切つて、あの直ぐ歸つて參つたんでございますよ」

「左樣？ 御前は可愛い兒ね。でも鶴をおどかしたりするのはいけない兒ね。洋服の相手はいけない兒の大きな頭をかき抱いたが、忽ちあれッと飛びのいた。ネッドが舌にぺろりと照子の頬を舐めたので。

皆聲を合せて笑ふ。

「だつて、いいひとの頬を突然に舐めたりするのだもの」

「おい、ネッド、取つて來い、其ら」

小子爵は椿の枝を泉水に投げた。ネッドは流石に見たばかり、焉んぞ牛刀を須ゐんと云ひ貌に、身動きもせず。

「畜生、汝不精だね」

「だつて、此婆は水に入らないのですもの」道子は少し躍起となつた。

「吾家のジョンなんか、深い處でもずんずん泳いで行くよ、ね、照ちやん」

「だつてジョンは獵犬ですわ、ね、道子さん」

「犬にかはりはないぢやないか、此樣な大きな犬——」

「貴君だつて琴はお彈けなさらんわ」道子はつんと云ひ切る。

佐々倉の若樣は、少し顏を赧くして、口を開いたが、終に何も云はなかつた。たゞじれ氣味に、落ち散つた椿をぽんぽん泉水に蹴こんで居る。

「一寸、道子さん、わたしネッドに乘つて見ませうか」

「お危うございますよ」千代が言を添へる。

「大丈夫よ、いつでも自家の驢馬に乘るんですもの、ネッドをぢつとさせて居て頂戴——さあ、ネッド、わたしが乘るから、ぢつとして居るのよ」

照子はやつと攀ぢ上つた。

「まあ、柔らかで好い心地！ 西洋人の樣に横乘りよ、あゝ何か手綱がないかしら」

「此」と道子は今まで頸にかけて居た彼椿の花輪をわたす。

花の手綱に、此騎手、歩めと云はれて辭するを得むや、ネッドは大儀さうにのそりのそり。

「はいはいッ。——一寸兄樣、馬の口をとつて頂戴な」

「よし來た——其ら駈足」とネッドの頸輪に手をかけてがくとひく拍子に、あれッと一聲、子爵、令嬢は眞逆樣に乾いた芝生の上——併し照子は起きざまに顏を掩うて泣き出した。

「ま、如何なすつたの？」駈け寄る道子。千代は忙はしく服の塵を拂ふ。

「だつて、あんまりですもの、阿母に云つけるから宜いわ」

「弱蟲！」

「あんまりだから宜い。云つけるわ、云つけるわ」

「云つけたつて、恐かありませんよウ」

最早堪忍袋の緒が切れた、と云はぬばかり照子は彼方の櫻が丘の四阿を指して脫兎の如く駈け出した。

「照子さん、照子さん」呼びながら追つかくる道子が被布の袂ほら〳〵。引つゞいて千代も駈け出す。ネッドも怪訝の顔でのそ〳〵。

「あとは若樣の獨舞臺、「弱蟲ッ！」」後矢を一つはなつて、さて頭を掻いて居たが、やがて靴の踵でくるりとまはつて、「われは官軍」を口笛で歌ひ出した。

（四）

泉水を下瞰して、南に小高き櫻が丘の、落花吹雪と亂るゝ中に、傘を廣げた樣な柴舍の、花雲亭と扁額うつた四阿がある。こゝに、珈琲碗、支那蜜柑の盃など載せた自然木の臺卓を中に、花色緞子の茵を敷いた自然木の腰掛によつて、しんみり話し入つて居る貴婦人二人。

主と見ゆるは、三十左右、細作りな美人。顏色の白過ぎると、眼鼻立のあまりはつきりし過ぎる上に、眼のまはり、頰のあたり眼立つやつれの爲めに、いくらか陰氣な所もあり、また險に思はるゝ所もあるが、さりとて何處に鄙吝氣な點を探さうとしても探されぬ王朝美人の傳統をひいた貴族型の顏容。烏羽玉を掬く黑髮を中形の丸髷に結つて、利久鼠の立小波の小紋縮緬に更紗縮緬を襲ねて、帶は質味な本國、羽織は黑縮緬に三紋の蝶は揚羽、黑地に白で梅花を二三輪束ね縫出した半襟を僅かに見せて、藤色のふきは草色絹天の庭畓の上にゆらりと波うつて居る。客も恐らく同年か、一つ二つ上かも知れぬ、空色に白く唐草を織り出した訪問服、恣を白金にした金の一重櫻の襟どめ、ボンネットは彼方に脫いで來たのか、束髮の髻を低う後へすべらし、貴婦人持の傘が隅に立てかけてある。美――と云ふ質ではないが、如何にも血色の好い、圓顏の、言葉のさば〳〵した婦人。若し彼を水仙の潔く寂しきに比せば、此は溫かな紅薔薇。

洋服の客は佐々倉子爵夫人富子。主は無論喜多川伯爵夫人貞子――道子の母である。上流の交際は、親類知己の中でも、得て疎い勝のもの。殊に喜多川夫人は、わが親類と云ふ程の者も帝都にもたず、知己の中にも其美人の評判を妬む者、また內情を知らぬは唯冷淡な高慢なと思ふもあつて、以前からあまり多くの友を有たなかつた。去年以來はいよ〳〵世に遠ざかつて、垂籠めてばかり居るので、ます〳〵孤立の姿となつた。唯一人佐々倉子爵夫人のみは、昔から妙に意氣相投ずるとでも云はうか――此は不思議である、雨夫人は其性質、趣味、多くの點に於て正に相背馳するのであるから――普通此社會に少なき親密の交を結んで、人に語られぬ內密も互の耳には入れて居た。道子も佐々倉夫人にはよくなついて、現に先夜鹿々館の演藝會にも、母は出るを厭ふので、佐々倉夫人の監督の下に行つたのである。

「ですからね、わたくし最早腹が立つて〳〵、餘り端ない樣でしたけれど、衆人が居る前で、斯樣云つたのです。『如何も種々有り難うございました、臭いもの身知らず、とか申しましてね、吾事は棚にあげて、人の惡い噂ばかり喋舌つてある〳〵者もありますからね』ッて云つたのです。此樣な快い氣味な事はないわ」佐々倉夫人は快よげに打笑つた。

喜多川夫人の顏には、色が往つたり來たり。

「併し何ですよ、貞子さん」佐々倉夫人は眞面目になつた。「藤澤伯が彼樣な評判な人ですから、餘程御氣を御つけなさらないと、世間の口がうるさくてね」

「わたくしも彼樣な家には足蹈したくもないのですが、何が何して下さると何もいやな思ひをして、世間の口はにかゝらなくも宜いけれど、何を云つても――」

吻と息ついて、

一元房が如何にかなつて、道子の安心がつけば、わたくしは最早世の中に用がない體ですから
――ほゝゝ」
喜多川夫人は急にわき向いた。

（五）

夫人の父は、梅津昭房と云つて、先帝に仕へまつりし四位の侍從、元治慶應の頃は上京荒神口に細い生計を立てて居た。
意地悪い關東の兵粮攻に、一天萬乘の尊き御身、たかが四十兩の金屛風一双が自由にはなり玉はず、反故の裏に御詠を書き玉ひ、伊丹の酒を召しては世に斯様な結構な酒があらうとは思ひ知らなんだとの御述懐、漏れ聞いて鬼とも組まんず勤王の勇士が霰の如き涙をほろほろこぼす様な婆娑。溥天清華の中にも、關東に取入つて不斷のつけ届に預かる人々、さもなくば薩摩長州等の大諸侯に特別の縁故あつて扶持を受ける向きを除くの外は、實に眼も當てられぬ貧乏をして、門邊に遊ぶ若侍が往來の者に諮問はれて、一時は上人、下人に問への擬式は浅ましけれど、裏へ廻れば青侍が青菜の多寡を不淨取の百姓と爭ふと云ふ有様。帷子を無くして數寄を着て客に會つたり、詫へし沓の代償促されて、「まあまてゐ小路、身はぜゝが内大臣おりや」と苦しい洒落を云つた人もあると、ちやんと記録に書いてある。梅津家とても其通り、荒神口の土塀の上に見越しの松は見事なれど、内證の生計は日々其郷前をなほうしいゝと呼びあるく田中村のいゝしが家にも優らず、主人が勤王家で、正廉で、義理堅くて、眞面目であつただけ、貧の荷は殊に重かつた。幼き貞子は早く甘藷粥の味を知つた。ひあかゞみを拾ひ讀む障子のあなたに、越年の支度如何したものであらうと父母が屈託の囁聞いて子供心にも悲しく、近衛流の能書と聞えし父が在る官邸に頼まれて日毎の暇に古今集寫す肩の凝りを一おゝ、貞子、よく揉んでたもるの一と父が笑顔のうれしきに七つ八つの貞子はわれから促して常に揉んだ。
其中、貞子が九歳、弟元房が三歳の年、父は王政復古の春も見ず、青柳の絲の亂れを吹きとけよ伊勢の神風と云ふ意味の辭世一首殘して、不歸の人となつた。其翌年が維新の天地がへし、世はくるりと逆様になつて、九重の雲霧分けて日の御子の光、日本に照りわたれば、何百年來霜枯を泣きし公卿一統一時に緑の息ふきかへし、われも〳〵と世に出る中に、働きざかりの主は亡くなる、嗣子はまだ哺乳兒の梅津家のみは荒神口の家をたゝみ、大比叡の麓に巣くふ一乘寺村の山茶花深き茅舎に世をわびた。
幸にも貞子が母は、奈良に重き神官の家から嫁いで來た綾子と云つて姿の美しきには似ぬ氣丈者、良人の親戚知友に己が得意の春に浮かれて見かへらず、おのが實家も父死して代がはりの親類母敷くなきに、女を嫁し男を世に出す迄は痩せてもからびてもわが腕一つでやつて行かねばならぬことと早く覺悟を定め、女ながらも村の娘を集めて手習讀みものを教へなどして、當の餬程のいたゞきの足らぬを足し、世にある人の哀憐を乞はず、女ながらもいよ〳〵權式を張つて居た。二人の子女は次第に長ずる。姉の貞子は親ながら見惚るゝ程日に〳〵美しくなりまさる。母は愈心の帯を引しめた。父が在りし日すら、女今川女庭訓をば讀ませ、列女傳曹大家女誡をば聞かせても、源氏の類は手にだに觸れしめざりし。況して女親ばかりの今、厳しき上にも監督を厳重にせではと、其頃流行の學校にも京へはやらず。學校へは出さぬかはり、吾手に及ぶ限りの智識は一わたり傳へた。國史のあらまし、國文の一斑、手蹟は父がのこせし手本、裁縫はわが嗜、八雲琴、女禮

式のくさ〲。

明治八年となつた。貞子も已に十七歳。吾子ながら、一點の塵も容さぬ白梅の氣高く美しき姿を見るにつけても、行先きの處置を母は案じ煩つたが、恰も此時昔の友、今は帝都の宮中に奉仕する權掌侍某と云ふのが墓參の次に尋ね來て、貞子を引受け世話することとなり、其年の春、貞子は一乘寺村の詫住居から一足飛に九重の奥深く、皇太后陛下の御前に侍する身となつた。

其秋、吹上御苑の菊花の御宴には、在京華族殘らず召され、皇太后皇后兩陛下も女官數多從へて臨ませ玉ひしが、其女官の中に、白絲襲ね、緋の袴、垂髮の裝は一樣ながら、野菊の中の白菊と秀でて少く美しき貞子の姿を見染めたのが、恰も其年夫人を喪つて猶獨身の喜多川貴道。後繼談の一條となつて、喜多川家の親戚、家令家扶、舊臣の中には、先方も公卿華族でこそあれ、攝家清華の名家ではなし、殊に家計も微々たる樣子、他に恰好の良縁は幾干もあらう、と大分異義があつたし、また此津家の女主人も、喜多川と云へば武家の中でも名ある家柄、唯一人と聞く後室は温柔き方と云ふし、二度目とは云へ子供があるでなし、婿君は三十、此方は十七、逆ふと云つても其位は何でもないこと、唯先方は大名華族の中でも聞ゆる素封家、此方は日蔭の貧しき家計、財寶を目當にしたと思はれんも口惜しく、また實家が此通りでは貞子にゆくゆくひけをとらす樣な事があつては亡人に對しても濟まぬ、と二の足踏んだが、何を云つても子供でもなき貞子樣が加之に二度目と云ふに戀着もしかねぬ執念、相談整ひ、許も下つて、結納、奥方の支度調度は婿君の仕送り、奥方の持參は天京の標致、祖先傳來の氣品ばかり、唯一つ黒地に螺鈿の梅花散らして色褪めた朱の緒かけた手文庫には、亡父が筆の烏丸状、母が自筆の消息の緒、母が譲りの黒塗の櫃に藏めた粟田口吉光の懷劍、母が昔の晴着なりし紫縮緬拔箔せし松竹梅の古小袖一領、此丈が入つて居た。斯くて目出度く、皇太后陛下より下され物もあつて、明日の身の路は知らずとも今日は四海波靜かに、白無垢姿潔よく目出度く式も濟んだのは、明治九年、貞子が十八の正月。

女を縁づけ、子の先途を託する所も出來て、張りつめた氣の一時に弛んだ母綾子は、其年の夏の末、東京で亡くなる。十一月には道子が生れる。哀しい事、嬉しい事、世は走馬燈の廻る月日の數重なつて、去年の花嫁は今年の奥方、母樣。道子が含む乳房に、われも昔は此樣にと、亡母を懷ふ涙一滴、ほろりと落ちてわつと泣く道子を、泣きやるな〱と、揺る籃に、御上樣、御召更衣遊ばせ、と手をつかふる侍女に涙隱して、更へし晴の衣紋直させ、髮撫でさせて、靜かに出づる大書院、良人と並んで舊藩中の年賀受けしきまり惡さの其も明年は馴れ、年々歳は何でもなく、明す程に、暮す程に、道子も何時しかわが昔母上に大鏡習ひ初めし年の十二、自己は早三十路に踏み入りて、喜多川夫人は金殿の奥に果敢ない身を泣いた。

（六）

大名の家に生れて、子供の時から不自由の不の字も知らず、何事も氣隨氣まゝが通つて育つた者は、人に察しがなく、己に制がなく、心に左る毒がなくても、得て殘酷な所行をし易いもの、されば美男と不具は背中合せ、馬鹿と大樣は隣同士、威嚴と威張りも似たもので、兎角殿樣は厄介樣、と或老人は云つたさうな。喜多川夫人の良人貴道伯は、不具でもなく、馬鹿と云ふ程の馬鹿でもなく、維新の年は二十あまり、猶若殿で、父の大殿も在れば家臣に氣の利いた者もあつて、勤王藩と云はれて大した後れを取

らず、維新後早々に見物半分の歐洲行、三年ばかりの滯在に覺えたものは射的に骨牌、三鞭のきゝ分け、球突、地獄買位なものであつたが、風采は先好し、流石に外國語も一寸喋舌れ、平民的で、さら〳〵して、大名華族では一寸話せさうな所から、歸朝後は太政官へ召出され、外務などに出仕したが、現の相撲をとらせて見れば見かけ倒しの案外才が無かつた所から某閑祇候など云ふ閑地に移されて、大殿は亡くなる、財産は家來に盜臣がなかつただけあまる程有るし、若い男と生れた冥加、使はずに何のおのれが金財と昔から百姓の膏を絞つた金箱をつかみ出して、次第に色を漁り出した。其內、夫人が亡くなり、後に來たのが貞子。新奧方の事なれば、結婚の當座一二年は、さして馬鹿騷ぎもしなかつたが、其はほんの一時の上辷り、道子が生れてよち〳〵歩みの頃から、病が段々昔へ戻つて、妾を置く、藝妓を圍ふ、時々は定紋付の車が北へ向くと云ふ話。三從、七去の義、縛りは女の身を亡ぼす專制、從順が女の道德、何事もぢつと辛抱して、容色も衰へ、夜半にや君が獨り行く先に役者と內證の藝妓が家であらうとも、此方は何も餘所に浮津白浪家に立てぬが貞女と、血には何百年の昔から、耳には人心ついてから吹き込まれた貞子は、昔も今も上下押なべ男は一人の妻を守ると云ふこと絕えて無く其を古來の賢女と云はるゝ人は默つて妬まず居たと云ふ恐ろしい先例の不文律にからまれ、賢名の貞と云ふ字を昔のまゝに解いて、自然と起る不快の念も蛇と嚙み殺し、當然に燃ゆる嫉妬の炎も苦とうち消し、何か吾身に落度はなきかと自反し、侍女の告げ口に應へ一つせず、口惜し涙を隱して機嫌よく出迎ふ顏を、醉歸の良人がとろ〳〵眼には嘲笑と見て、また不機嫌なこともあつた。

道子が六歲の冬、良人は南歐某國公使に任ぜられた。其れは、一には華族、二には金滿家、三には外國語が一寸出來て、四には美人の奧方があり、五には馬鹿と名のつく程でなく、六には其國柄があまり機敏な公使を要せず、七には手利きの書記官が一人つけてあつたからで。夫人貞子は喜んだ——良人の亂行も間隔があつて、仕事がないからの事、境異なつて事多ければ後樂も自然と直るであらうと。彼地へ渡つては、夫人は道子が師を其まゝに自己も語學修行、筆翰と氣品と一儀とで、公使夫人の名には轟いた。併し夫人の望は空賴であつた。初の間こそ左もなかつたが、少し尻が暖まるとまた例の品紅翠綠、其上に金に任せて骨牌遊。道德の程度はあまり高からぬ國柄、貴族の腐敗は無腸の臭いと同然、先當然と云つたものなれど、此は外國の使節丈に評判も高く、或時土地の貴族の甲乙と醜窩に泥醉して喧嘩の末は警吏に喰つてかゝり拘引された後で其と分かつて宥されたが、此事何時か本國に傳はつて、在任二年で召還された。夫人貞子が其前竊かに手紙で家令に諷して其となく歸る樣に計らはせたと云ふ者もあるが、事實は分からぬ。兎に角喜多川公使は召還された。其後外務の當局者を非常に恨んで居る。併し喜多川公使の手に外務は中々合はぬ。而して此悶々は漏さねばならぬ。幸にも金庫には金が唸るし、金でまゝになる女は山程あるし、母後室は亡くなる、いくらでも辛抱して呉れさうな奧方にあるし、舊家臣の中でも煙たく思ふ男は引ちがへに進行したし、——喜多川前公使の亂行は幾何級數で進んだ。取りかへ引かへ置く妾も已に十數人。妾腹の子も女ばかり三人もある。猶其上に、二階の月、北里の花と浮かれあるきて、月月の遊蕩費、圍ひ者へのきまつた手當だけでも、自家の負債を拂つて僅か半年一年の學資に充てて其餘殘で每晩飲酒の二合三合は心易う飮まる

ると左る貧困の舊家臣が眉を顰めた位。如何だい、侯公、大將御壯ぢやねえか、と馬丁が蔭口をきいた。

頭の抑へ手はなし、法律と云ふもの、元來大きなものを殘して小さなやつを罪に落す便利な篩、此は恐ろしい筈の社會の制裁と云ふやつも近頃の吾勝な無遠慮に頓斗大目になつて、大概にしたら如何ぢやと意見らしい事を云ふ伯父分の某の殿までが五十歩百歩の間柄とあつては、何に憚る所があらうぞ。是が下樣の嘯く小左衛門であつて見ると亭主の胸倉とつて、馬鹿も大概にしろ此頓痴氣野郎め、と手取ばやく小突きまはす法もあらうが、御殿の奥深く奥方と册かれて、大勢の召使の眼の前に威嚴を保つ婦人、殊に古風の女子教育で鍛ひこまれて嗜深い貞子、何事も押靜め押下げして居れば、嫉妬も不快も憤怨もまた已むことを得ぬ輕蔑も内攻して、胸の内は四苦八苦。併し嫁いで來てより顏見る度に苦い顏を見せらるゝ貴島の後室と云つて、良人の親族の小大名家に、今も嫁がず二十幾歳の痘痕だらけの般若娘が居るのを、喜多川家に入れ込まうと貞子が入輿の頃にも大分躍起となつて運動した、と云ふ事を聞き知つてからは、ます〳〵身を愼み、此方の仕打に指でもさゝす隙を與へまい、と飽くまで默つて受けて居れば、良人は其をよい事にして、意氣地なしと思つてか、仕度放題の亂行。殊に此一兩年は、蘭花の淸きに厭き、都の花の意氣に艶なるにも飽いて、野桃の鄙びたるを愛づるそゞろ心、一昨年の春沼津在の獵歸りに、白手拭かぶつて桃の花の下に鄙歌歌うて靑々した麥に消藻の肥料臭れて居る田舍娘のお隅と云ふ一寸澁皮のむけたのを見染めて、他へ嫁く約束があるのを、金に飽かして根こぎにしたあとは、お隅お隅と隅へは置かぬ寵愛。其女が去年の春喜多川家に唯一人の男兒を産んでからは、勢朝日と上るに引易へて、奥方はまるで無き者、眼の前の勢を逐ふ淺猿しき人心、家扶家從召使の中にもお部屋樣の機嫌とる樣になれば、賤き育の身は奥方の氣高きに壓されて妙に口惜しく頭が上がらざりしお隅ものこ〳〵増長して、何かと奥方を誣ふる樣になり、首尾よくばおのれ取つて代らん程の慾は無くとも、疑心暗鬼の邪推から、吾産んだ男兒の一寸咳嗽し腹が痛んでも邪智深い奥方の指圖で毒を盛つたのではあるまいか、わが躓いて倒れても奥方が笑はれた樣な、と僻んだ告口をする樣になつて、伯爵はまた其を盡く信ずるではなけれど、一半はお隅が機嫌をとる心から、貞子に出て行け、など云ふ始末。無論口ばかりではあらうが、其もあつて無き實家をもつ貞子には弱身につけ込み蹂躙られる心地。道子も已に十歳を越して、吾子ながら子供にませた眼もあり耳もあり感も烈しい質、此亂れた家に碌でもない事見聞させては可哀想でもあり裨益にもならずと、本邸には居ることならぬと良人の命を其まゝ、去秋以來此麻布の別邸に棲んで、手當は月々本邸より送られ、道子を學校に通はせ、其こそほんの夫婦有別、奥方の實は唯其丸髷に殘つて居る。

喜多川夫人の不幸は猶此に止まらぬのである。實弟の元房と云ふのは、貞子に六歳劣、貞子が喜多川家に嫁した其年母諸共東京へ喚び取つて、母の歿後はわれ母になり、華冑の子弟を干城の任に當らせよとの聖意を體して、豫備を卒へさせ、陸軍士官學校に入れ、十七年の敍爵に、良人は伯爵、弟は梅津子爵となつたのは好かつたが、此弟と云ふのが姉には似もやらぬ魂入らず。原はと云へば、姉を十分嚴重に育てた其に引易へ弟をば兎角大事に甘くし過ぎた母が過失であつた。十二三の頃から、遊好きの金づかひが荒くて、姉の夫人も弱つたが、縦奥方の實弟ではあり、後見の賢道伯も快よ

く世話して異れたが、愛がさめると其樣も行かず。士官學校に入つて安心と胸撫で下ろした甲斐もなく、卒業間近になつて、遊蕩の烈しい爲めに退學を食ひ、其れからは從五位子爵の肩書つきの浮浪者、姉の夫人が幾度足場を拵へてやつてもまたずる／＼、到頭去年の暮、好からぬ奴の同謀なりだしなりになつて詐僞取財の樣な事を仕出來し、危く法網は免れたが、終に華族禮遇停止を食つた。喜多川夫人は、泣きついて來る弟を最早知りませぬとは刎ねたが、何を云つても梅津家の命脈は此一人に繋がる實弟の事、眞實改心するならば如何樣にか骨折つて、禮遇停止を免除して貰ひ、然る可き業務も探して、と釘うつて返した。返したものの、今の境涯、肝腎の良人は相談相手にならず、舊藩家中の者に打明けて賴む事でもなし、昔己を世話した權掌侍某は掌侍に上つて間もなく亡くなる、佐々倉家にも此のみは賴まれず、厭ながら是非なく藤澤伯が家を二度までも訪うて、弟の再び世間に出らるゝ樣にと賴んだのである。

（七）

佐々倉夫人も思はず太息ついて、話は暫し途絶える。所へ靴音ばた／＼、涙滿面の桃色服が駈けて來た。

「おや、照子――」

「如何しましたエ？」

「あんまり――」言葉の三分二は、母の膝に埋れて小さな肩が嗚咽に搖れて居る。

引つゞいて道子と、千代と、ネッドまでが、喘々息で駈けて來た。

「如何したのです、あ、分つた、また兄樣と喧嘩をしましたね」

「だつて――あんまり――ですもの――人が――ネッド――」

「何ですと？　斯樣な大きな態をして泣くと云ふことがあるものですか。其ら、ネッドが笑つて居るよ、ね、道さん」

「道子、卿が如何かしたのではありませんか」

「否、照子さんが、あの、ネッドにお乘りなさると、兄樣が無理に頸環を引きなさつて、其れで照子さんが落ちて、お泣きなさつたのですわ。わたくし惡いのではないのですもの」

「其れ、／＼、また其樣なことを。卿が早くとめるものですよ。――千代も氣をつけてね」

千代は笑を含んで恐れ入つて居る。道子は眞面目に母の顏。照子にはきまり惡さが半分、いよいよ顏を母夫人の膝に埋めて、耳まで赤くなつて居る。ネッドは彼方見、此方見。

「さあ、最早大概にしてよすものですよ。さ、顏を拭くのです」佐々倉夫人は、右手に吾女の髮のリボンを直して、左に香高き手巾を握らす。

「照さん、機嫌を直して、お遊び――さ」喜多川夫人は盃の支那蜜柑をとつて照子に握らした。

「照子、お禮を申すのですよ」

がくと跳ね起きた照子の顏は、まだ濡れて、紅くて、最早笑つて居る。

「叔母樣、有り難う」

「御機嫌が直りましたね――」

「だつて……ですもの」照子は蜜柑を持つて、くるり廻つた。

「さ、道子に一つ、千代に一つ――其れから、照さん、此は兄樣にお上げなさい」

「母樣、泉水の方で喰べても、宜うございますか」道子はうるみを有つ母の眼をまじ／＼眺めながら。

「宜しいとも。仲好く一同で遊びませうぞ」

「鬼子ツこをしませうね、道子さん――千代ちやんもお出、――ネッド卿もお出よ。ほゝゝ」

ツ、と冴えた笑聲をのこして照子はとつとと驅

け出す。
「道さん、一寸」
　呼びとめて、佐々倉夫人は手早く被布を脱り、紫矢絣の襟を直し、緋縮緬の帯を一寸引しめ、「さ、此で身輕になりました」
「有り難う」道子は稚子髷を下げて、小走りに此方を向いて待つて居る照子のあと追つたが、やがて手をひき合うて、千代ネッド諸共に泉水の方へ行つてしまふ。
　あと目送りし兩夫人は、顔見合はせて、含笑んだ。
「道さんは成人ですが、自家の二人には、わたくし困り切るのよ。毎日二三回喧嘩がないことはないし、兄を立つれば妹が怨むでせう、妹を立つれば兄が怒りますし、ね、本當に仕樣がありませんわ。照子は彼通り私に肖てお轉婆ですし、兄の方はまた子爵に肖て眞面目は眞面目ですが怒りつぽくて、弱り切るのです」
　喜多川夫人は微かに含笑む。
「でも貞子さん、わたくし熟々考へて見ますと、子供ばかし惡く言ふ譯には行かぬと其樣思ひますわ。成人だつて、えらさうにして居る人が、矢張髭が生えた子供ですもの、始終子供喧嘩ばかりして居るのですわ。喧嘩兩成敗つて云ひますが、男と女となると、體は小さし、力は弱いし、如何しても男の無理が通り易いのです。其れで、兄の方を少し立てすぎると、照子が直ぐいぢけて、兄の吾儘が增長するのですから、わたくし些お轉婆の樣でも照子に負けるな〳〵つて其樣云つて聞かすのですがね――」
　四阿の卓子に頰杖ついて、右の指はこん〳〵と吾れ知らず拍子とりながら、佐々倉夫人は語をついだ。
「先、男と云ふものが子供見た樣ですね。甘やかして置けば際限もなく增長するものですわ。此頃の亂暴は增長した子供の吾儘ですわ。畢竟女があんまりお心好で、負けて〳〵負け通しに負けたものだから、悉皆領分を切り取られた、と云つた樣な譯ですわ、本當に。其れでわたくし其樣思ふのですよ、斯樣に女が負けてばかり居ては際限がないから、奮發して領分を取りかへしたら如何でせうつて。其方がつまり男の裨益ですもの。其れでわたくし、此樣ながさつな質ですから、子爵でも吾儘が過ぎると思ふと、ぽん〳〵云ふのですよ。其れも初は一言云へば十言かへされたのですが、此頃は餘程何かが變つて、折れてくれるやうになつたのですよ」

（八）

　喜多川夫人は默然として居る。從來沈默甘受の一點張で押通して來た夫人、假りに佐々倉夫人の所說を實行したとすると、結果は如何であらう、と心に考へて居るのであつた。
　佐々倉夫人は語をついだ。
「其れで、わたくし大變生意氣を云ふ樣ですが、喜多川伯爵も吾儘が御過ぎなさるですよ。何故と申して、貞子樣の樣な――まあ、云はして頂戴――貞子さんの樣な立派な――否、贔屓でも何でもありません、誰だつて其樣云つてますわ――立派な奥樣が御ありなさる癖に、餘りですわ」
「皆わたくし不束な故でございます」
「其樣ではありません。貴女の御辛抱が過ぎたのですわ」
　喜多川夫人は吻と息ついた。
「併し富子樣、昔から賢女貞女と云はるゝ方に、皆つらい所を辛抱しぬいて、いらつしたのではありますまいか。何もわたくし不束な故でございます。出して下さるではなし、死ねと仰有るではなし」喜多川夫人は下唇を噛んだ。「此

別邸に居さして、月々の不自由もない樣にして下さるし、わたくしさへちつと堪忍して居ますと、家内の紛紜も世間の口端にかゝらずに濟む事ですし、死んだ積りで居れば――」

「でも餘りですわ。失禮ながら正氣で御出とは思はれませんわ――居とした奧方を別邸に遣つて、素性も分からぬ賤しい者を――餘りですわ」

「道子が男子であつたら、少しは何して下さるでせうが、一人の子は女ですし、加之此樣な不束な質な上に、後嗣の男子も彼方に出來たのですから、わたくし最早有つても無くてもよい、寧死んだ方が好い體ですから、せめて道子が十七八にもなつて、梅津の家が細いながら續いて行く安心がつけば、最早わたくし長らへて御邪魔をかける未練もないのですが――富子樣、今は如何あつても思ひ切れませんわ」

喜多川夫人は俯いて、ほろ〳〵落涙した。

佐々倉夫人も眼をしばたゝいた。

「何て世の中でせうね、本當に――」

「わたくしは最早此樣な腑甲斐ない者ですから、何ですが、富子樣、道子は御自分の子ではありますまいか。子供と云つても最早十二です、物心もついて居るものを、些は考へて下さつても宜しいではありますまいか――時々は何故汝は生れて御出だつて、道子に云ひたくなるのでございますよ」

眼を拭つて、笑を裝ふ下脣はぶる〳〵震へる。

「如何して斯樣な亂な世の中になつたのでせう。ね、貞子さん。昔だつて斯樣な事はありはしませんわ。此れも如何はしい家業の者を奧樣なんか名乘らして居る新華族の連中が威張るからですわ。」

「併し富子樣、考へて見ますと、わたくしの運かも分かりません。父も母もわたくし共を育てる爲めに苦勞しぬいて果てたのですのに、わたくしばかり果報でしたから、此樣に苦勞するのも當然かとも思ふのでございますよ。でもわたくしは如何でも、道子、年端も行かぬ者に苦勞さすのが、實につらくて――今の樣では、道子も現在の父は愛して下さらず、道子も矢張わたくしばかり慕ふのでございますから」

「無理はありませんとも」

「わたくしに若しもの事があつては、彼樣な氣勝な兒ではありますし、如何樣な苦勞を致さうか、と其ればかり苦になりましてね」

「あゝ最早斯樣な御話は中止ませうや。何ですね、縁起でもないことばかり。本當に斯樣に御辛抱なさるのに！……喜多川伯爵だつて、其中一度夢が御醒めなさるでせうよ。何時まで彼樣でいらつしやることが正氣の人に出來ることではありませんわ。氣を長く御持ちなさることですよ」

二人は默した。日は少し薄うなつて、冷やりとそよぐ風、落花の雨にはまた一しきり、はらはらと囘廊を渡つた。

高髷の侍女が遽しく走せて來た。

「御上樣……あの、御前が――」

兩夫人は顏見合はした。

第五章

（一）

「御前樣、御待ちでございますよ、早く御出遊ばせ」

呼び〳〵、片はづしに結つた四十あまりの老女が、息せきかけて來た。

佐々倉夫人の一列は、最早半時ばかりも前に辭し去つた。併し道子は猶泉水の側に立つて、椿の花片を一片づつ挘つては泉水に投げて居る。持てあぐんだらしき千代と、ネッドが其を

眺めて居る。

「千代さん、困りますね、姫樣を御呼び申しに來ながら」

「だつて、如何樣に申上げても、御出なさらないのですもの」

「本當に困りますね、今些氣をお利かしなさいよ——さあ、姫樣、吾儘を遊ばしてはいけませぬ。さ、國と一同に御出遊ばせ」

道子は猶默然と、花片をちぎつては捨て、ちぎつては捨てて居る。

道子と父伯爵の間には、不言の敵對の狀態が久しくつゞいて居るのであつた。其は殆んど道子が物心つく頃から始まつた敵對である。女の子は男親になつき、女親は男の子を可愛がる、と云ふのが通則であるが、道子は以前から兎角母を慕つて、父に疎かつた。道子に關しては、伯爵も久しく夫人を妬んで居た。

父伯爵が南歐に公使を勤めて居た間道子を、養育の任に當つた最初の家庭教師は、名をマリアニーと呼ばれて、畫家のモデルになりさうな風姿をしながら、マッジニーの流を汲んで憂國の氣性烈しき年少婦人であつた。身は貴族の一人に生れて、而も非常の辛苦を嘗めて人となり、露獨佛諸邦を流浪して、虛無黨婦人、社會黨婦人等に交はり、政論の上は無論、婦人問題に關しても急激な意見を持する進步的婦人であつた。日本の貴族の公使が嬢の保姆を探して居ると聞いて、マルコ・ポロ以來其名高き遼東の日本に歐洲最新最高の精神を移植する布教の積りで、自から推薦して道子教養の任に當つた位だから、教ふる所は語學と作法の其に止まらなかつたのである。勿論、後には其政府の注意で他の保姆に更へたので、任にあることは僅かに一年半ばかり、道子が六歲七歲の幼稚な頭腦に播いた所は幾十もなかつたのであるが、併し其種子は無益には落ちなかつた。言葉もよくは通ぜず、話も無論分からぬが、其樣なまどろかしい媒素を靈の火は待たない。一切の權威をば疑問なしには受けず、一切の不義不正をば蛇蝎の如く惡み、懦弱闇愚に唾きし、吾手で食ひ、吾頭で判斷するマリアニー女史の意氣は、少なくも其幾分を道子に吹込んだ。藁は灰となり易いが、熱した石は容易にさめない。道子は藁の可燃質と共に、石の執拗をもつて居た。

視る子、聽く子、考ふる子、判ずる子、恐れぬ子の道子は、やゝ長ずるに從ひ、批評的に父伯爵の所行を見て、憤怒と輕蔑を禁じ得なかつた。逸早く其徵候を見た母夫人が、父子の義、男女の分を繰りかへし說き聞かして、其謀叛心を鎭壓せんと試み——併し母夫人其人もしばしば吾子が尤ではあるまいかと疑つたこともある——だが、其甲斐なかつたのである。父伯爵も其と感じて、心にじれた。而して一昨年妾腹に男子が生れた以來、伯爵は故らに道子を疎んじた。

「さ、姫樣、大抵に遊ばせな、其樣に吾儘を遊ばすものではございません。御父樣の御機嫌をわるく遊ばすと、御母樣に御不孝になります。さ、國と一同に御出遊ばせ」

最後の論理は確かに道子を動かしたのであらう、手に持つ椿の花を捨てて、さつさと歩き出した。

「あッ、姫樣、一寸御待ち遊ばせ」

老女は追ひついて道子が帶を引しめ、衣紋を直し、

「千代さんはネッドを連れて、乃父は未だお歸りでないか、見て來て下さい」

云ひすてて、道子を新築の西洋間の方へ導いた。

階段を上りきる時、

「不埒な」

怒を帶びた男の聲が聞えた。

老女は道子の肩をとらへて、囁いた。

「姫様、御前の御機嫌が御わるいのでございますから、何と仰有つても、御悖遊ばしてはいけませんでございますよ」

道子はさつと顔を赧くし、其手を刎ねのけて、扉を排いた。

（二）

派手な薄色格子縞の春服を着た、額の禿げた四十四五の男が眼を上げた。

即ち喜多川伯爵である。二十疊程の、紅地に黒く唐草模様を出した絨氈を敷きつめた廣間の中央に、大きな靠倚椅子に身を埋めて、巻莨を右手に、上靴を突つかけた足を重ねて居る。とろりとした茶色の眼、じれる子供の其の様に直ぐ尖る薄唇、眉は道子の其に似て濃き方であるが、茶色の瞳に徹はるゝ口のあたり力ぬけて、時々唇を潟るゝ歯は煙草を喀む故か少し黄ばんで見える　面上の紅は恐らく餘所で傾けたものの餘であらう。

夫人は圓卓を隔てゝ下手に、俯いて居たが、今扉の開く音に上げた顔に少し逆上せて、眼はうるんで居た。

「道、此處へ來い」

伯爵の聲は錆びて居る。扉をしめて、二三歩、立つたまゝ道子は父伯爵に一禮した。

「道、卿は不都合な女だぞ」

「道子、何故直ぐお出なさらぬ？　父上が御出になつたら、何も差措いて直ぐお出なさるものです。——何故お出なさらなかつたエ？」

道子は額を紅くしたが、終に何も言はず、じろじろ父の顔を瞰めて居る。其眼光が父のに會ふと、伯爵は眼をそらした。道子と見合はす時は、毎も斯様である。

「貞子、此も卿の躾が悪いからだ。道、卿は乃父を何と思ふ、乃父は親だぞ。其れ／＼また其様な眼をする。頑固者めが！」

伯爵は拳をあげて、卓子に一撃を與へた。卓上の鼻眼鏡が愕然飛び上つて、床に落ちる。

父伯爵の怒を帯びた聲高くないではないが、場合の可笑し味にうたれて、道子は微笑を禁じ得なかつた。が、不幸にして其微笑が伯爵の眼にとまつた。

「好、笑つたな、不孝者、親を馬鹿にする」

いきまき荒く突と立上る伯爵。夫人は押隔てた。

「良人、子供でございます……」

「子供なら親を馬鹿にしても宜いか」

「左様ではございませんけれど、此兒はまだ十二でございます、何卒御勘辨遊ばして——さ、道子、父上様にお詫を、お詫を申しませうぞ」

眞紅になつた道子、寸歩も動かず、頭も下げぬ。濃い眉少し釣つて、黒玉の眼はきら／＼と、眞面目になつた顔は一段の美に嚴を添へて、冒し難い威光に、親ながらうたれた伯爵は、手持無沙汰の兩拳を洋袴の衣兜に突込んで、室内を彼方へ、此方へ。

「好、あやまるな／＼、卿の様な頑固な奴は、乃父も子とは思はんから其様思へ。母御の御仕込だけあつて、天晴なものだ、高慢と云はうか、頑固と云はうか、——いや立派なものだ。ふゝん。併し道、よく聞け、今は昔と時世が違ふぞ。華族の、貴族のと威張つてばかり居るが能では無いぞ。卿母子はまるで勘違ひをしとると云ふものだ。時勢おくれだ」

喜多川伯は平民的だ、洒落だ、と云ふ評判は、伯爵が少なからず得意とする所である。大工、植木屋にも心易くものを言ひ、落潑の者にも君、僕で行くので、此點に於ても上下の分を嚴重に觀る夫人と、全く趣味を異にして居る。尤も其平民的は此方からだけ平民的で、先方が同格で來れば、御機嫌を損ずる、と云ふ者もあり、また

伯爵の實母は喜多川家の正室でなく町家から上つたお妾だけに、其趣味も先天的に平民的なのであらうと素破ぬく者もあつたが、兎に角喜多川伯は同族中にも聞えた平民的趣味を有つた方で、從來夫人を罵る言葉に、高慢だ、時勢おくれだ、は毎も出て來る慣用語であつたのである。

春の日はやゝ意外に傾いて、烏が啞々と鳴き出した。

（三）

「併し何だぞ、其高くとまつて御出の御方が、何で、人もあらうに――藤澤如きに頼みに行つた？」

「其は先刻も申上げました通り――道子、彼方へ行つてお出」

道子は父母の顏を交代に眺めて、容易に動かぬ。

「一體誰が許して藤澤を尋ねた？」

「道子、これ、彼方へ行つて――ね」

訴ふる眼つきを殘して、道子は徐と扉を排いて出て行つた。

「子は親とも思はず、奥の相談相手にもならずか。はゝゝゝ、喜多川もまるで有つて無いものだな。はゝゝ」

夫人はよく此夫の意味を知つて居る。風雨の前の一時靜、危險は其中に十分籠つて居るのである。

「先刻も御話申上げまする通り、申上げなかつたのは、全くわたくし重々不屆でございます、が」

「知れたことさ――今日其――何で其樣な噂を聞いて、嘘だらうと思つて來て見れば、事實！大事實！卿が賢女貞女も久しいもんだが、何處が賢女で、何處が貞女だ？よくづう／＼しく其樣な事が出來たものだ。一體卿は乃公を何と思うとる？乃公は蛆蟲ぢやないぞ。馬鹿ではないぞ。失禮千萬、人を馬鹿にするも程がある」

額の筋を顫かして、肩を揮つて、室内を大股に彼方此方往返して居た伯爵は、伏目になつて居る夫人を流目に見やつて、

「弟が詐僞取財で、姉が藤澤の――フヽン、結構な御親戚を御持ちになつた御賢女は御立派なものだ。ひゝひゝゝ――」

無暗と金を入れた茶色の歯を紅い齦まで見せて、伯爵は苦笑した。

夫人の聲は震うたが、容は屹と亂れなかつた。

「貴人、其は餘りと申すものでございます。先刻から彼程ことをわけて申上げて居るではございませんか、其はわたくし一存で其樣致しましたのは、成程わたくし重々惡かつたので――ございますが。汚らはしい――藤澤の――わたくし其樣な不正な事を致す女でございますか、ございませぬか、最早十二年から御側に居ますわたくしを御存じないと云ふのは――其は餘り、餘りと申すものでございます。愚とか、拙いとか、其樣な事なら兎も角も、女の操を――汚らはしい――」

きりゝと噛む歯を漏るゝ哭泣を、黒縮緬の袂に押へて、夫人は俯いた。

白の窓帷をしぼつた窓の側に突立つて、彼方に俯く夫人が姿はづかしき素足をじろ／＼見下して居る伯爵の面には、吾儘た動物の苦痛を見て居る腕白兒の顏に現はるゝ驚愕と不安と憫足と憤怒と搗きまぜた一種の相が現はれた。

「泣け、／＼、餘所の馬鹿は其手に乘るかも知れぬ。別邸にやつて置けば、いゝ氣になつて、現在の夫に一言の相談もしず、勝手に藤澤如き――こら、藤澤や木下は乃公が大嫌ひなやつと云ふ事を十二年も一處に居ながら卿は知らんか。彼樣な不都合な發跡のやつらに、喜多川の夫人ともあらう者が、頭を下げて――人でも連

れて行くことか、唯一人　何と云はれたつて辯解がつくか」

煞は時と共に長じ、言と共に殖え、動くと共に加はるもの。伯爵は身を後にして室内を彼方此方と塵も漏さぬ罪網を夫人の周圍に遶りかけた。

「卿の弟は乃公の面汚し、卿も乃公の面汚しぢや。現在の夫を差措いて、假令如何樣な大事であらうとも、其樣な法があるか。人もあらうに、藤澤如きに――乃公を踏みつけたのぢや。馬鹿にするのぢや。だから道までが乃公を馬鹿にする。皆卿が所爲だぞ」

（四）

「では、如何樣に御詫を申上げても、御聽入下さいませんのでございますか」

「詫びれば如何樣な事をしても宜いか」

「決して其樣な譯ではございませんが、惡い點は幾重にも御詫びを致して居るのでございますが、其れでも餘りな――一體誰が其樣な事を申上げました？」

「誰から聞いたつて、卿が知つた事か。聞きたいか、聞きたければ、聞かしてやる、――今日在る所で北島から聞いた」

「北島？――彼龜代子――？」

「然さ。何が不思議だ？」

「彼樣な人の――」

「默れ！　人の惡口すれば、わがあかりが立つか。卿の樣な舊弊な女とは北島は違ふぞ。其は世間では何かと云ひもする――世間は何とでも云ふ、乃公なんかの事も亂暴な事を言ひ居るさうだ、世間は馬鹿だ、盲目だ、聾だ、何も知らぬわ。北島だつて色々難癖つけるものの、分かつた女だ、話せる女だ、當世に必要な女だ。卿の樣な石部金吉を婦人にした樣な舊弊な女とは違ふぞ」

夫人は俯いたまゝ。

「舊弊さ、大舊弊さ。いやに澄して、勿體ぶつて、賢女ぶつて――乃公は賢女が大嫌ひだ。だから――お隅が却て宜いと云ふのだ。彼女は、な、其ア教育もない、貧乏公卿の娘でもないさ、併し洒落したものだ、眞面目なものだ、誰かの樣な二重底ではないぞ、賢女貞女ぶつて陰では良人を踏みつけにする者とは違ふぞ」

俯向きになつて居る夫人の耳は火の如くなつた。

伯爵は卷莨を出して、卓上の火鉢にかざしたが、容易につかなかつたので、灰をかき廻した末は、めちや／＼に揉みつぶして、意外に投げ棄てた。而して室内をまた往返りしたが、入日の光弱る窓前に來た時、佇んで大欠伸をして呟く樣に云つた。

「あゝあ、つまらん／＼。輿入の支度から悉皆させて、母御の葬式、弟の始末、何と云つては存分にさせて居ながら、今となつては御相談相手にもならずか――其で賢女で、良人に亂暴者の評判を立てさせて、藤澤如き奴にまで良人の意氣地無しを吹聽して、其で貞女か――何の事だ、馬鹿々々しい、乃公も可哀相なものだ。ひゝひゝゝゝ」

「では、御聽入下さいませんのでございますね」

「聽入れなければ如何だ？」

「何卒御暇を下さいまし」

夫人は屹と見上げた。眼は泣腫して居たが、調子は決然たる調子であつた。

初は耳を疑ふ如く、やがて額と唇と顎と一時にぶる／＼顫へて、伯爵は眉の毛のほつれかゝつた夫人の猶美しき顏を憎さげに睨んで居たが、ふいと立つて二三遍卓子の側を過りながら、ひゝひゝゝ笑ひ出した。

「暇を呉れろ？　好、やらうとも、暇が其樣に欲しければ暇をやらうとも。暇が出たら、何れ

好い處からお部屋様の口がかゝらうぞ。ひゝひゝゝ」

「何でございますと？」夫人の眼光は涙を透して電光と閃いた。脣は乾ききつて、頬のあたり眞紅になつて居る。

「暇をとるには、何れ御目的があらうと云ふのぢや」

「ございます」

「何だ？」

「死んでしまひます」

「ひゝひゝゝ。其は御勝手さ——失禮千萬な。卿の様な女は、淵川へでも身を投げて死んでしまへ」

（五）

恰も此時、扉開いて、高齢の侍女が小さな紫の袱紗包を持つて入つて來たが、室内の容子を一目見ると、伏目になつてもぢ〳〵する。

「何か？」伯爵の聲は眼光と共に尖つた。

「御手紙でございますが——」

「何、手紙？ 持て來い」伯爵は手をさし出す。侍女は夫人の方に眼をやつて、もぢ〳〵。

「あの、御上様ので——」

「何でも宜い。こら持て來んか」

瞥みつゝ、如き聲色の厲しさに、侍女は蒼くなつて恐々袱紗包を捧げたが、まだもぢ〳〵して居る。

「何だ？」

「御使が待つて居りますでございますが——」

袱紗を解けば男文字の大封筒、裏うちかへして伯爵の顔色さつと變つた。

「好、確かに受取つた、と其様云へ。——こら此を持て行くのだ、馬鹿め」

ぽんと蹴る右の上履にからまつて、袱紗は扉にぶつかる。手早く拾つて、侍女は匆々に出て行つた。

ぶる〳〵震ふ手先に、丈夫な封筒のきり難いのを簡ぎしりして引裂き、中身抽き出す拍子に、封筒はひらりと翻つて、俯いた夫人の眼下に墨黒々と藤澤茂光の四字を示した。さつと漲る耳の紅。

畜きもせず讀み返す伯爵は、失望か安堵か猜疑か其何れかを分き難い一種の相を浮べたが、寸々に手紙を引裂いて、投げ棄て、また室内を大股に歩き出した。

「フゝン、大權に屬する事に僭得者、か。——勿體ぶつて、何の事た——併し貞子、卿はエライ者だ、卿が苦衷を諒して敢へて一臂の力を藤澤が盡すさうだ、大したものだ。御禮は何れ大した事だらう。——貞子、假装舞踏會に行つたら藤澤に宜しく云つて呉れ。ひゝゝゝ」

夫人は硬くなつた。髪の一絲も動かぬ。

「と云つたばかりぢや分かるまい。此二十日の假装舞踏會には何れ御出だらうから、其節御目にかゝつて何かと御話し申すと書いてあるのぢや。はゝはゝゝ。假装——假装——假装舞踏會に假装貞女は似合つたものだ。はゝはゝゝ。乃公も歐洲では舞踏も好きだつたが、此國に歸つたら頓斗厭になつた。鹿鳴館に入るも嫌だ。藤澤木下がのさばる世の中では、舞踏も嫌だ。併し卿は行くが宜い——否、行くことはならん。最早卿は東京には置かん。宜いか。暇を呉れと云つたづて、決して暇はやらぬぞ。宜いか。別莊に置けば、宜い氣になつて、何をするか分かつたものか。沼津へ行け、明日行け。宜いか。道は乃公が手許に置く。乃公が許すまでは、箱根から此方へ一歩も踏むことはならんぞ。世間が何と云はうが、構ふものか。喜多川は喜多川一個の了簡でやる」

伯爵は手荒く電鈴を押した。先刻の高齢が召に應じて恐々入つて來た。

「こら、田中を呼べ、田中に來いと云へ」

田中は夫人附の家扶である。

「まだ帰つて見えませんでございますが——」

「帰らぬ？　馬鹿め——好し、帰つたら直ぐ来いと云へ、こら、本邸に来るのだ。こら、馬車の支度をしろと云へ」

高輪が出て行つたあと一分時ばかり、伯爵は化石の如くなつて居る夫人を流眄に見て居たが、つか〳〵扉を押あけて出ざまにぴつしやり。階段の中程で老女と何か言ふ声が聞えたが、二分程経つと玄関先を轔轔と乗り出す馬車の響が聞えた。

（六）

併し喜多川夫人の耳には、恐らく其響は入らなかつた。大抵の癪は押しても良人を送迎の礼は缺かなかつた様に引易へて、立たず、送らず、言はず、見ず、聞かず、石像の如く椅子に固着して居る。

入り日の名残外に薄らいで、黄昏は早室内に満ちて来た。

喜多川家に嫁いで十二年と云ふもの、様々の無礼な言ひかけに合つても一度も良人に言をかへさず、辛い事、口惜しい事、腹立たしい事に会つても、ぢつと歯を喰ひしばつて、随分と女の身には負ひあまる堪へない事も辛抱しぬいて来た揚句が、仮令此方の思案が足らぬ点はあつたとしても、忌しい疑をかけられ、本邸を逐はれた上に、また東京を逐はれ、事實に於て正室の地位をたかが田舎歌に奪はれた上に道子までも引上げられ、箱根を越して沼津へ、許さぬ内は二度と東京に帰るな、とは余りと云へば無理無情、何故女に生れて、何故喜多川家には嫁いで来たであらう、聞きふるし守りふるした女の道も當にはならず、身を責めて良人の夢の醒むるを待つなどとあてもなき當を當にして忍んで来たも何の甲斐かあらう、何の為めにならう、辛抱すれば募られ黙つて居れば踏みつけられて、忌はしい濡衣まで着せられて、今迄の苦心は水の泡、何の為めにつらい思をするのであらう、——と思ふではなく、感ずるともなく、勞れ切つた心を唯漠然と無動の淵に沈めて居る。

卒然人の気はひがして、柔軟な両手が夫人の膝を擁したので、愕いてふりあふぐ夫人の眼は、跪いて見上ぐる道子が星の如き両眼とぴつたり合つた。

「阿母さま！」

顫へうち震ふ夫人。

「道子、お前も阿母が悪い、とお思ひかえ？」

右手を母夫人の口に押あてて、道子は犇と抱きついた。

「道子！——」

慟哭あげて、夫人も道子を抱きしめた。

「道子！　お前は明日から——阿父様の方へ行くのです。阿母は、阿母は沼津——最早——暫時はお前と分れねばなりませぬ。宜いかえ——」

黄昏の薄あかり母夫人が涙越しの眼にもしるき白玉の面は紅に熱つて、悲哀と憤怨と漲る眼には涙、唇はひたとふるへて、頭を掉つて居る。

「道子、決して阿父様をお怨みなさるではありません——阿母も——阿母——阿母をお忘れでない」

道子は唇を噛る泣声を母の胸にうづめて、力のかぎり抱きしめた。夫人は絶え入るばかり女の肩にや丶久しく泣きくづれて居たが、吻と息ついて、斯く云ふ声は宛ながら腸を絞つた。

「道子、何故女に生れてお出だえ？　尼にお成り、尼にお成りなさい。他へ嫁つて苦労して如何します？　男と云ふ者は皆不好者——道子、決して男の妻になりでない。尼になるのです、尼に——」

室内の夕闇に、ひしと抱き合つて、母子は涙を身に浸した。

扉の外には、洋燈を手に、涙を呑んで老女が佇んで居た。

第六章

（一）

五月第二日曜の朝晩く、藤澤伯は高輪の私邸の二階で眼ざめた。

例ならば永田町の官邸で、と云ふ所であるが、日曜を見込んでの來客の煩を避けて、一夕一朝の閑を樂むべく、昨日の日暮方から、行先きを親近の甲乙にのみ知らして、竊とぬけて來たのであつた。

何時の間に開けたのか、美しき日影は枕頭の障子に榮えて、下に囀る金絲雀の聲面白く、一寸頭を上げれば、障子の腰の玻璃越し、上總房州かけて早夏近き品川海の眞帆片帆、障子の棧を其まゝの額縁にして、一面の好畫圖。伯は藤模樣縮緬の搔卷、何處となく白粉の香をとどめたのを少し踏みぬぎ、黄八丈の寢衣の袖から兩手を出して組んで、枕にすけて、大欠伸して、天井を眺めて、微笑した。

人生眞に微笑す可き機會に會ふことは幾何もないのであるが、藤澤伯は今其稀有の機會に會つた。思へば誰の胤か知れぬ道途の棄兒から起つて、日本一のエラ者になつたとは吾事ながら小說の樣な話、巨頭公の背を撫でた猿面冠者の頭をとんとたゝいて、天下の英雄は君と吾と誇つても、怪しうはあらぬ次第である。世間の馬鹿共は、藩閥が如何したの、運が好いの、と闇燒攻擊ばかりするが、不肖ながら藤澤茂光、何の好運なんかたよるものか、今の地位には吾手吾足で登つたのだ。勿論維新三傑の先輩が存生の砌は、後輩の吾儕思ふ樣に手は伸びず、甲東橫死の折からは有璺の事が落膽して、躍起好きの跛翁に「へこたれるな」と引ずり起された事もあつたが、何有、やつて見れば知れたもの、此十年の間日本の大黑柱は誰であつたかと問へば、不肖ながら此藤澤と承認せざるを得ないのである。先輩のまだほんの着手で置いた事業の跡を承けて、後輩の出すぎた縱論橫議を抑へて、內治外交の紛紜をきりまくつて、憲法も最早一二年の中には發布と云ふ所まで運ばせて、東洋未曾有の憲政國の基礎を据うるの責任と名譽は、不肖ながら此藤澤が頂戴しなければならぬ。公平に考へて見た所で、閣僚の中でも、世間で乃公の相棒ときめて居る木下は、銳敏で勇斷で俠氣もあるが、惜む可し大局を見る眼がない。長田、此は中々の意地惡者、味方とすれば恃む可く敵にしては油斷がならぬ奴だが、無論立憲政治家の資格が無い。南條は馬鹿に大きい所があるが、無學問はなし、實務の才も無し、殊に怜悧で乃公の加勢はする共邪魔になる氣づかひなし。長倉は愚物、十六盤さへ持たして置けば安心。堀——彼奴も最早追々歸朝するな、また頑固論で騷らせるかも知れんぞ、併し時勢おくれが何と威張つても駄目なもんさ。白井——彼の亂暴にも困る、併し此頃は大分大人しくなつた。西洋に行つた故かも知れぬ。否、困り者は巴里倫敦の空氣を吸はするに限るて。餘子は碌々、數ふるに足らぬ連中だ。野邊地は恐ろしいきれ物だが、外國にやつて置いたので、先安心。元老院には些煙たい眼玉の黑いやつが二三人居るが、彼樣な奴等は痩犬同然、腹さへ膨らして置けば、何有、尾をふつて居るさ。鷺野に下つて、大井田、敵ながら天晴剛の者とは彼奴の事だ、加之子分も中々腕利に富んで居る——併しさ、併し、何だ、今の樣では當分手も足も出る氣づかひなし。土屋は元來正直者、殊に彼貧乏では自分の髯でも挘つて食はずばなるまい。武東、此奴は維新以來の大山師、何時何をやり出すか分からぬ險呑な奴だ

が、何有、土地人は啓道が利くて、慾には目が無い奴等だ、騒ぎ出したら泡き込むばかりさ。斯う數へ立てて見ると、當時日本に乃公の向うに立つ男は、御氣の毒ながら一人も見出さない。大局の眼が見えて、學問があつて、泰西文明を咀嚼する丈の勢力があつて、畢竟立憲政治家、否經世家の資格を具へて居る者は、御氣の毒なから、先藤澤君を推さなければならぬ、藤澤君も實にエライ者ではないか。藤澤君は乃公、乃公は藤澤、はゝは、時に英雄無く、豎子をして名を成さしむ歟。

藤澤伯が微笑を註釋すれば、右の通りであつた。

（二）

藤澤伯の實質は聰明冷血の四字に盡きて居る。聰明冷血は、人の忌む所である。水清らさぬ如き人を、人は好まぬのである。聰明鬼神も忌む道理で、冷なた人は惡み、敬遠物である。お爲めに他を親すは、已が難い人情である。卽ち聰明は、處世の上から云つて、人の安全器である。藤澤伯の重なる安全器は、實質を包む浮誇の具であらう。浮誇の故に、聰明或は人を[illegible]の教唆になる。浮誇の故に、柄にない氣を使つて高踏もすれば、些細な事を氣にもすれば、英雄の度量を眞似て失敗しては倒れるのである。其柔術に拙いのも、或は浮誇の一作用に屬するのかも知れぬ。

賴む、可、引受けた、と二つ返事で、躊躇は[illegible]いで、骨折る木下伯と違つて、聰明冷血の藤澤伯は一挙手一投足も利害のお算盤は決して忘れない。突進す可く、其眼はあまり見え過ぎ、沸騰す可く、其血はあまりに冷やかなのである。併しながら、利益を損ぜぬ範圍内では、往々人の世話もすれば、自尊心の自負を傷けぬ程度では、謙介驗に謙し士に下ることもある。浮誇は妙な芝居をさすものだ、で無くとも、成功は由來度量を具へ、自識は存體に円熟を與ふるを好むものである。冷たい水も滿つれば溢れる。藤澤伯の倉有も自づからこぼる、時となつた。つい數日前に、在野の大井田、土陸以下伯の某推擧によつて、叙位の恩典に預つたのも、要するに細の愛驕のあまりである。先月鹿々館の貴婦人慈善會に、交も深からぬ、殊に田舍から飛び出して來た、殊によくも頭を下げぬ東老人と馬車に同乘したのも、倉有の溢れたのである。出來ることなら、誰しも劉文叔にはなつて見たい――藤澤伯は殊に芝居氣がある人である。先月喜多川伯爵夫人が思ひがけなく二度までも尋ね來ての依賴を引き受けたのも、一は其好色漢の癖にぶつかつた結果である。尤も、華族社會に名高き美人の喜多川夫人が、折入つての依賴を、藤澤伯でなくも、其樣無下に斷られるものでは無い。

藤澤伯は、婦人に關しては、古今となく、徹頭徹尾味方と云はず、日本の男子が從來概ね懐いて居た通りの考を有つて居る。煎じつむれば、婦人と云ふものは、可愛らしくて、馬鹿で、男子の慰みの爲めに生れて居る玩弄的動物である、ときめて居る。一夫一婦は支那の聖賢も命じなかつた。日本の英雄も行つた例がない。手を把つて語らうと思ふ女は云はずもの事、いやに實味な德川家も中々の好色であつた。維新の先輩殆んど一人として實際な潔しい事を云ふ者はなかつた。日本を背負ふ積りの自分、たかが女の五人十人、弄んだとて其れが何の汚點、殊に觀察位には大目に見る可き筈だ、と婦人の事については伯は安らかな良心を有つて居る。自己と云ふ者を有たぬ、云はゞ生きた死物同然の女を弄び馴れた伯が、其樣思ふのも、また無理なき次第かも知れぬ。併し喜多川夫人の依賴と厚意は、夫人にとつてよき身の護符であつた。伯は夫人の

餘儀ない依頼を引受けて、夫人の實弟衍津子爵を懇々説諭し、急に禮遇停止の御除と云ふ譯にも行くまいが、併し骨は折つて見る、兎に角改悛の效を現はす爲め、些勉强して來玉へ、と子爵を御陵調べの下まはりにして、京都地方へやつたまで、夫人に對して非禮の擧動はなかつた。伯が眞に氣の毒と云ふ心から忙しい中を一肩ぬいだが、抑も亦先々の野心が蟠つて居たのか其は分からぬ。兎に角肝腎の喜多川夫人が先月急に沼津とかへ行つたので、話は其れ切り、若し伯に其意地汚い野心があつたとすれば、まさに馬鹿を見たのであつた。

（三）

突然枕頭をがら／＼と横濱行の列車が通つたので、伯の思潮は一變して、維新前後の活劇から、亡くなつた甲東松菊諸先輩の上に及び、當年吾上に立ち、若くは吾と鑣を並べ馳せた連中の、或は泉下に歸し、或は意氣銷沈して甘んじて吾下風に立ち、乃至風潮におくれて落魄して杳として所在を知らぬ者の上に及び、喞々館の貴婦人演藝會の夜會つた以來病とやらでまだ緩々話す機會もなかつた東三郎の上に及び、九十九の平伏す頭より此倔强な一の頭を下げさして見たき思を催したが、不圖東老人の老いた姿に吾老後を思ひ浮べ、百歳の後九段か丸の內かに立つ可き吾記念碑の面影を思ひやり、千秋萬歳名、寂寞身後事、今日本に飛鳥を落す藤澤茂光も終に白骨と化けるのかと、吾にもあらで悵然とした。其も唯一瞬時、奇妙の聯想から咄嗟に先夜の假裝舞踏會を思ひ出で、更に其會が生み出した新聞の己に關するあられもない記事に移り、悄然と眥を上げたが、吾死んだ後は小新聞の三面雜報が賑さびれる事であらう、とまた一種の得意を催し、其れから不圖先日官邸に押かけて來て一夫一婦を說法した婦人風俗矯正會の幹事某女史が尖つた嘴を思ひ出して、はゝはゝはと笑つた。

「御前、御目ざめでらつしやるの？」

すうと襖を開けて、十七八の、お花、縮珍、紅のはひつた半襟、眞白に塗つた島田が、摺足ではひつて來た。

「何時起きた？ 些も知らんかつたぞ」

「ほゝゝゝ。御前、何を今御笑ひ遊ばして？」

「乃公か。乃公は笑ひはせん」

「彼樣なしらをきつてらつしやるよ。屹度、何だわ、彼處かの好い人を思ひ出して、嬉しがつてらつしたんだわ。本當に御前は御人が惡いわ」

と甘つたれる。

甘えろ／＼、芝居をしろ／＼、乃公が藤澤でなけりや鈍帳の馬の脚程もきれないのだがな、とは心の中、藤澤伯はにや／＼笑つて、枕近く膝を突いて居る女の顏を眺めて居る。斯れは伯爵が數ある嬖女の一人で、小縫またの名をお縫と呼ぶ果報者である。藤澤伯は、官邸私邸別邸を有つて居るからでもあるまいが、妻にも公妻私妻臨時妻の各種を有つて居る。

「最早御起き遊ばせな、九時ですわ」

「誰か來たか」

「は、濱の女將が來ましてね、あの、御前がおよつていらつしやるなら、一寸新橋まで、用達に行つて、直ぐ參りますからつて、申しましてね」

「唔、お杉が來たか——其れから？」

「其れから先刻來海さんが永田町から御手紙や電報をもつていらつしやいました。其れから今須藤さんが——」

「唔、正か、可、可、——どれ、起きるかな」

起き上つて、だらしなき寢衣の前をつくろひ、彼婦人に縮緬の兵兒帶を直させ、障子明ければ、亜字欄外に白金流す品川灣の風景は一日に集まる。伯は欠伸して、眼を細くして、微吟して、やゝしばらく立つて居た。

「大分御ゆつくりでしたな」

黄ろい聲を庭からかけた者がある。見下す伯の眼は牡丹花壇の此方にぬつと出た三十恰好の男のふりあふぐ眼と會つた。

「はゝゝ、日曜位は朝寢をせんと體がつゞかん。今下りる——上つとれ」

黄ろい聲の主は、當時日本に於て、下駄はいて藤澤伯の腹へはひるは此人ばかりと云はるゝ須藤正である。

（四）

藤澤伯は寢衣のまゝで下りて、盥漱を終へて、座敷の十疊に大胡坐をかいて、饌に向つた。帆立貝の鍋がぐつ〳〵いつて、給仕には彼島田が女房氣取で控へて居る。饌の横には朱點の注意符をつけた英字新聞が二三種、邦字のが三四種、手紙電報が一堆置いてある。日本の庄屋を勤むる藤澤伯の事であるから、日々來翰の數も大したもので、大抵は伯の耳代目代手代の須藤以下二名の祕書官で濟すことになつて居るが、其れでも伯の親展手裁を要するものばかりでも中々の數に上るさうな。藥を食ひ〳〵國政を理するクリスピーと同じく、伯は平民的で勤勉で食事の中も唯は居らぬと云ふのが大得意で、今日も讀んでは食ひ、食つては須藤と話を交へて居た。

黒綾のモーニングを着て、長髪を右分の七三に綺麗に撫でつけた、淺黒い圓顏の、眉の濃い、凹眼のじろ〳〵人を覘ふ、怜悧な親分に毛かけた須藤正は、勝手に新聞を引出して見ながら、時々伯と彼婦人の顏を覘いては、何か云つて居る。如何樣な本尊にも前立乃至後立の無いのはないが、藤澤伯のは本尊が本尊丈に前立も一筋縄では行かぬ代物である。殆んど子飼から伯に育てられて、怜悧の彼は書を讀む樣に藤澤伯を讀み盡し、性癖弱點、氣質の裏表、應對の間道本道、殘る所なく諳じて居る。のみならず、多年樂屋の奥に住んで、一法案、一政策の胚胎も與り知つて、あらゆる駈引魂膽を知りぬいて居る。政治は一種の賭博、戰爭、相場である。愚物は到底其趣味を解し得ないが、本來其方に趣味を有つ須藤は、親分に使はれて、表面に名こそ未だ立たぬが、已に一廉の政略家となつて居る。大樹の蔭は落果多く、泉について此勢力は果を導く樋と云つた樣なもので、勢力に近く住むは——若し利用の道さへ知つて居らば——一の勢力である。其奥に媚びんより竈に媚びるは往々近道で、大臣を擒にするには先づ身近の祕書官から手に入れねばならぬ場合が多い。其と見てとつた須藤は、大木の幹を蝕む蟲〳〵しい嫩芽と見せて、實は親木の滋養分を勝手に吸つて、吾根を下ろして、まさかの時の準備をして居る。萬更其と知らぬではないが、石田を使ふ太閤を學んで、藤澤伯は正々と重寶がつて使つて居るのであつた。

「相變らず愚論を吐きよるな」

茶碗を手にして、下に置いた洋紙の書翰を眺めて、藤澤伯は斯く云つた。

「堀ですな——最早伯林を立つた位でせう」

「然さ、來月は歸つて來るだらう。彼樣な男は歐羅巴に移住して呉れると宜いが、正、頑固には弱るのウ」

次ぎの手紙は檜山男ので、昨日申上げた通り今日愈向島の弊盧で、杜鵑は聞かずも滿庭の青葉に對して初鰹で一杯やりながら風流談でもする筈に付、正午から御來車を待つ、閣下大抵揃ふ筈、其れから彼東にも來いと申遣はして置いた故、一揉みもんで下さらば當人も恐悦と存ずる云々と書いてあつた。次のは、先日海防費獻金の賞として正六位に敍せられた豪商小谷が、此も向島の別墅で夕刻からの疎酒一獻、此も先日約束して置いた上に何時行つても

人をそらさぬ小谷の夜に入つての馳走は憎からず、幸ひ双方も向島で、樗山をしまうて小谷へ、二座つとめるは譯もない事と、忽ちにきめて、饌を終ふる頃までには餘の數通もさら／＼と眼を通してしまひ、其れから葉卷を手にして、須藤と庭に下りた。

（五）

伯は須藤と閑語を交へながら、庭の白砂に幅廣い二の字をつけて、牡丹花壇に沿ひ、薔薇の叢を避け、石を繞り、松を穿ちして、庭の一隅に建て離した茶室の椽に腰かけた。

藤澤伯の嗜好は、政治と婦人である。大禮服の道行と共に胡坐の茶碗酒を嗜む伯は、政治の外に書も讀み、詩も作り、美術も隨分談ずるが、本來の嗜好は人間のがさつな方面であつて、風流韻事には深き趣味を有たず、山水庭園家屋の装飾などは殆んど顧みないのである。先年高輪の私邸を營むについても、殆んど大工任せ、橐駝師任せであつたので、茶室なんどの伯にとつては無用なものも出來たが、併し伯は之を夏時閑暇の讀書室にも宛て、また豐公の故智を襲うて、人聞を厭ふ密談などは往々此無邪氣な離れの茶室でやつた。

「變つた事もないか」藤澤伯は卷莨の灰を彈いて、仔細ありげな子分の顏を見た。

「ぼつ／＼土龍もちを始めた樣です」

「最早始める時分よ――何か新事實があるのか」

「昨夜土屋と武東が、小日向の大井田で寄つたさうです。昨夜、最早十二時でした、水間から知らしてよこしました」

「フ、ーム」

伯は良久しく、手にもつた卷莨の燃え下るのを眺めて居たが、

「其れつきりか」

「は、何です、此間から大井田の新聞と、土屋のと、斯樣妙に調子が變つて、互にお世辭を言ふ樣ですからな、不思議に思つて探つて見ると、果せるかなです、――此度の大阪の懇親會には、土屋も出かけて行くさうですが、何しろ表面の無事で、油斷はなりません」

「大井田め、伯爵になつてもまだ飢じいと見えて、ゆすりアがるな。武東も土屋も馬鹿ぢやから、だしに使はれとるのぢや。併し正、やつ等の聯合は骨一本投げてやれば直ぐ破れる聯合ぢや。碌な事が出來るものか。拋擲つて置け、拋擲つて置け。第一何を旗標にするのぢや」

「旗標？　其は――」

急に衣兜を探つてわたす一葉の新聞を、伯はひろげて、東京新聞、社說、「條約改正に對する我國民の覺悟」と題する一欄を須藤が指すままに讀みかけて、愕としたが、終に讀み了つて、手中の莨を求むれば、地に落ちて已に灰となつて居る。

「事實は大分違つて居るが、正、此は臆測ばかりぢやないぞ。何處から祕密が漏れるのだ」藤澤伯は面を落して、太息した。

「油斷はなりません、一黨の外皆敵地ですからな、不平連は何處にもあります。元老院、法制局――内閣にも無いとは限りません、諸連の不平は久しいものです。祕密も漏れる筈です。今は先ぢつとして居ますが、下で騷ぎ出すと、何時内應するか分かりません。元來木下伯が敵を作る名人ですからな、彼癇癪持の氣短に條約改正は全く重荷です――惡くすると此穴から總崩れになるかも知れませんからな」

藤澤伯は默然として居る。木下伯が須藤嫌ひで、須藤が木下嫌ひは、藤澤伯もよく知つて居るので、まさか須藤の告口をおいそれと信ずる伯でも無いが、實は木下伯には隨分手古摺ることもあるので、須藤が云ふ所は伯のしば／＼考

へた所であった。

（六）

「萬一今度のが失敗とすれば、正、吾輩の地位に立って、卿は如何する？」

「左樣、私なら、待駒を一つ、小日向あたりにうって置きますな、今から」

小日向は大井田伯の住所である。藤澤伯は沈吟した。

「昨日も卿が歸って後で、待島が來て、頻りと其樣な話をして居たが」

「薔薇より餘程優ですぜ。油斷して、薔薇と小日向と接近さしては、事ですからな」

「はゝはゝ、正、卿は怜悧ぢゃが、若い、若い。奴等に其樣な働が出來るか。大井田だって、吾輩を差措いて、手も足も利かぬ薔薇と組む程の馬鹿ぢゃないさ」

「所が、其手足の利かぬ所が却て乘ずる所ですて。此新聞だって」須藤は東京新聞を、はたとたゝいた。「金穴がなくて立行く氣遣はないのです、尤も彼馬鹿華族の喜多川なんかも、說きつけられて、此頃では重な金主の一人ださうですが、薔薇連にも隨分臭いやつがあるのです、尤も此に確と突止めた訳ぢゃありませんが。でなくて、此種が何處から漏れるものですか。土屋なんかは憂ふるに足らずですが、小日向は中々油斷がなりません。十五年に出てから最早六年、饑じくて溜らずに居るのですからな」

「併し正、大井田は實に不都合極まるやつぢゃ。全體自分が好きで騷いで政府を飛出して居ながら、吾輩に賣られた樣なことを言ひよる。全體誰がお蔭で伯爵になったのぢゃ。吾輩は飽くまで寛大公平な態度をとっちよる。然るに、飽くことを知らぬやつめ、土屋武東をだしに使って、ゆするなんか、陰險ぢゃ、不埒ぢゃ。彼樣な奴は些と思ひ知らせんと增長していけん。吾輩は決して彼奴如きに握手は求めん。政權が欲しければ、勝手に御吠えなさいさ。御氣の毒ながら此藤澤の眼が黑い内は、城門は決して開けぬのぢゃ」

須藤は微笑して口を噤んだ。飽まで伯の性質を諳んじて居る彼は、斯の急言端論の拒絕、大いに拒絕の中に何如樣な意味が含んで居るかを察せぬ程の鈍間ではないのである。

「何しろ怪しからん、苟くも政府部内の者で機密の一端でも漏らすと云ふは不埒千萬ぢゃ。今日長田に會ふから、其樣云って、嚴重に此種の出處を探らして見る。南條にもよく談じて、薔薇連を撫でさせるのぢゃ。都合によってはドシ／＼處分もしなけりゃならんが、何しろ大事な場合だ、下下にも篤と忠告して置かんければならん。——如何だ、日報で一寸嚇して置くか」

「今朝峰を呼んで、其樣云って置きました」

「宜、宜」頷いて藤澤伯はじろ／＼子分の顏を見た。素早い奴だ、此が大井田の子分ででもあったら一廉の邪魔をするが、と伯の眼は言った。

「皆は一向書けないな。誰か、此を書くのは？」

藤澤伯は東京新聞を取上げた。

「佐藤と云ふやつです」

「宜、先月佛蘭西から歸って來た彼ぢゃな。中中筆が尖っとる」

「筆も尖って居ますが、辯舌も好し、躍起ですからな。土佐ッぽうでは、先、森、若手で佐藤は、武藤や土屋の手下には惜しいものです。此連中が大井田の子分の乾、小杉なんかと近頃頻りと寄る樣ですが——昨夜の會合もやつらが作り立てたのに違ひありません」

不圖足音が近づいたので、須藤は口を噤んだ。

（七）

「此樣な處に隱れていらっしゃるんだもの——叔母さん、此方ですよ」

甘つたれた聲を先に立てて、彼お絲が顯はれた。其あとから小山のゆるぎ出た樣な大女が顯はれた。五十恰好の、西洋南瓜大の頭に小さな丸髷をのせて、黑繻子の襟を衣紋と引かけて居る。左の眉から小鬢にかけて著しい刀痕は、昔北里に萬人の男を手玉に取つた頃の名殘を示して、濱の女將に其人ありと聞えた山吹屋のお杉と云ふのは、此女の事である。

「よウ。珍らしく出かけて來たな」

「御前、ひどい御見限りですね、——餘り御出がないから今日は押かけて參りました。ほツほゝほゝ」

笑ふ每に、大きな腹が搖いで、前齒の金がきらりと光る。

「忙しいから、つい無沙汰をした。何、噓なものか、此頃は久しく別莊にも行かんわ。ま、かけろ」

女將はお絲を伯の側に押やつて、自から須藤の側にかけた。

「須藤さん、御氣の毒さま、老婆で、御迷惑でせう」

須藤はしれ〳〵笑つて居る。

「本當に御前、些御保養を遊ばさないと、御體にさはりますよ。ね、小絲——絲ちやん。餘り御前を獨占は罪だよ。好い家妻てえものは、稀には良人にすゝめて他所のお酒を飲ますものですとさ——

「厭ですよ、叔母さん、其樣な事をわたしなんか——」

「須藤さん、あなた、些氣を利かして、御前を引出していらつしやいよ」

女將はぽんと須藤の膝を拍つた。

「ふゝむ、飛んだ保養だ」

「何ですね、口の惡い。御前、此人は油斷がなりません。御前の前では、斯らおとなしさうな顏をしてますがね——如何です、御前、お天氣も好うございますし、今度の急行で御出かけは、絲ちやんも心配なら、ね、御前、連れて行つていたゞくさ」

「いけん〳〵。今日は約束がある」

「おや、何方へ？」

「午後から向島へ行かんければならん」

「彼樣な遁辭を云つてらつしやるよ」

「何、噓なものか。檜山から小谷と、二座務めんければならん」

「おや、左樣ですか」

女將は一寸考へて居る。來訪の目的は、折よくば伯を引出して來ようと云ふのが一つ、お絲を世話した其禮が未なのを受取る爲めが一つ、今一個は世間の噂には近々に文官試驗規則とか云ふものが出て試驗を受けなければ役人になれぬとか云ふので、親類の某を是非其規則の出る前に官員にして欲しいのが一つであつた。倂し女將がまだ本題に入る可き機會を得ぬ内に、召使は詩人上林桐北の伺候を報じた。

やがて北島爲代子が來る。驕馬の候補者杉本が來る。伶悧な高等官の藤原が來る。何處から聞き出してか、來客續々詰めかけた。半日の閑居終に閑ならず、殊に談話好きの藤澤伯が引受け引受け話して居たので、不圖氣づいて、杉本と詩人桐北を連れ、向島に馬車を向けたのは、已に一時を過ぎた頃であつた。

第七章

（一）

墨堤は青葉に埋れ、花屋敷の梅子已に酸を帶ぶる今日此頃、牡丹老い、藤散りて菖蒲には猶早きを、無論花見んとの會でもなく、馬車に乘る連中の慰は婦人の外に此と云はるゝ勅任花ひかん爲めでもなく、青梅酒を煮て英雄を論ずる豪懷を銜ふでもなく、日頃國務鞅掌の疲勞

を慰す爲めに、此日曜の午後を卜して如才なき男爵檜山は其向島の靜閑な別墅に閣僚及び二三の知己を招いたのである。

別墅は、秋葉の裏つゞき、枳殼の垣をめぐらした瀟洒な構である。隅田の流に白帆の肩を見越して富士を眺むる眺望はなくも、植込の竹一本、飛石の一個にも、江戸の植木師が腕をふるつて、廣いと云ふ程でなくとも、四季其れ／＼の趣此に籠りて、主人が劇務の隙々に風月を樂み、吟心を寄するには好個の別墅、門口の「小仙洞」の扁額は李少荃の筆で、對聯の風竹作筆畫、石泉無操琴の十字は何如璋の筆蹟だそうだが、主人が果して仙骨の高士であるや否は疑問としても、別墅は詩人の居たるに恥ぢない趣がある。

此頃の西洋ばやり、洋食、洋服、洋酒、洋館、何から何まで西洋盡しの、發頭人も些うんざりの氣味を見込んで、此處の主人が今日はあつさりと氣をかへての馳走ぶり。酒は灘の正銘正眞、料理は一切八百松が承つて、客も主も着流しの無造作、無くてかなはぬ此ばかりは柳橋のが三人、三味をぬいて、わざと素人作り、口數少なく、氣かきいて酌をすれば、座興には主人が[illegible]細子の琴一曲、話は無論政治禁物、議會御無用、あつさり飲んで笑つて話すと云ふ、甘煮のあとのあらひは格別の御趣向と譽めて、客は笑壺に入つた。來客は、前橋伯、川畑伯、長田伯、小峯伯、原子、菱田伯、白井伯。木下伯、長倉伯は各自已み難い所要で辭したが、肝腎の藤澤伯が杉本、樋北の兩子を將て後れ馳せながら駈けつけて來た上に、此邊を散歩がてら通りかゝりの元老院の鵜飼子爵が賑やかだから寄つたとの推參、面倒な奴が舞込んだとは思つたが此奴を宥めて置くも現內閣——即日本の爲めに盡す忠義と怜悧な檜山男爵はにこ／＼顏で請ずると、やがて耳の早い音羽屋が自己も近くの別莊に保養の場より伺候したつで、此別墅には大分の人數となつた。

二階の十疊二間取りはらつて、庇に落つる滿庭の青葉、薔薇の香を送る午後の薫風醉顏を吹いて、夏は早垣一重なる卯の花、霧島の白き紅き、田圃の蛙の聲にも春は夢と早や醒むる其に引易へ、樓上の人は皆醉つた。主も客も皆夜にかけて小谷が別莊の二次會を勸むると云ふので、控へ目にして居たつもりの盃の數何時か重なつて、大人國の金時の樣に渾厚長者の小峯伯が先づなれば、白井伯は頻りに乾杯談を長田伯に挑み、原子は音羽屋を捕へて西洋劇の講釋、川畑伯は藝妓を相手に自作の端唄を中音に唱つて、午前に少し萌した懸念の雲も何處へ去つたか、大陽氣になつた藤澤伯の氣焔は手に持つ小盃の酒と共に溢れた。

（二）

日傾くにつれ、興は上り、座次は次第に亂れて、杯盤狼藉の中を、其處に一團、此處に一人、緣の欄干に背をもたせて、葉卷を手に、床の間の主人が愛藏の掛地、東坡眞筆の「梨花淡白柳深青」の七絕を眺めて、藤澤伯は主人檜山男、詩人樹花と頻りに唐宋詩人優劣論をして居る。川畑伯は大胡坐で、杉本を相手に、烏鷺の戰今正に酣なれば、支那海の後詰を論じながら鵜飼子爵が側から眺めて、―川畑君も、戰爭はうまいが、碁はまだ笊の方だな―などと、冷やかして居る。白井伯は小峯伯と、通辯が要る南蠻語で、金魚と薔薇の優劣論をやつて居る。此頃習ひ初めた鉢の木を獨り唸つて喜んで居る原子。菱田伯は、床の高麗燒の鶴の置物を手にとつて、吾秘藏の青磁魚鱗の香合と頭の中に比較して、暗に値ぶみをして居る。此時まで中央に陣取つて、藝妓と音羽屋を相手に且飲み且つ笑つて居た南條伯は、主人を呼びかけた。

―檜山さん、今日は御趣向つごあすが、乃公の

様な俗物は、三味線が無かと、淋しかな。わたしが一つ棚の逆磨を蹴つて、三味を一挺御覧ん申す。な、ぴん太、篳彈け」

「へゝゝ、南條様のは中々貞物でございますから」音羽屋がつるりと頭を撫でる。

「南條君の御株が始まつた。よし玉へ〳〵、折角の清會を俗了してしまふ」柱に倚つて、筆を右手に、短册を左手に、即興の歌を書く可く苦吟の態の長田伯が口を出した。

「長田さん、素破ぬくが宜うごあすか。はゝははゝ。長田さんは歌よみぢやが、中々其の、隅には置かれん男ぢや。諸君、わたしが御紹介します、斯長田君は、彼通り澄してきちやうめんな顔をして居られますぢやが、此れでも奇兵隊の時分から、其道にかけては中々英雄――」

一座哄然と笑つた。長田伯は苦笑して居る。

「如何だ、天下の英雄一席に會した記念に、詩歌書畫の合作でもやらうぢやないか」藤澤伯は昂々然と座に入つて來た。

「妙、早速用意を命じよう」主人檜山は立ちかけた。

南條伯は髯を撫でて呵々と笑つた。

「藤澤さんは人が惡いな。わたしをいぢめるつもいと見える。其ぢや、わたしが合作に入るかはいに藤澤さんもわたしと踊るとすツが、宜ごあすな」

「吾輩は藝無し猿ぢやから――」

「嘘々、舞踏を始めた藤澤さんが、手踊が出來ん筈は無か。喃、ぴん太。わたしは、政治は藤澤さんにかぶれて西洋主義ぢやが、女と遊藝は、國粹保存主義ぢやから――」

「其れぢや南條さんの御手振を先拜見するとしよう」

「三味がなかと踊れんな」

「三味は入るまい、南條さんの手ぶりぢや、お手が二上り、足三下りで、調子そろはぬ大狂ひ、合ふ三味はどうせ無いから」と川畑伯が瑟子をさめながら笑つた。

「川畑さんはひどいことを云ふ。好々、其ぢや三味ぬきの手踊、さ始まいぢや。寺島も、ぴん太も、皆歌へ。好か、さ、よい〳〵よい」

「あつ、御前、御危うございます、一寸、此處をほそめますから」

三人の阿嬌が手早く杯盤を片寄す所に、當家の令嬢絹子が入つて來て、「父上」と檜山男を呼び立てて何か耳うちした。

「唔、左様か、此處へ通すさ」

「檜山さん、誰ツごあすか」醉つても耳は慥かな南條伯が逸早く。

「東が來たさうです」檜山男は藤澤伯の顏を見た。

「先生到頭やつて來たな」

一座少しく靜まつて、やがて階段を上る足音が聞えた。

（三）

階段の口まで出迎へた主人檜山の後から、東老人は突々と座に入つて、黑眼鏡越しにずうと一座を見渡し、末座について、目禮した。

一座の視線は期せずして其方に集まる。綿入を袷に更へたばかり、羽織も袴も吻々館の服裝を其まゝ、唯彼時巻いて居た左眼の繃帶は黑眼鏡にかはつて、白い頭髮と髯とがいよ〳〵目立つ。

「やあ、東君、しばらく、御病氣ぢやつたさうだが――成程御痩せの樣だ。諸君、此方が東君ぢや」藤澤伯は主人の位置を奪つて、紹介の勞をとつた。

東老人は一禮して、妓がすゝむる革の蒲團にのつた。一座の話聲は一寸小止れて辭儀するものあり、またじろ〳〵眺める者もある、鵜飼子と原子は構はず局に對して居る。

「貴君が東さんごあんすか。わたしは南條云ふ馬鹿者ごあす。御昵懇の御頼ん申す」

南條伯は近々と寄つて無造作に挨拶する。令孃絹子が茶を東老人にすゝめる。

「絹子、早く東君の饌を」

「否、檜山君、構はずに置いて貰はう。病後猶不氣分で、實は御斷りする所だつたが、其も餘り失敬で、遲刻ながら一寸上つた仔細だから」

「東君、先一つ」藤澤伯は盃洗に一寸通して、盃をさした。寺島が御酌と立寄る。

東老人は頭を掉つた。

「失敬します——禁酒中で」

「如何ですな、眼病の方は？」檜山が辯明的に問うた。

「左眼は先つぶすときめた」

「其は不宜ね」

「いや、呦々館で東さんがぐる〳〵まきの繃帶は、わたしも愕然し申した。寺島は彼時御見やつたか。好か敵役ぢやつたぞ」

東老人は默然、黑眼鏡越しにじろ〳〵南條伯の桃色になつた鬚を眺めた。

「併し東君、東君の眼病も或は祝す可きかも知れないね、伊達政宗、ガムベッタ皆隻眼ぢや。東君の眼病も或は東君を英雄にする所以かも知れぬ」

藤澤伯が英雄論は初に潰れて直ぐ發する。

「南條さん〳〵、彼の達磨は如何した？　最早濟んだのか」

一寸座をはづして居た川畑伯が手巾を揉み揉み座に就く。

「珍客ぢやから、後廻しにし申した」

「川畑君、此間御話した此が東君ぢや」

藤澤伯に呼ばれて突と起つて、川畑伯は東老人の前に坐つた。

「此は初めて、併し御名は二十年前から承知しちよる。戊辰の時分は、此川畑は海道の手でつい御敵手にならなかつたが、甲州口の御働きは眼ざましかつたさうで、大村も噂をして居ました」

居丈高な東老人の半身眼立つ程顫うて、二十年の昔喚びかへす紅の色さつと面に漲つた。

「彼後始終甲州に御居住ださうで、失禮ながら御年配は？」

「東君は僕に九歳兄だから、五十七だね」檜山は東老人を顧みた。

「五十七には非常に老けて居なさるぢやないか」藤澤伯が呟く。

「[illegible]に芋ばかり食つて居る所爲ですかな、東老人は笑つた。黑塗の膳が其前に運ばれた。

「さ、酒だ、酒だ。何、僕は此邊で食ふで、小谷で酔醒の水を飲めば澤山さ。さ、寺島君、原君、勝負は後でも宜いぢやないか」此は主人が。

「抛擲つて置き玉へ、彼手合は他の云ふ言なんか聞く男ぢやない。さ、注いだ、注いだ、——」

東君も一盞位は宜いぢやらう」

一座は暫くてまた酒になる。風そよ吹いて、前栽の東坡竹の梢に落日の光ちら〳〵。

（四）

話は戊辰の昔語から更始まつて、剃刀の刃をわたる樣な危い逸話、今から思へば兒戲一笑にも値ひせぬ矛盾衝突、得意談、失策話、彼一句、此一句、口を銜いて、大陽氣の一座となつた。

鯉のあらひをつゝじつて居た藤澤伯は、からりと玻璃箸を措いて、妓につがせた盞を一氣に飲み乾し、疎髯を撚つて昂然と一座を見渡した。

「愉快ぢやないか。我々は實に千載の一時に生れ合はしたものぢやね。元龜天正の諸君と雖も、今の時代に生れんが爲めには恐らく千萬金も[illegible]の如く擲つぢやらうと思ふね。實に面白

いぢやないか。此四十年の我々の半生を顧ると、全く一部の傳奇を見るが如しぢや」

「實際一夢の看をなすね。いや夢と云へば、僕はいま以て五稜郭で腹切る夢を見る。はゝははゝ」檜山男は美髯を扱いた。

「所謂敵と分れ味方となつて爭つた彼も一時、座を同うし肱を把つて杯を擧ぐる此も一時ぢや。此處に居る者、恐らく一人として死生一髪の際を潛つて來ない者はなからう。南條君の如きは、寺田屋の白刃をくゞつて御出だし、木下の如きは半身已に墓に入つて居たのを、彼通り壯健にして君國に盡して居る。現に檜山君と白井君は、今こそ兄弟の樣にして御出ぢやが、維新の昔は互に鐵砲をうち合つた間ぢやないか。東君の如きも、二十年前を顧れば、吾々と今日席を同うするなんぞは、蓋意外ぢやらうと思ふ」藤澤伯は快然一笑して、盞を擧げた。

東老人は末座に默然として居る。

「何しろ三百諸侯の昔から憲法も出來國會も開けようと云ふ今には、隨分思ひ切つた飛び樣ですて。新富市村の廻り舞臺でも此急變は演れませんな」と笑顏の杉本は吾羽屋を顧みる。

「御意――あつし共まで斯う皆樣の御前に出られますのも有り難い話で。いや、其についても始終堀越と其樣申して、河原者の昔を忘れない樣に忘れない樣にと實は心がけて居りまするで」

「吾羽屋は甘い言を云ふな。昔を忘れんと、喧嘩も半分は無いちふもんぢや」白井伯が言を插む。

藤澤伯は直ぐ語尾を引とつた。

「いや、恐る可きは感情の纏綿から來る衝突ぢや。維新前後、其爲めに斃れた者は實に枚擧に暇あらずぢやね。吾輩は先頃大久保木戸諸先輩の手紙を不圖出して見て、落涙に堪へんかつたが、手を把つて胸襟を開けば笑つて濟む事も、其間に種々の事情と云ふものが出來て、毫厘の末が非常に悲しむ可き事に立到るのは實に殘念なものぢや」

南條伯は頻りに唯飮んで居る。

「殷鑑遠からず、明治二十年の今日に於ても然りぢや。ぢやから先頃吾輩は功臣の出處進退について、餘程注意をしなければ、上は至尊を援はし奉り、下は功臣の名節を汚す、實に憂ふ可き次第である事を演說したのぢや。世間では近頃頻りに藩閥々々と薩長攻擊をやるさうぢやが、愚も亦甚矣ぢやないか。吾輩の眼中は唯だ至尊あるのみ、日本社稷あるのみぢや。吾輩の胸中は不肖ながら光風霽月である。吾輩は藩閥如きに齷齪するものにあらずぢや、苟くも至尊を輔翼し奉つて、東洋未曾有の立憲國の基礎を据ゑようと云ふ者が、其れ位の見識度量が無くてなるものか。吾輩は天下と共に政を爲す目的である。野に遺賢なからしむるは、及ばずながら吾輩の望む所である。現に檜山君の如きは、吾輩と同感で、此處に居らるゝ東君を引出さうとかゝつて居られるのぢや」

一座水をうつた樣になつて、彼方の隅に猶勝敗を盤上に爭ふ鷄飼子と原子が鳴らす碁石の響のみ丁々と響いて居る。

「東君、御決心がついたら、一肩ぬいで貰はうぢやないか。其とも二千石ぢや御不足かしらん。故大久保は二千石に非常に重きを置いて居た。漢文以來良二千石は實に國家の柱石である。中央政府の機關が如何に整つても、地方長官其人を得なければ、立憲政治も無意義になる。長田君を煩はして、目下地方自治制の調査を急いで居るが、如何に自治制完美を極むるも、地方長官其人を得なければ、梶無き船の如しぢや。二千石は陛下の御名代である、中央政府の手足である、實地に於て民の父母である――東君、御意見を承らうぢやないか」

藤澤伯は東老人の顔をまもつた。

一座の眼光齊しく其方に向ふ。當時日本無双のきれ者藤澤伯に斯う云はるゝは何等の果報と、杉本、[illegible]北、果ては寺島、妓輩も目を欹てて末座を眺める。

（五）

東老人は黑眼鏡をあげて、藤澤伯から檜山男、一座をずうと見渡した。

「御厚意は千萬忝い、が、此東は時勢おくれの老骸で所詮諸君の手足となつて働く體ではない。檜山君、折角のお話ぢやが、此東には矢張富士見村の百姓が相應—諸君は十分御遣りなさるが宜い、東は此れから小佛笹子を越えて富士見村に晝寢でもしませう哩。はゝははゝゝ」

座中の少なくも五六人は目を瞪つた。

藤澤伯は微笑した。

「東君、其遁辭は措いて貰はう。御嫌なら無理にとは云はんが、—併し東君、王臣蹇々躬の故に匪ずと云ふ事はよく御承知ぢやらう。吾輩の手足と云へば、御不快もあらう。併し日本政府は此藤澤の政府にあらず、天皇陛下の政府である。陛下の御手足となつて、赤子の民を治むるに、何の怪しむ可きことかあらん。此聖明の代に當つて、一藝一能の士も進んで力を致す可き時勢に、巖穴に獨處するなぞは、昔の支那ならいざ知らず、今日の日本には正しく時勢おくれである、否吾儘である、不精である。東君の遁辭は、失敬ながら、吾輩其意を得ない—」

「否、遁辭ではござらぬ。燈臺下暗し、何もわざわざ田舍に燻ぶつて居る時勢おくれの老耄老爺を引張り出さずも、藤澤さん、國家の御用に立つ者は此東京にまだ幾個もある。其等を差置いて此東とは、御懇情誠に忝いが、恐らく前後緩急を誤つて御出ではあるまいかと思ふ—」

何等の無遠慮と、杉本は小面憎げに東老人の屹とした顔を眺めた。併し藤澤伯は飽くまで上手から出るのであつた。

「東君の今の御言葉は、如何やら賢路を吾輩が塞ぐ様にも取れるが、若し果して然りとせば、其は大なる間違である。先刻も云つた通り、吾輩の胸中は光風霽月である。朝野の區別は無い、併し大井田なり、土屋なり——」

藤澤伯は一座を見廻した。

「僻をもつて、一向吾輩の胸中を察せず、若手を教唆てて無暗と騒ぎ立つるには困る。吾輩の胸中は青天白日の如しぢや。彼連中と雖も、意見相合し、肝膽相照らす場合には、何時たりとも國政を共にするを厭はないのである。昔郭隗は死馬の骨に比して自ら薦めた。東君にして其れ程賢路を開くに御心があらば、自から隗より御始めになつたら如何だ。不肖ながら吾輩燕昭王たるを辭さない」

辭令の妙を得て居る藤澤伯が圓滑自在な舌鋒に押つめられて、東老人は默つた。

「剛情は大概にし玉へ。僕が何も求むる所あつて此樣肝煎るのでないことは斟酌して呉れても宜いではないか」檜山男は怨ずる。

東老人は顔をあげた。

「いや、此東は總理大臣でも御免を蒙る。藤澤さん、檜山君、此話は此ぎりにして、以後一切御無用にしていたゞきたい」

聲が高かつたので、彼方の隅に猪原子と局を對して居た鵜飼子が、棋子の手をとゞめて、じろり此方を見た。

藤澤伯の圓滑な面にも流石に不快の色は動いた。

「其樣明白に拒絶さるれば、何も此藤澤が七重の膝を八重に折つてまで御頼み申す譯ではないさ。はゝはゝゝ。人おの／＼好む所ありぢやから、田舍がよければ勝手に田舍で晝寢なと、朝

寢なとなさるがよからう。併し東君、何も三歲の兒童ぢやあるまいし、其樣唯厭だから厭と云ふ譯はあるまい、其樣峻拒さるゝ仔細――其仔細が承りたいね」

藤澤伯はやゝ居合腰になつた。

（六）

東老人は甲州の茅廬を出でて已に四十餘日を東都に過した。初二週の間、舊主家にも見參した。祖先の墓にも參り、亡母亡妻亡弟の追善も執行した。眼病の治療――診斷も受けた。呦々館の演藝會前、藤澤伯に一回、會後檜山に二回、舊知己の甲乙にも會つた。上野の彰義隊二十年祭にも出席して、暗涙を催した。晉が世話になつて居る在英雜貨商儀兵衞の留守宅も尋ねた。出京目的の强半は已に果して、歸思もとく動いて居る。併しながら殘れる二三の件は重大なるものばかり、已が一期の浮沈を定め、晉が前途の死活にも繫る大問題、難題である。此には靜思熟考の時日を要する。恰も好、心ありげな春寒は輕症の宿疾を贈つて、東老人を三週ばかり床に擒へた。豫想の外に長びく逗留の日數を、弟が家の二階に籠つて、東老人は思案を凝らした。

此臥床の三週日の中に、上野の櫻は青葉となり、藤澤伯の官邸に假裝舞踏會があつて奇怪な風說が流布し、木下伯の邸に至尊の行幸があつて昔の河原者が御前に咫尺し、其れから出來星紳商が海防費獻金と引かへに位階を賜はれば、德川の天下に熨斗つけて御渡し申した發頭人の氷川の翁が伯爵に敍せらるゝなど、さまざまの事は、弟が口より、新聞より、枕頭に傳はつて、東老人は更に考ふ可き材料を得たのである。

否、考ふるまでもない。甲州の山中で明治政府明治社會に下した彈劾は、四十日の見聞其ものがとく已に確定して居る。言語に絕えた薩長の專橫亡狀、期した事ではあるが、親しく見聞いては、實に駭かるゝ有樣。日本の政は薩長のわつぱが案して、日本の空氣は薩長が吐き出す毒瓦斯に腐れきつて居る。何處を見ても、輕佻、浮華、淫靡、汚穢の風が吹き廻して居る。初めて藤澤に會つた其時、綺羅を飾つた呦々館の夜會を見た時、旣に其と感じたが、其後見る事聞く事盡く憤慨の種である。谷中の墓參の歸るさ、上野に滿つる花見客の唯譯も無く喜び騷ぐを見やつて、無腸の男は薩長政府に取入つて榮達ばかり心がけ、無心の兒女は容づくつて薩長男子に玩弄にされて喜んで居る、江戶兒の腸は何處に殘つて居るか、と不思心に叫んだが、其は町家の子女に限らぬのである。上野の檜山の如きは、現に立派な幇間である。腸がある德川武士の口から云はれたことか。否、吾弟ですら其通りである。時候の暖かくなると反比例に、今日は昨日より待遇の冷やかになり行く青柳夫人は女の事で話にもならぬが、口髭撚る弟が俗化しようは如何だ。顏見て居ると、此れが三十年前蜻蛉髮に結つて青柳に貰はれて行くのは否と泣いた可愛い彼かと怪しまれる。一寸舊主家を見舞つても、一寸眼科醫に行つても、一寸公債の相場を聞きに行つても、薩長風は何處にも吹いて居る。此風の吹く處、男はすたり、女は腐れ、青々暢々とした人の元氣は索然と凋れてしまふ。

此樣な事なら、何故出京したか。何も糞壺に踏込まなくても、遠くから鼻をつまんで居れば澤山、吁甲州の草廬を出るのでなかつた――が――

此が一であつた、瘧が落ちても卽日歸裝を理するに躊躇せしめたのは、此であつた。而して、檜山の案内を不承々々にも承諾させ、遲刻な

がらも向島の檜山別墅に、東老人を驅つたのも、此「が」であつた。

（七）

併しながら二者の間に深く根ざした意見感情の乖離は、彼に包むの量あり、此に抑ふるの禮ある場合でも必ず一度は爆發せずには居らぬ。而して長く抑ふる程、爆發の勢はいよ〳〵激するのである。東老人は二十年の久しき、鬱憤を漏らす可き機會に會はなかつた。此度出京して、藤澤伯に、檜山男に面會の度毎にも、心の駒を制して、舌に轡は與へなかつた。併しながら場合は驅り、量は溢れる、腹の底からむらむらと或ものゝこみ上げ來るを制し得ぬ東老人の白髯に埋もるゝ顏は次第に紅になつて、額の條は深く、肩は聳え、膝の上の手は拳となつて、居丈高に藤澤伯を見下して、答ふる前に二つ三つ咳拂した。

「仔細？　仔細は他ではない。此東は毫碌はしても、まだ諸君の手足となる程に毫碌はしませぬ。志が合へば、兎も角も、知事であらうと、小使であらうと、乃至總理大臣であらうと、諸君と共には眞平御免を蒙る」

「意見が合はぬと云ひなさるのぢやな。宜しい。合はぬなら合はぬで、何も無理にと頭を下げはせぬが、其意見と云ふものを後學の爲めに承らうぢやないか」

「殺風景な議論は、東君、よさうぢやないか。官途が厭なら何も無理には勸めないさ。野暮な議論はよして、南條さんの手踊でも喝采しようぢやないか」一笑にまぎらす檜山の氣は氣でない。

「檜山君、先宜いさ、議論なら吾輩不肖ながら御相手にならう。東君は政府に對して如何云ふ意見をもつて御出であるか、先其れから承らう」

「其樣御所望なら、申さうが、此東は明治政府は陛下に大不忠、人民に大不義の亡國政府と見る。其張本人の一人は、藤澤さん、失敬ながら貴公と此東は認めて居る」

一瞬時藤澤伯の顏に燃えた怒火は、忽焉傲慢な微笑にかはつた。

「明治政府が亡國政府で、吾輩が其張本人――いや隨分耳新しい御議論ぢや。其理由が承りたいね」

「まるで、小新聞の口吻だ」と杉本が聲高に呟いた。

眼鏡越しじろり其方を睨んだ東老人は、また藤澤伯からずうと一座を見わたした。

「諸君は平常阿諛ばかり聞き慣れてお出では、此東が無遠慮な銅鑼聲は隨分御耳が痛からう。併し、藤澤さん、檜山君、種々御懇情に與つた御禮に、此東が忠言を呈する。全體諸君は此日本を何處へ引張つて御出のつもりか。二千五百萬の蒼生と上御一人は、諸君が玩弄物ではありませんぞ」

座上ひつそりとした。長田伯は腕組みして、南條伯は盞を下に置いて、檜山男はよしない事を仕出したと云ひ顏に、餘は意外にうたれ顏に、妓輩は呆氣にとられて、共に東老人の思ひきつた顏うちまもつた。藤澤伯は空の盞を啜つて、氣づいて、妓につがした。

「此東は二十年と云ふもの田舍に引込んで居たが、諸君の行爲は屹と見て居る。諸君は徳川幕府を顚覆して薩長政府を立てられた。併し今の明治政府は徳川の末路と何程の相違があるか。否、徳川には斯樣な腐敗はなかつた。徳川政府は今少し人民を懷つて居た」

「併し東さん、慶應三年の日本と明治二十年の日本は、同日の談では無いからね。如何に徳川幕府を東君が戀はれた所で、濟んだものは矢張濟んだもの、事實は矢張事實さ。二十年間日

本の進歩と、其の進歩を導いて來た明治政府の功勞は、白癡でなければ、認めざるを得ないと思ふ」川畑伯が横合から切りかけた。

「進歩？　進歩と云ふのは、何ですかな、世名屋敷の跡に吻々館が出來て、歷々の婦人が藝妓同樣に跳ねて、勳章さげた大臣がひよこ〳〵西洋人の機嫌氣褄をとつて、腐れて、浮いて、西洋の制度を鵜呑にするのが進歩ですかな」

藤澤伯は笑止らしく呵々と笑つた。

「まるで話にならん。東君は先刻から頻りと耄碌々々と云はれるが、吾輩は御謙遜の御言葉かと思つて居つたが、御自白ぢやな。智識を世界に求め、盛に經綸を行ふ、と云ふ御誓文の大旨を奉戴して居る明治政府ですぞ。大久保木戶諸先輩も徹頭徹尾其主意で立ち其主意で斃れた。不肖ながら此藤澤茂光は、先輩の志をついで、此處に御出の諸君と共に、維新の大規模を繼述して居る。其爲めに歐羅巴へも渡つて憲法も取調べる、官制も改革する、地方制度も研究する、海陸の防備もやつて居る。條約改正にも骨折つて居る、殖產興業にも肝膽を碎いて居る、人材養成國民教育の普及にも盡力して居る、司法の整頓もして居る、立法の準備も整へて居る、外交にも油斷なく心を勞して居る。鎖國の隱居屋から突然世界の大通りへ押出した新世帶を引受けた吾輩が苦心は、成程東君の如き局外者は御存じあるまい、併し陛下も御存じになつて居る、天地神明も照らして居る、地下の先輩も見て居る。東君の如きは、此維新の大精神を承けついで來て居る正統政府を、亡國政府と云はれるが、其れならば明治政府を顚覆して、德川幕府を復興しなさるが宜しい。さしより御自分の其頭を丁髷に結つて、刀をさして、日本國中の郡縣を封建の昔に戾して、外國人を追拂つて、つまり日本を千年の昔に戾さなければなるまい。然だ、曆日の上から二十年だが、進歩の上から千年にも當る。出來るならやつて御覽なさい。ぢやが御氣の毒ながら其樣云ふ識見家は東君を措いて日本に二人とあるまい。

はゝはゝはゝゝ」

―東君、感情は得て眼鏡を曇らすものだ。僕の如きも、舊幕出身であつて見れば、舊時代に戀々の情無きにしもあらざることは、恐らく東君の後に落ちないと思ふ。だから僕は五稜廓までも行つたのだ。併し東君、時勢は抗す可からず。幕府は薩長の爲めに倒れたのでは無いさ、時勢が倒したのだ、否幕府自から潔く時勢の要求に應じたのだ。僕は幕人であるが併しまた日本人である。幕人の情の外に、日本人の義務をもつて居る。僕の如きも、五稜廓で切る可き腹も切らず、昔は矢石を交へた諸君と、同一臺閣に立つのも、私情を忘れて、國家に奉公の義務を思ふからである。藤澤伯も云はれる通り、否、東君自身も覺えがある筈、當局の苦心は當局でなければ知らぬ。局外に立つて、何も知らず、無責任の罵詈攻擊は容易い事だ。其れで喝采を博するには譯もない——不平黨は何時の世にも多い。併し僕は書生論を唱ふるよりは些は年がいつて居るつもりだ。東君ともある可き者が、今の議論は餘り初心で、案外に思ふ」

熱心な楢山男の反駁は、呟に終つた。

「いや御說は誠に立派な樣だが、此東は其口車には乘らぬ。當局者でなければ當局者の苦心は知らぬ、と云はれたが、臭いもの身知らず、諸君は自から欺いて居られる。此東は二十年來田舍に居て、種々聞き込んだことがあつて、まさかと思つて居つたが、今度出京して見て驚いて居る。先年も自分が居村の近在で、納稅の事から百姓一揆が起つて、張本人は牢屋に入つたが、諸君は彼輩が道樂に其樣な事を仕出來したと思はるゝか。其樣では無い。國庫の金を浴びて居る諸君は、たかが年に五圓足らずの金、

出されぬと云ふ事があるか、思はるゝかも知れんが、田舎の百姓に五圓の金は生命ですぞ。年が年中汗水になつて、木綿を着て、麦を食つて、税が納められぬと公賣處分、疊まで鍋釜まで引きあげる、而して其税は如何なるかと云へば、諸君は其れで鹿鳴館を建てる、大禮服を着る、洋酒を飲む、洋食を食ふ、舞踏をする、妾を置く、藝妓娼妓を買ふ――皆民の膏でするのだ。其様思へば、斯處にある斯鯉の刺身の一きれも、此東は快よう喉を通されぬ。正統の政府は人民の撫恤する政府である。諸君の政府に何處に撫恤者があるか。其様云ふのは皆阿諛ばかりつかふ奴等だ。諸君は上御一人を欺き奉り、下人民を誑して居る。併し人民は何時までも馬鹿では居ませんぞ」

（八）

「徳川時代の百姓は黒縮緬の羽織で、御殿に住んで居たさうだ」何處の隅からか冷嘲の聲が聞えた。

東老人は烈火の如く怒つた。

「其様云ふ根性だから、諸君は馬鹿を盡すのだ。徳川時代にも水呑百姓はあつた。併し諸君の様な宰相にも民の父母たる心を有たぬ政治家は居らなかつた。楽翁公でも、水野でも、諸君の様な浮華な政はなかつた。牛の喘ぎを見て民の疾苦を察する心がけがあつた」

「だから陛下の東北御巡幸もあつたし、また僕等も度々地方を巡回しては民情を視察するのだ」誰やらが答ふる。

東老人は苦笑した。

「諸君の巡回は、夥しい日當をとつて、宿宿に花火国旗をあげさして、阿諛商人無骨紳士の馳走を喰つて、宿屋では女を抱いて寝て、知事が属官にしらべさした好い加減の報告を歸り際に懐中にねぢ込んで、其で視察も何もあつたものか。徳川の政治家は今些民政に心を用ゐた」

「いや、東君」楢山男が宥める様に云つた。「其様激しては恐らく何の話も出來まいと思ふ。先静かに考へて見玉へ。君は徳川々々と云ふが、其は徳川には素より賢君もあり名相もある、有徳公もあれば白河公もある、併し大公方もあれば田沼稲葉の類もあるぢやないか。一斑をもつて全豹を推す事は出來ない。總て大體から着眼しなければならぬ。地租二分五厘の今日と、實際五公五民位に當つた昔日と、斬捨御免の時代と四民平等の今と、木内宗吾が梟首になつた時代と×××でも大審院まで上告が出來る時代と、將軍から×××まで重箱に押つめられて身動きも出來なかつた時代と、力量さへあれば大政治家でも大學者でも大金滿家でもなり放題と云ふ今の時節と、一般人民の幸福は何方が宜いか、何方が幸福か、僕は云はずも知れたことではあるまいか」

「其は大分時勢は變つて來て居る。併し其は時勢の賜物だ。諸君が吾物顔に功勞を誇ると云ふは、心得ぬ次第である。諸君が明治の今日を造り出したと思ふは大きな心得違ひである。先頃も藤澤さんの案内で、はゝはゝ、鹿鳴館の海防費何とかに行つて見た、いや御盛なことであつたが、全體海軍の基礎は何時誰が据ゑたと思ひなさる？横須賀を創めたのは誰が創めた？海防費獻金者に位階をやる程なら、小栗に御贈位の沙汰があつて宜い筈、栗本其他一昔の御苦勞位はある可き所だ――否、一事が萬事、一體諸君のやり方が此通りである。上にしては陛下の御威徳、下は社會の大勢、原を云へば徳川様時の仕置の功果を收めて居ながら、諸君は吾物顔に振舞つて、得々として居ると云ふは、不埒千萬な話である。諸君は皆公を忘れて私ばかり營んで居る。此東は東京に來て、鼻がつ

まみたくなつた。政府も宮中も薩長で据つて居る。地方官から巡査まで――」

「勝海舟が伯爵になつたり、東君を引出さうとしたのは如何かね」冷かした者がある。

「はゝはゝ、骨無しは隨分籠絡されるかも知れぬ、併し其樣な小細工で天下の耳目を蔽ふことは出來ない。決して出來ない。何處に薩長風が吹いて居ぬ所があるか。何處を見ても依怙偏頗ばかり。緣故情實ばかりで行つて居る。昔は平氏で無ければ人に非ずと云つた時代もあるが、今は薩長でなければ頭を上げることは出來ない。薩長であれば、人を殺しても罪なくて濟む。賭博をやつても、巡査は知らぬ顏で居る。山林一つ拂下ぐるのでも、會社の補給利子一つでも、皆薩長の手に落ちる。諸君は日本の日本を薩長の日本と仕做して居る。補弼の任に當つて居ながら聖明を掩ひ奉つて居る。諸君が眞實愛國の誠があるなれば、身を謹んで、功に居らず、勤儉力行天下を率う可き位置に居ながら、便々と華族の榮爵を戴いて、世襲財産に腹を肥やして、高給を戴く上に私利を營んで、馬車に乗り廻して、躍り跳ねくるつたり、女色を弄んで、其れで大政治家も凄まじい。諸君は頻りに先輩々々と云ふが、諸君の先輩の大久保木戸西郷は地下に泣いて居るかも知れぬ。でなければ、其墓に唾しても宜い」

先刻から他にあしらはせて、せゝら笑つて居た藤澤伯は進み出でて口を開いた。

「大分御叱りの樣ぢやが、一向要領を得ない。馬車に乗つたり、舞踏會をしたりするのが惡いのか知らん。成程吾輩は東君よりも贅澤かも知れん。併し日光廟を造つたり嫁入行列の道を猩々緋で敷きつめたり、庭の築山に白砂糖の雪を降らしはしないつもりぢや。御注意の爲めに言つて置くが、吾輩は日本政府を代表する伯爵從三位藤澤茂光ですぞ。ダイオゼニスなら桶の中に住まう。馮驩なら孟嘗君の長屋に車無きを喞ちもしようが、政府の大臣としては外國人の手前もある、位置相當に生活をするのは當然の責務である。田舎の頑固老爺が息子の小使錢を取りしまる格で、此藤澤に節儉の御講釋は此御見當違ひと思ふ」

「大分苦しい御辯解――處女を辱しめたり、色に溺るゝのも、大臣の責務ですかな。はゝはゝは」

「東君、人身攻撃はよさうぢやないか」聞きかねて主人が顏を顰めた。

「東君は新聞屋が書くことを御信じになるのかね」藤澤伯は眼を光らした。

「否、此東は貧乏しても、未だ藤澤さんのあとをつけて穴探しをして歩く程墮落はせぬから、新聞に出る事實の有無は知らぬ。知らぬが其樣云ふ事を云はるゝのは、藤澤さんの信用が地に落ちて居る證據である」

「周公恐懼流言日、と云ふ句を東君は御存じであらう。政治家と云ふ者は、流言の的になる位は覺悟して居なければならぬ。一々其を信じたり、氣にしたりして居れば、政治家は世に立たれませんぞ」

「はゝはゝゝ、周公？ 周公も藤澤さんの引合ひに出されて、嘸嬉しからう。併し藤澤さん、風上に立つ者は衣を潔うす、人の上に立つ者は一言一行も謹まなければならぬ。其が政治家の天下に對する責である。此御嗜みなさるが宜からう」

「いや御忠告はありがたい。併し東君は、吾輩が餘程御嫌と見えるが、一體吾輩が御嫌であるか、吾輩の主義政策が御嫌であるか、一切要領を得ない。明白に御答を煩はしたいね」

（九）

暮春の日は落ちて、夕空に浮ぶ樺色の雲一片、

青葉に埋る丶庭の面は小手毬卯の花を白う染めぬいて、暮色座上に生ずる頃を、洒盡き、羹さむるを覺えぬまでに舌戰酣になつたが、今婢が持ち出づる洋燈の光はいたく激昂した一座の中に、熱極まつて却て氷の如く微笑する東老人の顏を照し出した。

「藤澤さんが嫌か、藤澤さんの主義政策が嫌か――御氣の毒ながら双方共此東は大嫌」

「成程。其理由は？」

「先刻から云ふ通り――」

「封建時代に立戻つて、憲法もよせば、國會もいらぬと仰有るのぢやな」

「否、其樣では無い。其樣では無いが、此東は諸君の樣に何も西洋彼も泰西と西洋の制度文物を鵜呑にするのが大嫌である。條約改正も結構、併し西洋人に阿諛をする必要が何處にあるか。和魂漢才と云ふ事もあつて、日本には日本の長所がある。精神がある。彼長を取つて此短を補ふは至極結構であるが、諸君の樣に憲法も獨逸、法律も佛蘭西、衣服も洋服、家も洋館、何も西洋、彼も西洋で、其樣西洋風を吹かせ――」

「國粹保存か。いや其御講義は東君を待たな丶も從來大分拜聽して居る。失敬ながら東君は二十年もおくれて御出ぢや」

「晩れて居るか、進んで居るか、自分は知らぬ。知らぬが、諸君の胸中に一點愛國の誠が無いことは知つて居る。國會も宜い、憲法も結構、併し法律制度ばかりで國家は治められぬ。如何に西洋の文物を輸入しても、附膏藥は決して利かぬ。日本の事情も考へず、人民の程度も思はず、學校あがりの若手に飜譯させた西洋の法制をもつて來て、直ぐ實施するなぞは、正氣の沙汰では無い。先頃も登記法とか云ふ面倒なものを諸君はお出しになつたが、人民は如何程御蔭を蒙つたか。猫の額程の地所一つ賣買しても、途方も無い登記料なぞ云ふものをとられた上に、收穫の忙しい中を半日も一日も待たされ、二度も三度も呼び出されて、面倒が殖えて、出費が増すばかり、自分が居村の者なぞは、『御上はぬけ目なく御取りになる』とこぼして居る。一體のやり口が此通りである。西洋に斯樣な法がある、其れ面白い、飜譯する、實施する、人民の利害休戚は殆んど諸君の念頭に浮んで居ない。而して其ぬけ目なく捲つた金を諸君は湯水の如く使つて居る。其も國家有用の事なら兎も角も、實に不埒な私慾の爲めに使つて居る。地方の民に諸君の斷狀を見せたら、如何思ふであらうか。決して竹槍蓆旗位では聞かぬ」

「はゝはゝ、東君は田舍に長く引籠んで居られただけあつて、田舍的眼光をもつてお出ぢや。一村の利害は見えても、天下の利害は御見えにならないな。人民の程度ばかり思つて、姑息因循な政治に喝采を博するのは、二三十年前の髷を結つた政治家なら或はやつたらう。否、徳川徳川と東君は云はれるが、徳川の政治家にも井伊の如き者も居る。天下を敵としても、天下に先んじて、天下の爲めを思つて、死して悔いん氣局氣概は、失敬ながら同じ徳川の遺臣と稱する連中の七たび生れかはつても及ばん所ぢや。――御待ちなさい――世界の大勢は急潮の如く駛せて居る此明治の時代に當つて、愚昧な人民の些々たる喜憂を本位にするが如きは、政治家の資格無き者である。小兒は何も知らぬ、病氣をするので藥をのますと泣く、泣くから呑まさぬが親の慈愛であらうか。否、政治家は一歩十歩社會に率先しなければならぬ。天下の憂に先つて憂へなければならぬ。十年、百年の將來を見なければならぬ。東君が總理大臣に御なりの時分は、御勝手に人民の後尻を御追ひになるが宜しい。吾輩は天下の望を失つても國家百年の長計を思ふ政治家を以て滿足する」

吾れながら微妙くも辯じたと思ひ顔に、藤澤伯は座上に殘る吾餘音に耳傾けた。

（十）

暫時沈吟して居た東老人は屹と膝を進めた。

「御議論は如何にも尤らしく聞えるが、此東は口先の辯茶羅には欺されぬ。如何しても諸君の精神が氣に入らぬ。何も奢侈浮華でなければ文明で無いと云ふ事はあるまい。舞踏をしなければ、條約改正が出來ぬ筈はない――此方の腰の骨さへ確りしたら條約改正は屹度出來る。諸君は政費が不足々々と云つては租税ばかり取立てるが、麥飯食つて天下を治むる覺悟があつたら、今些人民の負擔を輕くすることが出來る。軍艦の十隻二十隻、大砲の百門二百門、何も人民の膏血を絞つたり、富豪の御機嫌をとつたりしなくても、諸君が一汁一菜で、女に費す金を其方に向けたら、直ぐ出來る。眞面目に御成りなさい、眞面目に。諸君は浮かれて、足は地について居らぬ――諸君の政治は實に舞踏政治だ。諸君は日本を玩物にして居る。鼻歌で國政をやつて居る。口先で天下は治まりませんぞ」

「成程、其れでは東君の施政方針を承らう」

「諸君が眞實國家の爲めを思ふなら、一切の方針を改めて勤儉樸質の政治をするが宜い。民間の俊才をどし／＼引上げて、政權を薩長以外に頒つが宜い。一切の私を棄てて天下の爲めを圖るが宜い。今の樣では日本の政府で無くて薩長の政府である、人民の政府よりも、政府を肥やす人草である。政治は玩物では無い、人民は輕々しく動かす可きものではない、風を移し俗を更ふる事は餘程愼まねばならぬ。諸君の樣な輕躁な事で、國家百年の長計が立つなら、手品輕業師は大政治家で、植木屋は大政治家である。政府ばかり進んだつもりで、政府ばかり悧巧なつもりで、政府にばかり富を集めて、政府々々と何も彼も政府ばかり先に立てて、其れで國家が治まると思ふは大違ひである。頭にばかり血が寄れば手足は冷える。頭が無暗に大くなれば體は倒れる。政府は人民と釣合つて行かねばならぬ。諸君は人民を馬鹿にして居るが、人民は諸君が思ふ程馬鹿では無い。諸君は法律々々と法律で天下泰平が出來るやうに思ふが、其は腐學者の俗見である。漢高祖は法を三章に約した、後北條の禁令の數が殖えたので具眼の者は同家の衰亡を知つた。徳川時代が窮屈と先刻誰か云はれたが、近頃の窮屈は徳川時代にもない。先年も自分が小さな塾を立てて居たが、其れを縣廳の奴輩が色々面倒な事を云ひくさつて、やれ學科が如何だの、教員の資格が無いの、屆がおくれたの、印形が違つたの、書式が如何の、矢釜敷く云つて、到頭閉塾した樣な譯だが、一切の仕打が此通りである。人民の――」

「いや其事なら僕が當局ぢやから答辯する」と先刻盤を收めて、席に連なつた原子が冷哂つて進み出た。

「はゝあ、貴君の御指圖かな」

「僕は此れでも一省を預かる大臣ぢやから、田舎の一私塾位にかゝづらつて居る暇は無いが、僕が訓令の主旨を受けて地方の當局者が閉塾處分をやつたんぢやらう」

「はゝあ、其訓令と云ふのは？」

「御聞きになりたければ、何時でも講釋をして上げる。僕の方針と云ふのは、全國に統一した教育制度を設くるのである。小學校から大學まで首尾一貫して、國家教育を施すのである。其は無論政府の手でやらなければならぬ。足並を揃へるには、是非政府の手腕を待たなければならぬ。今日に於て、漢學塾とか不完全きはまる私學校を殘して置くのは、クルップ砲水雷艇の世の中に槍長刀を持ち出すのである。其は無論

一部の反對はあるかも知れん。飯に離れて泣言云ふ奴があるかも知れん。併し一部は犧牲としても、全體の利益は計らねばならん」

「其れで此東が、塾なぞは潰すが至當と云はれるのぢやな」

「東君の御塾が如何云ふ立派なものであつたか、僕は知らんが、はゝはゝ、先刻から段々承つた御恩言の容子では其御塾も推して知る可し。其樣な塾が百あらば百、萬あらば萬、片端から打潰してやらうと思ふ」

東老人が膝の上に拳が顫うた。が、屹と眼鏡越しに其方を睨んだばかり一寸も座は動かなかつた。

「東君の議論は如何しても二十年から晩れて居る。堀君なんかと至極御話が合はうと思ふ」

藤澤伯は勝誇つて笑を溢した、最初から一口も云はぬ長田伯小峯伯白井伯を顧みた。

小峯伯は徐に東老人を眺め、また一座を顧みて、愈々と口を開き始めた。

「先刻から段々東さんの御忠言の中には至極良藥がある樣にわたしは思ふ。離れて居れば、南方共思ひ違ひは得てあるもんぢや。いや、此樣に大きな機械ぢやから、末々下々の方には、隨分わたし共の意見を思ひ違ひして、飛んだ迷惑を人民にかけんとも限らん。併しわたし共が私慾ばかい働いて、惡い事ばかいして居る樣に思はるゝと云ふは、此また間違ぢやらうと思ふ。先頃も器械工場の齒車を見て熟々然思うたことぢやつたが、彼齒車と云ふものは、車の凸所と凹所と喰ひあうて運るものぢや。世の中は齒車ぢやな。長所もあれば、短所もある、其が互に喰ひ合うて運る。わたし共にも缺點もあらう、短所もあらう。民間にも、其は隨分俊才もあらう、また東さんの樣な、前に置いて失敬ぢやが、骨の硬いお方もある。斯樣して互に胸襟を披くと云ふは至極ぢやらうと思ふ」

「今の樣に諸君が政府にかじりついて、皆に手も足も出させぬ樣ぢや、商業の運轉も駄目と思ふ」東老人は冷嘲つた。

「廿三年には國會が開けますぞ」藤澤伯は大音に答へた。

「はゝはゝ。廿三年には國會が開けるから、廿三年までに存分我儘をすると云ふのかな」

「東さん」南條伯が空惚けた聲で呼びかけた。

「は」

「面倒ぢやごはんか。わたしが東さんなら、一揆を起します、一揆を。一揆を起してわたし達が首をたゝき切いますか」

東老人は、きと南條伯を見つめた。

「一揆を起しても、弟が見殺しにしますからな」

「東君、遺言ぢやらう」藤澤伯の大音がまた響き渡つた。

「はゝゝ。阿諛が聞きたければ、其處らの幇間を御呼びなさい。瘠せても、枯れても、東は武士ですぞ」

（十一）

「いや御立派な御武士ぢや」

「立派共。徳川武士は諸君の樣な成り上りの汚い根性は有たぬ」

「其は負ける方が何時も綺麗さ。兩國橋から眺めて見玉へ、滿潮には塵芥が多いが、退潮には大抵綺麗だ。亡ぶる平家は落花の樣に綺麗ぢやが、興る源氏は汚い。併し東君、其汚い源氏が天下を取つたのは、何故ぢやらう。實力である。薩長々々と云はれるが、實力があればこそ維新に天下を取つたのぢや。二十年間否でも應でも日本を治めて來たのも、此實力があるからぢや。世は實力の勝負である。實力で來玉へ、何時でも政府を御渡し申さう。併し東君の

様な時勢おくれでは所詮駄目である。御氣の毒ながら吾輩の下風に御立ちにならんければならぬ。はゝはゝゝ」

藤澤伯が誇りがに笑ふ顏を睨んで、齒を切つたが、思ふまゝに喝破す可き適當の辭を東老人は得なかつた。呼吸せまり、聲は嗄れて、病餘の老體は激昂も掩ふ能はざる疲勞を感じたのである。

藤澤伯が攻撃の的であつた間は、座上に折折微笑の影も見えたが、東老人の放つ矢は縱横に飛んで、何れも淺手深手負はぬ者は無い有樣となつたので、外侮を禦ぐと云つた樣に、東老人を半圓形に取りまいて、包圍攻撃にかゝつた一座は、今東老人が旗色の惡きを見るより、彼一矢、此一刀、先を爭うてとゞめを刺しにかかつた。

「老人いぢめは大概にしないか」最初から唯にやにや笑つて一句も云はなかつた鵜飼子が初めて口きいた。

「わたし達がいぢむるとぢやごはん。東さんにさんぐ～いぢめられたとぢや。喃、長田さん」

南條伯は、此も苦蟲を噛みつぶした顏で最初から無言で居る長田伯を顧みた。

「また催促が來た」一寸中座した檜山男は座に復つて藤澤伯に嚮せした。「最早切り上げて、小谷の二次會に移らうぢやないか」

「其が可い、其が可い、吾輩は先刻からの議論で酒も興もさめた」

「東さんは御出にならんとぢやつか。あ、然ごあんすか。其ぢや、此で失敬、いや近頃面白か御話で悉皆醉が醒めましたぢや。はゝはゝゝ」

「東君は老耄々々と云はれるが、中々如何して、伏波將軍の概ありだね」

「惜む可し、御論がふるい、全く靖獻遺言時代の議論である」

「東君、主人が客を置去りにする法は無いが、――先休息して行つて呉れ玉へ。今娘がお茶を點れるから」主人の檜山は東老人を慰めた。

猶獸然と末座に腕を組んで居る東老人を見下ろして、藤澤伯はやをら腰を起した。「東君、矢張故山に歸臥されるのかね」

「藤澤さんの下風に立つ位なら、此皺腹を東はかき切る。巧言令色は婦人の事だ。男なら男らしくしなさい」

藤澤伯は勃然と怒つた――一は白井伯外薩組の顏に微笑をちらと見たので――が、思ひかへして呵々と笑つた。

「はゝゝゝ。負けるのは不愉快なものされ、東君、最早是非知事になつて呉れとも云はんから、御隨手に田舍に御歸りになつて、百姓の御機嫌でも御取りになるが宜い。吾輩は吾輩で吾輩の思ふ所をやる、誰が何と云つてもやる、吾輩の意見に反對する者は東君でも誰でも構はん、ドシ／＼やつつけるのだ。はゝはゝゝ、力競べさ。はゝゝゝ、言論ででも何ででも、吾輩に當られるなら當つて見玉へ。其とも先刻南條君が云はれた通り謀叛でも宜い。吾輩の手に警察もある、國庫もある、六師團の兵もある。何時なり共御相手申す」

云ひすてて藤澤伯は座を起つた。一座ばらばらと起つ。

（十二）

一夜論じ明しても足らぬが、敵手の引揚ぐるに追撃もかけられず、席を蹴立てて吾先づ去らんにも端なく負色見する嫌があるので、倏儀なく獨り座に殘つた東老人は、馬車人車の響も絶えてやゝ久しき頃、令孃が持て出た一盞の苦茗を啜るとやがて、夕餐の饗も車のすゝめも辭して、月明に墨堤に出ると、居合はした人車に乘つて、吾妻橋の方へ走らした。

十日あまりの月は、櫻の葉がくれにちら／＼

覗いて、夜風が冷やり／＼襟に當る。東老人は疲れきつた病餘の老體をどつかり車に託して、熱した額を夜風に嘗めさせて、痛む眼を瞑つて、車輪の廻轉に耳を借して、眠るが如く車上に默した。

併しながら數時間の舌戰に亢つた神經は容易に鎭まらぬのである。風は過ぎたが、心湖の蕩漾は中々止まぬ。噴火は止んでも、胸の餘燼は彿々と燃つて來る。愉快か、無念か、抑も亦遺憾か、判ち難く名づけ難い雜感は、潮の如く漲つて來る。

二十年來磨いだ太刀を圖らずも今日敵と合はした。而して其結果は？　敵も確かに手を負うた、手答がいまだに殘つて居る。東老人は彼憤激した座客の顏を思ひ出でて呵々と笑つた。

併、敵は凱歌を擧げぬばかりに揚々と引揚げた。果して敵の勝であらうか。否、否、否、刀折れ矢竭きても、一息吾に存する限りは、敵に凱歌を擧げさせぬ。二十年から磨ぎすました太刀は、彼しきの小ぜり合で、鞘には藏められぬ。況んや負けたとて敵に渡されうか。「警察もある、六師團の兵もある、何時なりとも御相手申す」はゝはゝゝ。やさしくも言つたな。然だ、勝負の決は更に一戰を待たなければならぬ。

敵は何奴？　兵器は何？　舌？　筆？　彼奴、此奴。彼利器。此舊式の兵器——兵器の鈍は吾ながら口惜しくも認めなければならぬ——顧みれば滿身の淺手深手。如何思つても斯處暫らくは戰場を敵に委して、再擧を圖らねばならぬ。而して東老人は頭を掉つた。

「騷いで居アがらア。畜類めエ」

東老人は眼を開いた。青葉の隧道をぬけて、車は燈火明き邸宅の前にかゝつて居る。門内には馬車人車數輛、外に漏るゝ奥のさゞめき。

「誰氏だ？」

「小谷別莊た此なんです」

「小谷か、此が」

「また大臣さんの御馳走があるんだね——旦那、大臣なんか結構なものですぜ、小子なんざ朝から晩まで車の挽き通しで、わるくすると白馬の一盃もひつかけられねえんだが、大臣——」

併し東老人の耳に其餘は入らなかつた。敗軍の將を嘲る敵の凱歌と聞えて、三味太鼓にまじる笑聲哄然と耳を破つたのである。

東老人は脣を嚙んだ。

「何故出京したらう？」思ふと同時に、甲陽の草廬が突然眼前に閃いた。

吾妻橋を渡る時、月白き隅田の流を川上遠く車上から打眺めて、東老人は太息した。

＊　＊　＊　＊

東老人は終に東都に留まらなかつた。

何の爲めにか留まらうぞ。出京の要務は大抵果した。藩長閥は八百餘街に吹き荒んで居る。舊友檜山の家にも、實弟青輔の家にも、藩長が吐き出す毒瓦斯は滿ちて居る。

檜山男には告別の手紙一通、面會を求めて來た鵜飼子へは謝絶の書一本、吾が學資に公債を賣つた金を懷にして、檜山別邸の舌戰の翌々日、東老人は東京を立つた。

彼柳行李——其中に知事の辭令は入つて居なかつた——と同乗で、新宿を出る時、東老人はふりかへつて禁城の空を仰いだ。五月闇の空は十重二十重に薄汚い雲を被いで何處に日つ目も見えず、此頃の世の中の樣に、昏々として、何時晴れさうにも思はれない。宛ながら大石に壓さるゝ苦しい太息は、東老人の脣を漏れた。

東老人は鬱々として歸郷の途に上つた。

第八章

（一）

喜多川伯は、心底に夫人を信じきつて居る、

寧ろ畏敬して居る。自から其と背て意識しないが、己が夫人に負く所多き、夫人に劣る所少なからぬことは、酒に亂れ色に荒んだ胸中にも、おぼろに感じて居る。機會さへあれば、夫人を凌いで快とするのも、此爲めである。一時の氣に任して散々毒づきもし、猜疑の言も陳べたが、夫人と藤澤伯の間に不義の關係が實際成立つて居らうとは、思はなかつた。で、夫人を沼津の別莊に送りやると、最早其心配は忘れて了つた。

夫人問題が一先づ形がついたので、喜多川伯の生涯はまた平生の單調に復した。苦しいと云つて、無聊程苦しいものがあらうか。不幸の喜多川伯は心配すら有たなかつた。式日に大禮服で宮中に伺候すると、稀に華族會館に出る外は、食つて寢て飲んで遊ぶ外に要はなき閑散の體である。尤も書齋には金文字入の書籍が少なからず飾つてある。卓上には象牙の紙切りをちやんと添へて西洋の雜誌類が積んであるが、此は洋行中心易くした某貴族の書齋を見眞似たばかり、讀書癖を伯は毫も有たない。庭園を玩ぶではなし、美術に心寄するではなし、榴の油繪は金縁のかゞやかしい故で、伯爵夫人が見る毎に顏皺らめた伊太利仕入の彫像も、曲線の美を味ふでもなく、裸體と云ふに興味を有つばかりである。此ばかりは男々しい御慰と、夫人が勸めて出す樣に昔からして居た銃獵は、射的が上手丈に獲物も多いので、今も熱心であるが、最早其季節も過ぎて居る。花牌も、先夜左る旗亭の奧座敷で同族の甲乙と合戰中、如何して嗅ぎつけたか、極節の惡い落破戸に踏みこまれて散々ゆすられた以後、少々恐氣さして、今は寢所の奧深く、嬖女のお陽と相對で、帶や指環を賭けてやる位。無聊に苦んだ果は晝は寢て夜燭をとつてのいたづら遊び、自身は後鉢巻に襷をおつ取り、侍女車夫まで襷十字に綾取らして、鼠狩と云ふ異な遊までする樣になつたが、近頃は破新奇な道樂を見出した。其は政治道樂である。

華族の大金滿家、洋行までして加之政府に對し惡感を懷くと云ふ讚肉の金方を、如何に淸廉迂濶な在野黨でも何時までも放擲して置く筈は無い。舊臣の田村と云ふ土屋伯の機關新聞株主の一人が紹介で、喜多川家に民間黨の一派がぼつ〳〵往來し始めたのは、近頃の事ではなかつたが、つい先月伯が東京新聞主筆に說かれて三千金を基本金の中に寄附した以來、關係は急に深密となつた。のみならず先日、大井田伯が敍爵の祝宴に喜多川伯も招かれて、籠絡上手の主人が舌先にした〻か持囃された以來、喜多川伯はぐつと柔地になつて、政治熱は瘧疾の如くとりついた。

成程伯樂に遭はねば千里の駒も知られず、華族と馬鹿の樣に云ひ囃す華族の中に一大政治家が潛んで居らうとは、世間の盲眼奴業より知らず、此喜多川自身すら知らなかつた。今の政府が落城して次の內閣の少なくも一席には喜多川伯が占めねばならぬ。——端唄都々逸なんど洒落たものを折々漏らした喜多川伯の金歯が、近頃頻りに藩閥打破の、責任內閣のと異な言を吐くので、驚いた家令が然る可からずと忠諫に及んだが、泰西の貴族は皆政治家であることを君は知らぬな、との大氣焰。恐れ入つて家令は罷つたが、實は腹の中で、狂亂行より政黨いぢりがまだ優かも知れぬ、金庫の鑰さへしつかりと自分が握つて居れば、と高を括つて居たのであつた。

（二）

東老人は失望し切つて歸鄉した。何處を向いても、薩長世界・藩閥の樹は蔓茂り枝八方にのびて鬱々蒼々と半天にはびこり、斧斤も入ら

ず、火も焼き得ず、嚴冬の力を盡しても其一葉をだに落ちしむる望なきを思うて、失望しきつて東京を去つた。併しながら、秋は盛夏と袖すり合はせ、隆冬の雪の下に春は青々と芽ぐんで居る。藩閥政府の衰殘は已に其繁榮の絶頂に見えて居た。久しく踏み固められ、壓しつけられた地の下に、やがて此藩閥の大樹を覆す可き穴穿運動を勢はとくに始めて居た。

大井田伯が率ゆる在野の一黨、土屋伯を自づから首領と戴く一派、武東伯の粗網に包む一團、主義の相違、歴史の如何は措て問はず、久しく野に壓されて活動の餘地を得んともがくはいづれも一致して居る。藤澤伯木下伯が上下も未だ脱れぬ日本に燕尾服着せ、貴婦人紳士を躍らせて文明とは斯様なものと云はぬばかり、無暗に吹かした外國風の吹きかへしが来る時節と漸くなつて、勤儉尚武國粹保存を標語とした一派は、頭を朝の一角に、野の一角に尾を振つて、此また敵は本能寺の意氣込凄じく乗ず可き機合を窺つて居る。獨り其のみならず、政府其ものの中に政府を危うす可き獅子身中蟲は少なからず宿つて居た。薩長政府と一口に云つても、薩長政府の合せものは離れもの、必死の場合にこそ一致もすれば合力もするが、平生の場合に勢力の競、利益の爭は免れ難い數である。大久保の殁後、殊に此五六年、藤澤木下諸人が思ふまゝにやつてのけるを、薩派の不快は蓋一日の事では無かつたのである。現に内閣の重要な位置は大抵長派に占められ、伴食の不平は久しく薩派にあつて、他の失敗をあれがしに待つて居ることは、藤澤伯等も蓋感づいて居るのであつた。不平は薩派にとゞまらぬ。長人の中にも不平分子は少なからずあつた――自家の利害は到底至強の動機である。皇室の藩屏と云つて、實は藩閥政府の肥溜となつた華族の中にも、殊に貧乏な公卿華族の中には、何事も思ふに任せぬ腹立ちまぎれ、時の政府に喰つてかゝる機會を待つもの少なからぬ有様である。要するに、其動機は個人の失意、私怨、惡感、嫉妬、政權の渇望、其位置は大小高下敵味方の區別はあつても、藤澤伯を焼點として薩長と云ふ中にも殊に長派、長派と云ふ中にも或二三子の蹶起に對する惡感は意外に廣く埋伏して、何か一機の相圖にむら〳〵起り立つ勢は已に成つて居た。東老人は表面の狀態に失望して、風雲の機已に此裏に伏して居るを察しなかつたのである。

籠城は小勢に限る、攻撃は多勢に利あるを知つて、此頃民間黨の甲乙が連りに同志の糾合聯絡を締めた矢先き、喜多川伯がお世辭にせよ歡迎を受けたのは當然な事であつた。

（三）

喜多川伯爵が書齋の時計は、今午前十時半を指して居る。伯も朝餐を終へて――政治家となつても晏起の癖は止まぬので――くはへ楊枝で、英吉利ねるの單衣に白縮緬をだらしなく巻きつけた伯爵は、玻璃障子を漏る日影の麗しきに目を細くして、新聞を見て居る。從來あまり新聞なぞに見ぬ方であつたが、近頃は東京新聞の關係もあり、政治家が時事に迂闊でも濟まぬと云ふので、御用新聞、反對新聞、中立新聞の大小數種は伯爵が毎朝の日課として閲さるゝこととなつた。尤も社説論説の嚴めしきは匆々に飛ばして、其かはり小新聞の如何はしい雜報は非常の注意を以て精讀するが、此は書齋の秘密である。政治家となつて、喜多川伯の身邊には種々の異動を生じた。一週一回舊臣の法學士某が政法學の講義に來たり、大井田伯が學校を有つて居る向うを張ると云ふ程ではなくも有望の子弟五六名に學資を給したり、應接間にグラッドストーン、ビスマアク、カヴールなぞの畫像

がかゝり、出所怪しい女文字の手紙ばかり插さつて居た書齋の狀插に大井田土屋以下在野知名の士の手翰が立つて居るなぞも、其一である。篤實な家扶は殿樣の御勉強を喜ぶもあれば、政府に御反對ではと危む者もある。探偵がつけたと、喜多川伯は誇つて居た。

　何か面白い事でも見出でたのか、伯爵がはつはと新聞の上に笑つて居る所に、扉が開いて、二十二三の束髮の髻を低う盆窪の邊へすべらした婦人が、珈琲盆を捧げて、入つて來た。派手なお召、お納戸繻子に友染の腹合せ、水色の地に菖蒲の花を紫に藍に染めぬいた半襟、地が見えぬ程塗つて、眼鼻立は正しい方であるが、唯何處となく重く、厚く、口の大きなのが目立つ。

　此は伯爵が二年前沼津在の農家から根こぎにして來たお隅の方である。堅きつぽいと云はれた伯に、二年越し寵を專らにして、お部屋ながら家の長男賢明を生んだので、今は容色と才氣をぬいて、喜多川家の淀君と云ふ資格。伯爵が田舍から引張つて來た當座は、土氣臭いお部屋樣、あたりが明るいだけ可笑しい點ばかり見えて、「御前も餘程物ずきな、彼樣な田舍者を」と召使まで笑つて居た。其を口惜しと、半は競爭、多くは眞似の心から、お隅は着物の着樣、物ごし、歩みざま、不知不識伯爵夫人の氣高きを模して、其不調和不似合夥しく、ます〳〵物笑となつたのであつたが、二年あまり過ぎた今日此頃は、やゝ物馴れて、左まで人目に立たなくなつた。但其言ひをり〳〵存在なのと、白粉を塗り綺羅を掩うても掩ひ難い骨格の發達は、今以て勞働に馴れて居た往日を示して居る。

「また氣分が惡いのか」

　伯爵は珈琲碗を卓子に置いて、向うの椅子に眉をあつめたお隅の額を眺めた。

「頭痛がしてならないんですよ」

「青柳を呼んで診さすが可い」

お隅は默然、こめかみを揉んで居る。其手には三個まで寶石入の指環が閃いて居る。

「明坊は如何した？」

「猶寢んで居る――いらつしやるのですよ」

「皆學校に行つたか」

「然ですよ」

「道も行つたか」

「然ですよ」

「でもよく行つたな、折檻をした後では二日も三日も物を言はずに部屋から出ないやつだつたが、でもよく行つたな」

「大きい姫樣は此頃では御邸より學校が好きですよ」

「何故だい」

「奥樣が居ないからですよ」

　伯爵は苦笑して居る。

「本當に如何すれば彼樣な頑固な姫樣でせう？ 呆れつちまふわ。だつて、彼樣な小さな癖に、人を馬鹿にして居るんですもの。わたしにだつて、お隅とも云はないで、隅、々、呼ずてにするのですもの。房樣や芳樣は、彼でも明坊々々つて抱いたり可愛がるのですが、大きい姫樣に限つて、其は無愛想な――わたしが此樣な者ですから若樣までがあなづられるかと思ふと、本當に口惜しくなつちまふ」

　お隅は泣き出した。

「困つたやつだ。歸つたら、云つて聞かして、聞かなけりや今些折檻する分の事さ。泣くな、泣くな、何も泣くことはない」

「だつて、大きい姫樣ばかりぢやないんですもの、皆があなづるですよ」

「誰が？」

「彼洋服を着た――佐々倉の奥樣だつて然ですよ。ひとの額ばかりじろ〳〵見て、辭儀一つしないのですもの。何時までも日蔭者で、世間の奥樣達と正當の御交際も出來んかと思ふと――

明坊だつて大きくなつたらわたしを呼捨にするのかと思ふと、……其様な窮屈な恥かしい目に會ふより死んだ方が餘程優だわ、元の沼津の百姓で居た方が増だわ」

「誰が何と云はうと、乃公が居るぢやないか」

「だつて御前は些もわたしを思つては下さらないのだもの」

「はゝはゝゝ、奥を沼津へ追ひやつたのは誰だ？」

「だつて其がわたしを思つて居る證據にはならないのだもの、沼津々々つて、乾度奥様を戀しがつていらつしやるのだわ。其様に奥様が戀しければ、奥様を電報で御呼びなさるが可いわ、わたしはお暇をもらつて、死んぢまふから可い」

「馬鹿云ふな」

「馬鹿ですよ、どうせ、わたしは馬鹿ですよ。奥様の様な博識ぢやありません、奥様の様に美い女でもありません――其様にお嫁なら、お暇を下さい、わたしは狩野川の橋の上から飛び込んで死んぢまふから」

而してお隅はよゝと泣いた。

（四）

桃に名高い沼津在は香貫の桃郷、實竹籬に蓑乾して桃の木に鐵よせかけ、麥乾す軒に干烏賊の臭高き百姓七分に漁師三分と云ふ生計をして居る中村平造と云ふ家に、姉弟二人の子供があつて、姉の名をお隅と云つた。即ち喜多川伯の愛妾お隅の方の前身である。

「春なれや、名もなき山も薄霞」する頃は、道端の蓮華草、蒲公英までも美しいもの、十六七のお隅が少し日にやけた顔を裏の畑の桃の花蔭にほんのりさせて、頬手拭姉さまかぶりの下から溢るゝ亂れ髪の五筋六筋風になぶらせ、目籠背負つて、松葉搔持つた姿を、隣輩は「意氣な」と妬み、近在の若い者は鼠なきして、番出頭の天たらんと爭つたが、鹿は意外な、だんまり新次と云ふ若者の手に落ちた。

元は村の名主まで勤めた舊家ながら、父沼田新藏が大の好人の上に、好きな酒と賭博から、山を賣つては呑み、田を賣つては打ちして、門口の大欅ばかりを昔のまゝに、今は身代もめつきり傾いて、村の寄合の上座もわたり者の鐵五郎と云ふ根性惡の親方にとられてしまつた。其を苦にやんでか、獨子の新次は、いゝ、いゝ、だんまりと名をとる程に碌々口もきかず、酒一滴飲まず、夜遊び一つせず、三島へは明神様へ參詣ばかり、汗水になつて家業の農に精出すを、「感心ぢや、彼では屋臺骨を建て直すぞ」と心ある年寄は賞め、「話せぬ奴」と血氣の若者は陰者にして居た。其陰者が逸早く、村の名花のお隅を手に入るゝこととなつたので、皆驚いて、呆れて、騒いで、妬いて、果てはあきらめた。二人が夫婦約束は、双方の親々も認めて居る上に、新次に指もさゝせぬ必死の覺悟であつた。

新次は命にかけて戀ひて居た、が、お隅は左程でもなかつた。若い者にちやほやされて、新次位の良人はいくらもあると思ふではなく感じて居た。總じて、女は浮氣である、戀しても計算は中々忘れぬ。古草鞋一足も棄て兼ねる程身をつめて居た新次が、沼津へ三島へ出る每に、買つて來る花簪半襟などを、お隅は平氣にもらつて、花がまづいの、襟の模様が氣にくはぬのと顔をしかめた。男を自在にあつかふ力をお隅は自覺して居た――奴隷の如く、新次をあつかつた。つれなく扱はるゝ程、新次はます／＼女に惚れて、其我儘を可愛く、其しかめた顔を貴く思つた。「はゝはゝゝ、矢張思案の外ぢや」と年寄は笑ふ。若い者は手を拍つて面白がり、若い女は怒つた。

其内に新次は徴兵にとられた。入營の前に是非内祝言だけでも濟まして置きたいと、泣く様

に新次は賴んだが、お隅は聽かなかつた——恥かしいと云つて。愈入營の際にも、新次は涙を流して、三年位は直ぐ經つ、自身は一日も卿の事は忘れぬ、何卒浮氣をしずに待つて居て呉れ、と祈る樣に口說いて、心殘して立つた。

（五）

喜多川伯は山水癖などは更に有たぬ。其沼津在、我入道の別莊を造つたのは、駿河灣の風景を愛づる爲めではなく、海水浴の流行の魁するでもなく、一は有り餘る金の使ひ端に困つて、不圖南歐の滯在中見馴れた貴族の別莊を模して見る氣になつたのと、一は佐野御殿場から伊豆かけて時々銃獵遠征に出かける其足溜りにするつもりで、汽車もまだ通ぜぬ、割合に不便遠隔な此沼津在に地所を見立てて、別莊を造らせたのである。而して別莊落成の檢分かた〲、獵銃肩上げ、犬を率いて、伯が沼津に來たのは、新次が入營して三年目の春三月下旬のことであつた。伯は莫大の獲物を期して、東京を立つた。而して獲物は兎にあらず、雉子にあらずして、思ひがけもない彼お隅であつたのである。

或日、例の通り、犬を從へ、銃を肩にして、家扶も連れず、獨り靜浦の方を指して、ぶら〱香貫の桃花村を歩いて居ると、道草を食つて麥畑に入りこんだ犬を「畜生」と叱る聲が聞えた。不圖見ると、今を盛りの桃花の下で、白手拭を冠つた女が鍬柄に肱を休めて、犬を叱つたのである。伯爵と大きな黑目を見合はして、おくれ毛かき上げて、白い齒を見せて、笑つた。其夕伯の別莊に、普請以來何角と肝煎る棟梁が呼ばれて、翌朝お隅の父親にお隅を喜多川の殿樣に若干金で出す可き談判を受けた。

お隅の母は女だけ利益に動くことも早いので、初から心動いたが、正直者の父平造は頭を掉つた——新次の約束を反故にはされぬ。併し東京にも折々往來して世馴れた棟梁の口說上手、支度金は云々、月々の仕送りは云々、まだ其外に唸と頷きさへすれば云々の便宜がある——若又無殘と刎ねれば損は云々、父も心大に動いた——其若干金があれば、牛も買へる、漁舟も一ぱい出來る、今度の講の掛金も別にひど工面する要もなし、次郎八が賣ると云ふ田も買へる、其れからまだ色々。——新次の方に一つ談じて見て下され。機敏な棟梁は、直ちに新次が父親を襲うた。新次が父親は新次を恐れた、倅も最早此冬には出る筈、何も當人の所存を聞いた上でなければ。併し棟梁は直ちに其を否認した、御前は一日一刻も御待兼である。新次が父親は頭を傾けた、此頃の淋しい懷に百金は如何にも欲しいもの——倅が出て來た上で、此老爺が言譯が立つ樣にさへして貰へば、卽ちお隅さんが勝手に約束を止して行つてしまうたことにして貰へば云々。お隅は？　お隅ははつきりした返事をしなかつた——如何でも阿爺の云ふ通りと答へた、其實お隅の心は最初から動いて居たので。羹一杯に家督を賣つたエサウはまだ〱高賣したのだ、風通お召を見せられてかけがへのない身の純潔を朝飯前に賣つてのける女は世に腐る程ある。華族樣の殿樣の御部屋樣——嚴めしい東京の御邸住居——侍女がついて——金簪、鼈甲玳瑁珊瑚、帶は綿なしの本繻珍、絹物づくめの平生着、一身代に値る晴衣——甘い物の食ひづめ——樂のしづめ——洋服でも、下駄は一足五圓位、金、アルミでない金の指環、傘は柄の曲つた總の垂つた——。何と云ふ榮華だらう、夢の樣な話。お隅はわなわなと顫うた。眼は耀いた。

お隅は終に玉輿に乘つた。千金香貫に落ちて、お隅の父親は牛と田を買ひ、母は絲織の晴着を拵へ、新次が父親は久し振に好きな道に遊

び、棟梁は買馴染んだ三島女郎を請出して、圍うた。而して其年の秋の暮、心も空に沼津の方を戀ひ焦れた新次——新次は除隊前の忙しくて其一年間は終に一日の歸休もせず、而してお隅の親も新次が父親も新次には絶えて其事を云ひ送らなかつたので——が、辛い思で剩した給俸を悉く擲つた平打の銀簪、絲入縞、綿入繻珍などを携へて、欣々然と新橋の汽車に乘る時、現に同じ東京の二里とは離れぬ麹町平河町の喜多川邸に、お隅は已に六月の腹を抱へて居た。

（六）

甞て一年半歳、經れば二月三月で如何な女にも飽いてしまふ喜多川伯が、お隅に限つて悉皆溺れきつたのは、不思議と伯の平生を知る者は噂した。其は一は喜多川家の家嫡となる可き賢明を生んだ故でもあらうが、一は趣味が合つたからである。昔は美人の譽をとつた伯爵夫人の靨も浮べぬ淸き面貌を見飽いた伯爵の眼には、年が若く肉肥え生氣多いお隅が餘程新鮮に見え、京音やさしく指の折目正しき夫人にかしづかれてや、窮屈な伯爵は、お隅が起居振舞言葉遣ひ、田舍びてぞんざいなのが一廉の愛嬌に思はれ、田舍者の初めて故鄕離れて違つた身分境遇の眞中に飛び込んだ心細さにお隅が唯一向に伯爵を賴るを愈いぢらしいものに伯は思うて、何時しかお隅は伯の愛を專らにする有樣となつた。

お隅は次第に伯爵をあやなす術を呑込んだ——其を知らない女があらうか。其は新次を扱つたと同じく馴致して強く當るのである。男と云ふものは、薄のろい、狂氣じみた、弱く出れば強くなり、強く出ればべらりとなる動物であると云ふのである。其で隨分思ひ切つたことも云ふ、じれる、すねる、怒る、背うちむける、沼津へ歸つちまふと獨語を云ふ。やさしい夫人の辛抱を凌ぎ飽いた吾儘の伯は、此吾儘の前に頭を垂れて尾を振つた。

位置は猫を虎にする。たかがお轉婆娘のお隅は伯爵の愛を得、家嫡を生み、次第に勢力を自覺するにつれて、ぼつ〳〵吾儘を始めた。及び難しと思ふだけ憎くてたまらぬ、やさしくされるだけ氣味惡くてたまらぬ伯爵夫人の排斥は、秋の寢覺の囁きから始まり、勢力の扶植は叔父某、從弟某の別莊番玄關番登庸から始まつた。流行を趁ふ淺猿しい人心、羽振の好いお部屋樣の方に人氣は傾いて、伯爵夫人が本邸を出るに到つてお隅は全く勝を得たのだ。お隅の得意思ふ可しである。

夫人は遠ざける、家中の頭は下げさせる、伯爵夫人と名乘らぬばかり、出るには馬車、入るに三指、金の指環も二十幾箇、昔の頃夢にも見なかつた贅澤もし盡して、榮華の欲は滿たされた。果して滿たされたのであらうか。否、伯爵夫人がまだ本邸に居た頃から、お隅は時々物思はしい顏を伯爵に見られ、病氣かと問はれて頭を掉り、しきりに問ひ詰められて、背向いて悶泣きに泣いた。

其むしやくしやした胸の中には、五年前明日はいよ〳〵入營に立つと云ふ前日、人氣も無い鎭守八幡の石階に腰かけて、わが手を握つて、二三年は直ぐ經つ、浮氣をして呉れるなよと一ぱい眼に淚をもつた新次の顏が、泣いたり、怒つたり、怨んだり、冷笑つたり、さま〴〵に現はれて居るのであつた。

お隅は其後絶えて新次に會はなかつた。聞いたのは、新次が出營後狂氣の樣になつて折から別莊に來合はして居た喜多川伯爵を散々に蹴擲ゑたと云ふ事、其れから程なく何處へ行つたか一切所在が分からぬと云ふ事ばかり。お隅は肥え太つて而も年は爭はれぬ眼尻の皺、光なき眼、無意味な伯爵の顏を近々と見る每、其顏を

踏んだ男の目には焼けてもきりゝつとした眞面目な顔を思ひ浮べて、何かは知らずむらむらと腹立たしく、果ては怪しく泣かるゝを、伯爵は病氣では無いか、醫者を呼べ、とやさしくさるる程お隅は額打背けて五月蠅と泣き怒り、果ては向うに立つ者に當り散らすのであつた。

（七）

「戀は猶痲疹の如し、年寄りて後のは至つて重症なり」と古人は云つた。五十におつかゝつた喜多川伯がお隅に溺れ樣を見れば、滿更噓とも思はれぬのである。「何處がよくて、彼樣迷はれるものかなあ」と馬丁は歎じたさうな。伯爵を知る程の者は、實際正氣とは思はなかつた。

來時の心細氣に縮こまつて居た容子とは打つて變つて、傍目にもひやりとする程お隅は時々慳貪にふるまふが、夫人を凌いで快とする伯もお隅の前には小さくなつて、愛兒の爲儘と云つた樣に、常に唯負けて居る。のみならず、お隅が何時の頃よりか妙に鬱ぎ勝に、氣荒に、怒りつぽく、泣きつぽくなつたのを何故とも知らぬ伯は、唯機嫌をとるに汲々として居た。

伯爵夫人を虐げるのも、一は其爲めである。夫人を沼津に幽したのも、藤澤伯の嫌疑の外に、お隅の一笑を買ひたさが動機の一であつた。お隅が實家には、月々判任一等の俸額を仕送る。流石お隅に伯爵夫人を名乘らせぬまでも、お隅は生涯喜多川家に榮譽ある安樂の地位を占む可き伯爵の御墨付を握つて居る。夫人附の家扶田中、其女千代、老女お國は斥けられる。お隅の意に忤ふ者は、片端から暇になる。道子姫すら、お隅を喜ばす爲めには、從來覺えなき父が拳の味を知つた。

斯くても伯は猶お隅の慰め難きを嘆くのである。今日も其手で泣き立てられて、伯爵は途方に暮れて居る。

「何も泣くことは無い、〳〵。何だ、水臭い？ 乃公が水臭い？ 奧を沼津へ追ひ遣つたのは誰だ？ 家中の者殘らず追拂つても、末々まで卿の面倒を見てやらうと謂ふ已に、水臭いと云ふ、其れが水臭いと云ふものだ。何？ 乃公はよく氣が移る？ はゝはゝゝ、女だな！ 斯樣云ふ乃公の心中が見えないか。泣かぬが可い、泣くことはいらん」

併しお隅は猶よゝと泣くのである。

「何が氣に入らないのだ？ 如何しようと云ふのだ？ ――何、死んでしまひたい！ 馬鹿を云ふな」

「わたしはどうせ馬鹿ですよ。馬鹿が御嫌なら、最初からお呼びなさらんが宜いぢやありませんか。本當につまらない――死んぢまひたいわ」

「矢張其が病氣の所爲だ――醫師に、青柳に見さすが可い。直ぐ療る。乃公でも時々覺えがある」

「病氣々々つて、わたしは――病氣なんかぢやない、ないのですよ」お隅は伯爵が背を撫で摩る手を慳貪にふりはらつて、袂をかみしめた。

伯爵は呆れ果てて、其小搖れる肩のあたりを眺めて居たが、詮方なさに、椅子を離れて、ぶらぶら室内を歩きつゝ不圖起つた下方の幼き笑聲に、玻璃窓から覗いた。

下の青々した芝生に、小さな稚兒髷、紅帶、裝も姿も一樣な女兒が二人。誕生も幾過ぎて此頃二三歩移し初めたらしい鼠色のフランネルに紫の帶さした孩兒の手を左右からとつて、歩ませて居るのである。高髷の十八九なのが、ついて居る。

「何だ、最早歸つて來たのか――成程、土曜だな。やつ、歩く〳〵、お隅一寸來て見ないか」

併しお隅は起たなかつたので、伯は手持無沙汰に玻璃障子をあけて、「おい〳〵」と呼ぶ。稚

兒輩が仰いで「唯今」とお辭儀した。此は道子が異腹の妹房子芳子である。

「おい、一寸連れて來い、明坊を――好い天氣だ、お隅、緣切にでも出かけて見るか」

「行つてお出なさい」

「卿を連れて行くと云ふのだ」

「だつて花菖蒲なんか見たかないんですよ」

「困るぢやないか――おゝ明坊、來たか」

「一人で歩けてよ、阿爺」稚兒輩の一人が手をはなすと、ぼちや／＼太つた手をさしのばして蹌踉お隅の膝を捉へる。お隅は五月蠅さうに抱き上げた。

「道は如何した？」

「姉樣も一處に歸つてよ」

「何をしとる？ おい、道に來いと云へ」

「姉樣は本當に意地惡よ。だつて、あたし達と些とも遊んで呉れないんですもの」

「然よ、あたし達にお話もして呉れないのですもの」

「困つたやつだ」

「今も一處に明坊と遊びませうと云つても、ずんずん復習なんかするのですもの、あたし、姉樣大嫌ひよ」

「本當に嫌な、こはい姉樣よ」

「大きい姉樣の眼つきは奥樣そつくりですわ」お隅が口添へた。

道子は去月父の手許に引取られて以來、敵中に孤立する身となつた。母には別れる、佐々倉家との來往は妨げられる、母に手紙の往復の道すら絶たれ、千代も去り、お國も斥けられて、昔馴染の殘るは犬のネッドばかりとなつた。道子を憎しと思はぬ者も、お隅の手前公に同情を表するを憚るので、道子は唯一人父の家に虜の身となつたのである。而してはりねずみの身を戟にして自から衛るがごとく、道子は一歩も讓らじ負けじといよ／＼我を張るので、新しい奉公人などは其姿容の妙じきに一たび驚く者も、其意地に再び驚いて、小面憎く思ふ者もあるので、單純な妹二人の評判は其美しい姉よりも遙かに好かつた。

（八）

道子は父の書齋に入つて來た。服裝は、襟の白を除いて、二人の異母妹と同樣。一月あまりの間に、少し面窶せて居る。入りざまに少し額を擡らめ、やゝ怒を帶びた眼をあげて、父伯爵からお隅、三人の子供を見た。

「道、お隅に辭儀をしないか」

道子は默然と立つたまゝ。氣を盛んにして道子を睨む伯爵は、道子の眼に見かへされて、眼をそらした。

「昨日の事は覺えて居るか。何故卿は然頑固だ？ 乃父を親とも思はんな。可、可、卿が親と思はんなら、乃父も卿を子とは思はん。房を見い、芳を見ろ、おとなしいものだ――女はやさしくなければいけん。卿の樣な女を變生女子と云ふのだ」

道子は猶默々と父の顏、お隅の顏を見て居る。

「何を今爲て居た？」

「母上樣に手紙を書いて――」死んでも噓は云ふまじきものと母から吹き込まれて居る上に、噓は卑怯と道子は賤んで居る。

「手紙？ 誰が許した？ 沼津へ手紙を出すことはならんと云つて置いたぢやないか」

「昨日の事を奥樣に云つてやるのですか」お隅がにくさげに口きいた。

「卿は明坊の守をして居れば澤山、何も云はなくても可い」お隅を眞正面に見て、明瞭に道子は云つた。

お隅は身を震はす。勃然と伯爵は色を變へた。

「道、貴樣は不埒千萬なやつぢやな。お隅を誰と思ふ？　お隅は乃父の世話をする女ぢやぞ。明坊が生母ぢやぞ。明は喜多川家の家督ぢや。貴樣も行々上に見て行かなければならん、其明が生母ぢやぞ、お隅は。一言でもお隅に無禮を云うて見ろ、乃父が許さん」

伯爵の調子はじれつ子の其に似て來た。

「貴樣は何と云へば直ぐ母樣々々と云ふ。母樣ばかりが親と思つて居るのか。房や芳に貴樣の樣な頑固ぢやない」伯爵は芳子の後頭を撫でた。「宜いか、決して沼津へ手紙なんか出すことはならん。貴樣に母樣は無い、沼津に居るのは斷體ぢや。宜いか、實の母は此お隅だ。今からお隅を母と思へ。母樣と云へ――喃、房も芳も母樣と云ふのだぞ」

「母樣、あたしに明坊を抱かして頂戴な」鸚鵡がへしに房子が云つた。

「恹、悧巧だ、悧巧だ。道、貴樣も今後お隅を母樣と云ふのだぞ」

道子はほろ〳〵涙をこぼした。

「どうせ、わたしなんか百姓の女ですから、明坊の保姆ですから、大きい姉樣の母樣なんかになれやしません、ねエ、房子さん」

「馬鹿を云ふな。乃父が云ふに、誰が否と云ふものか。否と云ふやつは親でも無い、子でも無い。さ、道子、お隅にあやまれ。こら、あやまらんか」

傍にあり合ふ金頭の鞭をとつて、伯爵は立上がつた。房子と芳子は色を失つて、お隅の背に隱れた。

「御前、御よしなさい、可哀想に――あゝあ、つまらない〳〵、沼津へ歸つちまうかな」

「こら、謝らんか」

ほろ〳〵こぼるゝ涙の隙から、術無さうに父の顏を見て、道子は脣を嚙んだ。

「謝らないか」

伯爵は二三歩寄つて來た。道子は默然と立つたまゝに寸步も動かぬ。

「あやまらんか」

罵る口の下から、道子の襟髮を無手とつて、押据ゑ、金頭の鞭をふり上げた。

「阿爺、姉樣をぶつちやいやよ」流石に女兒の芳子はら〳〵する。お隅は「彼方行つていらつしやい」と二人の女兒を室外に追ひやつた。

道子が父伯爵とお隅を睇視むる眼は焔を吐いて居る。

「好、乃父を睨んだな」

伯爵の手があがると、道子は身をもぢつて、一聲悲鳴を漏らした。

「畜生、さ、あやまるか」

道子は押据ゑられて、歯を切つて、頭を掉つて居る。

「剛情者、撲殺すぞ」

鞭が上る、足が下る。道子は鞠の如くころんだ。火の如くなつた伯爵は手に任せて、鞭を雨ふらす。

「母樣！」鞭の下から道子は微かに叫んだ。

鞭の手をとゞめて、伯爵は訝しげに、道子を見た。

「あやまるか。お隅を母樣と云ふか！　何、頭を掉るな。沼津の母樣を呼んだのだな。大きい聲をしろ、今些大きな聲をしろ、沼津の母樣が聞きつけて來るかも知れん。さ、今些大きい聲をしないか。エ、不埒な、撲殺すから然思へ」

「御前、大概でおよしなさい。わたしが怨まれるばかりですから――本當に何んて剛情張りの姉樣だらう、彼樣な眼をして、おゝ恐い、恐い、喃、明坊ちやんや、恐い姉樣だねエ」

「剛情者め」

またふりあぐる鞭は忽ち千鈞の重きに變つて、夢中になつた伯爵は漸く吾手を支ふる他の腕に氣づいた。

「一御前、御折檻が過ぎまする一

白髪頭の神納様は息を切つて居る。喜多川家の彦左衛門と云はれて、三代に仕へ來つた昔氣質の一徹もの、伯爵を襁褓の昔から知つて、今は隱居の身ながら時々舊主を見舞つては色々矢釜敷く云ふのであるが、他とは違つて金錢の合力受けようではなし、全く舊主の爲めを思ふ忠義者と流石に伯爵も知つて居るので、煙たい思はしても、來る毎に目通りを許して、頭掻き掻き意見をも聞くのであつた。

「一神戸か。突然に來るやつがあるものか」

伯爵の眼は徐々閃いて、鞭の手にふるへて居る。

（九）

神戸貞之は極めて主家思ひの老人である。君臣の義は、身健の今日と共に廢れて、年賀と吊問の儀式の外には、舊藩臣の喜多川家に參候する者も稀で、偶に來る者も舊主の名義〻は其金錢を利用するの目的であることを慨し、自身は議事作官を勤むる倅に家を譲つて隱居の氣樂を幸ひに、頻々舊主家に伺候しては心易く隨分意見口もきいた。先頃から暫らく風邪の心地に打臥して、無沙汰の詫に來て見ると、書齋を出て來た芳子房子が御父樣は云々と言ふので、病中に聞いた事もあり、かた〴〵咎を忘れて走り込んだのである。

「一御鞭は老拙へ」

蹲まつたが、年は寄つても腕心流の代々師範までやつた神戸に難なくもぎ取られて、伯爵は甚だ不興げに、椅子に腰を落した。

「一病氣ぢやつたさうぢやが一

其答をばせず、神戸は塊肉の如く突伏して居る道子を扶け起す。其手を握つて、道子は自から立たんとしたが、ふら〳〵して、思はずぺたり床に坐つて、小さな肩で息して居る。雛子髷は崩れ、衣紋亂れ、眞紅に逆上せた面は涙に濕つて、喰ひしばつた齒からは時々嗚咽が漏れるが、其は悲哀ではなく悲憤の嗚咽である。

「一御前、よく、斯樣な御手荒な御仕打が出來まするな！」神戸が老眼に涙が見えた。

「一親が子を折檻するに不思議があるか一

「一でも御幼年の姫樣を斯樣な——さ、姫樣、最早御前が御宥しになりまする。さ、御立ち——さ」

道子は袂で顏を拭つて、椅子をとらまへて立つたが、まだ息切れがするのであつた。

「一不圖姫樣が如何樣な御過失があらせられたのでござりまする？一

「過失？　過失と云つて——其何だ、親の口から恥かしい事だが、此奴實に不屆な頑固なやつでな。何、今に始まらぬ、君が知つての通りぢやが、近來は別して其——親不孝は、云つても聞かん、打擲でもしなけりや」

「御不孝と申して如何樣な？」

「一其は何だ、其、親を親とも思はんやつでな。現在乃公の前で、此お隅に無禮千萬な事を云ふ。彼樣な眼をする。男なら親殺しでもしかねぬやつぢや。——不埒、親を怨むか」而して伯爵は憤然と立上つた。

神戸老人が押隔つる。人を呼ぶ。老女と高畠と入つて來た。

「一姫樣を彼方へ——宜しかな、疎略があつては成らん。成上り者の御機嫌ばかり取らずと、卿達も些は御家の爲めを思ふが可い。——さ、姫樣、宜うござりまする、何も此老爺が存じて居りまする。御堪忍が大事でござりますぞ。さ、早く」

道子は聲を飲んで哭き出したが、終に二人に扶けられて出て行つた。

「一寸、待ちなさい」

続いて出て行きかゝつたお隅を神戸は呼びとめた。

「わたし？　御用ですか」

「左様」

「何の御用ですか」お隅は立ちながら神戸の様をじろ／＼見て居たが、何程の事かあらんと謂ふ貌に、賢明を抱きながら座に復した。

伯爵は頻りに髭を撚つて居る。

「牝鶏の晨と申しまするが、御前、成上り者の吾儘も大概にさしてお置きになりませんと、御家の破滅になりまする。承れば、御上様も沼津の方へ御遣はしになつたさうで、全體御上様に何の御落度があれば――否、其は申しますまい。が、御前、狐に魅されぬ御用心が大事でござりまするぞ」

「わたしは狐ぢやありません、沼津の百姓の女ですよ」

「狐だ、御正氣の沙汰で無い様な事を御前がなさるのも、皆狐めが所爲だ――成上り者の分際で、御上様を押のけ、一の御様を徒様な……米粒程の人情があるなら、御手にすがつても御とめ申す可き所だ」

「だからわたしは御とめ申したのですよ」

「お隅にわるい事はない。折檻は乃公がしたのぢや」

神戸は笑止千萬な顔をした。

「其れだから狐めが増長するのでござります。不埒千萬な――昔なら一刀の下に切つて捨てるが」

神戸老人に睨まれて、お隅は少し顔色を變へた。

「御前、しつかりなされませぬと、御家も末でござりますぞ」神戸は聲を厲ました。

「何も此方から願つて来たのぢやなし、わたしは沼津の百姓で澤山なのを、御前が――」

お隅は顔を掩うて泣き出した。

「人を狐なんか――其様にわたしが悪ければ、歸りますとも。今歸つちまひます共。御前、わたしは、最早沼津に歸つちまひますから、今お暇を下さい。さ、明坊、御前に御出。さ」

「こら、お隅、何をする？　此れ、泣く事はない、無いと云ふに、否、歸すものか。誰が何と云つたつて、乃公が眼の玉の黒い内は歸しはせぬ。おい神戸、注意して口をきいて貰はう。全體誰が許して書齋なんかに入り込んだ？　要があるなら書院で會はう。心易くすれば、附けあがつて、推參な」

神戸は落涙した。喜多川家の先代とは同年の小姓、主従と云つても朋輩の様に育つたので、先殿の面影残る喜多川伯爵の顔を見ると昔を思ひ出づるを禁じ得なかつたのである。

「御前、斯様に申しても御夢が醒めませんか。如何に御頭を押へ人が無いとは申せ、御位牌に對しても、些は御慎みあつても宜しいかと存じまする。家令の、家扶の、誰の、彼のと、御手厚い高給を戴いて、夥しい御恩になつて居ながら、各自の身の上ばかり、御庫のあふれを攘むることばかり知つて、誰一人諫言申す者も無いとは、實に御家も最早末になりました。神戸は最早七十五歳になりまする。何時死ぬるも分からぬ體でござりまする。此が諫言の致しをさめかも分からぬのでござりまする。何卒一生の御願、早々此お隅を御暇になつて、沼津の御上様を御呼びになつて――」

伯爵は欠伸して、眼を閉ぢた。其顔をぢつと瞻めて、神戸は太息をついて居たが、やがて唇を噛んで更に聲を厲ました。

「御前、しつかりなされませぬと、御家騒動は明治の今日にもござりまするぞ。彼相馬を御覧になつても分かる事でござりまする。御前の御心一つでは、喜多川家は黒潰れにもなりまするぞ」

神戸が音聲に、嗄えた樣に資明が啼き出した。喜多川伯爵は頰を膨らして良久しく默然として居たが、恰も高齢な政客某の來訪を報じたのを機會に、跡を濁してお隅諸共書齋を出てしまつた。

第九章

(一)

佐々倉子爵夫人は此頃風俗矯正會に不圖關係し始めて、其身分、快活な氣質等よりおのづから人にも推さるゝので、何時しか名譽會頭の樣な位置に立つて、出ずきの子爵夫人は其故一層多忙になつた。今日も某處の矯正會大會に出て夜に入つたので車を急がして歸ると、恰も子爵が玄關に馬車を下りるに會して、打連れて居間へ通つて、彼此共にさも草臥れたらしく安樂椅子に腰を下ろした。

子爵と云ふのは、立たば鴨居につかへんず大男、顏の半面は濃く胡麻鹽髯に埋れて、襟印の付つた金指環が輝く手先までも毛深くもぢやもぢやして居る。其郷貫が北の寒地であつただけ、奥羽の山に住む熊にあやかつたのであらうと、口善惡の某が戯れた。眼は細く、愛嬌ついて、一體に人好きのする顏立ちである。當時十五銀行の重役を勤めて、小心翼々であつただけ、可なり世間にも通じて、職務の上にも名義のみの重役ではなく隨分役に立つ噂であるさうな。

子爵夫人は白羽を飾つたボンネットをぬいで、圓卓にさし置き、鬢の毛をかき上げ、侍女が持て來た茶を啜つて、時計を見た。

—最早八時過ぎ—貴郎、晩いではありませんか。—清も照子も最早寢んだらうね—

「今し方御やすみ遊ばしました」侍女が答へる。子供の就眠時は八時ときめてあるので。

—貴郎も晩いぢやないか。乃公は華族會館に廻つたものだから。貴郎はまた例の風俗何とかへ行つたのか—

—は、左樣ですよ。華族會館は賑やかでしたか—

—然さ、藤澤が長演說をやつた—餘程演說癖があるね、藤澤には—

—何を藤澤さんが演說したのです?」

—何有、相變らずの御說法さ、皇室の藩屛、四民の華と云ふ華族に、體面を汚す樣な事があつたり、無暗に政黨騷ぎをやつたりする樣では、陛下の思召に背く云々云つて居た」

「然ですか、わたくしの方ではまた藤澤さんに不品行の忠告をすると云ふ決議をしたのです」

—藤澤に? 駄目々々、藤澤や喜多川の品行が直る時は日本がつぶれる時だ—

—馬鹿な事を仰有い、直らんからつて抛擲つて置いたら際限がありません—今換へるよ—此は更衣をすゝめる侍女に。

—而して喜多川さんも來て居ましたか—

—居たとも。藤澤の演說には大分苦い顏をして居た、喜多川が政黨いぢりは評判ものだからな—

—政黨いぢりは細君いぢめより始可いわ—

「藤澤め、實にづうづうしいぢやないか。喜多川に貞子さんの消息を聞いて居た、何時沼津から御歸りになる、なんか云つて居た。喜多川が不快な顏をし居つたぞ—

「本當に男と云ふものは何故吾儘なものでせう?—

—男と云ふ者はは止して貰はう。乃公も男だ—

—馬鹿を仰有い—

—妙なものだ、喜多川も他所で會つて見ると、一寸話は分かるし、あれで如才が無うて、好い漢だが、—いや女と云ふは罪なものよ—

—女に罪はありません。男がしつかりしないか

らですわ」

「手前が女だから然云ふのだて。男の方から云へば、また、女が吾儘さへしなければ宜いのだ」

「其はどうせ御互樣ですわ。けれども喜多川さんの樣では本當に仕樣も模樣もありません」

「不思議なものさ、乃公の樣な誠におとなしい御亭主を有つ――淸、何を笑ふ――有つ者は風俗何とか會に入る。お貞さんの樣な人はまた喜多川の女房になつて、死ぬまで默つて辛抱する。世は逆樣なものだな」

「だからわたくし先頃も貞子さんに然云つたのですよ、辛抱も大抵になさい――」

「擂子木持つて荒れ出せと云ふのかい。いや大變な智慧をつけたものだ」

「人を馬鹿になさい。だつて女でもやさしい一方では此からの世の中には到底立てませんわ。御覽なさい、貞子さんが辛抱一方で受身で居るものですから、喜多川さんがいゝ氣になつて、吾儘に際限が無いではありませんか」

「喜多川も餘程醉狂なやつさ。彼お隈とか云ふ女、彼が何處が宜いのだ。全く正氣ぢやない、一種の精神病だ、癲狂院ものだね。併しあゝなつては、行く處まで行かなければ止まんな」

「行く處までつて、何處までです？」

「然さ、墓穴か、癲狂院か二つの中さ」

「親族會議でも開いて忠告する外はありませんわ」

「親族會議？　馬鹿を云ひなさい。子供か白癡ぢやあるまいし、親族會議で押付くると云ふことが出來るかい。加之何人が裁判官になるのだ。皆五十歩百歩の連中だ。其樣な事が出來るものは、乃公位の者ぢや。乃公は此まで喜多川に忠告したことは何度何十度かも知れん。渾て馬耳東風ぢや。此上強く出れば絶交する外はない。加之顏を見ると、彼で中々強い言に云はれぬ所があつての――彼喜多川が思ひ切つた吾儘が出來るかと思はれん位ぢやて」

「外でやさしい人に限つて内の亂暴がひどいのはきまつた相場です」

「すると乃公の樣な外でやさしく内で尙やさしい男は蓋し相場狂はせぢやの。はゝはゝ」

「本當に那樣な人の妻子になつた者は因果ですね。來月大磯に行くなら乾度沼津へ見舞に行つて來ませう。彼樣に辛抱が好い方だから、手紙にもあまり書いて來ないけれど、如何樣につらいでせう！　道子だつて本當に可愛想ですよ。此頃は目立つて痩せて來たつて、照子が然云ひますがね。此家へ引取ると宜いのですけれど、まさか無理やりに然も出來ず、意地者だけに口には云はなくも彼兒も苦勞するに違ひありません。此方から足を近くすると彼田舍女がまた僻みを起して却てよくあるまいと思つて控へて居ると、此頃は些とも遊びにも寄越さないのですもの。如何樣な容子かしら、明日あたりは其となく尋ねて見ませう。貞子さんも其ればかり手紙の度に賴んでゐるのですから――あ、此樣に話しこんで、貴郎、お召更遊ばせ、わたくしも一寸更へますから」

子爵夫人は立ち上つた。同時に束髮の侍女がやゝあわたゞしい狀で入つて來た。

「奧樣々々」

「何かい」

「喜多川樣からお人が見えて居ります、あの、道子樣が此邸にお出はないかと申して」

「道子さんが居ない？　はてな」

子爵も聞きつけて立ちどまつた。

「道子が如何したと？」

「道子が居なくなつたさうです――喜多川から誰が來て居るかい？」

「家扶の松原さんが參つて居ます樣でございます」

「此處へ通すが宜い」子爵も席に復した。

やがて五十餘のでつぷり太つた肉程に膽は多かるまじく見ゆる男が頗るあわてたさまで入つて來た。

「夜分に伺ひまして誠にどうも――唯今も一寸承りましてございますが、道子様は此邸様にも御出になりませんさうで」

「は、最早道子さんは久しく見えませんよ。些と遊びに來なさる樣だと宜いのですが――一體如何したのですね？」

「では此方様には全く御出になりませんので――はてな」松原は小首を傾けて溜息を吐いて居る。

「一體如何したのかな」子爵も不安の色を動かした。

「いや、其、何でございます、實は御前が少し其御折檻が過ぎまして、いや、其は今日午頃の事でございますが――はてな」

「而して何時見えなくなつたのですね？」子爵夫人はいよ／＼不安の色を動かした。

「其は其、何でございます、夕方不圖道子様が御見えになりませんので――否、其までは別に變つた御容子も」

「其では日暮方までは確かに居たのですね、而して誰も何時出たか氣づかなかつたのですね、邸内は悉皆探したのですね」

「いや悉皆其邸内は手を分けまして、近所も餘程其何致しましてございますが――御前も今し方御歸りになりまして、或は其此方様かも知れんから一寸伺つて參る樣に――」

「否、此方には久しく」

「でもございませうが、つい一時の御折檻で、其何を申しましても御親子のことでございますから、何卒何なら私御連れ申して參り度いので、決して其御如才はございませんので」

「何を云ふのだ、道さんは此家には居ない」

「佐々倉の屋敷には道さんも嘘を云ふ者も居ませんよ――貴郎、わたくし一寸行つて參ります。若しもう事があつたら、貞子さんに言譯が立ちません」

「然さ、乃公では角だつて何だし――清、政吉に、今歸つて大儀だが、急用が出來たから平河町まで直ぐ馬車の支度をしろと云へ」

「では全く御出になりませんので、はてな。――では兎も角も御暇をいたゞきまして、御上様に誠に失禮でございますが、――」

「はい／＼、構はず急いで御歸りなさい、而してよく氣を御つけなさい、また他の姫様達がなくならぬ樣にね――本當に何と云ふ油斷だらう、貞子さんが聞きなすつたら如何樣でせう。あゝ何卒無事であれば宜いが」

子爵夫人は取るものも取りあへず馬車を平河町の喜多川邸に走らした。

（三）

佐々倉子爵夫人の馬車が青山の邸を乗り出す時、道子は新橋停車場の石階を上つて居た。

道子は沼津の母へ奔る可く、夕闇にまぎれて平河町の邸をぬけ出でたのである。

道子を折檻し、政吉某と對談した後、華族會館の集會には猶時間があるので、父伯爵はお隅と二人の異母妹を將て馬車を堀切に驅つたが、道子は獨り吾部屋に籠つて、午餐の膳にも夕膳にも向はず、教科書を前に廣げて、考へ込んだ。

涙はとくに乾いて居た――道子は使の前に泣顔を見するを恥ぢた。父に撲たれた背は頻りに痛み、執られた左の手首は折るゝばかり岑々と疼む。併し道子の苦痛は此外にあつた。顧へば思ふ程口惜しくて溜まらぬ、情無うて溜まらぬ。此口惜しさ情無さを何處に行つて存分に訴へもし哭きもしようか。邸内には目下ばかり、目下の中には唯一人も頼になる程の者は

居ない。佐々倉の伯母様は好きな伯母様ではあれど今の場合、行きたくない心地もする。所詮吾泣く涙は天地間に唯一、母上の膝——戀しい母上、なつかしい母上——嘸淋しくて、自分が淋しい樣に淋しくて泣いて御出なさるであらう、わたしも行つて泣かう。思ふ存分に泣かう。沼津！　沼津！　道子は淺草へ廻つたお隅等が日暮方になつて歸つた混雜を機會に、麻裏をはいて竊と邸を脱け出した。

外は最早暮れて居た。月なく星なき五月闇の夜を絶えに照す瓦斯燈の光をたよりに、道子は新橋を志した。懷中には一錢の金も有たない、——十二の貴女に錢とよぶものを手にしたことはないのであつた。否、馬車か金紋付の車でなければ、外に出たこともないのである。併し今は非常の場合である。道子は未だ沼津へ行つたことはない。唯四年程前に、未だお隅が居なかつた時分、兩親と熱海に行つたことがある。其時箱根の山の下を通つた。其山を越えれば沼津と聞いて居る。兎も角も新橋から汽車が行く處まで汽車に乘つて、其れから——

道子は小走りに急いだ。不圖小石に躓いて蹌踉と二歩三歩、倒れんとした時、突然袂を提へた者がある。驚いた道子は聲を立てず、憤然と袂をひきざまにふりかへつて、遠き街燈の薄明りに大きな犬を認めた。

「ネッド——？」

ネッドであつた。後れ馳せに女主人のあとを追かけて來たのである。道子は心を躍らして、追手を望んだが、近くには追手の影も見えない。未だ氣付かぬのであらう。

ネッドは訝かし氣に、氣づかはし氣に、女主人の顏を見る容子である。道子が歩むとすれば、袂を銜へて、いつかな放さぬ。

「ネッド、好い兒、離して、頂戴よ。わたし、母樣の、所へ、行くから」

小さな掌が額を撫でると、ネッドは聞き分けたかの如く尾をふつて、何處までもとついて來る。持てあぐんだ道子は、是非なく打連れて行くのであつた——いくらか氣丈夫な心地もして。

幸ひ巡査に見咎めもせられず、道子は始終小走りに、虎の門を出て、人目を避け〳〵、新橋に着く頃は、最早綿の樣にぐつたり疲れきつて居た。

（三）

恰も國府津行の終列車が出る二十分前で、新橋停車場の下等待合室にはさま〳〵の人が群つて居たが、今稚兒髷に白襟、矢がすりに緋縮緬の帶をしめて麻裏をはいた少女が大きな犬を連れて入つて來たので、云ひ合はした樣に眼を聚立てた。

道子は眞面目な黒眼をあげて、室内を見廻したが、隅の方に農夫の夫婦らしい風呂敷包を斜に背負うた老爺と老嫗の傍に跪るゝ樣に腰かけた。

「大い狗だよ」

「如何したと云ふのかね、彼兒は？」

種々の囁きが四邊に起る。道子は小さな溜息をついて、四邊を見廻した。ネッドは其足下に蹲つて、油斷なく警戒して居る。

幾何見ても見足りないかの樣に、側近く腰かけた道子を見て居た老夫婦は互に會話を始めた。道子は耳傾けたが、話の大半は分からなかつた。併し國府津、々々と云ふこと丈はつきり耳に入つた。國府津の名は、熱海に行つた時通つたことを微かに覺えて居る。道子は老夫婦の顏を熟と見て居たが、

「國府津の汽車は何時出るの？」と突然に問うた。

「國府津行の汽車でがんすか。最早直ぐ出るで

がんす。わし等も、は、國府津まで行くでがんす。御前様も國府津行かつしやるのかね」老爺が問うた。
「國府津までしか汽車は行かないの？」
「左様でがんすよ、箱根ちふ山が未だ汽車ぢや通られねエんでがすよ。御前様何處まで行かつしやるのかね？」
「……」
「御一人でがんすかの？」
「……」
「御連れ様は如何さつしやつたのでがんすかの？」
「……」
「此大い犬は御前様のでがんすかの？」
道子は頷いた。
此問答を傍聽した群集はまた盛に囁きを始めたが、切符口が明いたので皆どや／＼と立つた。
「御前様、國府津行かつしやるなら、最早汽車が出るでがんすよ」
親切な老爺が注意して呉れたので、道子はネッドと共に立上つた。「何てまあ綺麗な嬢様かねエ」老媼が道子の頭を勿體なささうに撫でた。
「御前様、切符一人で貰へるでがんすかの？」老爺は心許無げに道子を見た。道子は唯頷いて居る。
やがて道子の番となつた。
「何方？」内から慳貪な聲がする。
「國府津」幼い聲がしたので、切符係が覗くと、綺麗な稚兒髷と眞黒い眞面目な兩眼が覗いて居た。
「はい國府津。〇十〇錢」
道子は切符を握つて、まじ／＼切符口を眺めて居る。
「お錢は？」終日器械的の勞働に疲れきつて言ふだに懶き切符係が斯く云ふ聲は、やさしかつた。
「御前様、お錢を御出しなさるが宜えでがんすよ」
先刻の老爺が言を添へた。
「お錢がいるの？」
「お錢がなけりや、は、汽車に乗られねエんでがんすよ」
且呆み、且訝しんで、切符係が窓から覗く。四邊の者が不思議さうに耳目をそばだてる。驛夫が來る。巡査が來る。道子があたりは忽ち人の山を築いた。

（四）

「掏摸か」
「迷ひつ子なんですか」
「切符代が無いんだつさ」
「無錢乗車をやらうと云ふのか。顔に似合はん太いやつもあるものだ。鬼神お松の卵ぢやねえか」
「なに貴顯の嬢さんだ。繼母が毒害しようとするんで、逃げ出して阿爺許へ行かうと云ふんだね」
折から濱の汽車が着いたので、物見高の群集はます／＼たかる。
「こら、立つてはいかん――では全く一人ですな。御姓名は？」巡査は大勢に圍まれてやゝ顔赧らめた道子に問うて居る。
「道と仰有るのですな――御名字は？」
道子はぐつと詰まつた。
「分かりませんか。名字です、田中とか上田とか、其、御名字がありませう」
道子はさけすむ如く巡査の顔を見たが答へなかつた。
「御家は何方です――其樣默つて御出なさつては困る」

「御前樣、本當な事をおまはり樣へ云はつしやるが宜えでがんすよ」老爺は猶立去りかねて、言を添へた。

「何も恐ねえ事は無えだ。さ、云ひなさろ」老媼も口添へたが、發車の鐸が鳴るので餘儀なく打連れて行つてしまふ。道子は其あとを目送つて、默然と立つて居た。

「犬の頸札を見りや宜いさ」誰やらが氣をつけた。

巡査は俯いてネッドを引寄せんとしたが、ネッドは獅子犬の頭を儼然とあげて、うゝと唸つたので、巡査は遽て飛びのいた。群衆がどつと笑ふ。巡査は顏を朱にした。

「こら、立つては不可と云ふに――孃さん、此方御出なさい。さ、其切符は戻すのです」

「道さんぢやないか」

群衆をかき分けて進み出た二十四五の、絨地の夏服に白鉢卷の麥藁帽をいたゞき、洋傘を挾んだ白面の美男を見ると、道子は顏色を變へた。

「道さん、一體如何したのだ？」

「君、此孃さんを御存じですか」巡査はじろじろ彼白面の若者を見た。

「識つて居るとも。親戚です――僕か、僕は」衣兜から女持の繻珍の紙入を出して、一葉の名刺を巡査に渡した、

「子爵梅津元房――梅津、々々、聞いた樣な名だ」と案じ顏に巡査は彼方の顏をうちまもつたが、

「では此令孃は御親戚でございますな。如何して御一人此處に御出になつたか、御存じでございませうか」

「僕も今日船で濱に着いて、今の汽車で來たばかりだから、一向容子は知らんが」

「兎も角も此方へ」

あと目送つてがや〳〵騷ぐ群衆を殘して、巡査は梅津子爵と道子とネッドを婦人待合室へ導いた。

（五）

梅津子爵と云ふのは、即ち喜多川伯爵夫人の實弟、道子が爲めには現在の叔父である。先きに華族禮遇停止を喫ふ樣の不行跡を仕出來したのを、喜多川夫人が藤澤伯に頼んで、暫らく息ぬきに京都へ遣り、御陵取調に從事させたのであつたが、破落戸根性の骨に染みた子爵は二月たゝぬに最早其も飽きてしまひ、到る處に作る惡友とまた惡い事を仕出來して、京都にも居られぬ仕宜となつたので、飄然とまた東京へ舞ひ戻る其端に道子にぶつかつたのである。

道子は此叔父を輕蔑しきつて居た。其も其筈、叔父が母と瓜二つと云ふのは唯其容貌だけの事、人柄は此れでも同じ蔓に生つたのかと怪まるゝ相違である。已に述べた通り、陸軍士官學校を不品行でしくじつた其を墮落の手初に、男が好うて、小才が利いて、而して子爵の肩書がある點から、思はぬ罪を作る機會も多く、惡所、惡酒、惡友に浸つた果は首尾よく子爵破落戸となり濟まし、年頃の令孃を有つ同族の人々から惡魔の如く遠ざけられ、華族廢止論の引例に何時も引出さるゝ程となつて、今年二十五と云ふに未だ定まつた妻もなく、姉なる喜多川夫人が苦勞の種となつて居る。道子は居常母夫人が此叔父についてさま〲に心を碎き、顏赧らめ涙をこぼし父に氣兼ねする場合の如何に多いかを知つて居るので、此叔父に對しては憤と輕蔑とを有つて居る。何時の程からか道子の腦中に染みこんだ「男はつまらぬ者」と云ふ觀念も、原はと云へば父と叔父とが其種子を播いたのである。

道子は家出の仔細を叔父に告げなかつた。沼津の母夫人に逢ひたさに、不圖迷ひ出た樣に

云つて、今から直ぐ沼津へ連れて云つて呉れと思ひ入つて頼んだ——溺るゝ者は藁でもつかむのである。

梅津子爵は頭を掻いた。紙入に京妓の名刺はあるが、五圓札一枚もない。實は音信絶えた、姉はまだ在京とばかり思ひ込んで居たので、また例の手段で泣きつく心算が、沼津と聞いて當惑の眉を顰めた。子爵は喜多川伯とは昔から疎い勝で、何を賴むも何時も姉夫人が中に立つたのであつた。

併しながら今直ぐ道子を連れて沼津まで姉夫人の跡追つた所で詮方ない話、何れ入り組んだ事情もあらうが、獨り沼津を志して家を飛び出した道子を連れ戻して、喜多川伯に逢つたらば、また甘い話が出來るも知れぬ、と子爵は忽ち思案をきめたので、樣々に道子を賺した。

「其樣な道理だから、宜いかい、今夜は叔父さんと一處に歸るのだ。何、心配は入らん、言譯は如何でもつくさ。何、歸らぬ？　其樣な駄駄を捏ねては困る。何、嘘なものか、僕も沼津へは是非行く要がある。きつと連れて行くさ。大丈夫、嘘を云ふものか。連れて行くから今夜は素直に歸るのだ」

「是非一應御歸りになつた上で、また御出直しになるが宜うございます」警官も言を添へて、自から車を命じに行つた。

（六）

子爵夫人が出て行つたあとで、佐々倉子爵は服を更め、熱いチョコレートの一盞を喫して、今日の手紙を見、日記などつけ終つて——子爵は事務家だけ、渾ての調子が精密で、其銀行の帳簿に一點の不明瞭を許さぬ如く、家計の監査も極めて嚴密で、御前は薪一本の代價も御存じで、と家扶某が頭を掻いたさうである——此頃稽古し始めた謠曲の本を手にして、洋風の寢室に入つた。其れから寢衣と着かへて、雪白の臥床に長身を横へ、金屬製の洋燈の心を少し細めて、仰向けに寢ながら「鉢の木」を唸つて居たが、頭上の時計が十一點をうつと、起き上つて時計を見、耳を傾けて、

「晩い」と呟いた。

殆んど同時に殷々遠雷の如き響が聞える。やがて其響は次第に近くなつて、玄關先きに乘り込む馬車の響となつたので、子爵は莞爾として横になつた。やゝ暫くすると、寢室の戸を開いて、まだ外出着のまゝボンネットも脱がず入つて來たのは、子爵夫人である。

「晩くなりました、御心配なすつたでせう」

「然さ——時に如何だつたかの」

「エ、ま、無事でした。今一處に連れて來て、下で照子と一處に寢かして置きました」

「然か——一體何處に如何して居たのだ？」

「沼津へ行かうと云ふんで、新橋まで行つて居たさうですよ。彼樣な思ひ切つた兒ですからね、わたくしも萬一したら然ではあるまいかと思つたのですが、本當にもう彼家の馬鹿揃と云つたら、まご〳〵するばかりで、唯一人も役に立つ男が居ないのですからね」

「沼津へ？　新橋まで？　いや可哀想に一人で其樣な向う見ずをやつたのか。併しよく分かつたの？」

「否、何が分かるものですか。わたくしが行つて、やつと新橋の方へ人を走らせる、警察に内内で賴んだりしたのです。否、追手とすり違ひに、道子は梅津さんに連れられて歸つて來たのです」

「梅津——梅津が最早歸つて來たのか」

「は、何ですよ、梅津さんが新橋に着くと恰道子に會つたのですと」

「梅津が？　フウム、餓鬼も人數と云ふが、彼奴でも居合はして好かつたの——其は先好かつ

た。喜多川は如何だ？」
「何て話にはなりません、人間も彼樣馬鹿になれるものですかね、彼樣な不孝なやつは井にはまつてなりと死んでしまつた方が餘程宜いなんかと云ふのですもの、彼お隅と云ふ女の前でしたからね、わたくしにも歸れなんか云ふのです。餘り腹が立つたものですから、些とばかり脂をとつてやつたのですが」
「困つたものだ」子爵は大息した。
「本當に道子も可哀想ですわね、現在の父が其通りですからね。よく歸つたとでも一言云つて吳れるならですが、何處に行つて居た？ 不孝者めと云つた樣な調子で、またひどい事でもしさうな權幕ですから、わたくしが中に入つて、二三日任して下さい、よく得心がいく樣に云ひ聞かして置きますからつて、無理やりに連れて來たのです。馬車の中で、何故叔母樣許へ御出でなかつたエ、と云つたら、泣いて居ましたつけ」
子爵は重ねて太息した。
「何しろ可哀想なものだ。現在の吾子を、よく然慘刻に出來たものだ。喜多川も中々譯を作る……其處な馬鹿でもなかつたが」
「皆彼田舍女が馬鹿にしたのですよ。だからわたくしが云ふのです、家庭を亂暴にして居て其れで政治家も何もあるものではない……國會が開けたら眞先に廢妾の建議を出してやらなければ……男の我儘も餘りと云へば亂暴な。貞子さんだと、喜多川さんを眼前に据ゑて置いて思ふ存分云つてやるのだけど」
「然眞黑にならなくも可いが何しろ困つたものだ。彼樣な親父をもつた道子は氣の毒なものだの」
「兩親もつて居て孤兒同然ですからね。二三日と云つて來たのですけど、歸せばまた彼兒がつらい思をするのは見え透いた事ですし、と云つて沼津へは猶遣れますまいし、先何とか云つて……否、貞子さんに知らしては大變です、其樣な事聞かなくたつて、心配はあり餘るのですもの」
「先當分預つて置くさ。照が大喜びだらうて」
「照子が先々寢ほけてましてね――おや、道子さん、最早學校なの、なんか云つてましたが、やつと氣がついて、大喜びで一處に寢みましたのですよ。可哀想に、草臥れきつて、馬車の中でもふら／＼するのですもの。あゝあ、此でやつと安心した、顏見るまでは胸がわく／＼して――どれ着更でもして」
子爵夫人が立上る時、階段を駈け上る響がして、扉の外から、
「阿母、阿母」
と呼んだ。
「誰？ おや、照子なの、騷々しい、何です？」
「道子さんが變よ」
「道さんが――ま、如何したの？」
子爵夫人は急いで下りた。下座敷の照子が臥床に、照子が白フランネルの寢衣を着たまゝ、道子は紫天鵞絨の枕に俯向いて居る。
「道さん、道さん、如何しましたエ？」
道子は辛うじて顏をあげた、が、また倒るゝ樣に突伏した。
「如何しました？ ……ま、此熱！」
抱き起す子爵夫人は驚いて叫んだ。洋燈に照さるゝ道子の顏は火の如くほてつて、熱氣にかゞやく眼の中とろ／＼と、齒は頻りにわなゝいて居る。
淸心丹をもつて下りて來た子爵は驚いて、人を醫師に走らした。併し醫師が來るまでに、道子は全身宛ながら焰の如く熱し、木の葉の如く震へて、「母樣、母樣」と續けざまに呼ぶばかり、其額を冷やして居る子爵夫人を見識つて居る容子もなかつた。
道子は此夜より重き熱病に罹つたのである。

第十章

（一）

須藤正が藤澤伯を警めた其豫言は違はなかつた。當局者が世間に祕して一氣に功を收めんと圖つたにも拘らず、六月には條約改正案の蒟蒻版摺を有志は皆握つて、遠寄の鉦太鼓は藤澤木下諸伯が半夜の夢を驚かし始めたのである。併し斯騷ぎは、纔かに社會の上層、其も一部に限られて、唯生きるに汲々たる一般衆庶は、判事に外國人を用ゐようと、治外法權が明治三十七年まで殘つて居ようと、其樣な事には一切頓着なしである。況して箱根の山を中に隔てた沼津と云つても此處は在、生涯の喜憂を唯漁獲の多寡に託して、舟が出されぬしいけには寢て暮らす我入道の漁村の雨の日は、晝ながら靜閑として、人なきかと思はるゝのであつた。

しと〳〵と降りしきる梅雨の中を、蓑笠素足に草鞋と云ふ裝で肴籠を荷つたのが、息杖つきつき歩いて來たが、唯有る家の前へ來ると、「どれ、おゝつ〳〵ら休んで行くべいか」と呟き〳〵、店頭に立寄る。

店頭には駄菓子の箱が並べてあつて、其後で子を負りながら眞黑な手で擬金鍔を四十餘の嬶が燒いて居る。十七八の鼻の低い、文金に結つた娘が天王祭にでも着る料であらう、派手な絞の浴衣を縫つて居ると、僅かの餘地に紅木綿の三尺を前結にした眞黑な二十三四の若者が二人寢そべつて、頤を兩手に支へて、何か戲談を云つて居たが、立寄る蓑笠を見て、遽てて起き上つた。

「今日は」肴籠を軒下に寄せ、笠だけ脱つて、緣臺に腰を下ろすのを見れば、白髮の丁髷をちよいと爺の窪の邊に結つた、赭顏の、眼の大い、獅子鼻の、脣の厚い、頑丈作りの老爺である。

「此降りに──よくお精が出ますよ、まあ」嬶は手早く澁茶を汲んで差出す。

「拵がなきや食はんねえだ──此一つ貰ひます」老爺は擬金鍔をつまんで、二個三個頰張つて、澁茶をぐつと乾した茶碗をとんと下に置いた。「當時の若者は拵ぐこと些も知んねえだ。女郎買ばかし知つて居るだ。わしは、七十八歳になるだが、──」

二人の若者は顏見合はして、苦笑した。

「七十八歳になるだが──」

「あ、老爺さん、此處に居たの？」

表の聲に皆眼を擧げると、蛇目の傘に爪皮のついた足駄、銀杏返しのきりゝつとした二十四五の女が立つて居る。

「へい、今日は。──松魚に鯖鰆、皮剝ばかし」

「何でも宜いから直ぐと來て下さい──東京から御客樣があるのだから」

「お客樣？　殿樣かね？」

「否、御前ぢやありません──では直ぐ來て下さい」

「はい、〳〵、今行くだ」

表の女は一寸會釋して行つて了ふ。

「東京の女は如何した云へば、彼樣意氣だかねエ」嬶はあと見送つて嘆息した。

「意氣は意氣だけんど、わし彼樣な女大嫌、──奧樣は好きだけんど」娘が少し額をしかめる。

「奧樣は彼女と一口には云はんねエだ」

「色が蒼えな」一人の若者が。

「此頃は猶痩せて居なさるだ」

「おいらア、吃驚しちまつただ。だつてよ、先頃おら烏賊釣に行つてよ、戾るとなア、渚傍に女が一人立つてるだ、そら先頃お月さまが暈かぶつた夜よ、ぢいと海を眺めてるだ、おいらア慄然としちまつただ。其れからナ、ぢいと見ると彼奧樣よ」

「美女程夜見ると恐ねえちふだ」
「何が恐ねえもんか、彼奥様にア乃公ア全く惚れ込んでしまつただ」老爺が髀をはたとたゝいた。皆哄然と笑ふ。
「笑ひ事ぢやねえ。乃公ア今年で七十八になるが、まだ彼位な女見た事ア澤山無え。何、顔に惚れるものか、皮一重引剝りやげばちろも緇鯛も同じだ。乃公あ彼人品に恐れ入つちまつただ。きりゝつとして居てよ、よく氣がつくだ。『老爺や、毎日御苦勞だの』其がお世辭ぢや無え、乃公此黑い眼の玉でちやんと睨んで居るだ。お世辭か然でねえかは知つて居るだ。些も高慢ちきな風は無え、庭の草なんか御自分でむしるだ。乃公ア彼顔見ると御氣の毒でなんねえ」
「何だつてまた彼奥様を二月も三月も此處へ遣つて置くだかね」
「殿様が馬鹿殿様だからよ。香貫のお隅つ子に魅されて居るだ」
「お隅つ子は出世したもんよ、喃」嬶は娘の顔を見た。
「何が出世なもんか」老爺は大喝した。「乃公ア云つただ、お隅が阿爺に然云つただ、出世ぢや無え、沼津の女郎に賣るも同じ事だ。己が娘ぶち賣つて、舟拵へようが、家藏建つたてて、何にもなんねえ、つて然云つてやつたけんど、矢張此が欲しい、此が」老爺は丸を拵へて見せる。
「此老爺は錢は欲しい、錢が欲しいが其樣な不義理な錢は欲しくは無えだ。天道樣ア光つて御出なさるからの、彼樣して金千兩貰つたてエて、泡錢だア、いまに碌な事は出て來ねえだ」
「お隅つ子だアて、寢覺が惡いに違え無えだ、香貫の新次を誑かして居るだから」若者の一人が言を插んだ。
「新次！　新次！　乃公アよウく彼を知つて居るだ、だから然云つただ、新次に云つただ、お隅の阿魔つちよは碌な阿魔つちよぢや無え、彼樣な女はよしねえて云つただ。云つたが、新の野郎聞かねえだ。馬鹿め、女旱ぢやあんめえし、彼野郎に惚れてた女は幾人もあるだ。善太夫新田のお勢だて――」
「横濱に奉公に行つた彼だね」
「然よ。好い女だ、色は黑えが、怜悧な女よ、新の野郎に惚れぬいて居ただ。新の馬鹿野郎盲目だからな、些も其知んねえだ。知んねえで、お隅に振られてよ、今ぢや何處へ行つたか分かんねえだ。頃日の若者は女に惚れ樣も知んねえだ――どれ行くべいか。は、どつこいしよ」
老爺は立上つて、笠を打被て、肴籠をやをら荷つたが、不圖思ひ出して、
「金鍔三個食つただ。歸途にやるべえ、今一文も無え」
云ひすてゝすた〳〵喜多川家の別莊の方へ行つた。

（三）

狩野の川口、流るゝ河水と寄する海とでせり上げた小三角洲の頸の邊に、某の小山に據り、松を繞うた二階作りの瓦葺は、出來の當時、何の要あつて斯樣な家を斯樣な處に建てるのか東京の人も酔興なと此あたりの村人を喫驚さした喜多川伯爵が別墅である。其二階に伯爵夫人は波の音を聞くことも已に七十餘日となつた。
何處までも咎を身に引いてぢつと忍ぶが婦德の訓戒に絆され、一にはまた告げずして擅まゝに藤澤伯に頼んだのは――假令其理由は百も二百もあるにせよ――兎に角我落度で良人の怒も、尤と思ふより、また今の場合おとなしく良人の命に從ふ外に良人の疑を霽らす道ありとも思はれぬので、一言も諍はず、心の臟をもぎ取らるゝ思はしながらも言はるゝまゝに道子をも引渡して、老家從一人、侍女一人を將て、

箱根を越して此沼津の在の明けても暮れても波の音と松風ばかり音づるゝ別荘に籠つたのは四月中旬。箱根の山駕籠の中から峯に谷にさり氣なく咲き滿ちた深山櫻の美しきをあはれと眺めた眼は、日毎に眺むる海の姿の何時となく夏を浮べて、南風に翻る我入道の五月幟、川向うの松の隙漏る麥圃日に〳〵色づき、夜は烏賊釣のかゞり紅の螢と海に亂るゝを見て、今五月雨闇き頃となつても、歸京の許は更に來らぬ。否、家從へ宛てて若干金の別荘費用として送つて來た外は、伯爵夫人は一行一字の良人のたよりにも接しなかつたのである。

東京の消息は、道子が幼き手紙――其も此頃はふつつり絶えた――と、佐々倉子爵夫人が慰めの書翰によつて纔かに傳はるのであつた。來て訪ふ人もなく、往いて訪ふ人もなく、村人の指目を牽くが心憂さに出あるくことも殆んど無いので、[illegible]。家從は好人の年老、退屈まぎれに毎日釣にばかり出かけて居る。侍女の金と云ふのが、纔かに話敵となるばかり。其外にはお澄が伯父分に當る別荘番の老夫婦、惡い者では無いが、此も喚び起す記憶に夫人が爲めには却て忌はしき牢守の心地。斯くて一日又一日、寂寥は磐石の如く夫人を壓するのであつた。

（三）

何事も愼ましい其氣質から云つても、其境遇から云つても、伯爵夫人が從來の生涯は隨分と淋しい生涯であつた。御殿の中に大勢の腰元に冊かるゝ生涯は、得て九尺二間の其れよりも淋しい勝のものである。併しながら此頃の寂寥に比すれば、從來の其は殆んど物の數でも無かつた。

心を慰むる道子が數十里を隔てて居るのみか、心を傷むる良人すら死せるが如く打絶えてしまつた。衣食に逐はるゝ身はまぎるゝすべもあるのであるが、憖ひ伯爵夫人と名乘つて月々の手當に疊の上の不自由に無い程、閑には苦痛の種となつて居る。富士も駿灣の風景もなか〳〵に見づらく、物の本歌の集其を繙くも懶く、長き日は睡らぬ夜に、睡らぬ夜は物思ふ晝につゞいて、婦人の嗜と鬢の毛一線亂さず、居常衣紋をば繕つて居れど、眞を語る鏡に瘠せ行く吾面の今日は昨日より色惡くなりまさりて、伯爵夫人の心は怪しく亂れ初めた。

熟々吾一生を顧み、世の中の事を思ひ合はせて、夫人は今迄に覺えなき謀叛の一念の急潮の如くさし來るを禁じ得なかつたのである。積善の餘慶、陰徳の陽報、其は聞きふるした所である。婦徳、女訓、其も守り來り行ひ來つて、一朝一夕の事では無い。辛抱も仕盡し、堪忍も仕盡した果は、あらぬ名を負はされ、此處に島流し同然の生涯を送つて居る。然るに非道の伯爵は平然と都に其邪な生涯をつゞけて居る。

私ばかり憐むお澄は、男兒までも生んで榮えて居る。のみならず女の節操を塵程にも思はぬ幾多の女は世に時めいて居る。邪な男は世に蔓つて居る。此れが果して世の中であらうか。若くは吾が執つて來た道は誤つて居るであらうか。吾母も吾祖母も、和漢古今の賢女と云はるる人の踏んで來た道が果して誤つて居るであらうか。腐れて邪なるは樂み、清うして正しきは苦む。苦むが積善の報で、樂むが積惡の果であらうか。抑も佐々倉子爵夫人が云つた通り、魂に堪忍が過ぎた故に良人を増長さしたのであらうか。女にばかり節操を守るの義務あつて、男に要むるの權ないのであらうか。而して吾にもあらぬ復讐の念は火の如く燃え起り、心はあらぬ方に迷ひ、眼は怪しく輝き、氷の如き微笑が唇に浮ぶのであつた。斯る時に

は、伯爵夫人は眼を閉ぢて、佛名を唱ふるのである。

夫人は昔から信心深き質であつた。其母は春日の神官の家から嫁いで來たのであつたが、此も信心深き質で、女の手に今も殘つて居る手文庫の中には、用ゐ馴れた小さな水晶の珠數が入つて居た。一乘寺村に住んで居た頃、大原の奥の尼寺に婦人あつて、京へ往來の度毎立寄つては母と話すを、傍見傍聽する貞子は世を捨てた其人品の淋しく清きをなつかしみ、白菊の一枝提げて鞍馬道の小石に足駄鳴らしつゝ大原の山深く歸り行く墨染の後姿見送つて、己もごつそりと黒髪剃りこぼち、あと追うて行きたき心地は常であつた。喜多川家に嫁いで後も、此上近きやんごとなき尼公の上京りて法話ある毎に、伯爵夫人は道子を連れて高壇近く清容を仰ぎ、妙音に隨喜の涙を流すのであつた。

併しながら、其信心は、一時心淵の騒立つ波を鎭むる油の效はあつても、其心の冷え切つた寂寥を温むる程の光熱をば導かぬのであつた。紫雲に乘つて九品の淨土に生るゝ未來の約束よりも、目のあたり心腹の苦悶を打明けて心から泣いて呉れる親身の顔が欲しかつた。さればこそ、京都にと思ひ込んで居た實弟の禰津子爵が思ひがけない來訪を侍女が報じた時は、死んだ母が魂魄になつて逢ひに來て呉れたかとばかり嬉しく、其弟が如何様な弟とまでは考ふる餘裕はなくて、疑ふ前に先づ喜んだのである。

（四）

侍女は簾を引き、燈を點てゝ退いた。下座敷の十疊に姉弟唯二人、外には雨が降りしきつて居る。

姉夫人のに着更へたらしく、女物のフランネルの單衣の袂を捲つて、胡坐かいた子爵は、寶石入の指環を飾つた白い纖細な指尖にちよつとつまんだ紙卷の碧煙を一吹吐いて怪しき笑を浮べた。

「ぢや些とも知らなかつたのですね、驚いて了ふ。月の世界ぢやあるまいし」

「何處からも手紙一つ知らして呉れる者が無いのだから——道理で彼兒から些とも手紙も來ず、佐々倉からも明瞭しない事ばかり、では其頃が病氣の絶頂でしたかねエ」夫人は吻と息ついた。

「併し先刻の樣だとうつかり話も何も出來はしない。喫驚しましたぜ」

「何もね、此頃は少しはツとすると直ぐ頭がふらふらするのでね——まあ宜かつた、最早大丈夫かしら。本當に、親には知らずに——あゝ一寸歸京つて見たい！」

「何ださうです、佐々倉でも道さんの病氣もあり是非あなたを呼ぶ樣にって、相談をかけたけれども、賢道氏がひどく機嫌を損したものだから、無理にしてもいけまい、加之醫師も大丈夫と云ふので、見合にしたさうです」

夫人は太息ついて居る。

「併し、何ですね、惡く云ふ樣ですが、喜多川——いや賢道氏位分からずやもありませんぜ何が御エライか知らんが、吾輩の顔さへ見ると、昂然と澄ますのです、何處の乞食坊主が來たかつて云はんばかりです。道さんを連れて行つた晩だつて然です、吾輩が折よく新橋で出會したればこそです、で無ければ道さんは如何なるか知れん所です。親戚の間だから恩にきせる譯では無いが、御位相當に云ふ可き所でせう。然るにですね、は、然ですか、有り難う、——其れつきり、何時歸つたかとも云はないのです。餘りと云へば人を馬鹿にしきつとるぢやありませんか。一體失敬な男です。大名丈に、人は皆辭儀して來る者と云ふ心得が除かんのですな。

吾輩は——

子爵が所説は皆事實であつた。併しながら子爵は、其後で伯爵に或無心を申込んで首尾よく刎ねられた一條を漏して居る。

「一體あなたを斯様な田舎に、病氣でも無いのに遣ると云ふは失敬極まる、妻の權理を蹂躙したものである。吾輩なら直ぐ離婚しちまふ——本當に、離婚しちまつたら如何です。再緣の口は幾箇もありますぜ」

うつとり考へ込んで居た伯爵夫人は愕然顔を上げた。

「何ですエ？」

「否、此様な田舎に燻つて居るより離婚が猶優と云ふのです」

「馬鹿な事を」

と云つて、伯爵夫人は心底から吐息を漏らした。離婚、自由の生涯、其を考へた事は、一年二年の事であらうか。情迫つては、良人の前に其を言ひ出でて良人の怒を倍したこともある。併しながら良人の家を死所と定めて來た身は、箱の中の白無垢にも恥ぢねばならぬ。其は猶可いとしても道子は如何なるであらうか。喜多川家の嫡女は、離別の母と共に去るを得可きものでは無い。假令然であつても、自分の苦痛を快とする伯爵は、故意に道子を押へて、渡さぬにきまつて居る。と云つて、自身一個の離婚も伯爵は決して許容しはしない。——其は過去の經驗によつて分かるのである、離婚の離の字でもほのめかせば伯爵は忽度と怒る、伯爵夫人は其源因を釋ねて、此は自分を縛つて蹂躙らなければ足が淋しいからであらうと思うて居る。所詮此狀態は死ぬる迄つゞく可き約束事で、自由になる時は息が切るゝ時、死なければ此束縛壓制は遁れられぬ、併し道子が慕ふかぎりは其に絆されて容易に死なれぬことと觀じて居る。

單衣に著き肩の細り、襟足のやつれ、半年經たぬ間に齢の四つ五つも重ねた面色の惡き其に引易へて、侍女が手際の此ばかり昔のまゝに雲を束ねた丸髷の美しきを子爵はじろ／＼見て、はゝはゝと笑つた。

「矢張貞女兩夫主義ですか。其は十年も二十年も昔の流行ですぜ。何有、夫婦なんてものは、どうせ合はせものの離れもの、會社も同樣です——都合が宜ければ繼續する、勝手が惡けりや解散してまた組直すでさ。實際あなたが斯樣辛抱しなすつた所で、誰が有り難いとも辱ないとも云ふ者はありはしませんからな」

夫人は默然として居る。

——だからです、離婚は如何ですと云ふのです。——は、女の道——舊いことを仰有る、其樣な道は此頃は最早誰も踏む者は無い、草が生えてますぜ。再緣の口は幾箇もあります、わたしが其樣云つちや可笑しい樣ですが、喜多川夫人の名は響いてますからな。論より證據、わたしが京都で知己になつた男です、大素封家、百萬からの身代ですがね——」

「あゝ最早止しなさい。馬鹿な事ばかり——わたしは離緣の心もなければ再緣の心なぞ猶更有ちません。其れよりも卿の身の落つき——卿何歳に御なりですか？」

「私？　私は馬齢こゝに二十五——未だ年は若いですよ」

夫人は眉を顰めた。

「本當に卿少ししつかりして下さい。二十五と云へば立派な男の齢ではありませんか——何時までも浪々して居て——」

「浪々はもつて生れたわたしが病です。何有、妻なんか邪魔なものです、錢さへあれば獨身が氣樂で宜いですよ」

（五）

「而して、卿は如何樣な心算で、歸つてお出で

すえ？」

「だつて京都見たいな屑々した處に居られたもんぢやありませんからな。碌でも無い奴輩に追つかはれて、陵墓ばかりいぢつてあるいて居るのは、隨分氣が滅入る話です。だから藤澤に手紙を一本呉れつけて、高飛と出かけたのです。其には計畫した事もありますからな」

「計畫つて、如何様な？」

「其は一寸一口に云へないですが――先首尾能く行けば、隨分儲かる口ですて」

伯爵夫人は氣づかはし氣に、自在に動く弟の薄脣を眺めた。

「卿の儲け話も、ふるいものですが、其れよりも梅津の名に此上疵をつけない様にして下さい。商人ではあるまいし、然お錢の事ばかり考へずとも、卿の心がけ一つでは恥を雪いで名を興す道は別に幾條もありませう」

「其は僕だつて何も生涯金ばかり溜めて居ようとは思はないのですが――何を云つても、金の世の中です、金が基礎です。あなたの様に大名の中でも金滿家の喜多川家の奥方でお出なされば、金は地から湧く様に思つてお出なさつても濟む様なものだが、僕の様な――何、世襲財産の一萬二萬、あつたつて使へるぢやなし、利子だつて知れたものでさ、其も碌々――だからさ、金儲の必要ありでせう。御覧なさい、帝室にだつてちやんと御料局があるし、十五銀行は誰のです？ 華族だから金儲が出來ないなら――否、最早よさう。到底金の世の中です。政治家の、學者の、威張つた所で、金が無ければ貧乏ゆるぎも出來やしない。賢道氏だつて、彼が一文無しの素寒貧であつて御覧なさい、斯う云つちや何だが唾もひつかける者はありやしないですぜ。金庫に金が唸つて居ればこそ、大概の吾儘は皆が大目に見るし、政治家の有志家の云ふ奴輩まで御辭儀をして行くでさ」

「其は正しい事なら――」

「不正な事ぢやいけぬと仰有るのでせう――無論です――は、彼ですか、何、彼は、ほんの一寸した事から、こんがらかつて、終彼様云ふ事になつたのです。何、僕もまさか詐欺取財をやる程向う見ずぢやありませんよ」子爵は呵々と笑つた。

「でも世間では然大目には見ないからね、だから何卒氣をつける上にも氣をつけて、――また彼様な事があつては最早浮ぶ瀬が無いのですからね、本當に彼世に御出の御兩親の事も思つて些は氣をつけて下さい」

兩親の面影殘る弟の顔をうちまもつて、伯爵夫人は眼を拭つた。

親身の顔を見たらば、少しは心の慰安になるであらうと思つた其は空賴に過ぎなかつた。會つて見れば、藁一筋の賴にもなりさうに思はれぬ輕薄者、此れが世間に唯一人の骨肉の弟かと思へば、伯爵夫人は今更に切なき身の寂寥を感ずるのであつた。

子爵は平然煙を吹いて、綺麗に爪を剔つた小指の尖で耳の穴をほぢつて居る。耳新しくもない、また例の説法か、と謂ふので。

「而して卿が計畫してお出のは、如何様な事ですか」

「は？ 計畫？ ――僕の計畫――其、其は何です、一朝夕には云はれないですが――何、決して不正なんか其様な事ぢやありません――何、心棒はあるですて。先刻も一寸お話しかけた素封家ですね、百萬以上と云ふ身代でね――は、其男ですか、京都でつい知己になつたのです――否、本當の事、今其件について出京して居るですて。――所で、何です、其男は京都で世話にもなつたし、實は種々相談もあつたので、僕がですね、僕が東道の主となつて、實は塔の澤に遊びに來たですよ。然るにですね、些

遊び過ぎて、水の手をきらしちまつたんです。何有、百萬以上の身代ですから、百や二百の金はおいと云へば呟と投出すのですが、大將に出さしちや面白くない事があるんです——」

「其で來たのですね」

伯爵夫人は太息した。

「何、其ばかりぢやないですよ。夙から來る心算で居たのですが——併し弱つた、實際弱つたです、大袈裟に出かけちやつたものだから」子爵は呵々と笑つて、姉夫人を見た。

夫人は考へ込んで居る。

「噓ぢやありません——斯、斯の通りですからな」

子爵は起つて床の間の紙入から一枚の紙片を取り出したが、不圖氣づいて其一端を引裂いて、餘を姉夫人の前に差出した。

併し夫人は其方を見もやらず、猶考へ込んでゐる。

「弱つちやつた——都合が出來ませんかな、百——でなければ六十でも七十でも宜いですが——」

「知りません」伯爵夫人の落ちたる頰の邊紅潮して、子爵に注いだ眼には涙を透して異樣の光がかゞやいた。知りません。何處ぞ他所の姉を探して御賴みなさい。子供ではあるまいし、其は餘り恥を知らぬと云ふものです。卿の御蔭では從來何程面目を失つて居ますか、些はわたしの身にもなつて下さい。お錢と云つて、一錢も有つわたしですか——何の爲めにわたしが此處に斯して居るか、其を思つたら、兄弟の情として見舞狀の一通はよこして呉れても宜い所です。卿の眼から氣樂な保養に來て居ると見えるか知りませんが、わたしには最早苦勞は十分です——、加勢をして下さいとは賴みませんから、何卒斯上に責苦をかけないで下さい」

（六）

梅津子爵は額膨らした。

「ぢや出來ないのですな。出來ないなら出來ないで宜いですよ、出來ないものを無理に出來して下さいとは云ひませんからな。はゝはゝゝ、箱根を越した結果が此か。いや御意見は有り難う、と云ひたいですが、併し此までわざ〳〵御意見を聞きには來ませんよ。いや御苦勞さま、御蔭で面目玉も癇癪玉も首尾よく潰れさうだ。おや最早僕は歸ります。塔の澤のやつ等が待つてますからな。おや御ゆつくり——」

「——御待ち——御待ちなさい。其では卿ゆすりいも同樣ですよ」

「——僕がゆすりい、ゆすりい？　僕が？——」

「——其樣な大きな聲を」

「——大きな聲が惡いですか。何も不義密通ぢやあるまいし、貧乏な弟が金の有り餘る姉に無心に來るのは當然です。宜しい、ゆすりでもかたりでも何とでも御云ひなさい。僕なんざ阿爺阿孃には早く別れる、世間にたつた一身孤ですからな、あなたまでが惡黨視すれば、十分です。宜しい、惡黨でもゆすりでも何でも構はん、僕は僕の分別があるです」

呆れ果てて、不興氣な弟子爵の顏をうちまもつた伯爵夫人の眼は忽ちはら〳〵と涙をこぼした。

「氣にさはつたら堪忍して下さい、でなくても、此頃は毎日胸がさけさうにつらい思ひをするのですから、些は思ひやつてね。でも、わたしが言ふ事に無理がありますか、ありますまい」

「無理はないですとも、無理もなければ金も無い、其れでは誠に仕方が無いと云ふものです。惡黨なら惡黨で宜しい、僕も眞正の惡黨になつて御目にかけます。ゆすりをします、眞正の。思ひやりが無いと云ひなさるが、僕がです、僕が信用を落すか落さぬかと云ふ大事の場です。其に五十や六十の金が出來んなぞ！　あなたこ

そ思ひやりが無い」

「卿は何も知らないのですね。五十六十は何でも無いと思つてお出か知りませんが、先刻も云つた通り、一錢のお錢もわたしの手にはありません。皆家扶から家從へ送つて來て、一厘のお錢も帳簿にちやんとつけるのです。恥を云はねば分かりませんが、麻布の時は猶然でもなかつたのですけど、此方へ來てからと云ふものは其はひどい――田舍は物價が廉いと云つても其はひどい――家從から其樣云つてやつても御前の御命令だからと云つてね」

「其れなら賢道氏に談判したら宜いぢやありませんか」

夫人は頭を掉つて情無げに熟と弟の顏をまもつた。

「其れなら離婚して好きな家に嫁くが宜いですよ」

「失禮な事をお言ひなさい。梅津の嫡女に其樣なさもしい事が出來ますか」

「だつて伯爵夫人が小使に差支へると云ふ話が、何處の世にあるものですか」

「でもまさか飢ゑると云ふでは無し――加之最早其中にはかたがつくのでせうから」

夫人は淋しく打笑んだ。

子爵は礑と小膝をうつた。

「僕にお任せなさい。其かたをつけて上げますぜ」

「如何かたをつけるのです?」

伯爵夫人はやゝ驚いて問うた。

「賢道氏に談判して、あなたの待遇法をあらためさす手段を取るのです」

子爵は怪しき笑を浮べる。

伯爵夫人は首を掉つた。

「無駄ですよ、其が出來る位なら――」

「無駄と云つて抛擲かして置いたら際限が無いぢやありませんか――僕にお任せなさい、惡い事はしないから」

「如何話をするのです?」

「如何つて――其は適宜な手段をとるですよ」

「卿が!?」

「何、僕だつて萬吏――知己に法律家もあれば、新聞記者もありますぜ」

伯爵夫人の面には不安と疑惧とあらはれた。

「まさか閨の恥を世間に曝す樣な事はしますまいね――否、最早何も止して下さい。此れがわたしの運と思へば、誰を怨むこともありません。死ぬまで默つて辛抱すれば、其で宜いのです。其が婦人の運命なのですから――でも、わたしは女ですが、卿はわたしとは違つて梅津の家を立てて行く大事な體ですからね、何卒わたしが一生の願ひですから、しつかりして下さい、で無ければわたしは死んでも阿爺阿孃に申譯がありません」

「だつて馬鹿々々しいぢやないですか」

伯爵夫人は良久しく沈吟じた。

「卿は何時東京に歸る心算です?」

「金の都合さへ出來りや直ぐ塔の澤を引揚げるのですが――」

「ではね、わたし別に何も頼む要はありませんが、卿が行くなり、佐々倉に頼むなりして、唯つた一日、二日とは云はないのだから、道子を一目見せて下さる樣に、其もわたしの顏が御忌なら佐々倉の家までで宜いのですから、何卒道子に唯つた一日で宜いのですから逢はして下さる樣にね、――手紙では盡しもしまいし、何だから、何卒骨を折つて下さい。宜うございますか、其他の事は一句も云つてはなりません」

「併し軍用金が無くちや戰爭は出來ないですよ」

伯爵夫人は太息した。

折から侍女が風呂の加減の宜しきを報じたので、子爵は足のしびれを撫でて座を立つ。

（七）

「御免を蒙りまする」

子爵が浴室に立つたあとに、恍然考へ込んで居た伯爵夫人は驚いて面を上げた。六十有餘の、泣顔した男が閾の際に畏つて居る。

此は家從の鎌田と云つて、堅いのと好釣を以て名高い男、其れ故夫人のお伴を命ぜられて、此漁村に生活の快を見出す唯一人となつたのである。

孤客僮僕を親しむと云つた樣に、人なつかしいのが一倍の今日此頃、併し伯爵夫人は主從の分をば何處までもきちんと正して、分けて男子は、頑直鎌田の如き老漢子をも心をゆるさないのであつた。鎌田もよく心得て居る――のみならず、自然と夫人に具はつた品位は、伯爵が折に觸れての怒罵叱咤よりも下々を制するの魔力を有つて居た。

「只今東京から使がございまして――御前が遠からず御出になるさうでございまする」

伯爵夫人は眼を瞠つた。

「御前が？――御一人で？」

「いえ、房子樣に芳子樣、其れから其――何も御一處ださうで」

夫人は暫らく沈吟じた。

「手紙がありますか」

鎌田は懷中の一通を差出して、舊の座に復した。手紙は家扶から鎌田へ宛てたので、暑くなり次第伯爵が行かるゝ筈だによつて、其準備をして置く樣に、と云つてある。恰も前々日であつた、香貫のお隣が父親なる者が伺候した次に、娘も其中來る樣に云ひ越しまして、と云ふ樣な事を云つたが、正に符合する。

伯爵夫人は滿面に喜色を浮べた。自己の處置は何とも云つてないが、無論伯爵の一行と更代に歸京することになるであらう――別莊は比較的に狹い方ではあるし、伯爵は否顏見るも嫌なのだ。お隣が伯爵と新婚旅行めいた其見せつけがましい來遊を口惜し忌々しと思ふよりも、伯爵夫人は先づ道子に歸り得可き機會の近づいたのを喜んだ。併しいつそ歸る程なら一刻も早いが宜いのである。病兒も無逢ひたがつて居るであらう。頼みにならぬ弟でも、此方の事情を佐々倉まで通じ、折よくば良人に頼んで歸期を早める位の事は出來さうなものである。

伯爵夫人は速やかに心を決した。

一夜を京都住居の昔がたりに珍らしくやゝ賑やかに過した明朝、梅津子爵は伯爵夫人が苦心の結果の二十圓を不承々々に懷に收め、良人に一通、佐々倉家に一通の夫人が手紙と白鯛の菜になれかしと心を用ゐた道子が平生嗜好の甘鯛の田麩の佃物とを携へて、立つて了ふ。

別莊の生活はまたもとの單調な寂寥に復つた。

第十一章

（一）

梅津子爵は空氣を吸ひ嘘を吐いて生活する人である。駄法螺は子爵の醫す可からざる癖となつて、左も無い事まで嘘の色彩を加味しなければ胸が濟まぬと云ふ有樣である。況して必要に際しては、眞赤眞白五色の嘘をつくのは、下世話に所謂朝飯前だ。某の金滿家の爲めに東道の主人となつて子爵が彼男を招待したのと云ふは、根も葉も無い架空談であつた。實は浮浪仲間の甲乙と、互に他の懷中を當に箱根遊と洒落たが、水の手頗る怪しくなつたので、まだ惡黨には若い方の子爵が嗾かされて、姉を訪らて金策と出かけたのである。で、子爵が塔の澤にかへると、伯爵夫人が苦心の二十圓は忽ち妾者と化け酒と化けして、道子が病床の

饌に上る筈の彼曲物の田麩は、蘚の黄ろい婢が舌に上り、伯爵夫人の手紙は何時までも子爵の衣兜に殘つて居たのである。忘れつぽい子爵の頭腦に、伯爵夫人が門前まで送り出でて幾度か賴み聞えた其言葉の節々は、三島を指す車の路の一里とは殘つて居なかつた。

欺かれ〳〵した伯爵夫人はまたも其手に乘つたのである。

子爵が出で去つて四日五日早くたつたが、子爵から手紙の一通も來ず、良人の伯爵からも、佐々倉からも吉凶共に音の沙汰も無い。今度こそは吉報があるであらうと潛かに信じきつて、歸れの電報を夢み、許すの返翰を待ち、何時になく心騷立つまゝに出立の用意も整へ、侍女にも其意を漏らして、いざと云はゞ直ぐうち立たん準備はとく出來て居たが、東都のたよりは一向に來らぬ。

伯爵夫人は怪んだ、疑つた、恐れた。道子の病が急にまた重つたのでわざと便が無いのではあるまいか。其とも彼弟の困り者がまた曲事を仕出したのではあるまいか。追かけて、良人に懇願の書を出した。佐々倉夫人に返詞を促した。而して名ばかりの樣ではあれど猶弟の住居と門札は掛つて居る筈の根岸の某番地と念の爲め塔の澤の某樓へも督責の手紙を出した。併しながら何處からも一行の返事だに來らぬのである。

待ち草臥れて、悶えて、久しく鬱した伯爵夫人の心は怪しく亂れた。

（二）

一お上樣、雨も止みましてございます。些お庭へでも、お出遊ばしては如何でございます一

忠義顏の侍女が言葉に、手紙書きかけて考へ込んで居た伯爵夫人は、筆さし措いて、庭に下りた。

日毎に雨の音、波の響のみ聞いて籠る一間の神代杉の天井は潰れよとばかり只管に頭を壓し、唐草模樣の襖は出ださじとばかり取圍む宛ながらの獄裏に、起ちて案じ居て悶ゆる其よりも、外は流石に少しは寬ぐ點もあつて、冷々と面を吹く風、宿雨を含む石榴花の青葉が中に焰の雫ゆり落すも眼ざむる心地するので、伯爵夫人は洋傘をとらせ、しつとり固まつた砂地を庭下駄に刻んで、侍女と打語らひつゝ濱へ下りた。

雨は止んだが、梅雨天の雲八重に二十重に渦まいて、晴日には手に取る三保、久能の翠碧も茫とかきくれて居る。潮の香の吹き散る濱邊には、廢船の一二隻、雨水溢れて砂に埋れ、濁れる心の穩ならぬ海の面、漁舟一隻目に入らない。狩野川の水增して、川口のあたり濁波頻りに立騷いで居る。

恰小さな樽樣のものが川水に押流されて來る。伯爵夫人の眼は器械的に其あとを目送つた。矢を射る如く川口へ來ると、寄する波と押す流に揉まれて、立つ渦に吸ひ込まれたが、またぽつかり浮出でて頻りと波間にもがいて居る。伯爵夫人は寒戰して、眼をそむけた。

「お寒くはいらつしやいませんか。――お待ち遊ばせ、一寸お羽織をとつて參じます」

急ぎ足の侍女があとより、伯爵夫人も徐に步をかへしたが、別莊の裏門をば入らず、行くともなく沼津道をぶら〳〵辿つた。雨に倦いた村の子供の幾人か、少しの晴間を遊びあるいて居る。其中に負つた子をゆすりながら女の兒が、

一――千本松原、小松原、松葉の數よりまだ可愛い」

と歌つて居る。

見れば、大きな足駄をはいて、鉢卷した八歲ばかりのやゝ剽輕な女兒。伯爵夫人たゞ見ると、

莞爾笑つたが、夫人が行き過ぎたあとから、

「松葉の數より――」

とまた歌ふ聲が聞えた。

松の雫のほた〳〵落つる下に佇んでふり顧る伯爵夫人は忽ち堪へ難いなつかしさの總身にしむを覺えて、ほろ〳〵落涙したのである。

「逢ひたい！」夫人の心は血を吐く聲で叫んだ。

二十六七年も昔、荒神口のほの闇い住居で母の手に擁られて――半夢心地に母も聞いた其も、彼無邪氣な唇を漏るゝ子守歌に似通つて居た。馴れぬ己が手に道子を擁つて歌つた節も同樣である。

「おや、最早お歸り遊ばしますの？」お羽織を持つて參じましたに一侍女は驚いて居る。

「また出直しませう。少しね、要もあるから―

侍女は夫人が何時になく顏も熱して、急ぎ足の理由を解さなかつた。

座敷に歸ると、襖をしめきつて、伯爵夫人は手文庫の中から寫眞を取り出でて、何時までも眺め入つた。一は臨終の數ケ月前に撮つた母の寫眞、四十五と云つても十歲も老けて、長い間窮乏ぐらしを立て通して女を無事に嫁づけた其安心の笑と共に何處やらがつかりとした氣はひが見ゆるのも、夫人には涙の種である。九歲の年に父を喪つて、喜多川家に嫁ぐまで十年あまり母の手一つに育てられ、しつけられて、云ひ盡されぬ母の苦心を見聞いた夫人には、親とし云へば母の事のみ直ぐ思ひ起すのである。今一葉は去年の春撮つた道子ので、常服のまゝながら、例の餘りに眞面目な其とは違つて笑を含んだ面影の、幼くて其は愛らしい。

夫人は掌にのせて長く〳〵眺め入つた。手文庫から大きな文字で書いた道子の手紙を取り出でて讀むとはなしに眺め入つた。濃い眉、眼の清き、言ふ時頰の紅らむ、怒る時唇の緊く結ぶ、笑ふ時乳靑の愛らしき、明瞭したものの云ひざま、張のある其聲音、思ふ程戀しさは身を切るばかり。死なければ母には會はれぬが、吾子は唯二日路を隔つるものを。

「歸りませう。何と仰有つても歸りませう―此冷やかな、言はぬ、紙の上の幻で滿足が出來ようか、病あがりの瘠せきつた軀を此膝にかき抱いて、此唇の熱で冷えきつた其色の蒼白きを淡紅に復さねば此心の渇はやまぬ。

「歸りませう。何如樣な事があつても歸つて彼兒に逢ひませう」

何如樣に逢ひたがつて居るであらう。其を思へば、何を待ち誰に憚つて今まで遠慮をしたのであらうぞ。喜多川の妻ではあれど、道子が爲めには母である。良人の許を待たなくも、吾子の顏見られぬ道理は無い。

「歸りませう、明朝立ちませう―

而して夫人は驚く家從、訝る侍女を喚んで、直ちに歸裝を整ふ可く嚴命した。

（三）

家從は驚いた。愼み深い女主人の擧動としては、誠に受取れぬ話と駭いた。東京の御許諾も無いに御歸りあつては御前の御瞋怒も恐ろしく、第一御傳役を承る此老人が手落になる道理、兎も角も東京の御沙汰を御待ちになつた上で、と例に無い手强く反對をした。併し伯爵夫人の權幕も例に無く鋭いのであつた。伯爵ばかりが其方の主人か、此程に理を分けて云ふことを聞かずば、暇を遣る、直ぐ歸れ、其れとも沼津を動かじとならば、隨意に別莊の番をするがよい、一人を連れて歸ります、と言葉靜かに色も眼立つ程變らなかつたが、思ひ定めた眼の中に爭ひ難い光あつて、家從は太息と共に唯畏れ入つた。

併しながら宛ながら天も伯爵夫人の歸京を沮

むかと思はれた。其間の小聲は暴風雨の息づきであつた。天氣が危いものと、出入の車屋が雲行怪しい空を眺めて、明日の車を命じに行つた喜多川別莊の使の者に云つたが、果然、近頃絶入も欲しかつた寄寒は日暮方から蒸籠に蒸さるる怪しい暑さに換つて、氣味惡い程寂然した中を海鳴の時を作つて響き渡つて居たが、九時過ぐる頃、南面の雨戸四十幾枚一齊にがた〳〵と鳴るを相圖に、暴風雨となつた。

十二時頃、あまり劇しいので、金に飽かし手を盡した普請、滅多な事もあるまいではあるが、下に御移り遊ばす樣に申上げて、と家從が注意で侍女の金が二階の寢間に伺候すると、洋燈が晃々とついて居て、伯爵夫人はぢいと燈下に端坐して居る。

「あつ、お上樣——未だ御寢遊ばさないのでございますか」

「ひどい暴れ樣だこと——未だ夜明ではあるまいの」

「唯今十二時うちましたばかしでございます」

「此方は宜しいから、下へ行つておやすみ。明日が早いから」

「あつ、明日矢張お立ちでございますの？」

「ほゝゝゝ、暴風雨が恐いかエ？」

侍女は色を喪つて匆々に下りて了ふ。

天明近くなつて、風はをだれて、凄じい暴雨となつた。徹夜の警戒に疲れ果てたお金が夢の中に名を呼ばれて纔かに眼を開けば、枕頭に眞蒼い顏の伯爵夫人が立つて居た。髮は綺麗に撫でつけて、薄色の合衿の紐をきちんと結んで居る。

昨夜來の大風雨さへあるにつひぞ見たことのない女主人の尋常ならぬ容子、喜多川別墅の眷族に動顚した。

暴風は殆んど止んだ。止んだが雨は加一倍の勢で降つて居る。細目に雨戸を開けると、煙ぼい、雨横さまにしぶいて、十歩の外は濛々として眼も届かぬ。閉めれば、戸を挟つ音、荒海の寄する響、百千の互砲小銃を連發する樣に、高聲で無くては話も出來ない。今し方御見舞に來た肴賣の老爺が話によれば、狩野川の橋が落ちたさうな。我入道の村だけでも大分潰れ家も、流失した舟もある。此方の御屋敷でさへ、瓦が落ちる、垣が倒れる、植木も大分損じて居る。斯う騒ぎに、車と仰せ有つても、車が一挺も手に入りませうか。假令三島まで御出になつても、箱根を如何して御越しになりまする。今日一日、せめて今日一ぱいは御待ちあつて、晴天にならば明朝でも。

家從は言を盡して爭つた。東京が戀しくて溜らぬ侍女すらも切に諫める。

爭ひかねて、伯爵夫人は今日の出發を延ばした。氣を利かして、侍女が臥床を設けたので、疲れきつた頭を横へたが、夫人は一場の惡夢を夢みた。

夫人は一人濱に立つて居る。天涯に暴風雨を孕んだ眞黒の雲が渦まいて、海、沼津の——は荒模樣を示して居る。遙かの沖に黑い岩が一つ、白衣の女兒が其上に立つて居る。其は蒼白い顏の道子である。夫人は驚いて、聲を限りに呼ぶ——聲は出ない、手をあげて招く。あゝ嬉し、道子が此方を見た、氣がついた、笑んだ、兩手をあげて招いて居る。あつ、危い、早く、早く、——併し舟もない、人も無い、夫人は足ずりして藻搔いて居る。不圖手をとつてずうと導く人がある。母だ。夫人は驚喜して導かるるまゝに淺瀬の岩を飛石の如く飛んで行く。道子はいよ〳〵手招きして居る、もどかしがつて——あ、危い、今直ぐ行きますよ。併し一歩も足が動かぬ。見れば大きな章魚が足をからんで居る。見る〳〵怪魚の頭が喜多川伯の顏になつて、呵々と笑ふ。夫人は身柱立つて、救を呼

ぶ——母様、道子、助けて〳〵。併し彼怪魚はます〳〵夫人を岩の間の深潭に引き込む。潭の水は氷の様だ、手もしびれる、足もしびれる、今一目と思つて道子を見たが、頭は最早水に沈んで居る、藻掻いても最早駄目だ、次第に深く、深く沈んで行く、最早眞闇——呀。

夫人は不圖身を起した。枕邊近く侍女の金が大きな封筒を持つて、膝をついて居る。

「御眼覺め遊ばしましてございますか　ま、御汗！　如何遊ばしたのでございます？」

夫人は額の汗を拭き、胸を撫でて吻と息をついた。

「夢を見てね、——其は？」

「ま、あの東京から御状が參りましてございますが、悉皆濡れてましたので、あぶりましたら斯様に焦がしちまひまして」

（四）

彼一封を取つて、伯爵夫人の胸先づ轟いた。絶えて久しい良人の手蹟、此重い封筒の中に果して何が籠つて居るであらう乎。侍女が床を收めて去るを待ちかねて、わな〳〵手に封を劈くと、細かく折つた一葉の新聞紙と、書翰の一片が露はれた。夫人は先づ書翰を披いた。

賢女の仕打と云ふものは斯様なものなりや。道樂者に良人を脅迫させ、猶其上に他人に對し良人を悪ざまに云ひふらし、剩さへ新聞紙上に喜多川賢道の名譽を傷つくるに到つては、實に言語同斷、昔なら手討にしても竹鋸びきにしても猶足らぬ所に候。實は離別と思ひたれど、併し離別はせぬ、歸京は猶以て許さぬ。否、許す、良人にあはす面目があるなら許す。よくも厚顔しく歸京などと云はれたもの、良人の顔に散々泥を塗りながらよく〳〵賢女の面皮は厚いものと今初めて知りたり。道事は御心配御無用、父も在ればお隅と云ふ母もある。御懸念に及ばず。道には會へぬものと思ひ、氣永く後生でも願はれべく候。其方が生きて居る間は、喜多川は沼津に足踏せずときめたり。特別の寛典を以て別莊は貸し遣はす、まさかに餓死もさすまじければ、ゆすり、毒づきは大概にして、おつとして居よ。二度と斯様な事があらば、其時こそ容赦はせぬ。

此の喜多川も賢女を妻にもつた御蔭で首尾よく世間に恥をかきたり。御恩の程は生々忘れ不申候。

月　日　　喜多川

沼津の

ゆすり賢女殿

猶々喜澤儀も壯健に候

解しかねて三四回同文を繰りかへしたが、新聞を廣げて朱點を施した一項の雑報を見るより、伯爵夫人は顔色を變へた。

喜澤伯の事を諱む御用新聞でもなければ、喜多川伯に縁故ある在野の新聞でもなく、新聞條例の密網を潛つて好んで上流の隱微を訐く小新聞が、「非道の伯爵」と題して、喜多川伯家庭の内幕を遠慮會釋もなく摘發したのであつた。伯爵夫人の身の上は恐ろしきまで細かに穿つてある。

伯爵夫人は總身火の如くまた氷の如くなるを覺えた。「如何して此様な事が」と問ふまでもなく、杳として分からなかつた弟子爵の消息が忌はしきまで明瞭に此裡によまるゝのである。

彼新紙と手紙をしかと懐に藏め、突と立ちて、伯爵夫人は家扶を呼び、橋落ちたらば舟で沼津へ渡つて、明日歸ると云ふ電報をうつ可く命じた。喜多川伯に一通、佐々倉家にて道子に一通。

「ではいよ〳〵御歸京になりますので？」
「槍が降つても明日は立ちます」
「え丶先刻御狀の趣は――」
「歸つて來る樣に――然云つてね――」
家從は訝し氣に仰ぎ見た。
伯爵夫人は笑つて居る。
まご〳〵して居た家從は、終に叩頭して出て行つた。

（五）

午後になると、雨止み、外面も大分靜かになつたので、今日を暮らし今宵を明かす外に要とても無い伯爵夫人は、家從侍女等が何角と忙しい間を、ぶらりと濱に出た。

風雨は過ぎて了つたが、空は猶八重雲を被つて、海の怒號も未だ止まない。我入道の方には、頻りに人が騷いで居る。併し川口のあたりは人も無く、打ちあげた松の枝、舟板の類が半砂に埋れて居る。伯爵夫人は歩むともなく歩んで牛臥山の海に入る端に立つた。

子供の子守歌にある彼千本松原を右に、伊豆の大瀨岬を左に、近く遠く見るばかり、餘の陸影は茫とかき消えて、無邊の海の足下近く寄せて碎けて白雪を散すのである。伯爵夫人はやゝ久しく海の面を眺めて、磯に立つた。恰も半町程前に大きな岩が峙つて、頻りに波をかぶつて居る。伯爵夫人は今日の夢を思ひ出でて、岩の上を見つめた。其處には白鷗の二三羽がとまつて居るばかり。夫人は恍惚となつた。

不圖氣づいて、懷の新聞と伯爵の來狀を取り出で、器械的に廣げたが、讀むでもなく其を引裂いては丸めて棄て始めた。寄せては返す每に、波が其白き紙片を奪ひ行くのを夫人は心地よげに眺めて居る。偶、其一片、小岩の間にはさまつて、波の手を漏るゝのを、夫人は俯いて拾はんとする。

「あぶねえでがすよ」
繩の帶して、拐のさきに棕櫚繩の圈をつゝかけて立つて居るのは、彼魚賣の老爺であつた。
「へい、今日は。大いしけでございました、へい。――へゝ、へい、有り難うございます、何の、七十年から海で育つた御蔭で、昨日來の暴風雨はちやんと二三日前から見込をつけて、はや、生簀もあげて置きますし、屋根が少々何したばかり、へい」
「今日もお肴を賣りに出たのかエ？」
「否、――何、肴はあるでがす。ちやんと生簀にしまつてあるでがす。黑鯛に赤鯛――無いものは腐つた魚ばかし。奧樣、何ぞ持つて上りますかな」
「左樣、老爺の魚を買ふのも今日限りだから」
「へ？」
「明日は歸るよ、長々世話になりました」
「へ、へい。明日御歸りに、へい。先刻は何の話も聞かねえだつたが――へい」
「達者で居てお呉れ」
「へい、有り難うございます。へい、明日御歸京、へ――い」
「老爺は七十八とか云つたね、血族も何も無いのかエ」
「へい、一人ぼつちの氣樂な體、へい。男子が一人あつただが、ちやうど昨夜の樣な風雨に、松魚釣りに出て居て、舟が顚覆つて死んでしまつただ。何、三十年から昔の事でがすよ」
伯爵夫人は七十餘年の風雨を淩いで巖乘な老爺の顏をぢいと眺めて居たが、
「何を樂に然働いてお出かエ？」
「樂？――左樣、酒も少々は戴きますが、澤山は飲まず、賭博は嫌、信心もせず、金を溜めるぢやなし、先稼ぐが樂でがすかな。面白エたつて、つまんねエたつて、生命がありや生きて居んなけりやなんねエから、まあ稼いで生

きて居るでがすよ—

「其で生き甲斐があるのかエ？」

—甲斐があるたつて、無えたつて、其が世の中でがすからね。魚は泳ぐ、人間は挊ぐときまつたものでがすからな。つまんねエと思やつまんねエし、面白エ世の中と思や面白エし、先小言云はねえで、挊いで、死んだら地獄でも極樂でも好きな處へやつて貰ふでがす—

伯爵夫人は太息した。

—如何樣な結構なお方でも、其相應の苦勞はあるでがすからな——辛抱が大事で、辛抱が——應、今行くだ（彼方から老爺を呼ぶ聲がしたので）——では後で魚をもつて上ります。最早上汐でがすから、此處は危えでがすよ。へ——い、明日御歸京なさるで—

何か呟き〳〵老爺は辭儀して行つて了ふ。其老いて嚴乘な後姿が、しばらく凸凹の岩に見え隱れして居たが、やがて岬角を廻つてしまつた。

（六）

伯爵夫人は猶何時までも磯に立つた。

風雨に過ぎたが、夕近き空の雲低く漂つて、一縷の光だに漏れず。風雨の攪し去つた海は千丈の底から濁つて、轟々と鳴るばかり、白帆の影も飛鳥の影も絶えて居る。思ひつゞけて眼を駛す遠見の果は、灰色の空濁れる海を壓へ、唯昏く、唯重く、何處に活路の通ふとも思はれぬ。

寂しい、切ない、果敢ない感が、冷油の如く總身にしみ渡る。

ふら〳〵として岩の端に出た。さし來る汐の花が颯と面にかゝる。夫人は戰慄した。かすかに唱名して、逃るゝ如く岩を下りた。俄かに、淋しく、人戀しさの禁へ難くなつた。

別莊に歸ると、襷をはづして侍女の金が手をつかふる。

「御歸り遊ばせ。何方へ行らつしやいまして？」

侍女がいそ〳〵と嬉しげな容子を、夫人は訝し氣に眺めて居る。

「あの、御車は何時に致しませう？」

夫人は怪訝の眼を瞪つた。

「車？　何の車かエ？」

「あれ、御上樣、御戯談仰有つて——明日召します御車でございますよ—

「あゝ左樣、車——左樣、車、車は早いが宜いね—

「其れからあのお召物は最早あらかた仕舞ひましてございますが、御手文庫や何かは、何ひました上でと思ひまして——」

「宜しい、其はわたしがしまひます—

其れから夫人は髪を結つて、沐浴して、形ばかりの夕饌に向つて、侍女が持て來し洋燈のかげに手まはりの小道具を片づけ始めた。

「奥樣は如何か遊ばして いらつしやる のですよ—

其夜夫人の臥床を設けて下りて來た金が家從に囁いた。

「何故？」

—だつて、彼小さな御手文庫一つを二時間も三時間もかゝつて未だしまつていらつしやらないのですもの—

「道子樣に御逢ひになるのが御嬉しいのだな」

家從は大息ついた。

九時頃洋燈を行燈にかへに侍女が二階に行つて見ると、夫人はすや〳〵と眠つて居る。十時頃には家内殘らず夢に入つた。沼津の夜は次第にふけて、海の響が高くなつた。

（七）

寂然した喜多川別墅の夜を驚かして、下の柱時計が午前二時をうつと、二階の座敷で伯爵夫

人貞子はふつと眼をさまして起き上つた。

枕頭の行燈の灯影ほのかに殘つて、四邊は森として居る。

其灯影を眺めて、何事をか思ひ出でん〳〵と努むる樣に、伯爵夫人は長く〳〵沈吟して居たが、やがて衣桁の衣服に寢衣を更め、ちやんと帶を結んで、臥床を收めた。

蒸し暑い夜だ。

夫人は縁と西側の脇かけ窓の戸を一枚繰り明けた。外の夜も蒸暑く、空氣は靜まりかへつて、そよとの風も動かず、薄闇い海と空の間に、血の如く眞紅な月が傾きかゝつて居る。

窓に肱をよせて、伯爵夫人は何時までも此月を眺めて居た。頃日來の風雨の騷ぎは止んで、凄まじい寂寥にかはつた。夜と共に悶ゆる海の呻吟も、此寂寥を添ふるのである。

やがて彼血紅色の月は見る〳〵沈んで了ふ。四邊は眞闇くなる。

伯爵夫人は戸をしめ、かき立てた行燈の蔭に暫しつくねんと灯影を眺めた。味氣ない其一生が、雷の如く眼の前を閃き過ぎた。嗚咽の如き響が脣を漏れた。併し夫人は涙を流さなかつた。突と立つて、行燈を床の間近く移して、鬱金木綿の包を解いて、靑貝ずり梅花模樣の手文庫を開けて、手紙、寫眞、古今集の寫本種々のなつかしい物の中から水晶の珠數と松竹梅を縫箔した母が嫁入の袿を取出し、最後に一口の懷劍を取り出した。

耳を澄すと、四邊は森として居る。

「何と云ふ永い夜だらう！」

夫人は心から漏るゝ欠伸を袂に包んで、ぢつと眼を閉ぢた。

何處でか海の響の間を縫つて鷄が一聲鳴いた。

夫人はふつと眼を瞪いて、彼水晶の珠數を左の手首にかけ、彼袿でしかと膝を包んで、黑塗の鞘を拂つて、氷を欺く刃尖を熟と眺めた。

再び鷄の聲が聞える。

「あ、最早黎明さうな」

斯く呟いたが、其幽な聲の消ゆる時は、伯爵夫人は兩の手にしかと握つた懷劍の切尖に突伏して居た。

第十二章

（一）

銀座通りの某店の大時計が午後の八時をうつ時、唯有る横町の薄汚い新聞社から二人の洋服が低聲に話しながら出て來た。

「併し吝な野郎ぢや無いか。うんと云ふ程機密費をかゝへて居ながら、千や二千の目腐れ金た、やつも餘程耄碌したな」

「例の吝嗇屋だからな。併し少許は皆無に優るさ——だが、木下が如何程あがいたつて今度は駄目だぜ、蜂の巣打破した樣な斯樣なぶまな事をやつて、始末がつくものか。小日向あたりで手を拍つて喜んで居る者があるさ」

「大井田はずるい。今に見玉へ、一同を出しぬいて大飛躍をやるぜ。土屋一輩が嘸怒るだらうな。彼樣な馬鹿正直は度す可からず。土屋なんか最早宜い加減にして政界を退くが宜い、由來政界に正直漢の成功した例が無い」

「ぢや君の如きは確かに成功者の資格があるな」

「君だつて餘り不成功の方でもあるまいぜ」

苦笑して、二人は默つた。やがて新橋にかゝる。

「如何だ、乘るか」

「何、歩くさ。——併し何だね、君、其土屋は馬鹿だが、土屋の新聞は一寸氣が利いて居るね」

「然だ、左樣、々々、彼ね、彼新聞に出した英國通信ね、條約改正を論じた、彼は、聞いたが、

何だそうだ、ケムブリッヂの學生ださうだ、何有、日本人さ、東とか云つてね、未だ十八九のやつださうだ」
「佐藤が餘程筆を入れたんだらう」
「そりや然さ。併し其東と云ふやつは餘程躍起家に違ひない、何ださうだ、何時かも何かの事で、タイムスに投書して大分物議を起してね、公使が呼びつけて注意したさうだ」
「官費生か」
「然ぢや無いだらう」
「誰が金を出しとるのだ」
「知らん、或は佐藤が周旋かも知れん、歸つたら何れ彼新聞に入るかも知れん」
「其れぢやます／＼御手揃だな。併し彼新聞なんざ全く畠が違ふから恐るゝに足らんさ。何でも、此方は特色をドシ／＼發揮して行くことだ。先頃の喜多川一件の如きは確かに聲價をあげたぜ」
「併し彼一件は存外實入が少なかつた。華族なんか案外吝嗇なものだて。今度の機會は好機會だから一扶り扶ると尤も妙だが――君、其後梅津に會つたか」
「梅津、吾輩は――や、噂をすれば」顋でしやくつた。

燈光明き芝口の通を、麥藁帽を阿彌陀にすべらし、ステッキをかいこんで、少しも醉はぬつもりの若者が蹣跚と歩いて來る。
「梅津君、々々々」
醉眼朦朧として子爵は良久しく二人を見て居たが、漸と下唇を舐めずつて鈍な笑を浮べた。
「や、此れはいゝ處で會つた――實はね、實は吾輩其、君に要があるんです、其」
「梅津君、御愁傷」
「御愁傷――至極御尤です、流連三日半文の錢なし、人力車にも乘れんから、其れで」
二人は相見て苦笑した。
「梅津君はよく酒が飲めるな」
「憂を掃ふ玉箒と云ふ譯かね」
「よく酒が飲める、飲む爲めの口ぢやないですか」
「千鳥足で葬式に出るも一興かの」
「葬式？　何の葬式？」
「くだらぬ洒落は大概にして貰ひたいね。君が姉君のさ、喜多川伯爵夫人の葬式さ」
「姉の葬式？　姉の葬式なら姉が死んだ後の事ですね」
「馬鹿な眞似は宜い加減にし玉へ、氣樂にも程があるぢやないか。一七日位は體面丈でも些謹愼し玉へ」
「死んだら謹愼しませうが、死なければ宜いでせう」
二人は怪訝の顔見合はした。
「其れとも姉が死んだよりが冥途からでも來ましたかね」
「君は知らないのか」
「何をですか」
「何をもあるものか。喜多川夫人の自殺さ」
梅津子爵ははゝと笑つた。
「吾輩はね、吾輩は其樣醉つては居ない、此れでも氣は確かだ、確かなものだ、かつがれるものか」
「ぢや君は知らないな――喜多川夫人は一昨日の夜沼津で自殺した」
梅津子爵が醉眼心得ぬげにとろ／＼とやゝ久しく二人が面に注いで居たが、少し顔色が變つた。
「全くですか」
「今朝の新聞を見ないのか」
「新聞なんざ見ないですよ」
「通知も來ないのか」
「通知？　吾輩は此れで三日歸宅しないから――ぢや本當か知ら。はてな」

「本當も嘘もあるものか。三助でも知つとる」

子爵は眼を据ゑて暫し默然として居た。忽然ステッキで地をうつて、噫と共に叫んだ。

「ちやー一つ喜多川に押かけてやらう――が、待ち玉へ、吾輩は無一文です、君、二三枚立て替へて置いて呉れませんか。此です、此です」

子爵は衣兜の紙入をはたいて見せた。

二人は顏見合はしたが、一寸思案して、一人は子爵を横町の小闇い蔭に呼び込んで、何か囁いた。

「――宜いかね、おとなしく葬式にも出るのだ。暴露しちやいけないぜ」

子爵は頻りに頷いて、紙幣をしまつて一寸一禮して蹌踉と人車に乘つた。

「彼でも皇室の藩屏か」ヘルメット形の帽はあと目送つて苦笑した。

「何、彼でも用途によつては隨分奇貨だからな」

二人は猶低聲に話しつゞけて高輪の方へ。

（三）

六月末日、喜多川伯爵夫人貞子の葬儀は、音羽の護國寺で行はれた。

流石に憚る由あつて、葬儀は極内場と云ふのであつたが、何を云つてももとは十六萬五千石の大名、同族の親戚、縁者、舊家臣の輩、其には近頃政治上の關係から程近き小日向の大井田伯、其れから土屋伯、以下在野有志の甲乙まで思ひがけなく會葬したので、少なからぬ馬車人車は護國寺の門に集まり、羽織袴の帳付も筆をとつて汗を流した。

時は午後二時半、觀音堂の正面には、戒壇と差向ひに白紗覆ひし柩を安置して、其前に燭燃え、花立ち、香薫じ、供物並び、金襴の袈裟嚴かに大了導師も衆僧を將て着座して居る。近親の佐々倉子爵白井伯爵山際子爵を初め、先程まで一隅で土屋伯以下諸有志を相手に處嫌はず大言壯語して居た大井田伯も、袴の稜を正して右方の座に居流れると、左の一側には貴婦人を前列に、舊藩中の妻女何れも白襟の衣紋正して居流れ、流石高聲を謹んでは居れど大勢の囁は群蚊の雷となつて堂を蒸すのであつた。

「御書置も無かつたさうですね」丸髷が隣の束髮に囁く。

「左樣ですつてね。如何しても、懐劍を御放しなさらなかつたさうですよ」

「餘程思ひつめて御出遊ばしたのでございますねエ」

「姫樣が御可哀想ですわ」

「最早御病氣は宜しいのですか」

「未だ佐々倉樣に御出なさるさうですね」

「彼お隣と云ふのも參つて居ますか」

「まさか」

「御前も御後悔遊ばしたでせうね」

「でも何だかさうですよ、其事を御聞きになりますと、大變に御怒りなさいましてね、死んでまで公乃に恥をかゝす、なんか云つていらつしたさうですよ」

「まあ！」

「評判の令弟と云ふのは、來て居られるですかね」男子席の後方で若い洋服が禿頭の羽織袴に囁いた。

「エ？令弟？――梅津子爵ですか。先刻方丈の方で一寸御見受け申したですが」

「よく御顏が出て御出です」何れ此も舊臣の一人。

「額に出て御出だが、いや實に――」

「神戸先生、一寸――」家扶づくりの羽織袴が、しみ出る額のあぶら汗を拭ひながら小聲に呼ぶと、默然苦り切つた顏の老人が座を起つて縁に出た。家扶は慌てたさまで何か囁く。老人はますます苦い顏をして、急ぎ足に堂を下りた。

「如何したと云ふのです」先刻の洋服が。

「さあ、——大分時刻が延びる樣ですが」

　三時廻ると、會葬者一同空虚な親族席を眺めて、怪訝の囁きが其處此處に聞えた。

「一體如何したと云ふのでせう」

「急病人でも出來ましたかな」

「其れとも一同に會はす顏が無いと仰有るので——」

「伯爵がですか。今となつては晩いぢやありませんか」

「本當に如何遊ばしたのでせう？」

「佐々倉の奧樣までが御見えなさらない樣ぢやありませんか」

「御病氣ですか」

「否、御實家に御病人がある樣に承つて居たのですが、今日は御見えなさりさうなものですね」

「本當に如何なすつたのでせう。何かが變ですわ」

　四時から非條約改正演説會に臨む筈の土屋伯は頻りに髯を拔いて居る。導師は役僧を顧みて、しばしば疑問の一瞥を與へる。家令家扶葬儀係は頻りに往つたり來たり。

　異な感が會衆を擒んだ。降りもせず照りも上らぬ六月末のいとゞ蒸暑い空氣は、蠟燭の焰、線香の匂ひ、大勢のつく息を飽和して、左ながら頭を壓する樣に、棺の中の當時の苦悶も想はれて、事ありげな感はふらふらと各個人の頭に涌いた。

　係りの心元なさに、佐々倉子爵も容子見に立つ。

（三）

　石段下の方丈の一室には、喜多川伯が梅津子と互に氣色ばんで居る。

「死因？　死因は先夜も云つた通り精神錯亂——」

「其精神錯亂の原因は何です？　云はれますまい、云はれなければ、吾輩が云ひますぞ。否、云ふまい——ゆすりのかたりのと御云ひなさるが、間接にもしろ殺人罪を犯したものが何處かに居ますぞ」

　喜多川伯は眞蒼に怒つたが、何も云はなかつた。

　破れざるを期して壓しへして器の忽ち破れたるに、且は吾壓力の效に驚き且は其器の脆きを怒つたのは、夫人の變報に接した喜多川伯の胸中であつた。不埒千萬な、誰が許して勝手に死んだ、勝手に死んで乃公の名をまたへ人の口に上した、面當がましい、何たる死状か、こつそり病死でもすることか、芝居じみた刃物三昧、辛抱も得せず、狂氣じみた——否、正に狂だ、狂である、理窟に合はぬ話である。

　乃公は知らぬ、乃公の知つた事ではない、一人で好きな眞似をして死んだのである、死ぬるは勝手に死ぬが宜い、併しながら乃公の面に土を塗り、乃公に迷惑をかけるは沙汰の限りである。

　喜多川伯は斯く怒つて、沼津へは唯家扶を遣はし、夜は安眠した。

　併しながら實した遺骸に對しては、やゝ異な感を覺えた。白無垢の襟のあたりは悉皆眞綿で卷いて、髮も綺麗に撫でつけてあるが、落ちた頬、凹んだ眼、青んだ額色、紫色の唇、三十年の苦痛を語る死顏の老い樣、臨終の苦悶を告ぐる痙攣の痕、熟と見て居れば、人無き室の靜さ、死骸の吐息も聞く思して、十三年前同じ白無垢に高髷の美しかつた面影を思ひ出でた伯爵は、吾にもあらで下唇の震ふを覺えなかつた。併し伯爵は「知らぬ、知らぬ」と心に叫んで、直に火酒を呼んだ。

　喜多川伯爵夫人の自殺は、都門三日の談柄となつた。喜多川伯に縁故ある二三新聞を除くの外、大抵は死者に同情を寄せて、明々に伯爵を

攻撃するの態度をとつたのである。伯爵夫人存生の砌は、其賢名を忌み、其美容を妬んで、兎角快からぬ者多かつた上流貴婦人の中にも、死は競爭をとり去つて、罪亡ぼしに喜多川伯の罪を重きに問ふ者少なからぬのであつた。何處を見ても、無言の眼に、唇に、有罪の宣告を讀んで、吾儕者の心弱く喜多川伯は妙に世間狹く感じ始めた。今日も馬車に上る前に、火酒の一盞は、其寒き心を温めたのである。

併しながら其宣告を梅津子爵若き口から聞くのは、堪へ得ざる所である、と伯爵は思つたのである。が、理の當然に責められて、伯は徒らに唇を震はして居る。

「法律の明文に無い、と云ひなさるかも知れん。併し吾輩の友人には新聞記者もあれば法律家もある。告訴しようと、天下の人心に訴へようと、吾輩の心一つです。吾輩の意見一つでは、禮遇停止は隨分吾輩の外にあるかも知れない」

「不埒」

「何方が不埒です。意地めぬいて、自殺さして置いて、人を不埒呼はりも面白いですな。宜しい、吾輩も分別があるです、何れ何處かで曲直を分けます。其れとも吾輩に謝罪狀を書きなさるか。でなければ謝罪狀に代はる可きものを――」

「ゆすり奴」

「吾輩がゆすりなら、君は殺人犯だ」

「巡査に引渡すぞ」

「巡査に引渡す？ 面白い――先づ姉から活かして貰はう。其れとも吾輩が今一同の前で片つ端から貴君の罪蹟を數へ立てるが宜しいか。其れとも新聞で悉く摘發しようか。裁判に持出して黑白を分けようか」

喜多川伯は唇を嚙んで、「齋藤、々々」と家令を呼んだ。

咳拂ひと共に、襖開けて、苦り切つた神戸老人の顔が現はれた。家令家扶の甲乙も其あとに續いて居る。

「御前、時刻が大分晩れて居ります。さ、早く本堂へ」

「神戸。實に不埒な――」喜多川伯は齒ぎしりして、梅津子爵を指した。

子爵は冷哂つて座を起つた。「何方が不埒か――宜しい、二三日中に代人を上げます」

「ゆすり奴」

「御兩所共、場所柄でござりまするぞ、御人柄に、御名前にさはりまするぞ」神戸老人は笑止千萬な顔して彼から此と顔見比べた。「さ早く本堂へ」

「ゆすりと一處に燒香は御免だ」喜多川伯の眼は猶電を光らす。

「死人に口なしと高を括つて、人をゆすり呼はりもよく出來た。君には夫人かも知れんが、吾輩は正しく實弟だ。弟が姉の葬式に燒香をするに何の不思議があるか」梅津子爵もまた氣色ばむ。

「御家の恥辱になりまするぞ。さ、御前、御兩所共、早く本堂へ。齋藤君、早く御前の御伴して、――何をまごつくのか」

「喜多川君、如何した、如何した。一同待兼ねて居る」佐々倉子爵の長身ぬつと次間から入つて來た。

（四）

柩の前には、會葬者一同、幼き房子芳子が物珍らしげに四邊見廻して居る外、肝腎の喜多川伯を始め、亡者には唯一兒と聞えた道子、唯一の弟と聞えた梅津子、さては姉妹の樣であつたと云ふ佐々倉子爵夫人までが影も見えぬ親族席を怪訝の眼に眺めて居る。

「奇體だね」

「何か異變でもあつたのではありますまいか」

「如何なすつたのでせう？」

男子席、婦人席の彼方此方に、斯る囁きが起り、或は喜多川伯の上に何か忌む可き兇事があるのでは無いか、と瞬時の惑を起す者もあつた。

併しながら喜多川伯は亡夫人の如く未だ世間を見棄つるの必要を感じなかつた。佐々倉子爵が立つとやがて、伯は梅津子爵と相前後して席に着いた——伯は眞蒼になつて、梅津子爵は冷笑つて。

猜疑の惑の中に、儀は始まつた。

讀經果て、燒香の準備整うて、役僧が喜多川伯の前に膝をついて、小聲に何か云つて退くと、伯は袴の襞を正して立上つた。

恰も其時、葬儀係の先導の下に、唐獅子の衝立を廻つた婦人席の横手から、純黑の洋服を着けた婦人が、雪白の無垢に垂髪の女兒の手を引いて、現はれた。其後から同じく黑の喪服を着た女兒が從いて來る。

「ま、何樣が！」

「ひどく、お窶せなすつたこと！」

「佐々倉の奥樣も窶せきつていらつしやるではありませんか」

婦人席の前列で斯く囁いた。

實に其は道子であつた。着たる白無垢の其よりも顔色は猶蒼白く、頬落ちて、足もとも猶危げに、愁を含む佐々倉夫人の手に扶けられて、歩んで居る。

燒香に立つた伯は直に進み、彼方は斜に寄る、相去る十五歩、双方の眼ははたと會つた。

喜多川伯の面に、紅の色さつと流れた。頭から爪先まで一瞥に父を見て、道子は戰々と慄へた。

（五）

道子は、沼津の母に奔る可く平河町の本邸を脱け出た以來、初めて父に會つたのである。

佐々倉家に連れられて行つた其夜から發病して、二週餘りの大熱に生命も危かつたが、手厚い看護に命を取りとめて、いたはる夫人、慰むる照子、召使の者まで心ある仕方に、自家にあるよりは却て長閑な日を送つて、すら〱と回復期に入つた。

此間平河町の自宅から家扶の者が時々見舞の物を持つて來たばかり、父伯爵は終に足踏しなかつた。道子は子供心に佐々倉家に恥ぢた。

其中に突然沼津の母から明日歸るとの電報が着いた。思ひがけない樣に接して、道子は急に勢づき、佐々倉夫人は數日前から實家の病人を見に行つて留守であつたが、久し振に髪を上げ、湯にも入つて、照子と手をとつて芝生を歩いて、何時にいらつしやるか、當てつこをしませう、と云つて、笑つた。御土産は何でせう、貝でせうか、と云つて笑んだ。

併しながら母夫人は何時までたつても歸つて來なかつた。唯佐々倉夫人が顔色を變へて實家から歸つて來た。訝しい、底に何かありさうな、何事をか隱して居さうな氣はひが、佐々倉家に充ち滿ちた。不穩の氣に襲はれた道子は連りに問うたが一切要領を得なかつた。佐々倉夫人は堅く家の者に口どめしたのであつた。彼病の舉句、彼あだ喜びの末、僅かに此變を聞知らば、如何樣な事になり行くかも知れぬ。幾度か考へ考へして、終に變り果てた喜多川伯爵夫人の面影を道子には見せなかつた。

終に葬儀の日は來た。延ばし〱して居たが、何時まで延ばす事も出來ない、葬儀の事だに知らさずに置いたらば後で如何樣に殘多く思ふであらう。夫婦相談の上、醫師にも問うて、佐々倉夫人は其日道子の室に行き、道子の髪を撫でつゝ、漸次に悲報を打明けた。世の中には死と云ふものがある事、人は一度は死なねば

ならぬ事、親と云つても一度は別れねばならぬ事――

道子の色が變つた、熟と佐々倉夫人を見て息をつまらした。道子は母の最早此世になきを知つて了つた。思ひ切つた其顏つき、腸を剜られても事實、十二分の事實を知了せでは止むまじき決心を見てとつた佐々倉夫人は、他の幼い、かよわい女兒を賺す樣に曖昧な話に一時を糊塗するに忍びなかつたのである。如何しても此兒には眞實の事を語つて置かねばならぬ。涙を拭うて、夫人は事の顚末を物語つた。死因は云々、死樣は云々。

道子は始終默然と聽いて居た。佐々倉夫人が危んだ樣に泣き叫びもしなかつた、昏倒もしなかつた。唯蒼白き色の、若しなり得べくば、尚蒼白く、次で火の如く紅に、渾身木の葉の如く打震へた。

「母樣を、今日、お葬式してしまふのですの？」

「然ですよ、わたしは此から護國寺に行くのです。道さんが今些健康になつてお出だと行くのだけど、今日は留守居をして下さい、――照子を殘して置きますからね」

「行きますよ、わたくしも」

「でも――」

「伯母樣、連れていらつして頂戴！」道子は犇と佐々倉夫人に取りついて、ほろほろ涙をこぼした。

斯くて此日後れ馳せに護國寺に來たのであつた。

（六）

燒香濟むと、會葬者の大牛は去り、埋葬終ると大抵は辭した。併し親族の人々は、客殿に茶菓を喫して、猶暫し留まつて居た。

佐々倉子爵夫人が山際子爵母堂白井伯爵夫人外親族の甲乙と言葉少なに應答する此方に、客殿の柱にもたれて、道子は默然と庭前に色褪せた紫陽花を眺めて居た。香燒きし香の馨の身にしみて、煙越しに柩の冷やかなるを見し以來、其柩を滲々した墓地の土中に深く下ろして其上に落つる土塊の響を聞きし以來、涙も出でぬ絶望は道子のをさな心を鎖して了つた。初め顏見合はして總身の血氷るを覺えし父すらも念頭に殘らねば、會葬者も眼に入らず、慰め顏の親族の誰彼がやさしい言葉心ありげな吐息も耳に入らず、眼を丸くして其顏を見る妹の房子芳子、手を執つて居る照子すら側に置いて、心は遙かの空に迷つて居るのであつた。

「道子――道子―」

ふり仰ぐ道子が面に微かな紅が現はれた。父伯爵が立つて居る。

「長い病氣であつたな、佐々倉の伯母樣伯母樣にしかと御禮を申上げるのだぞ」

道子は熟と父の顏を見つめた。伯爵の眼はうるんで、頰に涙の痕が殘つて居る。其涙の痕を見ると、道子は勃然と總身の血熱するを覺えた。伯爵は眼を轉して了ふ。

「何も御禮を云ひなさることはありません、ねエ、道さん」佐々倉夫人が言を添へる。

伯爵は坐つた。

「いや道が事では一方ならぬ御世話に預つて、何れ御禮にはあらためて申上げますが」

「御禮を受ける爲めに道さんをお世話は致しません」

伯爵は少し額を皺らめた。

「いや何も屆かぬ事ばかりで――併し何です、道も此通り全快致して見れば何時まで御厄介かける可きでもないですから、何なら早速連れて歸ることに致さうと思ひますが――喃、道子、阿爺と歸るのだぞ」

「其は喜多川家の御嫡女の道さんですから、何ですけど――」佐々倉夫人は道子を顧みた。

ほろ〳〵落涙するよと見れば、忽ち道子は突伏した。

「こら、道子、如何した、道子」

父伯爵の手が肩にかゝると、道子は身震ひして其手を刎ねのけた。屹とあげた面は耳まで紅になつて居る。

「何を爲る？」喜多川伯の聲は怒を帶びた。

「何角は他日のお話として、今日はわたしと一處に歸りませうね、道さん」佐々倉夫人が執り成した。

道子は默つて居る。

「こら、道、吾儘を云ふのではないぞ。阿爺と歸れ」

道子は劇しく頭を掉つた。

「好し、其れぢや佐々倉の叔母様と歸れ」喜多川伯は不興氣に身を起した。

「では道さん、一處に歸りませうね」

「道子さん、歸りませう」照子が手を把つた。

突然其手をふり攫して道子は犇と柱を抱いた。

「わたくし歸るのは嫌」

烈しい聲に、皆其方をふり向いた。道子は耳まで紅になつて、緊と唇を嚙んで、熱き涙をこぼす眼は焔の如く、父を射て居る。

「道さん、如何した？」梅津子爵がにや〳〵笑ひながら寄つて來た。

「如何した　如何した」佐々倉子爵も寄つて來た。

「さ、道さん、おとなしく歸りませうね」佐々倉夫人は其手を執つた。併し道子はます〳〵柱に縋りついて、頭を掉つて居る。

「わたくし歸るのは嫌、此處に居るのですもの……」

「此處に居ると云つたつて此處は寺だぞ」

「わたくしお寺に居たい――尼様になりたい！」

「あれ、お姉様が尼様になるつて、可笑しいわ」房子が眼を丸くして笑つた。

「道さん、何故其様な情無い事を云ふのです、さ、機嫌を直して歸りませうね」

「道子さん、歸りませうね」照子も泣聲。

「馬鹿な事を云ふものでは無い。皆様に濟まんぞ。さ、道、吾儘を云ふと聞かないぞ。こら、云ふことを聽かないか」

道子は猶頭を掉つて居る。

「不孝者、歸らないか」

道子は眞蒼になつて、屹と父伯爵の顏を見た。

「母様――母様と一處なら――」

皆喜多川伯を見た。伯は蒼惶いた。

＊　　＊　　＊　　＊

女性の居る可き寺で無いから、と云ひ聞かして、佐々倉夫人は無理に道子を連れ歸つたが、失望の餘り發した子供心の尼になりたいと云ふとも二三日中にはやがて忘れて了ふであらうと思ひの外、世を捨てる道子の決心は堅かつた。佐々倉一家、父伯爵すら思ひ止まる樣にと手を盡したが、不思議に思ひ入つた道子の心一つを扱ひ兼ねて、親族會議にかけた結果、是非なく其望に任すこととなり、大内の許を得て、京都に由緒ある某の尼寺に落飾さすこととなつた。

萩の花こぼれて、朝夕は羅が背の身にしむ九月の末、道子は幼き異母妹弟、佐々倉一家、親族一統、犬のネツドにも告別して、[illegible]を兼ねて見送ると云ふ父伯爵、家令家扶、侍女に伴はれて、京都に赴き、十月一日と云ふに洛外は御室のほとり、枳殻の垣、護門の櫻、清けに寂しい彼尼寺に落髪した。

五つ紋曙染の振袖を色無き衣に脱ぎ更へて、今年十二の世捨姿、稚子髷ぷつつりと剪み棄て、ごそと剃りこぼつ黒髪の上に、剃刀持つ老尼のほろりと落涙したと云ふことであつた。

第十三章

（一）

此度笹子を越えじと一旦思ひ定めて居たものを、ついふら／＼と都にさまよひ出て見れば、變り果てた世のさま、思ふに倍した隊長の跋扈横暴、以前の親友と許した者すら甘んじて其門に尾をふるの狗を學べば、何處を見ても男らしい者の影も無く、所詮此世の中が急に更まる可き望もなく、隊長天下の命脈は末を何時と定む可き衰徴も見えぬに失望しきつて、足の塵を拂つて都を去り、笹子を踰えて甲州富士見村の村居に歸臥したのは、昨日の樣だが、早半年何時かたつて、富士は再び白雪の冠、朝の霜、夕の嵐に東老人の病骨殊に苦惱を覺ゆる時となつた。

其を思ふ毎に苦笑自から禁ずる能はざるは、都歸りの其時の狀であつた。一向たよりはないが、滯京の長びくは、てつきり上々吉の首尾、其内洋服か何かに姿を更へ、馬車――で無くも金紋付の車を走らして、意氣揚々と歸つて來られるは必定、其樣すれば差寄り自分は知事樣の奧方樣、味噌臭い此手を洗つて、木綿布子を柔らかなものに更へて、大勢の人に見らるゝに顏も此ではならず、言葉も今些鷹揚にと、早や奧方になり濟して、思うて足らず村人への吹聴、實家の頑固な父親をすら煙に捲いて歸つた上で愈、然ならばと大事をとるを說き伏せて幾千金かしぼり内々黒紋付の支度にかゝつて居た東夫人はがつかりした。行つた時の柳行李一個、着物は皺になつて、不興氣な顏色、「あゝ草臥れた」とばかり、而して御役はと問へば、「馬鹿め」と一喝、拳けかへる夫人を尻眼に見て、「息子に金を送つて置いた」と云ふに、「あゝ月給が渡りましたか」と勇み立てば、また「馬鹿め」と冷嘲はれ、「青柳さんでは皆樣御かはりもありませんか」と問へば、「私は丈夫で居る」とあつけない返事。知事の辭令は彼柳行李に入つて居さうにもないに、「其れなら御役は御斷りなさつたので？」と思ひ切つて問へば、「御前も到頭知事の奧樣になり損ねたぞ、はゝはゝゝ」其が何で面白く何が可笑しくて笑はれる事かとむつとはしたが、流石に恐ろしくて面前では怨言を並べなかつた。其かはり多辯の夫人が急に無口になつて、起つては溜息、居ても溜息、風船玉の氣がぬけた樣にぐた／＼と萎れてしまつた。

慶を云ふつもりで押かけた村人は意外の光景に拍子ぬけして、歸つて了ふ。婿が歸つたと聞いて珍らしく直ぐ尋ねて來た舅も、其と聞いて、急にぽんと煙管を筒に納め、近頃不景氣金子拂底の噂をして舌鼓をうつて行つて了ふ。

其時の事を思ふ毎に、東老人は苦笑するのであつた。

（二）

六顆の金印には躓いて、失意の歸鄕には唾も舐めさせぬのは、古昔からきまつた相場、俗人の常で、其等を氣にかけるのでは無いが、唯東老人が自から悔恨に堪へなかつたのは、二十年來一劍を磨して、わづかに鋒を交ふれば、早くも吾敗に歸したことであつた。

敗北、何と云つても敗北の事實は掩はれない。回顧の懊惱が何よりの證據である。

第一、何の爲めに出京したか。其は吾が學資を作る爲め――併し其言譯は暗い。何の爲めに藤澤楢山等に一度ならず面會し、喲々館の夜會にも赴き、向島楢山別墅の宴に彼等と膝を交へたか――彼等の動作を見る爲めに、所見を聞く爲めに、畢竟敵情を採る爲めに――併しながら其口實は猶不十分である、二十年の苦節を擲つて一顆二千石の印に此白髪頭を賣る、などとは

以ての外の話ではあるが、彼等は正に買はんとした。ふり切つて歸つたのは吾ながらよくしたとは思つても、彼等に近づいて、其值踏するに任したのは、兎も角も一歩を彼等に讓つたもので、即ち彼等に致されんとしたものである。あゝ何故に出京したか、何故に彼等と語を交へたか、東老人は眉端に落つる富岳の雪に對し、旅衣を千度振つて猶ほ地惡く感じたのである。

併しながら懊惱は此にとゞまらなかつた。

二十年ぶりに帝都の土を踏んで、妙に氣おくれがした。怒つて之と爭つたが、其感は東都にある間、影の如く身につきまとつたのである。此奇怪な氣おくれは、時勢の所在と吾立場との差が生み出したのであるまいか。東老人は恐然として打消した、時勢を誤つて吾立場を卻した。併しながら安からぬ思が其處に蟠つたのである。

彼の檜山別莊の舌戰を十回百度念頭に喚び起して、彼等が立場と吾立場を比較して、吾が云ふ可くして云ひ盡さぬ所を數べ、彼等が弱點の衝く可くして衝かなかつた所を算べ、倚等に勝敗の決を案ずると、東老人は迷つた。無論彼等は誇つて居る、浮いて居る、天下の政治を執つて私をのみ營んで居る、立派な道具をつかつて居る。其は確かに事實である。如何に裝飾しても、內は空虛である。如何に言ひ黑めても、彼等が正體は明白に見え透いて居る。然らば勝は吾にあつて、彼等は敗北したか。道理に於ては、正に然ある可きであるが、實際彼等は凱歌を揚げて、吾は敗軍の姿となつた。

何故の敗か、何が敗北か。彼等は、時勢おくれと云つた。果して時勢と吾とは其程の差があるであらうか。假令其程の差があるにしても、其時勢なるものは最後の目的で、至極の標準であらうか。

東老人は私かに惑うた。

（三）

田舍に引籠つて、吾影法師と頷き合うての考に耽ける者の癖として、兎角偏狹に流れ易いのであるが、東老人は全く偏見の奴隸となるには餘り常識を剩して居た。

實に、思ふは知るに若かず、聞くは見るに若かず、二十年ぶりの出京は、敵を知り己を知る所以となつて、多少現政に對する東老人の覺悟に變化を來したのである。

其浮薄、其腐敗、其にも關らず、敵の要害の意外に堅固な點あることも知れた。檜山別莊の舌戰は云はゞ斥候の衝突に過ぎないのであるが、思ふにまして敵の太刀筋の鋭きも見たれば、はやる氣程に吾手は思ふに任せぬ焦燃を覺えた。吾を田舍の猿子見と嘲つた彼等も、流石に高きに據れば着眼の廣い所なしとは云はれぬ。浮薄と吾嘲つた、亡國政府と吾貶きつた彼等の政府にも、存外天の時に合し、地の利に乘ずる點は、見えるのである。要するに、一擧拔く可く思つた明治政府の要害は意外に堅い。

然らば兜を脫いで彼等薩長兒の軍門に降る乎。

以ての外。戰は此から始まらなければならぬ。明治政府と東とは何處までも兩立することは出來ぬ。敵の强を知る程、現政に對する憎惡は愈燃え立つたのである。

「實力で來玉へ、何時なりとも明治政府を明け渡さう」傲然として持つた藤澤が挑戰の小手は、猶耳底に金石の響をとゞめて居る。

「六個師團の兵もある、海軍もある、警察もある、力競なら何時でも來玉へ…」

はゝはゝゝ、ほざいたり、藤澤め、臆病者の虛成張、相手が田舍の一老翁と侮つて、大言壯語の芝居をしたな。

挑戰狀は確かに受取つた。早かれ、晩かれ、

天下分け目の事をしなければならぬ。
併しながら竹槍席旗の時代は過ぎた。況んや萬事判斷の非手段をとる可き時勢であらうか。今後の戰爭は容易な事では行かぬ。
東老人は書を飛ばして、晉が勉學を督勵した。

（四）

東老人が力と頼む一子晉も今年數へ年の十八となつた。
十三の年に渡英してこゝに六年、一貞ならでは歸朝の一度もしないのであつたが、父子の間には絶えず書信の往復があつて、彼我の關係は漠然父子と云ふよりも猶親しいものがあつた。父は何時も其子の手紙の冷淡を罵つて、如何しても此兒は侭儘で情が無くて自分に似て居ないと呟いた。併し父は、洋紙に走らすペンの文字こそ拙けれ、十三の年から外人の中に入り浸つて居るので手紙の文章に拙い所はあつても、年は一年より其子の考への大人びて、頼もしかしき見識のほの見ゆるを竊かに喜んで、一寸した手紙にも家事よりは國事、寒暑の常套は差置いても、時事の報道意見の交換をば怠らなかつたのである。

東老人が行末蕭然と門を立つて歸村して程なく、晉が手紙は、在英公使から官費生にしてやらうとの内意があつた事、併し心に染まなかつたので其は謝絶し、其かはり左る人の周旋によつて學業の暇々に東京の某新聞に通信をすることにしたと云ふ事を報じて來た。間もなく其第一信をのせた新聞——土屋伯の機關紙——と共に、主筆の佐藤と云ふ名を以て一通の書翰が東老人の手許に届いた。
通信は「條約改正と英國の興論」と題して、タイムス外諸新聞雜誌の拔萃に、したゝか自家の意見を附して通信よりも寧ろ一篇の非條約改正論であつたが、東老人は其新紙の上に落涙した、東京の叔父の家から逃げて歸つたのは、昨日の樣だが、最早此樣なものを筆にするまでになつたかと。
佐藤の書翰は、晉の事を實に後生可畏と稱して、猶將來晉氏の事に就て御用もあらば遠慮なく御申越を請ふと書き、御老人の事に關しては鵜飼子爵から承り及んだ事もあり、欽慕に堪へぬ云々と書いてあつた。
東老人は苦笑した。
有體に云へば、東老人は餘り民間政治家なるものに重きを置かなかつた。藤澤木下諸人と、大井田土屋武東諸子の間に、一は朝に立つて自儘に振舞ひ、一は野に蟄して悶々すると云ふの外、多大の相違を認めなかつたのである。今に見ろ、地位が出來たら氣焰に無くなる、彼等は藁炬火、直ぐ燃えて灰になる、と冷嘲つて居た。故に其昔國會請願書にも調印はしなかつた。政黨組織熱にも罹らなかつた。十年來政治史に特書さるゝ事件は數あつても、東老人は毎も冷眼に見て居た。
併しながら東老人は思案した。田舍に引込んで、心に落膽を託つて、團扇片手に一人氣焰を吐いて居る分の事ならば、其で宜いが、一旦晉が歸朝して政界に打つて出で——東老人は其子の前途を毫も疑はなかつた——る時になると、單獨では手も足も出るものでは無い。藩閥の根城は一騎驅の功名をゆるす可くあまり堅固である。同志も求めなければなるまいし、樣々の便宜も利用しなければならぬ。行々は自から一軍を作つて之に將となつて雄を爭ふとも、當初の立場は今から考へて、下地を造つて置かねばならぬ。偖晉が單甲匹馬寄手の陣に馳せ加はるとして、何處の營が尤も適當であらう乎。東老人はあまり大井田伯を好まなかつた。彼は奸雄だ、と常に謂つて居た。武東伯は山氣の塊、

二條公の一件以來、東老人は今以て其無責任を怒つて居る。武東と同藩同出身の土屋伯、維新には此もしたゝか味方を苦めた男であるが、智惠と力は無いかはり、正直で、眞面目なは此人である。況して其閣下は、氣あつて學足らず、大井田伯の子分共に小兒視されて居る輩、其中に飛び込んで一頭角を揃くは、四年後の昔には朝飯前の事である、吾が土屋伯の機關新聞と偶然縁を結んだのは、勿怪の幸である。

斯く思つたので、東老人は喫驚な體狀を佐藤主筆に送つた。而して此が端緒となつて、文通の路は開け、佐藤主筆は老人の所謂「田舍老爺の獨語」を聞き、東老人は新聞に現はれぬ幾多の政界の內狀を知つたのである。

政情の變轉は、實に間に髪を容れぬのであつた。此春東老人が出京した頃は、地底から生えぬいた樣な明治政府の堅城は小石一つ搖ぐ樣子もなく、薩長の[illegible]下は千秋萬歲、吾息ある間は所詮手も足も着けられぬと失望しきつて、歸つたのであつたが、其れから三月とたゝぬ間に、條約改正問題の地雷は其堅城に攻め入る可き[illegible]大の穴をあけた。[illegible]な事も出來まい、と流石に見て居た東老人に驚いた[illegible]、[illegible]さうな民間黨が強いか、強さうな政府が弱いのか、包圍攻撃は意外の火の手をあげて、攻太鼓、鬨の聲、凄まじい響は、山一重彼方に耳を澄ます東老人の心を躍らした。

改正中止、當局大臣辭職、勝に乘る寄手の鬨は荒海の鳴るかとばかり、意外な心地の東老人は禁を破つて三盃を傾けた。此分なれば、二十三年を待たず、藩閥の落城も意外に速いかも知れぬ、來月初旬の全國有志大懇親會には御見物かたがた御出京は如何や、土屋伯以下一同御待ち申すと、此は九月下旬佐藤氏からとゞいた宛ながら煙硝の臭に染みた手紙であつた。

東老人は心動いたが、終に出京を果さなかつた。

過る夏初、左眼の明を失して以來、右の一眼を生命の如く愛護して、其爲めに好める酒を絶ち、肉食の饗多きも厭はず、燈下の讀書も廢し、少し異狀を感ずれば好まぬ醫師にも走つて、末永く管が成業を見、移り行く世の狀も眺るは此眼と、大事をとつて居たが、其甲斐なかつたのである。

[illegible]東京[illegible]狀を手にする前[illegible]以來、東老人は[illegible]り[illegible]頭痛を感じて居たが、其[illegible]々[illegible]であつた、[illegible]を[illegible]つて[illegible]から秋晴の富士を仰いで居ると、突然雪白の富士が血の色に見えた。同時に堪へ難い劇痛を頭心に覺えた。實に呀と思ふ間もなかつたのである、頭心から右眼に錐で刺す如き其劇痛は傳はつて、血紅色の霧が眼前に渦まいた。

「しまつた――兼、兼」

つひぞ聞いたことの無いけたゝましい呼聲に、驚いて細君は駈けて來た。

「如何なさつたのですか」

「何でも宜い、水をかけろ、水を、頭から」

緣端に頭を伸べて、冷水を汲んでかけさしたが、冷やす頭は火の玉と熱し、水も沸くかと思ふ右眼の劇痛に、總身冷汗を流した。

「待て、待て」

水を拂つて、東老人は眼をあげた。唯慕しき光の闇――庭樹も富士も見えぬ。

「寫眞を持つて來い、寫眞、寫眞」

「へ、寫眞？」

「馬鹿め、吾が寫眞だ、吾が―」

吾が寫眞を手にとつて、逆と氣づけられて、取り直して、苦痛を忍んで、光に向いて、眼に押つくる樣にして、滿身の力をこめて眼を瞪つたが、

「駄目だ！　駄目だ！」

東老人は寫眞を擲つて、齒をくひしばつた。

＊　＊　＊　＊

東老人が竊に恐れて居た時節は遂に到來した。

急に車を甲府の醫師に走らしたが、素より手も足も着けられなかつた。二日二夜に渉る劇痛の後、東老人の眼の前には、唯晝はほの白く夜は眞黑き、無が殘つた。

東老人は終に盲目となつた。

（五）

東老人は終に盲目となつた。

左眼の明を失してすら、大方ならず不自由を感じて居る。其不自由にも纔かに馴れ初める間もなく、意地惡き天はまたも殘れる一燈を消して、常夜の闇に擠した。怒つても、悶えても、最早已に晩いのである。

纔かに晝夜を辨ずると云ふばかり、眼前に廣ぐる吾手の五指をすら判ちかぬる急盲の境涯。起居の不自由に氣を焦つては、細君がさし出す茶碗を蠅逐ふ手に覆し、「不用々々」と細君の介抱を刎ねのけては椽の柱に頭をうち、物に躓いては此樣な處に置くものがあるかと腹を立て、果ては獨り苦笑をすると云ふ有樣。

眼の劇痛は眼のつぶれると共に拭ふ樣に去つたが、二日二夜の間斷なき痛に疲勞しきつた擧句、氣は昂つて、寢ても眠らず、食も甘からず、柱に倚つて唯默然と腕組の果てはうつら〳〵となるかと思へば、愕然と醒めて試る眼は相も變らぬ「空」を見るばかり、「矢張左樣か」と舌鼓うつて、苦笑する姿を、御機嫌が直つたさうなと細君が例の口數多きに、「えゝ、矢釜しい、靜にしろ」と叱りつけられて、手も着けられぬと細君は頰膨らすのであつたが、まさか打棄てても逃げ出さぬは太公望夫人よりまだ〳〵賢女と東老人は打笑つた。實に、平常は塵芥程にも思はず、物事一つ相談した覺もない細君ではあるが、盲目の良人は宛ながらの孩兒、寢食起居にも其手を假れば、新聞一つ讀み、手紙の返事一つ出すにも、覺束なき細君の寺子屋學問を賴まねばならぬこととなつたのである。

「吾を呼びかへしませうか」

良人が機嫌の殊に惡かつた或朝、細君は云ひ出でた。

東老人は勃然と怒つた。

「馬鹿を云へ。乃公が死んだと云つて、歸るには及ばん。乃公は眼はつぶれても、心まで盲にはならん。安心して勉強せい、と然云つてやれ」

吾を呼返すは愚か、阿爺の盲したことをすら吾に知らすを堅く禁じて、唯右手の僂麻質斯に、當分筆とれず、母に代筆さすとのみ報じて置いたのであつた。實弟の青柳へは細君から報じたが、折かへして見舞狀と菓子折——畏きあたりの拜領物と云ふ銘つきの——と來たばかり、直ぐにも御見舞申したいのであるが、何を云つても至尊の御傍近く奉仕する身、殊に都合によつては遠からず左る方へ御巡幸もあらうかと云ふ話もあり、殘念ながら今當分は御無禮すると書いてあつた。「來ぬが宜いさ、來てもつぶれた眼が開かうではなし」と東老人は苦笑した。

日を重ぬるに從つて、東老人もやゝ新境涯に馴れて、狹い家内はあまり人手を假らぬ樣になつたが、素より闇は何時までも闇——細君に手をひかれての庭の漫歩きに、履底の簌々を聞いて置霜の深きを知り、鳥雀の喧しき方を仰いで百目柿の熟したを察すると云ふばかり、疲れては晝も夢にまざ〳〵と富士を見、夜はいち早く醒めて鷄聲にさま〴〵の事思ひ起すのであつた。

期節は冬に入つて、東老人の村居はいよ〳〵寂寥を極めた。

盲した東老人の頭腦は宛ながら窓を閉ぢた暗室の如く、外に心を散らす機會を失つて、記憶と豫想とのかはる〴〵頭腦に描く活畫は、いよ〳〵鮮明を加へ、強烈を増すのであつた。膝を抱いて柱に倚り、寢覺勝の枕に夜あらしの海と吼ゆるを聞きながら、熟々世の變遷・吾生の浮沈、人の身の上を考ふると、兩眼明なりし以前に增して、吾命の拙きも、世の腐敗も、鮮に讀まれ、而して東老人が鬱憤はますます燃えたのである。

（六）

眼盲して、外界の寂寥彌倍す程、東老人が心裡の鬱悶は加はつた。

熟々と思ひつゞくれば、世に逆つた轗軻の吾一生は、濁流の海にさまよひ出でた一道の寒潮の其にも似て吾ながら分明に其異、其孤、其失敗を認めざるを得ないのである。失敗！　吾本心の指導に從つて最好しと思ふ所を何處までも追ひ行く、吾には人に羞ぢざるの自滿あつても、世間の眼からは確かに失敗と云はなければならぬ。

維新の當年、薩長の亡状を憤つて、漫に壯士を學んだ其が轗軻逆流の初であつた。否、維新に朝敵の名を負つて錦旗に發砲した者は、素より多い、皆好い加減の所で見切りをつけて、時勢の潮流に身を委ねたのである。然るに、他人は薩長兒の門に走つて世に出るに引易へて、吾は降つて來る立身の蔓を刎ねのけて、わざわざ田舍に引籠つて村夫子の生活を撰んだ。世間の眼から見たらば確かに第二の蹉跌である。時勢は一瀉千里の勢で流れて行く。吾は依然逆流の態度をとつて行く。差は日々に加はる。世間の眼からは、確かに失敗である。此春の上京は、まさしく最後の機會であつた。併しながら吾は其最後の機會を逸するに任した。世間の眼からは恐らく愚の骨頂、度す可からざる頑固、濟ふ可からざるの失敗である。而して今は孤村に盲して、世に忘れられ、失敗の生を無名の墓に埋むる時を待つて居る。斯程鮮やかな失敗があらうか。

誰を咎むるでも無い、皆自家の所爲である。とらばとる可き他の成功の生涯をすてて、避けば避く可き此失敗の生涯を撰んだのである。素より遺憾なき筈――併しながら東老人は首陽の餓死者を學ばんには、あまり機心を藏して居た。憎惡の念が強かつた。復讎心が強かつた。自家の失敗を感ずることが深かつたのである。

實に失敗の生涯である、世間の眼からも、自家の見る所でも。纔かに彼等に致されなかつたと云ふばかり、纔かに山中に逃げ籠つて巖窟を守つたと云ふばかり。維新後二十年の長日月は、手も足も出ずに過ぎて了つた。何一つ成就する所はなかつたのである。

而して二十年に一度山中を出て敵地に乘り込んで見ると、敵は最新式の武器を集め、精練の士卒を備へて居るに引易へ、此方は敝甲羸馬、銹びた槍を提げて、唯氣を焦つばかり。敵壘を攻め落す所か、匆々に馬をかへして、また山中に逃げ籠つた。

其果は日月にすらも見はなされて、生きながら暗中に禁錮の身となつて、猶闇き暗黒に下るを待つて居る。

自業自得と云ひ、時勢がさした敗北と云へば、其迄であるが、誰が時勢を代表して吾に直接間接の迫害を加へたか。

問ふまでもなく、彼薩長兒である。舊主家を陰險きはまる手段で顚覆し去つたのは彼である。吾命を窮せしめたのも彼である。現に日本を吾有顏に占領して、勝手次第な振舞をして居る、腐れ果てた彼である。

而して東老人が心の闇に、無明の業火は、天明を待つ復讐軍の篝火と燃えたのである。

復讐軍！　無き軍に舊主家の恥辱を雪ぐ弔合戰では無い。徳川家の日はとくに沈んだ。明治も最早二十年、伏見鳥羽は、歴史の上の昔話となつて、恩怨一掃、時勢は全く一變した。富士川の水をば逆にかへすとも、徳川家の復興などは夢にも見られぬ話である。

併しながら東老人は、維新前後薩長の擧動に對して萌した憤嫉の一念を、二十年間一日も忘れ得なかつた。否、自家運命の數奇と、寂寞が醸す偏執とに養はれて、彼一念は恐ろしき痼疾となつてしまつたのである。此一念を霽さば死して遺憾なく、此一念を霽さずば墓の下の眠も穏やかならずと思ひ込んで居た。

不幸にして倒幕の張本人たる薩長の大立者は手を下ろす間もなく、死の手に討たれてしまつたが、餘は時を得貌にはね廻つて居る。人物が小さい丈、猶小面憎い、生意氣な繼續者——丁の背で一撃呉れて、土足にかけべきわつぱ共、復讐などとは大人氣ない話——復讐よりも征伐である。天意を竊み、人心に背く、文明を皮に着て、糞土の心をもつ腐れ果てた明治政府を伐つのである。

何程の事かあらんと思ひの外、事實は敵の侮り難きを證した。斥候の小ぜり合にすら、滿身の疵を負うて歸つたでは無いか。

一騎駈の勝負は所詮問題外である。天下分け目の關ヶ原には兩軍の鋭を盡して遂に戰はれねばならぬ。

戰は既に始まつた。眼盲した東老人は、宛ながら大谷吉隆の其を學んで、甲府の草廬にぢいと耳を矢叫びの聲に傾けて居た。

第十四章

（一）

甲州の冬は寒も一入、毛は摩りきれた毛皮の胴着に背を保護させ、炬燵に膝を突込んで、煤びた障子を漏るおぼつかなき夕日影に向ひ、頻りと十六盤を彈いては帳を調べ、耳にした筆をとつては書き入れて居る大兵の翁がある。

「お寒うございます——阿爺、阿爺」

五十位と見ゆる痩ぎすの婦人が炬燵の向うに坐つて、頻りに呼んで居るが、此耳が遠い上に一心に帳簿に喰ひ入つて居る翁の耳には入らぬと見えて、

「えゝと、十三俵に八升五合二勺九才か。此上に小作料を廉くして呉れもよく出來た。何ならら此いつを引上げて、ただ、引上げて、えゝと——」

「阿爺、お寒うございます」

ふつと上げた顏は赭顏、眉の白きは仙人めいて居るが、鼈甲縁の大眼鏡の後から覗く窪眼は、極めて狡猾な光を放つた。此は東老人が舅の坂井左近と云つて、古稀の賀をやつたは最早六年程以前の事、頭はつるりと禿げて居ても道の二里三里は下駄ばきでやつつける矍鑠たる老人、十六七も年下の婿其人より却て若やいで居る。

「應、兼か。寒くなつたな。先炬燵に入つて居れ、今直ぐ濟む所ぢや」

而して傍に人無きがごとまた一心に十六盤をぱち〳〵云はして居る。金錢の前に親子なし、勘定日には法事も延ばすと云ふ父の主義を知りぬいて居る娘は遠慮なく炬燵に入つて、「あゝ微温い」と舌鼓うち、自から立つて勝手から一火斗火を持ち來り、暫くあたりながら何十年昔から柱暦のかけ所一つ違はぬ六疊の父が居間を見廻して居ると、父はやがて計算を終へて、十六盤を片づけ、帳簿は用箪笥にしまひ、筆洗の微温湯に筆先を洗つて夕顏の屑籠から一片

の紙屑を出して丁寧に筆を拭つて筆筒に立て、鼈甲縁の眼鏡をはづして、手製の紙帶に藏め、然る後白眉の下に星と光る窪眼を女の顏に向けた。

「寒くなつたな」

「本當にお寒くなりました。阿爺おさはりもありませんか」

「わしか。わしは忙しうて、風邪を引く暇もないのぢや。——三郎氏は變りも無いか」

「阿爺、其事で御相談に參つたのですが」

坂井翁の眼はきらりと女の顏を覗つた。

「其事で相談、フウム、錢か」

「否、錢もどうせ足らないのですけれど、錢は先阿爺の御世話をかけないでもどうやら斯うやら行かれるのですが——」

「云、然だ、然だ。東とも云はれる者が、やれ盲目になつた、男に合力を賴む、では男と云ふものが立たぬと云ふもの、卿も阿爺が居るから一つ世話をやいて貰はうなんか甘つたれた根性を出してはいけないぞ。第一——」

「其は如何でも宜しいですが、阿爺、此が本當に泣顏に蜂と云ふものですかね、三郎が怪我をしましてね」

「三郎が？ 何時？…」

「一昨日の朝でした、最早馴れた積りでずん〳〵縁を歩いて居ますと生憎金盥があつたのでして、躓いて落ちましてね、左の手を折つたのでございます」

「折つた？ やれ〳〵、其は、何だの、また醫師の厄介で、錢が出るの。いや、一つ狂へば皆狂ふとはよく云つたものだ。三郎も馬鹿な痩我慢を出さずに、知事の辭令を有り難く頂戴して見ろ、今頃は馬車に乘つて、金庫が立つて居るのぢや。天道樣の下され物を戴かなかつたばかりに、貧乏はする、目もつぶれる、其上に怪我もする。慾がない者は詮方がないの。阿爺を見ろ、慾があるばかりで、今年七十六になつて、此通り達者で居る。都合によつては卿達の死水をとつてやらうかとも思つて居る。世話仕手があつたら、知事でも何でも、遠慮はせぬ、ならうと思ふ。卿の家の三郎の了簡が分からぬ」

「でも目が潰れては御役も勤まりますまいから」

「馬鹿を云へ。彼時知事になつて居て見ろ、彼が四月から、四五六七八九十十一十二、いや眼がつぶれてからの三月を差引いても六ケ月と何日、月給を三百圓と積つても三六千八百圓はまんまと懷に入つて居る筈。生活費を一月三百圓と見ても、一六が六百圓を千八百圓から引いて殘りが千二百圓、ええと、此を乃公がする樣に一割二分の高利で貸すと、ええと」

「阿爺、々々」

委細構はず、十六盤取り出してぱち〳〵彈き、

「其れ見ろ、元利合せて千四百圓近くの金を棒に振つて居る。待て〳〵まだあるぞ、月給はきまりきつた表門のお客、裏門からこつそり入つて來る役德と云ふやつが憎くないものだて、此れまた大したものぢや。盲目になつたからと云つて、わざ〳〵呼び出した者を然無暗に暇を出す法はないから、何れ何か眼をつかはずに濟む閑な役目を云ひつけるか、其とも恩給とか何とかどうせ素手では歸すまい。然すれば無慮三千圓近くの金は立派に入つて居る筈ぢや。いや、不斷然云ふことぢやが、慾がない者程困つた者は無い」

（二）

進が外祖父の坂井翁は、額の皺と共に慾も增え、年寄る事を忘れ果つる部類の人であつた。還曆の祝の年に、緣者親類の勸罷止し難く、家督を其子に讓りは讓つたが、隱居に息か、上

皇日々表へ出御あつて、政を親し玉ふに、温厚の子は手も足も出ず、怏々として早世し、其嫁も子供は無し、爪に火ともす舅の振舞一人では辛抱がしきれず、末期の離縁をして貰つて、實家へ逃げ歸つた。あとは女二人、長女は東家に嫁して、次ぎは最早四十に近く、とくにも養子と云ふ所であつたが、其養子と云ふやつが考へもの、惡くすると味噌嘗めて作り立てた身代を養子殿にちよろり舐めて仕舞はれるかも知れぬ、と危んで、まだ早い〳〵、人撰中で、今年七十六と云ふに家督の者もきめず、女と番頭を相手に、金の貸付、徳米の取立、味噌醤油の仕込、何も角も切つて廻して居る。近所の評判では、四五萬もあると云ふ話。婿の東とは、あまり氣が合はず、互に敬遠疎隔主義を執つて居るが、東の妻——長女は深く乃爺を信仰して、事毎に叱る良人よりも其父に相談に來る。今日も良人の介抱を小女に託して、町まで藥取りに行くを口實に、實家に相談に立寄つたのである。

「而で、卿が相談と云ふのは何か」

「相談と云つて外ではありませんがね、良人でも彼通り不自由な體にはなりますし、此頃はめつきり弱つて參りましたのですよ。其上にまた今度の樣な怪我をする樣では——醫師はもとの樣になると云ひますけれど、加之機嫌が惡いと云つたら腫物にさはる樣にして居ても叱られ通しで、辛抱も何も出來はしません。吾でも居たら些は宜からうかと思ふのですが。第一父親が盲目になつて母親が汗水になつて稼いで居るに、子息ばかり悠々と西洋料理を喰べて學問學問とべら〳〵異人の眞似をしなくたつても宜いのですからね」

「云、而で？」

「其で何なら吾を喚び返して、良人の機嫌も取らせ、家内の世話もさしたいと思ふのでございますよ。吾も最早十八ですから歸つたら私共二人に樂さす位の事は出來ようと思ひますが—」

「其は出來なくてはならんさ。金の千圓も二千圓も資本を注ぎ込んで、五十圓そこらの月給がとれんぢや割が合はん話ぢや。親の世話を子がするは當然の事ぢや。吾も最早歸つて實地の學問をするが宜い」

「でも困つてしまふのですよ。盲目になつたことも云つてやるなと云ふのですからね。乃公が死んだつて、歸つて來る要はない——此樣な調子ですからね。如何してもわたくしから云つてやられないのですよ、知れたら大變ですからね。それで阿爺から一通吾に出して下さいませんか。狀袋は此處にありますから」吾が母は横字の表書—吾が送つたので——した角形の封筒を取り出した。

「左樣さの—」坂井老人は頭を撫でた。丈夫な質なら引受けて損にならぬが、引受く可からざるは他の一切の責任である、殊に江戸から歸るではなし、西洋から歸るとすれば旅費も二十圓三十圓の事ではあるまい、其では旅費の御加勢と來られては、容易ならぬ事である。と云つて、斯まゝにして置いては、東の家も終には立ち行かず、此方に引背負ふ樣になつては此また容易ならぬ次第である。

やゝしばし思案の頭を傾けて居た坂井老人は、忽ちはたと膝を拍つた。

「斯うしたら如何だ。卿の家の三郎の實弟、何は何とか云つたな、それ東京に居る、醫者さ、立身をして居る——」

「青柳ですか」

「云、其青柳々々、青柳に卿から手紙をやつて—乃公からではいけぬ——斯く〳〵の事情で吾を呼びかへしたいが、直接では困ることもあるから、何なら其方の考の樣にして、其とな

く歸を促しては呉れまいか、と然賴んだら如何ぢや。晉も最早十八ぢや。何、旅費位は都合して歸つて來る」

（三）

坂井翁の入智慧で、書簡は甲州から東京の青柳へ、青柳からカムブリッヂの晉へと廻り、晉の歸朝を促したが、其書翰の西へ行く〳〵騷々しい明治の二十年は暮近くなつた。

東老人が千寵と賴む一間の茅舍を繞つて、冬は無限の寒と無限の無聊を齎した。左腕の怪我は、老人だけに醫師の豫言程速やかには治せず、嚴しき寒に催されて劇痛は安眠を礙げ、今迄覺えなき手足節々の痛をすら惹起して、食甘からず、居安からず、日々出入る村の者も今日は昨日より窶れの見ゆるを笑止がつたのである。

東老人自身も日毎に吾活氣の燃え下るを感じた。盲目にこそなつたれ、左腕をこそいためたれ、今年六十に猶とゞかず、髮こそは白くなつたれ、未だ老いたりと云ふ齡にもあらず、世に要なき身にもあらず、此まゝに衰ふるは吾ながら不覺と氣を取り直して見ても、今日此頃のさまは最早殘少なになつた薪の新に加ふるものはなくて唯燃え盡すを待つ有樣であることを自覺せざるを得なかつた。而して其燃え盡すは何れの時であらうか。燃え盡したあとは、無限の闇黑であらうか。恐ろしく短氣になつて居た良人の近頃は默然と終日唯沈吟するを不思議と細君は思つた。

村はまだ霜月、併し陽暦で行く東家では、形ばかりの餅搗きも濟み、門松も樹てた十二月廿八日。今日も朝から粉雪の降つては止み、止んではから風の烈しく吹き荒れて、明けたかと思へば早暮るゝに間もなき頃、床の小さきに不似合な鎧櫃大小を飾つた奥の六疊の柱に倚つて、焦茶の色は褪め果てた秩父大縞の廣袖に萎えた小倉をきちんとしめて、左腕は頸からつり、右手を炬燵にさし入れて、東老人は少し仰向き加減に、今うつ次の間の八角時計を聞いて居たが、

「四時か、最早暮れるな」

斯く獨語つて、其見えぬ眼を閉ぢた。

外には防風林の欅を搖つて凄じい風が吹き通る。臺所には、何かくど〳〵小婢を叱りながら、細君が熨斗餅を切る音が聞える。

其響がさま〳〵の事を東老人に思ひ起さした。

五十年の昔、江戸は麹町の邸に其響を聞いた事から、懷しい父母の面影、其頃の世のさま、其後の變遷、維新の痛恨、二十年來蟄居の鬱懷、は今更に東老人の心に繰返されて、吾ながら不覺の落涙を禁じ得なかつた。

其れから年の暮と云ふにつけて、其一年間の出來事は、繪卷物の如く腦裡に浮んだ。短かいと云へば夢の樣に、長いと云へばまた百年も經た樣な一年、多事の一年であつた。其春には、二十年ぶりに東京を見て、薩閥と云ふものゝ振舞を眼のあたりに見、危く其奴隷の一人とされる所をふり切つて歸つた。其秋には何の罰かは知らぬが、兩眼盲して東西を分たぬ身となつた。加ふるに、此怪我、加ふるに此衰弱、果して明年の歲暮に會ふを得るであらうか。

斯く思ひつゞけて、東老人は足音の近づくも知らなかつた。

「良人、手紙が參りましたよ」

「手紙？　何處から？」

「佐藤さんですよ」

「佐藤――近頃は頓斗よこさなかつたが。讀んで見ろ、讀んで見ろ」

細君は徐に讀み始めた。東老人が盲して以來、事情を知つた先方の手紙は多く假名を用ゐてあるので、細君もほゞ讀み得られるのであ

つた。

拜啓押つまりかんき日々相つのり候御老たい御きげん如何に候や偖小生も此度はからずしまながしの身と相成候

「何だ、島流し？　また讀み違へをするな。讀み直せ、讀み直せ」

「でもちやんと、し、ま、な、が、し、と假名で書いてあります」

「然か、何でも宜い、まあ讀んで見ろ」

二年間は東京の三里いないにふみこむこと相成らぬ身となり申候是れしかしながら餘りはんばつをいぢめしたゝりと思へば泣く子と政府にはかたれ申さずとあきらめ申候最早御承知なるべしわれ〳〵同志の火の手あまりつよく候より政府も思ひきつて此追ぱらひしゆだんをとり候次第にて此ありがたきほあん條れいの御かげをかうむりし者は小生の外に四百めいも是れあり候皆二年三年は都落いたすわけに候ぬらくら政府には近ごろくわだんのしうちしかしわれ〳〵も土を捲いて重ねて來るの日をまちてひとまづ恥を忍び

「暗くて讀めはしない――吉、吉、洋燈をつけてお出。日が暮れるに、何をぐづ〳〵して居るのだらう、本當に氣が利かぬ」

（四）

少婢が齎らした洋燈の光は、東老人が異樣の顏色を照らし出した。

「讀まんか、何を愚圖つく。こら、さつさと讀まないか」

「一寸待つて下さい。此樣に心を出すものがあるものか、本當に卿は、吉、卿は――」

「早く讀まんか」東老人が右の拳ははたと炬燵の櫓をうつた。

細君はくど〳〵呟きながら、また讀みつゞける。

恥を忍び、ひと先づ東京を引あげて當横はまへ下り候新ぶんは禁止され東京は追拂はれ落武者のていたらくわれながら笑止千萬御一笑可被下候所詮今一兩年は面白き狂げんも出來申す間敷小生は此間に外ゆうを試み候筈用意出來次第出發米國より英國に渡り候得者賢息にも御面會を得ることと相樂居候はいぐんの將は勇をかたらず何も右まで猶少しかたづき次第重ねて得貴意まをす可く候御老體千萬御愛護是祈早々不備

月　日　　佐藤生

東先生

虎皮下

勝に乘つて思はず虚を擣たれ散々の敗軍面目も無御座舞踏漁色の英雄共に斯樣な思ひ切つた所作が出來ようとは些意外の方に有之候

併しながら假令死物狂ひになり候共彼連中の壽命は知れたるものに候

やがて面白き狂言を御覽に入れ可申隨分御自愛を祈る

三度まで手紙を讀みかへさして、東老人は唯大息をついた。

「良人、また痛みますか」

東老人は默然として居る。

「痛みますか」

「何？」

「何つて、手が痛みますかと云ふのですよ」

「呍――卿は氣樂だな」

「わたしが氣樂？――氣樂？　氣樂ですよ、何もかも女の手一つですからね――どれ、臺所に遊びにでも參りませう」細君は何時になく突と立つてしまふ。

東老人は終夜眠らなかつた。
明くるを待ち兼ねて、知る限りの家から東京の新聞を借り集めさせ、息をもつかせず細君に讀ませたが、何れの新聞も佐藤の書翰と符合して、驚ろく可き事實を傳ふるのであつた。
今は疑ふ餘地も無い。關ケ原は見事味方の總敗軍となつたのである。
東老人は眞額に其打擊を受けた。七ケ月前向島の楢山が別墅で、彼藤澤が、「六個師團の兵もある、警察もある、何時でも御相手申す」と揚言した一句は、今ひしと手答したのであつた。
素より初から觀望の地位に立つて居た。政府を信じぬ如く、民軍の力も信じなかつた。烏合の兵が騷いだ所で、所詮物になる可くも思はなかつた。若し此烏合の衆に、藩閥政府の根城が然容易に攻落されるなら、東老人は恐らく苦笑して凱歌を擧ぐるに躊躇したかも知れぬ。
併しながら敗北は全く東老人の同情を民軍に吸ひとつたのである。勝は吾勝でなくも、敗はまさしく吾敗北の感をなしたのである　迅雷耳を掩ふ間もなきクーデターは、都門の外に騷ぐ寄手を逆擊ふ手段に止まつたか。否、寄手の陣をかけ離れて獨り甲陽の草廬に病に臥す失意の老翁の頭上に霹靂の如く落ちかゝつたのである。
東老人の腦中には、七ケ月前楢山別墅の光景が突如として現はれた。笑を帶びて、傲然、戰を吾に挑んだ藤澤一輩の顏が現はれた。而して蜘の子を散らすが如く都を落ち行く民軍の敗兵を千代田の城上から目送つて、彼等が手を拍つて笑ふ狀が、畫くが如く現はれた。遙かに甲州の方を指して、頑固老爺め、手並を見たかと、どつと笑ふ聲を在るが如くに聞いた。
而して東老人が憤怒は烈火の如く燃え起つたのである。
併しながら怒火は味方の敗兵を集むる篝火ともならずして、徒に其病衰の身の精根を燒き去るのみであつた。
せめて一矢は相酬いねばならぬ、ともとは塾生今は小學教員の某生を呼んで、藤澤楢山に宛てた長文の一書を口授する最中、東老人はふらふらと俯伏しに昏倒した。

（五）

醫師に診すれば、腦溢血、輕症の方ではあれど、衰弱の上なれば萬一を保し難し、一切神經の刺戟亢奮を避け、安靜療養を專らとせられよ、近親の方の遠方に居らるゝならば今の內に知らして置かるゝが安全、と細君に密々に告げたのであつた。
またしても細君の里なる實家に、相談の結果として手紙は東京なる青柳に、急いだ。而して青柳から一通の電報は甲國に飛んだのである。
東老人は半ば人事不省の中に年を迎へた。
枕頭に氷嚢を押へて居る細君はさまざまにとりとめもない良人の譫語を聞いた。
「さあ今だ——切り込め」而して細君は良人が揚ぐる鬨の聲に慌て惑うた。
「藤澤め、大概にしないか」而して細君は良人が右の拳のあがるに愕とおびえて飛退いた。
併しながら頻りに口に上るは、晉の名であつた。
「晉、歸つたか。いや、大きな男になつたな、はゝはゝゝゝ。幾歲？　十三？　十三か。はゝはゝゝ。晉が髭を生やした、見ろ、見ろ、腕白め、歸つたな、よく歸つたな、はゝはゝゝゝ」
而して細君は氣味惡げに四邊を見廻して身震ひした。
時々は頻りに瞼を動かした。眼が開かぬを不思議に思つたのであらう。時々はまだ癒えぬ左腕を動かして、苦痛に叫んだ。併し苦痛を感ずる樣であれば、まだ頼もしいと醫師は云ふので

ある。

正月の四日、今日は少しはつきりして來たと云ふ日に、珍らしく青柳國手がわざ／＼見舞に東京から來た。

「良人、々々、東京からお出になりましたよ」

「東京から？　東京に行つて居たのか、晉には」

「否、私です。青柳の十郎です。御分かりになりますか」

「呍、青柳、十郎、――呍、十郎か、はゝはゝは、十郎か。晉ぢやない、十郎か」

至尊に侍する忙しい體を、參賀を仕舞ひ、年賀も大臣と局長だけにして置いてわざ／＼東京から來たものを、と尋常ならばむつとす可き所であるが、寬洪の青柳國手は寧ろ憐憫を催した。胸の金鎖をいぢりながら、病兄の一年足らぬ間に變り果てた容貌、かけ蒲團の襟の汚れ、毛布の色褪め、近頃掃除もとゞかぬ、六疊の取り亂した薄ぎたなきを見廻して居たが、枕近くすり寄つて、

「御病體は如何です。非常に御無沙汰を致しました――どうも御上の御用が多いものですから」と茶を持ち出づる嫂を顧みた。

「如何致しまして、遠方でございますから――良人、々々、青柳さんが御挨拶をなすつてお出なさいますよ」

「然か」

「また種々澤山にお土産を戴きました」鷄肉エキス、ビーフチー、コンデンスミルク外種々の土産を大盆にのせたのを、細君は枕邊に持ちよつた。

「然か」

「然かつて良人、何とかお禮を仰有つて下さい」

「否、其樣な御心配にには及びません――御氣分は如何ですか」

青柳國手は探手して、いで脈を診んと病兄の右手――骨あらはな、併し撃劍を勵んだ名殘は節高な松枝を欺く五指にあらはれた其右手――をとると、突然東老人は其手を拂つて、寢がへりうたん／＼ともがいた。

「良人、ま、如何なさるのです」

「はゝはゝゝ。死ぬるに、兄弟も土産もいるものか。歸れ、／＼、忙しからう、直ぐ歸れ」

「ま、良人、何を仰有るのですよ。お忙しい中をわざ／＼東京から來て下すつたのではありませんか」

「忙しい中を來て呉れては、氣の毒ぢや。はゝはゝ、商賣の邪魔にならうに、早く歸れ」

「ま、本當に――あなた、病氣の故ですか、此頃はもうわたしでさへ――」

細君は口を噤んだ。青柳國手が頭を掉つて窃と晦したのである。

上流社會に出入する國手の事で、目上の者儘な患者扱は馴れきつて居る。天性の寬洪に加へて、職掌の上の經驗は何事にも微笑する驚く可き忍耐を與へ、忍耐に加ふるに驚く可き人の機をとるの術を以てしたのであつた。

國手は其一秒千金の貴重な時間を友愛の爲めに割いて、一夜半日を病兄の家に費した。此一夜半日の間に、國手は鹹辛い嫂の料理を八百善より結構と賞めて、盡く嫂の心を得た。甲府の醫師を呼んで、處方を聞いて、二三の注意を與へて、あなたと云つて恐れ入らした。坂井の老人と一時間の對話に、都門金融の話までして、同じ兄弟でも婿にするなら此方が好かつた、と内々舌皷うたした。

剩へ病兄の枕頭に坐して、寶石光る手に氷嚢を押へた。手づからビーフチーの一盃を煎じて薦めた。寢がへりを扶けた。まだ其れよりも、晉が歸朝を專斷ながら電報で促して置いた事――東老人は怒つた。併しながら青柳國手は其怒の意味を知らぬ程のうつけ者では無かつた――多分留守に返電が來て居るであらうと云ふ

事、吞邉電所ではなく晋其人が無論已に歸朝の緒に添つて居る事、晩くも二月下旬までには歸るであらうと云ふ事を徐々に持出して、何時しか病兒の心までも幾分か緩かしたのであつた。

暫くして暇乞、青柳國手は暇を告げた。實は百日でも千日でも傍について居て介抱したいのであるが、他の患家とは違つて、貝きあたりの御指も氣にかゝり、其れから貴多き患者の中で、某公爵の令孫、某侯爵の病室、某伯爵も代診には任して置かれず、某伯爵夫人が乳癌の手術、某子爵令嬢の遊藝も自身にしなければならず、要するに歸らねばならぬので、其で一先づ歸京しなければならぬ由を告げ、猶殘つた容體もあるなら電報で知らして下さい、其れから何によらず遠慮の御手傳があらば御遠慮なくと返禮の出來の無いをしたゝかに苦にする嫂に糟と云ふ、伴ふて、青柳國手は自慢として暇を告げた。

白酒、葡萄酒、時計の類、寶石の紅、派手な音器、青柳國手が身と共に此等を持ち去つたので、あとはまたもとの靜けさに復つた。

國手去つて三日ばかりして、一通の書状は一月二十日の日附ある晋が逐信と共に名の識交を添へて東家に達した。明日リヴァプールの港に乗り、米國を經て急行歸朝すると云ふのであつた。

「あゝ晋が歸るか、歸るか」

少なくも狂喜するであらうと期して居た細君は良人の冷淡を訝つた。東老人は此日から靜かに臥してあまり言はなかつた。翌日は衰弱の微かと危んだが、細君は良人の近年になくおとなしきを喜んだ。

東老人の遺言で、使邊近く四十幾個の珠を貫ける珠數の半ばが置かれた。四十幾個は倫敦から甲府への日數を勘算したのであつた。あまり靜かなので、細君がさし覗いて見れば、東老人の自由に利く右手に彼珠數を握して居る。足音がする毎に、最早日が暮れるか、と問ふのである。日落毎に珠の一個は除かれて、數の次第に減り行くを盲目の父は子供の如く喜んだ。

第十五章

（一）

雪降りしきる二月の某日、新橋停車場は時ならぬ花を咲かした。歐洲某國使の喪事の式に參列の爲め、英陸軍將校宮殿下同妃殿下の御出發御見送の連中が雲の如く場内に充滿したのである。

高帽にフロックコオト、軍服に勳章の閃き、花やいだ小紋の色、白襟紋付など、構内に入り亂れて、爵位富豪の其何れにかぶつかるでは寸步も動し得まじき雜沓、に令室の燦爛火花盛んに、笑語のさゞめき谷水の瀬もまじる多人數のいきれ、場外の寒は忘れて、實に扇も欲しいのであつた。

「一寸、御覽遊ばせ。彼丸髷に結つてお出のが、先頃婚禮なすつた喜多川伯爵夫人ですよ」

「まあ——彼が何とか云つた待合百姓の女でございますか」

「あら、御存じないの。彼は御親類の數遠い令孃ですわ」

「あらまあ、然ですの。でも彼樣な人によくく嫁かれたものですねえ」

「だつて自身で居るより好いのでせう。ほゝゝほ」

など小聲が隅の方で囁く、男子の方の話題に、專ら新任外務大臣に關して居た。

實に藩閥の常套手段に、一驚を喫した世間には、保安條例執行後四十日とたゝずして、藩閥方共民間黨の大頭政府の最大敵と認めて居る其候

爵を引ぬいて外務の椅子に据ゑた寝耳に水の珍聞に再驚を喫したのであつた。風說百出、揣摩臆說、要するに一も要領を得ないので、政海の潮流の皮相をのみ見る者は不可解現象として疑惑の中にさし置き、年若の下僚などには新長官に對する態度のとり樣に惑ふ者もあつて、發表後殆んど一週日を經た今日までも寄るとさはると其が話の題目となるのであつた。

併しながら幕下の云々は、幕内の耳を汚すに足らぬのである。しれ/\笑ふ須藤正を相手に額に皺よせて何か話して居る木下伯、羅漢の如く澄した長田伯を除くの外は、藤澤伯、白井伯、南條伯、長倉伯、小峯伯、楢山男以下閣の內外、陸海軍の大頭株、皆さり氣なく一隅に談笑して居る。而して先頃までも政敵であつた其連中の眞只中に、金吾中納言を學ぶは差手措き、煖爐近く陣取つて、外務の伯は頻りに長廣舌をふるつて居る。

「併し我輩の樣に、西は長崎、東は此東京を一寸も踏み出さぬ外務大臣は、恐らく空前絕後かも知れん」

「佐賀人は居ながら西洋を知つちよるごあすな」

南條伯が笑つた。

「何、子分をやれば、わざ/\西洋まで膝栗毛を乘り出すには及ばんさ」鵜飼子が苦りきつて新外務の顏を見た。

「否、若い者は洋行に限る。吾輩にやらすなら、何だ、京城三里外は面倒さ、旅費を呉れて盡く洋行さす所だつたね。三年もして歸つて來れば、おとなしくもなる、役にも立つ。嘛、長倉さん、其位の費用は何でもないね」

長倉伯は唯笑つて居る。

「僕は衞生上から元老の洋行を望むですて」赭顏の軍服を着た大男が突然口を出した。「西洋に行けば自然不品行も出來ないし、元老の保養は、氣候よりも西洋に限るですね」

「成程、其なら洋行黨の旗頭はさしつけ藤澤さんごあすな」

皆哄然と笑つた。區々の引力にひかれて立ちつどふ傍聽者の中に立まじつて恭しく聞いて居た青柳國手もわづかに微笑を敢てした。

（二）

折しも琳々と鳴り渡る鐸の響、待合室は總立となつた。

階上の休憩室を下りて、妃殿下の御腕を扶けつゝ、他の皇族の方々と、驛長の先導につれて英國使宮殿下が徐々に乘車し玉ふ後から、御見送の總員次第に繰り込み、横濱行は前後の車室に、餘は隙間も無くプラットフォムに溢がつて、男は帽を脱ぎ、婦人は姿を正した。

プラットフォムの此方には、昔も横濱から着した列車の昇降口に驛夫が立つて、乘客を下ろさず。知るも知らぬも、窓に集まるを、「こら/\」帽をとらんかと職務大事の巡查が頻りと咎めて居る。

「青柳君、々々—」一足おくれて後列にとり殘された楢山男が青柳國手を顧みて小聲に囁いた。國手は絕ゆる時なき微笑を湛へて、近寄る。

「彼を見玉へ—」と楢山男は彼方の列車の唯有る車室を顋で示した。「見た樣な顏と思つたが、何處か斯う君に肖て居るぢやないか—」

微笑を帶びた青柳國手の眼は彼方の下等室に注いだ。今しも巡查に咎められて、憤然帽を取つた洋服の若者が、眼を光らしてプラットフォムの華やかなる群衆と見渡して居たが、眉をあつめて頻りに其方を見つめる國手とふつと眼を見合はして、彼若者は目禮した。

「やあ——」國手は二足三足歩み寄つたが、恰も場内に響き渡る汽笛の一聲に、驚いて、氣

をつけ正面の態度をとつた。
一齊に低るゝ御見送の群衆の頭越しに、宮殿下の會釋し玉ふ影がちらりとすれば、雷の響を起して、列車は搖き出した。
列車の尾がプラットフォムを過ぎ終るより早く、御見送の群衆は忽ち崩れて、履物の音、談笑の聲、宛ながら蟻穴を覆へす觀が起つた。
「お待ちなさい、〳〵」驛夫は猶彼方の列車の扉を押へて居る。
扉を開けんとして手荒く驛夫に押戻された彼の洋服の若者の眼は閃いた。
「待が些澤だ」
「[illegible]が後ですな」
なにしろ車内の客が指すを、彼洋服の若者は苦笑してそろ〳〵流れ行く人の川を眺めて居たが、やがて[illegible]と、古びた[illegible]を[illegible]、中程の古びた革嚢を兩手に提げて、やをらプラットフォムに下り立つた、十七八の締めて小柄な[illegible]、色黒い[illegible]悉く來た[illegible]方の方を知らず、[illegible]を[illegible]て居る。濃い[illegible]に同じ色の外套、黑い[illegible]の帽を[illegible]て、[illegible]方を見[illegible]して居たが、群衆をかき分けて寄り來る青柳國手を見ると、帽をとつて一禮した。

「見違へる程大人びたね——今着いたのか」青柳國手は例の微笑を吝まぬのであつた。
「は」
「早かつた。今四五日はかゝるだらうと思つて居たが——變りもなかつたか」
「は——[illegible]は——」
「今朝電報が來たが——先面白くない容體だな。何でも非常に待つて居なさる樣子だ。わしも先頃も行つて來たが、實は今日あたり一寸行つて見ると宜いが、何しろ眼が廻る程忙しい體だから——併し此處に立つて居た所で仕樣がない。先彼方へ行つて、話すとしよう」
打連れて改札口を出ると、馬車を待つて居た檜山男が青柳國手に微笑をくれて、件の若者をおいと見た。
「一晉、檜山男爵で御出ぢや、阿爺の事で種々御配慮下すつた——恩人です」國手は若者から檜山男へと眼を走らす。
「これ、東君の——成程、[illegible]が待て御出と思つた、[illegible]英國に御出だつたさうだが」檜山男は美髯を撚つて、しげ〳〵晉の顏を見る。
「ケムブリッヂに居たのですが、何です、愚兄の病氣で今度歸つて參つたので」點頭したきり默然と棒立の晉を尻眼にかけて、國手が取做した。
「成程、東君の病氣は如何かね——吾輩もつい忙しいもんだから御無沙汰をして居たが、はあ、左樣其は不可ぬ——」檜山男の額に微雲がかけた。一角の[illegible]を東老人がすげなく[illegible]つて歸つた當時は、小癪なと[illegible]にも障つたが、やがて一笑に附し去つたあとは頓と東とも三郎とも忘れて居た男爵も、[illegible]を[illegible]む[illegible]の[illegible]は[illegible]して居るのである。「實は東君も[illegible]の云ふ通りして御出だと、或は今日の病氣もなかつたかも知れん——吾輩も一臂の勞を厭つた譯ぢやないが——併し過ぎた事は詮方が無い」
若者の顏色を見て檜山男は急に話頭を轉じ去つた。「何卒阿爺に宜敷、氣永に保養なさる樣にと云つて呉れ玉へ、——其れとも何か御用でもあつたら遠慮なく——何れまた御出京ぢやらう、其節ゆつくり西洋話でも。では——」
氣輕に點頭して、檜山男は馬車に乘つた。
「檜山は好漢ぢやないか」青柳國手は若者を顧みた。
晉は猶默然棒立に立つて居た。

（三）

新橋停車場を出づる數百の馬車、人車に踏み

にじらるゝ雪は、止みつ、降りつ、翌日の午頃迄に、甲府の街の富士見橋を二尺の餘も埋めた。往來は絶え、人聲も無くして、死せるが如き寂寞の中を、時々庭樹の枝の雪の重みに堪へかねて折るゝ響が凄まじく貫いて走つた。其中突然と吹き出した嵐、地上樹村皆舞ひ立つて一天濛々とした雪煙。搖ながら鎖す雨戸は弓と撓んで、燈の火しば／＼消ゆるのであつたが、夜と共に嵐も靜まつて、無限の寂寞は深く大地を掩うた。

東老人が病床のほとりには、一燈幽かにもえて居る。其燈の光よりも病者の命は幽かになつた。

＊　＊　＊　＊

彼病床に此衰弱、其れで容體の宜い方なのが不思議と甲府の病院長某が許つた其も一旦の事で、枕邊への珠の其數半に及ぶ頃から、東老人の樣子が變つた。

晝となく、夜となく、五分眠つては十分寤め、さむる每に「最早晉は歸つたか」と云ふ。「何、未だ歸らぬ」と嘘を云へ。「耳があるぞ。今の聲は晉ぢやないか」と云ふ。「其れ戸をたゝいて居るぢやないか。早くあけてやれ、開けてやれ」と云ふ。果ては怒つて、起きんと藻搔く、と思へばぼつかり、心の眼が明いた樣に、晉が船に醉つた所を夢に見た。「蒼い顔をして居たぞ。最早太平洋に乘り出した時分ぢや。西洋から歸りたては、食物が違うて腹がわるくなる。歸つたら町へパンを買ひにやるが宜い」などと云ふ。其れかと見れば、「馬鹿め、愚圖々々するな。死んで仕舞ふぞ。死體になつてから歸つて來てもつまらないぞ。而して高瀬舟の如く其儘にしたゝるのである。確かに強に極度まで張りつめられたのであつた。

斯る狀態が一週日もつゞく、と、突然容子がまた變つた。日又日、夜より夜に、唯昏々として睡るのである。細君が揺りさましてソップをすすめると、臥しながら一匙つゝ嚥下して、「最も終でございます」と云へば、返事もなくて直ぐうと／＼となる。譫言もせず、身動きもせず、唯息が通ふばかり、其呼吸も時々は餘りに靜かなので、細君は枕頭にさし寄つて、良人の口に手を當てて見ることもあつた。

次第に此容體の變化の間は短かくなつた。明るみ、暗み、燈の油、次第に盡くるのである。電氣をかけに醫師が來る每に、晉の歸期を問うた。

或日もとの寮生某が見舞に來て、世間話の末に、外務大臣更迭の一條を物語ると、病老人の氣色が變つた。「裏切したか」寮生某は新外相の指揮の下に立つ其黨に籍を置いて居たので、一言二言辯疏すると、東老人は烈火の如く怒つて、醫藥の益も此れまでと、蒲團をたゝいて、逆擲つた。併しながら怒火は一時に生命の油を吸つて、其跡のとの衰弱は甚しく、東老人が枕頭に終に臨む時なきかと危まれた。

醫師が皮下注射を施す、細君が東京に電報をかける。髙井老人すら十六盤をさし措いて、嫁の枕邊へ歸つた。

併しながら眠りつゝあた頭には未だ容易にきれなかつたのである。

東老人はふつと氣づいて、右手は枕のあたりを探つた。「あゝ御氣がつきましたな」「誰は誰だな」醫師は名を云つた。「あゝ、然か。晉は未だ歸らないのか」病老人はソップの一盃を嚥下し、寄りこぞつた者には一先づ引揚げた。

二月八日　九日の雪は寒ながらある程の煩惱を埋めて、東老人は近頃になき良好の容體を示した。乃公も眼は見えぬが、病氣は必ずよくなる。何、杖が折れたか、惜しい事をし

た、吾が大好きの柿であつたが。未だ中々着くまい。横濱に着いたら何とか知らすだらう。見苦しくない樣に片づけて置け。——細君は初めて眉を舒べた。

伴しながら其日の午過ぐる頃から吹き出す嵐と共に、東老人の心はまたさまよつた。船が覆る、それ〳〵、其繩を。はゝはゝ、彼奴め裏切をしたな——、藤澤——不埒——今に見ろ。やつ、斬れたか、刀々、槍を持て來い——退くな退くな、死ね〳〵。手を蔑にして蹴らな背を咬み鳴らす良人を細君は靜めかねた。

夜に入つて、嵐が靜まると、東老人もうとうととなつた。時々中に誰か呟いて居たが、夜が更くると共に、譫言も止んで、昨時に不規則な寝息の間に哭くが如き呻吟を漏らして居る。

柱時計が十一時十五分を報らす音に愕とさめた細君は、一寸良人の寝顔を覗いて、炬燵にもたれながら、縫ひかけの綿衣をとりあげたが、またふら〳〵と居睡つて居る。

（四）

突然、戸を敲く音が聞えた。

ふつと眼ざめて耳傾けた細君は、「吉、々」と呼んだが、返事が無いので、洋燈をとつて表口へ出る時、勝手の方に戸を敲く響が聞えた。

「誰だらう、今頃——」

呟いて、洋燈片手に勝手の戸を少し引あけた。全身眞白斑になつた洋服姿が、ぬつと光の中に現はれた。

「呀、お前は——」

珂樂と響して、あとは眞暗。奥の方から今吾めたらしい長呻吟が聞えた。

「ま、如何せう——良人、々々、吾が歸つて來ましたよ——此雪に！——お待ち、今あかりをつけるから——附木、々々、吉々——何と云ふ寒さだらう——吉々」

辛らじて燈は再びついた。

「阿爺は如何ですか」吾は吻と息ついて、どつかり上框に腰を下ろした。

「阿爺は毎日毎日にち待つてばかり——でも此雪に、よく歸つたね——大きくなつて——車で？まあ、其樣、歩いて、左樣、沼津から馬で、甲府から歩いて、其樣——あゝ左樣、昨日東京から徹夜で——左樣、荷物はあとから——左樣、横濱から電報をうつたつて。如何して着かないのだらう——其れ〳〵、吉、ぼかんと見て居るやつがあるものか。靴をとつて、雪をはたいて、鼠がひかぬ樣に下駄箱に入れて——凍えさうだつて、然だらう、吉々々、早く湯を持つてお出、顔を洗ふのぢやない、[illegible]お飲みなさるのだから——お待ち 其雪だらけの服は脱いで、今着物を持つて來るから——吉々々、洋燈が無けりや行燈をおつけ——手が凍えたろ、其火鉢——まあ火が無い——本當に仕樣のない」

「吾——吾」奥から[illegible]聞えた。

手を揉み、[illegible]、[illegible]と仲介、上衣、洋袴を脱いだ吾は、母が持つて來る未だ仕立上らぬ綿衣の袖を通して、帯を結び〳〵、奥の六疊に入ると、床を半ば起き出して居る瘠果てた父の姿が眼に入つた。

「ま、良人、其樣にぬけ出て——」細君は慌てて立寄る。

「阿爺、唯今歸りました」吾は枕に頭へた。

「おゝ吾か——ど、ど、何處に居る——乃公は先頃から盲目になつてな——寄れ、〳〵、ど、どれ、應、此が手か、此が——頭か、で、吾を撫でて見たが、突然淚声になつた。「まだ小さいな小さいな、此で、何處から歸つて來たのか」

而して啾々と泣き出した。

吾はわな〳〵と顫うた。

「寒いか、〳〵、何、徹夜で東京から——應、然である、〳〵、乃公の吾は然である——あゝ

よく歸つた――吾、乃公は最う駄目ぢや」父の聲は次第に濁した。

吾は犇と父の手を握つた。火の如き涙が頰を傳うて居る。

「吾、吾、何とか云ひなさい――良人、吾が泣いて居ります……」

「馬鹿、々々、男が――吾、日本は潰れるぞ、今の樣では屹度潰れるぞ、今の天下を取つて覆さぬと日本は潰れるぞ」

「良人、また其樣な大きな聲を――」

「默れ、婦女子の知つた事ぢやない。――吾、吾、學者になるな。商人になるな。宜いか。政治家になれ。今の天下をとつて覆せ。宜いか。乃公は負けた、乃公は負けて死ぬるのぢや。汝は勝て、乾度勝て。乃公は地獄から眼を開いて見て居る――あゝ、よう歸つて來た、此れで乃公も死んで宜い。分かつたか。さ、約束ぢや、手を握れ、手を握れ――」

而して東老人は呵々と笑つた。

* * * * *

併しながら父子の會面は永くは無かつた。張りつめた氣は吾が歸來に弛み、喜の極は怨の其に等しい聲を絞り果てた頂點に加へて、容體は忽ち危篤に迫つた。

近隣の者を頼んで急使を馳せたが、醫師も、坂井家の者も終に其間に合はなかつた。

併し半夜の間に、右の半身更に不隨となつて、言ひたげに口を動かしたが、語は成らずして、汗は額に珠を綴つた。

「あつ、最早口が利けないのか」母は聲を放つて泣いた。

後から確と父を抱いて、吾は耳に口を寄せ、

「阿爺、吾です、分かりますか」

東老人は二度三度徒に口を動かしたが、

「す、吾――確、手、手」

抱いたまゝに父の兩手を吾は犇と握つた。

「吾です。分かりますか」

わづかに頷くかと見れば、がつくりと父の頭は垂れた。吾は眼を閉ぢた。

じじ、といつて、油盡きた行燈の火は消えた。父が頭は逝く夜の蔭にうな垂れて、戸の隙を漏る曉の光ほの白う吾が面に落ちた。

（明治三十五年六月作）

露の祈

今朝庭を歩いて居ると、枯萩の枝に煌々と玉が光つた。よく〳〵見れば、誰が何時撒いたのか、此枝にも、彼枝にも、紅玉、黄玉、紫玉、綠玉、蒼玉の數々、きらり、きらりと光つて居る。思はず嘆して見とれた。近寄つて枝に觸るれば、ほろりと消える。其はいつもの露であつた。いつもの露を玉にした寳石師は何處に居る？ 彼はふりかへつて、東の空に杲々と輝く朝日を見た。

あゝ朝日！

爾の無限大を以てして露に宿るを厭はぬ爾の朝日。

須臾の命を小枝に託する水の一雫、其露を玉と光らす大日輪！

「爾の子、爾の榮を現はさん爲めに爾の子の榮を顯はし玉へ」の祈は彼の口を衝いて出た。

天つ日の光に玉とかがやかば
などか惜まん露の此身を

（「みゝずのたはこと」の「ひとりごと」より）

自然と人生

> To look on nature, not as in the hour
> Of thoughtless youth; but hearing often times
> The still, sad music of humanity,
> Nor harsh, nor grating, though of ample power
> To chasten and subdue."
>
> ——Wordsworth.

灰燼

（上）の一

勝ては官軍負けては賊の名を負はされて、思ひ出づれば去る二月降り積む雪を桜花と蹴散らして熊本を出でし一萬の健児も此處に傷つき彼處に死し、果ては四方より狩り立てらるゝ怒猪の牙を咬んでこゝ日州永井の一村に追ひ込められし時、今は矢盡き刀折れて、大將は自ら兵を解きて其中に、せめて一期の思出に、薩摩隼人の此最期をば見事見せて、我此翁と最後の伴にならばやと、残る三百余人、草鞋の紐をきと引しめ明治十年八月十七日の夜をこめて可愛嶽の山路にかゝりぬ。

小荷駄をば一切取り棄てつゝ、各自に糧嚢を帯び、銃を提げ、太刀を釣り、松明も點さず、言はず、土人を案内として辺見貞先に立てば、薩摩絣の單衣に紺染の兵児帯一尺余りの小脇差を腰にぼつこみ尻高々とからげて草鞋喰ひ／＼、中軍をうつ南洲・村田貫路別府河野村山野田坂田増田の諸士前後を擁し、殿には辺見の一隊、假令敵軍にもあれ、眼前に立たむ程のものは蹴散つて行かむものと思ひ込んでは後ろに打ち守まれつ。

進軍を起したるは午後十時、先鋒已に可愛嶽の嶺にかゝれば、夜は更けて星河一天、山黒くして月暗に、風露肌に冷やかなり。敵も眠らず、見よや、山又山に燃しつらねたる篝火點々として星を欺き、左右の嶺より敵の哨兵が探りうつ銃聲に斷間もなく谺に響く。絶頂までは二里にあまる、夜明けぬ間に急げ急げと、暗の夜道山路事ともせず、今後隊の一人が岩角に足踏み辷らして谷に落ちしをも知らで、六百の草鞋ながら「明けぬ間、明けぬ間」と囁き、谷を渉り峯を攀ぢ、青葉若葉をかき分け踏み分け、次第に上り上り上り――月傾きて短夜の明けむとす。

（上）の二

短夜の月傾くと思へば、何時か山の端白み、曉寒き風にほろ／＼と滾るゝ葉末の雫、未だほの闇き谷の岩が根に倒れし男の頬を傳うて自づから口に入れば、脣顫ひ、手足動きて、何かは知らず呟きしが、忽ち、

「阿母、唯今――」

蹶然と呼ぶ聲にはつと眼を開き、やをら起き上つて四方見廻し、雲打仰ぎて吻と一息、

「歸る、歸る――と思つたが――矢張先刻落ちた儘氣絶しておつたんだな。――あゝ最早黎明だ―」

舌鼓打鳴らして、立上り、腰のあたり六つ打たゝき、手さぐり、足をさすり、其處ら邊りに落ちたる銃を採り上げ、行かむとして、忽ち山の彼方遠き喊の聲に耳傾けしが、

「やッ、後れた！」

叫びもあへず、手早く草鞋の紐しめ直し、背負へる太刀をゆり上げ、滑る足を踏みしめ〳〵、木の枝傳うて谷間を攀ぢ上りぬ。

十歩行きては立ちどまり、二十歩上りては耳を傾け、谷を渉りて嶺にかゝれば、夜はまざまざと明け離れて、萬山の朝靜かに、やがて朝日杲々とさし上りて、山鳥の聲其處此處に聞えたり。赤松の根に銃を杖つきて、息つきあへず、屹と耳を澄ます。年は十八許、面痩せて見ゆれど眉目清らに、垢染みたる洋服の上に白木綿の兵兒帶して、脚袢草鞋に身を固め、綱袋と草鞋一足腰につけ、太き眞田の紐もて朱鞘の太刀を肩より釣りたり。

良久しく耳傾けしが、物音ばつたり絶えたるに、失望の色顏にあらはれ、

「些も聞えん――最早破つたな。ツッ、後れた、後れた。たしか三田井に出るんだつたが、三田井と云ふは何方か知らん」

力なげに呟きつゝ、不知案内の山路足に任せて十町あまり上れば、山いよ〳〵靜かになりぬ。唯一度、仄かに銃聲の響ける樣に思ひしが、其すら直ちに止みて、こぼるゝ霰の音も聞ゆるばかり。幾回か立ちどまりては、空しく耳を傾け、上るとはなくまた十四五町、うす闇き杉の木立を出ぬけ、雜木山にかゝれる時、突然に横手の嶺よりどろ〳〵と足音響きて、呀と思ふ間もなく黄筋入りたる洋裝の兵士十五六人落ちかゝる樣に走り來つ。雙方はたと踏みとまり、顏見合はせて立つたりしが、忽ち「賊だ、賊だ」と叫びて、取直す兵士が銃の鷄頭キゝと軋りぬ。

此方は夢中、突と走寄つて、兩手に銃をふり翳し、眞先に吾を狙ふ兵士を横薙になぐり倒しつ。案外手もとに飛び込まれて、狼狽騒ぐ兵士等が、一人と侮り總立になりて手捉にせむとかゝるを、銃投げすてて、一人の兵士が弱腰兩手にはたと押倒し、今一人が無手と攫める背後の太刀を其まゝ敵の手にとゞめてすりぬけ、岩を廻つて元來し路に逃げ下れば、

「逃げたぞ、逃げたぞ、――うて、うて」

罵り騒ぐ聲諸共に、鬢を掠めてはら〳〵と飛ぶ彈丸を、顧みもせず、若者は崖を飛び下り、滑り下り、驀地に逃げて、忽ち杉の木立に見えずなりぬ。

（中）の一

銀杏返しの髷少しほうけて、二重瞼の愛らしき二八許の娘、西日眩しき窓に向ひて、機の上に俯きながら絲の斷れしを繋ぎ終り、杼取り上げしが、彦山颪にざわ〳〵と亂るゝ障子の樹影を熟と見て、小さき胸より押出した樣に太息つく時、

「お菊、お菊」

呼ぶ聲に、

「唯」

と答へて、機を下り、襷はづして次の間に出づれば、四十餘の白髪多き婦人、茹栗を剝き剝き、

「菊さん。お茶を點れた」

「阿母、松坊は？」

「未だ歸らないのだよ。西郷さん以來、此處等の子供までが軍の眞似ばつかり、戰爭程いやなものはないね、菊さん――」

顏見合はせて溜息一回、栗を剝き茶を喫みて暫し無言なりしが、母は娘の顏ちらと見て、

「菊さん、和女聞いて居たかい、先刻また甚兵衞が來ての」

「――」

「また催促に來たのだよ。其れから、阿爺が留守だからつて斷つて置いたが――何でも猛さんが餘程焦躁つて居るさうな。それに、甚兵衞が

話では、二三日中愈猛さんが家督相續の披露をする筈で、何でも上田ぢや御馳走の準備の手手古舞をしとると云ふことさ」

「猛さんが？　到頭――」

「仕方がないされ、覺さんは彼様な馬鹿、茂さんは居ないし、――それで、何でも其披露前に此方の事も取極めたい口振だつた。また明日も來るよ、何とか返事をせにやならんが、外と違つて彼家ぢやからの――と云うて和女も――」

「阿母、猛さんに嫁く位なら、わたしは――」

「其れだから阿爺も心配をして御出なさるの、さ。實云ふと、上田の家には世話にもなつて居るし、阿爺は和女を遣りたがつて居なさるがの、彼様な柔しい方だから、義理のある和女に其様無理も云ひかねて、まあ板挾みになつて居なさるのだよ。それで、わたしも餘り和女の肩ばかり持つ樣で、愁色々掛酌されるのが無理非道云はれるよりも餘程辛くてね」

云ひ終りて吻と息つく。

「本當に濟まないのですけど、阿母、わたしは如何しても猛さんには嫁きたかありません、上田の叔母さんだつて些は推量しなさりさうなものね、阿母」

「其がさ、上田の旦那も彼病氣からめつきり弱つて、最早舊の旦那ぢやないからの。加之、猛さんが彼様な人だから、阿母だつて色々思ひはしなさつても、頭が上らないのだよ。あゝあ、茂さんが居たら――」

「本當に、阿母、茂さんは如何したんだらうね？」

包みかねて、涙はほろりと膝に落ちぬ。

「何でも甚兵衛が話では、城山の落ちたのが先月の廿四日で、西郷さんも死ぬる、中津の増田さんも死ぬる、其れからまあ此中津近在から出た者は今まで一人も歸つた者はないから、茂さんも死んだか、降參して牢家に入つたか、彼様な勝氣な人だから一番に討死しなさつたらうつての、其で上田の家ぢや最早茂さんを亡者に定めて――」

「だつて其様なら其様と何處からか樣子が知れさうなものね、阿母。如何してもわたしは、茂さんが死んなさつた樣にや、思はれない。昨夜も、何だか痩せてね、歸つて來なさつた夢を見たんですもの」

「其は和女が始終思つてるから、其様な夢を見たのだよ。――あゝあ、猛さんが戰爭に行つて、茂さんが殘ると、宜かつたのに。思ふ樣にならぬものだねエ、菊さん」

（中）の二

お菊母子が斯く語り合ふ時、十町ばかり此方の田圃道を、鍬擔げし老爺とぼ〱と夕日の落す吾影を踏みて、辿り行く〱、稻穗摘みて、ざら〱と掌に揉んで、含んで、籾殼を棄て、何か呟きながら行くあとより、手織木綿の袷に些くたびれたる縞紬の羽織引かけし五十餘のチョン髷の男、額のあたりをかきながら、

「萬平さん、おい、萬平さん」

呼びかけられて、老爺は徐々回顧り、

「お、甚兵衛さんか。何處へ？」

「一寸竹村まで行つて來ました」

「竹村、はゝあ、園部さんかね――此嫉妬は、甚兵衛さん、中々骨が折れませう？」

「骨も折れりや腰も折れる、此れで先方が折れてくれりや骨折甲斐もあるがね――いや萬平さん、嫉妬と戰爭は最早懲々」

「戰爭と云や、西郷さんもえらう走れ廻つたが、地の下に入つちや最早仕方がねえものだね」

「左様さね、彼疫病神の御陰ぢや如何程皆困つたか知れねえ。此中津近在でも泣の涙で居る家が四五十軒はあるね、さし寄りがそれ、御屋敷の――」

「茂旦那も最早愈駄目かね」

「まあ其樣なものか」

「フヽム、茂さんが駄目となつちや、大旦那や奥樣はこら非常御力落したね。ぢやが、甚兵衛さん――」

「？」

「猛旦那にや西郷樣は福神樣だね」

「違えねえ」

「西郷さんが在なけりや戰爭がなしと、戰爭がなけりや茂さんが在るしと、茂さんが在りや、ね、其い、何だから。最早此れから猛旦那の天下だね、邪魔者ア亡くなる、兄貴は馬鹿、彼大身代は一人の有で、加之彼美しい孃さんまで押領めちまふた、こら、何ちふ果報者ぢやろね、甚兵衛さん」

「違えねえ。何も命あつての物種さ。茂旦那も、戰爭に行かずとぢつとして居て見なさい。彼氣に入りだから、猛旦那が如何踏張つた所で上田家の財産は先半々されね。戰爭に出たばかりで、何千何萬と云ふ身代は棒にふる、とどのつまりア岩墓一基、好いた同士の彼お菊さんまで奪られる――尤も此丈はおいそれたア行くまいがね――其女まで奪られるた、餘程つまらん話ぢやないか。反之猛旦那を見なさい、意地悪の、やれ怖い人のと、蔭ぢや何と云はうが、面と對つちや皆ぴよこ／＼頭を下げる、斯う云ふ甚兵衛がちよこ／＼御使者に行くぢやないか。猛――」

忽ち背後に戞々と馬蹄響きて、二人がふりかへる時、馬は既に數歩の内に迫りぬ。馬上なるは二十二三の眉濃き男、白小倉の馬乘袴をはきて、竹の鞭を持ち、和鞍置いたる栗毛の馬に乘りたり。

忙てて片寄りながらチョン髷の男は小腰をかがめ

「旦那、御遠乘の御歸りでムいますか」

鷹揚に唯頷き、七八間行き過ぎしが、忽ちふりかへり、

「甚兵衛」

急ぎ足に追ひかけ、

「唯」

「如何だい？」

後れじと馬のあと尻追ひながら、「唯今丁度其歸途でムいますが――今日は生憎彼方の旦那が御留守で――」

「留守？　何を愚圖々々しちよる？　甚兵衛、最早何日になると思ふか」

甚兵衛は頭をかきつゝ、馬に引添ひ、「いや旦那樣、決して疎略に致します譯ではムいません。最早先方も半分以上出來て居りますので――何卒今二三日、此甚兵衛にお任せを願ひます」

「貴樣が出來なけりや、別人にさすから、其樣思へ」

濃き眉を蹙つて鋭く光る眼に、熱と甚兵衛が顔を見やりつ。一鞭あてて走せ去りぬ。

甚兵衛は追つて老爺と顔見合はせて、吻と一息。

「如何だね、甚兵衛さん？」

「いや、弱つた」

「今度の代がはりぢや、村も餘程こたへる哩」

太息つきて語り合ふ頃は、馬上の若者は早や一町ばかり行き過ぎつ。眉を揩めて、罪もなき道邊の楊柳の枝を打折り／＼走せ行きしが、

「急くこたない」

獨語ちつゝ、足搔をゆるめぬ。見渡す田の面は夕日に榮えて、限りなき垂穗の宛ながら新しき主を迎へて平伏せば、野唄歌うて其處此處に中稻刈る男女も馬蹄の響に手拭脫りて小腰かがむるを馬上より見下しつゝ、畦路傳ひに五六町、行手の丘の麓に當りて一叢茂れる大樹の間に漏るゝ壁白く瓦黑き一構の邸より、碧き煙の立上るを眺めて、馬上の人は笑み、馬は野風

に耳傾けして門口に暫く夕陽の影を踏みつゝ田圃道を行き盡し、榎の木の下に無縁地藏の彳ませ給ふ邊より横に折れ、細流に架せし一枚石の橋を渡りて、早や屋敷近くなりし時、仁王の如き大男門口に出で來り、手を翳して此方を望みしが、やがて馬上の若者の緩々と乘りつくるを、門前の石階三四段遽しく下りて麾き、

「猛、猛、猛」

「何かね、覺さん」

馬上の人は悠々と手綱を結びつゝ、

「歸つたよ――歸つたよ――茂が」

「茂が？」

若者は思はず馬を飛び下りつ。

「如何して？」また追つかけて、

「何時？」

「先刻頰被りをした人夫の樣な男が、こそ〳〵裏の山の方から奧庭に下りて來ての、誰かと思ふと茂の馬鹿ぢや、はははははゝゝゝゝ。可愛嶽で伴侶に離れて、腹切らうと思つたけれど、其も出來ず、それから長い間山の中の百姓家に奉つて、やつと溜つたんで、人夫の樣な風をして山傳ひに歸つて來たんぢや、はゝゝゝ。最早二日飯食はんで、餓鬼の樣痩せ居つての。其から阿母が泣いて、直ぐ飯食はして、今奧の六疊にぐつすり寢込んどる。はははははゝゝ。猛、人には言ふな」

默然と聞ける猛は、手に持つ鞭の落ちむとするを緊と握りつ。

「フウム、茂が！　茂が!!」

（中）の三

豐前の國中津の城下より二里ばかり西南に離れて、某と云ふ山村の丘を負ひ細流に臨みて宛ながら城郭の如き一構は、此邊きつての素封家上田久吾と云ふ人の居なり。屋敷内に當家の祖先が植ゑしと云ふ大なる楠樹あり、鬱蒼として緑深きことゝに三百餘年。鄕士ながら舊藩主奧平家にても殆ど客分の待遇なりしと云ふ程の舊家。されば年々の藏入も千俵に下らず、地劵證文古金銀の類は幾棹の長持に溢れ、財寶藏には古器物骨董類を初めとして、分けて書畫には珍品多く、或書畫好の大官人が一見して眼を廻せしと云ふ呉道子の楊柳觀音、徽宗皇帝の極彩色百花百鳥の圖、東坡筆竹の自畫贊、以下本家本元の支那にも得難き珍奇の書畫數百幀は、此のみにても大した身代と、わざ〳〵東京より見に來し或有名の骨董家は溜息つきぬ。されば、石垣に百年の苔蒸して、幾棟の土藏に巢くふ家鴿も心長閑に、黑瓦白壁參差として老楠の緑に映ずる其家を、村人は御屋敷と稱へて、「上田樣には及びもないが、せめてなりたや殿樣に」と常に歌ひぬ。

當主久吾は今年四十七、若かりし時は頭を漢學に腕を二刀流に固め、氣性烈しき質なりしが、昨年來中風症にて兩脚の自由を失ひしより、めつきり氣弱になりて、嗜好の川漁山獵も思ひ絶え、たゞ春秋に駕籠つらせて、八里程隔りし温泉に入湯する外は、大方寢所を出でることなし。奧樣は名をお由どのと呼ばれて、今年四十二。痩ぎすの色蒼ざめて、一寸見には恐さうなれど、實は蟲も殺さぬ人の好き奧樣。夫婦の間に、娘は無くて、覺、猛、茂と云ふ三人の男子あり。二十五、二十三、十八と云ふ年配。體格にかけては、總領の覺は弟二人を一塊に捏ね攪ぜてもやはか劣る可き偉大の骨柄ながら、偖肝腎の物が足らねば、棟梁にならぬ獨活の大木、雇人には侮られ、二人の弟には殿樣に追ひ使はれて、何時か廢物同樣の姿となりぬ。其に引かへ、二男の猛は、額廣くして眼凹み、一文字に結ぶ脣は鐵壁もこぢ開け難き力あり。智惠の塊、意地の化物、思へば穿ち、笑へば凍り、少なく言ひて、多く謀りぬ。

趣味はまさしく父の正統をひいて、四書五經に育ち、果ては馬具にも西洋を忌めば、髷もつい先年まで頭にのりて居たりき。季弟の茂はまた之に引易へて、早くも學問にすゝめ自由の理、さては東京の新聞に眼を曝して、自由の權利の民權のと言ひ罵り、征韓論民選議院論非大久保政府論など、未だ乳臭き口に唱へて中津あたりの諸老先生を驚かし、果ては増田宗太郎と云ふ男を無二の師友と傾きて、年も行かぬに憂國三昧、とゞのつまりは去る四月一通の置手紙して、増田を大將に正氣の輩と南洲の軍に馳せ加はりぬ。されば兄弟三人、尤もよく食ふは覺、謀るは猛、熱するは茂にて、空氣と水と火とは名をば覺、猛、茂とかへてこゝに上田の家に顯はれたりき。

覺は云ふまでもなく、父すらも冷刻なる猛を恐れ憚りて、自由民權の說に醉へる、家產を治めざる放蕩極まる末弟の茂を愛しぬ。嘗て中津の左る歷々の家より茂を養嗣に貰ひに來しに、上田の家にては一議にも及ばず斷りしより、偖は上田の家も行く／＼は茂の有にならざるまでも少なくも二分せられて、兩親は茂に倚るならむとは、何人も信じたりき。猛は深く茂を惡みぬ。

上田の家より約一里ばかりにして、以前惣庄屋をも務めし岡部と云ふは、上田の緣つゞき、主人は二人の子女を殘して數年前に死去し、後妻の子一人あり、茂が大の親友なりし長子は二年前に身歿りて、女お菊は今年十六になりぬ。其お菊が未だ八歳の昔なりしが、秋老けて山の椎の實風なきに落ちてこぼるゝ頃、上田の三兄弟は岡部の家に招かれて、裏の小山の椎拾の遊をなしけるに、拾ひ終りて較ぶれば茂が嚢最少なきを氣にして、お菊は竊に吾嚢のを移すを、其と氣づきし兄の覺、「やアい、茂の馬鹿やアい、女に加勢して貰ふ馬鹿やアい」と叫ぶに、滿面朱を注ぎたる茂は、突然兄に組みかゝりしに、七つ違ひの大力者に一も二もなく組み敷かれしを、お菊は口惜しく吾兄諸共覺に武者振つけば、側に立つて見てありし猛は突然組み伏せられし茂が頭を蹴りぬ。組んづ、ほぐれつ、泣きわめきのあとは雙方に立分れて、覺が「やアい、茂と菊ちやんは夫婦だつて、やアい」と叫ぶに、躍起となりて、「宜いつてことよ、妾は茂さんのお嫁になるのよ、あなた見たいな馬鹿は厭だつてことよ」とお菊は健氣に罵りかへしつ。其頃のお煙草盆に何時しか銀杏返しにかはりて、匂ひこぼるゝ白菊の花の姿を、上田の

三兄弟はとり／＼に戀ひしが、中にも兄に親しき茂は妹にも近く、其兄逝きて茂が足やゝ遠くなりての後も、妹は猶亡兄の友を思へるなり。猛はいよ／＼茂を嫉みぬ。

惡み、嫉みて、而も隱忍容易に鋒鋩を露はさゞりける猛は、此春茂が萬のものを投げすてて南洲の軍に走れるに會ひて、莞爾として笑みぬ。待つ可きものは機會、馬鹿々々しきは飛んで火に入る夏虫が身の上、何角と口賢しくは云ひ居りたれど、父上も母君も御覽ぜよ、親を捨て、家を棄てゝ首尾よく亂臣賊子となりたるは沙汰の限りの不孝者、此上は九分九厘まで戰場の骨とならずば刑場の露と消ゆ可き茂を何時まで惜しと思ひ給ふぞ。彼は已に亡者、勘當されし不孝者、兄は彼通りの鈍物、此猛が斯くてあるを上田の家の幸運と思ひて、此れよりは此猛を柱とも杖とも主とも君とも思ひ給へ、と云はぬばかりに猛は猛然と鋒鋩を露はし來りて、冷然の手に悉く家柄を握りつ。最初は一度二度戰場より吾子の使もありけるが、其後は便りばつたり歇んで、薩軍の勢日々に蹙るを聞くに、茂が無事に歸り來可き望も漸く細く、去月城山沒落の報を聞きては、父は素より母までも今は世に無き者と諦めし樣子に、猛は安堵の眉を

舒べつ。ぽつかり訪れる父母を思ふさまに説きつけて、戰爭も濟み世の中無事になりたれば、今迄延ばし、家督相續の披露を促し、更にお菊の縁談をも締めしなりき。其家督相續の披露は愈〻明後日と事定り、其縁談も漸く歩を進むる今日十月の十日と云ふに、忌める嫌める死せしと思へる茂は突然として歸り來れるなり。

（中）の 四

「仕方がない、嗚、お由—」

場所は上田の家の奥の奥なる八疊の離座敷。時は茂が歸りし翌日の夜十一時。言は黄金作りの大小鞘角の刀架に倚りし床の間を後に、蒲團敷かせて足さしのばし脇息に倚りたる小鬢の禿げし四十六七の男の口より出でたり。

顔みられて、側に坐れる婦人の顔愈〻蒼うなりぬ。

「其れでは死にに歸つた樣なものだね、如何しても助からないと云ふのかい、エ、猛？—」

「先刻から申上げる通り、助けたいは山々ですが、上田の家名が墮ちるか墮ちんの界です。上田の家から賊が出た、其は未だ宜しい。其賊が討死もせずに歸つて來る、其を匿ふ、上田の家は賊になつたも同然ですぜ。世間の思はくを思つて御覽なさい。其は未だしも茂を隱匿うて其が後露れる—後露れずにや決して居ません、最早村の者は皆知つて居ます、如何に僕婢の口を塞いだつて茂が歸つたことは最早皆知つて居ます。だから先刻も問部の家から此家では却つて不都合なこともあらうから、自宅に當分隱匿はうなんて云つて來たぢやありませんか—茂を隱匿した事が發露れる、其所か阿爺も阿母までも罪になりますぞ。阿爺の其御不自由な體を巡査が來て縛つて、阿母が牢屋に入つて、私共迄が赤衣着て御覽なさい、—イ、エ決して無罪にやなりません。萬々一茂が懲役で濟むにした所が、家名の汚は同一。中津近傍から五十人も賊に出て、一人も歸つて來た者はない。それに茂一人安閑として居つたら如何樣な評判が立ちますか。吾子が可愛いから、賊になつて討死もせずに阿容々々歸つて來ても、役人や巡査に賄賂して、隱匿つて置いた、なんて屹度言ひますぞ。こゝで思切つて、茂が潔く覺悟をきめたら、流石上田家に違つたもの、武士は違つたもの、賊には出ても見事に最期を遂げた、茂さんも感心ぢやが第一御親御がよく思ひ切つた、如何しても武士は違ふ、と斯樣言ふのは、見る樣です。茂も憖巡査に縛られたり、人の物笑になつたりするよりも、兄弟の前で潔く思切つた方が本望—本望で御座いませう。討死したと思つて、阿爺も阿母も御諦めなさい。嗚、覺さん—」

顔見られて、堪き膝を摧りながらうつかりとなし居たる覺は狼狽へて、

「其樣とも、其樣とも、彼樣な馬鹿は生きてた所で——」

顔見合はして太息つく父母の顔、熟と見て、猛は言葉に力を入れ、

「御得心が參りましたか。阿爺も阿母も御異存はありませんな。御異存がなければ、直ぐ茂を此庭へ——」

「エ、今直ぐ？——」

わなゝく母を尻目にかけ、

「日が經てば、駄目ですぞ！ 先刻も巡査が村の者に何か聞いて居たさうです。嗚、覺さん」

「吽、其樣だ、其樣だ」

「でも——」

「阿母、懲役に行きなさつても、私は知りません」

「お由、諦めるが宜えぞ」

「阿母、諦めなさい」と鸚鵡がへしに覺も口を添へつ、

「では、兄さん、貴下茂を呼んで來なさい」
猛が胸に、「宜、來た」とやをら身を起して出で去りしが、間もなく立返り、
「猛、猛」
「兄さん、靜かにしなさい。何だね？」
「茂はぐつすり寢とるぜ」
「寢て！」母は身を震はす。
「寢とる？ 起しなさい。何にも言はずに、唯連れて來るのだ、宜いかね
「何にも云はずに、唯連れて來るんだね。宜、來た」
廊下を傳ふ足音次第に遠ざかりて、あとは森然。三人が間に置ける行燈の光宛ながら氷れる樣に、泉水に落つる筧の水のみしやら〳〵と響きぬ。

（中）の五

「茂、其方が身の處分について、今迄評議を凝らしたが――猛、卿云へ」
父は咳拂ひして、猛を顧みつ。脇息を引寄する手は頻りに打震ひて見えぬ。
「茂、貴公は」と猛は明かに言ひ放ちぬ。「貴公は逆賊に與して――」
俯き居たる茂は屹と顏を上げ、
「逆賊？ 西郷先生を逆賊？ ――逆賊と云ふのは、役人です、大久保の奴です、乘輿を挾んで國家の柱石を――」
猛は冷嗤ひつ。「貴公は未だ其樣な事を云ふ、朝敵ぢやから、誅に伏したぢやないか」
「勝敗は時の運です」
「黙れ、茂、貴公はな、此御病氣の阿爺を拋擲つて、逆賊に與して、家名を汚して、討死もせず、阿容々々歸つて、親兄弟に迷惑をかけて其で濟むと思ふか」
茂は一言もなく頭を垂れ居たり。
「猛、其樣に――」
「阿母！」一睨して母を恐縮まし、「茂、腹切れ！」
はつと驚きて、茂は顏を上げぬ。
父は太息つきて、
「今猛が云つた通りぢや。茂――死んで呉れ」
「茂、死んで呉れ」母も口を滑らしつ。
父の顏、二兄の顏、等分に見やりし茂は、ほろりと落涙して、父の傍にうち顫ふ母の顏縋るが如くうちまもりぬ。
「？」
言はむとして言ひ得ず、母が脣は二たび三たび空しく動きぬ。母を見つめたる猛が眼は焰の如く閃きぬ。
母はぶる〳〵とうち戰ひつゝ、
「茂――堪忍してお呉れ」
「阿母、あなたも？」
茂はさし俯きつ。やゝありて、
「可愛が嶽で死ぬのだつた！」
突と立つて床の間の短刀取るより早く座に返つて、
「御免――」
刀光きらり、腹を劈けば、紅の血潮と行燈にしぶきつ。

（下）の一

上田の茂さんが歸つた、御屋敷の茂旦那が歸つたと云ふ噂に一騒ぎしたる村は、程なく茂さんが腹切つた、何刺殺されたんだと騒ぎ合ひ、何有其樣な事云ひ觸らして何處か遠方に隱匿ふのだと利口ぶる者もありしが、間もなくこつそり葬式も濟みたるに、皆はと口を噤みつ。何處の里にも絶えぬ不平家が、「金滿家は幸福な者、謀叛に加擔つて歸つて來ても、巡査も知らん貌で過ごす」と呟きし言葉は、やがて、「金滿家は厭た者、子が歸つても庇ふ道は知らず、腹切ら

せて自分ばかり安閑として居る、金満家の子になるより乞食の子が猶ましぢやと云ふ噂にかはりて、郷へ嘖き村の悪感は霧の如く「御屋敷」の周圍を立籠めたり。

流石に其氣勢を感じたる猛は、父を勸めて例の湯治に赴きつ。あとは奥様と覺と僕婢ばかり。村の者も自づから足を遠くし、奥様は始終締め切りて奥の間を出ず、覺は毎日の樣に川漁に出かけ、聲高に言ふ者なければ、「大きなる家ほど秋の夕哉」秋は偏に此家にのみ哀を鍾めて見えたりき。

十月十八日の朝は東の空凄しく燒けて、怪しく蒸暑く、晴ながら世の中ひつそりとして、木の葉もそよがぬ静かさはたゞ事ならずと村人皆々眉を顰めて居たりしが、午もやゝ過ぎ、三時近しと思ふ頃、千百羽の大鷲の翼揃へて飛び出でしかと疑はるゝ物音颯然と空に起りて、門田に積みし稲塚のさわ／＼／＼と十四五間飛ぶよと思へば、瞬く間に暴風となりつ。吹きつづけて夜に入れば勢いよ／＼凄じきに「御屋敷」の僕婢は臺所に寄りこぞり、榾したゝかにさしくべて、恐怖紛らす雜談。

「おゝ、吹く、吹く、おつぎさん、一寸外を見て見なさい、真闇‥‥——こはい晩ぢやねえか」

鎌を磨ぎ／＼男の云へば、爐の邊に落穗剝ける婢は身震ひし、

「怖いと云へば、先刻奥に行燈持つて行つたら、奥様が彼若い顔を斯樣ずうとあげて、おつぎ、今些此處に居て呉れないかえツて云はつしやつたと思ひなさい、わたしや襟元がぞつとしたで、はい、要を濟ませて直ぐ上りますて、逃げて來た。おちきさん、一寸行つて見な」

「おゝ嫌だ。——大旦那も若旦那も御留守で、奥は淋しいね、彼覺さんは居るけんど、——此風に高鼾で寝て居るだね、同じ兄弟でも猛旦那や茂——南無阿彌陀佛‥‥茂旦那も最早一七日だね」

「御可哀想に、南無阿彌陀佛‥‥」

「茂旦那も御可哀想、彼お奥樣も可哀想ぢやねえか」と此方に藁をうち居りし老爺は口を插みぬ。

「本當に其樣だよ。何でも昨日の甚兵衛さんの話ぢや、彼事を聞きなさつてから氣が變になつて、一昨日も今些で咽突きなさる所だつたてね、其で夜晝御母が番をして居なさるさうだよ」

「其樣ぢやろ、其樣ぢやろ、やつと甦つた樣歸つて來なさると、直ぐ彼樣云ふ事になる。氣も違はうよ。猛旦那も——うゝ、風が凪いだぢやないか、——やあ、また吹き出したぞ」

（下）の二

天地の鬨聲を飲みし樣に寂然となりしと思へば、忽ち雙と吹き破る暴風一陣、一頻り家を震つて、戸障子瓦多々々とはためき、砂石か木の葉かばら／＼と雨戸にうちつくる音、瓦の飛ぶ音、枝をもがるゝ老樹の悲鳴に和して、世は今にも盡きむかと危まれつ。

隙漏る風行燈の火先を搖りて、とろ／＼と細り、消えなむとして、また明かに燃え立つ奥の一間に、獨縫物してありし主婦のお由は、ふつと針をとゞめて耳傾けつ。立上つて、燈心かき立て、隔ての襖を引明けて、次の間を見合はせしが、また手早くはたと閉て切り、座に歸つて縫物をとり上げぬ。五分ばかりたちて、

「つぎ、つぎ——覺、居るかい！」

呼ぶ聲は徒室内に渦まきて、答なければ、來る人もなく、戸障子のがた／＼と鳴る響のみ聞えたり。

「如何したのだらう？ ——おゝひどい風——おや襖の外に居るのは誰？ つぎかい」

ぶる／＼と身を震はし、指尺片手に立上つて再び襖を開きしが、またぴつしやり引たてつ。

二たび燈心をかき立て、座につかむとして不圖行燈に眼をとめ、さしよりて熟と覗き、指尖に摩で試み、

「あゝ油の浸染だつた。左樣、左樣、彼は張替へたのだから、殘つて居る筈はない。――何て暗い行燈だらう！」

三たび立つて、燈心をかき立てつ。

「おゝひどい風――おや、障子の側に居るのは誰？　おや、わたしの影だつた、ほほゝゝゝゝ――おや、誰だ、誰だ、今笑つたのは？　つぎ、つぎ、覺、誰か來てお呉れ、早く早く早く――誰か來てお呉れ――

大聲に呼ぶと思ひし口はたゞ徒らに動きて、人來べき氣勢もなきに、恐怖に溶けし眼の中ちらちらと身悶えして立ちつ坐つ。

「おや、行燈の向に誰か居る。つぎかい、覺？――おや、茂だ、茂、茂、堪忍してお呉れ、堪忍して――」

突と起上つて、行燈の周圍を彼方に逃れ、此方に避け、

「――惡かつた。わたしが惡かつた。茂、堪忍してお呉れ。茂、茂、茂――最早其樣な顏をせずに――おゝ、怖い、怖い――何、何、何、「阿母あなたも」ツて？　おゝ「阿母、あなたも」「阿母、あなたも」――尤ぢや、惡かつた、母が惡かつた、皆わたしが惡かつた――おゝ闇い、闇い、闇い、茂が追つて來る、助けて、助けて――」

叫び〳〵走せまはる。はずみに袂は行燈にかかりて横になれば、火は爆と燃え立つて、忽ちにうつる障子。白紙を舐むる紅の舌ちよろちよろと瞬く間に燃え廣がりて、赫々と照り渡つたる一室の内。恍惚と眺めたる母は、忽ち手を拍つて、

「ほゝゝゝ、明るい、明るい、茂、茂、茂、最早堪忍してお呉れか。何、未だ「阿母、あなたも」ツて？　よ、よ、堪忍してお呉れ、阿母が乳呑んだ昔の茂になつてお呉れ。ほゝゝゝ、明るい、明るい、さ、茂、爆竹をしませう、爆竹」

手近にありし裁縫物、紙と云はず、絲と云はず、攫んでは投げ、攫んでは投げ、手を拍つて嬉々と笑ふ。折から家を搖かす烈風一陣、雨戸を吹き拂つて颯と煽れば、灰散り火飛んで、障子天井疊襖の嫌なく烈々と燃え上りぬ。

(下)の三

恰も其時、馬蹄戞々風を侵して此方へと來る者あり。

父と温泉にありける猛は、已み難き要起りて、午過ぎより例の騎馬にて歸村の途に上りしが、暴風に道の捗取りかねて、我村に一里半と云ふ處に來つれば、日はとつぷり暮れぬ。暴風は愈吹き募る。馬上提燈點す可くもあらねど、案内知つたる馬は夜道に迷はず、人は風に屈せず、足掻を早めて行く〳〵不圖行手の空を見れば、夜目にもしるき八――山の上少し黄ばみたり。

「おい、八――山の上は、あら何だ？」

道側の茅舍より突然出でたる黒影に問へば、老爺の聲して、

「左樣さ、――火事かね、眼が惡いで――」

あとの語は烈風に吹き散らされつ。

「火事か知らん」

呟き呟き五六町、眼を山上の微明に注ぎて行けば、暫らくは唯薄すりと黄ばめる光明の顏うては消えなむとせしが、忽ち爆と朱をさす樣に鮮かになりぬ。

「ヤア、火事だ、火事だ」

「何處の馬鹿か火事を遣り出し居つたな、不用心極まる、この風に！」

罵り罵りまた半里、八――山の麓を一廻りして、青――村にかゝれば、火光いよ〳〵明かになりぬ。道の眞中には、村人四五人烈風に

身を斜にして、火を望みつゝ、
「此風に遣りも遣つたもんよ、喃」
「左樣よ、此分ぢや餘程燒けようぜ」
「何でも山――村に違えねえ喃、彼稲荷山の一本松が右に見えるだから」
聞くともなく耳傾けし猛はいよ〳〵馬を早めてまた半里、路は荒海の如くに吼ゆる竹藪の村に入りぬ。村を出づれば、あとは田圃の一筋道。火は遠からずと見えて、竹の間を漏る火光ちら〳〵、暴風にまじる人の叫聲の聞ゆるに、ますます足掻を早めて藪中を駈けぬくるより赫と面照る火光に驚く猛。
「やあッ、しまつた！」
同時に其處此處より、
「火事ぢやア、火事ぢや。上田の御屋敷が燒けるぞ、御屋敷が燒けるぞ」
と叫び叫び走り行く聲暴風の中に聞ゆ。
「しまつた！」
齒をくひ切りつゝ、雙鐙を合はせて驀地に駈け行く。已に八町が内となれば、道は宛ながら炬火を照らせる樣に、行手の方は闇を染めぬく紅の烈火一團、炎々として燃え上る狀、手にとる如し。
「しまつた！」
三たび叫んで、今は流石に疲れし駿足の鬣を左手にかい攫み、右手には鞭、ふり上げて責め立て責め立てひた走りに走らす。一歩一歩に火は面を烘つて、繽紛と飛び來る火の粉は急霰の如く面を撲ち、馬鬣に落ちて、じり〳〵と燃ゆるも覺えぬ猛。
「しまつた！」
四たび叫んで、一町が内に來れる頃は、母屋の土藏も納屋小屋一切の建物殘なく烈火に包まれぬ。母屋の棟はまだ落ちず、珊瑚の柱、黃金の瓦、燦々と紫だちたる焔の中に閃きて、吹く風に紅の花飛び、金の雨滴り、綏々と宛ながら今鎔爐の中なる金殿の奇しき美觀。三棟の土藏は今炎々と燃え盛りて、五色の焔の中より猪黑き瓦の見えつ隱れつ。風息つけば、五棟に別れて炎々と立上る焔、また烈風の吹く每に五處の火焰一塊にもつれ、凄じき音たてての字に渦まき、しの字に狂ひ、餘炎藪を炙つて千竿の竹立ちながら爆發すれば、焔の中に包まれし老楠の葉は焦がれ、幹は纏々脂を流して、夥しき樟の臭を放ちつゝ火龍の如く燃えぬ。
「やあ、猛旦那だ、猛旦那だ」
燃ゆる建物を遠卷にして眞黑に群立つたる村人は口々に叫びて、道を開きつ。
「何を見とる、何故消さん、消さんか、消さんか」
馬上ながらに、齒ぎしりし、手を戟にして燃ゆる吾家を睨みたる猛が顏は猛火に向ひて赤鬼の如くなりつ。
「旦那、此風に！　到底寄りつかれたもんぢやありません」
「素晴しい火勢ぢやねえか、最早御屋敷も駄目ぢやの」
口々に云ひ罵る。
「何、駄目？　不埒な奴め、消せ、消さんか、何を立つて見とる？　龍吐水は如何した？」
「旦那、駄目でがすよ、斯樣なつちや龍吐水が千挺あつたつて、萬挺あつたつて、仕方がありません」
「消すも、消さんもあつたもんぢやねえ、寄付いたら體が焦げるわ」
「旦那、一人で消しなさろ！」
「何、不埒な」
「おゝ猛、猛、猛、燒けた、燒けた」遽しく呼びて駈け來る大男。
「馬鹿、覺さん、何故火事を遣り出來した？」
「吾は知らん、吾は知らん」
「知らんた何だ、道具は出したか？」

一阿母は吾が負つて逃げた、今預けて來たんぢや」

「道具は如何した？　大切な物は皆出たか？」

「出すも何も出來るこつちやない」

「何、燒いた？」

「皆命から〴〵逃げ出したんぢや」

「馬鹿奴」

馬を飛び下り、鞭打ふつて、烈火の家を目がけて十二三歩、忽ち烈風一陣横さまに拂うて、母屋の柱ゆら〳〵と動くと見れば、金頽れ朱傾きて、撞と倒れつ。煙交り灰交りの火花の柱空を沖いて、またはら〳〵と降り來る火の雨。眉を焦がせる猛は匇々に退きつ。

「やあ母屋が落ちた！」

「最早土藏も落ちる！」

「あゝ最早駄目ぢや」

「上田の御屋敷も灰になるかな」

「罰だよ」と云ふ聲も聞えぬ。

齒を喰ひしばりて、猛は突立ちたり。土藏は一つ落ち、二つ落ち、三つ落ちぬ。今は唯三百年の老楠の宛ながら大炬の如く弗々と烈風に燃えて末路の闇を照らすのみ。

群がる人をかき分け、押分け、

「旦那、旦那、猛の旦那」

一誰か――や、甚兵衞、――最早駄目ぢや――

「駄目でムいます――駄目で――園部の――」

「何？」

「園部のお菊孃が――」

「何？」

「茂旦那のお墓で首を縊つて――！」

「お菊が？」

折から、四邊の村人立ち騷ぎて、

「倒れる、倒れる、あぶねえぞ」

一しきり吹き募る風に、燃えに燃えたる大楠は、こらへかねてめき〳〵と裂けつ。暫し空中に跳躍ひしが、頓て夥しき地響うたして撞と灰燼の上に倒れぬ。火の粉まじりの灰ぱつと空中に飛んで、雨の如く舞ひ落ちたり。

「灰だ、灰だ、御屋敷が灰になつた、灰に！」

（下）の四

さしも廣大なる上田の家も一夜に灰燼となり、其金銀財寶書畫骨董の類より古文書帳簿證文の類まで、悉て烏有に歸しぬ。

父は家の燒けしを聞ける其日、驚きあまりて卒中に斃れつ。凶事相ついで、流石村の指目の後目痛きに、猛も村には住みかねて、中津に引出でしが、幾程もなく竊に剩せる田畑山林を賣り拂ひ、或夜單身東京に走りしまゝ、其後の消息は傳はらず。兄の毀は狂氣の母と獨殘されたるを、親類の某引取りて、二人を扶持しぬ。

園部の家にては、あらためてお菊を茂が墓に合葬せしが、村の者は之を「比翼塚」と呼びて、少女子が手向くる四季の野花は墓前に絶えず。上田の屋敷跡は何故にか人忌みて、家を建つる者もなければ、八重葎恣に生ひ茂りて、晝も蟲の音滋く、燃えさしの老楠の株のみ今も其まゝに殘れり。

（明治三十三年一月作）

自然に對する五分時

"And this our life, exempt from public haunt,
Finds tongues in trees, books in the running brooks,
Sermons in stones, and good in every thing.
—Shakspeare.

此頃の富士の曙

（明治三十一年一月記）

心あらむ人に見せたきは此頃の富士の曙。

午前六時過、試みに逗子の濱に立つて望め。眼前には水蒸氣渺茫として相模灘を見む。灘の果には、水平線に沿うてほの闇き藍色を見む。若し其北端に同じ藍色の富士を見ずば、諸君恐らくは足柄、箱根、伊豆の連山の其藍色一抹の中に潜むを知らざる可し。

海も山も未だ眠れるなり。

唯一抹、薔薇色の光あり。富士の嶺を距る弓杖許りにして、横に棚曳く。寒を忍びて、暫く立ちて見よ。諸君は其薔薇色の光の、一秒一秒富士の嶺に向つて這ひ下るを認む可し。丈、五尺、三尺、尺、而して寸。

富士は今睡より醒めむとするなり。

今醒めぬ。見よ、嶺の東の一角、薔薇色になりしを。

請ふ眸をかへさずして見よ。今富士の嶺にかゝりし紅霞は、見るが内に富士の暁、雪を追ひ下し行くなり。一分、――二分、――肩――胸。

見よ、天邊に立つ珊瑚の富士を。桃色に匂ふ雪の膚、山は透き徹らむとするなり。

富士は薄紅に醒めぬ。請ふ眼を下に移せ。紅霞は已に最も北なる大山の頭にかゝりぬ。早や足柄に及びぬ。箱根に移りぬ。見よ、闇を追ひ行く曙の足の迅さを。紅追ひ藍奔りて、伊豆の連山、既に桃色に染りぬ。

紅なる曙の足、伊豆山脈の南端天城山を越ゆる時は、請ふ眼を回して富士の下を望め。紫匂ふ江の島のあたりに、忽然として二三の金帆の閃くを見む。

海既に醒めたるなり。

諸君若し倦まずして立たば、頓て江の島に對ふ腰越の岬端として鎌むるを見む。更に立ちて、諸君が影の長く前に落つる頃に到らば、相模灘の水蒸氣漸く收まりて海光一碧、鏡の如くなるを見む。

此時、眼を擧げて見よ。群山紅褪せて、空は卵黄より上りて極めて薄き普魯士亞藍色となり、白雪の富士高く晴空に倚るを見む。

あゝ心あらむ人に見せたきは此頃の富士の曙。

大河

子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。川に對する人間の感情は、實に此一句に道破し盡されて居る。詩人の千百言、終に夫子の此口頭語に及ばぬのである。

海は實に大、靜なる時は慈母の膝の如く、一たび怒れば殆ど上帝の怒を想はしむる。併し「大江日夜流」の無窮と意味とは、また之を海に見る能はざるのである。

試みに或大河の滸に立つて、洪々たる河水の、音も立てず、靜に、息まずに、流れ流れ流れて限りなく流るゝを見たまへ。「逝者如斯夫」實に億萬年の昔より億萬年の後に到るまで、無限のスペースを流れ流れて限りなく流れ行く時の流を想ふのである。あゝ、白帆が見えて來た、……前を過ぎ行く……過ぎ行く……最早見えない。羅馬の所謂大帝國も斯く過ぎてしまつたではないか。あゝ、笹の葉が流れて來る、ちらりとする、最早見えない。亞歷山、那破烈翁も、斯の通であつた。あゝ、彼等は今何在哉。

溶々として流るゝは唯河の水のみである。

永遠の二字は、海よりも寧ろ大河の滸にありと思ふ。

利根の秋曉

先年秋十一月の初旬、利根の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。此處は利根の本流が、北利根北浦の末流と落ち合うて來るので、川幅が濶く、對岸の小見川迄は小一里もあらう。宿は直ぐ水

邊にあつて、夜半に眼を醒すと、櫓の音が軋々枕頭に聞える。

黎明に起きて、宿の者は未だ寝て居るので、窃と戸を開けて、河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて、腰かけた。未だほの闇い、空も河面も茫として鉛色であつた。直ぐ裏の方の闇い小屋の中で、鷄が勇ましく曉を告げると、餘程經つて川向の小見川の方から、さも微な鷄の音が聞えた。大河を隔てて呼びかはす此鷄聲は、實に宜い。チエルシアの賢とコンコルドの哲とは、實に斯の如く大西洋を隔てて呼びかはしたのであらう。抑も亦自分が眼には、曉は此兩岸の鷄聲の間から川面に湧き上つて來る樣に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやり〳〵水蒸氣が見えて來た。實に速い、瞬きをする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曉の光は四邊に充ち滿ちて居る。鷄は猶鳴きつゞける。空と水の薔薇色が少し褪ふ。忽ち晃々と眼ばゆき光が水に流れる。ふり顧り見れば、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。其梢離るゝ鳥一羽、朝日を負うて、宛ながら曉を告げ渡る神使の如く、凛とした朝の大氣に羽搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川は未だ碧々とした朝霧に眠つて居る。

對岸は未だ眠つて居るが、此方の村は最早さめた。背後の茅舍から煙が立上る。今柵を出た家鴨は足跡を霜に印けて、刮々呼びながら、朝日を碎いて水に飛び込む。楊柳の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が、白い息を吹き吹き川に下りて、河水を掬んで嗽ぎ、顔を洗ひ、それから遙に筑波の方へ向いて、掌を合はして拜んで居る。

あゝ實に好い拜殿、と自分は思つた。

上州の山

機の音、製絲の煙、桑の海、其上に聳ゆる赤城榛名妙義碓氷、遠くて淺間甲斐秩父の連山、日光足尾の連山、越後境の連山、或は奇崛、或は雄偉、根は地に、頭は天に、堂々として立つて居る。果しない桑原の道に置き果てて、其となく眼を上げると、此等の山々が常に泰然として頭を擡げて居る。

日常生活の齷齪に立往つて、而も心は挺然として無窮の天に向ふ偉大の人物は、實に斯の如くであらう。

自分は上州に行く毎に、山が斯く囁く樣に覺えるのである。

空山流水

或年の秋、十月の末であつた。自分は鹽原帶川の支流屁股川の畔の石に腰かけて居た。前夜凩が烈しく吹いて、紅葉は大抵散つてしまつて、川床は殆ど眞紅になつて居た。右も左も見上ぐる程の峯が細長く青空を劃つて、空にも川が流れて居るかと思はれた。秋末の事で、水は瘦せ、涸れに涸れて、所謂金石の川床の眞中を流れて行く。川床は峯と峯との谷間をくねつて、先下りになつて居るから、遠くまで流の末が見える。恰も川の末に一高峯が立ち塞つて、遠くから見ると川は其峯に吸ひ込まれるかの樣に思はれ、又山が、「此處に居なさい、里に出て何になる、居なさい、居なさい」と水の流を抱き止める樣にも思はれる。

併し水は底の石を洗ひ、紅葉の柵を潜つて、歌ひながら流れ行く。石に腰かけて、聞いて居ると、其音、松風に人無くして、鳴る琴の音、何に譬へて宜からう？ 身は石上に坐しながら、心は流水の行末を追うて、遠く、遠く、遠く——

あゝまだ仄に聞える。

今でも半夜夢醒めて、心澄む折々は、何處かに遠く遠く此音が聞えるのである。

大海の出日

枕を撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直に太平洋なり。

午前四時過ぎにもやあらむ、海上猶ほの闇く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うて燻りたる樺色の横ふあり、上りては濃き紫藍色の空となり、こゝに一痕の弦月ありて、黃金の弓を掛く。光さやかにして、宛ながら東瀛を鎭するに似たり。左手に黑くさし出でたるは犬吠岬なり。岬端の燈臺には、廻轉燈ありて、陸より海にかけ連りに白光の環を畫きぬ。

暫くする程に、曉風冷々として青黑き海原を掠ひ來り、夜の衣は東より次第に剝げて、蒼白き一曉の波を蹐みて此方へ此方へと近寄る狀も指點す可く、磯の黑きに凄白く打かゝるさまも漸々明かになり來りぬ。眼を上ぐれば、黃金の弓と見し月も何時か白銀の弓とかはり、燻りて見えし東の空も次第に澄みたる黃色を帶びぬ。茫々たる海原に立つ波の、腹は黑うして背は蒼白く、夜の夢は猶海の上にさまよへど、東の空已に瞼を開きて、太平洋の夜は今明けむとするなり。

已にして曙光は花の發くが如く圈波の廣まる如く空に水に廣がり行きて、水いよ〱白く、東の空ます〱黃ばみ、弦月も燈臺もわれと薄れ行きて、果はありとも見えずなりぬ。此時日の使とも覺しき渡り鳥の一列鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大瀛の波と云ふ波は盡く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるのさゞめき——聲なきの聲四方に滿つ。

五分過ぎ——十分過ぎぬ。東の空見る〱金光射し來り、忽然として猩紅の一點海端に浮み出でぬ、驚破、日出でぬと思ふ間もなし。息をもつがせず、瞬く間もなく、海神が手もて擎ぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黃金の櫛となり、金蹄となり、一揺して名殘なく水を離れつ。水を離るゝ其時遲く、萬斛の金たらたらと昇る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黃金の雪を飛ばしぬ。

相模灘の落日

秋冬風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世に斯る平和のまた多かる可しとも思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、其全く沈み終るまで三分時を要す。

初め日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山は煙の如く薄し。日は所謂白日、白光爛々として眩しきに、山も眼を細うせるにや。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山次第に紫になるなり。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山紫の肌に金煙を帶ぶ。

此時濱に立つて望めば、落日海に流れて、吾足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帶、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

斯かる凪の夕に、落日を見るの身は、恰も大聖の臨終に侍するの感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈

獨り澹然として永遠の濱に佇むを覺ゆ。喜と云はむ物あり。融然として心に浸む。喜と云はむは過ぎ、哀と云はむは未だ及ばず。

已にして日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の嶺巓に仍て紫上更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧み勝に悠々として落ち行く。

已にして殘一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、――忽ちにして無矣。

眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。

日は入りぬ。而も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黃なるを見ずや。偉人の沒後實に斯の如し。

日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き孛藍色となり、日の遺孽とも思ふ明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。

雜木林

東京の西郊、多摩の流に到るまでの間には、幾個の丘あり、谷あり。幾條の往還は此谷に下り、此丘に上り、うね〳〵として行く。谷は田にして、概ね小川の流あり、流には稀に水車あり。丘は拓かれて、畑となれるが多きも、其處此處には角に劃られたる多くの雜木林ありて殘れり。

余は斯雜木林を愛す。

木は楢、櫟、榛、栗、櫨など、猶多かるべし。大木稀にして、多くは切株より簇生せる若木なり、下ばえは大抵綺麗に拂ひあり。稀に赤松黑松の挺然林より秀でて翠蓋を碧空に翳すあり。

霜落ちて、大根ひく頃は、一林の黃葉錦してまた楓林を羨まず。

其葉落ち盡して、寒林の千萬枝簇々として寒空を刺すも可、日落ちて煙地に滿ち、林梢の空薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる、尤も可。

春來りて、淡褐、淡綠、淡紅、淡紫、嫩黃など和らかなる色の限りを盡せる新芽をつくる時は、何ぞ、獨り櫻花に狂せむや。

青葉の頃此林中に入りて見よ。葉々日を帶びて、綠玉、碧玉、頭上に蓋を綴れば、吾面も青く、若し假睡せば夢亦綠ならむ。

初茸の時候には、林を緣どる萩薄穗に出で、女郞花刈萱林中に亂れて、自然は此處に七草の園を作れり。

月あるも可、月なきもまた可、風露の夜此等の林のほとりを過ぎよ。松蟲、鈴蟲、轡蟲、きりぎりす、蟲と云ふ蟲の音雨の如く流るゝを聞かむ。おのづから蟲籠となれるも妙なり。

檐溜

雨後、庭櫻落ちて雪の如し。檐溜にも點々として浮べり。

檐溜を淺しと云ふことなかれ。其碧空を懷に抱けるを見ずや。

檐溜を小なりと云ふことなかれ。青空も映り、落花も點々として浮び、櫻の梢も倒まに覗き、底なる土の色をも見す。白鷄三羽來りて、紅の冠を搖かしつゝ、俯して銜み、仰いで飮めば、其影も亦水にあり。融然として相容れ、怡然として共棲す。

奈何ぞ人の子の住む世界の隘き。

春の悲哀

野を歩み、霞める空を仰ぎ、草の香を聞き、緩やかなる流水の歌を聴き、撫づるが如き風に向ふが中に、忽ち堪へ難きなつかしき感の起り來るあり。捉へむとすれば、已に痕なし。吾靈其れ離れて遠く來れる天の故郷を慕ふにあらざるなきを得むや。

自然は春に於てまさしく慈母なり。人は自然と融け合ひ、自然の懐に抱かれて、限りある人生を哀しみ、限りなき永遠を慕ふ。即ち慈母の懐に抱かれて、一種甘ゆる如き悲哀を感ずるなり。

自然の聲

（一）高根の風雨

今年五月の中旬、余は伊香保の西方に聳ゆる高根山の絶頂に、草を藉いて坐し居たり。前には大壑拐然として巨口を開けり。壑を隔てて左手に榛名富士聳え、右に烏帽子が嶽聳ゆ。二山の間、纔に匹練を露はすは榛名の湖水なり。湖の向うには、掃部が嶽鬢嶽が嶽等、やゝ低く水を昏り、烏帽子が嶽の右には、信越境の連山、雪を帶び、波濤の如く天際に横ふ。

近き山々、何れも紫褐色の肌膚をなせるが中にも、巍然として大壑より骨立する烏帽子が嶽、絶巓は束立せる巖より成り、風雨雪霜に刻まれし山膚は幾條の溝をなして、折しも五月中旬の事なれば、春は山中にも來り、山面山腹の襞溝に生ひたる檜の類は青葉の衣を着け、宛ながら幾頭の青龍の蜿々として山を下るが如く、また綠の瀑布の漲るに似て、榛名富士の裾より落つる同じ綠の流と共に、渾て右へ右へと大壑の中に瀉り落つれば、壑の底には幾個の小山跳ねかへりて綠の餘波を掀げぬ。

時は午後の二時頃にや。空氣重く、蒸あつくして、西の空は銅色に見え、滿目の山沈々として聲なく、人を嚇するの靜寂山谷に滿ちたりき。

暫く坐す程に、烏帽子が嶽の空鬱然として、洋墨を潑せる雲むら／＼と立ち渡りつ。何處ともなく襲ひかゝる風雨の攻鼓とも云はむ雷の殷々と鳴り出で、空氣は俄に打しめりて、滿目の景憂ふる樣に暗むよと思へば、一陣の冷風颯と面を掃ひ、湖水の音か、雨の音か、將萬山の樹木枝を震ふの音か、蕭然たる音山谷に起り、天地に瀰り、風雨と戰ふ山嶽の矢叫とも聞えて、凄じきこと云ふ可くもあらず。

眼を上ぐれば、烏帽子が嶽以西の山々は、濛々たる印度藍色の雲に蔽はれて、風丸雨彈の戰まさに酣なれど、國境の連山は、雪色猶鮮かに、天に倚り地を踏まへ、金輪際動かじと、一陣二陣中軍後隊倶を固めて二十里が程に立列び、惨として風雨の來襲を待つ狀、ウオトルローの英陣も斯くと思はれて、沈鬱悲壯、跌宕なる自然の威力の森然として身に浸むを覺ゆ。大壑に臨みてさし出でたる檜の古木に、梟あり。頻りに咽を鳴らす。

已にして雷鳴大に起り、雲は吾頭上まで眞闇に掩ひかゝり、風颯々として山壑を撼かし、豆大の雨一點――二點――千萬點ばら／＼と落ちて來りぬ。

余は風雨雷電の重圍を衝いて、峠の茶屋を指して蕣地に跑下りぬ。

（二）碓氷の川音

碓氷の秋を探るとて、或年の秋の或日、獨輕井澤を立ちて、舊道を辿る。碓氷の絶頂より半道あまりは、紅葉已に散り、落木寒山稀に染めたる如き翠松を點じて、蕭散の致可畫可歌

猶下れば、滿山皆枯葉、樹老いて山も赤白頭となりぬと覺ゆ。折から淺間の方面にかき曇り、麓は日影明かにさしながら、山は一點二點の時雨、はら〳〵と梢に落ち來りぬ。「時雨るゝや搔き分け行く淺間の山」など口吟み行くに、時雨は一しきり降りまさりて、滿山の樹さわ〳〵と人あるが如し。傘を翳して暫し佇む程に、時雨ははつたり巳み、あとの靜寂譬ふるに物なし。「山中人自正」と言ひけむ樣に、吾心水の如く清める時しも、何處にか一陣の谿籟蕭々として起り、颯々として山中に滿ちぬ。あゝ是れ碓氷の川の遙に谷底を流るゝなりき。

栗

栗は野人なり。木膚も葉もがさ〳〵として如何にも朴訥に、如何に巧言令色を嫌へばとて、毬の逆茂木、厚皮の鎧、猶其上に澁染の鎧下までつけて、奧深く甘き心を祕するは餘りならずや。而も余は栗を愛するなり。

余が二年あまり寓せる庭內には栗の木多かりし。初夏の頃にもなれば、青々と茂れる梢に形さへ色さへ海軍將士の肩總其まゝの花ふさふさと咲きて青空に映りたる、流石に棄てられぬ匠あり。星だらけなる夏の夜の空を、深黑き其梢のさわ〳〵と摩でて戰ぐは涼しきものなり。

井戸側に一株の栗あり。初冬の頃は、大なる其葉皆枯れ乾き落ちて、嫩をなす。余はをり〳〵朝まだきの闇き中に起きて、葉疎らなる其枝に有明の月の掛かるを見き。

鹽原の山深く秋を探りし時、靜勝なる山腹に、二合抱程の栗の木の、山燒などに會ひてや根方は半ば焼けて空洞になりたるが、彼處此處に八九本、十五六本、山腹よりさし出でて十分に枝を廣け、眞黃に黃葉したるは、嬉しかりき。

山路行きて其毬に草鞋ざく〳〵と踏みかけたるは嫉けれど、落葉滿空山の句など誦して獨り山深く辿る時、毬のおのづからはぢけて、實のぱらりと落つるは、「閑寂」其ものの聲聞く心地す。

「山ふかみ峯のさゝ栗にら〳〵と庭にちりしく大原の里」寂然法師の歌なり。

梅

寺古りて、梅三二本。月あらば更に好し。

或年の二月、小田原より湯本に遊び、早雲寺に詣る。時に夕陽西嶺に落ち、一鴉空を度り、禪山蒼々として暮れむとす。寺內人なく、唯梵花雨三株雪の如く黃昏に立てり。徘徊良久うして空を仰げば、古りし鐘樓の上に夕月の夢よりも淡きを見たりき。

風

雨は人を悩む、人の心を醫す、人の氣を和平ならしむ。眞に人を哀しましむるものは、雨にあらずして風なり。

飄然として何處よりともなく來り、飄然として何處へともなく去る。始なく、終を知らず。蕭々として過ぐれば、人の腸を斷つ。風は、過ぎ行く人生の聲なり。何處より來りて何處に去るを知らぬ「人」は、此聲を聞いて悲しむ。

「春秋も、涼む夕も、凪も、あはれは風に限るなりけり」古人巳に道ふ。

自然の色

(一) 春雨後の上州

伊香保を出でける頃ほと〳〵傘を敲ける雨は澁川に到りて止み、水濁れる利根を渡りて前橋の方に半里も行く程に、雲は北へ北へと卷き去

りて、午日の光雨の如く降り來ぬ。

雨後日光に輝く渾事物の色鮮かなるを見ずや。見渡す限り渺々と海の如く茂りたる桑の若葉は、一葉一葉に露を帶び、雨に洗はれ、日光を吸ひ、日光を吐きて、金綠色の焔煌々と燃え、晃々と照り、其間々には大麥小麥の白金色の穂波をうたすあり。遠き近き新樹の杜は綠より綠を描きて碧に映り、赤き五月鯉白き矢幟は遠近にそよぎつゝあり。其間々に紺碧の霞をかためたる如き妙義榛名小野子子持の絕々に出づるを見よ。其山々の間は越路の山の雪皎々と白きを見よ。此あたり人家の屋根には概ね菖蒲を植ゑたるが、折しも五月初旬の事なれば、濃き薄き紫の花淺綠の葉まじりに簇々と咲き出で、茅舍も花擁して立つ思あり。涼しき風吹き來ぬ。桑の若葉に心地よげに身ぶるひして、惜氣もなく金剛石の滴々をこぼし、人家屋頭の菖蒲の花は碧の空を撫でてふら〳〵頷く。先程まで空の一隅に堆く積み居たる雲の、何時か解け、散り、流れて、今は嶺に梳かるゝ羊毛の浮々としたる雲二條三條碧空に舞ひ、其れすら且流れ且消えつゝあるを見よ。心地よき陸や。露を拂ひて桑摘む乙女が歌の野面に流るゝを聞かずや。

上州の平野の眺を、是より余は平凡と思はざるべし。

（二）八汐の花

馬返を出づる頃、雨はら〳〵と落ちしが、間もなく止み、春雲綿の如く此處に卷き彼處に舒び、其間より云ふ可からざる暖かき匂を含める薄き淸淺色の空を漏らしぬ。

路は深澤の峽に入りて、大谷川の水の美言ひ盡し難し。大谷川——川と云はむよりは、寧ろ連續せる飛瀑とも云はむ。氷を碎き雪を轟かせる淸冷の水、此處に到りて、また故の氷雪に復りつゝ、峽より峽に折れ、岩より岩に飛び、飛躍して下る。其一たび躍りて雪を飛ばすや、其沫は個々日光を捉へて金紫の色に輝き、其落ちてまたむら〳〵と湧き上る時、冷■淸美實に云ふ可からざる綠青色を帶ぶ。此等の色は唯眼見る可くして、心已に思ふ可からず、況んや之を狀するをや。唯巖上に立つて、空しく水の美を歎ずるのみ。

脚下の水の美なるに見とれて、頭上の山の八汐の盛りを見落すなかれ。

躑躅花よりは濃く、山櫻花よりは薄き紅の花の、若葉の未だ萌え出ぬ樹に開き、灰色の枯木に映り、或は春空に點して、峯頂に簇立し、或は一株斜に巖頭にさしかゝり、蕾勝なるは紅深く、やゝ過ぎたるは紅淺く、山の彼處に此處に照れるを見よ。八汐の美また實に云ひ盡し難し。たま〳〵朝靄の嶺より降り來る雲の、霧の如き裾を捲うて山を渉り谷を渉る毎に、蔭と光と相追うて走り、彼方の花は蔭に入りてうち顰りたる樣にうすれ、此方の花は一層鮮かに日光にさし出でてちら〳〵花瓣を動かす。

雲の行くまゝに、山と水と花と、光に入り、蔭に入り、笑み、愁し、變化の妙を極む。

（三）相模灘の夕燒

日は雲を穿ちて、曇りながら小坪の山に落ちぬ。富士の東北に唯一抹朱黃色の殘曛を剩したるのみにて、他は煙りかへりし紫褐色の、曇如として見所もなく、鬱陶しき空なりし。

川邊に佇み、倦きて釣れる程に、次第に暮れ行し川の面少し明るみ、また少し明るみ、何處にか火など焚きたらむ樣に、少しづつ四邊の不思議に明るみ行きて、宛ながら落ちし日の魂のまた立歸る心地しつ。頭を上ぐれば、見よ、富士の東北に一抹朱黃色に匂ひし殘曛の、忽然靈の入りたる如く赫焉として燃え出でしな

りけり。

あゝ誰か落日を招き還すの扇なきを歎つ者あ
ぞ。萃れかゝる日の見る〳〵雲に立歸り行くを見ずや。天の一隅に今燃え初めしと見つる朱黄色の焔は、次第に西空に燃え廣がり、一秒又一秒、一分又一分、照り出で、照りまさり、最早絶頂と思ふに、天は倍々燃え、石榴花色の火は、天を燒き、地を燒き、海を燒き、山も燃え、家も燃え、戸前に立つて夕燒を見る陽翁の顏さへ鬼よりも赤し。唯百面手の焦慮せざるを怪しむ耳。

雲は燒き鎖されて、富士を初め山と云ふ山は盡く濃き紫色を帶びぬ。眼を上ぐれば、西天宛ながら絶大なる半截の陣軍旗を見る如く、富士を中心の日輪として、道毎に本細くして末廣く烈々として石榴花色を帶びたる大輝光の流は、幾十條ともなく地平線より天心に向つて放射す。恰も地心火を失して、大火焔の一時に天心を衝いて騰上するが如し。光焔天を炙つて、海火の如く燒くれば、限り無き水族も嚇死す可し。

十分ばかり過ぐる程に、滿天の黄焔更に血紅色に燃えかはり、鬼氣森然として人を襲ふ。更に五分ばかり經てば、血紅の色黒みがかりし赤色に變じ、光焔漸く退くよと見る間に、夢の醒むるが如く消えて、天地俄に闇然と暗くなりぬ。

山百合

（明治三十三年六月十日記）

後山山腹の茅萱青々と茂れる中に、宵の明星の如く一點兩點山百合の花白み初めしと思へば、何時か此處にも開き、彼處にも笑み、今は中夜の星よりも多くなりぬ。

山に登りて花を訪へば、花は茅萱深き中に潛みて、容易に見難し。

歸りて前庭に立ちて眺むれば、花は茅萱より秀でて含笑めるさまなり。

朝露山に滿つ頃は、花もうつとりと眠げなり。

夕風そよふきて、滿山の茅うね〳〵と青波をうたす時は、花も波のまに〳〵漂ひて、宛ながら水の上なる藻の花の揺らぐとも見ゆなり。

日落ちて、山闇うなり行く時、點々として花のみ白ら暮れ殘るさまいとあはれなり。

又

嘗て東京にあり、百合につきて斯の如く記しぬ。

「朝來門を過ぐる賣花翁の聲を聞いて、出で見れば、夏菊吾妻菊黄紫さま〴〵の花の中に兩三枝の百合を擔へり。卽ち盡く是を買ひ、磁瓶に插んで吾机の右に置きぬ。清香一室に滿ち、時に蠅行鳥跡に倦みたる眼を移して此君に向へば、神は轉た青山深き處に飛ぶ。

夏の花の中余は尤も牽牛と百合とを愛す。百合の中余は尤も白百合山百合を愛す。百花の譜を作りし許六の翁は百合を俗なるものと一口に喝破し去りたれども、其は濃抹の赤百合の上にこそ云ふべけれ、爭で清絶幽絶の白百合までも其中に包括し去る可けむや。幸に余を似而非風流と做すなかれ。人雲の如く車雨の如き帝都の中央、忙裡の忙急中の急なる境遇の中央にありながら心は常に春山秋野の外を繞る不生産的の余にとりては、賣花錢は卽ち是れ延命錢なり。

余が一瓶の百合花を購ひてより、晝は之を几邊の友とし、夜は中庭に持ち出でて終宵月の照らし星の照らし露の洗ふにまかす。朝起雨戸をやれば、先づ眼を照らすものは此君なり。一夜の間に苔の幾個は減じて花の幾個は增しぬ。卽ち井華を汲んで新水を與へ、花に葉に水を吹きて、滴々の露滴るまゝに擡げて之を緣上に置く。水を浴びたる葉は綠流れむと欲し、新に咲き

し花は清うして一塵を含まず。一日又一日、今日の蕾は明朝の花となり、今日の残花は昨日に開き、開き盛り衰へ朽ちて花の座は次第に梢頭に上り行きぬ。見よや六千年世界の變遷は、實に此一枝の百合の盛衰にあらはれたるを。

此花に對して思ひ出づるは曾て房州に遊びし時なり。夏猶淺くして伴ふ者もなき徒然に、獨りしば／＼海邊の山に上りぬ。鏡が浦は明鏡の如く滑かにして一點雨點坐せるが如き小舟を浮べ、富山は緑にして海色と相映じ、人聲四方に絕えて日光獨り天地に滿ちぬ。富山の次第に爽して海に下る處少しく禿して岩の觜を露はすあり。此岩に坐して白日夢に入れる折しも、一陣の香風忽ちかに吹いて過ぎぬ。顧みれば百合一枝岩背後に立てり。

此花に對して思ひ出づるは相模の山に遊びし時なり。一杯の土も歷史を含むてふ其地、山に倚れる鶴岡の邊、削り立てたる石壁の上、古寶の闇なる處、古英雄の長へに眠る處、細谷川の流るゝ處、杉の木蔭、小篠の中、何れの處にか白く咲き出でし此花を見ざる可き。或は秣草負ふ童に逢ふて、草籠に雨に挿みたるを見る。或は鶯鳴く細路を辿り行くとて、不圖頭を擡ぐれば、前に寶珠の如き蕾出あり。一山巔茅生なす山腹の斐の如く、其間此處彼處に無數の山百合の點々したるは、おのづからなる簪とや云はむ。風なき時は緑の天鵞絨の絨氈に白き花紋を浮織になしたる如く、一陣の風吹き來れば滿山の萱茅波の如くうねりうねりて無數の花は、波に漂ふ浮萍の花に似たり。

此花に對して思ひ出づるは曾て朝早く夏山を行ける時なり。山間朝氣冷かにして單衣の肩寒く覺えぬ。路は次第に細うなりて、松椎など上に茂り、小篠下に茂り、おしわけ行けば滿山の露、花に滴る。忽ち微風一陣幽香を送り來るあり。見れば山百合唯一枝小篠にまじりて咲き居りぬ。膝のほとりまで露に浸りつゝ小篠を分けて之を折れば、白玉の盃の如き其花に湛へし露にはら／＼と衣に落ち、手折る吾袂は清香に重うなりぬ。

此花に對して思ひ出づるは、高潔なる天女の面影なり。清香を德と稱じ、潔白の色を操と保ち、雜木蕪雜あら／＼しき浮世に生まれ出でしかも浮世に雜らず、世を憂へ人を悲みては涙の露と凝りつゝねに憂ひの色を帶ぶれど、天日を仰ぎては涙含みし眼に望の微笑を湛へ、人知れぬ山中に生ひ出でては獨り見る人もなき榮枯をなして憾みなく、山にありては山に咲き、園に移されては園に薫り、咲きて誇らず散りて恨みず、清く世を過ぎて永遠の春に入る。是れ清き天女の面影、是れ白百合の眞にあらずや。

案頭一瓶の百合、余は之に對する毎に心は清絕高絕の境を繞る。邪思妄念起る毎に余は此花に對して顏赧うするなり。「ア、百合よ、二千年の昔ユダヤの野に咲き出でて人の子の眼に觸れ限りなき眞理を傳ふるの便りとなりし百合よ、來る可き新しき國の園生に咲く百合よ、願はくは爾がもてる清香の半ばを頒ちて吾に與へよ」

朝霜

余は霜を愛す、其凜として潔きが爲めに、其爽晴を稱ずるが爲めに。

清美なるは霜白き時の朝日なり。

或時十二月の末、朝早く大船戸塚のあたりを過ぎ居たり。珍らしき霜朝にして、田も畑も家も眞に薄雪の降りたる樣に、處々の竹藪常磐木の梢までも一白なりき。

暫くする程に、東の空金色さして、杲々たる朝日一點の翳もなき空にあらはれ、億萬條の光線は一面の田野人家を射、霜は皎々晶々として表に白光を放ち、陰に紫の影を落しぬ。人

家も、藁も、田の中央に積みし稲塚も、乃至寸ばかり地より起てる藁屑も、すべて日に向ひて白く日に背いて紫に、眼の到る處、一望處として白光紫影ならざるはなく、紫影の中霜また隱々として見る可し。地はすべて紫水晶の塊となりぬ。

一農夫あり、霜野の眞中に、藁を焼きつゝあり。青煙蓬々として廣がり、廣がるまゝに日光を遮り、遮るまゝに白金色となり、やゝ濃かになりて終に煙も亦薄紫の色を帯びぬ。

此れより余は霜を愛することいよ〳〵深し。

蘆花

「蘆の花は見所とてもなく」と清少納言は書きぬ。而も其見所なきを余は却て愛するなり。

東京近郊にては、洲崎より中川尻江戸川尻のあたりかけて、一帶の蘆洲なり。秋の頃品川新橋間の汽車の窓より眺むれば、洲崎両東海に沿うて茫々たる色は卽ち蘆花の雪なり。

或日洲崎より堤の上を中川の方に行きしに、堤上の薄初めは膝を沒し、漸く腰を沒し、果は蘆まじりの薄高く頭を沒して、咫尺を辨ぜず。さわ〳〵〳〵足に任せて分け行くに、忽ちものに行き當りてはたと倒れぬ。彼方にも呀と驚するを、よく見れば釣竿を肩にせし漁夫なりけり。

猶行けば、堤上の薄蘆は漸く疎になりたれど、堤外は東西二三里が程渾て茫々たる蘆花洲にして、遙に洲外に一條の碧と帆影とを認めて海の所在を知るのみ。一脈の水路此蘆花叢裡を押分け、洄り澇りて、遠く海に通ず。潮退けば、穴だらけなる干潟露はれて、泥だらけなる蘆根に小蟹這ひありき、潮滿ち來れば、億萬限りなきの蘆花影を倒にして水に映じ、漁歌櫓聲思ひがけなき邊に起ることあり。

蘆間の水は、啻に鯔鯊鰡などの好んで棲む處なるのみならずして、五位鷺鴫なんども此處をよき隱れ家となす。

余が堤上に立ちて、暫く憩へる時、遙に一發の鉄砲響きしが、頓て鴫百舌鳥の類にや、魂消る樣に鳴きつれて、ばッと余が頭上を過ぎ、忽ち蘆花叢中に入りぬ。あとは萬更に寂として、唯限りなき蘆花の蕭々として風に鳴るあるのみ。

海と岩

（明治三十二年二月二十八日）

空は次第に紫色に濁りて、生温かき南風面を吹きぬ。漁師等が濱に走り出で來りて、忙がはしく網を收むる程に、雨ばら〳〵と降り來つ。

雨はやがて止みぬ。風は彌吹き募る。眼を上ぐれば、墨を潑せる、洋紅をぼかせる、紫に汚れ、銀色に朧に、さま〴〵の態を盡せる雲滿天に染み、融け、渦まき、富士も天城も隱れぬ。凄きまで黯然と暗める海は、宛ながら丈夫の怒れる如く千丈の底より鳴り吼えつゝ、一波又一波、岩を乘り越え、濱を呑み、斷えず、休せず、鞳鞳として陸を目がけて押寄す。

見渡せば、海に一帆の影なし。唯大鷲の嘴をあげ翼を張れるが如き名島の孤岩の、獨り大濤をかぶり白煙を蹴散らしつゝ、屹として萬波の海に立つあるのみ。

あゝ海よ、爾の怒は偉大なり。岩よ、爾の意力は偉大なり。古の大人も曾て爾が如く天を仰ぎ永遠を思ひ一世を敵として孤高の戰をつゞけたりき。

風は猶止まず、海はます〳〵猛りぬ。千波又萬波、碎けても碎けてもまた寄せ來る。彼方の海上に斗出して、一點の青を帯びず、撞乎と腰を据ゑて、雄健粗朴、褐色の衣をつけ攻め寄する海に向ふ小坪の岬を見ずや。人をして

當年の相模太郎を想はしむ。

榛の木

新芽ほのかに煙り初むる頃も流石にをかしけれど、其青黑く茂れる梢の紅なる夕照に映じて立てるも妙なれど、葉落ち盡して寒空に立つは尤も妙なり。

晩秋冬初は東京東北郊の趣味尤も深き時なり。滿々と黃金の海を湛へし田は悉く收まりて、川も村も人家も田中の肥料壺も殘りなく露はれ、冬木立の村紋れたる上より筑波と富士と遙に見かはして淋しげに笑める時、枯蘆がさがさと風に鳴り、曠々としたる田の眞中に肥料壺の二つ三つ竝べるに寒鴉の啞々と鳴ける時、ひよろひよろとしたる榛の木の、或は藁束を腹卷にし、或は節高なる肌をあらはし、氷の如き寒空を爬けるは、誠に趣深し。

自然は如何なるものをも用ゐて絕好の趣味を作るなり。

薄

葉も穗も白く枯れて、夕風に亂れ、夕日に閃ける、固に好きも、余は更に其新に穗を抽く頃の美しきを愛す。

九月の末、東京の近郊を步き見よ、或は蓼花と共に一叢水に臨み、或は限りもなく野山に蔓り、萱草野菊と地藪等を護し、蛇、蚤斯と稲粟蕎麥等の田畑を限り、僅かに苞葉を脱して未だ束を解かざる、或は解きて未だ亂れざる、銀絲の如きもの、紅絹の如きもの、淡紅、殷紅、靑々としたる其葉に映じ、露を含み、風に戰ぎ、孤立叢生、實に人の詩思を牽き得て千條の絲よりも多からしむ。

良夜

良夜とは今宵ならむ。今宵は陰曆七月十五夜なり。月清く、風涼し。

夜業の筆を擱き、枝折戶開けて、十五六步邸内を行けば、栗の大木眞黑に茂る邊に出でぬ。其蔭に潛める井戶あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲啞々、時々白銀の雫のポタリと墜つるは、誰が水を汲みて去りしにや。

更に行きて畑の中に佇む。月は今彼方の大竹藪を離れて、淸光溶々として上天下地を浸し、身は水中に立つの思あり、星の光何ぞ薄き。氷川の森も淡くして煙と見ゆめり。靜かに立ちてあれば、吾側なる桑の葉、蜀黍の葉は、月光を浴びて靑光に光り、棕櫚はさやさやと月に囁く。蟲の音滋き草を踏めば、月影爪先に散り行く、露のこぼるゝなり。藪の邊には頻りに鳥の聲す。月の明きに彼等も得眠らぬなるべし。

門開けたる處は月光水の如く流れ、樹下は月光靑き雨の如くに漏りぬ。

歩を返して、木蔭を過ぐるに、螢光のかげ木の間を漏れて、人の夜涼に語るあり。

枝折戶閉ぢて、緣に踞す程に、十時も過ぎて、往來全く絕え、月は頭上に來りぬ。一庭の月影夢よりも美なり。

月は一庭の樹を照らし、樹は一庭の影を落し、影と光と黑白斑々として庭に滿つ。緣に大なる楓の如き影あり、金剛纂の落せるなり。月光其滑かなる葉の面に落ちて、葉は宛ながら碧玉の扇と照れるが、其上にまた黑き斑點ありてちらちら躍れり。李樹の影の映れるなり。

月より流るゝ風梢をわたる每に、一庭の月光と樹影と相抱いて躍り、白搖ぎ黑さゞめきて、其中を步するの身に、是れ無熱地の藻の間に游ぶの魚にあらざるかを疑ふ。

香山三日の雲

（一）五月十日

障子明くれば、日は赤城の上にさし出で、空も碧に晴れながら、山谷にはやゝ鉛色の雲蓬蓬然と渦まき居れり。地に日頃來の雨に打濕りて、樹影和かに臥したり。清涼なる山氣旭日の光を孕みて、樹上の雫露金剛石の如くに輝けば、晴を喜ぶ燕子は頻りに翻り去り翻り來りて、小鳥の聲嬉々たり。

暫くありてまた見れば、光景已に一變化を來したり。空に淺碧に晴れつゝ、其根方に紫色の螬の如き片々の雲ありて浮めり。小野子子持より赤城にかけて渦まける白雲――藍色の隈ある――纏帶の如く一長列をなして山腹を纏ひ、小野子子持の頂――青綠の巾に藍色の蔭ある――宛ながら浮島の如く空に現はる。

暫く見て居る程に、赤城の巓なる雲は、徐徐に東南に向ひて大軍の動くが如く動き初めたり。續々蓬々として渦まき蔟がりつゝ、次第に利根の流れに沿うて下り初めぬ。而も先陣已に動き初めたるに、小野子子持の下、吾妻川の谷に屯せる雲は、猶牢乎として動かず。

已にして雲はいよ／＼川の流に沿うて下り、先陣已に過ぎて中隊之に從ひ、後陣また前進し初めたり。宛ながら白龍の如く、横流する瀑布の如き白雲の長列は、川に沿ひ、山を摩して、西より東に、北より南に、相追ひ相ついで次第に移り行く。卒然として小野子をかき消し、子持を片々の山影となし、また赤城を雨斷して空中の蜃山となす。其光を受くる部分は、白金よりも輝き、白銀よりも白く、而して山は其雲より出で碧空を襯して濃色滴らむとす。赤城はすべて藍色になりぬ。小野子子持は青膚藍蔭鮮かにして畫けるが如し。雲の薄れ行くあたりより、白根及び越後境の山ほのかに碧色を漏らす。

時の經つまゝに、長江の如く漲れる雲の流は斷えて、雲は擴れ上騰し、赤城は悉く雲の衣を脫ぎ棄てたり。雨に洗はれ、雲に拭はれて、山の靑玉の如く清し。

而も香山の天氣の定まりなきや、今日もまた晴に終る能はず。美しかりし白雲は消え、若くは煙の如くなりて山の面に殘るよと見るが中に、何時とはなく濁り勝ちなる雲、其處其處に湧き出で、彼處に渦まき、此處に蔭し、山容山色を殆ど分秒毎に變化せしめしが、午前十一時過に到り、またむら／＼と山谷雲に塞がれ、雨はら／＼と降り出でぬ。

夫れよりやみては降り、少し明るみかけてはまた曇り、氣まぐれなる空打つゞきて、夜にまた雨聲の里となりぬ。

（二）五月十三日

朝來雨瀟々たりしが、午近くなるまゝに雨は何時しか小降りとなりて、滿目の雲霧白み明るみ來り、伊香保一山の外、渾て白濛々たれども、最早晴の遠からざるを思ふ。山谷の霧は渾て上方に向ひて騰走し初め、宛ながら煙の浮める如く、飛揚して人家を掠め、杉叢松を撫で、蓬々然たり。庭の泉水の面を見れば、雨點猶頻りに紋を畫き、空に映じて見れば、白雨條々絲の如く降れども、空はいよ／＼明るみ來り、小鳥の聲賑かに、燕子舞ひ、牛遠く吼え、樓上樓下概ね障子を開きて「お天氣になる」と喜ぶ。

午後二時頃に到り、果然山谷に滿ちし雲霧の陣破れて、小野子子持の中腹以下露はれ出でぬ。雨後翠重く綠鮮かに、濃色まさに融けむとす。頓て突然中空に青天の斑々見え來りぬ。雲はいよ／＼斷え、千切れて、山を辭し、空に上り、或は屯し、或は東へ東へと走る。卒然赤

嶽の左腹に髣髴夢の如く見え來りぬ。七色鮮かにして雫らむとす、子持の中腹より次第に薄れて片々浮び來れる白雲、徐々赤城に向ひ、虹の上を經過する毎に、七色の弧中斷せられて見ゆ。頓て子持の右腹にも極めて薄き虹の影あらはれぬ。薄くして弧をなさず、唯斷續せる九の片と見ゆめり。

樓上より眺むれば、雲の變幻實に名狀す可からず。山に接して藍色の雲突あたる様に地をなせば、其上に白く染め拔きたる様の雲あり。ぼかせる様の雲あり。深き憂ひの如くに宿して移らざるの雲あり。他の雲の上を自在に移り行くの雲あり。巨人の怒れるが如き、女人の笑へるが如き、時に雲暗し、横に延ける雲、積綿の如き雲、銀の如く白き、銅の如く光れる、紫色あり、碧色あり、鼠色あり、[illegible]然として[illegible]所なし、[illegible]に見ては[illegible]信ず可からざるもの、自然の手に描き出されて人をして[illegible]に[illegible]あらざらしむ。[illegible]げに[illegible]の深きなるらむ、[illegible]の頂に[illegible]あり、雲の上に雲あり、其靄々たる[illegible]より僅に現ける[illegible]、[illegible]に[illegible]の上より[illegible]を望む[illegible]あり。

今子持の上方に點々綿を浮べしと思へるに、また見れば白旗の如き[illegible]其中腹に[illegible]り、今小野子の頂に岩の如き雲屯せしと見たるに、忽ち片雲を殘さず、一秒時間に於ける雲の變動、實に端倪す可からざる勢なり。已にして夕陽忽ち照らし、西空に屯せる雲は、何れも金覆輪せる紫の雲となり、日光其間より雨の如く鮮かに降りて、遠き山々は金の烟にぼかされ、小野子の頂に消うて、三個の雲宛ながら紫の烽火を揚げたる如くに、勢よく突立ち上り、處々日光を正面に受くるの雲は宛ながら白金色をなしつ。子持は金綠色の襞を生じぬ。欄前の山は樹々夕陽を帶びて、雨後の新綠焔の如く燃えむとす。夕陽に射られて、西空に連綿し居たる雲は一つ一つ消え失せ、雲の間に空を見しもの、今は金色帶びたる碧藍色の空に、金龍の如く金蜈蚣の如き雲、腹を金にし、背を紫にして、大空の金波に泳げるのみ。其に引かへて赤城の方は雲[illegible]重々として、或は[illegible]色に焦れ、藍色に蒸し、赤城も其重きに堪へざるを危む程に、雲[illegible]く其肩に集まれり。

頓て日入りて夜となりぬ。山暮れて黑く、空は[illegible]を含み、[illegible]の明星を初め[illegible]花の如く大空に咲けり。赤城小野子子持の上には[illegible]夜雲の黑く屯するが見ゆ。伊香保は眞黑に暮れて、湯澤の水音高し。

（三）五月十八日

朝は晴れたり。午後は綿の如き雲の、頻りに東より西に飛ぶを見しが、四時とも覺しき頃、[illegible]子の[illegible]に[illegible]然と[illegible]れるに、[illegible]き見れば、一[illegible]の黑雲已に小野子子持の頭上を目がけて横はり、滿目の山川[illegible]を含んで濃かに、宛ながら[illegible]然と口を噤んで色變ふるに似たり。一葉も動かず、一樹も鳴らさず、宛として一幅南畫山水の圖なり。二つ嶽は已に墨を潑したる如き雲の中に沒し去りて、[illegible]岩の屹然として人を嚇する如き黑雲の空に突立つのみ。鼠色の雲瀰天に飛んで、天移るかと疑はる。

已にして頭上に一點二點丁東の音あり。すはやと見る間に、ばら／＼／＼大粒の雨雹の如く凄じく落ち來りぬ。小野子子持も何時しか掻き消され、山風颯然として樹を拂ひ、狼狽したる燕雀頻りに鳴き騷ぎつゝ木葉深き處に隱るゝが見ゆ。

雷[illegible]々として鳴り初めぬ。雨は忽ち緩に、忽ち急に、[illegible]に走り、横に迸り、逃げ後れたる燕子は打ち落されむとして辛うじて飛び、滿眼の新綠は頻りに戰ぎ領きて、凡ての物皆活きて動きつゝあり。

已にして雨少し小止となるかと思へば、一白濛々の空、忽ち紫色に變じ、已にしてまた鼠色になりつ。無限大空の壁に神腕の畫手が一刷毛初めて下したる如き濁れる白雲、何處よりともなく此鼠色の空に浮き出でつ。浮々として西に向うて飛ぶ。已にして雨また大に到り、雨歇みて小野子の頭茫と湧き出で、西の空には白銅色の雲さへ見え初めたり。雨も終に晴れ得ずして、且曇り且降る間に、日は蒼然として暮れぬ。

五月の雪

香山にありける五月十五日の朝曇りて殊に寒く、綿衣を重ねしが、程なく宿の婢朝饌を持ち來りて、雪が降り出しましたと云ふ。起つて障子を開けば、珍らしきかな五月の雪落花の如く霏々として降りしきる。

戸を閉ぢ饌を終へて、また外を見れば、雪は已に小降となりて程なく已みたり。十分ばかりして雲開け、眞白き山二つ眼前に湧き出でぬ。小野子子持の山なりき。

聲も立て得ず見惚るゝ間に、朝日さし出で、雪の山はほのかに金色を放ちぬ。日上るまゝに二條三條底白き藍色の蔭山に湧きて、暗に峯と谷とを判つ。

四時間ばかりして再び見たる時は、雪已に消えて常見る小野子子持の山なりき。眞に夢の如し。

香山の朝

日は赤城山より出づ。

四時頃起き出でて戸を開けば、山茫として谷には朝霧海の如く布きたり。人も覺めず、烟起らず、唯睡げなる鷄の聲を聞く。

已にして赤城の背低に白金の後光さし來り、見る〳〵日は山より出づ。

日山上に出で、其金色の光は初め柔かに次第に濃く山谷の朝霧を貫きて其内に滿ち渡れば、聖寵初めて愚かなる心に下れる如く、鈍き鉛白色の山次第に透き徹り、赤城の山は薄き桔梗色の光を帶び、子持小野子の山々はほのかに綠を浮べたる碧色を帶ぶ。遠山は猶ほのかに、麓の谷は未だ朝霧に睡る。

已にして日はます〳〵上り、赤城と杉の森の間を光の谷となして、濃き杉の森を紫に烟らせ、疎なる唐松を金色帶びし綠玉の色に光らす頃は、一色なりし小野子子持の山々の襞襞の如く浮び出で、其襞次第に鮮かになり光れる峯と碧に煙る谷と分明に際だつ頃は、麓の鄙徐ろに動きて森現はれ家見えはじむ。

此時、日は伊香保の町に滿ちて、家々炊烟起り、晴を喜ぶ鳥雀の聲耳に溢る。眼をあぐれば、十里二十里の遠山まで、すべて東に向ひて朝日を迎へつゝあり。

相模灘の水蒸氣

霜の極めて劇しき朝は、相模灘の水蒸氣霧の如く立ちのぼる。

今日、午前七時半、高きに上りて望むに、田越川より相洋にかけて、唯一面蒼白き水蒸氣、濛々として煙の如く、遠くして富士、近くして小坪の岬、僅に半身を露はすのみ。江の島も初めは隱見したりしも、終にかき消されぬ。足柄箱根は襲ひ上る水氣を防ぎ兼ねて、しば〳〵姿を隱す。

七時四十分、日やゝ高く上りて、滿目の水蒸氣忽ち透明なる薄紫の色になりぬ。日の蒸すに從ひて、相模灘上の紫氣いよ〳〵勢猛く騰上して、江の島は全く影を沒し、足柄箱根も辛うじて寸ばかり頭を露はすのみ。一秒又一秒。水

蒸氣の勢宛ながら猛火の煙の如くますます漲まき上りて、富士の半峯と、小坪の岬の巓を除くの外、盡く群山を隱蔽し、侵蝕し、沸々として底止する所を知らず。日は之を仰ぎて滿目の紫焔幢々としてまさに天心を衝かむとす。

七時五十分。日は遍く水蒸氣の中に滿ち渡りぬ。洋上に瀰漫したる紫の水氣は流石に日の力を感じて、處々に割け目を生じ、思はぬ方に海の一線を見せ、思はぬ空に山の一角を露はし、富士先づ脚を脱ぎて、足柄箱根の頭を見、江の島紫烟の絶え間より笑み、海と山も漸く界を劃して、小坪の岬赫奕として日麓に及ぶ。

時更に移りぬ。日の力いよいよ加はりて、殘煙剩霧狼藉として海に山にたゞよふもの、夢の如く消えて痕なし。相洋豆山新に開闢にあへるが如し。金帆あり、二三、江の島のはづれに閃く。二羽の水鳥あり、洋上に大なる圏を畫きて飛ぶ。

八時を過ぐる五分。

（一月四日記）

富士の倒影

冬至には、日伊豆の天城山の邊に落つ。

冬至後に一日又一日、落日伊豆半島を北に遡りて、春分の後富士を越え、夏至には終に大山のあたりに落つ。

夏至過ぎてより、日は來路を遡りて、一日又一日南に歸り、秋分に富士を越え、冬至に到つてまた天城山に落つるなり。

年の上半に往き、年の下半に復る、富士は殆ど半途の關山。故に日の富士を越ゆるは概して春秋の彼岸なり。日、二たび富士を越ゆれば、年一たび經つ。

されば春秋の彼岸に、富士の背に日の沈む頃は、富士の倒影相模灘に落つる筈なり。

鮮かに落つと、村の漁夫は云ふ。而も不幸にして、余は未だ完き富士の倒影を見るの機會に遭はず。

而も凪ぎたる日の夕、前川の洲に下れば、對岸砂洲の下、倒に映れる富士の峯尖を覗ふ可し。立つて見る可からず、俯す如くにして僅に富士の三合以上を見る。何人も見るの山、其影獨り奈何ぞ人をして跪かしむる。

日落ちて、天黄に、海また天を蘸して黄なり。豆相の連山、紫の色染むるが如し。風凪ぎぬ沖より歸る舟一隻、紫の帆を下し、欸乃漾うて櫓を搖かし歸る。此時前川に下りて覗へば、富士半面を黄金の水に浮べ、紫の色蕩けむとす。

忽ち人あり、網を肩にし、夕潮の鯔を覗うて砂洲に立つ。頭は空なる富士の紫を點破し、影は水なる富士の巓に立てり。

（一月十日記）

四ツ手網

秋十月十一月、御最期川畔の葭蘆黄ろく枯るゝ頃より、春三月四月、刈跡の蘆芽二三寸薄紫に吐く頃まで、村人百姓仕事の片手間に、諸處に四ツ手網を掛く。遠くして望めば、遠色の網、彼處に一、此處に二、寂れたる冬枯の田野を縫うて、自ら川の來路を示す。

霞が浦邊の土浦あたりにて見る四ツ手網に、甚だ大にして、轆轤を以て上下するなり。漁人水に臨める半疊程の小屋に蹈して、晝夜十分二十分毎に上げ試む。されば小屋には辨當、火鉢、煙草入、角燈、また往々にして燗徳利を傍に置き、此處に小生涯を營むなり。獲物は鯉、鮒、鯽、鰕、サイ等甚だ多し。逗子あたりのは、水に臨みて低き足場を設け、四ツ手に打ちがへたる竹の交叉點の繩を結びて、時たま來ては上げ見るのみ。獲物は鯔、海津、稀に鯊、鰕等なれど唯點景の料としては、極めて趣致多し。

風凪ぎ、日和ぎ、何處ともなく春意動きて、

早咲きの梅五六輪、村路の籬に香る頃、田越の橋に彳めば、肩薄き村と村との間に纔に青める麥圃を迺りて四ツ手網の數五つ六つ、近きは大きく、遠きは雛の帳よりも小く、川の形に屈曲して、悠々として日光に掛かる。宛ながら畫ける樣なり。忽ち網の一は音なく落ち、網の二は落ち、彼や此やかはる〴〵伏しまた起きて、景卽ち活く。

伊豆の落日逗子の三方を繞る山を紫に染め、木葉落ち盡したる欅の村を茜珊瑚の森に化し、麥圃の綠を黃に、畦路を歸る野老の額を鬼よりも赭く、肩上の鐵光を金に閃かし、眼の向ふ處皆赫として燃えむとす。此時御最期川の水千倍の明を加へ、水に臨む四ツ手網、個々火の如く赤し。魚驚いて其下を過らず。影鮮かに水底に落つればなり。

已にして日全く落ち、神武寺の鐘聲杳々として夕を告ぐれば、殘照の色と光とソロモンの榮華よりも疾く凋み、黃昏は夕煙斜めなる山本の村より湧きて、半時にして地は茫々たり。缺月空にあり。御最期川一條夕潮を縫うて白し。

晩寒を忍びて、川邊に立てば、玉の如き月、水にあり。闇に隱れて有りとも見えぬ四ツ手網の、影鮮かに其ほとりに臥して、鯔などの過ぎてか水搖々と動く毎に、網は跳りて、逃るゝ月を掬はむとするに似たり。

田家の煙

余は煙を愛す。田家の煙を愛す。高きに躋して、遠村近落の煙の、相呼び相應じつゝ、悠々として天に上り行くを見る毎に、心乃ち樂しむ。

然れども、市井の濁波今や滔々として村落に及び、田家淳樸の風次第に地を掃はむとし、賭博、淫風、奢侈、遊惰、爭利のバチルス、殆ど戶毎に侵入せむとするを思へば、寧ろ一炬其家と其人と焚き盡すの優れるなきかを疑ふ。

否、寧ろ敎へて而して之を化せむのみ。

あゝ若し吾力能くせば、余は遍く此三個の進物を全國の村落に贈らむものを。三個とは、良醫、良敎師、而して良牧師。

良好なる小學校、良好なる會堂、良好なる診察所、此三は健全なる村を造る三要素。而して健全なる村は健全なる國を造るの大基本。あまり多く果實をつくるの枝は折る。富めるのみなる其國は亡ぶるなり。國民をして天を仰がしめよ。

田家の煙のいぶせき藁屋より出でて而も天に上るを見ずや。

寫生帖

昔畫家あり、一畫を描きぬ。他の畫家は更に富且珍なる色料を有ち、更に目ざましき畫をかきぬ。然るに此畫家は唯一色を以て畫き、畫には不思議なる紅輝ありき。他の畫家來りて問ふ「卿何處より其色を得來れる乎」と。彼は唯微笑し、頭を垂れて畫きぬ。畫はます〳〵紅になれり、畫家は愈白うなれり。終に或日畫家は畫前に死しぬ。彼を葬らむとて、衣を解きけるに、彼が左胸にふるき疵あるを見出でぬ。而して人は偏謂へり「彼は何處より彼色を得來りしぞ」と。程經て畫家は忘られぬ。而も畫は限りなく活きぬ。

オリーヴ・ジュライネル女史著「畫家の秘訣」を節譯す

哀音

諸君は曾て靜なる夜に門づけの三味の音に耳傾けしことありや。余は生來情に脆き方にはあらざれども、未だ曾て淚なしに彼哀音を聞く能はざるなり。

余は自ら其何の故なるを知らずと雖も、彼哀音を聽く毎に、腸九廻するを覺ゆ。古人は

言ひぬ、凡ての妙音樂は聽く者をして悲しましむと。誠に然り。ヴァイオリンの咽ぶ、笛聲の怨む、琴の音の蕭涼たる、抑またピアノ琵琶の類より卑しき樂器に至るまで、心を靜め耳を澄して聞く時には、何れか吾哀思をばかき起さざる可き。泣く者は苦を減ず、哀しき樂器は涙よりして人を慰む。嗚呼余は東西南北の人なり。曾て亦馬關外の夜泊に、潮聲に和して咽ぶ簫聲に腸を斷ち、曾て北越の客旅に追分の曲を聞いて泣きぬ。曾て月の明かに風の清き夜、中國の海に薩乃の聲を耳にし、又曾て雪の朝南薩の途上に馬士の歌を聞きぬ。此等は皆吾心を動かしぬ。而も未だ彼一片街頭の音、吾腸を寸斷するに若かざるなり。

霜冴えて物の音十里に聞ゆる夜、月色滄々として水の如き夜、晝の騷に引換へていと靜まりたる都の夜の蕭寂のたゞ中に、忽ちかき起したる三絃一聲。突然と出でて忽ち高く忽ち低く、又は音波次第々々に遠く延行きて、また何時となく消え了る。窓を開けば、滿地唯月色あり。諸君、幸に心を靜めて此一霎時の音を聞け。擾々たる者は無心に擾らすらむ。然れども靜聽する余には、三條の絃さながら億萬の人の心の琴線を觸れる如く、其音の一昻一低さながら人の欷歔する如く、アダム以來人間の苦痛煩悶悲哀を集めて此一時に於て天に訴ふるものの如く、一曲人生の行路難、眞に吾をして腸九廻せざらむと欲するも能はざらしむ。ア、余は之が爲めに泣くなり。知らず是れ何の爲めの涙ぞ。吾悲しき乎。人の悲を悲しむ乎。知らず、知らず、唯此時には人類の煩悶苦痛を感ずるのみ。

天は才華爛發なる詩人をして人間の悲曲を歌ひ盡さしめず。閭巷無名の嬬婦をして人間の爲めに代つて其悲を天に訴へしむ。言あるの悲は悲しからず。余は此哀音の中に、感ず可くして言ふ可からざる無數の苦、無數の血、無數の涙あるが故に之を聞いて哀しむなり。

幸に余が妄を容せ。余は彼一曲門づけの節を聽く毎に、罪ある子供の母の膝に伏して泣く如く、迷ひし戀人の其愛を追うてさまよふ如く感ず。"Still sad music of humanity" の句を誦する毎に、余は此哀音を思ふ。

可憐兒

（一）

伊豆の山に、日は傾きぬ。葉山の濱には金色の波消去しまた湧來たり。

余は長者ケ崎に散歩して歸りつゝありき。

余は俯きて歩めり。忽ち救々砂鳴りて、大小二つの影法師眼前に落ち來れり。余は眼をあげて二個の人を見ぬ。

長は四十ばかりの嫁婦らしき女、一人は七か、八には過ぎじと見ゆる美しき女の兒なり。振分髪はふさ〳〵と白き額に波うち紫矢絣の被布着て、緋天の緒の雪駄穿きたり。

老女は無言、少女も無言。少女の美しき面には、子供にあるまじき悲哀の色あるを認めぬ。

何人の兒なるか。

濱に下り來し漁師の妻に問へば、聲を潜めて答へぬ。「彼はハア秋田さまの方ちやまですよ――」

秋田？ あゝ是れさきに家内の波瀾より自殺して果てし秋田子爵夫人の忘れ形見の一女子。

余はふり回り見ぬ。二人は今まさに大なる岩の蔭に入りて、紫の被布の袂のみちら〳〵ほの見えたり。

余は頭を垂れて歩みぬ。砂には小き雪駄の跡續きたり。

余は頭を垂れて歩みぬ。

夕日の光は海にも山にも滿ちて、今日も寂に暮れむとす。濱には人の影もなし。波は一つ

づつ足下に來りて碎け、來りては碎く。

三段ばかり沖の方を過ぎ行く舟あり。欵乃の聲、物悲しく夕日の空に響けり。

余が眼中曇り、雙涙はら／＼と砂上に落ちぬ。

（二）

可憐兒！ 汝が母は美人なりければ、懇望せられて秋田子爵夫人となりぬ。誰かと思はむ、其瑤輿は荊棘を編みしものならむとは。

夫は大名華族、弄花に巧みに、射的に妙なり。彼は三たび妻を更へ、妾を換ふる十一人。花柳に遊び、百姓の女に戯れ、別業にありては晝夜顚倒の遊びに一家をして皆病ましめぬ。

夫人彼に嫁して、女芳子を生めり。夫の亂行は夫人の肉は饜かざること稀なり。の不幸と竝び長じぬ。

妾は夫の寵を奪ひぬ。夫は親戚の間を絶ちぬ。先妻の女は事毎に彼女を惡しぬ。愛を求めて、得ず。自由を求めて、得ず。離別を請うて聞かれず。疑はれ、讒せられ、虐げられ、幽閉されて、彼女は世を果敢なみ、某月某日終に葉山別業の土藏の二階に於て、短刀を以て自殺したり。

可憐の母！ 可憐の兒！

（三）

思ひつゞけて、歩むともなく森戸の橋に來ぬ。夕日に明き諏訪神社に著しく榮えたる邸宅の家は、問ふ迄もなき其人の別業なり。左手に見ゆるは、夫人が自殺したる一室なり。夕日は今其玻璃窓を射て、余の如く閃きつ。

余は橋欄に凭りて立てり。一羽の鴉あり、橋の彼方の松より起ちて、唖々と鳴きつゝ、彼別業の屋根を掠め、遠く山を越えて去りぬ。

日は沈みぬ。

光は夢の如く消え、地を掩うて落つる黄昏の底に、余は默然として佇立みつ。

海運橋

其年を記せず、其日を記せず、前もなく、後もなし。

余は東京日本橋區第一國立銀行に近き海運橋を渡らむとして、不圖橋詰の共同便所の側に一群の人あるを認めたり。

四十五六の身裝賤しき婦人、髮は蓬々と亂れ、淺黄木綿の單衣に古ひて左右不同の下駄を穿き、二歲ばかりの女兒を背負ひ、五歲ばかりの男兒の手を引き、俯きて立てり、巡査ありて、何事をか尋ねつゝあり。

忽ち婦人ははら／＼と涙を落しぬ。片手は子を手引き、片手は負へる子を手助くれば、額拭ふ由もなく、涙滿面に流れつ。

背の孩兒はすや／＼と眠れり。手引かれし子は怪訝なる顏して、母の顏を打まもりぬ。他に十歲ばかり七歲ばかりの男兒二人は、何心なく川の方を眺め居れり。

吾心惻然。近寄りて巡査の尋ぬるを聞けば、良人は家出して行方を知らず、店賃の拂ひ出來ぬより、今日長屋を逐ひ拂はれて、途方に暮るるなりと云ふ。

他に二三人立どまりて問答を聞き居しが、やがて急ぎ去りぬ。金紋の車に乘れる紳士、車上より此方を一瞥せしが、其まゝ走せぬけて、輪勢勇しく銀行の門に入りぬ。

余は袂を探り見つ。嚢底に一錢なし。吐息つきて、川向うを見れば、第一銀行の建物は宛ながら城壘の如く、屋頭の旗影空を摩して勢よく飜れり。

彼處には千萬の金あり。然れども——吁然れども——。

櫻

二十餘年の昔、一個の童、一人の成人に手を引かれて肥後の木山と云ふ田舍町を過ぎ居たりき。時は明治十年にて、童は戰爭を避けて親戚の家に行く途中なりけり。

木山町には、薩軍の本營を置き、病院を設けたれば、處として傷人ならざるはなし。大小不同の小銃を稻塚の如く積みたるあり。泥塗れの青毛布を曝して、虱をとりつゝこくり〳〵居睡るあり。股引の破れを綴ふ男あり。鐵砲の掃除しつゝ聲高に語るあり。童は右を見、左を見、分からぬ薩語に耳を聾かし、恐る〳〵連れなる男の手につかまりて行きぬ。敗北打續き、彈糧乏しく、運命日に蹙る陣中にも、猶笑ふ可き餘裕はありけるにや、此處其處に高聲の笑語も聞えぬ。賊と云へど、鬼にもあらざりしと思ひつゝ童は猶も歩み行きけるに、向うより歩み來る男あり。鼠色の洋服の甚く色褪めたるを着て足駄穿き、朱鞘の長刀を落し插しにし、左手は繃帶して頸より釣り、右手に今を盛りの山櫻一枝持ちて、ぶらり〳〵歩み來りしが、忽ち側の店先にて刀を磨げる男に呼びかけられて、彼の櫻の枝を研師の鼻さきに突つけ、何やらむ早口に二言三言口走りつゝ、呵々と打笑ひつ。怖も氣を過ぐる童に其櫻の枝を與へて、

「恐ろしかンおやツとな。はゝゝゝ」

笑ひすてて去りぬ。

櫻は半里ばかり童の手に持たれて、遂に道側の小川に投げ込まれぬ。

童は今此事を記す者なり。彼櫻を與れし朱鞘の男は何と云ふ男ぞ。如何になりしぞ。今として知る可からず。されど二十年來櫻花を見る毎に、彼朱鞘の男は何處よりか飛び來つて、髣髴として吾前に現はるゝなり。

兄弟

宇都宮停車場は纔ほの闇かりき。

余は吾妻山の噴火探檢に赴く途中にありたるなり。

鈴鳴り、燈閃く。忽ち窓外に人の爭ふ聲す。

余は車窓を開き見たり。

プラットフォムに兩人立てり。一個は四十二三。色青く頰骨高く、眼とろ〳〵として唇薄く、頰より頤にかけ剃後五日の鬚、亂杭の如く生えたり。釜底形の古帽、二子の綿入、前垂して手に風呂敷包を持ちたり。一個は三十四五、色黑く、痘痕滿面、眉無くして、唇厚く、眼は重き瞼の下に電の如く光れり。彼は吳絽の襟かけたる半纏を着て、素足に草履はきたり。

忽ち風呂敷包の男は、客車に飛び乗りぬ。痘痕の男は續て彼が袂を摑みぬ、袂逸す。更に風呂敷包を摑みぬ。

「如何する？」

「ウヌ、逃がすものか」痘痕の男は齒ぎりして、

風呂敷包を摑みつゝ引下さむとす。

驛役夫五六人ばら〳〵と走り來れり。

列車の窓は人の顏に塞がりたり。

「如何した？　如何したんだ？」

「此奴ア盗人です、貸したものも戻しやがらねえで行つて仕舞ひアがるんです。ウヌ」痘痕の男は唸りつゝぐいと風呂敷包を引く。

蹌踉きながら車上の男は、「こら、放さねいか。歸つたら如何かすると云ふぢやないか。なに、皆さん此れにや色々と譯もあるんでムいます。こら、放さねえか」

「なに、ウヌ、何時も〳〵譃ばつかりつきアがつて、此の奴、畜生ツ！」

第二の鈴鳴りぬ。

驛長來り、巡査來りぬ。「如何した？」一一云

如何したんだ？、皆の邪魔になるぞ、なに、あなた、私少々ばかり此男に」「少々ぢやねえぞ。騙り奴。畜生奴。泥棒奴。ウヌ」「コラ靜にせんか」一暴湧き、人亂る。巡査は強ひて痘痕の男を拉し去りぬ。

痘痕の男は振りかへりざまに、「ウヌ、覺えて居アがれ、兄弟も何もねえぞ、畜生、兄貴も糞もあるものか、人を騙りあがつて！」眼は火の如く、脣を嚙みつゝ、巡査の後に從ひ去れり。

然らば此は兄弟なりしなり。

余は悚然として震ひぬ。

車中の眼は、恰も余が面前に腰をかけたる風呂敷包の男に注ぎつ。彼は遑々として左右を見廻しつゝ「フン、弟のくせに、些少ばかりの事を。フン、人樣の前もあらア、フン」斯く呟きつゝ、件の風呂敷包のゆるみたるを膝の上にて結びぬ。手はわな〳〵と打震ひたり。

車中寂として聲なかりき。

吾家の富

（一）

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か云ふ、狹くして且陋なりと。家陋なりと雖も、膝を容る可く、庭狹きも碧空仰ぐ可く、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り見舞ひ、風、雨、雪、霰、かはる〳〵到りて興淺からず。蝶兒來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來り遊び、秋蛩また吟ず。靜に觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

（二）

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花團々として樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より白き花ちら〳〵と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。隣家に花樹多し。風に從ひて、飛花吾庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るが内に滿庭花の衣を着く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻あり、椿の花瓣あり、山吹の花あり、李の花あり。

（三）

庭隅に一株の山梔あり。五月闇、鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、此花の吾家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。碧幹亭々として些の邪なく、吾如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる金剛纂は、葉廣うして、吾家の雨聲を多からしむ。

李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

（四）

つく〳〵ぼふしの聲に、世は何時か秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、唯一株前の家主の植ゑ殘したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しと云ふとも、秋のあはれ閑寂の趣は却て吾庭の一枝にある可し。蛻巖の翁なりせば、「獨憐細菊近荊扉」とや吟ぜむ。恥づらくは「海内文章落布衣」と唱す可き身にあらざるを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして、滿樹金よりも黃なり。風の風起れば、かぐや姫の扇にせま欲しき其葉、翩々として翻り落つ。

半夜夢さめて、雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、庭として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添へて、寸金と人は云ふなる錦を吾は庭に敷きぬ。

（五）

木の葉落ち盡しては、流石に淋し氣なるも、日影月影いよ／＼多くなりて、空を見星を見るに障り少なきは嬉し。

國家と個人

門毎に國旗あり。到る處に凱旋門あり。

日清の局終へて、今日は 大元帥陛下が廣島より凱旋あらせらる可き日なりき。

新橋停車場附近は眞に人の海なりき。老若男女、騷ぎつゝ、罵りつゝ、笑ひつゝ、人波うつてどよみあへり。「聖駕奉迎」の旗は紅に、紫に、白く、青く、五月の空に心地よく飜れり。愛國忠君は空氣にありき。

忽ち此人波を分けて、藁積みたる荷車二三臺無理に過ぎむとして、警官の一喝に遭ひて止みぬ。

忽ち背後に唸る聲を聞きぬ。「何でえ、畜生奴。何が面白えんでい。わい／＼／＼騷いで居やがる。畜生奴。車力なんざ如何するんでい」

余は愕然として顧み、顧みてまた愕然たりき。

余が背後に立てるは、立ン坊の一人なるべし、髮も鬚も蓬々と打かぶり、澁紙色の顏は更に青黑き色を帶びて怪しく光り、顴骨高く露はれ、恐ろしく窪みたる眼は惘々としたる中に餓狼の如き凄じき光を帶びたり、雜巾を綴り合はし樣なる單衣の、胸も露はに繩の帶して跣足なりき。

群衆の中に子供あり、食ひかけし饅頭をとり落しぬ。彼繩帶の男、飛びかゝりて取るより早く忽ち食ひ盡しつ。

彼は實に饑ゑたるなり。

子供は怒りぬ。群衆は笑ふ。余は哭せむとす。

饑程悲しきはなく、餓程恐ろしきはなし。人肉を人に喰はすは饑なり。バスチールを毀たしめしものも饑なり。

愛國、忠君、其は君が說くに任す。願はくば陛下の赤子をして饑ゑしむる勿れ。

斷崖

（一）

某の小村より某の漁村に通ふ一條の間道あり。間道に一處の斷崖あり。約三四十間の間、路は綫の如く絕壁を繞つて通ず。上は斷崖、下は海。行人一步を誤る時には、忽ち數十丈の絕壁を眞逆樣に海に落ちて、海底の岩に頭を碎き、若くは水死婦人の髮の如くに滑り搖げる海草に手足をからまれ、氷の如き潭水に麻痺せられて、人知らぬ死を遂ぐるの外なからむ。

斷崖、斷崖、人生到る處斯斷崖多し。

（二）

某年某月某日、二個の人此絕壁の道に立てり。

後は一吾、前に一彼。彼は吾友、竹馬の友——吾敵、必死の敵。

彼は吾と、鄕を同うし、生年月を同うし、共に一個の鞦韆に乘り、共に同一の小學に學び、共に同一の少女を爭ひ、其初四半生は友と云はむより寧ろ兄弟、否多くの兄弟よりも親しみたり。

而して何故に今敵——必死の敵となれる。

「彼」は成功して、「吾」は失敗せるなり。

同じ競馬の、足を揃へて發足線に立つ時、其足並に相違あらむ耶。而して一たび走するに及びては、彼馬は後に落ち、此馬は先に進み、或ものは逸れて埒外に飛び出で、或ものは躓き

て倒る。恙なく先を占めて優賞を得る者は稀なり。人生また實に斯の如し。

人生の競馬場に於て、「彼」は成功し、「吾」は失敗せるなり。

彼は坦々たる道を踏んで今の位置に上れり。彼は其家は富みたりき。其父母は彼を愛しき。彼は小學より中學を經、高等學校を經、大學を經、大學院を經、斯くて博士となり、位階を得、官を得、或機會によりて夥しき富を得、富も往々にして買ひ難き名譽をも贏ち得たり。

「彼」が斯く成功の段に上れる間に、「吾」は失敗の階を下りぬ。家富みたりしも、或機會によりて其富を失ひぬ。父母はやがて逝きぬ。年未だ十三ならずして、吾は自ら扶助す可き身となりぬ。而も一片自ら朽ちざらむと欲するの念あり。努力し、自活し、自活しつゝ勉強し、斯くて或學校を卒業せむとするに臨みて、吾生命を蝕ふ可き肺患は突然吾身を襲ひたり、情ある洋人あり、吾を憐みて其歸國するに及び、風暖かに空氣淸き其本國に連れ行きぬ。病は漸く輕し。吾は恩人の監督の下に其大學に入る可き準備を整へたり。突然恩人は急患によりて死し、吾は異鄕に零丁の身となれり。身を屈して使傭ともなり、資を得て、修むる所あらむとせしに、病患また發し、吾はせめて故山の土とならむとて歸り來りぬ。歸りて未だ死せず、死せざる內は活く可き計をなさざるを得ず。吾は一個の通辯となりて、或洋人に從ひ、或海水浴場に來れり。而して殆んど二十年にして「彼」に會ひぬ。

二十年前小學の門に袂を分ちて、二十年後相逢へば、彼は明治の天下に一の重要なる位置を占むる人物となり、吾は半死の一通辯のみ。二十年の歲月は彼を成功の神に捧げて、吾を失敗の穴に墜せり。

吾心喜ばむ耶。

成功はすべての物を金にす。敗者の下ぐる頭は蹂躪せられ、勝者の微なる一點頭は美德と稱せらる。「彼」は自ら故人を忘れざるを誇り、吾を呼ぶに「君」を以てし、舊を談じて呵々と笑ひ、新を語りて「氣の毒」と云ふ。而して得意は顏にあらはれ、輕蔑は其鼻にかゝりぬ。

吾心懌ばむ耶。

彼に招かれて、其避暑の宿を訪へば、兒女家に滿てり。其花やかなる夫人の出でて禮するを見れば、誰か思はむ、其昔吾が「彼」と其愛を爭ひたる當年の少女ならむとは。

吾心懌ばむ耶。

不運は命と雖も、不運の荷を負ふは、容易ならむ耶。志遂げざる止むなきなり。家を成さず、名を成さず、孤影飄零として半死の身を人の世に寄す、命なれば此も止むなきなり。然れど今の「吾」が前に今の「彼」を立たせ、昔の「彼」を記憶する吾に、今の「吾」を嘲る「彼」を見せしめ、已に重荷を負はせ、また其重荷を負ふを嘲る。怒罵は忍ぶ可し、冷笑は忍ぶ可からず。天吾を冷笑し、「彼」吾を冷笑す。

天を情有りと云ふ耶。吾心憤らざらむ耶。

（三）

某月某日「彼」と「吾」と彼絕壁の道に立てり。彼は前、吾は後。相距る唯兩歩。彼は饒舌し、吾は默然。彼は其肥えたる肩を掉りて行き、吾は瘦せ衰てたる體をもて一歩一歩に喘ぎ、嗽す。

吾眼は吾に因らず絕壁の下を覗きぬ。懸崖千仞、碧潭百尺。一指を動かさば、壁上の「人」は潭底の「鬼」とならむ。

吾は頭を掉りぬ。而も眼は潭下に向ひてやまず。吾は終に冷晒ひつゝ、「彼」が濶き背を見つめぬ。熟と見つめぬ。而してまた冷晒ひぬ。

卒然響あり、「呀」と叫ぶ聲吾耳に入りし時、

「彼」が體は已に懸崖の端にかゝれり。滑りて落ち、落ちむとして「彼」は一束の薄を握みぬ。手は薄をつかみ、體は空にかゝれり。

「君！」

唯此一秒時、眞蒼になりたる彼が面上には、恐怖失望哀願一時に過ぎぬ。

唯此一秒時、絶壁に突立つたる吾心中には、過去と未來、復讐の快と、同情、さま〲の感一時に湧き起り、相鬪ひぬ。

余は彼を見下して突立ちたり。

「君！」一哀叫せる彼が縋れる薄はばり〱音して根こぎにならむとす。

一瞬時、呀と思ふ間もなく、吾は絶壁の道に腹這ひ、病み憊れたる身の力を鼓して、彼を引きあげ居たり。

吾は眞赤になり、彼は眞蒼になりて、一分時の後は相對ひて絶壁に立ちぬ。

暫らく悄然として立ちたる彼は、血だらけの手をのべて緊と吾手を握りつ。

其手をひき離して、吾は轟く胸を押へて立ち、また顫ふ吾手をぢつと眺めぬ。

救ひ上げられしは、彼手。吾にあらざる手。

吾は再び吾手を熟々と眺めぬ。手には何の汚點もなかりき。

（四）

翌日、吾は獨り其絶壁の道に立ちて、上天に向ひて吾救はれしことを感謝してありき。

斷崖千仞、碧潭百尺。

吁吾昨日立ちしは獨り此斷崖に立ちし乎。此れ吾一生の斷崖に立ちしにはあらざる乎。

晩秋初冬

（一）

霜落ち、凩吹き初めてより、庭の紅葉門の銀杏しきりに飛びて、晝は書窻を掃ふ影鳥かと疑はれ、夜は軒を搏ちて晴夜に雨を想ふ。朝に起き見れば、滿庭皆落葉。眼をあぐれば、さても痩せたり楓の梢、錦は地に散り布きて、梢には昨夜の凩に殘されし二葉三葉四葉心細氣に朝日に光り、昨日まで黄金の雲と見し銀杏も今朝は扇薄ら骨あらはれ、晩春の黄蝶にも似たる殘葉の猶此處其處に縋りつきたるもあはれなり。

（二）

斯頃の晝こそいと靜なれ。朝は霜夕は風の漱石に寒けれど、晝は空青々と高く澄みて、日光清く美し。窻に對して書讀み居れば、都に住むとしも思はれぬばかり靜なるに、時たま障子にうつる物の影、何ぞと障子開けば、庭の李樹の葉は落ちて槎枒たる枝の縱横に青空を截みたるに、梧葉にや、大きなる枯葉の一つ落ちかゝり、猶落ちもやらで靜に日光に光りたるもをかし。

庭も寂びぬ。霜枯れの菊俯きて影を落し、鳥の啄み殘せる南天の實の金剛纂の下に紅う照れるも、華やかならずしていと寂びたり。雀二三羽庭に下りて餌をあさる。椽には老猫の日を浴びて眠りぬ。蠅一つ飛び來りて、障子を這ひあるく音がさ〱と聞ゆ。

（三）

邸の内も寂びぬ。栗も銀杏も桑も楓も椋も榎も皆落葉して、月夜には其影限りもなく地に亂れ、踏み分け兼ぬる心地す。落葉焚く煙邸内其處此處に立上りて、茶の花ほのかに香る夕、はら〱と時雨來り落葉をたゝきて、ほいやりと黄昏れ行く頃は、西行ならば歌讀まむとぞ思ふ。暮雨瀟々、今行き過ぎし傘より吾一人まさりて、世は此雨の中に果つ可く思はるゝ夜は、

默然として吾に伴ふ吾影もあはれなり。

（四）

月色ほのかなる夜に、ほの白き銀杏の落葉を踏みて庭に立てば、月一しきり薄れて、はらはらと木の間洩り來る二點、三點。時雨――と思へば已に止みて、また月になりゆく。此趣誰にか語らむ。

月なくて、寒星空に滿つ頃、木の下に寂然として佇めば、夜氣凝りて動かず、良久うして大氣少しくふるひ、頭上に枯梢の相ふるゝ音あり、足下に落葉のがさりと云ふ響あり。一瞬にして止む。星の語れるにあらずや。

月霜の如く地に冴え、凩海の如く空に吼ゆる夜は、人籟すべて絶えて、直ちに至上の聲を聞く心地す。

夏の興

（一）

十二歳の夏、京、樽八の寺に避暑したることあり。寺の下に一道の清流あり。一處藍を湛へて淵をなし、淵の上に岩ありて突出でたり。日盛りに、二三の友と近所の村に行きて西瓜を買ひ來り、之を溪流に冷やすと稱して、或は岩上より抱いて躍り、或は爭ひ奪はむとして互に水を潑し狂ひ廻れば、淵は雪を沸して、三人が眼眩める間に、水は窩に綠玉塊を奪ひ去つて、浮島沒焉流し行く。餘りに爭ひて、岩角に西瓜を破れば、おの〳〵其一片を泳ぎながらに食ふ。多半は是れ水なり。

寺の坊主等小河童連と云ふ。眞に河の童なりき。

（二）

故郷の姉の家に清冷氷の如き井水あり。井戸の側に綠葉翠蔓一面に這ひ廣がりて黃花處々に咲ける南瓜の畑あり。午下二點。蟬聲耳を煎りて、睡に千鈞の重量ある時、跣足になりて井戸側に走り行き、一桶の水を汲みて高架の上に置き、南瓜の蔓の彎曲せるものを伐りとり、桶にさして導水管とし、赤條々になりて頭を冷やす心地今に忘れ得ず。

（三）

富士を下りて、中畑より友とおの〳〵馬に騎して御殿場の方へ行く。姫百合車百合撫子桔梗、其他あらゆる夏秋の草花淺茅にまじりて、書の中を行く心地あり。馬を牽ける小娘を喚びて、折らすれば一抱ばかり摘み來りぬ。馬首に載せて、其香色を愛でしが、後には吾前に海水浴帽を冠りて馬背に跨れる友を、背後より花の礫にうちて行く。

中畑を出でし時は、午に近き日の光赫々と頭上より照りつけ、馬上に汗を流しぬ。半里ばかり行く程に、忽ち殷々の響起りて、愛鷹山の邊に一團の黑雲湧き出で、見る〳〵東南の空に廣がりつ。水氣を含める風颯と面を吹き來りぬ。眼を上ぐれば、赫々と照りし日光かき消す如くに去りて、物の影は地の上に消え、野原も森も鬱として曇りぬ。馬は心地よげに鼻を鳴らして行く。

「よられつる野もせの草のかげろひて、涼しく曇る夕立の空」と云ふ西行の歌の妙を、此時知りぬ。

（四）

前に云へる姉の家は、不知火燃ゆる海邊にありて、天草に近く、大小の島々手次第に横はり、水は深けれど碧玉の如くに澄みて、島々の間を洄り、川となり、湖をなし、悠々として水も宛ながら游べる樣なり。地方と島、島と島と

の間の狭き處は、小聲にも話す可く、馴れたる子供は盥を浮べて渡る。所謂「島間海僞潮、渡船小於瓜」なるもの。

江村八月碧鱸まさに肥えたり。親戚知友三四人、一葉の小舟に釣具、鍋釜、米、皿碗、醬油何くれととりのせて出づ。日は熱けれど、水上微風あり。島影靜かなるあたりに舟をとどめて、おの／＼綸を垂るゝに、船頭の鈎には尺近き鯛一尾碧鱸小なるもの兩三尾を獲たれ共、素人の我等が鈎には稀に雜魚のかゝるのみ。腹立たしきこと限りなし、已に日も午に近づきぬれば、彼方に釣れる漁舟を喚びて、更に碧鱸の大なるを買ひ、舟を島根の松に繋ぎて、船頭が飯炊き肴作る間に、臂を枕に横になりつ。日の陰しきに乙女ならねど袖を顏に掩うてあれば、吾背の下の舟底をぴたり／＼と舐るが如き水の音、搖さと身は搖籃にある心地して、何時か夢路を早や三四里も行きしと思ふに、突然戸の鳴るに驚かされ、眼を開けば、船頭が、「客人、飯が出來た、起きさつしやい」と喚ぶなりけり。

簀板を膳にして、飯と汁とは碗に盛りたれど、肴は大皿に山盛りにして、一の茶碗に醬油を添へたり。潮水にとぎたる飯は些し鹽氣ありて却て甘く、船頭が鋳でたる出刃一挺の手料理、鱸も鯖もぶつぶつ切りの刺身は、大工が手斧の下に飛ぶ木片よりも大なれど、甘さは頰も落ちむばかり。喫し終れば、島に上りて人家の井水に咽を濕し、歸れば衣を脱ぎて舟の上より海に飛込み、一泳してまた一睡。日傾きて風そよ／＼と水面に流るゝ頃より、舟を移してまた綸を垂るゝ程に、日はます／＼傾きて、終に落ちぬ。島は一つ／＼次第に暮れて、明かなりし水の面溶々と紫を流し、やがてまた白うなりぬ。

舟を返せば、咿啞と響く櫓の音の一つ毎に空の星は殖えて、影水に落つれば舟は空を行く思あり。黑き島々には、ほのかに螢光のさすもあり。人無くして蟲の音をのみ載せたるものあり。行くまゝに空も水も闇うなりまさりぬ。櫓搖けば、碧鱗花の如く亂れ、鯔鱸の類右に左に倏々と走りて、水に白光を溶かす。夏の夜の更け易き、歸れば江村寂として黑く、蟲の音のみしげく聞えたり。

（五）

或夜頭熱して眠らず、起きて庭を歩するに、黑樹を漏り來る月の光碧にして雨の如く、蟲聲四に聞ゆ。行きて井戸端に到り、繩を手繰れば、月ゆら／＼と釣瓶の水にあり。口づから月光を啜ひ、あまれる水を覆せば、月影たらたらと滴り落つ。あまり美しきに、また一釣瓶、猶一釣瓶、三釣瓶の水をこぼして、猶暫し蟲聲、樹影の中に立ちぬ。

（六）

逗子にある日、暑甚しき時は、麥藁の減水帽を頭にかぶり、赤條々となり、小舟の櫓を押して、獨り前川の人無き處に到る。御最期川の兩支流相合する處には、藻の間に深き窪淵ありて、魚の巣窟なり。舟を此處にとゞめて、或は舟上より釣り、或は新聞を讀み、或は釣を垂れたるまゝ、舟板に臥枕して午睡す。醒め來れば、魚の釣竿を引き去り居ることもあり。七寸位の鱸のかゝり居ることもあり。

右の支流相會ふ處、青蘆渕あり。蘆渕の上には松生ひ、松の下草には透百合、撫子、日あふぎなど咲き、蟲聲も聞ゆ。渕のあたりは皆軟砂なり。或時舟を此處に寄せ、上りて透百合を採りて歸るに、偶日紫を流して淺水宛ながら水無きが如くなるに、日影の片の如きもの水中に在るが如く、無きが如く、動くが如く動かざるが如し。諦視すれば芝海老の游ぶなり。夜が

體透明にして、水其ものの塊れるに似たれば、渡に認め難きも、其動く毎に彼が影の黒く水底に移り行くにて、其れと知らる。よく見れば青蘆の根にも、水淺き砂の上にも、幾個ともなく游べり。手をもつて捉へて、須臾に一籃の海老を獲たり。

水濁れば、釣の獲物いよ／＼多し。雨勝の日、襯衣一枚になり、川中に入り、竿を水面四十度の角に插みて、靜かに魚を待つ。水流茶褐色に濁りて、膏の如く淀み、竿と綸の影倒に移りて、物と影と共に不規則なる三角形をなしつ。水中に立つこと久しければ、吾足を杭と心得てか、蟹などの這ひかゝるも可笑し。

忽ち空一段闇み、水の面にぽつりと一つ雨點の落ちて蛇の目を畫くと思へば、ぽつ／＼／＼落ち來りて、渦紋渦紋と亂れ、果はざあとしぶきて水面さゞめき立ちぬ。眼を上ぐれば、細き水晶簾空より川の面にかゝりて、小坪あたりの山は茫とかき暮れ、つい其處の松林も半は有無の間に入りぬ。

間もなく雨はまた忘れたる樣に止み、水はいよいよとろりと淀み濁りて、たつぷり水を含んで色濃き青松林の影も塗れるが如く映りぬ。釣竿の尖より綸を傳うてぽたりと雫の落つれば、圓波川の面に廣がり行く。

歸る時、魚籃には鰻鯊滿てり。

（七）

大人子供三四人沖釣に出でて、時移る程に、富士の此方に渦まく銅色の綿雲の奧に殷々と雷鳴り出でつ。雨も海上は靜かにして、一波だも動かず。

大島の方を眺めて、夕立來可しと船頭の云へる程に、我儕が眼には何も見えざりしが、猶も沖の方を眺めて、「來る、來る、さあ來たぞ――來たぞ」と船頭の云ふが中に、成程沖の方黑うなり來て、一里ばかり彼方を驅り居たる舟の狼狽へて帆を引下すよと見れば、其あたりの海の面鱗々と皺立ちぬ。大海を渡り來る驟雨の速さ。それ舟を戻せと云ふ間もあらせず、彼眞黑きもの見る／＼押寄せ來りて、冷風颯々と面を拂へば、舟の四周は忽ち億萬の水族一時に跳るが如く皺立ち、忽ちにして簀板に迸る白雨、一點、二點――千萬點。須臾に我等が一葉の小舟は黑風白雨の重圍に陷ちぬ。

傘も無く、ありても翳す樣無ければ、敷きたる茣蓙を三四人して引かつぎ、成人子供一枚の蓆の中に打笑ひつゝ舟底に蹲れば、電光雷鳴舟を繞りて、迸る雨に、袂も裾も絞るばかりになりぬ。

雨後の月

（一）

わたしは不斷さう思ふのですよ、人間は如何樣な事があらうと決して自棄を起すものぢやありませんね。それはもう海人が鹽燒くと云ふせち辛い世の中ですもの、五十年七十年の間には隨分憂い事つらい事、たまには死にたい程くやしい事もありますわ。意地の惡い天道樣自分一人を繼子になさつて、あゝいやだ／＼いつそ舌でも咋ひ切るか、淵川へでも身を投げて仕舞はうと、斯う思ふこともあるものです。でもね、此處が人間一生浮沈の別れ時で、斯の處を眼をねぶつてぢつと持ち堪へて居さへすると、天道樣の秤はすぐとまた逆戻り、沈んだものは浮上つて、枯株にも芽がふきます。此處の辛抱が出來ないで、つい自棄から一生をさゝはらさにして仕舞ふと云ふは、情ない譯ぢやありませんか。よく昔話に云ひますね、苦勞の重荷を背負つて居る人間が、他人の荷物は輕さうだと羨んで居るのを、天道樣が愍れと思召して、

それなら荷物の取り替へつこをしろと仰有つたので、皆喜んで自分の荷物を放下して、偖他人の荷をあれ此れと背負つて見ると、是はしたり、何れも〳〵吾荷より餘ッ程重いものばかり、餘儀なくまたもとの吾荷を背負つたと云ふ話がありませう。誰の身にも荷物は有りまさアね。座蒲團で拵へた人形さまを背負つて居る花ちやんでも、ね、日本を肩に背負つて居る何某の大臣さんでも、皆それ〴〵荷物はあるのですよ。わたしなんぞは斯樣な見るかげも無い獨り者、其でもね、儚の一葉も露とやらで、わたし相應に此とは背負つた荷もありますの。あなた方はまあ是れからが蕾み咲くと云ふのですから、面白い事も澤山ありませうし、また隨分つらい事もあります。何の御爲めにもなりますまいが、今夜は一つ此間から、皆樣の御望のわたしの素性の話をしませうね。さあ美さんも露ちやんも德ちやんもずつと此方へ御寄りなさい。エ、眠りつこなしですよ。今夜は蚊が居なくて宜いことね。おや、ランプが消えてしまつた。なに、德さんようムいますよ、此樣に疊の上まで月がさしますからね。おゝ涼しいこと。御覽なさい、楢の葉がきら〳〵、まるで玉ですね。では話しますよ、ようムんすかい、おほゝゝゝ、あらたまつて話し家の樣ですね。

（二）

よくソレ西國中國邊で歌ふ「船頭可哀や音戶の瀨戶で一丈五尺の櫓がしはる」と云ふ俗謠を知つて居ますかね。知つて居ませうね。わたしはね、其音戶で一と云はれた酒家の一人娘でしたの。今ぢや人の有になつてますが、わたしの家は田舍での大家でね、腥い藁葺や矮い瓦屋の眞中に巍然と立つた白壁の土藏造りは隨分入舟の目標になつたもので、今でも汽船であの邊を通つたら、依然靑々として海の流れに映つて屹と立つて居ると思ひますよ。結つきと云ふものは、どうも風儀が惡くッてね、ですが、わたしの內では珍らしい堅氣揃ひで、奉公人も大勢使つてましたが、短くても五六年長いのは二十年も三十年も勤めたと云ひます。でもね、災難の降つて來る時には致方のないもので、父はわたしがまだ母の乳房を銜へて居る內に、灘へ何か仕入れに行く途中で難船して、水島灘の藻屑になつて、それからと云ふものは母もがつかり弱つて、つい其秋風邪から病みついて、わたしをひしと抱きしめたまんま泣死にに死んで仕舞ひましてね。思へば此がわたしの一生の不仕合せの初でした。それからわたしは父の實弟で荒物屋をして居た叔父の內に引取られて、家業は叔父の監督で永年勤めて居た實體な番頭にやらせる事になつたさうですが、何を云つても親のない者ほど哀れな者はありませんわ。お金お金と近頃は金ばかり持囃す世の中になりましたが、億萬圓でも買はれないのは親の愛でせう、なんぼお金があるたつて、牛乳羊乳は買つても飮みませう、乳母は雇ひもしませうが、母親の乳房は買はれますまい。わたしも其頃はまだあんよが上手の頃でしたから、何の譯も知らないで、たゞ母に別れてから恐ろしく蟲氣が起つて夜晝啼通しに啼いて居たさうですが、段々大きうなるにつけて始終思ふのは此事ばかり、今日が日までもあゝお母さんが居たらお父さんが御出なすつたらと思はぬことはありませんよ。兎角人間と云ふものは我儘なもので、親が達者で居る間は勝手氣儘も云ひもし爲もするものですが、さあ別れると唯もう「なきてぞ人は戀しかりける」で、あゝ惡かつた、と氣のつく時は最早親は無言の石塔――あゝ話がわきへそれましたね。

（三）

わたしの叔父さんはそれは〳〵好い人で、夜

食の膳で一緒やりながら、わたしが部屋の隅などで飯事でもして居ると、ぢいつと見ながらほろほろ涙をこぼしたものですが、叔母は中々勝氣な方でわたしも叱られ〳〵しました。人間は一寸したはずみで善くも惡くもなるもので、叔母なんぞも決して惡人ではなかつたのですが、子供が多い所へもつていつてわたしが世話をかけるやら、それから人情は妙なものでね、わたしが兩親ないものですから家の前で鬼子ッこして居ても通りかゝりの者が、「お嬢さん、よくお遊びなさいますね」とまづ先にわたしに愛想を云つて行くので、叔母も何か自分の仕打に不足でも見られる樣に妙に氣を惡くするやら、生憎從姉從妹は麻疹してわたしは達者であつたり、小學校でもわたしは一番なのに皆は一向出來なかつたり、何やら角やらで叔母も其處はドゥしても生さぬ仲の事ですから苦い顏も見せれば隨分敲いたり抓つたりすることもありました。是は人情致し方もない所ですが、する方は兎に角、せられる方は本當に憐れなものでせう。わたしも斯樣な事から恐い、惡い、怨めしい、悲しいと云ふ事を覺えて、僞詐もちつとは言ひ習ひ、子供にあるまじき物思ひをすることもありましたよ。今でも覺えて居ます、從妹が叔母の針術を荒したのをわたしの所爲の樣にひどく叱られて、父母の墓所に逃げて行つて、嗚咽りあげながら、墓を眺めて、「あゝ此下にはお父さんやお母さんが御出なさる、わたしもはひりたいなあ」と思つたりして、丁度夏の頃ですから、あのソレよく墓場にさくぼんやりした黄ろい、ね、月見草の花を摘んで、それから夕日の黄ろく照りつける草の中に寢ころんで、墓石に映つた樫の影のちら〳〵〳〵〳〵躍るのを見て、頭の上につく〳〵ぼふし、つく〳〵ぼふしと鳴く蟬の聲を聞きながら、何時の間にか泣きなりに睡つてしまつて居たので、叔父の方ではわたしの行方が知れぬと云つて大騷ぎして、やうやうわたしが墓場に寢て居たのを搜し出し、此れは乾度お前が惡い、此樣な事で姉樣や兄樣の位牌に顏があはされるかと叔父がひどく叔母を叱つた事もありました。併し何と云つても家の實權は女にあるのですから、叔父から一つやさしく云はれる所では叔母から十も二十も睨まれると云ふ塩梅で、私も係ッ程子供らしい自然な性質を失つてしまひました。決して怨むぢやないのですが、今でも早く兩親に別れた子供でも見ると、吾事の樣に身にしみますよ。

其内叔父は果てますし、叔母は如何樣な心でしたか廣島の者で人の好くない四十男を後夫にしたので自然緣家親類の間も遠々しくなつてしまつたのですが、世の中には隨分いけない人もあるもので、其後夫と云ふ男がどうして叔母を欺したのか、わたしを追出してわたしが家の身代を取つて仕舞はうと謀つたものですから、亡くなつた母の弟がそれと聞きつけて、其樣な奴等に大事な姪は預けぬと非常に立腹して、親類會議を開いて、到頭わたしを引取りました。叔父の内に移つて暫く經つと、叔父は活計むきの都合で音戸の家をたゝんで東京に引出ることになり、それについてはわたしも共共引出た方がよからう、また何百里かけて家藏の世話出來るものでもなければ、いつその事公債にでも引換へて置いたがよからうと云ふことで、幸ひ望手があつたものですから、わたしの本家は家屋敷土藏から道具器械一式揃へて株ぐるみ悉皆其人に讓つて＝父の死後店の事を任して置いた番頭は叔父と前後に亡くなつて、此頃は店も暫く休んで居ました＝それから田畑や貸金なにかは親類の手堅い者に賴んで、東京に引出ましたのが、わたしが丁度十五の春でした。

其れから後は一々話せば長いですが、叔父は

麹町一丁目の北側に唐物店を出して仕合せに景氣づきますし、わたしも半年近く兎や角と家の事に從妹に加勢して居ましたが、叔父も斯様して置いては濟まぬと云つて、わたし共をつい近所の開化女學校へ遣ることになりました。わたしも其以前亡くなつた叔父の内に居た頃は、あまり叔母ががみ〳〵叱るものですから、つい捌けもすれば曲りもし沈みもする様になつて居たのですが、年若な時分は浮標も同然抑へ手がありさへせねば直ぐぶく〳〵浮立つて來るもので、別して此叔父の内に來てからは叔父叔母從兄妹まで親切に全く家内の者にして呉れたのですから、あたりは珍らしゝ、賑かだし、わたしも最早自分の不幸は打忘れていそ〳〵學校へ通つて居ました。其内都珍らしい正月の數も重なつて、上野淺草左程に遠くも思はない様になつて、十九と云ふ年になります。斯う云ふと可笑しい様ですが、わたしも其頃は此様な見すぼらしい風はして居ず、髪も[illegible]に、御嬢様は御器量が好くていらつしやいますからなどと輿更御世辭ではなく言はれた事もあつた位で、叔母も叔父も内々わたしを此まゝ此家の從兄の嫁にと思ひ込んで居たらしく、まだわたしには明白それと言はなかつたですが、何時か湯の歸りに奥の緣側で、「彼の心を聞いて置いた方が大丈夫ぢやないか」「なにあなた、不承知なんぞ云ふものですか、大丈夫ですよ」と叔父叔母の言葉を洩れ聞いた事もありました。此從兄の欽一郎と云ふのはわたしに二つまさりで、其頃は軍人になるとか云つて陸軍士官學校に入つて居まして、誠にさつぱりした男で、わたしも子供の時分から一處に育つて見れば兄妹の様に思はれて隔てなくして居たのですが、其處が不思議の世の中で、わたしの心は最早其時は他人の有でした。

わたしが學校の往き返り此一年ばかりが間、毎日の様に行逢ふ人があつたのです。年の頃は二十四五、何時も洋服出立のさつぱりとして色の白い、髭の黒い、今から思ふとおほゝゝゝ隨分にやけた人でしたが、其頃は眼の前にぼうつとして薄霧のかゝる時代ですから、大層立派な方だと思つて居ました。所がね、ほんに小說の様な御話ですが、靖國神社の祭禮の晩でした。花火を見に行つた歸り道、連にはぐれて獨り御濠際を歸つて來ますと、大勢醉つぱらつた奴等に出あつて、連がないと侮つたのか通せぬ路をしたりなんぞするのでせう。わたしは恐いよりも人の眼の前が羞かしくて如何せうかと途方に暮れて居ると、後から洋服着てステッキ持つた方が、「あ、お前此處に居たのか、ひどく搜したぞ」と云つて、わたしを引立ててずん〳〵通りぬけたのです。わたしは二度喫驚して、フッと其人を見ると、瓦斯燈の明りですぐ分かりました、それが毎日顏見合はす其方なんでせう。あ、御自分の連と思はして其場を救つて下すつたのだと心づいて、ほんに嬉しく思ひました。若い時分は一寸した事でもしみ〴〵身に沁みるもので斯様な事から一生をだいなしにすることもあり兼ねぬもので、うつかりしてはなりませんねエ。それから叔父の家まで送つて下すつたのが緣になつて、始終遊びに來るのです、三菱銀行‖其頃はまだ駿河臺にあつたのです‖の社員とやら、中々容子の好い悧巧な如才のない人で、田舍氣質の叔父叔母從妹までが好い方だと云つてよく持てなしたのですが、從兄ばかりは俗物だいけない奴だと嫌がつて、日曜でも顏あはせるとひどく氣分を惡くしました。其内段々近しくなつて、わたしの身上も何時の間にか知られて、それからはいよ〳〵以て親しく圓滑に持ちかけるのですから、何の分別も經驗もなかつたわたしの事で、しみ〴〵嬉しく思つて、實は内々叔父叔母の

わたしを從兄に妻す心算は氣づかなかつたのではないのですが、ついうか〳〵と其人の口車に乘つて、叔父叔母さへ承知致したならと斯う云つてしまつたのです。叔父叔母はひどく失望しました。失望もすれば不快にも思つた樣子でした。併し叔父叔母もまだわたしを欽一郎にと云ふ事は相談かけたこともなかつたのですから、まさかに内の嫁にするから外へは出來ぬとも云ひ兼ねて、好い人達ではあるし、わたしも本家の女と云ふに少しは遠慮もあつたので、先方は催促する、わたしは不承知でないと云ふ間にはさまつて、到頭ならぬと云ひ兼ねて、不承不承に承諾してしまつたのです。先方の身分取しらべるのも實は表むき丈で、早速結納の取かはせも濟む、先方からわたしの財産を一應聞きたいと云ふので叔父はついわたしの名になつて居る公債證書地劵などわたしの印形ぐるみ、器械的に先方へ渡して了ふと云ふ鹽梅で、わたしは何が何やら、夢の樣な心地でした。

（四）

併し夢の樣な心地の中にも從兄の欽一郎の右の話を聞いて、默つて一言も云ひはしなかつたのですが、恐ろしく顏を蹙めたのがそれは〳〵氣にかゝつて、叔父叔母もわたしの爲めにいそいそ婚禮の支度をして呉れはしますが、如何しても浮かぬ顏色で居るのが是れまた氣にかゝつて、何だか叔父叔母や從兄に對して濟まぬ樣な欺した樣な氣咎がして、其所爲でもありますまいが、ひどく頭痛がし出して、婚禮の一週間前と云ふ日からドッと床についてしまひました。最初は朝晩に熱が出て、それから身體中の血が湧いたり冷えたり痛い樣な搔きむしりたい程痒い樣な心地でしたが、其内顏から手足まで一面に赤みがかつた紫色のものがぽつ〳〵出來て、醫者に見せると、さあ大變、天然痘だと云ふのです、叔父も叔母も大騷ぎして到頭わたしを第二醫院に入れることになつて、釣臺にのつた迄は覺えて居ますが、其あとは唯茫として始終蒸風呂の中にでも居る樣な地獄にでも落ちた樣な積りで、夢心地に熱い〳〵と思ふばかりで一切夢中であつたので、ぽつかり眼を開いて長方形の部屋の中に寢臺に臥て居ることに氣づいて、「あゝまだ生きて居た」と思つたのは、入院して二週間も經つての事でした。餘程ひどい熱だつたさうで、醫者も望を絕つた位で、幸ひ一命を取りとめたのですが、顏容は見る影もなく變つてしまひました。

熱が退いて正氣づくと直ぐ浮んだのが「結婚」と云ふことと、また「此病氣が結婚の邪魔になりはせまいか」と云ふ心配でした。わたしの國の親類内に矢張天然痘をわづらつた者があつたのですが、直つた當座はまるで焰硝怪我でもした樣に顏一面赤黑くなつて、それが段々よくなると、彼處も此處もぽつ〳〵孔が見え出して、それはもう見られたものではありません。どうか彼樣にならぬ樣にしたいものだと念つて、可笑しい事ですが、痂一つ剝がない樣に用心して居ました。掛念はしたが實は知らなかつたのですよ、叔父も叔母も默つて何とも云はず、お醫者も看護婦も何とも云はず、鏡も見せて呉れなければ、わたしも何だか鏡を見るのが恐くて、玻璃障子や藥瓶でも見ぬ樣にして居たのですから、それから退院して叔父の内へ歸つて來ますと、知るべの者が退院の喜びに來ましたが、皆わたしの顏を見て實止な顏をして歸つて行きます。さては自分の顏が變つたに違ひない、それでは結婚も出來なくなつて仕舞はうか、愛想つかされうか、まさか彼親切な方が結納まで濟んで居るわたしが、少しばかり容貌形姿が變つたと云つて振棄てはなさるまい、なさるまいと思案しながら、緣側の柱にもたれて枯

梗の鉢に蝶が一つ飛んで居るのを眺めて居ますと、靴音がはつと胸にこたへました。彼人が來たのです。わたしが入院して最初二三度はデセールの鑵など持つて見舞に來たさうですが、其後はさつぱり音沙汰なしで、今日退院の知らせをしたから來たのでせう、弟と縁側に立つて居るわたしを見て一寸思ひ付かぬ風でしたが、やうやう、「イヤ、失敬しました」と挨拶するのでせう。わたしは恥しいと苦しいと心配と一時にこみあげて、かつと上氣して、碌々挨拶も出來ません。先方では一向無頓着なしで、何か暫く浮世話をして、別に何にも云はず、匆々に歸つて行きました。歸つたのは好いですが、歸り際にぢつとわたしの顔を見て、眼と唇の何處やらにそれは／＼冷たい輕蔑んだ色を見せて、にやりと笑つたのをちらりと認めたのです。わたしはハッと思つて、吾部屋に籠つて、襖をしめ切つて、震ひ／＼鏡を見た時の心もち！一眼見て「アッ」と吾ながら叫びました。あの位の大病だからよもや無事ではあるまいと思ひは思つたが、此れはまたあんまりな變り樣。菊石と云はうか、柘榴の内皮と云はうか、鼻の尖から額の下兩耳にかけて唯もう一面の黒痘痕、眼ばかり光つて居て、口は右の方へつりつけ、髮はばらり／＼ぬけて、二目と見られた容態ぢゃないでせう。わたしは突然鏡を庭石に擲きつけて一晩泣き明かしました。

（五）

若い女しかも嫁入際の若い女の器量を落して仕舞ふのは、中々天下取りのナポレオンが島流しされたよりもつらいものですよ。なまじひに御器量好だの美人だのと云はれた丈に、わたしも心から口惜しくて、此顔を寸々に切り裂いて、世の中の女と云ふ女の顔を扯きむしつて、出來ることなら此世界を打壞しても仕舞ひ度く二日三日は碌に口もきかないで、部屋に引籠つて居ました。彼人の方から其切り何の音づれもしません。其方はわたしも最早望を絶つて居りました。如何して此顔を下げて厚顔しく嫁にと云はれませうか。併しそれならそれと男らしく言つて來さうなもの、氣の毒と思ふ位の人情はありさうなものと、恨の念は充ち滿ちて居たのです。其内八月の十二日になつて、丁度今夜の樣な涼しい月夜でした、わたしはちつとは氣晴らしにもならうかと、そつと部屋を出て、唯た一人で九段の公園の方へぶら／＼出かけました。あゝ去年の此處の祭の歸り途だつた。彼人の世話になつたのが始まりで、もう結納まで取りかはす段になつて、此樣な事にならうとは。あゝ情ない、と思ひながら、ほろ／＼こぼるゝ涙を袂で拭き／＼、櫻の影眞黑い中を通りぬけて、靖國神社裏手の泉水の側を歩いて居ると、泉水の向側から突然に忘れもせぬ男の聲で、「其樣な事があるものですか」と云ふ聲が聞えたのです。ハッと思つて向うを見ると、今櫻の蔭から月影へ出た浴衣二つ。右は確に彼人、左は島田の女でせう。胸を撞き破る樣にうちだす動悸を兩手でぢつと抑へて、わな／＼震ふ唇を喰切るほど噛みしめて、ぢつと向うを見つめて居ると、此方は蔭ですから一向氣もつかずに、二人いやらしく寄添つて歩いて居ます。男は彼方向いて居て、顔は見えないですが、何か媚びしなだれた樣な風をして、女は俯き加減に微笑を含んで居る其横顔に月の光がさして凄い程白いのに、眞黑の島田から二すぢ三すぢおくれ毛のばらりと散りかゝつた風情、此は見覺えのある元園町の酒屋の娘で、一時同じ學校に居た事のある何某と云ふ女です。息を詰めて耳をすまして居ると女の聲で、「でもあなたはもう結納の取かはせまで爲すつたと云ふぢやありませんか」「何有、其樣な事は構はないさ。彼樣な

痘面が如何なるものか。加之此方から望んだ譯ではなし……」「まあ、あんな事をいつていらつしやる。わたしはちやんと知つて居ますよ」「何を？」「何をつて、悉皆」「馬鹿な」「でも萬一先方から矢釜しく掛合つて來たら如何なさいます？」「何處かへ行つて仕舞ふ丈の事さ、君と一處なら……」

最早先は聞かれません。わたしはそつと拔足して、社内を出ると、御壕の方を指して一散に駈け出しました。淺猿しいと云はうか、情ないと云はうか、此樣な腐れた世の中に生きて居たつて何にならう。あゝいやだ〳〵、自分もいや、人間もいや、世の中もいや、何もかも搔きむしつて、ぶち壞して、劈いて仕舞ひたい。口惜しいと一心に思ひつめて、壕の方へ駈けて行くと、瓦斯燈があかあかとついて、納涼に來る人や何か往來が絶えないものですから、も少し經つて人が居なくなつてと思つて、それから同じ處に立つて居ては巡査の眼にでもついてはならないと氣がついて、番町のあたりを無暗に歩きました。何だか茫と夢の樣な中にも、神經は恐ろしく鋭くなつて、國の父母の墓所の光景や、叔父の家や、從兄の顏や、叔母の顏や、學校の事や、病院の樣子や、今の九段の樣子や、鏡に見えた自分の顏や、洋服着た彼人の姿や、自分の葬式の光景や、何もかも一時に走馬燈の廻る樣に浮んで、今步いて居るのは番町でもあれば死んだ後の樣にも思はれて、眞暗い蔭になつて居る巷路をとぼとぼ步いて居ますと、其眞黑い中からぱつと光明がさして來ました。それから何やら歌ふ樣な聲も聞えるのです。何の事だか暫くは一向分からなかつたのですが、餘ッ程經つて此は讃美歌を歌ふので、此處は一二度は引張られて來た事もある耶蘇教の會堂だと云ふことが解りました。わたしは耶蘇教が大嫌ひで、と云ふのは何の耶蘇教を知つて何處の所が嫌ひと云ふではなく、唯耶蘇と云ふ其名から嫌ひで、蟲が嫌ひで、嫌だ嫌だと云つてましたが、此時其歌の調子が何やら憐れつぽく、もう今夜死ぬると云ふわたしにしみじみ覺えたので、ふつとはひり込んで聞いて居ますと、其歌は、

さまよへる者よ、　立ちかへりて
天つふるさとの、　父を見よや。

と云ふので、つい其節の美しいのに聞き惚れて、一句一節耳を傾けて居ると、其美しい節に包んだ美しい文句が油の樣に身にしみ渡つて、何だか母の懷にでも抱かれて其和かな手に背を撫でられる樣な心地がして、わたしは身震ひして顏を押へて泣き出しました。歌は猶つづいて、やさしい愛の言葉は耳から電氣の樣に全身にしみ渡る。淚は泉の樣に湧く。わたしは泣く程泣いて、淚の下から石か鉛の樣に固まつて居た胸さきは段々にくつろいで、ちつとは心の輕くなつた樣に思はれたのです。それから嫌ひな祈禱も吾とはなしに頭が下れば、說教もよくは分からなかつたのですが、何やらわたしの爲めばかり云つて聞かせる樣な心地がして、あゝほんとに惡かつた、天道樣が見ていらつしやる、此樣な事で死んでは濟まぬ。わたしは不仕合せでもわたしよりも不仕合せな人があらう、是れから心を入れかへて人間になりませう、と思ふではなく感じて、今夜の事を忘れますまいと心に誓ひました。それから會堂を出た所で、丁度從兄がわたしの居ないのを心配して從妹と一處にわたしを搜しに來るのに出あつて、叔父の家に歸つて、此一夜の事を思ふとほんとに夢の樣でした。

叔父も叔母もひどく先方の不人情なを怒つたのですが、其樣な人にはいくら云つても駄目ですよ。其れ所か、聞き質して見ると、ひどいぢやありませんか、わたしが財産はすつかり自分の

名義に書換へてしまつて、叔父が怒つて裁判にかけると談じつけると、此方では正當な手續を踏んで登記も濟んで居るから、法廷に爭つても差支はないと云ふのです。従兄の欽一郎は切歯してピストルでも持ち出しさうでしたから、わたしはとめて、其様にお金が欲しいのなら呉れてやりませう、わたし一人の身過は何しても出來ることですから、と云つて、公債や地券なにかは一切呉れてしまひ、契約も此方から解いてやりました。金は大事なもの、諺にも云ふ通り品行の本獨立の基ですが、それも心の取り様で、百萬圓有つても乞食根性がのかぬ者もありますからねエ。わたしは此時に自分の身代残らず失つたのですが、併し其代りに億萬圓も買ふことの出來ぬ心の悟を授けられました。

併し悟は一時に開けるものの癖はなか〳〵手間取るもので、わたしは今の年になつても少し油斷をすると人を羨んだり、自分の身上に倦きたり、正直にするのは馬鹿な話で、本當は世の中を浮いて暮らすが上分別なのではあるまいかと惑つて見たり、することもないではありません。ほんに恥しい次第で、其様な時は何時でも八月十二日の夜の事を思ひ出して、否と異見をして居ます。

何ですと、あ、其あとの話ですか。叔父叔母は其後もわたしをわけて親切にして呉れましたが、二三年前に流行病に前後に果てまして、それから従兄の欽一郎はわたしが此様になつて仕舞たのを、是非に妻にと望みましてね、わたしも眞實身にしみて嬉しかつたのですけれども、少し考へた所もあつて斷りまして、唯寫眞一枚貰つて置きました。其後従妹は近所に嫁にいつて、従兄も妻子が出來て、叔父の家もすつかり變つてしまひまして、わたしもかねての望通り田舎に參る事になり、それから今までも此様なに皆様の御世話になつて居ます。エ、其男の人は如何なつたつて仰有るの？　さあ、其人は、其人は何か落ぶれでもして、わたしが其人に邂逅つて親切に世話でもしてあげる様なれば、おほゝゝゝ小説の様でせうけれども、本當の事を云へば、其後はさつぱり便りを聞きません。何處かの會社の社長さんになつて居るかも知れません。従兄の欽一郎は今は陸軍少佐で、東京に居ます。そら此間見せましたでせう、裏に龍と鳳凰の彫刻のある古風の鏡、ね、錦の嚢にはひつた、あの鏡は一昨年田庄臺で分捕つたものだと云つて欽一郎が送つてよこしたのですよ。

湘南雜筆

家兄官に就かれし頃
戲によみて送りける

青い雲
白い雲
同じ雲でめしや白雲よ
わがまゝ気まゝに
空を飛ぶ

元旦

早起、若水を汲んで顔を洗ひ、雜煮を祝ひ終り、櫻山に登りて、富士を望むに、雲に潜んで見えず。

山を下りて、逗子の村を過ぐれば、人家の搆に三四十輪の花あり。椿に隣れる梅樹の梢付たるに、點々として胡蝶の翔のかゝれる如きを諦視すれば、梅花の已に發けるなり。

日あたりよき處には、稀に董花蒲公英の一朶両朶を見る。

舟にはおの〳〵旗を樹て松を飾りたり。村の子女晴着して羽子をつき、紙鳶を飛はすなど、淋

しきながらも流石に正月なり。（一月一日記）

冬威

雪猶融けず、地は凍り、水は氷り、萬象口を噤みて、殆ど生意を見る能はず。

砂山の松を穿ちて、野に出づれば、北風飄々鬢を吹き、ステッキ持つ手龜まむとす。空には凍雲漫々、目の到る處山も野も枯れに枯れぬ。野川の橋を渡る頃、曇りたる空より粉の如き飛雪紛々として降り來しが、程なく歇みたり。

「冬」なる哉、雪を帶ぶ茅舍の影寒田に宿れば、田も半ば凍りぬ。

林には波の吼ゆるが如き音あり。「冬」の聲なり。殘雪を帶ぶる枯蘆のがさ〳〵と鳴る音、乾き果て、枯れ果てて、吾魂を爬き破る心地す。

春は終に來らざる乎。

村のはづれには、女あり、雪かき分けて、冬菜を摘めり、村籬には椿紅に、梅花もちらほら咲きぬ。（一月十日記）

霜の朝

手水鉢の氷厚し。外に出づれば、道側に引あげられたる海藻雪の如く霜を帶び、田越川一面に薄氷をつけたるが、潮の滿ち來るに從ひ、氷はばり〳〵と音して裂け、裂けたる片は潮につれて上流に流れ行く。

川邊の葭原に下り、凍りたる泥を蹈み、霜白き葭を分け行くに、鴨五六羽ばた〳〵と起ちて、對岸の葭原に入りぬ。葭原の盡くる處は、農家の裏なり。四ツ手網一つ朝日にかゝりて、紫の紗の如く光れり。網の上に白羽の如く白銀の如く、キラ〳〵と輝くものあり。氷片のかゝれるなり。

日次第に上りて、川の兩岸を鎖せる氷も次第に融け、融くるに從ひて碧空の色、枯葭の色、黄ばめる松の色、四ツ手網の色など次第に流れぬ。海藻を滿載せし舟氷を分けて川に溯り來り、巖上の農夫と價を論じて海藻を賣る。此は麥の肥料にするなり。一舟の價三四十錢。（一月十六日）

伊豆の山火

夕に濱に立てば、半天に火あり。數點。星には紅に過ぎ、漁火には高きに過ぐ。是れ何ぞ。あゝ是れ伊豆の山の燒くるなり。

晝見れば、海の彼方に、此處彼處線香の煙の如くほのかに、夜は斯くの如く紅なり。山火乎。山火乎。海の彼方にも人住みて彼火を焚く乎。是れ海の彼方に住む「人」の十里の水を隔てて此方の「人」に生活の消息を傳ふる爲めに燃くの烽火にあらざる乎。（一月二十日）

霽日

今日も水晶の如き日和。

川は水蒸氣、道路は鐵、畑はたゞ一面の霜なり。手水鉢の氷碎いて、手を浄めつゝ、後山の方を見れば、「咳嗽の神」の祠の下に、五六人の男火を焚きつゝ話せり。碧き煙、山を掠めて、朝日の空に消え行く。

やがて彼等は山に上りて、白茅を刈り始めぬ。ざわ〳〵〳〵、白茅の山は髮を摘むが如くに上方より剪られ、見る〳〵半面禿げ了りぬ。束ねられたる枯茅は、一つづつ落されて、麓に横はる。

朝日滿庭、隣家の主婦は襷がけにて井戸端に洗濯し、吾宿の主婦は滿面の日を受けて、漬大根の首切りつゝあり。其側に兩家の子供三四人、嬉々として遊ぶ。行人皆挨拶す。「今日はお

暖かでムいますよ―

* * * *

午後、潮干て、川口の淺瀨には、女子供青海苔を採り、蠣を拾ひつゝあり。川上の葭原には、人ありて簇々葭を刈れり。

山蔭の田には未だ氷白けれ共、日向は次第に融けて、ばり〱〱〱われに破れて響を立て居れり。今朝人の火を焚きし「咳嗽の神」の祠に行けば、木瓜の既に蕾めるあり。枇杷の花は已に末になりぬ。枯松葉、枯芒なんど夥しく負へる男女、松葉搔を持ちつゝ、山を下り來る。隣家に薪割る音頻りなり。

（一月廿五日）

初午

初午の太鼓鼕々たり。

梅花は已に六七分、麥は未だ二三寸。

「奉納、稻荷大明神」の旗村々に立ちて、子女衣を更めて往來し、人の振舞酒に醉はざるはなし。

（二月一日）

立春

今日は立春なり。

潮甚く干たり。砂廣く、海狹くして、水低くなりぬ。

夕方出でゝ濱に歩す。

日は落日に間もなうして、雨も西の空は薄き藍色の靄の覆ふあり。日は夢の如く靄の中に微黄をぼかす。

潮干、砂廣くあらはれて、鐙摺の鼻の岩礁と、鳴鶴が鼻の岩礁と、黒く海中に延きたり。人あり、長一寸ばかり、岩の上に立つ。帆あり、幅一分ばかり、點々として遠見の果に遊ぶ。海は溶々として青の如く、とろ〱として流れず、纔に砂際に漣を捲きて、緩々砂に融くるのみ。

日は茫々としてほのかに海に流れつ。鳴鶴が鼻の影は、鰐皮の如く鱗々として高低せる砂と砂の絕え間を求めて、狹きに拔け、廣きに圓に臥したり。空眠り、日眠り、海眠り、山眠り、山の影眠り、帆影眠り、人眠る。立春の夕、地も天も蕩然として融けむとす。

（二月四日）

雪の日

起き出で見れば、滿天滿地の雪。

午前は粉雪紛々霏々、午後は綿雪片々飄々、終日斷え間なく降り暮らす。

障子を開けば、玉屑霏々亂れて飛び、後山も雪の爲めにおぼろなり。風大に到れば、積りし雪また亂れ立つて走る。午後はいよ〱降りしきりて、馬車も通はずなりぬ。積る雪の重量に、何の木にやぼきと折るゝ音するもの兩三度。

滿天滿地一白の中に、獨り前川のみ鼠色にして黒く、鷗十數羽來りて泅ぎつゝあり。時々其二三羽、水を起つて、十分に翼を擴げ、風雪に向ひて飛ばむとすれど、吹きやられ吹きやられして、空しく水に下りぬ。

盡日霏々濛々、天地雪に埋れ、人風雪に閉ぢられ、斯くて降りながら夜に入りぬ。

夜十時燈を携りて外を覗へば、飛雪猶紛々たり。

（二月十六日）

雪の明くる日

夜來の風雪止み、今日は玉の如き霽となりぬ。

日高く昇りて雪を蒸し、檐頭の雪先づ解けて、點滴雨の如く落ちて小川をなし、泡立ちて圓き舟の如く流れ行く。障子閉せば、滴々點々の影連りに障子に落ちてしば〱雨と疑ひ、障子開けばきら〱と光りて青空より眞珠の降

るに似たり。雪に伏したる夾竹桃、少し融けて壓力の薄らぐと共に、殘雪を刎ね落して起きかへる。
富士は麓まで綿もて包める樣にふくよかに、日先づさして嶽頂の水蒸氣煙の如く立上る。相豆の連山は一白にして、鮮かなること驚く可く、五六里も此方に歩み寄れる樣なり。

初春の雨

午前春陰、午後春雨、暖かにして長閑に、且靜なり。
逗子の梅は多く老いぬ。八幡の林には、子を負ひたる老婆、松葉松子枯枝を拾ひつゝあり。雨は松杉欅の間を漏りて、ほと／＼枯葉まじりの砂をうつ。
村より野に出づれば、麥の綠著しく深うなりて、路邊の枯草も綠斑らに萌え出でぬ。雨そぞろにしぶきて神武寺の山碧くかすめり。
櫻山には猶斑々の雪を見れど、山も樹も家も畑も田も春雨に潤ひて優かに見ゆ。川邊の枯葭其處此處に一叢二叢を殘して概ね刈られ、川明かに闊廣うなりぬ。四つ手網一つ春雨にかゝれり。
梅花は香を流し、椿は紅を流す。麥の綠潤ひて、山の碧煙れり。
此雨や如何に春色を催すらむ。
歸りて富士見橋のほとりに到れば、舟二艘苫を掩うて浮び、今しも米を洗へるにか、倒にかけたる米こし桶より乳の如き滴々春潮に融けて流る。進潮雨を帶びて碧く、膏の如し。沖の方濛として春帆一つ雨を穿ち來る。（二月廿三日）

初春の山

後山に上る。
春空藹として四山霞棚曳き、爭はれぬ春となりぬ。
海はゆら／＼として空と一つに融け、練れるが如き水の面に富士の白雪ちら／＼流れぬ。漁舟鷗よりも小なり。
村々はまだ冬枯のまゝなれど、霞低う地に這ひ、春四に滿てり。鳶一羽悠々として山下に舞ふ。
山崖、畑の畔、到る處蕗の薹靑く萌え、榛の木などは已に垂々の花をつけ、春蘭も早きは花さきぬ。枯草枯葉の間より春は簇々として萌えつゝあり。（二月廿八日）

三月節句

陽曆の節句、桃は咲かねど、春雲日を籠めて、空氣は酒よりも濃かなり。
逗子の村を過ぐれば、梅花も白きは已に過ぎむとし、椿は花葉よりも多く、ぼて／＼と早や落初めぬ。綿弓鳴り、鷄鳴き、悠々として春村に滿つ。
田の水もやゝ溫みて、雜草靑み、七色の脂浮める土の水を吸ひ水を吐く音ぴち／＼と、土も復活の滿足を呟くに似たり。
麥綠ます／＼濃かに、菜の花も咲き初め、田の畔の野芹も簇々芽を吐きぬ。
昨日の暖雨に、箱根足柄雪解けて、富士も麓而上四合あたりまで白衣を脫ぎぬ。（三月三日）

春の海

不動堂に腰かけて海を眺む。
春の海溶々として漾々たり。或處は大なる蝸牛の這ひたる跡の樣に滑りて白く光り、或處は億萬の鱗族ざわめく樣に靑く顫へり。磯近き水は透明にして明礬色を帶び、圓き石個々紫

の蔭を持して水中に横はり、茶褐色の藻は梳りたる髪の如く礁岩を纏ふ。波と云ふ程の波はなくて、唯揺々たる海のスウエルは衣の皺をも熨す様に、一つづつずうと押寄せ來りて磯に砕け、岩の凹窪に入りてはだぶりと響き、小石に散りてはざあと騒ぐ。

見突きの舟あり。時々棹を舟の上に落す音かたりと響きぬ。鮹鰕など突く男あり。ざぶ／＼浅水を渉りて、足下より鱗々の銀を踏み出す。

（三月十三日）

彼岸

今日彼岸に入る。

梅花既に狼藉として、麥緑已に莖をなしぬ。菜花盛となり、椿はぽたり／＼落ち落ちて地も紅なり。

野に出づれば、田の畔は土筆、芹、薺、嫁菜、野蒜、蓬なんど簇々として足を容る可き處もなし。薹は花となりて、蕗も小き青傘を翳し初めぬ。其隙に含羞める菫菜花の何ぞ美しき。蒲公英は細き手をば惜氣もなく田の畔に撒き散らせり。木瓜も紅唇を開きぬ。

田川の水の音を聞け。溶々として滑らかに、其裡に無限の春あり。おたまじやくし初めて生れて五分ばかり、温き水に泳げり。農夫は已に田をかへし初めむとす。

川邊には、枯葉舊根の間より、茅花には大に筍には小き蘆芽の數限もなく茜色に吐き出でぬ。

野には雲雀を聞き、吾隣家の欅には、近來日毎に鶯來鳴けり。

（三月十八日）

伊勢參宮

書窓の外、馬の鈴音ちやら／＼と賑かなる笑聲の聞ゆるに、何ぞと覗けば、赤白紫さまざまのきれを飾れる馬三四疋、乗れる男は旅装にて、大勢の男女老幼之を取巻き、囃し立てて停車場の方へと行くなり。伊勢參宮の首途を祝すなりとぞ。

戯れに斯るものを作りぬ。

伊勢參り

一、麥はのびたり、まだ粗やまあかぬ、
桃や菜種の花ざかり。

二、お伊勢參りの時節はい―まよ。
五十三次ぐ、十日はむかし、
今は一日、汽車の旅。

三、古いしやつぽを、横ちよにかあぶり、
赤い毛布に、駿引やね―るよ、
馬の鈴音、勇ましや。

四、「おや太郎作さん、もう御立ちかえ？」
「誰かと思ひやお松どん、ちよと行て來ましよ、土産は何か望まつせえ」

五、「おほゝゝ土産はいらぬが、聞かんせや、
伊勢の松坂、女郎衆の名所、
迷はしやんすな、戻らんせ、
さツ／＼と戻らんせ」

六、「あはゝゝ」「おほゝゝ」
馬の鈴音しやん／＼と、やがて霞に
消えて行く。

（三月廿五日）

磯の潮干

家も建つ可き平磐の今日は水を出でて日光に見え、岩に附着せる海草の日に照らされて、ぴちぴちと何か言ふ様なるもをかし。岩の裂け目には、退きわすれし潮水湛へて日に温み、名もなき小魚多く游げり。岩より岩に飛びて、磯の盡端に行けば、此處は潭深うして而も水は緑玉の色に澄み、かぢめ、もく、みるなどさま／＼の海

草波のうねるまゝに搖々と靡き、日光の金絲を落して水底に綾を織れるも美しく、ベラ、カサゴ、トラハゼ、カハハギなど磯魚の岩を出で藻に隱れて、往來するあれば、紅の海松、朱色のヒトデ、紫色のガゼ、綠色のイソキンチャク、茶色の雨虎など動植物の分界怪しきもの共の此處其處に水を彩りて、水中の春は陸上の春よりも却て美はし。

潮の香を嗅ぎて、岩の上より眺むれば、鹿菜、コブノリ、カマド、トコブシ、蠑螺、イソモチ、タマ、ガゼ、ヨコガヒ、シリダカなどを刈り剝ぎ拾ふ女點々として岩に散り、間々麗衣の子女のまじりて、礒も宛ながら花さける樣なり。章魚突く男は、水澄ます油入れたる竹筒片手に、片手に手頃のホコをとつて、岩より岩に飛べば、見突きの舟は巧みに岩と岩の間を縫うて、漁夫が覗桶に顏さし入れ水底を覗きつゝ水手と言ふ聲ほのかに聞ゆ。海は岩の彼方に帶よりも窄く、忽ち深碧天と際だち、忽ち白く光りて、空と一ならむとす。春帆二三、遠く伊豆の山を掠めて行く。

平岩と地かたの間には、一泓の潮湛へて池をなし、山影綠を浸す。漁家の子女五六人、小き帆舟を作りて之を浮ぶ。微風起りて帆張り、彼岸に達すれば、子供等手を拍つて喜ぶ。風止みて、舟中流に滯れば、子供等石を投じて之を追ふ。啞なる子の、年は少しまさりたるが、其中に立まじりて、吾放ちたる舟の首尾よく彼岸に着きしを、他の子供の袖曳きて指し示しつゝ嘻々と笑へるもあはれなり。（四月二日）

沙濱の潮干

金澤の牡丹見に行きて、歸るさ、野島に遊びて見るに、野島より夏島まで直徑半里ばかりの砂濱は、夥しき貝掘り人に滿たされぬ。皆此あたりの農婦蜑女にて、此砂濱は實に彼等が衣食の田なり。老婆より五六歲の女兒まで、皆かぶり手拭、赤襷、跣足と云ふ出立、右に裁庖丁の如きものを逆手にとりて、砂を鋤き返し、左手はしこく掘りかへしたる貝を拾ひ行く。或は一尺あまりの竹箸の尖に錻力の鋒つけたるを砂に穿てる小穴につきさして、馬刀貝を引き上ぐるもあり。獲物は鹽吹貝、蜊、尤も多く、蛤、螺、馬刀、ばか、など之につぎ、間々わたり蟹、車蝦などの砂にもぐれるあり。鹽吹貝は名の如く、掘りて取らむとすれば、忽ちふつと水吐くさま人を嘲りて唾する樣にて、面憎し。馬刀は穴を見て初一突に刺さざれば、逝竄して行く處を知らず。蝦は退潮に逃げ後れて、砂にもぐり、倔強の隱家と思へるが、掘りかへされて阿容々々と捕虜になる、宛ながら平治の信西も思はれて笑止なり。

見渡せば、砂は恰も一大盤をなし、其周圍には碧海宛ながら帶の如く盤を繞り、碧色の遠山また條の如く海を劃る。盤上は薄紫の砂にして、處々の殘溜淺うして踵をぬらさず、小蟹走り、小鯊游ぎ、何處にもぷち〳〵鳴る音す。蟹の言ふにや、沙の日と囁くにや。靜に見れば、此一大砂盤の上に、貝掘る人は蟻の散れるが如く、點々として俯き、仰し、屈みつゝ、蟹の如く砂を掘りかへせば、紫の砂は簇々として黑く覆り行く。或は歌ひ、或者は默し、遠きは呼び、近きは語り、時々或者立ちて腰伸せば、其頭は砂盤を越え、帶の如き海を越えて、白雲ゆく空につかへぬ。

長閑なる哉、海遠うして細く、帆いよ〳〵細く、山遠うして碧く、雲ありていよ〳〵碧し。數百の兒女老幼砂に群りて、おのがじし砂を掘りては貝をさめ、いそ〳〵としていそしめば、手桶と籠と器とは其處此處に散點し、山影は砂上の溜に臥し、すべて熙々として春光

の中にあり。

已にして潮次第に滿ちむとするにや、或はふごを荷ひ、或は熊手を肩にし、ざるを背負ひ、手桶を提げて、歸る者續々。「まだお取りなさんすかい」など呼ぶもあれば、「あぶねエよ、潮が滿ちて來るだ」など子供を戒むる聲も聞ゆ。後れて來れるは、猶踏みとまりて、汲々たり。

已にして潮は砂盤の四方より包圍攻擊を始め、帶の如くなりし海は四方より一分づつ次第に廣まりて、初め砂盤の中央に掘り居し者も汐先に足をあらはれ、次第に一人づつ陸へ陸へと驅りやられて、砂退り人退き潮進み海進みて、薄紫の盤は見る〳〵縮まり、一時間ばかりして見れば、砂上痕なく、海は吾足下まで漫々と白く湛へ、帆影悠々として所得貌に浮めり。（四月――日）

花月の夜

戸を明くれば、十六日の月櫻の梢に在り。空色濃くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和かなり。

春星影よりも微に空に綴る。微茫月色、花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎なる一枝は月にさし出でてほの白く、風情言ひ盡し難し。薄き影と、薄き光は、落花點々たる庭に落ちて、地を步す。宛ながら天を步むの感あり。

濱の方を望めば、砂洲茫々として白し。何處やらに俚歌を唱ふ聲あり。

又

已にして雨はら〳〵と降り來ぬ。やがてまた止みぬ。

春雲月を籠めて、夜ほの白く、櫻花澹として無からむとす。蛙の聲いと靜なり。（四月十五日）

新樹

夜來の宿雨止み、九時頃には滿天の雲散り且薄れ且細りて、綿の如きもの紗となり、紗の如きもの煙となり、煙の如きもの終に全く消え、一碧玉の如き空となりぬ。

日光雨の如く射し來りて、障子に若葉の影さしぬ。

其影の多きを見て若葉の茂れるを知る。

靜に觀れば、一庭の新樹日を受けて日を透し、金綠色に榮えて、宛ながら一天の日光を庭中に集めたるの感あり。其枝々葉々上には水の如き碧の空に映り、地にはおの〳〵紫の影を落せるを見よ。

櫻は葉となりたれど、猶稀に一點二點の殘花を葉がくれにとゞめ、時々蝶の飛ぶが如くひらひらと舞ひ落つ。木の下に落花と紅蕚と點々として影と共に地に貼せり。白き鷄一羽、身に斑々たる若葉の影を帶びつゝ、落花を啄む。

枝と枝との間に、かけ渡したる蛛絲の、碧に黃に、紅に閃くを見よ。限りなき飛蟲の雪の如く紛々として樹を繞り、蜂虻の營々として日光に飛ぶを見よ。自然は此麗日に際して、十分の滿足を表し居るなり。

獨り蝴蝶の往く春を追うて忙しげなる、夢と知らで花にあこがるゝかとあはれなり。

風徐ろに吹き來ぬ。新樹は徐ろに碧空を撫でて頷き、滿地の樹影また靜に顫ひ、新樹より新樹にかけ渡したる洗濯物の影は翩々として地上に躍りつゝあり。

落木に近かりし隣家は新樹に遠くなりぬ。墻を隔て機聲啞啞。

又

日落ちぬ。樺色の雲あり、高く新樹の梢にか

かりぬ。

夕風そよ吹きて、新樹空にそよぎ、麥圃も靜に波うちつゝあり。蒼々として日、夕に向ふ。

顧れば後山の松の上に、十四日の月盆の如く、未だ光なくしてかゝれり。畑を歩すれば、豆葉豆花の香衣を襲ふ。

空も空氣も風も月もすべて水の如く淡く、水の如く淸く、水の如く流る。　（四月廿日）

暮春の野

靑葉茂りて、村々綠に埋もれ、蘆暢びて川狹うなりぬ。

川の上流に立ちて、村の彼方に沈む日を見る。日は已に小坪の山にかゝりて、山は靑黑き村の梢に絕々の紫を見せたり。潮次第に滿ちて、靑川逆に流れ、一川の泡、雪の浮める如く、靑蘆の影を掠めて溯り行く。彼方の岸に四つ手網あり。人は靑蘆に隱れて見えねど、其四つ手を引上ぐる每に、網は夕日を帶びて紫金色に閃き、玉の如き水たら〳〵と川に滴る。

やがて日は紅の球を搖かして山に落ちぬ。殘照林端の空を紅に抹し、水にも其色流れつ。潮はいよ〳〵川に滿ち、殘照を浮べ、靑蘆の影を載せ、白き泡を運び、紺色の林影を浸して、漫々としてまさに小板橋を浸さむとす。時々魚あり林影の中にはねて、紺靑の水に白き渦紋を湧かしぬ。

夕風そよ吹き、殘照の影も次第に薄うなりぬ。蘆の影と一つになり、そよ〳〵歌ひながら暮れ行く。何處の寺の鐘か杳々として野末を渡る。

やがて地は靑黑う暮れ、人家の障子に燈火紅に見え染めぬ。　（五月十日）

蒼々茫々の夕

靜なるは麥刈濟む頃の田舍の夕暮なりけり。

神武寺に遊び、夕に及びて獨り田間の路を辿りて歸る。日は蒼然たる暮雲に包まれて落ち、雲のきれ目に一抹朱をぼかせし殘照も消えぬ。此處其處の畑より、村より、山側より、麥藁燒く煙縷々として立上り、蓬々として廣がり、果は山も村も茫々となりぬ。

靜に立ちて眺むれば、暮雲暮山の影落ちて水闇き田の面に、白きもの湧き出で、見る〳〵田より田に蔓延り行く。麥藁燒く煙の影の田を渡るなりけり。其底に蛙聲あり。

日落ち、煙滿ち、物は物と互に融け、恍として無我の境に入る。人語なく、物音なく、燈影なし。唯蒼々たり、茫々たり。

靜なる夕や。

獨り黃昏の底に立ちて、耳傾くれば、蛙聲獨り閑々、また隱々。

是れ實に「夕」の聲なり。　（六月六日）

夕山の百合

夕方後山に登る。夕風靑茅を戰がして、百合の花の香其處はかとなく漂ひ、丘上にしよんぼり月の影あり。日は大山の右に入りて、殘曛猶明かに、金樺色の橫雲ありて、宛ながら綵旛の飜れる如く、西より北に橫ふ。富士は薄き藍色の暮雲を抽きてほのかに其頂を露はし、海は紫を流して、一帆徐ろに其面を移り行く。

村の方を望めば、此頃まで村と村との間に照渡りし麥は何時か刈られて、其あと黑く、田は半ば植ゑられて、綠ほのかなる新秧の田と、水のみ白き未插の田と入り亂れて、一條の川帶の如く其中を洄りて白く光りぬ。麥刈られて、綠樹の村いよ〳〵闇し。其處にも、此處にも、麥わら燒く煙立ちのぼる。ぶち〳〵音するは、稈

の燒くなり。煙の本に紅の火閃くは、風ありて煽れるなり。見る〳〵煙は村を包み、山を侵して、黃昏は其中より湧きぬ。蛙聲風にのりて聞ゆ。

暮れて、山を下れば、徑を夾む青茅の一色に青黑きに、點々たる百合の花、朧夜の星の如く、ほの白う暮れ殘りぬ。風そよ〳〵として、夕山の香袂に滿つ。

山の端に月光り初めぬ。（六月十三日）

梅雨の頃

雨降りて止み、止みて又降る。鴉聲と蛙聲と交々雨晴を爭ふ。

雨の絕間に出でて、麥藁まじりの深泥を踏みつゝ、村を過ぐれば、綠くらき家には人ありて梅子を落し、畑には甘藷を植うる女あり。

田は大方植ゑられぬ。嫩黃田々、秧猶疎にして水多く、蛙聲四に滿つ、田より田に落つる水は、音も濁りて、こぼ〳〵と鳴る。まさに梅雨の頃は水の聲なり。

川は靑の如き碧潮滿々として、黃なる麥藁一束浮きつ沈みつ漂ひぬ。川邊の蘆稀に穗を抽きたり。其蕈を折り敷いて、鰻鯊を釣る子供あり。

氣重うして濃かなり。村より出づる煙の濕うて立ちも上らず、靄となりて這へるを見よ。山の藍深く綠重うして、滴水を落さば色融けて流れむずるさまを見よ。

山に梟の聲あり。

雨はら〳〵とまた降り出でぬ。（六月十八日）

夏

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子開き、簾を下して坐すれば、簾外山青く白衣の人往來す。富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すが〳〵しく、頭には僅に二三條の雪を冠れり。青疊敷く相模灘の上を、習々として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

又

今日初めて蜩の聲を後山に聞きぬ。一聲さやかにして銀鈴を振れる如し。

白日山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば川に釣る人あり。談笑の聲あり。笛聲あり。花火を揚ぐる子供あり。

夏の季は始りぬ。（七月十日）

涼しき夕

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に殘照流るゝ川あり。後に青蘆さや〳〵と戰げり。

潮次第に滿ち、川逆に流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底池よりも鮮かなり。小き鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのカイヅは隊をなして水色の玉にも似たる水を游げば、其影ちら〳〵と底に印せり。石垣の穴より出で遊ぶダボ鯊は、螯をあげて迫り來る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰕は杭を抱きて這ひ登り、石垣に縋れる宿かりは、身を投ぐる樣にころ〳〵と水底に墜ち行く。

下流の方を望めば、下流却て上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より涼風と共に流れ來る。潮滿ち盛れば「夕陽明滅亂流中」殘照の影やゝもすれば押流されむとし、小鮮群がりて水を攪すれば、水流れて其紋を消し、鬖々たる川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出でむとすれば、幾隊の魚苗もとゞまりかねて流れ行く。

垂れたる足の爪先に水とゞく頃は、殘照消え、

潮も滿ちて淀みぬ。鯔跳つてまた水に落つる音、石を投ぐる樣なり。（七月廿日）

立秋

秋、今日立つ。芙蓉咲き、法師蟬鳴く。赫々として日熱するも、秋思已に天地に入りぬ。（八月八日）

迎火

今日は八月十三日、此邊は陽暦より一月おくれに年中行事をすれば、今日は盆の初なり。日落ちて、夕風夕潮と共に生じ、川口に泊れる和船の檣の邊に八日の月鎌の如き缺壁を掛けぬ。

吾宿の老婆一束の藁を川邊に持ち出で、中に杉葉を入れ、まつちを擂りて火を點じぬれば、藁は炎々として燃え立ちぬ。老婆鉢に入れし水を、手もてふり澆ぎ、茄子の實の日に切りたるを火に投げかけ・合掌して、

「お爺さんも、孫も、此火にのつて御出なさい……さあ／＼家に御はひりなさい」

と云へば、二年前に母を喪ひ父を失へる五歲の童も、小き手を合して火を拜みぬ。

川邊には、其處此處に火燃ゆ、其一つに行きて見れば、八十餘の老婆線香をとり、熱々と燃ゆる火を眺めてありき。此老婆は昨年老夫を喪へる者なり。

各所の火はとろ／＼と燃えて、やがて灰となりぬ。夕潮石垣を打ちてたふ／＼聲あり。言はねども月も空より此世を眺め貌なり。死者知るなき乎。夕風の「否」と囁く聲を聞かず耶。（八月三日）

舟を川に浮ぶ

舟を浮べて、御最期川を溯る。

日落ちて、殘照水にあり。山には蟬の音、蜩の音猶流れぬ。

舟は暮色と共に次第に川を溯る。夕潮滿々と湛へて、青蘆の洲も半ば水にあり。舟行く方は、山影碧く水に臥し、時々鯔あり、高く跳ねて白き紋を畫く。

日暮れて、水白く、兩岸黑し。鈴蟲、松蟲、きり／＼す、水を挾みて鳴き、山の闇きには梟啢を鳴らす。空に五位鷺の聲あり。（八月廿日）

夏去り秋來る

女郎花咲き、柿の實ほのかに黃ばみ、甘藷次第に甘し。つく／＼ぼふしは晝に、松蟲鈴蟲は夜に、共に秋を語る。栗、稻、蘆穗のさわ／＼と云ふ音を聞け。

微雨はら／＼降りて止みぬ。是れ今年の夏の季を送るの聲なり。（八月廿八日）

秋分

今日は秋分なり。

朝起き外に出づれば、白露地に滿つ。稻穗、粟穗、薄花、蘆花、すべて露の中にあり。蟲聲水の如く流る。

又

彼岸の中日なれば、近在の老幼男女、藤澤に鎌倉に寺詣りして歸る者、織るが如し。川邊には鯊を釣る者、多く竝べり。

午後の日悠々として、碧潮川に滿ち、行人路に滿ち、日光空に滿ち、百舌鳥の聲耳に滿ち、風なく氣清うして、秋心に滿つ。

又

日入りぬ。無花果の葉蔭薄暗くなりて、芙蓉の花も夕と共に凋まむとす。空に雁聲あり。十五夜の雨に隱れし月は、今宵照出でぬ。庭の眞砂何時しか霜置ける樣に白み、樹影黒く地に湧きぬ。

庭の白萩月に照りて、雪の如し。（九月廿三日）

鯵釣り

（上）

「阿叔、釣に行らつしやらないの？」

恰も日曜の、午餐を喫つて居る所へ、外面の簾を揭げて、近所の小娘が案内に來た。斯娘の父さんなるものは、東京者だが、久しく逗子に居て、小舟一艘もつて、時々沖釣に出る男だ。

二つ返事で、からり箸を投げて、道具と魚籃と敷物を、小脇にかゝへて、前川へ下りて見ると、舟の用意は出來て、舟主＝甲某と云つて置から＝は徐々櫂を掉いて居る。今一人單衣の上に巡査の古外套を被つた翁に、或茶店の主人で、是も釣好家の乙某だ。

川口を出て、灣内を十二三町斜に横切つて行くと、最早鯵場だ。此處らは纔五六尋しか立たないが、底が岩で、藻が生えて、其れで鯵の寄る場所の一となつて居る。此樣な場所が、此近傍では數ふる程しかない。其處を外れると、一日釣つても恐らく目的の魚は一尾も獲られないのである。櫓柄を握つた甲某は頻りに山を見ては考へて居たが、頓て頷いて碇を下した。漁師はすべて山の谷間とか、木とか家とかを見當にして、漁場を覺えて居る。で若し何の邊で鯵が釣れるかと漁師に問へば、彼等は山上の松を指して、「彼、それ、大い松があるね。彼を左左（若くは右右）ととつて御出なさい」など敎ふるのである。

鯵釣の時候は、九、十、十一月が盛りと云つて宜い。今頃では、よく釣れる當歳のが先円五寸、尤も中にはまる鯵、いゝ鯵、め鯵の二歳三歳と上つて尺も其上もあるのがかゝる。併し鯵はあたりが軟かで、殊に口の薄い脆いもので、手荒に引いたり絲が撓んだりすれば、直ぐ頤がきれて逃げるものだ。鈎は鱚鈎位のもの、餌は多く白子、または鯵其ものを細く切つて、同餌に用ゆることもある。時間は大抵朝夕、水は成る可く濁るのが宜いのは、何の魚も異はないのだ。

一艘の小舟の三個所に陣取つて、三人各綸を下して見たが、未だ時間が早い故か、水が澄んだ故か、ベラなどの雜魚が二三尾釣れたのみで、鯵のあの字もかゝらない。甲某は水中眼鏡で、海底を覗いて、「黒鯛が來た、黒鯛が來た」と忙しく鰕を刻んで湯煮た薩摩芋に攪り雜ぜ、之を餌にして綸を下して見たが、更にあたらない。黒鯛は實に意地のきたない魚で、小鰕、絲目、小蟹、牛肉、薩摩芋、乃至上方地方でよくする餌と味噌と饂飩粉の練りまぜ、何によらず食つてはかゝるものだが、今日は水澄んで、殊に碧玉其まゝの水を、射透す日光の明かなるが、彼等の眼を鮮かならしめたと見えて、水中眼鏡で覗くと、五六尾の背の黒い魚等が如何にも欲し氣に餌の周圍を繞り繞りして居るが、終にかからなかつた。欠伸が艫の方に聞えて、甲某先づ鈴のついた針金を舷側に插し、綸を引かけ、（魚がひけば鈴が鳴る趣向だ）煙草を燻し始めると、乙某も欠伸して、古びた革の煙草入を取出した。自分も背伸して、恍然と眼を閉ぢ、又眼を開いて海原を眺める。

最早三時過ぎでもあらうか、日は西に廻つて、海の上に白金の柱が横はつて來た。良い時候だ、陸の方から北風が冷り〳〵海面を撫でて、舟底を敲く程の細波を立てて居る。鱗形の雲が

天心から東南の方にかけて宛ながら白銀の波を大空の碧にうたして居ると、海は其影を浮べて漾々と搖いて居る。富士江の烏足柄箱根眞鶴が岬から伊豆の天城山は、西日の光にはつきりと際立ち、右手の方を見ると近くて葉山遠くて三崎、三浦半島は縦に短く走つて、天城と三崎の中程には伊豆の大島がほのかに見える。白帆が其處此處に五つ六つ。大島の方角に、ペン尖でうつた・の如く—の如く小いのは、鰹を釣る舟であらう。名島の方で鮹突く舟の棹が時々針程に空を突いて閃くと、つい一町ばかり離れて、長い竿で針魚を釣つて居る舟が見える。それ竿を上げた、針魚が閃と光つて舟に跳び込む。何時何處から湧いて來たのか、笹の一葉に黒蟻二つ載せた樣なものが見える。舟だ、黒蟻と見たのは、水夫二人で切々と漕いで居るのだ。其黒い姿が、櫓を押す拍子に、交叉へてはXとなり、離れてHの字となつて、組んづほぐれつ次第に大きくなつて來る。

秋だ。秋だ。實に秋だ。つい背後の逗子の山山も、心からか少し薦色になつた樣だ。不動樣の邊に頻りに百舌鳥の鳴くのが聞える。葉山から逗子の停車場に通ふがた馬車の喇叭の音が聞える。

獵銃が無いと見くびつたものか、つい四五間側へ鴎が一羽下りて、時々水に潜つては鰓を咥へて出て、「人間は不器用なものだ」とさも嘲り顔に、此方を向いて、胸をつき出して、ゆらゆら波に浮いて居る。

（下）

其樣する内に、笹の一葉と見えた舟は漸次に近く漕いで來て、吾々の舟から三四十間離れて、碇を下して釣り始めた。針魚を釣つて居た舟も一艘、其側に寄つて來た。吾々も碇を上げて、舟を其方角に移した。

「如何だね、爺さん、些ツとは鯵のかいがあるかい？」

一艘の漁師は答へた。「左樣さね、纔ツ二三尾誑しましたアよ」

二三尾、さあ氣をつけろ、と爭うて綸を下して今や手ごたへがあるかと待つて居ると、二十間ばかり向うの波の上を突然にぴん〱つゞけざまに飛んで行くものがある。

「魳かね？」と甲菜が尋ねると、

「なアに、車鰕ですよ、鱸に追はれたんだね」

と答ふる言葉の下から、一艘の舟は手早く碇をぬいて、手早く櫓を押して、手早く竿を取出して、頻りに鱸を所謂だましいにかゝつたが、思はしくないと見えて、また漕ぎ戻して鯵釣りにかかつた。

釣瓶落しと云ふ秋の日は、箱根の駒が嶽の上に落ちかゝつて、富士の頭は早や紫に染つて來た。風は悉皆凪いで、落日の影漾々と水の上に金を流して居る。百舌も鳴き止んで、陸の方に啞々と烏の聲が聞え初めた。實に靜な秋の夕だ。空高く海渺々として風なく波なく、夕日の光獨り此間に充ち滿ちて居る。

忽ち珂々！　甲菜が綸をかけて置いた針金の鈴が一つ鳴つたかと思ふと、珂々琳々と二つ三つ四つつゞけざまに鳴つた。來たな！　繰り上げる綸の末を見ると、果然鶯茶の背に、銀色の腹をした、眼の大きな、口の透き通つた五寸位のやつが、潑刺と上つて來た。と見る内に、自分の指先にかけた綸がびくり。しめた。綸を手繰ると、重い。大きいぞ。それ上つた。まる鯵だ。一尺はたつぷりあらう。

さあ釣れ出した。三艘の舟三の字に竝んで、餌をつける、投り込む、手繰る。所謂膚撓まず、眼退がず、枚を銜むと云ふ格で、早や蔭深くなり行く水の上にのびかゝつて、繰り下し、引き上げる。隣の舟でドブンと鉛錘を投り込む音、

此方の舟で手繰る綸の舷側に軋る音、釣り上げられた魚の、ばた／＼舟板の上にはねては生簀の水に潑込む音。

「いや此奴ア大きい。ちよ、ちよ、一寸、其、た、攩網を」と甲某が遽しく叫んだ。

掬ひ上げて見ると、何だ、日張の大きいやつだ。

「畜生め、到頭かゝりやがつたな」と乙某が胴の間で獨語するのを顧ると、黒鯛を釣り上げて居る。黒鯛先生、先刻までは餌を遶つて敢て茹はなかつたが、終に夕蔭になつて眼がくらんだと見える。破れた沈默はまたもとに復つて、また暫く釣つて居ると、大方葉山の寺で撞き出したのであらう、暮の鐘が一つボーンと海面に響いて來た。

「如何です、最早終ひませうかね」と甲某は空を仰いだ。

「左様ですね」と膛き足らぬ溜息一つ。眼を上げると、何時の間にか、日は入つて、富士から相豆の連山は、入り日のあとの卵色の空に印度藍の波をうねらして、未だ瞭然と輪廓を見せて居るが、つい其處の葉山逗子の山々は已に夕靄がかゝつた。手を洗ふ潮水は宛ながら温湯だ。併し海氣は冷えて、乙某は古外套の襟を立てた。大島は最早見えない。鰹舟の歸るのであらう、舟は見えぬが、「エッショ、／＼、／＼」櫓拍子が遙に聞える。

他の二艘も碇をあげて、一艘は小坪へ、一艘は新宿へ歸つて行く。吾々も道具を收めて、富士に目送られて、紫流す水を徐々に分けて行く。最早暮れた。海の上は未だ明るいが、行く方は、濱も松林も人家も夕炊の煙も山も茫とした一の色に融け合つて、唯朦々として居る。櫓聲の絶間を、三聲四聲高く雁が鳴いて通つた。

川口近くなつて、山の影に入ると、驚いた鯔が跳ねては、眞黒い水に白い環を畫く。火光がちらちら見え出した。何處やらに犬の吠ゆるのが聞える。川口の淺瀬の退潮に棹して、舟を乘り入れると、岸の上に白いものが立つて居て、

「父爺ですか」

と幼い聲で呼んだ。先刻案内に來た小娘である。彼女の母なるものも、立つて居る。

「提燈を持つて來な」と呼びながら甲某は舟を繋いで、提燈の光に、生簀の魚を攩網で撈つて、三の魚籃に移した。釣れる時間が短かつたのだが、夫れでも七八十はあらう。皆潑剌として跳つて居る。

「左様なら、御疲れでしたらう」

道具と敷物と其から重くなつた魚籃を提げて、ふり顧つて見ると、眞黒い鳴鶴が岬の右手に、今日釣つた海は未だほのかに一道の白を展べて、富士もぼんやりと見える。富士の上には、明星が一つ、薄紫の空に晃いて居る。

（十月三日）

海と合戰

（一）

幸か、不幸か、未だ一度も銃を取つて、敵兵進擊の衝に當つたことはないが、今度初めて海と合戰をして見た。

軍物語をするには、先づ戰場の地形から説明せねばならぬ。相模灘は正南に開いて、太平洋の水を吞吐して居る。逗子灣は灘の東北隅に在つて、西南に口を開いて相模灘を吞吐して居る。田越川はまた南西に向つて逗子灣の水を吞吐して居る。此川口に川を挾んで人家が約二十軒ばかりもある。自分の僑居は東岸にあつて、家の前を川に沿うて三崎往還が走つて、往還から一段高く右に母屋あり、左に小竹藪があり、此間が前庭になり、藤棚があつて、それから五

六間退つて、猶一段高く自分等の寓所が立つて居る。中言だが、此小竹藪は、決して取除いてはならぬと、今の家主の祖父の時代から言ひ置いてあるさうだ。

五日以來の雨に、田越川の水は浮き上る樣に增して來た。船は大抵六日の暮方に、一艘も殘らず、或は陸に引上げ、或は水上遠く逃げてしまつた。七日の朝、滿潮の頃は、やゝともすると、水はちよろ〳〵三崎往還に上つて、皇太子殿下沼津行啓の前には、土木掛が人夫を指揮して、頻りに其處此處杭をうつたり、砂利を塡めたり、板を渡したりするのを見かけた。正午頃になつて、雨が少し止むと、それは蒸暑い、怪しい、胸惡な空氣が家を包んで、障子を明けると、蒸風呂の湯氣の樣なやつがぼやり〳〵額に當つて、座右にある本棚の玻璃戸が見る見る汗かいた。外に出て見ると、空も海も川もひた濁りに濁つて、今にも何か出て來さうである。近所の者も頻りに空を見て居る。忙々と戸締をする者もある。老龍庵＝此は家嚴の隱栖で、半町ばかり川上になつて、殊に小高くなつて居るので、水の心配はないのだ＝に走せつけて、戸の門を下したり、心張棒をしたり、風の用意をして、偖歸つて見ると、頓て吹き出した。

南風だ。雨も降り出した。僅かに開いた雨戸の隙から鐵砲玉とたばしる雨の障子に向つて、書を讀んで居ると、風浪風雨の聲屋を繞つて、宛として孤舟に坐するの思がある。

約二時頃でもあつたらうか、母屋の方から子供が三四人どろ〳〵逃げて來た。前庭に罵り騷ぐ家主の聲が聞える。突と起つて戸を開けて、はツ—と思つた。海は吾沓脱石の下まで來て居る。庭一面の水の中に立つて、家主は娘と血眼になつて、波防の丸太を橫へて居る。

「加勢が來たぞ」

一聲叫んで、尻引からげて、飛んで下りると、波は陸を殘して颯と引いた。恐ろしい力だ。道路の石垣の上押にした長さ三尺位の切石を宛ながら毬なんど玩ぶ樣に、ころ〳〵轉ばして行く。

「さあ、今だ！」

降る。吹く。其間を、自分はユーゴーの「渡海難」の主人公ギリアットが孤島の暴風雨の最中に防浪材を組立つる一節を思ひ浮べながら、防波の製造にかゝつた。宛ながら彈丸の面に立つて胸壁を築くのである。左手の方は竹藪が倔強の堡壘となつて居る、虞る可きは此竹藪から母屋までの正面だ。有丈の杉丸太を運び束ねる。藤棚の大杭に結ひつける。伊豆石の三十貫目もあらうと云ふやつを家主と二人で轉がして、根じめにする。未だ手薄だ。不圖往還に算を亂して轉がつた切石を目につけて逸早く飛んで行く拍子に、

「來ますぜ、來ますぜ、旦那」

遽しく呼ぶ家主が聲を聞き〳〵やつと轉がして來た切石を防材に立てかけて、飛びのくより早く、後追ひかけて來た一道の頗る大きな波が、づゞづーと川を逆押しに押して、一煽り往還に來たかと見ると、出來かゝつた防材を「何の此しきに」と云はむばかりに跳り越えて、氾濫と庭一面に散つた。のみならず、一派の浪は斜に防材を掠めて、撞と一つ母屋の雨戸に衝ると、雨戸を一枚向うざまに押倒して、其隙から滔々と流れ入つた。跣足になつて必死と道具を奥へ運んで居つた主婦の聲として「まあ如何せう？何もかも水になつちやつたよウ」

（二）

左なきだに三日降り續いた雨に、川水は漫々として岸に及んで居る。加之此進潮、更に此暴風、風は海を驅り、海は風を挾み、一灘の水を一灣に、一灣の水を一川に、一川の水を舉げ

て河口の二三十家に迫るのであるから、堪へられぬ。

恰も好し、山手に寄つた家の若い者が五六人、駈けつけて來た。倔強な手脚が浪の間々を潜つては、切石の石塔大なのを十四五も抱いて來て、丸太の上に並べ、猶其上を大丸太で押へて、荒繩で蜘手にからげた。母屋の雨戸は裏表から丸太を宛てがつて、簾挾みに犇々と括つて、左もなき處は二間梯子を緊しく打付けてしまつた。正面の堡壘は粗造ながら先づ出來た。此上は唯勝敗を何れにか決するのみである。

潮干衣絞りもあへず、藤棚の大柱を本營の牙旗と縋つて、堡壘の上に立つて見ると、實に凄じい寄手の勢だ。

灰色の空は低く海の面に舞ひ下つて、吹き上ぐる潮煙か、雲か、霧か、分からぬ蓬々としたものが、連りに北へ北へと走つて居る。常に海路の末に見る富士を初め相豆の連山は何處へ行つたか、固より影も見えず。降りしきる雨、しぶく潮煙に、遙の沖は茫とかき暮れて、空と海の堺も見えぬが、一里あまり彼方には猛りに猛つた渾海の時々空を目がけて跳り上るのがほの白く見える。鳴鶴が岬の石垣に、破れよ砕けよとぶつかつては三丈ばかり高く水煙を飛ばすのが見える。直ぐ其處の川口の形勢に到つては、殊に凄じいのである。常には八朔の高潮にも高く水上に出づる砂洲は、草一本の末も見えぬ程深く水底に沒して、川口の咽喉は平常に倍して濶くなつて居るが、三日來降り續いたため夥しく漲つて來た川水は出でむと欲して川口の進潮に支へられ、風を挾んで駸々上げて來る潮水は滿々たる川水に支へられ、川口の石垣の間に壓搾せられて、互に衝き合ひ、押し合ひ、もつれ合ひ、渦まき、哮つて、十二分に怒を含んで居る。恰も此時に乘じて、飄々たる暴風一陣二陣空際から吹き落して來ると、海は巨靈の手に撮み上げられるかの如く逆立つて、殆ど横に半里もある程の眞暗い大濤が、白鬣を振ひ白泡を散らして、陸を指して眞一文字に寄せて來る。而して其波濤は、北に小坪の岬に砕け南に鳴鶴が岬の石垣に砕け、正面新宿の濱に柔かに受留められて、更に志を得ないが、中に唯一個所襲ひ入る可き弱點を、田越川の川口に見出すのみである。こゝに侵入の口を見出して、轆轤と寄せて來る。川口の水は驚いて總立になる。其を其まゝ先鋒に、狹隘なる川口の一門を爭うて、一時にゴーと逆押しに押し上げるのである。平壤を突出する滿洲白馬隊の勢も未だ及ばない。實にウオトルローの其日、鐵石と固まつた英兵の方陣を目がけて、驀地に乘込んで來る佛蘭西の裝鐵騎兵隊の勢まさに斯の如くであつたらう。であるから、其衝に當つた兩岸は、石垣も築地垣も板垣も瓦落々々と片端から崩れて、其颯と引くに當つては、押崩した物を瞬く間に引攫つて行くのである。吾寓は、川口とはやゝ斜になつて、殊に左の一角を竹藪で受けとめて居る上に、流石防浪の堡壘が粗造ながら功を奏して、幾分かぶつくる濤の力を殺いで居るが、併し吾室の沓脱石の下は始終一面の水となつて、母屋の土間はやゝもすれば水際を沒せむとする勢である。

戰場も恐らく斯樣であらう。危險の中にも一種壯快な、勝負氣が盛に催して、家主の娘を初めとして、加勢半分見物半分に來て居る近所の女子供迄が、防浪の堡壘に突立つて、吹きつくる雨風潮煙を物ともせず、沖の方を眺めて居る。川口の山の樣な波が寄せて來ると「來たよ」「今度のは大いよ」と口々に罵りながら猶立つて居る。最早其處へ來たと云ふ時分に、一同身輕に飛びのいて、連りに「追つて下さい、波を追つて下さい」と云ふのである。波が高いと聲をあげて追ふのは、海村の風俗だ（追つて下

さい」と叫ぶ家主が、兩手を廣げて「ヤ、ヤアッ」と來る波を追ふと、加勢に來た男女、雨戸の隙から覗いて居る子供まで、手をあげて「ヤアッ」と追ふ。村のカニュートに叱られて、意地惡い波は防材を飛び越え滑りぬけて其處ら一面泡だらけにして颯と引くと、皆高い處からひら〳〵飛んで下りて、引く波のあと追つかけて、堡壘の上から波の行末を見送つて居る。宛ながら海と鬼子ッコをする樣な者だ。上流の方でも、左右の岸から頻りに「ヤアッ」と鬨の聲を揚げて居る。波は此兩岸の石垣板垣人垣の間を、追はれながらに獅子奮迅の勢を以て、眞一文字にかけ通つて、富士見橋を一搖搖つて、果は二町ばかり上流のサ某邸の石垣を苦もなく飛び越えて、其餘波は遙か上流に漲つて行く。

一しきり雨が止み、風が小止れたかと思ふと、今度は西南に廻つて恐ろしく吹き出した。吹きちぎらるゝ青葉木の葉はうなりをうつて亂れ飛ぶ。波は逆立つ。立つ波頭を其まゝ風は引攫つて、一面の白煙を吹き散らす。海は空と、風は潮と、まるで一になつて、浩々として殆ど物の音も聞えぬ。つゞけざまに打寄する大波小波に、往還の上は大人の股を沒し、庭の上は殆ど脛を沒するばかりになつて來た。役目とは云ひながら、此荒の最中に郵便物かついで駈けて來た脚夫も、溜らず飛び込んで來る。富士見橋の爪の土臺脆くも崩れて、向洲との通路は全く絶え果てた。戰は今絶頂に達したのである。

立木に身を寄せて、辛うじて川口の方を見ると、箱根の連山がつい川口に來たかと思ふ程の、正眞山の如き大波が打重ね〳〵寄せて來る。吾南隣は竹藪に遮られて更に見えぬが、向うの洲頭に立つて居るヲ某氏の別莊は夙に正面の築土垣を壞されて、家は著しく前の方へ屈んで居る。横手の垣と松が二三本殘つて居たが、例の山の如き波が一つ、續いて二つ、ひらりひらり飛びかゝつて、松は頻りに頷くと見る間に、殊に大きな波が勢込んで松の梢を飛び越して、瀧落しに來ると、最早跡は何も無い。唯家が前に俯いて、更に大波の來て攫ふのを待つのみである。此につゞいた養神亭の南の角の石垣も波の來る毎に、幼稚の玩ぶ積木なんぞ崩す樣にぼろ〳〵壞れ落ちて、其上に立つた垣も唯一簸りで意氣地なくばた〳〵倒れて了ふ。表座敷に波を見て居た客の荷物を提けて、とつかは裏へ逃け込むのが見える。宛ながら鷲津丸根の落城を見る心地だ。

あまり人間の饕食が劇しいから、海も今は猛然と怒つて、其千金の費百日の勞を唯一擧に破壞して居るのであらう。何處の家からさらつたものか、青々した松の木、戸板、樽、桶、板ぎれ、木ぎれ、あらゆるものが浮きつ沈みつ濁浪の中にもがいて居ると、海は奪ひ取つた敵のものを其まゝに破城槌として、石垣板塀處嫌はず碎けよと打ちつける、長い手鍵を蜻蛉切と打ちふつて、邪魔なす物を突放し引上げて居る村の平八も、波の勢のあまり烈しいので、終に逃げ込んだ。海は恣に其復讐を逞しうして居る。

忽焉正面から來た波が引きかけるかと思ふと、後に聲あつて、

「やあ、裏からも水が來たぞ」

物置小屋も本屋の間から泡だらけの水が滔々と押流して來た。隣家の縁の下を打ぬいて、餘れる勢竹藪を一匝して、逆に流れて來たのである。所謂腹背に敵だ。時計を見ると未だ三時半、滿潮と云ふ六時半までには、猶三時間もある。

此時こそは、自分も烏滸がましいが、馬を樹下に立て潮の如く寄する佛軍の精鋭を遙に望みつゝ、時計を出し見て「ブルーヘルか、夜か」

と獨語した英將の心になつたのである。

（三）

卒然雨が止む、風が少し小止れる、と思ふと伊豆の方の空がぼうつと明るくなつて、黄ろい空に山の影がほのかにあらはれた。

「おゝ、向山が見えて來たぞ」

老幼男女一齊に鬨の聲を揚げた。斯一聲を聞いた時の心こそ、實にエリントンが佛軍の横合からうつてかゝつた孛軍の第一發の砲聲を聞いた時の心であつた。

戰は最早絶頂を越した。曩きの一吹、一浸が、敵の精根の限であつたのだ。敵の旗色は確に動いて居る、風は猶吹く。併し折々息が途絶える。波は猶高い、前よりも猶高くはないかと思はれる。併し其内に何處となく強弩の末の氣味がある。此隙に、裏の竹籬の破れを潜つて、老龍庵に走せつけて見ると、豫想に違はず、松の小枝が折れて、草花の俯伏になつた位で、往還は大分崩れて居るが、屋敷其ものは一石も崩れず、屹として立つて居る。

四時過ぐると、風力愈衰へて來た。雲は北へ北へと幕引く様に捲き去つて、南の方は青空も見え、頭に綿帽子を被いでは居るが、富士の姿も、相豆の連山も瞭然と見えて來た。後の山に突然に法師蟬が鳴き出した。家主は「最早此方のものだ」と云ひ貌に、まだ勢猛に寄せて來る大波小波に足を洗はせながら、丸太に腰かけて、煙草を吸つて居ると、此方には加勢の男が握飯を食ひながら宿の娘と立話をして居る。

激戰已むと忽ち夥しく空腹を覺えたので、取りあへず、ずぶ濡れの着物を更へ、湯漬をかき込んで、南隣＝北隣は場所と手當と共によかつたので、皆無事だ＝を見舞ふと、實に眼も當てられぬ。テ某の別莊は、石垣も板垣も綺麗にとれて、松の木が根こぎになつて、緣の下に頭をつき込んで居ると、此方の車屋の便所はピザの塔よりも傾いて、井戸が潰れて、波はどんどん床の下を打拔いて勝手次第に往來して居る。某の南隣のマ某の家は、南の方の屋根を悉皆風にとられ、臺所を綺麗に波にとられて、半死半生の體で立つて居ると、其前には往還の電信柱が、倒れて、電線がぶら〳〵下つたまゝ、頻りに波に引摺られて居る。風は止んだ。併し海は猶怒つて、今は殆ど滿潮の勢未だ當る可からざるものがあつて、轟と來る毎に此處らの家の周圍は一面の海になる。別莊から浪に追ひ出されて、紫の袷を着たる某の小い嬢様が下男の背につかまりながら、遠方から此慘憺たる光景を見て居る。

立つて見て居る中に、日が暮れた。と思ふ間もなく、また晝に逆戻した様に、赫と明るくなつた。夥しい夕焼だ。所謂「戰餘落日黄」とは此事であらう。滿天滿地眞黄色に焼けて來た。獨り海のみ紫瀾洶湧、鞺鞳として荒れ騷いで居る。夕焼の空に際立つ水餘の破屋の眞黑いのを前にし、今引いて行つた波の殘溜の黄なるを踏んで、此景に對した余は、一種鬼氣の森然として身にしむを覺えたのであつた。

夜に入ると、風いよ〳〵止んで、「木枯らしの果はありけり海の音」餘怒を帶ぶる海の音獨り鞺鞳として星光に鳴りよどんで居る。戰は最早終つた。海は終に敗れて退いたのである。併し家々未だ戸前の保障を撤せず、尙警戒を解かず。富士見橋の袂には、篝火が夜一夜燃えて居る。

（四）

翌八日の朝、早く起きて見ると、人を馬鹿にした様な上天氣だ。昨日の戰場を見舞ふと、實にひどい。自分も隨分激戰をした積りであ

つたが、余所に比べるとまだ楽であつたと見える。

吾僑居の前から一町あまりの間は、道路は消滅して、昔の濱になつて居る。彼處の別莊は礎石を浪にとられて床下の砂を抉られて、べたりと前へのめつて居、此方の貸家は半分空に乘り出して、今にも顛覆しさうだ。大木の根が章魚の足の如くに長々と洗ひ出されて居ると、道の切石は遠く畑の中にころんで居る。鳴鶴が岬の下の新築地の石垣は、五六十間が程めちやめちやに崩れ石原になつてしまつた。川口は無暗に淺くなつて、洲が一夜に場所を變へて居る。更に葉山の方に行つて見ると、道の眞中には引揚げられた舟がづらり行手を塞いで、此方では大勢かゝつて、傾いた家をこれ起して居ると、彼方では物置が倒れて半腐した萱の狼藉としたのを掻退け、また彼方では家を素裸にして頭から行水を遣はして居る。別莊の崖崩れて、家の半ば空に浮んで居るのも見える。蒲鉾屋の俎板大の切石の砂に埋れて居るのを掘り出して數へて居る石工もある。生簀の籠を流して、二十兩損したと血眼になつて舟を出す爺もある。

何處の家では、四斗樽がころ〳〵波に轉ばされて、誰の家は海から一町もあるのに、ぐるりと波に打まはされて、誰は道具を悉皆濡して、誰は何したと云ふ。何處を向いても、其話ばかりで、人の顏を見ては、

「大きい暴風雨でムいましたよ、マア」

と云はぬ者はない。

家主の話では、十四年ぶりの荒ださうだ。

秋漸く深し

野路行けば、粟の收納の盛にて、稻の收納もぼつ〳〵始まりぬ。

蕎麥雪の如く、甘藷の畑は彌繁りに繁れり。百舌鳴く村に、紅なる黄なる星の如く柿の實の照れるを見よ。

彼岸花、螢草、野菊、蓼、小き粟の如き、稻の如き、黍の如き、燕麥の如き、八千草に鳴く蟲の音を踏み分け行けば、蛙飛び、螽斯飛び、稀には蟹がさ〳〵と隱れ行く。

又

山路行けば、薄刈萱の吾衣にかゝれるも、あはれなり。

山も秋やゝ深うなりぬ。何の樹殊に色づき、何の葉殊に落ち初めしと云ふにあらねど、林漸く疎に、山骨やゝ寒く、葉聲次第に乾き、樹々日々透明ならむとするを覺ゆ。默然として歩めば、小鳥の石を落せしか、栗の實の自らはじけて落ちしか、ころ〳〵がさと一聲木の間に物の落つる音して、あとはこつそり靜になりぬ。

（十月十一日）

富士雪を帶ぶ

富士雪を帶ぶ。さやかに雪を帶ぶ。

秋空何ぞ高き。風威を帶ぶ相模灘の怒號何ぞ壯なる。此空と此海の間に玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。

絶頂より五合目のあたりまで、銀よりも白き雪は桔梗色の山膚を被ひて、上は限なく下は宛ながら笹縁とれる樣に山を包む。雪色淨うして點塵なく、日光に輝き、水よりも澄める晩秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立ち騷ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗皎潔、神威十倍するを覺ゆ。

嶽頂一點の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、更に四圍の大景に眼睛を點ず。東海の景は富士によりて生き、富士は雪によりて生く。

（十月十六日）

凩

今日の風こそ、凩の初なれ。空を見るに一點の雲なく、天心より地平線に到るまで青々として水の如く、日色晶々として到らぬ隈なし。而して凩は何處よりともなく、彌吹きに吹き來りて、海を荒し、山を騷がし、木の葉を掃ひて已まず。空色、木葉の響、すべて一種乾ける枯れたる氣味ありて、秋の深きを思はしむ。

又

日は凩に吹き落されぬ。眼を上ぐれば、十一日の月何時か後山の上に出でたり。洞然として未だ光なし。凩の烈しきに月の光も吹き消さむずる心地せらる。

七時頃外に出で見れば、月は晝の如く、凩の上に冴えたり。地は白々と霜を敷きぬ。樹影深黑に亂るゝ道を踏みて、川口の方に行くに、前洲のあたり雪蛇の簇に走るを見る。月影に白浪を奪するなり。

十時頃に到るも凩は猶止まず。海の音、戸障子のはためき、樹梢のうなり、其間には蛙の聲も混りて、屋を繞る。戸を開けば滿天滿地の月色。

（十月十七日）

凩の後

凩は忘れたる樣に止みぬ。先の程まで騷々しく頭を掉りたりし庭前の櫻樹も畫ける如く靜まりて、枝より枝にひき渡したる蜘蛛の絲の一微顫だに見る能はず。凩の吹き集めたる落葉は其處に一堆、此處に一積、靜に伏して、がさとも云はず。

庭に立ちて、空を望むに、地平線より天心に到るまで一點の雲なく、晶瑩玲瓏、明鏡よりも澄み、碧玉よりも匂やかに、深淵よりも光を含み、名工の鍛へたる秋水よりも冴えたり。高く深く澄明にして、直に上帝の聖座をも見る可き心地す。

今日こそ眞に秋晩の尤も全き日の一なれ。二十日に亙りし大雨の後、二日に亙りし凩あり。彼雨もて洗ひ、此凩もて掃ひ、而して天地は乾々淨々、空はいよ／＼高く、空氣はいよ／＼澄み、日はいよ／＼明かに、蕩々として宇宙は一の璧となりぬ。自然は此上に完き秋日を與ふる能はじ。

（十月十八日）

月を帶ぶ白菊

墨の如き樹影を浴びて、獨り中庭の夜に立てば、月を帶ぶる白菊ほのかに香りて、花の月と囁く聲も聞く可き心地す。俯きて、其一枝を折らむとするに、しとゞ露にぬれたり。折れば、月影ほろ／＼とこぼれぬ。

朝來の雨止み、風息み、月夜の靜味言ひ盡し難し。何に動かされてか、井戸側の無花果の葉のがさりと云ひしあとは、一庭寂然として月と影と共に眠りぬ。

唯、稀に、稀に、檐滴の蔭闇き方に私語するのみ。

（十一月十二日）

暮秋

柿の落葉を踏みて、後山に登る。

芒、茅萱蕭々として亂れ、龍膽の碧、棘實の紅と徑を綴る。

山上より見れば、田は盡く刈られ、麥の綠猶ほのかにして、村も痩せ、蕭秋の野いたく寂びぬ。

烏五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴き連

れて彼方の村に向ふ。啞々の聲滿山に響く。

（十一月十五日）

透明凜然

碧空點翳なく、透明にして且凜然たり。天に向つて石を投ぜば、戛然として天鳴らむかと思ふ。

風止みて、搖動せる空氣は瑩然と凝りぬ。此頃の空氣は金質あり。物響を傳ふるにも春の如く音波の悠々と廣まり行くにあらで、宛ながら三尖の飛矢空氣を射ぬけば、空氣は戛然と其響を傳へ、一瞬にして止むものゝ如し。

（十一月二十日）

秋晩の佳日

今日は美日なり。

朝早く起きて、井戸端に顔を洗ふ。空はほのかに紫立ちたれど、山際は猶ほの闇し。鷄は小屋の闇きに鳴き、雀は已に樹梢に囀る。曉の風冷かに面を拂ふ。

川邊に出づれば、潮いたく乾て且淺く、其上に浮べる船も猶夢見顔なり。何處の家も猶戸を閉しぬ。砂の溜にちら／＼流るゝ殘月の影を踏みて、川口近く立ちつゝ富士の朝日を見る。

富士は猶薄き藍色して立てり。相模灘も一點の光なし。西空一抹微紅の光の外には、見る所凄として寒色を帶びざるはなし。鳴鶴の岬より馬士が荷車に腰かけて馬蹄の戛々に節あはしつゝ俚歌を歌ひ來る聲、氷を碎くが如く朝の空氣を震はしつ。

良ありて西空の紅霞は下り下り下りて、已に富士の背後八九合の處に到れど、未だ峯頭一點の紅なし。怪しみて見つゝある程に、峯頭白雪の一處指もてなすりたる樣に薄き濁れる朱色を帶び來りぬ。眼も離さず見れば、一秒一秒雪上の斑點は次第に廣く、次第に澄み、次第に明かに、果はぱつちりと薄紅に光り出でつ。雪は朝日の投げたる紅を吸うて見る／＼四面に浸み渡り、富士は終に紅に曙けぬ。鳴鶴の岬より鳶一羽すうと富士の半腹を掠めて、やがてばたばたと羽搏つては駛せ、また駛せては二つ三つ羽搏つてすうと駛せ行く。

猶立ちてあれば、紅は已に相豆の連山に及び、顧れば北の方も小坪の山に沿うて空は全く薄紅になり、川水も臙脂を融き流したる樣になりぬ。灘上に點々たる帆影も、近きは猶灰色に寒けれど、遠きは渾て金色をなしたり。

又

夕方また今朝富士を見し川邊の砂に立つて、夕日を見る。日はまさに鳴鶴の右に落ちむとして、白光爛々として眼見るに堪へず。鳴鶴は夕日に背いて闇く、石垣も黑し。其石垣の根に、一艘の船あり。檣の中程に捲きたる帆を懸けたるが黑々と日に劃せられ、檣頭より三二條斜に垂れたる帆綱は、日を受くる側に於て金色をなせり。

水乾て砂汀廣し。農夫あり、きら／＼と落日の影流るゝ水に立ちて、肥桶を洗ふ。前の砂洲に貝を拾ふ子供の影もまた黑く水に映りぬ。

眼を放てば、富士も、相豆の山もすべて茫とした紫色になりぬ。

やがて日は雙肩を搖りて次第に落ち、初めは白金色の光を輪の四周にぼかせしも、落つるに從つて、次第に光を收めて金色の空に眼以て見る可き團々たる黄球となり、一秒一秒沈み行く。日の沈むに從つて山の紫も漸う濃くなりぬ。

次第に缺け、果は金の櫛となり、點となりて、終に入りぬ。今迄赫々として夕陽に榮えたりし

家々の西南面は、忽ち冷かに蒼ざめて、乾坤の間生命なるものの今しも過ぎ終りたる心地す。光は實に生命なる哉。

されど猶日の入りしあとに餘光あり、相豆の山々濃き紫となり、また藍となりぬ。日の入りたるあとの空は金より朱となり、更に焦がれ煙りたる黄色となり、餘の空も淺黄より縹となり、紫となり、宵の明星一つ夕日の跡に生れ出でぬ。

殘照天にあり、天水にあり。此美しき夕に立ちて、見れど飽かぬ自然の日々新なるを感ず。（十一月廿四日）

時雨の日

今日は時雨の日なり。はら〳〵降り出づるかと思へば、止み、止みしと思へば、また思ひ出でたる樣に降り出づ。宿の女等度たびか乾物の出し入れに遑ふ。自然も冬に入らむとして、心騒がしきにやあらむ。「忙しう世の思はるゝ時雨哉」と、古人の句妙なる哉。

日は薄絹につゝまれたる樣に光薄く、山茫と打けぶり、落葉勝なる木々は打しめり、空氣はうつとりとして重し。恰も春陰に似たり。ただ寂しきのみ。（十一月廿七日）

寒星

寒星一天、深黒なる屋根の上、深黒なる山の上、到る處として星ならざるはなし。葉落ちたる欅の梢、大なる箒の如く空を摩して、枝々星を帶びたり。靜に中庭に立てば、山頂のあたり波濤の如く夜あらしの過ぐるを聞く。殷々として、遠雷の如きは、隣家夜籾を磨るなり。（十二月五日）

寒月

夜九時、戸を開けば、寒月晝の如し。風は葉もなき萬樹をふるひて、飄々、颯々、霜を含める空明に搖動し、地上の影木と共に搖動す。其處此處に落ち散る木の葉、月光に閃いて、簌、簌、玉屑を踏む思あり。

仰ぎ見れば、高空雲なく、寒光千萬里。天風吹いて、海鳴り、山騒ぎ、乾坤皆悲壯の鳴をなす。耳を側立つれば、寒蛩簷下に鳴きて、聲、絶たむとす。風に向ふて、月色霜の如き往還を行く人の屐齒戛然として金石の響をなすを聞かずや。月下に狂ふ湘海の彼方に夜目にも富士の白くさやかに立てるを見ずや。

月は照りに照り、風は彌吹きに吹く。大地吼え、大海嘯り、浩々又淸々たり。大なる哉自然の節奏。此月と此風と、殆ど予をして眠る能はざらしむ。（十二月十日）

凩の湘海

靜なりし世の中、俄に騒ぎ出でたる心地して、急に立出で見れば、已に凩吹き始めたり。

今まで紫だちたる紺青の色に湛へ居たりし湘海は、陣々の風に吹き立てられて、尺に一瀾、寸に一波、白く起ち、白く倒れて、相模灘は須臾に白泡白波狂ひに狂ひ、嘷りに嘷り、滔々汨々としてまさに沿岸一帶の磯山を押し流しも去らむとするの勢あり。颯々たる風の波を吹きしぶくを見よ。濱の眞砂の舞ひ立つて煙の如く渦まくを見よ。落葉と共に、小鳥の飛鳴しに吹き飛ばさるゝを見よ。顏を掩へて濱を走り來る漁夫の弓の如く身を張りて走れども一處に止るを見よ。小坪の山の黄茅波の如くに搖ぎ、峯の松一齊に折れむばかり撓むを見よ。

碧空朗かにして日色晶々たり。富士も相豆

の連山も鮮かに灘の彼邊に立てり。何處より如何にして風は吹くぞと怪しまるれど、眼を注ぐ處、海も山も人も草木も自ら持する能はずして、狂奔し悲鳴し動搖す。

吹きつゞけて夕に近づけば、落日杲々として伊豆相模の山々、富士の高嶺は渾て紫に變じ、三浦半島一帶は赫として火の如く夕陽に燃ゆるが間を、相模灘は金濤紫瀾朱波咆哮して、浩々蕩々の音天地に滿つ。（十二月十三日）

寒樹

粉雪ちら／＼、止みて日出でたれど、底寒きこと甚しく、北風終日膚を刺す。

日落ち天紫なり。葉落ち盡したる欅の大樹、幹は老將の如くに硬く、篩高なる梢頭より針の如く絲の如き千萬枝縱横に射し出で、紫の空を揶揄す。一枝々骨を刺して寒きを覺ゆ。上に蒼ざめたる月あり。空に氷りつきたる樣なり。（十二月二十日）

冬至

今日は冬至なり。

霜枯の草を踏みて、野外に立てば、一望寒景蕭條として、枯蘆風に戰ぐ音、葉もなき川楊に囀る鶺鴒、水涸れし野川の音、皆年の行く行く暮れなむとするを語る。（十二月廿二日）

歳除

晴れず、曇れど降らず、鬱陶しき年の暮なり。吾宿にも、山より松を伐り來りて、立てぬ。前川に泊する舟の上にも、松あり、注連繩あり。天下事無く、吾家事無く、客なく、債鬼なく、また餘財なく、淡々焉として年は靜に暮れ行く。（十二月卅一日）

風景畫家コロオ

（一）

佛國近代風景畫家の父とも云ふ可きジアン・バプチスト・カミール・コロオは、佛國大革命の血未だ斷頭機上に乾かざりし一千七百九十六年に生れ、普佛戰爭の創痍猶新なる一千八百七十五年八十の老齡を以て逝きぬ。彼逝いて已に二十餘年、歐洲の美術界は幾多の新現象を以て滿され、名家巧手踵を接して起りしと雖も、コロオ終に死せず。其清らかなる詩の如き生涯は、片幅に造化の妙機を縮めて永遠に怡樂の泉となる幾個の名畫と共に、永く一陣の清嵐を藝林に薫じ、流風餘韻今に到つて人をして低徊に堪へざらしむ。

（二）

コロオはもと摘髮師にして後仕立屋を業としたる者の子なりき。巴里に生れて、ルーアンの小學に通ふ七年、次で吳服商の店に入りて八年を經ぬ。然れどもコロオは終にコロオなり。彼は暇に乘じてはセーヌ河畔を漫歩して、悠々たる雲水に心目を娛ましめ、或はキル・ド・アヴレーの森に朝昏の變態を察し、自然は日々に彼が心を帳簿出納の務より奪ひ去りぬ。恰も好し、畫家ミシヤロンなる者ありて、彼に畫を教ふ。是れよりしてコロオの心はまた商賣の上にあらず。スケッチブックは衣兜に藏められて到る處に隨ひ、帳場の卓は畫臺となりて、風流なる手代は其上に畫紙畫筆を散らし、客來れば匆々に應接し終つて又直ちに畫に向ひぬ。於是父はコロオに諭して曰く、余は卿を一廉の店の主

人にもたさばやと思ひ居たれど、今の様に畫にのみ熱心せば、吾が存命の限りは卿に資本金を與へむこと思ひも寄らず、其代り年金千五百法を與ふ可し、其上を望む勿れ。コロオ欣然父の頸を抱いて謝し、即日畫布と畫筆を執つて、第一に見當りし景色の寫生に取りかゝりぬ。老年に及んで、コロオ友人に語つて曰ふ。憶ふ余が初めて畫家となる許しを得て寫生にかゝりし其日、父の店に使はるゝ女等少主人の畫をかく様を見むとて幾度となく走り來ぬ。ローズ孃の如き尤も足しげかりき。孃は今も存命にていまだに孃にてあるなり。時々來り省み、前週も來り訪ひしが、余は彼女に對して今昔の感に堪へざるものありき。其時に描きし畫は今日までも聊か古びず、さながら昔のまゝにてあるなり。然れどもローズ孃は如何に、抑も斯く云ふ余は如何に？と。一年一千五百法は甚だ豐かなりとせず。而もコロオ元來寡慾の人、身に係累なく、心に希望あり。欣々として一千五百法に衣食し、爾來三十年一錢の多きを貪らず。一毫も負債を醸さざりき。子を知る親に若かず。而も子を知らざることもまた往々にして親に若かず。後來コロオの名大に揚り、名譽勳章を受くるに及んで、父は猶兒の技倆を信ぜず、コロオの友に問うて曰く、貴下、眞實カミールは畫才ありや否やと。友百方コロオを稱賛するも、容易に信ぜず、而も年金を倍し與へぬ。コロオは孝子なりき。曾て伊太利に遊んでヱニスに到りし時、父の甚だ寂寥なりと云ふ書翰を見て、即日足を返しぬ。壯年の日、同輩と會談飲宴興湧くが如き時も、午前九時には其母常に骨牌を鬪はさむと待ち居るを以て、必ず退席せり。彼は仁王の如き大男なりしも、羊よりも柔かなる心を持てり。

（三）

コロオが初の師ミシヤルロンは、靑年畫家にとりて有益なる勸告を與へたり。曰く、自然を見よ。見る所をまさしく描け。感得する所を寫せと。ミシヤルロン程なく死して、コロオは更にミシヤルロンの師なるギクトル・ベルタンを師としたり。ベルタンは古風の風景畫家、其畫は甚だ器械的形式的なるものなりき。而もコロオは彼に由て形を精確に圖する事、及び畫の組立に調子を重ずると云ふ事を學び得たり。一千八百二十五年コロオは羅馬に行きぬ。同輩の畫家は皆彼の畫を笑ひて而も畫家を愛したり。快活温柔なるコロオは到る處に一陣の清風を齎したればなり。一日知名の畫家アリニー來りてコロオ羅馬「コリシアム」の繪を畫くを見、出でて美術家の集會する希臘茶亭に於て、他日コロオは我々一同の先生たるに至る可しと預言したれば、コロオは忽ちにして尊敬と希望を以て待たるゝに到りぬ。二年を經て巴里に歸つて初めてサロンに出品し、爾來死に到るまで四十三年間、年としてサロンの壁上にコロオの畫を見ざることなかりき。

一千八百三十三年コロオは初めて二等牌を得。十三年の後フォンテンブルウ林中の景色を描いて名譽勳章を得。九年の後一等賞牌を得。更に十二年の後二年賞牌と共に更に高等なる名譽勳章を得たり。年又年、美術家批評家がコロオを賞賛するの聲は高うなりぬ。然れども、世間はコロオてふ畫家の存在することすら知らざりき。彼が父すらも其子の技倆を知らざりき。彼が父の恩惠に由て千五百法の年金を倍し與へられし時は、彼は已に五十歳なりき。彼の畫の初めて賣れし時は彼は已に六十歳なりき。彼が畫初めて賣れ、買主之を持ち去るや、コロオ嘆息して曰く、吁吾畫帳の蒐集は今日迄も全かりしに、今や其一を缺くに到りぬと。此後彼彼が畫の次第に賣るゝに及んで、彼は猶其戲れた

らざるを信じ得ず。曾て一萬法の價を附し置きし畫の賣れたりと聞きし時、コロオは誤つて一個の零字を落したるものと思ひて、更にサロンの幹事にあらためて其價を書きて送りき。一千八百五十八年彼が畫三十八枚を賣りて二千八百四十六弗を得し時、彼は其友の戯謔ならむと思ひたり。幸にしてコロオ長命なりしが爲め、彼は生きて其畫の價二十倍するを見るに及びぬ。曾て彼が七百法に賣りし繪、後には一萬二千法に賣るゝに到りぬ。世は彼を識る晩かりしも終に彼を識れり。彼は半生畫に熱中して世間の毀譽に無頓着なりしも、世間は彼の白髮に榮の冠を被せたり。コロオ欣然として曰く、是れ吾の變れるにあらず、吾が主義の一定不變なるが終に勝利を獲たるなりと。

（四）

畫家をして高潔ならしめよ。彼をして六塵の欲に誘はれず、超然として專心一意其向ふ所に向はしめよ。彼が心をして媢嫉不平より自由ならしめ、彼をして世間の好惡に淡からしめ、單へに美と眞とに走らしめよ。人間清福の多半は實に彼が有ならん。一架の畫布は彼が帝國なり、一尺の畫毫は彼が玉笏なり。彼は竭きざる自然の泉を汲んで、自ら服し、人を服せしむ。個中に無限の快樂あり、慰藉あり、生命あり。コロオの如きは實に帝王も享くる能はざるの幸福を有するものなりき。

　彼は自然の兒なり。軀幹偉強にして、終生病を知らず。平生情和にして又快活、彼の身邊には常に清風吹けり。彼は苦んでパンを得るに及ばず、更に一係累の彼の心を擾はすなかりき。彼に時あつてか失望せり――誰か失望せざらむ。時あつてかサロンに出品したる吾畫の人目につかぬ片隅に掛けられたるを見ては心を痛め、時あつてか盲評者の惡口を聞いて眼底に涙ありき。然れども是れ一霎時の浮雲、一たび畫架に向へば消えて跡もなかりき。曾て歎じて曰く、若し繪畫は愚か事と云はゞ、誠に愉快なる愚か事と云はざる可からず、余が容貌を見よ、健康を見よ。不幸なる人々の容貌にあらはるゝ辛勞野心悔恨の跡何れにあるや、斯くも平和と滿足健康までも齎すの技術をば、奈何んぞ愛せざるを得むやと。畫はコロオの初戀、コロオの妻、コロオの食、コロオの渾てなりき。彼は世の愛を求むるに心なかりしも、然れども彼を識るは彼を愛する所以なりき。彼が年壯きや、畫家の集會は彼を得て歡を添へぬ。彼が年老いるや、巴里の畫家を擧げて彼を稱するに爺々コロオを以てし、彼が如く敬愛せられたる者なかりき。彼が在る處、熱心なる美術學生等は先を爭うて其膝下近く寄りこぞりつゝ、愛慕と歎美とを以て白髮の彼が唇より出づる一語一語を吸收せり。窮困の畫家には金を與へ、後進の青年には懇切の助言を與へ、彼は年輩に於ても、德望に於ても、眞に佛國美術家の爺々なりき。

　コロオ甚だ書を讀まず、其交游は彼と共に佛國繪畫刷新の功勞を分つルウソウ、ミルレー、ダウビニー等を初め美術家の範圍の外に出でざりき。三たび伊太利に遊び、一たび瑞西より荷蘭英國に遊びし外は、多くは、ギル・ド・アヴレーの林邊に住み、また巴里にも畫室を有せり。彼尤も音樂を嗜み、巧みに歌ひ、而して口に天然を說くに到つては、語々皆詩なりき。彼が老骨稜骨、白髮赭顏、細眼巨口、皺多き面に髯なく、段だら染の木綿の寢帽を被り、寬博を着て、長き陶製のパイプを銜へつゝ、畫架に向ふ所は、佛國無雙の風景畫家と云はむより、一見老車夫の如くなりき。彼は自然の兒にして、また平民兒なりき。彼が道の眞中に畫架を据うる時は、村孃車丁も過ぎがてに彼と言ふを樂みたり。

コロオの一生に於ける陰雲は、普佛戰爭なりき。彼は逃懐せり、吾若し畫を知らずば、戰爭の爲めに狂亂しつらむと。また曰く、美術の極意は唯愛なり。戰爭の惡、戰爭の怨に比すれば果して如何と。然れども巴里籠城の事愈定かなるや、彼は老愛國者の意氣を以て、直ちに巴里に歸り來り、其財嚢を擧げて防禦用及傷疾病救助用に供し、其時を分ちて或は畫に向ひ或は病困者の慰問に向へり。彼が晩年の名畫幾枚は實に此間に成りき。一千八百七十四年其畫の展覽會に上るや、彼は再び名譽特別大賞牌を與へられむとして其議かはりぬ。而も全國の美術家は連署してコロオに書を贈りて曰く、畢竟するに賞牌は物の數にもあらず、最大の名譽はコロオと云はるゝにありと。此後程なく畫家仲間美術嗜好家等協同醵金して、一大金牌を造りてコロオに贈りぬ。コロオ欣然として曰く、若くも愛さるゝことを思へば人をして欣喜に堪へざらしむと。

此年コロオが久しく共に棲みたる妹死して、コロオまた衰へぬ。彼は病床に侍する門弟を顧みて曰く、余は何の憾む所なし。七八十年の間健康にして、五十年間專ら繪畫に從事したり。吾が家族は皆正直なる人々にて、吾が朋友は皆良友なりき。余は生涯何人をも害したることなし。吾が運命は眞に幸福なりき、余は滿足し感謝するの外なしと。彼は其父の死せしが如く死せむと欲して、翌日僧を病床に請ぜり。而も彼が臨終の一念は畫にありき。彼已に瞑せむとす。右手恰も畫毫を揮るの態度をなしつゝ叫んで曰く、呼美しきかな、吾は未だ斯る美しき風景を見ずと。卽ち瞑しぬ。

コロオ終身娶らず、畫を以て妻となしぬ。彼が一生は彼の畫の如く清うして且和かなりき。葬儀の時に臨み美術局長シャンヌギールは彼の墓畔に演說して曰く、巴里の少年皆君を愛しぬ。君は常に少年を愛し而して君が才は永遠に老いざるの少年其ものなればなり、………………君は其千載朽ちざるの名作に於て、其畫ける青空森樹禽鳥を以て上帝を讃美したりと。語未だ了らざるに一羽の紅雀あり、墓畔の樹枝に飛び來つて、忽ち一聲の清歌を發しぬと云ふ。

一千八百八十年コロオの友人等相謀つて、彼が生前常に好んで畫架を据ゑたりしギル・ド・アヴレーなる小湖の畔に一片の石碑を建てぬ。十有餘年の春風秋雨は、憶ふに未だ甚だ石碑の面を害せざる可し。茲に之を寄す。我が美術愛好の士、若し佛國に遊んで或は石碑の下に詣るの日あらば、爲めに一盃の水を灑ぐを忘るゝ勿れ。

（五）

コロオが風景畫家たるは、人も知る。彼が常にギル・ド・アヴレーの林を愛して多くは畫架を此林邊に据ゑ、殊に春天緑樹の節を愛し、朝暉夕陰の時を愛して之を畫きしは何人も知る。而も彼が範圍は此に止まらず。彼は四季を畫き、月夜を畫けり。彼が畫ける何れの風景畫にも、殆んど人物あらざるはなし。彼は聖經の畫を描き、花卉を描き、市街を描き、動物または裸體人物を畫き、肖像四十餘枚を畫けり。彼がスケッチブックは森羅萬象の寫眞なり。コロオの如く勉強したる者少かる可し。少より老に到るまで、彼が一枚の畫を成さむとして、其準備の爲めに畫きたる下畫は殆ど無數なり。彼が警語は良心なり。學生は皆彼を稱するに良心の渾名を以てし、學生の如何にして畫く可きかと問ふ者には、彼卽ち良心の一語を以て答へたり。コロオ曰く、眞は美術の第一義、而して第二義、第三義なりと。彼が如く自然の研究を積みたる者は稀なり。彼が如く自然の眞を捉へむと務めたる者は稀なり。彼が一架の畫幅に向ふや、或は三軍の帥が決戰の場に向ふよりも眞面

目なりき。

嘗て曰く、畫家の先づ畫く所は自然に服從したるの畫なり。所謂畫を成すの期之を次ぐと。コロオの如きも、其初年の作は汲々として自然の一點一畫を愼み、筆細かに意謹みたるものなりき。中年以後、眼光ますます高く、運筆いよいよ老熟するに及びて、其小を措きて其大を攫み、其部分を後にして其全幅を先にし、揮灑甚だ自由にして、眞に波瀾老成の感ありき。彼は多年の經驗を積んで、解剖的に物を畫かむよりも、吾が見る所を畫かむことを務め、所謂部分の事實よりも、事實の一致して生ずる所の結果を畫かむことを務めぬ。渾ての事に於て、老熟に到るまでの間には、人は多く學ぶ所なかる可からず、また忘るゝ所なかる可からず。コロオの如きも、其知る所の瑣事を忘れ、見る所の小部分に瞑目し、除き且抑へ、一個の大畫を纏續する幾個の小畫趣小風景を削り去つて、初めて一幅の畫を成しぬ。彼は先づ解剖的に自然を研究して、終に綜合的に自然を描きしなり。彼が畫の渾熟廣濶なるは精確なる知識に基いて來り、其自由自在なるは事實に忠實なるより來り、其感情の馳騁縱橫なるは道理を離れず繩墨を忘れざるに伴ふ。彼は先づ自然を見るに尤も忠にして尤も自然を描くに忠なりしが故に、尤も自由なる詩的なる風景畫家たるを得たりき。

（六）

現世紀の半は、佛國美術の一段落なりき。似而非なるクラシック風の畫は時代の精神に驅り去られて、畫家の天地頓に廣大となれるは此時なりき。さればクラウド、プーザンの名と共に殆ど記憶に過ぎざりし風景畫も、荷蘭風を帶びたる英國畫の刺戟により、更に溯つて荷蘭の質實朴素なる畫風其ものの刺戟に由り、死せる型式的の桎梏を脫して、一新派一新傾向を生むの運に到りぬ。ヂオルヂ、ミセールの如きは其先驅なりき。次でコロオ、ミルレー、ルウソウ乃至トロヨン、ヂュプル、ダウビニーの諸大家、フォンテンブルウの林邊より雪崩の如く佛國美術界に押出して、各其方面に生面を開き、恰も眉山の三子京に出でて蘇氏の文章天下を風靡したるが如く、昏睡せる美術は俄然覺醒して革新の途上に大濶歩するに到りぬ。諸子は實に佛國の美術をして今日の如く振はしめたる中興の元勳にして、コロオの如きは麒麟閣上一二に名を留むるの人なり。

コロオ嘗て曰く、畫家に四の務あり、第一は形、圖して摸するを得、第二は色、比較輕重を注意して是を得、第三は感情、受け得たる感象より生ずるもの、第四は運筆、以上の三者を總ぶ。余の如きは、自ら思ふ、感情は即ち之を有すと。即ち余が心中聊か詩のあるありて、余をして以て見、且つ見る所を全うするを得せしむ、然れども色は往々にして之を失し、形を圖するの技術は甚だ乏しく、運筆も屢失敗を免れず、是を以て余はいよいよ努力して已まざるなりと。彼は眞に自ら知れり。彼が用ゆる所の色は、今日の或名家が用ゆる色程種類に富まず。彼が畫ける人物は、解剖學上の弱點甚だ少からず。彼が運筆は、一點一畫も鑑賞家を喜ばす程の手際にあらず。然れども此等の缺點あるに關せず、千載永くコロオ在るものは何ぞ。彼は十分に自然を愛し、自然を解し、自然に同情を有し、而して活ける自然を傳ふることを務めたり。自然は生く。一秒時も同じからず。唯一叢の林、然れども朝の林は夕の林にあらず。唯一時の小湖水、然れども彼時の水は此時の水に異り。彼は實に死せる自然の繁瑣なる目錄標本を臚列することを屑しとせずして、務めて此活ける變化ある自然の意、自然の詩、自然の狀態、自然の相を活寫したる者なり。

彼は此相を捉へむが爲めに、其畫題の大形と其不備の調子を見、一團の色と他の色との大關係を見、空の面目大氣の性質光の浮游を察し、空と氣と樹葉の斷えず脈搏顫動する機微を攫まむことを務めぬ。故を以てコロオの畫、草は其硬軟乾濕を知る可く、木は厚薄明暗宜しきを得て、彼が常に誇りし如く小禽も其枝に舞ひ、木の葉の奧の奧までも光線の透徹し得るを見る可く、或は空の靜に遠くして而も浮動生けるが如き、或は白雨の轉うして觸るれば融けむとする、物の上或は下、前若くは後、外乃ち內、凡そコロオの畫、處として大氣と日光との活動包續するを見ざるはなし。されば限りなき杳々の遠きを寫し、深遠澄明、光あり聲無うして而も微顫する青空を寫す。古來未だコロオの右に出づる者あらず。大氣を畫き、活動浮游到らざる處なき日光の性質を畫きたる者またコロオを以て卑隣に推さざるを得ず。

彼は佛蘭西クラシックを排して新畫風の勇將となりしと雖も、醇乎たるクラシックの精神は卽ち之を棄てざりき。彼はポル・ド・アヴレーの窻に神仙と泉水を夢みし時より已に一種理想的詩人なりしと雖も、彼が畫く所は其眼を經たる自然の實を取りたるものなりき。彼が畫には以て希臘羅馬人に見せしむ可し。而して今日の佛人も之を歎美するを禁ずること能はず。彼が用ゆる所の色は、重に褐色灰色淡綠色にして、人目を閃眩するの色を用ゆること稀なり。然れども其用ゆる色の範圍に於ては其妙を極む。調和は單調の謂にあらず。調子は實を枉ぐるの謂にあらず。コロオは尤も此際の比較輕重の研究を積んで超絕なる調子の眼を有しぬ。彼は能く其色を眞にし、其調子を全うす。故にコロオの畫、幅面常に沈着にして輕躁ならず、平和にして唐突ならず。ミルレー、ルウソウ等平生彼と肘を把つて前後を爭ひし大家と雖も、此點に於ては確に躊躇たる所なき能はず。コロオが幾多新進畫家の模範として其嚮導たりしものは、此等の仔細あるが爲めなり。彼は或點に於て實に印象派の第一先登なりき。彼が逝きし以來、戶外の大氣を描き日光を描き日光に於て見る物を描くの術はいよ／＼進步し、新更に奇を加へ、今はコロオの夢想だも及ばざるの點に到らむとするものあり。而も其系統を繹ぬれば、一線繫つてコロオの墳墓上にあるを見る。

（七）

彼は自然の兒、畫毫を握れる詩人なりき。其尤も及ぶ可からざる所は卽ち此處にあり。其尤も愛せらるゝ所以また此處にあり。古來幾多の畫家、彼よりも美なる風景を畫きし者はあり。未だ彼が如く渾身皆詩なるはなかりき。彼は眞に無聲詩人なり。他の描く所多くは色あるの散文、彼卽ち眞個無聲の詩を畫けり。

彼は荷蘭の感化を受けし英國の畫風よりして一點寫實の機を覗ひ、初年の伊太利の遊よりしてクラシック風の粹を吸ひ、荷蘭の畫風よりして質實沈重の風を含み得たり。然れども彼が眞教師は自然なりき。ヲオヅヲルスの如く彼が眞個の畫室は野外にありき。彼は甚だ學校アカデミーを好まず、古大家の畫も手必ず摸寫せずとも眼を以て熟視すれば足ると唱へ、畫家の心を養ひ手眼を養ふには廣大なる自然の學校に若くものなし。一たび此學校に入る者は永く之を忘る可からず、常に此に來らざる可からずと云へり。彼は眞に自然に養はれたるの畫家にして、更に學校畫室の臭味を帶びず。設令其畫風は衣冠の公卿よりも亂頭粗服の野人に似たる所なきにあらずと雖も、却て其中に掩ふ可からず奪ふ可からざるの天趣を帶びたり。詩篇の愛誦せられ、ヲオヅヲルスの愛誦せられ、ボルンスの愛誦せられむ限り、コロオが無聲詩は

永く人間の至寶たらむ。

彼が一千八百六十一年に描きし、オルフィアス朝を迎ふるの圖の如き、何等の清淨、何等の詩趣ぞ。朝陽上らむと欲して、金光見る見る殘夜の雲を追ひ、露を帶ぶるの高樹三兩株恰も眠より醒めて、千萬の細葉朝涼に動いて聲あり。詩人琴を擎げて其下に立つ。靜にして觀來れば、朝光紙上に漲り、清涼の朝氣水の如く浮動するを覺え、靜にして聞けば、木葉の囁き、禽鳥の和鳴も、聞く可きを思ふ。此時に當つて、誰かまた此光に浴し、此氣を吸ひ、此歌を聞き、此天の遠きを望み、此朝の清きに浸されて、オルフィアスと共に、心を空にして朝を迎へざるを得むや。彼が一千八百五十一年に畫きたる、聖セバスチアンの畫の如き、また實に此れと共に雙璧と稱するもの。畫は垂死の聖徒横はりて地にあり、聖尼兩名左右に侍す。地は蔭深き林叢なり。左右には巨大の老樹鬱々森々として聳立す。樹絶ゆる處遠景に小丘を見せ、丘上騎馬武者あり空に映じて立つ。小兒の天使兩人あり、手に殉道の棕櫚葉を執つて、高く垂死の聖徒の上に舞ふ。時は黄昏なり。樹下殆ど昏黒、然れども空に光あり、大氣に香あり、悲壯にして沈鬱、平和にして且莊重、オルフィアス」の畫と共に朝暮相對して眞に聯璧の觀あり。若し其「ネミー湖」「薪拾ひ」「風景と牛馬」を初めとしてフォンテンブルゥの諸景等に到りては、或は悠揚、或は瀟洒、大なるものは長篇の詩の如く、小なるものは短歌の如く、人をして詠歎玩味盡くる所を知らざらしむ。

彼は風景畫題を選むに於ても、午時よりも朝暮の時を愛し、偉大、威力、恐怖、沈痛の如き者よりも悠揚和平なるものを好み、風雨を描き突兀磽确たる荒蓼の景を描かむより寧ろ舒びやかなる風景、和かなる自然の態度を描くを好みぬ。彼が筆力は、骨力を和平に寓し法度を自由の中に寄せたるものにして。彼が畫は決して艶麗纎巧なるものにあらず、寧ろ田舍漢の如く剛壯なるものなりき。而も彼は自ら平和の畫家なりき。彼の使命は人間に向つて靜和の怡樂を分ち、慰藉を與へ、自然の喜びに與らしむるにありき。嘗て曰く、ヂラクルアキス君は猛獸の如し、余の如きは一羽の小禽兒のみと。彼斯の如く謙卑したりと雖も、また自ら抱負なきにあらざりき。常に曰く、諸君がおの／＼自家の短所を養ひ補はむと務むるは好し。然れども何よりも先づ諸君自家の天性に順ひ、諸君自家の眼光に依頼せよ。是ぞ良心また誠實とも云ふものなり、其他は顧るに及ばず、然らば諸君は幸福にして成功するを得む、と。彼は詩情滿身、自然の風景をとつて、自家の詩腸詩眼により、洗練して描き出す詩人的畫家にして、また自ら知り、信ずる所を守つて更に動ぜざる豪傑の士なりき。

（八）

余は眞にコロオの畫を愛す。更に畫家其人を絶愛す。彼が生涯の片影を見て、更に思を騁すれば、二十餘年前彼が白髮を圍繞して、其老いて猶壯なる脣より、金玉の辭を吸ひし巴里の青年諸生を羨まざらむと欲するも能はざるなり。

詩は別才あり。畫も亦別才なしとせず。然れどもヴァチカン殿内の大壁畫は千載永くミケランジェルの雄魂を傳へ、聖母基督の一幅優美にして溫柔なるラファエルの人物を畫面に彫りて今日に到るを思へば、事業は眞に人物の影にして、畫家が造次にも畫く所の一枚一枚は白日世間に自家の肺腑を曝すの懺悔録たるを思はざる能はず。畢竟詩は詩人、畫は實に畫家、豐田嘉禾を結び、澄泉清水を吐く。コロオの畫はコロオを描きしなり。

コロオ逝いて已に二十餘年、彼が白骨は已に土中の灰となるも、彼が世に遺しゝ名畫幾幅は今も猶自然の美を歌ひ、上帝の愛を歌うて、斯の辛き世に於て限りなき平和怡樂の一源泉となり、見る者をして清からしむ。而して彼が八十年の生涯に於て、清淡寡慾、温柔敦厚、快活にして人を愛し、謙和にして物と爭はず、而も世に阿らず、人に求めず、特立獨行一意其信ずる所を守つて動かず。心を虚うして一生を繪畫に供したるの經歴は、後の美術家が細心臨摸す可き絶好の粉本として、幾世の後に殘らむ。

有たぬ者

（「みゝずのたはこと」の「落穗の搔き寄せ」より）

新宿八王子間の電車線路工事が始まつて、大勢の土方が入り込み、村は連日嚴戒令の下にでも住む樣に兢々として居る。

天下無敵の強者と云へば、土方人足は其一であらう。彼等は頂天立地何の恐るゝ所もない赤裸の英雄である、原人である。彼等は元來裸である。何ものも有たない。有たないから失ふことが出來ない。失ふものがないから、彼等は恐るゝことを知らぬ。生存競爭の戰に於て、彼等は常に寄手である。唯進んで撃ち而して取ればよいのである。守ると云ふは、有つ者の事である。守ると云ふは、已に其第一歩に於て敗北である。

世には有たぬ程強い事はない。有たぬ者は、すべてのものを有つのである。彼等には明日は無い、昨日も無い、唯今日がある、刹那がある。彼等は神を恐れない。王者を恐れない。名聞を思はない。彼等は失ふ可き富もない。愛む可き家族も無い。彼等は其れより以下に落つべき何等の位置を有たない。國家か、何ものぞ。法律か、何の關係ぞ。習慣、何の束縛ぞ。彼等は胃の命令と、腕の法律と、皮膚の要求と、舌頭の指揮と、生殖器の催促の外、何の縛らるゝ所がない。彼等は自然力其ものである。一轉してタイタニックを沈めた氷山である。華麗な羅馬の文明を鐵蹄に蹂躙した北狄蠻人である。一切の作爲文明は、彼等の前に灰の如く消えて了ふ。

土を穿ち、土を移し、土を平し、土を積む。彼等は工兵の蟻である。同じ土に仕事をする者でも、農は蚯蚓である。蚯蚓は蟻を恐れる。

有つ者にとつては、有たぬ者程恐ろしい者は無い。土方人足の村で恐れらるゝも尤である。然しながら何ものも有たぬ彼等も、まだ生命と云ふものを有つて居る。彼等は生命を惜む。此れが彼等の弱點である。有たずに強い彼等も、有てば弱くなる虞が有る。世にも恐ろしい者は、其生命さへも惜まぬのみか、如何なる條件をもつて往つても妥協の望がない人々である。彼等は何ものを有つても滿足せぬ。彼等は全宇宙を吾有にしなければ滿足せぬ。寧吾を全宇宙に與へなければ滿足せぬ。其一切を獲む爲めには、有てる一切を捨てて了ふ位は何でもない。耶蘇も佛陀も斯恐ろしい人達である。

（明治四十五年七月十三日）

漁師の娘

（一）

常陸の國霞ヶ浦の南に、浮島と云つて、周圍三里の細長い島がある。

二百あまりの家と云ふ家はずらり西側に並んで、向う岸との間は先づ隅田川位、おゝいと呼べば應と答へて渡守が舟を出す位だが、東側は唯もう山と畠で持切つて、それから向うへは波の上一里半、麻生天王崎の大松も、女扇の端に書く子日の松位にしか見えない。

此浮島の東北の隅の葭蘆茫々と茂つた眞中に、唯ッた一軒、古くから立つて居る小屋がある。此は漁師の萬作が住家だ。夏から冬にかけては、人身よりも高い蘆が茂りに茂つて、何處に家があるとも分からぬが、此あたりを通つて居ると、蘆の中から突然に家鴨の聲が聞えたり、赤黒い網がぬつと頭を出して居たり、または一條の青烟の悠々と空に消えて行くのを見ることがある。併し其れよりも著しいしるしがある。其は此蘆の中から湧いて來る歌の聲――萬作の娘お光が歌ふ歌であつた。

「浮島名物、一に大根、二に鮒鰻、三にお光の歌……」などとよく島の若い者が歌ふ位、實にお光の歌と云つたら此あたりに知らぬ者はない。

秋の夕日が西に入つて、紺色になつた馬掛の鼻から水鳥が二羽三羽すうと金色の空を筑波の方へ飛んで、高濱麻生潮來の方角が一帶に薄紫になつて、十六島の空に片破れ月がしよんぼりと出て、浮島の黄ろく枯れた蘆の根もとに紅色の水ゆら〳〵と流るゝ時分、空より湧いて清い一聲、秋の夕の森とした空氣を破つて、斷續の音波が忽ち高く忽ち低く蘆の一葉々々を震はして、次第々々に霞が浦の水の上に響いて行く時は、ワカサギを漁して戻る島の荒し男も身震ひして櫓をとゞめた。實に此歌こそは浮島の名物であつた。

あゝしかしながら其歌は最早聞かれない。萬作が小屋は今も浮島の蘆の中に立つて居る。併し最早其歌は聞かれない。日の入るまで立ち盡しても、最早其歌は聞かれない。

（二）

十四五年も前の事だ、白髮だらけの正直萬作、其頃はまだ隻手で櫓柄あげおろす五十男で、漁もすれば作も少しはする、稼ぐに追付く貧乏もないが、貧乏は唯子のないのが是れ一つ。若い内は左もなけれど、五十の坂目かけては、是れほど心細いこともなくて、夫婦寢ざめにも此事を語り合ひ、朝夕筑波さまを拜んで居た。或日萬作潮來へ網絲買ひに往つて、晩く歸つて來たが、「それ土產」だと懷から取出したのを見ると、當歲の美しい女の子だ。「どうしたんべい、此孩兒は……此か、此か、此は……婆、筑波さまに御禮申しや」

萬作夫婦、夜は二人がからだを屏風にして隙もる風にもあてぬ。乳がないので、毎日粥を作つて粥汁をのませる。歯が生え出すと、鯉鮒の肉をむしつて、かけかゝつた歯に嚙んでくゝめる。「這へば立て、立てば步めと親ごころ、吾身につもる老を忘れて」萬作夫婦老を忘れてお光を愛する。這ふ。立つ。步む。獨りで箸を持つ。それは〳〵愛らしい。

だがドウも變だ。萬一唖ぢやあるまいか、と萬作夫婦心配した位、口をきかない。其かはり

よウく物を見る、よウく聴いて居る。極小さい時分から自在にかけた薬鑵の湯氣の立ちのぼるを不思議さうに目送る。蝶々の飛ぶのを不思議さうに眺める。花でも草でも摘んでやれば、唯もう何時までも見とれて居る。風、雨、鳥の音、何でも耳引立てて眞から聞き惚れる。大きくなつて舟に乗せると、不思議さうに山を見水を見て居たが、頓て楓のやうな手に水を掬つてはこぼし掬つてはこぼして、少しも恐れる様子がない。或時萬作が何處から買つて來たか、ガラスの球に金魚を入れたのをやると、お光は見て居たが、やがて汀に持ち出して水ながら湖にうつして仕舞つて、洋々として泳いで行く金魚の影を目送つて、手をたゝいた。鳥を非常に愛して、よく諸鳥の鳴聲を覺えて、雀や鷄を見ると、お光は直ぐ両手を羽の様にひろげて、舞ふ眞似をする。水鳥の蘆邊を立つて遙かに筑波の方に飛んで行くを目送つては、半時も一時間も、見えなくなつても、猶空を眺めて居る。

三つ四つの頃から、お光は口をきかぬばかり、よく歌つた。如何にも清い、銀鈴の様な聲をもつて居る。内に居ても、外に居ても、遊んでも、必ず何か歌つて居る。誰が教へたと云ふでもなく、獨りで歌ふ。其歌と云つたら、意味のある様なないやうなものだが、如何にも美しい聲で節面白う歌ふので、聞く者は皆舍てむ。また如何にも奇妙な言をいふ。「おつかあ、あたい蝶々になりたいねえ。まんまたべないで、花を吸つて飛んであるきたいよウ」「とつちやん、あのけむけむはドウして上つて行くの、天に行くの、あたいも行きたいねえ、ヨウあたいをけむ〳〵にしてヨウ」また或冬萬作が網で鴨をとつて來て毛をひくのを見て、「あらとつちやん、トットの衣服をとつてしまふの。トットが寒い〳〵ツて泣くわ」また或時萬作が鯉を漁つて來て料理するのを見て居たが、其右の手にすがつて、「あらとつちやん、いや〳〵あたいもうお魚たべるのはいや」そして其可愛らしい手で鯉の鰭から流れる血汐を拭つて、其落ちた鱗を一枚々々はめにかゝつた。萬作夫婦には日々に生ひたつお光に愍あられて、蓮花と愛しみながら、「妙な子だなウ」「妙な子だよ」斯く語り合つた。

文化の澤は此島村にも及んで、粗末ながら小學校の設けがある。お光八つにもなると路が遠いに伴もないからよせと父親の拒むも聞かないで、往來一里の路を日々辨當さげて通ふ。何處の誰の血を承けたか、口數はきかない方學才すぐれて、暫の間に村長の子と威張る十一二の子供までも追ひ越して教場第一の位を占めた。先生は可愛がる。嫉妬が起る。女連は同盟して、お光を法外にする。然しお光は負けぬ。其内誰かお光坊は拾ひッ子だ、といひ出して、果ては皆が拾ひッ子やあい〳〵と囃し立てる。其夕お光は家に歸るといきなり、母に縋つて、「母ちやん、あたいは拾ひッ兒？」二、母はギョッとしたが取り直し、「あに、拾ひッ兒なもんか。嘘よッ」

明夕お光はまた歸つて來るとすぐ、「母ちやんあたい拾ひッ兒なの」二、拾ひッ兒」「あに」と言ひは言つたものの、其れから毎晩々々思ひ込んでせきかけ〳〵お光が問ふので、母も外で漏れては内で塞いでも詮ないとでも思つたか、或夜お光を膝にかき抱きて、涙ながらに話し聞かした。卽ちお光は七年前木がらしの恐ろしく寒い夜、潮來と牛堀の間の蘆の中に棄てられて、息も切れる程啼いて居たのを、萬作が拾ひ上げて來たので、何のしるしもなかつたから、生の父母は誰か何人か一切分からぬ、七年の間夢にもそれと、知つたでもないから、今は全く此家の女だ、と云ふ事をこま〳〵と話した。お光は默然として聞いて居たが、聞き終つて涙ぐんで仕い

てしまつた。其顔をのぞき込んで「光よ。おいらは最早段々年寄つて來た。是から力にするは手前ばかりぞよ」と云ふと、お光はほろ／＼涙こぼしていきなり婆の頸にかじりついた。

それからは最早如何様に言つても學校には行かない。始終家で遊んで居る。一度、「おつかあ、捨兒ツてドウするの」と聞いたが、母が心を傷むる様子を見てからは、モウ何も聞かぬ。眞の父母のありやなしや、更に聞かぬ。併し口にこそ言はぬが、其小さい心に一點の暗愁立ち去らぬ霧の如く淀んで居るのは、餘所目にも見られる。可哀想にまだ八つ七つのお光は始終捨兒眞の父母など云ふことを、思ふともなく思つて、獨り解かれぬ疑問に心を苦しめて居る。之を知る者は只天道様ばかりだ。

（三）

萬作が住家は前にも言つた通り浮島の東北の隅の一軒家で、眺望にかけては恐らく浮島第一の風景を控へて居る。

後は畑から直ぐ山つゞき。左と右は唯もう茫々たる葭蘆の何段ともなく生ひ茂つて居て、前の方ばかり少し開けて居る。此開けて居る間から溶々として家の戸口まで這入つて來るのが霞が浦で、此開けて居る間を横一文字に遮に限つて居るのが筑波の連山だ。家の前には水の中に杭打つて板をわたし、霜の朝に顔洗ふも、米洗ひ、洗濯、あと仕舞ひ、または夕立に綱あらひ、たゞしは月の夕に泥鍬を洗ふのも、皆此處だ。水の中にはイツモ茶碗のかけ飯粒菜葉などが落ツこちて小魚や水馬が群がつて居る。直ぐ向うの杭には、常に一艘の小舟が筑波とすれすれに繋がれて、其あたりには家鴨が始終ボチャボチャやつて居る。其向うには鰻や鯰を入れた大きな魚籠が半分水に浸つて、もう其向うは亂れ蘆の縱横に生ひ茂つて、雲つく程伸びたのもあれば、半からぼッきと折れたのもあり、葉が浮くやら、根が沈むやら、影が水に映つて、水が影を搖かして、影か形か、形か影か、深いか淺いか、一切分からない。右の方は物干竿が立つて其向うの蘆の少し開けた處に大きな柳の古株があつて、此處に腰をかけると霞が浦は一眼だ、それ水鳥が飛ぶ、白帆が走る、雲が出て筑波が濳む、魚がはねて水に環を畫く。イヤモウ言はれぬ。

此絶景を占領して居る萬作が家は主人だけ無風流だ。歌に詠んでこそ海人が家だが、内はしきりもない一間に爐を切つて、煤だらけな自在をかけ、其處らぢう漁の道具何かで一ぱいだ。家の後は壁一重に直ぐ鷄や鶩の小屋があつて、朝夕は中々かしましい。東が白むと萬作一家三人直ぐと起きて、霞が浦の水掬ひあげて顔を洗つて、日輪さまを拜んで、それから鳥屋を明けて鶩を出してやるのがお光の役で、萬作は時節相應鯉鮒鰻などの釣に出掛けることもあれば、網曳に雇はれて行くこともあつたり、時々はまた鴨を獵りに行くこともあり、さもなければ裏の畑に麥蒔大根作ることもある、薪取り草取り縫針飯炊は婆の役で、お光は時々爺と一處に舟に乘つて行くこともあれば、獨り勝手に遊ぶこともある。夜は萬作は大概寢酒に醉つてしまひ、さもない時は草履を作つたり蓑を織つたり、母は薄暗い行燈のかげでつゞれをさしたり、網の繕をしたりすると、お光は學校已めて後も矢張手習讀書をせつせと勉強する。誰が心をつけるのであらう？

お光の身體は萬作夫婦の手で育つたが、お光の心を育て上げたものは筑波と霞が浦だ。山は天氣豫報、水は魚類の動靜を見る外には、霞が浦が如何あらうと筑波がかうあらうと頓着もない萬作が眼には何も見えぬが、お光の眼には四季刻々うつりかはる景色が如何様に面白く珍ら

しく見えたであらう！　背戸の柳緑の絲をかけそめて枯蘆の間からぽつ〳〵薄紫の芽がふく頃となれば、それ「雪は申さず先づ紫の筑波山」霞ゆゑに遠くなつて名が白霞　霞が浦は一面春霞だ。其間に此處に一つ、彼處に二つ、掌に載る程の白帆が走るともなく霞の奥にかくれ行く其景色は、如何様にゆかしくお光の心に覺えたであらう。それ夏が來る。四面は只もう眞青の蘆だ、蘆だ。世間の風と云ふ風は一つになつて此處に吹くと云ふ位。それ夕立だ。筑波の頭から空を劈いて湖に落込む電びかり〳〵と一筋二すぢ、雷が鳴る、眞黒の雲見る〳〵湖の天に散つて、波吹き立つる冷たい風一陣、戸口の蘆のそよと言ひ切らぬ内に、麻生の方からざあと降り出した白雨横さまに湖の面を走つて、漕ぎぬけうとあせる釣舟の二はい三ばい、瞬く間に引包むかと見るか内に、驚き騒ぐ家鴨の一群を諸共に搔消して、つい鼻先の柳の樹をさつと一刷毛薄墨にぼかしてしまふ。晴るゝ、暮れる、眞黒い森の背ぼうつと東雲に上る夕月、風なきに散る白銀の雫ほたほた。闇は墨畫の蘆に水、ちらり〳〵ほの見えて、其處らぢう螢くさい。お光の心は如何様に涼しく感じたであらう。秋になる。萬頃の蘆一齊にそよいで秋風の辭を歌ふ。蘆の花が咲く。雁が鳴く。時雨が降る。蘆は次第に枯れそめる。頓て限りなき蘆の一葉々々に朝霜白く置いて、磨ぎ澄ました霞が浦の鏡一面、大空につく息白く立ち上る頃は、遠かつた筑波も巨穴の見ゆる位近々と歩み寄つて、夕日の頃は其下に當る拇見崎觀音の石段の數も殆んどよまれる。お光の心は如何様に此清い景色を吸ひ込んだであらう。冬が來る。景色は寂れ行く。鴨の羽音冴えかへつて胸にこたへる。それに雪が降り出すと、空と湖と一かたまりになつて、筑波所か、すぐ先きも見えぬ位ちら〳〵〳〵〳〵降つて降つて降りしきり、櫓の音もしなければ、鳥の聲もせず、唯時々つもる雪の重みに枯蘆のぼき〳〵折れる音ばかりだ。此樣な時には、お光の心は如何樣に淋しく、あはれに感じたであらう。

學校に行かなくなつてからなほ〳〵世間に遠かつて、拾兒と聞いてから萬作夫婦の愛は昔にかはらぬが何となく心に缺陷があるらしく、何か始終思ひ沈んで居る。それを聊か慰むるは歌と筑波山だ。お光は言はぬさきに先づ歌つたと云つても宜い位だ。何を歌ふのか。よく此島で歌ふ俚歌ではない。文句は薩張分からぬが、如何にも深い思ひがあるらしく、誰かをさして訴ふるらしく、銀の様な聲をあげては延ばし、延ばしては収め、誰教ふるともない節奏自然妙に入つて、吾ながら吾聲に聞きほれて、トント夫れで自から慰めて居る樣だ。仕事をするにも歌ふ。遊ぶにも歌ふ。内に居ても外でも歌ふ。が、其尤も好む所は、夕燒の美しい時分、家の前の柳の古株に腰かけて、遙かに筑波の方を眺めながら歌ふのだ。筑波山は幼い時からお光の友であつた。其筈だ、朝起きて顔を洗つて眼をあけると、につこり笑つて、トント「お光坊、おはやう」といはんばかりに此方を向いて居るのは筑波山だ。夕方夜をしまつてまた柳の古株に來て眺めると、トント「お光坊、おやすみ、あすもね」といはぬばかり、此方を向いて居る。何處へ往つても、眼をあげさへすれば、筑波は始終此方を向いて居る。時々は蘆のかげに、「居ない居ない」をするが、少しでも隙があれば、「ばあ、お光坊、此處に居たよ」と云はぬばかりに顔を出す。斯樣に子供の時から始終見馴れて居るので、お光の心には筑波が生きて居るやうに思はれて、幼い時から筑波を見ては、「あら、お山が紫の着物着た。そら、淺黄の着物きた。あら、白い着物着た。あれ、森の中に入つてしまつた」などといふ。冬になつて骨あらはに痩せて見え

ると、「あら、お山が寒さうな」といふ。雪げに見えなくなると、お光は終日悵然として居る。年とる程淋しみが深うなつて、見れば見る程山はいよ〳〵いきて見える。心に悲しい思があつて、榛の根株に腰かけてつく〴〵と眺めて居ると、お光の眼には山が段々近うなつて、微笑んで小手招きするやうに思はれる。「お光坊、何を案じて居るの。何を考へて居るの。眞正のお父さんお母さんに逢ひたいの。何が悲しいの。お泣きでないよ、わたしたちが見て居るよ」といひ顔にぢつと此方を眺めて居る。見れば見るほど、嬉しく、悲しく、戀しく、なつかしく、霞が浦の水の面をさら〳〵と走つてお山に抱きつきたいとお光は思つて、飛ぶ鳥の翼を羨んで居ると、「お案じでないよ、今にね、わたしが達の傍に來られる、それまでは辛抱して御出」と慰める顔に此方を眺める。眺め眺めて日は入つて、戀しい思の筑波も黄昏の奥に入つてしまつても、猶立たないで「お光チョウ、日がくれたに何をしてるヨウ。ヨウ、早ら來う」とかしましく呼ぶ養母の聲が聞ゆるまでは眺め入つて居る。實にお光の眼には、男體女體二つ竝んで水と空の間にゆつたりと立つた筑波が、宛ながらに人のやうで、またさらに二親のやうに思はれて、其ゆつたりとしてやさしく大きく氣高く清い姿がなつかしくて〳〵、其前に歌ふ時は、恰も父母の膝に突伏して餘所での悲しさを思ひ入れ泣くやうな心地がして、歌つて果ては泣いて、それが爲めに心は慰められた。

（四）

霞が浦の秋幾たびか立ちかへつて、漁師の娘お光十四の春を迎へた。木綿縞の古布子垢づいて、髪は打かぶつて居るが、生みの父母の標致も思はれて、名に背かず磨かずも光るほどの美しさ。色鮮を欺いて、亂れて居れど髪つやゝかに、紅梅の脣愛らしく、眉細くして、第一眼は玉とも露とも秋の水とも譬へがたなく澄んで美しい。それに少しも引きつくろふ容子もなく、何時も袖なしの着物で古手拭打かぶつて、洗濯をしたり、飯を焚いたり、時々は爺と一座に漁に出かけたり、それに櫓も小櫂に似合はぬほど達者に漕ぐ。が、天の生せる麗質で、爺と潮來に行つた時、女郎屋の亭主お光を見て、「これは大したものだ、三百兩の代物だ」と云つたこともあつた。島の若者どもが時々其姿を見てチヤホヤするが、お光は頓と氣もつかぬらしい。

秋も次第に老けて、獵の好時節となつた。或日お光は背戸に大根を乾して居ると、「お光チョウお光チョウ」と母の呼ぶするので、庭の方に出て見ると、洋服出立で鐵砲をもつた若い男三四人、それに兎だの鴨だの一ぱい入れた網嚢を舁いだ男が一人。「此は島の者だ」ドヤ〳〵騒いで立つて居る。「お光チョウ、爺が居ねえから、お客さま方を牛堀までお伴して來う」と母が云つた。此は東京あたりの獵組で、後ろの山を越えて來たので、渡を頼むのだと思はれる。手ばしこく舟を用意して、薄べり敷いて客をのせ、すぐ漕ぎ出す。客の一人が媒は遠慮もなく、「一人のコートの裾を牽き、お光を顋で指し、「中々美人だねエ、此處らにや惜しいもんぢやないか」と云ふ。網を擔いで居た男が、ほゝと笑つて、「お光坊、旦那方が賞めらつしやるだに、一つ歌つて御聞かせ申さねエかい、なうお光坊」客の一人、「歌が上手なのかね」「上手つて、此處ら一の名人でさあ。浮島名物と云ふんでさあ」「ほう、そいつは妙だ。おいみいちやん、何ぞ歌つて聞かせぬかい」「其樣だ〳〵、此いつは土産だ。一つ聞きたいな」などと躁しく言ふのを聞かぬ風で一同に顏見られるのを五月蠅さうにお光は顏をそむけて漕ぎながら、時々見るともなく眼を側てて見ると、たちまち眼についた者が

ある。何様此は一行の主とでもいひさうな。たしかに華族の若殿様だ。年頃は二十四五、眉濃く目きりゝとした色白の美男子だ。浅黄天鵞絨の鳥打帽子を被つて、卵色薄羅紗の獵装束を着て、弾帯をきりゝとしめて、薄皮の行縢をはめて、胡坐をかきながら、パイプを軽くつまんでマニラを吹いて居る。うつかり見とれて居ると、其殿様がふつと此方を向いたので、お光は狼狽へて此方へ向いて俯いて櫓を押す拍子に、水に映つた乱髪の姿が見えたので、サッと顔を赤らめた。影も顔を赤めた。フッと氣づいて片手は櫓を押しながら、片手は髪をなでた。客はがやがや騒いで居る。吾事ではあるまいかと耳を傾けて見ると、何左様でもないが、何か胸騒ぎがして人に聞えはしまいかと思ふやうに動悸がうつ。兎角して牛堀について、一行はドヤ／＼上つて行つた。「美人、御苦労だつたね、此は少しだが簪でも買ひなさい」と、一人が紙に幾干か捻つて渡したのを受取つたまゝ、お光は何か本意なささうに跡見送つて、ホッと溜息ついて、軈て棹を返さうとすると、舟の中に白いものが落ちて居る。拾つて見れば、白絹のハンケチで、縁を紫で縫つたものだ、お光は何思つたかそつと頬を摩でて見て、懐にしまつた。

「婆、光あドウしたんだんべい、變だなう」此れは右の事があつて十四五日してから萬作が婆に話した言だ。何さま變た。昔から妙な兒であつたが、近来は殊に變だ。何時となく歌も歌はなくなつた。山も眺めなくなつた。仕事はする、が、氣に入らぬやうす。始終溜息ばかりついて居る。それに今迄に違つて、姿も氣にする。水鏡も見る。両親に對しては前よりも一入言はぬ。何處をあてともなく茫然として溜息をつく。好人の萬作も年寄つては愚痴ッぽく、また邪氣もちつとは出るかして、お光の阿魔め實の親が戀しいので己等を疎略にするのぢやあるめえかと思つたと見え、時々は今迄になく叱つたりすることもあるが、お光は唯默つて聴いて、一言もあらそはぬので、萬作の方から氣の毒になつてやめて仕舞ふ。「光にかぎつて其様な事はありやしねいよ」是は婆が萬作を宥める言だ。

左右する内、二三ケ月經つて、お光十五の二月となつた。お光は爺と舟に乗つて加藤洲に行つて、それから潮来に寄つて、要を達して歸りかゝつて居ると、隣に人待顔に立派な毛氈敷いて煙草盆火鉢まで揃へた舟があつて、軈て一人の男が鐵砲三四挺一處にかついでやつて來たが、其跡からドヤ／＼人の足音して、男女づれが大勢やつて來た。舟の方へ下りて來ると芬と酒の臭がして、眞先に女しかも女郎の肩に手をかけてぐでん／＼に酔つて、赤い眼をとろとろさせて、千鳥足に下りて來るのを見ると、此は驚いた、去年の秋の頃自舟に乗せたことのある、美男子の若殿様た、其若殿様が、正體なく酔つて、舟にのるといきなり大の字に倒れてしまつたので、お光ははつと驚いて、如何にも不思議相に、それから寂しさうに、無念さうに眺めて居たが、爺を催促して、跡の騒ぎや女郎などの、「ドウぞまたオホ、、、」など並葉ないやらしい笑声を聞き捨てて、舟を出してしまつた。「何だよ光、何をすてる？ 其白いものあ。ウン、ハンケチか。何する」お光は答へない。默つてしまつた。

其日歸つてから幾月ぶり思ひ出したやうにお光の歌ふのをきいて、萬作は、「なう婆、お光チョウは變な兒だなう、久しう歌はねえからドウしたんべいと思つたら、ヒョックラ歌ひ出したなう」と言つた。左程お光は久しぶりに歌ひ出して、また久しぶりに柳の根株に腰をかけた。そして久しぶりに筑波の方を眺めた。すると筑波は「久しう逢はなんだね光ちゃん。何様したんだエ。よう歸つてお出だ」と云ひさうに依

然ゆつたりとして氣高く清く眺められた。

（五）

お光今迄にもまして人中に出るを厭がり、男などが戯れ言云ひかけても、ふいと傍を向いてしまふ。其かはり兩親には今迄にもまして孝行をする。口數はきかないが、それは〱細かに心をつける。生みの親の事は忘れたのであらうか。否々萬作夫婦の前では左もないが、獨り居る時は深く〱思案に沈むことがある。其時は直ぐ歌ふ。如何にも悲しさうに歌ふ。歌ふと泣く。泣くと直ぐ柳の根株に行つて筑波を眺める。やゝしばし眺める。筑波は常にお光の心を慰めた。

萬作夫婦も今は六十の上越して、段々體は不自由になつて來るし、分けて萬作は此頃僂麻質で右の腕をいためて時々は久しく仕事を休むこともあり、それに不漁が續くやら網を破くやらで活計も段々困難になつて來るので、果ては今迄になく大酒をのみ出して、醉つては罪もないお光を叱り飛ばすこともある。が、お光は一言もあらがはぬ。やつと十五になるならぬの小腕で、鰻をとつたり、網を張つたり、せつせと働いて居る。其上夜も少し暇さへあると、先生に書いて貰つた手本を出して、習字をする。萬作も時々は叱りとばすものの、斯うやさしくせられては、めそ〱泣き出してお光を抱きしめ、お光も萬作にすがりつきて、何とはなしに親子差向ひて泣くこともある。

其内萬作は僂麻質が段々かうじて、果ては床につくやうになる。生計はます〱困つて來る。八月の中旬となつた。或日萬作が獨人で同じ島の勘太郎といふ男が尋ねて來て、斯いふ話をした。其は潮來一の豪家の子息某、何時かお光を見染め、是非妻にしたい、就ては支度金として五十圓、外に萬作夫婦には月々十圓と網一具やらうとの話だ。萬作は一々頷き勘太郎を返して、直ぐお光を呼んで斯々と話して見ると、お光は情なさそうにぢつと爺の顏を見つめて居たが、頭を掉つて外へ出てしまつた。萬作は腹を立てる。勘太郎は三日にあげず來て催促する。婆は中に居て萬作には「無情え事をしなさんな」と諫める。お光には、「爺もあゝではなかつたが、なう、お光チョウ、あの年でなう、お光チョウ、それにあの病氣でなう、お光チョウ、氣にかけなさんなよ、なうお光チョウ」と慰める。お光は人の見る所でこそ泣きもせぬが、少し暇さへあればすぐ柳の古株に行つて、小聲に歌ひながら、天外遙かに筑波の双峯を眺めて思ひに沈む。

其内九月となつた。月のはじめから暑いやうな寒いやうないやな天氣であつたが、日を逐うて空の模樣怪しうなつて、月の中旬に入ると、それは〱天の戸一時に破れたかと思ふばかり大雨大風となつて、それからといふものは毎日毎日降り明し降りくらし、降つて〱降りぬく程降りつゞける。一湖の水まさりけり五月雨」で、諸處方々の水はドン〱霞が浦に流れ込む。霞が浦の水は段々南に押し出して來る。浮島は其正面に當るからドウもたまらぬ。水は萬作が家の戸口を越した。やがて床につかへる。樽を並べて戸板を敷いて居ても、モウ其内水はドン〱押して來て、家の内では堪へ切れぬ。萬作も少しは痛も宜いから、强めて起きて、親子三人大骨折して後の山にやう〱雨露を凌ぐばかりの假小屋を建てて其處に住んだ。斯様からだをつかつたせゐか、其晩から萬作が腕は非常に痛み出して、少し熱さへ出て渇を覺ゆると見え、頻りに燒酎が飲みたい〱とくりかへしていふ。譫言のやうにいふ。燒酎！　燒酎！　此水に燒酎！　島には到底ない。一里半の水を押切つて麻生まで行かなければならない。お光は藁の上に

坐つて、爺の腕を靜かに摩りながら、熱に浮かされて赤みばしつた爺の眼を見、其白髮頭から其皺だらけの額から大粒の汗の湧くを見、其脣のいら〳〵乾くを見て居たが、そつと腕を置いて、そこへあつた一升德利をとつて、外へ出た。

雨は已んで、空は星だらけだ。月も出て居る。下の方を見ると、吾家も半ば水に浸つて、繫いだ舟は背戸の柳の幹の半に浮いて居る。手を翳して向うを見ると、水漫々として飛ぶ鳥の影もなく、濁浪渦まいて流れ行くのが月下に見える。麻生の方は眼に見えぬほど沈んで、大海を隔てたやうだ。遙に北の方を眺むれば、常見る岸が浦僅かに浮き上つたやうに、水茫々として遙に天腹を涵し、見ゆる限りの陸影皆小く沈んで、唯遙に筑波山の月影に青く見えるばかりだ。更に南の方を見ると、北利根、横利根、新利根の水一處に落ち合つて、十六島は何處に行つたか影も見えぬ。唯水勢滔々瀏々として凄じく南の方に押して行くのが荒海のやうに聞える。

「婆さん、お光あ何してる」「ホンに、お光あ何してるだんべい」飯焚いて居た嫗はフッと氣づいて其まゝ聲を立てて、「お光チョウ〳〵」と呼んだが返事がない。假屋のむしろ戸明けて半分頭を出し見まはしながら、「お光チョウ〳〵」と叫んで見ても返事がない。僅かに狼狽へて走り出で下を見まはすと、繫いであつた舟の影もない。若しやと思つて伸びあがつて手をかざし、月の光にすかして見ると、成程一艘の小舟が荒波を押切つて麻生の方へ向つて居る。耳をすますとゴオ〳〵鳴りどよむ水音の間々にかすかに櫓の音が聞える。「爺さんおたが —— お光チョウ、お光チョウイ」のび上つて叫べば、萬作もころげ出でて木にすがり泣聲あげて、「お光チョウイ、おー光チョウイ」と叫んで見ても、舟は次第次第に陸を離れて、果ては櫓の音も聞えぬ。「お光チョウイ。内のお光チョウイ」老夫婦が力の限り根限り叫ぶ聲は徒らに空明に散つてしまつて、あとはたゞ渺々たる霞が浦の水渦まいて流れるばかり。

(六)

大水は久しく湛へて終に落ちた。萬作夫婦も假小屋を出て、水餘の家に歸つた。併しお光は歸つて來ない。歸らぬ、歸らぬ、今日までもまだ歸らぬ。萬作夫婦は朝夕淚に暮れて、茶斷ち鹽斷して、いつもお光が腰かけた柳の古根にしめなはかけて筑波さまあらゆる神さまに願をかけても、一向に歸つて來ぬ。歸つて來たのは、唯萬作が見覺えある德利の如何して流れついたか浮島の南端に流れよつたばかりだ。

島の者は色々に評議を凝らした。大方は舟が覆つたのだと云ふ說であつたが、中には何處かへ流れついて其まゝ歸つて來ないのだらうと云ふ者もあつた。尤も此は其後の話だが、島の次郞八と云ふ漁師が、或朧月の夜晚くワカサギを漁して歸る時、幽かに聞いた歌の聲が、全くお光の聲の樣で、耳を澄して聞くといよ〳〵夫れに違ひない樣だから、次郞八は聲をしるべに舟を漕いで行くと、何處まで行つても茫々とした朧月夜の湖で、人の影もない。よく〳〵聞くと、其歌ふ聲が水の底にあるやうでもあり、空にあるやうでもあつて稍久しく迷つて居たが、終に思ひ切つて舟を返すと、其歌の聲は遠くなり近くなり久しい間耳に響いて居たと云ふことであつた。併し其は水鳥の聲だと云ふ者もあつた。

芳洲淺金石、清香入杏寒、黃梧栽碧葉、白芷勁芳馨、
寒水仙明滿、芳氣透潮庭、幽香人不見、江上數峯青、

夏の夜かたり

（一）

月影の白々とさし込む二階の縁端に、吾は横ころび、友は欄干に倚りかゝり、涼しき風に吹かれつゝ語りてありき。

話頭は人の性格なりき。

「君は然云へど、一概には云ひ難し。蛇の如く、踏み殺しても容易に死なぬ者あれば、菫の花にも似て、いたはり育てても稍もすれば萎れ行く人もあり。光と蔭とある如く人にも是れあり。訝しと思ひ玉はゞ、松井正夫の話を聞き給へ」

斯く云ひつゝ、友はやをら容をあらためたり。

軒近く茂りし明竹の藪より、隣家の燈漏れて、琴の音優に聞ゆ。

（二）

「松井正夫は天主教傳道師なりき。

傳道師の相場も近頃はいたく下りて、外人の扶助受けし者の中には甘んじて、靴の紐とく者、其パンを食つて其管に唾はく者、多かり。余は松井に於て珍らしき例外を見ぬ。

色淺黑く、髪滴るばかり黑く、眉秀でて眼少し曇り、頬やゝ殺けて唇乾き、笑へば眼きらきらと輝きて右の頬に靨見え、眞面目になれば唇屹と結びて眉の間に微かなる一線を描く、中脊の一丗年を心に描き玉へ。君は中らざるも遠からざる松井を見るを得む。貴公子の風ありと思ふも、無理ならず。素性を問へば彼は藩士にて五千石取りける仁の子なりしなり。父は維新の革命に失脚して、提灯張と迄成り下り、十六の孤兒と多病の寡婦とを殘して、卒中に斃れぬ。親戚は無く、情ある他人もなくて、二人は新しき位牌の前に顔見合はして居たりしを、思ひがけなく築地の天主教教師に救はれて、松井が神學校に入るやうになりしは、七年前の事なりき。

余が初めて相識りし頃は彼まさに卒業し、新に教師兼傳道師となりて、老いたる母と唯二人築地に住みたり。夜學校をも開きつ。此は教師に扶助せられし學資を返濟せむ爲めと言ひき。彼は確かに武士の子なり。其風采に、擧動に、恐ろしく律義なるに、二鞘の風は見えき。左れど彼は、傳道師よりも寧ろ詩人に近き程、多感にして情深かりき。彼が才學人物は人少なき教會に重きをなしぬ。信徒は彼を將來の領袖と仰ぎ、教師は子の如く彼を愛しぬ。慾には今少し氣を張らせ、意地を持たせたきのみ。彼は神經質にして、あまり小心なりき。

彼はしばしば鬱しぬ。鬱しては唯何となく惘々として限りなく空想の無底洞に落ちて行くなり。彼自ら知りぬ。『また例のが起りはせずや』と云へば、彼は鬱しつゝ笑ふを禁じ得ざりき。

彼は常に云ひぬ。「余の如きは間斷なく働かざる可からず、間あれば即ち鬱す」と。彼が心は實に美なりき。然れど其美しきは、日光の美しきよりも、寧ろ星の夜なりき。然れど彼は相識る者をして忘るゝ能はざらしむる或ものを有せり。彼を識る者は皆彼を愛しぬ。

彼は渾身の愛をあげて、其母に置きぬ。母は實に子に由つて生き、子は母に由つて生きたり。

然ればば母は其子の學校より引つゞいて新しき務に就き暫らくも安息の暇なき爲めいたく腦

をいためて瘦せ行くを憂へつ。同じ思ひの教師も松井が健康を氣遣ひて、強ひて彼を保養かたがた夏期傳道の爲めに相州某郡某氏の家に遣りぬ。
此は今を去る五年前、松井が二十三歳の初夏なりき」

（三）

此時風そよ／＼と明竹の藪を鳴らして、友の片袖白き扇の如く飜へりつ。
一余が話は此よりなり。
相州某郡、停車場より二里も離れて、三面山、一方は海に向ひたる、農漁打まぜ二百とは上らぬ小村に旦那と唱へられて、一段高き屋敷の後は百合咲く夏山緑を滴らし、落つる清水筧を傳うて泉水に鳴り、前は松塢蘇鐵梅など青々と敷きたる砂の白きに映り、間々に伊豆の遠山、白帆浮べし相模灘の碧を透かしたる涼しき住居は、松井が安息の場所なりき。『此頃は朝五時に起き、聖書を讀み、其後は或は山に上り、或は海に釣り、或は眠り、或は詩卷を讀み、夜は大抵家族と浮世話するのみ、氣樂なる事共に候』是れ彼が書中の一節なり。
斯くて日又日は事無く過ぎぬ……家孃の歸省迄は……。
家孃を說く前に家族を語る可きなれど、余は唯松井の書によりて、主人は五十あまり、ゆつたりと肥えし男、主婦は四十二三、昔氣質の女、此外には老いて健やかなる祖母と、十ばかりの男の兒あるを知るのみ。家孃名はきみ子、如何なる緣故にてか東京築地の天主教女學校に學び、松井と同じ教會に屬して、折々松井に聖書の講義聞きしことあり。十七にして、小柄なりき。
其は松井が此家に來りて、二週間目の事なりき。或朝松井は晩く起きて雨戸を開けしに、朝日きらきらと眼を射て、露けき庭樹に鳥の音流れぬ。朝風の心地よきに、何思ふともなく緣に佇みしに、忽ち木履の音して、椎の下枝の露はらはらと墜つる中より十六七の少女日光の中に立ち出でつ。松井を見てにつこり打笑み、手に持ちし二通の書翰を緣にさし置きたり。呆氣にとられし松井が碌々禮も言ひ果てぬに、『姉さん姉さん』と聲を先きに十ばかりの小兒走せ來り、『姉さん、裏に行つて見ようや』と少女の袂捉へて引立て行きぬ。孃は昨夜晩く歸りしなるを、松井は離れに起臥するなれば、知らぬなりけり。
松井が機械的に書を取り上げて、後見送りし時は、太き緖の單衣ちら／＼木の間に見え隱れつ」

（四）

一倦鳥故林に歸り、胡蝶春の野に舞ふ。其よりも樂しきは遊子の歸鄕なり。出づる時猶ほ青しかりし桃の已に實を結びて梢は軒を過ぎ、行く時處女なりし猶兒は已に子孫を率ゐて膝に上るなど、見るもの皆あらたまりて、而も變らざるは人の愛なり。あゝ此愛に浴する者は樂しい哉。
きみ子は今其樂を享けぬ。
家は孃の歸りて、賑やかになりぬ。愛女の歸を祝はむと、主人は自から鮮魚を濱に求め、稚兒は吾一人の姉の如く附纏ひて離れず。祖母と母とは吾孫吾子ながらも珍客の如く、ものも得言はで傍にのみ見とれつ。

「年を經て旅より歸るいとし子の
　ほゝゑむ顏のめづらしきかな」

土臭く磯臭き村の者共も前後に押懸けて、濁聲高く喜を述べ、『ほゝ、大きくならつしやりましたなう』と淚流す老婆もありき。
さらぬだに常に打笑めるきみ子は、自から持する能はざる迄に樂しくなりぬ。花は笑ひて、香を

りぬ、あたりのものゝ袂も透ずる迄に。

日を經て孃は次第に吾家に落つきぬ。彼女の居間には芭蕉の下に机を据ゑて、聖書學校敎科書など綺麗に積み載せ、一輪瓶に撫子の花一枝插したれ共、彼女は朝夕の祈禱の外は此處にあらず。多くは茶の間に出でて、母と針箱並べて裁縫をなし、或は毛絲編みつゝ、母の爲めに新聞を讀み、左もなければ庖厨に立働き、或時は幼弟の課業を復習し、父の暑に中てられし時は小ナイチンゲールとなり、單調なる日々の生涯に限りなき趣味を添へぬ。都にて看し時、松井は氣もつかざりき。今や目を側てぬ。

孃の歸りし後數日、殊に暑かりし日の夕、松井は獨り海邊に出でて、天涯に一點淋しく光れる星を仰ぎ、深く身世の孤なるに感じつゝ悄然として人なき渚を往來し、歸りし時は、已に九時近かりき。松井が部屋は離れなれば、母屋を通らで庭傳ひに赴く可し。眞黑き庭樹の間々に流るゝ如き銀河を仰ぎつゝ、茶の間の前ちかく歸り來しに、忽ち木の間もる一道の光に眼を射られ、同時に女の聲して『松井』と呼ぶに彼は立どまりぬ。立どまりて光さす方を見れば、八疊の間の雨戸は猶閉てず、緣側近くランプ据ゑて、差向ひて縫物するは當家の夫人ときみ子なり。

先刻より母子の間に話のつゞき來れるにや、今しも夫人は針もつ手をとゞめ、『其樣かい。本當にしつかりしたやさしい方と思つて居たが、其樣におつ母さんによくなさるのかい。今頃の若い方には本當に感心な方だねエ……』あとは俯きて殘絨を噛む口の内に含み去られぬ。

松井は胸轟かして、木の間越しに覗きぬ。恰も其時、孃は右の指なる針尖を綠の鬢にさとひきて顏をあげたり。唯此一刹那、光は孃の眼に眞珠の如き露の浮べるを照し出しぬ。

松井は其夜深くる迄寢ねざりき。光は蔭を憐れみ、蔭は光を慕ふ。余は彼等が愛に落ちたるを怪まず。

七月の初、他人として逢ひし二人は、八月の初には既に相約せるの情人なりき」

（五）

月影は今水の如く二階に流れ込みぬ。隣の琴は間の手に入りて、嘈々として面白くさゞめきつ。

「二人は今戀の夢に入りぬ。彼等は何も感ぜず、思はず、唯自家の愛を宇宙として、其中に詩の如き生活をなしたり。

あゝ彼等は如何に其日を送りしやらむ。

或時は、夕日西に入りて沖の白帆の一つ〳〵黃昏れ行く夕暮の濱邊に坐して、語盡き默極まつておの〳〵無言の哀想に耽りしこともあらむ。

或はまた十日あまりの月前山にさし出でて、一庭の樹木青く光る夜に、檐に吊せし岐阜提灯の幽然として光なき迄月のさし込む座敷の緣近く籐莚敷き、主人は浴衣の胸くつろげて團扇片手に高談し、主婦は何時の間にかうたゝ寢したる稚兒の方を時々顧みて團扇もて蚊を逐ひつゝ折々話の間に笑聲を挾じ、孃は父の談客の顏かたみがはりに睇りつゝ、世間話に夜深す心置なき團欒に、松井は他郷の客なるを忘れしこともありつらむ。

或はまた夏の眞晝の空蒼々と一點の雲だもなく、蟬槐に啼きつかれて、松にからみし凌霄花のそよりともせぬ午過ぎ、家の者は皆午睡の夢に入りて泉水の遣水獨り醒めたる時、愛は睡らで語るに言なく、松井は讀むともなく詩卷を繙げ、孃は裁縫しつゝ時々笑みては竊かに吐息つくこともありつらむ。

或朝なりき、松井はきみ子姉妹と後の山に上りぬ。幾曲りせし小徑を上り果つれば、爽らなる巓に出でつ。松青々と露けき山を見越して、

朝日まばゆき相模灘に白帆三つ四つ、伊豆の連山薄く遠見の果を限りぬ。忽ち幼兒は叫びぬ。

「あら、姉さん、先生、彼處に百合の花が一つ咲いてゐますよ』

『おゝ珍らしいこと、まだ百合が咲いて！』

指す方を見れば夏草のふさ〳〵と茂りし中に唯一つ白百合の花咲きたり。

松井は裾引あげ、露蹴散らしつゝ、草踏み分けて、百合を手折りぬ。今朝咲き出でし花一輪、明日開く可き蕾一個、白うして清く、露にそぼちて香は滴るばかりなり。松井はあたりに咲きし撫子の花諸共に折りて來りぬ。

きみ子は笑みて見つゝありしが、松井がいたく露に濡れたるを見て、袂にしたる白き手巾出して與へつ。松井が手渡す撫子を受けとりて愛らしげに接吻しつゝ、露も拂はで緑の鬢に插み、手をのばして百合花を取らむとしぬ。

松井は笑ひて與へざりき。

『おほゝ。後生ですから頂戴な』

松井は頭を掉りぬ。

「其樣な事仰有らないで、何卒頂戴な』

「たゞは上げられません」

きみ子は暫らく打案じ、「宜しうムいます」

「屹度ですよ』

『エ、屹度』

花はきみ子の手に渡りつ。莖細うして頭重き花なれば、歩むに連れてゆら〳〵と頷きぬ。其午後松井は母屋に遊びに行きて、きみ子が何か纏繍しつゝあるを見、窺見むとせしに、きみ子は遽てて之を隱しつ。『いけませんよ。此にね、あの御禮ですの。おほゝ』

或夕なりき。松井はきみ子の母きみ子等と母屋の庭に置床出して涼みてありき。日暮れ前に過ぎし夕立の名殘處々に小さき溜りをなして、三つ四つ星影之に映り、眞黑き前栽の木の雫風なきにはら〳〵と落ちて、涼しさは手に掬ぶばかりなりき。

彼等は星を語りつ。松井は空打仰ぎて、「僕は毎も其樣思ふです、星を見ると實に其樣思ふですね。人の靈も恰ど星の樣で、此廣い宇宙の中で、何千萬年に唯一度、星と星と行き逢ふことがあつて、其れが一度行逢ふと最早未來永劫またと逢ふことは出來ない。實に果敢ないぢやありませんか』

『おほゝ、牽牛織女などは毎年逢ふぢやムいませんか』きみ子の母は打笑ひぬ。

前栽の黑きに、沖の光はほのかに漏れて、二つ三つ漁火の影かすかなり。

松井はつく〴〵打眺め、「僕は彼漁火を見る度に思ひますよ、彼火が海の上に其處に一つ此處に二つちら〳〵する所は、實に人間の亡靈が迷ひに迷つて解脫の道を求めかねて、死の海にふらふらさまよふ樣ぢやありませんか」

きみ子は身震ひて、『おゝいやだ』嬢の眼には涙ありき。

あゝ一日も千年の如く、千年も一日の如き愛人の生涯、余如何ぞ說かむ。

松井は初戀の夢に醉ひて、傳道の事も疎ずるとはなく、おのづから疎になり行きたり」

（六）

一君は曾て彼光と蔭の戰を見しことありや。曇り勝なる秋の日の午後、試みに立つて庭の面を眺め見よ。今一庭明々として、塵に遊ぶ蚍蟻も歴々として喜色あるなり。忽ちものあり、遙かに寄せ來る。吾靈之を感じて先づ沈むを覺ゆ。見よ其ものは家を包み樹を被ひ、寸々光の領地を蠶食し、音もかもなく寄せ來る。闇然として來つて光を追ひ、倏然として侵し進む。眼を舉ぐれば一庭色死して、宛も微笑去れる後の垂死の顏の如し。已にして光また盛り返し、已にして蔭また侵し來る。或人の氣分に於

ては、往々にして、此光と蔭の干滿を見ることあるなり。

余は松井の話に返らざる可からず。八月も中過ぎて、蜩の聲に秋の音を含む頃となりぬ。一夕松井は母屋に來りて、折柄主人は留守なりければ、主婦きみ子と諸共に色々の物語をなしぬ。話の内に雨さつと降り出して、木の葉を滴る音瀧の如く、ランプの火はたゝき、冷たきしぶきは縁に上りぬ。松井もきみ子も暫し愁然として語なかりき。主婦は口を開きぬ。『ひどい雨ですこと。最早夏も此で仕舞でせうよ』

主婦は今日着いたる新聞を讀みつ。二人は語なく簷より滴る雨だれを眺めてありき。忽ち夫人は『まあ』と云つて新聞を差措きぬ。『何でムいます？何ですか』と二人は齊しく主婦の方を打見たり。『斯様なんですよ』と冒頭を置きて夫人は新聞に載せありし一項を物語りぬ。

其次第は、東京某の女學校に外國の學士號冠れる教師某と云へる人ありて、平素温厚方正の評判ある人なりしが、如何なる天魔の魅入りけむ、年猶少き可憐の一生徒を誘惑し、終に父母の許もなく竊に相約したりしに、父母は夢にも知らず幸ひなる良縁の口あればとて娘に其意を滿せしより忽ち彼密約の事しかのみか身にすゝぎ難き恥の藥を帶びたることさへ露はれ、一家失望の極に陷れるに、其學士某は罪に罪を重ねて其娘を棄て去り、今は日々に沈み行く其一人娘を父母は打まもりて涙にくるゝと云ふ忌々しき物語を、種子に餓ゆる雜報記者が尾鰭をつけて面白をかしく書きなしたるなりけり。斯く話し來りて、夫人は恰も吾上の事の如く涙ぐみ、『ホンニ人の親の心も知らず、情ない事をする奴もあるものですねえ』と一句論賛的に插みて其話を結びぬ。

松井は匆々に辭して吾居間に歸れり。何心なく夫人の放てる一句は宛ながら末日審判の喇叭の如く松井が耳元に響き渡り、愛の催眠術に寢入りし知覺良心は愕然として醒め來り、彼は眼を開きてつら〳〵己が位置を考へはじめたり。否彼は未だ考へざるに己が萬々誤れるを痛感したりしなり。

眠なき夜も明けて渠は例よりも疾く起き上り、朝の窓に向ひて聖經を讀み祈禱をなしはじめたり。然れども昨日まで只管愛の歌のみ歌へる如く思ひし聖經の文句は、今や鐵の如く冷やかに吾心を刺す樣に思はれ、すゝまぬ氣をふりおこして祈禱をなすも唇のみ徒らに動きて心に狂想亂戰し、心の一隅に聲ありて爾は背德の上に僞善の罪を重ぬと囁くものあるが如く、聖經を掩ひ祈禱を絕ちて立ちて庭に向ひぬ。然れど心内一點の曇りは心外無邊の光明界を色もなく抹し盡せり。折しも孃は昨夜遲く着したりとて一封の書簡を齎らし來りぬ。

『おや、如何なさいましたの。大變御顏色が惡うムいますよ』

『なに、少し頭痛がするものですから』

『其はいけませんねエ。あまり御勉強なすつたのでせう。あ、ほんに此御手紙が』

渡す手紙を打かへせば、母を託し置きし教師よりの書狀なり。讀めば見る〳〵松井が顏は變りぬ。

きみ子は心配顏に松井を見て『如何なさいましたの？』

『母が容態が惡いさうです』と渡す手紙を讀めば、寢冷の風邪がからじて少し熱が出でしといふ手紙なり。

『此ぢや今から直ぐ立たなけりやなりません』

『あら、直ぐ御立ちなさるの、御母さんも御風と書いてありますから、其樣に御心配なさる事もムいますまい。それにあれも今日中には出來ますから』

『其樣ですねエ』
松井は浮かぬ色ながら今一日逗留する事に決しぬ。
きみ子の家にては松井が明朝は出立す可しと云ふ事にて、今日は別れの馳走す可しと立騷ぎたりしに、日暮れ方になりて別配達の電信松井宛に來りぬ。其は『母危篤直グ歸レ』との凶報なりき。
此報に接したる松井は俄かに身も世もあられぬ心地して、唯此終列車を失はじと、荷物仕舞もそこ〳〵、告別もそこ〳〵、きみ子が何か紙に包みて與へしものを懷中する間もなく、眞驀地に車を走らしぬ。
あゝ已に晩かりしなり。
松井が息切つて、夜の十時、新橋より母の寓する教師の宅に着きし時は母は已に亡骸なりき。教師は涙を拂つて、『今一時間早かつたら間に合つたもの。松井君、お母さんは正夫々々と死ぬる迄言ひつゞけたよ』
松井は其場に昏倒したり——
語りて此處に到る時、友は危坐しつ、吾も覺えず起き上りぬ。
月はをり〳〵雲に入りて、物語る友の顏、忽ち見え忽ち隱れつ。

（七）

一松井が漸く吾に復りしは、三日の後なりき。慈愛深き教師は彼に代りて、松井が母の葬儀を營みしなり。二月も海邊に休養せし彼、定めて健勝になりつらむと思ひて、弔儀がてらに訪ね行きし余は松井が顏容の夏前よりも衰へたるに驚きたり。
是より後幾度土猶乾かざる新墳のほとりに跪ける青春の人を見しか、幾宵の眠なき夜を過ごしゝ人ありしか。其は云はでもありなむ。世に唯一人の母を喪ひし彼が心、然ある可きは道理なり。然れど彼をして一倍此打擊を感ぜしめたるものあり。其は彼が發足を後らし、彼をして母の死に目に遭はざるの不孝者たらしめし或ものなり。
彼が初めて之を見しは、漸く正氣に復りて母の墓に詣でむと衣更へし時なりき。袖をふるへば落つるものあり。紙に包みたるものなりき。何心なく開けば、忽ちレースの枝折あらはれつ。枝折には左も見事に百合花を繍ひたり。枝折の隅に小さき英の花文字にてMの字Kの字を組み合はしたり。Mは何ぞ、正夫の頭文字。Kは何ぞ、きみの頭文字。松井は微笑しぬ。微笑は消えて面は闇くなりぬ。
あゝ樂しき夏は夢なりき。
明くる月の初、夏休中諸方に道を傳へし人々打寄りて其結果を報道することあり。松井も其席に列なりぬ。靜冷なる夜は四圍の窓に迫り來りて、中には正面なる聖象の前にともせる二挺の大蠟燭晃々として輝き渡り、壁に掛け列ねたる諸聖徒の畫像宛ら生きて上より睨むるが如く、曳くばかり垂れし黒衣着たる教師が儼然として聖壇の前に立てる、捧ぐる祈の深々として堂に溢れる、肅畏の念は轉た一座の心に滿ちぬ。
松井は初めより頭垂れて居たりしが、或瞬間に不圖眼は擧がりて斜めに其前面の壁に掛けたる最後の晩餐の圖に注けり。圖は十一門徒基督を繞りて食卓に倚り、基督に對せる側に他の一門徒少しく顏をそむけて坐し、基督の眼は憐愍の色溢るゝばかり此門徒の上に注げるの狀を寫せり。此一門徒は即ち基督の弟子にして、基督を賣りたるユダなりき。松井が偶然此圖を見、ユダの暗黑なる顏を見て、愕然として眼を轉じたるを知る者あらざりき。已にして歌止み、禮拜の式濟み、傳道の報告次第にはじまりて松井の番となれり。沈想より驚かされて立上りたる松井が顏色の眞蒼さに一座驚きぬ。寂々とし

て腰掛の軋る音もなく燈火の光のみ晃々として照り渡りたる此席上に、松井は立ちたるまゝ口を噤んでありしが、忽ち胸に手を置き、病ありと斷るより早く、蹶然席を離れて會堂を急ぎ出でたり。

彼は三日影を隱しぬ。

三日を過ぐるの後、色蒼ざめし一個の青年、煉瓦の垣に青蔦這へる築地海岸某女學舍の門を入り、一個の少女を請うて共に應接間に入り、久うして辭して出でたり。迎へて入りし時少女はいそ〳〵として喜び面に溢れしが、送りて石階のほとりに出でたる時は滿眼たゞ涙なりき。

あゝ松井はきみ子と斷てるなり。

何故に斷てる？ 母病める時、彼は戀に浮かれき。母死する時、彼は戀の爲めに歸期を緩うしき。彼は傳道の爲めに行きぬ、然して戀に夏を送りぬ。彼は其家に宿しぬ、然して彼は其家の愛女を戀に導きぬ。傳道師の信任を賣りし者は誰。淸白なる孃を戀の夢に陷せし者は誰。餘人にありては兎も角も、彼松井の身にありては卽ち斷たざるを得ず。

彼は卽ちきみ子と斷ちぬ。更に書をきみ子の父母に送りて、陳謝しぬ。彼は已に三日食を斷つて天に謝しぬ。彼は今教師を初め重なる教會員の家を廻りて、其罪を謝しぬ。彼は父母の墓に謝しぬ。

嬢と斷ち、謝すところに謝して彼は重荷を卸せり。然れども重荷と共に彼は望をも卸し了りしなり。

松井が懺悔は同情を以て迎へられぬ。或は松井が良心の神經あまりに鋭なりと云ひ、或は此れ過失なり罪にはあらずと云ひ、教師も亦已に悔いたる罪は已に赦されたる罪なり、若し自から吾罪の追念の中に逡巡して志望を脱却し元氣を消磨するあらば天に對し地に對し人に對し自己に對し其こそ實に罪に罪を重ぬるなれと警め、余の如きは不束なる心に松井を暗鬱より救ひ出す者只渠少女にして能くす可し、松井が約を解きたるは是に似て非なりと思ひつめ、爲めに其間を彌縫し進んできみ子の兩親に計る所あらむと欲したりき。然れども松井は鳩の其卵子の上に坐するが如く只管自己の罪の中に留まりて動かず、教師の勸戒は悉ろに默受して、余が意見は悉ろに拒絶したり。然のみか渠は憚る所ありとて會堂に於て勉むる職務を辭し、人に諭すの價値なしとて日曜の聖書解釋をも辭し、會堂に出づるも後班に坐して默して祈り默して聽けり。ア、渠は空氣漏るゝ氣球の如く日に日に收縮し行かむとするなり。

あゝ松井は既にきみ子と約を斷てり。其父母に陳謝せり。師友に懺悔せり。天に向つて悔悟せり。自から責めて其位置を下れり。心内乾々淨々何の殘る所かあらむ。新生涯は方に此より始まる可きなり。而して彼は日々に沈淪し行けり。是れ何の故ぞや。

君は獨り某氏の筆に上れる彼岐阜の刺客の事を讀まずや。何が故に渠は已に赦に遭ひて再び世に出で、已に罪を償て其肉は吾刃を吞みたるの人に謝し、已に北海道に開墾に從事するの志を興せるの後に於て、乃ちあへて身を北海の波に投じたるか。是實に或人或性分にありては、一の事に逢ひ一の事を果せるの後、心内滿す可からざるの空間を生じ、恰も一芽已に折れて新芽再び發するの折なきが如く、一泉忽ち竭きて新泉再び湧くの折なきが如く、幽かなる意思は彼を無底坑外に擡げむとするも、幽鬼の手は右より左より引いて之を暗黒洞中に沒せしむるが故にはあらざるか。北海に投じたるの相原も、火燼え氣滅して消ゆるを待てる影の如く世にありし松井も、其心は一なるのみ。

一日又一日、松井は秋の蝶の如く日に〳〵細り行きぬ」

（八）

琴の音は今絶えつ。風もはたと已み、空には一團の眞黒き雲湧き出で、月は刻々此雲に向ひて、薄き紗の如き雲の多島海を今明らかに今闇く走り行く。友は悄然として語をつゞけぬ。

一秋は來ぬ。

松井は舊職に復らむともせず。余輩は彼を事業交際の旋渦に引き出さむとするも、冷やかに笑ひて聽き容れず。秋晴に乘じては飄然郊外に出でて夢の如く空行く孤雲の影を目送り、秋雨に籠りては幾時間も机に倚りかゝりて考ふるともなく庭前の秋草雨に點頭くさまを眺め入りぬ。渠は世より幾許程の距離に住めるにや。曾て熱心せる傳道事業も、曾て從事せし詩卷も、皆捨てて去りて、小形の聖書のみ常に其身邊に隨へり。ア、其聖書には一個の枝折今も挿みあり、レースに百合の花縫ひたる枝折今も挿みあり。此卷を開きて枝折を見る毎に、恰も今や世を去らむとする人の胸中に電光一閃青春の昔の事ありありと湧き出づる瞬間の如く、松井が眼には一點の光輝き來れり。而も其は唯瞬間の光、頓て秋の夕日の影の如くしぼみぬ。ア浮世に離れて浮世の中を歩める彼が心には、甍波よりもしげき千有餘街宛ながら枯薄秋風に吟ずる野原の如く、雲よりも多き車馬人衆渾てまぼろしの如く、己は恰も無邊の宇宙に抛り放たれたる星の彼方に千里此方に萬里幽然としてさまよふ如く思はれつらむ。されど此多事なるうき世は鬱する一子を顧みるの暇なく、教師と余と深く心をいためたるの外は、會堂の衆人もやゝ不思議に思へるのみ、深きことも知らで已みにき。

斯くて秋闌になりぬ。悲風病葉を掃ひ、朝々霜重うして楓葉血よりも紅に、稻は刈られて首なき株のみ田の面に殘り、星光夜々刀の如く愁人の心を貫く。教師は秋の半ばより教務上已み難き要事ありて一夕の勸誘を松井が爲めになしつ、廣島に赴きぬ。余は計らずも大患にかゝりて久しく大學の病院にあり、大熱にうかされし眼に一たび青蒼なる人の來りて余が手を握りしことありしを微に覺えたり。余が生死の途上を往來しつゝある間に、松井は無言より無言に移り、會堂にも遲く出でて疾く歸り、燈なしに夜を深かし、教師の家の一間より夜とも云はず晝とも云はず出であるくことをりをりにして、或時は愛宕山上の黄昏に坐して晩靄海の如く燈光漁火の如き百萬の家を瞰め宛ながら巨人の大息の如き都城のどよみに耳傾け、或は海岸に出でて遙に相州の山を望み、波と波と相搏ち旋渦と旋渦と相軋る水の面を一心に眺めつゝ、或時は墨よりも黒き深夜に青山の墓地に佇み、隱密の雲は日々松井とうき世の間を隔て行きぬ」

話の間に漸々傾きたる月は今まさに雲の重闇に入らむとして一道の光を眞青になれる吾友の半面に落せり。默然として暫し考へ入れる後友は續ぎぬ。

一暮れ行く秋の風身にしみて品川の海靄重る愁をたゝむの頃、一日船宿より一艘の小舟を借りて沖に漕ぎ出でたる者あり。日は落つれども舟は返らず。夜明くれども舟は歸らず。三日の後漁者定まれる船宿の男、大森沖の海苔標に流れかゝれる一隻の小舟の波に弄ばれて搖し居たるを見出しぬ。艫の方には一卷の小形の書あり。舳には帽と靴とあり。半ば引裂きたるレースの技折を插める書あり。主は何處ぞ。品海の波深うして其秘密を語らず。

後天主教教師の家にては待つこと一日周章一日の後、松井が居間の机の抽斗より密封せる三通の書狀を發見せり。一通は教師に宛て、一通

は教會に、他の一通は余に。斯くて此事は衆人の耳に入りて心にをさまり、皆知りて皆默したり。

獨り知らざるの人あり。曾てレースの技折に百合花を縫ひたるの人なり。初戀の夢今にさめやらで祈れば祈りの中に其人の名を呼び、會堂に出づれば出づる度に遙に其人を睇視したる渠姐は、日曜來れども其人を會衆の中に見ず、次週來れども其人の影を見ず、週去り月も亦往けども其影を見ず、一双の明眸今も猶其人を求むと。

可憐の孃よ、御身が十年待てばとて、百年待てばとて、彼は何時か御身に歸る可き。何時か歸り來る可き、相山倒れ品海盡くるも、彼は御身に歸り來るの時なからむ。」

* * * *

斯く語り終へし時、月雲に入りて、二階は闇くなりぬ。友の顏は見えざりき。然れど其聲には涙ありき。

（明治二十五年夏）

憎むと枯れる（「みゝずのたはこと」の「落穂の掻き寄せ」より）

戸を明けると、露一白。芝生には吉野紙を展げた樣な蜘網が張つて居る。小さな露の玉を瓔珞の樣に貫いた蛛の絲が、枝から枝にだらりと下つて居る。

門の入口に甘い香がすると思うたら、籬根にすひかづらの花が何時の間にか咲いて居る。生々又生々。營々日營々。何處を向いても凄じい自然の活氣に威壓を感ずる時節となつた。田圃には洗聲あげて蛙が「生めよ殖えむ」とわめく。雀や燕は出産を氣がまへて、新巣の經營に忙しく、昨日も今日も書院の戸袋に巣をつくるとて、チュッ〳〵チュッ〳〵喧しく囀りながら、さま〳〵の芥をくはへ込む。蠅がうるさい。蚊がうるさい。薔薇にも蚕豆にも數限りもなく蟲が涌く。地は限りなく草を生やす。四圍の自然に攻め立てられて、萬物の靈長も何だか小さくなつて了ふ氣がする。

隣の金さんが苗をくれた南瓜の成長を見に來たついでに、斯樣な話をした。金さんの家に、もと非常によく生る葡萄があつた。一年家の新ちゃんが葡萄をちぎるとて棚から落ち、大分の怪我をした。それからと云ふものは、家の者一同深く其葡萄の木を憎んだ。すると、葡萄は何時となく枯れて了うた。憎むと枯れる。面白い話。新約聖書に、耶蘇が實らぬ無花果を通りかかりに詛うたら、夕方歸る時最早枯れて居たと云ふ記事がある。耶蘇程の心力の强い人には出來さうな事だ。

夕方眞紅な提灯の樣な月が上つた。雨になるかと思うたら、水の樣な月夜になつた。此頃は宵毎に月が好い。夜もすがら蛙が鳴く。剖葦が鳴く。月に浸されて生活する我儕も、さながら深い靜かな水の底に住んで居る心地がする。

（明治四十五年六月一日）

五分時の夢

吾不才を悲しみ、人の才を羨み、平凡齷齪の生涯に倦み、日も夜も紙を展べ筆を舐りてはつくる反故も飽くことなき暗黒の腹を養ふ忌忌しさに、或夜燈下に筆を折つて斯く祈りぬ。

「吾は生くるを欲せず、平凡に倦みぬ、求めて得ざる才を追ふに倦み果てぬ、爾吾を生かさむと欲せば吾を平凡より救へ、吾を平凡に安んぜしめむとならば何ぞ吾に自己の平凡を見せしむるや、吾は生くるを欲せず」

頭は懊惱に低れて、精神やゝ恍惚。

忽焉、光れる者吾が側に立ちたれば、室の内眞晝よりも白くなりぬ。

吾をのゝきて云ふ。「誰ぞ、爾は？」

「汝が祈吾耳に達せり、吾汝に諭さむ、吾と共に來れ」と光れる者宣ふ。

＊　＊　＊　＊　＊

飄忽として吾等は大なる野に立ちぬ。百花の野に立ちぬ。花として在らざるなく、香として具はらざるなし。

光れる者蟻の眼よりも細き一個の花をとり、問ひ玉はく、「何ぞ」

「――苔の花なり」

「汝、耳傾けて此花の言を聞け、牡丹ならざるが故に肯て開かずと云ふや」

吾答ふ。「主よ、否、然れども余は無心の花たる能はざるなり」

主宣ふ。「來れ」

＊　＊　＊　＊　＊

飄忽として吾等は大なる森の梢に立ちぬ。限りなき鳥の群れ居る森の梢に立ちぬ。羽として具はらざるなく、音としてあらざるはなし。

光れる者其一羽を余に示して問ひ玉ふ。「何ぞ」

「鳥の中にいと賤しと云ふ――雀なり」

光れる者宣ふ。「彼に問へ、彼金鷲ならざるが故に飛ばずと云ふや」

余答ふ。「否、然れども、吾は無知の鳥たる能はざるなり」

「來れ」

＊　＊　＊　＊　＊

光れる者また余を率いて南の天の下に立たせ、天を仰げと命じ玉ふ。薄絹をはりたる雲あり、空を蔽ふ。彼噓き玉へば、雲の帷さらりと落ちて、寶珠を碎いて無限の宙宇に散らせる如く一天皆星となりぬ。

上帝其一を麾き玉ひたれば、一の星は螢の如く飛んで其袂に入りぬ。

上帝宣はく、「此は――と云ひて、汝等が棲む地より無極の遠きにあるものなり。彼に問へ、太陽の如く汝等の眼に大ならず、近からざるが故に、肯て光らずと云ふや」

余答ふ。「否、然れども余は小なれども、爾に像りて造られたるものなれば、星よりも大なり。星の運命をもて滿足する能はざるなり」

「來れ」と上帝宣ふ。

＊　＊　＊　＊　＊

飄々として吾等は虛を踏み、空を度り、天より天に上り、天より天に上り、無邊の天に上り、空を橫ぎる時の橋に立ちぬ。

唯見る、石壁、無邊際の底より立つて無邊際の頂に達す。壁の石、色としてあらざるなく、形としてあらざるなし。個々別なるが如く、また唯一なるが如し。

余問ふ。「主歟、是れ何の壁ぞ」

主答へ玉ふ。「吾天國の城壁なり」

一の小石を指して宣はく、「汝に力を與ふ、其石を抽きて見よ」

「主よ、否、彼小なる石を抽かば、大なる城壁崩るべし」

近く寄りてよく見よと宣ひければ、進みて彼小石の面を見るに——見よ、其石に鐫られたるは吾名なり。

吾胸轟きぬ。

主宣ふ。「汝見たりや、吾城壁を築くもの盡く吾石なり、大小なく、美醜なし、其一を缺く可からず——汝は滿足せりや」

汪然として吾涙落ちぬ。

「主歟、然り」

*　*　*　*

「汝の地に歸れ」と彼時の橋より推し玉ふに、呀と叫びて、己を狹き書齋に見出しぬ。頰には猶涙あり、額には汗珠を綴れり。

机上の袂時計は五分過ぎぬ。

燈の光煌々と吾を睨めり。

炬燵

雪がまだ融けぬ。

夜、二疊の炬燵に入つて、架上の一册を抽いたら、「多情多恨」であつた。器械的に頁を繙して居ると、ついつり込まれて讀み入つた。ふつと眼を上げると、向うには鶴子が櫓に突伏して好い氣もちにスヤ〳〵寢て居る。炬燵の上には、猫が咽も鳴らさず巴形に眠つて居る。九時近い時計がカチ〳〵鳴る。臺所では細君が皿の音をさして居る。

茫々たる過去と、漠々たる未來の間に、斯一瞬の現今は樂しい實在であらう。

またさら〳〵と雪になつた。

余は「多情多恨」を讀みつゞける。何と云ても名筆である。柳之助が亡妻の墓に雨がしよぼしよぼ降つて居たと葉山に語る條を讀むと、青山墓地にある春日燈籠の立つた紅葉山人の墓が、突と眼の前に現はれた。忽ち其墓の前に名刺を置いて落涙する一青年士官の姿が現はれる。其は寄生木の原著者である。彼青年士官彼自身最早故山の墓になつて居るのだ。

皆さつさと過ぎて行く。

「御徐に!」

斯く云ひたい。

何故人生は斯うさつさと過ぎて往つて了ふのであらう?

（明治四十二年一月二十二日）

國木田哲夫兄に與へて僕の近狀を報ずる書

（一）

僕は田舍者、元來田舍が好きだ。田舍はノンキで好い。新しい野菜が食へる。自然に親しむ機會が多い。自然に近い人間即農夫の生活若くは之に近いものが出來る。生活費も少なくて濟む。都會が嫌ひぢやない。田舍が好きなのだ。そこで田舍住居をすることにきめたが、場所の選擇には迷つた。北海道にしようか、韓國にしようか、小笠原島か、いつそ北米南米にしようか、色々思案の末が東京府下北多摩郡千歲村字粕谷三百五十六番地の卜居となつた。東京を西へ距る僅に三里、矢張東京に用があると見える。借家住居にはあき〱したので、それで地球の陸土五千二百萬方哩の內三反未滿の土を買ひ、土間共十五坪の麥藁葺を買つて、籍まで移して、いよ〱千歲村平民德富某になつたのが、昨年二月の二十七日。最早滿一年になる。

（二）

千歲村と云ふのは、東京の西三里、多摩川の東一里强、甲州街道を北の隅にして、所謂武藏野の一隅に巢くふ戶數五百餘の農村である。八つの字があつて、中央部落が粕谷と云つて戶數僅に二十八軒。二十八軒の中一番小さくて、淋しい景色のいゝのが僕の住居だ。低い丘の端で、前は淺い谷からだら〱上りの丘になり、雜木林に東と北の一部を圍つて、南面獨立。西は麥畑から村の杉日もあたる。風もあてる。木立や雜木林、其上に相武甲の連山がちよいちよいと顏を出して居る。裏へ出ると富士も見える。パノラマの樣な眺めで、些單調だが、大空は存分眺められる。總じて武藏野のウネリ樣は、小スケールの露西亞式で、唯其ウネリが小さく、山が見えて、樺の林のかはりに櫟林があつて、農家に牛馬が少なくて、赤いシャツがなくて、百姓の顏が少々ばかり氣が利いて居るだけだ。

僕は此處に居てしば〱一昨年露西亞の遊を憶出す。僕の家の向の丘に青山街道がうねつて居る。時々荷車のがら〱が聞える。僕はきつと「あひびき」の「から車の音が虛空に響き渡つた」の句を念ひ出す。併し露西亞の落秋の寂味も、冬の死も、從つて春の復活の喜も、此邊では十分分からぬと思ふ。

春は兎角風が多い。村の家々はいづれも杉木立や樫の防風林に籠つて、遠方から見るとなにがしの宮かと思ふ。二月から三四月にかけては、あまり風ばかり吹くので、蓮月の歌ではないが、「風吹かぬ日は淋しかりけり」だ。僕の家のぐるりの樫の木にハリガネが三本からんである。其一端は家の梁木に卷きつけてあるのだ。風のあて加減も、家の大さも大概分かるだらう。此邊の土は噴爐土とか云つて、火山灰質の輕小極まるもので、些風が強いと一齊に雲と舞ひ立つて、遠望は火事を欺き、近くは鼻の穴、押入れの奧まで侵入する。あるけば疊に足跡がつく。一晝夜も吹通しに吹かれると、實際くたびれてしまふ。

僕の家は出來てまだ十年位比較的新しいものだが、普請はお話にならぬ。其筈さ、先の家主なる者は素性知れぬ拾子で、赤子の時村に拾

はれ、三つの時に人に貰はれ、二十いくつの時養家から建てて貰つた家だもの。其男は農が嫌で、蘭商法をやつて、失敗して、東京で死んだ。其あとは近在の大工の妾が五年ばかり住んで居た。即妾宅さ。妾宅と云へば、一寸小意氣に聞えるが――まあ云はぬが花だ。花と云へば其妾の名がお花さんと云つた。お花さんと云へば――いや此も云はぬが花だ。投げやり普請のあとが、大工のくせに一切手を入れなかつたので、壁は落ち放題、床の下は吹通し、雨戸は反つて、屋根藁は半腐り、些眞劍に降ると黄ろい雨が漏る。越して來たのは去年の此頃、雲雀は鳴いて居たが、寒かつたね。日が落ちると、一軒の茅屋目がけて、四方から押寄せて來る武藏野の春寒、中々春寒料峭位の話ぢやない。おまけに、井が赤土水の上に渴水と來たので、僕も當分は毎朝手桶を荷つて、四町あまり矢張玉川をひいた品川分水へ水汲の役さ。風が荒いのと、水が硬いので、手足は忽ち皸あかぎれ。六疊二間に道具は塞がる。贅澤こそしなかつたが、兎に角二十圓位家賃を拂つて、小間の二つ位は占領して居たあとだから、御臺所も流石にほろ／＼落涙なさる。誰も無理に賴んだのぢやあるまいし、自分が好きで擇んだ生活、今更苦情を持込む所はなし、老人子供が無い素夫婦だから面白半分やつつけたものの時々はウンザリした。

（三）

夏は涼しい。蚊は居る。蠅は勿論雲霞の如くだ。書を讀んで居ると屋根裏からどさりと青大將が緣に落ちたり、玉蜀黍をもぎに行くと山かがしが絡んで居たりする。蛇は大嫌ひだ。だから愛したい。勿論まだ好きにはなれぬが、あまり度々接觸したので、多少驚かなくなつた。

下の谷が青田になつて、螢が流れたり、月夜は實にいゝ。寒い中は風呂を土間にたてたが夏から秋にかけては、裏の小杉の蔭にたてた。晝でも人通りの少ない處だから、夜は大びらなものだ。風呂の中から天の川を仰いだり、「行水の捨所なし蟲の聲」蟲の音聞いて湯をつかふのも頗る風流なものさ。雨が降ると海水帽をかぶつたり、傘をさしたりして入る。田園生活の夏は好い。慾には噴井の一つもあつて、家の近所に、小川の流があると强氣だが、さうは行かない。

一條の小道を隔てて直ぐ東隣が四反程の雜木林だ。冬枯も好い。若葉は實に美しい。早起して水の樣な空氣を吸つて居ると、林の奥に睡さうな日が出る。花を欺く木々の若葉からぼたりぼたり露が滴れる。夏秋の蟲の音も好い。松蟲鈴蟲は少ないが、轡蟲は限りなく居る。子供等が提燈つけて取りに來る。此雜木林の向うに不幸な兄弟が居る。兄は十七、啞の聾、弟は十二、盲目だ。二人でガチャ／＼を取りに來る。盲の弟が聞き澄して指をさすと、啞の兄が提燈の光に草を分けて蟲を捕る。二人で立派に一人前をする。初茸は無いが、楢茸、濕地茸、サヽゴなどが立つ。近所のかみさんなど汁鍋をかけて置いて、茸採りに來る。萩、女郎花、刈萱、つゞいて龍膽の花が咲く。

百舌鳥が鳴くと栗が笑む。富士が白くなると、甘藷が甘くなる。十月の末頃から十一月十二月にかけては、實に何とも云へぬ。遊びに來るなら小春だね。それから凩、落葉、時雨と愈寂びて愈高い自然の趣味は、云ふ丈管だ。遊びに來るなら晩秋初冬に限る。

（四）

近所に八幡の社がある。春の雹祭、秋の風祭などには、一疊程の拜殿に筵敷いて、村の家主諸君が一升徳利に五郎八茶碗、澤庵肴で

神酒をあげる。僕も神酒はやらぬが、胡踞かいて澤庵位は摘まむ。六年振りかで去年十二月の朔日に、此社内で村芝居をやつた。東京から市川馬の脚の一座が來て、見物の四百からあつて、纏頭の三十圓も寄つた。外題は伊賀越の通しに、曾我對面に、今一つは忘れた。夜の八時頃から始まつて、僕等は沼津を見て十時過ぎに歸つたが、何でもハネたのが朝の四時だつたさうだ。十二月と云ふのに、筵一枚敷いたきり夜通し露天の見物は恐れ入つたものだ。

七町程西に當つて、七八十人位入る基督教會堂がある。耳の遠い牧師が一人住んで居る。下曾根君と云つて、舊幕砲術師範の家がらで、五十餘歳、雅人だ。千歳村内に基督教信者が五軒ある。五軒で會堂をもつて居る。夏の頃などは、夜の九時頃から説教がはじまる。牧師一人聽者一人と云ふこともある。多くても十人とは無い。晝間の勞働に疲れきつて、説教中は大抵鼾さ。僕等も時々行くが、日曜は兎角宅に來客が多い。學生が遊びに來るのだ。日曜日は僕の傳道日ときめて居る。僕曰く、「僕の話は一向つまらぬかも知れぬ。併し往復六里、いゝ空氣を吸つて、それから澁茶一碗を喫つて歸るのは、決して悪くない」

村は豐かな方では無いが、先可なりだ。千歳村約千町歩の中で、水田僅に八十町歩位。副業には春秋の養蠶を第一として、養鷄養豚もやる。隨分生活の戰鬪は烈しい方だ。麥刈、田植、蠶、一時に落合ふ夏の頃は、何處を見ても眼がまはる様であることはあるが、オルガンだの琴だの悠々と彈く聽くと云ふ氣にはなれないね。皆稼ぐ。若い者の仕事の大半は東京から下肥をひいて來るのだ。桶の五つ六つ、中には八つもひいて來る。七八十貫乃至百貫にも上る。重荷だ。都會の汚物を淨化してまた送り戻す循環作用も面白いものぢやないか。都會の私生子などよく里子にとつて其まゝ背負込むのがある。藝者の娘などが髪打かぶつて野邊へ出て居る。村の風儀は悪い方ぢやない。忙しいのだ。尤も少しは賭博をやる。慰みが少ないのだ。舊正月は農家の尤も暇な時だが、三ケ日、七草、十五日、二十日正月などに、其處の三五郎、此處の倉作、手拭肩にぶらりと田圃路に立話などして居るのを見ると、ドウかしてやりたく、またやらなければならぬと思ふが、まだ一向まとまつた事も仕出來さない。一度同じ千歳村の烏山と粕谷の間に喧嘩があつた。事の起因はトロイ以來少しも變らぬ女の件さ。實は烏山の露西亞が戸籍の多いのを鼻にかけて些威張り過ぎたので、日本の粕谷が憤然として復讐と出かけたのだ。仕込杖なぞ振り廻して怪我人も出來たが、まづ／＼治まつた。戰爭以來兎角若い者の氣が荒くて困る。千歳村では無いが喧嘩の折の治療費を豫め積立てて置く村もあるさうだ。

(五)

勞働かね。勞働も少しはやる。僕思ふに頭腦ばかり使ふと惡魔になり、手足ばかり使ふと獸になる。そこで少しは讀書もやる。勞働もやる。尤も三反未滿の内、家と庭と櫟林とそれから樹木を植ゑ散らした殘りがやつと一反あまりで、米麥はやらぬから無論正式の農でなく、園藝と云ふ程爲行的でもない。タゞの野菜づくりだ。さきに云つた啞の兒の加勢もあつたが、去年は甘藷の七十貫位作つた。大豆、黍は不作だつたが、蕎麥は少ないが一寸食はれた。豌豆、隱元、玉蜀黍、越瓜、南瓜、胡瓜、茄子、根芋、白菜、大根、などは食倦きた。甘藍はむづかしい。球葱は地味にあはぬ。馬鈴薯は肥料不足で失敗した。金時サヽゲを作つたが熟期に雨が多くて、うつちやつて置いたら、莢の中で發芽し

た。小豆の收納したら、乾し方が不充分だつたので。半分蛆になつた。いや色々の失敗を重ねる。遠方から來た或男が植木を見廻つて、「食へるものは一つもありませんな」と云つたら、僕は、「皆眼で食ふのです」と答へたが、地味のせゐで梨も駄目、桃も駄目、林檎、櫻桃勿論駄目、柿は風で駄目、蜜柑は寒で駄目、一番適するのが栗、次は梅、葡萄位なものだ。出來ぬを承知で果樹苗を少々植ゑて置いたが、矢張「眼の食物」に了るのだらう。

戸籍は移したし、引越の三日目に、村の初午の集會に樽代壹圓を納めて仲間に入れて貰ひ、それから手拭と半紙を持つて、五人組の軒別に組入の挨拶をして廻つた。そこで村の諸君は如何に僕等を待つかと云ふに、皆よくして呉れる。尤も村民の義務は殘らず負擔する。諸君は僕等の事を「信心をする家」、「學を讀む家」、「書が澤山ある家」、「東京からエラ客の來る家」なぞと云つて居る。「何もしねエ家」と思つて居る者もある。秋の頃大分樹木を植ゑたので、また一つ「植木が好きな家」と云ふ名が殖えた。稀には若者が遊びに來る。村の休日には子供が大勢騷ぎに來る。不器用な腰つきで、折ふし肥桶をかつぐと皆が笑つて居る。

東京は近い。青山へ三里、新宿へは二里半位なものだ。午砲も時々聞える。場末の汽笛、それから中野や玉川線の電車の響が聞える。併し郵便は集配共一回で、東京の手紙は二日かかる。一日一里半の歩みだ。ポスト（時々切手はがきがきれる）へ十町、郵便局へは一里半、豆腐屋へ六町、（村の者は豆を持つて豆腐と交換に行く）、但新聞は東京版が其日の午後二時頃には來る。境まで汽車、それから調布を經て配達して來るのだ。小學校があるが、女兒も式日の外は袴は穿かぬ。煉瓦を見て、「あの赤エな何だ」と云ふ者もある。肥料車は毎日青山四谷へ通ふが、東京との距離は中々三里やなささうだ。

（六）

僕の家族は目下夫妻に犬一疋だ。「白」と云つて雄だが、極無抵抗主義で、イヷンの犬だ。イヷンと云へば、近所の寅爺さんの曰く、「利口な者ア東京に往つちまつて、馬鹿ばかり田舍に殘る譯でさ」と。村に殘るが馬鹿なら、都落ちして馬鹿の仲間入する僕等は大馬鹿の骨頂に違ひない。酸素も窒素も性分なら仕方は無いさ。僕も村に來て僅一年種々の經驗を重ねた。

淋しい一軒家で、來る人毎に不用心だと云ふ。以前は强盜の非常に跋扈した處で、家から家にハリガネを引張つて、非常報知をしたさうだが、近來は頓斗其樣なことも無い。用があつて夫妻東京へでも出かけると二日も三日も戸をしめて、がらあきにしてしまふ。但乞食は隨分やつて來る。追々心易くなつて來る。乞食問題に村の娛樂問題、此は引越郎下忽に提供せられた問題だが、まだ何等の解決を得ない。一軒家だから前述の雜木林の直ぐ下に墓地がある。明るくて靜かで、寢心地のよささうな墓地だ。玉椿や、サツキや、椿などが植ゑてあつて、春は墓の間に蒲公英が輝き、秋はシウメイ菊が淋しく笑ふ。墓の數が五六十、あまり古いのはなく、德川以來のものが多い。僕が引越してから三つ葬式があつた。第一は僕の組内の「ヤクザな伯父さん」で、家が貧しいので組合トモラヒにした。養蠶最中部屋がないので、土間に蓆を敷いて齋飯を食つた。此は田圃向うの墓地に葬つた。次の二つは右の墓地に埋葬した。一人は八十越した老健な隱居で、家は有福な方だから稼ぐ必要もないのだが野らへ出んと不愉快だと云つて、前々日までせつせと働いて、病苦と云ふ病苦もなくぽつくり往生した。幸福

な死樣さ。餞別一錢宛即ち二十七錢の村香奠をやると、丁寧な挨拶があつて鄭重な齋飯が出た。次に五十あまりの白髮に近い叔父さんで、僕の家に少々增築をやつた時、舅の大工に叱られて地づきの手傳などして居たが、僕が父の誕生祝に逗子に往つて歸つて見ると死んで居た。たつた二三日の中の事だ。

僕の家に一番近いお隣は此墓地だ。僕は毎も此墓地に往つては色々の事を考へる。これまでさま〴〵な亡くなつた人の事を考へて、殆んど一人遺憾なく人を葬つたことがないのを思ふと、自分の卑吝輕薄を恥ぢずには居られぬ。また自分自身の「死」に對する覺悟を檢すると、いかにも吝根性のつら〴〵するに愛想がつきずには居られない。否、僕等はどうしても「死」に對する嚴肅な覺悟が足りない。高慢だ。決死隊になれぬ。眞劍になれぬ。思へば「今日一日」を實行した奥村五百子の婆サンはエライ點があつた。

村の衆は僕にも此墓地の株に入れと勸めて居るが、僕はまだ何とも返事せずに居る。

（七）

鷦鷯一枝の經營に一年を過して了つた。天井を張る、其處をつぎ足す、物置が出來る。湯殿を建てる、井戸を掘る、十五坪の家は約二十四坪になつて、多少便利にも暖にもなつた。緣さきまでぶつ通しの麥畑に四ツ目籬を結つて、花木を植ゑて、庭らしくなつた。倍大分整つて來たが、いさゝか野趣を無くしたのが惜くもある。

明治四十五年大博覽會までには、新宿八王子間の電車が近所を通るさうだ。つい此頃東京の某が近在に地所を買つた。其內前の谷に工場でも出來て、眞黑な息つく煙突が立つかも知れぬ。然なればお仕舞だ。僕は早速第二殖民地を求めるね。然ならぬ內、健康になつて、一家擧つて泊りがけに遊びに來玉へ。自慢の甘藷でも蒸して武藏野の秋の一夜を語らうではないか。

明治四十一年三月十一日
雪霽れて日光眩しい午後三時

蝶の語れる

吾、毛蟲たりし時、醜かりき。吾、蝶となりて舞へば人美しと讃む。人の美しと云ふ吾は、曩日の醜かりし毛蟲ぞや。

吾、醜かりし時、人吾を疎み、忌み、嫌ひて避け、見る毎に吾を殺さむとしぬ。吾、美しと云はるゝに到れば、人爭うて吾を招く。吾の變れる乎、人の眼なき乎。

吾、醜しと見られし時、吾胸のいたみて、さびしく泣きたることいかばかりぞや。其時君獨り吾を憐みぬ。

君、吾毛蟲たりし時、吾を憐みて捨てざりき。故に蝶となれる吾は、今翼ある花となりて、願はくは君が爲めに君の花園に舞はむ。

（「みゝずのたはこと」の「ひとりごと」より）

梅一輪

（一）

「お馨さんの梅が咲きましたよ」

斯く妻が呼ぶ聲に、彼は下駄を突かけて、植木屋の庭の樣に無暗に樹木を植ゑ込んだ園内を歩いて、若木の梅の下に立つた。成程咲いた、咲いた。青軸また綠蕚と呼ばるゝ種類の梅で、花はまだ三四輪、染めた樣に綠な蕚から白く膨らみ出た蕾の幾個を添へて、春まだ淺い此二月の寒を物ともせず、ぱつちりと咲いて居る。極の雪の樣にいさゝか青味を帶びた純白の葩、芳烈な其香。今更の樣だが、梅は凜々しい氣もちの好い花だ。

白つぽい竪縞の銘仙の羽織、紺色カシミヤの袴、足駄を穿いた娘が、曾て此梅の下に立つて、一輪の花を摘んで黑い庇髮の鬢に插した。お馨さん——其娘の名——は其年の夏亞米利加に渡つて、翌年まだ此梅が咲かぬ内に米國で亡くなつた。

其れ以來、彼等は此梅を「お馨さんの梅」と呼ぶのである。

（二）

米國の畫家ヂャルヂ・ヘンリー・バウトンの描いた「メーフラワアの歸り」と云ふ畫がある。メーフラワアは、約三百年前、信仰、生活の自由を享けん爲めに、歐洲からはる〴〵大西洋を越えて、亞米利加の新大陸に渡つた淸教徒の一群ピルグリム、ファザアスが乘つた小さな帆前船である。畫は此船が任務を果してまた東へ歸り去る光景を描いた。海原の果には、最早小さく小さくなつた船が、陸から吹く追手風に帆を張つて船脚輕く東へ走つて居る。短い草が生えて、岩石の處々に起伏した濱には、ピルグリムの男女の人々が、彼處に五六人、此處に二三人、往く船を遙に見送つて居る。前景に立つ若い一對の男女は、傳說のジョン・アルデンとメーリー・チルトンでもあらうか。二人共まだ二十代の立派な若い同士。男は白い幅濶の襟をつけた服を着て、ステッキをついた左の手に鍔廣のピュリタン帽を持つ右の手を重ね、女は雪白のエプロンをかけて、半頭巾を冠り、右の手は男の腕に絡り、手巾を持つた左の手をわが胸に當てて居る。二人の眼はぢつと遠ざかり行くメーフラワア號の最後の影に注がれて居る。メーフラワアは故國との最後の連鎖である。メーフラワアの去ると共に故國の緣は切れるのである。なつかしい過去、舊世界、故國、歷史、一切の記念、其等との連鎖は、彼船脚の一歩々々に切れて行くのである。彼等の胸は痛み、眼には淚が宿つて居るに違ない。然しながら彼等は若い。彼等は新しい大陸に足を立てて居る。彼等の過去は、彼船と共に夢と消ゆる共、彼等の現在は荒寥であるとも、彼等は洋々たる未來を代表して居る。彼等は新世界のアダム、イヴである。

此畫を見る每に、彼はお馨さんと其戀人葛城勝郞を憶ひ出さぬことは無い。

（三）

葛城は九州の士の家の三男に生れた。海軍機關學校に居る頃から、彼は外川先生に私淑して基督を信じ、他の進級、出世、肉の快樂にあこがるゝ同窓青年の中にありて、彼は祈禱し、

斷食し、讀書し、瞑想する青年であつた。日露戰爭に機關少尉として出陣した彼は、戰爭が終ると共に海軍を見限つて、哲學文學を以て身を立つる可く決心した。寡婦として彼を育て上げた彼の母、彼の姉、彼の二兄、家族の者は皆彼が海軍を見捨つることに反對した。唯一人滿腔の同情を彼に寄せた人があつた。其れは其頃彼の母の家に寄寓して居る女學生であつた。女學生の名はお馨さんと云つた。

お馨さんは、上總の九十九里の海の音が暴風の日には遠雷の様に聞ゆる或村の小山の懷に蟠る家の娘であつた。四人の兄、一人の姉、五人の妹を彼女は有つて居た。鄕里の小學を終へて、出京して三輪田女學校を卒へ、更に英語を學ぶべく彼女はある縁によつて葛城の母の家に寄寓して青山女學院に通つて居た。彼女も亦外川先生の門弟で、日曜毎に隅の方に默つて聖書の講義を聽いて居た。富裕な家の女に生れて、彼女は社會主義に同情を有つて居た。葛城が軍艦から母の家に歸つて來る毎に、彼は彼女と談話を交へた。信仰を同じくし、師を同じくし、同じ理想を趁ふ二人は多くの點に於て一致を見出した。彼女は若い海軍士官が軍籍を脱することについて、家族總反對の中に唯一人の贊成者であつた。斯くて二人は自然に相思の中となつた。二人は時に青山から玉川まで歩いて行く〳〵語り、玉川の磧の人無き處に跪いて、流水の音を聞きつゝ共に祈つた。身は雪の如く、心は火の如く、二人の戀は美しいものであつた。

（四）

本文の筆を執る彼は、明治三十九年の正月、逗子の父母の家で初めて葛城に會つた。恰も自家の生涯に一革命を閲した時である。間もなく彼は上州の山に籠る。ついで露西亞に行く。外遊から歸つた時は、葛城は已に海軍を退いて京都の大學に居た。

明治四十年の初春、此文の筆者は東京から野に移り住んだ。八重櫻も散り方になり、武藏野の雜木林が薄綠に煙る頃、葛城は渡米の暇乞に來た。一夜泊つて明くる日、村はづれで別れたが、中數日を置いて更に葛城を見送る可く彼は横濱に往つた。港外のモンゴリヤ號は已に錨を拔かんとして、見送りに來た葛城の姉もお馨さんもとくに去り、葛城獨甲板の欄に倚つて居た。時間が無いので匆々に別を告げた。此時初めて葛城はお馨さんの事を云うた。ゆく〳〵世話にならうと思うて居ると云うた。而して今後度々上る樣に云つて置いたから宜しく賴む、と云うた。斯くて葛城は亞米利加に渡つた。

其年夏休前にお馨さんは初めて粕谷に來た。美しいと云ふ顔立では無いが、色白の、微塵色氣も鄙氣も無いすつきりした娘で、服裝も質素であつた。其頃は女子英學塾に寄宿して居たが、後には外川先生の家に移つた。粕谷に遊びに往つたと云うてやると、米國から大層喜んでよこすと云つてよく遊びに來た。今日は學校から玉川遠足をしますから、私は此方へ上りました、と云つて朝飯前に來た事もあつた。體質極めて強健で、病氣と云ふものを知らぬと云つて居た。新宿から三里、大抵足駄をはいて歩いた。日がへりに往復することもあつた。彼女は女中も居ぬ家の不自由を知つて居るので、來る時に何時も襷を袂に入れて來た。而して臺所の事、拭掃除、何くれとなく妻を手傳うた。家の事情、學校の不平、前途の喜憂、何も打明けて語り、慰められて歸つた。妻は次第に彼女を妹の如く愛した。

葛城は新英蘭の大學で神學を修めて居た。歐米大陸の波瀾萬丈沸えかへる樣な思潮に心魂

を震蕩された葛城は、非常の動搖と而して苦悶を感じ、大服從のあと大自由に向つてあこがれた。彼が故國の情人に寄する手紙は、其心中の千波萬波を漲らして、一回は一回より激烈なるものとなつた。彼はイプセンを讀む可く彼女に書き送つた。彼女を頭が固いと罵つたりした。而して彼女をも同じ波瀾に捲き込むべく努めた。斯等の手紙が初心な彼女を震駭憂悶せしめた狀は、傍眼にも氣の毒であつた。彼女は從順にイブセンも讀んだ。ツルゲーネフも讀んだ。然し彼女は葛城が墮落に向ひつゝあるものと考へた。何ともして葛城を救はねばならぬと身を藻搔いた。彼女は立つても居ても居られなくなつた。而して自身亞米利加に渡つて葛城を救はねばならぬと覺悟した。

粕谷の夫妻は彼女を慰めて、葛城が此等の動搖は當に來る可き醱酵で、少しも懸念す可きでないと諭した。然しお馨さんの渡米には、二念なく賛同した。彼葛城の爲めにも、彼女自身の鍛錬の爲めにも、至極好い思立と看たのである。彼女は葛城の渡米當時已に自身も渡米す可く身を悶えたが、父の反對によつて是非なく思ひ止まつたのであつた。

米國からは、あまり乘氣でもないが、來るなら紐育ブルックリンの看護婦學校に口があると知らして來た。彼女の師外川先生も、自身新英蘭で一時白癡院の看護夫をしたことがあると云うて、彼女の渡米に賛同した。お馨さんは母の愛女であつた。母は其愛女の爲めに其望を遂げさすべく骨折る事を諾した。彼女の長兄は其母を悅ばす可く陰に陽に骨折る事を妹に約した。殘る所は彼女の父の承諾だけであつた。彼女の父は田舍の平相國清盛として、其小帝國内に猛威を振うて居る。彼女と葛城の緣談も、中に立つて色々骨折る人があつたが、彼女の父は斷じて許さなかつた。葛城の人物よりも其無資産を慮つたのである。葛城の母、兄姉も皆お馨さんの渡米には不賛成であつた。葛城の勉强の邪魔になると謂うた。靜かにこゝで勉强して葛城の歸朝を待てと勸めた。然しお馨さんは如何しても思ひ止まることが出來なかつた。それに、日本に愚圖々々して居れば、心に染まぬ結婚を父に强ひられる恐れがあつた。

斯樣な事情と彼女の切なる心情を見聞する粕谷の夫妻は、打捨てて置く譯に行かなかつた。葛城が家族の反對に關せず、何を措いても彼女の父の結婚及渡米の許諾を獲べく、單刀直入桶狹間の本陣に斬込まねばならぬと考へた。

（五）

朧月の夜、葛城家の使者と僞る彼は、房總線の一驛で下りて、車に乘つてお馨さんの家に往つた。長い田舍町をぬけて、田圃沿ひの街道を小一里も行つて、田中路を小山の中に入つて、其山ふところの行止りが其家であつた。大きな長屋門の傍の潛りを入つて、勝手口から名刺を出した。色の褪めた黑紋付の羽織を着た素足の大きな六十爺さんが出て來た。お馨さんの父者人であつた。

其夜は烈しい風雨であつた。十二疊の座敷に寢かされた彼は、夢を結び得なかつた。明くる早々起きて雨戶をあけて見た。庭には大きな泉水を掘り、向うの小山を其まゝ庭にして、蘇鐵を植ゑたり、石段を甃んだり、石燈籠を据ゑたりしてある。下駄突かけて、裏の方に廻つて見ると、小山の裾を鬼の窟の如く刳りぬいた物置がある。家は茅葺ながら岩疊な構へで、一切の模樣が岩倉と云ふ其姓にふさはしい。まだ可なり吹き降りの中を、お馨さんによく肖た十四五、十一二の少女が、片手に足駄を提げ、頭から肩掛をかぶり、跣足で小學校に出かけて行く。座敷に歸つて、晝の光であらためて主翁と對面した。

住居にふさはしい岩畳なかつぷくである。左の目が眇かと思うたら、其れは眼の皮がたるんで居るのであつた。其れが一見人を馬鹿にした様に見える。芳野金陵の門人で、漢學の素養がある。其父なる人は、灌漑用の溜水池を設けて、四邊に恩澤を施して居る。お馨さんの父者人は、十六にして父に死なれ、一代にして巨萬の富をなした。六十爺の今日も、名ある博士の辯護士などを顧問に、萬事自身で切つて廻して居る。此邊は數名の博士、數十名の學士を出して居る位で、此富豪翁も子女の教育には餘程身を入れて居るのであつた。

障子に日がさして來た。障子を明けると、青空に映る花ざかりの大きな白木蓮が、夜來の風雨に落花狼藉、滿庭雪を鋪いて居る。推參の客は主翁に對して久しぶりに嘘と云ふものを吐いた。彼は葛城家の使者だと云うた。お馨さんを將來葛城俊郎の妻に呉れと云うた。旅費學資は一切葛城家から出すによつて、お馨さんを米國へ遣つてくれと云うた。學校に師範學校見た樣なもので、育兒衞生をするのだと云うた。主翁は逐一聞いた上で、煙管をポンと灰吹にはたき、十二三の召使の男児を呼んで、御寮樣に一寸御出と云へ、と命じた。やがてお馨さんの母者人が出て來た。よくお馨さんに肖て居る。十一人の子供を育て、恐ろしい吾儘者の良人に仕へて、しつかり家を歴へて行く婦人の尋常の婦人であるまいと云ふ事は、葛城家の僞使者も久しく想ふ所であつた。主翁は今一應先刻の御話をと云うた。似而非使者は、試驗さるゝ學生の如く、眞赤な嘘を眞顔で繰り返した。母者人は顔の筋一つ動かさず聽いて居た。主翁は兎も角伜や親戚の者共とも相談の上追つて御返事すると云うた。

「一六ケ敷いな」彼は斯く思ひつゝ歸途に就いた。

然しながら天はお馨さんに味方するかと思はれた。彼女の父は意外にも承諾を與へた。旅券も手に入つた。而して葛城が米國へ向け乘船した二年と三月目の明治四十二年の七月六日、横濱出帆の信濃丸で米國に向うた。葛城の姉、お馨さんの長兄夫婦、末の兄、お馨さんによく肖た妹達は、棧橋でお馨さんを見送つた。粕谷の夫妻も見送り人の中にあつた。妹達は何れも涙を流して居た。水草の裾模樣をつけた淡紅色絽の單衣を被た花嫁姿のお馨さんは、同行の若い婦人と共に信濃丸の甲板から笑みて一同を見て居た。彼女は涙を墮し得なかつた。其心はとく米國に飛んで居るのであつた。船はやをら棧橋を離れた。淡紅色衣の花嫁は、白い手巾を振り〳〵笑みつゝ視界の外に消えた。

（六）

乘船いたしましてから五日目になりますが、幸に海は非常に靜かで：：友人と同室で御座いますから心配もなく、朝より夕まで笑ひつゞけて居る次第にて、非常に幸福で愉快に暮して居ります。互に語り、讀書し、議論し、歌を唱ひ、少しも淋しき事はなく暮して居ります。非常に元氣なる故、隣室よりうらやましがられて居る程で御座います。：：然し葛城は下等で荷物同樣な取扱ひをされて非常に苦しんで參りましたのに、私は上等室にて御客樣扱ひを受け安樂に暮らして居りますから、濟まぬやうな申譯なきやうな心地がいたして居ります。

七月十日　　信濃丸にて　馨子

愛する御姉君に參らす

＊　＊　＊

去廿一日午後無事シヤトルに上陸いたしましたから、御安心下さいませ、：：明

十日朝九時發の汽車でニューヨークに參ります。

七月廿四日夜　シヤトルにて　馨子

姉上樣

* * *

昨日ニューヨークに着いたし、漸く目的の地に達し得候まゝ誠にうれしく存じ居り候。……葛城よりもよろしく、非常によろこび居り候。

七月卅一日　ニューヨークにて　馨子

姉上樣

* * *

身の平和、心の喜、筆にも言葉にも盡されず候。

勝郎

あまりのうれしさに、今の米國は天國に候。

八月三日　ニューヨークにて　馨子

* * *

前略、無事にニューヨークに着きました。ニューヨークの停車場から獨りで學校へ行く積りで居りましたら、思ひもかけず葛城が迎へに來て居りました。手紙では隨分強い事を申してよこしましたが、來て見れば非常によろこんで、よく來たと申して居ります。

前月の十日に病院に參りまして、直ぐ其日から働きました。慣れぬ業と言葉が初めは聞き取れぬので實に困りましたが、だん／＼と慣れてよくなりました。實に病院の仕事はハードで御座います。

朝の七時から夜の七時までは腰も掛ける事が出來ず、始終立つて居りますから、足が痛くて／＼實に初めは困りました。然し一日の内二時間は休めますから、一日の働時間は十時間で御座います。身體の工合のよき時はともかく、惡しき時は實にいやになります。慣れぬ仕事の上に一日立ちきりで御座いますから、身體の工合が妙になりまして、種々な變動を起しますが、慣れゝばよろしくなるとの事で御座います。

私は今は外科室の患者が四十人ばかり居る室で働いて居ります。隨分ひどい重傷の人も居ります。脊骨を挫いた人が三人程に、火傷の人や三階や二階から落ちた人や、盲腸炎の人や、なか／＼種々な種類の患者が居ります。

脊骨が折れても餘病さへ起さねば大丈夫で御座います。一人は肺炎を起して死にましたが、後の二人は丈夫で居りますが、然し實に痛さうで隨分氣の毒で御座います。初めは手術室から歸つて來て患者の側に居つて看護をいたします事が一番恐ろしく、殊に睡眠劑の臭が鼻について自分が心地が惡くなりましたが、近頃は慣れて平氣になりました。それからどんないやな恐ろしい事でも、自分がせねばならぬと思ひますれば、何でも出來ます。未だ初めで御座いまして、ベッドを作る事や、病人の敷布をかへる事や、器械を煮て消毒する事や、床ずれの出來ぬやうに患者の背をアルコールで擦る事や、氷嚢やら湯嚢やらをあてゝやつたり、呑物を作つて與へましたり、何やかやと、一日を忙しく、足は棒のやうになりまして、七時に室に歸つて參りましても、疲れて起きて居る事が出來ません程で御座います。

朝は六時に起きまして、六時半に食事に參りますが、初めは慣れぬし、三十分間に顔を洗ひ髪を結ひ制服を着、また床をなほす事が出來ませんでしたが、今では出來得るやうになりました。慣れゝば、十五分位でも出來得るやうになるさうで御座います。見ないで後のボタンを掛けるのがむつかしく、出來ないで初めはよわりましたが、いつの間にか慣れて來ました。晝は忙しいのと、夜は疲れますので、ついつい氣不調法にもなりまして、皆様に御無沙法を申上げて居ります。然し夢はなつかしき千歳村の御宅の様子や、また私の母や妹の事など夢みます。いつも夢では日本に居ります。未だ此地に參りましてから西洋の夢は見ません。

年來聞き及びました理想を實際に行ふ事が出來まして、實に愉快に思ひます。患者は米國人も居れば、獨乙人、伊太利人、ギリーク人、黒色人、實にあらゆる人を交へて居ります。初めは何だか異人のやうな氣がして妙でしたが、今は平氣になりまして、黒人でも誰でも自分の同胞の如く思はれ、出來得るだけ親切に世話してやりたいと務めて居ります。初めは患者の方でも妙に思うたらしう御座いましたが、近頃ではよくなついて、隨分よくおとなしくして居てくれますし、病人の方から親切に語をかけてくれますやうになりました。

校長もよろしい御方で、親切にして居て下さいます。私も日本に居りました時は、丈夫でゐばりましたが、ニューヨークに參りましてから餘り丈夫ではなく、風土やら食物やら萬事が變つた故で御座いませう、昨日からも少し工合が惡しく寢て居りましたら、校長も度々見舞に來て呉れますし、なか／＼手厚き看護して呉れますから、感謝いたして居ります。今日は午後から病院の働きに出ようと思ひましたが、校長から許しが出ませんから病院に參りませんで、床の上に坐つて先日から書きかけました御手紙を書きつゞけました。

葛城は明年ユニオンを卒業いたしますから、出ましたら直ぐ獨乙へ行つて二年程居つて、それから直ぐ日本へ歸りたいと申して居ります。私は身體のつゞく限りは病院に居りたいと思うて居ります。出來るなら卒業をしたいと思ひますが、卒業せぬでもかまひませんが、とにかく半年居つてもためになると思ひます。……葛城も本月の三日頃からとう／＼働きに參りました。隨分やはり骨が折れるさうで、氣の毒に思ひますが、少しは働いて見た方がよろしいと思ひます。…前には手紙を書いてから見るまでは一月もかゝりましたが、今は四時間程たてば手紙は參りますし、一時間かゝればニューヨークにも行かれます、一週間に一度は多分逢へますから、幸福に思うて居ります。私は是非とも三四年は米國に居りたく思うて居ります、今の處では。

葛城は米國嫌ひで、來年になつたら直ぐ獨乙へ行くと申して居ります。私も獨乙行を勸めて居ります。是非行くやうにと望んで居ります。

ニューヨークへ行きますには、地下の電車でも、亦エレベーターでもどちらでも取つて參れます。私は近頃はニューヨークに獨りで參れるやうになりました。…

御蔭様にて只今は満足して感謝して働いて居ります。少しも日本に未だ歸りたく思ひません。永く米國に居りたく思ひます。米國に参りまして氣が清々となりました。葛城が居りますから、何かと心强う御座います。然し手足まとひにならぬやう世話にならぬやうには充分致して居ります。

末筆ながら鶴子様にはどんなに御可愛らしくいらつしやいませう。鶴子様位の御子様を見ます度に思ひ出されます。毎朝小兒科の方に三つ四つの床を作りに参りますが、此頃では子供も慣れて言葉をかけ、また私が歸ります時にはグードバイと皆口々に可愛い聲で叫んでくれますから、可愛くて堪らなくなります。可愛い子供も赤兒も澤山居ります。どうか御姉上様にも御丈夫でいらつして下さいませ。

九月八日　ブルックリン病院にて

馨子

御なつかしき

御姉上様

御まへに

身體の工合が悪いと申しましたが、大した事は御座いません。殊に病院で御座いますから、病氣の心配は少しも御座いませんから。御安心下さいませ。

*　*　*

もはや秋となりました。故郷を思ひ出す時は、第一に粕谷の御家をなつかしく思ひ出します。

去る八日、校長より學生として他の見習ひの生徒と共に受け入れられ、今はキャプも貰ひ受け「眞の看護婦」になりました。無事に二ケ月の苦しい見習ひの時代は終りましたから、御安心下さいませ。

十月十二日　ブルックリン病院にて

馨子

姉上様

*　*　*

御はがきと御寫眞、夢ではないかとあやしむ程うれしく御なつかしく拜見いたしました。…

相かはらず働きが激しいので、私のやうな者には、身體がとても續かぬと思ひましたから止めようと思ひましたが、然し倒れる迄は病院に居る積りで居ります。只信仰をもつて神の助けによつて日日の務をいたして居ります。

十月廿四日　ブルックリン病院にて

馨子

姉上様

*　*　*

十一月三日、今日は天長節で御座いますが、私に取つては何の變りもなく今日も一日働きました。然しなつかしき故郷の事が今日は一しほ戀しくなつかしく思はれます。其後は如何御過し遊ばされますか。いつも御なつかしく、先日御送り下さいました御寫眞を眺めては自分の弱きを勵まして居ります。私は其後變りもなく自分の天職と信じて從事いたして居りますから、御安心下さいませ。先は御なつかしきまゝに一寸御伺ひいたしました。

十一月三日　ブルックリンにて

馨子

姉上様

*　*　*

目出度きクリスマスを遙かに御祝ひ申上げます。

此のエハガキにある可愛い子供は誰で御座いませうか。鶴ちやんでは御座いませんでせうか。あまりよく似て居りますもの。とにかく此の兒はクリスマスを是非千歳村のなつかしい御家で迎へたいと申します。大急ぎで今出立いたさせますから、よろしく御願ひ申します。

一千九百〇九年基督降誕になりて

ブルックリンにて

馨子

御姉上様に

(七)

明治四十四年二月三日、粕谷草堂の一家が午餐の卓について居ると、一通の電報が來た。お馨さんの兄者人からである。眼を通した主人は思はず呀と叫んだ。

馨急病にて死せりと

妻は聲を立てて哭いた。

主人は直ちに葛城の母と長兄を訪ねた、彼は面目ない心地がした。若し死が人生の最大不幸なら、お馨さんの渡米を沮んだ彼人々は先見の明があつたのである。彼は其足で更にお馨さんの父母を訪ふことにした。銀座で手土産の淺草海苔を買つたら、生憎「御結納一式調進仕候」の札が眼につく。去年の春頼まれもせぬ葛城家の使者としてお馨さんの實家に約婚の許諾を獲に往つた彼は、一年もたゝぬに此樣な用事で二たび其家を訪はうとは思はなかつた。

終列車は千葉までしか行かなかつた。彼は千葉に泊つて、翌朝房總線の一番に乘つた。停車場に下りると、お馨さんの兄さんが待つて居た。兄さんは赤い紙に書いた葛城から來た電文を見せた。

馨子急病昨夜世を去る

とある。兄さんはまた、父は非常に興奮して、終夜酒を飲み明かし、母や私に出て行けと申しますと云つた。

岩倉家の玄關で車を下りると、お馨さんの阿爺が出て來た。座に請ぜられて、一つ二つ淀みがちな挨拶をすると、阿爺が突然わアッと聲を立てて哭いた。少し話してまた聲を放つて哭いた。やがて阿母が出て來た。沈着な阿母も、挨拶半に顏が劇しく痙攣して、涙と共に聲を吞んだ。彼は人の子を殺した苛責を劇しく身に受け、唯默つて辭儀ばかりした。

やがて酒が出た。彼は平生一滴も飲まぬが、今日はせめてもの事に阿爺阿母と盃の取りやりをしるしばかりした。岩倉家では丁度十四になる末から三番目の女を、阿母の實家にやる約束をして、其祝ひをして居る所にお馨さんの訃報が届いたのださうだ。丁度お馨さんが米國で亡くなつた其晩に、阿母が玄關の式臺に靴の響を聞きつけ、はッとして出て見たら誰も居なかつたさうである。魂の彼女に其時早く太平洋を渡つて歸つて來たのであつた。

彼はお馨さんの兄さんと共に葛城家へ往つてあとの相談をすることにした。阿爺は是非新築中の別莊を見て呉れと云つて、草履をつッかけて案内に立つた。酒ぶとりした六十翁の、溝を跳ね越え、坂を駈け上る元氣は、心の苦から遁れようとする犧牲のもがきの樣で、彼の心を傷ませた。やがて別莊に來た。其は街道の近くにある田圃の中の孤丘を削つて其上に建てられた別莊で、質素な然し堅牢なものであつた。西には富士も望まれた。南には九十九里の海——太平洋の一片が淺黄リボンの樣に見える。お馨さんは去年此處の海を犬吠ケ崎の方へ上つて米國に渡つたのである。「如何です、海が見えませう。馨が見えるかも知れん」と主翁が云ふ。廣々とした座敷を指して、「葛城さんが歸つて來たら、此處で祝言させようと思つて居ました」

と主翁がまた云ふ。
彼は一々胸に釘うたるゝ思であつた。

（八）

お馨さん死去の電報に接して二週間目の二月十六日、午餐の席に郵便が來た。彼是と撰り分けて居た妻は、「あらッ、お馨さんが」と情ない聲を立てた。
其はお馨さんが亡くなる二週餘り前のはがきであつた。

新年をことほぎ參らせ候。
御正月になりましたら、精しい御手紙を認めたいと思うて思うて居りましたが、御正月も元旦からいつもと同じに働いて休みなどは取れませんでしたから、つい〳〵御無沙汰いたしました。隨分久しく御無沙汰申上げました。御許様御家内皆々様には御變りも御座いませんか。私はいつもながら達者で、毎日毎日働いて居ります。其後は何の變りもなく無事に病院で勤めて居ります。知らぬ内に種々の事を覺えて行きます。
御正月にはホームシックにかゝりまして實に淋しく、毎日千歳村のなつかしい御家族の御寫眞のみ眺めて居りました。私は只神の御助けと御導きにより只神の御保護を信じて其日を暮して居ります。いづれ後より精しく申上げます。御なつかしきまゝに一寸申上げました。

一月十三日　米國ブルックリンにて

岩倉馨子

姉上様

彼世からのたよりが又一つ來た。其はお馨さんが臨終十一日前の手紙であつた。

クリスマスと新年の祝ひも、いつしか過ぎ去りまして、はや今日は二十日正月となりました。
昨年の御正月には、御なつかしき御家に上りまして、御雜煮の御祝ひに預りました。今でも實に何ともかとも申されぬなつかしきその時の光景を追懷いたします。實に月日の過ぎ行くのは早いもので御座いまして、もはや當地に參りましてから年の半分は經ちました。此樣なですから、また御目にかゝる事の出來得る日は近きにある事と思ひます。
次に私事は相かはらず此病院で働いて居ります。三ケ月程前から忙しき婦人の病室の方へ參りましたもので、夜になつて室に歸りましても、筆を取る勇氣もなく過しましたが、二三日前から前に居つた病室に歸りましたので、非常に樂になりました。
三ケ月間は實に苦しい思ひをいたしました。然し實によい經驗を得ました。私は日本の看護婦のトレーニングにつきましては、どんなか少しも知りませんが、米國のトレーニング、スクールは、たしかに日本よりは勝つて居ると思ひます。隨分軍隊と同じやうな組織で、きびしう御座います。實にある點は高尙で完全ですが、また或點は劣つて居る所もありますやう思ばれます。日本に居りました時とすつかり何から何まで變つて居りまして、働いた事とて別に朝から夕までつづけた事もありませんで、生活が全く異つて居りますから、實に苦しく感じました。
近頃は朝から夕まで一度も腰もかけなくとも平氣で働いて居ります。然し三ケ月の間は、實に困りまして、幾度も止めようかと思ひましたが、とう〳〵つゞけま

した。仕事が苦しいばかりでなく、上のヘッドの看護婦が餘り人物の人でないので、下の私共は實に辛く思ひました。實に忙しいと申しましたら、あのやうな思ひは實に〳〵初めてで御座います。若し日本に居つてならば、とても私には勤まりません。此處ではいや應なしですから、とにかく務めて居ります。私は卒業はするかしないか、私はどうしてもいやになれば明日にも止める積りで居ります。たゞ葛城が米國に居ります間は、厄介をかけるのが氣の毒ですから、どうか續けたく思ひます。

友人の中にも、なか〳〵よい家庭に育つて性質のよい人もありますが、また意地の惡い人もあります。やはり面も性質も日本人と同じで御座います。人類ですから、やはり皆人情は同じで御座います。

私は自分のベストを盡して居ります。親切と正直とを旨として居ります。病人もよくなついて呉れますし、自分の受持の病人には滿足を與へる事が出來ましたから、此れは自分の第一の寶と思うてよろこんで居ります。家に歸る時は、皆よろこんで感謝して歸りますから、是れが私の樂しみで御座いました。

婦人の病室に居りました時は、何から何まで一切世話をせねばなりませんし、中には老人で不隨の人もありますから、床ずれの出來ぬやうにそれ〴〵手あてもせねばなりませんし、何ともかとも申されぬ程忙しう御座います。大抵十二人位のの人の世話を一人でいたしますし、また他の病室の病人の事も世話をせねばなりませんから、實に苦しう御座います。

看護法の實例なぞは、校長が一々生徒を集めて教へて呉れます。また今は醫師が解剖と生理など講じて居ります。昨年はバクテリヤについて講義もきゝました。また校長が自ら看護法など學術的に教へて居ります。講義なども、學術の名は私は知りませんから、なか〳〵むづかしいですが、またこちらの人もあまりよくは知りませんから、共に勉強して居ります。むづかしいですが、少しは興味が御座います。此處では醫學の事も知らねばなりませんから、餘程勉強せねばなりません。一日々々と少しづつ何かと覺えて參りますから、有り難く思うて居ります。

初めての米國にてのクリスマス、餘り樂しくも御座いませんでしたが、然しクリスマスの時は、此處でもなか〳〵にぎやかで御座いました。當日は四時間暇が來れました。クリスマスディナーも御座いまして、なか〳〵盛んで御座います。皆皆上機嫌で、うれしさうで御座います。學校でもクリスマスにはクリスマスダンスが御座いました。私は生れて初めて眞の舞踏會と云ふものを見ました。實に優美なもので御座います。夜の八時頃から翌朝の二時か三時まで踊つて居ります元氣のよいのには、おどろきました。

私は夜會服のかはりに日本服を久々で着ました。皆々非常によろこんでくれました。

御正月には休みもなく、元日から常と同じに働きました。御正月には何となく故郷がなつかしく、さびしくつて堪りませんでした。毎日々々忙しく働いて居りますから、常にはホームシックも起りませんが、半日暇の時などは、實にさび

しくてさびしくて堪らぬ事があります。

餘り私は外出はいたしません。少なくも一週に一度は出て、外の變つた空氣をすはねばならぬと知りつゝも、疲れるのがいやなので、つい／＼出ません。當地の人は皆元氣です。夜十二時に歸つても、翌日はやはり同じに務めます。學校では、一週に一度は十二時までの許しを貰へますし、三度は十一時までの許しを貰へますし、常には十時までは何處に行つてもかまはぬやうになつて居ります。此處は感心で御座います。此樣に自由でも少しも亂れません。日本の女學校などには、見ようと思うても見られぬ所で御座いませう。

私は今は自分で働いて自分で生活して居りますから、日本に居つた時よりも、苦しみながらも、或一種の愉快が御座います。

葛城はユニオンの方も卒業に近づきました。早いもので、二年も束の間に過ぎ去りました。いつも私供は御噂なつかしき御兩人樣の御噂のみいたして居ります。千歳村、實になつかしく思ひます。

大抵二週間に一度は、逢ひます。前から

私はニューヨークには獨りで參れますから、半日暇を取れる時は、二週に一度は參ります。

當地は實に寒さはきびしう御座いまして、雪は度々降りますが、家の中の寒防はよく備はつて居りますから、家の中の溫度は、春のやうな氣候で御座います。

私はシモヤケは毎年出來ましたが、今年は冷い思ひなどは少しもいたしませんから、手はきれいで、少しも出來ませんから御安心下さいませ。日本に居りました時は、シモヤケには困りました。外は隨分寒く、身を切らるゝ樣で御座います。雪が降りますと、なか／＼溶けませんで、幾日も／＼つもつて居ります。今日も雪模樣ですから、午後から降るかもわかりません。

書きたい事は山々御座いますが、また次の便りの時にいたします。

亂筆を御許し下さいませ。日本語を此頃は話しませんし、只葛城と日本語で話すものですから、亂暴な語ばかり習ひまして、いつも餘り無禮の語をつかつて驚く事が御座います。何卒亂筆亂文御許し下さいませ。

先は御無沙汰御詫びかた／＼御機嫌御伺ひまで。

一月廿日　　岩倉けい

御兩人なつかしき

御姉上樣

御まへに

此れがお馨さんの柏谷に寄せた最後の心の波であつた。此手紙を書いて十一日目に、彼女は其最後の戰場なる米國ブルックリン病院看護婦學校の病室に二十四年の生涯を終へたのである。

お馨さんは死んだ。

新生涯の新夫婦、メーフラワアを目送するピュリタンの若い男女の一對の其一人は缺けた。殘る一人は如何であらう。

一月廿一日午後七時半、最愛の我妻子高貴なる人生の戰に闘ひ死す。忠信なりし彼女は、死に至る迄忠信なりき。病は敗血症と腸炎の併發、事極めて意外、病勢に急轉直下、僅かに二十時間にして彼女は去る。

盛大なりし葬式（ユニオン神學校に於け

るゝは彼女、予と永しへに結ばむ爲めの結婚の式なりき。

多く言はず、唯、崇し玉へ。

二月三日　勝郎

＊　＊　＊　＊　＊

「日蓮は泣かねど、涙隙無し」と。涙隙無きに止まらず、聲を舉げて泣ける事も幾たびぞ。怨み、嘆き、悲しみ、憤い、憾み、如何にして此闇黒の力破らむと、空しくあたり見廻せるも幾度。……幾度我死せば此苦しみあらざりしものをと思ひ侍。

されど若し弟先んぜば、素子の悲痛は弟にも勝りて激しかりしならむか。弟をして此闇黒の力を破り得しむるものは、唯一つ素子生きて之れが爲めに戰ひ、死に及んで止まざりし我等の理想也。彼女の短かき生涯は、その一切の缺點と不完全を以てして、遂に人生最高の理想を追ひ、之れが爲めに戰ひ、戰ひ半ばならずして斃れし其尊き生涯也。[illegible]の如き人生は、生きて甲斐なけむ。昔者プラトー、ソクラテスの口をして曰はしめて曰く、"It is not more life, but a good life that we court," と。假令素子其戰ひの中に光榮の桂冠を得ざりしにせよ、彼女の生はその畢生の高貴なる努力あらん限を盡して戰ひ、戰の途上戰ひ死せる光榮ある戰死者の生也。此事、弟をして敬虔素子の死の前にぬかづき、無限のインスピレーションを茲に汲ましむ。

二月十八日　勝郎

（九）

五月の初、お馨さんが髪と骨になつて日本に歸つて來た。お馨さんのカタミを連れ歸つたのは、日本に歸化した米國の女宣教師で、彼女は横須賀に永住して海軍々人の間に傳道し、葛城も久しく世話になつて"母"と呼んで居た人で、お馨さんの病死の時は折よく紐育に居合し、始終看護の世話をしたのであつた。

五月の四日、[illegible]子供を連れて、お馨さんの郷里に於ける葬式に列なるべく出かけた。兩國の停車場で、彼等は古びた中折帽を阿彌陀にかぶつて、咽喉に汚れた絹ハンカチを巻いた、金歯の光つて眼の鋭い、癇癪持らしい顔をした外川先生と、[illegible]できない氣らしい、日本人の彼女よりも却つて日本語をつかふＴ女史に會つた。

いつもの停車場で下りて、一同は車をつらねて彼岡の上の別莊に往つて憩ひ、それから村宅に往つた。お馨さんの父老人、母老人と三度目の對面をした。十二疊兩間を打ぬいて、正面の床に遺髪と骨を納めた棺を安置し、昨日から來て葛城の姉さんが亡き義妹の爲めに作つた花環を前にかざり、また蘭なぞ生けてあつた。お馨さんは自身の寫眞と云ふ寫眞は殘らず破り棄てたさうで、目に見るべき其姿は殘つて居なかつた。然しお馨さんによく肖た妹達が五人まで居て、其幼な姿から二十歳前後を眼の前に見る樣であつた。外川先生が司會し、お馨さんの學友がオルガンを彈いて、一同[illegible]に「うつり行く夕日かげの、殘るわがいのち、いまか消ゆらむ、御使よ、つばさをのべ、とこしへのふるさとに、つれゆきてよ、……」と云ふのを歌うた。

[illegible]の牧師が立つてお馨さんと彼等の[illegible]を願[illegible]に逢て、[illegible]人に對して卑怯なる[illegible]言の罪を謝し、[illegible]に羞み、お馨さんの早世にまことに[illegible]念だが、自分の妹か娘かあるならば、十人は十人矢張お馨さんのやうに戰場に送りたいと思

ふと言つた。

次ぎにF女史が立つて、お馨さんの臨終前後の事を述べた、お馨さんは、ブルックリンの病院の生徒となつて以來、忠實に職分を盡して、校長はじめ先輩、同僚、患者、すべての人の信愛を贏ち得た。發病以來苦痛も中々あつたであらうが、一言も不平憂悶の語なく、何をしてもらつても「有り難う〱」と心から感謝し、信仰と感謝を以て此世を去つた。眞に見上げた臨終で、校長はじめ一人として其美しい勇ましい臨終に感激せぬ者は無かつた。F女史は斯く事細かに語り來つて「私も斯様に米國から御國に傳道に參つて居りますが、馨子さんの働きを見れば、其働きの間は實に暫の間でございましたが、私は恥入る樣に思ひます。馨子さんは實にやさしい方で、其上男も及ばぬ凛凛しい魂を持つてお出でした。春の初に咲く梅の花の樣な方でした」と云うた。

言下に、粕谷の彼は、彼の園内の梅の下に立つて白い花を折つて黒髪に插すお馨さんの姿をあらためて眼の前に見た。本當に彼女は人間になつた梅の花であつた。だから其花を折つて簪にしたのだ。彼女にして初めて梅の花を簪にすることが出來る。彼は重ねて思うた。米國からF女史が歸化して、日本に傳道に來る。日本からお馨さんが米國に往つて米國の人達に敬愛されて死ぬる。斯うして日米の間は自然に繋がれる。お馨さんは常に日米感情の疎隔を憂へて居る女であつた。日米の親和を熱心に祈つて居た女であつた。其祈は聽かれて、彼女は米國に死んだ。米國の灰になり米國の土になつた彼女は、眞に日本が米國に遣はした無位無官の本當の平和の使者の一人であつたと。蓋「寶の在る所心もまた在る」道理で、お馨さんを愛する程の人は、お馨さんの死んだ米國を懷はずには居られないのである。

最後に外川先生が師弟の關係を述べ、「彼女は强い女であつたが、體は强健だし、貧乏はしないし、思ひやりと云ふものが或は缺ける恐れがあつた。だから自分は米國渡航を贊成したのであつた。自分は考へた、彼女が二三年も米國に揉まれると、實にエライ女になつて來る。然るに今Fさんの言を聞けば、彼女は短い期間であつたが立派に其人格を完成することが出來た。だから死んだのである」と云うた。

外川先生の祈禱で式は終へた。一同記念の撮影をして、それから遺髮と遺骨を岩倉家の菩提寺の妙樂寺に送つた。寺は小山の中腹にある。本堂の背後、一段高い墓地の大きな海棠の下に、

岩倉馨子之墓

と云ふ小さな墓標が立てられた。

* * * *

葛城は其後間もなく獨逸に渡つた。

千九百十年六月十八日　ニューヨーク

本日午後三時當地出帆

三年苦戰健鬪のアメリカを去らむとして感慨强し。鬪爭は一個軟弱なる一少年を化して、兎も角の男を作り候。

馨子を姫とせし北米の空、ふり仰いで涙の如く雨を灑ふ。

勝郎

（十）

生きて居る者は、苦まねばならぬ。死んだお馨さんは、靈になつて猶働きつゝあるのだ。

一お馨さんの梅は、木の生くる限り春毎に咲くであらう。短く此世に生きたお馨さんは、永久に靈に活きて働くであらう。

綱島梁川君

明治四十年九月某の日、柄杓が井に落ちた。妻が代つて女中が錨を下ろして探したが、上らぬ。妻が代つて小一時間も骨折つたが、水底深く沈んだ柄杓は中々上らうともしない。最後に主人の彼が引受け、以前相模の海で鱚を釣つた手心で、錨索をとつた。脩然心に錨を上げたり下げたりしたが、時々はコトリと手答はあつても、錨の四本の足の其何れにも柄杓はかゝらない。果ては肝癪を起して、井の底を引掻き廻すと、折角の淸水を濁らすばかりで、肝腎の柄杓は一向上らぬ。上らぬとなるとます／＼意地になつて、片手は錨、片手は井筒の緣をつかみ、井の上に伸しかかつて不可見水底の柄杓と鬪つて居ると、

「郵便が參りました」

と云つて、女中が一枚のはがきを持つて來た。彼は舌打して錨を引上げ、其はがきを受取つた。裏をかへすと黑枠。誰かと思へば、綱島梁川君の訃であつた。

彼は其はがきを持つたまゝ、井傍を去つて母屋の緣に腰かけた。

*　*　*　*　*

程明道の句に「道通天地有形外」と云ふのがある。梁川君の樣な有象から無象に遁ふ其「道」を不斷に步いて居る人は、過去現在未來と三生を貫通して常住して居るので、死は單に此生態から彼生態に移つたと云ふに過ぎぬ。斯く思ふものの、死は矢張哀しい而して恐ろしい事實である。

彼は梁川君と此生に於て唯一回相見た。其は此春の四月十六日であつた。梁川君の名は久しく耳にして居た。其「見神の實驗」及び病間錄に收められた他の諸名篇を、彼は雜誌新人の紙上に愛讀し、教へらるゝことが多かつた。木下尙江君がある日粕谷に遊びに來た時、梁川君の事を話し、「一度逢つて御覽なさい、あの病體に恐入つた元氣」と云うた。丁度四月十六日には、救世軍のブース大將歡迎會が東京座に開かるゝ筈で、彼も案內をうけて居たので、出京のついでに梁川君を訪ふことにしたのであつた。

肺患者には無情な塵まじりの風が散り殘りの櫻の花を意地わるく吹きちぎる日の午後、彼は大久保余丁町の綱島家の格子戶をくゞつた。梁川先生發熱の氣あり來訪諸君は長談を用捨されたく云々と主治醫の書いた張札が格子戶に貼つてある。食事中との事で、しばらく薄暗い一室に待たされた。「自彊不息」と主人の囑によつて淸人か鮮人かの書いた額が掛つて居た。やがて案內されて、硝子戶になつて居る緣側傳ひに奧まつた一室に入つた。古い段通を敷いた六疊程の部屋、下を硝子戶の本棚にして金字の書卷のギッシリ詰まつた押入を背にして、蒲團の上に坐つて居る淺黑い人が、丁寧に頭を下げて、吸ひ込む樣なカスレ聲で初對面の挨拶をした。處女の樣なつゝましさがある。たゞ其の人を見る黑い瞳子の澄んで凝然と動かぬ所に、意志の强い其人格が閃く樣に思はれた。最初其カスレた聲を聞き苦しく思ひ、斯人に談話を强ふるの不躾を氣にして居た彼は、何時の間にかつり込まれて、色々と話込んだ。綱島君は名刺を見て、「あゝ丁度よい所だつた。御紹介しようと思つて居ました」と云ふ。やがて勞働者の風をした人が一青年を連れて入つて來た。梁川君

は、西田市太郎君と云ふて紹介し、一實地の經驗には、西田さんに學ぶ所が多い」と附け加へた。話は稍々に渉つた。彼は常に耶蘇基督について不滿に思ふ所は、と梁川君に問うた。「無花果を詛つた様な、と彼は言を添へた。梁川君は「僕も丁度今其事を思うて居たが、不滿と云ふ譯ではないが、耶蘇の一特色は其イラヒドイ所謂 Vehement な點にある」と答へた。話は菜食の事に移つて、彼は旅順へ閉塞に行く或部で、最後訣別の盃を擧ぐるに、生かして持て來た鷄を料理しようとしたが、誰云ひ出すともなく、鷄は生かして置かうぢやアないかと、到頭其まゝにして置いた、と云ふ逸話を話した。梁川君は首を傾げて聽いて居たが、「面白いな」と獨語した。一座の話は多端に渉つたが、要するに隨感隨話で、まとまつた事もなかつた。唯愉快に話し込んで思はず時を移し、二時間あまりにして西田君と前後に席を立つた。

其れから其足で三崎町の東京座に往つて、舞臺裏で諸君のあとから彼もブース大將の手を握るの愉快を獲た。大將は肉體も見上ぐるばかりの清げな大男で、其手は昨年の夏握つたトルストイの手の様に大きくて温であつた。午後には梁川君と語り、夜はブース大將の手を握る。四月十六日は彼にとつて喜ばしい一日であつた。嬉しいあまりに、大將の演說終つて喜捨金集めの帽が廻つた時、彼は思はず乏しい財布を倒にして了うた。

其後梁川君とははがきの往復をしたり、同光錄を贈つてもらつたりしたきり、彼も田園の生活多忙になつて久しく打絶えて居た。

そこで此訃は突然であつた。精神的に不朽な人は、肉體も假令其れが病體であつても猶不死の様に思はれてならなかつたのである。梁川君が死ぬ、其様な事はあまり彼の考には入つて居なかつた。一枚の黑枠のはがきは、鐵槌の如く彼に落ちた。「死ぬぞ」と其はがきは彼の耳もとに叫んだ。

* * * *

梁川君の葬式は、秋雨の瀟々と降る日であつた。彼は高足駄をはいて、粕谷から本郷教會に往つた。教會は一ぱいであつた。やがて棺が舁き込まれた。草鞋ばきの西田君の姿も見えた。某孃の獨唱も、先輩及友人諸氏の履歴弔詞の朗讀も、眞摯なものであつた。牧師が說教した。「一美人の裸體は好い、然しこれに彩衣を被せると倚美しい。梁川は永遠の眞理を趣味滴る如き文章に述べた」などの語があつた。梁川、梁川がやゝ耳障りであつた。

彼は棺の後に跟いて雜司ケ谷の墓地に往つた。葬式が終ると、何時の間にか車にのせられて綱島家に往つた。梁川君に親しい人々が集つて居て、晩餐の饗があつた。西田君、小田君、中桐君、水谷君等面識の人もあり、識らない方も多かつた。

新宿で電車を下りた。夜が深けて居る。雨は止んだが、路は田圃の様だ。彼は提灯もつけず、更に路を擇ばず、ザブ／＼泥水を渉つて歸つた。新宿から一里半も來た頃、眞闇な樹陰で眞黑な人影に行合うた。彼方はずうと寄つて來て、顏をすりつける様にして彼を覗く。彼は膽を冷やした。

「君は誰だ？」

先方から聲をかけた。彼は住所姓名を名乘つた。而して「貴君は？」ときいた。

「刑事です。大分晩く御歸りですな」

八幡近くまで歸つて來ると、提灯をともして二三人下りて來た。彼の影を見て、提灯はとまつたが、透かして見て「福富さんだよ」と驚いた様な聲をして行き過ぎた。此は八幡山の人々であつた。先日八幡山及粕谷の若者と烏山の若者

の間に喧嘩があつて、怪我人なぞ出来た。其あとがいまだにごたごたして居るのだ。

帰ると、一時過ぎて居た。

* * *

其後梁川君の遺文寸光録が出た。彼の名がちよい／＼出て居る。彼の事を好く云うてある。総じて人は自己の影を他人に見るものだ。梁川君が彼にうつした己が影に見惚れたのも無理はない。

梁川君が遺文の中、病中唯一度母君に接してや、胸中の苦を洩らしたと云つて、痛恨して居る。若し其れをただに自然の循環と見るなら、時間空間の限定は如何であらう。彼の様な汚穢な心と肉の行の者に研究しなければならぬ。

* * *

梁川君の訃に接した其日、地に落ちた[illegible]は、[illegible]上京して来た。

然し彼は其の生涯に於て宇宙の奥底にかくれしたものがある。彼は其の生涯を賭けて、その上、地の下、火の中、水の中、泉土の中まで潜つても探し出さねばならぬ。梁川君は端的に其求むるものを探し當てて、堂々と凱旋し去つた。質根の彼は、しば／＼捉へ得たと思うては、失ひ、摑んだと思うては失ひ、今以ても七顛八倒の笑止な歴史を繰り返して居る。但一切のもの實は大能掌裡の筋斗翻に過ぎないので、人々皆通天の路あることを信ずるの一念は、彼が迷宮の彷徨に於ける一の慰めである。

春の暮（「みゝずのたはこと」の[illegible]）

庭石菖一名草あやめの眞盛りである。茜がかつた紫と白と、一株二株はさしてめでたい花でもないが、午の日を受けて何萬となく庭一面に咲く時は、緑の地に紫と白の浮き模様、花毛氈を敷いたやうに美しい。見る人がないから、日傭のおかみを引張つて来て見せる。

草あやめの外には、芍薬、紫と白と黄の渓蓀、薔薇、石竹、瞿麥、虞美人草、花芥子、紅白除蟲菊、皆存分に咲いて、庭も園も色々に明るくなつた。

既でに麥が日に／＼照つて、周圍の黯い森に競ふ。春蟬が鳴く。剖葦が鳴く。蛙が鳴く。青い風が吹く。夕方は月見草が庭一ぱいに咲いて香る。

今日は雨が欲しく、風が悲しく、空がなつかしい五月下旬の日であつた。蟬の音、色ついた麥、耳にも眼にもじり／＼と暑く、光る様に眼に痛い様であつた。果然寒暖計は途方もない八十度を指した。

落葉木が悉皆若葉から青葉となつた所で、樫、松、杉、樅、椎等の常緑樹や竹の類が、日に／＼古葉を落しては若々しい若葉をつけ出した。此頃は毎日掃いても掃いても其の古葉が落ちる。

気軽な落葉木の若葉も美しいが、重々しい常緑樹の若にない厳かな若葉をつけた所も中々好い。ゆさ／＼と明るい豊かな冠へさうな若葉をかぶつた白樫の若枝、杉は矢車の[illegible]めいた新芽を簇立て、赤松は赤く黒松は白つぽい小蠟燭の様な心芽をつい／＼と枝の梢毎に立つて、竹はまた「暮春には春服已に成る」と云つた様に譬へ様もない清かな明るい色の衣をふつさりとかぶつて、何れを見ても眼の保養である。

今夜はじめて蛙が一つぶツりんと聴つた。

「蛙一つに[illegible]れぬ宵や春の暮」

最早春は暮るゝのである。

（明治四十五年五月二十六日）

印度洋

夜、新聞を見ると、長谷川二葉亭氏が肺病で露西亞から歸國の船中、コロムボと新嘉坡の間で死んだとある。去十日の事。

馬琴物から雪中梅型のガラクタ小説に耽溺して居た余に、「浮雲」は何たる驚駭であつたらう。余ははじめて人間の解剖室に引ずり込まれたかの如く、メスの様な其筆尖が唯恐ろしかつた。それからツルゲーネフの飜譯「あひゞき」を國民の友で、「めぐりあひ」を都の花で見た時、余は世にも斯様な美しい世界があるかと嘆息した。繰り返し讀んで足らず、手づから寫したものだ。其後「血笑記」を除く外、飜譯物は大抵見た。「其面影」はあまり面白いとも思はなかつた。「平凡」は新聞で半分から先きを見た。「浮雲」の筆は枯れきつて、ぱつちり眼を明いた五十男の皮肉と鋭利と、而して其處に醒めきつた人のさびしさが犇々と胸に迫るものがあつた。朝日から露西亞へ派遣された時、余は其通信の一行も見落さなかつた。通信の筆は數回ではたと絕えた。而して歸朝中途の死！

印度洋はよく病人の死ぬ處である。昔から船艙の中で死んで印度洋の水底に葬られた人は數知れぬ。印度洋で死んだ日本人も一人や二人では無い。知人柳房生の親族某神學士も、病を得て英國から歸途印度洋で死んで、新嘉坡に葬られた。二葉亭氏も印度洋で死んで、新嘉坡で火葬され、骨になつて日本に歸るのである。

高山の麓の谷は深い。世界第一の高峻雪山を有つ印度の洋は、幾千の人の死體を埋めても埋めても埋めきれるものでは無い。其陸の菩提樹の蔭に死の宗教の花が咲いた印度の洋は、彼を求めて歎くことを知らぬ死の海である。烈しい暑さのせゐもあらうが、印度洋は人の氣を變にする。日本郵船のある水夫は、コロムボで氣が變になり、春畫など水夫部屋に飾つて拜んだりして居たが、到頭印度洋の波を分けて水底深く沈んで了うた、と其船の人が余に語り聞かせた。印度洋の彼不可思議な色をして千劫萬劫已む時もなくゆらめく謎の様な水面を熟々と見て居れば、引き入れられる様で飛び込みたくなる。

三年前余は印度洋を東から西へと渡つた。日日海を眺めて暮らした。海の魔力が次第に及ぶを感じた。三等船客の中に、眼が惡いので歐洲廻りで渡米する一青年があつて、「思出の記」を持つて居た。ヘンテからコロムボの中間で、余は其思出の記を甲板から印度洋へ拋り込んだ。思出の記は一點の水煙を立てて印度洋の底深く沈んで往つたやうであつたが、彼俗物菊池愼太郎が果して往生したや否やは疑問である。印度洋は妙に人を死に誘ふ處である。

（明治四十二年五月十二日）

一枝の筆

（スタウ夫人）

世亂れて英雄あらはるゝとかや。然れば米國南北戰爭の頃には、有名なる人物數多輩出しけるが、こゝに一枝の筆を揮つてグラント將軍シヤアマン將軍にも劣るまじき働をなせし婦人ありけり。斯く云へば、成程、「アンクル、トムス、ケビン」の著者スタウ夫人の事かと讀者は頷き玉ふならむ。

抑も夫人は千八百十二年の夏、ビーチヤア家に生れぬ。ビーチヤア家は米國に多かるまじき人才輩出の家にて、夫人の父ライマン・ビーチヤア氏は名高き神學者、夫人の弟ヘンリー・ワアド・ビーチヤア氏は宗教家としても雄辯なる愛國者としても思想淸新なる文學者としても廣き意味にての政治家としても米國史に不朽なる人物にて、總勢十三人の兄弟姉妹何れ愚かなるはなかりしが、天は才を與へて金を與へざりければ、一家の困窮中々なりけり。分けて幼くして母を失ひしは、スタウ夫人が大不幸なりけり。

初めスタウ夫人に幼名をハアリット。エリサベスと云ひ、家庭並に學校の教育おろそかならず、殊に文章書くことは天稟と見え、十二の年「靈魂不朽の事は天然の光によりて證し得べきものか」と云ふいと大人らしき文章を書きて人を驚かせしこともありし。中學を出でし後は、姉の開けるハルトフオルドの學校に入りて頓て教師となり、父君レーン神學校々長となりし後、同じ姉君諸共にオハイオ州に學校を開きて教育に從事しぬ。此處は奴隷使役のいと盛なるケンタクキ―州の隣なれば、奴隷の事情よく見聞に觸れて、後の著作の材料となりしもの多かりつらむ。二十四歲の年父の管理せる神學校の教授スタウ氏に嫁ぎて、スタウ夫人となりぬ。

夫は夙に夫人の天才を見破り、文學に從事せむことを促したり。其手紙に、

親愛なる吾妹子よ、御身は必ず文學者になり玉ふ可く候。是は天命の定まる所に候。左れば其積りにてよくよく健康を貯へ、精神を振ひ起さる可く候。

と云ふ句あり。然りながら勢氣もあり、子供も多く生れぬれば、此希望によくも應ぜず。「メーフラワア」と云ふ小説、「地上の天國」と云ふ小冊子、外二三の著述はありたれども、はかばかしきものにもあらざりけり。

左る程に奴隷問題いよいよ火の手強くなり、北部南部の衝突、有志の激昂、議會の討論、米國全體宛ながら鼎の如く湧き立ちける。時にスタウ夫人の兄弟エドウアド・ビーチヤアの細君、ボストンより夫人に書を寄せて奴隷の慘状を述べ、最後に一句書き添へて曰く、

愛するハッチーの君よ、我若し御身程の筆力あらば、全國の民に奴隷主義の惡む可きを感ぜしむる樣なるものを書き侍らんに。

スタウ夫人は吾プランスウイツクの家の小さき客間にて、聲高に此書狀を讀みけるが、讀んで右の句に到り、立ち上つて手紙を押まろめ、「書かむ、必ず書かむ、命あらば必ず書かむ」と誓ひける。

千八百五十一年二月、夫人會堂の晚餐式に列なりけるが、「叔父トム」死去の一段夢ともなく現ともなく心に浮び出でぬ。英國の大豪傑クロムウエルの言に、一人は向う見ずに進む時は

どエラきはなし」と云ふ言あり。スタウ夫人は、「アンクル、トム」の趣向心に浮びしまゝ、千八百五十一年の六月五日より、ナショナル、エラ」と云ふ新聞に小說の筆を執り初めしが、最初三ケ月の豫約なりしに、書けば書く程氣は立ち心は燃え筆は進み、さら〳〵と書けば紙上に文字活きて聲あり、書きて書きて書きまくり、十ケ月を經てまさに完結に到りぬ。是ぞ「アンクル、トム」てふ黒人を主人公として奴隸主義の慘狀を滿天下の志士仁人に訴へ、非奴隸主義の公明正大を皇天の前に證せしもの、米國はおろか大凡世界の文學に於て千載不朽の其一產物として數へらるゝ「アンクル、トムス、ケビン」の小說なりける。此小說終に近づきける時、ボストンの一書肆、利益半分にて之を一冊の書にせむと申込みしに、スタウ夫人は此ぞ不朽の作なりとは氣も付かばこそ、家貧窮なればとて之を諾し、終に賣れ高の一割と云ふ約束にて出版させしに、第一日に三千部賣盡し、次週に再版し、一年に百二十版に上り、三ケ月の末に生來見しことなき一萬弗の大金を得、六ケ月後に更に一萬弗を得ぬ。凡そ近世の著述にて、此一小說程夥しく行はれしものは稀ならむ。米國にて賣高は云ふもくだなり。英國及殖民地にての發賣高百五十萬部に超え、英國博物館に收めしもののみにても三十五種の版あり。其他二十ケ國の語に譯せられ、演劇に仕組まれしなど、一篇の小說脚なくして世界を廻り、行く處として讀者觀客の同情を惹き心を動かさざるはなく、斯くて世間に顏も出さざる敎師の妻が世帶の暇に當世の兇を抱きつゝ書きし小說は「グラント」十萬の兵か南軍の堅寨を陷れしよりも恐らくまさりたる働を人情公義の爲めになしたりける。

スヌウ夫人の名は、世界に聞え、前途はいとも賑らかになりぬ。是より女史は二たびまで英國に渡りて、盛なる待遇を受け、名ある人達と交り、國に在りては小說としての價値は「アンクル、トムス、ケビン」にもまさりしと云ふ「ドレッド」「牧師の求婚」數卷の小說を書き、英國にてはハリエット・マルチノオ女史、ヂョルヂ・イリオット女史、ヂッケンス、サッカレー、米國にてはラウヱル、ホルムス、ロングフェルロウの諸名士と交游消息して、樂しき年は過ぎぬ。然れど尤も樂しかりし時は、夫人が多年の志望空しからず、平等自由の主義全勝を占め、米國に奴隸の跡を絕ちし其時にこそありつらめ。

良人歿後、夫人はハルトフォルドに閑居して靜かに晚年を送りぬ。春の夕日の西に傾くごと、穩に黄昏を待ちて、客あれば笑みて迎へ、音樂を聽き、天氣よき日に寵愛の犬を連れて散步し、花を愛で、世に心なきものゝ如くなれど、好事の者は爭うて夫人の手蹟を求め、夫人の影だに見ゆれば指し語りてあれこそ名高きスタウ夫人よと囁めきけり。斯くて夫人は眼には奴隸なき自由の鄉を見、身は薔薇の花香しき家に住みて、心にかゝる隈もなく、豐かに老を養ひしが、千八百九十六年八十五歲にして逝きぬ。其年の三月の末、夫人は人の請に應じて一句を書して曰ふ、上帝を信じて、善を行へと。此は其夫人の特に愛せらるゝ一句にて、眞に夫人は其實行を示せし人と申す可けれ。

スタウ夫人の「アンクル、トムス、ケビン」を書きし時は四十歲なり。ナイチンゲール女史のクリミヤに赴きし時は三十一歲なり。前者は一敎師の妻にして、後者は一看護婦なり。然れど其爲す所如何に大にして、及ぼす所の如何に廣きぞや。世の爲めにする機會は何時來るも知れず。或は妙齡にして來り、中年にして來り、老齡に到つて來る。若しとて油斷す可からず、年たけたりとて失望す可からず。されど其時に及びて世に盡すに、業なくして爭でよからむや。

例へばスタウ夫人に筆なく、ナイチンゲール女史に看護の習練なくば、何によりて働かむ。是を思へば、男子は云はず、婦人は誰しも何か一の業に熟し居ることこそ肝要なれ。此は生活の爲めのみならず、其業によりて生活よりも高尚なる働をなすの機會に應ぜむ爲め也。

食はれるもの

（「みゝずのたはこと」の一（『落穂の掻き寄せ』より））

奥の座敷で日課を書いて居ると、縁に蹲つて居た猫のトラがひらりと地に飛び下りた。またひらり縁に飛び上つたのを見ると、蟷螂を銜へて居る。緩と下ろした。蟷螂は死んだのか、氣絶したのか、少しも動かぬ。トラはわんぐりと喰ひはじめた。まだ生きて居ると見えて、蟷螂の足が有々に蠢いた。トラは慌てず、眼を閉ぢ、頭を傾げて、悠々と味ひ／＼喰つて居る。小さな鈴か鐘かを見る様で、淡い。蟷螂の腸は最早トラの胃の中にあるに、切れて落ちた翡翠色の尾の一片は、小さな一疋の蟲かなんぞの様にぐるつと巻いたりほどけたりして居る。トラは其れも鵜呑にして了うた。蟷螂のカタミは何も無い。日は相變らず照々と照らして居る。地は平氣で睡つて居る。木の葉一つソヨがぬ。トラは蟷螂を食つてしまつて、世にも無邪氣な顏をして、眼を閉ぢて眠つて了うた。

昨日は庭で青白い蜈蚣を褐色のフゥ蟲が二匹で螫し殺して吸うて居るのを見た。

一昨日は畑を歩いて、苦しい蛙の鳴き聲を聞いた。ドウしても蛇にかゝつた蛙の鳴き聲と思つて見まはすと、果然二尺ばかりの山かゞしが小さな蛙の足を銜へて居る。余は土塊を投げつけた。山かゞしは蛇の中でも精悍なやつである。蛙の腿を銜へながら鎌首をたてて逃げて行く。竹ぎれを取つて戻ると、玉蜀黍の畑に見えなくなつて了うた。

優勝劣敗は天理である。弱肉強食は自然である。宇宙は生命のとりやりである。然し強いものの上に尚強いものがあり、弱いものの下に尚弱いものがある。而して一番弱いものが一番強いものに勝つ場合もある。顯微鏡下に辛うじて見得る一細菌が、神の子だイヤ神だと傲る人間を容易に殺して了ふではないか。畢竟宇宙は是れ環、生命は共通、強い者も弱い、弱い者も強い、死ぬるものが生き、生きるものが死に、勝つ者が負け、負ける者が勝ち、食ふ者が食はれ、食はれるものも却て食ふ。般若心經に所謂、不增不減不生不滅不垢不淨、宇宙の本體は正に此である。

然し我等は人間である。善惡界に住んで居る。煩惱もある、愚癡もある。我等は尚肉に生きんと欲する如く、肉體の命も惜しい。自然淘汰を以て他を推す時、犧牲の叫びは聞きづらい。

ダアキンの兄弟分ワレース博士は、蛇にのまるゝ蛙は苦しい所ではない、一種の濕味にうつとりとなつて快感を以て蛇の喉を下るのだ、と云うた。大役小志の志賀氏は、戰場に於いて、決死の兵士は精神的高調によつて、所謂苦痛なるものを大して感じない、と云つて居る。如何にも道理で、また事實ともあらうと思はる。

然し我々は人間である　犧牲の叫は聞きづらい。

（明治四十五年七月二十日）

年譜

明治元年
十月二十五日、熊本縣葦北郡水俣村に生る。
父は一敬、母は久子矢島氏。

明治七年
小學校に入學。

明治十一年
兄猪一郎に伴はれて京都同志社に學ぶ。

明治十三年
同志社を半途退學す。

明治十八年
熊本にて受洗、傳道見習の爲め横井時雄氏に伴はれ愛媛縣今治に渡る。

明治十九年
「蘆花逸生」の雅號を此頃より用ゐ始む。
京都同志社に復籍。

明治二十年
五月、短篇小説『孤墳の夕』を「同志社文學」創刊號に載す。之れ小説を公にせし最初なり。
十二月、京都を出奔、熊本に還る。
此年より約一年半、熊本英學校男女校に教授を助く。

明治二十二年
春、上京。兄の經營する民友社に入社。
九月、『如温武雷土』を初めて民友社より出版す。

明治二十三年
三月、『理查土格武電』を民友社より出版。
夏、「國民新聞」に『石美人』を載す。
八月、「國民の友」に『露國文學の泰斗トルストイ』を載す。

明治二十五年
夏、短篇小説『夏の夜かたり』を「國民新聞」に掲ぐ。
十二月、『グラッドストン傳』を民友社より出版す。

明治二十六年
七月、『近世歐米歷史之片影』を纂輯す。

明治二十七年
五月五日、原田あい子と結婚す。

明治二十八年
七月、ゴーゴリの『老武者』を「國民新聞」に譯載す。
八月、『夏』を「家庭雜誌」に載す。
九月、『恐ろしき一夜』を「家庭雜誌」に載す。

明治二十九年
四月、飜案『捨つる命』を「國民新聞」に連載。

明治三十年
一月、相州逗子に居を移す。又、『漁師の娘』を「家庭雜誌」に載す。

四月、『トルストイ』を「十二文豪」の第十巻として民友社より出版。
十一月、『河島大尉』を「國民新聞」に載す。

明治三十一年
三月、文藝的處女作集たる『青山白雲』を民友社より出版。
四月、『世界古今名婦鑑』を民友社より出版。
八月、「飜案　まがつみ」を「國民新聞」に連載。
十月、『外交奇譚』を民友社より出版。
十一月、小説「不如歸」を「國民新聞」に連載し始む。

明治三十三年
一月、小説『不如歸』を民友社より出版。又、小説「灰燼」を「國民新聞」に載す。
八月、『自然と人生』を民友社より出版。
九月、小説「おもひ出の記」を「國民新聞」に連載し始む。
十月、東京郊外原宿に居を移す。
十一月、匿名にて『探偵異聞』を民友社より出版。又、「最初の燕尾服」を「國民新聞」に載す。

十二月、「不如歸」初めて大阪にて上演さる。

明治三十四年
一月、「除夜物語」を「國民新聞」に載す。
三月、昨秋來「國民新聞」に連載中の「おもひ出の記」完結す。
五月、小説『思出の記』を民友社より出版。
又、「予は小説家たるを恥辱とせず」なる論文を「國民新聞」に掲ぐ。
十月、「零落」を「新聲」に載す。
十二月、『ゴルドン將軍傳』を警醒社より出版。

明治三十五年
一月、小説『黑潮』第一を「國民新聞」に連載し始む。六月に到つて完結。
三月、「慈悲心鳥」を「文藝界」に載す。
八月、『青蘆集』を民友社より出版。
十二月、民友社を退く。

明治三十六年
二月、小説『黑潮』第一を、黑潮社より自費出版す。

明治三十七年
十二月、鹽谷榮氏に依りて『不如歸』の英譯版出づ。

明治三十九年
四月、單身横濱を出で、エルサレム順禮の途に就く。歸途、ヤスナヤ・ポリヤナにトルストイを訪ねて、八月敦賀に歸る。
十二月、『順禮紀行』を警醒社より出版。
又、月刊雜誌「黑潮」の刊行を企て、此月廿五日創刊號を發行す。

明治四十年
二月、東京を西へ去る三里、北多摩郡千歳村粕谷に一反五畝の土と十五坪の草葺家を購ひて移り住む。
此頃より「蘆花」の號を用ゐず。

明治四十一年
四月、「國木田哲夫兄に與へて僕の近状を報ずる書」を「二十八人集」に寄す。

明治四十二年
十二月、小説『寄生木』を警醒社より出版。

大正二年
三月、『みみずのたはこと』を新橋堂より出版。
六月、小説『十年』を『國民新聞』に掲載し始めたれど、僅に十一回にして稿を絶つ。又、アーサー・ロイドに依りて『自然と人生』の英譯版出づ。

大正三年
五月廿六日、父洪水一敬九十三歳を以て長逝す。
十二月、小説『黒い眼と茶色の目』を新橋堂より出版。

大正六年
三月、『死の蔭に』を大江書房より出版。

大正七年
四月、『新春』を福永書店より出版。

大正八年
一月、夫妻相携へて世界一周の途に上る。
二月、母久子、長逝す。

大正九年
三月、周遊の旅より歸る。

大正十年
三月、『日本から日本へ』を金尾文淵堂より出版。

大正十二年
四月、『竹崎順子』を福永書店より出版。

大正十三年
九月、『太平洋を中にして』を編纂し、文化生活研究會より出版。

大正十四年
五月、小説『富士』第一巻を福永書店より出版。

大正十五年（昭和元年）
二月、小説『富士』第二巻を福永書店より出版。
十二月二十五日、大正天皇崩御發表の報、避寒の爲め上總勝浦に赴く。其前日『富士』第四巻のプラン成る。

昭和二年
一月、小説『富士』第三巻を福永書店より出版。此月二十一日粕谷の家に歸る。
二月十四日、突然狭心症を起す。
七月六日、小雨降る夜、自動車にて重症の身を思ひ出の地伊香保に運び、千明仁泉亭に靜養し、
九月四日、改造社の約を果す爲め自ら絶筆だといひながら震ふ手に筆を執りて序文を草す。
九月十八日、午後十時五十分、病革りて易簀す。越えて二十三日、東京青山會館に訣別式を行ひ、遺骸はその夕、秋風寂しき粕谷の邸内雜木林の下に葬る。

昭和二年十月一日印刷
昭和二年十月五日發行

現代日本文學全集　第十二篇

著者　德富健次郎

發行者　山本美
東京市麹町區内幸町一丁目參番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市麹町區内幸町一丁目參番地
幸ビルディング壹階
改造社
振替東京八四〇二番
振替東京一七三[illegible]番
電話銀座[illegible]
電話銀座[illegible]

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02952 4733